國文註釋全書

文學博士　本居豐穎先生
文學博士　木村正辭先生
文學博士　井上頼圀先生　校訂

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部

緒言

一源氏物語評釋ハ萩原廣道ノ著ニシテ十四卷ナリ、首卷ヲ上下二冊ニ分チ總論ト凡例トヲ揭ゲ、題號、作者、時世、稱譽、歌、用意、趣向、一部ノ大事、注釋書、引歌、准據、卷名、人名、年立、系圖、種々ノ法則、及ビ頭書評釋凡例、本文譯注凡例等ヲ述べ、本文ハ桐壺ヨリ花宴ニ至ルマデノ八冊ニシテ、詳細ニ注釋批評セリ、本書ハ源氏ノ注釋書トシテ最モ有名ニ且ツ完備ヲ極ムレドモ、葵ノ卷以下ニ及バザリシハ甚遺憾ナリ、別ニ源氏物語々釋二卷、同餘釋二卷アリ、本文ノ難語難句故事等ヲ抄出シテ別卷トセルモノナリ、兩者共ニ花宴ノ卷ニテ終レリ、

明治四十二年十一月

編者識ス

源氏物語評釋

全

校正譯注源氏物語評釋首卷

萩原廣道著

總論上

源氏物語といふ題號の事

源氏物語といふ名の事は。本居翁の玉小櫛に云。大かたもろ〳〵の物語の名の例。おほくは其中に主としていふ人の名をもてつけたり。此物語もそのでうにて。光源氏君の事をむねとしてかける故に。源氏の物がたりとはいふなり云々。さて物語の名。光源氏の物語といふべし。たゞ源氏物語とはいふべきにあらず。といふ人あれど。さしもあらず。はやく作りぬしの日記にも。たゞ源氏の物がたりといへるをや。といはれたり。此說のごとし。さて源氏の事は。岡部翁の源氏新釋に云。國史また新撰姓氏錄などを案ずるに。嵯峨天皇弘仁五年に。皇子信公以下男女八人に。始て源朝臣の姓氏を賜はりて。左京に貫ね給ひしより。皇子に氏賜はるは專ら源氏なり。諸抄に。此時三十餘人に始て源氏を賜る。といへるは委しからず。最初八人にて。次々に三十餘人には至れるなり。といはれたるがごとし。源字の事は。舊說に。濫觴小水爲九河之源の義に祝して用るなり。とあり。今案に。伊藤長胤が秉燭譚に云。北魏の時。源賀に始めて源姓を賜ふ。源賀は本魏の皇族にて。源を同じうするに因て。始めて源姓を賜ふ事源賀が傳にあり。本朝にても源氏は皆皇族より出づ。同一義なりといへり。かの國の史を考るに。げにも此事ありて。源賀禿髮傉檀之子也云々。太武謂曰。卿與朕同源。因事分姓。今可爲源氏。と見えたり。されば舊說はいかゞあるべき。嵯峨天皇の御時は。殊に漢籍をもてはやし給へれば。大かたは長胤がいへりしごとく。同源の義にて賜へるなるべし。さる故に源氏をば殊に重みし給ひて。皇子の氏にのみ賜へる例とはなりにけん。さて物語といふ事は。玉小櫛に云。中むかしのほど物語といひて一くさのふみあり。物語とは今の世にはなしといふことにて。すなはち昔ばなし也。日本紀に談といふ字をぞ。ものがたりと訓たる。そを書に名づけて作れることは。繪合の卷に。

物語のいできはじめのおやなる。竹取翁にうつぼのとしかげを合せて。とあれば。此竹取やはじめなりけん。その物語。たがいつの代につくれりとはしられねども。いたくふるき物とも見えず。延喜などよりはこなたの物とぞ見えたる云々。さてもろ〳〵の物語のさま。おの〳〵すこしづゝかはりてさま〴〵なれども。いづれも昔の世に有し事をかたるよしにて。あるはいさゝかかたち有し事を。よりどころにしてつくりかへてもかき。あるは其名をかくしもしかへもしてかき。あるはみながら作りもし。又まれには有し事をそのまゝに書るも有て。やう〳〵なる中に。まづ多くは作りたるもの也云々。かくていづれの物語も。男女のなからひの事をむねとおほく書たるは。よゝの歌の集共にも。戀の歌の多きと同じことわりにて。人の情のふかくかゝること。戀にまさるはなければなり。といはれたるがごとし。なほ本書を見て知るべし。

紫式部の事幷日本紀の御局の事

この物語つくれる人の紫式部なることは。みづからかける日記にも見えたれば。動くことなし。この作れるにつきて。昔よりさま〴〵の説どもあれど。いづれも後よりおしはかりていへる妄説なること。紫家七論。源注拾遺。玉小櫛などに委しくいはれたれば。こゝには省く。さるは妄説をだに思へば。皆無用なる論なれば也。さて作りぬしの系圖は。舊注どもに見えたる中に、安藤爲章の紫家七論なるは。殊に委しく考へたるもの也。父は正四位下越前守藤原爲時朝臣とて。閑院左大臣冬嗣公の子。贈太政大臣良門公より四世の孫也。母は常陸介藤原爲信朝臣の女。夫は左衞門權佐藤原宣孝朝臣とて。同じ良門公の五世の孫にて。勸修寺家の祖なり。さて宣孝朝臣の北方となりて。大貳三位（女子名ハ賢子）と。辨局（名不傳）とを産て後。長保三年四月に宣孝卒られしかば。四五年ばかりやもめずみして、寛弘二三年の比より。上東門院へ宮づかへに出られたるさまなること。また此物語作られたるは。そのやもめずみのほどなるべきこと。また萬壽二年の比までは存生にて。上東門院に仕へられたりしさまなることなど。委しくかの七論にいへれば、ひらき見て知るべし。此人實の名

は傳はらず。紫式部といふは。いはゆる呼名なること。玉小櫛にいはれたるがごとし。さて紫式部といふ名につきて。說ども多かる中に。河海抄に。紫のうへの事をすぐれてかき出たる故に。藤式部の名をあらためて。紫式部と號せられけりとあるを。七論又源注拾遺などにはとられ。玉小櫛には。袋草紙に。一條院のお乳母の子なり。しかうして上東門院に奉らしむとて。わがゆかりのもの也。あはれとおぼしめせ。と申さしめ給ふ故に此名あり武藏野の義也。とあるをとられたり。この二つをおもふに河海のかたまされるやうなり。紫式部日記に左衞門督公任卿。あなかしこ。このわたりにぞ。紫やさふらふ。とうかゞひ給ふ。源氏ににるべき人見え給はぬに。かのうへはまいていかでものし給はん。と聞ゐたり。とあるをいづれも引出て。契沖爲章は。これによりて。かの河海說の證とせられたるを。小櫛には。ゆかりの說による時は。紫といふ名かの紫上にはあづからぬことなるを。それとよそへてのたまへるぞ興なる。すべてたはふれ言は。あらぬことをめづらかによそへていふをこそ。興とはすなれ云々。といはれたり今案に。まづ河海に藤式部をあらためて。紫式部と號せられけりとあるは。上東門院の號し給へる意か。また世人の號しける意か。わきがたけれど。まづは上東門院の號し給へりといふやうに聞ゆる也。もしさる意ならば。それは誤なるべし。大かたこの呼名は。式部又侍從少納言などいふ類こそ。みづからもつき。事がらによりては主よりも賜ふべき事ならんを。その上に冠らせたる。紫。和泉。などいふ類は。皆他より呼分ちたる名と聞えたり。此人もそのはじめは。江侍從淸少納言などのごとく。其氏によりて。藤式部といへりしとあれば。これすなはちその呼名なりけるを。此物語作り出て後に。他より稱て紫とはかうふらせつらんとぞおぼゆる。もしくはこの公任卿の。たはふれ給へるなどやその始なるらん。よしさらずとも。他のつけて呼たるが。何となく弘まれるなるべし。其故は。もし紫上の事をすぐれて書たるゆゑによりて。紫といふ名を賜はらばそは我身やがて紫上に擬へられたるがごときものなれば。かの用意ふかき人ならば。必辭び奉るべき事也また一條院の御乳母子の故をもてしか名づけ

給ふならば。これは殊にかしこきわざなれば。かならず甚く辭び奉るべき事決し。そのうへ帝はゆかりの者なりとの給ふとも。上東門院の。それをやがて。御みづからめし使ひ給ふ女房の名につけ給はんも。いかゞしき事なるに。まして世人のしか呼んは。いともかしこきわざなれば。必さはいふまじき事どもも也。さればたゞ藤式部とのみいへりしを。藤と紫とゆかりもあれば。かた〳〵に思ひよせて。他より紫とはつけたるなるべし。さてはじめはしかあだ名につけたりしも。何となく呼名のやうになりては。おのづから藤式部のかたはすたれて。專ら紫とのみいふやうにはなりけんかし。小櫛に。たはふれ言はあらぬ事をめづらかによそへて云をこそ興とはすなれ。といはれたるは。もとよりさることなれど。最初より此人に紫といふ稱ありしならば。此物語に紫上の事を。とりわきていみじくは書べくもあらず。もし書たらば。我身やがてそれになずらふるさまに聞ゆべければ也。されば猶紫上の事を。すぐれていみじくかゝれたる故に。他よりおして紫式部とはつけたりとこそおぼゆるなれ。紫上の事は。げにもすぐれていみじくかゝれたるに。この物語をも。はやく紫の物語と更科日記には見えたれば。契沖の說のごとく。呼名のおこりもそれに因ることは大かたがふまじくぞおぼゆる。また袋草紙の一說に。若紫の卷を作れる。甚深なる故に此名を得たり。とあるは。先達のとられざりしごとく。ひがことなるべし。そも〳〵かうやうの事は。今となりてはよくもしられぬ事なるに。たしかに引出てことわるべき例證もなきことなれば。實にはいかなるさまなりけん。たゞその事情をおして。かりそめにいひさだむるなれば。いづれかまさしくあたるべき。見ん人擇びてとりねかし。さてついでにいはまほしきはかの紫式部日記に。さゑもの內侍といふ人侍り云々。うちのうへ。源氏の物がたり。人によませ給ひつゝきこしめしけるに。この人は日本紀をこそよみ給べけれ。まことにざえあるべし。とのたまはせけるを。ふとおしはかりに。いみじうなんざえ〔が〕あると。殿上人などにいひちらして。日本紀の御つぼねとぞつけたりける。いとをかしくぞ侍る云々。といふとあり。これにつきて。藤井氏の日本紀御局考といふも

の一巻あり。其おもふきは。この日本紀とあるは。日本後紀。續日本後紀をさしてのたまへるよしをいひて。書紀より續後紀までの四ふみは同じ名なれば。昔は國史の事を日本紀といひつらんよしを論らひ。さて源氏君を嵯峨天皇に准へたる事より。次々に巻中の人々を。其世の人に思ひあてたる准據を擧て。日本紀をよく讀たるよしを。のたまへるやうにいはれたり。然れども此所の文。本によりて異同あるを。かの御局考には。日本紀をこそよみたるべけれとして引れたるは。さる本も有しにや。もしくは本によみ給へけれとあるを見て。帝より式部を給とはのたまふまじく。又給へとおのがうへにつけていふ意としては。語格の自他たがへれば。誤なりと見て。改められたるか。そはしらねども。よみたるべけれといひては。ざえあるべしといふに。かけ合ぬがごとし。たるは既に讀たる意なれば。べしと末をかねていへるにかなはず。又べしを推量りたる意として。俗言にざえガアルデアラウといふ意としては。次の詞に。おしはかりにいみじうなんざえある。（ざえの下にがもじある本は衍りたるなり）と殿上人などにいひちらして。とあるにかなはず。さるはまことにざえあるべしとのたまひたるを。いみじうざえあるといはんは。いさゝか言のかはれるのみにて。事のすぢは同じければ。さばかりたがへる事にあらざれば也。案ふに。給ふのふもじは。そへてかゝぬが昔の例と見えて。此物語の古き寫本どもに。いづれも添たるはすくなし。さればなほたまふべけれ。とよむべくおぼゆ。さて帝より式部を。給ふとのたまはんとは。後世にてはありげにもなき事のやうなれど。其世ざまの詞には。さる例ども。此物語の中にもこれかれ見えたれば。これはさして疑ふべきにもあらず。かくて言の意は。此人は日本紀を讀べし。さらばまことに學問あるべしとの給へるにて。ざえは例の學才の事にて。今世に學問といふ事。あるべしは。今より後出來べしといふ意にて。べけれもべしも。共に末をかけていふ辭として聞ゆべし。それを左衞門内侍の。いみじう學問ありとのたまへるやうにいひひがめて。殿上人などにいひちらして。かゝるあだ名つけたるを。心うきことに思ひしなるべし。かく見ざれば。事のさま打あひがたし。されども日本紀とあるを。書紀の

みにはあらず。すべて國史を日本紀といひならへるやうにいはれしは。事がら實にしかあるべくぞおぼゆる。この論もうきたる事なれば。まとにはいかゞあらん。例の人さだめてよ。さてかく日本紀の御局とつけたるにても。其世に人のあだ名つけけんならはしをおもふべし。猶他に見えたり。

時世のありさまの事

此物語をよまんには。まづ其時世のありさまを。よく〳〵思ひわきまへ置て讀べし。然らざれば事のさまいたく違ふ事ありて。後世の心にては。思ひ惑はるゝ事のみ多くして。うまく意得ることかたかるべし。時世とは。此物語作られたる一條院の帝の御代の事なり。紫家七論にいへるごとく。この物がたりは。一條院の御代。長保の末寛弘の始。紫式部寡にて里に住れける間にかゝれたる事は。大かた違ふまじくおぼゆるに。物語のさま。昔の世に有し事のやうには書のがれたるものから。すべての事のありさまは。其世にありしおもふきにて書れたり。と見えたれば。作者の在世のほどのありさまにて意得べきこと多かり。そのありさまをかつ〴〵いはんに。先我大御國の上古は。神武天皇。大和の橿原に大宮を建て。天下をしろしめしける時。神代ながらの御制度のまゝに。何事をもおきて給へりと見えたるにその制度のありさまは。大かた今世の御制度にちかく。朝廷に仕へ奉るを伴造といひ。諸國にて地を賜へるを國造といひて。おの〳〵生れながらにして。其家を繼其職をも繼て。幾世ふれども遷し變らるゝ事はなかりしを。（これらの事の委しきさまは。政迹考にいへればこゝには省く。）上古推古天皇の御世に。もろこしの冠位儀禮のさまを模し給ひ。孝德天皇の御世に。もろこしの郡縣の制度を模し給ひし後は。そのさまいたく變りて。大かたもろこしざまにぞなりにける。（これらの委しきさまは。日本紀また令格式の書をよみてしるべし。）そのあるやうは。日本を六十餘國と制め。國の下に郡を置。郡の下に鄉を置。鄉の下に村を置て。おのおの其吏をさだめ。朝廷にはもろ〳〵の官位を制められ。萬の事を司る所を置れて。各其吏をさだめ給ひ。その官につきて位の階あり。又その官位につきて。位田職田とて官位の祿あり。かくて朝廷にまぢかく仕奉る人たちは。其官位を賜りて次第に

高き階にも昇りゆく事なれど。官位は其人の一世かぎりにして。家を世々にしては傳へぬ御制度なりき。また國々の司は。京より出て年を限りて。こゝかしこ移ろひわたりつゝ。其國を治めらるゝことなりき。是いはゆる受領なり。郡領より已下の吏は。大かたその國の造縣主などのなれるもありと見えたる。これも年限など有けん。されども元來其處に住たる人なれば。後には世々其職を繼たるさまなり。さればいと卑しき吏ながらも。威權はこよなき事どもゝありし也　大かたかくのごとき御制度にはありしかど。我皇國には神世よりこのかた。氏姓を重みし。家系をいひたてゝ。貴き賤きを分つ國風なりしかば。その御制度は御制度として。やう〳〵にうつろひゆきつゝ。此一條院天皇の御世のほどなどに至りては。其職に任ぜらるべき家々も。大かた定りたるがごとくなれりし也。さても官位は。一世ばかりの御制なるからに。其官位につきたる隷も。また一世かぎりなりし也。されば世嗣のかはる時などには。いたく困ずべき事なる故に。私に田など買て。家のたつきとせられたる。是を庄園などゝいふ。今世にも某庄といふ名の。國々に遺れるは。其人の庄とありし所にて。皆私の領所の跡なり。源氏君の須磨　八宮の宇治なども。その領所めきて聞えたり。かゝる光景なりしかば。帝の御子とまうせども。さるべき御後見などのあらざるは。いと貧しくして。人げなきさまなるもおはしゝ事。常陸宮の姫君。宇治の八宮などの御さまにて思ふべし。さて官位に昇ることも。貴き家に生るゝ人は。その父祖の庇陰によりて。最初よりさるべき官位にも。つき給ふことなれど。地下といふより下ざまなる人は。さやうの憑もあらざれば。其時々に權威ある人の家に。私に心よせ仕へて。其勢をもて。朝廷につかうまつるべき種子として。官位をも申賜はり。後々までも其家の庇陰によりて。高き階にも昇りゆく事なりき。されば朝廷の御臣とも　權威ある家の臣とも知れぬさまなる人ども多し。此物語のうちにても。帚木の紀伊守。夕顔の惟光などやうの人。皆しか也。これ上古にも今の世にも。絶てなき事なれば。その勢ひいたく異なる事どももおほし。心得おくべし。また住所の事も左京右京のうちに。定れる宅地を賜はるやう

には見えたれど。此物語などのさまにては。しか嚴かなる事とも聞えず。富榮えたる人などは。己が意にまかせても宅地を買とり。或は人に讓り。又貧しくなれば賣などもせし事。他し書にも見えたれば。大かたはこれも勢ひにまかせ意にまかせて。何處へも轉りゆきし事とぞおぼゆる。さるは公卿より下の人々は。世の代る時などは。さるべき人もあらざれば。いと流落ることなどもありて。其勢ひのさまによりては。いかさまにもよろしきにしたがふべければ。おのづからさやうにはなれりしにこそ。まして婦人などはさまざまに浮れ漂ひて。所緣につきつゝさらぬ人の妻になる類もありと見ゆること。かの空蟬夕顔などのさまにて思ふべし。さて又いと上古には。氏姓の系を殊に重みせしならはしなりしかば。皇后に立給ふは。大かた皇子の系におはしましけるを。後にはやゝうつろひて。大臣の御女なども。皇后に立給ふ事もいできて。皇子など產奉り給へば。御外戚がたもその御ゆかりにつきて。上なき位にも昇りなどし給ひ。さらぬ公卿の御女たちも。女御更衣にそなはり給ひて。皇子うみ奉り給へば。同じく御威權のいでくることとなりしかば。いづれも〳〵。息女をいつきかしづきて。宮仕に出したてんとせられたること。當時のならはしなりき。桐壺更衣の御父按察大納言の遺言せられしやう。明石入道のかたくなに思ひつめたりし事などを見て知るべし。これはた今世には。をさ〳〵なき事なれば。いとおもひの外なる事どももおほし。さて又夫婦のなからひなどの事は。上古よりのなごりにて。たゞよりくる緣にのみまかせて。これは本妻かれは側室など。きはやかに名をつくる事だに。さばかりきよくはなかりしさま也。されば貴き人の御うへには。本妻とおぼしき人の。二人までおはするもあり。また妻とも妾ともしられぬ類ひなどもありて。さま〴〵なりしなり。これ今世もろこしざまの婚禮のさまとはいたく異なり。そのあるやうをかつ〴〵いはゞ。此物語また他し書どもにも見えたるごとく。同じほど。それより少しづゝ上下の品はあれども。相偶ひてよろしきほどの家に。女などありと聞ては。たよりにつけつゝ文をやりて。其返事のさま。歌のよしあしなどを考へ。手のよしあしなどをも見て。いみじく心にかな

へるには。心ざしを盡してひたぶるにいひより。又媒をたのみても心を盡すほどに。つひには事とげてかよひそめ。後にはあらはに女のかたへゆきて住などもするを。其女の父母など打聞ても。よきほどの事なれば。初はしらずがほして打すておき。後にはその婿に對面する類ひもあり。或はまた其男の。心にかなはぬをば。聞出すやがて制するもあり。又いと心にかなへるには。其女に文の返事などをしへてかゝせなどもすることなりき。されば文をおくるばかりのことは。大かた何のつゝむこともなく。その歌のかへしなどのめでたければ。なか〳〵いみじくいひはやして。感ずることとなりしさまは。帝に奏覽する世々の撰集にだに。その歌どもに作者の名をあらはしかゝれたるなどにて思ふべし。かゝるならはしなりしかば。まれには案外なる事どもゝいでくめれど。それさしも名分をたてゝいひさだめたる。妻妾といふにもあらねば。大かたの事はいみじき曲事とはおもはぬさまなりし也。貴き人だにかゝりしかば。ましていと〳〵下ざまには。さこそはさま〴〵なる事もありけめ。今世もろこしざまの婚禮といふ

わざにめなれ且かの國の後世の理學の論など聞ならひたる心より考ふれば。いとも〳〵思ひよらぬ事のみにて。彼がいはゆる淫奔の風世に滿て。上下おしなべて不義ならぬはなしとこそいはめ。然れども。それは今世にしてさる事おこなひたらばこそあらめ。其世にはこれすなはち其世の夫婦の道なりしかば。誰一人ひがことゝおもへることはなかりし也。かくいひても。猶今の俗はあやしみて。いひとく人に罪おほすばかりなるは。かの夏蟲の氷を疑ふたぐひにて。ならはぬ事を見聞て驚き思ふ故ぞかし。されども。又男女のなからひの正しかりし事は。今のさまよりはこよなく異にて。男女つねにたいめんすといふ事はなく。止事を得ずしてあふ事のあらんにも。疎き人は簀子にだにのぼらせず。やゝ親しきも簾を隔たるうへに几帳をたてそへ。或は障子を隔たる物ごしなどにてあひても。猶聲きかすばかりもはづかしき事とおもへり。兄弟なども異腹なるは。なほこのぢやうにて。あらはに面を見するを恥たり。もし其世の人に今世のさまを見せたらんには。何とかいはん。いとみだりがはしく恥をしらぬ風俗

とこそいはめ。されば昔は昔。今は今。皇國は皇國。もろこしはもろこしとして。其世のありさまを疑ひあやしふべからず。猶いはゞ。我皇國は氏姓のすぢを重くする國俗なれば。男女の緣も。あまりに貴き賤しき事たがひたるは。ふさはぬ事なれば。いかに妾なればとて。あやしくやうたがひたる者の女などを。貴き人の側に近づくる事などは。昔はをさ〳〵なかりし事也。又事理をもていはゞ。男ぞまづ女の家に通ひて妻問すべきことにて。見も知らぬ女を。先男の家にむかへくるなども。うらうへなること也。さればもろこしにも。親迎などいふわざの見えたるは。かたばかりさることを思へるなるべし。すべて男女のみちは。かたみに相感てあふべきことわりなれば。聞も知らぬ人を。おやしぞくの心もて。あながちに引もてきて。おしすうる事などは。天地のおのづからなることわりならねば。昔の世にはせざりしなるべし。又媒といふものも。其家のさま人のさまなど。よく見知たる女房などにして。女も物のいひにくからぬ人などつかはして。志のせちなるよしをいひしらする事なりしは。人の心をやぶらぬわざとこそいはめ。なにがしと名たゝる人の媒して。其親々と嚴かにいひ契れる中には。たゞ一言のたがひもて。男も女も永き世の物思ひとなることもあるを。おもひくらべて考ふべし。大かたそのかみは。時の帝と申せども。したがはぬ女をあながちにめさるゝさまにはあらず。桐壺の帝の。藤壺の中宮をめされし所。また朱雀院の帝の。秋好中宮に思ひかけ給へる事などを見て知べし。其中に玉かづらの君の事などは。餘りにかしこき事のごとくなれど。それはた情をさきだつるならはしなりしかば。うち〳〵の事はあらはに咎め給ふことなどもなくて。すぐし給へる事と聞えたり。これらはあまりになよび過たる事にはあれど。人の妻妾と定れる女を。おしたちて奪ひけん。もろこしの王どもがうへにくらべて。皇國のならひのまされるを知べし。大かたこれらの事どもは。今世のさまとはいたく違へる事なるからに。聞つかぬ輩は。これを見聞て。我國は禮儀もしらぬ夷狄の國のごと。思ひいふめれど。それは皆もろこしのふりをのみならひたるにて。國々おの〳〵ならはしの異なることをえしらぬ。いみじきひが心

といふべし。その中にも上にいへる。天下の御制度などは。我皇國のふりならず皆もろこしのふりを模されたること。又この男女のなからひのさまは。しかもろこしざまを模し給へるところなりしかど。猶我國ながらのならはしなる事。又今世の御制度は。大かた孝德天皇の御世よりあなたの。我國ざまの御制度なること。又今の夫婦の定めは。もろこしの禮にならへるものなることを。思ひ辨ふべし。猶いはまほしき事どもは多かれど。そは又別なる書にいへれば。こゝには省きつ。たゞ此物語をよむ人の。いつも〳〵いふかしむ事どもは。おほよそ上にいへるが如きことなれば。あら〳〵其あるやうを示しおく也。よく〳〵時世のさまを意得て。うたがふべからず。熊澤氏の源氏外傳にいへらく。惣じて其代にて見ると。後世より見るとは相違の事あり。其世には治世無事と思へども。その世の凶事どもを取あつめ。一所に書つらねたる記を見れば。治世のなきやう也。又戰國の記を見れば。朝夕軍ありていそがしきやうなれども。世間無用の多事やみて。却て隙なるもの也といへり云々。源氏も一生好色の人のやうに見ゆれども。さありては人の交りもなりがたかるべし。古への書を見るには。萬事おもひやりあるべし。といへり。まことにさることなればこゝにかゝげつ。おのれ常にいへらく。昔の書どもをよむには。心得べきやうあり。それはまづ國史。また律令格式の書などは。大かたわろき事をば用意して記し。又その人をおもむくる法などをのみ。記されたるなれば。これをよめば。何事もいみじく聞えて。さながらに滯りなく。行はれたることのやうにおぼゆるを。此物語さらぬも其世々のうちとけ言の物語などを見れば。おもひの外にたがへる事どもゝ多し。さる條どもを彼此かよはし考へて。其世々のありさまを推て知るべし。すべて昔の書を讀て學問する事は。むねと其時世のあるやうを考へて。今世にはたらかし用ゐて。益ある事どもを知ん爲なれば。なほざりに見んはいたづらなるわざ也。なに漢學する人など。かの國の經書といふ物をのみ。常に見ならひて。彼國は何事も。すべてうべ〳〵しく足ひたる國のごといひふめれど。その打とけ言かきたる書などを見れば。いと〳〵あやしくわろき事も多くして。か

の經書また法令教訓の書にいへるやうなる事い。さながら行はれたることは。昔よりさらになき事いとよく知れ。其中には。あまりに道理を責る故に。中中にねぢけたるふり。情なきならはしなども起れりしさま。殊に多く見えしらがふめり。されば何れの書を讀んにも。ひたふるに其文ことばに泥むことなく。人情のなりゆく末々を。深く思ひはかりて。其世のさまをさとるべし。中昔のほどのありさまを知るには。此物語などは殊によろしき書なれば。彼正しき書どもに見合せて。其世のふりを考ふべし。これなん學問のむねとあるべき事なりける。

此物語稱譽の事

舊注どもいづれの抄にも。此物語古來稱譽之事　と云條ありて。むかしより人々の譽られたる事どもを記されたり。然れども皆たゞかたそばばかりの事にて。まことによくいはれたりとおぼゆるも稀なり。たゞ玉小櫛にいはれたる事のみぞ。此物語のさまにいとよくかなへれば。いさゝかこゝに引いでゝ。よむ人のしるべとす。小櫛に云。こゝらの物語書どもの中に。此物語はことにすぐれてめでたき物にして。大かたさきにも後にもたぐひなし。まづこれよりさきなるふる物語どもは。何事もさしも深く心をいれて書りとしも見えず。たゞ一わたりにて。あるはめづらかに興ある事をむねとし。おどろ〳〵しきさまの事多くなどして。いづれも〳〵　物のあはれなるすぢなどは。さしもこまやかにふかくはあらず。又これより後の物どもは。狹衣などは。何事ももはら此物語のさまをならひて。心をいれたりとは見ゆるものから。こよなくおとれり。其外もみなことなる事なし。たゞ此物語ぞ。こよなくて。殊に深くよろづに心をいれて書る物にして。すべての文詞のめでたきことはさらにもいはず。よにふる人のたゞずまひ　春夏秋冬　をり〳〵の空のけしき　木草のありさまなどまで。すべてかきざまめでたき中にも。男女その人々のけはひ心ばせを。おの〳〵ことことに書分て　ほめたるさまなど。皆その人々のけはひ心ばへにしたがひて。一やうならず。よく分れて。うつゝの人にあひ見るごとくおしはからるゝなど。おぼろ氣の筆の。かけても及ぶべきさまにあ

らず。さて又よろづよりもめでたきことは。まづからぶみなどは。よにすぐれたりといふも。世の人の事にふれて。思ふ心の有さまをかけることは。たゞ一わたりのみこそあれ。いとあらく淺きもの也。すべて人の心といふものは。からぶみに書るごと。一かたにつきゞりなる物にはあらず。深く思ひしめる事にあたりては。とやかくやと。くだ〳〵しくめゝしくみだれあひて。さだまりがたく。さま〴〵のくまおほかる物なるを。此物語には。さるくだ〳〵しきくま〴〵まで。のこるかたなく。いともくはしくこまかに書あらはしたる事。くもりなき鏡にうつして。むかひたらんごとくにて。大かた人の情のあるやうをかけるさまは。やまともろこしいにしへ今。ゆくさきにもたぐふべきふみはあらじとぞおぼゆる。又すべて卷々の中に。めづらしくおどろ〳〵しく。めさむるやうの事はをさ〳〵なくて。はじめよりをはりまで。たゞよのつねのなだらかなる事の。同じやうなるすぢをのみいひて。いと長き文なれども。よむにうるさくおぼゆることなく。うむことなくて。たゞつゞきゆかしくのみぞおぼゆるかし。おのれをしへ子どものために。はやくより此物語をよみときてきかすること。あまたかへりになりぬるを。あだし書どもは。かばかり長からぬだに。說にうむ心もまじるを。これはさしもながき書にて。年月をわたれども。いさゝかもうむ心いでこず。たびごとにはじめてよみたらむこゝちして。めづらしくおかしくのみおぼゆるにも。いみじくすぐれたるほどはしられて。かへす〴〵めでたくなん。といはれたり。まことに此說のごとき書になん有ける。その中にもげにいはれたるやうに。人の心のうちに思ふことのくま〴〵を書あらはしたるは。いみじくいふなる漢文にも。ことなくまさりておぼえたり。今そのゆゑを案ふに。漢文にはすべててにをはといふ物なきからに。ものゝ心ばへなどを。いと〳〵委しくいひきはめんことは。おろそかなるべきことわり也。されども其もじごとに義を含みたる故に。上手の書る物などは。字の外に餘光あるごとくにして。めでたく聞ゆることなれど。すべてはいはゆる自他天人過去未來などの事を。さはやかにいひ分つことあたはずして。いとおほらかなる物なれば。（此事は別にいひたる物あれ）

ぱこゝにはたゞ大かたをあげつらふのみ也 たとひ稗史小說などいふ類にても。心におもふ事などは猶わらくして。うはべのありさまを。他より評じたるごとき體の物となれり。これからぶみのみじかき所なり。我國の文もあだし書なるは。皆たゞ事の意の聞ゆるをのみせんとして。心をこめたるものならねば。此物語のごと委しくめでたきはさらになし。さればたゞ此物語のみぞ。漢文にもまされる皇國ぶみのほんとすべき物にて。げにもやまともろこしいにしへ今。ゆくさきにも比類なき書になん有ける。

此物語の歌の事

玉小櫛に云。すべて物語の歌の事。伊勢物語などのは。おほくは古歌なれば。よきが多きを。作りぬしのあらたによみたりとおぼしきはよからず。中にはえもいはずわろきもあり。その外の古き作り物語ども。大かた歌はみなわろし。然るに此源氏の物語なるは。みな作りぬしのよめるなるに。わろきはをさをさ見えず。みなよろしき中に。すぐれたるもまじれり。歌は源氏なるよりは。狹衣ぞよろしきといふ人もあれど。然らず。さごろものも。ほかの古物語どもの歌にくらぶれば。げにこよなくよろしけれども。源氏のよりまされることはあらず。といはれたる。これもあたれる評なるを。近世の歌よみどもは。うけあへぬも多くありて。とやかくやもどきいひ。これらのことによりて。本居翁の歌をさへつたなきやうにいへるもあるは。いみじきひがこと也。それは此物語の中なる歌どものさま。一ッの體ありて。八代集などの體とはいさゝかかはりたる所もあるに。ちかきころは。萬葉集の詞をまじへてよむを。いみじきわざのやうに心得。それに新古今集のしらべなどをとりそへて。風韻ありなどいふ類の事行はれたる。其すゑ〴〵には。今俗のたゞに思ひいふことにちかき。いやしげなる事をさへいひて。さとび心にへつらひたる歌などもありて　おの〳〵たてたる私說をおし立んとて。さる說をもいふにぞあるべき。それはみないにしへの心詞を深くもたどらず。此物語などをも。たゞうはべばかりのぞき見たるのみにて。いひしらぬ味はひある事をえしらぬからに。さとび心に思ひなずらへて。妄に評ずるにこそあれ。

まことに此物語の歌は、大かた一ッの體あるものから。又しかひたむきにはあらずして古ぶりなるあり、後のさまなるあり、きすくなるあり、たくみなるありて。おの〳〵其人の其事がらに相かなへたるなれば。もろ〳〵の體一ッとしてそなはらざることなし、そが中にも、巧なること餘韻あることは、いひしらぬまでたくみにはひあるもあり。又その一ッの體といふも。そこのさまによりて。前後の文の詞ににほはせてひゞきあるさまに詠れたる故に、よのつねの歌集どもに、一首づゝはなちて擧たることは。おのづから差ありて。一ッの體あるやうには見ゆるなれど。すべては別にあやしき體あるにはあらず。しかるをたゞ一わたりに思ひとりて。それ稱たる先達をさへ。つたなきやうにいひちらすめるは。いとあぢきなくかたはらいたき事なり、此物語のうちに。歌の事を論ぜられたるところのあるをも見て、歌といふもののすべてのさまをもしるべく。又作りぬしの歌にらう〳〵しかりしほどをも思ひ辨ふべし。さて又本居翁の歌は此物語のみならず。中昔の此の歌のさまをいとよく學びとられたるものにて。其さまおだしく

おどろ〳〵しきふりなどは。たえてなき故に。ふと見てはかど〳〵しからぬやうにも見ゆめれど、よく〳〵よく味はひ考ふれば、げによくうつしとられたる所ありて、古人のふりにかなへるもの也、すべて近世に。よき歌とていふをきけば。たゞ一ふしあやしき事を考へ出て、物のあはれしらぬ人の耳に、けざけざとつらぬきて、げにとおぼゆべきさまのことつくるを、上手とはする事のやうなれど、それは皆このごろのさとび心の定めにこそあれ。實に本として學ぶ所の古の歌に似たらんには。今俗の耳には疎かるべきことわりなれば。しかかどなきさまにいはれなんは、中々いにしへの體に近きなるべし、かうやうの事は。猶いとはいはまほしき事多かれど、此物語にあづかる事にもあらざれば、こゝには畧きつ、安藤氏が紫家七論にも。いへらく。物語のうち。和歌ならびに詞ども、萬葉古今伊勢ものがたり竹とりなどの古體をはなれて。しかもおほどかにて。やすらかにやさしく。おほかた吾國の風流をつくしたれば。見る人をして倦事を知ざらしむ。まことにやまとぶみの上なきものなり。といへり。いにしへの歌物語の書ど

もを。よく見明らめたる人の論は。誰も皆かくなん有ける。さて又玉小櫛云。此物語。源氏君をはじめて。よき人としたる人の事は。何事もめでたきさまにほめたるに。そのよみ給へる歌のみは。ほめたる所一つもなくして。其人の他事のよきにあはせては。歌はあしきやうにいへる事のみ。ところ〴〵に見えたる。そは此物語の中の人々の歌は。みな紫式部みづからよめるなれば。ほむればわれほめになる故也云々。こゝに其例ども多く擧られたれど。今は略く。みなつくりぬしの。卑下の心しらひにていへる詞どもなるを。むかしよりそこに心つける人なくて。たゞまことにその歌のよからぬやうにのみ。注せられたるはいかにぞや。とあり。これ又心得おくべき事也。小櫛に又云。歌よむべき心ばへをしらむとならば。此物語をつねによく見べし。此物がたりに書たる事ども。人々のしわざ心ばへは。こと〴〵く歌よむべきこゝろばへ也しかいふ故はいかにといふに。まづ人の情は。古今たかきみじかき。かはる事なき物とはいへども。其中に時代のならひ身のほどなど。おのれ〳〵が世中につきて。いさゝかかはれるところもなきにあらず。

かくて歌も情の物に感ずるより。よみ出るわざなれば。いにしへ今高きみじかき。かはりはあるまじかるべきことわりながらも。上つ代こそあれ。中昔よりこなたのうたはしも。かならず今思ふ心をのみ。有のまゝによみいづるにもあらず。いにしへの歌をまねびて。其おもむきによむわざなれば。いにしへの世の有さま。人のこゝろばへしわざを。よくしらではかなはぬわざ也。又いにしへをまねぶといふ中にも。萬葉集よりあなたのは。世あがり事とほくして。そのさまいたくふりにたれば。さしおきて。おほかた古今集よりこなたをまねぶことなるに。そのよゝの歌どもは。みなむげにいやしきしづ山がつのよめるにはあらず。されば古の歌をまねぶにつきては。中の品より上ざまの人の心しわざ。その品の世中をもしらではかなはぬわざなるを。今の世にして。それこまかにしらんためには。この物語を見るにまさることなし。いにしへのも。たゞ歌を見たるのみにては。その歌のいできつる。本の心のくはしきやうをしらざる故に。まねぶに猶うときかたあるを。此物語を明暮によみなれぬれば。源氏君をはじめて。よき

ことのかぎりをとりあつめて。みやびたる人々にまじらひて。まのあたりその氣はひかたちを見。その物語をきくがごとくにて。そのしわざになれ。その心のうちまでこまかに見しられ。又そのかみの雲の上の有さま。をりをりのおほやけ事。やむことなき家々のうちうちの事どもまで。雅たる事のかぎりを。今のうつゝのめのまへに見るがごとくなれば。いにしへ人の歌の出來たる。本の有さま心の。よくしられて。かやうの歌は。しかじかの時に出きて。そのをりのよみ人のこゝろは。しかじかなる物ぞとやうに。くはしくしらるゝわざぞかし。さるゆゑに。此物語に書たる事ども。人々のしわざ心ばへは。ことごとく歌よむべき心ばへぞとはいふ也云々。さて此物語をつねによみて心を物語の中の人々の世中になして歌よむときは。おのづから古へのみやびやかなる情のうつりて。俗の人の情とははるかにまさりて。同じき月花を見たる趣も。ことなくあはれ深かるべし。さるを近き世の人は。古への歌をまねぶとはすれど。古への人の世中をしらず。その情にうとくして。たゞおのが今の心にまかせてよむ故に。古へにたがひて部しげなることのみおほくいでくるぞかし云々といはれたり。これ實にいはれたる說にて。歌よむ人の心得になる事おほければ。事の因に引出たる也。猶本書には。こまやかに其ことわりをいはれたれば。ひらき見て知べし。然るをこの段をも又さまざまのひがことをいひて。なじりたる物あれど。くだくだしければこゝには略きつ。歌の學びざまを論へる書の中に引出て。悉く辯へいふを見るべし。

作者の用意の事

紫家七論に云。凡才德ともに備ふる事は。丈夫すらかたき事になんありける。まして女にては。大和もろこしいとも稀なるべし。こゝにいにしへより源氏物語を論ずる人。たゞ紫式部が英才をのみ稱して。其實德をいはざれば。此物語の本意もあらはれがたく。式部がためにあかずうき事なり。爲章つらつら物語とむらさき日記とをよみて。其事實を考るに。やまとには似る人もなく。才德兼備の賢婦なり。先ツ物語のうへにて。ひとつふたつをいはゞ。紫上のらうらうしくおほどかなる物から。おも

りかにして用意ふかく。明石の上の心たかき物から。へりくだり。花ちる里のものねたみせず。藤壺のきさきのあやまちをくいて。はやく入道し給へる。朝顔の齋院のふかく名をゝしみ給へる。玉かづらのうへの言よく人々のけさうをのがれ。總角の君の父宮の遺戒を守りたるなど。樣々の婦德を記し。殊に品定に。あだなるをしりぞけて實なるをすゝめ。しばしば警戒をしめしたるは。しかしながら式部が心おきてなりといへども。みなむかし物語に書なして。みづからかしこだてをあらはさゞれば。よむ人もたゞ他の噂のやうにのみおもへり。たとへば本人の歌舞は。優師がユミなることをしらざるがごとし云々。といへり。（此末紫日記を引いで註して。其才德のいみじきまた玉かりしよした委くいへり。本書を見るべし。）小櫛に云。紫式部が心ばへは。此物語とかの日記とをもて考ふるに。女の學問だてして。さかしだちざえがるをば。いみじくにくみて。みづからも人にしか思はれじと。深く用意したるさま所々に見えたり。帚木卷にすべて男も女もわろものは云々といふより。いはまほしからん事をも。一つ二つのふしはすぐすべくなんあべかりける。といふまでの詞など。みづからの學問だてをにくみてせぬ心をしめしたる物なり。同卷に。などかは女といはむからに云々めにもみゝにもとまること。じねんに多かるべしといへるは。女とてもさばかりの事は。もとよりたれも有べきことなればそれにほこるべきわざにあらずといひて。みづからほこる心なきことをしらせたる也又同卷に。はかせのむすめの事を式部丞が語りたるを。君たちむくつけきことゝ。つまはじきをしてあはめ給へるよしかきたる。此女のやうをかむかふるに。さばかりあしくいふべき事は見えざるを。紫式部みづから學問だてをにくむ心を見せんために。ことさらにいみじくあしき事のやうに。いひなしたるもの也。又をとめの卷に。大學寮の衆の。ふるまひ氣はひ物いひなどを。いともあやしげに書るも。一與ながら。わざととりたてゝ學問する者の。優ならぬよしを。ことさらにいみじくいひなせる也。さるはよの人のならひ。すべて何わざも。おのが好みたふとむすぢの事をば。殊にめでたくよきさまにいひなさんとするわざなるに。みづからことに學問を好みながら。かへりてかくよからぬさまにいへる事

どもあるは。人にことなるふかき心しらひにぞ有ける。といはれたり。げに此説どもにいはれたるごとく。此物語の中なる人々の心ばへ。又其ことにつきたるよきあしきけぢめなどは。皆こと〴〵く作りぬしの用意なれば。今さらにこゝには評せず。その條ごとに心をふかめてあぢはひ見なば。まさしく作者に其用意のやうを聞くがごときものにて。いみじき事ども多きぞかし。

物語の心ばへ幷物のあはれを知るといふ事

玉小櫛に云。大かた物がたりは。世中にありとある。よき事あしき事。めづらしき事。おかしき事。おもしろき事。あはれなる事のさま〴〵を書あらはして。そのさまを繪にもかきまじへなどして。つれづれなるほどのもてあそびにし。又は心のむすぼられて。ものおもはしきをりなどのなぐさめにもし。世中のあるやうをも心得て。ものゝあはれをもしるもの也。といはれたり。物語といふ書を見るやうは。げにたゞかゝるものになんありける。さてこの源氏物語は。いかなる心にてつくれる。といふことの本意は。螢卷に源氏君と玉かづらの君との物語の事の問答の中に。何となく書あらはされたるを。玉小櫛に引出て。其意を注せられたり。これまことによき考にて。作りぬしの意をさながらに知らんことは。げにこのうへの事なんなかりける。その委しきさまは。かの書を見てしるべく。おのがかうがへは。螢卷に小櫛の説をまじへて注せれば。今は省きつ。さて又物語の中に。よきあしきなどいへるは。よのつねの儒佛の書にいふ善惡是非とは同じからず。たゞ人の情によしあしと思ふ事にて。物のあはれを知るをよしとし。しらぬをあしとしたる事も。小櫛にくはしくいはれたれば。必見るべし。この事のすぢを知ざれば。此物語見ても。其深き心ばへをしるによしなし。實にこの物のあはれを知るといふ事物語ぶみのむねとある事は。この本居先生ぞはじめて見いでて。委しく説述られたるにて。いとも〳〵心ことにめでたき考になん有ける。されば小櫛の二の卷は。大かた物のあはれの事をのみ解のべられたり。今其説を引出ていはんには。いと〳〵事長くなるをもて。

催馬集の歌の拍手(ハヤシ)の聲にハレといふをあれど今とは別なり又西國にて歎物に驚はしテハテサテ云々といふを東國の人はハレサテとやうにいふ俗語もあれど猶あはれの言の本に引いづべくはおぼえずなん

其要(ノムネ)とある所を摘(トリ)て。いさゝかこゝにかゝげつ。委しくは本書を見て知べし。さてその説の中に。あはれといふ言の本をとくとて。あはれは見る物きく物ふるゝ事に。心の感じて出る歎息(ナゲキ)の聲にて。今の俗(ヨノ)言(コトバ)にも。あゝといひ。はれといふ是也。たとへば月花を見て感じて。あゝ見事な花ぢや。はれよい月かななどいふ。あはれといふは。此あゝとはれとの重なりたるものにて。漢文に嗚呼などあるもじを。あ あとよむも是なり。といはれたるはいかにぞやおぼゆ。その故は。物に感じてあゝといへるは。古今たがふことなきを。はれといへることは。をさ〴〵物にも見えざるに。今の俗言(ヨノコト)にも聞たることなし。もしくは伊勢わたりの方言などにや。いと心得がたし。さればたゞあはれといふは歎息の聲とのみ見るべき也。此外(ノ)の説はすべていとめでたし。小櫛に云(ク)。人は何事にまれ。感ずべき事にあたりて。感ずべきこゝろをしりて感ずるを。ものゝあはれをしるとはいふを。かならず感ずべき事にふれても。心うごかず感ずることなきを。物のあはれしらずといひ。心なき人とはいふ也。ものゝわきまへ心ある人は。感ずべき事は。おのづから感ぜではえあらぬわざなるに。さもあらぬは。何とも思ひわくかたなくて。かならず感ずべき心をしらねばぞかし云々。此物語は殊に人の感ずべき事のかぎりを。さま〴〵かきあらはして。あはれを見せたるもの也。まづおほやけわたくしおもしろくめでたくいかめしき事のかぎりをかき。又春夏秋冬をり〴〵の花鳥月雪のたぐひを。おかしきさまに書あらはせるなど。これみな人の心をうごかし。あはれと思はする物にて。心に思ふことある時は。殊に雪のけしき木草の色も。あはれをもよほすくさはひとなるわざ也云々。(廣道云此次に物語の中なる語ども多く引れたれど今ははぶくおのが考はその巻々に注すべし。)そも〴〵紫式部が本意。とにかくに物のあはれをしるをむねとはして。しらざるがいふかひなきことはさらにもいはず。またそをしりたるふるまひの過たるも。あぢきなくよからぬことにて。其ことのすぢによりては。かならずあだなるかたにながれやすきわざなれば。心には深く思ひしりて。そのよきほどを思ひめぐらして。顯はしふるまふべきすぢもあること。上の件に引出たる。巻巻の事どもを考へわたしてしるべし。これぞ此物語

の大むねなりける。さてそは作りぬしの。みづからすぐれて深く物のあはれをしれる心に。世中(ノ)にありとある事のありさま。よき人あしき人の心しわざを。見るにつけきくにつけふるゝにつけて。そのこころをよく見しりて。感ずることの多かるが。心のうちにむすぼゝれて。しのびこめてはやみがたきふし〴〵を。その作りたる人のうへによせて。くはしくこまかに書顯(カキアラ)はして。おのがよしともあしともいはまほしき事どもを。其人に思はせいはせて。いふせき心をもらしたる物にして。よの中の物のあはれのかぎりは。此物語にのこることなし。さてこれをよむ人の心に。げにさもあらんと深く感ぜしめんために。何事もことさらに深くいみじく書なしたり。かゝれば此物語をよむは。紫式部にあひて。まのあたりかの人の思へる心ばへを語るを。くはしく聞にひとしく。又物語の中に見えたるよきあしき人のしわざ心のおもむきを。よく考へみれば。しか〴〵の物を見聞たる時は。かやうに思はるゝもの。しかしかの事にあたりたり時の心は。かやうなるもの。よき人のしわざ心は。かやうなるもの。わろき人はかやうなるものとやうに。すべて世中(ノ)の有さま。なべて人の心のおくのくま〴〵まで。いとよくしられて物の心をわきまへしりて。からぶみにいはゆる。人情世態によく通ぜんこと。此物語をよむにしくものあらじとぞおぼゆる。已上小櫛 廣道云。この論まことにさることにて。作りぬしのしたの心を見とほしたらんがごとし。これにつきていはまほしき事のあるは。すべて古今(ヘ)學問といふことする人。多くはただ書籍(フミ)に書たる事をのみ讀ならひて。今の現(ウツヽ)の眼前にある事をばさしもたどらず。ひたすら理といふ事をさきだてゝ。何事も〳〵その理におしあてかなへんとすることよ。そも〳〵學問といふ事は古(ヘ)の道を學ぶも。もはら古(ヘ)のありさまをしりて。それにくらべて。おの〳〵生(ケ)るほどの世中(ノ)のありさまをもさとり。事の成るべきやうをも思ひめぐらさんためなるべきを。かの理といふものをおしたてたるのみにては。今日(ケフ)の日のありさまに。さながらかなひたる事は少くして。しか學びたるごと。つゆもたがはずあひあたる事はなきもの也。しかるを強(シヒ)て其理にかなへんとては。さま〴〵賢(サカシ)ぶりたる行ひなどして。心に

もあらぬわざどもを。他にかゝはらずなしいでゝ。頑固なるふるまひするを。みづからこそいみじとも思へ。大かたの世人よりみれば。いとも〳〵あやしくこそさらびたることとなるをもて。はて〳〵は學問する人は。家をも身をも失ふものゝやうにさへいひしらふめるは。いとあぢきなく心うきわざになんある。さるはいはゆる。人情世態に通ずるかたの學問といふことの。殊にあらざる故ぞかし。されば物語ぶみの類を見て。人つ情のくま〴〵を。なごりなく知明らめて世中のあるやうをもさとり。さて千萬の書籍どもを讀ば。一書よみて一卷のかひあらんこと。疑ひなかるべし。げにそのかたのためなどには。又此物語に過たるものはあらざりけり。昔宮木孝庸といひし人。其君なる玄旨法印に。世間の便になるべき書は。何をか第一と心得侍らんと問しかば。源氏物語と答へられけるとぞ　もしくはかゝるかたの事どもをや思ひ給へりけん。これら猶いといはまほしき事どももあれど。それもまた別卷にいふべし。さて又玉小櫛に云。人の情の感ずる事戀にまさるはなし。されば物のあはれのふかくしのびがたきすぢは。殊にこひに多くして。神代より世々の歌にも。其すぢをよめるぞ殊におほくして。心ふかくすぐれたるも。戀の歌にぞ多かりける。又今の世の賤山がつのうたふ歌にいたるまで。戀のすぢなるが多かるも。おのづからの事にして。人の情のまこと也。さて戀につけては。そのさまにしたがひて。うきこともかなしき事も。うらめしき事も。はらだゝしきことも。おかしき事も。うれしきこともあるわざにて。さま〴〵に人の心の感ずるすぢは。おほかた戀の中にとりぐしたり。かくて此物語は。よの中の物のあはれのかぎりを書あつめて。よむ人を深く感ぜしめんと作れる物なるに。此戀のすぢならでは。人の情のさま〴〵とこまかなる有さま　物のあはれのすぐれて深きところの味はあらはしがたき故に。殊に此すぢをむねと多く物して。戀する人のさま〴〵につけて。なすわざ思ふ心のとり〴〵にあはれなる趣を。いとも〳〵こまやかにかきあらはして。ものゝあはれをつくして見せたり。後の事なれど。俊成三位の。戀せずは人は心もなからまし。物のあはれもこれよりぞしる。とある歌ぞ　物語の本意によくあ

たれりける云々。廣道云こゝに此物語の中なるあはれの深くしのびがたき記事ども引出られたれど。例のはぶく。上件の文どもに。あやしの心やとわれながら。おぼさる。葵巻の詞思ひかへし給へどえしもかなはず。夕霧巻の詞などあるをもて。此道の物のあはれの。深くたへがたきほどをしるべし。されば此すぢにつけては。さるまじきあやまちをも引いで。ことわりにそむけるふるまひも。おのづからうちまじるわざにて。源氏君のうへにて。空蟬君の事。朧月夜君の事。藤壺中宮の事などのごとし。戀の中にもさやうのわりなくあながちなるすぢには。今一きはものゝあはれのふかき事ある故に。ことさらに道ならぬ戀をも書出て。其あひだのふかきあはれを見せたるもの也云々。此次にその事ども引れたれど略く。本書を見るべし。此論もいといはれたり。そも〳〵戀などいふ事はしも。今俗の心にては。皆いはゆる淫奔放蕩不義非禮の事をさしてのみいふことのごと思ふらめど。それは皆儒佛の教に耳なれて。しか思ひならへるものにこそあれ。實に男女のなからひは。天地の神のおのづからになし出給へる道にして。さらに人の力もて禁むべきものにはあらず。生としいける物のかぎり。この道しらぬもあらざるは。これによりて次々に子孫をうまはりもてゆく。世中の本と有ことなれば也。然れどもさばかりいひて。いさめずしもあらば。これによりて爭ひもおこり。世のみだれともなるべきなれば。ほど〳〵に其道におきてゝ。おほやけより其偶ふべきやうを定め置給ふ。これやがて其世の大道にして。諸人のふみしたがひゆく所の規則なり。されば梅枝巻に源氏君の夕霧君を教喩し給ふ所などにも。戀のかたにてみだれ給ふことを。いたく禁しめ給へり。これ人世の道なればなり。されどもその方の事は。法令の書をはじめて。萬の教誡の書に載たれば事つきたり。物語ぶみは。世中のよきもあしきもとりあつめて。眞情のまゝにかたりもてゆくものなれば。さる教誡は教誡として。おのづから情のひくかたのさりがたきよしを。あらはなすを主として。さる教誡にはかゝはらぬなれば。さる心して見るべき也。然るを昔よりの注どもに。戀のすぢの事をいたく恥て。或は勸善懲惡といひ。或は好色の禁誡也などさま〴〵の事どもをいはれたるは。皆儒佛の書の例をもて物語を見られたるひがことなるよしも。

又玉小櫛に委く辨へられたれば。彼書を見て知べし。其論の末の所に云。もの〻あはれを見せんと作れる物語を。教誡にとりなすは。たとへば花を見んとて植おふしたる櫻の木を。伐くだきて薪にしたらんがごとし。薪は一日もなくてはえあらず。せちなる物なれば。それわろきにはあらねど。薪にはよき木どもの。ほかにあまたあなるに。あたら櫻をきりとらんは。中々に心なきしわざとぞいふべき。なほいはゞ。儒佛の教とはおもむきかはりこそあれ。物のあはれをしるといふことを。おしひろめなば。身をゝさめ。家をも國をも治むべき道にもわたりぬべき也。人のおやの子をおもふ心しわざを。あはれと思ひしらば。不孝の子はよにあるまじく。民のいたつき奴のつとめを。あはれと思ひしらんには。よに不仁の君はあるまじきを。不仁なる君不孝なる子もよにあるは。いひもてゆけばもの〻あはれをしらねばぞかし。されば物語は物のあはれを見せたるふみぞ。といふ事をさりとて。それをむねとして見る時は。おのづから教誡になるべきことは。よろづにわたりておほかるべきを。はじめより教誡の書ぞと心得て見たらんには。中々の物ぞこなひぞありぬべき。といはれたり。これまだいみじき論にて。今までのちうさくどもに。かけてもいはれぬ事なるを。此翁ぞはじめて見出られたるにて。いとおむかしくめでたし。か〻るにつけても玉小櫛は。此物語の註釋どもの中に。一きはぬけ出たる書なるを知るべし。

一部大事といふ事

紫家七論に。一部大事と標したる條ありていはく。冷泉院の御事。或はつくり物語なり。ふかく沙汰する事なかれといひ。或は子細ある事也としきりに是を秘し。或は此趣向の見にくきにて。一部の物語とりてだに見まほしからず。と申ともがらも侍り。ともに紫式部が本意をしらざるものといふべし。爲章試に今案をしるして。識者の是非をまち侍るべし。とて桐壺卷より次に。薄雲卷若菜卷などの語どもを引て。物のまぎれの事を論じて。伊勢物語に二條后。後撰集に京極御息所。榮華物語に花山女御。これらの御かた〴〵心ばせおもからずして。私のねぎごとになびきたるなるべし。されどさいはひにしてもの〻

まぎれを御覧じえざる也。とて。もろこしの楚幽王晉の元帝などが事を引出て云。これ他の國の事にてさへ心よからず。いはんや朝廷は皇神のさづけさせ給ひしより此かた。萬世一系さらにまぎれ給ふことなきもの也。すゑの世にも女御更衣のうちに。心ばせおもからぬうちまじりて。帝系のまぎれもいできぬべしやと。遠くおもひはかりし諷喩を見れば。式部は女なれども。其性質の美と學問のちからとうちあひて。識見おのづから大儒の意にひとしといふべし。又薫大將の事は天道好還の理をしめしたるおもむき。羅大經が筆に同じ。（羅大經が筆とは。上に晉帝を論じたる。鶴林玉露の文の事なるを今ははぶきたり。本書を見るべし。）此一件が一部の大事にして。講ずる人の意得あるべき事也。といひ。また或問を設けて答へて云る事の中に。皇胤御一代にても。在原氏藤原氏などにまぎれ有んは。吾國の御爲もの憂事にして。東海をふむ魯仲連ありぬべし。さるは藤壺に源氏の通ひて。冷泉院をうみ給ふは。誠にあるまじきあやまちにして。源氏姦淫の罪重しといへども。皇胤のまぎれおもはずなるかたにあらず。桐壺帝の御爲には。正しく子なり孫なり。神武天皇の御血脈なり。伊勢宗廟其祀をうけ給ひ。天下の蒼生其まつりごとをいたゞき奉るべし。それすら猶冷泉院の御後をすてゝ。朱雀院を正統にかへせるは。いとも嚴しき筆にあらずや。そも〳〵一旦人倫の亂あると。長く皇胤のまぎるゝと。何れか重くいづれか輕かるべしや。斷案をくだしがたしといへども。臣下の意にていはゞ。源氏の罪をしらざるまねして。皇胤のおもはぬかたならぬをよろこぶべし。式部が主意おしはかるべし。さしもに用意ふかき式部が。當時宮中にも披露する物語に。心得なくして書べしや。此作言諷諭に心つかせ給ひて。いかにも〳〵ものゝまぎれをあらかじめふせがせ給ふべし。ようせずはうたがはしき事ありぬべし云々。とて。猶くはしく論じてすべて諷諭と見たり。然るを玉小櫛に。又これを論じて云。冷泉院のものゝまぎれを諷諭にとりて。一部の大事也として。そのよしを論じたるも。なほ儒者ごゝろにして。ひたすらもろこしのふみどもの例にのみなづみて。物語のこゝろをしらざるもの也。その論の中に。源氏君と藤壺中宮との密事を。はじめにはいともやさしきさまにかきなし。終りにはい

とおそろしく有まじきあやまちなりけり。とことわりたる氣象を見よといひて。しひて諷諭にせんとしたれども。さきにも薄雲卷を引ていへるごとく。源氏君此事を。後にはいとおそろしくあるまじかりける事とおもひしり給ひながら。其後もなほ朧月夜君に忍び〳〵逢給ひしは何とかいはん。もし藤壺中宮の御事を。いとおそろしきあやまちなりとことわれる心ならば。其後にかゝる事をまさに書べしや。もしはたして諷諭ならむには。一たびはいましめながら。又立かへりてすゝむるにぞなりぬべき。又みをつくしの卷にいはく。當代のかく位にかなひ給ひぬることを。思ひのごとうれしとおぼす。注「これは源氏君のおぼせるにて。當代とは冷泉院の御事也」もしかの論のごとくならんには。源氏君冷泉院の御位につき給へるにつきては。いよ〳〵おそろしく思ひて。皇胤のまぎれぬる事を歎き給へるさまにては書べけれ。かやうに思ひのごとうれしとおぼすなどは書べきものかは。なほこの物のまぎれのかの説ども。あたらぬこと多けれども。かしこきすぢの事なれば。今はその辨へはもらしつ。かにかくに此御事。わきて諷諭といふべきにもあらず。そも〳〵此物のまぎれは古今ならびなき大事にはあれども。物語は物語なれば。さる世の中の大事を。一部の大事として書べきにはあらず。これも物語にては。たゞ物語の中の一つの事にぞ有ける。然らば此事はいかなる意にて書るぞといふに。まづ藤つぼの中宮との御事は。上にもいへるごとく。戀の物のあはれのかぎりを。深くきはめつくして見せむため也。そは男も女もよきことのかぎりをとりぐし給ひて。よろづにすぐれて。物のあはれをしり給へるどちの御うへといひ。又ことわりにたがへる。あながちなるあひだの戀には。殊に今一きはあはれのふかきことある物なる故に。ことさらにわりなくあるまじき事のかぎりなる戀を。此御方々のうへに書出て　かた〴〵物のあはれ深かるべきかぎりをとりあつめたる物ぞかし。さて冷泉院のものゝまぎれは。源氏君の榮えをきはめんために書る也　そはまづいづれの物語にも。むねとしてよきさまにいふ人有て。その人のうへをいふとては。よにあらゆるよき事をえりあつめていふ中に　身のさかえは人の世のよき事のかぎりなれば。

其人の萬にさいはひ有て。つひにうへなき身となりぬる事などをいふぞ。物語の多くの例にて。此物語も源氏君の榮えをきはめてかゝんとするに。人のさかえのきはまりは帝の御位にして。執政大臣といへ共。たゞ人はなほあかぬところある故に。太上天皇の尊號をかうぶらしめんとするに。さるべきよしなくてはゆくりなくて。まことに淺はかなるつくり事めくゆゑに。帝の御父とせん料に。此物のまぎれは書るもの也。そも〱此君。帝の御子にて。后と大臣とを御子にもち給へるうへに。帝の御父にてさへおはしますよしをもて。太上天皇になり給へる。かくてぞたふとくめでたき御身の榮えはきはまりける。なほ此尊號かうぶらしめ奉ん料也といふあかしは。薄雲卷に。夜居の僧の此物のまぎれを。はやくよりしり居たるが。みかど冷泉院へひそかに奏せんとする時の詞にいはく。これはきしかたゆくさきの大事と侍ることを。過おはしましにし院きさいの宮。たゞいまの世をまつりごち給ふおとゞの御ため。すべてかへりてよからぬ事にやもり出侍らん。かゝるおいほうしの身には。たとひうれへ侍りとも。何のくいか侍らん。佛天のつげあるによりて。奏し侍るなり。廣道云。本書こゝに注ありてその辨あれど。長ければ今はぶきつ。おのが考はかの卷にいふべし。かくて奏したることをきこしめして。みかどの此僧にのたまへる御詞にいはく。心にしらですぎなましかば。後の世までのとがめ有べかりける事を云々。こゝにも註ありしが今はぶく又僧の申せる詞に。天變しきりにさとし。世中しづかならぬはこの氣なり云々。よろづの事。おやの御世よりはじまるにこそ侍るなれ云々。註ありはぶくかくて次の文にいはく。いよ〱御がくもんをせさせ給ひつゝ云々　一世の源氏。又納言大臣になりて後に。さらにみこにもなり。位にもつき給へるもあまた例ありけり。人がらのかしこきにことよせて。さもやゆづり聞えましなど。よろづにぞおぼしける。秋のつかさめしに。太政大臣になり給ふべきことと云々。註ありはぶくそも〱此物のまぎれの事。さき〲の卷よりつぎ〱にいひ來て。こゝにいたりて。源氏君を御位につけ奉らんとおぼしめしよりたるところへおとしたる。次第のおもむきをよく考ふべし。さて此君の榮えをきはめて書むとならば。今一きざみすゝめて。帝の御位につけ奉るべきを。太上天皇にてやみ

ぬること。作りぬしの深く心をつけたるもの也。そは狹衣物語に。かの大將をつひに帝にしたるは。此物語の源氏君をまねびて。今一きはすゝめて書るものなるを。かの大將は。帝の位につけたるによりて。何とかやまことにつくりごとめきて。そのよしなく。中々に淺はかに聞ゆるを。紫式部はそこをよく思ひたるものにて。帝の御位をばのこして。太上天皇もそのよしなくてはゆくりなき故に。桐壺卷に。こま人の相したる詞に。國のおやとなりて。帝王のかみなき位にのぼるべき相おはします人の。そなたにて見れば。みだれうれふる事やあらむ。とはじめよりまづしたがまへをまうけおきて。此物のまぎれをかきて。かならず尊號を蒙り給はではかなはぬさまにかきもてゆきて。薄雲卷に至りて。御位につけ奉らむとある所に。此君の詞に。故院の御心ざし。あまたの御子たちの御中に。とりわきておぼしめしながら。位をゆづらせ給はんことをば。おぼしめしよらずなりにけり。何かその御心あらためて。及ばぬきはにはのぼり侍らん。とある。これ帝の御位にのぼり給ふべきなれども。その一きはをば。ことさらにのこせりといふ。つくりぬしの下心を思はせたる詞にて。いとも／＼心ふかき作りざま也。大かた此ものゝまぎれをかきたることは。此源氏君の榮えをきはめんため也といふこと。上件のおもむきどもをむかへてしるべし。なほいはゞ。かの狹衣は。おほかた何事も此物語をまねびて。すこしづゝ事のさまをかへて書る中に。大將の女二宮にしのびて逢奉りて。うみ給へる御子を。さがのゐんの皇子になして。まぎらはして後に。その御子を東宮にたて奉らんといふさだめある時。天照大御神の御告によりて。つひに此大將を位につけたる事は。もはら此冷泉院の物のまぎれをまねびて書たる物なるを。それもかの大將を位につけて。榮えをきはめんためなること。此物がたりと同じ作りぬしの意也。さればかれをもてもこれをなずらへしるべき也。（已上小櫛）といはれたり。此二つの論いづれよからむ。皆作りぬしのしたに思へる事なれば。後よりおしきはめては。さらにいふべきよしはなきものから。既にかゝる論どもの出來しうへは。たゞにもえあらで。おのれが思ふむねをもいさゝかこゝに記しつべし。さて此二つ

の論のうちに。おのれはまづは安藤氏のいへるかたやよろしからんぞとおぼゆる。さるはかの七論のかきざまは。小櫛にいはれたるごとく全く儒者意にして。漢籍の例をのみもて論じたる物にはあれど。作りぬしのしたの心は。いさゝか諷諭めきたる事もありしにか。とおぼゆるよしもあればなり。その故は此物語よりさき〴〵の物語も多かれど。帝の御妻にものゝまぎれありて。其御中にうまれ給へる御子を。御位につけ奉り給へりなどいふ事は。絶てなく。大かた此物語ぞはじめなるべきを。（便し今の世に傳はらぬあだし物語も多かりしと聞えたれば。それらにはさることもありしかはしらねども。そはさだの外也）つらく〳〵事の情をおして案ふに。作りぬしの在世のほどより。此物語ははやく宮中に流布したるさま。かの日記にしるく見えたれば。人にもかつ〴〵見せられけんほどしられたり。さてしか人も見て流布したらんには。つひに帝も皇后も見給ふべき物なるに。かくめづらかにかしこきすぢをかゝれたること。いとしも意得がたし。それはたもろこしのごとく。他し氏々の世といふことあらばこそ。それになぞらへても書のがるべきを。わが御國は。神代よりさることなければ。いづれの御時にかとはかけれども。まさしくわが國の其世のさまをうつしたる趣なれば。たとひ嵯峨天皇に准へ。醍醐天皇に擬へ奉りたるにもあれ。時のみかどの御先祖にませば。むらいの罪さりどころなかるべし。それも此漢ざまの御制度なりし世には。何事もよろづおほらかになよびかにて。きは〳〵しく咎め給ふなどの事はあらざりし時にはあれど。つひには帝もみそなはさん物に。かくあるまじき事どもを。ものふかく用意ありし人の。つゝまはずかゝれたるにておもへば。心の底に思ふ事どもは。必ありしなるべし。さるは安藤氏のいへるやうなる意なりしか。そはきはめていひがたけれど。大かた此一條のみは。諷諭めきて聞ゆる中にも。かの柏木のものゝまぎれは。まさしく其報を示したるにて。そのころむねと行はれたる佛説の趣によりて。因果を覿面に見せたる物なり。しかれどもしかけざ〳〵とはかかずして。深くたどりて見ん人の心にまかせつゝ。さる諷諭めきたる筆つきをあらはさずして。人情のゆくまゝにかきまぎらはしたる。これやがて作りぬしの意にて。女の議論がましきをつゝめるなり。な

ほいはゞ。此事は桐壺巻に。世の人光る君ときこゆ。またかゞやく日の宮と聞ゆとある所。伏案のはじめと見へたるに。この二つを對へ擧たるをみれば。此物のまぎれの事。物がたりの中のむねとある事にて。其餘の事どもは。皆これをまぎらはさんために。あやなしたる物のそうにさへ見ゆめり。されば此事のみは。猶作りぬしの意ありし事となんおぼゆる。そはいかなりし事を思へるにか。今實には知れがたき事なるを。しひていはんはかしこきわざなれば。おのれも又その論をばとゞめつ。よく見ん人はよく見てよくさとるべくなん。さてかうやうに見る時は。小櫛の説はいかゞしきを。かつ〴〵こゝに辨へいはば。まづ源氏君。此事を後にはいとおそろしくあるまじき事と思ひしり給ひながら。其後もなほ朧月夜君に忍び〳〵逢給ひしは何とかいはん云々。といはれたる。ことわりはまことにさる事なれど。これすなはち情を本として。物のあはれをむねとかける。物語ぶみの體にして。あるまじき事とはおもひしり給ひながら。なほわが御心にもまかせかね給ひて。のどめずかよひ給へる趣なれば。これをもては論ずべからず。安藤氏のいへることは。げにもつきゞりなる儒者意と聞えたれば。おそろしくあるまじく思ひ給ふ。とあるのみをもて。諷諭といへるは。今少しあたらぬことなれば。それを辨へられたるはことわりなれど。かくいひつめては。これもまた議論といふべきさまにぞ聞ゆる。すべて諷諭といふものは。その事とさしあてゝいふ議論のごとくにはあらでただ作りぬしの心の庭にのみ秘たる事なれば。この巻にはかくいへり。その巻にはしか書りなどいふ。巻巻の例などをもていふべきにはあらず。もしかつぶ〳〵とさだかに跡あるほどならば。諷諭とはいふべくもあらず。又其心得させんための人にだに聞ゆれば。其餘の人には聞えざるも。なでふ事かあらんなれば。さらぬやうにまぎらはして。其事をつゝむが諷諭のならひ也。されば今となりては。いよ〳〵知れぬ事なれど。其世のさまとその事がらとを思ひて。作りぬしの心をおして。かうもやと思はんぞ。この諷諭といふことの見やうなりける。あだし事どもは。此物語の中に。作りぬしの意を挾みていへる事あるを。こゝかしこ引合せて考ふれば。大かたし

らるゝ事なるを。かくにほはせてさとしたる事は。それにかゝはるべき事にはあらずかし。然れどもかの螢巻に。物語の心ばへをかける所に。その人のうへとてありのまゝにいひいづる事こそなけれよきもあしきも世にふる人のありさまの。見るにもあかず。きくにもあまる事の。後の世にもいひつたへさせまほしきふし〴〵を。心にこめがたくて。いひおきはじめたるなり。とあるなどは。物語のすべてのさまをいへるなれば。これらの證(アカシ)には引もいづべくや。さてまた小櫛に。みをづくしの巻に。當代のかく位にかなひ給ひぬることを。思ひのごとうれしとおぼすと。あるをも引いでゝいはれたることも。しかおぼすは。大かたの人情のかたにつきて。しかおぼすべきさまのことを書たるなれば。證(アカシ)にすべき事にはあらず。又皇胤のまぎれぬることを歎き給へるさまにこそ書べけれ。といはれたれど。しかかゝばやがて議論がましくなりて。いはゆる勸善懲惡などの體(サマ)なるべし。諷諭と勸善懲惡とは。其すぢ異なる事なるを。大かた一ッことのやうに。おしくるめていはれたるは。たゞかの儒者意をやぶらんとてのわざなるべけれど。いますこし細(クハ)しからざるに似たり。さて又物語は物語なれば。さる世中の大事を。一部の大事として書べきにはあらず云々。といはれたるもいかゞ。おのれは中々に。さる世中の大事のために。一部の物語に書たるものゝやうにおぼゆる也。さるはあだし物語どもは。させるふしもあらねば。いはれたるやうに。一部の大事などを思ふべきにはあらざれど。此物語は一ふしやうかはりたるに。此物のまぎれの事ばかりは。いたくめづらかなる事にて。かいなでの物語どもの例をもていふべき事とはおぼえねば也。また諷諭などいふ事は。大かた儒者意にはあなれど。此作りぬし。みながら漢籍を見ぬ人ならばこそあらめ すでに文法なども漢文に似たる所ありて。あだし物語とはこよなくかはりたるにて思へば。あながちに彼にならへるにはあらねども。さることおもはずとは定めがたくやあらん。されどこれは。かの諷諭のかたにひかるゝひが心にもあらんか。とにかくに證(アカシ)なき論なれば。しひていふべくもあらず。さて又ことわりにたがへるあながちなるあひだの戀には。殊に今一きはあはれのふかきことあ

る物なる故に。ことさらに云々といはれたるは。一わたりさることに似たれど。それも事がらによるべき也。かく皇胤のまぎれぬばかりの事をしも。とりたてゝ書ずとも物のあはれのふかきことはいくらもあらんを。殊更に此御かた〴〵のうへにしもかゝれたるは。別に心あるものに似たり。なほいはゞ宇治の卷々などは。かくあるまじき事のかぎりをばかゝれたらねど。ものゝあはれのせちなることは。今すこしまさりて聞ゆるをもても。あはれのかぎりは。あながちに上なき御かた〴〵のうへならでも作りぬしの心にて。つくして見せんもやすかるべくなん。さてまた源氏君の榮えをきはめんために書る也。といはれたることゞもは。殊にいかにぞや聞えたり。人の榮えのきはまはりは。帝の御位にして。執政大臣といへども。たゞ人はなほあかぬ所ある故に云々といはれたれど。それまた事がらによるべき也。そも〳〵他（ヒト）の國の帝などならばこそ。帝の御父とせん料になど。意にまかせてもかくべけれ。これはかの薄雲卷に。冷泉院の帝の先例をかんがへさせ給ふところにも。「もろこしにはあらはれてもしのびても。

みだりがはしき事いとおほかりけり。日本にはさらに御覽じうるところなし。たとひあらんにても。かやうにしのびたらん事をば。いかでかつたへしるやうのあらんとする。とあるごとく。我御國は神代よりうごきなき御くらゐなるを。いかに空言（ソラゴト）物語なればとて。かくおふけなき事のかゝるべしや。それよく心得たる人なればこそ。かくさまにいへるにはあれ。さらばいよ〳〵ことに意あるに似たり。榮えのきはみをかゝんとて。執政大臣などにしなしたりとも。其かゝんやうにて。榮えのきはみとは聞ゆべければ。何のあかぬことかはあらん。よしや帝の御位にのぼり給ふさまにかけりとも。かうあるまじき御中のゆゑならでも。のぼり給ふべきやうは。前にいくらもあるべし。しかるをかくおそろしき事の故にて。太上天皇の尊號得給へるやうにかきなしたるは。子細あるべき事なりかし。さてまた薄雲卷に夜居の僧の此事を帝へ奏する所の語どもを引て。尊號かうふらしめ奉らん料也といふ證（アカシ）とせられたるは。げに其料とは見えたれど。これによりてたゞ榮えをきはめんための料のみとは見えず。されば其語を注せられ

たるおもふきも。本文の意とは異なるやう也。おのれが考はかの巻にいひて。そこに件の説を辨ふるを見るべし。此一條をすべて。源氏君の榮えをきはめんための料也。といはれつれど。さばかりには見えず。源氏君の榮花のさかりは。藤末葉巻にて。何事もみな御心のまゝになりたるさまにかきて。前の巻々に見えたる事どものはてを結び。さて太上天皇に准へ給ふ事をいひ。其次に六條院へ行幸の事ある。これぞ榮えのさかりのきはみをかゝれたる所とぞ見ゆめる。其次の若菜巻に。四十の御賀の事の見えたるも。榮えのきはみの事にはあれど。かの巻は既に女三宮の事より。巻の始を書出られたるは。柏木の物のまぎれの伏案にて。衰にむかふ始なれば。此巻よりは衰へがたをかける物と見るべし。それより女三宮の事いできて。つひに薫君生れ給ひ。右衛門督うせ給ひ。落葉宮の事あるまで。皆源氏君の御心をくるしめ給ふ事のみなれば。よきかたの事にはあらず。さてつひに御法巻に。紫上のかくれ給へる。これ悲哀のきはみなるに。幻巻はそのかなしひの事のみをかゝれたれば。すべて源氏君のうへに。榮えばかりをかゝんと構へたるにはあらざる事をしるべし。もし源氏君の榮えをのみ物せんとならば。かゝるわろきかたの事をばはぶきて。紫上の事も雲隱のうちにこめ。柏木のくだりもことよくのがれ給へるさまにかくべき事なるを。かくあしきかたの事をもかけるは。みなかの物のまぎれの報應を示せるものなるべし。さてつひに源氏君の御末の榮えは。夕霧大臣のかたにとゞめ。桐壷帝の御末は。朱雀院の御子のかたに定め。致仕大臣の末は。紅梅大臣にとゞめたるも。安藤氏がいへるごとく。作りぬしの用意ありし事なるべし。さてまた太上天皇にてやみぬること。作りぬしの深く心をつけたるもの也とて。狹衣の事を淺はかに聞ゆといはれたるも。桐壷巻の相人の事も。薄雲巻の照應の事も。皆いはれたるごとくにて。つゆもいふべきふしなし。但しこれもたゞ榮えをきはめんためのみなるやうにいはれたるばかりはうけがたし。又かの狹衣を引て。かの大將を位につけたる事になずらへて。榮えをきはめんためなることをしれ。とやうにいはれたるもいかゞ也。げにかの物語は。此物語をうつせるものにて。其例を思ひたる

事勿論なれど。かの大將をつひに位につけたるにても。まぎらはしきを省きすてたる。作りぬしの意はしるきにはあらずや。そも〳〵氏姓を賜はることは。御臣となり給へる事のしるしなれば。一たび氏姓を賜ひては。ふたゝび皇子となりて。大御位を嗣給ふべくはあらぬことわりなれば。いとしも上つ代には。絕てなき事なりけるを。後にさる例の出來しは。さるべき皇子たちのおはしまさで。やむことを得給はざりし時の例なるを。其例を例として。いかさまにも作るべき物がたりぶみに。あながちにかくべきやうやはある。然れどもまほならぬ皇子たちの。もしさる故ありて。御位につかせ給ふ事などあらば。それこそは御臣に下り給へるを。かへし給はんにはおとりたるらめ。よしや世人はしらずがほつくるとも。天照大御神の何とか見給はんとすらん。狹衣の作者の。そこをおもへる故ありて。大御神の御告によりて。かの大將を御位につけたるは。げにいとさるべきことわりにて。此物語の天變の事。又冷泉院の御後をたちたるなどゝ。もはら同じかきざまとこそおぼゆるなれ。されどかうやうの事どもは。皆つくりぬしの心のそこにありし事にて。誰かはその實を知るべきなれば。七論も玉小櫛も。共にいたづらなる論にちかく。今かく辨へいふことも。猶たゞ同しおしはかりごとなれば。これかれともにいたづらごとゝいふべくなん。後の見ん人おのがじゝ心々にえらびてとりね。さてまた此論どもを見て。もし安藤氏が說を。げにとおもふ人などあらんに。かの諷諭の旨をなほもいはんとて。この作りぬしの御世ざまの事を引あてゝ試に論ずる類。ゆくさきにも必あらんと思ふを。それはいと〳〵ひがことなれば。さらに思ひかくることなかれ。そも〳〵我皇國のならはしは。たとひかしこき御あたりに。いかやうの御事あらんにても。けざ〳〵とあらはして。其よからぬ事をいふなどは。かけてもあらぬことなるを。後世にいたりては。憚なくいひちらす類も出來しは。皆もろこしざまのならはしのうつれるにて。いとも〳〵かしこきわざなれば。ゆめ〳〵此うへの事をいふべからず。もしさる推量の事どもをいはんとならば。廣道らもいと多くいふべきを。かくてのみさしおくは。わが大御國ぶりの御おもむけにしたがひ奉るもの

ぞ。かへすぐ〳〵もくちさがなき事をないひそとよ。但し物によそへなどしていふ事は。昔より例ある事なれば。この作りぬしの心ありげに見ゆる事ばかりを。事のついでにあげつらへる也。さればたゞ子細ありし事なりけん。とのみ見てあるべし。あなかしこ。

總論下

此物語注釋どもの事

此物語のちうさくの事は。源注拾遺玉小櫛にいはれたるごとく。河海抄ぞ大部の抄の始なりける。然れども契沖のいはれたるやうに。暗記の誤などにやあらん。某(ソレ)の書にありとて引出給へることの。今の本にはさらに見えぬ事ども多く。又引歌の句なども。本集とはこれかれかはりたることゞもゝあれば。たしかなるあかしになりがたき事おほし。其次は花鳥餘情なるが。これはた大かたは河海によられたる事も多く。又誤れる件(クダリ)どもゝ少からずして。ひたすらには從ひがたし。其次には。弄花。細流。明星。孟津。岷江入楚。萬水一露。湖月抄など。なほさまぐ〳〵多かれど。本居翁のいはれたるごとく。皆さきざきの抄どもを引出て。すこしづゝ考を加へられたるのみにて。さしてかはれるふしもなし。其中に細流は一ふしありて聞ゆる事も多く。餘(ホカ)の抄よりはいたくまされることゞもあり。また湖月抄は。師説も今按も。さきぐ〳〵の抄にはたちまさりて聞ゆる事のおほ

かるは。さき〴〵の抄どもをくらべ見て。そのよろしきに從へる故なるべし。されども多くは。岷江入楚よりぬき出たりと見ゆる事ありて。入楚に引もらされたる事は。さながらに遺りたる事どもゝあり。此抄は本文をさながら擧たるに板本にて得やすき故にや。今世にもてあつかふ物。大かた此抄ならぬはなし。されどなほいかにぞやおぼゆる事どものおほきよしは。玉小櫛にくはしく辨へられたるがごとし。さて河海花鳥をはじめて。其ほかの抄どもは。おほかた雲の上はるかなる御かた〴〵のあらはし給へる物にて。時代もなほいにしへに近かるを。かゝるはいかにといふかしむ人どものあなるは。げにさること也。其故をいかにと考ふるに。大かた中昔よりこなたの物識人たちには。あぢきなき一ッの癖ありて。何事のうへにも秘説などいひて。させるふしもなきことまでも秘らるゝ事なりし故に。かゝる抄どもをも。たゞ一人二人にのみ秘傳へて。あまねく人に見する事などは。をさ〳〵なかりしならはしなりしうへに。古の書どもを見集めて。事の證を考ふるなどの學も。おろそかなりしかば。たゞかくぞと一わたり

に考へ出たる事を。暗記のまゝに注しつけられたる類ひも多き故にぞあるべき。又昔の公事儀式。或は衣服調度の故實などは。さるやんごとなき御家々にて。注せられたることなれば。これは誠に誤なかるべき事なるを。それだに古き書と相てらして見れば。猶いかゞしくおぼゆる事どもゝあり。案にこの物語つくれる。一條院天皇の御時よりはそこらの年をかさねきて。令式の御制度も。やう〳〵あらぬさまになりゆきたるに。承久建武の亂れよりは。大内のありさまも。いたく古にたがへることおほく。注者たちのいましける世も。大かた亂世なりし故などにぞあるべき。もとよりもさながらにしられたる事ならば。別にちうさくを物せらるべきわざにもあらぬを。既に注釋を物せられたるにても。こまかなる事どもの知れざりしほどはいちじるし。然ればそのかたざまの説どもゝ。又ひたむきにはたのみがたし。されば今は湖月抄よりあなたの注どもは。舊注と稱へて大かたには漏したり。されど事のさまの違はざる事は。先ッ舊注より擧もてゆくべきことわりなれば。十に二三をばしるしつけぬ。さて契沖ほうしの源注拾

遺は。右の舊注どものたがへる條どもを。あまねく古書どもに考へたゞして。其わろき事どもを論ひたる物にて。いとおむかしくめでたきふみ也。此人はよにいみじきざえありし人にて。其餘の歌集何くれの説どもゝかの傳などやうの説にはかゝはらず。古き書に相照して。其實を考へ合せられたれば。浮たることはひとつもなくして。近世にいはゆる考證學のはじめの師なり。さればこの拾遺にて。此物語のちうさくのやうもいたく改まりぬれば。これよりこなたなるをば。新注と號けて別てり。しかれどもこの書は。大かた舊注の誤を正すをのみせんとせられたれば。本文のうへにかけて用ある處はいとすくなし。されば其説をとれることも又いと多からず。さるはあだし事の論は。引出たりとも。本文よむべきためにはあづからねばなり。さて此書は。近きころ板にゑりて世に弘まれるを。いかなることにか。こゝかしこもらせる條どももありて。たま〳〵のこれる寫本。又玉小櫛源注餘滴などに引れたる條どもの。脱たることと彼此あり。さる所どもは寫本また餘滴などよりとりて引たるもあれば。さる心して板本

とあはぬを疑ふべからず。其次は岡部翁の新釋といふ物あり。その總考一卷は。紫家七論と共に板にゑりて行はれたるが。大かたかの七論に似たるものなること。玉小櫛にいはれたるがごとし。其卷末にちうさくの例ども擧られたる所あるは。こたびもそれに從ひて。なほこれかれまし加へて。文法をことわるたすけとしたり。そのよしは凡例にいふがごとし。さて桐壺卷より次々のちうさくのやうは。舊注をまじへ用ゐて注せられたるに。其舊注と今按とのけぢめなくして。いと〳〵紛らはしきを。彼此くらべ見て。今按のかたをのみ引出たり。この本に貴本ありとおぼしくて。おのが見たりしも二やうあり。餘滴に引たるは又べちの本と見えて。をり〳〵たがへる所どもあり。おのが見たる二本のうちには。別記のそへるかた。後に改められたるものと見えて。ちうさくもいさゝか多き所もあり。また一本とたがへる所なども。後に考へられたりとおぼしき事どもおほし。然れどもその別記のそへるかたは。寫しざまいとわろくして。讀がたき所々多ければ。せんかたなくしてはじめの稿本と見ゆるかたを。むねと引用る

たり。此書の大むねは。かの惣考にもいはれたるがごとく。大かたは諷諭のたぐひと見られたる所々多くして。いと長き論などもあれど。おもふむねもありて。さる條どもはもらしたり。されどやむことをえぬ所には。かつ〲引出て。そのよしをことわりつ。次に加藤宇萬伎の雨夜物語たみ詞といふものあり。これは帚木卷の品定の解にて。所々に俗語をくはへて注したり。其説どもは。大かた岡部翁の傳へられたるさまにて。新釋と同じければ。今はさしも引出ず。さて其次に。本居翁の玉小櫛あり。此書は物語といふものゝすべてのやうを論ぜられたること。いとこまやかにして。昔より其類にあることなし。中にも作りぬしのこゝろしらひどもを。此物語の中に何となくかすめていはれたるを見出て。卷々のさる所々を引あつめて其よしを注せられたるなどは。かけても思ひ及ばぬかうがへなるに。物のあはれをしる事。物語のむねとあることとなるよしをいはれたるなども。昔よりの注どもにたえていはれぬ事にて。いとめづらかにめでたきことと上條にかつ〲引出ていへるがごとし。猶其委しきよしは。彼書の一二の卷にいひ盡されたれば。今はそれにゆづらひて略きたることゞも多し。かならず別に見るべき也。さて卷々の注釋のやうも。さき〲の抄どもとはことかはりて。めでたき説どもの多かる中に。てにをはの格。詞のはたらき樣(ザマ)などは。此翁の世に出られざりしほどは。いとたど〲しきことなりしを。はじめて委く考へなかめられしほどのことなれば。語(コトバ)のうつりざま。はたらきざま。てにをはの係結(カヽリムスビ)などの脉(スヂ)。いと〲こまやかにして。みやび言のつかひざまは。此ふみにて始てあきらかになれりとぞいはまし。しかのみならず。大かたの書の見やう。人情のおもふくさまを。深く考へて物せられたりと見ゆること多くして。其説どもいとおだやかに。強説(シヒゴト)と聞ゆることはいと〲稀也。すべてものゝちうさくのみにはあらず。何事の説にても。人情のおもふく末々をこまかにさぐりて。其世のさま。作りぬしの意はいふもさら也。今の人の打きく所までも。深く思ひはかりて物せざれば。理(コトワリ)は理として。げにさなりとはうけあへぬものなるを。此翁の説はさる事までゆきたらひて。げにとおぼゆる事はなはだ多し。

然れば。此物語いできてよりこのかた。注といふ注の中には。この玉小櫛にまさる物はひとつもなく。作りぬしのしたにおもはれたることを見得られたりとおぼゆる事も。またこの小櫛に過たるなんなかりける。これはあながちにほむるやうなれど。他の抄どもとくらべ見て。よく／＼味ひしるべき也。然るを此書は。いたく年老てものせられつるよしにて。末摘花巻より末は。注釋いとすくなくして。わつかに三巻ばかりに書つゞめられたるのみなるは。いといとあかずくちをしきわざになんある。されば若紫巻までは。むねと彼説をとりもちゐしかど。末摘花巻より下は。おのがちうさくをのみむねと物して。彼説を擧たることの少きは。擧べき説のなければ也。又他の抄どもには。いかゞしくおぼゆることの多かるも。悉く辨へんはわづらはしくて。拾遺新釋のせちといへども取ざることはかいやりて。其故をばことわらぬを。小櫛はたま／＼いかにぞや見ゆる事共をも。大かたに引出てあけづらひたる事ども多し。さるは淺はかなるざえをもて。此書をのみ殊更に論ずるやうにて。いとをこがましく思ふ人もあるらめど。かくばかりめでたき書なれば。たま／＼考へそこねられたる事をも。大かたのめでたきに心ひかれて。初學の輩などは。みながらさることゝうべなふ類もあるべしと思へるからに。やむことをえず辨へ試みたる也。見ん人さる心していたくなとがめそ。さて尾張人鈴木氏がかける。玉小櫛補遺といふもの二巻あり。小櫛の中にいはれたること。さらぬ所々をも。少しづゝみづからの考を補ひ加へたるもの也。これもまたとるべき事少からず。をり／＼に引出たり。さて其次には。江戸の石川雅望が著せる。源注餘滴といふものあり。湖月抄を本として。それにたがへる注どもを。むねと拾遺新釋の二抄より引出て。少しづゝ今按をくはへ。巻々の引歌類例などの。出る所たしかならぬなどを。本書にあはせて校へ正し。句のたがへるを引直し。又さま／＼の異本を擧て。本文をも校へ合せ。又語の注などには。あらゆる物語どもの中より。其類を聚めて引たる所もありて。便よき事少からず。おほかたこれらぞ。此近き世にいできたる注釋どもにはある。此外におのがえしらぬ物も有べけれど。えしらぬをばいかゞは

せんとて。右の抄どものげにとおぼゆるくだりどもを。かたみにぬきいでゝ注しつゝ。その足ざるところに。おのが釋（トキゴト）をものしつるなり。さてちうさくの外に。安藤爲章の紫家七論といふものあり。必見るべし。此人わかきほどより此物語を好みて。もろもろの家說をも聞。後に紫式部日記を得て。おのづから紫式部の心ざしをさとりしかば。あらはしかきたるよし。其書の後（シリヘ）にいへり。卷中のおもふきは。上にもしば〳〵引出たるごとき物にて。此物語の大むねを論じ。彼日記を此物語に引合せて。式部の才德のいみじかりし事を稱し。又むかしよりの注どもにいはれたるひがことを論じ破りていとめでたき事多し。但し玉小櫛に。その大むねたゞもろこし人の書ども作れる例をのみ思ひて。物語といふものゝ趣を思はず。といはれたることありて。大かたその辨へごとの如くなるもの也。されど小櫛の說もなほいかにぞやおぼゆる事どもゝありて。そのよし上にいへるがごとし。とにかくに舊說をはなれたる始の物にて。源注拾遺におとらぬ書也。また北村久備といふ人の著せる。すみれ草といふ物あり。これは玉小櫛に。系圖を作らまく思ひわたれど。いとまなくてはたさず。といはれたるをあかぬことに思ひて。此物語に見えたる人々の系圖をあらため作り。又小櫛の年立の圖にならひて。今少し委しき年立の圖をもつくりて添たるもの也。されば系圖く年立との事は。かの書のたらひたるに讓りて。今は別につくり出ず。彼書をとりそへて見合すべし。さて又熊澤氏の源氏外傳といふものあり。此書の事は。小櫛に論ぜられたるごとく。いはゆる外傳にして。物語よむには。さらに用なきもの也。これはそのかみ京にて。やんごとなき御かた〴〵に。おのが立たる經濟の儒學を傳へし時。この物語によそへて。其旨を解たるものと傳へ聞ぬ。げにさるさまの物と見えて。うべ〳〵しく聞ゆる條もおほかれど。本文にあづからぬあだし事なれば。今は大かたもらして載ず。

引歌の事

物語の中に。ふるき歌をたゞ一句ばかり引出て。事の餘韻（ニホヒ）をいみじく聞せたる。その本歌を昔より引歌といひならへり。この引歌ある所殊にめでたくして。

事がらのありさま身にしむまでに聞ゆる所々おほく
げにぬけいでたるかど／＼しさならでは。かうは思
ひよらるまじ。と感ずるにも餘りあり。さてとられ
たる歌は。古今集をはじめて　後撰拾遺六帖などに
見えたる。又この作りぬしの時よりあなたの。家々
の集に出たる歌なるを。奥入河海などにかいあつめ
て擧られ。其後々の抄にも。次々に引そへられたり。
然るにその引給へる歌ども。その本書とくらべて見
れば。詞のたがへる所も多く。或は本末入たがひ。
又は何の集にも見えぬ歌などもありて。いとみだり
也。これらは拾遺新釋小鏡などに。さま／＼いはれ
たる事あるに。餘滴には殊に心して其本をたゞして
載たり。されど猶のこれるも多く。意の聞えぬ歌な
どもまじれるを。新釋などには。注者のみだりにつ
くりてのせられたるやうにさへいはれたり。然れ
ども今世にはうせて知れぬ集も。其世にはありて口
ならしけんを。引れたるもあるべく。或は今世の集
なる方。寫しひがめなどして。却てたがへるなども有
べければ。しかあながちにいふべくもあらず。され
どもまれには餘りに拙き歌どもゝ見ゆれば。さるこ
と絶てなしとも定めがたくや。又本の歌の詞を。わ
ざと引かへて用ゐられたるもあるは。作りぬしの殊
に心しらひありし事と見ゆれば。それは今いふかぎ
りにはあらず。其所々に注するがごとし。さて又湖
月抄などには。引歌の所に。「かゝる點をかくる例な
るに。其點かけたるに引歌ならぬ所いとおほし。引
歌といふは。其歌の意をみながら知ざれば。引出た
る一句ばかりの意も聞えぬところの事也。其餘はた
とひ其歌の詞をとりてかゝれたりと見えたるも。あ
やどりたるのみなるは猶類例のたぐひ也。されば今
は此引歌の所のみに。「點をかけて分てり。其餘は釋
に其ゆゑを註しつ。

準據の事

舊注に準據といふ事ありて。桐壺帝は醍醐天皇に準
へ。朱雀院の帝は村上天皇に準へ。源氏君は西三條
右大臣光公或は西宮左大臣高明公に準ふるなどい
ひ。又夕顔の何がしの院は。河原左大臣融公の河原
院に準へ。帚木の中川の家は。藤原相如朝臣の家に
準ふるなどいふ類ひの事也。これら其例をいひもて

岷江入楚の一説にも桐壺帝を桓武天皇に朱雀院を平城天皇に冷泉院を淳和天皇に准ふなどいふことは見えたり

ゆく時は。似たる事もいとおほけれど。あながちに其人の事とさしあてゝ准(ラ)へたるにはあらず。皆つくり事なるくさはひに。彼此取まじへて。其おもかげをかゝれたるなれば。さる事をいはんには。かぎりもなき事なるに。又しかひし〳〵とあたれる事はたえてなければ。末つひにいたづら事也。されば玉小櫛にいはれたるごとく。とてもかくても有べき事なれば。今は悉くもらしたり。日本紀御局考には。源氏君を嵯峨天皇に准(ラ)へ桐壺帝を桓武天皇に。朱雀院の帝を平城天皇に。冷泉院の帝を仁明天皇に准へて書たりとて。似たる事どもを引出ていはれたることあり。これ桐壺帝を延喜の帝に准へたりといふよりは。まさりて聞ゆれども。猶しか引あてゝ見んは。物語ぶみのさまにあらず。さればたゞ桐壺帝は。いづれの御時にかおはしましけん一人の帝と見るべく。源氏君は。その御子にて。源氏を賜へる人と見るべし。中川の宿も其時の紀伊守が家。何がしの院もたゞ何がしの院と見てあるべし。しかれども又たま〳〵いはではえあらぬ所などもあるをりは。舊注にいはれたる事をさながら擧たる類(ヒ)もあれど。そはやむことを得ざる事にて。その所にことわるが如し。さて又桐壺巻に。長恨歌の畫を。亭子院のかゝせ給ひて。伊勢貫之に歌よませ給へる御屛風の事あるは。伊勢集にも見えたれば。實にありし物なる事論なし。されば亭子院の帝の次は。延喜の帝にませば。桐壺帝は延喜の帝に准(ラ)へたりともいふべきがごとくなれど。然らず。これはたゞ其頃名高き御屛風なりしからに。長恨歌の因(チナミ)にとり出たるのみにて。これによりて桐壺帝を延喜の帝に准(ラ)へたる證(アカシ)にはならず。須磨巻に。千枝常則といふゑかきの見えたるも。其頃の上手といひし人なるべき故に。とり出たる類ひ也。さればさる事どもをば淸く思ひすてゝ。たゞさしあたる人々を。かりに眞(マコト)の人のごと思ひなしてよむべきなり。

巻々の名どもの事

此物語の巻々の名どもの事は。その巻に見えたる歌や詞や。かりそめに取出て名づけられたること。諸抄にいはれたるがごとし。これを天台の四門に准(ナゾラ)へ。毛詩の名篇に比(ヨソ)ふるなどいはれたる。舊注のひ

がことゞもは。新注どもに辨へられたれば。これもまたさらにいはず。新釋の帚木卷に。舊注を辨へられたる所に。此物語の名ども。いとかろき事よりつけたるを。此卷など一つ二つの名にのみ。ふかき意あらんやは。古き書どもの名のやうも。みなやすらかにのみ。からもやまとも有けるをおもふべし。といはれたるは。まことにさることと也。されども猶よく考れば。いさゝかづゝは。作りぬしの心しらひありし事かとおぼゆるも。これかれ見えたり。それはその卷々のはじめにいへれば。こゝにはもらしつ。

人々の名の事

此物語はめでたきことおほかる中に。すべて人々の名をいはずして。たゞその前後の詞つきにて。その人の事と聞ゆるやうにかゝれたるは。まことにいみじき筆といふべし。されば朱雀院のみかど。冷泉院のみかどなどまうすも。たゞおりゐさせ給ひし後に。それおはします宮の名をもて申したるにて。實に昔おはしまし〻朱雀院天皇。冷泉院天皇の御事にはあらず。たゞ惟光良清時方などいふ。二三人にのみ名はあれど。それもしか家司(ケイシ)めきたる人に。ありげなる名を。わざと作りていへるなれば。これも猶かりの名なり。又上にもいへる千枝常則などの類ひは。實に在し人と聞ゆるを。事のさまによりてとり出たるのみなれば。物語のすぢにいさゝかもあづからぬ事なり。されどもあまたみえたる人々の事なればたえて名なくてはわかちがたき所もある故に。かりにとなへし名どもはかたゞゝあり。それはた作者(ツクリヌシ)のつけられたるは。いとしも多からず。事のさまによりては。空蟬の君を帚木とも二やうにいへるごとく。さしてたしかにいひわかちたるにもあらず。たゞそこのさまによりて。その事と聞ゆるためまでにつけたるのみ也。北村久備がすみれ草の凡例に云ク。帝をはじめ參らせ。人々の名を稱へいふ事あり。先ツ桐壺帝と申は。桐壺卷にもはらなる帝なれば。後に物語をよむ人の。其帝とわかつ料に。かりに名附たるもの也。物語の詞に桐壺帝といふ事は見えず。人々の名も是に同じ。大臣も納言も幾人ともなくあれば。何の大臣。何大納言と。かりに名附て。其人をわかちたるなり。かく人々をいひわかつに。物語の作りぬしの。

始よりおほせたる名と。物語をよむ後の人の。云習はしたる名とふたつ也。作りぬしの始よりおほせしは。光源氏匂兵部卿宮。薫大將。紫上。夕顏上など也。よむ人の名附しは。秋好中宮。槿齋院などいふ類なり。秋好中宮を物語の詞には。秋の御かたとのみ有て。秋好とは見えず。槿の齋院も。朝顏の姫君とみゆ。それは朝顏の歌を源氏君とよみかはし給ひたれば。その朝顏の歌よみ給ひし姫君といふ意なるを。後に齋院に成給ふ故に。物がたりよむ人の名づけて。槿齋院と申しなり。此外みな是に同じ。人々の名を後より稱へいふにも。亦其品三つあり。歌と詞とによりておほせしは。朧月夜內侍。雲井鴈などなり。歌の詞を卷の名とも。其人の名ともしていへるは。螢兵部卿宮。玉葛君などなり。卷の名によりていへるは。桐壺帝。竹川左大臣。紅梅右大臣。葵上などなり。餘は准へてしるべし。といへり。なほかのすみれ草の系圖には。其人々の下に。其名のゆゑをも注したれば。委しくはそれを見て知るべし。この作りぬしのつけたると。よむ人のつけたるとのけぢめは。先ッよく心得おかざれば。よみもてゆくうちに。まどはしきふしも出來めれば。かならずわきまへおくべき也。さて又湖月抄其ほかの本にも。人々のおもふ心いふ詞の標に。某甲心。某乙詞。などと記す例なるを。其人の名のいまだあらはれざるさきにも。其標をつけたり。たとへば帚木卷に頭中將のなでしこの歌よみたる女の事を語らるゝ所に。夕顏としるしたる類のごとし。それは後に夕顏卷にて。夕顏の歌よみし女なれば。たがふことはあらざれど。しか其人のあらはれぬうちより。後の名をひきこしあらはしては。作りぬしの心にひめおきて。後にあらはし出たる時。めづらしくをかしからん。とかまへられたるたくみをうしなひていとあぢきなし。されば今はいさゝか心して注せれど。さてはまたかの抄などを見なれたる人の。なか／＼にいふかしむべければとて。頭書の釋どもには。その人とまづ名を顯はして注したり。これはやむ事を得ぬしわざにてもとよりおのれが心にはあらず。されば此物語をうまく讀試んとおもふ人は。始にちうさくにて其意をさとりおきて。さて後某甲心。某乙詞。などいふことをもしるさぬ本を見て。文の意をよみあぢはふべ

し。いひしらずめでたくおもしろき所どもはおほきぞかし。

年立の事

此物語の紀年の事は。玉小櫛またすみれ草に圖をつくりて。いとくはしくしるされたれば。それにゆづらひて今は物せず。これはかならず心得おくべきこと也。さて年立は。源氏君の齢をもてつゞけゆきたるものなる中に。物語のなき年のをり〳〵あるは。作者の心しらひありし事と見へたり。それは先ッ桐壺巻と帚木巻との間に物語のなきは。桐壺巻は源氏君の本傳にて。其始をかたり出たるまでなれば。おとなになり給ふなどの事を。此間に省きたるにて。さして論なし。其次は花宴巻と葵巻との間に。一年がほどの物語なし。これは桐壺帝おりゐさせ給ひ。朱雀院の帝御位につかせ給ふほどの事なる故に。わざと其けぢめをたてゝはぶかれたるか。或は御くらゐゆづりの事を委しくいはゞ。さま〳〵の事どもありて。同じすぢの重なるべければ。省かれたるか。そはよくもしられねど。省れたる所はかならず御世のかはる所々なり。そは次はみをつくしの巻と繪合巻との間に。また一年がほどの事なし。これは朱雀院の帝おりゐさせ給ひ。冷泉院のみかど御位につかせ給ふほどの事なり。また其次は若菜の下巻に。はかなくて年月もかさなりて。うちのみかど御位につかせ給ひて十八年にならせ給ひぬ。とある。年月もかさなりてとある語に。源氏君四十二より四十五まで。四年の物語をこめ省きて。四十六の年。冷泉院の帝御位ゆづりの事をかゝれたり。これも御代のかはりめなり。其次は雲隱巻也。これは源氏君の終の所なれば。さらに論なし。匂宮巻は薫君と匂宮との傳をかき。竹川と紅梅とは。髭黒大臣と紅梅大臣との御すゑの事をかゝれたるなれば。この三巻もさして年立にはあづからず。橋姫巻より夢浮橋巻までは。薫君の齢をおひて一つゞきにしるされたり。さて源氏君の紀年を。御代のかはりめごとに。かくけぢめをたてられたるは。いかなる意とも知れねど。大かたは其御代々の勢ひによりて。源氏君のうへに盛衰のあるを。かき分られたるものに似たり。さるはまづ花宴巻までは。猶いと若くおはしけるほどにて。かろが

ろしき御しのびありきなどし給ふ事をかきて。わかくさかりなるさまをのみあらはし。さて葵巻よりは御代かはりて。弘徽殿がたの御勢ひつよくなりて。やう／＼にはしたなき事多くなりまさりつゝ。つひには。須磨のうつろひありけるは。しばらく衰へさせ給ふやうを書分ちたるにや。さてからうじて其事とけて。みやこへかへり給ふ事をしるしたるみをつくしの巻までを。一つゞきとして。其後を一年かゝれたるものなるべし。此間に蓬生關屋の二巻あれど。かれは末摘花君と空蟬君との終をとぢめたる。いはゆる並の巻なれば。さして年立にあづかる事にはあらず。さて繪合巻より冷泉院の帝の御世となりて。源氏君の御いきほひやう／＼にのぼりゆき。よろづ御心のまゝにして。つひに藤末葉巻にいたりて。太上天皇に准へ給ふよしの尊號かうふらせ給ひ。六條院へ行幸の事ある。これぞ此君のさかえのきはみを書つくせる所なるべき。さて若菜巻にいたりて。御位ゆづりありて。これより朱雀院の御子の御世となりたるに。女三宮の御事おこりしは。六條院のうへに。よからぬ事の出來つるはじめ也。それよりの二三巻は。柏木君の事。女三宮の御事。夕霧君の事などをいふ巻々なれど。猶かの物のまぎれに。六條院の御心をつくし給ふさまをかけるは。まづはよからぬ方の事也。さて御法巻に至りて紫上うせ給ふ。是生涯の御なげきにて。まぼろしの巻は其御歎きの事のみをしるされたり。さて雲隱にてかくれ給へるをみれば。みな此君の盛衰哀樂のうへによりて。御代のかはりをたて。其けぢめある所に。年次を省きて。わかちなしたる物と見ゆれば也。これなん此物語の一部は大綱を思ひかまへて。竪に年月の經ゆく事を立られたる法なるべくみゆるは。猶おしはかりのひがことにやあらん。されど大かたはたがふましくぞおぼゆる。

系圖の事

此物語に見えたる人々の系譜の事も。用あることとなれば。一わたり心得おくべし。これはたすみれ草の委しきにゆづりて。今は省きつ。たゞしかの書には。皇胤。大臣族。卿大夫族。系圖なき人。といふ四つをもて類を分てり。それわろしとにはあらねども。

物語よむ方にていはゞ。これに猶主客正副などの法をたておきて見るべし。しかせざればうまく事どものゆきかはるはし〴〵を。さはやかに心得ることかたし。それはまづ一部の主と立たるは。光源氏君なること論なし。これに對へたるは。かゞやく藤壺宮なるをそはかくかへ事なるをもて。この御ゆかりに御女姪の紫上をとり出てかへたる也。されば源氏君と紫上とは此物語の主とある人なり。さて源氏君に相副ては。致仕太政大臣（頭中將の事）なり。又此御かたがたに對へたるは。二條太政大臣弘徽殿皇后の一族なり。これははじめをはり。源氏君の御族とは。御中よからぬさまにして。彼此相對へたるが物語のおもふきなれば。客の法なり。帝も朱雀院と冷泉院とは。其御外戚のひくかたによりて。事を分ちたり。これなん此物語の大略の趣の立ざまなりける。さて其次は六條御息所の御族　髭黑大臣の一族。さては明石入道の族などなれど。これはさして重々しくたてたるすぢにはあらず。其外の人々は。唯このむねとある事のたすけに取書たるなれば。更にいふべきにもあらず。然れどもおの〳〵そのよりきたる所に。法あることなれば。等閑に見過すべからず。その卷々に評ずるを見るべし。さてまた宇治の卷々にいたりては。薫大將を主とたてゝ。匂宮をあひ副たり。是六條院に致仕大臣を相副たるがごとし。これは六條院の御子と。明石中宮の御子とを相對へて立たるものにて。大かた同じほどに並べたる物から。まづは薫大將をむねとしたる書ざま也。さて八宮の姫君たちをその客として。かの卷々にはかゝれたるなり。なほこまかにいはゞ。さま〴〵の法どもあれど。それも其所々に評じたれば。こゝにはたゞその大むねをいふのみ也。されば系圖を見んにはかゝる事をよく思ひ辨へて見るべき也。これは物語を讀べきための系圖なれば。其系圖につきての用あることは。かやうの趣どもを見ん爲なれば。先ッかくおどろかしおくなり。

此物語に種々の法則ある事

この物語のめでたき事を。今更にいひはやさんは。ことさらびたる事なれど。委しく見るにしたがひて。ます〳〵いみじさのいひしられぬは。たゞ一わたり

にかゝれたる物にはあらで。其事を記しそむるはじめより。くさ〳〵の法則を思ひ構へて。かゝれたるものとおぼしければ也。さてその法則といふは。我國のふみには。いまだ正しく見えたる物もなければ。何れのふみの法ぞといはんやうもなけれど。もろこしの書どもに。文章の法則をいへるを見るに。大かたそれと異なることもなきさまなる所あれば。まづはその法どもによられたる物とやいはん。さはいへもろこしの文法といふ事も。これよりはいと後世より盛にいひ出し事なれば。それによれりといはむをば。誰も〳〵うけあへまじきことにはあれど。そのもろこしの文法も。昔はじめてかきたる人の。みづからいひ出たる事にはあらず。皆その文のいみじきを見て。それにならはんとする後人の。かりに名づけて評したるに起れる物にて。すべてはたゞかりそめの法なり。されどその昔の文どもは。みづからしか思ひかまへてかゝざりしにもあれ。後より名をつけて評して見れば。さる法則どものあるによりて。しかいみじく見ゆるなれば。法ありといはんもうきたる事にはあらず。されば此物語の作りぬしも。さる法どもをおしたてんとて。かゝれたるにはあらざるべけれど。いみじきざえありて。もろこしの書どもをあまねく見られたるよしなれば。おのづから其法のうつるまじきにもあらず。さらば昔よりさだある。司馬遷が史記の法ありなどいふことも。みながらより所なき言ともいふべからぬにや。さればとて彼と此とは。語のさまも事の意も。いたくかはりたることなれば。あながちに彼にならひたりなどはいふべからず。かくいひても猶ひたぶるなる皇國の學者どもは。例の漢に似たりといふをいみきらひて。おのれを罪人とするもあらめど。そはなほ一わたりの論といふべし。そも〳〵皇國言ながらの文といふものは。祝詞宣命をおきての外は。古の世にあることなく。物事を記すには。すべて漢文章をかりてかけりし事。誰もよく知たるがごとし。然るにこの物語といふ物出來てよりは。皇國言ながらの文章も。かつ〳〵おこりそめにたり。さはあれど。此物語より前つかたの物は。たゞにもの打いふがごとく。詞をつらねたるのみにて。いまだ正しく文章といふべきほどのものもあらぬを。此物語いできてな

ん。始めてかくめでたくいみじき文章は世にあらはれたる。さるはまづ文章といふことは。いはゆるあやことばにて。其記しもてゆく事を。文(アヤ)にかざりて。讀む人にめでたくおもしろく聞しむるわざなれば。たゞに物うちいふがごとく書つくるをいふにはあらず。文はあや。又かざるなどゝよむ意。章はあきらかにあやある意の字(モジ)なれば。これをもてもたゞ言にあらざる故をば知べし。我皇國(ミクニ)には。もとよりしかことごとしき名をつけていふ事はあらざりけれど。かの祝詞(ノリト)などの。語(コトバ)をかざりとゝのへて。勢ひめでたくかゝれたるをみれば。猶たゞ言に物いふごとく。つらねべき物にはあらざりけらし。されば何事もかざらぬがよしとても。おもふ事をつぶつぶと書つけたるのみにては。何のをかしきふしもなくして。文章とならんやうはなし。たゞ文章といふ名のみは。もとより漢の名を借たるなれど。其事の意は皇國のいにしへも同じかりし事。これらをもておもふべし。しかれば此物語の文章も。かの史記などにまさしくならへりといはんこそひがことならめ。それ讀うかべたる人の手に。いかでおもしろくかきなさんとおもはゞおのづから其法のうつるまじきものにはあらず。さても猶彼と此とは。事のつらねざまも。もののいひざまも。いたくかはれる事にしあれば。たとひさながらうつしかゝんとすとも。たえて似つく事はあるまじきなれば。彼にならへりといはんは。またいといみじきひがこと也。たゞこの皇國言ながらの文章といふべき物は。此物語ぞ書出たる始なる。といはんには。さもあらずとは誰かいはん。よしやその本末はとまれかくまれ。今此物語の文章を評(サダ)して。そのめでたきよしをあらはし出つゝ。文ならふ輩のたつきともせんとするには。おのづから法(ノリ)の名をたてゝ。そのめでたき事をいはざれば。何をよすがにてか事をさとさん。それはた其法の名をしも。べちに悉く作らんも。いとたはやすき事にはあれど。かの漢文章の法則といふこと。既にこゝにも傳はりたれば。言をかへていひたりとも。誰かは彼にならへる物ならずとはいはん。さればいたづらなるわざにかゝづらひて。なかなかに紛らはしくせんよりはと。かのもろこしの後世の文法共にいへる法(ノリ)にならひ。かつその名目(ナ)などをも。かたそば借て評ず

る也。見ん人さる意していたくな咎めそ。そのうへこれはおのれがはじめて思ひつきたる事にもあらず。安藤爲章が紫家七論に。はやく其端を見いでゝいへらく。上略全篇は富貴温潤の氣象にして。官家の文章なれども。中に山林出世あり。市井田家あり。貧困哀傷あり。閨情風景は巻ごとに見えて。情をうつし景をかたどる事。まのあたり其人にむかひ。其所に遊ぶがごとし。全體は傳にして。又おのづから序の體あり。跋あり記あり論あり書ありて。諸體そなはれり。彼はゝき木の品定は。殊に奇妙なるものなり。爲章嘗て其章段をあらため侍りける時。序して云。論破あり論承あり。論腹あり論尾あり。麁より細にいり。俗より雅におもむき。繁より簡に歸し。波瀾頓挫。照應。伏案などいふ。もろこしの文法おのづから備り。其氣脉は悠揚として寛裕に。其文勢は圓活として婉曲なり。（是品定のみならず。一部にわたりて此意をつくべし。）史記莊韓柳歐蘇にひとしかるべし。女の筆にてはめづらかにあやしく。式部は誠に古今獨歩の才といふべし。いにしへより紫清といひならはしたれども。清少納言は才氣狹少にして。さかしだちたる跡あらはに。にくさげおほきものなり。同日にも論ずべからず。（已上品定序の略）云々。といへり。又岡部翁の新釋惣考にも。これらにならひて文法を釋んとおもはれけんと見えて。其釋を擧られたる所に云。文義に。末にあらん事のはしを前に擧る。これを生張本とも伏案ともいへり。此二事少しの違はあれど。大かた同じければ互にしるせり。又前文後文相對へて知るを照應といふ。又其語を即時にことわるを頓挫といふ。又文にある人相對して。互に應對せる語の外に作者の其事を評せる類をば。記者の語といふ。（俗に草子地といふものなり。）又其應對など。誰が詞ともふと分がたき所には。或は源氏。或は紫上など注せり。又文の句絶には。傍に點し。讀には中に點せり。（讀とは語の小別也。）小段をば［　］如此しるし。大段をば」如此記せり。（大段とは其事の終り也。）これらはわが國に例なき事もあれど。見わきよからむ料のみなり。その外右の數條の外にも注法あれども。本文を注せる例にて知るべければ。大かたを擧るのみ。惣て後世の注例に異なる事多し。よく心をつけて見るべし。先入の物を主として。不意にそしる人も有べけれども。惣てわたくしをわすれて古意につきた

り。誤れるは猶改むべし。といはれたるなどにより。又玉小櫛にも。こまやかなる所をおく深く尋ねて。作りぬしの心を用ゐたるを。こまやかにあぢはふべきよし。しば／＼いはれたるを本として。さま／＼ふかくたどり見るに。げにも思の外なる事どもゝありて。其法則の嚴かなるに驚くばかりなれば。岡部翁の立そめられたる法に。今少し事くはへて。さてこの評釋をばものしつるなりさてその法則のやうはいかにといはんに。まづ一部にわたりて一部の法則あり。一卷ごとに一卷の法則あり。一段ごとに一段の法則あり一章ごとに法則あり一句ごとに法則ありて。いさゝかなる事の末々まで。あやしきまでたらひたる法則あり。その一部にわたる法則といふは。時世年月の移るを經とし。人事のゆきかはるを緯として。物語の趣を作りなすに。時世年月の移りゆく經のかたにては。上條にもかつ／＼いへるがごとく。まづ桐壺帝の大御代其次に朱雀院の帝の御代。其次に冷泉院の帝の御代。其次今上としるしたる帝の御代。と定めおきて。其中間に必物語のなき年しき年をおかれたる。これ法則なり。又源氏君の齢をおひて生れ給へるよりおほよそ五十年餘の事を。五十四帖に書つらねて。右の御代々々に相かなへ其御代ざまのおもぶきによりて。此君のうへに盛衰のあるさまをかき分られたるこれ法則なり。かくてそれに隨ひてさま／＼の人のうへをも年をおひて。大かた相かなふべく、齡のほどをおもはせたる。是亦法則なり。宇治の卷々は。また薫君の齢をもて年をおひて匂宮を并べ擧たる。これまた法則なり。かく定めおきて。さて人世のゆきかはりいでくる事どもを。緯にあやどりて語りゆくにつけて。さま／＼の法則あり。そは上條にもいへるごとく。先光源氏君といふをたてゝ一部の主とし。それに對へてかゞやく日宮藤壺を取出たる。これ光と赫とを對へたる正對の法なり。然れども藤壺宮の事はかくろへ事なる故に。其所縁に御女姪の紫上をとり出たる。これ藤の花のゆかりに紫といへるにて。いはゞ藤壺宮のかはりのごときものなれば。始終源氏君に相偶ひたるはすべてこの紫上也。これ奇對といふべし。かくなしたるはたゞに光と赫と相むかへたらんよりは。今一きは心深く見えて。かけても及ぬ結構也といふ

べし。さてその光る君の御すゑを語るに。薫大將と匂兵部卿宮とをならべ擧たるこれ光のなごりに。匂と薫とをとり出たる。これはた正副の對法にて且源氏君のおもかげをうつしたる照應なり。又源氏君に相副て。致仕大臣をあらはして。其事どもを助けあやどりたるこれも正副の對法なり。また二條大臣弘徽殿皇后の事をあらはして　源氏君の御族と。御中のよからぬさまにとりなして。物語の種子としたる。是いはゆる主客反對の法なりさて又紫上は。何事もめでたくたらひて物語の中の女の主とある人なる。其反に末摘花君といふ。かたちわろく心もおくれたる人を擧て紫と紅とむかへたるこれも反對の法也さて又人々のうへを語り出ることも。其人々によりて一やうならずさま〴〵事をかへて書出られたる中に六條御息所の事をかゝれたるはいと〱めづらかなり。夕顏卷に。六條わたりの御しのびありきの頃といひ出て。そこにかよひ給へるさま。又變化のそれによそへてあらはれたるさまなどをも書ながらいまだ誰とも其人をばあらはさず。はるかに末なる葵卷にいたりてはじめて前坊の御息所なるよしをいはれたるなどは。いとおもひの外の筆つきにていとゝめでたし。これいはゆる伏線の法の奇じきもの也又朝貌の姬君は。帚木卷に。空蟬の方にて女房どもの源氏君の事を評ずる語のうちに。にほはせおきて。さて次々に顯しかゝれたる。これも同じ法なるに。一人は御むすめの齋宮にそひて伊勢へ下り給ひ。一人はみづから賀茂の齋院に立給へるなど。伊勢と賀茂と相對へたるにて。件の伏線を引動かしたる書ざまとしられたり。さて又葵卷に。賀茂祭の車あらそひの事によりて。御やすどころのいきすたまの事をいひ。それによりて葵上はみまかり給ひしことより。源氏君の御息所をうとみ給ふを恨みて。つひに伊勢へ下り給ふなども。伊勢と賀茂と葵と榊と對へたるに似たり。さて物のまぎれの一くだりは。いと〱かしこき御事なるに。それをしもかゝれたるは。作りぬしの心しらひありげに見ゆる事。上條にいふがごとし。然るに其事によりて　源氏君は太上天皇に准へられ給ひて。こよなき榮えをきはめ給ふさまにかゝれたる。其報應をかゝんとて。女三宮の物のまぎれをとり出たる。これ照對の法なる中に。おのづ

から報應を示したるもの也。さる故に夜居の僧都が冷泉院にほのめかし奉り。辨のおもとが薫君にあらはし申たるも共に同じき趣なるは。わざとその照對なることをあらはにしたるにて。いと〳〵心ふかきもの也。さて柏木君はこの事の物思ひつもりてつひにうせ給ひ。其末々落葉宮は夕霧君むかへとり給ひ。致仕大臣の後は紅梅右大臣の方に定れるなども。皆この報應のなごりを示せるなるべし。又夕顏君のうかれたゞよひたるに。浮舟君のよるべなきをむかへたるも。照對の法にてなにがしの院と宇治宮とをむかへ。源氏君と頭中將と二かたなるに。薫君と匂宮との二かたを對へ。五條の宿の八月十五夜と。三條の家の九月十三夜とを對へて。共に御車にのせて出給ふさまにかゝれたるも正しく照對をしらせたる也。さて一人はへんぐゑのためにとり殺され。一人はこたまにかすめとられたるなども。ずべて同じ筆づかひなる中に。たてたる心なき女の。よかるまじき趣をにほはせたり。さて夕顏のなごりを玉かづらにうつしても猶浮舟と對へたる法ありて。筑紫と常陸と東西に對へ。大夫監と常陸介との。むくつけくあらびたるをむかへ。長谷寺と小野の庵とむかへたりと見ゆる事あり。さて又須磨のうつろひは。源氏君のしばしの衰へをかゝん爲なるを。はやく若紫卷に其端をあらはして。北山にて良清に明石上のことをかたらせたる。これその伏案にて。遠く須磨明石の卷をかくべき結構の法也。これを見ても かの石山寺にて。須磨明石の卷より作られたりなどいふ。舊說の妄なるを笑ふべし。又花宴卷は。桐壺帝の御代のかぎりにて。源氏君の若きさかりのきはみをあらはしたるに。櫻に匂ふ朧月もて。内侍のかみの物のまぎれをあらはしおきて。さて其事のつもり〳〵て。つひに須磨にさすらへ給へるに。明石入道むかへとりて。いつきかしづき奉り。そこよりつひに都へかへり給ふ事を。秋の月によせて書れたるに。第三年の八月十五夜 初て參内し給ふよしをかゝれたるは春の花にいできそめたる禍の。秋の月にとけはてたるにて。盛衰の因緣を。月花によそへて思はせたる。これいはゆる首尾相應する法也。なほ此外にも 源内侍の年老てすきがましきに。近江君のしたどにはしたなきをむかへ。博士の女のざえがりたるに。大

學の儒者のかたくななるを照したるたぐひ。いさゝかの戯れ事のうへまでも。その法なしといふ事なし。されどさるこまかなる事どもは。いづれも其卷々の評釋にいへれば。こゝには只その大なることのみをいふなり。さて事が中にもいみじきは。雲隱卷をたてながら。すべて詞を略かれたる。此事のみはいといとめでたく。いと〳〵めづらしくして。やまともろこし古今にわたりて。かゝる筆づかひのいみじき書は。他に又あることなし。これ省筆法のいみじきものにて。かへす〴〵もめでたし。然るをさき〴〵の注どもに。よしもなき佛說などを引いでゝさまざま用なき事をばいはれたれど。この雲隱のさるべきよしを解れたる物のなきは。いとくちをしくあかぬ事なり。ましてかのつたなき物をつくりいでゝ。そのかはりなどいひし人は。いはゆる大海の一滴だに作りぬしの心をえしらぬものにて。いとも〳〵あぢきなくかたはらいたし。抑此物語は桐壺卷に更衣のうせ給へるを。帝のいたく歎き給へるより書起されたるに。揚貴妃のためしをひきいでゝ。「たづねゆくまぼろしもがなつてにても。たまのありかをそことしるべく。とよみ給ひし事を載たるより。つぎつぎに源氏君のさかえを書もてきたれるが。つひに御法卷にいたりて紫上のうせ給へる。これ物語の主とある人の。まづ一人かくれ給へるにて。やがて光源氏の雲隱れ給ふべき下がまへ也。さて幻卷にいたりて。正月より十二月まで。かの紫の御おもひにて。いたくなげき給ふよしを。をりから時々の月花木草によそへて書つくされたる趣。いとも〳〵ものがなしくして。此御歎きの故に。源氏君はやがてかくれ給ふべきやうにかゝれたる。其中に。雲ゐをわたる雁を見て「大空をかよふまぼろし夢にだに。見えこぬたまのゆくへたづねよ。といふ歌をよみ給へるを。やがて卷の名におふせたるは。桐壺の末を結ぶものに似たり。よしや此論はあたらずしもあれ。かくなしおきて。源氏君のかくれ給ふ所をかくまじき結構とせられたるは。たがひなくぞおぼゆる。かの幻卷の末に。「物思ふとすぐる月日もしらぬまに。年もわが世もけふやつきぬる。といふ歌をよみ給へるよしあるは。源氏君の辭世めきたる歌にして。やがて雲がくれ給ふべきを示したるもの也。さて雲隱卷

の中に。そこばくの年月をこめおきて。匂宮卷の始に。光りかくれ給ひにし後云々と書出て。その御すゑの事どもをついでられたる筆づかひ。いはんかたなく心ふかくして。さらに〳〵かけても思ひ及ばぬ事どもなりかし。すべて世にあらゆる作り物語ども。やまともろこしをいはず。いづれも〳〵。其むねとたてたる人のうへをば。かぎりもなき榮えを極めたるさまにして終らぬはなし。されどもそこにいたりては。殊更に作りたる跡。けざ〳〵と見えて。いとてづゝに見ゆるがつねなるを。此物語は。既に藤末葉卷にその榮えのきはみを書をへて。また若菜卷より其報應(ムクイ)の事どもをかき出。こゝに至りてその終をつゝみ省かれたるからに。いさゝかも作り事めきたることなく。實に有し事のごとおぼえて。いひしらぬ味ひあり。また舊説にもいはれたるやうに。このかくれ給へる事を書出んには。こゝにもかしこにも。同じやうなる歎きのさまを。書あらはさゞれば事たらず。さては同じすぢの重(ナ)りて。いとわづらはしかるべきを。それをば省きてなか〳〵に。幻卷一帖に。光君の御歎きをつくしたるなど。いとも〳〵めでたき文章の法といふべし。見ん人心をふかめて讀味ふべきものぞ。さて次には夢浮橋卷を書さして。筆をとゞめられたる。いひしらずめでたし。さるは先ッこの宇治の卷々は。始に薫君と匂宮との傳を。匂宮卷にいひ出おきて。さて橋姫卷より。八宮の姫君たちの御事を書出られたるに。これよりさき源氏君の事をかたりたる卷々とは。そのさまいたく事かはりて。いとしめやかにあはれふかく。人情のさりがたきかぎりの事どもを。いと〳〵せちにつらねられたるものにて。八宮の世にわびて宇治へ引籠り給ひ。さしつぎて北方うせ給ひ。姫君たちのみなしごとなり給ふを。おふしたて給ふ御心づかひより起りて。佛の道に御志ふかくなり。おこなひなどせさせ給ふさま。又薫君の柏木君の事をほの聞しりて。身をあぢきなく思ひなし給へるより。つひに佛の道に心ざしふかくなりて。物學びにとて宇治へおはしたるさま。又大姫君の中君を。いかで世にあらせ奉らんとて。我身をすてゝいたつき給ふさまなど。いと〳〵あはれふかくして。打よむに涙もはぶれぬめり。さてかくとり〴〵に打しめりたる佛ごゝろのすゑ。つ

ひに薫君大姫君にけさうし給ひしを。事よくのがれんとて。中君にあはせ奉り給へるを。猶あかずおもほして。匂宮をいざなひて。中君にあはせそめ給へるに。大姫はかなくなり給ひしかば。又中君に思ひうつりて。とりかへさまほしくおぼえ給ふこと。中君のそれを遁れんとて。浮舟君をかたしろにとすゝめ給ふうちに。匂宮に事いできし事。それより薫君の浮舟を宇治にすゑて通ひ給ふを。匂宮聞しりて。ひそかに。通ひ給ふ程に。つひにはあらはれて。浮舟君の身をなげんとせし事など。いづれも〳〵。さりがたきあはれのかぎりにて。ことわりならぬもなきやうなるは。かの源氏君の。花やかににぎはゝしかりし御さまとは。こよなく體(スガタ)をかへられたる物にて。今一きはめづらかにあはれ深し。たゞ匂宮をのみ。源氏君よりもあだ〳〵しくにぎはゝしくかきなし。それにつけて物語りの趣をかしう書めぐらされたりと見えたるを。それだに浮舟巻にいたりては。いとほしきまでに見えたるは。いとも〳〵上手の筆つきといふべし。大かた源氏君の御本上は。あながちなることをおぼしとゞむるくせは有ながら。又いと人のなさけをも思ひしり。ものゝあはれふかくして。花も實もあるさまにかきなされたるは。此物語のむねとある人なれば也。其なごりを二かたに分たる法なる故に。薫君は源氏君にもまさりて。しめやかにあはれ深き御心ばへにかきなし。匂宮は源氏君にもまさりて。にぎはゝしくあだめき給へるやうにかきなされたる。これ光といひ。薫といひ。匂といふ名につきて。其心ばへをあらはし分られたるに。其人々の本上を。心にいりて見たらんやうにかゝれたるは。いとも〳〵めづらかにて。めでたしといはんにも餘りあり。さて浮舟君の尼になりて。小野にかくれすむことを。薫君の聞しり給ひて。常陸介が子の小君を御使にて。小野へつかはし給へるに。浮舟の尼ははぢらひて。えしも逢給はねば。小君のむなしくかへり参りたるによりて。薫君のさま〴〵におぼす事ある所にて。すべて一部を書とゞめられたるは。鬼神もえしるまじき筆づかひと云べし。かゝるにこそ此物語はよみはてたる後もさしおきがたく。のこりおほくて。又くりかへし〳〵て。見れども見れども。いくたびもあくことなくして。餘情のきはまり

なきにはあれ。山路の露といふもの。かきそへられたる人は。これをあかずくちをしく。おもはれけんほどは。ことわりなれど。又作りぬしのいみじき心を。えしらぬものに似たり。そも〳〵文章に筆を省く法は。いたつきをいとひて省くにはあらず。必省かではえあらぬ所にて。わざと省くことなるを。此物語の文は。殊に委しくたらひたるものにて。俗にいふかゆき所へ手のとゞくやうなる體なれば。打見るにはいと長々しく見ゆるやうなる物から。又かくすくよかにたちきりて。筆を省かれたる所などは。いときは〳〵しく。かけても思ひよらぬすぢにて。雲隠巻と夢浮橋巻の末のさまとは。いみじくいひしらがふもろこし人の文にも。たえて見しことなくなんありける。それはた初よりつぶ〳〵とつらねたる事のすゑをかくふいにたちきりては。何のをかしきふしもあらねど。既に藤末葉巻の太上天皇の事に。光君の榮えをきはめつくしおきて。さて雲隠をしめしたるうへなれば。此君の事ははてにしを。なほその餘波に。宇治巻をかきくはへて。かの御末の事どもをいひつくしたるはてなれば。かくてもさらにあへなき事なくして。其餘情のかぎりなきことたとへていはんやうもなし。さて又夢浮橋と名づけられたるも。玉小櫛にいはれたるごとく。此物語に出たる事は。みな夢ぞとやうの意をふくめて。とぢめられたりと見えたるを。なほ思へば。源氏君の終をかきたる幻巻に對へて。夢幻をかけ合せて。法をとられたる物とおぼしく。かへす〴〵も心ふかくめでたし。すべて此物語は。めづらしきかきざまの多かる中に。かひなでの人のおもひもかけぬ事五ッあり。其一ッはすでにいへりし。雲隠巻と夢浮橋巻の末との事也。今二ッは人々のうへに名をつけずして。いと多かる人々の事を。つゆのみだれなくかきとられたると。六條御息所の事を伏おかんとて。既にかよひ給へるよしをいひながら。猶誰ともいはずして。あまたの巻々をへてほころばし出されたると。藤ばかまの巻と眞木柱巻との間に。筆を省かれたる所と也。人々の名をつけられざる事と。六條御息所の事とは。上條にかつかづもいへれば。今またいはず。眞木柱巻の初。いといとめづらし。そは先ッ玉かづらの巻の末よりして。玉葛君に心をかけたる人。いとおほかる中に。螢兵

部卿宮。ことさらに心ざしを見え給ひ。さうじみもかの宮をば。こゝろことにおもほすさまにかきなし來りて。さて藤袴の卷に玉かづらの君。內侍のかみになりて。月かはりなば入內し給はん事をきゝて。こゝかしこより御文どもの有ける中に。かの兵部卿宮ばかりには。御かへしありし事をいひて。とぢめたるを。眞木柱卷の初は。いと〳〵思ひかけぬさまにかはりて。けさう人の中に。殊に思ひおとし給へるさまに見えたる。髭黑大將の。既に玉葛君を得たる事をかき出たるに。猶其よしをばことわらで。內にきこしめさん事もかしこし。人にあまねくもらさじ。といさめきこえ給へど。さしもえつゝみあへ給はず。とかきはじめたる筆づかひ。いと〳〵あやしくくすしく。めづらかに思ひの外にて。はじめは何事ともしられぬを。やう〳〵よみもてゆくまゝに。此大將めきて聞えくるなど。打おどろくまでに奇しく珍らし。さてなほあまたの詞どもをへても。きはやかに其よしをばいはずして。霜月になりぬ。といふことを。あらためて書出たるより下に。大將殿ひるもいとかくろへたるさまにもてなして。こもりおはするを。いと心づきなく。かんの君（玉かづら也）はおぼしけり。とはじめてあらはし出られたる。いとも〳〵巧なるものにぞありける。これ反覆のいみじき法にて。いとらうたげにおいらかなる女の筆して。虎おほかみをも走らし。おに神をも驚かすべきいきほひありといふべし。猶そこに注する事どもを見て知るべし。大かたこれらぞこの物語の中にすぐれてめでたきところなりける。然るを昔よりの抄どもに。用なき事をば多くいはれつれど。かやうの事はさしも心をつけられずして。なほざりに看過されたるは。いと〳〵あへなくくちをしきわざになん有ける。今さしいでゝかくいひたてんは。われながらいとをこがましけれど。かくさだかに法ある事を。さしおかんがあかずおぼえて。うけばりがましきそしりをかへり見ざるになん。なほ此外にも。これやかれやとおほかれど。其卷々に注したれば。さのみはとてかきとゞめつ。大かたは准へてもさとるべし。一卷に一卷の法あり。一段に一段の法ある事なども。其卷ごとに評じたれば。こゝには略きつ。

をり〳〵のけしきをかける所の事

此物語のうちに。春夏秋冬。をり〳〵のけしきをかける所は。ことさらにえんにみやびたる詞おほくして。いひしらずめでたき事は。誰もよく知たる事にていまだしき輩は。これをのみ頻に賞て。名文なりなどいひのゝしること也。然れどもこのけしきをかかれたる所は。あながちにそのえんだちたる詞をのみ。むねとしてかゝれたるにはあらず。みな其時々かきあらはしたる人々の心にあはせて。事がらのあはれを深くせんためなる事。帚木巻に。有明月夜のあけはなるゝさまを書たる所に。何心なき空のけしきも。たゞ見る人から。えんにもすごくも見ゆるなりけり。とある意をおしひろめてしられたり。（なほ此外にもこれかれとあるた。玉小櫛にも引出ていはれたる事あり。あはせ見るべし。）されば此語は。一部にわたりて。さるけしきを書たる所の作りぬしの意なるを。しか殊更にはいはずして。こゝにかく挿みて聞せたるなど。事をことは〳〵しくせぬ此文の例にて。他にもさる類ひおほけし。たとへば。今世に芝居といふことするを見るに。其をりからの草木などを作りたて。又其事に似つきたる所のさまなど。ほど〳〵に作りかまへおきて。さて其わざするをのこどものさま〴〵ふさはしきかたちにいでたちて物すればこそ。事がらのまことめきて。見る人の心をも動かすなれ。もし其時所のさまにつきなくして。さきみだれたる花の盛に。怨靈をあらはし。風あらくふき雨打そゝぎたる堤の陰などに。きら〳〵しくそうぞきたる姫君などの。たゝずみたらんには。誰かはげにと打うなづくべき。物語のけしきを書たる所の心ばへも。これにひとしく。みな其をりからのさまに隨ひて。いとゞしくうれしひかなしひの。身にしむべきくさはひに書たるなれば。これをのみほめのゝしらんは。かの芝居につくりならべたる。くさ〴〵の作り物のみを見てほめたらんがごとく。いとも〳〵をこなるわざなめり。さるを近き世に。歌よむ人などの。文章とてかくを見れば。此物語などのさるけしきをかける所などを。こゝかしこかいあつめて。いさゝかばかりつらねたるのみなるを。こと〴〵しくべちに文章とぞいふなる。又それが學びのためにとて。さるくだりどもをかいあつめて。ことに卷をな

したる書などもありて。おほかたはさる物を見てぞつくりならふめる。學びのためには。それわろしとにはあらざれど。これをのみ我皇國の文章ぞと思ひいはんは。かの牛の毛の一すぢとかいふらんほどの事にて。何のかひもなき事なり。おのれはやくそのやうなきことを思ひしりにしかば。いかでさるまなびのために。ふるき文どもをあつめて。其法を示さむと思ひたちつゝ。これやかれやとよみ試しかど。此物語をおきての外は。これらの法のあひかなひて。文章のほんとなるべきものをさ〳〵なし。かれ思ひこうじて。つひに。此書のちうさくをも。思ひたちたるなれば。文學んとおもふ人は。さる所々に評ずる事を心とゞめて見るべき也。それが中には。みじかきさとりに思ひひがめて。鶴のはぎをたち。鳧の脚をそへたらんがごとき。ものぞこなひもあれど。いさゝかものゝたつきとなることゞもゝあるべからんかし。これらもいとさし過たることにはあれど。昔よりの註釋どもに。其さだなきがあへなくて。おどろかしおく也。たゞし細流抄などに。かの桐壺巻に。夕月のをかしきほどにいひ。月は入がたの雲といひ月は入ぬといふくだりに。その首尾なりとやうに注しておどろかしほめられたる事あるは。實にいとよく見出給へるなれど。猶その月に對へたる。風の脉をば思ひもらし給へる類ひもありて。くちをしく覺ゆる事ども多し。かしこに評ずるを見て知るべし。されど又。かゝる事に心つき給へるにても。細流は諸抄にまさりたることを知るべし。

頭書評釋凡例

一さき〴〵の抄どもの説を擧たるは。舊注新注をいはず。みな口かく方なる圏の中に。其書の目を一字づゝしるし。余が今あらたに注する説どもは。圓き圏の中に。(評)(釋)などゝ記しつ。評は本文のいみじき所々を批評しあらはし。釋は本文の通えがたきを釋もてゆくことなり。かれこの注をも評釋と名づけつ。

一先達の説を用ゐたる書目の標をこゝに擧ぐ。引合せて見るべし。

[奥]源氏奥入　宮内少輔藤原伊行朝臣作
[追注]奥入追注加　京極中納言定家卿補注
[水]水原抄　河内守源光行朝臣
[紫]紫明抄　紫雲寺素寂法師
[最]源中最秘抄　同作
[河]河海抄　四辻左大臣善成公
[花]花鳥餘情　一條禪閤兼良公
[秘]源語秘訣　同作
[和]和秘抄　同作

[不]不審抄出　宗祇法師
[祇注]帚木別注　同作
[弄]弄花抄　牡丹花肖柏紀聞西三條實隆公説
[葉]一葉抄　肖柏作
[細]細流抄　西三條右大臣公條公
[明]明星抄　西三條内大臣實澄公
[孟]孟津抄　九條禪閤植通公
[岷]岷江入楚　中院中納言通勝卿
[箋]岷江入楚中一説　西三條實澄公説通勝卿記聞
[巴]紹巴抄　里村紹巴
[万]萬水一露　能登永閑
[湖]湖月抄　北村季吟
[湖師]湖月抄師説　箕形如菴説
[抄]湖月抄中一説　季吟記聞　已上舊注
[拾]源注拾遺　契沖法師
[新]源氏新釋　岡部眞淵
[玉]玉小櫛　本居宣長
[玉補]玉小櫛補遺　鈴木朗
[餘]源注餘滴　石川雅望
[雅集]雅言集覽　同作

〔雅譯〕雅語譯解　鈴木　朗

已上新注

此外になほさま〴〵の注釋ありといへども。昔よりむねと用ゐ來らぬもの。又今余が見ざるかぎりはすべて擧ず。右の中にも。雅言集覽。雅語譯解の二つは。此物語の注ならねども。もはら此物語の雅言を解たる物なれば。こゝにくはへつ。此外に引たる書は。某書云。また某名云などゝおの〳〵其名をあらはして記しつ。又をり〳〵或抄とて引たる物は。本居先生の書入本といふ物の中に引れたる注にして。誰人の抄とも知れず。玉小櫛にも。或抄とて引れたると。全く同書と見えたるもの也。さて右の抄どもを引用ゐたる中に。舊注は大かた。省きてたゞ其要とあることのみを擧。むねとは新注をとれり。其中にも玉小櫛は殊に多し。其ゆゑは上にいへり。

一舊注のうち。河海花鳥などに既にいはれたることの弄花細流などにさながら見えたるを。湖月抄などに。後の方をのみむねと擧たることを。玉小櫛に難じて。さきの方をまづ擧べきことわりなるよしいはれたるはまことにさることと也。然れども。後にいできたる抄どもは。さきの抄のわろき事を。見出られたる事もありて。よき事も多ければ。今はあながちにその前後にはかゝはらで。たゞ事のすぢの。穩かに聞ゆるかたを引出たり。もとより彼此同じ事なるは。さきの方をのみ擧つ。されどもさきの抄よりも。今少し書加へられたる事などあるは。又後の委しきによれり。これはたやむことを得ぬしわざなり。

一舊注新注ともに。解れたるすぢは。げにと聞えながら。其解ざまのいかにぞやおぼえて。まぎらはしくたしかならざるは。同じおもむきながら。其語どもを改めて。おのが釋の下に記したる所たま〳〵あり。されどわづらはしければ。ひとつ〳〵其故をばことわらず。これはいと快らぬわざなれど。とにかくに本文の意の。通えやすからん爲にとて也。されど一ふし考へ得られたりと見ゆることは。少しものこさず餘釋に擧て。其解ざまのわろきよしを辨へいへり。

一諸注にいはれたる説の。いづれも同じ意なるは。詞みじかくして意の通え安さをとりつ。さるは頭書にものするに。長きは便あしくて也。

一釋の長くて。頭書に物するにわづらはしきと。諸抄の説を辨へいふべきことのある條とは。餘釋と號けて別にいへり。されども本文の意の。ふつにきこえがたき所は。長きをいとはず頭書にその説共を擧盡しつ。さて又語の類例。物事の根源。或は儀式調度の故實など。さして本文の脉にあづからぬ事は。みな餘釋にしるしつ。

一本文の傍にしるしたる俗言の譯語どもは。頭書にその語の義を注せず語釋と號けて。べちに其語の本の心ばへを注す。これら皆まづ先達の説をあげ次に余が案をしるして。其足ざるを補ふ。

一舊注新注をいはず。よろしき説なれど。事の長きは其要とある事を摘て頭書にしるし。其餘れることを餘釋にものしつ。

一餘釋語釋ともに。いと〳〵解がたき條どもは。諸抄の説を多く擧て。後に余が考を注す。但し諸抄の中に。解得られたりとおぼゆるあれば。そのよろしき説のみを擧て。他をば略きつ。又彼此同じさまなるは。さきの説のみを記し。いづれも解ざまのわろかめるは。たゞ余が釋のみを注しつ。

一文章を批評したることとは。我皇國の書にはをさをさ見へず。大かたは今始めてものすることなれば。其さまをもろこしざまにならひたり。其よしは上條に既にいへり。其法則のかりの名どもを。こゝに擧て大むねを注す。これはたゞ初學のためのみなり。さて此目どもは。もろこしにいへるをさながらにとれるもあり。又此物語の法に昔よりいへるを用ゐたるもあり。又今あらたに余がつくれるもあれど。事のさまのさとりやすきを主として。あながちにもろこしの例格に拘り泥まず。見ん人さるこゝろしていふかしむべからず。

主客

人と人と相對ひて事ある時。其むねとあるかたを主といひ。その主たる人のためにして。對へる方を客といふ。これによりて。其所の文に内外の差あり。又其卷其段につきても主客の法あり。准へて知るべし。

正副

軍を出すに。大將軍と副將軍とあるがごとく。その主とある方を正とし。それに附屬へる方を副とす。これにつきて文法に輕重あり。

正對

人にまれ。物事にまれ。同じほどの事を相對へて。優り劣りなきを正對といふ。これはただに對といひても有べけれど。次の反對にむかへて正字を加へたるのみ也。

反對

これは其事の反うへに相對ふをいふ。たとへば雨ふると日てると。夜と晝となどのごとし。其事同じからずといへども。表裏に相對ふをもて反對といへり。

照對　照應

この二つ大かた同じさまなれど。照對は一事の相似たるさまを再びあらはして。前の事に相照し對へたるをいふ。たとへば日と月と東西に光をあらそふがごとし。照應は。前に出たる事の末　あへなく消失ずして。再び其脉をあらはして。前の趣に相應くをいふ。たとへば日の光をうけて。月も星も光をはなつがごとし。

間隔

一つの事を語りもてゆくに。一つらに書つゞけては。いと長く煩はしくなりて。見ん人の倦んことを思ひはかりて。暫く切斷て其間に他事を挾み隔るをいふ。たとへば遠く海山を見るに。所々雲霧のへだゝりて。なかなかにけしきをかしく見ゆるがごとし。此法卷中に殊に多し。

伏案　伏線

この二つおほかたは同じ事也。伏案は。末にいふべき事を思ひ構へて。ひそかに其端をあらはしながら。伏せおく事也。伏線の線は絲すぢとよむ字にて。遠くいとすぢの端を伏置て。をりをり其縫めをあらはしつゝ。末に至りて結び竟る時。其絲ぐちを引ば。貫きたるぬひめ悉く動くことの如し。又結構といひたる所あるも同じ類也。結構はしたがまへの事也。

抑揚

抑はおさふること。揚はあぐることにて。文の勢をなす法なり。たとへば柄碓の頭を揚んとしては。其尾をつよく踏抑ふるがごとく。事がらをつよく揚ていはんとて。前つかたを抑へてかくをいへり。

緩急

字のごとく緩さと急しきと也。其事を叙ること。緩き時は静にして。ながき春日のうらゝかなるに。處女子の野邊をゆくがごとく。急しき時はすみやかにして。野分の風の。梢をまきてすぐるがごとし。各其事にしたがひて書ざま異なり。

反覆

事の急にうらがへりて。前の勢にいたくたがふを云。さるはわざとしか反覆して見ん人におもひの外の事と驚せんため也。たとへばしづかにすみわたりける月影の。俄にかきくもりて。神いみじく鳴はためきたる夕立の雨の。たちまちに降來たらんがごとし。

省筆

事の長かるべきをいたく約めて。前後のさまによりて。かゝる事と見ん人にさとらしむる類。また他にてありし事を。人の物語の中にいはせて其趣をしらしめ。或は煩はしきをいとひて省けるなどの類をすべて省筆といふ。

餘波

大じき事を書はてたる後に。其なごりのあへなく消失ん事を惜みて。其けしきなど書そへて引延たる類をいふ。餘波はいはゆるなごりにて。大波の引去りたる跡に。猶さゞら波しづまらず。遠淺に潮の遺りてやう〳〵に引さるさまに譬へていへり。

種子

これかれの物語の間つきなき時に。物一ッとり出て。物語の種子とする事也。若紫の雀子。女三宮のから猫の類ひなり。

報應

これはいはゆるものゝ報の應ずるをいふ。其事の報に彼事をあらはして。ものゝ道理を均

くすること也。

諷諭

今の現にある事に諷へて。一ツの事をあらはし出つゝ。ものゝことわりを諭すをいふ。この二ツは。作者の心の中にある事なるを。推量りて云也。

文脈　語脈

文脈とはつらねもてゆく文章のすぢをいひ。語脈は語のかゝりゆくすぢをいふ。此すぢの續きて。事の意を貫き通すこと。人身に脈ありて。體中を貫き通れるがごとし。又伏線の條理を。脉といひたる所もあれど。そは別事也。

首尾

事の始と終と也。これは首尾あひかなひて結ぶ所をいふことなれば。正しくは首尾相應などいはではかなはぬことなれど。暫くいひならへるに隨ひて。首尾とのみいふ。これより下は。舊注どもにいはれたる名目のまゝなり。

類例

其事其語の比例に。他し書の語。また歌などを引出たるを。類例といひならへり。これは注法の目也。

用意

これは作者の意を用ゐて。事におりたちてさまよくとりなしあつかふ事を。いひならひたりたとへば。空蟬君のさまよくもてつけたるありさまを。用意ありなどいへる。用意のごとし。

草子地

物語の中なる人の心詞ならで。他より評じたるごとき所を。草子地といへり。これは物語かたる人の語にとりなしたる作者の語也。その中に草子地ながら。しばらく其物語の中の人の心になりていふ所あり。また物語の中なる人の詞ながら。實は草子地よりいふ所あり。思ひわかつべし。

餘光　餘情

餘光はにほひと訓む意にて。文外に打にほひ

て。いひしらぬ味ひあるを賞ていふ語。餘情は其事竟たるに。猶かぎりなきあはれの含まりて聞ゆるをいふ。このふたつは共に形なき事なれど。言外ににほひ餘りたるいみじさを評ぜんために。とり出たるのみ也。

此外にもなほあめれど。今は其大むねをのみ擧つ。他は准へてもさとるべし。

本文譯注凡例

一此物語の本の事は。玉小櫛に云。本はむかし河内本といふと。青表紙といふと。大かた二やう有しとぞ。其中に定家中納言の本なるをもて。ちかき諸抄。なべてよきあしきをいはず。ひたぶるに青表紙のかたをとられたるさまなるはいかにぞや。いづれの本にまれ。よきあしきにつきてこそ。とりもすてもすべきわざなれ。かならずそのぬしによりて。さだむべきにはあらざるをや。といはれたる。まことにさること也。かくて青表紙のかたおこなはるゝにつけて。河内本はおのづから世にもてはやさずなりし故にや。それとおぼゆばかり異りたる本も。今世には見へず。但し紹巴抄といふ物には。青表紙中比斷絶のやうなりし。といへる事あり。さらば中比は。むねと河内本を用ゐしにや。さればもしくは今世に傳れる物の中に。河内本といへるもあるにや。そはともあれかくもあれ。さしたる異本とてはあることなし。然れども。すこしづゝの事は。かたみによきあしき所あれば。今此本文は。互に校へ合せて。そのよろしき方にしたがひて定めつ。其本どもは萬水一露。湖月抄の本をはじめて。別におこなはるゝ板本五部ばかりに。古き寫本二三部を校へ合せたるに。玉小櫛に校正せられたると。餘滴にをり〳〵引出たるとを。あひまじへて用ゐつ。なほひろくあさりもとめなば。よき本どもゝあるべからめど。おのが見ぬをばいかゞはせん。後の人なほよく校へ正すべし。

一校へ合せたる本文は。余がよしと思へる方にのみ從ひてものしつれど。彼此ことわりのたがはぬ所は。異本のかたをも右旁に注して。イ云々とするしつ。されどまさしく誤れりと見えたるは。わづ

らはしくてさらに注せず。さてまた。りとると誤れる類は。いと多ければ。そこにかなへるかたをのみとりて。わろきかたはかいやりつ。又侍給などの。りふなどの辭は。古き寫本どもには大かた省ける例と見へたれど。これによりて竟にはてにをはの格をさへ誤りて。意のきこえぬ事も出來しさまなれば。今は悉く加へてかきたり。これは古へざまにはあらざれど。しか誤らんよりはまさりたれば也。

一本文に脫たる語ありと見えて。とにかくに義の貫かぬ所には。かりに［　］かくのごとき標をいれて。釋に其ゆゑをことわりつ。又衍りて加はりたりと見ゆるもじにはしばらく「」かくのごとき標を圈みて。さながらに其字を省き。又かならずなくてはえあらぬ語の。脫たりと見ゆる所には。試に其語を補ひて。()かくのごとき圈の中に記しつこれら皆やむことをえぬしわざ也。

一假字は大かた古へに隨ひてあらためたり。其中に梅をむめ。馬をむま。諸をむべなど。いにしへ。うといひし發語を。むといふ類は。此物語かゝれたる頃も。既にしかかけりとおぼえて。和名抄其餘のものにも。むとあるかた多し。此物語は。既に訛り頽れたる音便の詞。また字音の語などをも。さながらにかゝれたる例なれば。これらも皆むめむまとやうに。むとかくべきことわりなれど。さては初學の輩の見てまどふべきくさはひともならんかとて。猶うとかける類これかれあり。これらは作者の意にさへたがふ事とはおもへれど。此書は初學のためにとて。本文をだに譯して注せるほどのことなれば。これはたやむ事を得ぬしわざ也。また語の清濁も大かた古へに隨ひて點をくはへたり。されどもまれに知れがたきは。多くは清音のまゝにしてさしおきつ。

一爾有米里をなんめり。何止をなんど。有辨伎をあんべいなどいふ類は。みな音便にくづれたる語なれど。此物語はその世の俗語のまゝにかゝれたる例なれば。初よりかゝりしにこそ。されば今はた聊も改めず。さて書ざまは。なめり。など。あべい。と書たるを。んを加へてよみならひたり。これは其世の詞つきを失はじとてのわざと見ゆれば。

片假字のンを加へて。そのよみざまをかつ〴〵しるしつ。されど後々に至りては。わづらはしくて皆はぶきたり。いづれもンを加へたる心によむべし。此類なほ多し。准へてしるべし。さてまたうれしくかなしくなどのくを。うれしうかなしうなど。うと書たる。これも音便の語なるを。諸本たがひにまじへて書たれば。今改るにおよばず。語調のよろしきにしたがひていづれにもしるしつ。

一本文の左旁に譯語をものせることは。いと〳〵俗びたるしわざにて。識者のおもはんこともかがやかしけれど。此物語をよむ人ごとに。雅言の耳遠くて。事の意を辨へがたしといふによりて。此書を講ずるをりなどに。いさゝめに其語の意を。本文の旁に記しつけたるを見て。かくてはいとたよりよし。といふ人のおほかるゆゑに。其本のままに彫せつるなれば。もとより識者に見すべきものにはあらず。たゞいとうひ學びの輩。さては女童などの。ふと見て。やがて解りつべきくさはひにもと思ふばかり也。さはあれど。千年にちかき雅語を。今世の俗語に譯しとりて。決く其意にかなへんことは。先達もいへるごとく。なかなかに容易からぬわざなれば。つとめて先達の譯されたる旨にもとづきて。余が考をもくはへたれど。猶言の意の異なること多くして。全く相當らぬ事どもゝあり。故相當らぬ所には。雅言一語に。俗言を二語づゝならべて擧たり。其語の意を互にとりまじへてさとるべし。さても猶譯しがたき所はたゞに某々のこと也。とやうに注せり。さて又漢字をも交へて譯したるは。いと逆なることわりなれど。今世は。なべてこの漢字のこゝろもて。よろづを通ずる事多ければ。大かたに知らるべきかぎりは。約やかなるをせんとして。かつ〴〵注しつけたる也。これはたなべて。俗に用ひなれたるもじして注せれば其字の本義には。たがへる所々なきにしもあらねど。正しく相當る字して注する時は。却て初學のさとりがたき事も多ければ。これもやむ事を得ずてなん。されど餘りにたがへることゞもは。いさゝか心しらひして記しつ。また本文の右旁に注したるは。いづれも其字の音なりとしるべし。

一此物語を講說せんとするには。雅言と俗言とあひかなふべきやうを。初よりよく〳〵思ひ定めて物せざれば。釋く人の意と。聽く人の意と。いたくたがふことありて。うまくその文の意を。傳へ受ることあたはず。此はおのれ年ごろ試みてさとれる事也。さる事の爲には。此譯し語ども。いさゝかやうあることもあるべきにや。これはついでにいふのみ也。

一此物語の文章は。みづからさかしだちたるをいとひて。よろづおほどかにものせられたる故にや。彼と此と事のかはりたる所に。きはやかなるけぢめなくして。ふと見ては一つゞきなる事のやうなる所あり。またその文語も。うらうへに打かへして。語勢をあやなされたる所々多く。なほざりに見ては。意の聞えかぬることゞもあり。又かならず前にいふべき事を。いつも〳〵後へまはして。其事と聞ゆるさまにかゝれたる所おほく。甚しき所は。紙一ひら二ひらを過ても。猶何事ともさとりがたき事どもおほし。これらあだし物語どもとは。こよなくすぐれたる所にて。文章の法とするにたれり。然れども。初學の輩のこうずることとなれば。今假にその標をつけて。其おもぶきを示さんとす。これはた漢文の例にならひたる事多けれど。はやく新釋に物せられたるにしたがひて。事をましくはへつ。其例どもこゝに擧るがごとし。

⌐大段落の標

一事を全く語り竟たる界に。此標をものしつ。

⌐小段落の標

一事のしばらく竟たる所の界などに。此標をものしつ。されども皇國言のふみは。漢文のごとく。きはやかに分るゝことなき所もあれば。これはたゞ大かたの標と心得べし。次なるも同じ。

◎彼と此と事を分つ標

彼と此と。自と他と。事のかはる所。又問答のまぎらはしき所。また此事をしばらくさしおきて。彼事を挿みたる所などの界に。かゝる點を加へて標とす。

◎◎◎◎眼目の語の標

これは漢文に。字眼などいへるにひとしく。其所にむねとある語。或は殊更に多くつかひて。

けしきをあやなしたる語。または伏線の脉を綻ばしたる語などの右旁に。かゝる點を用ゐて標とす。委しくは其所々の釋に。さる故をばことわるべし。

○い　語の清濁の標

濁るかたの點は常のごとし。必清てよむべき語を。俗に濁り來れる語には。○點をほどこして。其清べきよしを示しつ。

㊂助辭發語の標

助辭發語のまぎらはしきには。左旁にかゝる點をしるす。

『」弖爾乎波の首尾の標

これはいはゆるてにをはの係と結との標也。結びたる所の紛らはしきは。かやうの點を右旁にしるす。これに依て語脉を見明らむべし。これいと要あること也。

||　語脉轉倒の標

語の脉を上下に轉倒して。文勢をなしたる所。のまぎらはしきには。かくのごとき點を右の旁に引て。其語の脉を示す。この點のきれたる所を繼て心得べし。たとへば。桐壺卷のはじめに。母北の方なん。いにしへの人のよしあるにて。㊙おやうちぐし。さしあたりて世のおぼえはなやかなる。御かた〴〵にもおとらず。何事のぎしきをも。㊂もてなし給ひけれど云々。とある處などは。いにしへの人のよしあるにて。何事の儀式をもてなし給ひけれど。とつゞく語脉なる中に。おや打ぐし云々の事を挿みて語る法なり。されば此點をつぎて其意をさとるべし。又北方なんとあるなんは。もてなし給ひけれど。とある所結にて。つねにはけるといふべきを。れと轉じ。どゝうけてつゞけたる也。されば『」かゝる點をつけて。其首尾を知しむ。又よしあるにてとある。にての辭は。正しくはもてなしへ係る脉なる事を。知しめんとて。(甲)(乙)の點を左旁に標しつ。餘はこれに准へてしるべし。猶語脉のまぎらはしき所には。||かく二筋の點を引そへて。そのすぢを詳にす。此は殊に心をつけて見わかつべし。大かた此物語の聞えにくき所々は。此法をしらずして。よのつねの書

をよむがごとく。たゞにおしつゞけてよまんとするからに。事の意の辨へがたきぞかし。されば殊によく心得おくべき也。

(甲)(乙)(丙)(丁)隔句文脈の標

これはいはゆる隔句法の遠く係りたる所にて上より受たる文脈をしらしめんために。係りて斷たる下に(甲)をしるし。受て繼たる所に(乙)をしるしつ。この點を引合せて。其文の係りたる意を解るべし。二重にも三重にも句を疊みたる所には。(丙)(丁)(戊)(己)などゝ記して。其脈を分つ。

△ ﹂ 語意を補ふ標

いひ切たる語の末に。含めのこしたる意。又今世にては。必意を加へてきくべき所などに。其意を左旁に注するに。他の譯語と紛れじがために。かゝる點の中にしるしつ。この中なる語の意を挿み補ひて。そこの文を解るべし。いと長き意の含まりたるは。別に頭書の釋に其故をいへり。

右の外にも。聊づゝの注例あれど。そは准へてもさとるべし。舊印本などに。人々の心詞の所には。某心。某詞としるし。草子地には。地としるす類は。いづれも改めず。引歌の所に。〳〵かゝる點をかくる事も。湖月抄の例にならへる事ども。上條にいへるがごとし。

校正譯注源氏物語評釋首卷 終

第一帖 桐壺 評釋

〔舊注〕此卷の名はすなはち此卷に御つぼねは桐壺なりといへる詞をもちて名付たる也一名は壺前栽といふ是もおまへのつぼせんざいのさかりなるをとある詞によりてなり云々

〔新〕こを卷の名とせしは此卷に光源氏君の母御息所の局をきりつぼ也といひ且專ら此御息所の事をいふ卷なれば也或抄に壺前栽とも名づけしといふはおまへのつぼ前栽てふ詞のあればなりされど桐壺こそことにわたりて聞ゆれ○惣て此物語は紫式部の在し御時の樣を書たるもの也されど前代の帝の御名をあげ其外の人々の樣をも今の一人にあたらぬやうにかきなしたるは罪をのがれんとて也さてこのほどは帝の御いきほひやゝおとろへゆかせ給ひ臣下の權のみつよれるをうれへてひそかに帝の御いきほひつよりまさんずる心がまへを書たりと見ゆそのよしは次々にいふべし

〔玉〕源氏君生れ給へるより十二歳元服の事まで見えたりかくて卷の末におとなになり給ひて後は云云とあるを花鳥餘情に此詞に十三歳十四歳十五歳三箇年の事をばこめて帚木卷は十六歳也とあり今思ふにしからずおとなになり給ふとは元服しておとなの形になり給へるよしなりこれに三年こもれりとはいふべからずなほ下の文にたゞいまはをさなき御ほどにつみなくおぼしなして云々とあるにてしるべしされば此卷は十二歳までにて帚木へ年立はつゞかざるなり伊勢物語にむかし男うひかうぶりしてと書出せるも業平朝臣の成人のはじめを先いひおきてさて奈良へ下られたるは其後いつにても有べきがごとく此物語も此卷にまづ元服までを書おきてさて年立は帚木よりつゞけたる也桐壺卷は序文までもいひたらずといへる說いはれたる事なり

〔釋〕この桐壺の一卷は源氏君の本傳なりされば初に御父帝の御母更衣を寵し給ふ事より源氏君の生れ給へる事を擧さて末に御元服ありて源の氏を賜ひて御臣の列にいり給へること又當時の右大臣殿の婿になりてその里亭にすみ給ふよしまでを擧たる也故帚木より次下なる卷々とは年立もつゞかず

たゞ此卷のみもてはなれたるなればさるこゝろして讀べし

(評)此物語の筆づかひのいみじきとはいふもさらなれど此卷は初の卷なればにやことにいみじき所所おほし先最初に帝の更衣を寵し給ふ事の甚しきよしをいひおこして次々に人のそしり恨のおこるさまをいひさてそのうらみねたみの故によりて竟に更衣は病となりてうせ給へるよしをいへるは或人もいへるごとく源氏君の孤と也給へる事をいひて見ん人のあはれの深くかゝるべき程としたるなるべしさて其次に更衣の身まかられたるを帝の深くをしみ歎かせ給ひて更衣の母北方のかたへ靫負の命婦をつかはされたる所又命婦がかへり參りたるところの一段は殊に語をえりとゝのへて文づらをはなやかに心をかなしく書なされたりその中にをりからのけしきをかゝれたるなどはさらにいとめでたきに其法おごそかにみだれずしてかなしびをそふるひゞきとなれるさまかけても及ばぬ筆つきといふべしさてそこまでは上に楊貴妃のためしと書出られたるより白氏文集なる長恨歌をしたににほはせてかゝれたるに其脉つゆもみだれずかつ彼にはよりながらいづこも〳〵其語の意をとりかへて新らしくめづらしく書なされたるなど卷々の引歌の法と同くして文章の餘韻となりたるえもいはれずめでたしさて末にいたりて源氏君の傳にうつりその容貌と才藝とのいみじくめでたきよしをいふ中に高麗の相人に見せ給へるとをいひて一世のほどにあるべき事を先いはせたるなどぬけ出たる書ざまといふべしこれなん一部のおもふきを思ひ構へられたることのはじめなりけるさて其後元服し給ひて其夜右大臣殿のむこに成給へる事をいへるはやう〳〵おとなになり給へることをしらせたるにて此卷の事のすぢこゝに終れりさる中に藤壺中宮の傳左右大臣の傳弘徽殿女御の事東宮の御事頭中將葵上の事など插みあらはして末の卷々の源因とせられたるなどいとも〳〵透間なきもの也おほかた卷中の人々の事は源氏君の御族の一とも藤壺中宮の一とも左大臣頭中將の一とも右大臣弘徽殿女御の一ともにて其餘の人々は皆それに屬たるがごとき人々也さればそのむねとあるかぎりを

ばみな此巻に引出て末の巻の基とせられたる法いとおごそかにめでたしさて巻末にいたりてふたゝび光る君といふ名の事をいひてとぢめられたるにてこの巻は此君の本傳をむねとかゝれたることもおのづからあらはれてかぎりなくあぢはひふかし大かたかゝることは先達もをり／＼注せられたることあれどさしも委しくいはれたるもなければをこがましけれどさし出て評ずる也見ん人意の過たるを思ひゆるしてよ

いづれのおほん時にか
〔玉〕此物語はすべて作り物語にて今世にいはゆる昔ばなしなりさる故に昔いづれの御時にかありけんかゝる事の有しといへるにて此詞一部にわたれり云々

女御更衣〔花〕女御は后につげる女官也更衣は女御よりは次の人なり云云

いとやんごとなきゝはにはあらぬが
〔釋〕或説に源氏君はよきをたつくしてかけるなれば御母も大臣家の女などにつくりなすべきをやんごなききはならぬとあるはしばらくおさへて見る人にあはれと思はせんとて也末に帝のわたくし物にかしづき給ふなどある皆其意也といへり此説しかるべし

ときめき給ふありけり
〔評〕時めき給ふ更衣ありけりなどはかゝずしてそれより下らうの更衣たちはといふ所にて更衣と知しめたるいみじき筆づかひといふべしかやうのこと次々にいと多し心得

いづれの御時にか。女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に。いとやんごとなききはにはあらぬが。すぐれてときめき給ふありけり。はじめよりわれはと思ひあがり給へる御かた〴〵。めざましきものにおとしめそねみ給ふ。おなじほど。それより下らうの更衣たちは。ましてやすからず。あさゆふの宮づかへにつけても。人の心をのみうごかし。うらみをおふつもりにやありけむ。いとあつしくなりゆき。もの心ぼそげにさとがちなるを。いよ〳〵あかずあはれなるものにおもほして。人のそしりをもえはゞからせ給はず。世のためしにもなりぬべき。御もてなしなり。かんだちめうへ人なども。あいなくめをそばめつゝ。いとまばゆき人の御おぼえなり。もろこしにも。かゝることのおこりにこそ。世もみだれあしかりけれ。とやう〳〵あめのしたにもあぢきなう。人のもてなやみぐさになりて。楊貴妃のためしもひきいでつべうなりゆくに。いとはしたなきことおほかれど。かたじけなき御心ばへの。た

おくべし

はじめより〔玉〕もとよりといはんがごとし

うらみをおふつもりにや

（釋）人の恨の我身にかゝる事を物を引負ふになぞらへて負といへる也さて恨をおひてとやかくや心を苦しめたるが積りて竟に病がちになり給へる意なり

さとがち〔新〕さとにすみがち也

いよ／＼あかず云々（評）人の妬むによりて里にすみがちなれば逢給ふを遠くしていよ／＼飽ずあはれにおぼえ給ひつゝ竟には人のそしりをも憚らせ給はぬ也げに人情はさるものになんありける此脉次々にますます甚しくなりもてゆく樣よく／＼心をつけて味はふべし

世のためしにもなりぬべき〔新〕末に楊貴妃にたとへんの本之

めをそばめつゝ〔新〕あしくきらはしき物を見る時のさま也長恨歌傳に京師長吏爲レ之側レ目といふにもよりしならん

ぐひなきをたのみにてまじらひ給ふ。ちゝの大納言はなくなりて。はゝ北のかたなんいにしへの人のよしあるにて。おやうちぐし。さしあたりてよのおぼえはなやかなる御かた／″＼にもおとらず。何事のぎしきをも。もてなし給ひけれど。とりたてゝはか／″＼しき。御うしろみしなければ。ことゝある時は。なほより所なく心ぼそげなり。さきの世にも御ちぎりやふかゝりけん。よになくきよらなる。たまのをのこみこさへうまれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて。いそぎまゐらせて御覽ずるに。めづらかなるちごの御かたちなり。一のみこは。右大臣の女御の御はらにて。よせおもく。うたがひなきまうけの君。と世にもてかしづき聞ゆれど。この御にほひには。ならび給ふべくもあらざりければ。おほかたのやんごとなき御おもひにて。この君をばわたくしものにおもほしかしづき給ふ事かぎりなし。㊂母君はじめより。おしなべてのうへみやづかへし給ふべききはにはあらざりき。おぼえいとや

（評）桐壺帝の更衣を寵し給ふことをそのかみ專ら行はれたる長恨歌に依て巧みに書なさんとの結構なる故にこゝに初てかの傳の文をにほはし出られたる也されども彼にはすこしも拘らずしていと新しくめづらかにとりなされたる事次に評ずるがごとし

もろこしにも　（評）これ即チ楊貴妃の事を初めて綻ばし出されたるにてはるかの下に人のみかどのためしまでひきいでつゝさゝめきなげきけりとある首尾也心得おきてよむべし

天の下にもあぢきなう　〔玉〕天の下の人もあぢきなき御しわざとするよし也 或抄云はじめに女中のねたみをいひ次にかんだちめうへ人といひこゝに天の下にもといへり（評）この或抄の說げにいと委しく心得たりと云べし作者の心ありし事末にてしられたりそこにいふべし

はしたなき事おほかれど　〔玉〕こゝは更衣の身に受る方よりいへり

父の大なごんはなくなりて　（評）更衣の父按察大納言の事を何となき物語の中に挿みて說出されたりかくてその委しき事は 更衣のうせ給へる後に著されたりこの文法卷々におほし心得おくべしこゝよりは更衣の心づかひの苦しきありさまを委く說はじむる也

はゝ北の方なん云々よしあるにて　（釋）なんはもてなし給ひけれどゝあるけれにて結びて どゝ受たる格なりいにしへの人のよしあるにてはいにしへのよしある人にてといふ意也小櫛ににては下のもてなし給ひけれどゝいふへつゞく詞也とあり標の點にて心得べし

御契やふかゝりけん云々　（釋）帝と更衣と前世の御宿緣やふかゝりけん淸らかなる御子を生給ふといふ意也さへといへるは 男御子なる故に殊にめでたき意にていへる也

いつしかと云々　（釋）御產は更衣の御さとにてあるなれば帝の何時歟生れ給ふとやうに心もとなく 待遠におぼしめしける故に急ぎまゐらせて御覽ずるなり

一のみこは云々　（釋）帝の第一の御子也後に朱雀院と見えたる御事也 右大臣の女御は右大臣の御女の女御といふ意也卷中弘徽殿とある御方なり（評）主客の法を設けて初めて朱雀院の 御事を書出せりこれやがて源氏君の方と弘徽殿の方と反對して御中のよからぬ事を語る最初の筆なりさて一のみこの御勢ひのいみじきことを 揚いひて却てそれにもまさる若宮の御寵愛の甚しき事をいへる抑揚いとめでたし

まうけの君　（釋）春宮の御事なり

御にほひには　（釋）にほひは容顏のうつくしくめでたきをさしていへるなり

わたくしものに　（釋）帝の私物として格外にかしづき給ふといふ意なり 下に見えたる御着袴御元服の式などのよのつねに越たるさまなど皆私物のうちなり心をつくべしかしづきは尊ふかたより轉りていたはるにもいへり

母君　（釋）一本によりて補ふ此詞なき本はわろし小櫛の說なり

おしなべての上宮づかへ　〔細〕女御更衣は別殿に伺候して時々こそさふらふべきを 此人は典侍などのやうに御前さらずめしまとはせはかへり

むことなく。上ずめかしけれど。わりなくまつはさせ給ふあまりに。さるべき御あそびのをり／＼。なに事にもゆゑあることのふし／″＼には。まづまうのぼらせ給ふ。ある時はおほとのごもりすぐして。やがてさふらはせ給ひなど。あながちにおまへさらず。もてなさせ給ひしほどに。おのづからかろきかたにも見えしを。この御子生れ給ひてのちは。いと心ことに。おもほしおきてたれば。坊にも。ようせずは。このみこのゐ給ふべきなめり。と一のみこの女御は。おぼしうたがへり◎人よりさきにまゐり給ひて。やんごとなき御思ひなべてならず。御子たちなどもおはしませば。この御かたの御いさめをのみぞ。なほわづらはしく。心ぐるしう思ひ聞えさせ給ひける◎かしこき御かげをば。たのみきこえながら。おとしめ。きずをもとめ給ふ人はおほく。我身はかよわく。ものはかなきありさまにて。なか／＼なるもの思ひをぞし給ふ◎御つぼねはきりつぼなり。あまたの御かた／″＼をすぎさせ給ひ

てかろ／″＼しきなり〔花〕すけ内侍などのごとく朝夕に御前にしこうするを上宮仕といへり

(評)此段立かへりて更衣の御寵愛のさまをいひてさて若宮をうみ奉玉へる後の事に及べり

上ずめかしけれど〔新〕今昔物語の古本に貴人を上衆とかき下賤をば下衆と書り時の俗語也(釋)今俗にも上しうなどいふ也さて上衆めきてはあれど輕きかたに見えしとつゞく意の文中に其輕く見ゆるゆゑを挿みてことわる也此法巻中に多し

まつはさせ (釋)絲の物に纒はるゝごとく御側に引つけて放ち玉はぬ意なり

まうのぼらせ玉ふ 〔玉補〕森嘉基云給ふは給ひと有しを誤れるなるべし

おほとのごもり過して 〔湖師〕長恨歌に 春宵苦短日高起とある心なり

やがてさふらはせ玉ひ 〔玉〕更衣を

爾雅釋宮ニ宮中衖ヲ謂二之壼一ト郭注巷閤間道ト云々

局へ退らしめず翌日もそのまゝ御前にさふらはしめ給ふなり
いと心ことに（釋）若宮生れ給ひてよりは更衣をも格別に思しめす也
坊にも〔孟〕東宮坊職員令（釋）天位を嗣給ふべき皇太子のおはします宮を東宮坊といふ
一のみこの女御（釋）一の御子の御母女御といふを略きていへるなりすなはち弘徽殿の女御なり
人よりさきに參り給ひて〔湖〕弘徽殿女御は餘の女御更衣よりさきに入内ありて朱雀院一品宮前斎宮などの御母なれば帝の御思ひやんとなかりしなり（評）坊にもようせずはといふより下源氏君の方と御中のよかるまじき事のよしをいへるついでに帝も弘徽殿をば憚らせ給へる事を擧て弘徽殿がたの御威勢の爭ひがたきさまをあらはせり此脉やう〳〵にすゝみゆく文勢に心を付べし
きずをもとめ（釋）きずはあやまち也漢書の吹レ毛求レ疵といふ語に依てかくかゝれたるなるべきこと舊注のごとくなるべしあやまちを求め出して恥をあたへんとする意なり（評）此段恨をおふ事のます〳〵深くなりゆきてつひにうせ給ふべき事のすぢをいよ〳〵すゝめもてゆく也
なか〳〵なる物思ひをぞし給ふ〔細〕此物語なか〳〵といふ詞いづくも妙なり云々　御寵愛なくばかやうにはあるまじきをこれゆゑに中々なる物思ひもあるとなり
御つぼねはきりつぼなり（釋）帝のおはします清涼殿の丑寅の方にある淑景舍を桐壺といふ　御つぼに桐を植られたりとぞそこに更衣の御局はあるなり（評）殊更に御座所より遠き桐つぼをとり出たるはあまたの御方々の恨をかされんとての結構なるべし　作者の用意いとこまやかに巧なり
あまたの御かた〴〵を〔花〕弘徽殿麗景殿宣耀殿などを過てゆく馬道つゞきなればあまたの御かた〴〵を過させ給ふとはいへり
御まへわたり（釋）あまたの御かた〴〵の前を更衣のわたりて清涼殿へ上り給ふをいふ舊説はひがことなり
げにことわりと見えたり（評）この語は作者の自評なり更衣の時めき給ふさまを強く聞せたる筆づかひいといみじ
うちはし〔細〕きり馬道に板を打わたしてかよふみち也
わたどの（釋）彼此の殿の間に打わたして建たるを渡殿といふ今世につり屋といふ物のごとし
あやしきわざをしつゝ〔湖〕けがらはしき物をまきちらして更衣をおくりむかへの女房のきぬのすそをよごしゝなるべし
めだうの戸をさしこめ〔新〕和名抄に辨色立成云馬道俗音米多宇向レ堂之道也と書りこゝは外へよきさくるかたなき馬道なり　さてその馬道の所々をさへきる妻戸を閉ぢてかなたにてもこなたにても心得てひらかぬ也云々
はしたなめ〔玉〕はしたなからしむるにて更衣を迷惑せしむるをいふ
後涼殿〔花〕御殿の西にあたれる殿なれば堂の御所にちかき也俊成卿云こうらうでんとよむべし　假字がきの物を正字のごとくよめばこは〳〵

しき也云々

うへつぼね 〔玉〕つれの局の外に御座所ちかきあたりに別に休息所にまうけたる局なり

そのうらみましてやらんかたなし （釋）やらんかたなしははらし遣る所なき意にて皆更衣の身に負ひ給ふと云こゝろ也（評）此段更衣の思ひわびたるを御覧じていとゞあはれのかゝりゆく情げにさも有べき也さゝくて又恨をおふ事一段ふかくなりにけり

一のみやの奉りしにおとらず （釋）一宮の御着袴の時奉りしに劣ずといふ意也のもじいとめづらしさてこれは非例のことなれど御おぼえの殊なるがゆゑにかくは有にて前に私物にとありし脉なり

くらづかさをさめどの （釋）内藏寮納殿也共に御寶物など納めおくところなり

えそれみあへ給はず （釋）更衣を憎しと思ふ御かた〴〵も若宮をばしひて得嫉みあへ給はずと也あへは

つゝ。ひまなき御まへわたりに。人の御心をつくし給ふも。げにことわりと見えたり。まうのぼり給ふにも。あまり打しきるをり〳〵は。うちはしわた殿。こゝかしこのみちに。あやしきわざをしつゝ。御おくりむかへの人の。きぬのすそたへがたう。まさなき事どもあり。又ある時は。えさらぬめだうのとをさしこめ。こなたかなた。心をあはせてはしたなめわづらはせ給ふ時もおほかり。事にふれて。かずしらず。くるしきことのみまされば。いといたう思ひわびたるを。いとゞあはれと御らんじて。後涼殿に。もとよりさぶらひ給ふ更衣のざうしを。ほかにうつさせ給ひて うへつぼねにたまはす。そのうらみましてやらんかたなし□このみこみつになり給ふ年。御はかまぎの事。一の宮の奉りしにおとらず。くらづかさ。をさめどのゝ。ものをつくして。いみじうせさせ給ふ。それにつけても。世のそしりのみおほかれど。このみこのおよずけもておはする。御かたち心ばへ。ありがたくめづらしきまで見

強てすることにて敢字の意也あへずはその反にて不レ敢なり

物の心しり給ふ人は　（釋）御かたがたの中にも物事の情をよく思ひわきて知給ふ人は却て賞歎き給ふとの意也なりけりは深く歎息したる辭なりさてかくいふは源氏君のかたちも心もすぐれてめでたきよしを語り出るにて仇なふ人もめで奉るとまでいへるなり猶下にもあり上に玉の男御子と書出たる詠也心得おくべし

そのとしの夏　（評）上の段に恨みのつもりたる事をいひ置てこゝに至りて竟に病を引出給へるさまにかきなされたり是より下は帝の御寵愛の進みゆく方を主とあらはしたり

みやす所　（玉）此物語の例をもて考ふるに細流にも注せられたる如く御子をうみ奉り給へば御息所と申せりさてそは女御更衣などの外に別に此所あるにはあらず女御更衣などにわたれり云々

え給ふを。えそねみあへ給はず。ものゝこゝろしり給ふ人は。かゝる人も世にいでおはするものなりけり。とあさましきまで。めをおどろかし給ふ□そのとしの夏。みやす所はかなきこゝちにわづらひて。まかでなんとし給ふを。いとまさらにゆるさせ給はず。としごろつねのあつしさになり給へれば。御めなれて。猶しばしこゝろみよ。とのみのたまはするに。日々におもり給ひて。たゞ五六日のほどに。いとよわうなれば。はゝぎみなくなくそうして。まかでさせ奉り給ふ。かゝるをりにも。あるまじきはぢもこそ。と心づかひして。みこをばとゞめ奉りて。しのびてぞ出給ふ。かぎりあれば。さのみもえとゞめさせ給はず。御覽じだにおくらぬおぼつかなさを。いふかたなくおぼさる。いとにほひやかに。うつくしげなる人の。いたうおもやせて。いとあはれと物を思ひしみながら。ことにいでゝも聞えやらず。あるかなきかにきえいりつゝものし給ふを御覽ずるに。きしかたゆくすゑおぼしめされず。よ

まかでさせ奉り給ふ　〔新〕落着をまづいひて其事のさまを次々にしろす文の一つなり

あるまじきはぢもこそ

〔湖〕あまた妬む人あればなり

みこをばとゞめ奉りて

〔玉〕源氏君もともに退出給はんには人のよくしろべき故にひそかに人のしろまじきさまにて更衣のみ退出なりそは人のひろく知てはれためろ人々のしわざにて恥がましき事などもあらんかとてなり

かぎりあれば　〔湖〕別をゝしませ給ふもその限りあればなり

いとにほひやかに云々　〔新〕こゝは御休所の御ありさまをいとよく書とりたり

あはれと物を思ひしみながら

〔新〕今はかぎりと思へば御なごりをも御子の御事をも思ひしみて奏しおくべき事多かるべきなり

あるかなきかにきえ入つゝ

〔釋〕氣息のあるかなきかに消かへりてをはするさま也氣息と云ずし

ろづの事を。なく／＼契りのたまはすれど。御いらへもえ聞え給はず。まみなどもいとたゆげにて。いとゞなよ／＼と。われかのけしきにてふしたれば。いかさまにか。とおぼしめしまどはる。てぐるまのせんじなどの給はせても。又いらせ給ひては。さらにえゆるさせ給はず。（〔湖〕死る道をも諸共にこそと契らせ給ひしと也）かぎりあらんみちにも。おくれさきだゝじ。とちぎらせ給ひけるを。さりともうちすてゝはえゆきやらじ。との給はするを。女もいといみじと見たてまつりて。

かぎりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきはいのちなりけり。いとかく思ひ給へましかば。といきもたえつゝ。きこえまほしげなることは。ありげなれど。いとくるしげに。たゆげなれば。かくながらともかくもならんを。御覧じはてむ。とおぼしめすに。けふはじむべきいのりども。さるべき人々うけたまはれる。こよひよりときこえいそがせば。わりなくおもほしながら。まかでさせ給ひつ。御むねのみつとふたがりて。つゆまどろまれず。あかし

てそれと聞しむるは文詞をいやしくせじとてのわざなるべし

きしかたゆく末おぼしわかれず　（釋）俗言に跡先の分別もなくといふ意なりいたく惑ひ給ふさまなり

われかのけしきにて　〔孟〕我か人かなどゝうたがふほどによわき心なり

いかさまにかと　〔玉〕俗言にこれは何とせうぞといふ意なりまどはるといへるにてしるべし

てぐるまのせんじ　〔河〕てぐるまは石階の高き門よりのぼる中の重を出入のためなり中重の輦車とも云なり〔和秘〕輿に輪をかけて手してひく車をいふなり内裏の門の内などをのるなり更衣重病なれば輦にのりて退出あるべきよしを仰らるゝ宣旨なり

又いらせ給ひては　〔湖〕更衣の局へ帝入らせ玉ひて御覽じては猶別れがたく思しめすなり

さりとも打すてゝは　（釋）さりともは然有ともなり病をさして然とはのたまへるなり〔玉〕ゆくは死てゆくなり上の語次の歌にて知るべし（評）こゝの御詞いといとせちにあはれにて鬼神もおしのごひつべくなん

かぎりとて云々　〔新〕右のかぎりあらん道にも云々といふをうけてさは契り奉りしかど命はおの〳〵のかぎり有て別れ奉るがかなしきにいひさて云々とてもかくてもいきたきものは命にてこそあれとなり〔玉〕拾遺にいへるごとく生に行をかれたり但し行のかたはたゞわかるゝ道といへる緣のみにて歌の意は生なり

いきもたえつゝ云々　（釋）息もたえつゝは絶つ〳〵して未絶ざる意なればたえ〳〵にてといはんがごとし（評）いとかく思給へましかばといふ下に哀しおくべき事は多かりしをと後悔の意を含めたるにてかぎりもなくあはれに聞えたり又聞えまほしげありげくるしげたゆげなど殊更に四つのげもじを重ねたるは皆他より推量りたる更衣のありさまなればなりいと〳〵くはしくめでたしといふべし

けふはじむべきいのりども　（評）いのりの事にて限りなき御別れのわりなきを交きりたる書ざまいとらう〳〵しくあざやかなり

御使のゆきかふ　〔拾〕〔新〕行歸なり萬葉に往反とかけり

よなか打過るほどに　〔玉〕これは更衣の里の人々のいへる詞を御使のきゝたるところをいふなり

こもりおはします　〔抄〕夜の御殿などへ引こもり給へるなるべし

みこはかくても　〔玉〕御母更衣はうせ給ひてもの意なり

例なき事なれば　〔細〕七歲已前の人服忌の事醍醐の御代に法をたてらるゝ事兩度改れり是ははじめ七歲已前の人も服のいみあるべしと有し時の分にかけるなり

あやしと見奉り給へるを　〔玉補〕こゝに脫あるべしと故大人にさきに聞たるを小櫛にはもらされたり（釋）をもじ下に係る所なし　もしくは衍文か（評）この語かなしひの情を盡したり打よむ者の腸を斷るゝこゝちす

かねさせ給ふ。御使のゆきかふほどもなきに。なほいぶせさをかぎりなくのたまはせつるを。夜中うちすぐるほどになん たえはて給ひぬる。とてなきさわげば。御つかひもいとあへなくてかへりまゐりぬ。きこしめす御心まどひ。なにごともおぼしめしわかれず。こもりおはします。みこは。かくてもいと御らんぜまほしけれど。かゝるほどにさぶらひ給ふれいなきことなれば。まかでたまひなんとす。なにごとかあらんともおもほしたらず。さぶらふ人のなきまどひ。うへも御なみだのひまなくながれおはしますを。あやしと見奉り給へる〔を〕。よろしきことにだに。かゝるわかれのかなしからぬはなきわざなるを。ましてあはれにいふかひなし。かぎりあれば。れいのさはうにをさめたてまつるを。はゝ北のかた。おなじけふりにものぼりなん。となきこがれ給ひて。御おくりの女房のくるまに。したひのり給ひて。をたぎといふ所に。いといかめしうそのさはうしたるに。おはしつきたるこゝち。い

よろしき事にだに云々 （釋）此所いたく紛らはしきを諸注に何のさだもなきはいふかしき事なりまづよろしき事にだには新釋に常ざまの事にだになりとある意にて俗言に相應な事でさへと云意なるべしかゝるわかれとは親子のわかれをいへりと聞ゆ然らばよろしき事といふは生ての別をさしたるならんさてすべての意は生たるうちによろしき事にてわかるゝだに親子の別れのかなしからぬはなき事なるにこれはまして死別なればいともあはれにていふかひなしといふ意なるべし

おなじけふりにも云々 （釋）當時の葬はむねと火葬なりしからに煙といへるなり母北の方更衣と同く死んとの給ふをかくあやなしていへるなり〔玉〕こがれは煙の縁の詞をもていへるにて文のあやなり此類多し心を付べし

女房 （釋）房はつぼねにて今いふ部屋の事なり仕へする女の房の事よ

り轉りてつかふる女をすべていふ稱となれるなり今世女中衆といふがごとし

愛宕といふ所　〔河〕桓武天皇平安城に遷都の時此地を諸人の葬所に定めらる延暦遷都記に見えたり

むなしき御からをみる〳〵　〔玉〕これはいまだ葬に出たゝれざるさきにいはれたりし語にてかれてはかくの給ひつれどゝなり

はひになり給はんを　〔釋〕火葬なればかくいへり同じ煙にもとありし脉なり

三位のくらゐ　〔玉〕これは三位のくらゐと書たれば三位は音にてさんゐと訓んぞ物語の詞つきなりける

宣命　〔釋〕贈位の旨をかゝれたる勅語のふみなり〔湖〕大臣勅を奉りて内記に命じて作らしむるよし延喜式に有少納言これをよむと云々

今一きざみの位

〔箋〕更衣は四位女御は三位なり

物思ひしり給ふは　〔釋〕にくみ給ふ人々の中にも物の情思ひしり給ふ

かばかりかはありけん。むなしき御からをみる〳〵。猶おはする物とおもふが。いとかひなければ。はひになり給はんを見奉りて。今はなき人。とひたぶるに思ひなりなん。とさかしうの給ひつれど。くるまよりおちぬべうまどひ給へば。さは思ひつかし。と人々もてわづらひ聞ゆ。うちより御つかひあり。三位のくらゐおくり給ふよし。勅使きてその宣命よむなん。かなしきことなりける。女御とだにいはせずなりぬるが。あかずくちをしうおぼさるれば。いまひときざみのくらゐをだに。とおくらせ給ふなりけり。これにつけてもにくみ給ふ人々おほかり。物思ひしり給ふは。さまかたちなどの。めでたかりしこと。心ばせのなだらかにめやすく。にくみがたかりし事など。今ぞおぼしいづる。さまあしき御もてなしゆゑこそ。すげなうそねみ給ひしか。人がらのあはれになさけありし御心を。うへの女房なども。こひしのびあへり。「なくてぞ。とはかゝるをりにや。と見えたり ☐ はかなく日比すぎて。後

人はといふ意也上に物の心しり給ふ人はとありしすぢにて憎む人の中より貲る方の人をとり出たる文のあや也

さまあしき（釋）きりつぼの更衣一人を寵し給ふ故に他の女御更衣たちはおのづからすさめられたるを様悪きといへる也外見のわろき意也

うへの女房〔玉〕すべてうへとは帝の御あたり近き事にいへりうへつぼねうへみやづかへなどのごとしこれは帝の御前ちかくつかうまつる女房をいへり

なくてぞとは

〔奥入〕「ある時はありのすさびににくかりきなくてぞ人は戀しかりける〔拾〕六帖第五物語「ある時はありのすさびにかたらはで戀しき物とわかれてぞ知るこの歌はありて奥入の歌なし何に出たるにや（釋）案に奥入の引歌はげに疑はしきもの也されども六帖の歌なかへて引出べきにもあらず別にさやう

のわざなどにも。こまかにとぶらはせ給ふ。ほどふるまゝに。せんかたなうかなしうおぼさるゝに。御かたぐの御とのゐなども。たえてし給はず。ただなみだにひぢて。あかしくらさせ給へば。見たてまつる人さへ露けき秋なり◎なきあとまで。人のむねあくまじかりける人の御おぼえかなとぞ。弘徽殿などには。なほゆるしなうの給ひける㊂一の宮を見奉らせ給ふにも。わか宮の御こひしさのみ。おもほし出つゝ。したしき女房。御めのとなどをつかはしつゝ。ありさまを聞しめす〔　〕野分たちて。にはかにはださむき夕暮のほど。つねよりもおぼしいづる事おほくて。ゆげひの命婦といふをつかはす。夕月夜のをかしきほどに。いだしたてさせ給ひて。やがてながめおはします。かうやうのをりは。御あそびなどせさせ給ひしに。こゝろことなる物のねをかきならし。はかなくきこえいづることのはも。人よりはことなりしけはひかたちの。おもかげにつとそひておぼさるゝも。「やみのうつゝには。なほお

の歌ありしにこそ猶よく尋ぬべしされはかゝるをりにやとある下に含めたる意も本歌のさまによりては聊たがふべしかれ試に△ヨミケジ」

△アラン」と二やうに記しおきつ

御かた〴〵の御とのゐ（釋）女御更衣たちの帝へ御番に參り給ふ事也

露けき秋なり〔河〕後選「人はいさことぞともなきながめにぞわれは露けき秋もしらるゝ（釋）案にこれは引歌にはあらず類似のみ也たゞ傍にて見奉る人までも帝の御心をおしはかり奉りて涙がち也といふ意を露けきとはいへる也さて秋なりといふに時のおしうつりたることをおもはせたる筆のはたらきさらにめでたし

のわきたちて〔餘〕和名抄云暴風史記云暴風雷雨漢語抄八夜知又乃和木乃加世（釋）野分は秋の暴風を云たちては其風の吹立つなりたをにごりよみて野分めきてとやうに讀る注はひがことなりさてはふく風などの詞なくては聞えぬことなり野分はあながちに木を折家を倒すばかりの大風をのみいふにはあらずたゞ強くふく風のことなればこゝのけしきに論なし

はださむき〔拾〕萬葉に膚の字をかきてはだへさむしとよめる歌おほし（釋）此說のごとく膚寒きなり將といふ說はわろし野分の風吹立てにはかに膚寒き夕ぐれなりげにいと人戀しくおもほし給ひけん事うべなりともうべなり

夕づくよのをかしきほどに（釋）夕月夜は宵のほど月夜にて曉の闇なる比を云八月の十日ごろのさまなり（評）御使を出し給ふほどに暮はてゝ夕月夜となりたるさまいとめでたしこの一段は殊に詞をとゝのへてみやびかに書なされたり次々心とゞめて見るべし

やがてながめおはします（評）つれよりもおぼし出る事多き故に命婦を出し給ひても猶そのまゝに打ながめておはしますなり餘情思ひ奉るべし下の命婦がかへり參れる所と相照してあぢはふべし

かうやうのをりは（釋）夕月夜のをかしくあはれなるをりなり

やみのうつゝには〔奥入〕「うば玉のやみのうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり〔細〕夢にいくらもまさらざりけりといひたるよりは此條は猶はかなきとなり引歌のとりざま奇妙なり

門ひきいるゝより（釋）車を門より引入るなり車といはずして車と聞ゆるはいひなれたる故にもあらんか又心して省けるにも有べし次々も皆しかり

やみにくれて〔餘〕後選雜一兼輔朝臣「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（釋）此歌の詞をにほはせて書るなり更衣を想ひ給ふなげきにくれまどひて母君のふししづみ給へる間になり

草もたかくなり（釋）これはとりつくろはぬけしきを甚しくいへるまでにて實に草の高くなれるにはあらずかれこゝちしてといへり心をつくべし（評）上に野分たちてといひ夕月夜といひ出たる脉をたがへず次々も皆風と月とを並べ擧て昨のけしきをかゝれたるいとおごそかに法あ

とりけり命婦かしこにまかでつきて。かどひきいるゝより。氣はひあはれなり。やもめずみなれど。人ひとりの御かしづきに。とかくつくろひたてゝめやすきほどにて。すぐし給ひつるを。やみにくれて。ふししづみ給へるほどに。くさもたかくなり。野分にいとゞあれたるこゝちして。月かげばかりぞ。やへむぐらにもさはらずさしいりたる。みなみおもてにおろして。はゝ君とみにえものもの給はず。今までとまり侍るが。いとうきを。かゝる御つかひのよもぎふのつゆわけ入給ふにつけても。いとはづかしうなんとて。げにえたふまじくない給ふ。まゐりてはいとゞ心ぐるしう。心ぎもゝつくるやうになん。と内侍のすけのそうし給ひしを。もの思ひ給へしらぬこゝちにも。げにこそいとしのびがたう侍りけれ。とてやゝためらひて。おほせごとつたへ聞ゆ。しばしはゆめかとのみたどられしを。やう〳〵思ひしづまるにしも。さむべきかたなくたへがたきは。いかにすべきわざにかとも。とひあはすべき

り然るに傍注に月の事をばいはれたれど風のさだなきはいかにぞやさてこゝには闇をもて月に反對し草をもて風のけしきをそへられたる殊にめでたきかきざまなり心をつくべし

やへむぐらにもさはらず

〔奥入〕新勅「とふ人もなき宿なれどくる春はやへむぐらにもさはらざりけり貫之〔餘〕此歌家集并六帖二の巻にも見えたり〔細〕春を月にかへて引用

よもぎふ 〔釋〕はゝ君の卑下の詞なり上の草むぐらなどの縁なり

げにえたふまじく 〔釋〕げには今までとまり侍るがいとうきをとあるをうけてげにといへるなりえたふまじくは命もこらへがたきさまに見ゆるを云

内侍のすけのそうし給ひしを

〔釋〕これよりさきに典侍なる女房を御使に遣されし事ありしさまに書なしたるなり次のげにこそといへるは其典侍の奏したる語をう

けていへるなり
やゝためらひて　（釋）やゝは暫時と
いはんがごとしためらひは猶豫せ
るなり命婦の用意いみじく聞えた
り
しばしは夢かとのみ　（釋）更衣の身
まかられしを餘りのかなしさに暫
くは夢かと思しめしたどられしと
なりたどるは手取の意にて物を搜
り〳〵するやうの事にいへりこゝ
は夢かと思ひさぐられ給ひし意な
り
さむべきかたなく　〔新〕上に夢かと
ばかりとあるより出づ
しのびては參り給ひなんや
〔湖〕母君に參内あれとなり
露けき中に　（釋）涙がちなる憂の中
にといふ意なるを折から秋なれば
かくの給へるなり
むせかへらせ給ひつゝかつは人も云
云　（評）御かなしみのありさまかき
得ていといみじ
うけ給はりもはてぬやうにて
〔新〕この心づかひ有べき事なり

人だになきを。しのびてはまゐり給ひなんや。わかみやのいとおぼつかなく。露けき中にすぐし給ふも。心ぐるしうおぼさるゝを。とくまゐり給へなどはか〴〵しうものたまはせやらず。むせかへらせ給ひつゝ。かつは人も心よわく見奉るらん。とおぼしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの。心ぐるしさに。うけ給はりもはてぬやうにてなん。まかで侍りぬる。とて御文たてまつる。めも見え侍らぬに。かくかしこきおほせごとをひかりにてなん。とて見給ふ。ほどへば。すこしうちまぎるゝ事もや。とまちすぐす月日にそへて。いとしのびがたきは。わりなきわざになん。いはけなき人もいかに。と思ひやりつつ。もろともにはぐゝまぬおぼつかなさを。いまは猶むかしのかたみになずらへて。ものし給へなど。こまやかにかゝせ給へり。

みやぎのゝ露ふきむすぶ風のおとにこ萩がもとを思ひこそやれ。とあれど。え見給ひはてず。いのちながさの。いとつらう思ひ給へしらるゝに。松のお

巴君俄ニ胸塞リテ見サシ玉ヘル體也

(評)やうにてとかける更にめでたし

めも見え侍らぬに　(評)見え侍らぬと宥て光にてとある事の情つらぬきて縁の詞はなれずいと〳〵めでたし〔湖〕勅定を光にて見るとの心なり

ほどへばすこし云々

〔新〕上の物語をむかへ見るに事のこゝろ相はなれずして又かさならぬやうに書なしたり

もろともにはぐゝまぬ

〔玉〕これはもろともにはぐゝまぬ。がおぼつかなきを宥けんを誤れるなるべし本のまゝにては穏ならず云々さてもろともには更衣の母と諸共に也若宮里におはしましては祖母一人してはぐゝみて帝のもろ共にはえはぐゝみ給はぬよし也更衣と諸共にといへる注はひがこと也さてはおぼつかなきといふ詞にかなはず

むかしのかたみになずらへて

〔玉〕物し給へとは母に禁裡へまゐる

もはんことだに。はづかしう思ひ給へ侍れば。もゝしきにゆきかひ侍らんことは。ましていとはゞかりおほくなん。かしこきおほせごとを。たび〳〵うけ給はりながら。みづからはえなん思ひ給へたつまじき。わか宮は。いかにおもほししるにか。まゐり給はんことをのみなん。おぼしいそぐめれば。ことわりにかなしう見奉り侍るなど。うちうちおもひ給ふるさまを。そうし給へ。ゆゝしき身に侍れば。かくておはしますも。いま〳〵しうかたじけなくなどの給ふ。宮はおほとのごもりにけり。見たてまつりて。くはしく御有さまもそうし侍らまほしきを。まちおはしますらんを。夜ふけ侍りぬべし。とていそぐ。くれまどふ心のやみも。たへがたきかたはしをだに。はるくばかりに聞えまほしう侍るを。わたくしにも。心のどかにまかで給へ。としごろうれしくおもたゝしきついでにのみ。たちより給ひしものを。かゝる御せうそこにて。みたてまつる。かへす〳〵つれなき命にも侍るかな。生れし時よ

り給へとのたまへる也云々 若宮を我もそこと諸共にはぐゝまぬがおぼつかなきほどに今は若宮を更衣の形見ぞと思ひて具し奉りて參り給へ
われもそこともろともにはぐゝまんとなり云々

みやぎの丶云々 〔玉〕拾遺に類歌を證に引て宮城野を宮中にかへるまでは有まじきかといへれど猶宮中の心有べし 東屋の卷に宮城野の小萩が本としらませばといふ歌も宮城野とは八宮の事にいへるたぐひ也花鳥に露吹結ぶを涙とあるはわろし 〔釋〕案に露吹むすぶは猶涙を催す意あるべしさらでは露は用なく聞ゆ風は今日の野分の風也つれよりもおぼし出ることおほくてといへる首尾なりよく味はふべし宮城野は陸奥の名所也こはぎは木萩なるを小萩にとりなして兒の緣にかけたる也一首の意は野分たちて 禁中にもそゞろに涙のもよほさるゝにつけて若宮の御うへをいかにと思ひやり給ふと也露は風のふくにつけてよりあひて玉なすを吹結ぶとはいへる也

松のおもはん事だに 〔細〕「いかにしてありとしられし高砂の松の思はんこともはづかし六帖五 〔釋〕いのちつれなくながらへて高砂の松とひとしく人にしられんもはづかしとの意なるべし新釋に說あり別に記す

もゝしき 〔釋〕もゝしきは大宮の枕詞なるをやがて大宮の事にしていへる也奈良をあをによし山をあし引といへるたぐひの例なり

宮は大とのごもりにけり 〔玉〕これより命婦が詞也地よりいふにあらずさて此けりはおしはかりて定めたる言也

まちおはしますらんを 〔釋〕このをいかゞしきやうなれど後世にといふべき意のをにて例多し誤にはあらず

くれまどふ心のやみも 〔釋〕くれまどふは心の昏くなりて惑ふ也闇の緣にまづかくいへり人のおやの心はやみにあらねども云々の歌をおもへる事は勿論なり但し引歌にはあらず

かたはし 〔釋〕堪がたき悲みの端ほどもとのこゝろなり

はるく 〔新〕晴けすを約めていへり

わたくしにも 〔釋〕此度はおほやけ事のついでなれば私にもといへるなり

まかで給へ 〔釋〕退出てこなたへ來給へといふ意なり

おもたゝしき〔新〕面起しきにて面おこすといふに同じ

かへすぐ 〔抄〕上の詞に命長さのいとつらう又其前に今までとまり侍るがとありこれらにて見れば返々つれなきといへる尤味あり

生れし時より云々 〔評〕上に父の大納言はなくなりてと何げなき語の中に更衣の種姓をかたり出おきてこゝに至りて其委き由を著はしたりそれはた殊更には說ずして母君の語の中に挿みたるいともいともめでたしさて思ふ心ありしとは更衣の宮仕してもしくは帝の御寵をかうふり若宮など生れ給はゞいみじき家の榮えともなるべく思ひおきてられたる意にて當時の風俗すべてさやうなりしなり 心あらん人は心とゞめて見るべしさて又上に夜ふけ侍りぬべしとていそぐといひおきて又かくながぐしき物語を說出たるはこのほどにますぐ夜の更ぬべき種

り。おもふ心ありし人にて。故大納言いまはとなるまで。たゞこの人の宮づかへのほい。かならずとげさせ奉れ。我なくなりぬとて。くちをしう思ひくづほるな。とかへすがへすいさめおかれ侍しかば。はかばかしううしろみ思ふ人なきまじらひは。中々なるべきことゝ思ひ給へながら。たゞかのゆゐごんをたがへじ。とばかりに。いだしたて侍りしを。身にあまるまでの御心ざしの。よろづにかたじけなきに。人げなきはぢをかくしつゝ。まじらひ給ふめりつるを。人のそねみふかくつもり。やすからぬことおほくなりそひ侍るに。よこさまなるやうにて。つひにかくなり侍りぬれば。かへりてはつらくなん。かしこき御心ざしを思ひ給へ侍る。これもわりなき心のやみになん。といひもやらず。むせかへり給ふほどに。夜もふけぬ。うへもしかなん。わが御心ながら。あながちに。人めおどろくばかりおぼされしも。ながゝるまじきなりけりといまはつらかりける人のちぎりになん。世にいさゝかも。人の心

子としたる文のたくみなり

宮づかへのほい　〔釋〕上に思ふ心ありしといへる即ちこの本意の事なり

くづほる　〔餘〕契沖云くづれ折るなり或云萬葉に可多知久都保里とあれば折る義にはあらざるべし〔釋〕たゞ頽るゝ義なりさてこゝは志の頽るゝ事にて今俗もいふ語也なは莫也

うしろみ思ふ人なき　〔釋〕このうしろみは用意なりはかばかしくうしろみ助くる人ならで宮づかへに出人にまじらへば人わろき事のみ多くして出たらぬよりはおとるべき事をなかなかとはいへるなり

人げなき　〔釋〕いとゞ慢られて人がましくももてなされぬを人氣なきといへり

よこさまなるやうにて　〔細〕あまりに寵甚しき故に人の妬みなどつもりてうせぬれば横死のやうにおもへり

心のやみ　〔釋〕子を思ふあまりの頑

心を云本の歌上に見えたり
夜もふけぬ（評）此語めでたし上に夜ふけ侍りぬべしとていそぐといひてさて母君の長き物語をいひ終られたる故にまさしく夜のふけたるよしをこゝに挿みてあらはしおくなりかくて直に命婦の歸ることをいはずしてなほそのあへしらひの答を記されたるいと〳〵いみじき筆といふべし
ながゝるまじきなりけり
〔新〕かくほどなく別れ給はんさいつさがとて人めおどろくばかり思されしとなり
よにいさゝかも云々
〔新〕主上の常のおぼしめしも此人故にはみだれ給へるなりかの後涼殿の更衣の局を外へうつされしなどの類なり
さきの世ゆかしうなん
〔新〕前世にいかなる契り有てかとなり
うちかへしつゝ御しほたれがちに
〔釋〕うちかへしは打返し〳〵幾度

をまげたるとはあらじと。おもふを。たゞこの人ゆゑにて。あまたさるまじき人のうらみをおひしはてゝは。かう打すてられて。心をさめんかたなきに。いとゞ人わろく。かたくなになりはつるも。さきの世ゆかしうなん。とうちかへしつゝ。御しほたれがちにのみおはします。とかたりてつきせず。なくなく。夜いたうふけぬれば。こよひすぐさず。御かへりそうせんとて。いそぎまゐる。月は入がたの空きようすみわたれるに。風いとすゞしく吹て。草むらの蟲のこゑ〴〵。もよほしがほなるも。たちはなれにくき。草のもとなり。

すゞむしの聲のかぎりをつくしてもながき夜あかずふるなみだかな。えものりやらず。

いとゞしくむしのねしげきあさぢふに露おきそふる雲のうへ人。かごとも聞えつべくなん。といはせ給ふ。をかしき御おくりものなど。あるべきをり

ものたまふ意なりしほたれがちは涙がちといふをかくいへるなり

かたりてつきせず（釋）いつまで語りても物語の盡ぬ意なり上に夜更侍りぬべしとていそぐといへるを結ばんとてかくいへるなり

なく〳〵（玉）此詞は下のいそぎ參るといふへかゝれり此類つれにおほし云々

夜いたうふけぬれば

〔玉〕或抄に前に夜もふけぬといへる故にこゝにはいたうふけぬればとかけりといへるまことに心をつくべきふしなりすべて此物語はかく何となき詞にも心をいれたる所多きぞかし

いそぎまゐる（評）こゝにて命婦の立てかへるなり次の事どもは其かへりさまの事をいひて餘情をおもはしむる法なりこの類次下におほし心得おくべし

月は入がたの空きよう云々

（評）上に夕月夜のをかしきといひ月かげばかりぞといへる脉なる事

にもあらねば。たゞかの御かたみにとて。かゝるようもや。とのこしおき給へりける。御さうぞくひとくだり。御ぐしあげのでうどめく物そへ給ふ。わかき人々。かなしきことはさらにもいはず。内わたりをあさゆふにならひて。いとさう〴〵しく。うへの御ありさまなど。思ひいできこゆれば。とくまゐり給はんことを。そゝのかし聞ゆれど。かくいまいましき身のそひ奉らんも。いと人ぎゝうかるべし。又見奉らでしばしもあらんは。いとうしろめたう思ひ聞え給ひて。すが〳〵ともえまゐらせ奉り給はぬなりけり□命婦は。まだおほとのごもらせ給はざりけるを。あはれに見たてまつる。おまへのつぼせんざいの。いとおもしろきさかりなるを。御らんずるやうにて。しのびやかに。心にくきかぎりの女房四五人。さふらはせ給ひて。御物がたりをさせ給ふなりけり。このごろあけくれ御覧ずる。ちやうごんかの御ゑ。亭子院のかゝせ給ひて。いせつらゆきによませ給へる。やまとことのはをも。もろこしのうた

は諸注にいはれたるがごとし但月のみならず風の事も又同じ脈にて野分たちてといひ野分にいとゞあれたるこゝちしてといひさてこゝに風いと涼しくといへる荒かりし風のやう/\吹しづまりて月かげのすゞしく澄たるさまひゞきあひてえもいはれぬけしきなり草むらとあるも前に草もたかくなりといひやへむぐらよもぎふなどいへる脈なるがこゝに至りて蟲の聲をそへ出して次の歌の種としたり心をつけて見るべし

もよほしがほなるも（釋）涙といはずして催しがほといへるおもしろし舊注に哀を催すなりとあるはたがへり蟲のなくといふに涙をおもはするは歌詞のつれなれば涙を催すなり

立はなれにくき（釋）或抄にあはれにものがなしきすまひを見すてがたき心なりといへり

草のもとなり（新）上に草も高くなりまたよもぎふの露わけといへり（河）蓬がもとゝ同じ風情歟

すゞむしの云々（釋）蟲の聲々とある中より鈴蟲一つをとり出て枕詞におきたりそはやがてふるといはん料なりさて意は鈴蟲のごとく聲のかぎりを盡してなくとも秋の長き夜もあきたらずしていつまでも出くるなみだかなといへるにて降る涙とは涙を雨にとりなせるより出たる歌詞なり

えものりやらず（新）命婦此あはれを見すてがたくて車にのりかぬるなり立はなれにくき草のもとゝいへるもこれなり云々

いとゞしく云々（釋）いとゞしくは露おきそふるへかゝる語脈なりさて蟲の音しげきあさぢふにとはなく聲のしげき宿にといふ意露おきそふるは涙をながし添るといふたとへなり雲の上人は勅使の命婦をさしたる事論なし諸注解ざま紛らはしくて一首の意たしかならず

かごとも聞えつべくなん（新）もとよりなげきの露ふかき淺ぢふに御使につけて涙をそふればかこちごともいふべきとなり（釋）この説のごとしかごとは物によそへて怨をいふことなり

いはせ給ふ（新）ついでに車よせて乘などする間に人して返しをいひ出せしなり

御おくりもの（玉）すべておくり物といふは客のかへるを送る時に贈る物をいひて送物なりたゞなべて贈る物にはあらず

でうど（餘）漢王莽傳禮儀調度とあり和名抄に調度部あり（釋）今俗にいふ道具のことなりさてこれは下にしるしのかんざしならましかばとあるくだりの用に御ぐし上の調度めく物をそへたるなり心得おくべし

すが/\とも云々なりけり（玉）すべて文になりけりといへるは上の事のよしを解釋したるごとき語のとぢめにおく辭なり云々この次に御物語せさせ給ふなりけりといへるも帝のまだ大とのごもらざるよしを解釋したる文のとぢめなりみな此意なり

命婦は云々（評）これより命婦がかへり參りたる事をかたるなりさてその歸りたる事をば省きて命婦がおもふ心より書出られたるなか/\にめでたし上に夕月夜のをかしきほどに出したてさせ給ひてやがてながめおはしますといへる所をうけて繼ぎたる所なりよく/\あぢは

をも。たゞそのすぢをぞ。まくらごとにせさせ給ふ。いとこまやかに有さまをとはせ給ふ。あはれなりつること。しのびやかにそうす。御返り御らんずれば。いともかしこきは。おき所も侍らず。かゝるおほせごとにつけても。かきくらすみだりごゝちになん。

あらき風ふせぎしかげのかれしよりこはぎがうへぞしづ心なき。などやうにみだりがはしきを。心をさめざりけるほどゝ。御覧じゆるすべし。いとかうしも見えじ。とおぼししづむれど。さらにえしのびあへさせ給はず。御らんじはじめし年月のことさへかきあつめ。よろづにおぼしつゞけられて。時のまもおぼつかなかりしを。かくても月日はへにけり。とあさましうおぼしめさる。故大納言のゆゐごむあやまたず。宮づかへのほいふかく物したりしよろこびは。かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。いふかひなしや。とうちの給はせて。いとあはれにおぼしやる。かくてもおのづから。わか宮など

ふべし

おまへのつぼせんざいの　〔河〕壺前栽は清涼殿の東庭并に西庭朝餉并に臺盤所の前にあり云々　〔釋〕壺とは小庭の事なり前栽は字のごとく家の前庭に草木を栽ゑをいふこ

こは秋草の花盛なるさまなり

御覧ずるやうにて　〔万〕御らんずるやうにてとかける詞おもしろきなり命婦のかへるを御心には下まち給へどもうへは草花を御らんずるやうにてとの心なり落着は人目をいさゝかはゞかり給ふ御心なるべし

長恨歌の御ゑ亭子院のかゝせ給ひて　〔玉〕此絵を亭子院の御みづから書給へるやうに聞ゆれどもさにはあらず絵師におほせてかゝせ給へるなりさて上に女房四五人さふらはせ給ひて御物語せさせ給ふといへるはすなはちこの長恨歌のすぢの事を御物語せさせ給ふなりたゞそのすぢをぞまくらごとにといへるすなはち上の御物語せさせ給ふよ

しとことわれるなり此所かやうに見ざれば長恨歌の繪歌の事ここにはよしなし

いせつらゆきに（釋）此御屏風の事は伊勢集に見えたれば實に傳はりてありしにこそきはめて名高き御物なりけんとぞおぼゆるかれこゝにそれを借出て そのありさまを實にしたる文なりかゝる事猶おほし

もろこしのうたも（釋）これは伊勢貫之とは別なる文人におほせてかゝしめ給へるなるべし詩の事をはぶきていはねはこゝに用なき事なればなり

たゞそのすぢをまくらごとにせさせ給ふ（釋）たゞ長恨歌にいへる妻におくれたるすぢの事をのみ言種にし給ふなりまくら言とは俗に寝ばなしといはんがごとき意なり寝ころびて物語する事なり諸注心得かねられたりとおぼしくて憶なる説なしさてこゝまでは帝の御ありさまを語るなり

おもひいで給はゞ。さるべきついでもありなん。命ながくとこそおもひねんぜめ。などのたまはす。かのおくり物御らんぜさす。なき人のすみかたづねいでたりけん。しるしのかんざしならましかば。とおもほすもいとかひなし。たづねゆくまぼろしもがなつてにてもたまのありかをそことしるべく。ゑにかける楊貴妃のかたちは。いみじきゑしといへども。筆かぎりありければ。いとにほひすくなし。太液の芙蓉。未央の柳も。けにかよひたりしかたちを。□からめいたるよそひは。うるはしうこそありけめ。なつかしうらうたげなりしを。おぼしいづるに。花鳥の色にも音にも。よそふべきかたぞなき。朝夕のことくさに。はねをならべ。えだをかはさん。とちぎらせ給ひしに。かなはざりけるいのちのほどぞ。つきせずうらめしき。風のおと蟲のねにつけても。物のみかなしうおぼさるゝに。弘徽殿には。ひさしうへの御つぼねにも。まうのぼり給はず。月のおもしろきに。夜ふくるまで。あそびをぞし

給ふなる。いとすさましう。ものしときこしめす。此ごろの御けしきを見たてまつる。うへびと女房などは。かたはらいたしときゝけり。いとおしたちかど〳〵しき所ものし給ふ御かたにて。ことにもあらずおぼしけちて。もてなし給ふなるべし。月もいりぬ。

雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらんあさぢふのやど。おぼしやりつゝ。ともし火をかゝげつくして。おきおはします。右近のつかさの。とのゐまうしの聲聞ゆるは。うしになりぬるなるべし。人めをおぼしてよるのおとゞにいらせ給ひてん。まどろませ給ふことかたし。あしたにおきさせ給ふとても。「あくるもしらで。とおもほしいづるにも。なほあさまつりごとは。おこたらせ給ひぬべかめり。ものなどもきこしめさず。あさがれひのけしきばかりふれさせ給ひて。大床子の御ものなどは。いとはるかにおぼしめしたれば。はいぜんにさふらふかぎりは。こゝろぐるしき御けしきを見たて

しのびやかにそうす（釋）この奏すとある中に口づからの御返答もみなおしこめて省きたるなり

おき所も侍らず（釋）かたじけなき仰事は蓬生の宿に置べき所もなしとの意にてふかく謝し奉りたる詞なり

あらき風云々〔新〕はぐゝみ奉るべき母御息所はあらずなりて御子のうへも心もとなしとよめるなり拾遺集長歌にたのもしき陰に二たびおくれたる二葉の草をふく風のあらきかたにはあてじとてせばき袂をふせぎつゝとよめり

などやうにみだりがはしきを〔玉〕みだりがはしとは歌のよろしからざるよしなりなどやうにと歌よりつゞきたるにて心得べし云々さて此歌實にみだりがはしきにはあらず例の紫式部が卑下の心ばへにてかくいひなせるものなり云云

かくても月日はへにけりと〔細〕〔抄〕身をうしと思ふに消ぬ物

なればかくてもへぬる世にこそ有けれといふ歌のこゝろなり

かひあるさまにとこそ　（釋）湖月傍注に更衣を后にもと思召たるべしとあれど必しも后にもといふ意にはあらず女御などの意にはあるべけれどたゞかひあるさまにとのみ見てあるべし

かくてもおのづから　〔玉〕かくてもは更衣はなくなられてもなりおのづからはさるべきついでもといふへかゝれり若宮云々へはかゝらず

なき人のすみかたづね出たりけん云々　〔玉〕あけくれ長恨歌の事をまくらごとにせさせ給ふほどなるからふと此事をおぼしめしよれることよしあること也　（評）上にみぐし上のでうどめくものといへるをこゝにて顯はし出たる巧みさらにいとめでたし長恨歌に臨邛道士鴻都客。能以精誠致魂魄。爲感君王展轉思。遂教方士慇懃覓。云々唯將舊物表深情。鈿合金釵寄將去。釵留一股合一扇。釵擘黄金合分鈿。但令心似金鈿堅。云々とあり

たづねゆく云々　〔新〕かの幻のわざする人もあれかしそれをやがて傳にても御息所の靈のあり所だにしらばやと也まぼろしとは幻術する人をいふ幻のことば虛幻詭誕惑人也と字注にいへり　（釋）まぼろしはこゝは幻師といふ意にてかの方士をさしたる也。一つ略けるは例なりさてこのまぼろしはるかに末なる幻の卷に大空をかよふまぼろし云々といふ歌の所へかけてふかき意の照應ありとおぼしきよしありそこにいふべし

いとにほひすくなし　〔新〕よく書し繪といへど實の人のやうに艷色のなきなり

太液の芙蓉云々　〔奥入〕長恨歌云太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉　太液は池の名芙蓉ははちす也未央は宮殿の名なり

けにかよひたりしかたちを。　（釋）氣に似ひたりし容貌也けにとよみたる注はひがこと也氣は楊貴妃の氣色に也かよひは似通ふなること例いと多しさてかたちをの下に語脱たるなるべしさらでは聞えがたし試にいはゞおもふになどやありけんなほ考ふべし

からめいたるよそひはうるはしうこそ　〔玉〕すべてうるはしうといふ言は古書にては美麗の意なれども物語などにいへるはたゞ美麗の意にはあらで俗言にきつとしてかたいといふ意みだれず正しき意にいへりこゝは楊貴妃の唐めきたるよそひはあまりきつとしてかたくてたをやかにはあらざりけんといへるなり

花鳥の色にも音にも　〔玉〕かの楊貴妃がかたちは猶芙蓉柳などにもたとへしを更衣のかたちは然たとふべき物もなくすぐれたりしとなり

はねをならべ云々　〔河〕長恨歌に在天願作比翼鳥在地願爲連理枝

かなはざりけるいのちのほどぞ　〔新〕前にかぎりあらん道にもおくれさきだゝじと契らせ給ふと有しも比翼をならべ云々の事なり且歌にかぎりとてわかるゝ道のかなしきにと御休所のよみしなどもあはせ見るべし

つきせずうらめしき　（釋）長恨歌の結句に天長地久有時盡此恨綿々無絶期とあるをおもはれたる句なるべし長恨歌といふ題は此句にて

つけたるなりこは因(チナミ)にいふのみぞ

風のおとむしのねにつけても　(評)此段また風と虫とをとり出て帝の御悲みの種としたりさて次に月をば轉(ウツ)して弘徽殿女御の遊興(ミアソビ)の種として更に帝の御思ひをまさせたる文のたくみいひ志らずめでたし此所虫と風とのとぢめの條なり心をつくべし

弘徽殿には久しう云々　(評)もの妬みしてひが〳〵しき女の情をいとよくうつされたりこれはた前後に見えたる主客の脉なり

月もいりぬ　(細)此詞殊勝なり前に夕月とかき入がたの雲と書て月もいりぬといふ妙なり　(釋)此御説のごとし但月のみにはあらず風も又添たる事上に注するがごとし此句月のとぢめなり

雲のうへも云々　(玉)いかですむらんとは雲の上にてだに涙にくろゝ月なればまして淺茅生のやどには

まつりなげく。すべてちかうさふらふかぎりは。をとこ女。いとわりなきわざかな。といひあはせつゝなげく。さるべき契りこそはおはしましけめ。そこらの人のそしりうらみをも。はゞからせ給はず。この御事にふれたることをば。だうりをもうしなはせ給ひ。今はたかく世中のことをも。おぼしすてたるやうになりゆくは。いとたいぐ〳〵しきわざなり。と人のみかどのためしまでひきいでつゝ。さゝめきなげきけり「一月日へて。わか宮まゐり給ひぬ。いとゞこの世の物ならず。きよらにおよずけ給へれば。いとゞゆゝしうおぼしたり。あくるとしの春。坊さだまり給ふにも。いとひきこさまほしうおぼせど。御うしろみすべき人もなく。また世のうけひくまじきことなれば。なかなかあやふくおぼしはゞかりて。色にも出させ給はずなりぬるを。さばかりおぼしたれど。かぎりこそありけれ。と世の人も聞え。女御も御こゝろおちゐ給ひぬ◎かの御おばきたのかた。なぐさむかたなくおぼし志づみて。おは

月影のいかで濟むさこそ涙にくらめと月のすむことをいひて住をかねたり

ともし火を　〔奥入〕長恨歌夕殿螢飛思悄然秋燈挑盡未能眠遲々鐘鼓初長夜耿々星河欲曙天

（釋）秋燈一本孤燈と有下二句は餘滴に隨ひて今加へ引つ

うこんのつかさのとのゐ申

（釋）右近のつかさは右近衛府也とのゐまうしとは直宿に侍らふ武官の人々各の名をなのり申す事也其聲をきこしめして夜の更たるを知しめす意也右近衞のとのゐ申は丑の一刻なり

あくるもしらでと

（釋）上に見えたる長恨歌の御屛風の繪によめる伊勢が歌の詞をとられたり「玉すだれあくるもしらでねし物を夢にも見じとおもひかけきや」伊勢集に見えたりこれは長恨歌の春宵苦短日高起また悠々生死別經年魂魄不曾來入夢といふ句もてよめる歌なり

すらん所にだに。たづねゆかん。とねがひ給ひししるしにや。つひにうせ給ひぬれば。またこれをかなしびおぼすことかぎりなし。みこむつになり給ふ年なれば。このたびはおぼししりて。こひなげき給ふ。としごろなれむつび聞え給へるを。見奉りおくかなしびをなん。かへす〴〵の給ひける◎今はうちにのみさぶらひ給ふ◎七つになり給へば。ふみはじめなどせさせ給ひて。よにしらずさとうかしこくおはすれば。あまりにおそろしきまで御らんず。今はたれも〳〵えにくみ給はじ。はゝ君なくてだにらうたうし給へ。とて弘徽殿などにも。わたらせ給ふ御ともには。やがてみすのうちにいれ奉り給ふ。いみじきもののふあたかたきなりとも。見ては打ゑまれぬべきさまのし給へれば。えさしはなち給はず。女みこたちふたところ。此御はらにおはしませど。なずらひ給ふべきだにぞなかりける。御かた〴〵もかくれ給はず。今よりなまめかしくはづかしげにおはすれば。いとをかしううちとけぬあそびぐさ

なにあさまつりごとは
〔奥入〕 長恨歌春宵苦短日高起従是君王不早朝 〔細〕長恨歌には貴妃が寵によりて也こゝは更衣の御歎きにおこたらせ給ふ也猶の字殊勝なり 〔評〕この御説のごとく樂みと悲みとをとりかへられたるにて少しも彼を襲はずしてかへりて新らしくめでたきひゞきとなれり

あさがれひのけしきばかり 〔釋〕案□にのもじ穩かならずもしくはのみと有しを脱せるにや 〔細〕朝がれひは女房の陪膳大床子は殿上人の陪膳也いづれをも御覧じいれぬと也 〔玉〕こゝのやうは大床子のおものは外ざま朝がれひは御内々也大床子の御ものなどはいとはるかにおぼしめしたればといへるにてしるべし大床子のを常の御膳也といへる注はまぎらはし

すべてちかうさふらふかぎりは云々 〔評〕はいぜんにさふらふかぎりは云々といひて又ちかうさふらふか

に。たれも〳〵思ひ聞え給へり。わざとの御がくもんはさるものにて。ことふえのねにもくもゐをひゞかし。すべていひつゞけば。こと〴〵しうたてぞなりぬべき人の御さまなりける□そのころこまうどのまゐれるが中に。かしこき相人ありけるを。きこしめして宮のうちにめさんことは。うだのみかどの御いましめあれば。いみじうしのびて。このみこを鴻臚舘につかはしたり。御うしろみだちてつかうまつる。右大辨のこのやうにおもはせて。ゐてたてまつる。相人おどろきて。あまたたびかたぶきあやしふ。國のおやとなりて。帝王のかみなきくらゐにのぼるべきさう。おはします人の。そなたにてみれば。みだれうれふることやあらん。おほやけのかためとなりて。あめのしたをたすくるかたにてみれば。又そのさうたがふべしといふ。辨もいとざえかしこきはかせにて。いひかはしたる事どもなん。いときようありける文などつくりかはして。けふあすかへりさりなんとするに。かくありがたき

ぎりはといへるはいたづらに重なりたる加くなれど然らずこゝは帝の更衣を寵し給ふことのとぢめなる故に殊にはしをおこしてすべて云々といひ又立かへりてそこらの人の譏恨をも云々と語りてつひに他朝のためしまで引出つゝといへるにて卷首に人のそしりをもえ憚らせ給はずよのためしにもなりぬべきといひ楊貴妃のためしも引出づべうなりゆくにといひて女御更衣より公卿殿上人に及びつひに天下の人のもてなやみぐさになりたりといへる事の首尾を合せて結びたるなりさて楊貴妃のためしといへるよりこなたかの長恨歌の句をとりてこゝかしこ挿み入られたるが彼意のまゝにはとらずしてみな事をかへて引用ゐたるなどすべて妙なりとも妙なる物にて もろこし人のいはゆる換骨奪胎といふべきこゝちす

月日へてわか宮參り給ひぬ　〔新〕令の定め父母の喪は服一年暇五十日にて其後今にかはらず然ればこのわか宮も 御暇五十日を過てはまゐり給ふべきをさの祖母君のすが〳〵とも參らせ給はで月日おほく過して其年の冬にいたりて參らせしなり云々下略

いとゞこの世の物ならず　〔玉〕久しく見給はで月日へて見給ふゆゑにいよ〳〵うつくしくなりまさり給へるなり云々

いとひきこさまほしう　(釋)一の宮を引こしてわか宮を東宮にせまほしうおぼししとなり

なか〳〵あやふく　〔玉〕源氏君を坊に立給ふ事をあやふくおぼしめすなり

かぎりこそ有けれ　〔玉〕帝の源氏君をさばかり思しめせどもかぎり有て坊にはえ立給はざりけるよと世人申すなり

女御も御心おちゐ給ひぬ　〔玉補〕前の一のみこの女御は覺し疑へりに應ぜり

なぐさむかたなく　(釋)更衣のうせ給ひしよりこのかたなぐさむかたなく思ひなげき給ふ意なり舊注に源氏君立坊の義もやとたのみ給ひしかどもさもなかりしかばなぐさむかたなくとなりといへるは過たるべし

みこむつになり給ふ　〔新〕右の一の宮坊にさだまり給ふより御祖母の卒までの間に年ありて今六歲になり給ふなり

このたびはおぼししりて　(釋)上の更衣の卒し給へる處に何事かあらんともおもほしたらずといへるをうけて六歲になり給へればこの度は死ぬといふ事を思し知て戀歎き給ふといへるなり

としごろなれむつび云々　(評)祖母君の情を推量りたる文にてつゆばかりも透間なき書ざまなり 此人はさしも用なければうせ給へる事をこゝにいひて先かくしたるなり

今は内にのみ　(評)源氏君の內ずみし給ふ事を先いひ出ておくなり文のかはりめに心を着べし

ふみはじめなど　(釋)御讀書始なり博士をめして御注の孝經をよみそめ給ふなり 御注は唐の玄宗の注したるなりさてなどゝいへる中に其ほかの諸藝をもならひ始給へる事をこめたり

よにしらず　(釋)すべてかく世に云々といふはいみじく勝れたるよしをいへる事にて 此世の中には未知らずといふ意なり他もこれに准へてし

るべし
おそろしきまで（釋）才氣のすぐれたるに膽をつぶし給ふさまなりかやうのおそろしきは今俗にもいふ語なり舊注に命の長からぬ物なればとあるはひがごとなり
はゝ君なくてだに（新）母君は妬れてうせたれば御子をだにらうたくし給へとなり（釋）案に舊注もこの意に解れたれどだにの辭なくての下にありてはさらにさやうには聞えぬことなりもしくは母君なら。でだにとありしをなくてと寫し誤れるかさらばわか宮の實の御母ならずともいふ意になりて聞ゆべし猶考ふべしさて今はたれも／＼えにくみ給はじといふは帝のわか宮にの給へる語母君ならでだには弘徽殿女御にの給へる語なり思ひわかつべし
みすのうちに（釋）いと／＼幼き人といへども男子をばみだりに簾の内へ入られざりし昔の風俗思ふべし

人にたいめんしたるよろこび。かへりてはかなしかるべき心ばへを。おもしろくつくりたるに。みこもいとあはれなるくをつくり給へるを。かぎりなうめで奉りて。いみじきおくり物どもをさゝげたてまつる。おほやけよりもおほくのものたまはす。おのづからことひろごりて。もらさせ給はねど。春宮のおほぢおとゞなど。いかなることにか。とおぼしうたがひてなんありける。みかどかしこき御心に。やまとさうをおほせて。おぼしよりにけるすぢなれば。いまゝでこのきみを。みこにもなさせ給はざりけるを。相人はまことにかしこかりけり。とおぼしあはせて。無品親王の。外戚のよせなきにてはただよはさじ。わが御世もいとさだめなきを。たゞ人にておほやけの御うしろみをするなん。ゆくさきもたのもしげなること。とおぼしさだめて。いよ／＼みち／＼のざえをならはさせ給ふ。きはことにかしこくて。たゞ人にはいとあたらしけれど。みことなり給ひなば。世のうたがひおひ給ひぬべく。もの

し給へば。すくえうのかしこきみちの人に。かんがへさせ給ふにも。おなじさまにまうせば。源氏になし奉るべく。おぼしおきてたり□年月にそへて。みやす所の御ことを。おぼしわするゝをりなし。なぐさむや。とさるべき人人をまゐらせ給へど。なずらひにおぼさるゝだに。いとかたき世かな。とうとましうのみ。よろづにおぼしなりぬるに。先帝の四の宮の。御かたちすぐれ給へる聞え。たかくおはします。はゝぎさきよになくかしづき聞え給ふを。うへにさぶらふ内侍のすけは。先帝の御時の人にて。かの宮にも。したしうまゐりなれたりければ。いはけなくおはしましゝ時より見奉り。いまもほのみたてまつりて。うせ給ひにしみやす所の御かたちに似給へる人を。三代のみやづかへにつたはりぬるに。え見たてまつりつけぬに。きさいの宮のひめみやこそ。いとようおぼえて。おひいでさせ給へりけれ。ありがたき御かたち人になん。とそうしけるに。まことにや。と御こゝろとまりて。ねん

いみじきもの、ふあたがたき（釋）この物語かゝれたる比の世には武士は物のあはれをしらぬもの、一くさにかぞへられたる世ざまなりきこの事いたく論ある事なれどこゝに用なければ略きていはずあたのたは清みかたきのかは濁りてよむべしさてかくいふは源氏君のかたちのめでたきよしをほむる例の脉にて弘徽殿の女御さへつひにえさしはなち給はぬといへるにてその容貌のいみじくめでたきよしはしられたり

女御子たち二ところ（釋）かく女みこたちとくらべて猶まされるさまにいへるにてます〳〵源氏君のめでたさはしられたり

今よりなまめかしうはづかしげに（釋）わか宮六歳なれどかたちめでたくおはする故に色めきたるやうにおぼえて打向ふ人々のはづかしくおぼえ給ふなり故打とけぬあそびぐさといへり打とけぬは心のおかれて用意する事あそびぐさは翫

び種といふ意なりさてこゝまでは容貌のいみじきを賞たるなり次は才能の事を称するなり

くもゐをひゞかし　（釋）雲の居る天までも響かしといへるによそへて大宮人のほめのゝしる事を聞せたるなり

ことごとしうたてぞなりぬべき　（釋）うたてといふ詞は甚しければ却てわろくなる意につかひたりここも其意にてわか宮の才能を一つづゝいひつゞくればかへりて作り事めきてあしくなるといふ意なり

宇多の帝の御いましめ　〔奥入〕寛平遺誡云　外蕃之人必可二召見一者在二簾中一見レ之不レ可二直對一耳　〔新〕外蕃の使人朝参の時は天子顕れ給ふなりこれは使にても別に召るゝなりか又はおのづから來れる韓人などをの給ふなるべしさてこゝの相人は使のため來れるにもあれみこの御相のために召ん事は右の御戒に准じてはゞかり給ふとなるべし

ごろにきこえさせ給ひけり。はゝぎさき。あなおそろしや。春宮の女御のいとさがなくて。きりつぼの更衣の。あらはにはかなくもてなされしためしも。ゆゝしう。とおぼしつゝみて。すがすがしうもおぼしたゝざりけるほどに。きさきもうせたまひぬ。心ぼそきさまにて。おはしますに。たゞわが女みこたちと。おなじつらに思ひ聞えん。といとねんごろにきこえさせ給ふ。さぶらふ人々御うしろみたち。御せうとの兵部卿のみこなど。かく心ぼそくておはしまさましよりは。うちずみせさせ給ひて。御心もなぐさむべくなどおぼしなりて。まゐらせ奉り給へり。ふぢつぼと聞ゆ。げに御かたちありさま。あやしきまでぞおぼえ給へる。これは人の御きはまさりて。思ひなしめでたく。人もえおとしめ聞え給はねば。うけばりてあかぬ事なし。かれは人もゆるしきこえざりしに。御心ざしのあやにくなりしぞかし。おぼしまぎるとはなけれど。おのづから御心うつろひて。こよなくおぼしなぐさむやうなるも。

鴻臚舘　〔河〕職員令云玄蕃寮頭一人掌佛寺僧尼名籍蕃客辭見讌饗送迎及在京夷狄監當舘舍事義解謂鴻臚舘也　(釋)外蕃の人をおく處をもろこしにて鴻臚寺といふによりて玄蕃寮なるをも鴻臚館とつけられしなりこゝにこまうどはさしおかれたればわか宮をそこへ遣はし給ふなり

ゐてたてまつる　(釋)ゐては引つれてといふ意なり萬葉集に率字をよめるよくあたれり下皆こゝにならふべし

かたふきあやしふ　(釋)ものを考ふる時は首を傾くるものなる故に考ふる事をかたふくといへるなり下皆同じ

國のおやとなりて　(釋)漢ぶみに民之父母といふ語のあるによりてみかどを國のおやといへるなり

そなたにてみれば　(釋)そなたとは帝王の相をさしていへるなり

おほやけのかためとなりて云々　(釋)朝廷のかためといへるにて攝政關白などの事なり　〔玉〕攝政關白などゝ成給ふべき相かとも思へども帝王の相なれば攝關にしては其相たがふべしといふなり　〔評〕この一段は源氏君一代のうちに有べき事を思ひかまへてこの相人に先いはせたるにていとも〳〵巧みなる伏案なりよく〳〵心を付べし初にかたちのめでたきをいひ次に才能のいみじきをいひこゝに至りて一世の吉凶をことわれる傳文の法なりこれより下の詩文の事どもはたゞこのにほひにかきそへて源氏君の秀才なるよしをほめたるまでなり

ざえかしこき　(釋)先達のいはれしごとく卷中にざえといへるはこと〴〵く學才の事にて學問といはんがごとしたゞに才氣の事にはあらず心得おくべし

いみじきおくり物　〔新〕此さゝげものゝ事梅がえの卷にいさゝか出たり

いかなる事にかと　〔抄〕東宮を立かへ給はんかなど思ふ疑ひの有なるべし

やまとさうをおほせて　〔玉〕みかどの御心に此御子をもし親王にもなさば人の疑ひなど出來てかへりて御ためによろしからじと考へ給へることをやがてやまとさうとはいへるなり云々やまと相としもいへるはこまの相人のことをいへる所なる故なりさて相といふからおほせてともいへるなり

さう人はまことにかしこかりけり　〔玉〕高麗の相人のみだれうれふる事やあらんと申せるが御みづからおぼしめし考へたる所とあへる故に相人はかしこかりけりとおぼせるなり

わが御世もいとさだめなきを　(釋)帝の我御治世も定めがたく思しめすよしなりさるは御悲みがちにて御命もいかゞとおぼせるなるべし其ほどに若宮をゆくすゑたのもしきさまにせんとおもほすなり

たゞ人にておほやけの御後見を　(釋)このたゞ人は臣下の事をさせるなり御うしろみは政を相くる事にて攝關また大臣などなり

たゞ人にはあたらしけれど　〔新〕世にたぐひなき光君を臣とせんは惜き事なれどなり

すくえうのかしこきみちの人に
、〔孟〕宿曜師昔は一の道也二十八宿九曜の行度をもちて人の運命を考ろものなり（釋）宿曜のみちのかしこき人にといふ意也
源氏になし奉るべく（釋）氏姓を賜はるは臣となり給へるしるしなれば世のうたがひをば負ひ給ふまじきなり源氏の事は巻首にいへりおきては用言にてさだめといふに同じ
年月にそへて（釋）こゝより藤壺中宮の御事を説出せり桐壺更衣に似給へるによりて御心のとまること紫の上の藤壺に似給へるゆゑに源氏君の御心のとまりしがごとし
たどめおくべし
なぐさむやと〔新〕過にし更衣の事をおぼしうれへ給ふ御心を少しもおもひ和み給ふかとなり（釋）さろべき人々とは然るべき女御更衣となり給ふべき人々なり
なずらひに（釋）なずらひは體言なり更衣に准じ給ふばかりの人もな

あはれなるわざなりけり◎源氏の君は、御あたりさり給はぬを。ましてしげくわたらせ給ふ御かたは。えはぢあへ給はず。いづれの御かたも。われ人におとらんとおぼいたるやはある。とり〲にいとめでたけれど。うちおとなび給へるに。いとわかううつくしげにて。せちにかくれ給へど。おのづからもり見たてまつる。はゝみやすどころは。かげだにおぼえ給はぬを。いとように給へり。と内侍のすけの聞えけるを。わかき御心ちに。いとあはれと思ひきこえ給ひて。つねにまゐらまほしう、なづさひ。見奉らばや。とおぼえ給ふ。うへもかぎりなき御思ひどちにて。なうとみ給ひそ。あやしくよそへ聞えつべきこゝちなんする。なめしとおぼさで。らうたうし給へ。つらつきまみなどは。いとようにたりしゆゑ。かよひて見え給ふも。にげなからずなん。など聞えつけ給へれば。をさな心ちにも。はかなき花紅葉につけても。こゝろざしを見え奉り。こよなう心よせ聞え給へれば。こきでんの女御。又この宮

とも御中そば〲しきゆゑ　うちそへてもとよりのにくさもたち出て。ものしとおぼしたり。世にたぐひなしと見たてまつり給ひ。名たかうおはする宮の御かたちにも。なほにほはしさはたとへんかたなく。うつくしげなるを。世の人ひかる君ときこゆ。藤つぼならび給ひて。御おぼえもとり〲なれば。かがやく日の宮と聞ゆ□此君の御わらはすがた。いとかへまうくおぼせど。十二にて御元服し給ふ。ゐたちおぼしいとなみて。かぎりある事にことをそへさせ給ふ。一とせの春宮の御げんぷく。南殿にてありしぎしきの。よそほしかりし御ひゞきにおとさせ給はず。所々のきやうなど。くらずかさてくさうゐんなど。おほやけごとにつかうまつれる。おろそかなる事もこそ。ととりわきおほせごとありて。きよらをつくしてつかうまつれり。おはしますとのゝ。ひんがしのひさし。ひんがしむきに御いしたてゝ。くわざの御座。ひきいれのおとゞの御ざ。御前にあり。さるのときにぞ源氏まゐり給ふ。みづらゆひ給へる

かりしなり
いとかたき世かなと（釋）准におぼさるゝ人だに有がたき世中かなとやうにおぼしてさるべき人々を参らすることなどもうとましくおぼしめす意なり
先帝の（釋）いづれの帝などゝしひて准據をいふ説はわろしたゞ先帝とのみ心得べし
内侍のすけ（玉）上にゆげいの命婦が内侍のすけのそうし給ひしといへると同人たるべきか（釋）さも有べし此物語不用なる人を出すにもおのづからそのすぢある事多し
今もほの見奉りて（釋）幼くおはせし時より見奉りたるが今もほのかには見奉るとなりかくいふは大人になり給へればみだりに人に對面し給ふ事のなければなり物がたりのやう委しといふべし
三代の宮づかへに（釋）この桐つぼの帝まで御三代に

傳はりて宮づかへつかうまつるにいまだ御やす所に似給へる人をば見ずとなり舊注に光孝字多醍醐たるべきかとあるを玉小櫛にもとられたれどしひて准據をいはんはこの物語の例ならねば新釋餘滴などにとられざりしに從ふべし

いとようおぼえて
（釋）おぼえてとは似給ひてといふことなり卷中いづこもしかり

ねんごろに聞えさせ給ひけり
（湖）四宮の御入内の事を申させ給ふなり　（釋）こゝまでの語脈いささか紛らはしきをしるしたる點によりて詞のかゝる所を思ひわくべきなり

きりつぼの更衣の
（釋）桐壺に居給ひし更衣といふ意なり

あらはにはかなくもてなされし
（釋）あらはには密にせずしてけざけざとあきらかにおとしめあなづりてもてなされし意也けゝしうはかの嫉妬のために病がちになりて

つらつき。かほのにほひ。さまかへ給はんとをしげなり。大藏卿くら人つかうまつる。いときよらなる御ぐしをそぐほど。心ぐるしげなるを。うへはみやす所のみましかば。とおぼしいづるにたへがたきを。心づよくねんじかへさせ給ふ。かうぶりし給ひて。御やすみどころにまかで給ひて。御そたてまつりかへて。おりてはいし奉り給ふさまに。みな人なみだおとし給ふ。みかどはたましてえしのびあへ給はず。おぼしまぎるゝをりもありつるを。むかしの事とりかへし。かなしくおぼさる。いとかうきびわなるほどは。あげおとりや。とうたがはしくおぼされつるを。あさましううつくしげさそひ給へり。ひきいれのおとゞのみこばらに。たゞひとりかしづき給ふ御むすめ。春宮よりも御けしきあるを。おぼしわづらふことありけるは。この君にたてまつらんの御心なりけり。うちにも御けしき給はらせ給ひければ。さらばこのをりの御うしろみなかめるを。そひぶしにも。ともよほさせ給ひければ。さおぼ

つひにうせ給へる故に忌々しうとはの給へるなり

きさきもうせ給ひぬ　〔評〕この一段は藤壺中宮の傳なるがまづ更衣に似給へるよしをいひて帝の御心にかなひ給ふ故をあげさて直に入内し給へるさまにはいはで御母后の一たびはうけひき給はざりしよしをいひてさて後后もうせ給ひてつひに入内し給へるさまに書れたるは例の事をかろくせずしてます／＼帝の御心にかなひ給ふべき根ざしをふかくせんためなり其中につゆも事の情を失はぬ筆づかひいとめでたしともめでたしさてこの后はさしも用なき人なればすみやかにうせ給へるよしをいひてとりかくされたる又いとめでたし

御うしろみたち　〔釋〕これはさふらふ人々の中にて殊に御うしろみをする人なるべし玉小櫛補遺にたちを濁りてさふらふ人々御後見だちて參らせ奉るなりといへるは次に「などおぼしなりてといふにかなはずたちすみてよむべし

兵部卿のみこ　〔細〕紫上の父なり後に式部卿なり

うちずみ　〔釋〕入内して禁中に住給ふをうちずみと云

藤つぼと聞ゆ　〔河〕藤懸ル二蝦一孕木ニ一但非ル二上古此木ニ一歟　建曆御記　〔釋〕禁中五舍の一飛香舍也入内してそこに住給へるを人みな藤壺と申すとの意なり

げに御かたちありさま　〔釋〕げにとは前にいとようおぼえてと内侍のすけの奏したるをうけてげにといへるなり

人の御きはまさりて云々　〔釋〕先帝の姫宮なれば、世の思ひなしもめでたく女御更衣たちもえおとしめ給はねばおしたちてたらはぬこゝろなしとなり

かれは人もゆるし聞えざりしに云々　〔釋〕かれとは更衣の事なりさてこゝは藤つぼの方を主といふ所なればまづ彼は云々といひて次にこれは云々といふべき抑揚の定れる法なるをかく上下にとりかへられたるは奇といふべししばらく此二句をこれは云々の上へ入れて心得べしさらでは勢ひ聞えがたかるべし

おぼしまぎるとはなけれど　〔釋〕更衣をかなしみ給ふ御心のまぎるることはなけれど藤つぼの更衣に似給へる故におのづから御心うつりて前に參らせ給ふ人々よりは格段におぼしなぐさむやうなるもあはれなる御心ざしなりといふ意也

源氏の君は　〔新〕前に源氏にせんの御おきて有し事をいひて其後宣下ありし事は略せり云々

ましてしげくわたらせ給ふ御かたは　〔釋〕前に弘徽殿などにもわたらせ給ふ御ともにはやがてみすの内にいれ奉り給ふ云々御かた／＼もかくれ給はず云々とあるをうけてかゝれたり帝のしげくわたらせ給ふ御方は源氏君も御供にてたび／＼わたり給へばつひにははぢあへ給はず馴給ふといふ意也　〔新〕こゝはすべての女御更衣たちの中をいふ内に藤壺もあれどそれは又次にもいへり

うちおとなび給へるに　〔釋〕他の女御更衣たちはいづれも年たけておとなび給へる中に藤つぼはいとわかくうつくしげなれば源氏君にはぢて

したり。さふらひにまかで給ひて。人々おほみきまゐるほど。みこたちの御座のすゑに。源氏つき給へり。おとゞけしきばみ給ふ事あれど。物のつゝましきほどにて。ともかくもえあへしらひ聞え給はず。おまへより内侍せんじうけたまはりつたへて。おとゞ参り給ふべきめしあれば。まゐり給ふ。御ろくの物。うへの命ふとりてたまふ。しろきおほうちきに。御ぞ一くだり。れいのことなり。御さかづきのついでに。

　いときなきはつもとゆひにながき世をちぎるこゝろはむすびこめつや。御心ばへありておどろかさせ給ふ。

　むすびつる心もふかさもとゆひにこきむらさきの色しあせずは。とそうして。ながはしよりおりてぶたうし給ふ。ひだりのつかさの御うま。藏人所のたかすゑて。給はり給ふ。みはしのもとに。みこたち上達部つらねて。ろくどもしなじなにたまはり給ふ。その日のおまへのをりびつ物。こものなど。

ねんごろにかくれ給へど又自然に漏ては源氏の見奉り給ふとなりこのところいとわかうつくしげにてといへる上に藤つぼはなどの語なくてはいとまぎらはしく聞ゆ

もり見たてまつる　(釋)奉るのるはりの誤にや下へかけて少し穏がならず

いとあはれと思ひ聞え給ひて云々

(評)ものゝまぎれの端こゝにはじめてあらはれそめたり母に似給へりと聞て幼き心にあはれのかゝりゆくさまげにさもあるべき情なり

うへもかぎりなき御思ひどちにて

(新)藤つぼと源氏とは同く共に帝のおぼしめすどちとなり

あやしくよそへ聞えつべき

(玉)或抄に藤つぼの桐壺更衣によく似給へれば源氏の御母ともよそへ云べきこゝちし給ふとなりといへるよろし

いとようにたりしゆゑ

(玉)うせにし更衣のつらつきまみなどは此源氏君とよく似て有しと

のたまふなり湖月に藤壺と源氏と似給ひてといへるはかなはずにたりしのしはいはゆる過去のしなれば更衣の事ならではかなはずかよひて見え給ふも〔玉〕これも似てといふ意にて藤壺の御顔の源氏君と似て見え給ふよしなり云々にげなからずなん〔玉〕よそへて母と申し子といはんに似げなきにあらずとなり上にあやしうよそへ聞えつべきとあるをうけて然聞ゆるなりさてこの所上よりの文の意をとほしていはゞうせにし更衣のつらつきまみなどこの源氏といとよく似て有しかば又藤壺の源氏と似て見え給ふところもあやしう母子ともよそへいふべきこゝちのすればしかよそへて母と申し子といはんにつかはしからざるにあらずとのたまへるなり〔釋〕此段右の說にてあきらかなり諸注いづれもとき得られたるはなしさてなめしとおぼさでとは更衣を藤壺になずらへ給ふを無禮とはおぼさずして

右大辨なんうけ給はりてつかうまつらせける。どんじき。ろくのからびつどもなど。ところせきまで。春宮の御元服のをりにもかずまされり。なかなかかぎりもなくいかめしうなん。その夜おとゞの御さとに。源氏の君まかでさせ給ふ。さほうよにめづらしきまで。もてかしづき聞え給へり。いときびわにておはしたるを。ゆゝしううつくしとおもひ聞えたまへり。女君はすこしすぐし給へるほどに。いとわかうおはすれば。にげなくはづかしとおぼいたり◎このおとゞの御おぼえ。いとやんごとなきに。はゝ宮。内のひとつ御きさいばらになんおはしければ。いづかたにつけても。物あざやかなるに。この君さへかくおはしそひぬれば。春宮の御おほぢにて。つひに世中をしり給ふべき。右のおとゞの御いきほひは。ものにもあらずおされ給へり。御子どもあまたはらばらにものし給ふ。宮の御はらは。藏人の少將にて。いとわかうをかしきを。右のおとゞの。御中はいとよからねど。え見すぐし給はで。かし

と帝のことわり給ふ意なり、
こよなう心よせ　〔玉〕他の女御更衣たちとはかくべつにまさりて藤つぼへは心をよせ奉り給ふなり
うちそへてもとよりの云々
〔評〕人情まことに然なんありけるさて上に更衣のうせ給ひて後源氏君のかたちのめでたきにめでゝ一度思ひゆるし給へるを竟にこゝにて又もとのごとく御中よからず書なされたりこれかのよしあしの主客の脉なるがます／＼甚しくなりゆくさま味はふべし
よにたぐひなしと見奉り給ひ云々
〔新〕これは帝の藤つぼを見給ふ御心なりあまたの人を奉りつれどかゝるかたち人はなかりしゆゑなり
名高うおはする宮　〔新〕これも同じ藤壺の御かたちの名高きをいふなり右と引つゞけてよむべし此名高きを擧てそれよりもまさる光君をいはん料なり或説に弘徽殿の御腹の皇女たちを云といへるはわろし
ひかる君　〔釋〕容貌のめでたくうつ

づき給ふ四の君にあはせ奉り。おとらずもてかしづきたるは。あらまほしき御あはひどもになん□源氏の君は。うへのつねにめしまつはせば。こゝろやすくさとずみもえし給はず。心のうちには。たゞふぢつぼの御ありさまを。たぐひなしと思ひ聞えて。さやうならん人をこそみめ。にる人なくもおはしけるかな。おほいとのゝ君。いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど。心にもつかずおぼえ給ひて。をさなきほどの御ひとへごゝろにかゝりて。いとくるしきまでぞおはしける。おとなになり給ひて後は。ありしやうにみすのうちにもいれ給はず。御あそびのをり／＼。ことふえのねにきゝかよひ。ほのかなる御こゑをなぐさめにて。うちずみのみこのましうおぼえ給ふ。五六日さぶらひ給ひて。おほいとのに二三日など。たえ／＼にまかで給へど。たゞいまはをさなき御ほどに。つみなくおぼしなして。いとなみかしづき聞え給ふ。御かたぐ＼の人々。世中におしなべたらぬを。えりとゝのへすぐり

くしくして光るがごとき故に光る君と世人の名けたりとなり

かゝやく日の宮　〔釋〕ならび給ひては源氏君に並び給ひてなり御おぼえは帝の御寵愛なりかゝやくは日の盛なるかたちをいふこれも世人のつけたるなり　〔評〕光る君といふに相對へて赫く日宮といへるいとめでたしこれなん此物語の中の主とある人たちなることを先よく心得おくべし

十二にて御元服し給ふ　〔河〕人生て十二を一周といふ此歳冠禮する和漢の例なり禮記曰天子之子十二而冠

ゐたち　〔新〕居にも立にもなり

かぎりあることに云々　〔抄〕一世の源氏元服の儀式は定れる事なりそれに猶事をくはへらるゝなり

御ひゞき　〔釋〕何事にまれ事ある時に世人の甚しくいひさわぐ事をひゞきといふ世の響といふ意なり

所々のきやう　〔抄〕北山抄云所々饗膳之事。王卿。廳女房別納。殿上藏人所。兩寛。諸大夫。二百膳穀倉院屯食五十具廳別納各二十具以上廳和例云々

〔釋〕所々にて饗膳を賜はることなり

穀倉院　〔釋〕無主沒官の田税諸庄の物銅錢の類を納めおきて年中の饗などに充らるゝ所なり

おほやけ事につかうまつれる　〔玉〕すべておほやけざまの事はたゞ定まれるあとのまゝにたがへじとまもるのみにてことに心をいるゝ事はなくこまやかなるかたはなきものなればなり云々

ひきいれのおとゞ　〔玉〕加冠の人をいふ　〔湖〕其日冠をめさせそむる人なりもとゞりを引入る故なり

みづらゆひ給へる　〔拾〕和名抄云唐韻云髻和名毛止々利髻也四聲字苑云鬟和名美豆良一云訓同レ上屈髮也　〔餘〕眞淵云束帶はあげみづらにし直衣にはさげみづらにす源氏今日はあげみづらなりゆひやうは雅亮裝束抄にくはし

大藏卿くら人　〔玉〕これは大藏卿なる人の理髮の役をつかうまつるといへるなれば理髮にあたる詞あるべきになきは聞えがたしされはこれはみぐし上と有けんをくら人とは寫し誤れる歟理髮を御ぐし上といふべきものなりもし又花鳥の說の如く大藏卿にて藏人頭をかねたるよしならばくら人の下に理髮をいへる詞の有しがおちたるかいづれにまれ其詞なくては何事を仕奉るとも聞えず

御やすみ所　〔花〕今案一世源氏の元服にも下侍を以て休所とす西宮抄に見えたり　〔抄〕下侍とは殿上の次を云

御衣奉りかへて　〔花〕童體の時は赤色の闕腋の袍を着す云々源氏君は無位なれば縫腋の黄袍なるべし

おりてはいし給ふ　〔新〕仙花門より東庭に出て拜舞と西宮抄にいへり　〔釋〕堂下におりて帝を拜し給ふなり

皆人淚おとし給ふ　〔釋〕拜舞の樣のおとなびてめでたきを感じていづれも落淚し給ふさまなり堂下にて拜し給ふ故にといふ說はわろかめり

あげおとり　〔花〕わらはにてみめよき人の冠して見おとりする事なり

て。さぶらはせ給ふ。御心につくべき御あそびをし。おふな〳〵おぼしいたづく◎うちにはもとのしげいさを御ざうしにて。はゝみやす所の御かた〴〵の人々。まかでちらずさぶらはせ給ふ。さとの殿は。すりしきたくみづかさに。宣旨くだりて。になうあらためつくらせ給ふ。もとのこだち。山のたゝずまひ。おもしろきところなるを。池のこゝろひろくしなして。めでたくつくりのゝしる。かゝる所に。おもふやうならん人をすゑてすまばや。とのみなげかしうおぼしわたる「ひかる君といふ名は。こまうどのめで聞えて。つけ奉りけるとぞ。いひつたへたる」となん。

ひきいれのおとゞのみこばらに　〔孟〕葵上の母は桐壺帝の御妹なり依てみこばらといふなり

春宮よりも御けしきあるを　（釋）御けしきあるとはきはやかに奏れとおほせらるゝにはあらで内々にてしかせよとそゝのかし給ふを云こゝは葵上を春宮へ參らせよとそゝのかし給ひしを源氏君へ奉らんとて思ひわづらひ給ひしなり

うちにも御けしき給はらせ　〔新〕葵の上を源氏に奉らんのよしを帝へうかゞひ奉りし事をいへり然るを帝此御元服のたよりから此御子の御後見のためにもなどもよほさせ給ふなり

さふらひにまかで給ひて　（釋）上に御休所と有し下侍の所也こゝにて御酒まゐるうち親王の御座の末に源氏君着き給ふ也

おとゞけしきばみ聞え給ふ事　〔玉〕萬水一露に左大臣の源氏に葵上の事をほのめかし給ふをいへりといへるよろし

内侍宣旨うけ給はり傳へて　（釋）内侍の女官帝の宣旨を承り左大臣に傳へて御前へ召すなり内侍は掌侍なりといへり

御ろくの物うへの命婦とりて賜ふ　（釋）祿は加冠を勞ひ給ふ御祿なりうへの命婦は小櫛に御前ちかくつかうまつる内命婦なり云々とあり

白き大うちき　〔新〕袷のうちきを二つ重ねたるを大袿といふおほく袿一かされとかくは袷の袿一つに單を下にかされたるなり云々御ぞ一くだりとは御表衣　御下襲　御表袴と三つをいふべし云々

いときなき云々　（釋）はじめてもとゞりを結ぶを初もとゆひといふ世とは男女の緣の事にいへり一首の意は今加冠したる初もとゆひに末長き

縁を契る心をもむすびこめたりやいかにと問かけ給ふにてむすびはもとゆひの縁語こむるは葵上の事をなり

むすびつる云々　〔玉〕三の句のにもじは結句の下へふくめたる意有てそこへかゝるてにをはなりふくめたる意は紫の色しあせずは仰のごとくもとゆひに長き契をこめ奉らんといふ意なりかく見ざればにもじ聞えがたし　(釋)ふかきあせずなどみな濃紫の縁なりもとゆひは紫の組たる糸なればなり心もふかきとは帝の仰のかたじけなきよしをそへたるにや下句は源氏君の御心だにかはらずはなりと舊注にいはれたるがごとし

ながはしよりおりて　〔花〕御殿より南殿へかよふ廊なり大内の時は此所にきざ橋有て東庭におるゝ道あり引入のおとゞなども此階よりおりて御前の辰巳のかたにて御前に向て舞踏し侍るべし

みこたちかんだちめつられて　〔弄〕源氏の元服に祿を給ふ事は東宮の御元服の時の儀を表するなり其時は諸卿ことごとく賜ふなり

をりびつものこもの　〔細〕をりうづとよむなり折に入たる物なり　〔玉〕こものは籠物なり獻物にはあらず(釋)籠に入たる菓子なり

右大辨なんうけ給はりて　(釋)右大辨なる人承りてそれぞれに仕奉らしめたるなり上に源氏君を鴻臚館へゐて奉りし右大辨なるべし　〔抄〕右大辨勤仕例天慶三年二月十九日源清平

どんじき　〔新〕台記春日詣條屯食幾十具裹飯幾百とあれば屯食をツヽミイヒと有説は誤也屯食は今世に二重の臺といふ物ぞ其遺制ならん

ろくのからびつ　(釋)諸官に賜はる祿を入たる辛櫃なり　〔花〕祿の辛櫃は親王以下の元服にはこれをたてず東宮の御元服の時の事なりそれ故次の詞に東宮の御元服のをりにもかずまされりとあり

そのよおとゞの御さとに云々　(釋)御元服ありし當夜左大臣殿へ源氏君禁中より出て行給ふ也さほうとは葵上と婚禮し給ふもろもろの儀式なり

女君はすこしすぐし給へるほどに　(釋)紅葉賀卷によとせばかりこのかみにおはすればうちすごしはづかしげにさかりにとゝのほりて見え給ふとあるによりて諸注に源氏君の十二にあてゝ十六歳と定められたり　〔湖〕葵上は源氏に四の兄なり此年のましたる事ゆゑ始終葵上には心おかせ給ふとなり　(評)案に葵上の源氏の御心にそまぬさまにいへるは年のたけ給へる故のみにはあらざれどこれも其中の一つにはあればこの說もすつべきにあらず心得おくべし

ものあざやかなるに　(釋)父母いづかたにつけても種姓貴くして他にすぐれ給へるをあざやかとはいへるなりあざやかは俗にはつきりとしたりといふ意なり

よの中をしり給ふべき　(釋)これは帝の御うへを申奉るごとく聞えていともかしこきいひざまなれどもそのかみ攝關の事をかくさまにもいひしなり大臣の威權おもひやるべし

宮の御はらは　〔釋〕宮とは帝と御一腹の三の宮にて左大臣の北方を申すなりその御腹の御子は葵上とこの藏人の少將となりこの宮は後の卷々に大宮としるしたるが御事藏人の少將は頭中將とつけたるが事なり

くらうどの少將　〔釋〕近衞の少將にて藏人頭に補せられたるを云　〔評〕この一段左大臣の威權をかたる序に右大臣の末のいきほひを顯はし且頭中將の傳を始て出せり此人源氏君に相匹ひて何事にもめでたきさまに書たるが始終少しづゝ劣りざまにかゝれたるは卷中の主とある人なればなり正副の筆すぢ心を付べし

あらまほしき御あはひどもになん　〔評〕左右の大臣の御中はよからねど云々せられたるはげにかくあるべき御間がらなりと地より評じたるなりさてかくいふは末にはさはあらで彼此互に御中のわろき事をいはんとて先かくいひおくなりいと心ふかき書ざまなり

さやうならん人をこそみめ　〔釋〕見めとは我物にして明暮にあひ見る事なり此詞次下に多し皆同じ

おほいとの　〔釋〕大殿といふ事なり次々いもじをおとしたるは今皆補ひつ　〔評〕この段藤壺の君を母に似たる人とて戀しのび給へる心やうやう募りて我物として見まほしくおぼえ給ふといふ端を起したり此脉次の卷どもにちら〳〵と見えたるがつひに若紫の卷にいたりて綻ばし出せりさて又こゝに葵上の御心につかぬ事をも插みて後の伏線としたる更にめでたし正妻の心にそまぬからにあだし人にいよ〳〵心の深まりゆく情げにさる事になん有ける

心にもつかずおぼえ給ひて　〔玉〕此上に詞たらず脫たるにやその故はさやうならん人をといふより人とは見ゆれどゝいふまでは源氏君の心を直にいへる語心にもつかず云々は物語の地よりいへる語なればかならず其堺に云々とゝいふ詞なくてはとゝのはずさるは後の人の寫すとておとしたる物かはたもとより紫式部がとりはづして誤れるものか此たぐひなること卷々になり〳〵あるなり

御ひとへ心に　〔玉〕をさなきほどの心は物をたゞ一すぢに思ひて他の事にわたらぬをいふ

おとなになり給ひて後は　〔玉〕元服し給ひて後はといふ事なり

みすのうちにも　〔新〕藤つぼのみすのうちにもなり　〔釋〕上に御ともにはやがてみすのうちにいれ奉り給ふとありし首尾なりそのかみの禮儀思ひやるべし

琴笛の音に聞かよひ　〔新〕琴は藤つぼ笛は源氏の物の音にあつる說よし次下にも似たる事あり凡和漢ともに物の音によりて情をかよはすことおほし

つみなく　〔釋〕源氏君の幼き故にたえ〳〵なるをも何の罪なき御心と左大臣の思ひゆるし給ふなり

もとのしげいさを　〔釋〕もとのとは故の更衣のおはしゝ所といふ意なりみざうしは源氏君のおはします御局とし給ふなり

はゝみやす所の御かた〳〵の　〔玉〕御かた〳〵とは更衣の局と母の里とにつかへし人々をいへるか

さとの殿は〔細〕更衣の里なり後に二條院といふなり

すりしきたくみづかさ（釋）修理職内匠寮なり共に令外の官なり殿舍の破壞をつくろひ工匠の事を司どる職なり

になう〔新〕似る物無てふ語なり六帖に似なき思ひといふ題にて歌どもありみなその意なり

いけのこゝろ〔河〕樓頭題ニ鵁鶄一池心浴ニ鳳凰一白氏文集（釋）この漢文をよみていけのこゝろとはいへるなり他にも例ありさて心といふより廣くといへるは縁なり

かゝる所に思ふやうならん人を云々〔細〕大かた思ふやうなる人をとなりまた藤つぼの心あり〔花〕つひにはねがひのごとく紫上を後には二條院にすませ給ひしなり〔新〕葵の源の御心にいられればなり（釋）案に大かたこの說どものごとき意なり其中に紫上の事はこゝにてはまだあらはれぬ所なれどかの上はすべて藤壺のかはりに見給ふ意なればこゝにその端を發かれしなるべしいとたくみなり

ひかる君といふ名は云々〔新〕前に世の人光る君といへるは其もと高麗の相人がなづけ申しよりいふとの意を爰にてあかすなり語を前後にしていふも文の一つなり兩說なりといふ注は文を心得ぬ人のさだなり〔玉補〕かゝる所に思ふやうなる云々おぼしわたるこの語勢すでに結びのさまなりかくて又光る君云々といひて前の文のこまうどを引かけ又次の卷の書出しにつゞくやうにして結びたるさまいはんかたなく面白しこの結びたるやう漢文にては左傳の七月之卒章藏ㇾ氷之道孟子の能言距ニ楊墨一などによくにたりすべて此書卷々の結びに皆こゝろしたり味はふべし

（評）この說どものごとし舊注はよしなきことのみ多しこの鈴木氏が說は殊にとき得たりといふべしげにも卷々の結びの詞は作者の殊に心せられたりと見ゆる中にこの卷は源氏君の本傳のごときものなるからに殊さらに光る君といふことの傳へを委くして結ばれたるものとおぼしさるは上にもいへるごとくかの相人がいへる事は源氏君の一代のうちにあるべき吉凶禍福をあらかじめ定めたるにて一部の大なる眼目なればば光るといふ名もかれに名づけさせんはおのづからの命數にもあづかるべければ殊にかくいひあらはして結めさて帚木卷に光る源氏云々とかき出べき結構をのこされたるなるべしかへすがへすいみじともいみじくめでたしともめでたき書ざまなりといふべしさて末にとなんとあるは人の物語したるを聞て記したるさまに遁れたるにて云々と其世より今の世まで世人のいひ傳へ來れるなりとなん人のかたりしを聞侍りしとやうに含めのこしてとぢめたるなり此例次々にいとおほし深く用意せられたる事なるべし文の前後の次第は新釋のごとくなるべし

〈舊注〉此卷を帚木と號する事は源氏の君中川のやどりへ方たがへになずらへておはしましたりしに空蟬のつれなくて逢奉らずなりしかば源氏「はゝき木の心をしらでそのはらの道にあやなくまどひぬるかなとよみ給ひしに空せみ「かずならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらずきゆるはゝきゞと返しに奉りし歌にて付たる名なりこれ坂上是則が「その原やふせ屋におふるはゝき木の有とは見えてあはぬ君かなといへる歌をとれるなり帚木とは美濃信濃兩國の境に其原ふせやといふ所にある木なり遠くてみれば帚をたてたるやうにて近くてみればそれに似たる木もなし然れば有とは見れどあはぬ心にたとへ侍り云々

〈新〉凡此物語の始終の樣かの品さだめにこもれり然れば桐壺卷は系譜のごとく此品定は序の如くにてその系譜につゞく品定の中の事は專ら卷の名を負(オフ)すべからずされば源氏の女を懸想(ケサウ)し給ふ始はかのうつせみの君にあれば名とせしにやあらん或說に此物語は作り事ながら又昔有し事をおもかげにして書り五十四帖も有ものかと見ればなくなき物かとすれば有ものなれば此はゝき木の一部の名と夢のうきはしと云名にて始終せりといふは物の例にはかゝはらでみだりに故ありがましき工夫をなせし物にてぞ侍る惣(スベ)て此物語の卷々の名どもいとかろき事よりつけたるを此卷など一つ二つの名にのみふかき意あらんやは古きふみどもの名のやうもみなやすらかにのみからもやまとも有けるをおもふべし又儒佛の書を引ていふなどは例のいふにもたらずさるいと心ありげに古言によれるなどの說は皆々そへたる意なりもとよりの此文の意はさる事を專らとしてかけるにはあらで別に此御世のみだりがはしきをいかで上一人の御こゝろつけかし女のこゝろざし用意などのためにもとて書るは記者の意にぞ侍るべき

〔玉〕源氏君十七歲の夏の事なり此時官は中將なり但し中將に任ぜられし事は桐つぼと此卷との間に有べしさて諸抄に此卷を十六歲とせられたるは誤なりそも〳〵源氏君の齡(トシ)は桐壺卷に十二といへる

より後藤末紫巻に三十九歳のよし見えたる其あひだにはすべて齡をいへることなければ此巻を十六歳とせられたるもたゞかの藤末紫巻より逆にかぞへて定めたるものなるを諸抄の説其間に一年の違ひ有故に此巻に十七歳なりその一年たがへるよしは玉かづらの巻のところにいふべし

○此發端の語は見るに心得べきやうあるなりまづ此帚木巻は細流にもしるされたるごとく此物語一部の序のごとくなるを此發端の語も又一部にわたりて序の如くにて源氏君の壯年のほどの事をまづとりすべて一つに評じたるものなり此巻のはじめのころの事にはあらずいひけたれ給ふとがの多きといふもかゝるすき事といふも皆これより後の巻巻にある事共をさしていへるなりこれより前桐壺巻にはいまださることなしかたりつたへけむといへるすなはち此物語此後の巻々の事どもなりかくてまだ中將などに物し給ひし時といふより其始へ立かへりてその有しやうをつぎ〳〵に語るよしなり

（釋）帚木と名づけたる事は舊注のごとしさて此名にてこと〴〵しきゆゑよしのあるやうにいはれたることゞもは新釋に辨へられたるごとくなるべければ今ははぶきたりさて又此巻のはゝき木の歌はかの是則の歌によりたることは論なきをその本歌のこゝろ猶うたがはしきよしありしかれどもたしかに思ひ定めたる説もなければしばらく舊注のまゝにものしつ顯昭の袖中抄十九の巻にも説ども多く出されたれどいづれもげにとおぼゆるもなし其中に綺語抄を引て二つの義を擧られたるうち「帚木のある杜のあるなり其杜いとしげくてもりの中にはゝき木をおひたりそれを遠くてみればあるやうにて杜の中に行て見れば木のしげりて見えぬなり」とあるや事の情に近かるべからんさて品定をもとゝせずして空蟬の事もて巻名につけたりといふことの説は大かた新釋のごとくならんかされどきはめてはいひがたし

○發端の語の事は玉小櫛にいはれたるごとく源氏君の一世のうちにありし事共を先評じたるにてげに此語一部にわたれりさて此語を結びたる所は夕顏巻の末に「かやうのくだ〳〵しき事はあながち

にかくろへしのび給ひしもいとほしくてみなもらしとゞめたるをなどみかどの御子ならんからに見ん人さへかたほならずものほめがちなるとつくりごとめきてとりなす人ものし給ひければなんあまりもの いひ さがなきつみさりどころなく」といふ所なりされば此巻より夕顔巻の末までは一つづきなる文なるをかりに三巻となしたるものなりそのよしは夕顔巻にこゝの語と引合せてくはしく注せるを見るべしさて此語どもによりて猶考ふるに發端にかゝるすきごとゝいひしのび給ひけるかくろへ事といへるは源氏君の一代のうちの好色事をさしたるやうには聞ゆるものから又この空蟬夕顔の事をさしていへるにはあらじかと思ふよしありさるはかゝるすき事としもいへるかゝるの詞も巻々すべてのこととしてはあまりに廣きに過て聞えたるにかろびたる名をやながさんとあるも帝の御子として受領ばかりの分際なる女に心をつくしてあらぬ所にまどひありき給ふをかろびとはいへりと聞ゆればなり結びの語に夕顔の事を書はてたる後にかやうのくだ〳〵しき事はあながちにかくろへしのび給ひしもといへるも此空蟬夕顔をさしたりと聞ゆるをも引合せておもふべし若紫より次々の巻に見えたる人々はさばかりに賤しきもあらず大かた源氏君のよばひたまふべきほどの人なればさしてかろびたるすぢにはあらず此巻の末に空蟬の君の思ふ心を書たる所などにも夫ある身にて逢奉りし事をばさしもいはずしてたゞ身のほどの賤しきを恥らひたる事をのみむねといへるも貴き賤きかけはなれたるけぢめありし故なるべく見ゆるをも考へ合すべしかくて此巻より夕顔巻までの事どもは其もと雨夜の品定に馬頭がいへりしことより御心つきてさるくま〴〵までおもほしかけたるさまなる事はその脉を次々に引出たる詞どもの中に著く見えたる中に夕顔巻にかやうのなみ〳〵まではおもほしかゝらざりけるをありし雨夜の品定ののちいぶかしくおもほしなるなどいへるをも考ふべし然れば此一つゞきの文には受領ばかりの中の事をまづとり出あらはして品定のなごりをあやなしたる條とすべしかくして見る時はいひけたれ給ふ咎といへる咎も好色の外の事にはあらでこの

空蟬夕顔の外の好色事をさしたりとすべしされど暫く本文には先達の說のまゝにとりて注しつ見ん人猶よく考ふべし

(評)此卷より、夕顔卷までは一つゞきの文なるを三卷に分られたるさまいとめづらかなりさるはいかなる心ぞといふことは今知るべきにはあらざれどかいなでの筆ならば先、桐壺卷に源氏君の傳をかき次に此卷に品定の事をいひさて中川の段をひとつにすべて空蟬卷とすべきことなるをさはあらずして品定につゞけて中川の段をあらはしさて其事の末を截てべちに空蟬卷をたてさて夕顔の卷をかきてとぢめられたるはいと案外なることゝちするにつきておしはかりに考れば例の事をきは〳〵しくせずしてさりげなく書まぎらはされたるにやとぞおぼゆるさるは此品定はあるが中にも心をいれて世にあらゆる女のさがどもをくまなく論じあかしたる所なれば先達のいはれけんやうに實に一部の序のごときものにてふかく心をこめられたる物からこればかりを別にはなちて某の論某の序などやうにものしては餘りけざやかにて女の手してはかなくなつかしく書たる物のさまならねばわざとかくまぎらはして何となく物語のうちにこめたる物なるべしされぱそのさまも雨夜に源氏君の御とのゐ所のつれ〴〵なるに頭中將左馬頭藤式部丞などの何となく來つどひてうちとけ物がたりすることのやうにとりなし猶桐壺の脉をとり出て其前後を大殿の事もてあやなされたるなど物語といふものゝやうあることを螢卷に源氏君と玉かづらの君との打とけ言の中にあらはしたると同じ筆つきなればなりさて其大殿の事より中川の段を引出られたるに俄にはからずして御方達へにとりなして空蟬君をあらはし出その事をばかたりはてずしてなかばにてたちきりてとぢめたるなどわざとしどけなく書まぎらはしたる物とおぼえてかの品定のきはきはしからむことをかいけちておしつゝみたる筆づかひめきたり

○品定のくだりのいみじきことは諸抄にいはれたること多ければいふもさらなる事ながら實に此物語のむねとある所なる故にや殊に作りぬしのざえのほどあらはれてかへす〳〵めでたしそれが中に

も初に長雨のはれまなきをいひおこして物語のしめやかなるべきしたくみをなしおきさて源氏君と頭中將と殊さらにむつれ給ふよしをとき出てうちとけ言のたまふべきくさはひとし次に又雨の脉をあらはしていよ／＼のどかにつれ／＼なることをいひつひに御厨子のふみどもを引出てたはぶれ給ふより此論のはしをおこされたるに左馬頭藤式部丞參りあひてます／＼物語のさかりになりゆくさまなどつゆばかりもすきまなきものなりさて物語する當夜のさまの脉をうしなはじがために一段ごとのきるゝ所に人々のありさまいふ言思ふ心などを挾みあらはされたるまさしくその人をうち見るがごとくにしていはんかたなくめでたしされば其所にいたるごとに當夜のさまをあらはしたる第幾段なりとて評ぜり心をつけて見るべし此脉十二段にしてつひに其論竟たるに藤式部一人をまづ下させて省かれたるなどは殊に心きゝたる書ざまなりといふべしさてまた此品定の大かたのすぢははじめに人の種姓につきて上中下の品ある事をいひ次に女の本上につきてさま／＼の心ばへある事

をいふうちにしか何事もたらひてめでたき女はよに有まじきよしをことわりてよろづ男の見ゆるしてすぐすべき事を何となく挿みていましめられたりさて其次にさま／＼女の難ある事どもを擧てあだ／＼しきとさがなきとの女のやうをとり出てかたみによきあしき事あるよしをあげつらふ中にすべては種姓にもよらずかたちをもいはずたゞまめやかにしづかなる心のおもふきなるを竟のたのみ所に思ふべきよしをいひてよにたらひたることはなかるべき事をふかくしめされたり次にしふねき女のくせをいふ事のついでに女の男に對する心しらひをそれとなくいひ出ていましめられたる所殊にめでたしさて其次に三の事のたとへを引いでてうはべのけしきだちたる女としめやかにまことある女とをくらべいひてなほじちになんよりけるとある所すべて此論のおちゐたる所なりそも／＼女の本上につきたるわろきくせをおしくるめていはゞたゞこのあだ／＼しきとさがなきとしふねきとの三にてこれを一つもぐせざる女は大かた世中にあることなしされば女はとにかくにこれを

つゝしみ男はこれを見忍びんより外に男女のなからひの心もちゐはなきよしをいはんとてこれかれ事をあやなしてさてあだなると實(ジチ)なるとぞ相たのむべき所の大むねなるよしをしめしたるものなりさてその次に人々の昔ありし事を語るやうにしてさがなきとあだなるとの女を對(ムカ)へ擧てそのあるやうを馬頭にいはせてことわり次にはかなき女のためしを頭中將にかたらせざえがりてこち〴〵しき女のさまを藤式部にいはせて興としたるなりこれはた此二(ツ)を反對としたるなりさてそのざゑがる女のことのついでにすべて女の才學だてし或は世間(ヨノナカ)の事を辨へがほするくせのいたくけにくゝよからぬ事をいひてをはりたるこれこの作りぬしの日比の心しらひにてその世の女のざえがりたるをかたはらいたく思ひていましめたるなりこれらの事は猶其所々に評ずるを考へ合せてさとるべしかゝれば此一段にて世中の男女のなからひの有さまをば大かたに書つくされたりと見ゆめればつら〳〵委しく見ん人は敎(ヲシヘ)とも戒(イマシメ)ともなさばなること多かるべしかしさはいへ作りぬしの心はしかひたむきに敎ぞ戒ぞなどきは〳〵しう書たるにはあらでなか〳〵さる筆つきをかくさんとてさま〴〵にまぎらはしたる物なれば舊注のごとく敎戒にとりなし儒道にいひよせ佛法にしひつけなどせんことはいとあぢきなくさりとてまたおしなべたる昔ばなしのつらにいひなしてさばかり作りぬしの心をこめられたる事をたゞあだめきめなれたる打つけのすき事せん媒(ナカダチ)となるやうに評(サダ)したらんはいとうもれいたくあたらしきことなり見ん人ふかく心してあぢはふべし

○昔よりの注どもに品定にいへる女のくせを卷々に見えたる人々にあてゝ藤壺にあたれり葵上にあたれりなど注せられたるは一わたりいはれなきにもあらざれどしかさしつけて此事はそれにあてん此人は彼にあてんとてかゝれたるさまには見えざればかたそばあたりたるやうなるもいひもてゆけば又かたはらあたらぬ所ありてみながらかなへりと見ゆるはひとつもなしされば大かたはいたづら事めきたれば今はさるすぢどもをば皆はぶきたりしかれどもまづかくさま〴〵の女のさがを論(アゲツラ)ひ

たるはこれをおしひろめて源氏君にさま〴〵の人人を相對へてその心ばへのあるやうを見すべきくさはひとは見えたればその源因とは見るべきなりさてまたこれに一段二段三段としるしもてゆきてつひに十八段にいたりて十八段の品定などいふ事ふるくよりいはれたることなれどこれはた一條のおちゐる所々かの段のぢやうのやうには見えぬうへに上にいふがごとく事のすぢも段ごとにかはればさばかりくはしくいふべくもあらずされば今は又それをも省けり但し一事のきるゝ所には例の標をつけて彼此はなれたる事のさまのみをかりそめに示しつ

○品定と空蟬夕顏の事とはいたくもてはなれたるごとく見ゆれどさにはあらずかの馬頭がいへりしことより源氏君の御心つきてさるあやしき所にもあくがれ給ふさまに書なしたる物なる故に所々にそのつなぎの詞を挾みて品定の段とかけはなれぬやうにかゝれたりされば〳〵しけれどその所々にて其脈なることを評じあらはせり其中に夕顏君の事は品定の時頭中將のかたり出られたる事なれば品定の次にまづかき出べきことなるをさはあらずして先空蟬君をあらはし次にゆくりなきさまに夕顏をあらはされたる筆づかひさらにめでたし大よそつくり物がたりは打見るよりかゝるおもふきぞとたゞうどの目にも末のさまの見えしらるるはいとあさはかなるものなるをかくとりかへて思ひかけぬさまに物するにてこそ其書のめづらしさもいとゞいみじくはおぼゆるなれ見ん人さる意して作りぬしのよにぬけいでたるかど〳〵しさをあぢはひしるべしかゝる事ども猶他にもおほし

○空蟬と夕顏とは同じほどの人なるを相對へて擧たる中に一人は用意いとこまやかにふかくしてわろかめるかたちをもさるかたにとりなし世中のありさまをもふかく思ひしりて物のあはれもいみじきに心のみさをもたゞならぬさまにとりなし一人はかたちをかしくおほどかに打とけてさしたる用意もなくたゞはかなげにこめきたるさまにかゝれたるは反對の法なりさていづれも同じ夏の事なる故に空蟬といひ夕顏といへるも心あるに似たりさて又これらの人々は物語のむねとある人々にもあ

らざるからに空蟬は國へくだりたるよしにて事をたちきり夕顔はうせて玉かづらを殘しとゞめたるさまにして末の物語の伏案とせられたりさて空蟬は關屋卷に其終をかゝれたるは源氏君の須磨よりかへり給ひて人々をもらさずとふらひ給ふ事のついでに其末をとぢめたるなり夕顔は玉かづらの卷にいたりてかの頭中將のいどみの末の脈をとり出べきためばかりにして終れるなど皆とくはぶきてむねとある人の事をかたらんとてなりこれらまづよく心得おくべし

○桐壺卷と此卷の品定とはこの物語の一部の發端なるよしは先達もいはれたるがごとし其中に桐つぼは經品定は緯のごとしさるは桐壺はむねと源氏君の傳にてそのはじめよりの事を年月にそへて語るなれば經也品定は專ら人事のうへをかたるなればこれ緯なりおほよそ世間のありさまは經には月日のおのづから過ゆき緯には人事のこゝろとなり出るにてさま〴〵の物語どもはいでくるなれば先このたてぬきの大かたをあらはし定めおくにぞ有けるこれは作りぬしのしか思ひてかゝれたるにはあらざめれどたがはぬ事なればちなみにいふなり

○桐壺卷と此卷の品定とは發端の卷なればにや文章の語のはこびいとむつかしき所おほくしてあやにいりくみたる所などはふとさとりかぬる類ひもありこれは作りぬしの意してかゝれたる事にやあらんされどよく〳〵其語のうつりを考へつゝ見ればいひしらずめでたき所も又おほし中川のくだりよりは專ら物語にうつれる故にや文の語いとすがすがしくして大かたにいりくみたる所はすくなしこれも作りぬしの意ありし事かはたおのづから然るかしらねどもとにかくにあやなしたるは文ありてめでたくすが〳〵しきはかはらかにてめでたし

○此卷に源氏君と紀伊守との問答の所二所あるにいづれも問答のきふなる所にいたりてはこれかれの語の中にさかひなくおしつゞけてかゝれたるにその人のいふことゝきはやかにわかれたるいひしらずめでたしすべて御國言の文は漢文とは異にてこの問答のかさなりてきふなる所殊さらに書とり

にくゝして事情（ココロ）をそこなふこと多きものなるをかくあざやかにかゝれたるはいと〳〵ぬけ出たる文かきなりけり猶かやうの所々は次の巻々にもいと多し心をつけて見ならふべし

光る源氏。名のみこと〴〵しう。いひけたれ給ふとがおほかなるに。いとゞかゝるすきごとゞもを。すゑの世にも聞つたへて。かろびたる名をやながさん。としのび給ひけるかくろへごとをさへ。かたりつたへけん。人の物いひさがなさよ。さるはいといたく世をはゞかり。まめだち給ひけるほどに。なよびかにをかしきことはなくて。かたのゝ少將にはわらはれ給ひけんかし□まだ中將などにものし給ひし時は。うちにのみさぶらひようし給ひて。おほいとのにはたえ〴〵まかで給ふを。「しのぶのみだれや。とうたがひ聞ゆることもありしかど。さしもあだめきめなれたる。うちつけのすき〴〵しさなどは。このましからぬ御本上にて。まれにはあながちにひきたがへ。心づくしなることを。御心におぼしとゞむるくせなん。あやにくにて。さるまじき御ふるまひも打まじりける」ながあめはれまなきころ。内の御物いみさしつゞきて。いとゞながゐさぶらひ給ふを。おほいとのにはおぼつかなくうらめしと

ひかる源氏名のみこと〴〵しう
〔玉〕此下にてもじをそへて心得べし〔花〕この發端の詞は桐壺卷の終の詞に光る君といふ名はこまうどのめで聞えてつけ奉ると書るをうけていへるなり（釋）この御説のごとく桐壺卷より續きたる文の脉也こと〴〵しうは光るといふ名の事々しきよし也

いひけたれ給ふとが〔玉補〕此とがを師の好色のとがと解れたるはいかゞ好色の外のとがなるべしかの須磨に流され給ふ時の世の風説も好色の過のみにはあらざりしやうの類ひなり若好色のみのとがとしては下のいとゞといふ詞聞えがたし〔玉〕ひかるといふにけたれといへるおのづからの文のにほひなり

いとゞかゝるすき事どもを云々
〔玉〕かゝるすきごとゝいふより名をやながさんといふまではその時に源氏君のみづからおぼせる心をいへる也（釋）すきごとゝいへる

卽好色の事なり いひけたれ給ふ咎多かるうへに又かゝる好色事をし給へりと後世までも聞傳へてかろ〴〵しき名をや流さんとみづから思しつゝしみて深くひめ給へる隱事をさへ語り傳へたる世の人のものいひはさがなきものぞといふ意也さてそのかくろへ事は これより次の卷々にしるしもてゆく事どもをさしたる也

さるはいといたくよをはゞかり云々 (釋)さるはといふ辭こゝなるはいさゝか異にて されどさはいへなどいふ意に近く聞ゆ

なよびかにをかしき事はなくて 〔玉補〕是は卷々にある歌をおとしめいへると同意にて 源氏君の事をかくいふは卽作者の卑下にて此物語の作りざまのつたなくをかしからぬよしを下にことわりたる也かたのゝ少將いせ物語などのふりとはかはれるよし也

かたのゝ少將 〔花〕淸少納言の 枕草子に物語の名ども出せる處にこまのゝ物語かたのゝ少將とあり (釋)この物語今は世に傳はらずおもふにあだめきたるさまなりしなるべし 宗祇云作り物語の人にて作り物語の人に對する事面白くかけるなりといへりさる事なり

まだ中將などに 〔玉〕上の發端(ハジメ)のすべての語をうけて其始つかたよりの事どもをこれよりかたりはじむるなり まだといふも其始へ立かへりていふ故なりなどゝいふもはじめつかたをひろくいへる詞也云々

さふらひようし給ひて (釋)このさぶらひは體言なり伺候とのゐなどいはんがごとし俗言にいはゞ禁中の御番をよくし給ひてといふ意なり

おほいとのには 〔細〕桐壺にも內ずみのみこのましうおぼえ給ふ五六日さふらひ給ひておほい殿には二三日などたえ〴〵まかで給ふとあり (釋)この御說のごとくきりつぼの卷の脉をうけてつがれたる所なり

しのぶのみだれやと 〔湖〕奥入「春日野のわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず 內裏にていかなるみだれ心もあるならんと葵上がたには思ひうたがふとなり

さしもあだめきめなれたる云々 (釋)さしもはこのましからぬへ係(カヽ)る語脉なり此段のてにをはいと紛らはしさをひとわたりいはゞ宗祇注にかやうに人の疑ひ思ひしかども光君の御心にはなびきやすき人に心とめ給ふことなき御本上なるによりさもなかりけりといふ義也といへるやよろしからんされどもさもなかりけりといふにあたる詞なければ打つけにさは聞えがたしされぱしばらく御本上にてといふ下にさはなかりしかどもまたと云ふことを加へてきくべしこの處大かた脫文あるべくおぼゆ

御本上 (釋)本上は本性の借字にて几帳を木丁とかく類ひ也 〔餘〕荀子性惡篇禮積(ノ)僞(ニ)者豈人之本性也哉(ナランヤ)

まれにはあながちに (釋)まれにはひきたがへあながちに心づくしなることをとつゞく語脉なるを打かへしてかくいふは 例の文法なり引たがへとはうちつけのすき〴〵しさなどは好ましからぬ御本性に引たがへといふ意也

おぼしとゞむるくせなんあやにくにて (釋)なんはあやにくへのみ係る辭のごとくなれどさては下のけるといふにかなはざれば 猶打まじりけるへかゝる辭と見るべしあやにくにては心づくしなる事をさるまじき事とはおぼす物からなほあやにくにてといふ意なり

さるまじき御ふるまひも打まじりける〔玉〕これまでの文中將などにて物し給ひしころのさまをひろくいへる也 此巻の時のことにはかぎらず〔細〕此段は悉皆源氏君の本性を書あらはし侍る也云々〔新〕なりがたきをしひて懸給ふ御くせ故にうつせみ藤つぼなどの有まじき御しわざもありし也

長雨はれまなきころ〔釋〕五月雨のはれまなきころなる事下の中河の家のさまにてしられたりこの段下の品定の事をいはんとての發端なり

御ものいみ〔釋〕何事にまれつゝしみ給ふべき事ある時に人の出入をとゞめて齋戒し給ふを物忌といふこゝはさることのさしつゞく故に源氏君の里に出給はずして禁中にながく居給ふ也〔玉〕上に内にのみさふらひようし給ひてとあるを此ほどは御物いみのさしつゞきていよ〳〵長居し給ふなりすべていとゞといふ詞はみな此意をもて見るべし

よろづの御よそひ〔釋〕よろづのとは御裝束よりはじめてもろ〳〵の御調度までをいふなるべし

たゞこの御とのゐ所の宮づかへをつとめ給ふ〔玉〕御とのゐ所は禁中にて源氏君のおはする所なりすべてつとむとは俗言に精出してするといふ意なり俗にいふとはいさゝかたがひ有〔釋〕源氏君の御とのゐ所へ宮づかへをつとめ給ふといひて左大臣殿の源氏君をかしづき給ふさまを戯れがてらきかせたるなり

宮ばらの中將は〔釋〕頭中將の御母は桐壺帝の御妹三宮なるからに宮腹の中將といへるなりこゝよりむつれ聞え給ひけるといふまでは頭中將の源氏君にしたしきゆゑを挿みたるにて別に一段なるものから下のうちとけごとの品定をとき出んとのしたくみなり心をつくべし

右のおとゞの云々すみかは〔玉〕頭中將のすみか也男の女の許へ通ふをすむといひて此すみかはかよひすむ所といふこと也 さればいたはりかしづき給ふといふも頭中將をなり

この君も〔釋〕源氏君の葵上の御心につかぬにむかへて此君もとはいへるなり 物うくは心のすゝまぬ也

すきがましきあだ人なり〔釋〕本妻を物うくして外に通ひ給ふことあるよしをほのめかしかつは次の品定を引出んとてかくいへる也實にあだ人なるよしにはあらず只若き人の勢ひを戯れて評じたる語と見るべし

我かたのしつらひ〔釋〕我かたとはおほい殿にて頭中將の住給ふ所をいふしつらひは家内のかざりなど也 まばゆくしてはきら〳〵しく目もかがやくばかりなるをいふ

がくもんをもあそびをも〔釋〕がくもんは漢文章を學び給ふことあそびは管絃を習ひ給ふ事也

まつはれ〔釋〕絲の物にまつはるゝによせて人のむつましく立はなれぬをいへる語なり

かしこまりもおかず〔細〕へだてなくむつび給ふ故におのづから禮儀をも忘れて伴ひ給ふと也 是則品定の物語など打とけたることの始にかけるなるべし

つれ〴〵とふりくらして云々
（評）上に長雨はれまなき比とかき出たる脉を再びこゝにあらはして打とけ言の物語をしめやかにせんけしきとせられたるいとめでたし

おほとなぶら　（新）式にも夜もすがら御寢所に有ともし火を御殿油と書たりおほとのあぶらののあ反ななればおほとなぶらといふ

いろ〳〵の紙なるふみ　（釋）艷書はかされの薄やうにかくゆゑにいろいろの紙なるといへるなり

さりぬべき　（湖）中將に見せてもさもあるべきをば見せんと也

かたはなるべきもこそ　（細）其中に見苦しきも有べきと云下の心は興あるふみをばかくし給ふ也

そのうちとけて云々　（釋）あまりにうちとけたるふみは人に見られてはかたはらいたき物なればしか源氏のおぼされんはゆかしく見まほしとの意なり

おしなべたる大かたのは云々

おぼしたれど。よろづの御よそひ。なにくれとめづらしきさまに。てうじいで給ひつゝ御むすこの君だち。たゞこの御とのゐ所の宮づかへをつとめ給ふ▢宮ばらの中將は。中にしたしくなれ聞え給ひて。あそびたはふれをも。人よりは心やすく。なれ〳〵しくふるまひたり。右のおとゞのいたはりかしづき給ふすみかは。この君もいとものうくして。すきがましきあだ人なり。さとにても。我かたのしつらひまばゆくして。君のいでいりし給ふに。うちつれ聞え給ひつゝ。よるひるがくもんをもあそびをも。もろともにして。をさ〳〵たちおくれず。いづくにてもまつはれきこえ給ふほどに。おのづからかしこまりもおかず。心のうちにおもふことをもかくしあへずなん。むつれ聞え給ひける▢つれ〴〵とふりくらして。しめやかなるよひの雨に。殿上にもをさ〳〵人ずくなに。御とのゐ所も。れいよりはのどやかなるこゝちするに。おほとなぶらちかくて。ふみどもなど見給ふついでに。ちかきみづしな

る。いろ〳〵のかみなるふみどもをひきいでゝ。中將わりなくゆかしがれば。さりぬべき。すこしは見せん。かたはなるべきもこそ。とゆるし給はねば。そのうちとけてかたはらいたし。とおぼされんこそゆかしけれ。おしなべたるおほかたのは。かずならねどほど〳〵につけて。かきかはしつゝも見侍りなん。おのがじゝうらめしきをり〳〵。まちがほならん夕ぐれなどのこそ。見どころはあらめ。とゑんずれば。やんごとなく。せちにかくし給ふべきなどは。かやうにおほざうなるみづしなどに。うちおきちらし給ふべくもあらず。ふかくとりおき給ふべかめれば。これは二のまちの心やすきなるべし。かたはしづゝ見るに。かくさま〴〵なるものどもこそ侍けれ。とてこゝろあてに。それか。かれか。などとふ中に。いひあつるもあり。もてはなれたる事をも。おもひよせて。うたがふもをかしとおぼせど。ことずくなにて。とかくまぎらはしつゝ。とりかくし給ひつ。そこにこそおほくつどへ給ふらめ。

(釋)數ならねどゝは源氏に對して中將のわが身を卑下したる語なりなみ〳〵のふみはほど〳〵におのれらも女と書かはして見侍るべしと也

まちがほならん夕ぐれなどのこそ〔玉〕夕暮などまちがほならん文こそといふ意之まちがほは文のさまをいふ也夕暮へかゝれる詞にはあらずさてまちがほといへるはまつよしをあらはにはかゝで其心をかすめたるをいふ也

かたはしづゝ見るに　〔玉〕これは必見せ給ふにと有べき也其ゆゑは上のゑんずればといへるはこゝへかかる言なるに見るにといひてはゑんずればのかゝり所なくてとゝのはずにもじも次の語にかなはざれば也云々　(釋)此說いはれたりさらば上のやむことなくもかたはしづゝ云々へかゝる語と見るべきにや止事を得ぬ意なりこれを例の尊きかたの語としてはせちにといふにつきなく聞ゆべし

それかかれかなど
(釋)其人の文か、かの人のふみかと頭中將のとふ中にといふ意也
そこにこそ　〔玉〕そこは其所にて今の世にも人にむかひて其許といふに同じ
聞え給ふついでに　(釋)このにもじはるかに下なるとうめきたるけしきもはづかしげなればといふ所へ係る也甲乙の點つけたるをよくこころえてよみ味ふべし
女のこれはしもと　(釋)しもは助辭なりこれはとり出て難のつけられぬよき女は世にありがたしといふ意也かなは歎息したる也　〔玉〕こゝより品定の始也しなさだめといふ名目もはやく物語のうち夕顔巻に見えたり
てはしりかき　〔玉〕なさけにと讀きりてはしりかきとよむべしなさけのために手をはしりかく也。かも清くよむべし云々
なりふしのいらへ　(釋)なりふしにつけたるふみのいらへ歌のかへし

すこし見ばや。さてなんこのづしも心よくひらくべき。とのたまへば。御覧じどころあらんこそかたく侍らめ。など聞え給ふついでに(甲)女の。これはしもと。なんつくまじきはかたくもあるかな。とやう〳〵なん見給へしる。たゞうはべばかりのなさけに。てはしりかき。をりふしのいらへ心えてうちしなどばかりは。ずゐぶんによろしきもおほかり。とみ給ふれど。そもまことにそのかたをとりいでんえらびに。かならずもるまじきは。いとかたしや。わがこゝろえたる事ばかりを。おのがじゝ心をやりて。人をばおとしめ。かたはらいたきこともおほかり。おやなど。たちそひもてあがめて。おひさきこもれる窓のうちなるほどは。たゞかたかどをきゝつたへて。こゝろをうごかす事もあめり。かたちをかしくうちおほどき。わかやかにてまぎるゝことなきほど。はかなきすさびをも。人まねに心をいるゝ事もあるに。おのづからひとつゆゑづけてし出ることもあり。みる人おくれたるかたをばいひかくし。

などを心得てする也うちは發語
ずゐぶんによろしきも　〔河〕其人の分にしたがひてよろしき也
そのかたを　〔玉〕そのかたとは上の手はしりかきをりふしのいらへうちしなどするたぐひをさしていふ也
かならずもろまじきは　〔釋〕右の二くさの事を撰ぶに必定もろまじく取入んほどの人は有がたしと也
わがこゝろえたる云々おほかり　〔玉〕これは上のうはべばかりの云々のたぐひなる女に多くある事ぞといふ也別に一種にはあらず　〔釋〕心得たる事とは銘々にならひえたる藝能のたぐひを云それを自讃して人をあなどりおとしむる也
おやなどたちそひもてあがめて　〔釋〕父母など其女につきそひ有ていつきかしづきあがむるをいふ
おひさきこもれる窓のうちなる　〔河〕長恨歌楊家有レ女初長成養在二深窓一人未レ識　〔玉〕おひさきこもれるとは年わかくて行さきの多く長きをいふわかき人をよごもれるといふも同じさてこもれるといひて窓の内とつゞけいふはおのづからの文のにほひ也さて窓の内といふは長恨歌の語によりて人の女の親の家にあるほどをいふ詞也實に窓の内にすめるよしにはあらず
たゞかたかどを　〔釋〕かどは才の意なりかたかどは才藝のかたはし也
かたちをかしく打おほどき　〔釋〕をかしくはかたちのよきをいふおほどきは大やうなる意にて俗言におぼこといふがごとく心のつかぬさまをいふなり
まぎるゝ事なきほど　〔湖〕親のもとにて外の所作もあらぬほど也
人まねに心をいるゝ　〔釋〕人のするを見まねにふと心をいれて習ふこともあるに心ともなくおのづから一藝ならひとる意なり
ゆゑづけて　〔玉〕何にまれ一藝などをば大ていにしいづる也
まねびいだすに　〔玉〕すべてまねぶとはその有さまのまゝをかたるをいふ
くたさん　〔玉〕腐さん也下さんにはあらず
みおとり　〔釋〕見そめたる時よりやう〳〵に劣るを見おとりと云
うめきたるけしきもはづかしげなれば　〔釋〕甲乙の點つけたる語脉をつぎて心得べしうめきたるとは心の不平を歎息したるさまなりはづかしげは諸注頭中將の恥らひ給へるさまにとかれたるを餘滴に例どもを多くあげて中將の體の源氏君にはづかしく見ゆる意にいへるやかなふべからんうめきたるけしきとあるは恥たるさまとはいたく異なれば也
いとなべてはあられど云々　〔湖〕中將の物語をこと〴〵くおぼしあはするにはあられど也
ほゝゑみて　〔玉〕たみ詞に含笑なりといへるよろし

そのかたかどもなき人は　〔玉〕上にたゞかたかどを聞つたへてといひひとつゆゑづけてなどいへるはかたかどある女なるをそればかりの能もなき女も世に有べきにやといひ給ふなり

とるかたなく口をしきいはと云々（釋）とり所なくわろきといふなりとおぼゆばかりすぐれたるとは共に少くして大かた同じほどならんといふ也何事にかぎらず世中のありさまげにかくなん有けるツ

（評）この品定の段は初に先女の難なきは大かたよに有まじきといふより書出られたりそは新釋に是ぞ下の數々の論に冠らしむる語にて條々この理をつくせりさて終にれぢけがましきおぼえだになくば物まめやかに靜なる心の趣ならんをぞつひのたのみ所には思ひおくべかりけるてふにて結びをはれりといはれたる如くしなさだめとはいへども大かた定らぬ方を主として論ぜられたりさてまづ才藝の聞え

さてありぬべきかたをばつくろひて。まねびいだすに。それしかあらじ。とそらにいかゞはおしはかり思ひくたさん。まことかと見もてゆくに。見おとりせぬやうはなくなんあるべき　とうめきたるけしきも。はづかしげなれば。いとなべてはあらねど。われもおぼしあはする事やあらむ。うちほゝゑみて。そのかたかどもなき人はあらんやとの給へば。いとさばかりならんあたりには。誰かはすかされより侍らん。とるかたなくくちをしきと。いうなりとおぼゆばかり。すぐれたるとは。かずひとしくこそ侍らめ。人のしなたかくうまれぬれば。人にもてかしづかれて。かくるゝことおほく。じねんにそのけはひこよなかるべし。中のしなになん。人の心々おのがじゝのたてたるおもふきもみえて。わかるべきことかた〴〵おほかるべき。しものきざみといふきはになれば。ことにみゝたゝずかし。とていとくまなげなるけしきなるも。ゆかしくて　そのしな〴〵やいかに。いづれをみつの品におきてかわく

べき。もとのしなたかく生れながら。身はしづみ。くらゐみじかくて。人げなき。またなほ人の。かむだちへなどまでなりのぼりたる。われはがほにて家のうちをかざり。人におとらじとおもへる。そのけぢめをばいかゞわくべき。と問給ふほどに。左の馬のかみ。藤式部丞。御物忌にこもらんとてまゐれり。世のすきものにて。物よくいひとほれるを。中将まちとりて。このしなじなをわきまへさだめあらそふ。いときゝにくきことおほかり□なりのぼれども。もとよりさるべきすぢならぬは。よの人の思へることも。さはいへどなほことなり。又もとはやんごとなきすぢなれど。世にふるたつきすくなく。時世うつろひて。おぼえおとろへぬれば。心は心としてことたらず。わろびたる事ども出くるわざなめれば。とり〴〵にことわりて。中のしなにぞおくべき□ずりやうといひて。人の國のことにかゝづらひいとなみて。しなさだまりたる中にも。またきざみ〳〵ありて。中の品のけしうはあらぬ。え

あるもまことにすぐれたるは有がたきよしをいひ次に此段に至りて種姓につきて品格のけぢめをいへる也その中に源氏君と頭中將との問答のありさまを委しくあらはしたるはつれ〴〵なる雨夜に打とけてかたらひ給ふ情景をうしなはじがために一段ごとの切るゝ所にそのけしきを挿み入れたるにて例のいとめでたき筆つきなり此脉を先よくわきまへ置てよむべしさて又この段は玉小櫛にもいはれたるごとく上中下三つの品をいふ中に上が上と下が下とははぶきてもはら中の品の事をいはんしたくみなる故にまづくちをしきというなるとを等しくとり出てそれをばしばらく傍へはぶきおきて中の品をとり出んとしてその中にも又さま〴〵の故ありてひたむきにはいひがたきよしの難をまうけて源氏君の詞として抑へたる也よく〳〵味ふべし猶次々にいふべし

人のしなたかく生れぬれば（釋）人

の種姓貴く生れたるはしたがふ人々に崇められてわろきをもかくるゝものなればおのづからそのけはひこよなくめでたきかたに見ゆる意也
おのかじゝのたてたるおもふきも云々　（釋）中品なるはさして人にもてあがめらるゝばかりもあらずおの／＼たてたる志のおもふきも見えてわかるべきと也　〔玉〕よしあしの見えわかるゝこと也上文に上品の人はかくるゝ事おほくといへるに對へて見るべし
いとくまなげなるも　〔新〕中將殘る隈なげにのたまへば猶此事委くとかん事をゆかしみおぼすまゝに問を設出てとかしむる也さて其品々やいかにとは右のごときは一わたりの品也猶それが中にもきざみ／＼こそあらめとてとひはげますさまなりくまは隈曲などの字を書て入めぐりたる所又陰ふかく隠れたる所などをいふ
いづれを三の品におきてかわくべき　（釋）人の品たかくといひ中の品といひ下のきざみといふをうけて三の品といへり
なほ人の　〔細〕諸大夫などの時を得て次第に昇進して公卿までなりのぼる人也　（釋）なほ人こゝにては地下をいふ
左のうまのかみ藤式部のじよう　（評）この二人をあらはし出されたるいと／＼めづらしこの品定源氏君と頭中將とのみにてはいとさう／＼しければこの二人をそへてにぎはゝしくしたる也然るに却て馬頭主となりて物うちいひ主とあるべき源氏君はなか／＼に打ねふりなどし給へるさまにかゝれたるさらにいとめづらしくをかしさてまたこの二人の事も後の巻々にすこしは出さるべきをさもなくしてたゞこの品定にのみむれと物いひたるばかりなるも思ひの外のこゝちしていとめづらし
御物いみにこもらんとて　（釋）すべて物忌は外に出ず家内にのみとぢこもり居る事なる故に籠るといふ也こゝは源氏君と共にこもりて御つれづれをなぐさめ參らせんとてといふ意也
世のすきもの　〔新〕今の世にてのすきものと也さてこゝにては好色のみを云にあらずさかしく風流なども有をいへり
ものよくいひとほれるを　〔玉〕深くこまかなる所までよくゆきとほりていふなり
いと聞にくきことおほかり　〔玉〕よの女のよきあしきをいふ故也
なりのぼれども云々　〔細〕左馬頭の申也前の二の品を評ずる也惟光がむすめ藤内侍のすけなどにあたれり　（釋）さるべきすぢならぬはとは公卿になるべき種姓ならぬ也さはいへど猶こと也はさはいふものゝ世人のおもふ所もとよりの公卿とは一段ひきく思ふよし也　〔玉〕さはいへどはいづこにても俗言に何といふてもといふ意也
又もとはやんごとなき云々　〔細〕これは種姓よき人のおとろへゆくをいふなり末摘花にあたれり　（釋）舊注どもにこの品々の女の事を末の巻に見えたる誰にあたれりとやうにいはれたる一わたりさることなれどかならずしもこゝの論にひし／＼と打あはせてかゝれたるにもあらざればしかひたむきに定めてはたがふことゞもおほしされば只世にあらゆる女のくさ／＼をこゝに論じおきてつぎ／＼に其おもかげの人をあらはす種子とせられたりとのみ見てあるべしされば次々にもさる説は大かたはぶきつ

心は心として　〔湖〕わが心はなほむかしよかりし時の心ながら家まづしければするわざも事たらはぬ也
とりどりにことわりて　〔玉〕こゝはなりのぼれども云々ともとはやん事なき云々とをそれぞれにことわりて也
ずりやうといひて人の國の事に　〔孟〕受領とは諸國の守をいふ國衙庄園の事をとり行ふもの也　〔釋〕人の國の事とは京ならぬ他國の事にあづ
かるをいふかゝづらひはかゝりあひといはんがごとし受領をいやしめたる書ざま也
しなさだまりたる中にも　〔湖〕受領の品に定りながら又次第々々ありてと也　〔玉〕きざみぐは段々の有て也
中の品のけしうはあらぬ　〔玉〕けは異にてあやしからぬ也云々　物のさしもあしからぬをけしうはあらずといふ也
えり出つべきころほひなり　〔釋〕國の守介は外官なる故に内官よりはこよなく賤しめたること也しかれども他國へ出てみづから政を執行ふゆ
ゑにおのづから勢ひもつよく家も富さかえけるによりて後にはいとたふとくなれりこの作者の時も大かたは昔のまゝにはあらざりしさま卷
の中所々に見えたりさるからにころほひなりとはかけるなり心をつくべし世の勢ひを見るにたること多かるべし
なまなまの上達部よりも　〔玉〕俗言になまじけの公卿といふことなり公卿といふばかりにて世のおぼえも何も公卿のやうにもあらぬをいふ次
の非參議の云々と相對へて見べし
非參議の三四位どもの　〔玉〕いまだ參議に任ぜずして公卿にあらざる三位四位の人どもをいへりつねには位を以て三位以上を公卿とすること
もあれどこゝは官に就て參議以上を公卿としてそれに對へていへる也なまなまのかんだちめよりも非參議のといへる語の勢ひをもて知べし
青表紙本には三の字なしそれによれる本はひがこと也かならずひろくゆるやかに三四位とあるべき語也四位とかぎりていふ所にはあらず
やすらかに身をもてなし　〔玉〕公卿にあらざればよろづ心やすき也
思ひかけぬさいはひ　〔釋〕かしこき御あたりに近づき奉りて御子うみ奉る類ひをいふ
すべてにぎはゝしきに　〔玉〕すべてとは上の受領の事をも合せていへり　〔釋〕さらばすべて富たるに依て女の品は定まるなるべしとの意也に
ぎはゝしきとは家の賑はしく富たるをいふ
こと人のいはんやうに云々　〔玉〕今馬頭のいへるはさらににぎはゝしきをよしといふにはあらざる物を其意を得ずして仰らると中將の源氏君
にいふ也源氏君はよくこゝろを得給ふべき事なるに心もえぬこと人のいはんやうにと也色ごのみならぬ人のいはんやうにといふ注はひがご
と也　〔釋〕この處少しまぎらはしもしくは源氏君はにぎはゝしく富榮え給ひながらさもあらぬこと人のいはんやうにといふ意にもあらんか
猶考ふべしさてにくむといふは何れにしてもたゞかりそめにくむまねする意なり實ににくむにはあらず此所當夜の物語のさまをあらはし
たる第二の段なり
もとの品時世のおぼえ打あひ　〔釋〕此段は上が上の品をいひてそれをば打おき次に下が下の中にも思ひの外にめづらしき事あるをいへり反對

りいでつべきころほひなり。なゝ〳〵の上達部よりも非參議の三四位どもの。世のおぼえくちをしからず。もとのねざしいやしからぬが。やすらかに身をもてなしふるまひたる。いとかはらかなりや。家のうちにたらぬ事などはたなかめるまゝに。はぶかずまばゆきまで。もてかしづけるむすめなどの。おとしめがたくおひいづるも。あまた有べし。みやづかへにいでたちて。おもひかけぬさいはひ。とりいづるためしどもおほかりかし。などいへば。すべてにぎはゝしきに。よるべきなゝり。とてわらひ給ふを。こと人のいはんやうに。こゝろえずおほせらるゝ。とて中將にくむ「」もとのしなときよのおぼえうちあひ。やんごとなきあたりの。うち〳〵のもてなしけはひ。おくれたらんはさらにもいはず。なにをしてかくおひいでけん。といふかひなくおぼゆべし。うちあひてすぐれたらんもことわり。これこそはさるべきことゝおぼえて。めづらかなる事。と心もおどろくまじ。なにがしがおよぶべきほど

の文法なり玉小櫛にこれをも中の品のうちなりといはれたるはいさゝかたがへり

うち〳〵のもてなしけはひ

（釋）もてなしは其女のもてなしさまなりけはひはけしきの外へ見ゆるをいふおくれたらんはくちをしからんなりさらにもいはずは論にも及ばぬ意なり

なにをして云々　〔湖〕彼女を見る人の思ひおとしむる心也

うちあひてすぐれたらんも云々

（釋）この打あひは其女の身のほどにあひかなひて何事もすぐれたるをいふ上の打あひとはさすところ異なりさてこれももとの品ときよのおぼえ云々の中の女の事なり別に一種にはあらず

上が上は打おき侍りぬ

（釋）上が上の事は我らが及ぶべきかぎりならればさしおきていはじとなりこゝにて上が上の論ははぶきたり　〔玉〕上件なりのぼれども云々の條よりもとのしなときよの

おぼえ云々までの條々は女の身の品の種々をむれといひこれより下の條々は其女の心おきてふるまひのしな〳〵をいひてこれより上とこれより下とは品定の竪と緯との如し大かたこれらの事ども心をつけてこまかにわきまへ味ふべしなほざりに見んは作りぬしのさばかり心をいれたるほいなきわざなりかし

さてよにありと人にしられず
〔釋〕これより上條の反對に世に有ともしられぬほどの下の品の中に珍らしくらうたげならん人のあらんをいふ上のめづらかなる事と心もおどろくまじといふよりうけて見るべし此條はめづらしきに心とまる事をせんとしたる論なり

あばれたらんむぐらのかど
〔釋〕あはれたらんは荒たる事なりむぐらのかどは葎の生しげりたる門と云意にて荒たるさま也　〔玉〕むぐらの門といふからとぢられといふ也

ならねば。かみがかみはうちおき侍りぬ ◎さて世にありと人にしられず。さびしくあばれたらんむぐらのかどに。思ひのほかにらうたげならん人の。とぢられたらむこそ。かぎりなくめづらしくはおぼえめ。いかではたかゝりけん。とおもふよりたがへることとなん。あやしく心とまるわざなる ◎ちゝの年おい物むつかしげにふとりすぎ。せうとのかほにくげに。思ひやりことなる事なきねやの内に。いといたくおもひあがり。はかなくしいでたることわざも。ゆゑなからず見えたらむ。かたかどにても。いかゞ思ひのほかにをかしからざらん。すぐれてきずなきかたのえらびにこそおよばざらめ。さるかたにてすてがたきものを〔ば〕。とて式部をみやれば。わがいもうとゞもの。よろしきこえあるをおもひての給ふにや。とやこゝろうらん。物もいはず ◎いでやかみのしなと思ふにだに。かたげなるよを。と君はおぼすべし。しろき御ぞどものなよゝかなるに。なほしばかりを。しどけなくきなし給ひて。ひも

おもふよりたがへることなん云々　(釋)思ふにたがへる也箋におもほえずふるさとにいとはしたなくてありければこゝちまどひにけりといせ
物語にいへる類也とあるがごとし
ちゝのとしおい云々　(釋)これも珍らしきに心とまる事ながら又一種なり上なるはおちぶれたる家の事これは何事もわろびれて見ゆる家の
事なり
思ひやりことなることなき　(湖)外よりの思ひやりゆかしげなき事也思ひあがりは其女(ムスメ)は身をけたかくおもひあがり居る也
かたかどにても　(玉)たとひわづかに一ツ二ツのかどあらんにてもといふ也
さるかたにて　(玉)中の品にとりてはといふ意也云々物をばのばもじはやを誤れるなるべしばにては聞えず
式部を見やれば　(釋)馬頭かたりさして式部が方を見やりたる貌なりその夜のさまを顯はしたる第三の段也
物もいはず　(釋)父の年おい云々と云よりの評をわが妹の事に思ひあてたるにやあらん物もいはずと戯れて書たる也いと／＼をかし○上文も
との品時世のおぼえ打あひといふよりこゝまではもしくは頭中將の詞にやこゝにのたまふにやといへる事さらに馬頭が云たる事とは聞えざ
れば也されども又なにがしがおよぶべきほどならればこそ云々といへるは中將とも聞えずしばらく舊說に隨ひて馬頭の語とす猶考ふべし
いでや云々かたげなるよなと　(弄)源の心に葵上の事を思ひあはせ給ふ也　(玉)よをのをは世なる物をの意なり　(釋)をもじの下に傍注のご
とき意をいひさしてとゞ受たる也
白き御ぞどもの云々　(釋)これより源氏君の打とけ給ひてます／＼めでたきかたちをいへり例の脉なりそひふしとは臂をつきてよこに臥すを
いふ今俗よこになるといふこと也ほかげは火影に御貌の見ゆるをいふ體言なり
あくまじく　(釋)飽足(アキタル)まじと也
大かたのよにつけて見るには　(玉)此段萬のうへにわたりてまことにさる事なり　(釋)咎は難の意也
をのこのおほやけにつかうまつり　(釋)是より男子の宮づかへの事をもてたとへを取なり
よのかためとなるべきも　(釋)よのかためとは政事をとりて滯なきいはゆる柱石の人をいふまことのうつわものとは眞の大器といふこと也攝
政關白也とかぎりていへる注はわろし
かしこしとても云々　(釋)いかばかり賢(カシコ)き人なりともたゞ一二人にて天下の事の執行はるべきならねばさま／＼のつかさ人ありて上は下に助
けられ下は上になびき從ひて互にゆづりあひて政をするならんと也らんの辭あぢはひあり　(花)天下はひろしといへども諸人力を合せて治
れば中々やすき也せばき家の中の事はあるじ一人のはからひなればゆづるかたなくして大事なる心也このあるじはうしろみの事をいふべし
(玉)聖德太子憲法に上行下靡(ヘハ　ク)云々

などもうちすてゝ(結ビ給ハヌ也)。そひふし(傍臥)給へる御ほかげ(火影)。いとゞ(ヒトシホ)めでたく。女にて(ニナリテ)見奉らまほし。この御ためには。かみ(上)がかみ(上)をえり(撰)いで(出)ゝも。なほあく(飽)まじく見え給ふ□さま〴〵の人のうへどもを。かたり(談)あはせ(合)つゝ。おほかたのよにつけてみる(馬頭詞 大綱世上ノ一トシテ一トホリニ 見テハトイフ意也)にはとが(咎)なきも。わが(我)物とうちたのむ(憑)べき(人女)をえらば(撰)んに。おほかる(多)中にも。えなん(得)思ひさだむ(決)まじかりける。をのこ(男子)のおほやけ(官)につかうまつり。はか〴〵しき(シッカリトシタ)よ(世)のかため(固)となるべきも。まこと(真)のうつわもの(器量)となるべきを。とりいだ(出)さんには。かたかる(難)べしかし。されどかしこし(賢)とても。ひとり(一人)ふたり(二人)世中を(合シテ)まつりごち(政)しる(知)べきならねば。上は下にたすけ(助)られ。下は上になびき(靡)て。ことひろき(事広)にゆづらふらん(譲合 デアラウ)。せばき(狭)家のうちの。あるじ(女主)とすべき人ひとつりを(玉 緊要の事共をいふ也)。思ひめぐらす(マハス)に。たらは(足)であしかるべき大事どもなん。かた〴〵(カレコレ)おほかる。「とあればかゝり。あふさきるさにて。なのめに(ユガミナリニ)さても有ぬべき人のすくなき(寡)を。(甲)すき〴〵しき(ウハキラシイ)心のすさび(ナグサミゴト)にて。人のありさまを。あまた(数多)見あは(クラ)

とあればかゝり云々
〔河〕そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに古今集俳諧　〔釋〕とすればをとあればとかへて引れたるは自他の差によれるなるべし此歌の釋別にいふべしあふさきるさは雅語譯解に左に餘れば右にたらぬと云心也といへり一つよき事あれば又一つわろき事も有といふたとへまでなり

なのめにさても有ぬべき人の
〔釋〕なのめは斜字の意にてゆがみたる也俗にゆがみなりにといへるよくあたれりさても有ぬべきはそのまゝにて堪忍してさしおかるゝほどの人也

すくなきを　〔玉〕此をもじは下の同じくは云々といふ所へかゝる語也〔釋〕此説のごとし甲乙丙丁の點つけたるをよく味ひて語脈を誤るべからず

すき〴〵しき心のすさびにて云々
〔釋〕すき〴〵しきすさびにまかせ

てさま〴〵の女のさまを見くらべんなどの物好みにはあらねどひとへに本妻にもとさだむべき人をとかれこれ撰み初たるが竟に定らぬなるべしといふ意也同じくは云々は直さずしてさながら心にかなふ人もあるべきかと思ふよしを其中にはさみてことわりたるなり
わがちからいりをし〔玉〕男のたすけてなほす事のいらざるなりいりは俗言にも錢がいるかれがいるなどいふいり也
心にかなふやうもやと〔玉〕思ひさだむべきよるべとすばかりに心にかなふとつゞく語也云々
さだまりがたきなるべし〔玉〕上におほかる中にもえなん思ひ定むまじかりけるといへるをうけていへるなり然思ひ定めがたきことはかやうかやうなる故なるべしとみづからおしはかりたるよし也
見そめつる契ばかりを
(釋)ふと逢そめたるも我にたぐふべき前世の宿縁なるべしとやうに

せんのこのみならねど。ひとへに思ひさだむべきよるべとすばかりに。(丙)(乙)同おなじくはわがちからいりをし。なほしひきつくろふべきところなく。(丁)心にかなふやうもや。とえりそめつる人の。さだまりがたきなるべし。かならずしも。わがおもふにかなはねど。みそめつる契りばかりを。すてがたく思ひとまる人は。ものまめやかなりと見え。さてたもたるゝ女のためも。心にくゝおしはからるゝなり。されどなにか。世の有さまを見給へあつむるまゝに。心におよばず。いとゆかしき事もなしや。君たちの上なき御えらびには。ましていかばかりの人かはたぐひたまはん。ところせく思給へぬだに□かたちきたなげなくわかやかなるほどの。おのがじゝは。ちりもつかじと身をもてなし。ふみをかけど。おほどかにことえりをし。すみつきほのかに。心もとなくおもはせつゝ。又さやかにも見てしがな。とすべなくまたせ。わづかなるこゑきくばかりいひよれど。いきのしたに引いれ。ことずくななるが。いとよく

思ひて離別せず堪忍するよし也さやうの男は人よりもまめやかに見えさても猶たもたれたる女も何事かよき所あるべしと心にくゝおしはか
らるゝといへるなり
されどなにか　〔玉〕されどゝは心にくゝおしはからるといへるにあたりていへりなにかは何かは也心にくゝおしはからるとはいへどもさやう
のたぐひも何かはゆかしからんの意也云々
よの有さまを見給へあつむるまゝに　〔釋〕馬頭世上のありさまをかれこれ見集るにしたがひて也
心におよばず　〔玉〕及びなきやうに思はるゝをいふ注にこれをと思ひ及ぶこともあらずといへるはかなはず
君たちの上なき御えらびには云々　〔釋〕君たちは源氏君頭中將をさしていへり上なき御えらびは此君たちは當世の貴人なれば此上もなき御撰
びといふ意也ましてとは我らだに如此なればましていかばかりの人かよく御心にかなふ人とはなり給はんといへる也たぐひとは配偶する意
也
所せく思ひ給へぬだに　〔玉〕細流にこゝにて句を切て心を上へかけて見る也とあるがごとし我らが賤しき身にだにしか思ひ侍るをまして君た
ちの上なき御えらびにはといふ也たみ詞にあまねく女を見あつむるだにといへるはたがへりそは所せく思はぬをひろく見あつむる意にとり
ていへるなれどさる意にはあらずすべてところせしといふ詞は言の本の意は所の狹き意より出たるなれども用る意は必しもしからずこゝは
貴人は身の重々しくて萬の事たやすからぬをところせしと常にいふ其意にて妻をえらび給ふことも貴人は何くれとむつかしくしてたやすか
らぬを我らがごとき下ざまの人はさやうに事むつかしくはあらざるをそれだにといふ意にていへるなり　〔釋〕此條きはめて誤脫ありとおぼ
えて事の意委しくわきまへがたしされども暫く右の說どものごとく見てあるべし猶今一つ試にいはゞ所せく思ひ給へぬだにといふ事はなき
本もあれば脫したる事は論なし此詞を上の世のありさまを見給へあつむるまゝにといふ下へつゞけて見る時はことわり貫きて聞ゆるにつけ
て案ふに本はしか有けんを一度おとして後にまた書入るゝ時に二行ならびたる右の行へ書入たるを左の行へ入たるぞとおもひ誤りて後に又
寫す人のこの所へ入たるなるべしもの寫すにはかやうの事をり／＼あるもの也。さてもなほされど何かといひたる事穩ならず是は河海になに
がはなにがしといふ心とやうにいはれたるごとくもとはなにがしと有しをしもじを脫せるならんかくして見る時は「されどなにがし世のあ
りさまを見給へあつむるにかく所せく思ひ給へぬ身にだに心におよばずいとゆかしきこともなしやまして君たちの上なき御えらびにはいか
ばかりの人かたぐひ給はんといふ意となりて事もなく聞ゆべしましては君たちの上にある意也
かたちきたなげなく云々　〔釋〕猶馬頭の詞也上の條はつひのたのみ所とすばかりの女の世に有がたきよしをいひこゝよりは女のうへにつけて
さま／＼のくせある事をいへりよく／＼わかちて心得べし。
ちりもつかじと身をもてなし　〔釋〕つかじはつけじを寫し誤れるなるべしこれは若き女のおの／＼身をたしなむ事にて塵ひとつも身につけま

じとするありさまをいへる也

ふみをかけどおほどかに云々　〔釋〕おほどかは細流に大やう也とある意也さておほどかに言撰(コトエリ)をしとはふみの詞をばいとよくえらびて手づくならぬやうに書ながらしか撰びたるごとくにはせで大やうなるやうにまぎらはしたるをいふ也さらでは言のつゞきことわりなし萬水一露に大やうなるさまにて文をかけども詞をえらびつくろひてかくとの義也といへれど言のはこびさは聞えず又おほどかにはすみつき云々へかゝる語かともおもへど文の勢もあらず

すみつきほのかに　〔新〕墨つきなるべし手つき口つきなどいふつきに同じ書たる墨色筆づかひをかれていふ也

こゝろもとなくおもはせつゝ　〔拾〕返事の墨つきほのかにて心もとなければ猶さやかなる返事を見てしがなと思ひて又ふみをやればすべもなきまで返事せずまたせてとにかくに人をなやますなり

わづかなる聲(イキ)きくばかりいひよれど　〔釋〕わづかなるこゑは小さき聲なりそれをきくほどにいひよるとはいひよりてつひに物ごしなどにて逢たるさま也息の下にひきいれとは息(イキ)よりも細きやうなる聲することにてひきいれ聲などもいへり言ずくなは物いふ事のすくなき也

いとよくもてかくすなりけり　〔玉〕文をかけど云々わづかなる云々の二つを合せていふ也さやうの女は身のおくれてたらはぬ所をよくかくして男に見あらはされぬ也俗言にしがを見せぬといふ意也云々さてなりけりといへる意はすべて世中の女はおくれてたらはぬ難あるが多かる物なるを右のごとくなるがそれをよくもてかくすことぞやといふ意なり

なよびかに女しと見れば云々とりなせばあだめく　〔玉〕あだめくとはあだなるさまに見ゆるをいひてたゞにあだ也といふとは異なりさて物やはらかに女らしき女ぞと見ればさやうの女は必心よわくしてあまりなさけに引こめらるゝ物なる故におのづからとりなす時はあだなるになりなさるゝさまなる物ぞといふなり

これをはじめのなんとすべし　〔玉〕右のなんは殊に世に多くある物なる故に女はまづこれをつゝしむべきことぞといふ意にていへる也第一の難といふごとく聞ゆれどもさにはあらじ云々　〔新〕此女より上にはまだ入たちて見たる女をこまかにはいはずこゝに至て女の難をいへば是を最初の難に擧たり　〔釋〕最初の難とあるよろし多かる中の最初の難也

ことが中になのめなるまじき　〔釋〕ことが中にとは多くある事どもの中にといふ意也諸注わろしなのめなるまじきはゆがみなりにすておきがたき意なり　〔玉〕此所むかしより讀誤れるから意もたがへりこれはなのめなるまじきと讀て人のうしろみのとつゞけてよむべし人のうしろみとは夫のうしろみするをいふ夫をうしろみする方の事は女のよろづの事の中に殊になのめにてはえあるまじき第一のわざなるをいへり注どもの意にしては事が中にといふ詞聞えずよく味ふべし

物のあはれしりすぐし云々　〔釋〕物のあはれを知るはいとよき事なれども　あまりに知過したるは又あたなるかたにもちかきもの也すぐしとい

ふに心をつくべしはかなきついでのなさけとは湖月に花紅葉月雪などのをりふしに歌とみなどする心也といへるがごとしありの下にて°もじをそへて次の詞へかけて心得べし

なかしきにすゝめるかた　〔玉〕風流のかたは夫のうしろみの方にはなくてもよかるべきが如くなれどもと也物のあはれしりすぐしとは物のあはれしれるよしのふるまひするをいふ　(釋)すゝめるといふ詞心をつくべし

またまめ〳〵しきすぢをたてゝ　〔玉〕又といふ詞下にいかゞはくちをしからざらんといへるへかけて見べし風流なる方はなくてもよかるべしと見えたれども又さやうにあらずの意にてそのよしをいひつゞくる也　(釋)まめ〳〵しきすぢとは夫の後見してよろづ夫のためにまめやかにいとなむすぢの事也たてゝといへる心をつくべし

みゝはさみがちに　〔玉〕古の女はみな髪をたれたるに額髪とて左右に耳より前へもたるゝことなるをかたちつくろはぬ女は耳より前へたりたる髪をうるさくむつかしく思ひて耳のうしろへかいこしてはさむを云

びさうなきいへとうじ　〔拾〕無二美相一主人母(ナキビサウイヘトウジ)　(釋)うつくしき相(カタチ)なき家刀自(イヘトウジ)のたゞ一偏に心うちとけたる後見ばかりをしてと也この°してといふ詞ははるかに下なる何事をなど云々といふ所へかけてきくべしさらではこゝろ貫きがたし後見ばかりをして云々の事にも何事をなどあわつかに云々といふ意也打とけたるとは食物衣物(クヒモノキモノ)につきたる心やすだての後見といふ事也家刀自(イヘトウジ)は家内の事とる女あるじをいふなり

朝夕の出入につけても云々　(釋)夫朝夕わが家を出入するにつけても公私の人のありさまのよきあしき事などをうとき他人にわざとかたらはるべしや近く見ん我妻などに談合もすべく思ひてゑまれもなかれもする事どものあらんにもきゝもわかず思ひも知ぬものと思へばその妻のかたもおのづから打背向(ソムカ)れて人しれずわらひも歎きもせらるゝを聞て妻の何事をなどあわつかに仰ぎゐたらんはくちをしといへるなり

きゝわき思ひしるべからんに　〔玉〕むつましくかたらふ妻の物のあはれをしりてかやうの事の心をも聞わけて分別あらんに語らまほしと也

うちもゑまれ涙もさしぐみ　(釋)目にも耳にもとまるよきあしき事につけても打も笑(エマ)れ涙もさしぐむ也小櫛にかたりてかひなき妻のこちなきを思ひてひとりわらひもせられ又いふかひなき事を思ひて涙もさしぐむ也といはれたるはいたくたがへりそは此次に人しれぬ思ひ出わらひもせられあはれとも打ひとりごたるとあるがその事なりしかるを却てそこの注には思ひあまる事どもの中に歎息すべき事を思ひては歎息する也といはれたるは語脈(コトノスチ)いたくたがへり猶別にも云べしさしぐみは涙の出くるさま也

おほやけばらたゝしく　〔玉〕おのが身にはあづからぬ人のうへの事をかたはらより見聞てはらたゝしく思ふこと也此おほやけは俗(ヨ)のいやしき言に身にあづからぬ人のうへの事に妬(モノネタミ)するを法界りんきといふ法界の意にあたれり

心ひとつに思ひあまる事など　(釋)わが心一つにては決(サダ)めがたく思ひあまる也これも公私のよしあしにつけての事也　〔玉〕これはおほやけばらたゝしくとは別事也つゞけて心得べからずさて何にかは云々は二つを合せていふなり

なに〻かはきかせんと思へば
(釋)此女は物の心しられねばきかせてもかひなければなり打そむかれては其女の方へ向ふも物うくて背向る〻也

人しれぬ思ひ出わらひ
(釋)其女のいふかひなきを人しれず思ひつゞけてたゞひとり笑ひも歎きもせらるゝ也あはれは歎息の聲なり

なに事ぞなどあわつかに (玉)夫のそのさまを妻の見てそれは何事ぞなどいひて也 (釋)あわつかには騒がしく静ならぬ意也あわはあわつあわたゝしなどのあわと同じ舊説はひがこと也假字もわとかくべし

さしあふぎゐたらんは
(玉)うち仰のき居るにてあわつかなるさまを云なり (釋)その事と心もつかずして空を仰ぎてうかとしたる體也

いかゞはくちをしからぬ
(玉)くちをしきよしをつよくいへ

もてかくすなりけり。なよびかに女しとみれば。あまりなさけに引こめられて。とりなせばあだめく。これをはじめのなんとすべし。ことが中になのめなるまじき。人のうしろみのかたは。物のあはれしりすぐし。はかなきついでのなさけあり。をかしきにすゝめるかた。なくてもよかるべし。とみえたるに◎また。まめ〳〵しきすぢをたてゝ。みゝはさみがちに。びさうなきいへとうじの。ひとへにうちとけたるうしろみばかりをして。あさゆふの出入につけても。おほやけわたくしの人のたゝずまひ。よきあしきことの。めにもみゝにもとまる有さまを。うとき人にわざとうちまねばんやは。ちかくて見ん人の。きゝわき思ひしるべからんに。かたりもあはせばや。とうちもゑまれ。なみだもさしぐみ。もしはあやなきおほやけばらだゝしく。心ひとつに思ひあまる事などおほかるを。なにゝかはきかせん。と思へば。うちそむかれて。人しれぬ思ひいでわらひもせられ。あはれともうちひとりごた

るゝに。なに事ぞなど。あわつかにさしあふぎゐたらんは。いかゞはくちをしからぬ□たゞひたふるにこめきて。やはらかならん人を。とかくひきつくろひてはなどか見ざらん。心もとなくとも。なほし所あるこゝちすべし。げにさしむかひてみむほどは。さてもらうたきかたに。つみゆるし見るべきを。たちはなれては。さるべき事をもいひやり。をりふしにしいでんわざの。あだことにも。まめことにも。わが心と思ひうる事なく。ふかきいたりなからんは。いとくちをしく。たのもしげなきとがや。なほくるしからむ◎つねはすこしそば〳〵しく心づきなき人の。をりふしにつけて。いでばえするやうもありかしなど。くまなきものいひもさだめかねて。いたくうちなげく□いまはたゞしなにもよらじ。かたちをばさらにもいはじ。いとくちをしく。ねぢけがましきおぼえだになくば。たゞひとへにものまめやかに。しづかなる心のおもぶきならんよるべをぞ。つひのたのみ所には。思ひおくべかりけ

る詞なりことが中に云々といふよりこれまで一つゞきなり
(評)かくのごとき女世にいと多きものなり俗言にはたらきてなどいふさまの女なりさてこの女のさまをかゝれたるはさもあるべき事なるをそれにそひたらん男の心をかかれたる筆つき心の中に入て見たらんがごとくにていとも〳〵委しくあやしきまでにめでたし

たゞひたふるにこめきて
(釋)こゝより大やうに物やはらかなる女の事を論ずるなり

ひきつくろひては　(玉)たらはぬ事をば男のたすけてとりつくろふなり云々

なほし所あるこゝちすべし
(釋)心の柔らかなる人はいふがまゝに従ふべければおぼつかなきながらにも直しがひのあるこゝちすべしと也

げにさしむかひて　(玉)此げにといふ言のつかひざまいさゝかむつかしまづしばらく諾なひたるところ

る。あまりのゆゑよし心ばせ。うちそへたらんをば。よろこびに思ひ。すこしおくれたるかたあらんをも。あながちにもとめくはへじ。うしろやすくのどけき所だにつよくば。うはべのなさけは。おのづからもてつけつべきわざをや。えんにものはぢして。うらみいふべき事をも。見しらぬさまにしのびて。うへはつれなくみさをづくり。心ひとつに思ひあまる時は。いはんかたなくすごきことのは。あはれなる歌をよみおき。しのばるべきかたみをとゞめて。ふかき山ざと。よばなれたる海づらなどに。はひかくれぬかし。わらはに侍しとき。女房などの物がたりよみしをきゝて。いとあはれにかなしく。心ふかき事かな。と涙をさへなんおとし侍し。今おもふには。いとかるぐしくことさらびたることなり。心ざしふかゝらんをとこをおきて。みるめのまへに。つらきことありとも。人の心を見しらぬやうに。にげかくれて人をまどはし。心をみんとするほどに。ながき世の物思ひになる。い

につきていへるなり〔釋〕げには見んほどはの下へおろして心得べしげにさても云々といふ意にてなほし所ある心ちすべしとあるを諸なびたる也さてもはつみゆるしの次なる見るべきへかゝる意にてさても見るべきなと云也
たちはなれては〔玉〕別所に離れて居るほど也〔釋〕さるべき事はさしあたる用の事どもなり
をりふしにしいでんわざの云々〔釋〕をりふしにつけて何事にまれ爲出んわざのあだなるにもまめなるにも其女の心として思ひわかつ事なくして功者ならぬは何の頼みにもなりがたきとなり
たのもしげなきとがや〔玉〕立はなれゐる時わが心と物を心得ることあたはざる女は頼みにしがたき也とがは咎にて難といふこと也○なほといへるはこめきやはらかなるはよけれどそれもなほにてやはりまだの意也
そばぐしく心づきなき人の

〔玉〕そばそばしくはたみ詞によそよそしくしたしからぬ也といへるよろし云々さてこは男の心にそばそばしく心づきなく思ふにて女の方よりそばそばしきにはあらず

いでばえ　〔玉〕事にふれてはえばえしきしわざのあるなり

くまなき物いひも　〔玉〕世中の女のさまざまのやうをのこる所なくよく知ていふ馬頭なれども也さだめかねては上件にいへるさまざまの女をすべていづれをよしとも定めかぬる也

いたくうちなげく　〔釋〕とにかくにたらひたる女の有がたきを歎息したる也

今はたゞ品にもよらじ云々　〔新〕かくあふさきるさなるのみなれば今は品高きにも形よきにもよりがたしとさとり得たる也是一部の大意なるべし　〔釋〕此説のごとく此段品定のむねとある所にてつひに物靜にまめやかなる人をたのみ所にせんより外にすべなきよしをいへり心をつくべし

よるべ　〔玉〕通ひすむ女を云注に本妻なりといへるはたがへり次につひのたのみ所といへるぞ本妻なる

あまりのゆゑよし　〔釋〕あまりは體言なりゆゑよしは小櫛に何わざにもあれひと才とるべきふしあるをゆゑ有ともよし有ともいふ也とあるがごとし

よろこびに思ひ　〔拾〕俗にいふひろひものゝ心なり

おくれたるかたあらんをも云々　〔釋〕おくれたるはたらはぬ也しかたらはぬ方ありともしひて求め加へじと也

うしろやすくのどけき所　〔玉〕これ即上の物まめやかにしづかなる心のおもむきといへるもの也　〔釋〕つよくはとはたしかにてたぢろかぬ也

うはべのなさけは　〔釋〕うはべは表方の意也なさけは風流才藝の類をいふなるべし上向の風流などは次々に見きゝならひて自然ともてつくるやうになるべきわざ也といふ意也　〔評〕この段新釋にいはれたるがごとく品定の初に女のこれはしもと難つくまじきはかたくも有かなといひ出たるを結びたるにて世にあらゆる女の難を論じてつひに此まめやかにうしろやすきにとゞめたるいとめでたし人のおもふきは昔今たがふことなくあながちにたかき賤しきにも拘らず女を撰ぶにはかくのごとくならんより外にせんかたなき事をよくよく思ひ辨へて作者の筆のいみじきを味ふべしさて次の段には名聞がましくしふねき女の心がろきを一種擧てねぢけがましきをいましめられたりなほ下にいふべし

うへはつれなくみさをづくり云々　〔釋〕つれなくは何げなくもてなす也　〔玉〕みさをにもてつけてともいへりくづれぬやうに心をつけてもてつくるなり

すごきことのは　〔釋〕執念の物すごきまでに聞ゆることのは也ことのはといへるも歌なるべし

物語よみしをきゝて　〔釋〕むかし物語のふみにかゝる女のことを記したるを女房のよみしを馬頭のきゝて也

とあぢきなき事なり。心ふかしやなどほめたてられて。あはれすゝみぬれば。やがてあまになりぬかし。おもひたつほどは。いと心すめるやうにて。よにかへりみすべくも思へらず。いであなかなし。かくはたおぼしなりにけるよ。などやうに。あひしれる人きとぶらひ、ひたすらにうしとも思ひはなれぬをとこ聞つけて。涙おとせば。つかふ人。ふるごだちなど。君の御心はあはれなりける物を。あたら御身を。などいふに。みづからひたひがみをかきさぐりて。あへなく心ぼそければ。うちひそみぬかし。しのぶれど涙こぼれぬれば。をり〳〵ごとにえねんじえず。くやしきこともおほかめるに。ほとけもなか〳〵こゝろぎたなし。と見給ひつべし。にごりにしめる ほど よりも。なまうかびにては。かへりてあしきみちにもたゞよひぬべくぞおぼゆる。たえぬすぐせあさからで。あまにもなさで。たづねとりたらんも。やがてそのおもひ出。うらめしきふしあらざらんや。あしくもよくもあひそひて。とあ

心ざしふかゝらん男をおきて云々
〔玉〕男のつれ〴〵の深き心ざしをばしらぬものゝやうにさしあたりて當座に少々つらき事有とても也
こゝろをもみんとするほどに
〔釋〕いかにするにかと男の心を見んとするほどに也
ながきよの物思ひになる 〔玉〕さやうの事によりてつひに離別することあるをいへり
心ふかしやなど 〔新〕愛着を離れて菩提心に趣き給ふべき也などほむるにつけて情のすゝみて尼になりぬべしとなり 〔玉〕はじめ心ひとつに思ひあまれるすぢのいよ〳〵すゝむ也
ひたすらにうしとも云々
〔玉〕上に心をも見んとするほどにと有しごとくにて此女ひたすらに男をうしと思ひはなれたるにはあらざる也
ふるごだち 〔拾〕御等といふ意なるべし云々 〔玉〕古き女房ども也云云

ひたひがみをかきさぐりて
〔玉〕あたら髪をそぎすてたる事よと後悔するさま也
うちひそみぬかし　〔新〕是は泣(ナク)ときの口つきをいふ云々　〔釋〕むかしより顰字をよめる意にて俗にびり口するといふにあたれり
〔評〕人ぎゝにかゝづらひてあはれしりがほする女の心がろさの後悔のさま見るがごとし此類今世にもをり〳〵あり
にごりにしめるほどよりも云々
〔湖〕俗にて濁世にありし時よりかく出家のゝち心のなまうかびなるはかへりて悪道にまよふべき事と也　〔釋〕うかばんとて尼になりたるものゝ悔しき心ありてなま〳〵なる故になまうかびといへる也あしき道はいはゆる悪趣の事也
たえぬすぐせあさからで云々
〔釋〕すぐせは例の宿因縁也絶まじき宿因ありて尼にならぬうちにたづね出してとりかへしたらんにも也

らんをりも。かゝらんきざみ(刻)をも。見すぐしたらん中こそ。ちぎり(宿縁)ふかくあはれならめ。われも人もうしろめたく(キヅカハシウ)心おかれじやは(キガオカレマイモノカ)。又なのめに(ヨコミチヘ)うつろふ(ム心ノ)かたわらん人をうらみて。けしきばみ(キモチヲミセ)そむ(背)かんはた(モマタ)。をこがまし(アホウラシ)かりなん。心はうつろふかたありとも。みそめし(アヒハジメタ)こゝろざしいと(ムヲ)ほしくおもはゞ。さるかたのよすが(タヨリドコロ)に思ひてもありぬべきに。さやうならんたぢろき(ドサメキ)に。たえ(絶)ぬべきわざなり◎すべて(惣)よろづの事なだらか(オダヤカ)に。ゑん(怨)ずべき事をば。みしれる(見知)さまにほのめかし。うらむべからんふしをも。にくからず(カハユラシウ)かすめなさば。それ(ソノ云ザ)につけて(マニツケテ也)。あはれもまさりぬべし。おほくはわが心(男ノ我也)も。見る人から(女ユエニ)をさま(治)りもすべし。あまり(ムサレバトテ)むげ(一向ニ)にうちゆるべ見はなち(放)たるも。心やすくらうたき(カハユラシイ)やうなれど。おのづから(自然)かろき(ソマツナ)かたにぞおぼえ侍るかし。つながぬ(不繋)舟のうき(浮)たるためし(男ノ心ノ定マラヌタトヘ也)も。げに(ナルホド)あやなし(ワケガナイ)。さは侍らぬか(ザウハゴザラヌカ)。といへば中将うなづく(點頭)□さし(中將詞)あたりて。をかしともあはれとも。心にいらむ(余一本いりたらん)人(女)の。たのもしげなき(アテニナラヌ)うたが

やがてその思ひ出云々　〔釋〕やがてはうらめしきへかゝる意也その思ひ出は小櫛にさきにそむきて家を出し事を思ひ出るをいふ也とあるがことし厄になさでたづね取たりとも一たび家を出し事を思ひ出てやがてうらめしきふしあるべしと也

われも人も云々　〔新〕其男も女も也　〔祇注〕さきのごとくあひそひてありともさやうならん女はうしろめたくて心おかれぬ事はあるまじの心也　〔釋〕我も人もは新釋のごとし祇注に女とのみいへるはたがへれど其外はよろしさてこの一句語の脉はなれて聞ゆるは脱文など有なるべし猶考ふべし

又なのめにうつろふかたあらん人を　〔玉〕このなのめはたしかにうつろふにはあらでたゞいさゝかうつろふ也

いとほしく思はゞ　〔玉〕たみ詞に女の男をいとほしく思はゞの意にいへるはたがへり男の心に女をいとほしく思はゞ也

さるかたのよすが　〔玉〕見そめし心ざしをいとほしく思ふかたのよすがなりよすがとは通ひすむ所をいふすべてよるべ又よすがなど有を本妻と心得たるはたがへり必しも本妻にはかぎらず

ゑんずべき事をば云々うらむべからんふしをも云々　〔玉〕こは同じ事の二つ重なりて聞ゆるにつきてつら／＼思ふにゑんずるは心にうらめしく思ふことうらむべからんふしは恨みをいふべきふしにして心に思ふ方と言にいふ方とを二つに分ていへる也云々　〔釋〕ほのめかしはほのかにいひかすむることかすめなすはかすかにほのめかす事也

それにつけてあはれもまさりぬべし　〔釋〕ほのめかしかすむるいひざまにつけて初よりもあはれまさるべしとなりまさるといふに心をつくべし

みる人からをさまりもすべし　〔玉〕そへる女のあへしらひがらによりてなりをさまるは他へうつるこゝろのやむをいふ

むげに打ゆるべ見はなちたるも　〔拾〕拾遺戀五に「うらみぬもうたがはしくぞおもほゆるたのむ心のなきかと思へばこの歌のこゝろ見えれど下の心はかよふべし

つながぬ舟の　〔河〕文選鵩鳥賦云泛乎若二不レ繫之舟一　〔玉〕河海に文選を引れたるは本也然れどもこゝは白氏文集の偶吟詩に無レ情水任二方圓器一不レ繫舟隨二去住風一といへるをとりて書るなりさてげにあやなしは此本文にかゝりていへり

さは侍らぬかといへば中將うなづく　〔評〕當夜のさまをあらはしたる第四の段なりさてすべてよろづの事といふよりこゝまでは女の男に相そふ心おきてをいへり上にいとくちをしくねぢけがましきおぼえだになくば云々といへるは男の用意なるに對へてよく／＼味ふべし先男のよろづ見過すべきよしをいひて次に女のあへしらひざまをいへり文の法ついで亂れずしていひしらずめでたし次は中將のあへしらひの語としてたのもしげなき女をいましむるなり

さしあたりて云々　〔釋〕時にあたりて我心にをかしともあはれともおもはん人のあだなる心あらんは大事なるべしと也たのもしげなきうたが

ひとは小櫛に女のあだにして外へ心を分るやうのうたがはしき事あるをいふといはれたるがごとし大事は俗にいふに同じく大せつなるこゝろなり

わが心あやまちなくて

〔湖〕男のわきにうつろふ心なくばとの心なり （釋）この說よろしこれを女の心と見たる注はわろしたのもしげなきうたがひあらん女をも男の心あやまちなくて見しのびつゝ過さばさるあだなる心をもおのづからにさし直してもなどか見ざらんとおぼえたれどさはあらじといふ意也心あやまちとつゞけてよむべし體言なり男の心に女に對してあやまちしたりと思ふやうなる事をいへる也さしなほしてとは女の男の心にはぢておのづからあだなるふるまひを直すをいふ此段を新釋に頭中將の夕貌の事をしたに思ひていはれたるさまにとがれたるはいかゞあらん猶考ふべし

それさしもあらじ （釋）それとは上

ひあらんこそ。大事なるべけれ。我(男也)こゝろあやまちなくて見すぐさば。(ムウタガハシキヲモ)さしなほし(直)てもなどか見ざらん。とおぼえたれど。それさしもあらじ。(ソレモサウハアルマイ)ともかくもたがふ(違)べきふしあらんを。のどやか(ユル)にみしのばん(見テコラヘル)よりほか(外)に。ます事あるまじかりけり。といひて。わが(我)いもうと(妹)の姫君(葵上)は。このさだめにかなひ給へり(ともかくも云々ヨリ下ノ事ヲ云)とおもへば。君(源氏)のうちねふり(眠)てことばまぜ(交)給はぬを。さうざうしく(モノサビシク)心やましと(モドカシ)思ふ。馬のかみものさだめのはかせ(博士)になりて。ひゞらぎゐたり。中將はこのことわり(理)聞はて(竟)ん。と心にいれてあへしらひ(アシラヒ)ゐ給へり〔馬頭詞〕よろづのことによそへて(比)おぼせ。木のみちのたくみ(工匠)の。よろづの物を心にまかせてつくり(作)いだすも(出)。りんじ(臨時)のもてあそびもの(翫物)の。その物とあともさだまらぬは。そば(側)つきざれ(シャレ)ばみたるも。げに(ナルホド)かうもしつべかりけり。と時につけつゝさま(カタチ)をかへて。今めかしき(タウセイフウ)にめうつり(目移)て。をかしき(オモシロキ)もあり。大事として。まことにうるはしき(キツトタヾシイ)人の。でうど(調度)のかざり(飾)とする。さだまれる(定)やう(様)ある物を。なんな(難)

のわが心あやまちなくて云々をさしていへる也さしもあらじは然も
あらじにてしは助辞也
ともかくもたがふべきふしあらんを〔弄〕畢竟の理なりともかくもといへるより惣じての批判と見るべき也 〔孟〕ともかくも女の男のたがひたる事あるを腹たち怨ぜずして見忍ぶをいふなり葵上の心むけこれにかなひ侍り〔湖〕前のとあらんをりもかゝらんきざみをも見すぐしたらん中こそといひすべてよろづの事なだらかになどゝいひし詞に答へたる詞と見るべし
わがいもうとのひめ君は云々 〔釋〕このさだめとはともかくも云々より下の事をさしていへるなるべし
君の打れふりて云々 〔釋〕このさだめ葵上のさまにかなへれば源氏君にきかせ奉らんと思ふに打れふりて語を交給はぬを中將のさう〴〵しく心やましく思ひ給ふよし也さう〴〵しくはものさびしき意心やましくは起て聞給へかしとやうに

くしいづることなん。なほまことのものゝ上手は。さまことに見えわかれ侍る◎又ゑどころに上ずおほかれど。すみがきにえらばれて。つぎ〳〵に。さらにおとりまさるけぢめ。ふとしも見えわかれず。かゝれど。人の見およばぬほうらいの山。あら海のいかれるいをのすがた。から國のはげしきけだものゝかたち。めに見えぬおにのかほなどの。おどろ〳〵しくつくりたるものは。心にまかせて。ひときは人のめをおどろかして。じちにはにざらめど。さてありぬべし。よのつねの山のたゝずまひ。水のながれ。めにちかき。人のいへゐありさま。げにと見え。なつかしくやはらびたるかたなどを。しづかにかきまぜて。すくよかならぬ山のけしき。こぶかくよばなれてたゝみなし。けぢかきまがきのうちをば。そのこゝろしらひおきてなどをなん。上ずはいといきほひことに。わろものはおよばぬところおほかめる◎てをかきたるにも。ふかき事はなくて。こゝかしこのてんながにはしりかき。そこはかと

心のいらるゝ意也このところ又當夜のさまをあらはしたる第五段なり

ものさだめのはかせになりて　〔新〕はかせは博士にて博達の學士なり何の道々にも師匠なるをいへどこゝは學問の博士が學生の論を判り定むるがごとく馬頭が定むるをなかしく書て興とするなり

ひゞらぎゐたり　〔玉〕俗言に口をたゝきゐたりといふこと也紫式部日記によろづつれ〲なる人のまぎるゝ事なきまゝにふるき反古ひきさがしおこなひがちにくちひゞらかしずゝの音たかきなどいとこゝろづきなく見ゆるわざなりとあるも口ひゞらかしは經よみ念佛などくちやめずいひつゞくるをいへり云々

このことわり聞はてんと云々　〔釋〕このことわりとは上にしな〲あげつらへる女のしなの理をいふあへしらひは孟津に會釋也と注せられたるがごとし

よろづのことによそへておぼせ　〔評〕こゝよりあだなる女と實なる女とのけぢめを物によそへて說出せりさてそれはたゞ一事にてもあるべきを同じたとへを三つまで擧てつひにたゞ實なるかたの一すぢにむすびよせられたる筆づかひ例のいといみじといふべしさるはこの實なることの一事なん品定のむねとあることなればなりける

そのものとあともさだまらぬは　〔釋〕たしかにいか樣と其形の定まりなき器物はなり

そばつきざればみ　〔玉〕そばつきは傍の形なりつきは顏つき手つきなどのつき也されぱみは俗にしやれたるといふこと也云々これはうはべの風流めきなさけだちて實なき女のたとへなり

げにかうもしつべかりけりと　〔釋〕そばつきざればみたる物は打見るに興ありていかにもかくすべき事なりとやうに一たびは感ぜらるゝ也げには見る人の感じうべなへる語なり時につけつゝさまをかへてとは其時々の流行にしたがひていかやうにも作りかふるをいふ

大事として　〔湖〕是より定りたる格式ある道具のうへをいふなり

うるはしき人のでうどの　〔玉〕うるはしきはでうどへかゝりて人へはかゝらず人のうるはしきでうどゝいふ事也たみ詞にうるはしき人と見て善人也といへるはたがへり云々たゞこれは實なる女のたとへなるをや　〔釋〕案に小櫛の說一わたりいはれたる事ながらなほこれはうるはしき人にて貴人をさしたるにやあらんさだまれるやうある物といへるはむかしより定まりたる故實のやうある物といふ意と聞ゆればたゞに人のとのみいひてはいさゝかたらはぬこゝちす

さまことに見えわかれ侍る　〔祇〕うるはしき人のでうどのかざりをば人の家あるじといはるべき女のかたにたとへいふなり　〔釋〕此段のすべての意は臨時の翫物などはざればみたるもいまめかしくてをかしきもありされど大事として故實ある貴人の調度のかざりとする物などを難なく作り出ることはまことの上手ならでは其さま殊にきはやかには見え分るまじといふ意を女のうへにたとへてなり〲かよふ女などはざ

れぱみあだめきたるもさるかたになかしかるべけれどたのみとしてうしろみの事とらせん人は實ならではかなふまじきことしないへる也

ゑどころ　〔河〕西宮抄云畫所在二式乾門內東廰御書所南一有二別當一五位藏人預云々

すみがきにえらばれて　〔玉〕彩色をする事に對へてたゞ繪をかくことをいへる名目也古へは繪をかきて彩色をばべちに他人にせさする事ありし故に二つに分て墨がきつくり繪といへり　つくりゑとは彩色するをいふ也墨繪彩色繪といふことにはあらず云々　（釋）えらばれての下にかくにといふことをくはへて心得べし小櫛にはつぎ〳〵の下にいれて心得べきよしいはれたれどつぎ〳〵にはまさりおとる次第をさしていへる語なれば意いさゝかたがふべし

ほうらいの山　〔餘〕列子湯問篇曰渤海之東不レ知二幾億萬里一有二大壑一焉云々其中有二五山一焉一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州五曰蓬萊其山高下周旋三萬里其頂平處九千里山之中間相去七萬里以爲二隣居一云々下略

あらうみのいかれるいを云々　〔餘〕鯨鯢鰐などをいへるなるべしはげしきけだものは猛獸にて虎豹獅子の類をいへるなるべし

おにのかほ　〔細〕後漢書張衡傳云畫工惡レ圖二犬馬一而好レ作二鬼魅一誠以二實事難一レ形而虛僞不レ窮也　〔新〕〔餘〕韓子云客有下爲二齊王一畫者上齊王問曰畫孰最難者曰犬馬難孰易者曰鬼魅最易夫犬馬人所レ知也旦暮罄二於前一不レ可レ類之故難鬼神無レ形者不レ罄二於前一故易之也

すくよかならぬ山のけしき　〔玉〕すくよかならぬは嶮岨ならぬ也といへる注よろし云々

よばなれてたゝみなし　〔湖〕世をはなれたる心なり　（釋）山は幾重にも疊むがごとくかく物なる故に疊みなしといへる也

けぢかきまがきのうち　〔湖〕氣近き也　〔細〕前栽をいふ也

こゝろしらひ　〔拾〕有意日本紀第廿八天武紀上　（釋）しらひはあへしらひなどのしらひと同じき辭也俗に心もちといふ意也體言なりおきても體言なり

わか物はおよばぬ所おほかめる　（釋）このくだりも又人の目を驚かす方をあだなる女にたとへよのつねの山の云々けぢかきまがきの內などを實なる女にたとへていへるなり

てをかきたるにも云々　（釋）こゝより又書の事によそへていふ也字かくことを手といふは今もしかりふかき事なきは深く達らぬをいふ

こゝかしこのてんながに　（釋）こゝかしこ點を長くなどしてことばへまぎらはすをいふはしりがきのかすむべし

まことのすぢをこまやかに　〔細〕唐穆宗問二筆法柳公權一曰心正則筆正筆正乃可レ法矣といへり　（釋）まことのすぢとは筆法の事也

うはべの筆きえてみゆれど　（釋）うはべの筆とは筆勢のことなるべし法のごとくこまやかに書たるは筆勢なきやうなるを消てといへる也

今一たびとりならべて　（釋）今一度とは立かへりて今一度よく〳〵見る也とりならべてはけしきばめるとまことのすぢなるとくらべて也

猶じちになんよりける　〔玉〕これは上件の三つのたとへをすべていふ也三のたとへ皆同じ意にて女のけしきばめるうはべのなさけと實なると

なくけしきばめるは。うち見るにかど〳〵しくけしきだちたれど。なほまことのすぢを。こまやかにかきえたるは。うはべの筆きえてみゆれど。今ひとたびとりならべて見れば。猶じちになんよりける◎はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の。ときにあたりてけしきばめらむ。みるめのなさけをば。えたのむまじく思ひ給へ侍り◎そのはじめの事。すき〴〵しくともまうし侍らん。とてちかくゐよれば。君もめさまし給ふ。中將いみじくしんじて。つらづゑをつきてむかひゐ給へり。のりの師の。世のことわりときゝかせん所のこゝちするも。かつはをかしけれど。かゝるついでは。おの〳〵むつごとも。え忍びとゞめずなんありける□はやうまだいと下らうに侍しとき。あはれと思ふ人侍りき。聞えさせつるやうに。かたちなどいとまほにも侍らざりしかば。わかきほどのすき心ちには。この人をとまりにとも思ひとゞめ侍らず。よるべとは思ひながら。さう〴〵しくて。とかくまぎれありき侍りし

のたとへ也云々（評）此語上件三つの事をつゞめたる眼目の詞なるはいふもさらにてすべては品定の眼目の詞なることをよく心得てよむべし

はかなき事だにかくこそ侍れ云々（釋）はかなき事は上件三つの事を云こゝに至りてつひに實によるべきよしをことわりあかしたる也

そのはじめの事（釋）馬頭がそのはじめ有し事也

君もめさまし給ふ（湖）前に君の打眠りてとありし首尾也（釋）此所當夜の人々のさまをあらはしたる第六の段なり源氏君のねふりてさめ給ひ中將のしんじてあへしらひ給ふさまなど其人のすがたをまさしく見るがごとくにていとく〳〵めでたし

中將いみじくしんじて（釋）つら杖をつきたるは感じたるさま也法の師の云々といふに對へて信じてとかけるいとをかし

つらづゑ（河）白氏文集吟ー苦支頭

暁燭前ノ
のりのしの云々　(釋)法師の世間の道理を説く所の心ちするもをかしけれど、戯れたる也むつごとは舊注にいもせの中の私語とあるがごとし
はやうまだいと下らうに侍し時
〔湖〕左馬頭官位淺かりし時也
(評)こゝよりはおの〳〵のうへにありし事をかたる也初はたゞにしなど心ばせとを論じ其後物によそへて論じつひに我身にありし事をもて論じをはるなり文のうつろひに心とゞめて見るべし
聞えさせつるやうに　〔細〕前にびさうなき家とうじといひし事也
まほにも　〔拾〕まほは片帆にむかひたる詞なり云々　(釋)帆の事よりいでゝたゞますぐなるといふ意につかひたりかたほはその反(ウラ)にてゆがみたる事也
とまり　(釋)つひのよるべとして其人に思ひとゞまる意也
よるべとは思ひながら云々　(釋)此

を。物ゑんじをなんいたくし侍りしかば。心づきなく。いとかゝらでおいらかならましかばと思ひつゝ。あまりいとゆるしなくうたがひ侍るしもうるさくて。(甲)かく数ならぬ身を見もはなたで。などかくしも●おもふらん。と心ぐるしきをり〳〵も侍りて。(乙)じねんに心をさめらるゝやうになん侍りし。この女のあるやう。もとより思ひいたらざりける事にも。いかでこの人のためには。となきてをいだし。おくれたるすぢの心をも。なほくちをしくは見えじ。と思ひはげみつゝ。とにかくにつけて。物まめやかにうしろみ。つゆにても心にたがふことはなくもがな。とおもへりしほどに。すゝめるかたと思ひしかど。とかくになびきゝてなよびゆき。見にくきかたちをも。この人に見やうとまれん。とわりなく思ひつくろひ。うとき人にみえば。おもてぶせにやおもはん。とはゞかりはぢて。みさをにもてつけて。見なるゝまゝに。心もけしうはあらず侍りしかど。たゞこのにくきかたひとつなん。心をさめず侍

女をとまりにとは思はれど又より所とは思ひし也されどさてのみはさう〴〵しくてとかくまぎれありきしと也よるべは憑方の意にて憑み寄る方といふ意なり

〔釋〕此てもじは句をへだてゝじれんに云々へつゞく意と見るべしさらではこの所聞えがたしうたがふもうるさくておのづから心のをさまるやうなる中に數ならぬ身をかくまでも思ふらんと心ぐるしき心もありてかた〴〵心をさめらるゝやうなりしなり玉小櫛補遺に侍しはうるさけれどなどあるべしといへれどかくてもきこゆるなり

數ならぬ身を　〔細〕いまだ官も淺くて年もわかき我身をば何とて是ほどまでは頼みてゆるしなくはするぞとなり

思ひいたらざりける事にも　〔湖〕わが心のいたらぬ事にも也

なきてをいたし　〔玉〕おのがえせぬ及ばぬ事までをさは思はれじとし

りし。そのかみ思ひ侍りしやう。かうあながちにしたがひおぢたる人なめり。いかでこるばかりのわざして。おどして。このかたもすこしよろしくもなり。さがなさもやめんと思ひて。まことにうしなども思ひて。たえぬべきけしきならば。かばかり我にしたがふ心ならば。思ひこりなんと思ひ給へて。ことさらになさけなくつれなきさまを見せて。れいのはらだちゑんずるに。かくおぞましくは。いみじき契ふかくとも。たえてまた見じ。かぎりとおもはゞ。かくわりなき物うたがひはせよ。ゆくさきながく見えんと思はゞ。つらき事ありともねんじて。なのめに思ひなりて。かゝる心だにうせなば。いとあはれとなん思ふべき。人なみ〳〵にもなり。すこしおとなびんにそへて。またならぶ人なく(な)(ん)あるべきなど。かしこくをしへたつるかなと思ひ給へて。われだけくいひそし侍るに。すこし打わらひて。よろづにみだてなく。ものげなきほどを見すぐして。人かずなる世もやとまつかたは。のどかにお

ひてする意なり
すゝめるかたと〔弄〕さし過たる心也〔釋〕進める方にてすなはちなき手を出して思ひはげむを進めるといへるなりすくめるとある本はわろし
とかくになびきゝてなよびゆき〔弄〕此女の馬頭になびく也〔釋〕なびきは從ふ意なりなよびゆきはもの和らかになりゆくをいふ
此人にみやうとまれんと〔釋〕此人は馬頭をいふ女の方を主としていふ所なる故に此人とはいへる也女の馬頭に見疎まれんかと思ひてかたちをつくろふよし也
うとき人に見えば云々〔釋〕うとき人は他人をいふわろきかたちを他人に見られなば馬頭がおもてぶせにやおもはんと女のはゞかりてかくれなどする意也おもてぶせははぢたる貌にて面目なしといふ意なり〔新〕白氏文集に外人不レ見見應レ笑
みさをにもてつけて〔玉〕俗言にたしなむといふ意にて容貌の事也〔釋〕この前後に脱文あるべくおぼゆさらでは女と馬頭とのわいためなしはゞかりはぢてとあるは女也みなるゝまゝにといふは馬頭の女を見馴る也
心もけしうはあらず侍りしかど〔釋〕見なるゝまゝに心も異しうはあらざりしかどたゞ嫉妬ひとつは心にかなはざりしと也にくきかたとは嫉妬のことをさしていへる也
心をさめず〔湖〕馬頭心おちつかざりし也〔玉補〕上のをさめらるゝに應ず〔新〕にくしと思ふ心の治めがたき也〔釋〕案にこれはもしくは女の心にえをさめざりし事にや馬頭の事としてはをさめずといふ詞の自他たがへるやう也されど暫く諸注にしたがふ猶考ふべし
このかたもすこしよろしくもなり〔玉〕此かたは嫉妬の事也よろしくなるはうすくなのめになる也さてなりの下へてもじを加へて心得べし
さがなさもやめんと思ひて〔玉〕口さがなきにて俗言に口やかましきといふこと也さて此かたもさがなさもといへるは二つの如く聞ゆれど然らずさがなきは嫉妬してさがなきなれば一つ事也嫉妬もなのめになりてさがなさのやむ也さて　やめむと思ひてはやむべくせんと思ひて也
まことにうしなども思ひて〔玉〕女をこらさんためにつくりてする事なるを實にうしと思ふごとく見せての意なり
たえぬべきけしきならば〔玉〕こなたより絶ぬべきけしきに見せたらば也
かくおぞましくは〔雅譯〕女の心つよく手あらき意なり
いみじき契ふかくとも〔新〕いみじきといひふかくと有からは宿世の契ありともといふ意也只相契れるをいはゞふかき契は有ともなどいふべし
かぎりと思はゞ云々〔釋〕これを限に絶んとおもはゞすぢなき嫉妬をもせよゆく末長く見えんと思はゞつれなき事ありともたへ忍びてなのめ

もひなされて。心やましくもあらず。つらき心をしのびて。思ひなほらんをりを見つけんと。年月をかさねんあいなだのみは。いとくるしくなんあるべければ。かたみにそむきぬべききざみになんある。とねたげにいふ時に。はらだゝしくなりて。にくげなる事どもをいひはげまし侍るに。女もえをさめぬすぢにて。およびひとつをひきよせて。くひて侍りしを。おどろ〳〵しくかこちて。かゝるきずさへつきぬれば。いよ〳〵まじらひをすべきにもあらず。はづかしめ給ふめるつかさくらゐ。いとゞしく。なにゝつけてかは人めかん。世をそむきぬべき身なめり。などいひおどして。さらばけふこそはかぎりなめれ。とこのおよびをかゞめてまかでぬ。

手をゝりてあひ見しことをかぞふればこれひとつやは君がうきふし。えうらみじなどいひ侍れば。さすがにうちなきて。

うきふしを心ひとつにかぞへきてこや君がてをわかるべきをり。などいひ

に思ひなして嫉妬をやめよさらばあはれと思ふべきと也

人なみ〳〵にもなり〔祇注〕官位もあがり人々しくもならばいよ〳〵あひ思べきと女の心をとる儀也〔釋〕おとなびんは官位すゝみて大人ぶるをいふ

又ならぶ人なく〔釋〕外に又此女に比すべきほどの寵愛の人はなかるべしと也

かしこくをしへたつるかなと〔湖〕我がしこく女を教へたつるかなと思ひて也〔釋〕たつるは仕立るいひ立るなどのたつるに同じ

いひそし〔河〕言殺也いひこらす也〔花〕殺の字詩にも愁殺惱殺など作れり〔細〕つよくいひすごす也〔玉〕宿木巻にもひきたがへこゝろえぬまで好みそし給へる注にいひすごす心也とはさも有べし殺字はあたらず

みだてなく〔祇注〕官位の賤き事也

人かずなるよもやと〔釋〕官位進みて人がましき時節もあらんかと待

かたはといふ也
のどかに思ひなされて　〔玉〕其方の事にさのみ切にも思ひいれざるよし也
あいなだのみは　〔玉〕すべて此詞はいかにあらんもしりがたき行末の事をそのわきまへもなく頼みに思ふこと也
はらだゝしくなりて　〔玉〕こりなんとかれて思ひしにたがへる故なり
えをさめぬすぢにて　〔釋〕女も嫉妬の腹立はえこらへぬ條にて也
およびひとつを　〔新〕和名抄指由比俗云於與比さて五ッの指ごとに何の於與比といひことに季指古於與比と有からは惣ての指をおよびとはい
ふ也
まじらひを　〔湖〕朝廷の交なり
はづかしめ給ふめるつかさ位　〔玉〕上に見だてなくものげなきほどを云々と女のいへるにあたりていふ也　〔釋〕この段いさゝか聞にくし位の
下に字の脱たるにやいとゞしくは官位の賤さに疵さへつけるをいとゞといへる也人めかんは人がましくならんの意なり
世をそむきぬべき身なめり　〔釋〕遁世すべき身といふ意也
このおよびをかゞめて　〔釋〕このは今かのといふべき所也かのくはれし指を痛き故に屈めて歸りしと戲れていへるなり退出は　源氏君頭中將に
對ひていへる敬ひ詞にてたゞ歸ること也
てをゝりて云々　〔釋〕湖月抄に五文字はおよびをかゞめてといへる詞書にかけて見るべしといへるよろし手を折ては指を折てといふ事也さて
歌の意は指を折てあひ見し年月の間の事をかぞへて見るにたゞこの物ゑたみの一つや君がうきふしなるべきといひて其外の事はうしろみの
事も我に盡したる心も皆まめやかなりし物をとふくめたる意也やはの辭はふくめたる所にて結ぶ格にてうきふしの下にナルベキといふ辭を
いひさしたる其ベキにて結び竟る意也此歌の解諸注ひがこと多し別に論ずべし
えうらみじなと　〔釋〕物ゑたみの外にはさしてうきふしもなかりしかば今別るとても其方をばえうらみじと馬頭のいへる也さる故に女もさす
がにかなしくなりて打なきたる也この詞も諸注はいかゞ也別にいふべし
うきふしを云々　〔釋〕このうきふしは上の歌に君がうきふしといへるにつきて却て馬頭があだ〳〵しきをうきふしといへるなりさてそのあだ
あだしきうきふしをたゞ我心ひとつにおしこめてたへしのびきてといへるにてかぞへといふは上の歌にかぞふればといふにあたりて一つ二
つところへ來りし事をいへる也下句はしかこらへ來りたるにこの時にいたりてつひに君に別るべき時節到來したるならんと歎きたる也手を
別るといへるは今俗の言にも手チキルなどいふがごとくたゞ別るゝ事なるをかの手を折てといふ句にあたりていへるなりこやのやはいひさ
してふくめたるナランのむにて結びたる格なりこの歌も諸注はまぎらはし

いひしろひ　〔孟〕たがひにいふ心なり　（釋）しろひは辭にてひきしろひつきしろひなどのしろひと同じく互にする意也
あくがれまかりありくに　〔玉〕方々の女のもとへかよひありく也あくがれとはかの・ゐるべと思へる女にはなれたる故也
りんじの祭のでうがくに　〔花〕賀茂臨時祭調樂十一月午日於二北陣一構二假屋一有二儀式一有二饗膳勸盃等一　〔祇注〕りんじのまつりとは北祭の事也
十一月酉なり調樂は午の日なり大内にてあるなり
よふけていみじうみぞれふる夜　（評）此二句身にしみてめでたし調樂のかへりちふけてみぞれふるさま絕たる女を思ひいでゝといふべき心を
起さんしたくみかへすぐいみじといふべし　（釋）みぞれは雪まじりの雨也下には雪といへり
これかれまかりあがるゝ所にて　（釋）まかりは禁中より出る也あがるゝは別れ散る事也件ひて出たる人のわかるゝ也
なほ家ちと思はんかたは　（釋）路はたゞかろくそへたるにて我家と思はん方は也
またなかりけり　〔玉〕かの女をおきて外に又なり
うちわたりのたびねも　（釋）うちは禁中也禁中あたりにひとりねせんも不用らしきとの意也 旅寝はまろねするがつれなればいへるのみ也すさ
ましは物さびしく不用なる意也　〔新〕家路といひ出せしより旅ねといへり是文なり
けしきばめるあたりは云々　〔玉〕こよひの寒きにけしきばみ風流ならんあたりは打とけがたくてそゞろはしく寒からんと也
いかゞおもへると云々　〔玉〕寒き夜は心やすくうちとけてぬる所こそよけれと思ひてかの女の戀しく思はるゝからけしきも見がてらゆく也
なま人わろくつめくはるれど　（釋）さまわろく恥たる體也　〔餘〕うつぼ物語藏びらきの卷に講師はこゝろせよとのたまへばえよまでつめくひ
もてさふらふ　〔細〕恥たる體なり　〔玉〕かやうのなまは俗言にどうやらといふこゝろばへ也
さりともこよひ云々　（釋）さはありとも今夜あひかたらはゞこの日比の恨はとけなんと思ひし也
かべにそむけ　〔河〕耿々殘灯背レ壁影　白氏文集
なえたるきぬどものあつごえたる　（釋）なえたるは和らかなる也あつごえは舊注に綿など入たるにやと有がごとし
大なるこに打かけて　〔新〕薫の料ならば大なることいふべからず是はよるの物をあたゝめん料とみゆ
ひきあぐべき物のかたびら　〔河〕几帳の帷也　〔新〕これは几帳のみをいふならでかべしろ其外をもかぬるならん
さればよと　〔細〕さればこそ我を思ひはすてぬよと也　（釋）こゝろおごりは心の中にて慢ずる意なり
さうじみ　〔玉〕物語の例其本人といふ意に用る稱なり正身の字は古書にもなりくゝ見えたり
とまりて　（釋）のこりとゞまりたる也
けしきばめるせうそこもせで　〔玉〕馬頭をうらみたるけしきを見せたるやうのせうそこ也　（釋）これは上にいはんかたなくすごきことのはあ

はれなる歌をよみおき云々といへるにあたりていへる也もの辭に心を付べし

ひたやごもりに 〔玉〕河海に直隱(ヒタヤゴモリ)とある字のごとく何のいへることもすることもなくてその故といふこともしられずたゞひたすらにかくるゝやすの意也やといふはこもりといふによれる言にて屋の意より出たる言か

我なうとみれど 〔玉〕我は馬頭が我なりうとみれど我を思へるにやといふ意也我を女の我と見たるはひがこと也さては我なといふ言いたづらなるをやこれはもし他(ホカ)に心をかはせる男のあるによりていかでうとめかしと我をば思ひしにやといふ意にてこそ我をとはいへるなれ云々

心とゞめたる色あひしさまいとあらまほしくて。 〔釋〕湖月本にいろあひしざまとつゞけてよみたるはひがこと也色あひしとよみてさまいととよむべし心とゞめてうつくしく

しろひ侍りしかど。まことにはかはるべきこととも思ひ給へずながら。ひごろふるまでせうそこもつかはさず。あくがれまかりありくに。りんじのまつりのでうがくに。夜ふけていみじうみぞれふる夜。これかれまかりあがるゝ所にて。思ひめぐらせば。なほ家ぢと思はんかたは。またなかりけり。内わたりのたびねもすさましかるべく。けしきばめるあたりはそゞろさむくや。と思ひ給へられしかば。いかゞおもへる。とけしきも見がてら。雪をうちはらひつゝまかりて。なま人わろくつめくはるれど。さりともこよひ。日ごろの恨はとけなん。と思ひ給へしに。火ほのかにかべにそむけ。なえたるきぬどものあつごえたる。おほいなるこに打かけて。ひきあぐべき物のかたびらなどうちあげて。こよひばかりや。とまちけるさまなり。さればよと心おごりするに。さうじみはなし。さるべき女房どもばかりとまりて。おやの家に。このよさりなんわたりぬる。とこたへ侍り。えんなるうたもよまず。

染なし衣のさまもあらまほしき形に縫てありし也
わが見すてゝ後をさへなん　〔玉〕此わがは女の我也これも人の手にうつる意をふくめたる所なる故にわがとはいふ也さて見すてといふも俗言にいふとは心ばへことにしてこれはうしろみすることをすてゝやむるをいふ也上下の詞をよく思ひ合せてしるべし
とかくいひ侍しを　〔釋〕ふたゝびあひ見んなどいひやりしなるべし
たづねまどはさんとも　〔湖師〕此詞は彼品定にえんに物はぢしてうらみいはざりし女の山里などにはひかくれて人をまどはせしやうに男をたづねまどはさんともかくれありかざりしと也その親の家へわたりし夜も馬頭をいとひてせしわざにはあらざりし心をあらはすなるべし
かゝやかしからず　〔玉〕馬頭が方よりとかくいふにその近事のおだやかにおとなしきをいふ也

けしきばめるせうそこもせで。いとひたやごもりになさけなかりしかば。あへなきこゝちして。さがなくゆるしなかりしも。我をうとみねと思ふかたの心やありけん。とさしも見給へざりし事なれど。心やましきまゝに思ひ侍りしに。きるべき物つねよりも心とゞめたる色あひし。さまいとあらまほしくて。さすがにわが見すてゝん後をさへなん。思ひやりうしろみたりし。さりともたえて思ひはなつやうはあらじ。と思ひ給へて。とかくいひ侍りしを。そむきもせず。たづねまどはさんともかくれしのびず。かゞやかしからずいらへつゝ。たゞありし心ながらは。えなん見すぐすまじき。あらためてのどかに思ひならばなん。あひみるべき。などいひしを。さりとも思ひはなれじ。と思ひ給へしかば。しばしこらさんの心にて。しかあらためんともいはず。いたくつなびきて見せしあひだに。いといたく思ひなげきて。はかなくなり侍りにしかば。たはぶれにくゝなんおぼえ侍りし◎ひとへにうちたの

たゞありし心ながらば（釋）もとのまゝにあだ〳〵しき心にてはと也
のどかに思ひならば（玉）方々へうつす心をやめてしづかにおちつくをいふなり
つなびきて（玉）たみ詞に引ぱりあふ體也といへるよろし（新）（餘）拾遺集平貞文「引よせばたゞにはよらで春駒のつなびきするぞ名はたつときくこの歌をもていへり
思ひなげきて云々（釋）女の思ひ歎きてそのおもひにてつひに身まかりたる也
たはふれにくゝ（新）たはふれのまことゝなりて興さむるといふが如くこらさんのはかりごとに過てかひなくなれるなり古今集に「ありぬやとこゝろみがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ戀しき是を轉じて用ゐたり
さばかりにて有ぬべく（玉）上をくはへずともそのまゝにてたりなんと也
はかなきあだ事をも云々

みたらんかたは。さばかりにてありぬべくなん。思ひ給へいでらるゝ。はかなきあだことをも。まことの大事をも。いひあはせたるにかひなからず。たつた姫といはんにもつきなからず。たなばたのてにもおとるまじく。そのかたもぐして。うるせくなん侍りし。とていとあはれとおもひいでたり。中將。そのたなばたのたちぬふかたをのどめて。ながき契にぞあえまし。げにそのたつたひめのにしきには。又しくものあらじ。はかなき花紅葉といふも。をりふしの色あひつきなく。はか〴〵しからぬは。つゆのはえなくきえぬるわざなり。さるによりかたき世ぞ。とはさだめかねたるぞや。といひはやし給ふ。さておなじころまかりかよひしところは。人もたちまさり。心ばせまことにゆゑありとみえぬべく。うちよみ。はしりかき。かいひくつまおと。てつきくちつき。みなたど〳〵しからず。みきゝわたり侍りき。見るめもこともなく侍りしかば。このさがなものを。打とけたるかたにて。とき〴〵

(釋)あだ事はあだなる事にてさしてとりとめたる事ならぬ風流など也まことの大事は公私につけたる緊要の事をいふ

たつた姫といはんにも　〔新〕立田彦(タツタヒコ)立田姫の二神は風の神にて本は物染るなどの事はあられど此立田山は紅葉のよきよし古今集後撰集などに歌多く侍るによりて其後は立田姫は紅染出す神のごとくいひなせる也　〔祇注〕うせたりし女の物をよく染るかたを龍田姫といひ織ぬふかたをたなばたの手にもおとるまじといへるなり　(釋)いにしへは常の女もみづから物をそめしかば　かばかりの人も衣服をそめしなり今世のさまを見て疑ふべからず棚機姫(タナバタヒメ)神は古語拾遺に見えたりされどこゝはたゞ機といふ事をとりて織る事に用ゐたるまでなりたなばたもかの七夕をおもへるなるべし

うるせく　(釋)うるさくとある本は誤なり一本によりて改めつうるせくは功のいりてよろしきかたにつかひたり

そのたなばたの云々　〔祇注〕裁ぬふかたは似ずとも長き契にあやからせたきよし也「おふ事はたなばたつめにひとしくてたちぬふかたはあえずぞありけるの歌をとりていへる也　(釋)此歌後撰集にありさてこの歌の意はあふことのまれに　裁縫ふ事のつたなきよしなるをこゝにはたちぬふかたをのどめて世とゝもにかはらぬ契にあえんとうちかへしてとられたる例ゆいとめでたし長き契とはかの牽牛織女の契の天地とゝもに久しきかたにていへる也

たつたひめのにしきには　〔玉〕これは其女のやうを聞てげに其女にしくものあらじと女のすべてのうへをほめたる詞也たゞ物染るかたのみをほめたるにはあらずにしきといへるはたゞしく物といはんための縁のみにてその錦をいはんとて上の語によりて女を立田姫とはいへる也

(釋)立田姫のにしきはそめなす錦といふ意なりしくは及ぶ意にておよぶものあらじといへる也錦の縁にしくとかけていへり

はかなき花紅葉といふも云々　〔玉〕いふもはいへどもの意か又はかなき物にいふ花紅葉もといふ意にもあるべしさてこれは本妻ともさだむべき女は大かた何事もたらはではあしかるべきよしにていへるにてはかなき花紅葉だに云々なればまして妻とすべき女は何事もたらはではといふ意也然るを上に立田姫の錦といひこゝにもなりふしの色あひとあるになづみてたゞ物染ることゝ心得たる注は誤なり云々

なりふしの色あひつきなく云々　(釋)花紅葉もそのをり〳〵の色あひはか〴〵しからぬはすこしの光映(ハエ)もなくいろの消はてゝ興なきわざ也といふ意なり露は花紅葉をにほはし出る物なる故にいさゝかの事をつゆといふ詞にかれていへるたくみ也新釋にたゞ少ばかりの意にのみとかれたるはわろしさてこれは本妻とすべき女のたとへなること玉小櫛にいはれたるがごとし

さるにより　〔玉〕此上にまして妻ともすべき女は大かた何事もたらはではかなはずといふ意をふくめたる物也上の詞にその立田姫の錦に云々とかの女をほめて花紅葉のくらべ物をいへるにてそのふくめたる意は聞ゆるなりさてそのふくめたるをうけてさるによりといふ也

かたき世ぞとは云々　〔玉〕妻とすべき女は何事もたらはではあしかるべきわざなるによりてさやうの女は有がたき世中にて定めかれたりと也

云々

いひはやし給ふ　〔湖〕馬頭をいひはやし給ふ也　(評)中將云々といひ榮し給ふといふ意にて當夜のさまの第七段也

人もたちまさり　(釋)指くひし女より人がらもまさりたる也

ゆゑありと見えぬべく　〔玉〕人の見んにまことに故ある女と見ゆべきさまなりしと也

見きゝわたり侍りき　〔玉〕見はよみたる歌手かきたるなどを見る事聞は琴をひきたるを聞也これらのわざたど〳〵しからざるさまに馬頭が見聞て年月をわたりこしといふ也

みるめも云々　(釋)かたち雜なき也

このさがなものを　〔玉〕すべてかのといふべきをこのといへること多し心得おくべし云々　(釋)さがなものはさがなく物ねたみして指くひし女の事也

うちとけたるかた　〔玉〕心やすき所にして也

かくろへみ侍りし　(釋)指くひし女

かくろへ見侍りしほどは。いとこよなくこゝろとまり侍りき。この人うせて後いかゞはせん。あはれながらも。すぎぬるはかひなくて。しば〳〵まかりなるゝまゝに。すこしまばゆく。えんにこのましきことはめにつかぬ所あるに。うちたのむべくはみえず。かれ〴〵にのみ見せ侍りしほどに。しのびて心かよはせる人ぞありけらし。神無月のころほひ。月おもしろかりし夜。内よりまかで侍るに。あるうへ人きあひて。この車にあひのりて侍れば。大納言の家にまかりとまらんとするに。この人のいふやう。こよひ人まつらんやどなん。あやしく心ぐるしき。とて。この女の家はた。よきぬみちなりければ。あれたるくづれより。池の水。かげ見えて。月だにやどるすみかを。すぎんも。さすがにて。おり侍りぬかし。もとよりさる心をかはせるにやありけん。此をとこいたくすゞろぎて。かどちかきらうのすのこだつ物にしりかけて。とばかり月をみる。菊いとおもしろくうつろひわたりて。風に

にかくれて也 〔玉〕木枯女をなり
すこしまばゆく 〔玉〕うるさく思はるゝ心ばへ也
えんにこのましきことは 〔細〕あだ〳〵しきかたの心たのもしからぬと也云々
心かよはせる人ぞ （釋）心かよはせる人は郎下の殿上人をいふ
あるうへ人きあひて （釋）馬頭禁中より退出る時一人の殿上人來りあはせて馬頭の車に相乘したる也
大納言の家に 〔弄〕誰とも見えず馬頭にえんある人なるべしたゞ大納言といへるおぼつかなし馬頭が父にや云々河にも馬頭が父歟と云々
此人のいふやうこよひ人まつらん （釋）此殿上人馬頭にいふやうは今夜我をまつ女ありてあやしく心にかゝればそなたへゆかんとてといふ意也とての下に詞いさゝか落たるか或抄に鈴屋翁の說とて擧たるにも詞おほく脫たるべきよしをいへり 〔湖師〕馬頭のかよふ事を此うへ人はしらぬ也 〔餘〕古今雜下「今ぞしろくるしき物と人またんさとをばかれずとふべかりけり 此歌にてあやなしたる也云々
此女の家はた 〔玉〕はたはも又也大納言の家にゆくに此女の家も又かならず通る道なればと也 大納言の家にとまらんとするに此女の家はた云とつゞく語のはこび也
よきぬ道 〔餘〕契沖云よきはよけといふに同じ古今に花のあたりをよきてふけ萬葉のよき道を曲道とかけり云々
あれたるくづれより池の水かげ見えて （釋）築地などのあれたるくづれより池の水に月のやどれる影の見ゆる意なるをあやなしてかける也
月だにやどるすみかを 〔河〕拾遺集伊勢「雲ゐにてあひかたらはぬ月だにもわがやとすぎてゆく時はなし 〔湖〕月さへやどるすみかを男のやどらでもさすがに通しがたしとの心也
おり侍ぬかし （釋）上に脫文ある故にやこの車よりおりたる人の自他まぎらはし しばらく上の心ぐるしきとてとある所よりうけたる語と見て殿上人の下たる事とすべし萬水一露には馬頭もおるゝ也といへり
もとよりさる心をかはせるにや 〔湖〕此うへ人木枯の女に心を通じたるにやと也 是馬頭は此よしを見しりてさらぬやうにて見るに殿上人は其事を不知也
とばかり 〔湖〕しばしといふ心也
うつろひわたりて （釋）霜にうつろひて色の赤くなるをいふ 菊はうつろひたるを賞るも常也わたりてはひとしく色の付たるをいふ
あはれとげに （釋）げにあはれと見えたりといふ語脉也
かげもよし 〔河〕催馬樂に「あすかゐにやどりはすべしかげもよしみもひも寒しみまくさもよし 〔花〕あすかゐの歌のかげもよしは木の陰也みもひは寒水也みまくさは馬にかふ草也 〔拾〕飛鳥井はかげろふ日記によるべし大和の明日香にあり 〔細〕此あすかゐをうたふ心は宿りも

すべしの心をとる也
つゞしりうたふ　〔餘〕ひとくちづゝうたふ也さだかにうたふべき時ならねば也萬葉五堅鹽をとりつゞろひ末つむ花卷に御つゞしり歌のいとをかしき云々
しらべとゝのへたりけるを
〔玉〕かれてよく調子をあはせおきたるを也もしこれを今ひくことゝしては下のかきあはせたりしといふこと重なり又とゝのへといふ言もいかゞ也
かきあはせたりしほど
（釋）琴を搔ひきて笛にあはせたる也けしうはあらずはあやしからずつきづきしき意也
りちのしらべは　（細）飛鳥井も律の歌也律は秋を司る也又律は陰なれば女のかた也時節がみな月なればなりにあへるなるべし　（釋）この御說さも有べけれど陰陽のさだまではあらざるべしたゞ律の調子は女のやはらかなる手にかきならしたる音の簾のうちより聞えたるが

きほへるもみぢのみだれなど。あはれとげに見えたり。ふところなりけるふえとりいでゝふきならし。「かげもよしなどつゞしりうたふほどに。よくなるわごんをしらべとゝのへたりけるを。うるはしくかきあはせたりしほど。けしうはあらずかし。りちのしらべは。女の物やはらかにかきならして。すのうちより聞えたるも。いまめきたる物のこゑなれば。きよくすめる月にをりつきなからず。をとこいたくめでゝ。すのもとにあゆみきて。「庭の紅葉こそ。げにふみわけたるあともなけれ。などねたます。きくをゝりて。

ことの音もきくもえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける。わろかめりなどいひて。いまひと聲きゝはやすべき人のあるときに。手なのこい給ひそなど　いたくあざれかゝれば。女聲いたうつくろひて。

こがらしに吹あはすめる笛の音をひきとゞむべきことのはぞなき。となまめきかはすに。にくゝなるをもしらで。又さうのことをばんしきでうに

今めきたる意なるべし
にはの紅葉こそ 〔河〕秋はきぬもみぢはやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし 古今集
うへ人此女を馬頭が妻とはしられどもいかさまにも此女に人のかよふと聞ている也 〔釋〕庭の紅葉に踏分たる跡ありて人の來かよふさまなりといふ事を却てなしといひて反をきかせてくちをしがらする意也
れたます 〔玉〕れたましむるなり總角卷になべてやはなどれたまし聞ゆれば蜻蛉卷に など かくれたましがほに かきならし給ふなども有
菊を折て 〔釋〕殿上人あたりの菊を折もちて歌よむくさはひとする也
ことの音も云々 〔釋〕一首の意はかきひく琴の音もさきたる菊の色もたゞならずめでたき宿ながらたゞひとつわろかりしことは我ごとく何のへんもなき人を引とめけるにてさこそ迷惑ならめといふ意也さ

えらべて。いまめかしくひきたるつまおと。かどなきにはあらねど。まばゆき心ちなんし侍りし。たゞときぐ〳〵うちかたらふ宮づかへ人などの。あくまでざればみすきたるは。さてもみるかぎりは。をかしくも有ぬべし。時々にてもさる所にて。わすれぬよすがと思ひ給へんには。たのもしげなくさしすぐいたりと心おかれて。その夜の事にことつけてこそ。まかりたえにしか◎このふたつの事を思ひ給へあはするに。わかき時の心にだに。なほさやうにもていでたることは。いとあやしくたのもしげなくおぼえ侍りき。今よりのちは。ましてさのみなん思ひ給へらるべき。御心のまゝに。をらばおちぬべき萩の露。ひろはゞきえなんと見ゆる。玉ざゝのうへのあられなどのえんにあえかなるすき〳〵しさのみこそ。をかしくおぼさるらめ。今さりとも。なゝとせあまりがほどに。おぼしえり侍りなん。なにがしがいやしきいさめにて。すきたわめらむ女には心おかせ給へ。あやまちして。見ん人の

ろからにわろかめりといふことをそへていへる也わろかめりは女の心にわろく思ふなるべしといふ意也めりといふ辭に心を付べし一本に月もえならぬとあるは菊を折てといへるにかなはず菊の方をとるべし此歌諸注いづれも解得られたるはなしながらといふ語の勢を味はふべし今一聲きゝはやすべき人の云々　〔釋〕我よりも今一段聞はやす人のある時には秘曲の手をのこさずしてきかせ給へといひてあざれかゝる也舊注また新釋玉小櫛ともにこれを殿上人のみづからの事とせられたるはいみじきひが事也

聲いたうつくろひて　〔釋〕今一聲聞はやす人のある時などいふを聞て女きつとなりてこわづくろひして歌をよむ也事のけしき思ひやるべし

木がらしに云々　〔玉〕此殿上人をこよひとまるべく引とめん詞もなしと也木枯にとゞむべき葉もなしといふ詞のしたて也　〔釋〕一首の意は木なからすばかり烈しき風に吹あはすめる笛の音なれば木葉のごとくはかなき言葉にてはひきとゞむべきよしなしといひて言にわがひく琴をかれ笛を殿上人にしていへる也さるはいたく疑ひてあざれたるに答へてしかうたがひ給はゞ何といひて引とゞむべきやうもなしといへる意也舊注どもは例のいかゞなり　〔新〕前にいふ手つき口つきたど／＼しからぬをこゝに見せたり

にくゝなるをもしらで　〔釋〕馬頭の心に憎しと思ふをも女のしらで也此所馬頭はいまだ車にあるかまた共に下りて物かげよりうかゞひ見たるさまか上下にその事をことわらざればいさゝか紛らはしく聞ゆ諸注にその論なきはいかゞ

ばんしきでうに　〔玉補〕楽のすがた般渉調はかるはづみなるもの也さるに依て此女の心ざまに取合せて今めかしく云々といふ也　〔釋〕この説のごとくなるべし舊注に調子を時節にあてゝいはれたるなどは例のうるさし

たゞ時々打かたらう云々　〔新〕かの調度畫などの一時の興とまことの器とをいへるにこゝも同じ

ざればみすきたるは　〔釋〕湖月本にすきを過としたるはわろしすきがましき意にてあだなる也きもじ清べし

さてもみるかぎりは　〔湖〕さやうにされぱみても逢見る時ばかりは面白からんと也

さるところにて　〔釋〕にてはにしての誤などにやすこしいかゞ也さる所とはかよふ所といふ意也よすがは憑み所也

その夜のことにことつけて　〔釋〕其夜殿上人と歌よみかはせし事にかこつけて也

御心のまゝに　〔玉〕御心のまゝに女のなびきしたがふ事也云々

ならばおちぬべき萩のつゆ云々　〔河〕なりて見ばおちぞしぬべき秋はぎのえだもとをゝにおけるしら露　古今集　〔新〕心ははかなくうきたる女の事をいへるは明らけし云々　さゝのあられは古事記に佐々婆爾宇都夜阿良禮能といとふるき時よりいふ事也これをとれるならでもこゝのあられは常いふこと也云々　〔釋〕玉ざゝの上のあられもかならず歌あるべし猶たづぬべし二つのたとへの詞いとえんにめでたし

七とせあまりがほどに　〔釋〕細流に馬頭源氏よりも七年ばかりの兄といふ義無といはれたるよろしさるを又七は大數を擧たるやうにいはれたるはひがごと也こゝは語中に馬頭が年のほどをおもはせたる書ざまにていとめでたき所なり源氏君を十七として見れば馬頭廿四五なるべし

新釋には中將のとし廿二三也と注せられたりされど中將の年はたしかに見えたる事なければいかゞあらん又舊注に櫲樟七年の事などいはれたるはこゝにつきなきいたづらごと也

なにがしが　（釋）馬頭みづから名をいふべき所をなにがしといへるは此物語の例也下の頭中將のなにがしも同じ

すきたわめらん　〔新〕すきは好色の好にあたりたわめらんは上のあえかにといふに同じくなよ〳〵と人になびきやすきをいふ

中將れいのうなづく　（釋）上に中將のうなづくといへる故に例のといへるいとくはしくをかしさて此段當夜のありさまをあらはしたる第八の段なり

かたゑみて　〔新〕是卽少しゑむなるを詞のつゞきによりて少しかたゑみとは書たるのみ也

いづかたに　〔玉〕いづれにしても也

おはさうず　〔細〕おはしますなり

しれものゝ物語を　〔玉〕我身のうへに有し事を卑下してかくはいへる也　（釋）しれものは愚（オロカ）なる意にて俗言にたわけものといふ意也

ながらふべきものとしも　（釋）ながらふは永く月日を經（フ）る意也月日永くあひ見んものとも思はざりしかどゝ也

たえ〴〵　〔湖〕絶々ながらといふ心也

うらめしと思ふ事も　（釋）女の中將を憑（タノ）みにするにつけてはとだえ給ふをりなどはうらめしと思ふ事もあらんと中將のおしはかりて覺ゆる也

みしらぬやうにて　〔湖〕とだえのつらさをも見しらぬやうにして也

たまさかなる人とも　（釋）中將をかくたまさかかよふ人のごとくにも思はぬさま也

もてつけたらん有さまに見えて　〔玉〕心に恨めしく思ひながらつゝしみて其色を顯さゞるやうにおしはからるゝ也さる故に心ぐるしき也朝夕にはいつも〳〵の意也

たのめわたる事ども　（釋）たのめはたのませ也中將より女に行末を憑ましむる事なども有しと也わたるはしか憑みにして年月を經（ヘ）わたる事也

おだしくて　（釋）穩（オダ）やかなる意也

この見給ふるわたりより　（釋）この見給ふるとは此方の見るといふ意にて北の方の事也右大臣の御女四君の事也　〔餘〕夕顏卷に右近が物語する所にこその秋のころかの右大臣殿よりいとおそろしき事の聞えまうでこしに云々　西の京に御めのとのすみ侍る所になんはひかくれ給へりしといへるがこれ也

かすめいはせ（釋）あらはにはいはでそれと心得らるゝやうにかすめていはせたる也

後にこそ（湖）頭中將其由を後に聞し也

心ぼそかりければ（釋）語脉甲乙點のごとし

涙ぐみたり（評）かなしさのせちなることを思ひ出て語らぬさきに中將の涙ぐまれたるさま目の前に見るが如し源氏君の問かけ給へることを挿みたるさらにめでたし其夜のさまの九段也

いさや（餘）いなに同じ
ことなることもなかりきの

〔玉〕源氏君のゆかしげに問給ふにつけていなとよさして語り申すべきほどの事もなかりしよと也

山がつの云々（釋）山がつの垣ほは我身を卑下してたとへなでしこは幼兒のうへにたとへたる也さて我には心淺くなり給ふとも此子にはあはれをかけ給へといふ意也露といへるはかけよといふ詞の縁のみ

ためかたくなる名をも。たてつべきものなり。といましむ〔〕中將れいのうなづく◎君すこしかたゑみて。さることゝはおぼすべかめり。いづかたにつけても。人わろくはしたなかりける御物語かな。とてうちわらひおはさうず◎中將。なにがしは。しれものゝ物がたりをせんとて〔〕いとしのびてみそめたりし人の。さても見つべかりしけはひなりしかば。さてながらふべきものとしも。思ひ給へざりしかど。なれゆくまゝにあはれとおぼえしかば。たえだえわすれぬものに思ひ給へしを。さばかりになれば。うちたのめるけしきも見えき。たのむにつけては。うらめしと思ふ事もあらん。と心ながらおぼゆるをりをりも侍りしを。見しらぬやうにて。ひさしきとだえをも。かうたまさかなる人とも思ひたらず。たゞあさゆふにもてつけたらんありさまにみえて。心ぐるしかりしかば。たのめわたる事などもありきかし。おやもなくいと心ぼそげにて。さらばこの人こそは。とことにふれて。おもへる

けしきも。らうたげなりき。からのどけきにおだしくて。ひさしくまからざりしころ。この見給ふるわたりより。なさけなくうたてある事をなん。さるたよりありてかすめいはせたりける。後にこそ聞侍りしか。さるうきことやあらんともしらず。心にはわすれずながら。せうそこなどもせで。ひさしく侍りしに。むげに思ひしをれて。心ぼそかりければ。をさなきものなどもありしに。おもひわづらひて。なでしこの花ををりておこせたりし。とて涙ぐみたり。さてそのふみのことばゝ。ととひ給へば。いさや。ことなることもなかりきや。

女　山がつのかきほあるともをり／＼にあはれはかけよなでしこの露。思ひいでしまゝにまかりたりしかば。れいのうらもなきものから。あれたる家の。露しげきをながめて。むしのねにきほへるけしき。むかし物語めきておぼえ侍りし。

にてさして心なし

思ひ出しまゝに（釋）歌をおこせしにより中將の思ひ出られし也

むしのねにきほへるけしき

〔玉〕蟲のなくにおとらずきほひてもの思ふけしき也

むかし物語めきて（釋）昔物語のさうしに殊更に設けてかきたるけしきによく似ておぼえしといふ意なり舊注ひがこと多し

さきまじる云々（釋）今この前栽に咲まじりてある花はいづれもめでたしともわかれども猶やはりとこ夏に及ぶものなしといへるにてをさな子のらうたきといづれわかぬ物からなほ其方にしくものはなしとよそへていへる也とこなつは瞿麥の一名にて夏をむねと咲ものなれば常夏といふこれをやがて床にいひよせたり床といふにしくといへるも縁の詞也

やまとなでしこをばさしおきて

（釋）大和なでしこは野山に自然に生るたけ高きをいふ常なるはから

撫子也その初外國より渡しゝ物なるべしさて撫子といふ名たゞやがて子の事にいへる事上の歌のごとしたゞ子をばさしおきてといふ意也まづちりをだにと〔奥入〕「ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとこなつの花 古今集夏みつね

心をとる 〔湖〕機嫌をとる也

うちはらふ云々 〔孟〕ひこぼしのまれにあふよのとこなつは打はらふにも露けかりけり 後撰集秋上四句打はらへども 〔釋〕打はらふは床を打拂ふなり床を拂ふは男と共に寐んためなり上句はこの頃中將のとだえ給へるにて床打はらふ袖も淚にぬれて露けき心を常夏につづけていひかけたる也下句はかの北の方よりうたてある事ないはせたるをしたにほのめかして常夏の花に嵐の吹てしをれしむる秋も來れりといふ意なりそふといへるはとだえのかなしき上にうたてあることの添たる意也いたづらに見過

さきまじる花はいづれとわかねども猶とこなつにしく物ぞなき。やまとなでしこをばさしおきて。まづ「ちりをだに。とおやの心をとる。

うちはらふ袖も露けきとこなつにあらし吹そふ秋もきにけり。とはかなげにいひなして。まめ〳〵しくうらみたるさまも見えず。なみだをもらしおとしても。いとはづかしくつゝましげにまぎらはしかくして。つらさをも思ひしりけり。と見えんは。わりなくくるしき物に。とおもひたりしかば。心やすくて。またとだえおき侍りしほどに。あともなくこそかきけちてうせにしか。まだ世にあらば。はかなき世にぞさすらふらむ。あはれと思ひしほどに。わづらはしげに思ひまつはすけしき見えましかば。かくもあくがらさざらまし。こよなきとだえおかず。さる物にしなして。ながく見るやうも侍りなまし。かのなでしこの。らうたく侍りしかば。いかでたづねん。と思ひ給ふるを。今にえこそ聞つけ侍らね。これこそのたまひつるはかなきためしなめれ。

すべからず秋といへるは常夏の枯ぬべきなりなるに物がなしき心をそへてさる時節到來したりといふ意なり

なみだをもらしおとしても　（釋）涙をおさへ忍びてもふともれおつるさま也此女のさま思ふべし

いとはづかしく云々　〔湖〕頭中將のと絕のつらさを思ひしるけしきをも恥る也

かきけちて　（釋）かきは例の發語けちは消也跡を消してにげうせたる也

まだ世にあらばはかなき世にぞ　（釋）上の世は現世の事にて女の此世にあらばといふ意下の世は身につきたる境界の事にて女の不幸をさしたる也

あはれと思ひしほどに　（釋）ほどは間の意也あはれと思ひしあひだに云々のけしき見えばといふ意也小櫛にあはれと思ひし女なりしかばの意也とあるはいかゞあらんさてはほどゝいふ言俗語めきて聞ゆ猶

つれなくてつらしと思ひけるをもえらで。あはれたえざりしも。やくなきかたおもひなりけり。今やう〳〵わすれゆくきはに。かれはたえしも思ひはなれず。をり〳〵人やりならずむねこがるゝゆふべもあらん。とおぼえ侍り。これなんえたもつまじく。たのもしげなきかたなりける◎さればかのさがなものも。思ひいであるかたにわすれがたけれど。さしあたりて見んには。わづらはしく。よくせずは。あきたきこともありなんや。ことのねのすゝめりけん。かど〳〵しさも。すきたるつみおもかるべし。この心もとなきも。うたがひそふべければ。いづれとつひにおもひさだめずなりぬること世中や。たゞかくぞとり〴〵にくらべぐるしかるべき。このさま〴〵のよきかぎりをとりぐし。なんずべきくさはひまぜぬ人は。いづこにかはあらん。吉祥天女をおもひかけんとすれば。ほうげづきくすしからむこそ。またわびしかりぬべけれ。とてみなわらひ給ひぬ　◎式部が所にぞ。けしきある事はあらん。す

考ふべし

わづらはしげに思ひまつはすけしき 〔新〕とだえたいと恨みなどしてつれに來ならすべき樣にもいひなどせばおのづからさる心のおだしさもなくてとふべきにと也 〔釋〕一本に思ひまどはすとありかくてはわづらはしげに云々はかの四君よりうたてある事をいはせたる事にて四君よりさやうにむつかしくいひて女を惑はすけしきを中將の見たらばといふ意となるべしわづらはしげにといふ語は此方にかなへるやう也猶考ふべし

かくもあくがらさゞらまし 〔湖〕かやうにうかれ出るやうにはすまじきと也

さるものにしなして 〔湖〕本臺ならずとも又一方の北方にもなどいふ也

こゝこその給ひつる 〔湖〕馬頭に對していへる詞也えんに物はぢしてうらみいふべき事をも見しらぬさまにしのびてなどいひし事也

あはれたえざりしも 〔玉〕絶ざりしもといふことおだやかならず聞ゆめれど然らず上の文に見えたるごとくかくれうせて後までもあはれと思ふこと絶ざりしよし也下に今やう／＼忘れゆくきはにとあるをも思ふべし

やくなきかた思ひ 〔玉〕これは我をばふかく恨みてかくれうせぬるほどの女を此方には猶絶ずあはれと思ふはこれも片思といふものなりけりと一種の片思につくりていへる詞也次の言にかれはたえしも云々とあるをもて實に片思ひといふにはあらざることをしるべし

人やりならず 〔雅譯〕我心からにて人のしらぬ事をいふ

むねこがるゝ 〔河〕「涙にしおもひのきゆる物ならばいとかくむねはこがれざらまし 後撰 千思千腸熱一念一心焦 遊仙窟 〔釋〕この注は類例のみ也中將を思ひはなれずおのれと心の焦るゝまで物思ふ夕べもあらんと也

えたもつまじく 〔玉〕たもつは男の女をたもつ也上にさてたもたるゝ女のためもとあるが如し

さればかの云々 〔釋〕こゝより端をあらためていへれど猶中將の詞也馬頭とした説はわろし其よしは別に論ずべし

あきたき事も 〔釋〕厭痛の意にて心にいとはるゝをいふありなんやのやはよの意と小櫛に有

琴の音の 〔釋〕すゝめりけんはかきひく音のをりにあひて進みたりし意也一本すゝめけんと有はわろし

この心もとなきも 〔玉〕このとは今みづから語りつる夕貌の上をさしていへり心もとなきとはうらみいふべきをも忍びていはざるはその心のほどのしりがたきをいふさてこのといふは夕貌上をさしたる言なれども心もとなきも云々はひろくいへるにて此夕貌上のやうにといふ意なり

うたがひそふべければ 〔玉〕或抄に別人に心をかはしやするとの疑ひなりといへり

なりぬるこそ世中や 〔釋〕此所いさゝか紛はしもしくは脫文あるにやこのまゝにて解ば世中の下になれといふ辭を含めて上のこそを結びた

こしづゝかたりまうせ。とせめらる。式部詞 下もが下もの中には。なでふことかきこしめし所侍らん。といへど。頭の君まめやかにおそしとせめ給へばなに事をとりまうさんと思ひめぐらすに△ヤ、思出テ云ヤウ まだ文章の生やうに侍りしとき。かしこき女のためしをなん見給へし。かの馬頭のまうし給へるやうにおほやけごとをもいひあはせ。わたくしざまの世にすまふべき心おきてを思ひめぐらさんかたも。いたりふかくざえのきは。なま〳〵のはかせはづかしく。すべてくちあかすべくなん侍らざりし。それはあるはかせのもとにがくもんなどし侍るとて。まかりかよひしほどに。あるじのむすめどもおほかり。と聞給へて。はかなきついでに。いひよりて侍しを。おやきゝつけて。さかづきをもて出て。わがふたつのみちうたふをきけ。となん聞えごち侍りしかど。をさをさうちとけてもまからず。かのおやの心をはゞかりて。さすがにかゝづらひ侍りしほどに。いとあはれに思ひうしろみ△女式部一。ねざめのかたらひにも。身の

る也さてやはいひすてのやにて歎息の聲也世中や云々とつゞけて心得るはわろし

たゞかくぞとり〴〵に〔玉〕これたどりて見てもかれをとりて見てもとにかくに難ありて思ふにかなひがたき意也〔釋〕かくぞのぞ一本にこそとあるは結びのべきにかなはずくらべぐるしは並べ比べて定めがたき意也かくてもべきの辭少し穩ならぬこゝちす猶考ふべし

このさま〴〵のよきかぎりを云々〔釋〕品定の最初より論じたる中のよき事ばかりを一人に具へて難ずべきふしをまぜぬ人は何處にかあらんと也湖月抄師説に品定の初にこれはしもと難つくまじきはかたくもある哉といへる首尾なりといへるよろしくさはひは種子の意にて難の種となる事也

吉祥天女を〔湖〕帝釋のむすめ瑞嚴の天女也最勝王經に有〔玉〕靈異記に聖武天皇の御世に信濃國のうばそくが和泉國の血渟の上山寺な

靈異記ノ吉祥天女ノ事ハ餘釋ニ擧ツ

る吉祥天女の像に思ひをかけて云々せし事見ゆ又狹衣の物語にまだかゝる事はなかりつる物をいかばかりなる吉祥天女ならん　（釋）思ひかけんとすればとある語かの上山寺の事を思へるなるべし

ほうけづきくすしからんこそ　（釋）法氣付也法は佛法の驗の方につきていへるにて靈妙不思議の事をさしていへりくすしは其靈驗の奇異きをいふ語にて萬葉などに多き語也さて意はかの上山寺の事のごとく吉祥天女の瑞嚴なるを思ひかけんとすれば又佛法げありて神變奇怪ならんがわびしといへるにてすべてよき女の有がたき意也

式部が所にぞ云々　（釋）頭中將の詞なるべしけしきあるは一ふしありておもしろき事といはんがごとし　（評）この藤式部丞をこゝにいたりて初めてあらはし出されたるいとをかし此人は馬頭に相副たるごとく書なしたる用をこゝに至りて綻ばして上にさま〴〵論じたる事どもを笑はしくしてまぎらはしたる筆つきいとめでたしされぱこの一段は殊更にをこがましくたはふれて人の眼をさましつべくかゝれたり此所當夜のありさまをあらはしたる第十の段なり

しもがしもの中には云々　（釋）上に下のきざみといふきはになれば殊にみゝたゝずかしとありなでふは何といふ也

なに事をとり申さんと思ひめぐらすに　〔玉補〕嘉基云とり申すは申上ると云程の詞也云々　（釋）とりは執にて後世に執達など云執の意也さて此所思ひめぐらすにまだ云々とつゞきたる語餘りにはかに聞えて穩ならず脫文などあるにつしばらく譯注のごとき意にふくめてさとるべし

文章生　〔餘〕職員令大學寮律學博士二人已上同助敎　明法生十人文章生二十人簡二取雜仕及白丁聰慧一不レ須レ限二年多少一也　（釋）儒家の人は皆大學寮にて學問して後つぎつぎに出身すること也式部もさる人にて若かりしほどは文章生なりし也

馬頭の申給へるやうに　〔細〕前に朝夕の出入につけても公私の人のたゝずまひよきあしき事の めにもみゝにもとまるありさまをうとき人にわざとうちまねばんやはといひしやうに也

ざえのきは　〔玉〕ざえは才の字の音ながら物語にいへるはいづれも才智の意にはあらず俗に學問のある學問のなきなどいふ學問の事也きはゝ分際にてほどゝいはんがごとし

なま〳〵の博士はづかしく云々　（釋）此女の學問のほどを思へばなま〳〵の博士は恥べきとの意也口あかすべく云々は議論などしたらんにもすべて人に口を開きてものをばいはせざりしと也かやうの女その世にはこれかれありきと見えたりかの淸少納言が博士をもてあそびたる類ひ思ふべしさる事をしたに思ひて此段はかけるなるべし　〔餘〕職員令博士一人掌下敎二授經業一課中試學生上

さかづきをもていでゝ　〔湖師〕これもかの文集に主人會二良媒一置レ酒滿二玉壺一といひし詞にてかく也

わがふたつの道うたふをきけ　〔餘〕この詩白氏文集秦中吟十首のひとつにて議婚と題せり　主人會二良媒一置レ酒滿二玉壺一四座且勿レ飲聽二我歌一兩途富家女易レ嫁嫁早輕二其夫一貧家女難レ嫁嫁晚孝二於姑一聞君欲レ娶レ婦娶レ婦意如何　〔孟〕これは博士の女貧家なるによりて

式部にいひきかせたる也　(評)博士といふものゝ心見るがごとくいとをかし

きこえごち　(釋)きこえは例のいひ也ごちはごとしといふを約めたる辭也

かゝづらひ　(釋)拘はる意也かの父の博士が心を憚りて絶はてもせずかゝはりたるほどに也

いとあはれに思ひうしろみ云々　(釋)うしろみは用言也女の式部をあはれに思ひて後むる也ねざめのかたらひは夫婦ともねしたる夜のかたらひぐさにもといふ意也

いときよげに云々　(釋)消息文にもいときよげにといふ語脉也　〔玉〕假字をまじへずして眞名のみに書るを云

うべ〳〵しくいひまはし　(釋)尺牘體の文章にことわりめきて書わたす也

その者を師として　(釋)其女を師として文章を習ひしと也例のわざとをこがましくかたりなすさま也こしをれぶみは今も腰をれ歌などいふごとく用にたらぬ意也卑下の詞也

いまにその恩は　〔釋〕これもをこめきたるすぢにていふ

なつかしきさいしと　〔玉〕こゝにてはたゞ妻の事をいへり古今集の歌に世中をいとふ山べの草木とや云々といへるも卯花は木なるを草木といへると同じ類の言也

なまわろならん　〔玉〕なまは上になま人わろくとあるなまに同じわろはわろびれたるふるまひ也

はづかしくなん　(釋)なつかしき妻とたのまんに學才なき人のわろびれたる行狀など見えんにははづかしくて心のおかるゝ意也

まいて君たちの　(釋)我等學問をもてつかうまつるべき身なれどなほかくのごとしましていはんや君たちの貴き御うへにはといふ意を含めり

はかなしくちをしと云々　〔湖〕愚癡なる女をはかなし口をしとかつ〴〵見ながらも只其みめかたちの我心につき緣にひかれてなどあひそふ事もあるなればといひて女の才學はいらぬ心をふくめたる也侍るめればと句をきりてよむべし　〔玉〕すぐせのひくかた侍めればの下へ女はさのみ學問などはなくてもありぬべきものぞといふ意をふくめたる語也そは上にはか〴〵しくしたゝかなる御うしろみは何にかはせさせ給はんといへるにて然きこゆ

をのこしもなんしさいなき物は侍める　〔玉〕子細なきといふこと心得がたきを上よりのつゞきの趣をもてよく考るに何の一ふしもなきよしにてこゝは學問などのなきをいふ也さてすべての意は世中には男にてすら學問なきものは侍る也といへるにてまして女は學問なくともなでふ事かあらんの意也諸說みな子細といふことに泥みて大かたの意にかなはず　(釋)此所いたくまぎらはししばらく右の說どものごとく心得てあるべしおのが考は餘釋にいへり

のこりをいはせんとて　(釋)女の事をいひさしてやみたる故にのこりの事をいはせんとて誘し給ふ也

心はえながらはなのわたり云々
(釋)すかし給ふとは心得ながらわざとほこりかにをかしくかたりなすなり鼻のあたりをこづきはほこりかにをかしきさまをいへる其世の俗語なり
つれの打とけゐたるかたには侍らで
(釋)常に此女の打とけてすむ所にはあらで別なる所にて障子などをへだてゝ對面したる也物ごしといふはいづれも物を隔てあふよし也
ふすぶるにやと　(釋)式部が久しくこぬを恨みて女のすねたるかと思ふ意也今俗の言にもいふことにてイブス又ケブタガラスなどいふに同じ
またよきふしなりとも　(釋)ふすぶるをふしにして中絶んによき時也と思ふよし也
このさかし人　(釋)學才ある女なればこの賢人と戯れていへる也
世のだうりを思ひとりて
(釋)ことわりといはずして道理としもいへるは儒者ざまの詞にて此

ざえつき。おほやけにつかうまつるべき。みち〳〵しきことをおしへて。いときよげに。せうそこぶみにも。かんなといふものかきまぜず。うべ〳〵しくいひまはし侍るにおのづからえまかりたえで。そのものを師としてなん。わづかなるこしをれぶみつくる事などならひ侍りしかば。いまにそのおんはわすれ侍らねど。なつかしきさいしとうちたのまんに。むざいの人なまわろならんふるまひなどみえんに。はづかしくなん見え侍りし。まいて君だちの御ためには。はか〴〵しくしたゝかなる御うしろみは。何にかはせさせ給はん。はかなし。くちをし。とかつ見つゝも。たゞわが心につき。すぐ世のひくかた侍るめれば。をのこしもなん。しさいなきものは侍める。とまうせば◎のこりをいはせんとて。さて〳〵をかしかりける女かな。とすかい給ふを。こゝろはえながら。はなのあたりをこづきてかたりなす◎さていと久しくまからざりしに。ものゝたよりにたちよりて侍れば。つねのうちとけゐた

女の才學あるをうつし出せるたくみ也世間の理を思ひとりわきまへて恨みざる意也。
聲もはやりかにて（釋）よのつれの女は男にあひては聲ひきく物いふなるを此女はしのぶ體なくあざやかにいふさま也
ふびやう〔玉〕腹病風病二説のうち風病のかたよろしかるべし春記に長暦四年四月十四日云々今日始テ服ス韮草ヲ依ニ風病ニ也とありさてふびやうごくれちのさうやくざふじらなど女のいふべき詞にあらざるを此女はせうそこ文にもかんなといふ物かきまぜずといへるたぐひにてつれのものいひもこはぐ〳〵しくさかしだちたるさまをことさらにかく書るなり此物語すべてほうしの詞儒者の詞などおの〳〵その心ばへを書り心をつくべし
ごくれちのさうやくを
〔餘〕和名抄云大蒜本草云葫音胡和名於保比流味辛温除風者也　兼名苑云葫一名葷音大蒜也　〔細〕土用のひるな

るかたには侍らで。心やましきものごしにてなん。あひて侍りし。ふすぶるにや。とをこがましくも。またよきふしなりとも思ひ給ふるに。このさかし人はた。かるぐ〳〵しきものゑんじすべきにもあらず。世のだうりを思ひとりて恨みざりけり。聲もはやりかにていふやう。月ごろふびやうおもきにたへかねて。ごくねちのさうやくをぶくして。いとくさきによりなん。えたいめんたまはらぬ。まのあたりならずとも。さるべからんざふじらは。うけ給はらん。といとあはれにうべ〳〵しくいひ侍り。いらへに何とかはいはれ侍らん。たゞうけ給はりぬ。とてたち出侍るに。さうぐ〳〵しくやおぼえけん。この香うせなん時にたちより給へ。とたかやかにいふを。聞すぐさんもいとほし。しばしたちやすらふべきにはた侍らねば。げにそのにほひさへ。はなやかにたちそへるもすべなくて。にげめをつかひて。
さゝがにのふるまひしるきゆふぐれにひるますぐせといふがあやなさ。い

どいひて藥に用る事のある也　〔釋〕細流の如く今俗も暑氣の藥とてくふ事也さらば極熱のころ用る草藥と云意にや蒜(ヒル)は今ニヽクといふ物にて効おほき草なり

いとくさきにより　〔釋〕これもきすくにけざ〳〵といへたる詞也

まのあたりならずとも　〔湖〕直に御目にかゝらずとも也

いとあはれに　〔釋〕あはれにといへるは後見の雜事等を承らんといへるが式部をあはれふ意なればなるべし

何とかは　〔玉〕蒜を服したる事のいとうたて心づきなく思はれて何ともいらふべき詞もなきなり

さう〴〵しくやおぼえけん　〔湖〕事たらずのいらへやと思ひけん也

たゞやかにいふを　〔湖〕式部はや立出てゆく故に聲高くいひてよく聞せんとする也

聞すぐさんもいとほし云々　〔釋〕聞ながして出んもさすがにいとほしく又たちやすらひ物いふべきにもあらねばといふ意也

げにそのにほひさへ云々　〔釋〕案に此所に詞脱たるにやげにそのといふことおだやかならず湖月抄にたゞにも心につかざるにその香さへそひけんはいよ〳〵うるさくてと也といへるさる意のごとくは聞えたれどげにそのといふ詞は女のこの香うせなん時といへるをうけて式部がいふ詞めきて聞ゆればなほいかゞ也されどこのまゝにてしひて釋(トカ)ば湖月のごとき意としてげにそのは女の詞をうけて式部が心におもへる事とせんかさらばやすらふべきにはた侍らればにげめをつかひてと續く語脈(コトスヂ)として其間におもふ心をさしはさめる文とすべしされどとにかくに穩ならず猶試にいはゞすべなくてのではとの誤にて式部がいふ詞にもあらんかさらばげにその云々もすべなくといひてにげめをつかひてといふ意となるべしされどさては又さへといひそへるもといふにかなはぬこゝちす猶考ふべし先達はいかに思ひとられたるにか諸注ともに解(トキ)説(ゴト)なしさてはなやかにとは臭(クサ)き香(カ)の甚しきを戲れていへる語と聞えたりすべなくてはせんすべなくての意也

にげめをつかひて　〔釋〕これはその世の俗語と聞えたれば大かたに意を得てさとるべし湖月抄ににげまなこになりての心也といひ又孟津を引てとめられてはとの心にてにげめする也といへりさもあるべきとにかくに逃(ニゲ)支度するありさまとは聞えたり下にいひもはてずはしりいで侍りぬるにとあるに照して事の勢ひをおもふべし

さゝがにの云々　〔釋〕さゝがには蛛(クモ)の枕詞なるをやがて蛛の事にとりなしていへりさて古今集にわがせこが來べきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしもとある古き歌の詞によりて今夜我來べきよひなればかの蛛のふるまひは夕暮よりいちじるからんを其夕ぐれにひるますぐせといふは文(アヤ)なくわけのわからぬ事也といふ意にて晝間(ヒルマ)に蒜(ヒル)の香(カ)の失(ウス)る間(マ)をかねたりあやなさは俗言にワケガナイといふ意也

いかなることつけぞや　〔釋〕いかなることつけ言に蒜くひたりとはいふぞやと咎めうたがひたる也ことつけはかこつけといふにひとしく事に託(ツケ)てとかくいふこと也

おひて　〔玉〕追てにて跡より人に追かけさせて此歌をやる也たみ詞に此女おひ出てといへるはひがこと也おひてとはみづからならでも跡より物するをいふ例なるをや
あふ事の云々　〔新〕夜をへだてずむつましく逢ふほどの中にしあらば晝間のたいめも草藥の香する間をもなにかおもてはゆくはづかしからじをさばかり思はれぬ中なればかくはつゝまるゝと也
しづ〳〵と申せば　〔釋〕をこがましき物語なればあわつけくかたりもなすべきを靜まりかへりてうべ〳〵しくかたれるにてます〳〵をかしくをこがましきさまをあらはしたる也心をつくべし
おいらかに　〔玉〕俗言にじんじやうにといふによくあたれりさやうのむくつけき女とそはんよりはじんじやうに鬼とそひゐたるこそまさらめといふ意也云々
あはめ　〔玉〕河海に淡(アハメ)とあるよろし淡しとするにてうとみにくむをいふ詞也
これよりめづらしきことは　〔玉〕これもをこめきていふ詞也
おりぬ　〔釋〕下(オリ)ぬにて源氏君の御とのゐ所より藤式部が下(オリ)て歸りし也一本にはたりと有かくては細流のごとく居(チリ)の意なりされども居(チリ)にてはこのさまにかなはず下(オリ)ぬといふに隨ふべし　〔評〕今宵のまとゐの一人を先(ツ)退き去しめたるは見ん人をして厭(アカ)しめざるたくみなるべし例のいとめでたし今宵のさまをあらはしだる第十一の段也
すべて男も女も　〔釋〕これより馬頭が詞にてかの才學だてすることは男も女もけにくゝわろきよしをことわる也
見せつくさんと　〔釋〕おのがしれる事をみながら人に見せていみじく思はれんとする事也
三史　〔弄〕史記　漢書　後漢書
五經　〔弄〕毛詩　禮記　春秋　周易　尙書
みち〳〵しきかたをあきらかに　〔釋〕三史五經のといふよりは女のこと也さるしたゝかなる道理を明らかにさとり明らめだる女は愛なからんと先(ツ)いひて次にその故をことわる也
などかは女といはんからに　〔釋〕などかはゝ下のあらんまでへかゝる意也女といはんからになどかは公私の事につけてむげに通達せぬ事のあらんと也玉小櫛にこれを學問のすぢを也とあるはいかゞ也たゞ公私の事とすべし
すこしもかどあらん人の　〔釋〕公私の事につけてわざとならひ學ばずとも少し才あらん女はつれに耳目にとまりてさとり得ることおのづからおほかるべしと也こゝの注も小櫛はわろし
さるまゝには云々　〔釋〕然有(サル)まゝには才學にまかせ世間の事に通達したるにまかせてといふ意也まんなをはしりかきとは漢字(カラモジ)を草書にかくこ

と也さるまじき中はさは有まじき
女どちの中に用ゐる文に也なかば
すぎて書すくめは女文に漢字を過
半交てかく也やはらかなるべきに
かたき字を交る故にすくめとはい
へる也これ皆才學だてにする事也
かゝる女今世にもをり〳〵あり
あなうたて此かたの（釋）女ぶみに
漢字をかきまぜたるを見るにあな
むやくの事や此才學だてのかたの
たをやかならばと思はるゝよし也
心ちにはさしも（釋）かく人の心に
はしかにくげに見らるゝ事とはお
もはざらめど打よむ時自然にかた
き音によまれなどしてわざとがま
しと也
これは上らうの中にも（釋）この紫
式部などの比は女の才學ある人多
かりしかばかやうの人上臈の中に
も有しなるべしそれをかたはら
いたく思ひて評じたる語と聞え
たり
歌よむと思へる人の云々
〔新〕おのがひとへ心に好むかたに

かなることつけぞや。といひもはてず。はしりいで侍ぬるに。おひて。
あふことの夜をしへだてぬ中ならばひるまもなにかまばゆからまし。さす
がにくちとくなどは侍りき。としづ〳〵とまうせば。君だちあさましとおも
ひて。そらごととてわらひ給ふ◎いづこのさる女かあるべき。おいらかに
おにとこそむかひゐたらめむくつけき事。とつまはじきをして。いはんかた
なし。と式部をあはめにくみて。すこしよろしからん事をとり申せ。とせめ
給へど。これよりめづらしきことはさぶらひなんや。とておりぬ□すべてを
とこも女も。わろものは。わづかにしれるかたの事を。のこりなく見せつく
さん。と思へるこそいとほしけれ。三史五經のみち〳〵しきかたを。あきら
かにさとりあかさんこそ。あいぎやうなからめ。などかは女といはんから
に。世にある事の。おほやけわたくしにつけて。むげにしらずいたらずしも
あらん。わざとならひまねばねども。すこしもかどあらん人の。みゝにもめ

のみおもひ入たるをいふさる人今も多かるべし　（釋）まつはれはからまれといはんがごとし我は歌よみ也と思へる人のそのまゝ其歌にからまれてつきなきふるまひするよし也

をかしきふる事をも　〔新〕をかしき古事も時にしたがひてかすかに聞えさせたるはわろからねどきとさる事と見えてをりにも似つかはしからぬをにくみて初よりとはいへり　（釋）歌の初より故事をあらはしてとり入れよむことなるべし

すさましきをり〳〵に　（釋）すさましきは不用めきたる也につかはしからず不用めきたるをりによみかくる事也ものしきはいかゞしくあるまじき意也

かへしせねばなさけなし　（釋）よみかけたる歌の返歌をせねば情をしらぬものにいたりもし又實にえせざらん人は手もちなくて不都合なるべしと評じたる也

さるべきせちゑなど　〔玉〕こはすな

にもとまることじねんにおほかるべし。さるまゝには。まんなをはしりかきて。さるまじき中の女ぶみに。なかばすぎてかきすくめたる。あなうたて。このかたのたをやかならましかば。と見ゆかし。こゝちにはさしもおもはざらめど。おのづから。こは〴〵しきこゑによみなされなどしつゝ。ことさらびたり。これは上らうの中にもおほかる事ぞかし。うたよむと思へる人の。やがて歌にまつはれ。をかしきふることをも。はじめよりとりこみつゝ。すさましきをりをり。よみかけたるこそものしきことなれ。かへしせねばなさけなし。えせざらん人ははしたなからむ。さるべきせちゑなど。五月のせちにいそぎまゐるあした。なにのあやめも思ひしづめられぬに。えならぬねをひきかけ。九日のえんにまづかたき詩の心をおもひめぐらし。ひとまなきをりに。菊の露をかこちよせ。などやうのつきなきいとなみにあはせ。さならでも。おのづからげに後におもへば。をかしくも。あはれにも。あべかりけることの。

、はち次にいふ五月のせち九日のえんのことをまづいふ也

なにのあやめも思ひしづめられぬに

（釋）いそぎ參內せんとするあしたは心いそがはしき故に何の分別もなく思ひしづめられぬ時に歌をよみておこする也〔玉〕あやめとは其日の緣の詞にていへる文なり

えならぬねを引かけ〔玉〕菖蒲の根の事をふしにしたる歌をよみおこする也引かけとはあやめの根の緣の詞にていへる文也（釋）拾遺にえならぬに江をかれたるやうにいはれたるはさもあるべきか案にえならぬはえさらぬの誤にはあらじか少〻穩ならぬやう也えさらぬには得去ぬにてのがれがたき意也

まづかたき詩の心を〔玉〕かたきとはすべて詩をつくるをむつかしきわざとしていへる也難題と見るはわろかめり

いとまなきなりに

（釋）思ひめぐらしていとまなきをり也

そのをりにつきなく。めにもとまらぬなどを。おしはからずよみ出たる。なか〳〵心おくれて見ゆ。よろづのことに。などかは。さても。とおぼゆるをりから〳〵、思ひわかぬばかりの心にては。よしばみなさけだゝざらんなん。めやすかるべき。すべて心にしれらん事をも。しらずがほにもてなし。いはまほしからん事をも。ひとつふたつのふしはすぐすべくなんあべかりける。などいふにも。君は人ひとりの御有さまを。心のうちにおもひつゞけ給ふ。これはたらず。またさしすぎたる事なく物し給ひけるかな。とありがたきにも。いとゞむねふたがる。いづかたによりはつともなくて。はて〳〵はあや〳〵しき事どもになりて。あかし給ひつ「」からうじてけふは日のけしきもなほれり。かくのみこもりさぶらひ給ふも。おほい殿の御心いとほしければ。まかで給へり◎おほかたのけしき人のけはひもけざやかにけたかくみだれたる所まじらず。猶これこそは。かの人々のすてがたくとりいでしまめ人に

菊の露をかこちよせ　〔拾〕菊の露をゝの菊水などによせて歌よみかくるをかこちよせといへり　（釋）かこちは物に託（ヨセ）ていふ意也

つきなきいとなみにあはせ　〔拾〕あはせはうきめにあはするなどいふに同じ云々　〔玉〕あはせの意拾遺のごとし俗言にじゆつないめにあはするといふこと也さてこれは五月のせちに云々九日のえんに云々を合せていへるにていそき參內せんとするをりかたき詩を案ずるをりなどにて他へは心はちらしがたきにそれに似つかぬいとなみをせさするなりいとなみは返歌を案ずるをいふ也

さならでもおのづから　〔玉〕さならでもとはかならず其日ならずとも其日過てしづかになりて後によみおこせたりともよかるべきものをの意也おのづからとはまづ菖蒲の根は五日菊の露は九日ぞその時節にてはあれどもよしや其日は過て後なりともおのづからをかしからんの意にていへり

げに後におもへば　〔玉〕其歌を後に見て思へば也げにとは其歌に同心していふ也さてこは後におもへばげにとうちかへして心得べしさて又此所の語さならでもおのづからと後に思へばとは二つに分ていへるにて後におもへばさならでもといふ意にはあらずかくてそのさならでもおのづからと後に思へばとの二つを合せてをかしくも云々と受たる語にして後に思へばをかしくも云々ともつゞき又さならでもおのづからをかしくも云々ともつゞく意也すべてかやうのところ言のいひざまてにをはなどをこまかにわきまへてすべての語の意を心得べしよくせずはまぎれぬべし　（釋）この玉小櫛の說まぎらはしきがごとくなれどよく文脈（スヂ）を見得られたるもの也くりかへし見てあぢはふべしさてかくても猶いとなみにあはせとある語少しおちゐぬこゝちすもしくは此下に詞脫たるか試にいはゞ〔　〕などゝいふ辭など有しを上のなどゝ重（カサナ）るやうに思ひてさかしらにけづりたるにや

などかはさてもと　〔玉〕などかはかゝることはせんさてもあれかしといふ意なりさてもあれかしとはそのまゝにてもあれかしにて俗言に物をせずしてやむをまゝにするといふ是也歌などをもよみてやらず何ともせずしてあれといふ意也

をりからとき〴〵　〔餘〕をりからにて句とせるはわろしをりからとき〴〵とつゞけてよむべき也をりからも時々も詞をかへたるのみにて同語をかされていへる也人のいそがしと思へるをりからをも時のさまをも思ひわかずあながちに歌などよみかくるさる心おそき本性ならばなまなかに歌よまぬかたこそまさりたらめといへるなり

よしばみなさけだゝざらんなん　（釋）よしばみはよしありげに見するなりなさけだつはなさけしりがほをするなり

すべて心にしれらん事をも　〔新〕これはかのはじめにすべて男も女もわろものはわづかに しれるかたの事をのこりなく見せつくさんと思へるこそいとほしけれといふ所をむすびたる也

すぐすべくなんあべかりける　〔湖〕いひのこして過すべしと也　（釋）馬頭の語こゝにてとぢめたり

君は人ひとりの御有さまを云々　（釋）かく書て藤壺の事とおもはせたる筆つきさらにめでたくみそか事なるゆゑに心のうちにとかゝれたる也

これはたらず云々　（釋）これとは藤つぼの宮をさしていへりたらずさし過たる事なく物し給ふとは何事によらずそのかたち心ざま行ひざまなかれていへる也玉小櫛にこれとは今馬頭の論によろしとして願ふところをさしていふとてこれにとある本をまされるやうにいはれたるはいみじきひがこと也思ひつゞけ給ふといふ終りて又初の馬頭の論をこれにとはいかでかいふべきかつ物し給ひけるかなといふ詞も上にかゝる詞なくて何人の物すとも聞えざるをや

ありがたきにもいとゞむねふたがる　（釋）ありがたきは藤壺のごとき人の世にありがたき也むねふたがるは空おそろしくおぼえて心の塞(ムネフタガ)る意なり此語にてたしかに藤つぼの事としらせたる書ざまいとたくみなり桐壺巻のすゑの脉をこゝにはほはせて事あるさまにひゞかせおく也いとゞはたゞにしもむねのふたがるにかゝる人のありがたきを思ひいでゝいとゞふたがるといふ意なり心をつくべし

いづかたによりはつともなく云々　（釋）品定の論まち〳〵なりしかども何方によりて定まり終るともなくはてには埒もなき事どもになりて其夜をあかし給ひつといふ意なりあやしき事とは俗言にらちもないといふ意にいへる也さるは聞にくき女の品定なればかくいへるなり餘滴に拾遺雜上世中をかくいひ〳〵のはて〳〵はいかにやいかにならんとすらん此歌にてこゝのとぢめはしつる也といへるはいかゞあらん事の意たがひたるやうなり又或抄に品定ばわきになりてさま〴〵の物語どもにて夜あけたるとなりといへるは大かたさもあるべく聞えたれど猶あやしきといひなりてといへるにいさゝかかなひがたきこゝちす新釋には論どもになりてとある異本をとられたれどいかゞなり　（評）品定の論こゝにとぢめたりそも〳〵此論のむねとある事は上にもかづ〳〵いへるがごとく今ひとたびとりならべて見れば猶じちになんよりける云々見るめのなさけをばえたのむまじく思ひ給へ侍りといふ所なるをなほその餘波(ナゴリ)にまめなる女とあだなる女とに馬頭が昔あへりしことをいひてかたみにその難ある事を反對としてくらべて論じさて其ついでに頭中將に夕顏の事をかたらせて心もとなき女の一くさの難をあげかつ後卷の伏線としたりさてその反對に藤式部丞に才學をたてたる女の事をいはせてをこがましくあざけりたる其中に夕顏は中將のいみじく心をかけられたるさまをあはれにいひ博士のむすめは愛敬なくなさけうすきさまにかゝれたるこれもまた反對の法なりさてそのついでに女の才學だてすることの殊にわろきよしを論じてふかくいましめてとゞめたるこれなんこの作者のつねにたてられたる心しらひなりけるそのよしは此物語のうちにも所々に見え又かの日記の文などにも見えて卷のはじめにいへるがごとしさて末にいたりて源氏君の御心に藤壺の宮の事をおもひいで給へるよしを書れたるは桐壺卷の脉を失はじがためかつはすでに物のまぎれの事ありしよしをほのめかしおきて末の卷々のつなぎとしたるもの也さてこの詞にてもこの藤つぼの宮は何事もたらひてめでたく女とある女のほんとなるべきさまにてかの光る源氏といふに對へてかゞやく日の宮といへりし脉(スヂ)の書ざまなるをしるべし

からうじてけふは云々　（評）此所より空蟬の君の事をかたり出る也さて此段は上の品定とはいたくかけはなれたる事のやうなれど下(タ)のこゝろは品定めよりつゞきたりさるはかの受領といひて云々といへる一種の品の事をまづ語り出るにて夕顏卷の末まではこの卷と一つゞきなる事

上下にいへるがごとしされば左り馬頭がいへりし品定の事を源氏君の思ひ出給ふよしをこゝかしこに挿みて其脉の絶ざることをあらはされたりよく〳〵心をふかめて見べし〔細〕長雨晴間なきと前に有しにかゝれり此ものゝ字にて御物忌も果て雨もはれたるを見せたり

いとほしければ（釋）久しく里へ出給はねば左大臣殿のおぼつかなく思ひ給ふもいとほしき意也上におほいとのにはおぼつかなくうらめしとおぼしたれど云々とあるにつぎてきくべし

おほかたのけしき（釋）けしきは葵ノ上の住なし給へる舘内のけしきなり人のけはひは葵上のけはひ也みだれたるは亂雜にわろびたる事なり

かの人々のすてがたくとり出し（釋）品定にたゞひとへにものまめやかに靜なる心のおもふきならんよるべをぞつひのたのみ所には思

はたのまれぬべけれ。とおぼすものから。あまりうるはしき御有さまの。とけがたくはづかしげにのみ。思ひしづまり給へるを。さう〳〵しくて。中納言の君。中務などやうの。おしなべたらぬわかうどゞもに。たはぶれごとなどの給ひつゝ。あつさにみだれ給へる御ありさまを。見るかひありと思ひ聞えたり。おとゞもわたり給ひて。うちとけ給へれば。御几帳へだてゝ。おはしまして。御物語聞え給ふを。あつきにとにがみ給へば。人々わらふ。あなかま。とてけうそくによりおはす。いとやすらかなる御ふるまひなりや

◎くらくなるほどに。こよひなかゞみ。うちよりはふたがりて侍りけり。と聞ゆ。さかし。れいもいみ給ふかたなりけり。二條院にもおなじすぢにて。いづくにかたがへん。いとなやましきに。とておほとのごもれり。いとあしき事なり。とこれかれきこゆ。きのかみにてしたしくつかうまつる人の。なか川のわたりなる家なん。このごろ水せきいれて。すゞしきかげに侍る。と聞

ひおくべかりけるなどいひし事也

(評)この所品定の中の事をとり出たる第一段なり脉を繼たる筆つき心をつくべし

あまりうるはしき云々 (釋)うるはしきは例の端正なる貌也はづかしげには其人のさまを見て此方に恥かしき意なり

中納言の君中務 〔花〕中納言の君は源氏の須磨へうつろひのをり一夜立とまり給ひし人也中つかさの君は末摘花卷に源になびきて大宮の御けしきいかにぞやと聞えし人也(評)これらの人々は物語の餘興なれどそれはた遠くにほはせおきて事をにはかにせぬ筆づかひ味はひあり

あつさにみだれ給へる (釋)あつさは五月雨はれて小暑にうつる比なるべしみだれはかたちをつくろひ給はぬ也

御木下へだてゝ 〔湖師〕左大臣殿の遠慮のさまなるべし 〔餘〕和名抄帳屬有二几帳之名一所出未レ詳 同坐

ゆ。いとよかなり。なやましきに。うしながらひきいれつべからん所を。との給ふ。しのび〳〵の御かたたがへどころは。あまたありぬべけれど。ひさしくほどへてわたり給へるに。かたふたげてひきたがへ。ほかざまへ。とおぼさんはいとほしきなるべし。きのかみにおほせごと給へば。うけ給はりながら。しぞきて。いよのかみの朝臣の家に。つゝしむ事侍りて。女房なんまかりうつれるころにて。せばき所に侍れば。なめげなる事や侍らん。としたになげくを聞給ひて。その人ぢかゝらんなんうれしかるべき。女どほきたびねは物おそろしき心ちすべきを。たゞその几帳のうしろに。との給へば。げによろしきおまし所にも。とて人はしらせやる。いとしのびてことさらにことごとしからぬ所を。といそぎ出給へば。おとゞにも聞え給はず。御ともにもむつましきかぎりして。おはしましぬ。かみにはかに。とわぶれど。人もきゝいれず。しんでんのひんがしおもてはらひあけさせて。かりそめの

脇息ノ脇ハ入聲ノ字ナレバけふト書ベキヲう。ト諸本ニカケルハほうしナドノ例ニテ言ヲナダラカニセシナルベシ

欹具案几屬有二脇息之名一所出未レ詳

あつきにとにがみ給へば （釋）おとゞの物語し給ふをうるさがりて源氏のあつきに來給はずともあるべきにとやうにひそかにの給ふ意也それを聞て女房などの笑ふをあなかまと源氏の制しながら脇息によりておはす也あなかまは鳴高きを制する語也いとやすらかなるは 源氏の御ふるまひの心やすげなるを地より評じたるなり

くらくなるほどに （釋）中神の塞りたるにとまり給ひてはいかゞ也と日のくるゝまゝに思ひいでゝ女房たちの心をつくるさま也

なかゞみ （河）金匱經云天一立二中央一爲二十二將一定二吉凶一云々立二中央一故號二中神一歟件方古來所二逢來一也 （釋）內裡より大殿へ出給へば天一神のふたがりたる方にあたるよし也二條院にも同じすぢにてとは同じく塞りたる方にあたるよし也中神を長神といへる說はひがこと也 〔餘〕和名抄云天一神百鬼經曰天一神和名奈加々美天女化身也とあればふるき代よりいへることにぞ 〔新〕源氏はおぼしよらざりしを人々申す也此時陰陽家の說行はれてかゝる方違などいふ事も常に侍り

さかし例もいみ給ふかたなりけり （釋）こゝより源氏君の詞也玉小櫛にこれは又一人が申す詞にて云々とあるはいかゞ也いみ給ふとある給ふは禁中にて忌給ふといふ意か又左大臣の忌給ふ意か心得がたけれど源氏君の詞とは聞えたりいづくにかたがへんは其方をたがへてほかへゆく所をもとむる也なやましきにはこゝち例ならぬよし也

いとあしき事なりと （釋）なやましとて源氏君の寢給へるを見てふたがりたる方にてとまり給ふはいとわろき事なりと女房たちなどのいふなり

きのかみにてしたしくつかうまつる人 （釋）紀伊守にてありながら源氏君に心よせて親しくつかうまつる人也

なか川 〔河〕賀茂川は東桂川は西京極川は中央にて中河なり

すゞしきかげ （釋）かげは樹陰也

いとよかなり 〔餘〕いとよくあるなりるもにたむのごとくとなふくあなかといふは常なり

牛ながら引入つべからん 〔湖〕下乘せぬ心也禮義もなく心安き所をと也

忍び／＼の御かたゞがへ所は （釋）源氏のかよひ給ふ女の家などはあまたあるべしといふ意也

かたふたけて （釋）わざと方の塞りたる日に來て引たがへ他ざまへゆき給ふやうに葵上また左大臣などのおぼさんはいとほしき故に明らかに紀伊守が方へたがへ給ふなるべしと評じたる也

うけ給はりながらしぞきて （釋）仰を承りながら御次などへ退きて也

いよのかみの朝臣 （釋）紀伊守の父伊豫介也介を守といふはいかゞなれど通じてさもいへりし也父子家を別にしてすめりしさま也つゝしむ事

はこれもたゞ違などの物忌事なるべし

女どはきたびれは　（釋）或抄に源氏のざれことにの給ふ也といへりげによろしきおまし所にもとて

（釋）細流に侍ふ人たちの申詞也とあるよろし人はしらするも侍ふ人たちのはしらせやる也弄花に紀伊守が詞とあるを玉小櫛にとられたるはわろし

こと〴〵しからぬ所をと

（釋）との下にてもじを脱せるにやかみにはかにとわぶれど云々

（釋）紀伊守かく俄に來給ひてはとてわぶれど侍ふ人御供の人などもきゝ入ずしておしてゆく意也

しんでんの東おもて云々　（釋）寢殿は正殿也今の書院のごとしそこの東面をはらひあけさせて源氏君の御座をしつらふ也湖月に紀守の傍輩どもの取持てしたるさま也といへるよろし

そこはかとなき蟲の聲々

〔箋〕そこはかとなきといへる詞分

御しつらひしたり。水の心ばへなど。さるかたにをかしうしなしたり。ゐなか家だつ柴がきして。前栽などこゝろとゞめてうゑたり。風すゞしくて。そこはかとなきむしのこゑ〴〵聞え。ほたるしげくとびまがひて。をかしきほどなり。人々渡殿よりいでたるいづみにのぞきゐてさけのむ。あるじもさかなもとむ。とこゆるぎのいそぎありくほど。君はのどやかにながめ給ひて。かの中のしなにとり出ていひし。このなみならんかし。とおぼしいづ。思ひあがれるけしきに。聞おき給へるむすめなれば。ゆかしくてみゝとゞめ給へるに。このにしおもてにぞ人のけはひする。きぬのおとなひはら〳〵として。わかき聲どもにくからず。さすがにしのびてものいひ〔ゑ〕わらひなどするけはひ。ことさらびたり。かうしはあげたりけれど。かみこゝろなし。とむつかりておろしつれば。火ともしたるすきかげ。さうじのかみよりもりたるに。やをらより給ひて。見ゆやとおぼせど。ひましなければ。しばし聞給

明に蟲のなくにあらず夏の季に入てからは何ともしれぬ蟲の鳴なりそこはかとなきといへる詞尤面白し

わた殿より出たるいづみ　〔玉〕渡殿の下をとほりて庭を流れ出る泉也

あるじもさかなもとむと云々

〔餘〕風俗歌河海に引るは古本と少したがへり今古本につきこゝにあぐ「たまだれのをがめをなかにすゑてあるじはもやさかなまぎにさかなとりにこゆるぎのいそのわかめかりあげにわかめかりあげに

(釋)まぎにはもとめに也こゆるぎの礒は相摸國に在と舊説にいはれたり和名抄相摸國餘綾郡餘綾與呂木

(評)酒のむといふ語勢をうけて玉だれのをがめの歌を引いでさてこゆるぎの礒を急にいひかけられたる所いとをかし又いそぎありくとありて君はのどやかにといへるも文のあや也心をつくべし

かの中の品に云々　(評)品定の事を取出たる第二段なり脈の貫き通れ

ふに。此近きもやにつどひゐたるなるべし。うちさゝめきいふ事どもを聞給へば。我御うへなるべし。いといたうまめだちて。まだきにやんごとなきよすが。さだまり給へるこそさうぐ〵しかめれ。されどさるべきくまには。よくこそかくれありき給ふなれ。などいふにも。おぼす事のみ心にかゝり給へれば。まづむねつぶれて。かやうのついでにも。人のいひもらさんを。聞つけたらん時。などおぼえ給ふ。ことなる事なければ。きゝさし給ひつ。式部卿宮の姫君に。朝がほたてまつり給ひしうたなどをすこしほゝゆがめてかたるもきこゆ。くつろぎがましくうたずじがちにもあるかな。なほ見おとりはしなんかしとおぼす◎かみいできて。とうろかけそへ。火あかくかゝげなどして。御くだものばかりまゐれり。とばり帳もいかに。そはさるかたの心もとなくては。めざましきあるじならん。との給へば。なによけんともえうけ給はらず。とかしこまりてさふらふ。はしつかたのおましに。かりな

ろに心をつくべし

思ひあがれるけしきに　〔細〕空蟬ならば父の内へ参らせんなど思ひし人也

むすめなれば　〔玉〕空蟬は今は伊豫介が妻なるにむすめといへるはいかゞなるやうなれどもこれは思ひあがれるやうに聞給ひしは人のむすめにて有しほどの事なればたがへることなしいよの介がむすめの事かとも思へどさにはあらじ

きぬのおとなひ　〔釋〕人の動くにつけて衣の音するさま也

さすがに　〔釋〕忍びたれどさすがに物いひ笑ひなどする意也物いひといふことなき本はおちたる也○もじは衍也

さうじのかみより　〔釋〕障子の紙よりなり新釋に上とあるはいかゞ也火かげのあかり障子の紙よりもるゝにつけて女のかたの見ゆやとおぼせど隙なき也

やなら　〔拾〕柔(ヤハ)ら也他の物語にはすなはちやはらといへる所もあり俗にそろりとゝいふにかなへり云々

もや　〔拾〕母屋とかくは母は音にはあらずおもやの上略なり云々　おも屋を本としてさまざまの屋はそどのひさしなどの出くるはあまたの子に似たればさておも屋とはつけたるなるべし云々

おぼすことのみ心にかゝり給へれば云々　〔細〕藤壺密通の事也　〔評〕その事となく藤つぼの御事をかすめてかゝれたる例のめでたし品定の末の脉(スヂ)をあらはし出たる所也心得おくべし

式部卿の宮の姫君に云々　〔新〕此事既に有しをこゝに始て書出たり此文はかくさまざまにかける常の事也　〔釋〕朝顔巻の歌に「見しをりのつゆわすられぬ朝がほの云々見しをりとは此巻の初の事なるべし　〔評〕新釋にいはれたるごとく朝顔の姫君をこゝの語中にほのめかし出してそはいかなる人ならんと見る人にうたがはせ置て末々その人をあらはす伏線とせられたる法いとめづらし心得おくべし

ほゝゆがめて　〔玉〕ほゝの意はいまだ思ひえざれどもゆがむことにてかの歌などを正しくもあらず誤まじりに語るなり　〔評〕此語いとめでたし世中の評判など大かたまほにはあらぬ物也

歌すじがちにも　〔釋〕ずじは誦しにてたゞに打吟ずるをいふずんじとよめるは音便也さてこれはつれづれげなるさまをいふ也

猶みおとりはしなんかし　〔釋〕みおとりは聞しより見ては劣るを云かく心きゝたるさまには聞ゆれどあひ見ては猶劣るべしと也猶は受領の品なればヤハリといふ意のなほ也諸説みなわろし

御くだ物ばかりまゐれり　〔釋〕紀守出來りて云々して御馳走申すによりて菓子ばかりくひ給ふ意也

とばり帳もいかに　〔河〕催馬樂呂我家(ワイヘン)「わいへんはとばり帳をもかけ(たれ)たるを大君きませむこにせんみさかなはな(に)によけんあはびさだをかかせよけん云々〔釋〕上の風俗歌の照應に催馬樂をとり出たる也さておほきみを源氏みづからに比(タク)へてそひぶしの女を出せと戯れ給ふ也さるかた

るやうにておほとのごもれば。人々もえづまりぬ◎あるじの子どもをかしげにてあり。わらはなる。殿上のほどに。御覧じなれたるもあり。いよのすけの子もあり。あまたある中に。いとけはひあてはかにて。十二三ばかりなるもあり。いづれかいづれ。などとひ給ふに。これは故衞門のかみのすゑのこにて。いとかなしくし侍りけるを。をさなきほどにおくれ侍りて。あねなる人のよすがに。かくて侍るなり。ざえなどもつき侍りぬべく。けしうは侍らぬを。殿上なども思ひ給へかけながら。すが〳〵しうはえまじらひ侍らざめる。とまうす。あはれのことや。このあねぎみや。まうとの後のおや。さなん侍る。と申すに。にげなきおやをもまうけたりけるかな。うへにもきこしめしおきて。宮づかへにいだしたてんともらしそうせしを。いかになりにけむ。といつぞやの給はせし。世こそさだめなきものなれ。などいとおよずけのたまふ。ふいにかくて物し侍るなり。世中といふものさのみこそ。今もむ

の心もとなくてはとは玉小櫛にさろかたのまうけもあれかしとねがひてまたるゝに其まうけのなきを心もとなしといふ也とあるがごとし心もなくてはとある本にていはゞ心得もなくてはといふ義也これもすてがたし

なにゝよけんとも云々　〔玉〕たゞ催馬樂の詞にて答へたるのみにていかにしてよく侍らんえ思ひより侍らずと申せる意也うけ給はらずはえ承諾し奉らず也

はしつかたのおましに　(釋)あつき比なる故に御座の外に端にも御座をまうけたるなるべし下におくなるおましに入給ぬとあるに相てらしてしか聞ゆさてそこにかりそめにふして紀守と物語し給ふ也

あるじの子どもをかしげにてあり　(評)見えしらがふ子どもの事ないふ中に小君をあらはしおきて後の用とせられたるいとたくみ也

殿上のほどに　〔玉〕殿上してあるを殿上のあたりにてといふほどの意

かしもさだまりたる事侍らね。」なかについても女のすぐせは。うかびたるなんあはれに侍る。など聞えさす。いよのすけはかしづくや。君と思ふらんな。いかゞは。わたくしのしうとこそは思ひて侍るめるを。すき〴〵しきことゝなにがしよりはじめてうけひき侍らずなん。と申す。さりともさうとたちの。つき〴〵しくいまめきたらんに。おろしたてんやは。かのすけはいとよしありてけしきばめるをや。など物語し給ひつゝ。いづかたにぞ。みなしもやにおろし侍りぬるを。えやまかりおりあへざらん。ときこゆ。ゑひすゝみて。みな人々すのこにふしつゝ。しづまりぬ「君はとけてもねられ給はず。いたづらぶしとおぼさるに。御めさめて。この北のさうじのあなたに。人のけはひするを。こなたやかくいふ人のかくれたるかたならん。あはれや。と御心とどめて。やをらおきてたち聞給へば。ありつる子の聲にてものけ給はる。いづくにおはしますぞ。とかれたる聲のをかしきにていへば。こゝにぞふした

なり

いよのすけ〔玉〕實は介なるを上には守といへる也すべて介を守といふはつれのことなるを守を介といへることはなし須磨巻に太宰大貳を帥とあるを次官を長官といへる例也又常陸介を常陸守とあるも同じ

いづれかいづれ（釋）何れか紀守の子何れか伊與介の子なるぞといふ意也

これは故衛門のかみの云々（釋）空蟬の父中納言にて衛門督を兼たる人なりと舊注に有がごとしかなしくはいとほしむ事にて古言に例多し（評）小君と空蟬との傳を紀守が語中にあらはし出たり小君の事は關屋巻にその終をいへり後に源氏君に志あさきさまに書なされたるは空蟬の用意深きに反對したる法なるべし

ざえなどもつき（釋）學問も末には成ぬべく見ゆる意也つきは附の意にて學才の身に附くをいふけしう

は侍らぬは不才にてはなき意也

殿上なども云々　〔釋〕殿上の奉公にも出したてんと思ひかけたれど後見する人なくて人にまじはりがたくもだし侍りといふ意也すが〳〵しうはサツパリといふ意也こゝははか〴〵しといはんが如し

まうとの後のおや　〔餘〕眞淵云まうとは眞人也紀守をさして朝臣とものたまへり共にかばれのみいふはいさゝかあがむる語也眞人は貴樣と云ほどの事也　〔釋〕後のおやは繼母なりおやの下にナル〔二〕といふことをふくめて上のやもじを結びたり

にげなきおやをもまうけたりけるかな　〔釋〕紀守の妻にしてもよろしきほどの空蟬を母といはんは似つかはしからぬといふ意なり諸注いづれもわろし

上にもきこしめしおきて云々　〔新〕かゝる女の侍るに出したてばやとつゝまず物のたよりにもらして申しをも也さて聞しめし置ていかに成にけんとつゞく意也さて宮づかへにといふよりみかどの仰の御詞也うへにも聞しめしおきてといふまでは源氏ののたまふ也

世こそさだめなき物なれ　〔釋〕こゝに世とあるは例の男女の間の世にて緣の事也次の世中も同じさて源氏君はまだ十七歳ばかりなるにかゝる事をのたまふはおとなぶりたる事なる故におよずけといへる也

ふいにかくて物し侍るなり　〔餘〕史記始皇本紀出二不意一　〔釋〕こゝろならず伊與介が妻になりて侍る也といふ意也

中について女のすくせは云々　〔釋〕すぐせは宿世の字音にてかの前世の宿緣の事なるを身の幸不幸の事に轉じていへり男女の緣といふ物は昔より今に至るまで定りたる事のなき中に女は殊に男にしたがはではえあらぬ物なる故に身の上もおのれと定めがたくうかびたゞよひたるがあはれなりといふ義也

君と思ふらんな　〔拾〕大和物語に云本院の北方のまだ帥の大納言の女にていますかりけるなりに平仲がよみて聞えける「春の野にみどりにはへるさねかづらわが君さねとたのむばかりぞ　〔釋〕この注は類例也伊與介は年老たれば若き空蟬をかしづきて主君のごとく思ふらんと戲ての給ふ也なほ問かけ給ふ辭也

いかゞは　〔餘〕これをいかゞあらんといふやうに解せんは誤なりいかでかの意にて君とおもはざらんやといへる也云々

わたくしのしう　〔細〕おし出して主といはんは源氏の御前にては憚ある故に私のといふ會釋おもしろし　〔餘〕此說非なり桐壺にわたくしものにおもほしかしづき給ふとあるがごとく私とは他人にむかひていふ詞にて他人には見せず我ものとのみ領ずるをわたくしとはいふ也云々

〔釋〕私の注餘滴のごとし但他人にむかひていふ詞にて他人にはみせずといへるは猶わろしたゞ我物としてふかく愛る事のおほやけならぬに對したるのみ也

さりともまうとたちの云々　〔玉〕紀の守などはいかにつき〳〵しく今めきてのぞむとも空蟬をゆるしてあはせはせじを伊豫介は得て妻にした

るはけしきばみよしある男ぞよとたはふれての給ふ也注ゝよしありてけしきばめるといふにかなはず又上文よりのうつりもよろしからずひがこと也　（釋）この小櫛の説はいかゞあらん猶舊説のかたまさるべし但し舊説は解ざまよからず今いはゞ紀守がわたくしのしうと思ひて侍るといふをうけてしかありとも汝たちのつきゞしく今めきたらん中へ伊與介が空蟬をゆるしておろしたてんやはかの伊與介はいとよしありてけしきばめる物をやといふ意にてつきゞしくは年のほどの似つかはしき意今めきはかたちの今やうぶりなる也さてよしあるは伊與介のよしめきてたやすからぬかたちけしきばめるは物のけしき見しるべく心のきゝたるさま也小櫛のごとくにてはやはといふ辭さらに聞えず又空蟬をゆるしてあはする事をおろしたつとはいふべくもあらず中々にひがことなるべし

みなしも屋におろし侍りぬるを云々　（釋）下屋は下の方にある雑舍也　〔玉〕實に下屋におろしたるにはあらず源氏君のわたりたまへるに女どもを然るべき所におくは憚ある故にかく申すのみ也さる故にえやまかりおりあへざらんといへり

ゐひすゝみて　（評）上に酒のむと有し首尾也

すのこ　（釋）東の庇の簀子也和名抄云簀音責功程式板敷簀子須乃古床上籍レ竹名也

いたづらぶし　（釋）ひとりねなる故にいたづらぶし也舊注の引歌不用也

あはれやと云々　（釋）内へもまらんなど思ひし女の老たる受領の妻になりたるがあはれなる也こゝにて空蟬にあはんの御心おこりしさま也

ものけ給はる　〔餘〕これより小君の詞也これは人にむかひていかに物うけ給はらんといひてさてしかゞゝといへる也今も人の家に行いたりて物承らんなどいふ類也

かれたる聲のをかしき　（釋）このをかしきは愛らしき意也聲のかれたる子の却て愛らしきが今もあるもの也　（評）空蟬と小君との問答は其夜のけしきをいへるまでなる物から其中に空蟬の源氏君を評じたるおもふきをあらはしおきて逢給へる時のさまのにはかならぬやうにせしものなるべし

しどけなき　（釋）寐かゝりて物いふ故にしどけなき也もとより聲のしどけなきにはあらず

いもうと　〔新〕姉にても男の方に對してはいもといふ例は仁賢紀の日鷹吉士が妻の哭ていへるに於レ母亦兄於レ吾亦兄　弱草　吾夫何怜矣この古注に云古者不レ言二兄弟長幼一女以レ男稱レ兄男以レ女稱レ妹云々と此意也此文の比にも猶さる稱の殘りて書るなるべし云々

ひさしにぞ　（釋）上にはしつかたのおましにかりなるやうにて大とのごもればとありし所也

かほ引入れつるこゑす　（釋）着て寐たる物の中へ顔引入たる也

ねたう心とゞめても　〔玉〕或抄にこゝろとゞめてもとひ聞ぬがねたき也　（釋）此説のごとし空蟬に心あるが故に我うへをとひ聞ぬがあぢきなき也

さうじぐちすぢかひたるほど〔花〕〔細〕源氏の空蟬の聲を聞て推し給ふ也障子は寢殿と母屋との南面と北面との中を隔たる障子なりすぢかひたるとは源氏君の南面にある御座とすぢかひたる所をいふ也今夜源氏の寢所は寢殿の東のひさし也前の詞にしんでんの東おもてとあり空蟬のかたは北おもて也前に此北のさうじのあなたに人のけはひするとありされば源氏のおはします東おもてのかたよりは空蟬の臥所は北西にすぢかひたるべし

中將の君はいづくにぞ〔評〕中將の君を出せる更にめでたし此人湯におりてあるほどに源氏の入給へるをかへりたれば既に抱きて出給へるにあへるなどいみじくめでたし中將めしつればとある詞はじめて逢給へるくさはひとなりてつきなからず聞えたるなど殊にたくみなり

なげしのしもに　〔釋〕長押は空蟬のふしたる母屋のかまちをいふ其下

る。まらうどはね給ひぬるか。いかにちかゝらんと思ひつるを。されどけどほかりけり。といふ。ねたりける聲のしどけなき。いとよくにかよひたれば。いもうとゝ聞給ひつ。ひさしにぞおほとのごもりぬる。おとにきゝつる御ありさまを見奉りつる。げにこそめでたかりけれ。とみそかにいふ。ひるならましかばのぞきて見奉りてまし。とねふたげにいひてかほひきいれつる聲す。ねたう。心とゞめてもとひきけかし。とあぢきなくおぼす。まろははしにね侍らん。あなくらしとて火かゝげなどすべし。女君は。たゞこのさうじぐちすぢかひたるほどにぞふしたるべき。中將の君はいづくにぞ。人げとほきこゝちして。物おそろし。といふなればなげしのしもに。人々ふしていらへすなり。しもやにゆにおりて。たゞいま參らん。と侍る。といふ。みなしづまりぬるけはひなれば。かけがねをこゝろみにひきあけ給へれば。あなたよりはさゝざりけり。几帳をさうじぐちにはたてゝ。火はほのぐらきに見

やがて次の間にて庇也そこに女房どもの臥なりて　いらへする　さまなり
さうしぐちには　〔釋〕はもじなき本はおちたる也さうじ口には几帳をたてゝ也
からびつだつ物　〔湖〕伊與介が家よりかりにうつりたる體なるべし〔釋〕火くらき故にたしかに韓櫃とも見えぬさま也かれだつ物とはいへる也
いとさゝやかにて　〔釋〕空蟬の體いとやせてちひさきなるべし
なまわづらはしけれど　〔玉〕おしやるといふまでかゝれる詞也までといふへはかゝらず　〔釋〕上なる衣は着てねたるきぬ也おしやるは引のくる也もとめつる人は中將の君なり
中將めしつれば　〔細〕源氏當官中將也中將の君はいづくにぞと尋ねしを聞給ひしほどにかくの給ふ也とりあへずよき詞也
人しれぬ思ひの　〔釋〕人しれず密に

給へば。からびつだつ物どもをおきたれば。みだりがはしきなかをわけいり給ひて。けはひしつる所にいり給へれば。たゞひとりいとさゝやかにてふしたり。なまわづらはしけれど。うへなるきぬをおしやるまで。もとめつる人とおもへり。中将めしつれば。人しれぬおもひの。しるしある心ちして。との給ふを。ともかくも思ひわかれず。物におそはるゝ心ちして。やとおびゆれど。かほにきぬのさはりて。おとにもたてず。うちつけにふかゝらぬ心のほどゝ見給ふらん。ことわりなれど。年ごろ思ひわたる心のうちも。聞えしらせんとてなん。かゝるをりをまちいでたるも。さらにあさくはあらじ。と思ひなし給へ。といとやはらかにの給ひて。おにかみもあらだつまじきけはひなれば。はしたなく。こゝに人。ともえのゝしらず。こゝちはたわびしく。あるまじき事と思へば。あさましく。人たがへにこそ侍るめれ。といふもいきのしたなり。きえまどへるけしき。いと心ぐるしくらうたげなれば。を

かしと見給ひて。たがふべくもあらぬ心のしるべを。思はずにもおぼめい給ふかな。すきがましきさまにはよに見え奉らじ。思ふ事すこし聞ゆべきぞ。とて。いとちひさやかなれば。かきいだきて。さうじのもとにいで給ふにぞ。もとめつる中將だつ人きあひたる。やゝとの給ふに。あやしくて。さぐりよりたるにぞ。いみじくにほひみちて。かほにもくゆりかゝる心ちするに。おもひよりぬ。あさましう。こはいかなることぞ。と思ひまどはるれど。聞えんかたなし。なみ〳〵の人ならばこそ。あらゝかにもひきかなぐらめ。それだに人のあまたしらんは。いかゞあらむ。心もさわぎてしたひきたれど。どうもなくて。おくなるおましにいり給ひぬ。さうじをひきたてゝ。あかつきに御むかへにものせよ。との給へば。女はこの人の思ふらんことさへ。しぬばかりわりなきに。ながるゝまであせになりて。いとなやましげなる。いとほしけれど。れいのいづくよりとうで給ふことのはにかあらん。あはれ

空蟬を思ひたりしに中將とてめしつればその思ひのかひある心ちして參りたりといふ意也

ともかくも　〔釋〕何事とも分別せられぬ意也

ものにおそはるゝ心ちして　〔釋〕いさゝかれふりかけたりしさま也萬葉集に物といふ假字に鬼字をかけり

やとおびゆれど云々　〔萬〕やはおびえたる聲なるべし　〔評〕かほに衣のさはりてとあるなどすべて此あたりのさまいと〳〵くはしくめでたし

かゝるをり　〔湖〕空蟬の中川の宿へわたりゐるをりを待出しといひなし給ふなり

おにかみもあらだつまじき　〔釋〕いかならん鬼神なりとも源氏君のめでたきさまを見ては爭ひあらだつまじければといふ意也

こゝに人とも　〔玉〕こゝに誰にかあらん人の來つるともえよばゝらぬ

なり
心ちはたわびしく（釋）はたはモマタなりえのゝしらぬに心ちもまたわびしき也あるまじき事とは夫ある身にしてはあるまじきふるまひと思ふよしなり
いきの下なり［湖］聲たてずいふ也
たかしと見給ひて（釋）このたかしはうつくしくあはれと見る意也消まどへるけしきの心ぐるしきにつけていとゞあはれのまさる情なり
たがふべくもあらぬ云々［湖］人たがへすべくもあらず我思ふ心ざしなしるべにて來つる物な思ひの外にもおぼめき給ふと也（釋）おぼめきは空ぼけしてわざとおぼつかなくいふことなり
いとうひさやかなれば（釋）上にいとさゝやかにてふしたりとある應さうじのもとに（釋）上にさうじぐちとありし所
もとめつる中將だつ人［湖］だつは源は中將な見しり給はれば也
やゝとのたまふに［餘］やゝは人な

しらるばかり。なさけ〳〵しくの給ひつくすべかめれど。なほいとあさましきに。うつゝともおぼえずこそ。かずならぬ身ながらも。おぼしくだしける御心のほども。いかゞあさくは思ひ給へざらん。いとかやうなるきはゝ。きはとこそ侍るなれ。とて。かくおしたち給へるを。ふかくなさけなくうらめし。と思ひいりたるさまも。げにいとほしくこゝろはづかしきけはひなれば。そのきは〴〵をまだ思ひしらぬうひごとぞや。中々おしなべたるつらに思ひなし給へるなん。うたてありける。おのづから聞給ふやうもあらん。あながちなるすきごゝろは。さらにならはぬを。さるべきにや。げにかくあはめられ奉るも。ことわりなるこゝろまどひを。みづからもあやしきまでなん。などまめだちてよろづにの給へど。いとたぐひなき御ありさまの。いよいようちとけ聞えんことわびしければ。すくよかに心づきなし。とは見え奉るとも。さるかたのいふかひなきにてすぐしてん。と思ひて。つれなくのみ

よぶ時にもいへどこゝはさにあらず思ひかけなく人きあひたればやゝと聲いだして驚き給へるさまをかきたる也云々

いみじくにほひみちて云々　（釋）源氏君の御衣にたきしめ給へるそらだきのかをりの中將の君が顔へも薰りかゝるやうにおぼゆるにて源氏と思ひ知りたる也貴人の薰物はなみ〳〵の物ならねばけぢめあるさまなり次下みな同じ意也

あさましう　（釋）此詞は思ひまどはるれどへかけてきくべし

それだに人のあまたしらんは　〔玉〕たとひなみ〳〵の人ならんにてもあまたの人のしらんはよきことにもあらじをましてこれはの意也

どうもなくて　〔孟〕源の動轉なくて也

おくなるおましに　（釋）寢殿にまうけたる御寢所なり上にはしつかたのおましにかりなるやうにて大とのこもればとあるは假に端の御座にふし給へる也かりなるやうにてといへるに心をつくべし舊注どもいとくだ〳〵し

わりなきに　（釋）にもじ少し穩ならず

例のいづくよりとうで給ふことのはにか　（釋）何れの所より取出し給ふ詞ならん打聞てはあはれもしらるゝほどになさけ〳〵しくいひつくし給へどゝ也さていまだかゝる事の給ひたる事は見えぬに例のといへるいかゞしきやうなれどこれは源氏君の女に對ひてはいつも〳〵かやうにの給ふといふ意をふくめたる詞にて上下へおしわたしていへる也されば他も准へてしるべし

うつゝともおぼえずこそ　（釋）こゝより空蟬の詞也あまりの事にて現とは覺えず夢にてやあらんといふ意也おぼしくだしは下し也朽しにはあらず小櫛はひがこと也

いかゞあさくは　〔湖〕さきに源のかやうのなりを待出たるもさらにあさくはあらじと思ひなし給へとの給ひし詞の答也云々

かやうなるきはゝきはとこそ　〔花〕上﨟下﨟のきはをいふ也云々　〔餘〕花鳥の說によるべし云々なみといへるもきはといへるも同類の詞なりきはゝきはといへる詞末摘花卷に源の末摘をかいまみさせよと命婦に仰給ふ所に俄に我も人もうちとけてかたらふべき人のきはゝきはとこそあれとみえたり花鳥の說によるべし　（釋）こゝの解は右の說を得たりとすべし夫ある事をきはゝきはといふやうにいはれたる注はきはといふ詞の例にたがへりかやうに受領などいふ分際はその分際に相應なる緣のある物に侍る也といふ意也

おしたち給へるを　（釋）おしは押つけに物する意たちは心をたてゝをれぬ意にて無理わざするといふよし也

心はづかしき　（釋）女のしたがはぬにつけて心に恥る意也

そのきは〳〵をまだしらぬ云々　（釋）きはゝきはとこそ侍るなれといふをうけて其分際ある事をも更にしらぬ初事ぞとの給ふ也さて初々しき心は他へうつろふことなく一すぢなる物なるを普通の色好みのなみに思ひなすがうたてありといふ意にて中々とはいへる也舊說のごとくにてはなか〳〵の詞聞えがたし

おのづから聞給ふやうもあらん云々
（釋）世の評たも自然聞たることもあらん我はさらにあながちなる好色心は今までならひ來らぬを然るべき前世の宿縁ありてにやはじめてかうあながちなるわざするなればかくあはめらるゝもげにことわり也とおぼゆるほどの心まどひは我ながらあやしきまでにおぼゆるといふ意也
さるべきにや　（玉）かやうに深く思ひてあるまじきふるまひをし侍るも然るべき前世の宿縁あるにやと也
あはめられ　（玉）淡められ也
いとたぐひなき御ありさまの云々
（釋）世に類ひなき源氏の御ありさまなるに恥らひていよ／＼從ひ奉らん事のわびしければと也
さるかたの　（湖）情の方のいふかひなきものになりて過さんと空蟬のおもふ也
人がらの云々なよ竹のこゝちして
（釋）空蟬の人がらのやはらかなる

もてなしたり。人がらのたをやぎたるに。つよき心をしひてくはへたれば。なよ竹のこゝちして。さすがにをるべくもあらず。まことにこゝろやましくて。あながちなる御こゝろばへを。いふかたなしと思ひてなくさまなど。いとあはれなり。心ぐるしくはあれど。見ざらましかば。くちをしからまし。とおぼす。なぐさめがたくうしとおもへれば。などかくうとましき物にしもおぼすべき。おぼえなきさまなるしもこそ。ちぎりあるとは思ひ給はめ。むげに世を思ひしらぬやうに。おほゝれ給ふなんいとつらき。とうらみられて。いとかくうき身のほどのさだまらぬ。ありしながらの身にて。かゝる御心ばへを見ましかば。あるまじきわれだのみにて。みなほし給ふのちせもや。ともおもひ給へなぐさめましを。いとかうかりなるうきねのほどを思ひ侍るに。たぐひなく思ひ給へまどはるゝなり。よし今は「みきとなかけそ。とておもへるさま。げにいとことわりなり。おろかならず契りなぐさめ給ふ事おほか

にしひてつよき心なくはへたればなれ從はんかとは見えながらさすがになれずしたがはぬといふを竹にたとへていへる也たをやぎはたをたをとして柔かなる也〔新〕女竹はなよゝかにたわめどしなやかなれば中々に折がたき物なるにたとふ（評）なよ竹の比喩(タトヘ)いとめでたししひてといひさすがにといへるもめでたし新釋になよ竹を女竹とあるはおしあてめきたりたゞ竹也

みざらましかばくちをしからまし（釋）見るとは實に交はる事なり〔玉〕既に實事有しうへ也さてかく逢見たる事は空蟬のためには心ぐるしけれども逢見ずはくちをしきことならんとおぼすなり注どもたがへり

なぐさめがたく　〔玉〕空蟬の心なり思ひなぐさめんとすれどもなぐさめがたくうしと思ふ也源氏君のなぐさめ給へどもといふやうに心得たるはたがへり

おぼえなきさまなるしもこそ　〔箋〕不慮の參會こそ一段ふかき契の因緣なれと也

むげに世を思ひしらぬやうに　〔玉〕世をしるは男女のかたらひをしること也思ひしらぬといふもたゞしらぬといふに同じ（釋）おほゝれはおほらかに惚(ホレ)たるさまする事也おほのほすみてよむべし

うき身のほどの定まらぬ　〔湖〕伊與介の妻にならぬむかしの身にてあらば也（釋）ほどは分限を云受領の妻と定まるこれ分限也

ありしながらの身にて　〔奧入〕〔河〕とりかへす物にもがなやよの中をありしながらのわが身とおもはん〔餘〕此歌何に出たる歟と契沖いへりされど所々に此歌の心してかける所あまたありもと六帖などに在しが今の本にもらせしなるべし

あるまじき我だのみにて　（釋）あるまじき事ながらも我をたのみてといふ意也我だのみは體言也

見なほし給ふのちせもやと云々　〔花〕もとの身ながら源氏にとはれ奉らば御こゝろざしおろかなりともみなほし給ふやとも賴むべきにと也空蟬の心也後せは只のちといはんためなり（釋）此御說よろし後せは後の時といはんがごとしせはうれしきせかなしきせなどいふせ也

かりなるうきねのほどを　〔玉〕我は夫のある身なれば二たびと逢見奉るべきにあらざればこよひかくわりなく一度逢奉りしはたゞかりそめのうきたる契といふ也空蟬の心始終かくのごとし

たぐひなく思ひ給へまどはるゝなり　（釋）たぐひなく思ひまどはるゝは身のさちなきを也此段のすべての意はありしながらのもとの身にてかかる御心ばへを見たらばよしやお志のおろかなりとも見直し給ふ時もあらんと思ひたのみてなぐさめんものを既に受領の妻と定まりてかうあひ奉るもかりそめにしのびたるうきねなりさる身のほどを思ふにたぐひもなくくちをしうて思ひまどはるといふ意也ほどゝは身のほどの事也諸注皆解得られぬ中に新釋はよろし

みきとなかけそとて　〔河〕それをただに思ふ事とて我やどを見きとないひそ人のきかくに〔細〕古今には見きとないひそとあるをかけそとひきかへて用る面白き也（釋）案に此歌の四句はかけそとある方いにしへめきて聞ゆもしくは古今集のかたは後に寫しひがめたるにやあらんさ

てこゝの意はよしやかくあながちに逢給へるうへにいかにせん見たりと言のはにかけ給ふなと口がためする意を此引歌にゆづりてきかせたるなり例のいとたくみ也

思へるさま〔湖〕空蟬の思ひ入たるさまなり（釋）案にもの思へるさまと有けんをおとせるにや少し言たらぬげに聞ゆげにことわりなりとは地より空蟬の心を評じたるなり

おろかならず契りなぐさめ給ふ事〔新〕此所打とけたる事をば略して行末の契りをし又逢て後いよ〱女は心なぐさめがたかるをよろづにいひなぐさめ給ふとなり

（評）實事のありし事を始終にのめかして書まぎらはしたる筆つきいとも〱めでたし諸注こゝをその實事の所と定められたるはさる事ながら玉小櫛に見ざらましかばとある所にすでに實事有しうへ也といはれたるもまた捨がたしさるはいふかたなしと思ひてなくさまなど

るべし◎とりもなきぬ。人々おきいでゝ。いといぎたなかりける夜かな。御車ひき出よ。などいふなり。かみもいできて。女などの御方たがへこそ。よぶかくいそがせ給ふべきかは。などいふ◎君は又かやうのついであらんこともいとかたし。さしはへてはいかでか御ふみなどもかよはん。事のいとわりなきをおぼすに。いとむねいたし。おくの中將もいでゝくるしがれば。ゆるし給ひても。又ひきとゞめ給ひつゝ。いかでか聞ゆべき。よにしらぬ御心のつらさもあはれも。あさからぬよの思ひ出は。さま〲めづらかなるべきためしかな。とて打なき給ふ御けしき。いとなまめきたり。とりもしばしばなくに。心あわたゝしくて。

つれなさをうらみもはてぬしのゝめにとりあへぬまでおどろかすらむ。女身のありさまをおもふに。いとつきなくまばゆきこゝちして。めでたき御もてなしも。なにともおぼえず。つねはいとすく〱しくこゝろづきなしと思

いとあはれなりとある所其事めきて聞ゆるに見きとなかけそとあるきもじも過去の辭也又とて思へるさまといふつゞきも事の後めきて聞えたればなりされどさばかりあなぐりて委しくいはんは中々に書まぎらはしたる作りぬしの意にはあらざるべければたゞ大かたに見過すべくなん實事なしなどいはれたる舊注はいと〳〵ひがこと也さていづれにしてもこゝにて打とけたるさまなることは論なし

とりもなきぬ人々おきいでゝ云々　(評)鳥の聲に御供の人々おき出てものいふさま見るが如くきくがごとしこれらの事を挿みてつきせぬうらみを殘しとゞめて立出給ふ餘情をふかめたるいと〳〵いみじ

さしはへてはいかでか御ふみなども聞えん事のいとわりなきをおぼすに　(釋)さしはへては俗言にわざ〳〵などいふ意なりさていかでか御文なども聞えんとよみきりて事のいとわりなきをとよむべし事のわりなきとは忍びたる事なればいと理りなくむつかしき意也玉小櫛にいかでかの下にともじ落たるかとていはれし說も湖月本にいかでかの下に句と記したるもともにいみじきひがことなり御文といへるは源氏君の心を地よりおしはかりていふ所なれば御とはいへるなり源氏君のみづから御文とのたまひし意にはあらずよく思ひ辨へて疑ふべからず

いかでか聞ゆべき　〔湖〕ふみなどもいかゞしてつたへんと也

御心のつらさもあはれも云々　〔餘〕心のつらさとは空蟬をいひそれを淺からずあはれと思ふは源の心にてとり〴〵にたがひたる人心よといへる意にてさま〴〵めづらかなるべきためしかなとの給へるなり

あさからぬよの　(釋)案に湖月本に世のとかきたるはいかゞあらんこれは夜の意にてこの逢給ひし夜の事なるべし又よは例の男女の中をいふ意にて源氏と空蟬との中はつらさとあはれと共に淺からぬといふにもあらんか考ふべし

とりもしば〳〵なくに　〔細〕前に鳥もなきぬと書てこゝに鳥もしば〳〵とかける面白し

つれなさを云々　〔新〕つれなきことをまだ恨みもはてぬ間に心あわたゞしく明ぬるをいかでかくはおどろかしぬらんとなり物を取も堪ぬに鶏をそへたりさて實事なしと中將におもはせんの意也且上に疑ひの詞なくてらんといへる例のいかになどいふ語をこめたるてにをは也　(釋)この說のごとし但實事なしと中將におもはせんの意也とあるは舊注にもいはれたる事ながら過たるべししのゝめは古今集にしのゝめのほがら〳〵とあけゆけばといふ歌を本にて夜のあけゆく時をしのゝめといひならへりしのゝめは小竹之芽といふ事にてほがらへかけたる枕詞也

身のありさまを思ふに云々　(釋)空蟬わが身のありさまを思ふにいと賤しくてかたちも位も高くめでたき源氏君にあひ奉りたる事のにつかはしからずまばゆくおぼえて源氏君のめでたき御もてなしも何とも思はれずと也

つれはいとすく〳〵しく云々　(釋)すく〳〵しくはすくよかといふに同じ意也すく〳〵しく思ひあなづるといふ義にてすく〳〵しくは空蟬の心に思ふ意也心づきなしは伊與介を心づきなしと思ふ也すく〳〵しを伊與介の事としてはわたくしのしうと思ふなどいひしおもふきにかな

ひがたし餘滴にすく／＼しをふつゝかなる心歟といへるはひがこと也

いよのかたのみ思ひやられて云々　（釋）此詞にて伊與介は任國へ下りてある事しられたり夢にや見ゆらんは今宵のさまのなりつれは思ひあなづりたりし夫もわが身のあやまちより空おそろしく思ひ出らるゝ女の情げに然るべし

身のうさを云々　（湖師）空蟬の公卿の子にて伊與の妻になりし事かくぬし定りたる身にて源氏にあひし事またありしながらの身にてかく源氏に思はれまゐらせばとりかへさまほしく思ふ事などのうき歎きを思ふにあかぬうちにはやわかれを告る鷄の聲さへすればいよ／＼うき事をとりかされてねをなくと也　（釋）案にこの說よろし玉小櫛に身のうさとは夫の定まれる身にて源氏君に逢たるをうきことに思ふ也とあるはいさゝかたがへり

ことゝあかくなれば　（新）專らと明はつるをいふ也明るを事として早く明る意也然れば專らと明るてふに同じ

へだつるせきとみえたり　（河）（細）「あふ坂の名をたのみつゝこしかどもへだつる關のつらくもあるかな此歌のこゝろは實なきかこつけによく叶へり又「彦星に戀はまさりぬ天の河へだつる關を今はやめてよ此歌は障子を隔ての歌なればこゝによく合たり兩首ともに用べしと也（餘）初の歌新勅選戀二よみ人しらず二の句名をばたのみて後の歌伊勢物語　（釋）案にこゝは障子やがてへだつる關となりたる意なれば初の歌の詞のみをもてかゝれたるなるべし

南のこうらんに　（餘）高欄とかくは俗なり段國沙州記吐谷渾於二河上一作レ橋勾欄甚嚴飾勾欄之名始レ此玉篇に階際木勾欄とあり　（釋）東おもての南の方なる欄によりかゝりて打ながめ給ふなるべし

そゝきあけて　（餘）鈴虫卷さまかはりたるいとなみにそゝきあへるいとあはれなるに狹衣今やそゝきやむとものいはでつく／＼とゐ給へれば契沖云俗にいそがしく立ゐするをそく／＼するといへり紫上のあまがつなどつくりてそゝくりゐ給ふ　（釋）源氏君を見奉らんとて格子をそそろかにいそぎあげて女房などののぞく意也

すのこの中のほどにたてたる　（釋）南の簀子の西の方に見とほすべき所の中に小障子をたてたる也

こさうじのかみより　（釋）舊注のごとく小障子の上よりなるべし小櫛に紙よりといはれたる說どもは猶いかゞ也

身にしむばかり思へるすき心　（釋）源氏をのぞきてほのかに見奉りたる女房どものすき心には身にしむほどめでたく思へるも有べしと也

月は有明にて云々　（釋）五月の末の有明ごろなるべし光をさまれるは明はてゝ光のうすくなりたる也かげさやかに見えては猶空の影は淸く見えたるさま也これを地にうつりたる影のやうに見られたる舊注はさとび心也其外もやうなき說どももおほしなか／＼をかしきは夜中よりも却てけしきのおもしろきよし也

何心なき空のけしきも云々　（評）何の意もなき空のけしきも見る人の心に憂あればかなしく歡あればおもしろく其時々打むかふ心々にて艶に

も凄くもさま〴〵に見ゆるとなり
此詞はひろく上下にわたりたるこ
とにて大かた時々の物事につけて
けしきををかしく書なしたる所は
皆其をりの人々の心にかけて物の
あはれの身にしむやうにかき出ら
れたること此例をおして知るべし
こゝはさるけしきのをかしきにも
人しれぬ憂ある源氏の御心にはい
とむねいたく云々といへる意なる
其中に何心なき云々の事をさしは
さみて前後の文例を示されたるい
とめでたしいたづらに見過すべか
らず
よすがだになきを　（釋）此をの下に
かぎりなき餘情をふくめのこして
とゝ受たる也かへりみがちといへ
る則そのありさま也
とのにかへり給ひても　（釋）殿は大
殿也
すぐれたる事はなけれど　（釋）空蟬
のかたちのすぐれたることはなけ
れど見にくからず用意してもてな
しつくろひても有けるかなと思ひ

ひあなづるいよのかたのみ思ひやられて夢にや見ゆらんとそらおそろしくつつまし
身のうさをなげくにあかであくる夜はとりかさねてぞねもなかれける。
ことゝわかくなれば。さうじぐちまでおくり給ふ。うちもとも。人さわがしければ。ひきたてゝわかれ入給ふほど。心ぼそく。「へだつるせきと見えたり。御なほしなどき給ひて。南のこうらんにしばしうちながめ給ふ。にしおもてのかうしそゝきあげて。人々のぞくべかめり。すのこの中のほどにたてたる。こさうじのかみより。ほのかに見え給へる御有さまを。身にしむばかりおもへるすき心どもあめり。月は有明にて。ひかりをさまれる物から。影さやかにみえて。中々をかしきあけぼのなり。なに心なき空のけしきも。たゞみる人から。えんにもすごくも見ゆるなりけり。人しれぬ御心には。いとむねいたく。ことつてやらんよすがだになきを。とかへりみがちにていで給ひぬ◎

出給ふ也中の品はかの品定に中の品のけしうはあらぬえり出つべきころほひ也など馬頭のいへりし事を思ひあはせ給ふさま也くまなく見あつめたる人は馬頭なり（評）此段品定を引出たる脉の第三段にてまづそのしるしを見せたる所也このほどは大殿にのみ（評）まづおはします所を定めおく也紀守ためさんにたよりよろし

中納言の子は〔花〕前には衛門督と云こゝには中納言といへり權中納言兼右衛門督たりし故也

うへにもわれ奉らん「眠」前に殿上などもすがすがしう思ひ立ぬよし紀守の申し故なり

のたまひ見ん（釋）これは我いふことなれど源氏君の仰を傳ふる故にのたまひといへる也

むねつぶれておぼせど（評）この詞いとよくかきなされたり

朝臣のおとうとやもたる

〔細〕前にまうとゝありし類也賞翫しての詞也紀守をさしての給ふ也

とのにかへり給ひても。とみにまどろまれ給はず。又あひみるべきかたなきを。ましてかの人の思ふらむ心のうちを。いかならん。と心ぐるしくおぼしやる。すぐれたることはなけれど。めやすくもてつけてもありつる中のしなかな。くまなく見あつめたる人のいひしことは。げにとおぼしあはせられけり□このほどはおほい殿にのみおはします。なほいとかきたえて思ふらん事の。いとほしく御心にかゝりて。くるしくおぼしわびて。きのかみをめしたり。かのありし中納言の子は。えさせてんや。らうたげに見えしを。身ぢかくつかふ人にせん。うへにもわれ奉らん。とのたまへば。いとかしこきおほせごとに侍るなり。あねなる人にの給ひみん。と申すもむねつぶれておぼせど。そのあね君は。あそんのおとうとやもたる。さも侍らず。このふたとせばかりぞ。かくて物し侍れど。おやのおきてにたがへり。と思ひなげきて。心ゆかぬやうになん聞給ふる。あはれのことや。よろしく聞えし人ぞかし。

空蟬の腹に子のあるかなきかと尋ね給ふなり空蟬の子あらば紀守別腹の弟なるべし

かくて物し侍れど
〔孟〕伊與が妻になりて二ヶ年也

おやのおきてにたがへりと
〔細〕空蟬の父は宮仕にとこそ思ひしにさもなくて受領の妻になる事心ゆかぬと也

あはれの事や云々 〔釋〕あはれとは父のおきてにたがひたるがあはれなるよし也よろしく聞えしはかたちのよしと聞給ひし事也

けしうは侍らざるべし
〔玉〕すべてけしうはあらずといふはわろくはあらずといふ意也よしといふ意也といへるはたがへり
〔萬〕侍らざるべしの詞面白し次の詞にうと〳〵しきといへる首尾たかけるなり

世のたとひにて 〔花〕まゝ子はまゝ母にむつびぬ事と世のたとへに申すなり 〔釋〕つれにもてはなれてうと〳〵しう侍れば世中にいひ

まことによしや。との給へば。けしうは侍らざるべし。もてはなれてうと〳〵しう侍れば。よのたとひにてむつれ侍らず。とまうす◎さて五六日ありて。この子ゐてまゐれり。こまやかにをかしとはなけれど。なまめきたるさまして。あて人と見えたり。めしいれて。いとなつかしくかたらひ給ふ。わらはごゝちに。いとめでたくうれしとおもふ。いもうとの君の事も。くはしくとひ聞給ふ。さるべき事はいらへ聞えなどして。はづかしげにしづまりたれば。うちいでにくし。されどいとよくいひしらせ給ふ。かゝることこそは。とほの心うるも思ひのほかなれど。をさなき心ちにふかくしもたどらず。御ふみをもてきたれば。女あさましきに涙もいできぬ。この子の思ふらん事もはしたなくて。さすがに御ふみをおもがくしにひろげたり。いとおほくて。

見し夢をあふ夜ありやとなげくまにめさへあはでぞころもへにける。

ぬる夜なければなど。めもおよばぬ御かきざまに。めもきりふたがりて。心えぬ

ならへるごとくまゝしき中にてむつましくもせればよくも知侍らずといふ意也舊注に白氏文集を引れたるまではあらざるよし小櫛にいはれたるがごとし

ゐてまゐれり (釋)紀守の率て也

こまやかに云々 (釋)いづこもこまかにたらひてうつくしくめでたきかたちならねどなまめきたるさましてあてなる人と見ゆるよし也あては品のよき意也

はづかしげにしづまりたれば (釋)もの靜かなるさましたるがはづかしげなるよし也小君の恥たる意にはあらず

されどいとよくいひしらせ給ふ (釋)空蟬の事をいひ出にくけれど品よくかすめて心得させ給ふよしなり

ふかくしもたどらず (湖)思ひもめぐらさずと也

なみだも (玉)もといへるは源氏君の御文を持て小君が出來たるにあはせて涙もなり

すぐせうちそへりける身を。おもひつゞけてふし給へり。またの日に君をめしたれば。まゐるとて御かへりこふ。かゝる御ふみ見るべき人もなし。と聞えよとの給へば。うちゑみて。たがふべくもの給はざりし物を。いかゞはさは申さん。といふに。心やましく。のこりなくのたまはせしらせてけり。と思ふに。つらきことかぎりなし。いでおよずけたることはいはぬぞよき。さはなまゐり給ひそ。とむつがられて。めすにはいかでか。とてまゐりぬ◎きのかみすき心に。このまゝはゝのありさまを。あたらしきものにおもひて。つゐしようしよる心なれば。この子をもてかしづきてゐてありく◎君めしよせて。きのふまちくらしゝを。なほあひ思ふまじきなめり。とゑんじ給へばかほうちあかめてゐたり。いづらとの給ふに。しか〴〵とまうすに。いふかひなのことや。あさましとて。またも給へり。あこはしらじな。そのいよのおきなよりは。さきに見し人ぞ。されどたのもしげなくくびほそしとて。

さすがに御文をおもがくしに〔湖師〕見にとは思へどさすがにゆかしければなり〔新〕さすがにゆかしくはた小君におもはゆければ面がくしながらひろげたるいともよく書たり〔評〕げにいはれたるがごとくおもがくしにひろげたりとあるぬけ出てめでたし

見し夢を云々〔餘〕正夢はよくあふ物なれば夢にみしごとくうつゝにあふべき夜もがなとねがひなげくなり空蟬にかりそめに逢給へるを夢にとりなしての給へる也さてさるなげきするほどにあふ事はおきて我目まであはではねられぬとよめる也信明集に「なか／＼におほつかなさの夢ならばあはする人も有もしなまし是も夢をあはすといふよりよめり拾遺戀「夢よりぞ戀しき人を見そめつる今はあはする人もあらなんよみ人しらず〔玉〕思ひにてねられぬ也さへとは夢のあはざるうへにめさへあはずといへる詞也あふといふは夢の縁の詞也

ぬるよなければなど〔河〕「戀しさを何につけてかなぐさめん夢にも見えずぬる夜なければ

めもおよばぬ御かきざまに〔釋〕一本に御かきざまもと有はわろしいみじき御かきざまを見て心動くゆゑに身をなげく也めもきりてとのみある本は寫しおとせる也涙にめもきりふたがる意也

心えぬすぐせ〔玉〕受領の妻になれるばかりのうき身なるに又源氏君のごとくなるすぐれたる御方にかやうに思はれ奉ることは心得がたきすぐせのそへる也

きのかみすき心に云々〔釋〕紀守すきたる心に空蟬の年若くて伊與介の妻になれることをあたらものに思ひて心をかけつゝ追從して近づきよらんと思ふ故に小君をもてかしづきてひきゐてありくと也今日も源氏の御方へ紀守が率(ツレ)てゆくさま也〔評〕紀守が小君をゐてゆくにつけて繼母に心をかけたる事を説出てつひに此事によりて空蟬の尼になるべき伏案とせられたるいとめでたしかゝる事どもすべて此物語の法なれば心を付べし

猶あひ思ふまじきなめり云々〔釋〕源氏の小君を思ひ給ふに小君は源氏を思ひ奉らずと怨じ給ふ語なる故に相(アヒ)といへり猶とはこれよりさきに相思ふべき契ありしをさもなしとうらみ給ひし事あるをしらせて猶とはいへる也さてこの小君のさまを思ふに男色をほのめかして書たるものとおぼえて前になまめきたるさまして云々とかき出しをはじめてこゝにかくいひ末にいたりて御かたはらにふせ給へり云々つれなき人よりは中々あはれにおぼさるといひ空蟬卷にいたりて手さぐりのほそくちひさきほどなどいへるまさしくそのありさまをあらはされたる筆つき也心をつけてよむべし然るを諸注にいさゝかも其さだなきは事がらのをこがましき故にもあらめどいとなほざりなる事といふべし

いふかひなのことやあさましとて〔釋〕いふかひなは小君あさましは空蟬の心にかけて見るべし

あこはしらじな〔新〕吾子也萬葉などに吾をばあともわともいへりさてあこはわが子といひてしたしみの語なり〔釋〕汝はしるまじけれど伊與介よりは前に逢たるぞと戯れにの給ふ也

くびほそしとて〔釋〕案に此語は其世の俗語にて頸(クビ)の細きは貧相なりなどいふ諺(コトワザ)のありしをこゝに見えたりかれたのもしげなきとはいへるなる

べし
ふつゝかなる　〔玉〕太つかといふ事にて物のふとく丈夫なる意也注にげすしき心也といへるは後に轉じたる意にてこゝにはかなはず
ゆくさきみじかゝりなん
〔湖〕年老たる人なれば也
まつはし給ひて　〔釋〕糸の物に纏はるをたとひにてむつましくするをまつはしといへる也
うちにも　〔釋〕上にうちにもわれ奉らんとありしひゞき也
みくしげどの　〔河〕御匣殿内藏寮外御服など裁縫所也　順徳院御抄
〔釋〕今世にお納戸などいふごときところ也貞觀殿中にありと見えたりされどこゝはわがとあれば源氏君の御くしげ殿也岷江入楚に庶人も裝束調ずる所をいふ也と見えたり
かろ〴〵しき名さへ　〔新〕かく有まじき事の上にはたをさなき中だちに文つたへなどせる心がろき名を副とり添んものと也　〔釋〕舊注にとりそへん身のと引つゞけて見る

ふつゝかなるうしろみまうけて。かくあなづり給ふなめり。さりともあこはわが子にてをあれよ。かのたのもし人は。ゆくさきみじかゝりなん。との給へば。さもやありけん。いみじかりけることかな。と思へるを。をかしとおぼす。このこをまつはし給ひて。うちにもゐて參りなどし給ふ。わがみくしげどのにの給ひて。さうぞくなどもせさせ。まことにおやめきてあつかひ給ふ。御文はつねにあり。されどこのこもいとをさなし。こゝろよりほかにちりもせば。かろ〴〵しき名さへとりそへん。身のおぼえをいとつきなかるべく思へば。めでたき事もわが身からこそ。と思ひて。うちとけたる御いらへも聞えず。ほのかなりし御けはひありさまは。げになべてにやは。とおもひ出聞えぬにはあらねど。をかしきさまを見え奉りても。なにゝかはなるべき。など思ひかへすなりけり◎君はおぼしおこたる時のまもなく。心ぐるしくも戀しくもおぼしいづ。おもへりしけしきなどの。いとほしさも。

べしとあるはわろかめり
いとつきなかるべく　〔玉〕受領の妻と定まれる身にて高貴の源氏君などへ御返事などせんは似つかはしからずと也云々
我身からこそ　〔釋〕たとひいかほどめでたき事も我身の分限相應にてこそよけれ分に過たることはすまじと思ひて打とけたる御返事も聞えずといふ意也舊注いとわろし
ほのかなりし御けはひ有さまは云々〔釋〕くらき所にて逢たる故にほのかなりしとはいへる也　〔玉〕げには世中の人のめで聞ゆるもげになり
をかしきさまを　〔釋〕をかしきはをこがましき意さまはかたち也先分際のつきなきをいひ次にかたちのわろきを恥る也文法ついでありさてなりけりといふまでは草子地にて空蟬の心をいひ次に源氏君の心をいへり
思へりしけしきなどの　〔玉〕源氏に逢奉りしことをかけてもあるまじ

はるけんかたなくおぼしわたる。かろ〲しくはひまぎれたちより給はんも。人めしげからん所には。びんなきふるまひやあらはれん。と人のためもいとほしくおぼしわづらふ□れいのうちに日かずへ給ふころ。さるべきかたのいみまちいで給ひて。にはかにまかで給ふまねして。みちのほどよりおはしましたり。きのかみおどろきて。やり水のめいぼくと。かしこまりよろこぶ。こ君にはひるつかたより。かくなん思ひよれる。との給ひちぎれり。あけくれまつはしならし給ひければ。こよひもまづめしいでたり。女もさる御せうそこありけるに。おぼしたばかりつらんほどは。あさくしも思ひなされねど。さりとてうちとけ。人げなきありさまを見え奉りても。ゆめのやうにてすぎにしなげきを。又やくはへん。と思ひみだれて。猶さてまちつけ聞えさせん事のまばゆければ。こ君が出ていぬるほどに。いとけぢかければかたはらいたし。なやましければ。しのびてうちたゝかせなどもせんに。ほどはなれ

き事といみじくうき事に思へり空蟬の其時のけしき也云々
はひまぎれ（釋）はひは匍匐にてひそかにものする意まぎれはものに紛れてゆく意なり
れいのうちに（岷）前に内にのみさぶらひようし給ひてと有
さるべきかたのいみ（釋）或抄に云禁中より退出し給ふ道にて方ふたがりたるを思ひ出給ひたる體にしておはする也といへりかれ然るべき時を待給ひし也
にはかに（玉）にはかにはおはしましたりへかゝれり俄にまかで給ふといふにはあらずまれにしては忌の方をたがへにゆくまれをして也
やり水のめいぼくと（玉）源氏君の此家にはじめにおはしましたりしも水せきいれてすゞしき陰に侍ると人の申しによりてなれば又此度おはしましたるも此やり水の面目といへる也（釋）この會釋の詞いとなかし（餘）史記項羽本紀縱江東父兄憐而王レ我何面目見レ之

てをとて。わた殿に。中將といひしがつぼねしたるかくれに。うつろひぬ。さる心して人とくしづめて。御せうそこあれど。こ君はえたづねあはず。よろづの所もとめありきて。わた殿にわけ入て。からうじてたどりきたり。いとあさましくつらしと思ひて。いかにかひなしとおぼさん。となきぬばかりいへば。かくけしからぬ心はつかふものか。をさなき人の。かゝることいひつたふるは。いみじくいむなるものを。といひおどして。心ちなやましければ。人々さけずおさへさせてなん。と聞えさせよ。あやしとたれも〳〵思ふらん。といひはなちて。心のうちには。いとかくしなさだまりぬる身のおぼえならで。すぎにしおやの御けはひとまれる。ふるさとながら。たまさかにもまちつけ奉らば。をかしくもやあらまし。しひて思ひしらぬがほに見けつも。いかにほどしらぬやうにおぼすらん。と心ながらもむねいたく。さすがにおもひみだる。とてもかくても。今はいふかひなきすぐせなりければ。く

人げなきありさまを（釋）人氣なきとはかたちのわろく人がましからぬよし也
夢のやうにて過にしなげきを（湖）はじめの方違の時逢まゐらせし事をいふ也云々（釋）ふたゝび逢なばいよ〳〵身のすぐせをなげくことの加はるべければといふ意也

まばゆければ（玉）人げなきさまにて源氏君に見え奉らんがはづかしくてまばゆき也注に人のおもはくはづかしければといへるはいたくたがへり

なやましければ云々（釋）かたはらいたしといふまでは空蟬の心に思ふよし也なやましければ云々といふよりはわた殿にうつるよしを人にいひてうたがはせじとまぎらはす空蟬の詞也よく思ひ分つべし所勞あればひそかに肩腰などうちたゝかせんに源氏の御座ちかくては便なしほど遠くあらんといひて中將が局へゆくさま也さて中將をとり出たるはかの夜の心を知たればよろづにたよりよければとてなるべしいとこまやか也

かくれに（玉）かくれとはかくれたる所をいふか又思ふにつぼねしたるにかくれにてかくれんためにといふ意なるを後の人にもじの重なれるをいかゞと思ひて上なるをばさかしらに除きたるか（釋）初の說よろし後の說はひがこと也かくれは體言にてかくれ所といふ意也

さる心して（釋）空に逢給はんの心して也

いとあさましく（釋）空蟬の女房の局に逃入たるを見て小君輿をさましたるさま也つらしはつれなしの意也

なきぬばかり（釋）ほと〳〵泣もすべきほどにいふ也俗になかぬばかりといふ意

をさなき人の（湖）童のなかだちする事は世に忌む事ぞといひおどせるなり

人々さけずおさへさせて（釋）病あれば女房どもを遠ざけず胸腹など押へさせて侍れば便なしといへといふ意なりあやしとたれも〳〵は誰も〳〵あやしと思ふらんといふ脉也

しなさだまりぬる身のおぼえ（釋）受領の妻と品格の定りたる身といふ也おぼえは人のおもはくにてこゝは身の勢ひ仕合せをいふ也

すぎにしおやの云々（釋）蓬生の卷にもおやの御かげとまりたるとあり過にし父母の餘波のおもかげに見ゆるやうなるをとまれるとはいへるなりいとあはれなる詞也ふるさとは父母の家をさしていへり

見けつも（釋）さばかりの源氏の御志を思ひしらぬやうに見消つもと也

いかにほどしらぬやうに（玉）源氏君の御こゝろざし御身のほどをしらぬやうに也

心ながらも（釋）わが心に思ふことながらもむれいたくなりさすがにはいひはなちたるものゝさすがに也

いふかひなきすぐせ（釋）既に受領の妻と定まりたる上は今はいふともかひなき前世の宿緣ぞと也

むじんに心づきなくて（釋）無心は心なくなさけなき也心づきなくなさけなきものとおぼすともかくて止なんと思ふよし也

ふよう〔玉〕事かなはざるよし也注に不用不要などの字を出して其字の意に解れたるはみなかなはず字はさも有べけれど意は然らず云々（釋）字は不用なるべし假字ようとかくべしいたづらなる意也

めづらかなりける心のほどを（釋）このをもじの下に必脱文あるべしこのまゝにては聞えがたし其故は身もいとはづかしくこそなりぬれとゝあるは源氏ののたまふ言なるをめづらかなりける心のほどをとあるは源氏の思ひ給ふ心なれば其間に語なくてはとゝのひがたし猶考ふべき也

身もいとはづかしくこそ〔湖〕空蟬にきらはるゝ事をのたまふ也

いといとほしき御けしき也（釋）これは草子地ながら小君が心になりていへる也

むじんに心づきなくてやみなん。と思ひはてたり◎君はいかにたばかりなさん。とまだをさなきを。うしろめたく。まちふし給へるに。ふようなるよしを聞ゆれば。あさましくめづらかなりける心のほどを。身もいとはづかしくこそなりぬれ。といといとほしき御けしきなり。とばかり物もの給はず。いたううめきて。うしとおぼしたり。

はゝき木の心をしらでそのはらの道にあやなくまどひぬるかな。聞えんかたこそなけれとの給へり。女もさすがにまどろまれざりければ。

かずならぬふせ屋におふる名のうさにあるにもあらずきゆるはゝき木。

と聞えたり。小君いといとほしさに。ねぶたくもあらでまどひありくを。人あやしと見るらん。とわび給ふ。れいの人々はいぎたなきに。ひとゝころ。すゞろにすさましくおぼしつゞけらるれど。人にゝぬ心ざまの。なほきえずたちのぼりけるもねたく。かゝるにつけてこそ心もとまれ。とかつはおぼし

ながら。めざましくつらけれは。さばれとおぼせど。さもえおぼしはつまじく。かくれたらん所にだに。なほゐていけとの給へど。いとむつかしげにさしこめられて。人あまた侍るめれば。かしこげにと聞ゆ。いとほしと思へり。よし。あこだになすてその給ひて。御かたはらにふせ給へり。わかくなつかしき御ありさまを。うれしくめでたし。とおもひたれば。つれなき人よりは。なか〳〵あはれにおぼさる。とぞ。

はゝきゞの云々　〔河〕「そのはらやふせやにおふるはゝき木のありとは見えてあはぬ君かな　〔餘〕坂上ノ是則が歌にて新古今集にものせたりくはしくは袖中抄卷十九に見えたり　〔花〕はゝきゝは空蟬にたとへたり有とは見れどあはぬ故也　〔釋〕尋ればよれば見うしなふといへるはゝき木の心をもしらでその原の道にあやなくもまどひ來にけることかなといひてさても〳〵つれなくくやしき事也といふ意をふくめたる也かれ聞えんかたこそなけれとはのたまへる也

女もさすがに　〔釋〕さはつれなくもてなしゝ物からさすがに心にかゝりてねられざりければかゝる歌をよめりといふ意也

かずならぬ云々　〔新〕その原のふせやを賤が伏廬(フセヤ)にいひなして女の身をよそへたりさて其數ならぬ名のうさにとはかゝる受領の女となりたる身のいやしさにこそかくにげ隱れ侍れ昔ながらかゝらばさもあらじをと先にいひつる意を一首につゞめていへり　〔玉〕上句は受領の妻と定まれる賤き名のうさに也此人の心始終かくのごとし云々下句はあるにもあられず思ひきゆるよし也さて四句もきゆるも帚木の縁の詞也

小君いと〳〵ほしさに　〔釋〕この歌の贈答も小君がつたへたるよしをあらはしたるにてすきまなき筆つき也

わび給ふ　〔釋〕これは源氏君のわび給ふごとく聞ゆれどなほ空蟬也さて空蟬に給ふといふは上に思ひつゞけてふし給へりとある所の小櫛補遺にこゝに至りてかく此女君をあがまへいへるは源氏君の御思ひ人となりしによりて也といへる意なるべし

例の人々は　〔湖〕御供の人前にもいぎたなかりける夜かなとあれば例のと也

すさましく　〔玉〕不興におぼす也　〔釋〕獨寢し給ふがすさましき也

なほきえず云々　〔湖師〕きゆるはゝき木と歌にはよめどつれなき意地は猶きえずと也　〔釋〕たちのぼるはぬけ出たる意也帚木の梢高きによそ

へたるか或は消るといふ火の縁にのぼるといへるにもあらんかとにかくに縁語也

かゝるにつけてこそ心もとまれ　〔湖師〕うちつけのすき〴〵しさなどはこのましからぬ御本上にてなどある心也かやうにつれなき故に源の心もとまるぞと也　（釋）かつはゝれたき中に且はの意なり

かしこげにと聞ゆ　〔玉〕所のさまむさ〴〵として人共もあまたつどひて侍ればさる所に入れ奉らんはあまり恐多きよし申せるにて所のさまの源氏君へ恐れあるなり

よしあこだになすてそとの給ひて云々　（釋）よしさらばせめて汝だに我なすてなとの給ひて御側に臥しめ給へるなりこれ上にもいへるごとく男色をほのめかしたる書ざま也心とゞめて見るべしふせは令臥なり

おぼさるとぞ　〔玉〕細流にとぞとは紫式部わが書たることをたしかにせしのため也とあるはたがへりしらせしまでにはあらずたゞことさらにおほめきたる詞にてかやうに語り傳へたりと昔物語になしたる詞也

〔評〕とぞの說小櫛のごとしさて此卷の終と空蟬卷の始とはつゞきたる事なるを暫くきりて別卷とせられたるなりさてしか別卷とせられたる意は今知がたけれど大かたはこれは品定これは中川の段などやうにあきやかにけにへゝかまへんがつゝましさにしどけなくまぎらはさんためにもあるべしさて又この中川の事初は方違ゆゑゆくりなきことより出来たる事なるを女のつれなきにわび給ひて二たび事のついでをまうこしらへておはしつゞにはしのびてわたり給へるさまつぎ〳〵に御思ひのたへがたくなりゆくこゝろたいとよく書なされたる中におのづから法則あり深く心とゞめてあぢはふべし

第三帖 空蟬 評釋

〔舊注〕并一此卷は源氏君十六歳の夏の事あり以歌爲卷名うつせみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな　并の義は先横を以て本とすうつほ物語濱松物語のごとし但此物語にかぎりて竪の并あり此物語には并に三の品有一には竪二には横三には横竪をかねたり竪とは此卷の類なり此卷は帚木の末の事を書つゞけたりさて横とは蓬生の卷の類なりみをつくしの初の時分の事を書たり是はみをつくしのはじめにかくべき事のそこにかゝれねば別に一卷としたる也横竪をかねたるは末摘花の卷の類なりはじめは若紫より前の事あり末には若紫より後の事あり云々

〔玉〕帚木卷の同年にて源氏君十七歳なり十六とするは誤なること上にいへるがごとしこれよりつぎつぎ處女卷まで諸抄一年のたがひ有としるべし

〔新〕誰やらん此文に竪横てふ事をいひ出したるに其理りかける物のいひなしわろく理り明らかならず先竪とは本系の事にて源氏はもとより葵上などの本系の類をいふ此空蟬の卷などの類は本系にはあらねど帚木の卷よりつゞきて一ッの筋なれば横といふべからずよりて竪の并とはいへり云々これも卷々の總ての心しらしめん料なればさも有べしされどかゝる事にいと心をつけずとも本末をよくよみとく時はおのづからしらるゝ也今の人はかく樣の事にのみ日をくらして文の意をよくよみとかぬなるべし

〔釋〕案に舊注に并の卷の事をいはれたること一わたりは心得おくべしされども新釋小備などにいはれたるごとくしひてさだすべき事にもあらずさて并とは横に并びたるをこそいはめ竪の并といふことは理りきこえぬいひざまなりこれは一つらにつづきたることをしかいへるなれば續の卷などはいひもしつべし然れどもふるくいひ馴きつるに隨ひて今はたこれを改めずおして并の卷といひてあるべしさるはさしも本文の意にあづかる事にもあらざれば也さて諸註にいはれたるごとく蓬生關屋卷などは横の并にてみをつくしの卷にかくべき事を人によりて分ちかけるなれば論なし此卷又夕顏

巻などは帚木巻のつゞきにてさらに幷びたる事なければいかゞなれども帚木より夕顔までは一つらにつゞきたる文なればしばらくそれを分たん爲におして幷といひてありなんか末摘花を横竪をかねたりとあるもいひざまよろしからずこれは若紫の幷にはあれど反對の法にて事をかへたるにて年月のつゞきは却て夕顔よりうけたりさて末には若紫の事をもひゞかせていへれば幷の中に續をかねたりなどこそいはめされどこれもまた舊きに隨ひつさばれとにかくに理りの貫かぬ云ざまなれば一説に桐壺を一とし帚木を二とし空蟬をはゝき木の幷一とし夕顔を幷二としさて若紫を三としたるなどはすべてもちゐずならびの巻とはいへども一二三の次第はつぎ〳〵五十四帖にして幷の巻を側なる物として其前の巻に屬る類〳〵したる物とは見えざれば今は空蟬を三夕顔を四としてついでたり又玉かづらの巻の次初音巻より次〻槇柱巻までの九巻をすべて玉葛の竪の幷とせられたるなどは殊にいはれなしかしこは玉葛君の事を多く書たる所なれどもすべては源氏君の榮えのさかりを年をおひてかたるを主としたるなればさらに玉葛の幷にはあらぬものをや猶そこにもいふべしとにもかくにもかやうの事どもは大かたにしてさしおくべしさてまた年立の事は舊注は處女巻までは一年づゝのたがひあることと玉小櫛にいはれたるごとくなればこれより次の巻々には皆はぶきて小櫛の年立をのみ用ゐたり

(評)この巻は帚木巻の末をゆくりかにきりて一巻としたるなればよろづかの巻の脉に續けてよむべし源氏君御方違に中河の宿へおはして一夜空蟬君にあひ給へりしなごりを猶せちにおぼしわすれでふたゝびおはしたるに空蟬のかくれて逢奉らざりしかば又さらにたばかりてしのび入給へるに空蟬と軒端荻と相對ひて碁を打てありしをかいまみ給へる所など殊にめづらかにかきなされたりかくて人をしづめてしのびより給へるに空蟬の君のひそかにすべり出ておもひかけぬ軒端荻にあひ給へるなどいと〳〵めづらしくめでたしさて夜ふかく出給へるに老ごだちのよりきてとがめたる所其さまをまさめに見るがごとくにていとをかしくめでた

しさてすべて此卷は空蟬の君の用意のいみじきをいふ事主なる故に軒端荻をとり出てあわつかにそゞろかなる人の清らかにうつくしきさまにいひてそれを客として主とある空蟬の用意のいみじさをつよくきかせたるたくみいみじくめでたしさるは女はひたぶるにかたちのめでたきのみにもよらずたゞふかく心しらひしてかたちをもふるまひをもなだらかにおだしくめやすくもてつけて人にかろめあなづられぬさまにもてなし又世中のとある事かゝる事をもわきまへ物のあはれをもおもひしりながら見しらぬさまにもてなしてよろづ大どかにふるまふべき事どもをふかく此空蟬の君の上にとどめてあらはし見せたるなりさればかのもぬけのくだりよりして末々もいと心にくきさまにかゝれたるを心とゞめてあぢはふべし

○空蟬のもぬけのくだりに軒端荻のいぎたなく用意なきさまをあらはしたるはれいの反對の脉なるを源氏君の本意の人のすべり出てかくれたるにせんかたなくして俄におもひうつり給へるさまに轉じてかゝれたるなどゆくりなく事を引たがへて興としたるたくみにしていとめでたしさて老ごだちのとがめたるは又其餘波をあやなして事のあへなくをさまらんことを惜みたるにほひの筆なる物から其中にかろ〴〵しき御忍びありきのあやふきよしをいましめたり末に小君のわたりありくにつけて空蟬と軒端荻との思ふ心をとり〴〵に書分たれたるなど例のめでたしさて空蟬の歌の末に詞なくて此卷をとぢめられたるは卷の初のゆくりなきにひゞかせたるものと見えて首尾あひかなへりいたづらに見過すべからずなん

ねられ給はぬまゝに

〔花〕帚木巻終の詞につゞけてかけりいまだ中河のやどりにとまり給ひての事なり

〔釋〕巻の分ちざまいとめづらし帚木巻に小君と共に寐給ひし事ないひたはりてこの巻の初にかく書おこしたる思ひの外のこゝちしていとをかしなほざりに見過すべからず

われはかく　〔新〕餘りの御心やましさにいとせめて小君にかくの給ふ也次に例のやうにものたまひまつはさずとあるをもておもへば女にもかたりぬべしとおぼすよりなるべし

にくまれてもならはぬを

〔釋〕人に憎まれたる事はたえてなきをといふ意也ならはぬは未聞ぬにて俗になれ来らぬといふがごとし

ながらふまじくこそ

〔釋〕いとはづかしき物思ひに存命しがたきやうにも思ふとの給ふ也

ねられ給はぬまゝに。われはかく人ににくまれてもならはぬを。こよひなんはじめてうしと世をおもひしりぬれば。はづかしうて。ながらふまじくこそ思ひなりぬれ。などのたまへば。涙をさへこぼしてふしたり。いとらうたしとおぼす。てさぐりのほそくちひさきほど。かみのいとながゝらざりしけはひのさま似かよひたるも。思ひなしにやあはれなり。あながちにかゝづらひたどりよらんも。人わろかるべく。まめやかにめざましとおぼしあかしつつ。れいのやうにものたまひまつはさず。夜ふかくいで給へばこの子はいといとほしくさう〳〵しと思ふ□女もなみ〳〵ならず。かたはらいたしとおもふに。御せうそこもたえてなし。おぼしこりにけるとおもふにも。やがてつれなくて。やみ給ひなましかば。うからまし。しひていとほしき御ふるまひの絶ざらんも。うたてあるべし。よきほどにかくてとぢめてん。とおもふものから。たゞならずながめがちなり◎君は。心づきなしとはおぼしながら。

てさぐりの　〔釋〕帚木卷にいへるごとく男色たほのめかしたる書ざまこれにてしるべし男色ならずして手さぐりなどはいふべくもあらず手さぐりのちひさく髪の長からざる小君がけはひの空蟬に似たるたわが御思ひなしにやあはれにおぼしめすよし也

あながちにかゝづらひ　〔湖師〕帚木卷にかくれたらん所にだになほゐていけとの給へどゝいへる所をうけて聞べしかのかくれまでたづねより給はんも人めわるからんと也

おぼしあかしつゝ　〔釋〕めざましとおぼしながら夜を明し給ふ意也

のたまひまつはさず　〔釋〕まつはすとはねんごろにむつましくし給ふこと也

さう〳〵しと思ふ　〔釋〕中河の家の段こゝにて終れり次は其後に空蟬のおもふ心也

おぼしこりにけると　〔玉補〕けるの下によの字をそへて心得べし此類。

かくてはえやむまじう御心にかゝり。人わろくおもほしわびて。こぎみに。いとつらうもうれたくもおぼゆるに。しひて思ひかへせど。心にしもしたがはずくるしきを。さりぬべきをりをみて。たいめすべくたばかれ。とのたまひわたれば。わづらはしけれど。かゝるかたにてものたまひまつはすは。うれしうおぼえけり□をさなきこゝちに。いかならんをりにか。とまちわたるに。きのかみくにゝくだりなどして。女どちのどやかなる「夕やみの。みちたど〳〵しげなるまぎれに。わが車にてゐて奉る。このこもをさなきを。いかならんとおぼせど。さのみもえおぼしのどむまじかりければ。さりげなきすがたにて。門などさゝぬさきに。といそぎおはす。人みぬかたよりひきいれて。おろしたてまつる。わらはなれば。とのゐ人なども。ことに見いれつゐそうせず心やすし。ひんがしのつまどにたて奉りて。我はみなみのすみのまよりかうしたゝきのゝしりていりぬ。ごだちわらはなりといふなり。なぞ

所々に多し必しもてにをはの誤又寫し誤にもあらず

やがてつれなくて云々

(評)空蟬の心につれなきにこり給ふよと思ふにつけても速に思ひ絶給はゞさすがにうかるべしさりとて又强て思ひかけ給ふ事どもの絶ざらんもうたてあるべし中ほどのよき所にて止んとは思ふものからさすがに心にかゝりて物思ひがちにながめらるゝと也人の心のくまぐまげにかくもこそとおぼえていとあはれふかし

たゞならずながめがちなり

(新)さは思ひながらも何となく直なるよりはしたはしき也云々

たばかれ　(新)古へたばかるといふは只おもひはかるをいふ後世僞りあざむく心をかぬるやうにおもへるは古書の意にかなはず

かゝるかたにても　(釋)かゝる方とは好色のすぢをいふ小君源氏君のめでたきに感じ奉りける故にわづらはしきことをさせ給ふは面倒な

かうあつきに。このかうしはおろされたる。ととへば。ひるよりにしの御かたのわたらせ給ひて。ごうたせ給ふといふ。さてむかひゐたらんを見ばや。と思ひて。やをらあゆみいでゝ。すだれのはさまにいり給ひぬ。この入つるかうしはまださゝねば。ひまみゆるによりて。にしざまに見とほし給へば。このきはにたてたる屛風も。はしのかたおしたゝまれたるに。まぎるべき几帳なども。あつければにやうちかけて。いとよくみいれらる。火ちかうともしたり。もやのなかばしらにそばめる人や。わがこゝろかくるとまづめとゞめ給へば。こきあやのひとへがさねなめり。なにゝかあらんうへにきて。かしらつきほそやかにちひさき人の。ものげなきすがたぞしたる。かほなどは。さしむかひたる人などにも。わざと見ゆまじうもてなしたり。てつきやせ〳〵として。いたうひきかくしためり。いまひとりはひんがしむきにて。のこる所なくみゆ。しろきうすものゝひとへがさね。ふたあゐのこうちきだつもの。

れどれんごゐにしたしうの給ふなうれしと思ふと也これも男色なほのめかしたる脉なり
夕やみの　〔河〕萬葉曰「ゆふやみは道たど〳〵し月まちてかへれわがせこそのまにも見ん
わが車にてゐて奉る　〔釋〕小君我車にのせ奉りて率てゆく意也
ことに見いれつゐそうせず　〔釋〕みいれは小君の方を見入る也つゐそうは追從なりその字は下學集に見ゆと餘滴にいへり
ひんがしのつまどに云々　〔釋〕南向の家の東の妻戸有所に源氏君を立せ奉りて小君はその南の角の間の格子をたゝきてあけよなど云てわざとさわがしくのゝしりあけさせて入たる也さて其跡をそのまゝにあけ置て源氏を入奉らんとせしを女房見てあらはなりといへるなりさるを小君はなにあけおかせんとて格子の下されたる故を問ふ也此わたりのさま繪がける人に聲あるこゝちしていとめでたし
にしの御かたの　〔細〕伊與介のむすめ軒端荻也空蟬のまゝ子也此家の西の方にあたりてすめるなるべし
さて向ひゐたらんを見ばやと思ひて　〔評〕小君とごだちとの問答をいひさして源氏君のかいま見を說出せる筆づかひさらにめでたしこのうちに小君は入てものゝけしきを見るなるべし下に小君いでくるこゝちすればとある所へ相照して見るべし
やをらあゆみいでゝ　〔釋〕妻戸の口を步み出て簾のはざまに入給ふ也
この入つるかうしは　〔評〕小君とごだちと問答しながら入たる故に事にまぎれてその跡をまださらぬとなりこれ源氏君のかいまみの道を開きて下のありさまをあらはし出んまうけ也としるべし
にしざまに見とほし　〔細〕唯今源氏はたつみの方より すぢかひて西のかたへ見とほし給ふなり
このきはにたてたる屏風も　〔釋〕このきはとは格子のきは也格子にそへてたてたる屏風も端の方たゝまれたる也これも小君が入し跡なるべしさて又其内にたてそへたる几帳も暑ければ帷を上へ打かけてその下よりよく見入らると也下の小君が詞に格子には几帳そへて侍とあるに合せ考ふべし
火ちかうともしたり　〔釋〕これより內のありさまを語る也或抄に碁をうつ故燈ちかき也といへり
もやの中柱に　〔釋〕もやは母屋の意なるよし拾遺にいはれたり主人の常に居る處也中柱は壁につかぬ所の柱なりそれに空蟬はよりそひてあるなるべし側めるは橫によりそへるかたちなり
なにゝかあらんうへにきて　〔評〕夜の見わたしの近からぬに柱によりてよくも見えぬさまを顯さんとて何にかあらんといへるめでたし
かほなども云々　〔評〕これより空蟬の用意ふかきさまをいへり此段かたちよからねど用意ふかき人とかたちよけれど用意なき人とを反對としたりよく〳〵味はふべし
手つき云々　〔細〕碁を打には手あらはなるべきをもよきほどに引かくす也用意淺からぬ體なり

こうちきだつ物（釋）だつはめくと云に等しき形容辭也これも遠き故におしはかりていへるなり
うべこそおやの（釋）これよりさきに伊與介が我むすめな世に又なく思ふらはさなど聞給ひたるさまに書る也
心ちぞ猶しづかなるけをそへばや
（評）これまり上には容貌のめでたきよしをあげてこゝにそのさわがしきなおとしめたり空蟬は先かたちのわろきをいひて次に用意のふかきなあらはせり抑揚反對その法おごそかなりといふべし
かどなきにはあるまじ（釋）源氏君の心になりて草子地より評じたるなり文勢おちはひあり
ごうちはてゝ（釋）こゝより又源氏君の見給ふさまなり軒端荻なりおくの人は〔細〕空蟬也棋數の奥なるべし
そこはぢにこそあらめ
〔玉補〕持は今俗にいふせきのことなり唐の碁の書に見えたり〔雅

ないがしろにきなして。くれなゐのこしひきゆへるきはまでも。むねあらはに。ばうそくなるもてなしなり。いとしろうをかしげにつぶ〳〵とこえて。そゝろかなる人の。かしらつきひたひつき。ものあざやかに。まみくちつき。いとあいぎやうづき。はなやかなるかたちなり。かみはいとふさやかにて。ながくはあらねど。さがりばかたのほどいときよげに。すべてねぢけたるところなく。をかしげなる人と見えたり。うべこそおやの世になくはおもふらめ。とをかしく見給ふ。こゝちぞなほしづかなるけをそへばや。とふとみゆる。かどなきにはあるまじ。ごうちはてゝ。けちさすわたり。心とげに見えて。きは〳〵とさうどけば。おくの人はいとしづかにのどめて。まち給へや。そこはぢにこそあらめ。このわたりのこうをこそ。などいへど。いでこのたびはまけにけり。すみの所々いで〳〵。とおよびをかゞめて。とをはたみそよそなどかぞふるさま。いよのゆげたもたど〳〵しかるまじうみ

集〕左傳正義　奕棊謂レ不レ能ニ相害一爲レ持
すみの所々　〔釋〕碁盤のすみの地をかぞふるさま也およびはたゞ指の事なること上に見えたり
いよのゆげたも　〔花〕〔孟〕六花集に古歌とて出せり「いよのゆのゆげたの數は左八ツ右は九ツ中は十六すべて三十三有といへり　〔河〕〔餘〕體源抄伊豫湯　雜藝催馬樂「いよのゆのゆげたはいくついさしらずやかずへずやかすへずよまずやそよやなよや君ぞしるらんや　〔細〕數多き事にいふ也又今父の伊與へ下りたる留守也似合たる詞也　〔釋〕軒端荻の碁の地をかぞふるさまのあわつかなるをかの左八右は九などいふ湯げたのかぞへざまによそへてたど〳〵しかるまじと戯れたるなり
すこししなおくれたり　〔釋〕軒端荻の人品空蟬より少しおとりたりといへる也上のかどなきにはあるまじといふ語と同じく源氏君の心に

ゆ。すこししなおくれたり。たとしへなくくちおほひて。さやかにも見せねど。めをしつとつけ給へれは。おのづからそばめにみゆ。めすこしはれたるこゝちして。はななどもあざやかなる所なうねびれて。にほはしきところも見えず。いひたつればわろきによれるかたちを。いといたうもてつけて。このまされる人よりは。心あらん。とめとゞめつべきさましたり。にぎはゝしくあいぎやうづきをかしげなるを。いよ〳〵ほこりかにうちとけてわらひなどそぼるれば。にほひおほく見えて。さるかたにいとをかしき人のさまなり。あわつけしとはおぼしながら。まめならぬ御心は。これもえおぼしはなつまじかりけり。見給ふかぎりの人は。うちとけたるよなく。ひきつくろひそばめたる。うはべをのみこそ見給へ。かくうちとけたる人のありさまかいまみなどは。まだし給はざりつることなれば。なにごゝろもなうさやかなるは。いとほしながら。ひさしう見給〔へ〕まほしきに。こ君いでくるこゝちすれ

なりて草子地より評じたる也
たとしへなく口おほひて　〔玉〕軒端荻のばうそくなるもてなしとはいたく異にして　たとへ　がたきよしなり
ねびれて　〔玉〕あざやかなる所なうといひにほはしき所も見えずといへるぞすなはち此詞の注のごとくなる
まめならぬ御心は　（釋）好色のかたに信實ならぬ御心には軒ばの荻をあわつけしとは見おとし給ひながらえおぼしすて給ふまじと草子地より戯れて評じたる也　（評）これやがて下の人たがへを引出べきためのしたぐみなりとしるべし
見給ふかぎりの人は　（釋）源氏君のこれまで見給ふほどの人はうはべを引つくろひて打とけず用意して打もむかはぬさまにして見え参らすればかう打とけたる人のさまはまだ見給はずと也そばめたるとは用意して正目には向はぬさまに恥らひたるかたちをしたるをいふ

ば。やをら出給ぬ。わたどのゝ戸ぐちによりゐ給へり。いとかたじけなしと思ひて。れいならぬ人侍りて。えちかうもより侍らず。さてこよひもやかへしてんとする。いとあさましうからうこそあべけれ。との給へば。などてか。あなたにかへり侍りなば。たばかり侍りなんときこゆ。さもなびかしつべきけしきにこそはあらめ。わらはなれど。物の心ばへ。人のけしきみつべくしづまれるを。とおぼすなりけり。ごうちはてつるにやあらん。うちそよめくこゝちして。人々あがるゝけはひなどすなり。わか君はいづくにおはしますならん。このみかうしはさしてん。とてならすなり。しづまりぬなり。いりてさらばたばかれ。とのたまふ。この子もいもうとの御心は。たわむ所なくまめだちたれば。いひあはせんかたなくて。人ずくなゝらんをりに。いれ奉らんと思ふなりけり。きのかみのいもうとも。こなたにあるか。われにかいまみせさせよ。との給へば。いかでかさは侍らん。かうしには几帳そへて侍

かいまみ　〔新〕本は垣間よりひそかに見るより出て何處にてもひそかに見るなかいまみといふ　（釋）このかいまみは用言也ありさまなかいまみなどはといふ意なり

なに心もなう云々　（釋）空蟬も軒端荻も見る人有ともしらず何心なくてさやかに見られたるはその人のためにいたはしと思しながらといふ意也〇見給へまほしきにとあるは寫しひがめたる也改むべし

わた殿の戸ぐちに　〔細〕前より此の戸口に居給ひしやうにして小君に見え給ふなり

いとかたじけなしと思ひて　（釋）久しく待せ奉りぬと思ひて小君が恐多しと思へる也

例ならぬ人侍りて　（釋）常にはあらぬ人ありて空蟬の傍へ近くもえよらずといふ意也其世の禮儀思ふべし

あなたにかへり侍りなば　（釋）軒端荻のおのがすむ西の方へかへりなばといふ意也

さもなびかしつべき　（釋）小君がたばかり侍なんといふなきゝ給ひてさやうにもいひなびかすべき空蟬のけしきならん小君はわらはなれどものゝ心ばへ人のけしきは察すべくしづまりたればと思ひ給ふ意なり此所いさゝか紛らはしきなかく見ざれば心得がたしよく〳〵思ふべし

このみかうしはさしてんとて　（釋）上文に小君がたゝきのゝしりて入ぬといひ次に此入つるかうしはまださゝねばといへる格子の事にて今また小君が出て外にあるた女房のさゝんとてわが君は云々といひておろして鳴す也格子の首尾殊にとゝのひてめでたしならすは格子なさすとて音さするないへる也

しづまりぬなり　（釋）寢靜まりぬるなりこゝより源氏君の詞也小櫛に地の詞とせられたるはわろきよし同補遺にもいへり

いもうと　（釋）妹人（イモウト）の義（ヨシ）也いにしへは夫妻兄弟ともに男より女なば次第にかゝはらず妹（イモ）といへりこゝもその意にて空蟬の事也このほどまではさる詞の遺（ノコ）りしなるべし

たわむ所なくまめだちたれば　（釋）貞實（マメヤカ）なるすぢなたてゝいさゝかも撓（タワ）まずなびかぬ意なり

かうしには木丁そへて　（釋）かいまみすべき格子には几帳なたてそへてあれば見えがたしと申す也

さかし　〔玉〕さやうぞかしなりかうしには木丁そへて侍と申せることなり

このたびはつまどな　（釋）かうしはすでにさしたればこのたびは妻戸なたゝきてあけさせて入るなり心なつけて見るべし

みな人々しづまりねにけり　（評）こゝにて人々の寢しづまれるなたしかにことわりたる也例の委しき書ざまなり

このさうじ口に　（釋）小君涼しき所にねんとするさまにもてなして入たる所のはし近きさうじぐちにふして源氏な入れ奉んとはかる也

たゝみひろげて　〔餘〕古への疊は今のうすべり也云々　（釋）案に此說よろし風吹とほせといひたるははしちかくねたるゆゑな人に聞しめん爲也さて常にねぬ所なれば敷べき物なき故にうすべりの疊なひろげて其上に臥たる也諸注に屏風の事とせられたるはわろし

る。ときこゆ。さかし。されども。とをかしくおぼせど。みつとはしらせじ。いとほしとおぼして。よふくることの心もとなさをのたまふ。このたびはつまどをたゝきている。みな人々しづまりねにけり。このさうじぐちにまろはねたらん。風吹とほせ。とてたゝみひろげてふす。ごだちひんがしのひさしに。いとあまたねたるべし。とはなちつるわらはも。そなたにいりてふしぬれば。とばかりそらねして。火あかきかたに屛風をひろげて。かげほのかなるに。やをらいれ奉る。いかにぞ。をこがましきこともこそ。とおぼすにいとつゝましけれど。みちびくまゝに。もやの几帳のかたびらひきあげて。いとやをらいり給ふとすれど。みなしづまれる夜の御ぞのけはひ。やはらかなるしもいとしるかりけり。女はさこそ。わすれ給ふを。うれしきに思ひなせど。あやしく夢のやうなることの。心にはなるゝをりなき頃にて。「心とけたるいだにねられずなん。「ひるはながめよるはねざめがちなれば。春ならぬ

こだち東のひさしに　（評）空蟬の方に人すくなきよしをかゝんとてまづかくいへる也

戸はなちつる童も　（評）上に妻戸をたゝきているとある時に内より戸をあけたるわらは也上に其よしをばいはざれどもあけたる人は必あるべきを思ひてかくかきとゞめたる筆づかひ例のいとくはしくめでたし　（釋）そなたにとはごだちのねたる東庇也されば此童は女のわらはなるべし

をこがましき事もこそ　（釋）或説に心をおはせたる事にもあらず幼き人をしるべにていかゞと危く思しめせど也といへり

もやの木丁のかたびら　（釋）空蟬の寝たるもやの木丁の帷を引あげてそこより入給ふ也

やはらかなるしも云々

（釋）人皆寐しづまりては物おとのよく聞ゆるものなれば源氏の和らかなる御衣のけはひもいといちじるく聞えたるさま也

あやしく夢のやうなる事の
〔釋〕夢のやうなる事はさきに一度源氏君にあひ參らせたること也この比忘れ給ふやうなるをうれしとは思ひながらさすがに忘れがたく心にはなれず思ひ出らるゝ比にてといふ意也

心とけたるいだにねられず
〔河〕〔餘〕「君こふる涙のかゝる冬の夜はこゝろとけたるいだにねられず拾遺集戀よみ人しらず結句いやはねらるゝとあり　〔釋〕心をゆるべ打とけてうまくねられぬなり

ひるはながめ云々　〔河〕「よるはさめひるはながめにくらされて春はこのめもいとなかりけり　〔餘〕謙德公集に女の歌とて載て有四の句春のこのめとせり　〔釋〕晝は物思ひに雲をながめ夜もまた物思ひにねざめがちなればこの目もいとまなく歎かしきにといふ意を此歌によりてかける也此目に木芽をいひかけたるはさらにもいはず今は夏

このめも。いとなくなげかしきに。碁うちつる君。こよひはこなたに。といまめかしくうちかたらひてねにけり。わかき人は何心なく。いとよくまどろみたるべし。かゝるけはひの。いとかうばしく打にほふに。かほをもたげたるに。ひとへうちかけたる几帳のすきまに。くらけれど。うちみじろぎたるけはひいとしるし。あさましくおぼえて。ともかくも思ひわかれず。やをらおき出て。すゞしなるひとへひとつをきて。すべり出にけり。君は入給ひて。たゞひとりふしたるを心やすくおぼす。ゆかのしもに二人ばかりぞふしたる。きぬをおしやりてより給へるに。ありしけはひよりは。ものゝしくおぼゆれど。おもほしもよらずかし。いぎたなきさまなどぞ。あやしくやうかはりて。やうゝゝ見あらはし給ひて。あさましく心やましけれど。人たがへとたどりて見えんも。をこがましくあやしと思ふべし。ほいの人をたづねよらんも。かばかりのがるゝ心あめれば。かひなくをこにこそおもはめ

の時なれば春ならぬとことわりたるいとめでたし
ひとへ打かけたる木丁の　〔萬〕木丁のかたびら二重なるべきを夏なればひとへとかけり　〔釋〕伴雄云かさねのひとへを一重ぬぎて木丁にかけおきたるなりといへり
うちみじろぎ　〔釋〕しづかに身を動かす形容をいへる詞にて俗にむぐめくといふに近し諸注みななかなひがたし
ひとへひとつをきて　〔新〕いとあつければ肌にはひとへのみきて小袿はもとより衣もみな上におきてふしたれば其ひとへのみにて外をばすべておきて出たる也
すべり出にけり　〔釋〕ひそかにすべりぬけて逃出たる也すべるとは立ずして居ながらはひ出るをいふなり
ゆかのしもに　〔釋〕空蟬のねたる下段の閨の床の下に女房二人ばかりふしたる也其外は皆東の庇に入し

とおぼす。かのをかしかりつるほかげならば。いかゞはせんにおぼしなるも。わろき御心あさゝなめりかし。やう〳〵めさめて。いとおぼえすあさましきに。あきれたるけしきにて。なにの心ふかくいとほしきよういもなし。世中をまだ思ひしらぬほどよりは。ざればみたるかたにて。あゑかにも思ひまどはず。われともしらせじとおもほせど。いかにしてかゝる事ぞ。と後におもひめぐらさんも。わがためにはことにもあらねど。あのつらき人の。あながちによをつゝむも。さすがにいとほしければ。たび〳〵の御かたゝがへにことつけ給ひしさまを。いとよういひなし給ふ。たどらん人は心えつべけれど。まだいとわかきこゝちに。さこそさしすぎたるやうなれど。えしも思ひわかず。にくしとはなけれど。御心とまるべきゆゑもなきこゝちして。なほかのうれたき人のこゝろを。いみじくおぼす。いづこにはひまぎれて。かたくなしと思ひゐたらん。かくしふねき人はありがたき物を。とおもほすにしも。

寐たるなり

あやしくやうかはりて　〔釋〕軒端荻のいぎたなきさまなど空蟬とはさまかはりたる也さてさまなどぞとあるぞもじはやうかはりてといふまでへ係る意とは聞ゆれどさてはその結びなくていかゞなりやうかはれるになど有べくおぼゆもしくは字のおちたるならんか考ふべし

人たがへとたどりて見えんも　〔新〕人たがへと見えんもはぢあるがうへに空蟬にかよふならんと此人にあやしまれんは人のためいとほしとなるべし

ほいの人を　〔釋〕本意の空蟬を尋ねんにもかくまでのがるゝ心あれば尋るかひもなくあはずして却てをこにこそ思はめと也

かのをかしかりつる　〔釋〕碁を打てありし時火かげに見給ひたるかたちならばよしやいかゞはせんとおぼして軒端荻に御心うつるさまなりかれわろき御心あさゝなめりかしと地より評じたるなり

世中をまだ思ひしらぬほどよりは　〔釋〕世中とは男女のなからひをいふ軒端荻は男女のなからひをまだしらぬほどらひよりはざればみたるかたにて源氏君のかくより來給へるをも何事ぞなど案外にはおもひ惑はずと也萬水一露にはや前に人にあひたるやうにおぼえ給ふと也といへるはいみじきひがこと也

世をつゝむも　〔餘〕つゝむはつゝしむといはんがごとし　〔釋〕言のもとはつゝしむと同じけれどつゝむはかくすと云かたなり

たどらん人は　〔釋〕たどらんとはおしあてに推察してさぐり知んといふ意也心得つべけれどゝは空蟬への御心ざしと心得つべけれど也

さこそさし過たるやうなれど　〔釋〕上に世中をまだ思ひしらぬほどよりはざればみたるかたにてとある首尾也しかざればみてさし過たるやうなれどをさなければえしらぬ也

あやにくにまぎれがたう　〔釋〕かくしふれき人はなしとおぼしめさばさても思ひ絶給ふべきをあやにくに思ひ出られ給ふと也帚木卷の初にあやにくに心づくしなる事を云々とある脉にて源氏君の本上なり心をつくべし

人しりたることよりも　〔釋〕なべて世に顯はれ人に知られたる中よりもかやうにひそかに相見るは物のあはれもふかくそふ事と昔の人もいへりされば必相思ひ給へよとの給ふなり昔の人もいひけるとあるには引歌などあるべき所なり考ふべし

つゝむことなきにしもあらねば　〔釋〕世に憚らずかよひ來べき身にしもあらねば我身ながらわが心にもまかせがたしと也

さるべき人々も　〔釋〕人々は伊與介紀守などをさしての給ふなるべし

なほ〳〵しく　〔玉〕花鳥によのつねのなほざりにかたらふ心なるべしとあるぞよろしきすべて此詞は俗言になんでもないといふ意也　〔評〕かくのたまふは軒端荻の御心につかぬ故に今よりとだえおき給はんしたくみをしてのたまふやうに書なせしさま言の外ににほひたり

えきこえさすまじき　〔湖〕消息などもえ申かはすまじきと也

かのぬぎすべしたりと見ゆるうす衣 〔玉〕一本にかく有ぞよろしきぬぎすべしたる事は源氏君はたしかには知給ふまじければと見ゆるといふ詞あるべければ也云々 〔釋〕ぬぎすべしはぬぎすべらかして捨置たる也上にひとへひとつなきてとあるにてらして見るべし

ふとおどろきぬ 〔釋〕驚きてさめたる也

戸をやをらおしあくるに 〔釋〕さきに童にあけさせて小君が入たるつま戸なるべし老たるごだちは東の庇にねたる女房のうちなるべし

さかしがりてとざまへく 〔新〕賢ぶりして也 〔釋〕老女のかしこだてして外の方へあゆみくる也餘滴などに小君を云としたるはひがこと也

いとにくゝて 〔釋〕小君が心に老女のさかしがるをにくゝおぼえてなり

あらず 〔玉〕俗言にいや何事でもないといふ意なり

あやにくにまぎれがたう思ひ出られ給ふ。この人のなに心なく。わかやかなるけはひもあはれなれば。さすがになさけ〳〵しく契りおかせ給ふ。人しりたる事よりも。かやうなるはあはれもそふこと〻なん。むかしの人もいひける。あひ思ひ給へよ。つゝむことなきにしもあらねば。身ながら心にもえまかすまじくなんありける。又さるべき人々もゆるされじかし。とかねてむねいたくなん。わすれでまち給へよ。などなほ〳〵しくかたらひ給ふ。人の思ひ侍らんことのはづかしきになん。え聞えさすまじき。とうらもなくいふ。なべて人にしらせばこそあらめ。このちひさきうへ人などにつたへてきこえん。けしきなくもてなし給へ。などいひおきて。かのぬぎすべしたり。と見ゆるうすぎぬをとりて出給ぬ。こ君ちかくふしたるをおこし給へばうしろめたう思ひつゝねければ。ふとおどろきぬ。戸をやをらおしあくるに。おいたるごだちのこゑにて。あれはたそ。とおどろ〳〵しくとふ。わづらは

曉ちかき月〔萬〕前に夕やみとかけ
る詞の次第面白し
又おはするはたそととふ云々
〔細〕此女のいふ也たそととひてま
た民部のおもと也と自問自答する
也花鳥には小輔のおもとゝあり本
のかはり也〔花〕おもとはお局な
どいふが如し
いまたゞ今立ならび給ひなん
〔釋〕小君が背長のたゞ今のほどに
民部のおもとばかりになりて立並
び給ふべしと云也老女のくちつき
をいとよくうつしかゝれたりとい
ふべし
この戸より〔釋〕小君があけたる戸
口より老ごだちも出てくる也
わびしけれど〔釋〕源氏君也おしか
へさではおしかへして返答もえし
給はぬ也湖月に老女のくるをとゞ
めがたき心也とあるは少したがへ
り
渡殿の口に〔釋〕上にわた殿の戸口
にと有し所也かいそひては引そひ
て也

しくて。まろぞといらふ。夜中にこはなぞありかせ給ふ。とさかしがりて。とざまへく。にくゝて。あらず。こゝもとへ出るぞ。とて君をおし出奉るに。あかつきちかき月。くまなくさしいでゝ。ふと人のかげみえければ。またおはするはたそ。ととふ。みんぶのおもとなめり。けしうはあらぬおもとのたけだちかなといふ。たけたかき人の。つねにわらはるゝをいふなりけり。おい人これをつらねてありきけると思ひて。今たゞいま。たちならび給ひなん。といふ〳〵。われもこの戸よりいでゝく。わびしけれど。えはたおしかへさで。わた殿のくちにかいそひて。かくれたち給へれば。このおもとさしよりて。おもとはこよひはうへにやさふらひ給ひつる。をとゝひよりはらをやみて。いとわりなければ。しもに侍りつるを。人ずくなりとてめしゝかば。よべまうのぼりしかど。なほえたふまじくなん。とうれふ。いらへもきかで。あなはら〳〵。いまきこえむ。とてすぎぬるに。からうじていで給

うへにやさふらひ給ひつる
〔玉〕或抄にうへとは主人のおはします所をさしていふなりといへるよろしく云々次の文にしもに侍つるといへる下と對へて心得べししもは下屋也
いらへもきこえであなはら〳〵
(釋)返事をも聞ずして行過たる也今聞えんとは後に委く語らんといふが如き意也〔新〕はら〳〵は腹いたしといふべきをいたしとまではいひあへぬなり
いよ〳〵おぼしこりぬべし (釋)いよ〳〵といへるは上にこの子もをさなきをいかならんとおぼせど、いひいかにぞをこがましき事もこそとおぼすになどあるに對へていよ〳〵とはいへるなり湖月師說に云々といへるはたがへり
(評)この老ごだちに出あひ給へる一段は例の餘情に書そへたるものにて人たがへの事の儀にあへなく空蟬のつれなきにこり給ふうへにおさまらん事を惜みたる筆づかひ

ふ。なほかゝるありさまは。かろ〴〵しくあやふかりけり。といよ〳〵おぼしこりぬべし」こ君御車のしりにて。二條院におはしましぬ。ありさまのたまひて。をさなかりけり。とあはめ給ひて。かの人の心を。つまはじきをしつゝうらみ給ふ。いとほしうてものもえ聞えず。いとふかうにくみ給ふべかめれば。身もうく思ひはてぬ。などかよそにても。なつかしきいらへばかりはし給ふまじき。いよのすけにおとりける身こそ。など心づきなしとおもひての給ふ。ありつるこうちきを。さすがに御ぞのしたにひきいれて。おほとのごもれり。こ君をおまへにふせて。よろづにうらみかつはかたらひ給ふ。あこはらうたけれど。つらきゆかりにこそ。えおもひはつまじけれ。とまめやかにのたまふを。いとわびしと思ひたり。しばし打やすみ給へど。ねられ給はず。御すゞりいそぎめして。さしはへたる御ふみにはあらで。たゞうがみに。てならひのやうにかきすさび給ふ

うつせみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな。とかき給へるを。ふところにひきいれてもたり。かの人もいかにおもふらん。といとほしけれど。かた〴〵おもほしかへして。御ことづてもなし。かのうすぎぬは。こうちきのいとなつかしき人がにしめるを。身ぢかくならしつゝ見ゐ給へり。こ君かしこにいきたれば。あね君まちつけて。いみじうの給ふ。あさましかりしに。とかくまぎらはしても。人のおもはんことさり所なきに。いとなんわりなき。いとかう心をさなきを。かつはいかにおもほすらん。とてはづかしめ給ふ。ひだりみぎにくるしくおもへど。かの御てならひとりいでたり。さすがにとりて見給ふ。かのもぬけをいかに。いせをのあまのしほなれてや。などおもふもたゞならず。いとよろづにみだれたり。にしの君も。物はづかしきこゝちして。わたり給ひにけり。またしる人もなき事なれば。人しれず打ながめてゐたり。こ君のわたりありくにつけても。むねのみふた

なるべしいと〳〵めでたし

御くるまのしりにて（釋）小君御車のしりに乘て御供をするなり

つまはじきをしつゝ（釋）ふかく恨むる時のさま也つまはじきは爪さきをたわめて彈くことなり

身もうく（新）こは身を耻る語にて歌にうき身といふに同じ

ありつるこうちきを

（評）上にうす衣をとりてとあるをこゝに小袿といひてうすぎぬやがてこうちきなるよしをおもはせさて下にかのうす衣はこうちきの云云とかきあらはされたり心をつくべし

御硯いそぎめして（釋）或抄に早朝未明に也といへるよろしさらではいそぎといふ事用なく聞ゆ

たゝうがみ（釋）紙を疊みてふところに入おきて用ある時つかふをたたうがみといふ今世のはな紙のごとし

うつせみの身をかへてける

（釋）うつせみはこゝにてはたゞ蟬

がれど。御せうそこもなし。あさましと思ひうるかたもなくて。ざれたる心ちに。ものあはれなるべし。つれなき人も。さこそしづむれど。いとあさはかにもあらぬ。御けしきを。ありしながらのわが身ならば。ととりかへす物ならねど。しのびがたければ。この御たゝうがみのかたつかたに。

空蟬のはにおく露のこがくれてしのび〳〵にぬるゝ袖かな

の事なり身をかへてけるとは蟬の蛻けたるを云さるからに空といふことをかろくそへていへるまでなり一首の意は我をいとひてにげ隠れたるはうらめしけれど猶用意ある人品のなつかしきといひて人がらに蟬の蛻けたる殼をいひよせてかの小袿を人の殼とさしたるたくみなりこのもとにといへるは蟬の樹下にて蛻くるになぞらへてかのきぬを脱すべしたる所をいへる也諸注用なき事のみ多くして歌の意をとかれたるもなきはいかにぞや

かた〳〵おもほしかへして　〔釋〕空蟬の思ふ心がつは小君が心などをさま〴〵に憚り給ふをかた〴〵とはいへるなるべし

人がら　〔湖〕人香也うつりがの事也

心をさなきを　〔釋〕おとなしき心なくあさはかに蹀したる事を心をさなくといへる也

ひだりみぎに　〔花〕源氏はこの事故に恨み給ふあね君ははづかしめ給ふ小君よりは右にくるしく思ふ也

御手ならひ　〔釋〕手をならすためにむだがきするをいふ今世にいふとはすこし異也

さすがにとりて見給ふ　〔釋〕小君をはづかしめたるものからさすがにとりて見る也給ふとかけるは地の語ながら小君が心になりていへるにや下にわたり給ひにけりとあるも同じ

いせをのあまの　〔河〕後選「すゞか川伊勢をのあまのすて衣しほなれけりと人や見るらん心は猶人がらのなつかしきかなとあるをみてきならしたる物をなどはつかしく思ふ也云々　〔釋〕しほなれば垢じみよごれたるをいへる也

たゞならず　〔湖〕源氏をおもふ故也　〔釋〕この說のごとしたゞにはあらでさま〴〵に思ひみだるゝ也

わたり給ひにけり　〔釋〕わたり といふ語こなたへ來るがごとくにも聞ゆれど物はづかしき心ちしてとあれば舊注のごとくかへりたるなる

べし

小君のわたりありくに　（釋）源氏の御もとより空蟬の方へ來てありくなり　〔新〕此小君して聞え給ふべしと契りおき給ひしにさもなきをおもふなり

御せうそこもなし　（釋）男女あひたる又のあした消息する事はそのかみのならはしなり

あさましと云々　（釋）御せうそこもなきを我を疎みてならんとてあさましとも心得ずしてさし過たる心に物さびしく思ふと也

ありしながらの云々　〔河〕とりかへす物にもがなや世中をありしながらのわが身とおもはん　（釋）此歌帚木にもありて既にいへりこゝもその意にてもとのまゝの身ならば源氏にしたがひ奉るべき事もあらんをとりかへされぬ昔の思ひ出られてしのびがたきよし也

空蟬のはにおく露の　（釋）この歌全篇伊勢集にありと河海其外の抄どもにいはれたるはひがことなるよし拾遺新釋小櫛等にいはれたるがごとし全くいせ集にも何にもなき歌なりさて初句はうつせみの身をかへてけるとあるをうけていへるのみにてこれもたゞ蟬の事也三句のもじは例のごとくといふ意をふくめて聞くのにてこゝまでは序なり木がくれてはたゞかくれてといふ意なるを蟬の緣に木隱といへるのみなりしのび／＼にぬるゝはわが身のすぐせのくちをしき事を思ひて人しれぬ涙にひそかに袖をぬらすよしなり此歌も諸注解得られたるはなし

（評）小君のわたりありくにつけて空蟬と軒端荻との思ふ心をかたみに書あらはされたるさま心の中に入て見たらんがごとくにていと／＼めでたし上に意を打たる所にてかたちのしづまりたるとさわがしきとをあらはしおきてこゝに至りて其心のけぢめをかき出られたるにつゆばかりも勢ひのはづれたることなきはいとも／＼めづらしき筆つきなりけりさてこゝに歌をもて此卷をとぢめたるははじめにねられ給はぬままにとゆくりなくふと書出たる首尾にてわざとかく歌の末に詞なくて終られけんとおぼえていひしらずとゝのひたり見ん人よく／＼味はひ考ふべし

第四帖 夕顔 評釋

(舊注)これも竪の幷なり以テ歌幷ニ詞ヲ爲ス卷名ト詞にはかの白くさけるをなん夕顔と申侍るとあり歌は「心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへたるゆふがほの花」「よりてこそそれかとも見めたそかれにほの〴〵みつる花の夕がほなどあり

(釋)幷の卷の事は空蟬卷のはじめにいへるがごとししひてかゝはりなづむべからすたゞ帚木卷の末より空蟬卷までの事と同じ此の事なるを事のすぢを分たんために別に事分ちたるものとのみ見るべし且此卷までは帚木卷より一つらにつゞきたる文なることも上にいへるがごとし

(評)此卷はもはら夕顔上の事をかたるをむねとしてさて玉葛君の事をのこしおく伏案を立たり其中に六條御息所の事をはじめてほのめかし出てつひに葵卷榊卷にいたりて其事どもを詳にすべき伏線を挿めりそのよしは上にも下にも委くいへればここには省きつさて又惟光朝臣の事大貳乳母の事など此卷よりはじめてあらはされたりそれも何となく物語の中に挾みておのづからしらるゝやうにかかれたるは例の法にて事をきは〴〵しくせぬ筆づかひなるべし又空蟬の事を所々挿みてあらはしたるは夕顔と同じほどに對へ出たる人なるにかつ雨夜の物語のなごり源氏君のかゝるくま〴〵までものし給ふ事をあへなく絶しめじが爲にとり出られしものなるべし軒端荻はたゞかのもぬけの夜のかたしろばかりなるをなほさておかんがあへなくてとりそへてあらはされたるなりさてつひに夕顔の四十九日のわざはてたる所に伊豫介空蟬をゐて國へ下りゆく事を引合せて過にしもけふわかるゝも二道に云々といふ歌をもて此卷をとぢめられたるは帚木卷より打つゞきたる事の末を結びたるものにていと〳〵心ふかくたくみなる物なり其末にかやうのくだ〳〵しき事は云々といふよりはかの帚木の發端の語をむすびたる物なることそこに委しくいへるがごとし葵上の事藤壺宮の事などにはほのめかせたるは上下の事の脉のおしとほりたるを見せたるのみにてさして論なしされど遠く其線の貫きとほれる事をしたどめおくべし

春田正頼ノ年立ノ説江談抄ノ河原院ノ事ハ共ニ餘釋ニ學タルヲ見ルベシ

○此卷はなにがしの院のへんぐゑの段を主としてかけるものなる故に夕顔の事のみは始より終までいとあやしくゆくりかにめづらかなるさまにとりなされたりされぱはじめにいかなる物のつどへるならんとやうかはりておぼさるゝと書はじめたるより所々に鬼物また狐また變化などの語を挿みまたあやしといふ語を眼目としてあやなされたるなどいとちからありてめでたく聞えたりされば文づらをもそこはかとなくまぎらはしてかの段にかゝる所まではさまぐ\打あはぬさまなるを夕顔上のうせて後右近にかたらせてさることゝ思ひ合さるゝやうに書ほどかれたるいとぐ\めでたしされどあまりにあやしく書かすめられたる故にやなほうちあはぬことゞもゝある事かの惟光がけさうを思ひゆづりたる事がらのきはやかにしられぬ事また春田正頼が難じたる六條御息所の紀年の打あはぬこと鈴木朗が咎めたるずゐじんの顏を見ては忽源氏君としらるべき事又舊注にもいはれたる夕顏の花をのせたるあふぎに歌かきたるは夕顔上のおほどかに物はぢする本上にてはかなひがたきよしの事などすべてたどぐ\しくあざやかならずそれが中にも何がしの院の變化の事は八月十五夜のまたの夜なれば正しく八月十六夜なり然るにかしこのけうとくものおそろしきけしき月夜の事としてはいさゝかあへなく聞ゆべしさるは月の夜はいかばかりあれはてたる所にてかつ雨風の物すごさを添たりとも事がらさばかりはあらぬものなればなりされば猶今すこし引はへて闇のよごろの事とせられたらばといとあたらしくおぼゆるはなほかいなでのひが心にやあらん案にこれは舊注に引れたる江談抄の河原院にて京極御息所を融公の靈のおびやかしたる古物語をしたに思ひてかゝれたるがかの入レ夜月明とあるなどを思はれたるにも有べからんかさらばあながちに作者の思ひおとされたるにもあらざめれど猶事がらのけしきはあかぬこゝちぞするされど今はたかゝる事をあなぐりいでゝいはんはあまりにこちぐ\しきわざなればしひていふべき事にはあらずたゞそのくだりのいみじきをのみめでくつがへるべし

○五條の宿のくだりいとめでたしさて卷首にもい

へりしごとく夕顔上は浮船君に相照し對へたる書ざまなりされば此の五條の宿は東屋卷なる三條の家に對へたるなり東屋卷にいはく「かやうの方たがへ所と思ひてちひさき家まうけたりけり三條わたりにざればみたるがまだつくりさしたる所なればはか〴〵しきしつらひもせでなん有ける云々又云「たびのやどり(三條の家也)はつれ〴〵にて庭の草もいふせきこゝちするにいやしきあづま聲したるものどもばかりのみ出入なぐさめに見るべき前栽の花もなし云々又いはく「ほどもなうあけぬるこゝちするに鳥などはなかでおほぢちかき所におほどれたるこゑしていかにとか聞もしらぬなのりをして打むれてゆくなどぞ聞ゆるかやうの朝ぼらけに見れば物いたゞきたるものゝおにのやうなるぞかしときゝ給ふもかゝるよもぎのまろねにならひ給はぬこゝちにをかしうも有けり云々九月にも有けるを云々けふは十三日なりけり云々とあるなどを引合せておもふべし正しく五條の八月十五夜に三條の九月十三日をむかへたる書ざまなるに正身(サウジミ)を車にかきのせてにはかに出給へるなどもいとよく似たりさて又浮船君の身をなげんとして物にけどられていざなひ出られたるも此卷の何がしの院の變化(ヘングヱ)に對へたる物なり右近といふ女房の名を同じさまに作られたるなどは此すぢを示せんとてわざと構へられたるものに似たり猶かしこにいふを見てしるべし

○へんぐゑのくだりは此卷のむねとある所なればめでたき事いふもさらなれどなほいとやはらびたる文の詞もてたとしへなく物すごくむく〳〵しきさまをあくまでにかゝれたるいといみじともいみじといふべしすべて作り物語はいかさまにも作りなさるべきことなればへんぐゑのさまもいとおどろ〳〵しき物のかたちをあらはしいでまたそのあやしびの結びには觀音の佛力など引出て首尾をととのへ書のがるゝが大かたのならひなるをさらにさることうじたる筆の跡をあらはさずたゞ一ふしものすごきけしきをとりあつめたる夢の中にをかしげなる女のあらはれたる事のみをかゝれたるいはんかたなくめづらしくめでたししかして其事のすぢをいひもてゆく時は皆たゞこなたの心からあら

はれたるさまに書かすめられたるなどもの丶理わりをいとよく思ひさとられけん心しらひ見えて作者のざえのほどかへすぐ丶もいみじく聞えたり大かた今の世にも出くるおやしき物語ども丶その本のすぢをせめていひもてゆけば皆か丶るさまの事なるぞおほかる浮船君のけどられぬるくだりなどは殊にさる心してか丶れたりと見えていみじき事どもいと多かりそこにいふを相照して見るべしさて此夕顔上も浮船君もあまりに大どき過て立たる心なくたゞよはしき人なるからにさるへんぐゑどもにもけどられたるなるべし詞のうへにさる事どもは見えねどもさる心してか丶れたりと見ゆる事どもいと多し心をつけて見るべきなり

六條わたりの御忍びありき　〔細〕六條御息所の事はじめて書出たり帚木巻に忍び〳〵の御かたたがへ所はあまたありぬべけれどと有此語より出たり　〔釋〕細流の御說のごとく帚木巻の脉なるべしさて此御息所の事はこゝにはじめて伏線のはしをあらはしたれど未だ誰ともしられぬさまにかきかすめ次々にも其脉をほのめかしながら猶かくし置て葵巻にいたりて前坊の北方なるよしをほころばしたる筆づかひ妙なりとも妙なるもの也此事は上にもいへり猶下にいふべし

大貳のめのと　〔花〕源氏のめのと皇子の例ならば二人たるべき歟親王のつらならば三人たるべし下の詞にはくゞむ人あまたあるやうなりしかどゝの給へり大貳のさしつぎに左衞門のめのとゝてあり末摘花巻に見えたり

五條わたりなる家　〔釋〕わたり三字餘滴に引る異本によりて加へつ

六條わたりの御しのびありきの頃。うちよりまかで給ふなかやどりに。大貳のめのとのいたくわづらひて。あまになりにける。〔翊 命念のため尼になりたるべし〕とぶらはんとて。五條わたりなる家たづねておはしたり。御車いるべき門はさしたりければ。〔箋 つねは大門をばさしたるべし〕人して惟光めさせて。またせ給ひけるほど。むつかしげなるおほぢのさまを見わたし給へるに。此家のかたはらに。ひがきといふものあたらしうして。かみははじとみ四五けんばかりあげわたして。すだれなどもいとしろうすゞしげなるに。をかしきひたひつきのすきかげ。〔箋 夕顔の家の女ども也簾に見えすく人かげ也〕あまた見えてのぞく。たちさまよふらんしもつかた思ひやるに。あながちにたけたかきこゝちぞする。いかなるものゝつどへるならん。とやうかはりておぼさる。御車もいたうやつし給へり。さきもおはせ給はず。誰とかしらんとうちとけ給ひて。すこしさしのぞき給へれば。かどはしとみのやうなるを。おしあけたる。見いれのほどなく物はかなきすまひを。あはれに「いづこかさしてとおもほしなせば」玉の

惟光　〔新〕大貳のめのとの子なる故に源氏の家令の如くて在しが後には民部大輔といへり

はじとみ　〔新〕蔀は一間を皆ふたぐべく作りたるを擧おくをいふ半蔀は下の方を板してかためて半上の方のみひらきあぐるやうにしたるをいふ此所は宿の前に長屋をたてて半蔀して物みる料としたれば二階めきて高きなるべし故に其內に立てゐる人はたけ高きやうに外より見ゆるなり云々

御車もいたうやつし給へり

〔箋〕網代車也前に御忍びありきの比と有網代車は女などものるものなれば誰ともしらせじとて乘用する也仍て路次にて人に對して禮などもなき也

さきもおはせ給はず　〔新〕三位已上の人は必さきおはする也枕册子に大さき小さきなどいへり　〔湖〕警蹕にて往來の人をとゞめいましむる也これは忍び給ふ故さきをも追せ給はぬ也

うてなもおなじ事なり。きりかけだつ物に。いと青やかなるかづらの。こゝちよげにはひかゝれるに。白き花ぞおのれひとりゑみのまゆひらけたる。をちかた人に物まうす。とひとりごち給ふを。みずゐじんついゐて。かの白くさけるをなん夕がほと申侍る。花の名は人めきて。かうあやしきかきねになんさき侍りける。とまうす。げにいと小家がちにむつかしげなるわたりの。このもかのもあやしう打よろぼひて。むね〳〵しからぬ軒のつまごとに。はひまつはれたるを。くちをしの花のちぎりや。一ふさをりてまゐれ。とのたまへば。このおしあけたる門にいりてをる。さすがにざれたるやり戸ぐちに。きなるすゞしのひとへばかま。ながくきなしたるわらはのをかしげなるいできてうちまねく。しろきあふぎの　いたうこがしたるを。これにおきてまゐらせよ。えだもなさけなげなめる花を。とてとらせたれば。かどあけて惟光の朝臣のいできたるして奉らす。かぎをおきまどはし侍りて。いとふ

かどはしとみのやうなるを
〔釋〕門は蔀のやうなるを押明たりといふ意にやさらば上へつりあげてあくる戸の事なるべし細流にたり戸なるべしとあれどいかゞ有べきこれは狭き家の門は左右に戸の開きがたき故に上へつり上べく作りたるが蔀を上るさまに似たるをいへるなるべしさらば押上とよむべくおぼゆれど下にこのおしあけたる門にとあるを思へば猶開の方にや
みいれのほどなく物はかなき
〔釋〕ほどなくは間なくの意也外より見入たる所の奥ふかゝらぬ意也故にものはかなき也
いづこかさしてと 〔細〕世中はいづこかさして我ならんゆきとまるをぞ宿とさだむる 〔餘〕古今集雜下
玉のうてなも 〔細〕何せんに玉のうてなもやへむぐらはへらん宿にふたりこそねめ 〔餘〕此歌六帖卷六むぐらの部に有て四句はへらんなかにとせり云々 〔釋〕こゝの意は

びんなるわざなりや。もの〻あやめ見給へわくべき人も侍らぬわたりなれど。らうがはしきおほぢにたちおはしまして。とかしこまり申す。ひきいれており給ふ◎これみつがあにのあざり。むこのみかはのかみ。むすめなどわたりつどひたるほどにて。かくおはしましたるよろこびを。またなき事にかしこまる。尼君もおきあがりて。をしげなき身なれど。すてがたく思ひ給へつることは。たゞかくおまへにさぶらひ御覧ぜらる〻ことのかはり侍りなん事を。くちをしう思ひ給へたゆたひしかど。いむことのしるしに。よみがへりてなん。かくわたりおはしますを見給へ侍りぬれば。今なんあみだ佛の御ひかりも。心きよくまたれ侍るべきなど聞えて。よわげになく。日ごろおこたりがたく物せらる〻を。やすからずなげきわたりつるに。かく世をはなる〻さまにものし給へば。いとあはれにくちをしうなん。命ながくてなほくらゐたかくなども見なし給へ。さてこそこ〻のしなのかみにも。さはり

何處かさして我物ならんと思ひなせば此はかなきすまひも玉の臺も同事也といふ意にて本來無東西何處有南北などいふ佛語の義をふくめたりと聞ゆあはれにといふ語に心をつくべし

きりかけだつもの　〔釋〕きりかけは竪の木にきりかけをして横に板を重ねかけて打つけたる物也かりそめに築地のかはりなどに物する也

おのれひとりゑみのまゆひらけたる　〔釋〕夕顔といはんとてまづかく人めきていひ出たる也いとをかし

をちかた人に　〔河〕打わたすをちかた人に物申すわれそのそこに白く咲るはなにの花ぞも　古今集旋頭歌

御隨身　〔湖〕品へさふらひ分際の者也六位までなる也　〔箋〕源氏當官中將也小隨身たるべき也

花の名は人めきて　〔釋〕顔といふにつきて人めきてとはいへる也おのれひとりといへるより緣の詞あぢはふべし

あやしきかきねに　〔評〕此卷は下の變化の段を主としてかける物なる故に上にいかなる物のつどへるならんとやうかはりておぼさるといへるを初にてこゝにあやしきかきねといひ次にあやしう打よろぼひといへるすべてその脉にてあやしといふを眼目の語として疊みかけてつかひたる物也かれ右旁に◎點を物して其しるしとす心をつけてあぢはへ見るべし

むねむねしからぬ　〔玉〕たしかにそれともなきさまにてはかなきをいふ俗言にしかともせぬといふ意也

このおしあけたるかどに　〔細〕前に門は蔀のやうなるをおしあけたるといひしこと也　〔釋〕このはかのといふべきをいへる例の詞也上なるを押上ケたるとしてはこゝの語勢にかなはず何れも開アケ也

ざれたるやり戸口に　〔釋〕かくあやしき所ながらさすがに戸口はしやれて心あるさま也やり戸は今いふ引戸也門よりは内の戸口と聞ゆ

枝もなさけなげなめる花を　〔玉〕夕顔は枝は蔓ツルにておほどればびこりたる物なれば手よりたゞには奉りにくかるべきほどに此扇にすゑて奉れといふ也

かどあけて云々　〔細〕此御隨身ノ花を直に參らすべき事をいかゞと思ふ所へ惟光門をあけて參りたるして奉る也かやうの書ざまえもいはれぬ所あるにや　〔釋〕此説よろし

惟光があにのあざり　〔餘〕釋氏要覽菩提資糧論云阿遮梨夜隋言ニハ正行ト南山抄云能糾スル正弟子ヲ故　〔釋〕阿闍梨は比叡山の僧なるよし末に見えたり　〔評〕惟光が傳をなにとなくあらはされたる例のめでたし上に惟光めさせてといひ出で次に惟光の朝臣の書きたるしてといひこゝに至りて惟光が兄のといへるにてやうやうに惟光は御めのとの子なるよししられたり心をつけて見るべしさて此人は源氏の家令めきたる人にありげなる名をまうけてつけたる也もじも光る君の光るによせたるなるべし

たゆたひしかど　〔釋〕御覽ぜらるゝことのかはらん事をくちをしく思ひて死がたくありしといふ意をたゆたひといへる也

いむことのしるしに　〔釋〕尼になりて戒を授りたる功德に甦生して再び源氏君にあひ奉れば今は快く身まかるべしといふ意也いむことは

なく生れ給はめ。この世にすこしうらみのこるは。わろきわざとなんきくなど。涙ぐみてのたまふ。かたほなるをだに。めのとなどやうの思ふべき人は。あさましうまほにみなすものを。ましていとおもたゝしう。なづさひつかうまつりけん。身もいたはしく。かたじけなくおもほゆべかめれば。すゞろに涙がちなり。子どもはいと見ぐるしと思ひて。そむきぬる世のさりがたきやうに。みづからひそみ御らんぜられ給ふ。とつきじろひめくはす。君はいとあはれとおもほして。いはけなかりけるほどに。思ふべき人々の。うちすてて物し給ひにけるなごり。はぐゝむ人あまたあるやうなりしかど。したしく思ひむつぶるすぢは。またなくなんおもほえし。人となりて後は。かぎりあれば。朝夕にしもえみ奉らず。心のまゝにとぶらひまうづる事はなけれど。猶ひさしうたいめんせぬ時は。心ぼそくおぼゆるを。「さらぬわかれはなくもがなとなんなど。こまやかにかたらひ給ひて。おしのごひ給へる御袖のにほ

○いみことにて五戒の事也

かく世をはなるゝさまに〔釋〕尼になりたるは世を遁れ離るゝ也

なほ位たかく〔細〕吾昇をなどをきはめ給ふべき行末をも見給へと也

こゝの品のかみにも〔細〕九品上品上生なり今こそあみだ佛の御光も心清くといひし返答に奇特の詞なり

うらみのこるは〔湖〕一念にても臨終に思ひのこす事ありて此世に執着のとゞまるは後世の障となる心也〔玉〕かやうのうらみは俗にざんれんなるといふ意なり

つきじろひめくはす〔玉〕詞にはいはで肩膝などを衝て目くはしをする也と或抄にいへるがことし〔拾〕史記項羽傳胸離騷目成

思ふべき人々の打すてゝ云々〔細〕三歳にて更衣にはなれ六歳にて祖母に離れ給ふ也

はぐゝむ人あまたあるやうなりしかど

〔細〕左衛門の乳母におくるゝこと末摘花卷に見えたり

かぎりあれば　〔餘〕此詞は所せき御身などいへると同くてやことなき人の御身の自由ならで心やすく出させ給ふことをまかせ給はぬをいへる也云々

さらぬわかれは　〔河〕世中にさらぬわかれのなくもがな千代もといのる人の子のため　いせ物語

げに世におもへば　〔釋〕世にといふ詞なき本はおちたる也さて本はげに思へば世におしなべたらぬ人のと有しを亂れてうつしひがめたるか例の轉倒の語としても猶少し穩ならず　〔玉〕かくまでよにすぐれ給へる源氏君の御乳母となれることはなみ／＼ならぬ宿業ぞといふなり

打しほたれけり　〔評〕尼君の歎きたるを上に子どもの笑ひしをこゝにいたりて打しほたれといへる抑揚あひかなひていとめでたし

しそくめして　〔餘〕紙燭也紙束とも

ひも。いと所せきまでかをりみちたるに。げに世におもへば。おしなべたらぬ人の御すぐせぞかし。と尼君をもどかしと見つる子どもゝ。みな打しほたれけり。ずほうなど。また／＼はじむべき事などおきての給はせて。出給ふとて◎これみつにしそくめして。ありつるあふぎ御覽ずれば。もてならしたるうつりが。いとしみふかうなつかしうて。をかしうすさびかきたり。

心あてにそれかとぞみるしら露のひかりそへたる花の夕顏。そこはかとなくかきまぎらはしたるも。あてはかにゆゑづきたれば。いと思ひのほかにをかしうおぼえ給ふ。惟光に。このにしなる家にはなに人のすむぞ。とひきゝたりや。との給へば。れいのうるさき御心とは思へども。さはえ申さで。この五六日こゝに侍れど。ばうざの事をおもひ給へあつかひ侍るほどに。となりのことはえきゝ侍らずなど。はしたなげに聞ゆれば。にくしとこそ思ひたれな。されどこの扇のたづぬべきゆゑありて見ゆるを。なほこのわたり

いふ和名抄云紙燭雑題有二紙燭詩一
紙燭俗韻之管玖　〔明〕物語など
し給ふうちに日もくれにければ
なり
うつり香　〔新〕うつりがといふもた
き物のうつり香なるべし云々
〔評〕さきに扇は御覧ずべきを惟光
出來り案内して入るにさわがれて
止給ひし故今取出て見給ふ也さて
初は尼君を訪給ふかた主なりしを
こゝに至りて夕顔のかた主となり
尼君の方客となりたる法也いとめ
でたし
心あてに云々　〔玉〕源氏君を夕顔の
花にたとへて今夕露に色も光もそ
ひていとめでたく見ゆる夕顔の花
はなみ〳〵の人とは見えず心あて
に源氏君かと見奉りぬと也三四の
句は白露の夕顔の花の光をそへた
る也露の光にはあらず云々
〔釋〕末句は古寫本によりぬ花の顔
を心あてに云々といふ語路なれば
也
にくしとこそ思ひたれな　〔箋〕折節

の心しれらんものをめしてとへ。との給へば。入てこのやどもりなるをのこ
をよびてとひきく。やうめいのすけなりける人の家になん侍りける。男は
ゐなかにまかりて。女なんわかく事このみて。はらからなど宮づかへ人にて
きかよふ。と申す。くはしき事はしも人のえしり侍らぬにやあらんと聞ゆ。
さらばその宮づかへ人なゝり。したりがほに物なれていへるかな。〔と〕めざ
ましかるべききはにやあらんとおぼせど。さして聞えかゝれる心の。にくか
らずすぐしがたきぞ。れいの此かたにはおもからぬ御心なめりかし。御たゝ
うがみに。いたうあらぬさまにかきかへ給ひて。
よりてこそそれかともみめたそかれにほの〴〵見つる夕がほの花。ありつ
る御ずゐじんしてつかはす。まだみぬ御さまなりけれど。いとしるく思ひ
あてられ給へる御そばめを見すぐさで。さしおどろかしけるを。御いらへ給
はでほどへければ。なまはしたなきに。かくわざとめかしければ。あまへて

つきなき好色と思ふかと也
やうめいのすけなりける人の
〔拾〕名くろ心を思ふに只名のみを
あげてまことの介のごとく國務を
つかさどる事もなく權官のごとく
祿を得ることもなき故なるべし
(釋)楊名の義此說のごとくなるべ
しゐなかにまかりてとあれば任國
へ下りたるやうにも聞ゆれど猶さ
にはあらず異事にて田舍へはゆき
しなるべし又案になりけるとある
は過去の辭なればさきに楊給なり
し人のまことの介になりて國へ下
りたるにもあらんか考ふべし諸說
は別にいへり　〔玉〕これより惟光
が源氏君に申す語にてきかよふと
いふまではやどもりが惟光にかた
りしさまにてと申すはやどもりが
かやうにまうせるといふ也
女なんわかく事このみて
(釋)事このむはざれたる事を好む
意にやさて案に上にこの宿もりな
る男をよびてとあるを舊說に楊名
介が家の宿もりと見られたれども

いかに聞えんなどいひしろふべかめれど。めざましと思ひてずゐじんは參りぬ。御さきのまつほのかにて。いとしのびて出給ふ。はじとみはおろしてけり。ひま〳〵より見ゆる火のひかり。「螢よりけにほのかにあはれなり◎御心ざしの所には。木だち前栽など。なべてのところに似ず。いとのどかに心にくゝすみなし給へり。うちとけぬ御ありさまなどの。けしきことなるに。ありつるかきねおもほし出らるべくもあらずかし。つとめてすこしねすごし給ひて。日さしいづるほどに出給ふ。」朝けの御すがたは。げに人のめで聞えんも。ことわりなる御さまなりけり◎けふもこのしとみの前わたりし給ふ。きしかたもすぎ給ひけんわたりなれど。たゞはかなき一ふしに御心とゞまりて。いかなる人のすみかならんとは。ゆきゝに御めとまり給ひけり□これみつ日ごろありてまゐれり。わづらひ侍る人。なほよわげに侍れば。とかく見給へあつかひてなん。など聞えて。ちかくまゐりよりて聞ゆ。おほせられし

もしくは惟光が家の宿りにはあらじかとぞ思ふさるは入てこのといふも隣の家の人をいふやうに聞えぬうへにこゝに事好みてとあるもおのがしうの事をいふ語とは聞えれば也猶考ふべし

たゝうがみに　〔花〕たゝう紙に歌かくこと後撰十九巻の詞にあり

よりてこそ云々　(釋)近くよりてこそたしかに其人とも見るべけれたそかれ時のくらきにほの〴〵見つる夕顔をよそめに定めてそれかとはいかにとの心也細流に一本に初句なりてこそとある本もありとしるされたりそれも又あしからず古寫本此末句を夕がほの花とせりこれはいづれにてもあるべし諸抄の論はべちにいふべしたそかれは誰そかれはとたどるゝなどの夕ぐれ時をいふ

まだみぬ御さまなりけれど　〔新〕いまだ見奉らねどもやがて源としるかりければえたゞに過かねて也

あまへていかに聞えんなど云々　(釋)この所少しまさらはし案に御いらへも給はでほど經るがはしたなきに又かくわざとがましく御歌を遣し給はゞ女どものあまへあなづりていかに聞えんなど隨身に相談するやうにいひさわがんかと隨身は心外におもひながら行たりといふ意にやあらんさてあれどのどはばの誤かもしくはなどの下にこその係辭ありてあれと結びたるをとゝ受たるを寫しおとせるかいづれにしても此儘にてはいかゞ也舊説に御返事にあまへて又歌を參らせんと言しるふ也といひ又參りぬと有をいそぎかへる也といへるなどは共にひがこと也

螢よりけに　〔餘〕古今戀二友則「夕されば螢よりけにもゆれどもひかりみねばや人のつれなき」〔新〕けには萬葉に勝異などの字を書りこの文には螢より少しきかたに打かへしてとる也

御心ざしの所には云々　〔拾〕六條御息所はいつ比いかにして思ひそめ給へるよし右に見えずかやうに打まじへたる文章也御心ざしの所といふにて淺からず思ひ給へる事見えたり　〔玉〕拾遺に此詞にてあさからず思ひ給へること見えたりといへるはいかゞこれはかの御息所の御方へと心ざしておはしますにその道の間にて大貳の乳母又夕がほなどの所の事をいへる故に御心ざしの所とはいへるにこそあれ　(釋)拾遺の説小褂に辨へられたるがごとし但し文章に心をとめられたるはよし上にもいへることくこは誰ともなく書もてゆく中に御息所の事と後に知るべくほのめかしたる法なるがこゝに至りて貴き女とはしらるゝさまにかゝれたり心を付べし

うちとけぬ御ありさまの　(釋)御やす所の本性をはじめて顯はしたり此心終まで貫きてつゆもかはることなししたどめおくべし諸抄の説はひがこと也

あさけの御すがた　〔孟〕わがせこが旦開容（アサケノスガタ）よく見ずてけふのあひだをこひくらすかも　〔拾〕萬葉の歌引歌のごとし第十二の最初に有又同卷に「朝がらすはやくなゝきそ我せこがあさけのすがたみればかなしも又朝戸出のすがた夜戸出の姿とも有

たゞはかなき一ふしに　〔潮〕かの夕顔の歌を參らせしより御目とまるとなり

後なん。となりの事しりて侍るものよびて。とはせ侍りしかど。はか〴〵しくもまうし侍らず。いとしのびて。さつきのころほひよりものし給ふ人なんあるべけれど。その人とは。さらに家のうちの人にだにしらせず。となん申す。時々中垣のかいまみし侍るに。げにわかき女どものすきかげみえ侍り。しびらだつ物かごとばかりひきかけて。かしづく人侍るなめり。きのふ夕日のなごりなくさし入て侍しに。ふみかくとてゐて侍し人の。かほこそいとよく侍しか。物思へるけはひして。ある人々もしのびて打なくさまなどなんしるく見え侍る。ときこゆ。君うちゑみ給ひて。しらばやとおもほしたり。おぼえこそおもかるべき御身のほどなれど。御よはひのほど。人のなびきめで聞えたるさまなど思ふには。すき給はざらんも。なさけなくさう〴〵しかるべしかし。人のうけひかぬほどにてだに。なほさりぬべきあたりのことは。このましうおぼゆるものを。と思ひをり。もし見給へうることもや侍

これみつひごろありて
〔細〕惟光は毎日さふらふべきを病者ゆゑの懈怠なり
げにわかき女どもの　〔玉〕げにはかしづく人侍るめりといふへかゝれり上にさ月のころほひより物し給ふ人なん有といへるをうけてげにとはいへる也云々
しびらだつ物かごとばかり
〔新〕こは裙也裙は令義解に枚帯也といへば裳の腰に又うはもとてひらめなる絹をまとふをこゝは裳を略してその枚帯のみ引かけて在也故に託言ばかり引かけてとはいふ也催馬楽に上ものすそぬれ下ものすそぬれなどいへり　〔細〕裳など引かけたるは人をうやまふさまにて同僚計あるとは見えぬさまなり云々
きのふ夕日のなごりなく
〔細〕西むきなる所と見えたり南むきの西かげたるべし　〔釋〕案に上にこの西なる家とあれば惟光が家の西隣と聞えたりされば女の奥ふ

かく居たるは隣家の西より夕日のさし入たる光にて東隣よりあきらかに見たるさまなるべし

しろく見え侍る（釋）これは見え侍りしとありしを寫し誤れるなるべし光しかいはでは えあらぬ 所なり

おぼえこそおもかるべき（釋）こその辭一本になきは脱たるなり此こそはなれにて結びたるなどゝうけてつゞけたる也

かの下が下と（評）かのとは雨夜の品定の時馬頭がいひしをさしていへりさてこれを引出られたるはかの雨夜物語の脈をあらはして一つゞきなる文を示せたる法なること上下にいへるがごとし

さてかのうつせみの
（釋）上空蟬卷にうつせみの身をかへてける又うつせみの羽におく露のなどありし歌又かのもぬけの衣の事などによりて作者のその女の事とさして名けたるなり心得おくべし

る。とはかなきついでつくり出て せうそこなどつかはしたりき。かきなれたる手して。くちとく返事などし侍りき。いとくちをしうはあらぬわか人どもなん侍るめる。と聞ゆれば。猶いひよれ。たづねしらではさう〴〵しかりなん。とのたまふ。かのしもがしもと。人の思ひおとしゝすまひなれど。その中にも。思ひのほかにくちをしからぬを見つけたらんは。とめづらしうおもほすなりけり[二]さてかのうつせみのあさましうつれなきを。この世の人にはたがひておぼすに。おいらかならましかば。心ぐるしきあやまちにてもやみぬべきを。いとねたく まけてやみなんを心にかゝらぬをりなし◎かやうのなみ〳〵まではおもほしかゝらざりつるを。ありし雨夜のしなさだめの後。いぶかしくおもほしなるしな〴〵のあるに。いとゞくまなくなりぬる御こゝろなめりかし◎うらもなくまち聞えがほなるかたつかたの人を。あはれとおぼさぬにしもあらねど。つれなくてきゝゐたらんことの。はづかしけれ

ば。まづこなたの心見はてゝとおぼすほどに。伊與のすけのぼりぬ。まづいそぎまゐれり。ふなみちのしわざとて。すこしくろみやつれたるたびすがた。いとふつゝかに心づきなし。されど人もいやしからぬすぢに。かたちなどねびたれどきよげにて。たゞならずけしきよしづきてなどぞありける。國の物がたりなど申すに。ゆげたはいくつとはまほしくおぼせど。あいなくまばゆくて。御こゝろのうちにおぼし出ることもさま〴〵なり。ものまめやかなるおとなをかく思ふも。げにをこがましううしろめたきわざなりや。げにこれぞなのめならぬかたはなるべかりける。と馬のかみのいさめおぼしいでゝいとほしきに。つれなき心はねたけれど。人のためはあはれとおぼしなさる。むすめをばさるべき人にあづけて。北の方をばゐてくだりぬべし。ときゝ給ふに。ひとかたならず心あわたゝしくて。今一たびはえあるまじきことにや。とこ君をかたらひ給へど。人のこゝろをあはせたらんことにてだに。

おいらかならましかば云々　(釋)おいらかはじんじやうの意にて上に見えたる詞也さて空蟬のじんじやうに從ひ奉らばかの一夜の事は心ぐるしきあやまちなしたりと思ひても止ぬべきをといふ意なり

まけてやみなんを　〔玉〕これはまけてやみなんとゝ有けんをやを一つおとしとたゞに誤れるなるべし本のまゝにては語とゝのはず　(釋)負てやむとは空蟬のつれなきと源氏君の思ひ給ふとの心くらべに負てなり心の上に御字ありしなるべし

かやうのなみ〳〵までは　(評)こゝにいたりて品定の照應のすぢたしかにあらはされたり心をつくべし

いふかしくおもほしなる　〔湖〕中の品下の品にもゆかしくおぼしめす所いできて彌好色の心くまなくなりしと也

くまなく　(釋)いたらぬ所もなく心

なかけてもとめ給ふなと云
伊與介のぼりぬ〔新〕まだ任の中に斗帳などの事にて上り參りしなるべし此下に空蟬をゐて下ることあり
ゆげたはいくつと〔湖〕伊與の湯桁の事空蟬卷に出たり
〔玉〕これはたゞ伊與國の事どもをとはんとおぼすよし也必湯げたの事にはあらずさてまばゆくおぼすは空蟬の事ある故なり云々
物まめやかなるおとなた
〔玉〕實體なる年おびたる人なといふこと也云々わかゝ風流なる人などならばこそまばゆくも思ふべきことなれ伊與介がやうなる翁なかくまばゆくはづかしく思ふはなこがましきことゝみづからおぼす也云々
げにこれぞなのめならぬかたはなるべかりけると云々
(釋)此段諸注說得られたりともおぼえず今案ふになのめならぬといふ語は一轉して「ナミ大體デハナ

かろらかにえしもまぎれ給ふまじきを。ましてにげなきことにおもひて。いまさらにみぐるしかるべし。と思ひはなれたり。さすがにたえておもほしわすれなんことも。いといふかひなく。うかるべきことに思ひて。さるべきをりをりの御いらへなど。なつかしくきこえつゝ。なげのふでづかひにつけたることのは。あやしうらうたげに。めとまるべきふしくはへなどして。あはれとはおぼしぬべき人のけはひなれば。つれなくねたき物の。わすれがたきにおぼす。いま一かたは。ぬしつよくなるとも。かはらず打とけぬべく見えしさまなるをたのみて。とかくきゝ給へど。御心もうごかずぞありける□
秋にもなりぬ。人やりならず心づくしに。おもほしみだるゝこと共ありて。おほい殿にはたえまおきつゝ。うらめしうのみ思ひ聞え給へり□六條わたりにも。とけがたかりし御けしきを。おもむけきこえ給ひて後。ひきかへしなのめならむは。いとほしかし。されどよそなりし御心まどひのやうに。あ

ク「ヒトヽホッテハナク」などいふ意に用(ツカ)ひたるが多ければ細流になべてならぬ也とある意に近かるべしさて馬頭がいさめは花鳥のごとく帝木になにがしがいやしきいさめにてすきたわめらん女には心おかせ給へあやまちしてみん人のためかたくなゝる名をもたてつべき物なりといましむとある段の事也これぞとは伊與介をさしたるにて妻の密事(ミソカゴト)をもしらであるはなべてならぬ片羽なるべかりけりと源氏君のおもほすにつけてかの馬頭があやまちして見ん人のため云々といひしをおぼし出て伊與介をいとほしとおぼすにつけては空蟬のつれなき心はれたけれど此伊與介がためにはあはれなる志也とおぼしなさるといふ意也　〔拾〕なのめならぬは大形ならぬ意也なべてならぬとはすこしかはれり

（釋）この拾遺の説よろしかるべし

ましてにげなきことに思ひて　（釋）にげなきは源氏君の御分際と受領の妻の分際と似合しからぬ意也人の妻たる故の事にはあらず或抄こゝより空蟬の心を云り

今更にみぐるしかるべしと　（釋）見ぐるしは一たびかけはなれてつれなくもてなしたるものを今更に従はんが見ぐるしき也

なげの筆づかひに　〔拾〕ないがしろは輕慢の意あればかなはず物をなげやる心なればなほざりの心なるべし六帖「あはれをばなげのことばといひながらおもはぬ人にかくる物かは　古今春下そせい法師「いざけふは春の山べにまじりなんくれなばなげの花のかげかは　兼盛集「ことのはをなげなる物と思ひなばなにかは人のつらくしもあらん　曾丹集「あればありとなげらのよそに見し人の秋風ふけばそれぞ戀しき　〔餘〕朗云なげはなきげにて輕慢の意にもなりなほざりの意にもなる也

ぬしつよくなるとも　（釋）此語諸抄に説なしいかゞ案にぬしは夫の事にてぬしつよくなるは夫のしかと定まるといふ意なるべし右京大夫集にぬしつよくさだまるべしなど聞しころ云々と有さてたとひ夫ありともかはらず源氏君に打とけ奉るべく見えしさまなるをたのみてといふ意なり

とかくきこえ給へど　（釋）上にさるべき人にあづけてといへる事也舊注に少將に嫁するさた也とあるはこゝにては過たるべし

秋にもなりぬ　〔湖〕いとゞ物思ひのそふ時なり

心づくしに　〔細〕藤壺の御事空蟬の事かたがた心づくし也　〔餘〕木の間よりもりくる月の影みれば心づくしの秋はきにけり　古今秋上　よみ人しらず

六條わたりにも　（釋）なほ誰ともあらはさぬ筆づかひに心をつくべし御息所と注するはやむ事を得ざるのみなり

とけがたかりし　（釋）上に打とけぬ御ありさまなどのけしきこゝとなるにとありし事也續て心得べし

おもむけ　（釋）面向(オモムケ)の意にて背向(ソムキ)たる人をこしらへてこなたへ向じめ従ふる意也

されどよそなりし御心まどひのやうに　〔玉〕上にいとほしかしといへるも册子地よりいへる也さてそれをうけていとほしき事なれども源氏君

はさしもおぼさぬはいかなること
にかと也云々
あながちなる事はなきも
(釋)まへつかた我物とせずよそな
りし時御息所に御心をまどはし給
ひしやうにあながちにおぼしめさ
ぬはいかなる事にかあらんと見え
たりと草子地より評していへるな
り
女はいと物を餘りなるまで云々
(評)いまだ誰ともあらはされども
やう／＼にしふれき心ざまを説も
て出られたろいとあやしくめづら
し
御よはひのほどもにげなく
(釋)源氏君十七御息所廿四也さて
この御息所の紀年に論あり別にい
ふべし
ねふたげなるけしきに　[玉]けしき
にといへるに心をつくべしよもす
がら女の御心のとけざりし故にと
けてもね給はぬけしきを中將など
にもしらさんためにことさらにね
ふたげなるけしきをし給ふ也いた

ながちなることはなきも。いかなることにかと見えたり。女はいと物をあまりなるまでおぼしめたる御こゝろざまにて。よはひのほどもにげなく。人のもりきかんに。いとゞかくつらき御よがれのねざめ／＼。おぼしをるゝこと。いとさま／＼なり。霧のいとふかきあした。いたくそゝのかされ給ひて。ねふたげなるけしきに。うちなげきつゝ出給ふを。中將のおもと。みかうしひとまあげて。見奉りおくり給へとおぼしく。御几帳ひきやりたれば。御ぐしもたげて見出し給へり。前栽の色々みだれたるを。過がてにやすらひ給へるさま。げにたぐひなし。らうのかたへおはするに。中將の君も御ともにまゐる。しをんいろのをりにあひたるうすものゝも。あざやかにひきゆひたるこしつき。たをやかになまめきたり。みかへり給ひて。すみのまのこうらんに。しばしひきすゑ給へり。うちとけたらぬもてなし。かみのさがりば。めざましくもと見給ふ。

さく花にうつるてふ名はつゝめどもをらですぎうきけさの朝顏。いかゞすべき。とて手をとらへ給へれば。いとなれてとく。

朝霧のはれまもまたぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる。とおほやけごとにぞ聞えなす。をかしげなるさふらひわらはの。すがたこのましうことさらめきたる。さしぬきのすそ露けゞに。花のなかにまじりて。あさがほ折てまゐるほどなど。ゑにかゝまほしげなり。おほかたにうち見奉る人だに。こころしめ奉らぬはなし。ものゝなさけしらぬ山がつも。花のかげにはなほやすらはまほしきにや。この御光りをみ奉るあたりは。ほど〳〵につけて。わがかなしと思ふむすめを。つかうまつらせばやとねがひ。もしはくちをしからずと思ふ。いもうとなどもたる人は。いやしきにても。猶この御あたりにさふらはせん。と思ひよらぬはなかりけり。ましてさりぬべきついでの御ことのはも。なつかしき御けしきを見奉る人の。すこし物の心をおもひしる

くそゝのかされ給ひてもれふたきよしにもてなし給ふ也名殘なゝしみてといへる注はかなはずさて中将がふるまひは此源氏君の御けしきないとほしく思ひ聞えて也

しをん色のなりにあひたる
〔河〕普通しをん色の裳と心得るは非也紫苑色のきぬに薄物の裳也
〔細〕なりに あひたると句を切てよむべし 河海説可レ然表すはう裏萠黄也 (釋)なりにあひたるとはなりふし秋にて紫苑のなりにあへるをいふ前栽にも咲たるべし

打とけたらぬもてなし
(釋)主の御前なれば殊に打とけぬ也

めざましくもと (釋)打とけずしてきとしたるありさまをめざましと見給ふ意也髮のさがりばは髮の下りたる端のみだれずしてある意にていへるなるべし

さく花に云々 (釋)さく花は主の女君朝がほは中将にたとへたりさてさく花にうつるといふ名はつゝま

しけれど、いひて女君に外へ心の移るといふことはつゝみかくせどもとそへていへりさてならでは打過がたきけさの朝顔といひて朝顔に中將の今朝の顔のうつくしきをそへたる也さていかゞすべきは歌よりつゞけて朝顔をいかゞすべきといふ意也

あさぎりの云々　(釋)この朝霧のはるゝ間も待たず出給ふけしきにては女君に心をとめ給はぬと見奉るといへるにてそはなさけなしといふ意をふくめたり花は上の歌によりて女君をたとへたること論なし

おほやけごとにぞ
(釋)私のけさうをばおきて主君の御事にいひなす故におほやけ事とはいへるなり

さふらひわらは　(明)源氏のめしつれられたる童也花鳥に女と云非也云々細同　(釋)男といふ説よし小櫛も男をとられたり女にさふらひといはんもいかゞ指貫も男の物也

は。いかゞはおろかに思ひ聞えん。明暮うちとけてしもおはせぬを。心もとなき事に思ふべかめり。まことや。かの惟光があづかりのかいまみは。いとよくあない見とりてまうす。その人とはさらにえ思ひより侍らず。人にいみじくかくれしのぶるけしきになん見え侍るを。つれ〴〵なるまゝに。みなみのはじとみあるながやにわたりきつゝ。車の音すれば。わかきもの共のぞきなどすべかめるに。このしうとおぼしきも。はひわたる時侍るべかめり。かたちなんほのかなれど。いとらうたげに侍る。ひと日さきおひてわたる車の侍りしを。のぞきて。わらはべのいそぎきて。右近の君こそまづ物見給へ。中將殿こそこれよりわたり給ひぬれといへば。又よろしきおとな出きて。あなかまと。てかく物から。いかでさはしるぞ。いでみん。とてはひわたる。うちはしだつ物をみちにてなんかよひ侍る。いそぎくるものは。きぬのすそをものにひきかけて。よろぼひたふれて。はしよりもおちぬべければ。いで

このかづらきの神こそ。さかしうしおきたれ。とむつかりて。物のぞきの心もさめぬめり。君は御なほしすがたにて。御隨身どもゝありし。なにがしくれがしとかぞへしは。頭中將のずゐじんそのことねりわらはをなん。しるしにいひ侍りし。など聞ゆれば。たしかにその車をぞ見まし。との給ひて。もしかのあはれにわすれざりし人にやとおもほしよるも。いとしらまほしげなる御けしきを見て。わたくしのけさうもいとよくしおきて。あないものこる所なく見給へおきながら。たゞ我どちとしらせて。ものなどいふわかきおもとの侍るを。空おぼれしてなんはかられまかりありく。いとよくかくしたりと思ひて。ちひさき子どもなどの侍るが。ことあやまちしつべきも。いひまぎらはして。また人なきさまを。しひてつくり侍る。などかたりてわらふ。尼君のとぶらひにものせんついでに。かいまみせさせよとのたまひけり。かりにても。やどれるすまひのほどをおもふに。これこそかの人のさだめあなづ

ことさらめきたるとは殊更につくりたてたるやうなる姿といふ意なり

朝がほをりて参るほど
(釋)童の朝顔を折て参るはならで過うきとある歌を聞ひがめたるさまにとりなしたる餘光の文也

大かたに打見奉る人だに云々
(釋)こゝよりは中將に戯れ給ひし事のちなみに源氏君のめでたきを世の人の感じたることを語る例の文なり

花のかげには猶やすらはまほしきにや　[河]古今序たきゝおへる山がつの花のかげにやすめるがごとし
(釋)此詞を打かへして猶といへるいとめでたしたとへたる意は明らけし

あけくれ打とけてしも
[玉]これはこの中將などが然思ふべきものぞと册子地よりいふなり
(釋)案にましてさりぬべきついでのといふより中將がうへにあてゝこゝの文を結びたるなり

惟光があづかりの　〔玉〕夕顔の宿の事は惟光に仰せつけてまかせおき給へる故にかくいふ也俗言に惟光がうけとりのといふに同じ

ながやに　〔孟〕橋の寺の中屋にわがゐねしうなゐはなりはわが髪まさる　〔餘〕萬葉には末句髪上つらんかとあり云々　〔拾〕萬葉第十六に長屋とかけり中屋は誤れり

ほのかなれど　〔釋〕ほのかに見たるなれどゝいふ意なり

いそぎきて　〔釋〕長屋より來て也

右近の君こそまづ物見給へ　〔新〕今昔物語に安部晴明が父に物いふにちゝこそといひかけたるなどむかし人をあがめていふ語にて宇治拾遺に地藏ばさちを地藏こそ大和物語に西こそと西隣の人をいへりすべてこそてふ辭は物の有が中よりとりわきて是こそなどいふなればおのづから人をたふとむ語ともせるにや　〔湖師〕こそとは人をよびかくるとていふ詞なり下の詞にも北殿こそとてあり　〔釋〕右近は夕顔の乳母のむすめなりまづは一番にといふに近く他の女房よりも右近にまづ來て物を見よといふ意也さるは頭中將の事には右近ぞ第一にあづかるべければ也心を付べし此物語は末をよみたる後に立かへりて考れはかゝる事共の用意まで知らるゝ事也心得べし

てかくものから　〔釋〕手をふりて制するさまの物を掻がごとき故に手かくとはいへる也

うちはしだつ物を　〔湖師〕かりに打わたしたる廊下也

いそぎくるものは　急ぎ物見んとてくる者はといふ意にて右近の外の女房どものさまなり諸抄に右近と見られたるはわろし小櫛の說もこゝにはかなはず

かづらきの神こそ　〔新〕此橋は吻蛆にあしくしたりといふをおもしろく書たりかづらきのくめぢの石橋は一夜の間にかけんと神の誓ひ給ひしをほどなく夜明てわたしはてずてふ諺の有をかの中務は歌にもよみたり此事金峯山の緣起にありといへど緣起は皆僞言なれば引は中々に愚なるわざ也只諺として有べし　〔釋〕打橋よりおちたるまけじだましひをいへるさまに戲れて女どもの物見るさまをいとよく摸しかゝれたり

なにがしくれがしと　〔釋〕名など書べき所なるをさいはぬは此物語の例也

頭中將の　〔釋〕こゝに初て頭中將といへり心をつくべし

小舍人童　〔河〕小舍人は童の惣名也

たしかに其車をぞ見まし　〔細〕それとたしかに見とゞくべき物をと也　〔玉〕ほかの散なん後ぞさかましといへると同じ格の詞也おほくの本にぞもじなきは落せる也拾遺に疑ひてましの下にをの字落たるかといへるはよき心づき也されど見ましをとても猶よろしからず一本にぞもじあるにていと明らか也

もしかのあはれに忘れざりし人にや　〔細〕雨夜の物語の時頭中將のわすれがたく申されし女かと源の推し給ふ也
わたくしのけさうも　〔湖〕惟光もわかき人のあるにいひよりてそれにかこつけて案内をよく見たるよしを申出る也　〔新〕此ながらは次のはか
られまかりあるくといふへかゝる辭也云々　〔釋〕源氏の御懸想のみならず惟光のおのがけさうをもしてといへる意也わたくしのといへるは
源氏君に奉公する外なればといふ意にていへる也
たゞ我どちとしらせて　〔孟〕わがどちはわれどし也わかきおもとは夕顏也是は女房どものわがどうれいの樣に人にしらせて物などいふなりそ
れをこなたにはよくしりたれどわざとしらぬよしに空おぼれしてまかりありくと惟光がかたり申すなり　〔釋〕はかられまかりありくは謀ら
れたるさまにして行通ふといふ意也
ことあやまちもしつべきも　〔湖〕童などの何ごゝろなく夕顏に主あへしらひの詞をつかひさうなるをはたのおもとなどがいひまぎらはしてみ
なわが同輩にて又外に主はなきやうにしなす也　〔釋〕此說よろし但しはたのおもとなどがといへるはいさゝあらんこれは惟光がものいひよ
りたる女などなるべし
これこそかの人のさだめあなづりし云々　〔釋〕品定をとり出られたる脉也かの人とは馬頭など也
その中に思ひの外に云々　〔湖師〕帚木にさびしくあばれたらんむぐらのかどに思ひの外にらうたげならん人のとぢられゐたらんこそかぎりな
くめづらしくはおぼえめといひしをおぼしあはする也
たばかりまどひありきつゝ　〔釋〕源氏君の夕顏にあひ給はん事を謀りていたつきありく意也
このほどの事くだ〳〵しければ　〔評〕前後の事のさまを思ふに源氏君を此宿におはしそめさせんやうをつぶさにかゝんは極めてむつかしき事
なるうへにいたくわづらはしかるべければ此詞にこめて約め省きたる筆づかひさらにいとめでたし例のといへるにて前後に此法ある事を示
したる也心をつくべし餘滴に六條御息所藤壺などすべて通ひそめ給へることをみなもらしてしるさゞればこゝにも例のとは書たる也といへ
りさることも也さて女をさしてといふより下はかよひ給ふ人を源氏君ともしらせず女のうへをも誰とも問給はずして互に疑ひ給へるを始とし
てやう〳〵に變化の段におひよせいたる端をおこされたりよく〳〵心得おくべし
おりたち　〔釋〕車にめすべきを下立てありき給ふ也辭のおりたちと見たる說はわろし下にわが馬をば奉りてとあるを思ふべし
けさう人の　〔玉〕人にけさうする者はいかにも我身を物々しく見することなるにかく步行にてものげなきさまを見られんはからきことゝたは
ふれて申す也
夕がほのしるべせし隨身　〔玉補〕前の夕顏の歌の所とあはせ見るにいたくしらせじとし給ふこのあだりのさまにては此隨身をめしつれ給ふ事
いといふかし此隨身を見れば忽源氏君とはしらるべき事なり　〔釋〕此說はことわり也さま〴〵に助けて考へみれども解べきよしなし作者于

慮の一失とやいふべき
あかつきの道　〔餘〕清正集「みじか夜の殘りすくなくふけゆけばかれてものうき曉の道　〔釋〕これは類例也
そこはかとなくまどはしつゝ
〔釋〕つきしたひて伺ふ夕顔がたの人をまどはしてしらせ給はぬ也
かゝるすぢはまめ人の
〔新〕戀には實人の亂るゝ事すらあるを源氏はいと若うおはすれどよくしづめおはせしにと也
けさのほどひるまのへだても
〔新〕けさかへりて夕べはおはすべきそのひるの間のほどだにおぼつかなくおぼす也
思ひさまし給ふに　〔新〕心にしひて思ひさましてこゝろみ給ふことをまづいふ也
あさましくやはらかに　〔玉〕あさましくとはやはらかにおほどきたることの甚しきをいへる詞也やはらかにおほどきたるをさしていふにはあらず

りしものしなならめ。そのなかにおもひのほかにをかしきこともあらば。などおもほすなりけり。惟光いさゝかのことも。御心にたがはじと思ふに。おのれもくまなきすき心にて。いみじくたばかりまどひありきつゝ。しひておはしまさせそめてけり。このほどの事くだ〳〵しければ。れいのもらしつ

◎女をさしてその人とたづねいで給はねば。われも名のりをし給はで。いとわりなうやつれ給ひつゝ。例ならずおりたちありき給ふは。おろかにはおぼされぬなるべしとみれば。わが馬をば奉りて。御ともにはしりありく。けさう人のいと物げなきあしもとを。見つけられて侍らん時。からくもあるべきかなどわぶれど。人にしらせ給はぬまゝに。かの夕がほのしるべせしずゐじんばかり。さてはかほむげにしるまじきわらはひとりばかりぞゐておはしける。もし思ひよるけしきもやとて。となりに中やどりをだにし給はず。女もいとあやしう心えぬこゝちのみして。御つかひに人をそへ。あかつきの

世をまだしらぬにもあらず
（釋）世は男女の道をさしていへり
ひたぶるに若びたる物から男せぬ
女とも見えぬよし也
やんごとなきにはあるまじ
（釋）まじの下にきをなどの辭脫た
るなるべし少しいかゞに聞ゆ
返々おぼす　（湖）前にもさまで心の
とまるべきさまにもあらずとある
故かへすがへすといふ也
さまをかへかほをもほの見せ給はず
（湖）貌をつゝみておはせしにや
（巴抄）昔は覆面して人にあひたる
と也　（玉）かくまでわりなく忍び
かへし給ふことはいやしき小家に
通ひ給ふ事をふかくつゝみ給へば
也
むかし有けん物のへんぐゑめきて
（細）三輪の明神の本緣にてよく叶
へり　（釋）河海を初として諸抄み
な三輪の故事を引給へり准據をい
はゞさもあるべき事なれど只さや
うの事をひろくさしていへりとの
み見てあるべし　さて　こゝは　物の

道を(源ノ跡給フ所也)うかゞはせ。御ありか(在所)見せんとたづぬれど。そこはかとなく(ドコトイフコトナシニ)まどはし(△ウカヾフ人ヲ」)つゝ(ナガラ)。さすがにあはれに。見ではえあるまじく(アハズシテハキラレヌヤウニ)。この人の(夕顔ガ△源ノ)御心にかゝりたれば。びんなく(フツガフニ)かろぐ\しき(イロ)ことゝも。おもほしかへしわびつゝ(ツラカリナガラ)。いとしばしば(タビタビ)おはします(△夕顔ノ宿へ」)。かゝるすぢは(好色ノスヂ也)。まめ(實)人のみだるゝ(△心ノ)をりもあるを。いと(△源ハ」)めやすく(ミグルシカラズ)しづめ(△心ヲ」)給ひて。人のとがめ(咎)聞ゆべきふるまひ(行状)は。し給はざりつるを(△コレマデ」)。◎◎◎◎あやしきまで(フシギア)。けさ(（甲）今朝)のほどひるま(晝間)のへだて(アヒダ)もおぼつかなく(マチドホニ)など（乙）。思ひわづらはれ給へば。かつは(ヒトツニハ)いと物ぐるほしく(狂)。さまで(ソレホドマデ)心とゞむ(留)べき。こと(事)のさま(様)にもあらず。といみじく思ひさまし給ふに。人(夕顔)の氣はひ(アンバイ)いとあさましく(キモノツブレタホド)やはらか(柔和)におほどき(アドケナク)て。ものふかくおもき(重)かたはおくれ(後)て。ひたぶる(一向)にわかび(若)たるものから。世をまだしらぬにもあらず。いとやんごとなき(タットキ人)にはあるまじ。いづくに(コヽラニ)いとかうしも(コノヤウニマデ)とまる心ぞ。とかへすがへすおぼす。いとことさらめきて(ワザトガマシウ)。御さうぞく(裝束)をも。やつれたる(フケイキナ)かり(狩)の御ぞ(衣)を奉り。さまをかへかほ(顔)をもほのみ(チツトモ)

變化とつゞけてよむべし物とはすべて目に見えぬおに神の類をさしていふ語にて萬葉集の借字にはやがて鬼字をモノと訓たり物怪化物などいふ物も同じく大物主といふ神の御名もさる物の主たる意と聞ゆもろこしにも史記などに物字を變化の事にいへる所あり

(評)こゝにはじめて變化といふ事を説出られたり此脉下の何がしの院の變化の段まで引とほりて玉を貫たる緒のごときこゝちすいたづらに見過すべからずかれ伏線のあらはれたる所々に變化第幾段の脉と注して示しつさて又顔だに知れぬ人をかよはせてあひ逢んことはいとあるまじき事ながらなるをいとよく書まぎらはしてさもありげにしろされたる作りぬしのいたつきを思ふべしこれ皆事をあやしくして後の變化をあらはさんための結構なりと知るべし

たればかりにかはあらん 〔湖〕誰ほどの位の人ならんと也

せ給はず。夜ふかきほどに人をしづめて。出入などし給へば。むかしありけん。もの丶へんぐゑめきて。うたて思ひなげかるれど。人の御けはひはた。手さぐりにもしるきわざなりければ。たればかりにかはあらん。猶このすきもの丶しいでつるわざなめり。とたいふをうたがひながら。せめてつれなくしらずがほにて。かけて思ひよらぬさまに。たゆまずあざれありければ。いかなることにかとこ丶ろえがたく。女がたもあやしうやうたがひたる。物おもひをなんしける。君もかくうらなくたゆめて。はひかくれなば。いづくをはかりとかわれもたづねん。かりそめのかくれがとはたのみゆめれば。いづかたにもうつろひゆかん日を。いつともしらじとおぼすに。おひまどはして。なのめにおもひなしつべくは。たゞかばかりのすさびにても。すぎぬべきことを。さらにさてすぐしてんとおぼされず。ひとめをおぼしてへだておき給ふよなよななどは。いとしのびがたく。くるしきまでおもほえ給へば。猶たれと

たいふ（釋）惟光時に五位なるべし

うたがひながら（釋）此ながらの詞は下のいかなる事にかといふへ係る意なるを其間に惟光がありさまを挾みていへる例の法也甲乙の點のごとし

やうたがひたる（釋）よのつねのけさうとは事がらの違ひたるにつきて物思ひするをいふ

うらなくたゆめて〔祕〕〔細〕打向ひてはさらにそむくべきやうには見えざれども自然ふといづくへも行てはと思ひ給ふ也たゆめては油斷させて也

はひかくれなば（釋）はひはひそかにものするをいふ詞なり

いづくなはかりとか〔新〕はかりは許量也物の度量より出たる辭なり〔餘〕後撰秋下源わたす「あかゝらば見るべき物をかりがねのいづこばかりに鳴てゆくらん

おひまどはして〔拾〕おひは跡をおひたづぬる也まどはしは尋ねまど

なくて二條院にむかへてん。もし聞えありて。びんなかるべきことなりとも。さるべきにこそは。わが心ながら。いとかく人にしむことはなきを。いかなる契にかはありけんなどおもはしよる。いざいと心やすき所にてのどかに聞えんなどかたらひ給へば。なほあやしうかくのたまへど。よづかぬ御もてなしなれば。ものおそろしくこそあれ。といとわかびていへば。げにとほゝゑまれ給ひて。げにいづれかきつねならんな。たゞはかられ給へかし。となつかしげにの給へば。女もいみじうなびきて。さもありぬべう思ひたり。よになくかたはならん事なりとも。ひたぶるにしたがふ心は。いとあはれげなる人と見給ふに。なほかの頭中將のとこなつうたがはしく。かたりし心ざままづ思ひ出られ給へど。しのぶるやうこそは。とあながちにもとひはて給はず。けしきばみて。ふとそむきかくるべき心ざまなどはなければ。かれぐにとだえおかんをりこそは。さやうに思ひかはることもあらめ心ながらもすこし

ふ也
なのめに思ひなしつべくは
〔湖〕たとひゆくへなくなりたりとも大かたにおぼされぬべくはとなり
へだておき給ふ　〔釋〕へだては體言なるべしとだえをおくといふに同じ
さるべきにこそは
〔玉〕或抄に宿業にてこそあらめ也といへりこれも然るべき宿縁なるべければ便なかるべき事なりともよしやいかゞはせんといふ意をこめたる也
いとかく人にしむことはなきを
〔釋〕人にしむとは深く思ひの染意也我御心ながら考へ見給ふにかやうに人に思ひしむことはなきにいかなる前世の宿縁にや此夕顔にはいたく思ひしみ給ふとおぼすよしなり
いざ　〔釋〕これより源氏君の詞也いざはさそひたつる語也
よづかぬ御もてなしなれば

はうつろふことあらんこそ。あはれなるべけれとさへおぼしけり◎八月十五夜くまなき月かげ。ひまおほかるいた屋のこりなくもりきて。見ならひ給はぬすまひのさまもめづらしきに。あかつきちかくなりにけるなるべし。となりの家々あやしきしづのをの聲に。めさまして。あはれ　いとさむしや。ことしこそなりはひにもたのむところすくなく。ゐなかのかよひも思ひかけねば。いと心ぼそけれ。北殿こそきゝ給ふやなどいひかはすも聞ゆ。いとあはれなるおのがじゝのいとなみに。おき出てそゝめきさわぐもほどなきを。女いとはづかしく思ひたり。えんだちけしきばまん人は。きえもいりぬべきすまひのさまなめりかし。されどのどかに。つらきもうきもかたはらいたきことも。思ひいれたるさまならで。わがもてなしありさまは。いとあてはかにこめかしくて。またなくらうがはしきとなりのようゐなさを。いかなる事ともきゝしりたるさまならねば。なかなかはぢかゞやかんよりは。つみゆるさ

〔湖〕よのつれならぬ也ゆくへもしらせ給はず顔をも見せ給はぬをいふ也　〔釋〕よのつれのさまに似つかぬ也さてこゝはかくの給へどなほあやしうにづかぬとつゞく意也

わかびていへば　〔釋〕物をそろしといへるがあどなく若びたる也

いづれか狐ならんな云々　〔釋〕かたみに名のりし給はねばいづれか人をはかるきつねならんといふ意に戯れてのたまふ也たゞはかられ給へとは我いふまゝに謀られて共にゆくべき所へ出たち給へとの意也きつねならんなのなはいひおさふるかたり辭なり

さもありぬべう　〔湖〕源ののたまふまゝにしてあらんと也

よになくかたはなる事なりとも　〔玉補〕夕顔の心ざまをいふ也　〔釋〕たとひ世に又なくかたはなる事なりともそれをもいとはずひたぶるに男に順ふ夕顔の心はいとあはれげなる人と見給ふにといふ意也

頭中將のとこ夏　〔釋〕帚木の品定に中將のかたられしうちはらふ袖も露けきとこなつにとよみたる女にやとうたがはしく思ひ出られ給ふなり

しのぶるやうこそはと　〔釋〕身上をつゝみてしのぶるには子細あらんとてあながちにもとひたゞし給はぬ也

ふとそむきかくるべき　〔釋〕身上を問ずしてさておきたりともけしきばみてにげかくれなどする心ざまなどはなければと也

心ながらも云々　〔湖師〕源の心ながらも此人を置てわきへすこしにても心のうつる事あらんは哀なる事にてあらんとまで思ひ給ふなり

ひまおほかるいた屋　〔拾〕君なくてあれたるやどのいたまより月のもるにも袖はぬれけり　六帖

曉ちかくなりにけるなるべし　〔評〕此一句下の事どもをいひおこすべきくさはひなるが身にしみて聞えたり

なりはひにも　〔新〕日本紀に田家をなりどころ萬葉に業云々と書てなりをしまされとあるは農業をせよといふ事也　〔餘〕萬葉十八長歌萬調まつるつかさとつくりたるその奈理波比を云々　〔釋〕なりはひを諸注共に農業とかかれたるは本の意也されどこゝは轉りたる末の意にてたゞ家業といふほどの事也次に田舍のかよひもとあるを思ふに小商人のうへと聞ゆればなりはひも商賈のわざなるべし

ゐなかのかよひも　〔釋〕京より田舍へゆきて商ひするをいふ伊勢物語にゐなかわたらひといへり

北殿こそきゝ給や　〔釋〕北隣の人を呼かけて壁ごしに物語するさまなり案にきゝ給へやとありしを寫しひがめたるにや湖月本には給やとふもじを略きて書たり考べし

えんだちけしきばまん人は　〔細〕夕顔の天然大やうなる樣をいふなりさかしだちたる人ならば此けはひを源の聞給ふをばかたはらいたく思ひてきえも入べき物をと也

つらきもうきも云々　〔釋〕或抄に云これは今のとなりのありさまを云にはあらず全體夕顔の性をいふ也云々といへり然るべし

中々はらかゝやかんよりは
(釋)隣の物音をはぢてかゝやかしく思はん人よりは却てつみなく見ゆとなり大どかなる本上をいへる也

ごほ〳〵となる神よりも
(孟)「天のはらふみとゞろかしなる神も思ふ中をばさくるものかは
蜻蛉日記にも空くらがり松風の音たかくて神ごほ〳〵となると有

からうすの音 (餘)和名抄親尙兵切韻云碓和名賀良宇須云々
(釋)本居翁云柄碓の意也韓碓にはあらずといはれたりさもやあらん
(評)このわたり小家がちなる所のさまをいとよくうつしかゝれたる中に源氏のなにのひゞきともしらせ給はぬよしをかゝれたるは貴人のさまをあらはしたるにていと心きゝたるもの也

しろたへの衣うつ (細)北斗星前横ニ旅雁ニ南樓月下擣ニ寒衣ニ (餘)これは朗詠集に見えて劉元叔が詩なり (釋)白栲は白き栲の事にて

れてぞ見えける。ごほ〳〵となる神よりもおどろ〳〵しく。ふみとゞろかすからうすのおともまくらがみとおぼゆ。あなみゝかしがましとこれにぞおぼさるゝ。なにのひゞきとも聞いれ給はず。いとあやしうめざましきおとなひとのみ聞給ふ。くだ〳〵しきことのみおほかり。しろたへの衣うつきぬたのおとも。かすかにこなたかなたきゝわたされ。空とぶかりのこゑ。とりあつめてしのびがたきことおほかり。はしちかきおまし所なりければ。やり戸をひきあけ給ひて。もろともに見出し給ふ。ほどなき庭にざれたるくれ竹。前栽の露は。なほかゝる所もおなじごときらめきたり。むしのこゑ〴〵みだりがはしく。かべの中のきり〴〵すだに。まどほに聞ならひ給へる御みゝに。さしあてたるやうになきみだるゝを。なか〳〵さまかへておぼさるゝも。御こゝろざしひとつのあさからぬに。よろづのつみゆるさるゝなめりかし。しろきあはせ。うす色のなよゝかなるをかさねてはなやかならぬすがた。い

とらうたげにあゑかなるこゝちして。そことゝりたてゝ。すぐれたることもなけれど。ほそやかにたを〳〵として。ものうちいひたるけはひ。あな心ぐるしとたゞいとらうたくみゆ。こゝろばみたるかたをすこしそへたらば。と見給ひながら。なほうちとけてみまほしくおぼさるれば。いざたゞ此わたりちかき所に。こゝろやすくてあかさん。かくてのみはいとくるしかりけり。との給へば。いかでかにはかならん。といとおいらかにいひてゐたり。この世のみならぬちぎりなどまでたのめ給ふに。うちとくる心ばへなど。あやしくやうかはりて。よなれたる人ともおぼえねば。人のおもはん所もえはゞかり給はで。右近をめし出て。ずゐじんをめさせ給ひて。御車引いれさせ給ふ。このある人々も。かゝる御心ざしのおろかならぬを見しれば。おぼめかしながらたのみをかけ聞えたり。あけがたもちかうなりにけり。とりの聲などはきこえでみたけさうじにやあらん。たゞおきなびたるこゑにぬか

下賤の者の衣にせし也故にことさらにかくいへる也

ほどなき庭にざれたるくれ竹　〔釋〕ほどなきは間のなき狹き意也ざれたる吳竹はおもふきあるさまなるをいふ也。舊注に引れたるにはくれ竹のとのもじあるありもとはしか有しなるべし

かべの中のきり〴〵す　〔花〕詩七月篇八月在レ宇九月在レ戸十月蟋蟀入二我床下一　〔玉〕壁の中になくは屋の内なれば間近きことなるにそれだに間遠に聞ならひ給へるは殿の廣くてかべもやゝまどほき故也然るに此やどは狹き故に庭になく虫どもの聲も耳にさしあてゝ鳴やうに間近くおぼす也

さまかへておぼさるゝも　〔湖師〕珍らかにおもしろくおぼす也　〔細〕志の切なる故也

白きあはせうす色のなよゝかなるを　〔花〕白きあはせのきぬにうす色のうはざを着たるべし　〔細〕紫のうすき色なり

あな心ぐるしと　(釋)物いひたるけしきの餘りはかなげなる故にきく人のきのどくげにおぼゆるさまを心ぐるしとはいへる也

心ばみたる、〔玉〕俗に氣のあるといふ意と聞ゆ

此世のみならぬ契り　(釋)此世のみならず未來までの契をかはして

夕顔にたのませ給ふ也たのめはセタノマ令レ憑の意なり下の彌勒を引出ん結構なりとしるべし

右近をめしいでゝ　(評)上に右近の君こそまづ物見給へとのあれてここに右近をめしいでゝとあるいとくすしき書ざまといふべしかくて此女の夕顔の乳母の子なるよしは遙に下に見えたり心を付て見るべし

このある人々も云々　(釋)このある人々は夕顔の女房どもなりかく源氏君の御心ざしのおろかならぬを見しりておぼつかなきものから夕顔の身上によきことなるべしとおもひてたのみをかけてよろこぶさ

づくぞ聞ゆる。たちゐのけはひたへがたげにおこなふ。いとあはれに。あしたの露にことならぬ世を。なにをむさぼる身のいのりにか。と聞給ふに。なもたうらいのだうしとぞをがむなる。かれきゝ給へ。この世とのみはおもはざりけり。とあはれがり給ひて。

うばそくがおこなふ道をしるべにてこん世もふかきちぎりたがふな。長生殿のふるきためしはゆゝしくて。はねをかはさんとはひきかへて。みろくの世をぞかね給ふ。ゆくさきの御たのめいとこちたし。

さきのよの契しらるゝ身のうさに行末かねてたのみがたさよ。かやうのすぢなども。さるはこゝろもとなかめり。いざよふ月に。ゆくりなくあくがれんことを。女も思ひやすらひとかくのたまふほどに。にはかに雲がくれて明ゆく空いとをかし。はしたなきほどにならぬさきに。とれいのいそぎ出給ひて。かろらかにうちのせ給へれば。右近ぞのりける。そのわたりちかきなに

まなり
あけがたもちかう　(釋)上に曉ちかくなりにけるなるべしとありし首尾也
鳥の聲などは聞えで　〔玉〕はもじなき本またてもじを清てよむといへる皆わろし下にたゞおきなびたる聲にぬかづくぞ聞ゆるといへるにて鳥の聲は聞えざることしるきをや
みたけさうじ　〔河〕みたけは金峯山なり云々　〔湖〕やまとの金峯山に千日精進してまゐる事也其おこなひする人にやあらんと也　〔細〕枕草子に哀なる物よき男のわかきみたけしやうじんしたる定りたる人〳〵したるもあはぬよな〳〵へだつるをばくるしきことにこそ思ふべかめるをことの外にきびしく〳〵へだてなしてひとりゐてうち行ひたる曉のぬかのほどいみじくあはれなり
たゞおきなびたる聲に云々　(釋)翁めきたる聲にて行法しぬかづく音の聞ゆるさまなりさる故に立居のけはひたへがたげなるなり行法に禮拜の度ありて立ては居〳〵する事あるなり
あしたの露に　(釋)朝露のはかなきに世の常なきをたとふるは佛家にいひならへる事なり
なもたうらいの導師　〔河〕金剛藏王は過去釋迦現在觀音當來彌勒なり彌勒の出世の時地にしくべき金を守り給ふ神なり仍てみたけ精進に彌勒を禮するか彌勒は釋迦の附屬をうけて一生補處の菩薩とぞ第一減劫のはじめに下生し給ひて成佛して龍華之樹下にて三會の曉に說法給ふ故に當來導師といふなり　〔玉〕此禮する聲にてみたけさうじぞと聞知給ふなりと云注はひがことなり此名を唱るを聞て來世を祈ることを知給へるにこそあれ　(釋)當來は未來といふに同じ導師はみちびく師なり彌勒佛の事なり
かれ聞給へこの世とのみは　(釋)當來の導師といふを聞給へこの世のみとは執行者も思はざりけり來世はかならず有べきなればその來世までかはらぬ契をたがへ給ふなといはんとてあはれがり給ふなり上にこの世ならぬ契までたのめ給ふにとといへる脉なり
うばそくが云々　〔河〕うばそくは俗ながら佛弟子に入る人なり四部弟子の一なり涅槃經云善男善女受三歸依是則名爲優婆塞　(釋)うばそくはすなはち行法する翁の事なりそのうばそくが行ふ道をしるべにて來世ある事を知りてその來世までもふかき夫婦の緣をたがへ給ふなと云意なりかくとかざればしるべにてといへる意詳ならず諸抄おろそかなり
長生殿のふるきためしは　〔河〕七月七日長生殿夜半無人私語時在天願作比翼鳥在地願爲連理枝長恨歌　〔湖師〕玄宗と楊貴妃の契は末とげずなりぬればゆゝしくてといへりはねをかはさんとはひきかへてとはかのひよくの鳥といへるにはひきたがへてなり
みろくの世をそかね給ふ云々　〔河〕從釋尊入滅至慈尊出世隔五十七倶低六十百千歲云々　彌勒下生經には將來久遠劫於此國界成佛云々
(釋)彌勒出世の時までかねて契り給ふとなり故にゆくさきの御たのめいと言痛しといへるなりこちたしは言の多き意なり
さきのよの云々　〔新〕前世の因緣たなければ現在かくのごとし今生如此なれば未來も賴む所なしと今の身のうさをかへりみてよめり

（釋）うきはうかれたゞよふ身のう
さなるべし
かやうのすぢなども云々
〔玉〕かやうのすぢとは歌よむ事を
いへり心もとなきは未熟なるよし
なりさてかくいへるは實に此歌の
心もとなきにはあらず例の紫式部
がひげなり諸抄此意を得ずひがこ
となり
いさよふ月に　〔玉〕入がたちかけれ
どもいまだいらでしばしあるほど
の月をいふ出んとしてしばし出ざ
るをもいふ同じ意なりさもじ清言
なりさて女は思ひやすらひ一本に
女もとあるぞまされるいさよふ月
にといへれば女もやすらふといふ
べければなり　（釋）いさよふは猶
やすらふといはんがごとき意なり
さてやすらひとあるひは誤にても
とはやすらふと有しなるべしさら
では語とゝのはず
にはかに雲隱れて　〔巴〕佛滅をいふ
惡相なり　〔拾〕物にとらるべき前
表めきてかけるにや　（釋）案にこ

がしの院におはしましつきて。あづかりめしいづる程。あれたる門のしのぶ草しげりて。見あげられたる。たとしへなくこぐらし。きりもふかく露けきに。すだれをさへあげ給へれば。御袖もいたうぬれにけり。まだかやうなることをならはざりつるを。心づくしなる事にもありけるかな。

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだしらぬしのゝめの道。ならひ給へりや。との給ふ。女はぢらひて。

山のはの心もしらでゆく月はうはのそらにてかげやたえなん。こゝろぼそくとて。ものおそろしうすごげに思ひたれば。かのさしつどへるすまひのこゝろならひならん。とをかしうおぼす。御車いれさせて。にしのたいにおましなどよそふほど。こうらんに御車ひきかけて立給へり。右近えんなるこゝちして。きしかたのことなども。人しれず思ひ出けり。あづかりいみじくけいめいしてありくけしきに。この御有さましりはてぬ。ほの〴〵と物見

こはたゞけしきのみにて右の說のごとき意まではあらざるべし

なにがしの院　〔河〕河原院融六條坊門萬里小路坊門南萬里小路東從院左大臣融公舊宅也又號六條院後宇多院御領也　〔釋〕准據をいはゞ右のごとくならめどすべて名をかくしてたゞなにがしの院といへればたゞ夕顏の宿ちかきひとつの院と見てあるべし源氏君の御別莊めきたる所なり

あれたる門のしのぶ草しげりて　〔釋〕あれたる院のありさまをいとよくうつしかゝれたり語の脉は黏のごとき意なりこぐらしは木の枝のたれてくらき意なり　〔評〕前々より引もてきたれる變化の脉つひに此院に係りてものすごきけしきをまづあらはしたり變化第二の脉なり

きりもふかく露けきに　〔評〕この以下は餘光にかゝれたりけしきいとしめやかなり　〔湖〕道すがらのさま思ふべし

まだかやうなる事を　〔抄〕まだかやうなる事をも身にはならはぬをさてもく心づくしなることにもありけるかなといふ詞より歌へつゞけていにしへもかく人のまどふ道かといへるなり　さて夕顏の上はかやうの心づくしなる道になれ給ひたるかとのたまふを女のはぢらひたりといふにや

いにしへも云々　〔新〕むかし物語に女をぬすみ出などしてかゝる心ぐるしき事多きをふくみたるなり　〔釋〕いにしへの人も戀の道にはかくのごとくにやまどひありきけん我はまだかゝるしのゝめごろの道はしらずとの意なりさて歌よりつゞけてそこにはならひ給へりやいかにと問かけ給ふ故に女はぢらひたるなり

ならひ給へりや　〔新〕夕顏の樣世をしらぬにはあらぬにかくしのびたるすまひにて在からはかゝるめにもあひけんかしとおぼすよりとひ給ふなれば女ははぢたるなり

山のはの云々　〔玉〕初二句は源氏君のいかなる心にていづこへゐてゆき給ふことゝもしらでといふ意のたとへ月は我身のたとへなり細流に山の端は月をかくすべき所とはしらでとある其意はなし　〔新〕行末の心もしらでかく隨ひゆく身はおほぞらにしてはぶれやうせんと此院の物恐ろしきにつけても思ふなり終にうせなん前つさがをかく催すなり　〔釋〕新釋のごとくつひにうせなん事をほのめかしたるなり下句さやうに聞ゆさて上の行すゑかれてたのみがたさよとある所の詮に此歌ものはかなきさま早世の前表なり歌の風體よくく思ふべしと有こゝにもかくあるをみればげにさる事をふくめてよまれたるなるべし

ものおそろしうすごげに　〔湖〕この院の體を夕顏の思ふ心なり　〔評〕この語變化第三の脉なり

かのさしつどひたるすまひの　〔細〕せばき所にすみつけたるならひと思ひ給ふなり　〔釋〕すまひは夕顏の宿をさせり

にしのたいに云々立給へり　〔釋〕西の方なる對の屋に御座所とりつくらふうち勾欄に車の轅をひきかけて車の中に立てまち給ふさまなりこの御有樣のえんなるを見て頭中將の事など右近が思ひ出けりとおしていへるなり

ゆるほどに。おり給ひぬめり。かりそめなれどきよげにしつらひたり。御ともに人もさふらはざりけり。ふびんなるわざかなとて。むつましきしもげいしにて。殿にもつかうまつるものなりければ。参りよりて。さるべき人めすべきにやなどまうさすれど。ことさらに人くまじきかくれがもとめ、たるなり。さらに心よりほかにもらすな。とくちがためさせ給ふ。御かゆなどいそぎまゐらせたれど。とりつぐ御まかなひうちあはず。まだしらぬことなる御たびねに。「おきなが川と契り給ふより外のことなし。日たくるほどにおき給ひて。かうし手づからあげ給ふ。いといたくあれて。人めもなく。はるぐ\と見わたされて。こだちいとうとましうものふりたり。けぢかき草木などは。ことに見所なく。みな「秋の野らにて。池もみくさにうづもれたれば。いとけうとげ〈に〉なり〈にける所かな〉べちなふのかたにぞ。ざうしなどして。人すむべかめれど。こなたははなれたり。けうとくもなりにける

けいめい　〔玉〕河海に經營とある是なりえをめといふは三位をさんみ陰陽をおんみやうといふ類なり云々

この御ありさましりはてぬ　〔釋〕この院のあづかりがいたく敬ひて事ども經營するありさまを見てたしかに源氏君なりと右近が知はてたるなり

御ともに人もさふらはざりけり　〔評〕上に人にしらせ給はぬまゝにかの夕がほのしるべせし隨身ばかり云々とありし首尾なりこゝに二たびいはせたるは此院にても人ずくなき故をいひ出て物すごきさまをいふべきしたくみなり味はふべし

下げいし　〔河〕諸大夫なり此院のあづかりが事なり

御まかなひ打あはず　〔湖〕はいぜんなどの人なり　〔玉〕うちあふはものゝとゝのほりそろひたる事也

おきなが川と　〔河〕萬葉「にほ鳥のおきなが川はたえぬとも君にかた

らふ事つきめやは（釋）息長川の事拾遺に委し近江國坂田郡にある川なり

いといたくあれて云々（評）院中のけしきをあらはしたり變化第四の脉（釋）はるばるとは前栽の廣きさまなり木だち云々はそは内より見たるけしきなり上なるは門前のさまなり委しといふべし

ことに見所なく（釋）ことにとある語いとめでたし

秋の野らにて（孟）里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

けうとく（河）氣疎（孟）人げうとげなるなり

所かな（玉）これは下に源氏君のゝたまへる詞よりまがひて寫し誤れる所あるべし其故は同じ語のつたなく重れるうへにこゝは地の詞なればかななどいふ言あるべき所にあらざればなりされぱもとはいとけうとげにあれたりなどぞありけん

ところかな。さりともおになども。われをば見ゆるしてんとのたまふ。かほはなほかくし給へれど。女のいとつらしと思へれば。げにかばかりにてへだてあらんも。ことのさまにたがひたりとおぼして。

ゆふ露にひもとく花は玉ほこのたよりに見えしえにこそありけれ。露のひかりやいかにとの給へば。しりめに見おこせて。

ひかりありと見し夕顔のうは露はたそかれ時のそらめなりけり。とほのかにいふ。をかしとおぼしなす。げに打とけ給へるさま世になく。所がらまいてゆゝしきまで見え給ふ。つきせずへだて給へるつらさに。あらはさじと思ひつる物を。今だに名のりし給へ。いとむくつけしとの給へど。「あまのこなればとて。さすがにうちとけぬさま。いとあいだれたり。「よしこれも「われからなゝり。とうらみかつはかたらひくらし給ふ。惟光たづね聞えて。御くだ物など參らす。右近がいはんこと。さすがにいとほしければ。ちかくもえさふ

（釋）この說のごとし但しあれたることは上にもあればいかゞ也しばらくにもじをも削りてけうとげなりとしてさしおくよき本を得て正すべし

べちなふ　〔玉〕河海に別に建たる屋也別納にて大饗おこなはれたる事おほし小寢殿也とあり細流に雜舍也とあるはいかゞ　（釋）別納の方にあづかりの居るさま也さてはなれたりといひて猶人ずくなゝるさまをあらはされたり下の段の結構也

さりともおになども云々　（評）此語いと妙なり變化第五の躰なるがみづから誇りて招き給へるさまにほのめかされたり

かほは猶かくし給へれど　〔細〕昔はふくめんをたれて面をかくしてありくことある也　（釋）上に顏をもほの見せ給はずとありし首尾也

夕露に云々　〔湖師〕ひもとくはかくしたる顏をあらはしたる也えには緣也源の今かく顏をあらはして夕に見え給ふはかの夕顏の宿をとほりがけに見しより緣となりしとなり　（釋）二句は覆面の紐をとくを花のひもとくによせたるなるべし新釋には顏をかくし給へるを扇してかくし給へりといふ舊說をとられたれど車に相乘し給ふほどにては扇にてかくしはつべき事のさまならねばふくめんといふ方を用ゐたりさて玉梓は道の枕詞なるをやがて道の事としていへる例の詞なり

露の光やいかに　〔新〕心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたると有しをもてとひ給ふ也

光ありと云々　〔玉〕さきに光ありと見しはそらめにてぞ有ける今よく見れば光はなき物をとよめるなりさるはあくまで光ありと見ながらことさらに逆ひてかくそのうらをいふこと此のたぐひ今の世にもよくあること也云々　（釋）此說いとよろし諸抄のごとくにてはしりめに見おこせてといへるあざれたるさまにかなはずさて其あざれたるををかしくおぼしなす也

げに打とけ給へる　「玉」此げには源氏君の歌に夕露にひもとく花とよみ露の光やいかにとの給へるなどをうけていへり

所がらまいて云々　（釋）かくあれはてたる所がらにては光る君のすがた似つかはしからずしていま／＼しきまでに見え給ふと也まいては常ざまの所にても此君のさまに似つきたる所はあらぬをまいてと云意也ゆゝしきは忌々しきにて變化の見いるゝ事を下にふくめたる書ざま也

へだて給へるつらさに云々　〔湖〕夕顏源を殊外へだてゝ名ものり給はねば源もあらはさじと思ひけれど今あらはせしぞと也

あまのこなれば　〔河〕「白波のよするなぎさに世をつくすあまの子なれば宿もさだめず　新古今

われからなゝり　〔河〕「あまのかる藻にすむ蟲のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ　古今　〔新〕或云あまのこと女のいふにつきてもにすむ蟲をとりよせてわが今まで顯さゞればなのり給はぬもことわり也とうらみかつは又かたらひ給ふと也

右近がいはんこと　（釋）案にこれは此所へたばかりてよびとり給ふことを右近が惟光になげきいはんことのいとほしければといふ意也さるは此事のもとは惟光なれば也下にうこんたいふのけはひきくに　はじめよりの事打思ひ出られてなくと有をも思ふべし諸抄いさゝかづゝたがへり

さもありぬべき有さまにこそは
（釋）ずゐぶんによろしきかたちの女ならんとおしはかる也
わがいとよく云々〔湖〕初より惟光がいひよりてわが物にもすべきものなと思ふなり
たとしへなくしづかなる云々
〔細〕なにがし院のさま思ひやるべし　（評）院中の夕ぐれのけしきをあらはし出たり變化第六の脉也下にいとかよわくひろも空をのみ見つる物なとある所の首尾也物思ひあるさま也さてやう〳〵にくれゆくにしたがひてけうとく物すごくなりゆくさまいはんかたなし
夕ばえを見かはして　（釋）夕ばえは夕べになりて物のます〳〵めでたく見ゆるをいふこゝは見かはしてとあればけしきの夕ばえにはあらでかたみにうつくしき顏の夕ばえを見かはす意也さる故に女もかゝるありさまを云々よろづの歎きわすれてすこし打とけゆくとはいへる也もし諸抄のごとくけしきの事

らひよらず。かくまでたどりありき給ふもをかしう。さもありぬべきありさまにこそは。とおしはからるゝにも。わがいとよく思ひよりぬべかりしことを。ゆづり聞えて。心ひろさよなど。めざましうぞ思ひをる。たとしへなくしづかなる。ゆふべの空をながめ給ひて。おくのかたはくらうものむつかし。と女のおもひたれば。はしのすだれをあげてそひふし給へり。夕ばえを見かはして。女もかゝるありさまを。思ひのほかにあやしきこゝちはしながら。よろづのなげきわすれて。すこしうちとけゆくけしき。いとらうたし。つと御かたはらにそひくらして。物をいとおそろしと思ひたるさま。わかう心ぐるし。かうしとくおろし給ひて。おほとなぶらまゐらせて。なごりなくなりにたる御ありさまにて。なほ心のうちのへだてのこし給へるなんつらき。とうらみ給ふ。うちにいかにもとめさせ給ふらんをいづこにたづぬらん。とおぼしやりて。かつはあやしのこゝろや。六條わたりにも。いかに思ひみだ

とする時は上にたとしへなくしづかなる夕のそらとあるに重なるべし

すこし打とけゆく（釋）今までは打とけざりし故にすこしとはいへるなり

つと御かたはらにそひくらして

（評）つとの語勢にてめでたし院中のけしきやう／＼物すごくなるまゝに女のものおぢして源氏君に高閑たる間に日のくれはてたるおもふきいとよく書なされたりかくて男君はそれを中々にらうたきものにおぼえ給ひていとほしみ給へる又さも有べき情なり此所變化第七の脉なるがやう／＼にせまりきて人のうへに及びたり心を付べし

かうしとくおろし給ひて（釋）上にかうし手づからあげ給ひてとありし首尾なりこゝも手づからなるべし

なごりなくなりにたる（釋）心の中に思ひ殘す事なき意をなごりなくといへる也かくむつましくなりて

れ給ふらん。うらみられんもくるしうことわりなり。といとほしきすぢは。あはれとおぼすまゝに。まづ思ひ(出)聞え給ふ。何心もなきさしむかひを。あまり心ふかく。見る人もくるしき御ありさまを。すこしとりすてばやと思ひくらべられ給ひける。よひすぐるほどすこしねいり給へるに。御まくらがみに。いとをかしげなる女ゐて。おのがいとめでたしと見奉るをば。たづねもおもほさで。かくことなることなき人をゐておはして。ときめかし給ふこそ。いとめざましくつらけれとて。この御かたはらの人を。かきおこさんとすと見給ふ。物におそはるゝこゝちして。おどろき給へれば。火もきえにけり。うたておぼさるれば。たちをひきぬきて。うちおき給ひて。右近をおこし給ふ。これもおそろしと思ひたるさまにてまゐりよれり。わた殿なるとのゐ人おこして。しそくさしてまゐれ。といへ。とのたまへば。いかでかまからん。くらうてといへば。あなわかわかし。とうちわらひ給ひて。手をたゝき

心のへだてを殘すことゝ名をあらはさぬを恨み給ふ也

うちにいかにもとめ給ふらん　(評)ものすごく打しめりゆく院中のけしきに源氏君もやう／＼うらがなしく思ひなり給ひて帝の御けしきなかしこみ且六條わたりの事など思ひ出給ふ事げにさもあるべき人情にて心のくま／＼を盡きたるがごとし

うらみられんもくるしう　(釋)かやうの所にしのびありきし給へれば六條わたりにうらみらるゝもきのどくに尤なりとの意也

まづ思ひ聞え給ふ　(釋)思ひの下に出とありしがおちたるなるべし必有べき所なれば今試に補ひつ

何心もなきさし向ひを云々　(釋)源氏と夕顔とさし向ひといふ意なり　(拾)此めやすきにくらべて御息所のあまり心ふかく見るもくるしきさまでなるをとりすてたきと也　(釋)とりすてばやとぞとありしをぞをおとせるなるべし

よひすぐるほどにすこしねいり給へるに　(評)此語さらにめでたし變化第八の脉なるがこゝにいたりて綻びて變化を顯はし出されたる筆づかひいとめづらか也さるはやう／＼に物すごくなりまさりきて男君も女君ものがなしくしをれ給へるを猶けざ／＼とは顯さずしてすこしねいり給へる夢の中より出し來られたるありさまつゆばかりも透間なきかきざまなりよく／＼味はふべし

いとをかしげなる女ゐて　(釋)諸注にこれを六條御息所の怨念なるべく注せられたるはおしあてのひがこと也そのよしは餘釋に委しく辨へたるがごとしたゞいとあやしくをかしげなる女の居たることゝのみ思ふべし此院にすめりけん變化のものゝあらはれ出たるさま也

かくことなる事なき人を　(玉)ことにすぐれたる所もなき人を也　(釋)ゐておはしては率て此所へ來給ひて也

かきおこさんとすと見給ふ　(釋)御かたはらに臥たる夕顔君を掻起さんとするさまに夢に見給ふ也

ものにおそはるゝこゝちして　(釋)ものは鬼物をいふ事話にいへり上に夢といはずして驚き給へればといへるにさめ給へる意をふくめてまざらはしたる筆つきいとめでたし

火もきえにけり　(評)上のおほとなぶら參らせてに應ず變化第九の脉

太刀を引ぬきて　(釋)太刀をぬきて枕上に置給ふは太刀のいきほひにて鬼物を壓ふる術なるべし

わた殿なるとのゐ人おこして　(釋)わた殿に隨身童などの御供の人此院の預りの子など直宿してある事下にみゆ

山びこのこたふるこゑ　(新)古今集「打わびてよばゝん聲に山びこのこたへぬ山はあらじとぞ思ふ六帖「つれもなき人をこふとて山びこのこたへするまでなげきつるかな　(釋)山びこは山響なりこゝはならねどいひならへるまゝにいへり手をたゝきて人を呼給へばかなたこなたにひゞきて答ふるさま也變化第十の脉也こたふるといふに心を付べし

あせもしとゞになりて　(河)いせ物語にみのもかさもとりあへずしとゞにぬれてまどひきにけり　(餘)朗云しと／＼の畧今もしと／＼といふ(花)しとゞにぬれて也

いとかよわくひるも空をのみ見つる物を　（釋）心よわく物思ひありげに空を打ながめたる事也上にゆふべのそらをながめ給ひてとありし首尾なり夕顔のさま也

にしのつまどにいでゝ云々　（釋）西の對より西へ出る渡殿の口の妻戸也わたどのゝ火の消たるいとものすごし變化第十一の躰なり

此院のあづかりの子の　（釋）子のとあるの○もじ一本になきはおちたる也さて此あづかりの子は院あづかりの子なること論なし然るを細流に前におほい殿にもしたしうつかうまつるなどいひし者也とあるはたがへり

御こたへしておきたれば　（釋）この起たるは預りの子一人のみなるべしさらではこわづくれとおほせよとあるにかなはず下文もすべて預りの子一人と聞えたるをや

つる打して　〔湖〕弓の弦を打ならせと也惡鬼のおそるゝ故也　（釋）い

給へば。山びこのこたふるこゑ。いとうとまし。人はえ聞つけで參らぬに。この女君いみじくわなゝきまどひて。いかさまにせんと思へり。あせもしとどになりてわれかのけしきなり。物おぢをなんわりなくせさせ給ふ御本上にて。いかにおぼさるゝにか。と右近も聞ゆ。いとかよわくて。ひるもそらをのみ見つるものを。いとほしとおぼして。われ人をおこさん。手たゝけば。やまびこのこたふる。いとうるさし。こゝにしばしちかくとて。右近をひきよせ給ひて。にしのつま戸にいでゝ。とをおしあけ給へれば。わた殿のひもきえにけり。風すこしうちふきたるに。人はすくなくて。さふらふかぎりみなねたり。この院のあづかりの子の。むつましくつかひ給ふわかきをのこ。またうへわらはひとり。例のずゐじんばかりぞ有ける。めせば御こたへしておきたれば。しそくさしてまゐれ。隨身もつるうちしてたえずこわづくれ。とおほせよ。人ばなれたる所に。心とけていぬるものか。惟光の朝臣のきた

はゆる鳴弦の術也上に太刀をぬきてとありし照應なるべしこわづくろは絶ず聲をして人ある事を示すなるべし
惟光の朝臣の　〔評〕惟光を省きたるは殊更にあわてさわぎ給ふ事をいはんとてなるべしいと巧みなり
瀧口なりければ　〔新〕宮中の瀧口てふ所に侍らふものをいふ也　〔釋〕拾芥抄云瀧口本所在二御所近邊一清涼殿艮邊號寛平御時被レ置衆若十人若廿人隨二時儀一云々こゝの意はかく申者は瀧口の武士なりければ弓弦をにつかはしく打ならしてといふ意也預りがざうしの方へいぬるは火を取來んためなる事次の文にてしられたり
火あやふし　〔河〕本朝文粹云夜行翁夜々警レ火舊府中呼曰火危彼謂何源順　〔釋〕今世に火用心といひていましめありくことのごとし
あづかりがざうしのかたへ　〔釋〕かたへにとある本はわろしこれは預りが曹子にゆきて火を取來

りつらんは。とのはせ給へば。さふらひつれど。おほせごともなし。あかつきに御むかへにまゐるべきよし申てなんまかで侍りぬる。と聞ゆ。このかう申すものは。たきぐちなりければ。ゆづるいとつきづきしくうちならして。火あやふしといふいふ。あづかりがざうしのかたへいぬなり。内をおぼしやりて。なだいめんはすぎぬらん。瀧口のとのゐまうし。今こそとおしはかり給ふは。まだいたうふけぬにこそは。かへりいりてさぐり給へば。女君はさながらふして。右近はかたはらにうつぶしふしたり。こはなぞ。あなものぐるほしのものおぢや。あれたる所は。きつねなどやうの物の。人おびやかさんとて。けおそろしう思はするならん。まろあれば。さやうの物にはおどされじ。とてひきおこし給ふ。いとうたて。みだり心ちのあしう侍れば。うつぶしふして侍るなり。おまへにこそわりなくおぼさるらめ。といへば。そよ。などかうは。とてかいさぐり給ふに。いきもせず。ひきうごかし給へど。

べきためにいぬるなれば傍にゆきて何をかせん又いぬる也とあるも言の格たがへりいぬ也と有に隨ふべし

名だいめん 〔花〕亥の一刻に内竪時の札を奏す其後侍臣のなだいめんありなだいめんとは名謁を云殿上に御とのゐしたる侍臣たがひに名をとはれて名のる事也其次に瀧口のとのゐ申ありとのゐ申といふも名謁と同じき也瀧口廿人あるもの也いづれも亥の刻の事なればいたくもふけぬにこそはとかけり〔細〕此火ともしに行たる間に禁中の事などおぼしやる也前にうちにいかにもとめさせ給ふらんを云々とあり此心よりかやうの事にふれても思ひやり給ふ也 〔評〕この御説のごとし物のわびしきにつきていよ／＼禁中をおぼし出る情さもあるべし

きつれなどやうの物の云々

〔釋〕變化第十二段の脉

けおそろしう 〔湖〕けしきおそろし

なよ／＼として。我にもあらぬさまなれば。いといたくわかびたる人にて。ものにけどられぬるなめり。とせんかたなきこゝちし給ふ。しそくもて參れり。右近もうごくべきさまにもあらねば。ちかき御几帳をひきよせて。なほもてまゐれとの給ふ。れいならぬことにて。おまへちかくもえ參らぬつゝましさに。なげしにもえのぼらず。なほもてこや。ところにしたがひてこそ。とてめしよせて見給へば。たゞこのまくらがみに。夢に見えつるかたちしたる女。おもかげに見えてふときえうせぬ。むかしものがたりなどにこそ。かかる事はきけ。といとめづらかにむくつけゝれど。まづこの人いかになりぬるぞ。とおもほす心さわぎに。身のうへもしられ給はず。そひふして。やゝとおどろかし給へど。たゞひえにひえいりて。いきはとく絶はてにけり。いはんかたなし。たのもしくいかにといひふれ給ふべき人もなし。ほうしなどをこそは。かゝるかたのたのもしきものにはおぼすべけれど。さこそ心づよ

き也

ひきおこし給ふ　〔萬〕右近を引起し給ふ也

わかびたる人にて云々　〔湖〕心をさなき人にて氣をとられぬると也（釋）ものには鬼物に也

近き御几帳をひきよせて　〔湖〕源のみづから引よせて女君をへだてゝ瀧口をめす也

つゝましさになげしにも　（釋）つゝましさには愼ましさにといはんがごとし恐多さにといふ意也長押は上段の間のかまち也

所にしたがひてこそ　〔湖〕禮儀をなすも所によるぞと也

おもかげに見えてふときえうせぬ　（評）此語めでたし火の光につきて變化の物の立かくれたるさま也これらすべて源氏君の御心がらなる理を思ひておもかげにといへるかへすぐ〵めでたし心をつくべし變化第十三段の脉なり

むかし物語などにこそ　（釋）舊注に寛平法皇京極御息所と河原院にいでましけるに融公の靈たゝりをなしたる事など出されたれど例のいかゞ只昔物語にかやうの事はきけ今の世にはめづらしといふ意とのみ見てあるべし下に法師などをこそ云々とあるを淨藏が加持したる事にあてられたれどそれもいかゞ也されど其文は餘釋に引出て論じつ

いはんかたなし云々　（釋）この段詞おちたるかと思へどさしもあらず例の打かへしたる文法とおぼし試に甲乙丙丁のしるしをつけたるに隨ひて事の意をさとるべし

さこそ心づよがり給へど　〔湖〕前にまろあればさやうの物にはおどされじとの給ひし事也

やるかたなくて　（釋）うれひをはらしやるかたなくて也

けはひものうとくなりゆく　（釋）夕顏のけはひの生たる人とはかはりていくな物うとくとはいへる也諸抄に三魂七魄の事などいはれたるいといと不用なれば略きつ

南殿のおにの云々　〔湖〕此おとゞは貞信公也　〔河〕世継ニ云いづれの御時とは覺え侍らず思ふに延喜朱雀院の御ほどにこそは侍りけめ宣旨うけ給はらせ給ひておこなひに陣の座におはします道に南殿の御帳のうしろのほどとほらせ給にものゝけはひして御劍の石づきをとらへたりければいとあやしくてさぐらせ給ふに毛はむく〵とおひたる手の爪ながく刀のはのやうなるに鬼なりけりといとおそろしう思しめしけれどおくしたるやうに見えじと念ぜさせ給ひておほやけの勅定承りてさだめに參る人とらふるは何物ぞゆるさずはあしかりなんとて御太刀を引ぬきてこれが手をとらへさせ給へりければまどひてうちはなちてうしとらのすみざまへまかりけり云々

さりとも　〔湖〕南殿のおにもおとゞにけさくなしたれば源も夕の身くるしからじとの給ふ也

よるの聲はおどろ〵し　（釋）夜の流聲は高く聞ゆる物なればおどろ〵しといへり

いとあわたゞしきに
〔湖〕右近をばいさめ給へども源氏の我もあきれ給ふ也 〔釋〕あわたゞしきはあわてたるさま也

いへとおほせよ 〔湖〕惟光にはやくまゐれと云付て人をつかはせと瀧口にのたまふ詞也

なにがしのあざり
〔釋〕惟光が兄の阿闍梨と上に見えし人也なにがしは例の名をいふ所なるをかくしたる也そこに物するとは惟光のやどれる所にあらばといふ意也大貳乳母の家なるべしさてこれは上のほうしなどをこそはかゝるかたのたのもしきものにはおぼすべけれといへる脉にて呼來りて加持などせさせんため也

あま君などのきかんに云々
〔釋〕かゝあわたゞしき事の中に尼君の思はん所までつゝみ給ふさまにかゝれたるいと委しくいとめでたし

むく〳〵しさ
〔新〕春海考るにむく〳〵はむくつ

がり給へど。わかき御心ちにていふかひなくなりぬるを見たまふに。やるかたなくて。つといだきて。あがきみいきいで給へ。いみじきめな見せ給ひそ。との給へど。ひえいりにたれば。けはひものうとくなりゆく。右近はたゞあなむつかし。と思ひけるこゝちみなさめて。なきまどふさまいといみじ。なんでんのおにの。なにがしのおとゞをおびやかしけるためしをおぼしいでて。心づよく。さりともいたづらになりはて給はじ。よるのこゑはおどろ〳〵し。あなかま。といさめ給ひて。いとあわたゝしきに。あきれたるこゝちし給ふ。このをとこをめして。こゝにいとあやしう物におそはれたる人の。なやましげなるを。たゞ今惟光のあそんのやどれる所にまかりて。いそぎまゐるべきよしいへ。とおほせよ。なにがしのあざり。そこにものするほどならば。こゝにくべきよししのびていへ。かのあまぎみなどのきかんに。おどろ〳〵しくいふな。かゝるありきゆるさぬ人なりなど。物の給ふやうな

れど。むねはふたがりて。この人をむなしくしなしてんことの。いみじくおぼさるゝにそへて。おほかたのむく〳〵しさ。たとへんかたなし。夜中もすぎにけんかし。風のやゝあらあらしう吹たるは。まして松のひゞきこぶかく聞えて。けしきある鳥のからごゑになきたるも。ふくろふはこれにやとおぼゆ。うちおもひめぐらすに。こなたかなたけどほくうとましきに。人聲せず。などてかくはかなきやどりはとりつるぞ。とくやしさもやらんかたなし。右近はものもおぼえず。君につとそひ奉りて。わなゝきしぬべし。またこれもいかならん。と心そらにてとらへ給へり。われひとりさかしき人にて。おぼしやるかたぞなきや。火はほのかにまたゝきて。もやのきはにたてたる屛風のかみ。こゝかしこのくまぐ〳〵しく見ゆるに。ものゝあしおとひし〳〵とふみならしつゝ。うしろよりよりくる心ちす。これみつとくまゐらなんとおぼす。ありかさだめぬものにて。こゝかしこたづねけるほどに。夜のあく〳〵

けきを略して重ねいへるなりあざやかなるを略してあざ〳〵といへると同じ語勢なり（釋）略してといへるはいかゞ也むく〳〵つけきのむくと同語なるが活きざまのかはりたる也

夜中も過にけんかし
（釋）上に瀧口のとのゐ申今こそと有し脉にてやう〳〵更行たるさま也變化十四段の脉

風のやゝあら〳〵しう吹たるは
（釋）上に風すこし打ふきたるにと有し脉にてあら〳〵しうといへり

松のひゞきこぶかく聞えて
（釋）夜のふけしづまれるに風のあらく吹て松にあたる音はげにいと木深くものすごく聞ゆべし故にましてとはいへる也

けしきある鳥のから聲に鳴たるも
（湖）けしきあるはたゞならず一けしきある也から聲は聞なれずからびたるなり
（河）（餘）白氏文集第一凶宅詩に
梟鳴松桂枝狐藏蘭菊叢蒼苔黄

葉地日暮ラ二旋風一前主爲ニ將相一後主爲ニ公卿一　〔弄〕山にすむふくろふはこれにやと河内本に甚面白し云々

（釋）案に山にすむといふ事ありてはゆゝに此詩にはかなひがたし猶考ふべし詩の語を思ひたるかたにていはゞかの梟鳴ニ松桂ノ枝ニ一など文集にいへる鳥はこれにやと始めておぼせるよし也道人のさま書得られたりと聞ゆさておぼゆと有はおぼす。た寫し誤れるか源氏君の思ひ給ふ事なれば必しか有べくおぼゆ

はかなきやどりは

（釋）はかなきは人少くあれたる所なる故にものはかなき也

わなゝきしぬべし　（釋）わなゝきはふるふさま也ふるひ死るかともみゆるばかりなる意也

火はほのかにまたゝきて

（評）またゝきといへるめでたしともめでたし火のあかくくらくきらめくる變化の段なる故にまたゝき

るほどのひさしさ。ちよをすぐさんこゝちし給ふ。からうじてとりの聲はるかに聞ゆるに。いのちをかけてなにのちぎりにかゝるめを見るらん。わが心ながら。かゝるすぢにおふけなくあるまじきこゝろのむくいに。かくきしかたゆくさきのためしとなりぬべきことはあるなめり。しのぶとも世にあることとかくれなくて。内にきこしめされんことをはじめて。人の思ひいはん事。よからぬわらはべのくちずさびになりぬべきなめり。ありありてをこがましき名をとるべきかな。とおぼしめぐらす。からうじて惟光の朝臣まゐれり。よなかあかつきといはず。御心にしたがへるものゝ。こよひしもさぶらはで。めしにさへおこたりつるを。にくしとおもほすものから。めしいれて。のたまひ出んことのあへなきに。ふと物もいはれ給はず。右近たいふのけはひきくに。はじめよりのこと。うち思ひ出られてなくを。君もえたへ給はで　われひとりさかしがりいだきもち給へりけるに。この人にいきをのべ給ひてぞ。

とたとへたる也この所變化十五段の脉にてつひに結びはてたる所也かれ物凄くおそろしきけしきいよ〻ます〱はなはだし
屏風のかみ　〔釋〕上也紙にはあらず屏風の上のあきたる所隈ありと見えておそろしげなる也くま〲しばしが隈ありと見ゆるさまをいふ例の
形容の辭なりさてこゝは見ゆるにとある本をまされりとすべし火はほのかにまたゝきてといふ語の末なれば見ゆるといふかたことわり也
物のあしおとひし〱と　〔拾〕萬葉長歌にこの床のひしとなるまでなげきつるかも　〔釋〕これはひしといふ事の類例也さて物の足音ひし〱
とふみならしてうしろの方よりくる心ちするはむくつけき事のかぎりにていたくわびしきさまを書はてたる也
うしろよりよりくるこゝちす　〔餘〕頭云よりのかさなりたるかたよからん其有樣ひとしほ思ひやらる
とくまゐらなんとおぼす　〔釋〕もの〻わびしくむくつけきにつけて惟光を待かね給ふさまげにさもあるべし
ちよをすぐさん心ちし給ふ　〔釋〕後拾遺「くる〻まは千歳を過す心ちしてまつはまことの久しかりけり此歌などをおもひてかゝれたるなるべ
しされば こゝのちよは千代の意なり湖月本千夜とかけるはひがこと也
からうじて鳥の聲聞ゆるに　〔釋〕鳥のこゑ聞ゆるにつきてすこし御心のしづまるにつけて次々の事を思ひ出給ふさまげにいとことわり也
〔評〕この所變化の段の終也そも〱此變化の樣此院中へかゝり來てあれたる門のしのぶ草しげりて見あげられたるたとしへなくこぐらしと
書出られたるより次々にそのけしきをあらはしかつ源氏君のおぼす心などかたみにくはしく書出られたるがやう〱にあやしくなりまさり
てつひに夢の中よりへんぐゑの女あらはれたる其なごりますます〱ものすごくして源氏君のあわて給ふさまのいとせはしきをつゆのなんなく
書とられたるはいと〱めづらかにめでたき筆つきといふべしよく〱心をつけてよみあぢはふべくなん
いのちをかけて何の契に　〔釋〕いかなる前世の宿因ありて命をまでかけてかくくるしきめを見る事ならんとおぼすよし也
おふけなくあるまじき心の　〔細〕藤壺に心かけ給ふ事の空おそろしきむくいかとおぼす也
しのぶとも世にある事かくれなくて　〔釋〕かゝるぞげに世中のありさまなる舊注に中庸を引たるはこと〲し
よからぬわらはべのくちずさみ　〔釋〕後世にいはゆる京童のくちずさみ也ふるき諺なりしにこそ
あり〱て　〔湖〕かやうにうき聞えあり〱てのはて〱はと也
からうじて惟光のあそん參れり　〔評〕惟光を歸らしめたるは源氏君のあわたゞしさをつよくかゝん爲なること上にいへるがごとしこゝにいた
りて出來らせたるは末々の事どもを執せんため也作者の用意こまやか也
ふとものもいはれ給はず　〔評〕源氏君のさま打見るがごとし
右近たいふのけはひきくに云々　〔釋〕右近これみつの來りしけはひをきゝてその初惟光がたばかりて源氏君を夕顔の宿へかよはせそめ參らせ
し事を思ひ出る也さてその事どもは上にくだ〱しければれいのもらしつとて略きたる中にこもりたる事也然るを細流に惟光がわが懸想人

にしてありきし事を思出たる也とあるはいさゝか違へり

えたへ給はで　（釋）語脈甲乙のごとしえたへ給はでとばかりなき給ふといふ落着なる中にそのさまをいへる也

此人にいきをのべ給ひてぞ　（釋）惟光が參りしによりて打くつろぎ給ひてといふ意をかくいへる也　（評）此語いと〳〵めでたし今まではとかくとひてさかしがり給ひしを惟光にゆづらひたるこゝちしてかなしさをおぼえ給ふさま人の情をゑがけるがごとしとばかりといひやゝためらひてといへるなどさらにめでたし

ず經などをこそすなれ　（釋）或抄に邪氣を退けんために經をよます事也といへりかつはいき出んためのいのりにも有べし

きのふ山へまかりのぼりにけり　（釋）山とのみいふはすべて比叡山のことなりこれにてあざりは比叡山の僧なることしられたり

かなしきこともおぼされける。とばかりいといたくえもとゞめずなき給ふ。やゝためらひて。こゝにいとあやしき事のあるを。あさましといふにもあまりてなんある。かゝるとみの事には。ずきやうなどをこそはすなれとて。そのことゞもせさせん。ぐわんなどもたてさせんとて。あざりものせよといひやりつるは。とのたまふに。きのふ山へまかりのぼりにけり。まづいとめづらかなることにも侍るかな。かねてれいならず御心ちの物せさせ給ふことや侍りつらん。さることもなかりつ。とてなき給ふさま。いとをかしげにらうたく。見奉る人もいとかなしくて。おのれもよゝとなきぬ。さいへど年うちねび。世中のとあることもしほじみぬる人こそ。ものゝをりふしはたのもしかりけれ。いづれも〳〵わかきどちにて。いはんかたもなけれど。この院もりなどにきかせんことは。いとびんなかるべし。この人ひとりこそむつましうもあらめ。おのづから物いひもらしつべき。くゐむぞくもたちまじり

かれて例ならず〔細〕夕顔の上は自然かれて遺例などせし事の有かと也

おのれもよゝとなきぬ〔釋〕源氏君の泣給ふを見奉り感じて惟光もよにいはゆるもらひ泣をするさまなり〔河〕君によりよゝよゝ〳〵とよゝ〳〵とれをのみぞなくよゝ〳〵と六帖〔新〕萬葉にもよゝとせに老舌出てよゝむともとよみてなく時の口つき也〔釋〕よゝはなく音也

さいへど云々〔釋〕此さいへどはたのもしかりけれへ係る意にて云々の人こそかゝるものゝなりふしはさいへどたのもしかりけれといふ意にて例の文法也玉小櫛に必しも上にうくる事なくてもいふ詞也とあるはひがこと也上を受る事なくてさいへどゝはいふべくもなしとある事も〔玉補〕かゝる事もといふを略きたるなり

しほじみぬる人こそ〔釋〕鹽じむは度々事に出あひて功者なる事也鹽

たらん。まづこの院をいでおはしましねといふ。さてこれより人ずくなゝる所は。いかでかあらんとの給ふ。げにさぞ侍らん。かのふるさとは。女房などのかなしびにたへず。なきまどひ侍らんに。となりしげくとがむるさと人おほく侍らんに。おのづからきこえ侍らんを。山でらこそ。なほかやうのことおのづからゆきまじり。ものまぎるゝ事侍らめ。と思ひまはして。むかし見給へし女房の尼にて侍る。ひんがし山のへんに。うつし奉らん。惟光がちゝの朝臣のめのとに侍りしものゝ。「みづはくみてすみ侍るなり。あたりは人しげきやうに侍れど。いとかごかに侍りと聞えて。あけはなるゝほどのまぎれに御車よす。この人をえいだき給ふまじければ。うはむしろにおしくゝみて。惟光のせ奉る。いとさゝやかにて。うとましげもなくらうたげなり。したゝかにしもえせねば。かみはこぼれ出たるも。めくれまどひてあさましうかなしとおぼせば。なりはてんさまを見んとおぼせど。はや御馬にて二條院へおは

の物に染たもてたとへたり

くふんそく〔餘〕涅槃經云我及眷屬

史記簪嗜傳大臣誅ニ諸呂須嬃屬ニ索

隱曰嬃音眷（釋）從類の事也

山寺こそ（釋）或抄云山寺には死人

たあつかふ事多ければまぎれんと

也

思ひまはして（釋）惟光のしばらく

思案するさまいと委し

むかし見給へし女房の

（釋）此詞惟光があひたる女のごと

く聞ゆれども下文のさまさはあら

ず故見知タルと譯せり尼にて侍る

は尼になりたるが住て侍るといふ

意也

ちゝの朝臣のめのとに侍りしものゝ

（釋）惟光が父の乳母なりし女の年

よりて尼になりて住たる也

みつはぐみて〔河〕年ふればわが黑

髪もしら川のみつはくむまでおい

にけるかな後選〔巴〕此詞靑表紙

になしと云々〔新〕今昔物語蒔本

十三播賀法師の事いふ條に云美豆

波左須やそちあまりのおいのなみ

しまさなん。人さわがしくなり侍らぬほどに。とて右近をそへてのす。〔れば〕

君に馬は奉りて。われはかちよりくゝりひきあげなどして出たつ。かつはい

とあやしくおぼえぬおくりなれど。御けしきのいみじきを見奉れば。身をす

てゝゆくに。君はものもおぼえ給はず。われかのさまにておはしつきたり。

人々いづこよりおはしますにか。なやましげに見えさせ給ふなどいへど。御

帳のうちにいり給ひて。むねをおさへて。思ふにいといみじければ。などて

のりそひてゆかざりつらん。いきかへりたらむ時。いかなるこゝちせん。見

すてゝいきわかれにけり。とつらくや思はん。とこゝろまどひの中にもおぼ

すに。御むねせきあぐるこゝちし給ふ。御ぐしもいたく。身もあつき心ちし

て。いとくるしくまどはれ給へば。かくはかなくて。われもいたづらになり

ぬるなめり。とおぼす□日たかくなれど。おきあがり給はねば。人々あやし

がりて。御かゆなどそゝのかし聞ゆれど。くるしくて。いと心ぼそくおぼさ

くらげのほれにあふぞうれしきかくもあれば三歯さすともいふ也老て歯のまばらに落て上のは下のはと三ツさし合ひくみあふやうなるない
へり三輪と覺えていふ説は皆誤なり右にも美豆波とこそ書たれかの檜垣の嫗がよめるも同じ云々　〔釋〕新釋の説もなほいかゞあらん此詞と
にかくに知れがたしたゞ年老たるさまとのみ心得てあるべし諸説は餘釋にいへりさてひがき女が集には此歌初句老はてゝ二句髮は末句なり
にけるかなと有やまと物語には初句うば玉のとあり
かこかに　〔萬〕かこ〳〵としたるといふ心也〔河〕四園ともいふかこめる心也〔湖師〕今俗にかんごりとしたるといふ心也
うはむしろにおしくゝみて　〔湖〕惟光夕顔を直にいだくは恐ある故に筵につゝみたる也〔孟〕弘仁八年八月從三位橘朝臣常子薨以席裹屍
〔釋〕上席はうへにしくむしろ也
さゝやか　〔新〕さゝとは總てちひさきことをいふ小竹葉小波などの類多し
したゝかにしもえせねば　〔釋〕源氏君はえいだき給ふまじければ惟光車にいだきのせたるものからなほ力なくて思ひのまゝにえとりつくろは
ぬをしたゝかにしもえせずとはいへる也さばかりの人の事におりたゝれたるさまをいとよくうつしかゝれたり
はや御馬にて云々　〔釋〕語脈點のごとし
右近をそへてのすれば　〔玉〕此ればといふ詞下にかゝる所なしいかゞ　〔釋〕げに誤脱あるべく見えたりればの二もじしばらく假に省きつ此所
一本にかちより君に馬は奉りて。くゝり引あげなどして。かつは云々とありいづれにしてもみだれたるなるべし
くゝりひきあげ　〔釋〕さしぬきの裾のくゝりといへるかたよろし
御けしきのいみじきを　〔釋〕源氏君の御なげきのいみじきをみ奉ればいとほしくて我身をすてゝならばぬおくりつかうまつるさま也
御帳　〔釋〕和名抄釋名云帳猶高反此間音長帳也施張於床上也云々
などてのりそひてゆかざりつらん云々　〔釋〕同車にてゆくべかりしものをなどてゆかざりつらんもし生かへりたらば心ざしの淺かりしとや思
はんと思ひ給ふをいかなる心ちせんといへるなりこれを夕顔の心と見たる注はわろし見すてゝいきわかれにけりとつらくや思はんとあるが
夕顔の心を思ひやり給へるなり
御ぐしもいたく云々　〔湖〕頭痛熱氣など夕顔の愁傷のみならずものゝけの心もあるにや　〔評〕下に物のけのなごりにて煩ひ給ふ事をいはんと
てこゝに先かく打いでゝおく也事をにはかにせぬ筆づかひ思ふべし
おほいとのゝ君だちあまた　〔玉補〕此上にとて。といふ詞あるべしおちたるならん　〔釋〕さもあるべし　〔玉〕これすなはち内よりの御使に參り
給へる也下にさらばさるよしをこそ奏し侍らめとあるにてしらる
たちながらこなたに　〔釋〕穢にふれ給へる故に人を座せしめず立せながら簾ごしにものの給ふ也この下にけがらひありとのたまひてまゐる人

人もみなたちながらまいづればとあるにて知られたり
えいであへで 〔孟〕家内な出さずしてと也 （釋）案に一本にいきあへでとあるかたよろし
おぢはゞかりて 〔湖〕源氏のお給ふによりそれをはゞかりて日を暮して遅く出したると也
聞つけ侍しかば 〔湖〕源の聞給はぬは大事なければども隠つけ給ふ故穢れたりと也 （釋）大事なけれどもといへるはわろし聞ぬはせんすべなきにこそあれ
神事なる比は 〔花〕夕顔上のうせ侍る事は八月十六日の事也九月は斎月にて一日より御神事なり廿ヶ日の穢にふれ給ふによりて参内かなふまじき事也
しはぶきやみ 〔餘〕和名抄病源論云咳嗽之病不歇肺寒則成也 〔河〕延喜式十五日兒近来患咳嗽音不徹 （釋）今いふ風邪の事なり
いとむらいにて 〔細〕簾をへだてゝ

るゝに。内より御つかひあり。きのふもえたづね出奉らざりしより。おぼつかながらせ給ふ。おほい殿の君だちあまたまゐり給へど。頭中將ばかりを。たちながらこなたに入給へとのたまひて。みすのうちながらの給ふ。めのとにて侍るものゝ。この五月のころほひより。おもくわづらひ侍りしが。かしらそりいむことうけなどして。そのしるしにやよみがへりたりしを。このごろ又おこりて。よわくなんなりにたる。今ひとたびとぶらひ見よと申たりしかば。いときなきよりなづさひしものゝ。いまはのきざみにつらしとや思はんと思ひ給へてまかれりしに。その家なりけるしも人のやまひしけるが。にはかにえいきあへでなくなりにけるを。おぢはゞかりて。日をくらしてなんとり出侍りけるを。きゝつけ侍りしかば。神事なる頃は。いとふびんなることゝ思ひ給へかしこまりて。えまゐらぬなり。このあかつきより。しはぶきやみにや侍らん。かしらいといたくてくるしく侍れば。いとむらいにて聞ゆ

申は無禮と頭中將に會釋なし給ふ也

かしこくもとめ奉らせ給ひて
〔玉〕或抄にかたじけなく也といへるよろし　〔釋〕恐多くといふ意なり

たちかへり　〔湖師〕是頭中將勅使に來ての心入尤なり源の內へ參らぬよしなの給ふ其由は天子へ申さんといひて立てさて立かへりてわがざれことはの給ふ也

いきぶれ　〔萬〕行ふれ也何としたるけがらはしき事に行あひ給ふぞやと也　〔釋〕行觸穢言也行ぶれの穢といふ意なり故にかゝらせといへり

むね打つぶれ給ひて
〔釋〕いひあてられてはつと肝の潰れたるさまなり

かくこまかにはあらで云々　〔釋〕中將にいひあてられ給へる故にしかこまかにいひても中々にわろかめりとおぼしていひ直し給ふさまをいとよくかゝれたり心を付て見る

ることなどの給ふ。中將さらばさるよしをこそ奏し侍らめ。よべも御あそびに。かしこくもとめ奉らせ給ひて。御けしきあしく侍りき。と聞え給ひて。たちかへり。いかなるいきぶれにかゝらせ給ふぞや。のべやらせ給ふ事こそ。まことゝも思ひ給へられね。といふに。むねうちつぶれ給ひて。かくこまかにはあらで。たゞおぼえぬけがらひにふれたるよしをそうし給へ。いとこそたい〴〵しく侍れ。とつれなくの給へど。心のうちには。いふかひなくかなしきことをおぼすに。御心ちもなやましければ。人にめも見あはせ給はず。藏人の辨をめしよせて。まめやかにかゝるよしをそうせさせ給ふ。大殿などにも。かゝる事ありてえ參らぬ御せうそこなど聞え給ふ。□日くれて惟光まゐれり。かゝるけがらひありとのたまひて。參る人々も。みなたちながらまかづれば。人しげからず。めしよせて。いかにぞいまはと見はてつや。との給ふまゝに。袖を御顏におしあてゝなき給ふ。これみつもなく／＼。今はかぎ

べし
いとこそたいぐ〳〵しく（釋）此詞は上にも見えたり意々の音といへる說まづはよろしこゝは緩怠らしくとのたまふ意にて委しくいはゞ帝へ對して却て緩怠らしく聞えんとの心なるべし舊注たしかなる說どもなし
つれなく（釋）さりげなく也
藏人の辨を（釋）頭中將は疑ひ戲れて實ともし給はねばたゞ大かたを奏し給へといひてさてもろともに來給へる藏人の辨を召てかされて委しく勅答し給ふさまなり情景いと〳〵くはしくめでたしまめやかといふ詞に心をつくべし
おほい殿などにも云々
（評）しかあるべき情景いと〳〵くはし
かゝるけがらひありとの給ひて
（評）惟光と密に事を語り給はん料に先人少きよしなことわりおく也
かへす〴〵くはし
今はと見はてつや

りにこそは物し給ふめれ。なが〳〵とこもり侍らんもびんなきを。あすなん日よろしく侍れば。とかくの事。いとたふとき老僧のあひしりて侍るに。いひかたらひつけ侍りぬると聞ゆ。そひたりつる女はいかにとの給へば。それなんまたえいくまじう侍るめる。われもおくれじとまどひ侍りて。けさは谷にもおちいりぬべくなん見給へつる。かのふるさとの人に。つげやらんと申せど。しばし思ひしづめよ。事のさま思ひめぐらして。となんこしらへおき侍りつる。とかたり聞ゆるまゝに。いといみじとおぼして。われもいと心ちなやましく。いかなるべきにかとなんおぼゆる。とのたまふ。なにか。さらにおもほし物せさせ給ふ。さるべきにこそ。よろづのこと侍らめ。人にももらさじと思ひ給ふれば。惟光おりたちて。よろづはものし侍るなど申す。さかし。さみな思ひなせど。うかびたる心のすさびに。人をいたづらになしつる。かごとおひぬべきがいとからきなり。少將の命婦などにもきかすな。

〔湖〕もはや蘇生あらじと見はてたるかとなり

なが／＼とこもり侍らんも　（釋）こもりとはひんがし山の尼が住所に夕顔の屍をこめおく事なり長くこもりあらんも便なければ明日葬(ハウブリ)をせんといふなり

日よろしく侍れば　（釋）日がらも相應なればとなり葬日の吉凶をいひ事そのかみはやくありしと見えたり陰陽師などの說なるべし

とかくの事　（釋）ともしかくもする葬禮の事なりとかくなどまぎらはしていふは葬といふ事を忌てなるべし

あひしりて　（釋）惟光と相識(アヒシ)てなり

けさは谷にもおち入ぬべく　〔花〕右近かなしみのあまりに谷に身をもなげんの心なり　〔河〕世中のうきたびごとに身をなげばふかき谷こそあ

さくなりなめ　古今俳諧

かのふるさとの人に　〔細〕右近は彼宿へも此よしを告やらんと申すなり　（釋）一本のもとなし

ことのさま思ひめぐらして　（釋）右近は告やらんといふをしばらく思ひしづまれる事のさまをよく／＼思案して告やるべしと惟光がこしらへおきたりといふなりさるはありのまゝにいひやらば彼女房などの悲しみまどひ騒ひて源氏君の御ためによからぬ事も出來んかとの用意なるべし

こしらへ　〔拾〕喩(コシラヘ)日本紀

いかなるべきにか　〔湖〕御念もあやふきとなり

なにかさらに云々　（釋）今更に何かさほどに思しめし給ふべきこれも然るべき前世の宿因にこそ侍らめといふ意なりさるべきとは然あるべき宿因といふ事なることと前後に例多しさて給ふの下にべきの辭脫たるかかくても聞ゆれど少しいかにぞや聞ゆ語脉は點のごとし

人にもらさじと云々　（釋）此事を人に聞せじと思へば惟光みづから葬の事をとりて萬事をとりまかなひ侍るといふなり

さかしさみな思ひなせど　（釋）さかしは然(サ)かしにてさかしは辭なりさみな思ひなすとはさるべきにこそ萬の事侍らめといへるをうけてさやうに萬事は皆宿因ぞとおもひなせどゝいふ意なり

うかびたる心のすさびに　（釋）うかびはおも／＼しからずしてかろく浮てたゞよはしき意なり俗にうは／＼したりなどいはんがごとしさてしかうかびたる心のすさびに人をむなしくしなし給へりなど人のかごとをおはんがいらきとなりかごとは物によそへて恨をのぶることにて彼夕顔のやどの女房をはじめて此尼君などのいさめまでにわたりて聞えたり

さらぬ法師ばらなどにも云々　（釋）少將の命婦などにも云々との給ふをうけてそれは勿論の事なりさはあらぬ葬所の法師ばらなどにもみなありさまを異(コト)にいひなして源氏君の御名をたてぬやうにはからひたりといふ意なり法師ばらのばらは輩ばらなどいふばらにひとしく群(ムレ)たる意

の言と聞ゆ
かゝり給へる〔細〕なぐさむ心なり
〔巴〕「霜がれの草のとざしのさびしさも霞にかゝる春の山ざと」定家卿の歌なり此かゝるといへる同じ心なり〔新〕それによりかゝりて有たいふ子にかゝり人にかゝりてなどいふも是なり（釋）右の説の中に新釋は少しいかゞこれは拘はる義なり上にいかなるべきにかとなんおぼゆるとの給ひし結びてかやうに申すにかゝはりて命たとりとめ給ふといふ意なるべし
さらに事なく〔玉〕さらにはのたまへどいふへかゝりてあらためてのたまふよしなるべしことなくは難なくにて故障なくといふ意なり云々
なにかこと〴〵しく〔玉〕葬のほどの事を源氏君のおぼつかなくおぼしめして事なくしなせなどのたまふ故に何かはさやうにおぼつかなくはおぼすべきことごとしくし侍るべきにもあらざれば心やすしと

尼君ましてかやうのことなどいさめらるゝを。はづかしくなんおぼゆべき。とくちがため給ふ。さらぬほうしばらなどにも。みないひなすさまことに侍り。と聞ゆるにぞかゝり給へる。ほのきく女房など。あやしく何事ならん。けがらひのよしの給ひて。内にも參り給はず。またかくさゝめきなげき給ふ。とほの〴〵あやしがる。さらに。ことなくしなせ。とそのほどのさほう。のたまへど。なにか。こと〴〵しくすべきにも侍らず。とてたつがいとかなしくおぼさるれば。びんなしと思ふべけれど。今一たびかのなきがらを見ざらんが。いといぶせかるべきを。馬にてものせんとの給ふを。いとたい〴〵しき事とは思へど。さおぼされんはいかゞせん。はやおはしまして。夜ふけぬさきにかへらせおはしませと申せば。このごろの御やつれにまうけ給へる。かりの御さうぞくきかへなどして出給ふ。御こゝちかきくらし。いみじくたへがたければ。かくあやしき道に出たちても。あやふかりし物ごりに。い

申すなり
(釋)此段いさゝか紛らはしまづは右のごとく心得べし他の説は餘釋に擧つさて語脉は其ほどのさほうことなくしなせといふ意也
いとかなしゝおぼさるれば
(釋)惟光がきすくにいひすてゝ立てゆくを見給ひてかなしくおぼさるゝなり夕顔のかぎりと思ひ給ふ故也
いとたい〳〵しき　(釋)怠々の意を轉じて雅語譯解にフスヽミナといへる意に用ひたりと聞ゆ
このごろの御やつれに
(釋)この比夕顔の宿へかよひ給ふとてやつれたるさまに調じ給へる狩衣をとり出て着替給ふなり假の御裝束と心得るはわろかめり
あやふかりし物ごりに
(釋)前の夜の變化の事にこり給ひていかにせんとたゆたひ給ひながら猶かなしさにたへで出立給ふなり
たゞいまのからを見では

かにせんとおぼしわづらへど。猶かなしさのやるかたなく。たゞ今のからを見では。またいつの世にか。ありしかたちをも見ん。とおぼしねんじて。れいのたいふずゐじんをぐして出給ふ。みちとほくおぼゆ。十七日の月さしいでゝ。かはらのほど御さきの火もほのかなるに。とりべ野のかたなど見やりたるほどなど。物むつかしきも。何ともおぼえ給はず。●かきみだるこゝちし給ひて。おはしつきぬ。あたりさへすごきに。いた屋のかたはらにだうたてて。おこなへるあまのすまひ。いとあはれなり。みあかしのかげほのかにすきてみゆ。その屋には女ひとりなくこゑのみして。とのかたにほうしばらの二三人物語しつゝ。わざとの聲たてぬ念佛ぞする。てら〳〵のそやもみなおこなひはてゝ。いとしめやかなり。きよみづのかたぞ。光おほく見えて。人のけはひもしげかりける。このあまぎみのこなる大とこの。こゑたふとくて經うちよみたるに。涙のこりなくおぼさる。いり給へれば。火とりそむけ

て。右近は屏風へだてゝふしたり。いかにわびしからんと見給ふ。おそろしきけもおぼえず。いとらうたげなるさまして。まだいさゝかかはりたるところなし。てをとらへて。我に今一たびこゑをだにきかせ給へ　いかなるむかしの契にかありけん。しばしのほどに心をつくして。あはれにおもほえしを。うちすてゝまどはし給ふがいみじきこと。と聲もをしまずなきたまふ事かぎりなし。大とこたちも誰とはしらぬに。あやしと思ひて。みな涙おとしけり。かたうこんをば。いざ二條院へとの給へど。年ごろをさなく侍りしより。かたときも立はなれ奉らず。なれ聞えつる人に。にはかにわかれ奉りて。いづこにかへり侍らん。いかになり給ひにきとか人にもいひ侍らん。かなしき事をばさるものにて。人にいひさわがれ侍らんがいみじきこと。といひて。なきまどひて。煙にたぐひてしたひまゐりなんといふ。ことわりなれど。さなん世中はある。わかれといふものゝかなしからぬはなし。とあるもかゝるも。おな

〔玉〕たゞいまのとは今夜葬むとするなれば今のうちに見ずはといふ意なり云々

十七日の月　（釋）たちまちの月とよむといふ說はいかゞたゞ音にて讀べし前後の例なり

かはらのほど　〔湖〕鴨川なり

御さきの火　〔孟〕たいまつ也

鳥部野のかたなど　〔湖〕とりべのゝ葬送の地墓原などあるべきに平生の心ならば物むつかしかるべきを唯今の御心には何とも思ひ給はぬ也　（釋）尼のすめる東山のへんを或抄に今の靈山のあたりならんかといへり二條院より出てそのわたりへ出たち給ふに河原のほどより鳥部野の見やらるゝなるべし

女ひとりなくこゑのみして　（評）右近を思はせたる例のいとくはし

わざとの聲たてぬ念佛　〔新〕大かたは聲を高く佛の御名を唱ふるをこはいとつぶ〳〵と唱ふ

るないふならむ一向に無言念佛にはあらじさてはいかにともしられじ　(釋)惟光かねてしのびやかにと誂らへたるべければわざと聲たてず
して靜に念佛するさまなり　舊注に葬送以前無言念佛得二十五功德一などいふ事を引れたれど新釋にいはれたるがごとくなるべし
寺々のそやも　〔孟〕諸寺初夜後夜の長講とて行ふ也　(釋)初夜の行法の聲たえてしめやかなるさまあはれふかし
清水のかたそ光おほく見えて　〔河〕寶龜十一年初建立延曆廿四年官符界二四至一以二田村丸私宅一寄附云々　〔細〕十七日の參詣の人のさまなり
(評)物みなしめやかにあはれなる中に清水の火の光を挾まれたるいとめでたし
大とこ　〔河〕嵩宗制天下名山置二大德七人一　〔湖〕行功のつもりたるをいふ也
涙のこりなく　(釋)所のさまのいとあはれなるにたふとげなる聲に經よみたるを聞給ひてかなしさの心に感じて涙の多く出る也
火とりそむけて　(釋)或抄云死人の方へは灯をむけずしてそむくるもの也　〔玉〕源氏の御出によりてといふ注はいかゞ
うこんは屏風へだてゝ　〔細〕夕顏上と屏風へだてゝ也
むかしのちぎり　(釋)昔の世の契といふ意にてかの宿緣の事也
たれとはしらぬに　(釋)源氏君をも夕顏上をも誰とはしらぬにといふ注よろし誰とはしらずあやしとは思へど事がらのあはれなる故にみな
みなもらひなきをしたる也
かなしき事をばさる物にて　〔玉〕かなしき事はいふもさらなればそれはそれにてといふ意也すべてさるものにてといふ詞は皆しかり
人にいひさわがれ侍らんが　〔湖〕右近がしわざといはんと也
けふりにたぐひて　(釋)火葬の煙にたぐひて右近も夕顏をしたひゆかんといふ也
さなん世中はある　〔玉〕世中といふ物はさやうに賴みに思ふ人に思ひかけず俄に別るゝやうの事つれにおほくあるならひぞと也そも〳〵此所
の源氏君の語はすべて右近が夕顏上のにはかに非業なるがごとくにてうせられたる事を誠にふかくなげくをなぐさめんとてのたまへるなれ
ば其心を得て解べき也
わかれといふものゝ　〔玉〕たとへば年老て後よのつねのごと病て死るわかれなどにてもかなしさは同じ事にてすべて別れにかなしからざるわ
かれはなければ夕顏の事をもさのみ殊にな思ひそと也云々
とあるもかゝるも　〔玉〕よのつねのやうに病して死るなども又夕顏のごとく思ひかけぬ事にて俄に死るもその別れのやうはさま〴〵かはれど
もいづれもみな定まれる命のかぎりある物にて別るゝなれば畢竟は同じことぞと也
われをたのめ　(釋)我をたのみにして仕へよとの意也
かくいふわが身こそは云々　(評)上よりいとせちなるかなしさのさまをつくしてつひに右近がうへに及びそれをなぐさめ給ふとて源氏君の

喩へ給ふ事をいひて結び終りたるを又まきほぐしてこの二三句を書添られたるさらにかなしさのわき出たるこゝちしていはんかたなき餘情ありかへすぐもいみじき文かきなるかな

これみつ云々　（評）上によふけぬさきにはやかへらせおはしませと有

いとゞしき朝ぎり　〔湖師〕たゞさへ心まどひの折ふしにいとゞ霧に途方を失ふこゝちし給ふ也

ありしながら　（釋）夕顔の屍の在世のまゝにて打ふしたりつるを思ひ出給ふ也

うちかはし給へりし　〔玉〕すべてかはすとはたがひに相交ふるをいひて衣を打かはすは寐たる時男女たがひにうちかけまじへきる也さればこゝは河原院にて夕顔と寝給ひたりし時たがひにまじへ給へりし源氏君の御衣の夕顔の死骸の方につきてそのまゝにてあるを見給へる也きられたりつるといふもたしかに着たるにはあらずおのづから

じいのちのかぎりあるものになんある。思ひなぐさめてわれをたのめ。との給ひこしらへても。かくいふ我身こそは。いきとまるまじきこゝちすれ。との給ふもたのもしげなしや。惟光。夜はあけがたになり侍ぬらん。はやかへらせ給ひなんと聞ゆれば。かへり見のみせられて。むねもつとふたがりて出給ふ。みちいと露けきに。いとゞしき朝霧に。いづこともなくまどふこゝちし給ふ。ありしながらうちふしたりつるさま。うちかはし給へりし。わがくれなゐの御そのきられたりつるなど。いかなりけんちぎりにか。と道すがらおぼさる。御馬にもはかぐしくのり給ふまじき御さまなれば。また惟光そひたすけて。おはしまするに。つゝみのほどにて。馬よりすべりおりて。いみじく御こゝちまどひければ。かゝるみちの空にてはぶれぬべきにやあらん。さらにえいきつくまじき心ちなんする。との給ふに。これみつもこゝちまどひて。わが（身）はかぐしくは。さの給ふとも。かゝる道にゐて出奉る

死骸にまつはれて着たるやうにてある也

（評）この事がらいと〳〵かなしくして虎狼もなきつべし

つゝみのほどにて〔拾〕兼輔を堤の中納言といひ大和物語に監命婦のつゝみなる家をうりてとあり所の名なり

かゝる道の空にてはぶれぬべき

（釋）道のそらは途中といはんがごとし空はかゝる所なきものなれば此方へも彼方へもつかぬ間の事を空といへるなりはぶれは溢と同じ言にて在所を放れてたゞよひゆく事にいへり水の溢るといふも堤をこえて他へゆくにて思ふべしこゝは源氏君かなしびの餘りに途中にてゆくへなくあぶるゝやうにおぼえ給ふ意也諸注くだ〳〵しくしてげにと覺ゆるもなし

わがはか〴〵しくは（釋）湖月抄の頭書に引たる文にはわが身とありて細流にもわが身はか〴〵しくは此御出をも諫め申てとゞむべき物

べきかは。とおもふに。いと心あわたゝしければ。川の水にて手をあらひて。清水の觀音をねんじ奉りても。すべなく思ひまどふ。君もしひて御心をおこして。心のうちに佛をねんじ給ひて。又とかくたすけられ給ひてなん。二條院へかへり給ひける㊂あやしう夜ふかき御ありきを。人々みぐるしきわざかな。このごろ例よりも。しづ心なき御しのびありきのうちしきるなかにも。きのふの御けしきの。いとなやましうおぼしたりしには。いかでかくたどりありき給ふらん。となげきあへり。まことにふし給ひぬるまゝに。いといたうくるしがり給ひて。二三日になりぬるに。むげによわるやうにし給ふ。内にもきこしめしなげくことかぎりなし。御いのりかた〴〵にひまなくのゝしる。まつりはらへずほうなど。いひつくすべくもあらず。世にたぐひなくゆゝしき御ありさまなれば。世にながくおはしますまじきにや。とあめのしたの人のさわぎなり㊂くるしき御心ちにも。かの右近をめしよせて。つぼ

ねなどちかく給はりてさふらはせ給ふ。惟光こゝちもさわぎまどへど。思ひのどめて。この人のたつきなしと思ひたるを。もてなしたすけつゝさふらはす。君はいさゝか隙ありておぼさるゝ時は。めしいでゝつかひなどし給へば。ほどなくまじらひつきたり。ぶくいとくろうして。かたちなどよからねど。かたはに見ぐるしからぬわかうどなり。あやしうみじかゝりける御契にひかされて。我も世にえあるまじきなめり。年ごろのたのみうしなひて。心ぼそく思ふらん。なぐさめにも。もしながらへば。よろづにはぐゝまんとこそ思ひしか。ほどもなくまたたちそひぬべきが。くちをしくもあるべきかな。としのびやかにの給ひて。よわげになき給へば。いふかひなきことをばおきて。いみじうをしとおもひきこゆ◎とのゝうちの人。あしをそらにておもひまどふ。うちより御つかひ雨のあしよりもけにしげし。おぼしなげきおはしますをきゝ給ふに。いとかたじけなくて。せめてつよくおぼしなる。大殿もいみ

たゞ惟光が後悔也と有然らばもとはわが身とありけんを寫しおとせるなるべし身もじなくてはいかゞ也

さのたまふとも　（釋）今一たび屍を見にゆかんとのたまふとも也

川の水にて手をあらひて

（釋）觀音を念ずるとて手を洗ひ清めたる也諸抄に古き文ども引れたれどいたづら也さて清水の觀音は其頃靈驗いちじろくいへるにけふ其緣日なればとり出たる也上に清水のかたぞ光おほく見えてといへる脉に心をつくべし

人々見ぐるしきわざかな

（釋）人々は二條院の女房たちなどなるべし見ぐるしきは見て苦しとするかたにて笑止などいふに近し

きのふの御けしきの

（釋）きのふ惱ましくし給ひし御けしきなりしにかくしのびありきし給ふはいかなる事ぞとなげきあへる也

まことにふし給ひぬるまゝに　〔湖說〕昨日まではさのみわづらひ給ふ事はなし物思ひ又はけがらひにふれ給へるをまぎらさんとの御わづらひ
なりしがけふは眞實にわづらひ給ふと也　(釋)わづらひ給ふ事はなしといへるはわろしきのふもなやましくし給ひし事上に見えたり其外は
此說のごとし　〔玉〕まことにはくるしがり給ふへかゝる意也
よわるやうに　(釋)すべてよわるといふ詞は衰弱して頼ずくなくなるやうの意につかひたる例也上下同じ
まつりはらへ　〔玉〕此ころ病のいのりなどに祭祓といふことおほく見えたるは陰陽家のおこなふわざ也
世にたぐひなく云々　(釋)源氏君世にたぐひなく何事もめでたくおはします故に却て短命にやあらんと天下の人のなしみさわぐこと也あまり
にたらひたる人は命短きもの也と今の諺にもいふこと也
くるしき御心ちにも云々　(釋)苦しき御こゝちの中にも夕顔のいたみとおぼして右近をめしよせて局を給ひて御座近くさしおき給ふなり
惟光こゝちもさわぎまどへど云々　(釋)これみつ源氏の御病にこゝちも騷ぎまどへど右近がたつきなきを助けてありつかする也
まじらひつきたり　(釋)右近二條院の人々に交りてなり合たる意也
ぶくいとくろうして　〔細〕服衣の色深き也說々あり不レ可レ用レ之歟　(釋)夕顔上のために右近凶服をきたる也凶服を着てはえなきうへにかた
ちもよからねど見ぐるしからぬ若人也といふ意也
としごろのたのみうしなひて云々　(釋)右近夕顔上を年ごろたのみてつかへしを其頼とする人を失ひてさぞ心細く思ふらん其なぐさめにわれ
もしながらへば萬事につけて汝を養育せんと思ひしをほどもなく我も夕顔と共に死ぬべく思ふがくちおしといふ意也たちそひぬべきとは火
葬の煙にたちそふべきと云意をはぶきていへる也上に右近が煙にたぐひてといへるに同じかく省きてもしか聞ゆるは此頃常にいひならへる
詞なる故なるべし
いふかひなき事をばおきて　(釋)舊注に夕顔の上の事をば置てといへるはたがへりこれはよろづにはぐゝまんとの給へるをうけてはぐゝむ人
なくたのみがひなき事をばさしおきてまのあたり源氏君のむなしくなり給はん事を惜く思ふといふ意也なき給へばとあるばもじをあぢはふ
べし
あしをそらにて　(釋)俗言に足をさかしにしてといふにあたりて奔走にいとまなきたとへの語也拾遺に萬葉集の歌どもを擧て類例としたるは
心の空なる例にてこゝにはいかゞ
あめのあしよりもげにしげし　〔拾〕兼盛集に「君を思ふ數にしとらばをやみなくふりそふ雨のあしはものかは文章にもしげき事には雨のこと
し林のごとしなどいへり　〔河〕しげき事をば如二雨脚一と詩にも作れり　(釋)けには異に也舊注にまさりてなりといへり
つよくおぼしなる　(釋)しひて心づよく思ひかへしてみづからつとめ給ふ也

けいめいし給ひて　〔玉〕經營也俗言にていはゞきつう御せわたし給ふといふことなり云々

さま〴〵の事を　〔湖〕祈禱修法などなり

ことなるなごり　〔釋〕ことなるは例に異なるにて卽異例也なごりは其病の餘波也おこたりは病の怠るにて快氣の事なり

けがらひいみ給ひしも云々

〔釋〕死穢を忌給ひしも快氣し給ふ日もひとつに滿竟たる夜なればといふ意なり湖月に夕顏の死給ふは八月十六日なり然ばこゝは九月十六日か十七日の比なるべしといへり　〔玉〕よは夜なり内の御とのゐ所に參り給ふといふへかけていへるなり世と心得たるはひがことなり

わが御車にて　〔孟〕内より致仕大臣の同車なり　〔細〕葵上の御方にとどめ置奉らるゝなり

御物いみなにやかやと

〔評〕男君の情を見るがごとくうつ

じくけいめいし給ひて。日々にわたり給ひつゝ。さま〴〵の事をせさせ給ふ。じるしにや。廿日あまりいとおもくわづらひ給へれど。ことなるなごりのこらず。おこたりざまに見え給ふ。けがらひいみ給ひしも。ひとつにみちぬるよなれば。おぼつかながらせ給ふ御心わりなくて。内の御とのゐどころに參り給ひなどす。大殿わが御くるまにて。むかへ奉り給ひて。御物いみなにやかやと。むつかしうつゝしませ奉り給ふ。われにもあらず。あらぬよにかへりたるやうに。しばしはおぼえ給ふ。九月廿日のほどにぞおこたりはて給ひて。いといたうおもやせ給へれど。なか〳〵いみじうなまめかしうて。ながめがちにねをのみなき給ふ。見奉りとがむる人もありて。御ものゝけなめりなどいふもあり。右近をめしいでゝ。（ここより二條院にての事也）のどやかなる夕ぐれに。物がたりなどし給ひて。猶いとなんあやしき。などてその人としられじとは。かくい給へりしぞ。まことに「あまのこなりとも。さばかりに思ふをしらで。

されたりむつかしうといへる殊にめでたしこは若き源氏君の心になりていへるなり

おこたりはて　（釋）全快し給ふ也

ながめがちに　（釋）夕顔の事を思しいでゝ物おもはしく空をながめがちにしのび／＼なき給ふさま也

御物のけなめり　（釋）ものゝけとは鬼物の氣の人の身に入てさま／＼怪しき事いふ類ひの事をいへり他にしらせずひとりねをなき給ふを見て御ものゝけならんと人々の評ずるなり

あまの子なりとも

〔孟〕これは前に蜑の子なればといひし事を思ひ出給ふなり

〔湖師〕たとひまことにあまの子にて宿もさだめず賤しき人なりともなり

さばかり思ふをしらで

〔玉〕しらでは俗言にとんぢやくせずかまはぬといふ意なりすべて雅言にはしらずといふに其意なるおほし心得おくべしつれにいふしら

へだて給ひしかばなんつらかりし。との給へば。などてかふかくかくし聞え給ふことは侍らん。いつのほどにてかは。なにならぬ御なのりを聞え給はん。はじめよりあやしうおぼえぬさまなりし御ことなれば。うつゝともおぼえずなんある。との給ひて。御名がくしもさばかりにこそは。と聞え給ひながら。なほざりにこそまぎらはし給ふらめ。となんうき事におぼしたりし。と聞ゆれば。あいなかりける心くらべもかな。われはしかへだつるこゝろもなかりき。たゞかやうに人にゆるされぬふるまひをなん。まだならはぬことなる。うちにいさめの給はするをはじめ。つゝむ事おほかる身にて。はかなく人にたはぶれごとをいふも。ところせうとりなし。うるさき身のありさまになんあるを。はかなかりしゆふべより。あやしう心にかゝりて。あながちに見奉りしも。かゝるべき契にこそはものし給ひけめ。とおもふもあはれになん。またうちかへしつらうおぼゆる。かうながかるまじきにては。などさしも心

ずの意にしては聞えぬ所おほきぞかし
いつのほどにてかは
〔湖〕いつの間にかさやうの俗姓などまで顯はし給はんずるぞとなり
なにならぬ 〔釋〕何ばかりにもあらぬいやしき名を告給はんといふ意なり源氏君に對しておのが主のうへを卑下したる詞なり
あやしうおぼえぬさま 〔釋〕はじめより名をも告ずして逢參らせたるがあやしきなりうつゝともおぼえずは夢のやうなりとの意なり
御名がくしも云々
〔湖師〕此御名がくしとは源の事をいふなり云々
〔玉〕聞え給ひながらは夕顔のおしはかりて源氏君ならんそれゆゑにかゝる小屋に通ひ給ふ事をつゝましくおぼして名をば顯し給はぬにこそあらめと詞には申給ひながらも心の内にはうきことにおぼしたりしと語るなり 〔釋〕なほざりには夕顔をなほざりにおぼす故に名

にしみて。あはれとおぼえ給ひけん。なほくはしうかたれ。今はなにごとをかくすべきぞ。七日々々の佛かゝせても。たがためとか心のうちにもおもはん。との給へば。なにかはへだて聞えさせ侍らん。みづからしのびすぐし給ひし事を。なき御うしろにくちさがなくやは。と思ひ給ふるばかりになん。おやたちははやううせ給ひにき。三位ノ中將となん聞えし。いとらうたきものにおもひ聞え給へりしかど。我身のほどの心もとなさをおぼすめりしに。いのちさへたへ給はずなりにし後。はかなき物のたよりにて。頭中將まだ少將にものし給ひし時。見そめ奉らせ給ひて。三年ばかりはこゝろざしあるさまにかよひ給ひしを。こぞの秋の頃。かの右の大殿より。いとおそろしきことの聞えまうでこしに。物おぢをわりなくし給ひし御心に。せんかたなうおぼしおぢて。にしの京に。御めのとのすみ侍る所になん。はひかくれ給へりし。それもいと見ぐるしきにすみわび給ひて。山里にうつろひなんとおぼしたり

をあらはさずまぎらはし給ふといふ意なり猶餘釋に云

心くらべ　〔釋〕互に名をあらはさじとしたる事を心くらべとはの給へる也心くらべは心に思ふすぢをたてあひてまけじとするをいへり

人にゆるされぬふるまひ　〔細〕しのびありきの事なり

ならはぬ事なる　〔釋〕此下ににをなどのもじおちたるか

ところせう　〔釋〕源氏君の御身の重き故に他よりも重々しくとりなして輕々しき御ふるまひのなりがたきを所狹(トコロセウ)といへるなり

はかなかりしゆふべ　〔新〕かの夕顔をりつる夕より逢そめて後の事までをかねいふなり

あはれになん又打かへし云々　〔釋〕あはれにおぼゆる中に又打かへしつらくも覺ゆといふ意なり語脉點のごとしよく味はふべし

あはれとおぼえ給ひけん　〔玉〕これはみづからの事なれば給ひといふ言いかゞなるごとく聞ゆれども然らずすべておぼえは思はれといふ言にて其中に人に思はるゝ意なるありこゝもそれにて夕顔の我にあはれと思はれ給ひけんといふ意なる故に給ひは夕顔へかゝれり

七日々々の佛かゝせても　〔湖師〕これ十三佛を七々日の間にあてゝ書て亡者の爲に供養する事也　〔釋〕或抄に忌佛とて七日々々の本尊を繪にかき又は木像に作りて供養する事也といへり

心のうちにも　〔評〕夕顔の事は密事(ミソカ)にてあらはにする事ならねば心の中にもといへるにて俗にいふかゆき所へ手のとゞくといふべき文勢なり

おやたちは　〔細〕こゝより語り出す也

わが身のほどの云々　〔湖師〕夕顔をいとほしく思ひ給ひてよき緣にもと思ひ給へりしかど位のほどのあさき故心のまゝならぬをおぼしたる其上に命さへはかなくなり給ひしと也　〔釋〕心もとなさは身の分限のはかばかしからぬ故に行末のおぼつかなき意也

三とせばかり　〔新〕頭中將三年かよひ給ふ二年めに玉かづらの君生れ三年めにうき事ありて外へかくれ四年めに源のかよひ給へり此次の年玉かづらの四つなるを筑紫へゐてゆく

こぞの秋の比　〔細〕風ふきそふ秋もきにけりの歌のこゝろ也

右のおほい殿　〔釋〕頭中將の北方四君の御父なり物のたよりにつけておどし給へる事帚木にも見えたり

御めのとの　〔細〕揚名介が妻也

ことしより　〔釋〕よに三年塞りなどいふ方なるべし今年よりといふにてしか聞ゆ

たがふとて　〔細〕方違への爲に此五條なる家へ出給ふなり

おぼしなげくめりし　〔玉〕めりしといふてにをは調はずかならず誤有べし　〔釋〕ことゝの下になんの辭脫(チ)たるなるべし

給ふめりしかと
〔玉〕しかといふ詞上にこそといふ言なくていかゞかもじけづるべきかもしかといはゞ上をつれなくのみもてなしてこそと有べし
〔釋〕案にかもじをけづりたりとも上になんの辭なくてはしもじにかなひがたしされば決くこそのおちたるなるべし此説に依て今補へ試みつ

まどはし 〔釋〕迫まどはしの意にて失ひたる事也

我にえさせよ 〔評〕此一段遠く玉かづらの卷を書出べき伏案なり玉かづらを尋ね出し給はん料に右近を二條院へのこしとゞめさせてそれにかたらひあつらへ給ふ事を先いひて後に初瀬にて右近が玉かづらにあひし事の不都合ならぬやうにかまへられたる筆つきいとたくみなり見ん人心をとゞめおくべし

かの中將にも傳ふべけれど云々
〔新〕頭中將にしらせばかの隱れたるも源のわざ也とかごとおひなん

しを。ことしよりはふたがりたるかたに侍りければ。たがふとて。あやしき所に物し給ひしを。見あらはされ奉りぬること。とおぼしなげくめりし。よの人にゝず。物づゝみをし給ひて。人に物を思ふけしきを見えんを。はづかしきものにし給ひて。つれなくのみもてなして(こ)(そ)。御らんぜられ奉り給ふめりしか。とかたり出るに。さればよ。とおぼしあはせて。いよ〳〵あはれもまさりぬ。をさなき人まどはしたり。と中將のうれへしは。さる人や。とゝひ給ふ。しか。をとゝしの春ぞものし給へりし。女にていとらうたげになんと聞ゆ。さていづこにぞ。人にさとはしらせで。我にえさせよ。あとはかなくいみじと思ふ御かたみに。いとうれしかるべくなん。との給ふ。かの中將にもつたふべけれど。いふかひなきかごとおひなん。とざまかうざまにつけて。はぐゝまんにとがあるまじきを。そのあらむめのとなどにも。ことざまにいひなしてものせよかし。などかたらひ給ふ。さらばいとうれし

くなん侍るべき。かのにしの京にておひいで給はんは。心ぐるしうなん。はかぐ〳〵しくあつかふ人なしとて。かしこになんと聞ゆ。夕暮のしづかなるに。そらのけしきいとあはれに。おまへの前栽かれ〴〵に。むしのねもなきかれて。もみぢのやう〳〵色づくほど。ゑにかきたるやうにおもしろきを見わたして。心よりほかにをかしきまじらひかなと。かの夕がほのやどりを思ひ出るもはづかし。竹の中にいへばとゝいふ鳥の。ふつゝかになくをきゝ給ひて。かのありし院に。このとりのなきしを。いとおそろしと思ひたりしさまの。おもかげにらうたくおもほしいでらるれば。年はいくつにかものし給ひし。あやしうよの人にゝず。あえかに見え給ひしも。かくながゝるまじくてなりけりとの給ふ。十九にやなり給ひけん。右近はなくなりにける御めのとの。すておきて侍りければ。三位の君のらうたがり給ひて。かの御あたりさらず。おふしたて給ひしを思ひ給へいづれば。いかでか世に侍らむとすら

そも世にある人故ならばさてもありなんをかゝる後にはいよ〳〵いふかひなき恨をうけんものと也されどさる事のいひわけにも又女君の靈の思はん所につけてもてふた左につけ右につけとはの給ふ也

〔玉〕とざまかうざまにつけては夕顔の形見にもあり又頭中將の子にて葵上の樣にてもあればいづれにつけても外ならればと也（釋）とざまかうざまの解は小櫛まさらんか舊說どもはひがこと多し

そのあらんめのとなどにも云々

（釋）その今幼き人につきてある乳母などにも何とか異やうにいひなしてと也さるは源氏君の名なつゝみ給ふ故なり

はかぐ〳〵しくあつかふ人なしとて

〔湖〕夕顔の方にてはたれもしつかりとそだつる人なしとて西京にてやしなふと也

夕ぐれのしづかなるに云々

（評）例のけしきをかゝれたる筆つきいとめでたし秋の末のありさま

を二三句につくされたりさてこのけしきのいみじきにあはれを催し且源氏君の御かたちのいみじきに感じて右近が思ふ心をうごかし次に鳩の事をとり出て源氏君のかなしびを動かしたる例のいといみじき筆なりけしきのいたづらならぬたゞあぢはふべし

竹の中にいへばとゝいふ鳥の

〔河〕和名抄本草云鵤伊倍八止頸短ク灰色也　(釋)案に鵤は家にすむ故の名と聞えたればつれの鳩なるべしこれは竹の中になくとあれば山鳩と聞えたり作者たまへ〳〵考へそこれられたるか和名抄云野王按鳩音丘和名夜萬八止此鳥種類甚多鳩ノ共惣名也とあり

かのありし院に此鳥の鳴した

〔新〕かの六條わたりの院などの如き大きにて人少なる家には必此はとのすむ物なるを以てかくいへり先にはかゝで今かくいふも又文の一つ也

おもほし出らるれば

ん。「いとしも人にとくやしうなん。物はかなげにものし給ひし人の御心を。たのもしき人にて。としごろならひ侍りけること。と聞ゆ。はかなびたるこそ女はらうたけれ。かしこく人になびかぬ。いと心づきなきわざなり。みづからはかゞ〳〵しくすくよかならぬこゝろならひに。女はたゞやはらかにて。とりはづしては人にあざむかれぬべきが。さすがにものづゝみし。見ん人の心に〔は〕したがはんなんあはれにて。わが心のまゝにとりなほしてみんに。なつかしくおぼゆべきなどのたまへば。このかたの御このみには。もてはなれ給はざりけり。と思ひ給ふるにも。くちをしく侍るわざかな。とてなく。そらのうちくもりて。風ひやゝかなるに。いといたくながめ給ひて。

見し人のけふりを雲とながむればゆふべの空もむつましきかな。とひとりごち給へど。えさしいらへも聞えず。かやうにておはせましかば。と思ふにも。むねのみふたがりて。おぼゆ。みゝかしがましかりしきぬたの音を。お

〔新〕おもほし出ればとは戀しくかなしく思ひ給ふ故にくり返し慕れ給ふなり

あゑかに　〔孫釋〕いとわかゝくて物はかなくよわき意也

なくなりにける御めのとの　〔湖師〕右近が母も夕顔のめのとなりし也すておきて、とは右近母におくれし事也西京のめのとは右近が母うせて後よりの事なるべし

いかでか世に侍らんとすらん　〔釋〕此語まぎらはし案に云々の御恩を思ひ出れば夕顔と共に死ぬべき事なるをかくおくれながらへてあるはつれなき命也いかでか共に死ずして世にながらへんとはすらんといひて歎きたるなるべしすらんとある辭をよく〳〵味はふべし

いとしも人に　〔孟〕「思ふとていとしも人になれざらんしかならひてぞ見ねば戀しき　〔湖師〕異本人にむつれけんと有　〔拾〕孟津に引れたるは拾遺戀四の歌にて今の本にはいとこそ人になれざらめ〻有緣による物ならなくにを物とはなしにと引れたるたぐひなるべし　〔釋〕いとしも人はといへるがごとく初よりなれざらばさてあるべきをかゝく御恩を蒙りて忝きは今となりては却て悔しといふ意也

物はかなげにものし給ひし人の　〔釋〕物はかなげなる夕顔の心を年來たのもしき人として打たのみなれ來りたるがはかなきとの意也しかならひてぞといふ引歌の句をならひといふ詞にあらはしたり

はかなびたるこそ　〔孟〕右近が前の詞に物はかなげにものし給ひし人といひし詞に付て女ははかなびたるこそよけれと源の宣ふ也

さすがに物づゝみし　〔玉〕孟津にわが男にはしたがひ世上には物づゝみしとあるはたがへり物づゝみしはすべてのやうをいへるなれば夫に對しても同じ事也見ん人の心にはといへるにはは世上の人に對へていふ詞にはあらず

このかたの御好みには　〔釋〕今この源氏の仰せらるゝ方の御好みには夕顔はもてはなれず御好のまゝなりしと思ひ出るにも殘念也といひてなく也

空の打くもりて云々　〔評〕くれゆく秋の夕のけしきいとあはれ也上にもみちやう〳〵色づくほどゝありし脉をつぎて歌のあはれを催す筆づかひいとめでたし

見し人の云々　〔玉〕二の句けふりと雲をといはでは事たがへるやうなれど然らずけふりをあの雲ぞと思ひてながむれば也結句むつかしきかなとある本は誤也　〔玉補〕けふりと雲をといはでかくいへるをかし

えさしいらへも聞えず　〔釋〕右近が分をあらはしたる詞

かやうにておはせましかば　〔湖師〕只今右近が源にちかく馴るやうにして夕顔の源とおはしまさばうれしからんと思ふにかなしき也

みゝかしかましかりしきぬたの音を　〔釋〕上に白たへの衣うつきぬたの音もかすかにこなたかなた聞わたされとありし脉なり

まさにながき夜　〔河〕八月九月正長夜千聲萬聲無二止時一　白氏文集

かのいよの家の小君
(評)こゝより二たび空蟬の事を引出てさきの脉をつぎたりさてつひに空蟬は國へ下り夕顔はために佛事をいとなみ給ふにてしばらく共にかきはてられたり此下にすぎにしもけふわかるゝも二道にといへる歌其とぢめ也心得おくべし

ことにありしやうなる〔細〕今は空蟬に音信給ふ事もなき也

うけ給はりなやむを
(釋)此詞約やかにして味ひあり源氏君のなやみ給ふを空蟬の方にいひうつして承りなやむといへる也
〔孟〕ことに出てはえこそとはぬと歌へかけて見るべし

とはぬをも云々 〔細〕源のなやみ給ふをも空蟬ははゞかりて問奉らぬを源も又などかとも音信給はで程ふるを思ひみだるゝと也 〔餘〕いかばかりかはといへるは五十日をふくみてよめるならんか云々

ますだは 〔河〕「れぬなはのくるしかるらん君よりもわれぞますだの

ぼし出るさへ戀しくて。まさにながき夜とうちずじてふし給へり「かのいよの家のこぎみまゐるをりあれど。ことにありしやうなることづてもし給はねば。うしとおぼしはてにけるを。いとほしと思ふに。かくわづらひ給ふをききて。さすがにうちなげきけり。とほくくだりなんとするを。さすがに心ぼそければ。おぼしわすれぬるかとこゝろみに。うけ給はりなやむを。ことにいでゝはえこそ。

　とはぬをもなどかとゝはでほどふるにいかばかりかは思ひみだるゝ」ますだはまことになん。と聞えたり。めづらしきに。これもあはれわすれ給はず。いけるかひなきや(い)(か)(に)。たがいはましごとにか。

　うつせみの世はうき物としりにしをまたことのはにかゝるいのちよ。はかなしや。と御手も打わなゝかるゝに。みだれかき給へる。いとゞうつくしげなり。猶かのもぬけをわすれ給はぬを。いとほしうもをかしうもおもひけり。

いけるかひなき〔餘〕拾遺戀四に有𦂶田の池は大和國高市郡にあり〔釋〕われぞますだの云々といへるは實(マコト)にて侍りけりといふ意也上の文の詞の初よりこゝに至るまで皆源氏の御なやみを我身にうつしていへるいとたくみ也心を付べし

めづらしきにこれも〔玉〕たゞ今はひたすら夕顔の事をおぼすころなる故にこれもといふ也

いけるかひなきや〔釋〕案に湖月抄頭書に秘訣を引たる所の文にいけるかひなきやいかにとしるせりこれはさる本の有しを引たるが本文には脱しゝなるべしかくては意明らかなる故に今いかにといふ語を補ひつ玉小櫛補遺に物をよび出す詞にてよに同じきや也とていへる説あれどさても猶おだやかならずさて意はいけるかひなしといひおこせしは何事ぞと告めたるにて俗言にヘン何ノコトヂヤヤラといふ意也たがいはまじことにかとはそは誰がいふべき事にかあらんこなたよりこそいふべき事なれといふ意也

うつせみの云々〔釋〕初句は枕詞ながら猶かのもぬけを含めるなるべしさて世はうき物としりはてしを再びかやうにとはるゝにつけて其言のはに命をかけとゞめたるはといふ意也玉小櫛補遺に言のははのは蟬の羽の縁の語也といへりさも有るべし

はかなしや〔釋〕さる言のはにかゝりて生(イキ)とまりたる命もはかなしと歎よりつゞけたる歎息の詞也

御手も打わなゝかるゝに〔箋〕病後のさま也〔釋〕御手のわなゝかるゝにみだれがき給へるさまかへりてうつくしといへる也これかの源氏君をほめたる例の文なり

かのもぬけをわすれ給はぬを〔細〕此歌に空蟬のとよみ給ふは猶かのもぬけの事を忘れ給はぬよと思ふ也

あやしやいかに思ふらんと〔玉〕軒端荻のすでに男女の交(マジラヒ)をなしたる事を少將のあやしく思ふべしとおぼす也さてそれは我ぞといふ事を少將にもしらせがてらの心にて此文はつかはす也下に我なりけりと思ひあはせばさりとも云々とあるにて心得べし思ひあはせばゝ男女の交をなしたるは源氏君にてありけりと此文にて思ひ合すなりたゞ注のまゝにては思ひあはすといふこと聞えずよく味はふべし〔玉補〕あやしとは樣あしく見ぐるしきやうなる事をいふ詞にて此女の破瓜の事をさしての給へりさてそれを少將のいかにいふかしく思ふらんと思しめす意也小櫛のときかたにては此文意いまた明らかならず〔釋〕小櫛も補遺もあやしやといふ詞を少將のあやしと思ふさまにとかれたるはたがへりもし其意ならばあやしくいかに思ふらんなどぞいふべきをやといへるはさる意ならざる事論なし少將をかよはすと聞しめして源氏君のあやしやとおもほすよし也いかに思ふらんとあるが破瓜の事也

しにかへり思ふ心は〔玉〕かへりは其事をつよくいふ詞也きえかへるわきかへるなどのごとし今世の言にもいふこと也〔釋〕この比病にわづらひ給ひし事を軒端荻のゆゑなるやうにいひなし給ふ也

ほのかにも云々〔釋〕ほのかはかすかといはんがごとし軒ばのをぎは軒近く植たる荻の事結ぶは物のさはりにならぬやうに引結ぶ事也さて其結ぶに契を結び給ひし事をかねてかの碁打つる夜かすかにも契をむすばずは露ばかりのうらみをも何が故にかくべきぞといふ意也さてその

かごとをかくろは少將のかよふといふことをかこつ意也諸注にこれを源氏君の病をとはぬをかこち給ふ意にとかれたるはいみじきひがこと也病をとはぬばかりをさしもかこつべき事かはしにかへり思ふとあるも皆少將の事なるをや
〔玉〕露のは荻又むすばずはの緣にて意はいさゝかのといふ意也かごとはいひくさなり
たかやかなるをぎにつけて〔箋〕人目をはゞからざるよし也よのつれの義にあらず〔釋〕此說のごとしわざと少將に見られんとてのわざ也これにつけてもかごとは少將の事なるを知るべし
我なりけりと思ひあはせば云々〔釋〕軒端荻のすでに男女の交したるは源氏君なりけりと思ひあはせばたとひ破瓜の後なりともその罪はゆるすべしと也さるは源氏君の御勢ひつよく何事も世にゆるされ給ふ故なるべしさる故に御心おごりぞあいなかりけると評じたる也

(地)かやうにくからずはきこえかはせど。けぢかくとは思ひよらず。さすがにいふかひなからずは見え奉りてやみなん。と思ふなりけり。かのかたつかたは。藏人の少將をなんかよはす。ときゝ給ふ。あやしや。いかに思ふらん。と少將の心のうちもいとほしく。またかの人のけしきもゆかしければ。小君して。しにかへり思ふこゝろはしり給へりや。といひつかはす。

(源)ほのかにも軒端の荻をむすばずは露のかごとをなにゝかけまし。たかやかなる荻につけて。しのびてとのたまへれど。とりあやまちて。少將も見つけて。われなりけりと思ひあはせば。さりともつみゆるしてん。とおもふ御心おごりぞあいなかりける。少將のなきをりに見すれば。心うしとおもへど。かくおぼし出たるもさすがにて。御かへりくちときばかりをかごとにてとらす。

(軒端荻)ほのめかす風につけても下荻のなかばは霜にむすぼゝれつゝ。てはあしげ

少將のなきなりに見すれば（釋）源氏君は少將にも見せまく思ひ給へども小君とり傳へて少將の居ぬ時に見せし也

こゝろうしとおもへど〔玉〕源氏君のつれなきを心うくはおもへどなり

さすがにて（釋）さすがにすて置がたくて也

かごとにて〔玉〕いひぐさにて也歌はわろけれども早く出來たるばかりを申わけにしてといふ意也申わけは卽其事をいひぐさにする也

ほのめかす云々〔新〕忘れぬ物ながら君は專ら絕給ふと思ひをるに又かくおどろかさせ給ふにつけては有し御契をすてはて給はぬにやと猶なかば思ひたのまれて物思ひのそひ侍るされどあらはれて色に出べきならねば下にむすぼゝるゝといふなるべし且女はもとよりわすれぬを風につけてものゝ辭にしらせたり（釋）歌のおもてはほのめきて吹くる風の寒きにつけても

なるを。まぎらはしざればみてかいたるさま。しなゝしてほかげに見しかほおぼしいでらる。うちとけでむかひゐたる人は。えうとみはつまじきさまもしたりしかな。なにの心ばせありげもなく。さうどきほこりたりしよ。とおぼし出るににくからず。なほこりずまに。又もあだ名はたちぬべき御心のすさびなめり［　］かの人の四十九日。しのびてひえの法華堂にて。ことそがず。さうぞくよりはじめてさるべきものども。こまかに。ず經などせさせ給ふ。經佛のかざりまでおろかならず。惟光があにのあざり。いとたふとき人にてになうしけり。御文の師にてむつまじくおぼす。もんざうはかせめして。願文つくらせ給ふ。その人となくて。あはれと思ひし人の。はかなきさまになりにたるを。あみだ佛にゆづり聞ゆるよし。あはれげにかきいで給へれば。たゞかくながらくはふべきこと侍らざめりと申す。しのび給へれど。御なみだもこぼれて。いみじくおぼしたれば。なに人ならん。その人とは聞えもな

荻の下葉のなかば〳〵霜に結ぼゝれゆくといへるにて折からやう〳〵寒くなりて霜もおき荻葉も枯ゆくによせたる也初句は上の歌にほのかにもとあるをうけて轉したる也下荻は荻の下葉といふ意也 〔玉〕なかば〳〵とはうれしくもあり又思ひむすぼゝれもする意なるべし
うちとけて 〔玉〕これは空蟬の事にてうちとけずして向ひゐたる也軒端荻の其時の顔をおぼし出るにつけて向ひゐたりし空蟬の事をもふとおぼし出て思ひくらべ給ふ也これを軒端荻の事としては人はといへる詞かなはず云々〔拾〕〔新〕同意
なにの心ばせありげもなく云々 〔釋〕こゝより軒端荻の事也かく二人の事をむかへてとり〳〵にいへるは空蟬巻よりの文の體也 〔新〕さうどきは空蟬巻にきは〳〵とさうどけばとありしこと也
なほこりずまに 〔拾〕まはそへたる詞也萬葉第十五にあはずまにしてとよめるもあはずして也

くて。かうおぼしなげかすばかりなりけん。すぐせのたかさよといひけり。しのびててうぜさせ給へりける。さうぞくのはかまを。とりよせ給ひて。

なく〳〵もけふは我ゆふしたひもをいづれの世にかとけて見るべき。このほどまではたゞよふなるを。いづれの道にさだまりておもふくらん。とおもほしやりつゝ。ねんずをいとあはれにし給ふ。頭中將を見給ふにも。あいなくむねさわぎて。かのなでしこのおひたつありさま。きかせまほしけれど。かごとにおぢてうち出給はず◎かの夕がほのやどりには。いづかたに。と思ひまどへど。そのまゝにえたづね聞えず。右近だにおとづれねば。◎◎あやしとおもひなげきあへり。たしかならねど。けはひをさばかりにやとさゝめきしかば。惟光をかこちけれど。いとかけはなれけしきなくいひなして。なほおなじごとすきありきければ。いとゞゆめのこゝちして。もしずりやうの子どものすき〴〵しきが。頭の君におぢ聞えて。やがてゐてくだりけるにやとぞ思

〔河〕こりずまにまたもなき名はたちぬべし人にくからぬ世にしすまへば　古今集　（釋）なき名をあだ名とかへられたる例の筆つき也にくからずも此歌の詞より出たる也こりずまには夕顔空蟬などに懲(コリ)給ふべきになほ懲ずに也

四十九日　（釋）ふるくなゝなぬかとよまれたるを拾遺に音によむべきよしいへるに從ふべし前後の例也

ひえの法華堂にて　〔河〕在二止觀院西一　〔細〕李部王記云天慶六正六藤寛子卒當二三七日一於二叡山東法華堂一修二諷誦一云々

さうぞくよりはじめて云々　（釋）法師に布施する裝束より始めて然るべき物金銀諸具を省略せず沙汰してつかはし給ふ也經佛のかざりは經卷の軸表紙佛像の莊嚴などをいふなるべし

惟光が兄のあざり　（釋）前に見えたる人にて其緣あり

文章博士　〔箋〕文章生の翟學業を經て後博士になるなり

願文つくらせ給ふ　〔玉補〕草稿をかきて見せ給ひて此趣にてさりぬべく取つくろひしたゝむべきよし仰せらるゝをいふ也下にたゞかくながら云々と有にてしるべし

あみだ佛にゆづり　〔玉〕此世にてはわがあひ見し人なるを今は極樂へやりて阿彌陀佛を賴み奉るといふ意也

すぐせのたかさよ　（釋）その人とは知れねど源氏君のかくまでに思しめすはしあはせのよき人也といふ意也

さうぞくのはかまを　（釋）前に見えたる布施物の裝束也これを取よせて歌をかきつけ給ふなるべしさて歌のさまを思ふに袴は下袴と聞えたり

なく〳〵も云々　（釋）いにしへは男女相かたらひて又人にあふまじき誓に下袴の紐を結(ユヒ)かはして他人には解(カ)すまじく口がためたりと聞ゆこの歌なるもさる意をそへたり今日なきながら我ゆひかたむるこの下紐をいつの時何れの世にか再びときて夕顔を相見るべきといふ意なるをくに打とけてといふ意をかれたるゆゑにとけてとはいへる也今日はのはもじはぞとあらまほしげなれど今日はなく〳〵もといふ意なればかくてもよろし　〔玉〕とけて見るべきは打とけて逢見るべき也注に解脫の義といへるはかなはず

このほどまでは云々　〔箋〕四十九日の間は中有にたゞよふ義也然れば其識の生處六道の輪廻いまだ定まらず仍て造佛造經等の善根を修して善果を得せしめんと也中陰經の說なり　〔巴〕今日の作善に生處定らんと也　（釋）六道の中いづれの道に定まりて夕顔の魂はおもふくらんとおもほしやる也

かのなでしこの　（評）玉かづらの君のおひたち給ふ事を頭中將に聞せ給はぬよしをこゝにことわりおく伏案いとめでたしかくて後にたいめんし給ふ處にかゝれたる事を見るべし　おのづからあぢはひふかし

かの夕顔のやどりには　〔孟〕五條の宿には夕がほのいづかたへ行つらんと思ふ也　（釋）其まゝには源氏君と書たまへるまゝに也　（評）夕顔の

事はすでに竟(ハテ)たるをなほ此一段をあらはして玉葛巻の伏案をのこせる也玉かづらの巻の始に「年月へだゝりぬれどあかざりし夕がほをつゆわすれ給はずと書出られたるは此巻を受繼たる詞なることはいふもさらなり「其御めのとのをとこ少貳になりていきければくだりにけりかのわか君の四つになる年ぞつくしへはいきけるとある所よりは此段の脉をつぎたるなり又惟光をかこちければとあるは上に「惟光云々いみじくたばかりまどひありきつゝしひておはしまさせそめてけり云々とあるよりこなたの首尾をあはせて結びたる也そこにもいへる如く源氏君を夕顏の宿へみちびくはいと〳〵難きわざなる故に其子細をばはぶきてたゞ惟光のたばかり事にしなしたる也さるからにこゝにも又いとかけはなれ云々といひてつひにたばかりてかこちごとを遁れたる意として終りたり作りぬしの用意をふかく思ふべきなり

さばかりにやとさゝめきしかば〳〵〔箋〕源といふ事を大かたは知たる也 〔孟〕さゝめきしはさゝやきし也

これみつをかこちければ 〔湖〕源氏へ媒せしは惟光なれば其ゆくへをしらんとかこつ也

なほ同じごとすきありきければ 「湖師」惟光ももとよりいひよりしにかはらず私のけさうをする也しらぬさまを見せんためなり

もしずりやうの子どもの 〔細〕自然受領の子供など夕顏をとりて頭中將におち擢りて國へゐて下りたるかなど思ふ也 〔評〕この事ゆくりなきやうなれど玉葛巻に大夫監を出すべき端をあらはせるなるべしこの家あるじぞ云々とあるは乳母のむすめが玉かづらの事におりたつべき結構なるべし

めのとのむすめ 〔細〕揚名介の妻は嫡女也一人はつくしに住つきたり一人は玉かづらに付てのぼりき玉葛巻に見えたり

三人その子はありて 〔湖〕めのとの子也 〔釋〕案にそのとさしたるはめのとのむすめをいへるごとく聞えたりさらば乳母のむすめの揚名介が妻の子三人ありといふにやされど次々に用あるを思へば猶めのとの子か考ふべし

うこんはこと人なりければ 〔細〕前にいふがごとく右近は別のめのとの子なり

わか君のうへをだにえきかず云々 〔評〕これは玉葛巻に「かの西の京にとまりしわか君をだにゆくへもしらずひとへに物を思ひつゝみ又今さらにかひなき事によりて我名もらすなとくちがため給ひしをはゞかり聞えてたづねてもおとづれ聞えざりしほどに云々とある所へかけて書とゞめられたるなり文の詞によく〳〵心とゞめてあぢはふべし皆彼巻の伏案なり 〔釋〕こゝの語脉は點のごとし

ゆくへなくて 〔玉〕玉かづらのいかになり給へるもしられぬなり

君はゆめにだに云々 〔評〕此一段は上の變化の段の結びなる中に妖物の故を注釋したるなり此段の詞をもても諸抄に御息所の靈といへる説の妄(ミダリ)なるを知るべしさて夕顏を夢に見んとおもほしたるに變化の女をさへ見給へりとかゝれたるいとめでたしかの段にも夢のうちに見給ひたるをこゝにもまた夢に見給ひてその妖物のしかりし故をさとり給へるやうにかゝれたる所露のあやまちなくしていと〳〵めでたし

かの有し院ながら云々 〔釋〕ありし院にて見給ひし夢の中に夕顏に添りし變化の女の同じかたちにて見えたるなり女のとよみきりてさまも云

云と讀べし此詞どもにては夕顔をもひとつに見給ひしと聞ゆさて法事し給ひて又の夜といへるは法力によりてさる妖物も退きたる事をにほはせたるなるべし

われに見いれけんたよりに（釋）妖物の見入るといふこと今俗もいふ詞なりさて源氏君は太刀を抜などしてふせぎ給ひし故に轉じて夕顔に祟りたるさまにかきなしたるなり

いよのすけ神無月の云々（釋）ついたち比は上の十日をひろくさして云例なり（評）この一段は關屋巻へかけてとゝむる結構なりかの巻の初に「いよの介をいひしは故院かくれさせ給ひて又の年ひたちになりてくだりしかばかのはゝき木もいざなはれにけりとあるはこゝの脉を繼たるなり心得おくべし

女房の下らんにとて（新）介の往反は常なるを此度は女房具して下らんにはとてぬさ料の物などいとれもころによくし給ふなり錢をたむ

ひよりける。この家あるじぞ。にしの京のめのとのむすめなりける。三人その子はありて。右近はこと人なりければ。思ひへだてゝ。御ありさまをきかせぬなりけり。となきこひけり。右近はたかしがましくいひさわがれんを思ひて。君もいまさらにもらさじ。としのび給へばわかぎみのうへをだにえきかず。あさましくゆくへなくてすぎゆく◎君は夢にだに見ばや。とおぼしわたるに。このほうじし給ひて又の夜。ほのかにかのありし院ながら。そひたりし女の。さまもおなじやうにて見えければ。あれたりしところにすみけんものゝわれに見いれけんたよりに。かくなりぬることゝおぼしいづるにも。ゆゝしくなん□いよのすけ神無月のついたちごろにくだる。女房のくだらんにとて。たむけ心ことにせさせ給ふ。またうちうちにもわざとし給ひて。こまやかにをかしきさまなる。くし。あふぎ。おほくして。ぬさなどいとわざとがましくて。かのこうちきもつかはす。

けといふといへる說は强たり別にはぬさ袋にぬさ其外扇きぬなど多くとり添ろとおちくぼなどにも委しそれをこゝにはすべてたむけといひたろなりさて是は男のかたへなり女方へのは大かた委しく書たり此の女方のに同じさまなる物贈り給ふを文をゆづり合せて書たるのみ（釋）たむけを餞別の贈物なりといふ舊注も强たろにはあらずもとは道祖神の祭物のぬさより出たろが轉りて贈物の名となれりしなり

くし扇〔巴〕櫛はものゝとゞこほりなとく故なり扇はあふといふ心なりいづれも祝したろ心なり

ぬさ〔萬〕麻旅にて道祖神に手向る故に是を旅人の贈物に古來しけるなり〔新〕ぬさは幣ながら旅路の手向の料に五色の絹をこまかに切て道の神に手向ちらし行なりかのこうちきもつかはす

〔細〕前のもぬけを返し給ふなり

（評）此段空蟬の事をしばらくとぢ

あふまでのかたみばかりと見しほどにひたすら袖のくちにけるかな。こまやかなることゞもあれど。うるさければかゝず。御使かへりにけれど。こ君してこうちきの御かへりばかり聞えさせたり。

せみのはもたちかへてけるなつごろもかへすを見てもねはなかれけり。おもへど。あやしう人ににぬ心づよさにても。ふりはなれぬるかな。と思ひつづけ給ふ。けふぞ冬たつ日なりけるもしるく。うちしぐれて。空のけしきいとあはれなり。ながめくらし給ひて。

すぎにしもけふわかるゝもふた道にゆくかたしらぬ秋の暮かな。猶かく人しれぬ事はくるしかりけり。とおぼししりぬらんかしかやうのくだ〳〵しき事は。あながちにかくろへしのび給ひしも。いとほしくて。みなもらしとゞめたるを。などみかどの御子ならんからに。見ん人さへかたほならず物ほめがちなる。とつくり事めきてとりなす人。ものし給ひければなん。あま

むろ所なる故に此こうちきをかへ
して首尾をとゝのへられたる法い
としめでたし
あふまでの云々、〔箋〕さりとも逢ふ
事もやとそれまでの形見にとゞめ
しうす衣の袖くつるまで我思ひの
いたづらになりけるよとなり

りものいひさがなきつみ。さりどころなく。
ヤカマシキ　罪　避　處　△オボエ侍り」

(釋)袖の朽るに涙の故なるよしをおもはせたるなるべし
こまやかなる事どもあれど　〔玉〕源氏君の御文になり
御つかひは　〔湖〕伊與介へのおもてむきの使はかへりたるなり
せみのはも云々　〔細〕もぬけは夏の衣なり今は冬の衣なる故なり　(釋)蟬の羽のごとく薄かりし衣も今は裁かへて冬となりたるに今さら夏衣
をかへすを見るにつけても音に泣るゝといふ也たちかへてといふ中に月日のたちたることをこめかつ源氏君の御心のかはりたるをにほは
せたるにも有べしさてせめて形見とも見給ふべきに返し給ふは思ひ絶給ふなるべければさすがにかなしといふ意なりかへすは衣の縁なく
は蟬の縁なることはいふも更なり　〔新〕十月更衣の日にはあられど今は冬ちかくなりてけの衣などは歌のとはことなればかくよめるにや
思へど　〔箋〕思へども〳〵也深く思ふ時の詞なり　(釋)案にどはばの誤にや此もじ互に相誤れる事多しどにては穩ならず
ふりはなれぬるかな　〔玉〕萬水一露に伊與へ下向の事なりといへるよろし　(釋)俗言にふり切てしまうたといふ意なり
ながめくらし給ひて　(釋)もの思ひに一日空をながめて日を暮し給ふなり
すぎにしも云々　〔細〕過にしは夕顔上けふわかるゝは空蟬なり云々　〔玉補〕これは空蟬と夕顔とをいふはもとよりながら詞の面は九月盡に暮
にし秋を過にしといひけふ立冬にてくれぬる秋をけふ別るゝといひたるなりさらでは立冬の事をいへるよしなし此歌は十月になりての事な
り云々　(釋)下の句は夕顔の過ゆくと空蟬のたちてゆくとを秋のくれゆくにいひよせたるなりさて意は過にしとけふ別るゝとは二道にゆけ
ど共に行方をしらぬ秋の末かなといふ意にてみな目に見えず成ぬるをふかく歎き給へるなり巧にして餘情かぎりなき歌也
猶かく人しれぬ事は云々　〔湖〕空蟬の事も夕顔の事もみな人しれぬこと也　(釋)上の空蟬と夕顔との事を一つにすべて結びたる詞也くるしか
りけりとおぼし知ぬらんとは心しらひの多くて苦しき事とこれらによりて知り給ふべしと地より評じたる也いと〳〵餘情あり
かやうのくだ〳〵しきことは　〔細〕夕顔の上のこと空蟬の事などなり皆此事をばしるすまじく思ひたれどもと也　〔湖師〕かやうの事は源もあ

ながちにしひて隱ししのび給ひしかば源のためいとほしくてみなもらしかゝざりしなと也云々　(釋)外へもらして記すことを止めたるなといふ意也

みかどの御子ならんからに　〔玉〕いかに帝の御子なればとてといふ意の詞也

見ん人さへかたほならず　〔玉〕源氏君のふるまひをかたはらより見る人にてすなはち見て物語をかきたる人をいふ也　(釋)かたほならずはまほにとりなしてといふ意にてあしき事をとりつくろふを云

とりなす人ものし給ひければなん　(釋)作り事のやうにいひなす人ありければやむ事を得ずのこりなくみなしるしつけたりといふ意也

あまりものいひさがなきつみさり所なく　(釋)のこりなく記しつけたるものから餘りにものいひさがなき罪は記者のうへに避（サケ）ん所もなくおぼゆると也見ん人さるかたにゆるし給へなどの意をふくめたりさり所はさけ所といふがごとし　(評)かやうのくだ〳〵しき事とは上にかく人しれぬ事はとあるをうけてかゝれたれば細流に注し給へるごとく空蟬夕顔の事をさしたること論なし然れどもこゝは一部の凡例めきたる處なれば箋にいはれたるごとく源氏一部の好色の事にもなべてわたる事也そは次の文にみなもらしとゞめたるなとある皆といふ詞にてしか聞えたりさてこゝのすべての意はかやうの事は源氏君のあながちにかくし給ひし事なればいとほしくてみな漏し省きて筆を止めたりしを或人の見ていかに帝の御子なればとて傍より見ん人までも共にわろき事をかくしてかたほならず物ほめがちにはしるしたるぞあしき事はあしきにてあらはすが私なきにはあらずやされぱこれは僞りまうけたる作り事也とやうにとりなしいひければせんかたなくてのこりなく記したる也されど餘りに口さがなき罪はさり所もなく皆記者の身におふべし見ん人さるかたにゆるされよといふ意なりこれを細流また湖月抄師説などに帚木巻の發端にいへることの首尾なるべくいはれたるはまことにさることにてかの小序のごとき文を結びたる跋文のごときもの也さればいたづらに見過すべきにあらずなほそのよしを委くいふべし先（ソ）かの帚木巻に光る源氏云々いとゞかゝるすき事どもを末の世にも聞傳へてかろびたる名をやながさんとしのび給ひけるかくろへ事をさへかたりつたへけんといへるはこゝにかやうのくだ〳〵しき事はあながちにかくろへしのび給ひしもいとほしくてといふに當り人の物いひさがなさよといへるはあまり物いひさがなき罪さり所なくといふにあたれり但しかれは世人の口さがなきをいへるをこれはそれを記す人の口さがなきと轉して結びたり其次にさるはいといたく世をはゞかりまめだち給ひけるほどになよびかにをかしき事はなくて云々といひ又さしもあだめきめなれたる打つけのすき〴〵しさなどはこのましからぬ御本上にてなどいへるはこゝにかたほならず物ほめがちなると難じたる事にて源氏君の本性のまめやかなるにあたれり又まれにはあながちにひきたがへ心づくしなる事を御心におぼしとゞむるくせなんあやにくにてさるまじきふるまひも打まじりけるといへるはいとほしくてみなもらしとゞめたるなといへる事にあたれり然ればかの序を結びたる跋なる事は更に論なしこれを一部にわたるといふ故は此物語は先達もいはれしごとく女のさかしだてするをふかく愼みたるものにて物のことわりをしたゝかにいふをいとへるからにいはまほしき事どもをも皆何とな

く物語の中に挿みてきはやかならぬをむれとせられたりさればこゝにもたゞ源氏君のかくろへ事をしろすばかりのやうにいひなしたろには
あれど巻中にいへるおもふきは其世にみづから見聞して心にあまる事どもをにほはせしろしたろなればよき人のよく見て深く考へあぢはは
ば世のたすけともなるべき意を含めたるをほのめかさんとてつくりごとめきてとりなす人ものし給ひければと難をまうけてかゝれたるなる
べしさるはこの物語はもとより作り事なれば作り事といはんになでふことかあるべきを作り事也ととりなす人のありし故にのこりのわろ
き事をも皆しろしたりといへるにおのづからさる意とはしられたれば也然れば源氏君のあながちにかくろへしのび給ひしといふ事はうつせ
み夕がほの類のみならず藤壺宮朧月夜君などの事をはじめてさまぐの事どもをもとりすべていへるものなるべくおぼゆされどそはみな作
りぬしの世に見えしらがへるさまをほのかにあらはしたるなれば罪はまことにさり所なけれどもしろしおきて見ん人の心にまかすといふ意
を含めて結びたるなるべしさるはわざと詞をかすめてとりなす人ものし給ひければなんといひのこしさりどころなくとふくめてとぢめなど
して餘情をおもはせられたるにて殊にさる意とは知れたりさりどころなくとくもじにてとゞめられたるは殊更にめでたくいとく心ふかき
かきざまといふべしされば此物語は諷諭なりといふ説もむげに見しらぬ説にてはあらざるべしされば此意を一部のうへにおしわたして作り
ぬしの底のこゝろをよくく ふかく考へ味はふべき事也さて帚木巻よりこゝまでは一つゞきの事なるを巻を分ちてさらぬやうにとりなしつ
ひにこゝにて上文の意をとりすべて結ばれたるはかへすぐもいみじき事上に所々いへるがごとし

第五帖 若紫 評釋

〔舊注〕以レ歌爲二卷名一也「手につみていつしかも見んむらさきのねにかよひける野べのわか草若紫とつゞきたる詞は見えず式部卿の姫君を紫上と名づけ侍るは藤壺の女御のゆかり尋ね出たるによれり云々

〔新〕紫を若紫てふことはわかき根を用る物ならねば理聞えがたし思ふに伊勢物語に「春日野のわかむらさきのすり衣とよみしは女をたとへて若草といふべきを紫草にとりかへて若紫といへりと見ゆしかれば此卷の名はそのいせ物語の詞を何心なく用ゐて若むらさきと名づけしのみなるべしかのかいまみの事をうつして此卷に書しにてもしるきなり

〔玉〕源氏君十八歲なり

〔釋〕若紫といふ名の事ことわりをいはゞ新釋のごとくなるべし然れどもこれはたゞ藤壺女御のゆかりの紫上のわかきほどをいふ卷なればかのねにかよひけるといふ歌を思ひてなにとなくつけしなるべしかくて次のくれなゐの末摘花と反對にしたる也そのよしは末摘花卷に委しくいふべし

〔評〕此卷の發端いとゆくりか也案に夕顔卷の脉は末摘花卷にうけて續きたるを此卷はなか〳〵にかくわらはやみの事より書出られたるは例の案外に書まぎらはして末摘花卷と前後とりかへてあやなされたるものにや細流箋などに夕顔卷に河原院にて靈氣にあひ給ひし故にわらはやみにわづらひ給ふよしに注せられたるはさも有べきかされども文のうへにはさることかすかにも見えねば猶いかゞ也さて末摘花卷に「わらはやみにわづらひ給ひ人しれぬ物思ひのまぎれも御心のいとまなきやうにて春夏すぎぬとあるは即此卷の照應にて同年の同じ比なることをおもはせたる也又其下に「かの紫のゆかりたづねとり給ひてはそのうつくしみに心いり給ひて六條わたりにだにかれまさり給ふめれば云々とあるも此卷の照應にて既に紫上を二條院へむかへ給ひしをしらせたるなりかくてかの末に「二條院におはしたればむらさきの君いともうつくしきかたおひにてくれなゐはかうなつかしきも

ありけりと見ゆるに云々とあるは此卷のすゑを繼たるにて紫と紅とを二かたにわけて反對にしたるをひとつに結びたる所なり見ん人此脉にふかく心をとゞむべしいひしらず巧なる書ざまにてかいなでの人の思ひよらぬことゞもおほし

○北山のかいまみの段なにがし僧都の僧坊をときいでゝ「かしこに女こそ有けれ云々をかしげなるをうなごどもわかき人々わらはべなん見ゆるといふとかきさしてさてうしろの山へ源氏君の登りて京のかたを見給ふより遠く須磨明石の卷をかくべき伏案をあらはされたる筆つきいひしらずめでたしその中に「繪にいとよくも似たるかな又「御ゑいみじうまさらせ給はんなど繪の事よりいひ起されたるは孟津に須磨にて畫をかき給ひしことのおこりなりとあるごとくかの日記をゑがき給ふべき伏線なるべしこの脉つひに繪合卷に至てほころび出たるいひしらずをかし又「播磨守の子の今年藏人よりかうふり得たるとあるは後に良清と見えたる人の事なるをこゝには其名をあらはさすしてはるかの後に出されたる又その良清がことをいひさしおきて後に明石上の媒となるべき種子を殘されたるなどすべていさゝかもいたづらなることなしさて紫上をかいま見給ふ所に先雀子をとり出てわらはべの何心なくおほどかにらうたきさまをあらはし其雀子より尼君の後世の事にうつり後世の事より紫上をうしろめたく思ひ給ひて故姫君のことに轉りつひに按察大納言のゆゑよしにわたりゆく次第いとめでたしかくて此かいまみのさまをくはしくあらはし置たるはてに「さるはかぎりなう心をつくし聞ゆる人にいとよう似奉れるがまもらるるなりけりとことわりたる抑揚の勢ひいと〳〵つよくいみじく聞えたりさて若草の歌などよみて尼君の打しをれ給へる所へ僧都のきておどろかしたるとぢめなど殊によろし其次に「かゝればこのすきものどもは云々とて猶かの雨夜の品定の脉を引もて來られたるなども透間なき書ざまなり「あけゆく空はいといたうかすみてといふよりはたゞ此餘波をあやなして源氏君の才と貌とのいみじきをかたるのみの文なりさてかへり給ひて帝へ聖の事奏し給へるはこのひとりが事を結びたる所也葵上

の事は桐壺よりこなたの例の脉也
○藤壺宮の御事のくだり殊にめでたしかしこの頭書にもかつ〴〵評せるごとく此事上の巻々よりそこはかとなくにほはせ來りてつひに此巻にいたりてまさしくあひ給へることをあらはされたるにこれより後は藤壺宮の悔み恐れ給ふよしをのみかゝれたるなどいとよろしさてこれを此巻にしも顯されたるは紫上の事のみあまりに長きを思ひて間隔したる法なるは勿論なれどかの御かたみのゆかりを尋ね出給へるに物のまぎれの御子をはらみ給ふことを書つゞけてゆかりの色を紫上にゆづるべき結構としられたりさてその末に源氏君のおどろおどろしき夢を見給ひてうらなふ者めしてとはせ給ふ時こたへまうしたることは桐壺巻に高麗の相人がいへりし事のやゝ委しくなりもて來れるにてやがて下の巻々の源氏君の盛衰の伏案をはやく定めてあらはしたる所也心をつくべし
○尼君の家をとひてたいめんし給へるは紫上をはやく讓らせんの結構也其後にこの尼君失給へることをいへるは紫上のみなし子となりてものあはれなるさまをあらはし源氏君のむかへとり給ふべき事の端をおこしたる也且此尼君はさしも用なき人なればはやくうせ給へるよしに書とゞめられたるなるべしこれより紫上をむかへとり給ふまでの事はさばかりいときなき人を物し給ふなればいとむつかしきわざなるをげにさも有べく書とられたる例のいとめでたし兵部卿親王の乳母がかくしたらんとのみにてさして紫上をさぐりもとめ給はぬは今世のさまにしてはいといふかしきほどの事なれど其世のさまはかくてもさして難なかりしこと惣論の所にいへる制度の事また此前後夕顔浮舟などさま〴〵の人のうへをあひてらして疑ふべからず兵部卿親王の北方のことも後々の巻に其脉をおとさずあらはされたるを心をつけて見るべきなり

わらはやみ〔細〕俗にいふおこり也〔餘〕和名抄云瘧病說文云瘧音虐俗云衣夜美一云和良波夜美寒熱並作二日一發之病也

よろづにまじなひかぢなど〔孟〕まじなひは厭術也加持は眞言教陀羅尼の事也（釋）よろづにといへるはさま〴〵の咒術をつくしてせさせ給ひしをいふ也

ある人北山になん〔拾〕北山といふ所もあれどこれは北の方なる山也（釋）舊注に北山のなにがし寺を鞍馬寺として准據多く擧られたれど例の用なければ引出ずたゞそのあたりの事とのみ見てあるべし

かしこきおこなひ人（釋）さま〴〵の修驗道を行ひて行德ある僧を云

人々まじなひわづらひしを（釋）去年の夏も瘧病流行したる時なみ〳〵の人のまじなひかれしを此行人は速にまじなひとゞめし類あまた有とかたる也

しゞこらかしつる時は〔細〕瘧はしそびらかしてはあしくおちかぬる

わらはやみにわづらひ給ひて。よろづにまじなひかぢなどまゐらせ給へど。しるしなくて。あまたゝびおこり給ひければ。ある人北山になん。なにがし寺といふところに。かしこきおこなひ人侍る。こぞのなつも世におこりて。人々まじなひわづらひしを。やがてとゞむるたぐひあまた侍りき。しゞこらかしつる時は。うたて侍るを。とくこそこゝろみさせ給はめ。など聞ゆれば。めしにつかはしたるに。おいかゞまりて。むろのとにもまかでず。とまうしたれば。いかゞはせん。いとしのびて物せん。とのたまひて。御ともにむつまじき四五人ばかりして。まだあかつきにおはす。やゝふかういる所なりけり。やよひのつごもりなれば。京の花ざかりはみなすぎにけり。山の櫻はまださかりにて。入もておはするまゝに。霞のたゝずまひもをかしう見ゆれば。かゝるありさまもならひ給はず。所せき御身にて。めづらしうおぼされけり。てらのさまもいとあはれなり。峯たかくふかきいはほの中にぞ。

よし也
(釈)しゞころは縮凝の意なるべし
まじなひ損ずれば病の縮み凝てお
ちかぬる意なり
とくこそ心みさせ給へ
(釈)はやく彼行人をめして試み給
へと申す也
老かゞまりて　(釈)老屈して室外に
もえ出ずと行人のことわり申たる
也
いかゞはせん云々　(釈)さらばいか
にせんよししのびてゆかんとの給
ふ也
御ともに云々　(釈)御近侍のむつま
じき人ばかり四五人つれて行給ふ
也
やゝふかう入る所なりけり
(釈)行人の居る所はやゝ山深く入
る所なりとまづ其居所のさまをと
き次に入もておはする道のけしき
をいひ次に寺のさまもといへり文
章次第あり
やよひのつごもりなれば
(釈)三月廿日過といふ事也必しも

ひじりいりゐたりける。のぼり給ひて。たれともしらせ給はず。いといたうやつれ給へれど。しるき御さまなれば。あなかしこや。ひと日めし侍りしにやおはしますらむ。今はこの世の事を思ひ給へねば。げんがたのおこなひも。すてわすれてはべるを。いかでかかうおはしましつらん。とおどろきさわぎて。うちゑみつゝ見奉る。いとたふときだいとこなりけり。さるべき物つくりてすかせ奉る。かぢなどまゐるほど。日たかくさしあがりぬ。すこしたちいでつゝみわたし給へば。たかき所にて。こゝかしこそうばうども。あらはに見おろさるゝ。たゞこのつゞらをりのしもに。おなじ小柴なれど。うるはしうしわたして。きよげなるやらうなどつゞけて。こだちいとよしあるは。なに人のすむにか。ととひ給へば。御ともなる人。これなんなにがし僧都の。このふたとせこもり侍るばうに侍るなる。心はづかしき人すむなる所にこそあなれ。あやしうもあまりやつしけるかな。きゝもこそすれ。などのたまふ。

晦日の事にはあらずたゞ末の十日のほどを大やうにいふ例にて前後に多し
みね高く深きいはほの中にぞ　〔玉〕すべていはほの中にすむといへるは山の奥の岩ほの立めぐれる地也岩窟と心得るはひがこと也　〔孟〕いかならんいはほの中にすまばかは世のうきことの聞えこざらん　古今雑下
ひじり　（釋）行徳ある僧をいへるそのころの俗語也なほ語釋にいへり
げんがたのおこなひも　（釋）験の方の行法もといふ意也験とは修法加持などの效験ありといふを略きていへる俗語也舊注に現世の祈禱といはれたるはわろし此世の事を思ひ給へればといへるは老屈して後世をのみ願へればこの世の修験をして人の爲にする事などは指忘れたりといふ意なりさるは此頃の僧は大かた修験をむねとして阿闍梨などになるをいみじき面目としたるならはしなりしかば名聞を思ふこともふかゝりし也下におどろきさわぎてといへるなど其おもむき也
いかでかゝうおはしましつらん　（釋）修験の事は思ひかけぬをいかに聞しめしておはしつらんとて驚き騒ぐ也　（評）おどろきさわぎてといへるかろ〴〵しさを抑へていとたふとき大とこなりけりと揚たる文勢いとめでたし
さるべき物つくりて　〔細〕符などなるべし河内本にはさるべきふんとあり　（釋）ふんは符をはねてよみたるなり今俗はふうと引ていへりすかせは俗に令(ノマセ)飲といふがごとし
すこし立出つゝ　（釋）かのひじりの所を少し立いでゝ見わたし給ふ也
そうばう　〔餘〕要覧云顔休云坊區也苑師云坊區院也　（釋）今世に寺中といふもののさまなり
たゞこのつゞらをりの下に　（釋）たゞこのといふより源氏君の詞と見るべし詞の中に所のさまをつゞめてあらはしいへる法なり　〔玉〕つゞらをりはをれまがりたる道のさまの黒葛(ツヅラ)のさまに似たるよりいふ名なるべし
同じ小柴なれど　（釋）こしばゝ小柴垣也垣の字おちたる歟又かくいひても其世には垣と聞えしにもあるべししわたしてといへるすなはち垣をしわたしたる事也屋廊などを小柴にてしたるやうに聞ゆる故にかく注する也
木だちいとよしあるは　（釋）木をきりすかしなどして心にくゝよしめきたるさまに作りたるを云なるべし
なにがし僧都　（釋）なにがしはこの僧都の名をいふべき所なるを例の名をかくせる物語なる故になにがしといへる也舊注に覺忍僧都とせられたるは例のしひたる准據也泥むべからず
こもり侍る　〔細〕三年禁足のよし末にも見えたり　（釋）禁足は何ぞの行法の故ありて年をかぎりてとぢこもること也
心はづかしき人　（釋）かれてしり給へる人にて聞え高く用意あるさま也
あまりやつしけるかな　〔湖師〕やつしけるとは御供などもすくなくかろ〳〵しきさまをのたまふ也

きよげなるわらはなど「細」女のわらはなり尼公のわらはなるべし（釋）此御說のごとしそれを御供の人の見てかしこに女こそ有けれといへる也

あか奉り花をりなど（釋）佛に供ずる水を閼伽といふ梵語也「箋」時花とて時々の花を佛に奉る也

僧都はよもさやうには（釋）此僧都は行法の聞えあればよも女をばかくしおくまじと也すゑとはかくして居しむる也

君はおこなひし給ひつゝ「新」眞言などをうけて誦し給ふなるべし

とかうまぎらはさせ給ひて「細」おこりは心にまぎるゝことあればおこらぬ事のある也（釋）おもほし入るとはふかく案じ入る事をいふ

うしろの山に（釋）上にすこしたちいでゝとある所より又その後のはるかに高き所へうつりて京のかたを見給ふ也舊注に僧正が谷をいふかとあるは例のおしあて也たゞうしろの山とみるべし異本しりへの

きよげなるわらはなど。あまたいできて。あかたてまつり花をりなどするも。わらはに見ゆ。かしこに女こそありけれ。僧都はよもさやうにはすゑ給はじを。いかなる人ならん。とくち〴〵いふ。おりてのぞくもあり。をかしげなる女ごども。わかき人。わらはべなん見ゆるといふ。君はおこなひし給ひつゝ。日たくるまゝに。いかならんとおぼしたるを。とかうまぎらはさせ給ひて。おもほしいれぬなんよく侍る。と聞ゆれば。うしろの山にたちいでゝ。京のかたを見給ふ。はるかにかすみわたりて。よもの木ずゑそこはかとなうけふりわたれるほど。ゑにいとよくもにたるかな。かゝるところにすむ人。心におもひのこすことはあらじかし。とのたまへば。これはいとあさく侍り。人の國などに侍る海山のありさまなどを。御覧ぜさせてはべらば。いかに御繪いみじうまさらせ給はん。ふじの山。なにがしの。たけなど。かたり聞ゆるもあり。またにしの國のおもしろきうら〳〵。いそのうへをいひつゞくる

山とあるもすてがたし

けふりわたれる　〔釋〕けふるは木芽(コノメ)のもえ出るをいふ也かすみたるさまといへる注はわろし

ゑにいとよくも　〔玉〕此詞上よりのつゞきは地の詞のやうなれども地の詞のさまにあらずこれより源氏君の詞とすべし　〔釋〕此説のごとし但しかくてはまたほどゝいふ詞の結びなしはるかにかすみわたりてといふ所より源氏君の詞なるべし例の語の中にけしきをかたる法なり舊注はかゝる所にといふより源詞とせられたれどひがこと也

かゝる所にすむ人　〔釋〕かやうにけしきよき所にすむ人は心にあきたらぬことはあるまじと也

これはいとあさく侍り云々　〔釋〕御供の人の詞也かやうなる所はまだ何ばかりのけしきにも侍らずといふ意を淺くとはいへる也

人のくに　〔河〕異國の事にはあらざる也　〔細〕他國也伊勢物語に人の國にても猶かゝることなんやまざりけるといふに同じ

いかに御繪いみじうまさらせ給はん　〔箋〕源氏すまにてゑをかき給ひしをこゝにていひ出したる也　弄同

なにがしのたけ　〔花〕なにがしのたけは惣じて所をさだむべからず別しては淺間のたけをいふべきにやふじあさまと對していふ故也

よろづにまぎらはし聞ゆ　〔釋〕上におもほしいれぬなんよきとありし首尾

ちかき所には云々　〔釋〕御供の中の一人が詞也末を案ずるにげにも良清が詞とはしらるれどなほ誰ともなきさまにかたり出すが例の文法なり

〔湖師〕これ須磨明石をかくべき張本なり

ゆほびかなる所に侍る　〔釋〕此詞は俗にツンポリトシタといふ意と聞えたり舊注どもに寛大なる心ととかれたるはうらうへなるひがこと也其よしは語釋にいへりさてあかしの浦は何のいたりふかきおもふきはなけれど海の面を見わたしたるけしきあだし所とはかはりてツンポリト狹く淸らなる所ぞといふ意也明石は前に淡路島ありて海のおもては寛大ならぬものをや

かのくにのさきのかみしぼち　〔釋〕前の播磨守入道の事也　〔河〕新發は初て入二釋門一人の名也初發心の義也經に新發意菩薩といふがごとし

〔釋〕新發意をつゞめてしぼちといふ也たゞ新發とのみにては聞えず俗にもシンポチといへり

いといたし　〔玉〕いたしはさしもあるまじきものゝ思ひの外にほどよりはよきをほめたる詞也他卷に見えたるも皆同じ意也こゝも播磨前守の分際には餘りてよきよし也

大臣の後にて　〔湖師〕後は子孫といふ心

出たち　〔河〕出身也身をも立出仕をもすべかりける也云々

ひがもの　〔玉〕變なる人といふこと也すべてひがといふは皆あるべきさまに違ひたることにてひが〳〵しひがことひがむなどみな其意也

近衞の中將をすてゝ　〔細〕中將など宮中にて近きまもりの官こそねがふ所なるべきを近衞をすてゝ國の守にならんことは頗無念のことなるべ

しされば上のひがものとはいふなり云々

すこしおくまりたる山ずみもせで
（釋）世をのがるゝほどならば深き山へもいるべきをさはなくして海づらに出ゐて住るはひがみたるやうなれどゝいふ意也げにはふかき里は云々へ係る意なる其間に事を說く例の文法也

かつは心をやれるすまひ
〔玉〕みづからあかぬことなしとほこりたるやうの意也云々拾遺に心をはらしやりなぐさめんためといふ心也といへるは言の本の意はさることなれども物語書に用ひたる例は然らず

ところえぬやうなりけれ
〔玉〕いきほひもなく慊らぬやうにありしよし也云々

そこら〔河〕幾多 日本紀 若干同心歟

のこりのよはひゆたかにふべき
〔玉補〕產業の事也 （釋）心がまへといへるが產業のこと也入道の殘

もありて。よろづにまぎらはし聞ゆ ◎ちかき所には。はりまのあかしの浦こそなほことに侍れ。何のいたりふかきくまはなけれど。たゞうみのおもてを見わたしたるほどなん。あやしくこと所にゝず。ゆほびかなるところに侍る。かのくにのさきのかみしぼちの。むすめかしづきたる家いといたしかし。大臣の後にて。出たちもすべかりける人の。世のひがものにてまじらひもせず。近衛の中將をすてゝ。申給はれりけるつかさなれど。かのくにの人にもすこしあなづられて。なにのめいぼくにてか。又みやこにもかへらんといひて。かしらおろし侍りにけるを。すこしおくまりたる山ずみもせで。さる海づらにいでゐたる。ひが〳〵しきやうなれど。げにかの國のうちに。さも人のこもりゐぬべきところ〴〵はありながら。ふかきさとは人ばなれ心すごく。わかきさいしの思ひわびぬべきにより。かつは心をやれるすまひになん侍る。さいつころまかりくだりて侍りしついでに。ありさま見給へによりてはべり

生を不足なく經べき結構を十分にしたる也田地山林など買ひたるなるべし

法師まさり　〔玉補〕桐壺巻にあげおとりといふ詞の類にて法師になりてより人がらのまさりて見ゆる事をいふなるべし

代々の國の司など　〔細〕諸國の守は一任四ヶ年にてかはる故に代々とはいふ也さやうの任におもふく人の心をかはすものあれどうけひかぬと也　〔釋〕用意殊にしては心もちゐを殊更にして心ばへを見すとは志の深きを女に見するなり心ばへは心延也猶心差といはんがごとし

この人ひとりにこそあれ　〔湖〕我子は此明石上一人なればこの人をだにいたづらになさじとの心也

思ふさまことなり　〔釋〕さやうに受領の妻などにせんなどゝは思ふ樣遙に異也との意也禁中へ奉らんなどの意なるべし細流に夢の告ある

しかば。京にてこそところえぬやうなりけれ。そこらはるかに。いかめしうしめてつくれるさま。さはいへど。國のつかさにてしおきける事なれば。のこりのよはひゆたかにふべきこゝろがまへも。になくしたりけり。のちの世のつとめも。いとよくして。なか〳〵法師まさりしたる人になん侍りける。と申せば。さてそのむすめはととひ給ふ。けしうはあらず。かたち心ばせなど侍るなり。代々のくにのつかさなど。よういことにして。さる心ばへみすなれど。さらにうけひかず。わが身のかくいたづらにしづめるだにあるを。この人ひとりにこそあなれ。思ふさまことなり。もしわれにおくれて。その心ざしとげず。このおもひおきつるすぐせたがはゞ。海にいりねとつねにゆゐごんしおきて侍るなど聞ゆれば。君もをかしときゝ給ふ。人々。かいりうわうのきさきになるべきいつきむすめなゝり。心だかさくるしやとてわらふ。かくいふははりまのかみのこの。藏人より。ことしかうぶりえたるなりけり。

によりて云々とあるは同じことながらこゝの注にはかなひがたし

もしわれにおくれて（釋）もし我死て汝おくれ殘りつゝ其志もえとげず思ひ定めたることたがひなば海に身をなげよといふ也

おもひおきつる［玉］これに掟字を書ておきてといふ詞を用言にいへる詞にて事をかやう〳〵と定むるなり物語に此言いと多きを置て置つるとまぎらはしきこと有心得おくべし

つれにゆゐごんしおきて

（釋）平生になからん後の遺言を爲置て侍りとかたる也

海龍王の后に［細］只海に入れといふによりての取合せ也云々

（釋）此御說のごとく入道が思ひ掟つるすぐせたがはゞ海に入れと遺言せるにつきて然らば大かた其遺言のごとくにはなるまじければ海に入て龍王の后になるべきいつき女ならん入道が心高さの聞ぐるしやとて人々笑ふ意なりさて海龍王

いとすきたるものなれば。かの入道のゆゐごんやぶりつべき心はあらんかし。さてたゞずみよるならん。といひあへり。いでやさいふとも。ゐなかびたらん。をさなくよりさる所におひいでゝ。ふるめいたるおやにのみしたがひたらんは。はゝこそゆゑあるべけれ。よきわかうどわらはなど。みやこのやんごとなき所々より。るいにふれてたづねとりて。まばゆくこそもてなすなれ。なさけなき人になりゆかば。さて心やすくてしも。えおきたらじをや。などいふもあり。君は何心ありて。うみのそこまでふかう思ひいるらん。そこのみるめもものむつかしうなどの給ひて。たゞならずおもほしたり。かやうにても。なべてならず。もてひがみたることこのみ給ふ御心なれば。御みゝとゞまらんをやと見奉る◎くれかゝりぬれど。おこらせ給はずなりぬるにこそはあめれ。はやかへらせ給ひなんとあるを。大とこ。御物のけなどくはゝれるさまにおはしましけるを。こよひはなほしづかにかぢなどま

といふ名は佛家にいふことなれど舊注淺羯羅の梵語の釋はこゝによしなし

かくいふは　（釋）かくいふとは此あかしの新發意のむすめの事を語りたる人をさしていへり

藏人よりことしかうふりえたる　〔花〕正月五日の叙位に六位の藏人はかならず巡爵とて従五位下に叙せらるゝ也かうふりとは爵の事也

かの入道のゆゐごんやぶりつべき　（釋）この物語する五位の藏人好色者なればかの入道が心高き遺言をやぶりてわが物とせんの心はあらんと戯れていへる也たゞずみよるは立よるといはんがごとし　この藏人は後に良清と見えたる人の事なるをこゝには名をあらはさずして遠くその線を伏せおかれたるいひしらずたくみなり

いでやさいふとも云々　〔玉〕をさなくより云々したがひたらんはゐなかひたらんと上へかへる意の語也　（釋）母こそゆゑ有べけれゐなかびたらんとつゞく意也又はゝこそゆゑ有べけれをさなくより云々ともめぐりてつゞく意ともすべしかく定まらずめぐるさまなるは此文章の例の法なり心をつけて味はふべし

はゝこそ云々　〔玉〕細流に良清が詞也とあるはいかゞ下にいふもありとあれば又一人がいへる也いでやといふよりつゞけて同人の詞にてもあるべし

よきわかうどわらはなど云々　（釋）いでやといふより故あるべけれまで同人の詞也さてこゝよりもてなすなれまでは藏人の詞也其故はこれより上はゐなかびたらんとおしはかりてもどく意こゝよりはさはあらじといひとく意なれば也さてなさけなき人にといふより又一人が詞なるべし又いひもどく意のある上に「いふもありといふ語藏人とは聞えねば也さてこゝの意はむすめの心いやしくならぬためによきつかひ人どもを京の貴きあたりより類にふれて呼下してめしつかふとなり　類にふれては縁にしたがひてといふ意まばゆくもてなすはまばゆくかゝやくほどにかしづく意也

なさけなき人になりゆかば　〔玉〕河海細流などに後々の國司の事とあれどももし其意ならんにはたゞなさけなき人になりゆくといひては聞えぬこと也一本にはなりてゆかばとてもじ有によらば良清などがなさけなきものになりておしてのぞまばといふ意かとも思へどもそれもゆかばといふ詞心ゆかず又思ふにになりはくだりを寫誤れるにて國司にまれさらぬ人にまれ情なくおしたちたる人のかのくにゝくだりゆかばおしてのぞむべきほどにといへるか　（釋）案に只今こそ云々まばゆくもてなすなれおやなどなくなりてなさけなき人にのみなりゆかばうしろむる人もなくさやうにこゝろやすくしてはえおくまじといふ意にやとにかくに他人のなさけなきが望みにゆく意とは聞えず猶考ふべし

君は何心ありて云々　（釋）入道何の心ありてさやうに海に沈めよと迄は遺言するならんといふ意なるを縁語にてあやなしたる也ふかくは海の藻みるめは海松なるを見る目といひなす例也　〔玉〕底の見る目もきたなき所なるべきに何とて海のそこまでは思ひ入て海に身をなげよとはいふらんといふ意也　引歌無用

かやうにても　（釋）かやうにはのたまへどもの意なり
もてひがみたる事　〔新〕葵上六條御息所などのやん事なきかたにはうとくて夕顔のかた樣のやつれたるに心入れ給ふをいふならん　（釋）なべてならずもてひがみたるとは一とほりならず變なる事を好み給ふといふ意也
くれかゝりぬれど　（釋）こゝより御供の詞也玉小櫛にどはばの誤かとていはれたる說あれどかやうの所は上にもたび〳〵ありし文法にて日のくれかゝりたるを御供の人の語中につゞめていへる也さて下にとあるをといへるあるの詞すこしいかゞいふをとあるべき所なり
御物のけなどくはゝれる　（釋）くはゝれるとはわらは病の上に物の氣の加はれる也　〔細〕御物のけなどくはゝれるとかけるも夕がほの卷よりの心をあらはして殊にその餘情あるにや
ゆふぐれのいたうかすみたるに　〔細〕前に坊などある所なれば人目をしのび給ひて夕暮のかすみたるに立出給ふ用意あるさまなり
たゞこの西おもてに　〔玉〕かやうのたゞは今の俗言に直（ヂキ）にといふこと也
持佛すゑ奉りて　〔岷〕幼年などより一心にたのみておこなひいれたる本尊をいふ也　（釋）此僧坊の西面なる所に持佛をすゑて行ふさま也
尼なりけり　（釋）此なりけりは上にきよげなるわらはどもあまた出きて云々かしこに女こそ有けれ云々といへる所をうけてかの女などの見えたるは此尼のつかふ人なりけりといふ意か　又は此小柴垣のあるじは尼也といふ意などかされど猶穩ならず案にありけりとありしを寫し誤れるにや
すだれすこしあげて　（釋）こゝより內のありさまをくはしくいへり源の見給ふ心よりいふ詞とみるべし
花たてまつる　〔岷〕前にわらはの花をるとありし也
中のはしらに　（釋）中柱空蟬卷にみゆ
いとなやましげに　〔湖〕病者のさま也
尼君　〔釋〕たゞ人と見えずといはんとて君の字をそへたり
やせたれどつらつきふくらかに　（釋）痩たれど頰骨のあらはれたるなどのさまにはあらぬなるべし
今めかしき物かなと　（釋）源氏君のかいまみ給ふ心中より內のさまをいへる文法なる故に物かなといへる上文の例なり心をつくべし
きよげなるおとなふたりばかり　（釋）尼君の傍にある人を見る意
中に十ばかりにや云々　（釋）紫のうへなり
白きゝぬ山ぶきなどの　〔花〕裏山吹の衣は表黃裏紅也花山吹は表薄朽葉裏黃也　（釋）などゝいへるはかいまみ故にたしかに見とめぬさまをしらせたる詞也

ゐりて出させ給へと申す　さもあること〻みな人申す君もか〻るたびねもならひ給はねば。さすがにをかしくて。さらばあかつきにとの給ふ。日もいとながきに。つれ〴〵なれば。ゆふぐれのいたうかすみたるにまぎれて。かのこしばがきのもとにたちいで給ふ　人々はかへし給ひて惟光ばかり御ともにてのぞき給へば。たゞこのにしおもてにしも。ぢ佛すゑ奉りて。おこなふ尼なりけり。すだれすこしあげて花たてまつるめり。なかのはしらによりゐて。けうそくのうへに經をおきて。いとなやましげによみゐたる尼君。たゞ人と見えず。四十あまりにていとしろくあてに。やせたれどつらつきふくらかに。まみのほど。かみのうつくしげにそがれたるすゑも。なか〳〵ながきよりもこよなう今めかしき物かな。とあはれに見給ふ。きよげなるおとなふたりばかり。さてはわらはべぞいでいりあそぶ。中に十ばかりにやあらんとみえて。しろきゝぬ山ぶきなどのなれたるきて。はしりきたる女ご　あま

おひさき見えて　〔釋〕生立てゆくさきうつくしからんと見ゆる也

あふぎをひろげたるやうに
〔釋〕髮の末のほそらずしてふさやかにひろがりたるかたちをたとへていへるなり

あかくすりなして　〔細〕なきなどして顔をすりたるさま也

すこしおぼえたる所あれば
〔評〕藤壺と紫上と似たる事をいはんとてまづ尼君に似たるよしをいへるいとたくみ也

すゞめの子を　〔釋〕時はやよひのつごもりがたなれば雀子のやう〳〵巣立するころなるべし　〔評〕此段尼君の種姓を語り出んにつきなければまづ雀子をとり出て種子としたるたくみいといみじこれより尼君に似つかはしき後世の事になりてつひに故姫君のうへにおよぶついで心をつけて味はふべし

いぬきが　〔河〕上東門院の上童に此名あり榮花物語に見えたり此物語にはあてきなれきなどありきは公

た見えつるこどもににるべうもあらず。いみじうおひさき見えて。うつくしげなるかたちなり。かみはあふぎをひろげたるやうに。ゆら〳〵として。かほはいとあかくすりなしてたてり。なにごとぞや。わらはべとはらだち給へるかとて。尼君の見あげたるに。すこしおぼえたる所あれば。こなめりとみ給ふ。すゞめのこをいぬきがにがしつる。ふせごのうちにこめたりつるものを。とていとくちをしとおもへり。このゐたるおとな。れいの心なしの。かゝるわざをして。さいなまるゝこそいと心づきなけれ。いづかたへかまかりぬる。いとをかしうやう〳〵なりつるものを。からすなどもこそ見つくれ。とてたちてゆく。かみゆるらかにいとながくめやすき人なゝめり。少納言のめのととぞ人いふめるは。この子のうしろみなるべし。尼君いであなをさなや。いふかひなう物し給ふかな。おのがかくけふあすになりぬるいのちをば。何ともおぼしたらで。すゞめしたひ給ふほどよ。つみうることぞとつねに聞ゆる

の字なり又君の字也世俗にあねきをばきなどいふは姉君伯母君といふ心也云々

ふせごのうちに　〔玉〕こゝは寺なれば鳥をいるゝ籠などはなき故にかりにふせごにいれたる也

れいの心なしの云々　〔湖師〕常に心なく麁相なる者のかやうの事をして折檻せらるゝ事よといふ也此わらは紅葉賀巻にてひいなの殿をそこなひしことあり　〔釋〕此注よく心をつけたりかゝる事迄に照應をかまへられたるいと〳〵めでたし

いとをかしう云々　〔玉〕やう〳〵をかしうなりつるとつゞく意也〔湖師〕烏などの見つけばとりぬべき物をといふ也

たちてゆく　〔玉〕雀を尋んとて也

いふかひなうものし給ふかな〔釋〕年のほどよりは心のいふかひなうものし給ふを歎きたる詞也

おのがかくけふあすに　〔釋〕尼君病てけふあすをもしらぬ命なるを紫上は何ともおぼさで罪とする雀を

を。こゝろうくとて。こちやといへば。ついゐたり。つらつきいとらうたげにて。まゆのわたり打けふり。いはけなくかひやりたるひたひつき。かんさしいみじううつくし。ねびゆかんさまゆかしき人かな。とめとまり給ふ。さるはかぎりなう心をつくし聞ゆる人に。いとように奉れるがまもらるゝなりけり。と思ふにも涙ぞおつる。あま君かみをかきなでつゝ。けづる事をばうるさがり給へど。をかしの御ぐしや。いとはかなうものし給ふこそ。あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば。いとかゝらぬ人もある物を。こひめ君は。十二にてとのにおくれ給ひしほど。いみじうものは思ひしり給へりしぞかし。たゞ今おのれ見すて奉らば。いかでよにおはせんとすらん。とていみじうなくを。見給ふもすゞろにかなし。をさな心ちにも。さすがにうちまもりて。ふしめになりてうつぶしたるに。こぼれかゝりたるかみ。つや／＼とめでたう見ゆ。

したひ給ふよと也おぼしたらではおぼしてあらで也てあの反た也

〔玉〕にどは心のほど也年のほどゝいふ注はたがへり

つみうることぞと
〔明〕涅槃經第四金剛身品持戒比丘比丘尼不レ得レ畜二養奴婢牛羊非法之物一

うちけぶり　〔河〕にほひやかなる心か

かんさし　〔玉〕髪のさしざまといふことにて木の枝のさしたるさまを枝ざしといひ目の物をさして見るさまをまなこざしなどいふたぐひ也さればこれは額の際より項の方へ髪の生のぼりさせるさまをいふ言也髪のさすといふも枝のさすと同じ心ばへ也此詞巻々に多し皆然也云々

さるはかぎりなう心をつくし聞ゆる人に　〔細〕藤壺によく似たる也をばめひ也　〔評〕こゝにいたりてはじめて藤壺に似奉りたる事をあらはされたり藤壺と紫とゆかりに似か

おひたゝむありかもしらぬわか草をおくらす露ぞきえんそらなき。またゐたるおとな。げにとうちなきて。
はつくさのおひゆくすゑもしらぬまにいかでか露のきえんとすらんと。聞ゆるほどに。僧都あなたよりきて。こなたはあらはにや侍らん。けふしもはしにおはしましけるかな。このかみのひじりのかたに。源氏の中將の。わらはやみまじなひにものし給ひけるを。たゞいまなんきゝつけ侍る。いみじうしのび給ひければ。えしり侍らで。こゝに侍りながら。御とふらひにもまうでざりける。とのたまへば。あないみじや。あやしきさまを人やみつらん。とてすだれおろしつ。このよにのゝしり給ふひかる源氏。かゝるついでに見奉り給はんや。世をすてたる法師のこゝちにも。いみじうよのうれへ忘れ。よはひのぶる人の御有さまなり。いで御せうそこ聞えん。とてたつおとすれば。かへり給ひぬ。あはれなる人を見つるかな。かゝればこのすきものども

よひたる伏案の前後をふかく味はふべし

涙ぞおつる（評）此一語ことにゆきたらひて事の心をつくせりといふべし

うしろめたけれ（釋）紫上の物はかなきをおきてこの世をさらばなど思ふにつけてうしろめたきなるべし

かばかりになれば（細）よのつれの人は十ばかりにもなればおとなしやかなる物を此君はいとけなくましますと也

こひめ君は（細）紫上の母也按察大納言におくれ給ひし事也

（評）尼君の物語の中に紫上の父母のゆゑよしを顯し出せる省筆の法いとめづらしくめでたし

すゞろにかなし（玉）さもあるまじき事に何故となくおぼえずかなしき也

ふしめになりて（玉）ふしはなえふすにて目つきのしをるゝ也俗言にしを〳〵として

といふ意也

こぼれかゝりたる髪　〔評〕上に髪は扇をひろげたるやうにといひ出てひたひつき髪さしといひ又髪をかきなでゝ云々といひてこゝにこぼれかかりたるといへる首尾つらぬきてめでたし

おひたらん云々　〔新〕生立て有べき方もしらぬ若子を見捨てんことのおぼつかなさに命の終らんにも終らん樣なき心ちするといへりありかは在所(アリカ)にてこゝは末の手著(タツキ)をいふ云々　露はわか草よりいでゝ消んといはん料にて命をたとへたり空なきとは心まどひして物のかたもしられぬをいふ

又ゐたるおとな　〔玉〕少納言にはあらず上におとな二人と有て少納言が事はこのゐたるおとな云々とて上に見えたるに又ゐたるといへるは今一人のおとな也又といふを歌へかけてゐたるおとなの又よめるといふ意ともすべけれど少納言は既に立てゆくとあればこゝにゐたるとはいふべきにあらざるをや

はつくさの云々　〔新〕若草のおひゆく末を見さだめんまでは御心づようなりてながらへ給ふべきにこそあれいかで消んなどはのたまふぞといさむる也若草初草は同じ事なればいせ物語にもたがひによめり

あなたより　〔釋〕僧都の坊はこの尼君のおはする西面なる所よりはおくまりたるあなたざまに有と見えたり故にあなたよりといへり

けふしもはしにおはしましける哉　〔釋〕日も多かるに今日しも端つかたにおはしけることかなさて〳〵かろ〳〵しといふ意なりしもといひかなといふ詞のあぢはひすべてかくのごとし

こゝに侍りながら　〔湖〕我此山に在ながら御見廻も申ざることよと也

此世にのゝしり給ふ光る源氏　〔玉補〕此詞いかゞのゝしられ給ふとかのゝしり侍るとか有しを誤れるかのゝしるとはかしがましく評判するを云也

世のうれへわすれ　〔釋〕源氏君のかたちをほめたる例の脈也世をすてたる僧なれども此君を見れば愁を忘れ命を延るやうに覺ゆるといふ也

かゝればこのすきものどもは　〔釋〕このは例のかのといふ意也すきものは雨夜に品定せし人々をさしていへる也さてこゝの意は源氏君のたまさかに立出給ふだにかく案外にうつくしき人を見給ふにかのすき者どもは身輕くしてありくれかやうなるありきをのみすればよにかくれたる人をも見つくる也とかの人々の物語のさまを感じ給ふよしなり　〔評〕これ帚木の照應をこの卷にうつしきて引たる脈也心をつくべし

さてもいと　〔玉〕此さてもは俗言のさてものごとし雅語にはめづらしきつかひざま也　〔釋〕をは雅語のつかひざまにて譯注のごとき意也

かの人の御かはりに云々ふかうつきぬ　〔釋〕かの人は藤壺也藤つぼといはずしてしか思はせたるは例の脈也かくて此所にて紫上を藤壺の御かはりにとあらはし出たる結構いとめづらしふかうといふ語に心をつくべし此人源氏君に對へたる第一の御方なる故なり

よきりおはしましけるよし
〔玉〕すべてよきるといふ言はよきて過る意と聞えたりこゝも其意にて僧都の坊へは立よらず過給へるをいふなるべし云々さて又よきるといふ言は物語書などにはをさをさ聞なれぬをこゝはほうしの語なる故にいへり

うれはしく〔新〕こはたゞうれへに思ふてふにはあらずせんかたなく心うく思ふをいふ〔湖〕かくれしのばせ給ふをうれへに思ひて先御見まひを遠慮せしと也

草の御むしろ〔玉〕草枕といふごとく旅ねの御むしろなる故に草のとはいへる也

十よ日〔拾〕よの字あり音なるべし下の十よ年にやなり侍りぬらんとあるを思ふべし

かうやうなる人の云々
〔細〕效驗あらば子細あるまじきを萬一驗なくば聖の威德もいかゞと思給ふ故にしのび給ふと也是も源の用意深さたぐひなき也

は。かゝるありきをのみして。よくさるまじき人をも見つくるなりけり。(二)たまさかにたちいづるだに。かく思ひのほかなることをみるよ。とをかしうおぼす。さてもいとうつくしかりつるちごかな。なに人ならん。かの人の御かはりに。あけくれのなぐさめにも見ばや。と思ふこゝろふかうつきぬ。(三)うちふし給へるに。僧都の御弟子。これみつをよびいでさす。ほどなき所なれば。君もやがて聞給ふ。よきりおはしましけるよし。たゞいまなん人まうすに。おどろきながらさふらふべきを。なにがし此寺にこもり侍るとは。しろしめしながら。忍びさせ給へるを。うれはしく思ひ給へてなん。草の御むしろも。この坊にこそまうけ侍るべけれ。いとほいなきことゝ申給へり。いぬる十よ日のほどより。わらはやみにわづらひ侍るを。たびかさなりてたへがたう侍れば。人のをしへのまゝに。にはかにたづね入侍りつれど。かうやうなる人の。しるしあらはさぬ時。はしたなかるべきも。たゞなるよりはいとほしう

たゞなるよりは
(釋)驗ありといふ名のなき人よりは也
今そなたにも　(釋)參らんといふをふくめ殘したる也
すなはち僧都參り給へり
(釋)源氏君の隔意なきを聞て即刻僧都源氏君のかたへ參られたる也これ當然の禮なり
かる〴〵しき御ありさまを
(釋)僧都心はづかしく用意有てかつ世にも尊く思はれたる人なればあまりにかる〴〵しくやつれ給へるを源氏のはぢ給へる也
こもれるほどの　(釋)禁足の間の事どもをかたり給ふ也
おなじ柴のいほりなれど
(釋)こゝもかしこも同じ草庵なれどゝ也　[細]涼しきとは時節にかぎらず水の清くすゞしげなるを云也僧都のもとへ源氏を申入れんとてのたまへる詞也
まだ見ぬ人々　[玉]源氏君をまだ見ぬ人々也　[孟]前の柴垣のかいま

思ひ給へつゝみてなん。いたうしのび侍りつる。今そなたにも。とのたまへり。すなはち僧都まゐりたまへり。法師なれど。いと心はづかしく。人がらもやんごとなく。世に思はれ給へる人なれば。かる〴〵しき御ありさまを。はしたなうおもほす。かくこもれるほどの御ものがたりなど聞え給ひて。おなじしばのいほりなれど。すこしすゞしき水のながれも御覽ぜさせん。とせちに聞え給へば。かのまだ見ぬ人々に。こと〴〵しういひきかせつるも。つゝましうおぼせど。あはれなりつるありさまもいふかしくて。おはしぬ。げにいと心ことによしありて。おなじ木草をもうゑなし給へり。月もなきころなれば。やり水にかゞり火ともし。とうろなどにもまゐりたり。南おもていときよげにしつらひたまへり。空だき物心にくゝかをりいで。みやうがうのかなどにほひみちたるに。君の御おひ風いとことなれば。うちの人々も心づかひすべかめり僧都世のつねなき御物語。後の世の事など聞えしらせ給ふ。

みの時この世にのゝしり給ふ光源氏かゝるついでに見給はんやなどといひしを聞てはぢらひ給へるなり

あはれなりつる有さまも　〔釋〕紫上也

同じ木草をもうゑなし

〔釋〕山におひたると同じ木草をもさるかたに植なして見所あるさまにつくりたる意也うゑなしといへるに心をつくべし

やり水にかゞりびともし

〔釋〕遣水の上に篝火をともし燈籠にも火をともしたる也上に火といへる故に下にははぶけり

そらだきもの　〔新〕式に此香の法あり　〔花〕佛に奉る香を名香といふ牛頭栴檀など名ある香をいふべし

君の御おひかぜ　〔湖〕源のたきしめ給ふ御衣の匂ひ也　〔釋〕おひ風とはうしろよりふく風をいふが常なれどこゝは御衣にしめ給へるたきものゝ香のあゆみ給ふ跡に殘る事

我御つみのほどおそろしう、あぢきなきことに心をしめて。いけるかぎり。これを思ひなやむべきなめり。ましてのちのよのいみじかるべきを。おぼしつゞけて。かうやうなるすまひもせまほしうおぼえ給ふ物から。ひるのおもかげ心にかゝりてこひしければ。こゝに物し給ふはたれにか。たづね聞えまほしき夢を見給へしかな。けふなん思ひあはせつる。と聞え給へば。うちわらひて。うちつけなる御ゆめがたりにぞ侍なる。たづねさせ給ひても。御心おとりせさせ給ひぬべし。こあぜちの大納言は。世になくてひさしくなり侍りぬれば。えしろしめさじかし。その北の方なん。なにがしがいもうとに侍る。かのあぜちかくれて後。よをそむきて侍るが。このごろわづらふ事侍るにより。かく京にもまかでねば。たのもし所にこもりて物し侍るなり。と聞え給ふ。かの大納言の御むすめ。ものし給ふと聞給へしは。すきずきしきかたにはあらで。まめやかに聞ゆるなり。とおしあてにの給へば。むすめた

を轉じていへりときこゆさて源氏君のかたりは名香にもまさりて異なりと也
心づかひ　(釋)心づかひとはつきなくは思はれじと用意する事也
よのつれなき御物語云々
〔細〕源に說きかせ申さるゝ也云々すべて僧は俗に對しては必無常の法理を演說するを禮儀とすべし
(釋)禮儀までもあらざるべしたゞこの比の世のならはし也
わが御つみのほど　〔孟〕源の心中藤壺の事をふくめり
(釋)孟津のごとくなるべしあぢきなき事に心をしめてとある詞たゞ世のつねのことゝ聞えねば也
まして　〔玉〕いけるかぎり云々に對へてまして後世はなり
かやうなるすまひも　(釋)かやうなる山ずみもして世をのがれまほしうおぼえ給ふ物から晝の紫上のおもかげ心にかゝると也
たづね聞えまほしき夢を云々
〔湖師〕いひ出んもたよりなさにま

だひとり侍りし。うせてこの十よ年にやなり侍りぬらん。故大納言は。内に奉らんなど。かしこういつき侍りしを。その本いのごとくも物し侍らで。すぎ侍りにしかば。たゞこの尼君ひとりもてあつかひ侍りしほどに。いかなる人のしわざにか。兵部卿の宮なん。しのびてかたらひつき給へりけるを。もとの北のかたやんごとなくなどして。やすからぬ事おほくて。あけくれ物を思ひてなん。なくなり侍りにし。もの思ひにやまひづく物と。めにちかく見給へしなど申給ふ。さらばその子なりけり。とおぼしあはせ給ひつ。みこの御すぢにて。かの人にもかよひ聞えたるにや。といとゞあはれにみまほしく。人のほどもあてにをかしう。なか〳〵のさかしら心なく。うちかたらひて。心のまゝにをしへおふしたてゝ見ばやとおもほす。いとあはれに物し給ふことかな。それはとゞめ給ふかたみもなきかと。をさなかりつるゆくすゑの。猶たしかにしらまほしくて。とひ給へば。なくなり侍りしほどにこそ

こゝならぬ夢がたりをすと伊勢物語にいへる類也（釋）こゝに物し給ふ人をたづねまほしき夢を見たりしなけふこゝに來て思ひ合せたりとの意也

うちわらひて云々

（釋）源氏君のそら夢がたりを僧都のさとりしをしらせて打わらひて打つけなる云々と書たる也

故按察大納言〔孟〕尼公の夫紫上の祖父なり（釋）大納言にて陸奥出羽の按察使を兼たる人也按察使をつゞめてアゼチとはいふ也

たのもし所に云々

（釋）僧都こゝにこもりゐて京へも出ねばそれをよきたのみ所として尼君の來り住侍りと也

聞給へしは（釋）此下にいかにといふ詞をそへて心得べし

おしあてにのたまへば（釋）此語おもしろし源氏君は紫上を尼君の子とはおぼしよりたれど實にはしられがたければおしあてにいひ試み給ふ也

侍しか。それも女にてぞ。それにつけても。物思ひのもよほしになん。よはひの末に思ひ給へなげき侍める。と聞え給ふ。さればよとおぼさる。あやしきことなれど。をさなき御うしろみにおぼすべく。聞え給ひてんや。おもふ心ありて。ゆきかゝづらふかたも侍りながら。よに心のしまぬにやあらん。ひとりずみにてのみなん。まだにげなきほどゝ。つねの人におぼしなずらへて。はしたなくやなどの給へば。いとうれしかるべきおほせごとなるを。まだむげにいはけなきほどに侍るめれば。たはふれにても。御らんじがたくや。そも〳〵女は人にもてなされて。おとなにもなり給ふ物なれば。くはしくはえとり申さず。かのおば北のかたにかたらひ侍りて聞えさせん。とすくよかにいひて。ものごはきさまし給へれば。わかき御心にはづかしくて。えよくも聞え給はず。あみだほとけものし給ふだうに。する事侍るころになん。そやいまだつとめ侍らず。すぐしてさぶらはんとてのぼり給ひぬ。君はこゝちもい

むすめたゞひとり　〔湖〕僧都は紫上の事をはしり給はれば尼公のむすめ紫上の母の事をこたへ給ふ也
すぎ侍りにしかば　〔湖〕大納言死去ありし也
いかなる人のしわざにか　〔釋〕いかなる人のしわざにてか嫉して兵部卿宮しのびてかたらひ給ひしと也此所惣論にいへるごとくその世のさま
なればいふかしむべからず
もとの北のかた　〔釋〕兵部卿宮の本臺也此人の事末々に見えたりやすからぬ事は嫉妬にてくるしき事多かりしよしなり
なくなり侍りにし　〔釋〕紫上のはゝ君身まかり給ひし也
物思ひに病づく物と　〔細〕僧都の詞與あり法師などは物に貪着のなき故かく思ふもことわり也　〔釋〕世に物思ひにて病つくといふことを眼前
に見たりと也
さらばその子なりけり　〔岷〕源の心尼公の子かと紫を思ひたれば孫にて有けるよとおとしつけ給ふ也
かの人にもかよひ聞えたるにや　〔細〕兵部卿の御筋なれば藤壺にも餘所ならぬによりて似かよひ給ふと思ひ給ふ也　〔釋〕藤つぼは兵部卿の宮
の御妹なり
人のほども　〔湖師〕宮の御むすめなれば也　〔釋〕なかしうの下すこし詞のたらぬこゝちす落たるか
中々のさかしら心なく　〔玉〕まだをさなくはあれどもさかしら心なくてそれもかへりてよからんの意なりさかしらはかしこだて也　〔釋〕中々
の意小櫛のごとし但しこゝは中々のと體言にいへればナマナカナマジヒなど譯して、かなへり
とゞめ給ふかたみ　〔釋〕此世にとゞめ置給ふ忘れがたみの子といふ意也
をさなかりつるゆくへの　〔玉〕ゆくへは僧都の物がたりの末也　〔釋〕をさなかりつる人のゆく末といふ意也かりつるといふ詞過去なればひろ
まのかいまみに見たりし時の事を思ひ出給へることゝ聞ゆ小櫛少したがへり
なくなり侍りしほどにこそ　〔釋〕紫の母上のなくなり給ひしなりからに女子一人うみ給ひしよし也侍りしとあるは産給ひしこと也
それにつけても　〔釋〕その女子の事につけても也物思ひは尼君の也
よはひの末に　〔湖〕尼公の老のよはひの末に思ひなげかるゝと也
さればよと　〔岷〕前にその子なりけりとおぼし合せつと有こゝにてはいよ／＼治定し給ふ也
あやしきことなれど　〔岷〕僧都へは申にくき事なれどもなどゝあへしらひたる詞なるべし
ゆきかゝづらふかたも云々　〔釋〕葵上なるべしよに心のしまぬとは俗に染ヅクとかいふごとく互に心のふかく染ぬ故にやあらんとの意なるべ
し

つれの人におぼしなずらへて
〔玉〕我をよのつれの人の思ふ心のやうにおぼしてまだ似つかはしからぬよはひなればはしたなくやおぼさん我はよのつれの人のやうにいもせの交の事を思ひて申にはあらずと也
まだむげに　〔玉〕まだはいまだ也又と見るはひがこと也
女は人にもてなされて云々
〔玉〕此語はおば北の方にかたらひてといふへかけて心得べしまだいときなくは侍れども女は云々なれば祖母にかたらひて見侍らんといふ意也　〔釋〕此所の意は女は人にとりつくろはれて人の妻にもなる物なれば世をすてたる法師などのあづかるべき事にもあらずされば委しくは得執し申さず祖母北の方にかたらひて其心にまかせんとの意也とり申すとは事をとりて申す意にて執達といはんがごとし諸注たがへり
えよくも聞え給はず　〔釋〕なほとや

となやましきに。雨すこしうちそゝぎ。山風ひやゝかに吹たるに。瀧のよどみもまさりて。おとたかう聞ゆ。すこしねふたげなる讀經の。たえ〴〵すごく聞ゆるなど。すゞろなる人も。所がら物あはれなり。ましておもほしめぐらす事おほくて。まどろまれ給はず。そやといひしかども。夜もいたうふけにけり。内にも人のねぬけはひしるくて。いとしのびたれど。ずゞのけうそくにひきならさるゝおとほの聞え。なつかしう打そよめくおとなひ。あてはかなりと聞給ひて。ほどもなく近ければ。とにたてわたしたる屏風の中を。すこしひきあけて扇をならし給へば。おぼえなきこゝちすべかめれど。聞しらぬやうにやはとてゐざりいづる人あなり。すこししぞきて。あやし。ひがみゝにや。とたどるを聞給ひて。佛の御しるべは。くらきにいりてもさらにたがふまじかなる物を。とのたまふ御こゑの。いとわかうあてなるに。うちいでむこわづかひもはづかしけれど。いかなるかたの御しるべに

かくやとよきさまにもえかたらひ給はぬ也えもじ聞えの上にある意也

する事侍るころになん　〔玉補〕頃は此日比の頃也時刻をいふにあらず注に初夜のつとめ也と有はたがへりさては次の詞と重複せり

心ちもなやましきに　〔釋〕瘧後なれば也

瀧のよどみも　〔玉補〕よどみこゝに用なしこれは必とよみを誤れるなるべし　〔釋〕右の說のごとく見ては難なしよどみは瀧の岩にせかれてここかしこたまり淀むなればいかゞとよみは響字を書來れる意にてひゞきの事也

れふたげなる御經の　〔細〕引聲のあみだ經なるべし　〔岷〕例時とて聲を引てよむ也　〔釋〕僧都の讀經なるべし山寺の春夜のけしき例のいとめでたし

すゞろなる人も　〔釋〕心なくすゞろなる人も此けしきに感じては物哀なるべしまして源氏君は思しめぐらす事多くてまどろまれ給はずと也

初夜といひしかども　〔釋〕僧都初夜過してといひしかども來らずして夜のいたく更たるさま也

すゞのけうそくに　〔岷〕念珠の脇息にあたるなり　〔河〕枕草子云ずゞのけうそくにあたりてなりたるこそ心にくけれ

なつかしう打そよめく　〔釋〕女房たちなどなるべし

とにたてわたしたる屛風の中を　〔釋〕尼君の居所は西おもてと上にあり源氏君は南おもてにおはすれば西おもての間の外にたてたる屛風なるべし

扇をならし給へば　〔釋〕昔は人をよぶに扇を鳴したること此物語の中にもあまた見えたり今の人の手をたゝく類なるべし

すこししぞきて云々　〔釋〕この出たる人くらき故に源氏の居給ふをとみにえ見つけず少し退きてあやしや扇のおとはひが耳の聞ぞこなひかとたどる也玉小櫛に源氏の退き給ふやうにいはれたるはわろし又此出たる人を舊注に少納言ときはめていはれたるもいかゞげにも少納言めきては聞ゆれど猶たゞ誰ともなく一人の女房と見るべし

ほとけの御しるべは　〔河〕從レ冥入二於冥一永不レ聞二佛名一　法華經　〔新〕此文によりて且僧家尼君おはせば所につけての給ふ也　〔釋〕此出たる女房を佛のしるべにとりなして佛は冥途に入ても更に迷ふまじく其佛の御しるべなればたがふまじき物をなどひが耳とはたどるぞといふ意也　〔玉〕舊注に尼君へ歌まゐらせ給はんしるべに云々はひがこと也

はつくさの云々　〔釋〕はつ草に紫上をたとへたるはさらに論なしさてその初草の若紫を見たるより我たびねの袖も涙にかわかぬといふを草の縁の露にとりなしたるなりうへといへるに身のうへの事をもかねたるかさまではあらぬか

と聞え給ひてんや　〔岷〕かやうにつたへてくれられんやとのたまふ也

承りわくべき人も　〔岷〕わくべきといへるおもしろし紫上の幼きをかくいふ也

おのづから云々　〔孟〕さる故ありて、申すと思はれよと也
よづいたる　(釋)よづくとは男女のなからひの事をしろをいふ既にいへり
さるにては　〔玉〕それにしてはといふこと也
なさけなしとて　(釋)返歌の遲きは情のなき事としたるその世のならはしなり
まくらゆふ云々　〔細〕若草の御歌をすきがましき方には取なさで返したし給ふ也　(釋)まくらゆふとは草枕を結ふといふ意にて旅寢の事也さてこよひばかりのたびねの露けさを我常にすむ山の苔の衣の露けさにくらべては申給ふな同じやうの事にはあらずはるかに此方の露けさはまさり侍るといふ意也故にひがたう侍る物をと言そへたり舊注にみ山の苔とは袖の事也とあるは說きまゝならず露けさはいづれも袖の事をにほはせたるなれど上の歌のたびねの袖とあるにゆづ

かは。おぼつかなく。と聞ゆ。げにうちつけなり。とおほめき給はんも。ことわりなれど。

はつ草のわか葉のうへを見つるよりたびねの袖も露ぞかわかぬ。と聞え給ひてんや。との給ふ。さらにかうやうの御せうそこ。うけ給はりわくべき人も物し給はぬさまは。しろしめしたりげなるを。たれにかは。と聞ゆ。おのづからさるやうありて聞ゆるならん　と思ひなし給へかし。との給へば。いりて聞ゆ　あないまめかし。この君や。よづいたるほどにおはするとぞおぼすらむ。さるにてはかのわか草を。いかできい給へることぞ。とさまざまあやしきに。心もみだれて。久しうなれば。なさけなしとて。

まくらゆふこよひばかりの露けさをみ山のこけにくらべざらなん。ひがたう侍るものを。と聞え給ふ。かうやうの人づてなる御せうそこは。まださらに聞えしらず。ならはぬことになん。かたじけなくとも。かゝるついでに。

りてにふきたるなり花鳥に「おく山のこけの衣にくらべなんいづれか露はこぼれまさるといふ歌を擧られたるは類例なり引歌にはあらず

人づてなる御せうそこは

(釋)人傳なる消息はいまだいひもしらず聞もならはずといふ意也

ひがこと聞給へるならん

(釋)岷江本いかでひがごとゝあり もとしか有しことしるければ今補へついかにして紫上の事を聞ひがめ給へるならんとの意也ひがことといふはまだ幼き人の事をとかくの給ふは必聞ひがめ給へるならんといふ意にてひがことゝはいへる也舊注たがへり

はしたなうもこそ

〔湖〕尼君の返事ものたまはずば源氏のつきなく思召んと少納言などの申す也

うちつけに 〔湖〕初對面に淺きやうなるものゝついでなれどもと也

おとな〳〵しう 〔玉〕尼君のさまの

まめ〳〵しう聞えさすべき事なん。と聞えたまへれば。尼君いかでひがこときゝ給へるならん。といとはづかしき御けはひに。何事をかはいらへ聞えんとのたまへば。はしたなうもこそおぼせ。と人々聞ゆ。げにわかやかなる人こそうたてもあらめ。まめやかにの給ふかたじけなし。とてゐざりより給へり。うちつけにあさはかなりと御覽ぜられぬべきついでなれど。心にはさもおぼえ侍らねば。ほとけはおのづからとて。おとな〳〵しうはづかしげなるにつゝまれて。とみにもえうちいで給はず。げに思ひ給へよりがたきついでに。かくまでの給はせ聞えさするも。あさくはいかゞとの給ふ。あはれにうけ給はる御有さまを。かのすぎ給ひにけん御かはりに。おぼしないてんや。いふかひなきほどのよはひにて。むつまじかるべき人にも。たちおくれ侍りにければ。あやしううきたるやうにて。年月をこそかさね侍れ。おなじさまに物し給ふなるを。たぐひになさせ給へと。いと聞えまほしきを。かゝるを

はづかしげなるにつゝまれて源氏君のおぼす事をばとみにもえいひ出給はぬ也

あさくはいかゞ〔新〕思ひよらぬ時のついでながらかくまでの給ふも又おほえずかく御物語聞ゆるもげに佛の御しるべならんと思へば淺くはいかゞ思ひ侍らんと也

すぎ給ひにけん御かはりに

〔湖師〕源を紫の御母のかはりにもおぼしめしなせと也〔釋〕下に後の親などいへる詠の張本なり

同しさまに〔細〕今紫上も母にはやくはなれ給ひてみなし子なるは源と同じたぐひなるべし

かゝるをりも有がたくてなん

〔釋〕かゝるをりもなくてもだしたりしなけふのついでにおぼされん所をも憚らず打出たりと也細流になんにてよみきるべしとあれど猶なんはうち出侍りぬるのぬるまで係りたる意にて其中にもだしたりし事をふくめたる格と見るべくや巻中かゝること多し

りもありがたくてなん。おぼされんとこゝろをもはゞからす。うち出侍りぬる。と聞え給へば。いとうれしう思ひ給へぬべき御ことながらも。きこしめしひがめたることなどや侍らん。とつゝましうなん。あやしき身ひとつを。たのもし人にする人なん侍れど。いとまだいふかひなきほどにて。御覧じゆるさるゝかたも侍りがたければ。えなんうけ給はりとゞめられざりける。とのたまふ。みなおぼつかなからずうけ給はるものを。所せうおぼしはゞからで。思ひ給へよるさまことなる心のほどを御覧ぜよ。と聞え給へど。いとにげなきことを。さもしらでの給ふとおぼして。心とけたる御いらへもなし。僧都おはしぬれば。よしかう聞えそめ侍りぬれば。いとたのもしうなん。とておしたて給ひつ。あかつきがたになりにければ。法華三昧おこなふだうのせんぼうのこゑ。山おろしにつきて聞えくる。いとたふとく。瀧の音にひゞきあひたり。

吹まよふみ山おろしに夢さめてなみだもよほすたきのおとかな。
さしくみに袖ぬらしける山水にすめるこゝろはさわぎやはする。みゝなれ侍りにけりやと聞え給ふ。明ゆく空はいといたうかすみて。山の鳥どもそこはかとなくさへづりあひたり。名もしらぬ木草の花ども。いろ〳〵にちりまじり。にしきをしけると見ゆるに。鹿のたゝずみありくもめづらしく見給ふ。なやましさもまぎれはてぬ。ひじりうごきもえせねど。とかうしてごしんまゐらせ給ふ。かれたるこゑのいといたうすきひがめるも。あはれにくうづきて。だらによみたり。御むかへの人々まゐりて。おこたり給へるよろこび聞え。内よりも御つかひあり。僧都世に見えぬさまの御くだ物。なにくれと。谷の底までほりいでゝいとなみ聞え給ふ。ことしばかりのちかひふかう侍りて。御おくりにもえまゐり侍るまじき事。なか〳〵にも思ひ給へらるべきかな。と聞え給ひて。おほみきまゐり給ふ。山水に心とまり侍りぬれど。内よ

きこしめしひがめたる
（釋）うれしき事ながら聞そこね給へることなども侍るべしと也上にいかでひがこと聞給へるならんと有し脉也
たのもし人にする人
（釋）尼君をたのもしき人にもしてかゝり居る人といふ意にて紫上也
いふかひなきほどにて　（釋）堅固に幼き也
みなおぼつかなからず
（細）たしかによく案内を知侍る物をと也
所せうおぼしはゞからで
（釋）事狭く遠慮し給はずとも也
思ひ給へよるさまことなる心のほどを　（釋）幼き兒に思ひよるはよのつねのさまに異なる也その心ざしのつねならぬをもゆるして見給へとの意也
いとにげなき事を
（釋）紫上の幼くしていもせのかたらひの似げなきをしらでのみの給ふとおぼしてとにかくに領掌し給

はぬなり
聞えそめ侍りぬれば 〔新〕いはで思
ひしよりもかくうちいでゝは終に
いひ侍らんものとたのもしきとな
り
おしたて給ひつ 〔釋〕上にとにたて
わたしたる屏風の中をすこし引あ
けてとある首尾なれば屏風をおし
たて給へる也湖月師説に障子など
をたて給ふ也といへるはいかに
法華三昧おこなふ堂の
〔河〕三昧梵語也 此云二正受一又名二
正定一法華懺法智者大師（南岳）所レ
行法門也 〔花〕止観に四種三昧あ
りいはゆる常行常坐半行半座非行
非座の四種也法華懺法は半行半座
の三昧也懺法は天台大師或説遵式
つくり給ひて六時に六根の罪を懺
悔する法門也
吹まよふ云々 〔玉〕上句せんぽうの
聲を聞て煩悩の夢のさめぬるこゝ
ちすといふ意をふくめて感涙をも
よほす意をかねたるか
さしくみに云々 〔新〕さしくみには

りおぼつかながらせ給へるも。かしこければなん。いまこの花のをりすぐさずまゐりこん。

宮人にゆきてかたらん山櫻風よりさきにきても見るべく。とのたまふ御もてなしこわづかひさへ。めもあやなるに。

うどんぐゑの花まちえたるこゝちしてみ山ざくらにめこそうつらね。と聞え給へば。ほゝゑみて。時ありてひとたびひらくなるは。かたかなる物を。とのたまふ。ひじり御かはらけたまはりて。

おく山の松のとぼそをまれにあけてまだ見ぬ花のかほをみるかな。とうちなきて見奉る。ひじり御まもりにどこたてまつる。見給ひて。僧都さうとくたいしのくだらより得給へりける。こんがうじのずゝの。玉のさうぞくしたる。やがてそのくにより入れたるはこのからめいたるを。すきたるふくろにいれて。五葉の枝につけて。こんるりのつぼどもに。御くすりどもいれて。

さしつけにといふ意也さて君は此瀧の音などを聞てさしつけに袖ぬらし給ふと承れどなれてすむ身はさもおぼえぬはみゝなれたる故にや侍らんとこたへたり云々　（釋）さしくみの説新釋のごとしなほ別にも論ずべしさてさしくみといへるはもとより水の縁語なる故に取出たるなり結句の詞つよきを思ふに佛心の動かぬをそへたるにも有べし新釋右に引たる下にいはれたる説はひがこと也僧都のうたなることは勿論なり

あけゆく空は云々　（釋）春山のけしきいとめでたし舊注にさまぐ〵の詩など引れたれどすべて用なし作者の心にかの詩などを思はれぬにもあらざめれどそれとたしかにあてたるならればいたづらごと也

まぎれはてぬ　（釋）これは源氏君の事なればまぎれはて給ひぬとあるべきを寫しおとせるにや

うごきもえせれど　〔湖師〕さきに老かゞまりて室の外にもまかでずといひし首尾也

ごしん　〔河〕護身　〔湖師〕加持する事也

すきひがめる　〔玉〕ひがめるはよのつれのさかりの人の聲とはかはれるよし也調子にのきたりといふはあまりにことぐ〵し　〔新〕齒多く落ぬれば聲のすきてひがめる也

ぐうづきて　〔細〕ぐうは功也功のいりたる也

世に見えぬさまの　（釋）里にては見なれぬよし也

くだもの　〔玉補〕すべて書中にくだ物とあるは皆今世の硯蓋の取肴といふ類の物と見えたりこれらの詞を見てもしるべし

谷のそこまで　（評）此句にて僧都のいといたう奔走したるさまをあらはしたるめでたし

ことしばかりの　〔細〕前にも此二とせと有三年住山の人と見えたり

中々にも　〔玉〕此度かく對面し奉れるはうれしき物から別れ奉りては中々に名殘かなしかるべしと也舊註いみじきひがこと也

いまこの花の　（釋）この今は俗言にオッツケといふに同じつかひざま也

みや人に云々　（釋）この山櫻のさまを歸りて大宮人につげて風にちらぬさきにはやくきて見るべしとかたりてもろともにこんといふ意也風よりさきにといへるおもしろし

うどんぐゑの　〔河〕案優曇華金輪王出世瑞也故號二靈瑞花一人壽八萬歳時節金輪王遶二四州一其時海水半減するによりて此花出現する也是を光源氏を待えたるによそへたる也詞に時ありて一たび開くなるとあるも法華の久遠時一現の心也　〔新〕下に源の御有さまを何事にもめうつるまじかりけるといへるに同じ　（釋）華をぐゑと書たるは重き聲によませんためにて源氏をぐゑんじ法華經をほくゑ經といへる類也み山ざくらは卽こゝに咲たる花をいへるのみ也

時ありて一たび〔玉〕金光明經讃佛品に希有希有佛出二於世一如二優曇華時一現耳この文にていへるなり

おく山の云々〔釋〕おく山にさしこめたる松の扉を希にあけてまだ見ぬ花の顏を見るといひてまだ見ぬ花にうどんげをふくめて源氏君によそへたる也花のかほといふ例餘滴に擧たり〔岷〕私云むろのとにもまかでずとあれば松の扉をまれにあけてと云似合たりかほを見る哉といふは花のうつくしき心也かほ鳥かほ花などもうつくしき事也云々

うちなきて〔湖〕感涙なるべし

どこ奉る見給ひて

〔玉〕奉るとよみ切て見べし見給ひてはたゞ僧都のそれを見たるよしのみなり弄花細流の說あたらず無用也〔岷〕獨鈷は菩提心の表也〔湖師〕獨鈷は行人の常住もつ物也まもりなどの爲に人にも奉る也

さうとく太子の云々

藤さくらなどにつけて。所につけたる御おくり物ども。さゝげ奉り給ふ。君はひじりよりはじめ。ど經しつる法師のふせ。まうけの物ども。さまぐ\にとりにつかはしたりければそのわたりの山がつまで。さるべきものどもたまひ。御ず經などしていで給ふうちに。僧都いり給ひて。かの聞え給ひし事まねび聞え給へど。ともかうもたゞ今は聞えんかたなし。もし御心ざしあらば。いま四五年をすぐしてこそは。ともかうも。との給へば。さなん。とおなじさまにのみあるを。ほいなしとおぼす。御せうそこ。僧都のもとなるちひさきわらはして。

夕まぐれほのかに花の色をみてけさはかすみのたちぞわづらふ。御かへし。

まことにや花のあたりはたちうきとかすむる空のけしきをも見ん。とよしあるてのいとあてなるを。うちすてかい給へり。御車に奉るほど。おほい殿

〔花〕百濟國より金剛子のわたりたることに元興寺資財帳第九云喜多迦子金剛子此等百濟國所ﾚ献也云云但し聖德太子の珠數の事はいまだ見出し侍らずさもありぬべくよりきたる事をばつくりごとにいひなす常の事也　〔釋〕一本ふだらくよりと有もよかるべしいはゆる天竺の補陀落山より得給へるといへる也いづれにてもたゞ得がたき物のためしにいへるのみと見てあるべし

こんがうじのずゞ　〔餘〕義楚六帖寶玉珍奇の部金銀のあひだに金剛子を載たるをみれば金の堅固なる物としらる此外に金剛樹といへる物あることをしるせり　〔釋〕金剛子の珠數を玉をもてかざりたるなり

からめいたるを　〔釋〕からめくとは我が國にてめなれずもろこしざまにこちたきをいふ詞なり下みな同じ

すきたるふくろに　〔拾〕透たる袋歟

より。いづちともなくておはしましにけることゝて。御むかへの人々。君だちなどあまたまゐり給へり。頭中將左中辨。さらぬ君だちもしたひ聞えて。かうやうの御ともはつかうまつり侍らんと思ひ給ふるを。あさましうおくらさせ給へること。とうらみ聞えて。いといみじき花のかげに。しばしもやすらはずたちかへり侍らんは。あかぬわざかなとの給ふ。岩がくれのこけのうへになみゐて。かはらけまゐる。おちくる水のさまなど。ゆゑある瀧のもとなり。頭中將ふところなりけるふえとり出て。吹すましたり。辨の君扇はかなう打ならして。とよらの寺のにしなるやとうたふ。人よりはことなる君だちなるを。源氏の君いといたううちなやみて。岩によりゐ給へるは。たぐひなくゆゝしき御有さまにぞ。何事にもめうつるまじかりける。れいのひちりきふくずゐじん。さうのふえもたせたるすきものなどあり。僧都きんをみづからもてまゐりて。これたゞ御てひとつあそばして。おなじくは山の鳥もお

どろかし侍らん。とせちに聞え給へば。みだりごゝちいとたへがたき物をと聞え給へど。けにくからずかきならして。みなたち給ひぬ。あかずくちをしと。いふかひなき法師わらはべも。涙をおとしあへり。ましてうちには。年おいたる尼君たちなど。まださらにかゝる人の御有さまを見ざりつれば。この世のものともおぼえ給はずと聞えあへり。僧都も。あはれなにの契にて。かゝる御さまながら。いとむつかしき日のもとの末の世に。生れ給ひつらんとみるに。いとなんかなしき。とてめおしのごひ給ふこのわか君をさなごこちに。めでたき人かなと見給ひて。宮の御ありさまよりも。まさり給へるかな。などの給ふ。さらばかの人の御子になりておはしませよと聞ゆれば。うちうなづきて。いとようありなん。とおもほしたり。ひゐなあそびにもゑかい給ふにも。源氏の君とつくりいでゝ。きよらなるきぬきせかしづき給ふ□君はまづうちに參り給ひて。日ごろの御物語など聞え給ふ。いといたう

また絹に結たる袋歟云々
〔玉〕透たる袋歟と拾遺にいへるがごとし

こんるりのつぼ（釋）紺色なる瑠璃の壺也さて河海に藥師佛の事ないはれたるは小櫛に辨へられたるごとく用なきいたづらごと也然れども紺瑠璃の壺に藥を入たるはかの藥師佛の手にもてるより思ひつきたるにはあるべし事がらしか思はるゝ也

所につけたる（釋）所がら事がらにつけたる品々を送物に奉り給ふ也獨鈷念珠藥は瘧病のため五葉藤櫻はたりからの山づと也皆意を用ゐられたる作者の結構思ふべし

とりにつかはしたりければ
（評）此句殊に透間なき書ざまと云ふべし

出給ふうちに（釋）出給ふ間に也内にと心得たる注はひがこと也

さなんと同じさまに〔新〕さあることなりと僧都も同じさまにいふなり

夕まぐれ云々　〔細〕尼君の方への歌なりちと見給ひし事をほのめかし給ふ也　〔釋〕下句此所をたちうく思ふ事を霞のたつにいひかけたる也紫上を花にたとへたるはもちろん也

まことにや云々　〔新〕おもては花のうへにて下にはかすめほのめかし給ふ事のまことかかりそめごとか年へて後に見參らせんといへり故に御心ざしあらば今四五年を過してと有し意也　〔釋〕初句は立うきへ係る意也かすむると有にいひかすめ給ふことをよせたること花鳥の御説のごとし拾遺に下句をけさの御たちのけしきに見奉らんと也といへるはわろし

御むかへの人々　〔評〕此段は餘波に書なしてなほ上の段のあへなく失なん事を惜みたる法也心をつくべし

とよらの寺の西なるや　〔河〕可津良支乃天良乃末江名留也止與良乃天良能爾之奈留也江乃波井爾之良太萬之川久也末之良太末志津久也於之止止於之止々　下略　催馬樂　葛城　〔釋〕この歌は光仁天皇の御時の童謠なるを催馬樂にいれたる也豐浦寺は大和に有し也此寺の事諸説さだかならねどこゝに用なければ略きつえのはゐは榎葉井也名所也　〔玉〕えのは非瀧の本なるに縁あり

人よりはことなる　〔岷〕御むかへに參たる人々も皆類なき殿上人なれども源の御前にてはけおさるゝ也

いたう打なやみ　〔釋〕うつくしき人の打なやみてます／＼艶に見ゆるさまないへり例のほめたる脉也

れいのひちりきふく隨身　〔湖〕いつも御供にひちりきもちて參る人なるべし

さうの笛もたせたる　〔細〕是も隨身なるべし

同じくは山の鳥も　〔河〕瓠巴鼓琴瑟鳥舞而鳴魚躍而遊矣　列子　〔湖師〕此山の人は僧俗皆源に目驚せし心をいふ詞也

むつかしき日の本の　〔花〕上の僧都の歌に光源氏をば優曇華にたとへて輪王の出世によせたり故に此詞はある也　〔玉〕かく皇國をいやしくいひなすはほうし心のならひにてつれの事ながらいともかしこきまがことなり

かの人の御子に　〔釋〕上にかのすぎ給ひにけん御かはりにおぼしないてんやとありし脉也心をつくべし

ひいなあそびにも云々　〔評〕此段紫上の源氏君にはじめて思ひつき給ふことを説出て後の伏案としたりさてひいなの事も繪の事も皆後々に引いでゝ用あることにあやなしたり心をつけて置べき也すべて僧都の送出られたる所よりは餘波のにほひにそへたる文なる中におのづから末の巻の伏線をのこされたりよく考へて味はふべし

君はまづ内に　〔評〕先の字めでたし

ゆゝしとおぼしめしたり　〔孟〕帝の御心に源の顏色を御覽じておどろき給ふ也ゆゝしといふ詞は所によりてかはるいま／＼しき事にもいふなり

あざり　〔細〕七高山阿闍梨近江國比叡山比良山　美濃國伊吹山　山城國愛宕山　攝津國神峯寺　大和國金峯山葛城山　毎年給料五十斛春秋各四十九

日於二件山一修二藥師儀邊一祈二天下
五穀一也 承和三年定
いかゞと思ひはゞかりて
〔湖〕源の忍びの御ありきに大臣の
おはさん事はわざと遠慮し給ひて
と也
のどやかに 〔細〕大殿我御方に誘引
し給ふ也
さしもおぼされど
〔釋〕上下の葵上の例の脉也
みづからはひきいりて
〔岷〕源をば端にのせ奉りて大殿は
奥のかたにのり給ふ也車はおくの
かたはさがり也
さすがに心ぐるしく
〔湖師〕葵は源の心にいられども大
殿の懇なるはさすがに心ぐるしく
いとほしく思ひ給ふと也
もの〻ひめ君 〔釋〕書にかきたる物
語ぶみなどの中なる姫君といふ意
か又は作り物の人形といふ意かさ
てはゑにかきたるといふに少しか
なはぬかとにかくに「かきたるも
の」とつゞけてよむはわろし

おとろへにけり。とてゆゝしとおぼしめしたり。ひじりのたふとかりける事などとはせ給ふ。くはしくそうし給へば。あざりなどにもなるべきものにこそあめれ。おこなひのらうはつもりて。おほやけにしろしめされざりける事。とたふとがりの給はせけり。大殿まゐりあひ給ひて。御むかへにもと思ひ給へつれど。しのびたる御ありきにはいかゞ。と思ひはゞかりてなん。のどやかに一二日うちやすみ給へとて。やがて御おくりつかうまつらんと申給へば。さしもおぼされねど。ひかされてまかで給ふ。わが御車にのせ奉り給ひて。みづからはひきいりて奉れり。もてかしづき聞え給へる御心ばへのあはれなるをぞ。さすがに心ぐるしくおもほしける。殿にも。おはしますらんと心づかひし給ひて。ひさしく見給はぬほどに。いとゞ玉のうてなにみがきしつらひ。よろづをとゝのへ給へり。女君れいのはひかくれて。とみにもいで給はぬを。おとゞせちに聞え給ひて。からうじてわたり給へり。たゞゑにかきた

思ふことも打かすめ云々
〔玉〕年のかさなるにそへてといふより源氏君の詞也さてまさるなの。なもじおだやかならず思はずにといへるも言たらずはぶきていひのこすも詞にこそよれかくては語とのはずされはこゝは「御心のへだてもまさるはいと心ぐるしく思はずにこそと有けんをはなに誤りこそを落せるなるべしさてときぐくはといふより源氏詞としたる注はひがこと也さては上におもほしてといへるにかなはずおもほしての下より詞なることしるし
〔玉補〕思ふことも打かすめ云々よりすべて皆源の御詞なり小櫛あやまられたり
〔釋〕小櫛説のごとくならばあはれならめといふ下にともじあるべき也されど「おもほしてといふこと葵上のおもほす事を源氏ののたまへるならでは聞えがたしさらば補遺説のごとく「思ふことも打かすめといふより源氏君の詞とすべ

る。ものゝ姫君のやうに。しすゑられて。うちみじろき給ふこともかたく。うるはしうて物し給へば。思ふこともうちかすめ。山みちの物語をも聞えむに。いふかひありて。をかしう打いらへ給はゞこそあはれならめ。世には心もとけず。うとくはづかしきものにおもほして。年のかさなるにそへて。御心のへだてもまさるを。いとくるしく思はずに。ときぐ〵はよのつねなる御けしきを見ばや。たへがたうわづらひ侍りしをも。いかゞとだにとはせ給はぬこそ。めづらしからぬ事なれど。猶うらめしう。と聞え給ふ。からうじて。「とはぬはつらきものにやあらん。としりめに見おこせ給へるまみ。いとはづかしげに。けたかううつくしげなる御かたちなり。まれぐ〵はあさましの御ことや。とはぬなどいふきはゝ。ことにこそ侍るなれ。心うくものたまひなすかな。よとゝもにはしたなき御もてなしを。もしおもほしなほるをりもや。とさまかうざまにこゝろみ聞ゆるほど。いとゞおもほしうとむなめり

きにやさては又「いふかひありて云々あはれならめといふ語勢あまりなるやうなれどすべては心つゞくべしかくても「思はずにといふことは猶おだやかならず脱文などあるにやなほ考ふべし諸抄に何のさだもなきはいと麁し

よのつれなる御けしきを（釋）よのつれの女のやうにしたしくかたらひ給ふけしきを見まほしと也

たへがたう　（釋）瘧病の事

とはぬはつらき　［拾］六帖五「こともつき程はなけれどかた時もとはぬはつらき物にぞ有ける同六「我宿にきゐる鶯羽をよわみとはぬはつらきものにぞ有ける
［河］後「わすれねといひしにかなふ君なれどとはぬはつらき物にぞありける
（釋）拾遺に引る初の歌の詞なるべし

まれ〳〵は　［弄］［細］まれ〳〵とは

かし。よしや「いのちだにとて。よるのおましに入給ひぬ。女君ふともいり給はず。聞えわづらひ給ひて。うちなげきてふし給へるも。なま心づきなきにやあらん。ねふたげにもてなして。とかう世をおもほしみだるゝ事おほかり。かのわか草のおひいでんほどの。猶ゆかしきを。にげないほどゝ思へりしも。ことわりぞかし。いひよりがたきことにも有かな。いかにかまへて。たゞ心やすくむかへとりて。あけくれのなぐさめにもみん。兵部卿の宮は。いとあてになまめい給へれど。にほひやかになどもあらぬを。いかでかのひとぞうにおぼえ給ひつらむ。ひとつきさいばらなればにや。などおもほす。ゆかりいとむつましきに。いかでか。とふかうおもほす。またの日御ふみ奉れ給へり。僧都にもほのめかし給ふべし。あまうへには。もてはなれたりし御けしきの。つゝましさに。思ひ給ふるさまをも。えあらはしはて侍らずなりにしをなん。かばかり聞ゆるにても。おしなべたらぬ心ざしのほどを。御覧

たま〳〵の給ひ出る詞のかやうなるよとうらみ給ふ也云々　〈釋〉案に此詞穩ならずもしくは上のとはぬはつらきといふ引歌の句などにやさらば引歌なほあらんか考ふべしこのまゝにていはゞとはぬはつらきなどまれ〳〵にかよひくる人のやうにの給ふはあさましの御事かなといふ意にや舊注のごとくにてははもじ聞えがたし

とはぬなどいふきはゝ　〈釋〉とはぬなどいふことはたま〳〵かよふ所などにこそいふべきことなれ本臺などの分際にの給ふべきことには侍らずとの意なるべし

こゝろみ聞ゆるほど　〈釋〉これは源氏君のこゝかしこしのびありき給ふことなどを葵上を試んためにするやうにのたまひなすなるべし

よしやいのちだに　〈餘〉拾遺集戀一よみ人しらず「いかにしてしばしわすれんいのちだにあらばあふよのありもこそすれ　古今集離別よみ人しらず「えぞしらぬ今こゝろみよ命あらばわれやわするゝ人やとはぬと　〈釋〉右の古今引歌孟新釋にも擧られたりこゝにかなふべし舊注の引歌はひがことなること餘滴にいへるがごとしさてこゝの意はよしや命だにあらば我やわするゝ人やとはぬといふことをつひには思ひ辨まへ給ふを見んといふ意也

ふとも　〈釋〉ふとは形容の辭

かのわか草の　〈釋〉かくいひて紫上ときかしむるは例の文法

いひよりがたき　〈釋〉似氣なきことゝ思へるがことわりなればしひてはいひよりがたき也

兵部卿の宮は云々　〈釋〉あてになまめくは上品にてしなやかなる也にほひやかなるは花やかにして愛らしき也舊注はまぎらはしき説也

いかでかのひとぞうに　〔玉補〕本のまゝにてよし小櫛に給へらんとある本をよしとせられたるはいかゞ　〈釋〉かの一族とは藤壺の一族といふをにほはせてかける也ひとつきさいばらとは兵部卿宮の御兄弟おほかる中に藤壺と兵部卿とは同じ后の腹に生れ給ふはらからなればさて紫上の藤壺に似給ふならんとの意也

ゆかりいとむつまじきに　〔萬〕紫上は藤壺の御姪女にておはしませばそのゆかりむつまじきと也藤の縁にゆかり面白き詞也

いかでかと　〈釋〉いかでかむかへとらんの意也かもじ餘りたるこゝちす

もてはなれたりし　〈釋〉尼君紫上の事をにげなき事としてもてはなれたりし也

思ひ給ふるさまをも　〔玉〕舊注に云々をなん殘多く思召故又かく文を參らすとの心也といへるはたがへり云々をなんの下にのこりおほく思ひ侍るといふ意をふくめたるまでにてそれ故又文を參らすといふ意はなしかばかり聞ゆるにてもといふはその意にはあらず下へかゝれる詞なるをや

おもかげは　〈釋〉上句山ざくらの面影の我身をはなれぬ意にてすなはち紫上のおもかげの事也　〔拾〕我心のあるほどをば山櫻のもとにとめて

こし物を何の心の身に殘りておもかげの立そふぞと也
よのまの風も　〔河〕「朝まだきおきてぞ見つる梅の花よのまの風のうしろめたさに　後撰元良親王
おしつゝみ給へる　〔花〕河海につゝみ文をたてぶみの事にいへるおぼつかなしつゝみ文は宇治卷にも見えたりたて文にては有まじきにや嫁娶記に見えたり云々
さだすぎたる　〔釋〕定過るとはよきころほひを過て年のふけたるをいふ諸説語釋にいへり
めもあやに　〔釋〕目も文にの意にて見るに文色ありてめでたきをほめていふ詞なり
ゆくての　〔釋〕過しころは道のついでに立より給ひての事なる故にゆくての御事といへるをかし舊注はひがことおほし
まだなにはづをだに　〔河〕此詞を常の人歌をいまだよまずと心得たるもあるにやさにはあらず古今序に難波津淺香山の歌を手ならふ人の

じしらば。いかにうれしうなどあり。中にちひさくひきむすびて。

源　おもかげは身をもはなれず山ざくら心のかぎりとめてこしかど。「よのまの風もうしろめたうなん。とあり。御手などはさるものにてたゞはかなうおしつゝみ給へるさまも。さだすぎたる御めどもには。めもあやにこのましうみゆ。あなかたはらいたや。いかゞきこえむ。とおぼしわづらふ。文の詞　ゆくての御ことは。なほざりにも思ひ給へなされしを。ふりはへさせ給へるに。聞えさせんかたなくなん。まだなにはづをだに。はか〴〵しうつゞけ侍らざめれば。かひなくなん。さても。

尼君　あらしふくをのへの櫻ちらぬまをこゝろとめけるほどのはかなさ。いとゞうしろめたうとあり。僧都の御かへりもおなじさまなれば。くちをしくて。

二三日ありて。惟光をぞたてまつれ給ふ。源詞　少納言のめのとゝいふ人あべし。たづねてくはしうかたらへ。などの給ひしらす。惟光心　さもかゝらぬくまなき御こゝ

はじめにもしけるといへる事なりいろはのぢやうに一字づゝかきていまだ此歌をだにかきえずといふ也さて返事にそのはなちがきなん見まほしきといへる也

さても　〔孟〕さてもと歌へかけて見るべし　〔釋〕此御説のごとしさてもははかなきへかゝる語脈也

あらしふく　〔湖師〕源の文に夜のまの風もうしろめたくとあるをうけてあらしふくとよめり上には花のさかりのすこしのほどに心をとむるははかなきといひて下は源の紫のをさなきに心をかけ給ふは嵐ふく山の櫻のちらぬまに心をとむるごとくはかなからんとなり

〔釋〕此説解得たり弄花玉小櫛などにたゞ花のうへをのみよめるやうに注せられたるはわろしさては次なるうしろめたうといふ詞も用なきをや

いとゞうしろめたう

〔玉〕さやうのはかなき御心にては紫上をまかせ奉ん事はいよ／＼う

ろかな。さばかりいはけなげなりしけはひを。まほならねども見しほどを。おもひやるもをかし。わざとかう御文あるを。僧都もかしこまり聞え給ふ。少納言にせうそこしてあひたり。くはしうおもほしのたまふさま。おほかたの御ありさまなどかたる。ことばおほかる人にて。つき／＼しういひつゞくれど。いとわりなき御ほどを。いかにおもほすにか。とゆゝしうなん。たれも／＼おぼしける。御ふみにも。いとねんごろにかい給ひて。かの御はなちがきなん。なほ見給へまほしきとて。れいの中なるには。

あさか山あさくも人を思はぬになど山の井のかけはなるらん。御かへし。

くみそめてくやしと聞し山のゐの淺きながらやかげを見すべき。惟光もおなじことを聞ゆ　このわづらひ給ふ事よろしくは。この頃すくして。京のとのにわたり給ひてなん聞えさすべき。とあるを。心もとなうおもほす「藤つぼの宮なやみ給ふ事ありて。まかで給へり。うへのおぼつかながりなげき

聞え給ふ御けしきも。いといとほしう見奉りながら。かゝるをりだにと。心もあくがれまどひて。いづくにも〳〵まうで給はず。内にてもさとにても。ひるはつく〴〵とながめくらして。くるれば王命婦をせめありき給ふ。いかゞたばかりけん。いとわりなくて見奉るほどさへ。うつゝとはおぼえぬぞわびしきや。宮もあさましかりしをおぼしいづるだに。よとゝもの御物思ひなるを。さてだにやみなんとふかうおぼしたるに。いと心うくて。いみじき御けしきなるものから。なつかしうらうたげに。さりとてうちとけず。心ふかうはづかしげなる御もてなしなどの。なほ人ににさせ給はぬを。などかなのめなる事だに。うちまじり給はざりけん。とつらうさへぞおぼさるゝ。何事をかは聞えつくし給はん。くらぶの山にやどりもとらまほしげなれど。あやにくなるみじか夜にて。あさましう中々なり。

見てもまたあふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎるゝわが身ともがな。と

しろめたしと也いとゞとは源氏君の文に夜のまの風もうしろめたくなんと有をうけていへり

少納言のめのといふ人あべし

(評)上のかいまみの所に少納言のめのとゝぞ人いふめるはと有てさて扇をならし給へる時出來たる人には名をいはずこゝにて少納言をたづねてかたらへとあるにてかの夜の人も少納言なるべしとやうににほはせたる筆のたくみいひしらずあぢはひあり

さもかゝらぬくまなき

(釋)いづくのくま〴〵までも源氏君のすき心のかゝるをいへるなりくまは隈にて かくれたる所をいふ

いはけなげなりしけはひを

〔玉補〕此下にともじ落たるべしくはしくおもほしのたまふさま

〔玉補〕くはしくはおもほしへはつゞかず下のかたるへかゝる也

御はなちがき 〔河〕放書也さきにいふごとくつゞけてかゝずして一字

づゝかきたるなり

れいの中なるには　〔湖〕前にも中にちひさく引結びてと有紫への文也

あさか山云々　〔河〕「あさか山かげさへみゆる山の井の淺くは人を思ふものかは　古今序　〔拾〕萬葉十六には下句あさき心を吾おもはなくに　〔花〕さきのなにはづをだにといへるによりてあさか山をとり出し侍り古今序の詞を思ひよせたる也　〔釋〕山の井の影といひかけたること諸抄のごとし契沖のけもじを濁りてよむといへるはひがこと也清てよむべしかけはなるはもてはなるといふにひとし

くみそめて云々　〔河〕「くやしくぞくみそめてける淺ければ袖のみぬるゝ山の井の水　六帖二　〔釋〕初二句は引歌の詞を思ひてきゝしとはいへるなり下句は小櫛のごとしかげは紫上のかげ也見るべきとある本は誤れる也　〔玉〕下句本歌に淺ければ袖のみぬるゝと有をその淺きをしりながら影を見せ奉るべきことかはと也我身を卑下したる也といふ注はかなはず

これみつも　〔花〕惟光かへりまゐりて尼うへはいまだ同じ返事を申させ給ふよしを申すなり

京の殿に　〔釋〕尼君の夫あぜちの大納言の家京にあること下に見えたり

藤つぼの宮云々　〔花〕三月四月の事なるべし　〔弄〕三條の宮へまかで給ふ也

つく〳〵とながめくらして　〔釋〕つく〳〵とは物を思ふ形容の辭ながめは物思ひのある時うか〳〵としてものゝ見つめらるゝをいふくらしては日をくらして也

王命婦　〔孟〕藤壺の官女なり　〔釋〕王の女などの宮つかへして命婦となりたるをかくいふべし舊注に王氏の命婦と注せられたるはいかゞ皇國に王氏といふ氏はあることなし河海の例は引そこね給へる也さてこの王命婦はこの御中のなかだちせし人也といふ事をことわらずしてふとあらはしたる筆づかひ例のいとめでたし

せめありき給ふ　〔釋〕日くるればなかだちの王命婦にさるべきひまもとめよとせめ給ふ也せめは今俗サイソクといふに同じ意也さてありきといへるにつきまとひてせめ給ふさましられていとめでたし

いかゞたばかりけん　〔拾〕日本紀に慮計洲方便これら皆たばかるとよみてはかるに同じ

見奉るほどさへ云々　〔評〕この一二句いとめでたし現とはおぼえず夢のやうなるぞわびしきといひて源氏君の心を評じたる也さてこの物のまぎれの事これより上にはひたすらに思ひかけ給ふけしきをほのめかしおきてこゝに初めて逢給へる事をいへるが旣に實事ありし後のことゝして藤壺の悔給へるさまにかきなされたるいとも〳〵上手の筆つきといふべしこれより末々皆此意を脉としたり深くあぢはふべし

宮もあさましかりしを云々　〔花〕是よりさき源氏君の女御にまゐりちかづき給へること此詞に見えたり　〔評〕花鳥の御說のごとしもじひとつにてすでに逢給へりしを聞せたる例のめでたしこれより次々は藤壺の御心をいへるが後々の卷までおし貫きていとも〳〵せちにあはれに

むせかへり給ふさまも。さすがにいみじければ。おもほ
　世がたりに人やつたへんたぐひなくうき身をさめぬ夢になしても。
しみだれたるさまも。いとことわりにかたじけなし。命婦の君ぞ。御なほし
などはかきあつめもてきたる。殿におはして。なきねにふしくらし給ひつ。
御文なども。れいの御覧じいれぬよしのみあれば。つねの事ながらもつらう。
いみじうおぼしほれて。うちへもまゐらで。二三日こもりおはすれば。また
いかなるにか。と御心うごかせ給ふべかめるも。おそろしうのみおぼえ給ふ。
宮も猶いと心うき身なりけり。とおぼしなげくに。なやましさもまさり給ひ
て。とく參り給ふべき御つかひしきれど。おもほしもたゝず。まことに御心
ちれいのやうにもおはしまさぬは。いかなるにか。と人しれずおぼすことも
ありければ。心うく。いかならんとのみおぼしみだる。あつきほどはいとゞ
おきもあがり給はず。三月になり給へば。いとしるきほどにて。人々見奉り

聞えたり心をつくべし

なのめなる事だに　（釋）わろき事だにあらばせめては思ひ絶る種にもならんをと也いとせちなる書ざま也

つらうさへぞ　〔玉〕よろづすぐれたるがつらうさへおぼさるゝ也

くらぶの山に　〔細〕只くらき心にて夜をなじたふ心なるべし古今集「秋夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり

〔玉〕曾根好忠集に「いざせことをぐらの山に家居してみじかき夏の夜をもうらみじ此歌こゝの意とおなじ

あやにくなるみじか夜にて　〔玉〕あやにくは俗言にいぢわるくといふ意也　〔萬〕卯月の比なればおのづから短夜のなごりさもや有けん

中々なり　（釋）逢見ぬよりはなかなかつらしとの意也

みてもまた云々　〔玉〕あふは夢の緣の語也夢にはあはすといひあふと

いふこと有也見てもといふも夢につきていへる言也　〔玉補〕又あふ夜のまれなると夢の合ふ世の稀なると二かたにかけたる詞也　（釋）下句
はその夢のうちにかきまぎれてむなしくならまほしとの意也ともがなは願ふ意の辭
世がたりに云々　（釋）初二句はうき身を夢になしてむなしくなるともためしなき世がたりにいひ傳へんがかなしとの意也三句は初句の上に置
て心得べし　〔玉〕さめぬ夢とは夢さめて又本の現にかへる物なるを夢になしてきゆる身はかへることなきをいふなり
御なほしなどは　〔新〕直衣などもそことなくぬぎ捨たりしを命婦のとりまかなひてきせて出し參らせし也源は別の悲みにうつゝともなきさま
をしらせて云なるべし
殿におはしてなきれに　〔萬〕二條院に也　〔玉〕なきれは泣ながらに眠るをいふ　〔拾〕六帖「夕されば君をまつちの山鳥のなく／＼ぬるを立も
きかなん
御らんじいれぬよしのみあれば　〔湖〕藤つぼの源氏の文をも見給はぬよしを王命婦などより申すなるべし
またいかなるにかと　〔細〕源の病惱を又いかにかと内におぼしぬべきもそれさへおそろしと也　（釋）又とは瘧病の後なる故にいへり湖月師說
はひがこと也
なやましさもまさり　〔岷〕かされて源にあひ給へる事を心うきことにおぼしなげくから御なやみもおもるなり　（釋）なやみ給ふ事有てまかで
給ふをりなる故にまさり給ひてとはいへり
人しれずおぼすことも　〔細〕懷妊の事也　〔湖〕惡疽（ツハリ）などの心ばへにや　（釋）月水などの事なるべし
三月になり給へば云々　〔花〕三月をみな月とかける本もあり藤壺女御たゞもなくなり給ひて三月ばかりに成給ふ也此三四月の比御心ちわづら
ひて御さとにまし／＼ける時源氏君近づきより給ひしより御懷妊有て卯月の比よりは六月は三月ばかりになる也さるほどにみな月とかける
本も心はちがはぬ也かくてあくる年の二月十四日に冷泉院は生れ給ふ十一ヶ月にあたれるにや
御すぐせ　〔釋〕例の前世の宿緣也
この月まで　〔湖師〕帝へ申上給はぬを驚きあやしむ也
わが御心ひとつには　〔湖師〕源氏の御子を懷妊し給ふ心なり
御めのとごの辨命婦などぞ　〔玉〕辨と命婦と二人にて命婦は王命婦也かたみには辨と命婦とたがひに也さて猶のがれがたかりけるといふは命
婦一人が思ふ也さる故に命婦はと二たび名をいへり源氏君の密通の事は辨はしらず命婦のみしれる事なる故にかく分ていへるなり
うちには御ものゝけのまぎれにて　（釋）御物のけのさはり有て御懷妊の事とみにはけしきなくてしられがたかりし故に奏せざりしとことわり
申すなるべしと地より評じてかける也いとすきまなき事といふべし

とがむるに。あさましき御すぐせのほど心うし。人はおもひよらぬことなれば。この月までそうせさせ給はざりけること。とおどろき聞ゆ。わが御心ひとつには。しるうおぼしわくこともありけり。御ゆどのなどにも。したしうつかうまつりて。何事の御けしきをも。しるく見奉りしれる。御めのと子の辨。命婦などぞあやしと思へど。かたみにいひあはすべきにあらねば。なほのがれがたかりける御すぐせをぞ。命婦はあさましと思ふ。うちには御物のけのまぎれにて。とみにけしきなうおはしましけるやうにぞそうしけんかし。みな人もさのみ思ひけり。いとゞあはれにかぎりなうおぼされて。御つかひなどひまなきも。そらおそろしう。物をおもほすことひまなし。中將の君も。おどろ〳〵しう。さまことなる夢を見給ひて。あはするものをめしてとはせ給へば。およびなう。おぼしもかけぬすぢの事をあはせけり。其中にたがひめありて。つゝしませ給ふべき事なん侍る。といふに。わづらはしくおぼえて。

いとゞあはれに
〔岷〕帝の御心いよ〳〵藤つぼに御思ひまさるなり

さまことなる夢を見給ひて
〔花〕たとへば源氏の北の方の御腹に御子いでき給ひて御位につかせ給べきさまの御夢にあはする也さておぼしもかけぬといへり
〔釋〕あはする者とは夢占(ユメウラ)の博士(ハカセ)也そのかみはさるものもありきかし萬水一露の説占者の詞めきてよし
〔萬〕此御夢を相せさすれば御子三人あるべし一人は天子一人は后一人は大臣なるべきよしをうらなふ也

その中にたがひめありて
〔新〕その夢をあはせてみれば上をおかしてその罪にあたるべきなどの心有つらんをいふ也かの須磨のうつろひの事も朧月夜の事のみならで此天のとがめもあるべしむくいなどいふは此記者の意也
〔釋〕花鳥に左遷の事にてはなきやうに注せられたるはわろしつゝし

みづからのゆめにはあらず。人の御ことをかたるなり。この夢あふまで。また人にまねぶな。とのたまひて。心のうちには。いかなる事ならん。とおぼしわたるに。この宮の御事きゝ給ひて。もしさるやうもや。とおぼしあはせ給ふに。いとゞしく。いみじきことのはをつくし聞え給へど。命婦も思ふに。いとむくつけうわづらはしさまさりて。さらにたばかるべきかたなし。はかなきひとくだりの御かへりの。玉さかなりしもたえはてにたり。七月になりてぞ参り給ひける。めづらしくあはれにていとゞしき御思ひのほどかぎりなし。すこしふくらかになり給ひて。うちなやみ。おもやせ給へるはた。げににるものなくめでたし。れいのあけくれこなたにのみおはしまして。御あそびもやう〳〵をかしきころなれば。源氏の君も。いとまなくめしまつはしつゝ。御琴笛など。さま〴〵につかうまつらせ給ふ。いみじうつゝみ給へど。しのびがたきけしきの。もりいづるをり〳〵(は)。宮もさすがなることゞもを。お

ませ給ふべき事といへる正しく左遷の事をさしたりと聞えたるなや
(評)此夢の占に源氏君生涯の禍福の伏案を立られたることかの桐壺巻の相人の詞と同じき中にこゝはやゝ委しくなりたり末の巻に照してよく味はふべし
みづからの夢には　(釋)たがひめありてといふを聞ていま〳〵しくおぼえ給ふ上に及びなきさまのことを合せたれば憚り給ひてこれは我夢にあらず人の夢をかたるなりといひまぎらはしてさて人に語るなと占者に口がため給ふなり舊注無用の説おほし
この宮の御事聞給ひて云々
(釋)藤壺の宮の御懐妊の事を聞給ひてもしやかの夢合する者のいへるさまにやなど思ひ合せ給ふ故に今一たび逢見んの心にていみじく言のはを盡し給ふ也
むくつけう云々
(眠)命婦も空おそろしくなり藤壺もいよ〳〵おぼしこりたる也

〔釋〕案に命婦も思ふとあるに。もじの結びたしかならぬこゝちすもしくは詞脱たるかたばかるべきかたなしとあるしはくとや有けんさては下文へのつゞき少し聞よかるべし

七月になりてぞ　〔岷〕藤壺參内也

〔細〕懷妊四ケ月なるべし

ふくらかに　〔細〕懷妊のさま也

げににるものなく　〔玉〕げにとは帝の御思ひかぎりなきもげに也

こなたにのみ　〔萬〕天子つれに藤壺にのみおはしますと也

御あそびもやう〳〵

〔花〕世もやう〳〵涼しくなる比なれば也

しのびがたきけしきの

〔岷〕源の思ひあまるさまなるべし

〔釋〕をり〳〵の下に詞落たるべし。今はもじひとつ補ひてその心をつらぬけり猶考ふべし

さすがなる事どもを　〔釋〕さはいふものゝあはれなる源氏君の御うへを思ひつゞけ給ふなるべし

ほくおもほしつゞけけり」かの山でらの人は。よろしうなりて出給ひにけり。京の御すみかたづねて。とき〴〵の御せうそこなどあり。おなじさまにのみあるも。ことわりなるうちに。この月頃は。ありしにまさる物思ひに。こと事なくてすぎゆく。秋のすゑつかた。いともの心ぼそくて。なげき給ふ。月のをかしき夜。しのびたるところに。からうじて思ひたち給へるを。時雨めいてうちそゝぐ。おはする所は六條京極わたりにて。うちよりなれば。すこしほどゝほきこゝちするに。あれたる家の木だちいとものふりて。こぐらう見えたるあり。れいの御ともにはなれぬ惟光なん。こあぜちの大納言の家に侍り。ひと日物のたよりにとぶらひて侍りしかば。かのあまうへいたうよわり給ひにたれば。なに事もおぼえず。となん申て侍りしと聞ゆれば。あはれのことや。とぶらふべかりけるを。などかさなんとも物せざりし。いりてせうそこせよとの給へば。人いれてあないせさす。わざとかうたちより給へるこ

出給ひにけり　〔釋〕尼君北山をいでゝ京へかへり給ふ也
おなじさまにのみ　〔岷〕いとけなきよしのみ返事のある也
ありしにまさる　〔花〕謙德公集「わすれなん今はと思ふときにこそありしにまさる物思ひぼすれ今案藤つぼの御事也
秋の末つかた　〔孟〕前に七月になりてと有てこゝに秋の末つかたと有心をつくべし　〔釋〕なげき給ふは猶藤壺の事なるべし
からうじて　〔釋〕しひて心にもそまぬを思ひたち給へる故にからうじてといへるなるべし
しぐれめいて打そゝぐ　〔釋〕人を問につきぐ〜しき爲の時雨なるべし
六條京極わたりにて　〔釋〕夕顔卷よりの脉をこゝにあらはしたり　御息所なる事は論なし　されどこゝには猶あらはさず伏線の用意心をつくべし
こぐらう　〔湖〕木闇也庭樹の茂きさまなり
こあぜちの大納言の　〔岷〕惟光の源へ申す也紫上の外祖父也
かの尼上いたうよわり　〔花〕上にはよろしうなりてと書て今又かくいふは老病にて再發せるにや　〔釋〕上に四十あまりとあれば老病ともいひがたきかとにかくに物思ひ病のごとくかきなしたるなり
わざとかう　〔細〕ついでならでわざとゝいはする也
かたはらいたき事かな　〔釋〕尼君のたのもしげなくなりて對面し給はぬが笑止に氣毒なる意也
むつかしげに侍れど　〔箋〕見苦しき所のさま聊爾なれどもと也
かしこまりをだに　〔餘〕こゝは御禮を申すといふ意也
物ふかきおまし所　〔箋〕物ふかきとは餘りに俄なる故御座所のはしぢかなるをわざと狂言に斯のごとく申す也　〔玉〕これは物げなきを寫し誤れるなり本のまゝにては聞えぬこと也注はしひごと也　〔釋〕ひさしはゝしつかたなればもの深きとはいふべからず箋の義もこゝにはにつかはしからず狂言もことにこそよれかゝる所にいはんものかは小櫛のごとくなるべきか　もしくは物ふるきかとも思へどさてもなほ穩ならず物ふかゝらぬなどいひてかなふべき所也猶考ふべし
げにかゝる所は　〔弄〕源もならひ給はぬさまにおぼす也
つれに思ひ給へたちながら　〔萬〕源もつれに御出ありたきとおぼしめせどもいひより給ふことにいまだをさなきとて御同心もなければつゝましさにおのづから尼公のおもらせ給ふをもしろしめさぬと也
みだりごゝちはいつともなく云々　〔孟〕違例の事を內より尼公の返答也　〔釋〕みだり心ちのなやましさはいつともなく常の事になりたればそ

と。といはせたれば。いりて。かく御とぶらひになんおはしましたるといふに。おどろきて。いとかたはらいたき事かな。この日比むげに。いとたのもしげなくならせ給ひにたれば。御たいめんなどもあるまじ。といへども。かへし奉らんはかしこし。とて南のひさしひきつくろひていれ奉る。いとむつかしげに侍るめれど。かしこまりをだにとてなん。ゆくりなう物ふかきおまし所になんと聞ゆ。げにかゝる所はれいにたがひておぼさる。つねに思ひ給へたちながら。かひなきさまにのみもてなさせ給ふに。つゝまれ侍りてなん。なやませ給ふ事をも。かくともうけ給はらざりけるおほつかなさ。など聞え給ふ。みだりごゝちはいつともなくのみ侍り。かぎりのさまになり侍りて。いとかたじけなくたちよらせ給へるに。みづから聞えさせぬこと。のたまはする事のすぢ。たまさかにもおぼしめしかはらぬやう侍らば。かくわりなきよはひすぎ侍りて。かならずかずまへさせ給へ。いみじく心ぼそげに見給へ

はともかくも侍れ臨終のさまになりてかく參くとぶらひ給へるにみづから對面して直に答へ奉らぬことゝと先無禮を謝し給ふ也

わりなきよはひすぎ侍りて　〔細〕いとけなき也年齢もかさなりてとなり

かずまへさせ給へ　〔萬〕源の思ひ人の數になし給へと也

ねがひ侍る道のほだし　〔細〕後生のさはりともなるべきと也

いとちかければ　〔細〕程なき家居なればかくいふ聲なも源の聞給ふ也たえ〲聞えてといふにてよみきるべし

此君だに　〔釋〕紫上みづからかしこまりなも聞え給ふべきほどの年ならばうれしからんとの意なりかしこまりは禮ないふといふ心也

なにかあさう思ひ給へらん事ゆゑ　〔釋〕源氏君の詞也ひとり言といふ舊注はひがことなりあさく思ふ事ならばかくなさなき人にすきずきしきさまな見え奉らんやといふ

意なり
いかなるちぎりにか云々
〔釋〕ちぎりは例の宿縁也いかなる前世の宿縁にかあらん見そめしよりあはれに思ひ聞ゆるも我ながらあやしと也までの下少し詞足らぬこゝちす　〔玉〕此世のみの事にはあらじ前の世よりの因縁にこそと也過現未三世の事といふ法はいみじきひがこと也
かひなきこゝちのみ
〔釋〕まゐりてもかひなき心ちのみするをせめて紫上の聲をだに聞んとのたまふ也
よろづおもほししらぬさまに
〔玉〕尼君のいたくよわり給へることなどをも何ともおぼしいれぬよしの意なり
きこゆるをりしも　〔釋〕わづらはしき故に紫上はねいりて居給へりといひなすをりしも何心なく紫上のこなたへ出來給ふ也はしたなきさまたいとよくうつし出られたり今もをり〳〵あるさま也

おくなん。ねがひ侍る道のほだしに思ひ給へられぬべき。など聞え給へり。いとちかければ。心ぼそげなる御聲。たえ〴〵聞えて。いとかたじけなきわざにも侍るかな。此君だにかしこまりも聞え給ひつべきほどならましかば。との給ふ。あはれにきゝ給ひて。なにかあさう思ひ給へんことゆゑ。かうすき〴〵しきさまをみえ奉らん。いかなるちぎりにか。見奉りそめしより。あはれに思ひ聞ゆるも。あやしきまで。この世の事にはおぼえ侍らぬ。などのたまひて。かひなきこゝちのみし侍るを。かのいはけなう物し給ふ御ひとこゑ。いかでか。との給へば。いでやよろづおぼししらぬさまに。おほとのごもりいりて。など聞ゆるをりしも。あなたよりくるおとして。うへこそ。この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見給はぬ。とのたまふを。人々いとかたはらいたしと思ひて。あなかまと聞ゆ。いさ。見しかば心ちのあしさなぐさみき。との給ひしかばぞかし。とかしこき事きゝえたり。とお

うへこそ（釋）紫上の尼上を呼かけ給ふ詞也こそといふ詞の事夕顔の釋に注せるがごとし必しも尊びていふ語にはあらず

この寺にありし（釋）かの北山の寺にありしといふ也このはかのゝ意也

○いさ見しかば云々（釋）いさの詞譯注のごとし尼君などの源氏君を見しかば心ちのあしさもなぐさみつとの給ひし事を紫上の聞おぼえをりてかしこき事聞たりと思ひて今源氏君の來給へるをしらせんとてはしり來てのたまふさま也幼き人のさまをいとよくうつされたり

人々のくるしと思ひたれば

〔細〕源の用意也紫上とは知給へ共人々くるしげに思ひたるさまをみしり給ふ故に聞ぬさまにし給ふなり

げにいふかひなの

〔岷〕尼公のたまふごとくまことにいはけなき也さりながらよくなしへたてゝみたきよし也

ぼしての給ふ。いとをかしときゝ給へど。人々のくるしと思ひたれば。聞ぬやうにて。まめやかなる御とぶらひを。聞えおき給ひてかへり給ひぬ。げにいふかひなのけはひや。さりとも。いとようをしへてんとおもほす。またの日も。いとまめやかにとぶらひ聞え給ふ。れいのちひさくて。「おないはけなきたづのひとこゑきゝしよりあしまになづむ船ぞえならぬ。ことさらをさなくかきなし給へるも。いみじうをかしげなれば。やがて御手本にと人々聞ゆ。少納言ぞ聞えたる。とはせ給へるは。けふをもすぐしがたげなるさまにて。山でらにまかりわたるほどにて。かうとはせ給へるかしこまりは。この世ならでも聞えさせん。とあり。いとあはれとおぼす秋のゆふべは。まして心のいとまなくのみ。おぼしみだるゝ人の御あたりに。心をかけて。あながちなるゆかりも。たづねまほしき心も。まさり給ふなるべし。きえん空なきとありしゆふべ。おぼし出られて。戀しくもまた見

れいのちひさくて（釋）いつものごとく紫上への御文は小くしていれ給ふ也
いはけなき（釋）上句は紫上の一聲を聞給へるをひな鶴によせてほのめかしたる也船は源氏君みづからのたとへなり
〔玉〕あしまになづむは思ひなやむをたとへたりえならぬは淺からずにて思ひなやむことの淺からざるよし也えに江をもたせたりえならぬの舊注どもみだり也
おなじ人にやと（拾）注「湊入の蘆わけ小船さはりおほみ同じ人にや戀んと思ひし是は誤なり　古今「堀江こぐたなゝし小舟こぎかへりおなじ人にやこひわたりなん
やがて御手本にと（釋）此御文をそのまゝ紫上の手ならひし給ふ本にし給へといふ也
とはせ給へるは云々〔細〕少納言が文の詞也尼公は北山へ出給ふと也
〔新〕この比は病て死んずるほどには山寺へわたして寺にて終るさま

おとりやせん。とさすがにあやふし。

手につみていつしかも見んむらさきのねにかよひける野べのわか草　十月に朱雀院の行幸あるべし。まひ人など。やんことなき家の子ども。上達部殿上人どもなども。そのかたにつき〴〵しきは。みなえらせ給へれば。みこたち大臣よりはじめて。とり〴〵のざえどもならひ給ふ(に)。いとまなし。山ざと人にもひさしうおとづれ給はざりけるを。おもほしいでゝ。ふりはへつかはしたりければ。僧都のかへりことのみあり。たちぬる月の廿日のほどになん。つひにむなしく見給へなして。せけんのだうりなれど。かなしび思ひ給ふる。などあるを見給ふに。世中のはかなさもあはれに。うしろめたげに思へりし人もいかならん。をさなきほどに戀やすらん。と(こ)みやす所におくれ奉りしなど。はか〴〵しからねど。思ひいでゝ。あさからずとぶらひ給へり。少納言ゆゑなからず。御返しなど聞えたり。いみなどすぎて。京の

にせしなりかくのごとき樣蜻蛉日記にも見え古歌のはし書にもおやの喪に山寺にこもりたる事あるもさる類と見ゆ出家したる人は殊にさもするにや

この世ならでも（釋）この世ならでものちの世より申さんと也げにいとあはれ也

心のいとまなくのみ（釋）いとまなくのみとよみ切ておぼしみだるゝ人の御あたりにとつゞけてよむべしおぼしみだるゝ人とは藤壺の御方なりそれに心のいとまなく思ひかけ給ふよし也

あながちなるゆかりも（釋）あながちなるとは幼きをあながちに尋れよる意也ゆかりは藤つぼのゆかりの紫上をさせり

きえん空なきと（細）おひたゝんありかもしらぬわか草をおくらす露ぞきえん空なきとよみし時の事など思ひ出給ふ也

見おとりやせんと（細）深切に思ひ給ふ故に自然ちかく見ばみおとり

殿になん。と聞給へば。ほどへて。みづからのどかなる夜おはしたり。いとすごげにあれたる所の。人ずくなゝるに。いかにをさなき人。おそろしか、ん。とみゆ。れいの所にいれ奉りて。少納言御有さまなど。うちなきつゝ聞えつゞくるに。あいなう御袖もたゞならず。宮にわたし奉らんと侍るを。こひめ君の。いとなさけなくうき物に思ひ聞え給へりしに。いとむげにちごならぬよはひの。またはかばかしう人のおもむけをも見しり給はず。中空なる御ほどにて。あまた物し給ふなるなかの。あなづらはしき人にてやまじり給はんなど。すぎ給ひぬるも。よとゝもにおぼしなげきつるも。しるき事おほく侍るに。かくかたじけなきなげの御ことのはは。後の御心もたどり聞えさせず。いとうれしうおもひ給へられぬべき。をりふしに侍りながら。すこしもなずらひなるさまにも物し給はず。御年よりもわかびてならひ給へれば。いとかたはらいたく侍り。と聞ゆ。なにかかうくりかへし聞えしらする心の

やせんとまでおぼす也（評）さすがにあやふしといへるいとめでたし
手につみて〔河〕此歌紫の名の元始也云々根にかよひけるとは藤壺女御のゆかりといふ也 古今「紫の一もとゆゑにむさしのゝ草はみながらあはれとぞ見るといふ歌の心也云々〔細〕いつかわが物にすべきの心也云々（釋）岷江入楚に此歌の時節の論ありいたづらごと也用ゐまじき也此歌の下に詞をはぶけるいとめでたし野べのわか草はかの消ん空なきといふ歌より引もて來れる也
十月に朱雀院の行幸有べし〔花〕朱雀院は後院也天子脱屣の後の御在所也三條朱雀に四町に造られたり延喜の御宇には宇多の御門を朱雀院と申侍り十月の行幸は紅葉賀の事なるべし（釋）この行幸の事末摘花卷にも見えてそのいとなみの事も見えたりこれ紅葉賀卷と引合せてとりつなぎたる照應の法なり猶そこにもいふべし
やんことなき家のこども〔岷〕舞人には攝家大臣家以下の子どもゝ出る事也されば源氏頭中將などもまひ給ひし也
そのかたに〔湖〕舞樂の方に也
とり〳〵のざえ（釋）ざえは才にて音樂の器用をさす琴笛いろ〳〵の藝をならひ給ふ也ならひ給ふの下にもじ落たることしるければ今補ひつなくては聞えぬこと也いとまなしのしはくの誤にはあらじかしかあらんかた下へのことわりたしかなり
山里人にも久しう〔玉〕いとまなしといふよりつゞきて源氏君も舞などならひ給ふにいとまなくてといふ意をふくめたり（釋）上にいへる釋の意考ふべし山里人は尼君紫上をさすなるべし
たちぬる月（釋）たちは月日のたつといふたつにて過にしをいふ
せけんの〔岷〕世間の道理也僧都に似合たる詞也
あはれに〔釋〕こゝにてよみ切べし
こひやすらんと〔玉〕ともじ多くの本にことありとゝは一本にある也故といふこともあらまほしけれどとゝいふことは必なくてはかなはぬ所也もしは戀やすらんとこ御息所にと有しをたがひに落せるにやあらん（釋）此說によりて今假にこもじを補へつ故といふことも必あるべき前後の例也
こみやす所に〔細〕桐壺の更衣にはなれ給ひし時の事まで思ひ給ふ也
はか〴〵しからねど（釋）源氏君三歲の時なれば也
いみなど過て〔湖〕祖母の服は三月暇は三十日也こゝは三十日の暇あきたる也〔細〕紫上京へ出給ふ也
れいの所に〔岷〕前にありし南のひさしなるべし
たゞならず（釋）涙にぬるゝ事也

こひめ君の（釋）紫上の實母也紫上の宮のかたへわたし奉るならば故姫君なさけなくうき物に思ひ給ひしと也

いとむげに云々（細）（岷）一向に二歳三歳の時ならば無分別にてもありぬべし紫ははや十ばかりにも成給へば他人の中のすまひもいかゞと也

またはかぐ〵しう（岷）紫のまだ十ばかりなれば又人のおもむきをしろほどにもなきと也それを中空なろといへるにや中半なる心也

あまた物し給ふ中の（花）兵部卿宮の御むすめ今の北方のはらに女一人冷泉院の女御なり又一人ひげぐろの大將の室也その外は系圖にのせず

しろき事おほく（釋）繼母のおもむけかれて尼君の歎き給ひしもいちじろく見ゆる事多き也

なげの御ことのはは（釋）無氣とは有げにもなきとの意也かくかたじけなくのたまふはありげにもなき

ほどを。つゝみ給ふらん。そのいふかひなき御有さまの。あはれにゆかしうおぼえ給ふ（る）も。ちぎりことになん心ながら思ひしられける。なほ人づてならで。きこえしらせばや。

あしわかのうらにみるめはかたくともこはたちながらかへるなみかは。

めざましからむとの給へば。げにこそいとかしこけれとて。

よる波の心もしらでわかの浦に玉もなびかんほどぞうきたる。

わりなきことゝ聞ゆるさまの。なれたるに。すこしつみゆるされ給ふ。なぞこえざらん。とうちずじ給へるを。身にしみてわかき人々おもへり。君はうへをこひ聞え給ひて。なきふし給へるに。御あそびがたきどもの。なほしきたる人のおはする。宮のおはしますなめり。と聞ゆれば。おきいで給ひて。少納言よ。なほしきたりつらんはいづら。宮のおはするか。とてよりおはしたる御こゑ。いとらうたし。宮にはあらねど。またおもほしはなつべうもあらず。

御詞ながら後に御心のかはるとかはらぬをもとはずまづいとうれしき折ふし也さはあれど紫上の源氏君の御めになり給ふべきさまにもあらず年よりもをさなくおはすればきのどく也といふ意也なずらひとは御妻に准ふといふ心の體言なり

なにかゝうくりかへし云々（釋）此所意とはらず案につゝみ給ふらんとあるはつゝみ給へんと有しを寫しひがめたるなるべし其故はかうくりかへし聞えしらする心のほどゝいふまでは源氏のみづからのうへをの給ふなるにつゝみ給ふらんとては少納言がつゝむ事となれりされば必しか有しにこそ一本には給らんと書たりやゝちかしさてこれはなげの御ことのはゝなどいへるに答へてかうくりかへしいひしらするこゝろのほどを何かつゝみ侍んとのたまへるなりかくて心明らけし注どもみなひがことなり

こち。とのたまふを。はづかしかりし人と。さすがに聞なして。あしういひてけり。とおぼして。めのとにさしよりて。いざかしねふたきに。とのたまへば。今さらなどしのび給ふらん。このひざのうへに御とのごもれよ。いますこしより給へ。との給へば。めのとの。さればこそ。かうよづかぬ御ほどにてなん。とておしよせ奉りたれば。なに心もなくゐ給へるに。手をさしいれてさぐり給へれば。なよゝかなる御ぞに。かみはつや〳〵とかゝりて。すゑのふさやかにさぐりつけられたるほど。いとうつくしう思ひやらる。てをとらへ給へれば。うたて例ならぬ人の。かくちかづき給へるはおそろしうて。ねなんといふものを。とてしひてひきいり給ふにつきて。すべり入て。今はまろぞ思ふべき人。なうとみ給ひそ。との給ふ。めのと。いであなうたてや。ゆゝしうも侍るかな。聞えしらせ給ふとも。さらに何のしるしも侍らじ物を。とてくるしげに思ひたれば。さりともかゝる御ほどを。いかゞ

ゆかしうおぼえ給ふも（釋）こゝも源氏みづからの給ふなれば給ふる。もと有べきこと著ければ今補ひつ

あしわかの云々（釋）紫上に對面はしがたくとも物ごしに立ながら此まゝにかへるべき事かはといふ意なり故にげにこそいとかしこけれとはいへる也わかの浦に紫上の幼きをよそへ海松に見る目をそへたる也盧若の浦の説拾遺のごとし別に記しつ

〔玉〕結句かへるべき波かはといふべきをかへる波かはといへるはすこしいかゞ

よる波の云々（釋）よりくる源氏君の御心をもしらずしてなびきしたがひ給はんはうきたる事ならずやといふ意をわかの浦の波によせていへり玉藻は海藻に丸き實のあるをいふと先達はいへりきなびかんうきたる皆藻の縁にて上の歌の海松をうけたる也わかの浦はあしわかの浦をうけて紫上をふくめたる

はあらん。なほたゞよにしらぬ心ざしのほどを。見はて給へ。とのたまふ。あられふりあれて。すごきよのさまなり。いかでかう人ずくなにこゝろぼそうて。すぐし給はん。とうちない給ひて いと見すて がたきほどなれば。みかうしをゐりね。物おそろしき夜のさまなめるを。とのゐ人にて侍らん。人人ちかうさぶらはれよかし。とて いとなれがほに。御帳の内に。かきいだきて入給へば。あやしう思ひの外にも。とあきれて誰も〳〵ゐたり。めのとはうしろめたうわりなしと思へど。あらましう聞えさわぐべきならねば。うちなげきつゝゐたり。わか君はいとおそろしく。いかならんとわなゝかれて。いとうつくしき御はだつきも。そゞろさむげにおぼしたるを。らうたくおぼえて。ひとへばかりをおしくゝみて。わが御心ちも。かつはうたておぼえ給へど。あはれにうちかたらひ給ひて。いざ給へよ。をかしき繪などおほく。ひいなあそびなどする所に。と心につくべきことをの給ふけはひの。いとな

は勿論也舊注粗くして事の心聞とりがたし
わりなきことゝ　〔玉〕立ながらかへるべきかはとのたまふはわりなきこと也といへるなり
つみゆるされ給ふ　〔釋〕すべて罪を免すなどいへばこと〴〵しく聞ゆれどたゞそのかひの有ほどの事にいへり今俗某々ノカハリなどいふにちかし紫上をあひ見ぬいふせさに少納言が物なれたるをかへて免す意也
なぞこえざらん　〔河〕人しれず身はいそげども年をへてなどこえざらんあふ坂の關　〔餘〕後撰集戀三伊尹朝臣初句人しれぬ四句などこえがたきと有〔釋〕こえがたきを越ざらんとて引たるは例の筆也戀ざらんとある本はことわりなし河海はおぼえそこれ給へるなるべしさてこゝの意は年をへなばなとかは逢といふ關も越ざらんと也いとをかし
みあそびがたきども　〔岷〕紫の御遊びのとぎども也
おもほしはなつべうも　〔湖〕我も他人と思ひ放すべくもあらぬものよと也
はづかしかりし人と　〔釋〕上に御子になりておはしませよなどいひし人なればはづかしかりし人とはいへる也。しもじ心をつくべし
いざかし　〔新〕いざは率なふ詞かしは願ふ詞にてゆけかしこよかしのかしに同じ
れふたきに　〔釋〕眠痛の意にて眠の甚しき也さてこゝの文幼兒のさまをゑがけるがごとし
さればこそ　〔細〕御覽ぜよいまだかくいふかひなき御さまなる物をと乳母の申す也
手をさしいれてさぐり給へれば　〔細〕上にきぬをかいとり給ふなるべし其あはひへ手をいれて髮をさぐり給ふなるべし
いとうつくしう思ひやらる　〔釋〕此物語のころの女は髮をたれてありければ何物よりも先髮のめでたきをほめたること也上に紫上の髮のことをたび〳〵いへりし脉也心をつくべし思ひやらるとはきぬの中にて見えぬ故にいへり
すべり入て　〔玉〕うるはしく歩み行て入にはあらでたゞ居ながらににじりよりて入やうのさまなるべし俗言にいふすべるも同じこと也衣をぬぎすべらかすもおなじ心ばへなり〔釋〕庇の間の御座より母屋のかたへすべり入給ふなるべし
今はまろぞ思ふべき人　〔湖〕尼君なくなり給ひて後今は源氏若紫を思ふ人なるぞなうとみ給ひそと也
聞えしらせ給ふとも　〔湖〕前に人づてならで聞えしらせばやとの給ひしをうけてみるべし紫をさなき故源ののたまふかひもあらじと也
さりともかゝる御ほどを　〔湖師〕源のおしたちて無理わざは有まじきと也
あられふりあれて　〔評〕人ずくなにそゞろ寒き情景
とのゐ人にて侍らん　〔釋〕我直宿の番人となりてこゝに伺候せんとの意也
かきいだきて　〔釋〕一本によりて補ひつ

わか君は 〔河〕男女ともに若君と號す年わかき義也

御はだつきも 〔釋〕岷江に紫上のはだつきとあるはひがこと也源氏君の御肌つき也さらではおぼしたるをといふこと聞えがたし

ひとへばかりをおしくゝみて 〔岷〕紫にひとへをきせてかたはらにふせ給ふ也 〔釋〕おしくゝみてはおしつゝみて也ひとへばかりにしておしつゝみて肌にそへ給ふなるべし

いざ給へよ 〔湖〕源の二條院へ渡し奉らんとおぼす故に畫などある所へ御出あれとさそひ給ふ也 〔釋〕給とひいなとの詠

心につくべき事を 〔湖〕紫の心にかなふべき事をのたまふ也

さすがに云々 〔評〕小兒の樣ゑがけるが如し

夜ひとよ風ふきあるゝに 〔評〕あられのなごり

げにかうおはせざらましかば 〔評〕風と霰とのあるゝ夜の情を女

つかしきを。をさなき心ちにも。いといたうもおぢず。さすがにむつかしうねもいらず。みじろぎふし給へり。夜ひとよ風ふきあるゝに。げにかうおはせざらましかば。いかに心ぼそからまし。おなじくはよろしきほどにおはしまさましかば。とさゝめきあへり。めのとはうしろめたさに。いとちかうさぶらふ。風すこし吹やみたるに。夜ふかう出給ふも。ことありがほなりや。いとあはれに見奉る御ありさまを。今はましてかた時のまもおほつかなかるべし。あけくれながめ侍る所にわたし奉らん。かくてのみはいかゞ物おぢし給はざりける。とのたまへば。宮も御むかへになど聞え給ふめれど。此御四十九日すぐしてや。など思ひ給ふなど聞ゆれば。たのもしきすぢながらも。よそ〳〵にてならひ給へるは。おなじうこそうとうおぼえ給はめ。いまより見奉れど。あさからぬ心ざしはまさりぬべくなん。とてかいなでつゝ。かへりみがちにて出給ひぬ◎いみじうきりわたれる空もたゞならぬに。霜はいと

房ども心に結びかけたる餘情きはまりなし
同じくはよろしきほどに　(釋)紫の年の相應なる程ならばとさゝやく也女房などのいふべき詞つきげにしかるべし
めのとは　(評)乳母の心遣ひ見るが如し
風すこし吹やみたるに　(評)風少し止て出給ふとある筆のはこび今も猶動くがごとし
事有がほなりや　(岷)よのつれのきぬ〴〵めきたると也
今はまして　(釋)かく見給ひての今はまして也
明くれながめ侍る所に　(湖)源の獨住し給ふ二條院へ也
いかゞ物おぢし給はざりけり　(釋)諸本みなけりとあれどけるの誤しるければ今は一本によりつけりとある本によりていへる説はひがこと也紫のかくてのみ居給はゞいかゞは物おぢし給はざるべきと

しろうおきて。まことのけさうもをかしかりぬべきに。さう〴〵しう思ひおはす。いとしのびてかよひ給ふところの。みちなりけるをおぼしいでゝ。門うちたゝかせ給へど。聞つくる人なし。かひなくて。御ともにこゑある人してうたはせ給ふ。

朝ぼらけ霧たつ空のまよひにもゆきすぎがたきいもがかどかな。とふたかへりばかりうたひたるに。よしばみたるしもづかへをいだして。

たちとまり霧のまがきのすぎうくは草のとざしにさはりしもせじ。といひかけていりぬ。又人もいでこねば。かへるもなさけなけれど。明ゆく空もはしたなくて。殿へおはしぬ◎をかしかりつる人のなごり戀しく。ひとりゑみしつゝふし給へり。日たかうおほとのごもりおきて。文やり給ふに。かくべきことのはもれいならねば。筆うちおきつゝすさびゐ給へり。をかしきゑなどをやり給ふ◎かしこにはけふしも宮わたり給へり。としごろよりも

いふ義にてけるはおしてきはむる意の也

此御四十九日過して 〔花〕十一月九日頃尼君の中陰はつる也此時ははや朱雀院の行幸なども過たるべし

たのもしきすぢながらも

〔釋〕兵部卿宮は父君にてたのもしくましませど紫上は尼君の方におはしてよそ〳〵しくおひたち給へれば我と同じくうとくおぼさんと也花鳥いさゝかたがへり

今より見奉れど 〔玉〕我はわづかに今よりはじめて見奉れど也

かへりみがちにて 〔釋〕いく度もいく度も顧し給ふさま也

いみじうきりわれたる空も

〔評〕きりは用言なること拾遺にいへるがごとし風吹やみてきりわたれる空いとをかし霜の白きに曉の寒さ思ひやるべしかれまことのけさうも云々といへり

いと忍びてかよひ給ふ所の云々

〔玉〕此段を書ることは上にまこと

ことなうあれまさりひろうものふりたる所の。いとゞ人ずくなにさびしければ。見わたし給ひて。かゝる所には。いかでかしばしも。をさなき人のすぐし給はん。なほかしこにわたし奉りてん。なにのところせきほどにもあらず。めのとはざうしなどしてさぶらひなん。君はわかき人々などあれば。もろともにあそびて。いとよう物し給ひなんなどの給ふ。ちかうよびよせ奉り給へるに。かの御うつりがの。いみじうえんにしみかへり給へれば。をかしの御にほひや。御ぞはいとなえて。と心ぐるしげにおぼいたり。とし比もあつしくさだすぎ給へる人に。そひ給へるにより。時々かしこにわたりて。みならし給へなどものせしを。あやしううとみ給ひて。人も心おくめりしを。かゝるをりにしも物し給はんも。心ぐるしう。などの給へば。なにかは。心ぼそくとも。しばしはかくておはしましなん。すこし物の心おもほししりなんに。わたらせ給はんこそ。よくは侍るべけれと聞ゆ。よるひるこひ聞え給ふに。

のけさうもおかしかりぬべきに云々といひて紫上幼き故にかへるささう〴〵しくおぼすから此女の家に音つれ給ふ也注に此段物語のかざり
にて奇妙也云々とのみあるはことたらず
あさぼらけ云々　〔細〕妹が門催馬樂也うたはせてなどいふあたり面白し　（釋）此歌催馬樂の妹が門をおもはれたるさまなれど意はかれにかゝ
はりたるにはあらずたゞ霧たつ空のまよひにも妹が門はまぎれず思ひ出られて行過がたしといふ意のみ也まよひは霧のたちてまぼしくた
どらはしきをいふ拾遺に道をまよふにかれたりといへるはわろし
ふたかへり　（釋）おしかへして歌ひたる也
しもづかへ　〔萬〕はしたものよりはちと上なる人がしもにつかふ女也
たちとまり云々　〔玉〕霧のまがきの隔にて過うくばはかなき此草のとざしはさはるべくもあらねば霧に道はまどひても妹が門をばたちより給
はぬやとまがきとゝざしとを合せてよめり　〔拾〕霧のまがきとは霧の物を立へだてゝ見せぬ事垣のごとくなればいふさてまがきとは萬葉に
前垣（マガキ）と書たればまへのかき也云々草のとざしは後撰戀五「いふからにつらさぞまさる秋の夜の草のとざしのさはるべしやは
かへるもなさけなければ　（釋）かくいひかけたるに立よらぬも情なければど明ゆけばはしたなくてといふ意也
大とのごもりおきて　〔玉〕たゞおき給ふことをかくいふはおほとのごもりて有しがおき給ふよし也花にさきちるといふもたゞちる事にて咲て
有しがちる意なるに同じ
かくべきことのはも　〔細〕常の後朝の文にはかはりはてたりとなりさて書べき詞もなきと也
すさびゐ給へり　（釋）筆をさしおきつゝ案じ給ふさまをすさびといへり手なぐさみにするやうの意也
をかしき点など　（釋）給の脉
かしこにはけふしも　（釋）けふしもといへるは源氏君の文やり給ふ日しもといふ意にて宮のわたり給へる危さをふくめたる辭也
なにの所せきほどにもあらず　〔岷〕所せばきやうにことぐ〴〵しきほどの紫の御身にもあらずとのたまふ也　（釋）この御説よろし湖月に父宮の
もとなれば憚有べきにもあらずとやうにいへるはわろし
かの御うつりが　（釋）よき人のたき物は異なる香ありしなるべし源氏君薫大將などのはことにいみじくいへる例也
御そはいとなえて　（釋）いみじき香にあはせては御衣のいとくたれたるを心ぐるしく思ひ給ふ也さるは後見のなきをいとほしみ給ふなるべ
し
あつしくさだ過給へる人に　〔玉〕上のとしごろもは物せしをといふへかゝりてとしごろも云々といひしを也さてこゝの語の意はあつしくさだ
過たる尼公にそひゐ給へるによりて心ぐるしさに時々はかしこへも渡りて見ならし給へと年ごろもいひし事なるにとのたまふ也云々

見ならし　〔新〕こなたへもわたりて今めきたる事なども見馴し給へとの給ひしなと也されど次の詞をもかけて見ればしか見ならし給ふついでにまゝ母にもおのづからむつびつべきなと云までをこめてかけるならん

あやしうとみ給ひて云々

（釋）不思議に繼母のかたなうとみ給ふ故に繼母も心おくやうなりしなかやうに尼君うせ給ひてせんすべなき時にわたり給はゞ繼母の心いかゞあらんときづかはしく思ひ給ふよし也

すこし物の心　〔新〕少納言が下心にはかくおはしまさせてよきほどに源へすぐに參らせんと思ひていへるなるべし

はかなき物もきこしめさずとて

〔玉〕此とて｜は云々とめのとなどの申すがそれ故とてげにいと云々の意也

思ひな入給ひそ　（釋）ふかく思ひ入給ふなとなぐさめ給ふ也

はかなき物もきこしめさずとて。げにいといたうおもやせ給へれど。いとあてにうつくしく。中々見え給ふ。なにか。さしもおもほす。今は世になき人の御事はかひなし。おのれあれば。などかたらひ聞え給ひて。くるればかへらせ給ふを。いと心ぼそしとおぼいてない給へば。宮もうちなき給ひて。いとかう思ひないり給ひそ。けふあすわたし奉らんなど。かへすがへすこしらへおきて。いで給ひぬ。なごりもなぐさめがたうなきゐ給へり。行さきの身のあらんことなどまでも。おぼししらず。たゞとしごろたちはなるゝをりなう。まつはしならひて。いまはなき人となり給ひにける。とおぼすがいみじきに。をさなき御こゝちなれど。むねつとふたがりて。れいのやうにもあそび給はず。ひるはさてもまぎらはし給ふを。ゆふぐれとなれば。いみじうくし給へば。かくてはいかですぐし給はん。となぐさめわびて。めのともなきあへり◎君の御もとよりは。惟光をたてまつれ給へり。まゐりくべきを。内より

めしあればなん。こゝろぐるしう見奉りしも。しづ心なくとて。とのゐ人奉れ給へり。あぢきなうもあるかな。たはぶれにても。ものゝはじめにこの御ことよ。宮きこしめしつけば。さぶらふ人々の。おろかなるにぞさいなまれん。あなかしこ。物のついでに。いはけなくうち出聞えさせ給ふな。などいふも。それをば何ともおぼしたらぬぞあさましきや。少納言は惟光にあはれなる物語どもして。ありへてのちや。さるべき御すぐせ。のがれ聞え給はぬやうもあらん。たゞいまは。かけてもいとにげなき御事と見奉るを。あやしうおぼしの給はするも。いかなる御心にか。おもひよるかたなうみだれ侍る。けふもみやわたらせ給ひて。うしろやすくつかうまつれ。心をさなくもてなし聞ゆるな。との給はせつるも。いとわづらはしう。たゞなるよりは。かゝる御すきごとも。思ひいでられ侍りつる。などいひて。此人も事ありがほにや思はん。などあいなければ。いたうなげかしげにもいひなさず。だいふも

なごりも　(釋)宮のかへらせ給ひし餘波戀しくてなぐさめがたき也

ゆくさきの云々　(岷)紫の心の中を察してかけり　(評)此段をさなき人のみなしごとなりたるさまをいとよく書とられたり打よむに涙もはぶるゝこゝちす

たちはなるゝをりなう　(釋)尼君に立はなるゝをりなく馴まつはし給ひし也

なきあへり　(釋)あへりといふは乳母も人々もといふ意をふくめたるなり

參りくべきを　(岷)源の惟光して仰つかはされたる詞

しづ心なく　(釋)紫上の事の案じられて心おちゐがたき意也

とのゐ人　(釋)すなはち惟光など也

たはぶれにても　(玉)かりそめにてもといはんがごとし舊注にたとへ源の當座のたはぶれにし給ふとてもといへるはたがへりかくいふ詞の例をしらざる注也たはふるゝことにはあらず

いかなることにかあらん。と心得がたく思ふ。参りてありさまなど聞えければ。あはれにおぼしやらるれと。さてかよひ給はんも。さすがにそゞろなるこゝちして。かろ〴〵しうもてひがめたること。と人ももりきかん。などつつましければ。たゞむかへてんとおもほす。御文はたび〳〵奉れ給ふ。くるればれいのたいふをぞたてまつれ給ふ。さはる事どものありて。えまゐりこぬを。おろかにやなどあり。宮よりあすにはかに御むかへに。との給はせたりつれば。心あわたゝしくてなん。とし比のよもぎふをかれなんも。さすがに心ぼそう。さぶらふ人々もおもひみだれて。とことずくなにいひて。をさ〳〵あへしらはず。物ぬひいとなむけはひなどしるければ。参りぬ。君は大殿におはしけるに。れいの女君。とみにもたいめんし給はず。ものむつかしうおぼえ給ひて。あづまをすがゝきて。ひたちには田をこそつくれ。といふ歌を。こゑはいとなまめきて。すさびゐ給へり。まゐりたれば。めしよせ

物のはじめに　〔玉〕物のはじめに妾などになしては兵部卿の聞しめして皆々な御折檻有べきと也
〔釋〕きはやかに妾などいふべきさまにはあられねどおひさきいかなる幸もあるべき人をまだきより本臺ある人にあはするを罪なまれんとの意なるべし

あなかしこ云々　〔萬〕紫君にかまへて物のついでにも父宮へ源氏の御出の事又直宿人など参る事を御申あるなと也

それをば何とも　〔玉〕それとは今めのとがいふ事の趣をさしていへる也

ありへてのちや　〔釋〕ありへては在在て月日を經るをいふ年月を過して紫上成人し給ひて後はさるべき宿縁のがれずして夫婦となり給ふ事もあらんと也

思ひよるかたなう　〔釋〕にげなきことをあやしうもかくまで聞え給ふはいかなる御心とも辨へがたきを思ひよるかたなうといへる也

うしろやすう　〔湖〕紫上にうしろめたき事なくつかへよと也
心をさなく　〔釋〕紫上を心をさなくもてなすなよくおとなしくかしづけよとの意也
たゞなるよりは云々　〔釋〕語脉點のごとしかゝる御すきごともたゞなるよりはわづらはしといふ意なりたゞなるよりとは父君のうしろやすう云々とのたまへる時なればたゞ平生よりは源氏君の御すき事のわづらはしう思ひ出られたりといふ意也舊注よしなき説どもおほし
此人もことありがほに　〔湖〕少納言が心也かやうにいはゞ源の紫と夫婦の契もありとや思はんとあいなければそれほどにこと〴〵しくいはざりし也
たいふも云々　〔孟〕めのとが事ありがほにはいはぬ物からすき事も思ひ出侍りつるなどいひしを惟光心得がたくあやしく思ひ侍る也
參りて　〔岷〕惟光かへり參りて也
宮よりあすにはかに御むかへにと　〔釋〕少納言などの惟光にかたる也必しも源氏君への御返事とは聞えず舊注はいかゞ也紫上をむかへに人をおこせ給はんと宮よりのたまはせたる也
としごろの　〔岷〕としごろの蓬生あれたる所ながらさすが別れんもなごりをしき心をおもしろく書なせり云々　〔釋〕かれなんははなるゝ事也離に枯をかれたる蓬の緣
をさ〳〵あへしらはず　〔釋〕あまり惟光をもあへしらはず物ぬひなどして出たつ支度をするさま也
大殿におはしけるに　〔釋〕葵上の方へ此時にわたらせ給へる也もとより居給ひたるにはあらずさて女君の對面し給はぬ故に和琴を引すさび給ふ也
あづまをすがゝきて　〔釋〕あづまとは和琴の事也　〔新〕案にすがゝきは雙の音をすがといふ也片搔てふに對へてもしろく且雙六をすぐろくといへる例をもおもへば也
ひたちにはたをこそつくれ　〔玉〕風俗常陸歌比太知仁波太乎己曾川久禮安太己々呂可奴止也支見加山乎己衣乃乎己衣安末與支末世留これは常陸なる女のとなりの國などより通ひ來たる男によみかけたるにて歌の意は我は田を作りてこそ居れ他事はなきにもし君がきまさぬ間にあだ心ありて他男をかれて通はすかと疑ひやし給ふらん野山をこえてかゝる雨夜に來ませるとよめる也扨今源氏君のうたひ給へるは我は此常陸の女の田をこそつくれとよめる如くあだ心はなきにあだ心ありとおぼすにや葵上のとみにも對面し給はぬことよといふ意にて也注に末摘花の事とあるはいと物どほくこゝによしなきこと也
をさなき人をぬすみ云々　〔玉〕かの宮にわたりて後にむかへ出たらはぬすみ出たりとよの人にいはるべしさらばかしこへわたらぬさきにとなり云々

車のさうぞくさながら　〔湖師〕けふ
大殿へ乗用の車のさうぞくをその
まゝおき侍れあかつきかの方へお
はせんと惟光にのたまふ也
(釋)さながらといふ詞をおもふに
右の說よろしきか細流弄花などに
とりつくろふべき事と惟光思ふべ
けれぱとあるはいかゞ也
おきてたれ　〔玉〕掟てゝあれにて
掟よといふこと也
聞えありて　(釋)世の聞えといふ意
にて世評のこと也
人のほどだに云々　〔岷〕紫上心など
かはすほどの女ならばかやうにむ
かへとり給ふもつねの事なればく
るしからずこれは年齢のにつかわ
しからぬをいかゞと思ひ給ふ也
(釋)おしはかられぬべくはとの意
也
女君れいの
(釋)上文を結びたる照應いとめで
たし
いとせちに見るべき事
〔湖〕かしこは二條院也かの方に源

てありさまとひ給ふ。しか〳〵なんと聞ゆれば。くちをしうおぼして。かの宮にわたりなば。わざとむかへいでんも。すきずきしかるべし。をさなき人をぬすみいでたり。ともどきおひなんそのさきに。しばし人にもくちがためて。わたしてん。とおぼして。あかつきかしこに物せん。車のさうぞくさながら。ずゐじんひとりふたりおほせおきてたれ。との給ふ。うけ給はりてたちぬ。君はいかにせまし。聞えありて。すきがましきやうなるべき事。人のほどだに物を思ひしり。女の心かよはしける事。とおしはかられぬべくは。よのつねなり。父宮のたづねいで給へらんも。はしたなうすゞろなるべきを。とおぼしみだるれど。さてはづしてんは。いとくちをしかるべければまだ夜ふかういで給ふ。女君れいのしぶ〳〵に。心もとけず物し給ふ。かしこにいとせちに見るべき事の侍るを。思ひ給へいでゝなん。立かへりまゐりきなん。とて出給へば。さぶらふ人々もしらざりけり。我御かたにて。御

なほしなどは奉る。惟光ばかりを馬にのせておはしぬ。かどうちたゝかせ給へば。心もしらぬものゝあけたるに。御車をやをらひきいれさせて。たいふつまどをならして。しはぶけは。少納言きゝしりて。いできたり。こゝにおはしますといへば。をさなき人は御とのごもりてなん。などかいとよふかうは。たちいでさせ給へる。と物のたよりと思ひていふ。宮へわたらせ給ふべかなるを。其さきにものひとこと聞えさせおかんとてなん。との給へば。なにごとにか侍らん。いかにはかぐしき御いらへ。聞えさせ給はん。とてうちわらひてゐたり。君いり給へば。いとかたはらいたく。うちとけて。あやしきふる人どもの侍るに。と聞えさす。まだおどろい給はじな。いで御めさまし聞えん。かゝる朝ぎりをしらで。いぬるものか。とて入給へば。やともえ聞えず。君はなに心もなくね給へるを。いだきおどろかし給ふにおどろきて。宮の御むかへにおはしたる。とねおびれておぼしたり。御ぐしかきつ

の見給はでかなはぬ事あるを失念し給ひて今思ひ出給へば御出あるぞとなり云々

我御かたにて　〔孟〕大殿のうちにて源の御休所なり

惟光ばかりを　〔湖〕忍び給ふさまなり

心もしらぬものゝ

〔孟〕源の御出としらぬ者の門を明たれば御車を入らるゝ也

〔釋〕心もえぬ者のあけたる故に御車をひそかに引入させて惟光みづから妻戸を鳴らしてしはぶく也皆源氏君としらすまじき用意也

こゝにおはしますと　〔釋〕源氏君の此所におはすといふ也

ものゝたよりと思ひていふ

〔細〕いづくよりぞの御朝がへりなるべしと少納言は思ふ也

宮へわたらせ給べかなるを

〔釋〕父宮の方へわたらせ給ふと聞て其さきに一言いひおくべき事有て來れりとの給ふ也

いかにはかぐしき云々

〔玉〕いかにはさぞといふ意にてさぞはか〴〵しき御返事あるべきとたはふれていふ也打笑ひてとあるにてしるべし此いかにをいかでかといふ意に見るはわろしすべて近世の歌にさぞとよむを古の歌文には皆いかにといへり心得おくべし

かたはらいたく　（釋）あやしきふるごだちどものうちとけたるが傍いたき意也

かゝる朝霧をば云々　〔玉〕すべて夜半も過れば夜の內ながらも朝といふは常の事也古今集あふみぶりの歌に近江より朝立ちくればといひてとぢめに明ぬ此夜はとよめるなどにてもしるべし

やとも　（釋）やはおどろく聲也內の女房どもおどろきながらさすがにやともえいはぬ也

御ぐしかきつくろひ　（釋）源氏君紫上の髮をかきつくろひ給ふ也

宮の御使にて　（釋）父宮のかたへわたし奉らんといふよしを聞給ひし

くろひなどし給ひて。いざ給へ。宮の御つかひにて參りきつるぞ。とのたまふに。あらざりけり。とあきれて。おそろしと思ひたれば。あな心う。まろもおなじ人ぞ。とてかきいだきて出給へば。たいふ少納言などは。こはいかにと聞ゆ。こゝにはつねにもえ參らぬが。おほつかなければ。心やすき所に。と聞えしを。心うくわたり給ふべかなれば。まして聞えがたかるべければ。人ひとりまゐられよかし。との給へば。心あわたゝしくて。けふはいとびんなくなん侍るべき。宮のわたらせ給はんには。いかさまにか聞えやらむ。おのづからほどへて。さるべきにおはしまさば。ともかうも侍りなんを。いと思ひやりなきほどのことに侍れば。さぶらふ人々くるしう侍るべし。と聞ゆれば。よしのちにも人はまゐりなんかし。とて御車よせさせ給へば。あさましういかさまにか。と思ひあへり。わかぎみも。あやしとおもほしてない給ふ少納言とゞめ聞えんかたなければ。よべぬひし御ぞどもひきさげて。みづ

からに宮の御つかひといひなし給ふなりしかの給へるを紫の聞給ひて宮にてはあらずとあきれ給ふ也
まろも同じ人ぞ　〔玉〕宮と同じことぞかはる事なしと也
たいふせうなごんなどは　（釋）大夫は惟光也諸抄に女房の名也といはれたるはわろし惟光もかくまでにはし給ふまじく思ひよりたるならめば
驚くべきなり箋に惟光この所まで參りよるべからずなどいはれたれどいで給へばとあればそれも難なし
心うくわたり給ふ　（釋）兵部卿宮のかたへわたり給ふ也ましてはこゝにだにも常にはえ參らぬにまして宮へわたり給はゞ聞えがたしといふ意なり
宮のわたらせ給はんには　（釋）父君の來り給はゞ何とか申すべき申わけなしといふ意也
さるべきにおはしまさば　（釋）宿緣おはしまさばほどへても自然にいかやうともなり侍らんといふ也
思ひやりなきほどの事に　〔玉〕あまり俄にて何の用意思案もなき事なればといふ也
さふらふ人々　（釋）紫上の女房達也
よし後にも人は云々　（湖師）源氏少納言が詞は聞もいれ給はずよし紫の供には跡からなりともまゐれとて紫を車にのせ給ふなり　（評）事きふになりて問答もなく出ゆき給ふさまなとげにいとよくうつされたりといふべし
よべぬひし御ぞども云々　（湖師）上に物ぬひいとなむけはひしるければとありし首尾也　（評）かくあわたゞしき中によべぬひしといひみづからもよろしき衣着かへてといへるいともく\すきまなき筆といふべし
ひきさげて　〔玉〕拾遺に蜻蛉日記にずゞ引かけ經ひきさげなどあり提の字にてたゞ取て持也といへるがごとし
にしのたいに　（釋）院の西の方なる對の屋なり對は母屋に對して延たる屋をいふ
わか君をば云々　（釋）上にかきいだきて出給へばとありし首尾
やすらへば　（釋）車よりおりかねてやすらふ也やすらふは躊躇する事也少納言がさま見るがごとし
そは心なり　（釋）案に心なりとは夢のこゝちし侍るをといふにこたへてそれは心から也とのたまへる也諸抄に心まかせ也とやうにあるはたがへりそのことは次に見えたれば也
御みづからは云々（釋）少納言の車よりおりかねたるを見給ひて紫の御身をばかくわたし奉りたれば其方はかへらんとならば歸れよおくらせんとのたまふ也おくりは體言にて一つのわざとしていへる語也
わりなくて　（釋）少納言わりなしと思へどせんかたなくて車より下る也
にはかにあさましう　（釋）俄に興さめてむなさわぎするよし也俄にといへるめでたし

とてもかくても云々
（釋）かなたを思ひこなたをおもひつひにはみなしごとなり給へるを歎きたる女の心畫けるがごとしたのもしき人々は尼君母上など也いみじさは不仕合といふ意に聞ゆ
さすがにゆゝしければ
〔岷〕今事の始と思ひていまいましきと堪忍したる也（評）此一句いとめでたし例のかゆき所へ手のとどきたる文勢なり
こなたはすみ給はぬたい〔湖〕源常は東の對に住給ふなりこゝは西の對也
御丁御屏風など
（釋）御帳御屏風などよきさまにかまへて建ること也したてとはこしらへ立といはんがごとし舊注よしなき論ありひがこと也丁は帳の假字也
御木丁のかたびら
〔玉〕御木丁おましなどはこゝにももとより有てたゞかたびらを引おろせばよく引つくろへばよきさま

からも。よろしきゝぬきかへてのりぬ。二條院はちかければ。まだあかうならぬほどにおはして。にしのたいに御くるまよせており給ふ。わか君をば。いとかろらかに。かきいだきておろし給ふ。少納言。猶いと夢のこゝちし侍るを。いかにし侍るべき事にか。とてやすらへば。そは心なゝり。御身づからはわたし奉りつれば。かへりなんとあらばおくりせんかし。との給ふに。わりなくておりぬ。にはかにあさましう。むねもしづかならず。宮のおぼしのたまはんこと。いかになりはて給ふべき。御ありさまにか。とてもかくても。たのもしき人々に。おくれ聞え給へるがいみじさ。と思ふに。涙のとゞまらぬを。さすがにゆゝしければ。ねんじゐたり。こなたはすみ給はぬたいなれば。御帳などもなかりけり。惟光めして。御丁御屏風など。あたり〳〵したてさせ給ふ。御几丁のかたびらひきおろし。おましなど。たゞひきつくろふばかりにてあれば。ひんがしのたいに。御とのゐものめしにつかはして。おほと

にてある也
ひんがしのたいに（釋）東の對の常の御座所へ衾などとりに遣はして寢給ふなりとのゐ物とは今の世に夜着といふものゝ類なり
今はさは（釋）今よりはさやうに少納言とはれ給ふまじきものぞとをしへ給ふ也
あけゆくまゝに見わたせば（湖）前にまだあかうならぬほどにおはしぬとある首尾也
庭のすなごも（釋）此一句にて二條院のいみじきをきかせたるいとめでたし
はしたなく思ひたれど（釋）少納言かやうの所にて交らはんは不都合なることゝ思ひゐたれど女房などは侍らはず男ばかり簾の外にあるを見て少し安心したるさま也
うときまらうどなどの（釋）女房の侍らはぬ故をことわる也
ほのきく人は（釋）これは簾の外の男の中にてほのかに此事をきゝし

のごもりぬ。わか君いとむくつけう。いかにする事ならん。とふるはれ給へど。さすがにこゑたてゝもえなき給はず。少納言がもとにねん。との給ふ聲いとわかし。今はさはおほとのごもるまじきぞよ。とをしへ聞え給へば。いとわびしくてなきふし給へり。めのとはうちもふされず。物もおぼえずなきゐたり。あけゆくまゝにみわたせば。おとゞのつくりざま。しつらひざま。さらにもいはず。庭のすなごも。玉をかさねたらんやうに見えて。かゞやくこゝちするに。はしたなく思ひゐたれど。こなたには。女房などもさぶらはざりけり。うときまらうどなどのまゐるをりふしのかたなりければ。をとこどもぞみすのとに有ける。かく人むかへ給へり。とほのきく人は。たれならん。おぼろけにはあらじとさゝめく。御てうづ御かゆなどこなたにまゐる。日たかうおき給ひて。人なくてあしかめるを。さるべき人々夕づけてこそはむかへさせ給はめ。との給ひて。たいにわらはべめしにつかはす。ちひさきかぎり

人はといふ意也

たれならん　〔釋〕むかへ給へる女は誰人ならん源氏君の迎へ給ふほどならばおぼろけの人にはあらじと評ずる也

御かゆ　〔釋〕粥は朝飯の外也昔は二度の飯の外に朝はかゆなど參りし也　〔餘〕和名抄唐韻云饘和名加太賀由厚粥也と有て今の朝夕米を蒸て食する是也飯とは蒸籠にてむしたるを云

さるべき人々　〔細〕故郷の人々めす也

夕づけてこそは　〔釋〕夕づけては夕べにつきての意也ひるは人めを憚り給ふとなるべし

ちひさきかぎりことさらに　〔玉〕ことさらには俗にいふわざとにてわざと小き童ばかりといふことと也

君は御そにまとはれて　〔釋〕源氏君の御衣にまとはれてふし給へるなるべし

かう心うくなおはせそ

ことさらにまゐれ。とありければ。いとをかしげにて四人參りたり。君は御そにまとはれてふし給へるを。せめておこして。かう心うくなおはせそ。すゞろなる人は。かうは有なんや。女は心やはらかなるなんよきなど。今よりをしへ聞え給ふ。御かたちは。さしはなれて見しよりも。いみじうきよらにて。なつかしう打かたらひつゝ。をかしき繪。あそび物ども。とりにつかはして見せ奉り。御心につくべき事どもをし給ふやうやうおきいでゝ見給ふ。にび色のこまやかなるが。うちなえたるどもをき給ひて。何心なく。うちゑみなどしてゐ給へるが。いとうつくしきに。われも打ゑまれて見給ふ。ひんがしのたいにわたり給へるに。たちいでゝ。庭のこだち。池のかたなどのぞき給へば。霜がれの前栽。ゑにかけるやうにおもしろくて。見もしらぬ四位五位こきまぜに。ひまなういでいりつゝ。げにをかしき所かなとおぼす。御屏風どもなど。いとをかしき繪をみつゝ。なぐさめておはするもはかなしや。

（釋）上になきふし給へりとあれば猶うちとけずしてゐ給ふなるべし故に心うくなおはせそとのたまへる也

すゞろなる人は（釋）此語少しまぎらはしけれど案に人は源氏君なるべし我すゞろなる人ならばかうむかへきて心をつくさんやといふ意と見るべし

今よりをしへ聞え給ふ

〔湖〕前にも心のまゝにおふしたてて見ばやとおもほすと有又たいふかひなのけはひやさりともいとよくをしへてんとおぼすと有

御かたちは〔玉〕これは上下の言のつゞきざま源氏君の御かたちをいへるやうにも聞えたり〔玉補〕下への詞つゞきのさま實に源氏君の御かたちをいへるやうに聞えたれどこれは必紫の上の御かたちをいふべき所也さればきよらにての下に落たる詞などあるべし（□□）二説何れよからん辨へがたけれどかくながらにては源氏君の御かた

君は二三日内へもまゐり給はで。この人をなつけかたらひ聞え給ふ。やがてほんにもとおぼすにや。手ならひ繪など。さまぐ\にかきつゝ見せ奉り給ふ。いみじうをかしげにかきあつめ給へり。「むさし野といへばかこたれぬ。とむらさきのかみにかい給へる。すみつきの。いとことなるをとりて見ゐ給へり。すこしちひさくて。

ねはみねどあはれとぞおもふむさしのゝ露わけわぶる草のゆかりを。とあり。いで君もかい給へ。とあれば。まだようはかゝず。とて見あげ給へるが。なに心なくうつくしげなれば。うちほゝゑみて。よからねど。むげにかゝぬこそわろけれをしへ聞えんかし。との給へば。うちそばみてかい給ふ。てつき。筆とり給へるさまの。をさなげなるもらうたうのみおぼゆれば。心ながらあやしとおぼす。かきそこなひつ。とはぢてかくし給ふを。しひて見給へば。

ちゝと見えより外はなければ暫く小櫛にしたがふべくや
ながしき繪 〔釋〕繪の脉
見給ふにび色の 〔玉〕にもじを上へつけて見る説はひがこと也さてはにといふ言とゝのはず
〔河〕紫上外祖母の服を着する也
ひんがしのたいに 〔細〕源の東の對のわが御方 出給ふ其間に紫上の立いで給ふ也
四位五位こきまぜに
〔河〕古今「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春のにしきなりける「み雪ふるかすがの原のさくら花えこそ見わかねこきまぜにして
〔釋〕紫上尼君の方にては見しり給はぬ四位五位どもひまなく出入するをめづらしと見給ふ也こきまぜにとは四位の紫袍五位の赤袍たちまじりたるを云りの柳さくらをこきまぜてといふ類也こきはかきといふに等しく手して物するに力のいる詞を發語の勢ひにそへたるのみ也 〔新〕こゝは三位も六位も七

かこつべきゆゑをしらねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん。といとわかけれど。おひさきみえて。ふくよかにかい給へり。こあま君のにぞにたりける。いまめかしき手本ならはゞ。いとようかい給ひてんと見給ふ。ひいなゝど。わざとやどもつくりつゞけて。もろともにあそびつゝ。こよなき物思ひのまぎらはしなり㊂かのとまりにし人々は。宮わたり給ひて。たづね聞え給ひけるに。聞えやらんかたなくてぞ。わびあへりける。しばし人にしらせじ。と君ものたまひ。少納言も思ふ事なれば。せちにくちがためやりつゝ。たゞゆくへもしらず。少納言がゐてかくし聞えたる。とのみ聞えさするに。宮もいふかひなうおぼして。こあま君も。かしこにわたり給はん事を。いときのしとおぼしたりしことなれば。めのとのいとさしすぐしたる心ばせのあまり。おいらかに。わたさんをびんなしなどはいはで。心にまかせて。ゐてはぶらかしつるなめり。となく／＼かへり給ひぬ。もしきゝ出奉らばつげよ。

位もいろ〳〵出入べきなれとさまで書ては文の拙き故に略して四位五位とのみ書しもの也こきまぜといひたるにてしるべし

出入つゝ　〔釋〕此下にもしくは詞落たるかのぞき給へばとあるはもじの結びあらまほしき所なり

御屛風どもなど云々　〔釋〕上に屛風の事見ゆなどゝいへるは其外取につゞはしたる畫までをいへる也はかなしと評したる詞例のめでたし

やがて本にもと　〔釋〕すぐに御手本にもし給へるとおぼすにやと也

むさし野といへば　〔河〕「しられどもむさしのといへばかこたれぬよしやさこそはむらさきのゆゑ　〔餘〕六帖卷五　〔細〕藤壺の御ゆかりとなり

墨つきのいとことなるを　〔釋〕紫のゆかりの事かき給へるなれば墨つきも心してかき給ふべければことなるべし

すこしちひさくて　〔湖〕歌の書ざま也

ねはみねど云々　〔花〕草の根を寢る心によめる也業平中將妹に對してよめる歌「うらわかみねよげに見ゆるわか草を人の結ばんことをしぞ思ふこのねよげも根を寢にそへたる也　〔眠〕露わけわぶるは藤壺の事なるべし　〔釋〕いまだ寢は見ねどあはれとぞ思ふあひがたき藤つぼの御ゆかりなればと也露分わぶるは逢がたき心草は紫草なり

よかられど　〔孟〕わろくともかき給はぬよりはと也

うちそばみて　〔釋〕はぢらひて側向（ソバムキ）になりてかき給ふ也

心ながらあやしと　〔釋〕源氏君わが御心ながらかくまで紫上にこゝろうつり給ふはあやしく不思議なりとおぼす也

かこつべき云々　〔花〕「かこつべき故もなき身にむさしのゝ若むらさきをなにゝかくらん　〔釋〕むさし野といへばかこたれぬとあるをうけて我をかこつべきゆゑをしらればおぼつかなし露わけわぶる草のゆかりとはいかなる草のゆかりぞと也

ふくよかに　〔玉〕ふくらかにてたゞをさなき人の書たるさま也舊注に大やうなる手といへるはわろし其意はなしおひさき見えてといふはふくよかへかゝれることにはあらず

今めかしき手本ならはゞ　〔玉〕尼公の手は古風にて今の風にはあらざるが今より後今めかしき手本をならはゞの意にていへるなり

ひいなども　〔釋〕ひいなの脉

やども　〔釋〕ひいなのやどもを造りつゞけなどし給ふ也ひいなの入るべき屋の形したるをいふなるべし

こよなき物思ひの　〔花〕藤つぼの御事也ゆかりを尋ね出て思ひなぐさみ給ふ也

かのとまりにし人々は　〔細〕是より故郷の事なり　〔釋〕故鄕にとまりし女房たち也

しばし人にしらせじと　〔湖〕前にしばし人にもくちがためてわたしてんとおぼすと有し首尾也

との給ふもわづらはし。〔く〕僧都の御もとにもたづね聞え給へど。あとはかなくて。あたらしかりし御かたちなど。戀しくかなしとおぼす。北のかたも。母君をにくしと思ひ聞え給ひけるを心もうせて。我心にまかせ給ひつべうおもほしけるに。たがひぬるはくちをしうおぼしけり◎やう〳〵人まゐりあつまりぬ。御あそびがたきのわらはべちごども。いとめづらかにいまめかしき。御ありさまどもなれば。思ふことなくて。あそびあへり。君は男君のおはせずなどして。さう〴〵しき夕ぐれなどばかりぞ。尼君をこひ聞え給ひて。うちなきなどし給へど。宮をばことに思ひ出聞え給はず。もとよりみならひ聞え給はで。ならひ給へれば。今はたゞこの後のおやを。いみじうむつびまつはし聞え給ふ。物よりおはすれば。まづ出むかひて。あはれに打かたらひ。御ふところにいりゐて。いさゝかうとくはづかしともおもひたらず。さるかたには。いみじうらうたきわざなりけり。さかしら心あり。なにくれとむつかし

くちがためやりつゝ　(釋)二條院へといふ事をないひそと口がためして紫の故郷へやる也

かしこに　(釋)父宮の御かたに紫上のわたり給はんことを也

さしすぐしたる心ばせの　(釋)少納言がさし過たる心の餘りに紫上を父宮のかたへわたさんを便なしなど尋常にはいはずして心にまかせてゐてゆきしならんとなりおいらかにはいはでへかゝる意也おいらかにわたさんといふ意にてはなし

もし聞出奉らば云々　(釋)湖月にこれを兵部卿宮の里の衆につげ置給ふ詞としてわづらはしくといふを跡に殘れる人々の心也といへるはまことにさることなれどさてはわづらはしくとあるくもじ切ずしてとゞまる所なしかれ案にこれは宮の御心にてもし聞出奉らば告よと里の人々にのたまふもわづらはしくてさもえのたまはぬ意かとも思へど猶穩かならずし

さすぢになりぬれば。わが心ちもすこしたがふふしもいでくや。とこゝろおかれ。人もうらみがちに。思ひのほかの事もおのづからいでくるを。いとをかしきもてあそびなり。むすめなどはた。かばかりになりぬれば。心やすくうちふるまひ。へだてなきさまにおきふしなどは。えしもすまじきを。これはいとさまかはりたるかしづきぐさなり。とおぼいためり。

ばらく湖月の意としてかりにくもじを削りつかくては聞ゆべし

あとはかなくて　〔玉〕僧都のもとへ尋ね給ひてもさらにゆくへしられぬよし也

北方も母君を云々　〔釋〕兵部卿宮の北方も紫上の母君をにくしと思ひ給ひける心も今はうせて紫上をばわが心にまかせておふしたてんとおぼしけるに事たがひければくちをしくおほすと也

やう／＼人参りあつまりぬ

〔細〕是より又二條院の事なり

〔釋〕参りあつまるは故郷よりも其外よりも参りしなるべし故郷よりとのみかぎりたる注はわろし御遊びがたきのわらはべちごどもゝ此うちと見るべし上にはたゞ四人とあれば其後に又々多く参りたりとすべし

もとより見ならひ聞え給はで　〔釋〕これは父宮をば殊に思ひいで聞え給はぬゆゑをことわる文也甲乙の點のごとく心得べし宮とはわかれておひ立給へれば殊に思ひ出給はぬと也

のちのおやを　〔釋〕源氏君なることは論なし上にかの通給ひにけん御かはりにおぼしないてんやと有し脉を失はずして後の親といへるいとをかし

物よりおはすれば　〔湖〕源氏外よりかへり給へば也

さるかたには　〔釋〕さるかたとはもてあそびものにし給ふ方にはとの意なり此次よりはさるかたにらうたきよしを委しく述る文也

さかしら心あり云々　〔湖師〕さかしら心は嫉妬などのかたをいふ也わか心ちとは男の心をいふ人もうらみがちとは女をいふなり　〔釋〕年たけてまことの夫婦とならんにもしさかしら心ありてむつかしきすぢにねたみなどせば我心にもたがふ事も出來やせんと心もおかるべしさらば女がたも恨みがちになりて案外の事も自然といでこんを今はまださることもなければをかしき翫び物也といふ意なるべし

むすめなどはた　（釋）まことの娘などはかほどの年ごろになればかく心やすくふるまひて懐に入もろともにふしなどへだてなきさまにはえすまじきにこれはつひに夫婦となるべき人なればさまかはりたるかしづき種(グサ)とおぼすよしなり

これはいとさまかはりたる云々　〔玉〕これはまことのむすめとはさまかはりたるかしづきぐさぞと也注によのつれの夫婦のかたらひのやうにもあらず云々と夫婦の事へもかけていへるはわろしかしづきぐさとはもはらむすめにつきていふ詞なり夫婦のかたのさまかはりたることはいとをかしきもてあそびぐさとすでに上にいひてこゝへはかゝらぬ事也　（釋）この物語卷々の末をさま〴〵に體(スガタ)をかへて結ばれたる中に此卷なるは源氏君の紫上をかしつくにつけておぼしたることをいひてはかなくとぢめられたり次の末摘花卷の末に「二條院におはしたればむらさきの君いともうつくしきかたおひにて云々とある所へつゞきて心得べしかしこにて紫とくれなゐと反對にしたる脉をひきすべて結びたるなり

第六帖 末摘花 評釋

〔舊注〕歌幷詞をもて爲二卷名一詞云猶かのすゑつむ花にほひやかにさし出たり歌になつかしき色ともなしになに、此末摘花を袖にふれけん此卷は常陸宮の御むすめ末摘花の御事をかきたるゆゑの名也

〔新〕此姫君は故常陸宮の御むすめにて御鼻のあかきによりて末摘花にたとへて詞にもしかの給へり そは萬葉の紅の末摘花の色云々てふ歌より出たる詞にて紅花は莖立たる上に房ありその房の末に花はかつ〳〵咲出るを手して摘とる故に末つむ花といふ

〔玉〕源氏君十八の春より十九の正月まで也或人問夕顏上のうせられしは去年の秋なるに此卷のはじめに思へども猶あかざりし夕顏の露におくれしほどの心ちをとし月ふれとおぼしわすれずとあり秋より明年の春までの事を年月ふれどゝはいかゞ答さる例多し胡蝶卷に玉葛君は去年の冬はじめて源氏の御方にわたり給へるにその又の年の春の源氏君の詞にかく年へぬるむつまじさにと見え蜻蛉卷に去年の夏よりの事を今年の夏の詞に年ごろと見え浮舟卷にも秋より又の年の春までの事をとしごろと有たぐひ也

〔釋〕卷名の事諸抄のごとし但舊註にこの卷を横竪をかねたる幷といはれしはいかゞ也そのよしは空蟬卷の首に委しく論へるがごとしかれ今は幷の事どもにはしひてかゝはらず此卷を以て第六帖としてかぞへたり次々なるも皆しかりさて卷の名の事は總論にもいへるが如くたゞよりくるにしたがひて名けられたる物と見えて卷ごとにしひてことごとしき理を思はれたる物とは見えざれども又おのづからいさゝかづゝ心せられたる物とは見えたり此卷は紅の末摘花によりて名けられたるは上の若紫と相對へたる物にて卷中にて第一にめでたき人をいとも〳〵わろかめる人と反對にせられたるものと見ゆさるは此次の卷は紅葉賀と花宴と對へ葵と榊と對へられたるにてさる事とはしらるゝ也さて次々の卷どもゝ大かたはさばかりの心はせられたりと見ゆるが多けれど又悉く然るにもあらざればみながらさやうにもいひがたけれど作りぬ

しの心ありげに見ゆる名どもは次々の巻にも注しつべし見ん人大かたは心得おくべき也

(評)此巻は若紫の反對にいと古めきたる常陸宮の姫君の事をいはんとてわびしくわろき事のかぎりをあつめて語るを主としたる事はいふもさらなる中に發端の詞をばかの夕顔のなつかしかりしを思し忘れずいかでさるむぐらの門にあはれなる人のあれかしとしひてもとめ給ふ物好の心より思ひの外にくちをしき人を引出きてわづらひ給へるよしに書なされたる反覆の筆いとめでたしされば初にさる事をしひてもとめ給ふよしをことわりおきて大輔の命婦を引出さておぼろ月夜のをかしきにあれたる所にゐてゆかれて琴きゝ給ひ又八月廿よるまたるゝ月の心もとなきにゆきて逢給ひ又えならず身にしむべき雪の朝に立出給ふなどいと心ふかくあはれなるけしきに書もてゆかれたるは後にさうじみのかたちを見物のわびしくふつゝかなるを見あらはし肝をけしてあきれ給はん爲の抑揚なるべし此すぢに心とゞめて見るべき也雪の中にとひ給へるくだりはかのわびしくむつかしくふつゝかにうるさきすぢをかぞへたてゝ書たるにて末摘花君のさまのむねとある所なれば心とゞめて見るべし其中に古代の禮儀を失はざるとさうじみのわらひて心うつくしくけだかきとかたちに髪のめでたきをいはれたるなんわろき中にとり所ある事を殘したるなるべきかくてぞあながちなる作り物語めかずしてさもあるべく聞ゆなるこれこの作りぬしの用意のいみじき所也といふべしたいふの命婦が媒するさまのいとはやりかに心かろきなどは宮づかへするものゝさがなくうたてき情をいひあらはしたるなれど其中にさすがに末摘花君のことをたすけあはれひたるさまの見えたるなども皆さる用意也此すぢはこの人々のみにはあらずいづれの人のうへにも皆さるようい有よく／＼心とゞめて見るべし抑作り物語はよさまにいはんとてはよき事の限をとりぐしたるさまにいひあしき人の上とてはあしき事の限りを書あらはすがやまともろこしなべての作り物語の常なるを此つくりぬしはさるさかひをよく見あきらめて今一きは用意せられたるなど此物語はさらに作り事と聞えぬなりさるは

世中にある人々のうへを見るにいかならんあしき人にても又其中にはさすがによき心しわざもまじりよき人なればとて露のあやまちなからんはさらにある事なきが常にてもろこしざまの理屈づめとかいふらんすぢの人はたえて世の中にはなきもの也かゝることわりをよく思ひしらん人は作りぬしのさえのたゞならぬをしるべくなんこはついでにいふのみ也

○頭中將のしたひきて立聞し給へるはこの正副の法にて對へていどませたるにて中務の君の頭中將をいとひて源氏君のたまさかなる御けしきになびきたるも其ぢやうなり此すぢ紅葉賀にいたりて源内侍のいどみにいたりて極れりさてかしこにかくいどみ給ふ頭中將の心をもいひあらはされたり心をつくすべしさて頭中將にいどみあひていよ〳〵末摘花をゆかしく思ひていひより給へるにいとくちをしき人なりければいたうはぢらひ給へるは後に頭中將の玉かづらの君の事をうらやみて近江の君をしひてたづねとり給ひてさがなきにこうじ給へるを照對にてとり〴〵にそのをかしみをあらはされたり先よく心にとめおきてよむべし

○末摘花君の御めのとこ侍從といふいとはやりかなるわかうどを引出てさうじみの御かはりに歌などよみたるさまにかゝれたるははじめ思ひ給ひしには似もやらで後に此人あらずてくちをしくわびしき事のかぎりをつくして見せんとの反覆抑揚なるべしかくて雪ふる夜に源氏君のひそかにかいまみ給ふ所にわびしき事のかぎりを書つくして見せられたるはすべてをかしく戯れくつがへりたる物からげにかく衰へし人の家のさまをめの前に見るがごとく寫し出られたり其中にも常陸宮のおきて正しく住なし給ひしなごりありて「几丁などいたくそこなはれたれど年へにける立どかはらずおしやりなどみだれねばといひ「御だいひそくやうの物もろこしの物なれどゝいひ「しびらひきゆひつけたるさすがにくしおしたれてといへる類みな其すぢをあらはしたる也抑常陸宮は古代の禮儀正しくしてかたくななるまでにおはしければひたすら世にもあひ給はでうせ給へるなるべき事言の外ににほひて聞えたるは世の中の有さまかならずし

かにて今の世も同じくさる人の時にあへるは稀なる事を思はせたるにも有べしさて又かくばかり貴き親王たちのいかにおとろへ給へればとてかう貧しくなり給はん事は今世にしては心得がたき事なれどもろこしざまの郡縣の制度をうつし給へる世のさまは時にあはぬ人は貴き御かたもみなかうやうに成ゆき給へりし事巻首の總論にいへる條に考へ合せてよく〳〵心得べき也

○源氏君の御とのゐ所に命婦が衣筥をもてきたるくだりはかの末摘花を見給ひたる餘波にてかたくなに心おくれたるさまをあやどりたるはいふも更なる中にさすがにこだいの禮儀殘りて當世に打あはずおくれたるすぢをしたにゝほはせたりさて紫上の事を末にいへるはかの若紫に此紅の末摘花をむかへたる反對の法を引すべてとぢめたるにていと〳〵めでたしさて紅梅の花より又かの末つむ花の事を思ひ出給へるさまにいひてかゝる人々の末末いかなりけんとおぼめきてとゞめられたる殊にめでたしかくいひ置て又蓬生の一巻を書て末を結められたるなど深く心したる物としらる猶かの蓬生巻にいへるを見てしるべし

思へども云々　〔花〕此卷は夕顏の卷につゞけて發端の詞をかけり若紫の卷は三月に北山へわらはやみまじなひに出給へるより初てかけり此卷は若紫よりさきの事をいへる故に夕顏卷につゞけて書る也信明集「しぐれつゝ梢々のうつるとも露におくれし秋はわすれじ
〔細〕凡思へどもと歌の五文字におくはかならず思へども〳〵と深切に思ふ心のあるよし也古今おもへども身をしわけねばの歌も思へども〳〵とかされて思ふ心のある也此末摘などに耳とゞめ給ふも夕顏上にわかれて後又さやうなる人にもしやまた逢見んの心也
〔釋〕露におくれしとは露のはかなくきゆるにおくれしといふ意にて夕顏上のうせ給へるにおくれ給ひしをいひなしたる也
こゝもかしこも　〔弄〕葵上六條御息所などの體也　〔釋〕大かたあひ給ふかた〴〵をひろくさしていへる也けしきばみ又心ふかきさまをま

おもへども。なほあかざりし夕がほの。露におくれしほどの心ちを。年月ふれどおぼしわすれず。こゝもかしこも。うちとけぬかぎりのけしきばみ心ふかきかたの御いどましさに。けぢかくなつかしかりしあはれに。にる物なうこひしくおぼえ給ふ。いかでこと〴〵しきおぼえはなく。いとらうたげならん人の。つゝましき事なからん。みつけてしがな。とこりずまにおぼしわたれば。すこしゆゑづきて聞ゆるわたりは。御みゝとまり給はぬくまなきに。さてもやとおぼしよるばかりのけはひあるあたりにこそは。ひとくだりをもほのめかし給ふめるに。なびき聞えずもてはなれたるは。をさ〳〵あるまじきぞ。いとめなれたるや。つれなう心づよきは。たとしへなうなさけおくるゝまめやかさなど。あまり物のほどしらぬやうに。さてしもすぐしはてず。なごりなくくづほれて。なほ〳〵しきかたにさだまりなどするもあれば。のたまひさしつるもおほかりけり。かのうつせみを。ものゝをり〳〵には。

けじ劣らじとつくろひ給ふ事をいどましきとはいへる也
けぢかくなつかしかりし（釋）こゝより夕顔上の事也いづかたもけしきばみ心ふかくなどつくろひ給ひて打とけがたき故にけぢかくなつかしき夕顔上を戀しうおぼえ給ふ也
いかでこと〳〵しき〔孟〕夕がほの心つきのやうなる人もがなと也（釋）おぼえはなくの下にともといふ詞ありしをおとせるなるべしなくてはとゝのひがたしおぼえは世のおもはくの事にてこゝは種姓などをいへり
さてもやとおぼしよる云々（釋）御耳とまる中にさてもや見んと思ひより給ふほどの所々へは一くだりの文をも遣はし給ふにもてはなれたるは大かたあるまじと地より評したる也めなれたるとはめづらしげなき意也
つれなう心づよきは（釋）其中に又つれなく心づよくてなびかぬ女はまめやかさ餘りてなさけおくれ物の分際もしらぬやうなるを實にさやうかと見ればさてばかりも過しはてず後にはつれなき心のなごりもなくくづれて何ともなきたゞ人の妻にさだまりなどするもあればいひさしにしてやみ給へるも多しといふ也此段いたく書かすめたる筆つきにてほのかにまぎらはしよく〳〵心を得てよむべし物のほどしらぬとは源氏君の尊き分際をもしらぬやうにむげにつれなくするといふ意なりあまりといふ詞はもしくは上の句につけてまめやかさなど餘りとよむべきかとも思へどなほもとのまゝなるべし岷江入楚の箋注ひがことおほし
かのうつせみを云々（評）この一段ははゝきゞの卷よりこなたなり〳〵に綻ばしたる脉をあらはしたるはいふもさらなり此下に末摘花君にくらべてうらうへに評し結ばんとての伏案也心をつくべし
をぎの葉も（釋）軒端荻の事にて例の副たる文法也風のたよりおどろかしなどいづれも荻の縁語なり
ほかげのみだれたりしさまは〔花〕灯の影に碁うつを見給ひしを荻の穗によそへてかけたる也
またさやうにても（釋）または再の字の意にてふたゝびその時のごとくにても見まほしく思すと也
おほかたなごりなき云々（評）此詞は箋にもいはれたるが如く源氏君の性質を評じたる中に夕顔上のかはりにとてあながちにむぐらの門をたづね給ひつひに末摘花君を引出べき伏案としられたりいと巧也
左衛門のめのと〔細〕源の乳母也大貳の乳母につぎては此左衛門のめのとを源は大切にし給ふ也
たいふの命婦（釋）兵部大輔の女の命婦になりたるなれば大輔の命婦とはいふ也
うちにさふらふ（釋）此語の脉うちにさふらふ兵部大輔といふやうに聞ゆれどもさにはあらずたいふの命婦とて内にさふらふはわかんどほりの兵部大輔なるが女といふ意也そのよしは下文にてしられたり
わかんどほり〔和〕たとへば王孫にてある人の兵部大輔に成たるをいふ也〔孟〕王孫にて姓を不レ賜平人也わかんどほりの事是もむかしは秘

事にいひし事也
〔拾〕百濟王禪廣の末を百濟王某ㇾといひけるを略して王といひければ王家といふべしさてそれを音便にわかんともいふべきは催馬樂にわいへんなどいふ例也とほりはすぢの心にて王家の裔といふ心などにや延喜式に中納言眞世王の末を王氏といへり又桓武天皇の御裔にもいへりいづれの親王にもあれ氏を賜はらであるほどは皆王氏といふにや王氏を王家といふべし
(釋)拾遺の說のごとく王家のすぢといふ義なるべしたゞ王の裔にて氏賜はらぬ人と心得べし百濟王のことはこゝに用なき注なり
兵部大輔　(釋)この人常陸宮の御子にて末摘花君の御兄のごとく聞ゆるよし玉小櫛に委く考へられたり長ければ餘釋に擧つ
父君のもとをさとにて
〔玉〕これを父宮といへる說はいみじきひがこと也拾遺にわきまへたるがごとし又父宮を父君といふこ

ねたうおぼしいづ。荻の葉も。さりぬべき風のたよりある時は。おどろかし給ふをりもあるべし。ほかげのみだれたりしさまは。またさやうにても見まほしくおぼす。おほかたなごりなきものわすれをぞ。えし給はざりける「左衛門のめのとゝて。大貳のあま君のさしつぎにおぼいたるがむすめ。たいふの命婦とて。うちにさぶらふ。わかんどほりの。兵部のたいふなるがむすめなりけり。いといたう色このめるわかうどにてありけるを。君もめしつかひなどし給ふ。はゝはちくぜんのかみのめにて。くだりにければ。ちゝ君のもとをさとにてゆきかよふ。こひたちのみこのすゑにまうけて。いみじうかしづき給ひし御むすめ。心ぼそくてのこりゐ給へるを。物のついでにかたり聞えければ。あはれのことや。とてとひきゝ給ふ。心ばへかたちなど。ふかきかたはえしり侍らず。かいひそめ人うとうもてなし給へば。さべきよひゐなど。ものごしにてぞかたらひ侍る。きんをぞなつかしきかたらひ人と

となへ宮なれば宮とかみことかいふ例なるをや　〔拾〕上にいへる兵部大輔なり云々（餘釋ニ擧ク）

ひたちのみこ　（釋）親王の常陸の太守に任ぜられたるをいふ

かたらひ人　〔拾〕琴は聲ある物なればかたらひ人といふ人とは萬葉には雁を遠つ人郭公をも遠つ人後撰にも郭公を「まつ人を誰ならなくにとよむ此物語の末には猶をも人といひつれば萬にわたりて似つきたる所にはいふべき也

みつのとも　〔河〕今日北窓下。自問何所爲。欣然得三友。三友者爲誰。琴罷輙擧酒。酒罷輙吟詩。三友遞相引。循環無止時。一彈愜中心。一詠暢四支。猶恐中有間。以醉彌縫之。（白氏文集）

いまーくさやうたてあらん　〔細〕河海詩の事と云々但酒の事にて可然歟詩は女の學ばんもつきなからざるなり　〔拾〕細流の説然るべし云々下略　（釋）拾遺にいへるごとく詩もあまりに好まんはなつかしからざるべし然れどもこゝは酒なるべしさてこゝの意は琴をかたらひ人といひなしたる故にげに琴詩酒を三の友といへればさもあるべしされど酒をのまんはうたてあらんと戯れ給へる意をつゞめていへる也諸抄無用の事多くして此意をとかれざるはいかにぞやさらでは聞えぬこと也

いたうけしきばましや　（釋）俗言に亭主ブリタルといふがごとき意にて末摘花の琴のことを命婦がことわるをしかけしきだちて亭主ぶるほどのことかはといふ意と聞えたり

まかでよと　（釋）命婦も內裏を退出て案內せよとの給ふ也

父のたいふの君は云々　（釋）此人の事餘釋に玉小櫛を引たるがごとし故に君といへるなるべしこゝとは常陸宮をいふまゝ母は大輔君と共に外にすむにや又このひたちの宮の內におきて時々かよふにや今少し詳ならず

まゝはゝのあたりは　〔花〕兵部大輔が左衛門乳母の後にむかへたる妻は命婦がためにはまゝ母なり　〔新〕住もつかずとは父の家の事也上には先有にきすらをいふ故に父君のもとを里にて行かよふと書たりこゝにはさはあれど父の方にはまゝ母あればえすみもつかで內より退る時多くは末摘花の方へゆくをいへり

ものゝ音すむべき夜の　〔湖〕朧夜の琴などの音の澄わたるべき夜にもあらぬにと申す也　〔萬〕命婦がめいわくしたるとの詞也

猶あなたにわたりて　〔湖〕末摘のおはするかたへ行て琴を所望つかまつれと也

うちとけたるすみかに　〔細〕內々の方也命婦が我局などなるべし　〔萬〕命婦常に參りてある方に置まゐらせたれば忝しとはいへり　（釋）うしろめたうとはかくし置參らせたる故に人の見つけんかと氣にかゝる意也

御ことの音いかにまさり侍らんと　（釋）おぼろ月のをかしきにあはせて琴の音の常よりはいかばかりまさらんと思はるゝ夜のけしきにさそはれて參りしといふ也

思ひ給へる。と聞ゆれば。みつのともにて。いまひとくさやうたてあらん。とて。我にきかせよ。ちゝみこのさやうのにいとよしづきて物し給ひければ。おしなべての手づかひにはあらじとおもふ。とかたらひ給ふ。さやうに聞しめすばかりには侍らずやあらん。といへば。いたうけしきばましや。このごろのおぼろ月夜に。しのびて物せん。まかでよ。との給へば。わづらはしとおもへど。うちわたりものどやかなる。春のつれづれにまかでぬ。ちゝのたいふの君はほかにぞすみける。こゝには時々ぞかよひける。命婦はまゝはゝのあたりはすみもつかず。姫君の御あたりをむつびて。こゝにはくるなりけり。の給ひしもしるく。いざよひの月をかしきほどにおはしたり。いとかたはらいたきわざかな。ものゝねすむべき夜のさまにも侍らざめるに。と聞ゆれど。猶あなたにわたりて。たゞひとこゑもよほし聞えよ。むなしくてかへらんがねたかるべきを。との給へば。打とけたるすみかにすゑ奉

心あわたゞしき出入に
（釋）常に參れどいつも〳〵心いそがしき出入にてえ承らぬは殘念也といふ意也湖月萬水などに内裏の御奉公に隙なさにといへるは少したがへり

あはれは聞しる人こそはあなれ
（釋）此語いさゝか心得がたし異本を擧て餘釋にいへるを見べし今は一本によりていはん命婦が詞に御ことの手いかにまさり侍んと思ひ給へらるゝ夜のけはひにといふをうけてさるをりふしの物のあはれは心ありて聞しる人こそはあなれ我らごときものゝしるべきことかはまして禁中に行かよふ命婦などの聞ばかりはいかでかえひかんといふ意なるべし舊注のごとくにては次の詞に續きがたくしていたくほこりかに聞ゆさはあるまじき事なり

めしよするもあいなう
（釋）琴をめしよせ給ふを見て命婦が何となく打つけに心づかひする

なあいなうといへる也源氏君のいかゞ聞給はんと安心のならぬよしなり

ものゝねがらの〔新〕手なきにはあられどそはいとふかき手ならぬをもとより琴は音がらのよき物なれば聞にくからぬ也

さばかりの人の云々

〔釋〕さばかりの人とは故父宮なりふるめかしうとは古代の行儀正しきをいふ所せくはかしづく事の餘りて所も狹きほどなるをいへりおもほし殘す事とは色々さま〴〵に物を思出て思ひといふ思ひに殘ることなきをいふ此詞を心得そこれられたる舊注はいみじきひがことなり

むかし物語にも〔釋〕昔物語の册子などにもかやうの所にこそあはれなる事どもはありけれと思ひ合せ給ふ也花鳥に引給へるうつほの俊蔭がむすめなどのことげによしありては聞ゆれど必しも夜にかゝはる事にはあらずたゞ昔物語とのみ

りて。うしろめたうかたじけなしと思へど。しんでんにまゐりたれば。まだかうしもさながら。梅の香をかしきを見いだして物し給ふ。よきをりかなと思ひて。御ことのねいかにまさり侍らん。とおもひ給へらるゝよのけはひに。さそはれ侍りてなん。心あわたゝしきいでいりに。えうけ給はらぬこそくちをしけれ。といへば。あはれはしる人こそあなれ。もゝしきにゆきかふ人のきくばかりやは。とてめしよするもあいなう。いかゞきゝ給はんとむねつぶる。ほのかにかきならし給ふ。をかしう聞ゆ。なにばかりふかきてならねども。ものゝねがらのすぢことなる物なれば。きゝにくゝもおぼされず。いといたうあれわたりてさびしき所に。さばかりの人の。ふるめかしう。所せくかしづきすゑたりけんなごりなく。いかにおもほしのこす事なからん。かやうの所にこそは。むかし物語にもあはれなることゞも有けれ。など思ひつゞけて。ものやいひよらましとおぼせど。うちつけにやおぼさん。と

見てあるべし
命婦かどあるものにて
〔細〕命婦心しらひして大かたにひかせまゐらするなり
くもりがちに侍めり　〔岷〕朧月夜の體をいふ物の音もゆるびてすみぬべき夜のさまならずと申す也
まらうどのこんと侍りつる
〔釋〕客人の來んと申つるを局にあらずはいとひたりとや思はん故にかへり侍る也今に参りてのどやかに承らんと申て立て歸りさまに御格子参らんと心をつけたるなり命婦がさま見るがごとく聞がごとし
のどかにをのをは助辭なり
なか／＼なるほどにても
〔湖〕あまりに少し聞給へばかへりてきかぬにおとれるほどにてやみぬることよと也
のたまふけしき　〔釋〕けしきにて何をきりてよむかたまづはよろしからんかさてはをかしとの下にはもじなどあらまほし又けしきをかしとつゞけてよむかたにてはけし

心はづかしくて。やすらひ給ふ。命婦かどあるものにて。いたうみゝならさせ奉らじと思ひければ。くもりがちにはべめり。まらうどのこんと侍りつる。いとひがほにもこそ。いま心のどかにを。みかうしまゐりなん。とていたうもそゝのかさでかへりたれば。なか／＼なるほどにてもやみぬるかな。物きゝわくほどにもあらでねたう。とのたまふけしき。をかしとおぼしたり。おなじくはけぢかきほどの立ぎゝせさせよ。との給へど。心にくゝてと思へば。いでやいとかすかなるありさまに思ひきえて。心ぐるしげに物し給ふめるを。うしろめたきさまにやといへば。げにさもあること。にはかにわれも人もうちとけて。かたらふべき人のきはゝ。きはとこそあれ。などあはれにおほさるゝ人の御ほどなれば。猶さやうのけしきをほのめかせ。とかたらひ給ふ。又ちぎり給へるかたやあらん。いとしのびてかへり給ふ。うへのまめにおはします。ともてなやみ聞えさせ給ふこそ。をかしう思ひ給へら

きは其夜の宮中のけしきと聞ゆ猶考へてさだむべし
心にくゝてと思へば〔細〕命婦が心づかひ也〔湖師〕おくふかくせんと思へるなり（釋）心にくきほどにて止んと思ひたる也
いとかすかなる有さまに
（釋）あれはてゝよろづ幽なるありさまに末摘花のはぢらひて消入るさまに居給へばきのどく也とことわる也かすかといひ消るといふは緣の語
にはかに我も人も云々
（釋）ふと出會てにはかにかたらふは凡人などの分際にてこそするわざなれ貴人どちはさはあらずとの心也舊注わろし
〔餘〕男女のしのびわざするは貴人は貴人どちいやしきものはいやしきものどちにかたらふなきはゝきはといへる也
さやうのけしきな〔細〕此由な申せと也
うへのまめにおはしますと

るゝをり〳〵侍れ。かやうの御やつれすがたを。いかでかは御覽じつけん。と聞ゆれば。たちかへりうちわらひて。こと人のいはんやうに。とがなあらはされそ。これをあだ〳〵しきふるまひといはゞ。女のありさまくるしからんとの給へば。あまりいろめいたりとおぼして。をり〳〵かうの給ふを。はづかしとおもひて物もいはず。しんでんのかたに。人のけはひきくやうもや。とおぼして。やをらたちいでたまふ。すいがいのたゞすこしをれのこりたるかくれのかたに。たちより給ふに。もとよりたてるをとこありけり。たれならん。こゝろかけたるすきものありけり。とおぼして。かげにつきて。たちかくれ給へば。とうの中將なりけり。このゆふつかた。うちよりもろともにまかで給ひけるを。やがて大殿にもよらず。二條院にもあらで。引わかれ給ひけるを。いづちならんとたゞならで。われも行かたあれど。あとにつきてうかゞひけり。あやしき馬に。かりぎぬすがたのないがしろにてきければ。

〔釋〕父帝の常に源氏君の御事をあまり實體にましますともてなやむやうにの給ふを命婦が聞てをかしく思ふをり〳〵もありと也さてかやうの御やつれ姿を帝のいかでか御らんじつけ給はん御覽じたらばいかゞあらんなど戲れて申す也上のまた契り給へるかたやあらんといふをたすけたる餘韻なり

こと人のいはんやうに　〔花〕命婦は御めのと子なればかくのたまふ也

これをあだ〳〵しきふるまひと　〔眠〕男のかゝるふるまひをあだあだしきといはゞ女の好色なるをば何とすべきぞとのたまふ也

あまり色めいたりと　〔細〕命婦がさま也　〔眠〕命婦が我身のうへをの給ふとはづかしく思ひてこたへ申さぬ也

しんでんのかたに　〔湖〕末摘のけしきをゆかしくおぼしてもし其けはひの聞えやせんとて寢殿のかたへ立出給ふ也

えしり給はぬに。さすがに。かうことかたにいり給ひぬれば。心もえず思ひけるほど。物のねにきゝついてたてるに。かへりや出給ふ。としたまつなりけり。君はたれともえ見わき給はで。我としられじ。とぬきあしにあゆみのき給ふに。ふとよりて。ふりすてさせ給へるつらさに。御おくりつかうまつりつるは。

もろともにおほうち山はいでつれどいるかた見せぬいさよひの月。とうらむるもねたけれど。此君とみ給ふにすこしをかしうなりぬ。人の思ひよらぬことよ。とにくむ〳〵。

里わかぬかげをば見れどゆく月のいるさの山を誰かたづぬる。かうしたひありかば。いかにせさせ給はん。と聞え給ふ。まことはかやうの御ありきには。ずゐじんからこそ。はか〳〵しき事もあるべけれ。おくらさせ給はでこそあらめ。やつれたる御ありきは。かる〳〵しき事もいできなん。とおし

(釋)再案かうしたびありかば云々とある詞の勢ひ歌ぬしの直にいひつゞけられたる意と聞ゆされば人の思ひ

すいがいのたゞすこし　(評)すいがいは透(スキ)たる垣也たゞすこしといへるに荒たるさまつよく聞えてちからあり
心かけたるすきもの　〔湖〕末摘に心かけし人かとおぼして也
かげにつきて　〔湖〕月のくらき方につきてなり
我もゆくかたあれど　(釋)頭中將も忍びてゆく所あれど也
あやしき馬にかりぎぬ姿の　〔花〕狩衣姿上に内より出給ふと有それにかりきぬすがたおぼつかなし　〔新〕中將もゆく方ありと出たればさるや
つれの料にもたらしたるを道のいづこにても着たるなるべし馬もあやしきといふは夕顔卷に惟光が馬を源に奉りしごとく從者の馬に中將も
のりけんかしこゝを疑ふやうにいひし說はいふにもたらず
ないがしろにて　〔新〕こゝは中將ならぬさましたるをいふかの軒端荻の衣にいへるとは異也
ことかたに入給ひぬれば　〔岷〕源の寢殿へこそおはすべきをさはなくて命婦の居るかくれの方へおはしたるを心得ず思ひたるに其うちに末摘
の琴を引給へばそれに聞ついて寢殿のすいがきのもとにいまだたゝずみ居たるなり
したまつなりけり　(釋)したまつは心のうちにのみ思ひて待意也すべてかやうのしたといふ詞は心の中の事也引歌まではあらぬ所也
もろともに云々　(釋)大内山の事花鳥に委し仁和寺の西北岡のあたりなるべしと有さてこゝは大内山の名をかりて禁中の事にいへり入るかた
見せぬとは源氏君のかくれ給ふをよそへていへりいさよひの月は上に見えたり
人の思ひよらぬ事よ　(釋)かやうに跡につきてうかゞひ來るなどはなべての人の思ひもつかぬ事よとかりににくみながら也
さとわかぬ云々　〔花〕里わかぬ月のひかりをば見れども明がたの入さの山までをたづぬる人もなきに思ひよらぬ事とにくむ心をそへたり
(釋)里わかぬとはいづれの里とはいはずなべておしてる月の影を云頭中將のいたらぬ隈なくありき給ふの意也いるさの山は但馬國の名所な
るをかりて只月の入る事によせたり
かうしたひありかば　〔花〕頭中將の詞也
隨身からこそ　〔花〕隨身は近衛づかさの身にしたがへてつるゝもの也　(釋)かやうの御しのびありきにも然るべき御供の人ありてこそ道のほ
ども危げなくたしかなるべけれされはいつも某を隨へ給ひておくれさせ給はでこそ出給はめとの意也舊注大和物語を引れたる例の不用也
かる〳〵しき事もいできなん　(釋)かくやつれたる御忍びありきは輕々しく不都合なる事もや出來んといひて諫むる也さてかく諫め給ふもす
べて皆戲れて諫むるなり其意を得て讀べし
かうのみ見つけらるゝを　〔湖師〕かうのみといふ詞今はじめての事にあらず已前にもかやうの事をみつけしならん此後にも源内侍等の事あり
おもきこうに　〔玉〕こうは功にてわが手がらにおぼす也碁の劫の事はさらによしなし

よらぬ事よといふ所よりすへて中將のうへにやそのかたにては源のかやうのあれたる所にしのび來給ふな思ひよらぬとはいへる也歌も中將のとすれば意も異にな／りて上句は源の御しのびありきの事のたとへ／也末句は我ならではたつねくまじといふ落着となれりかくみん方いさゝか穩かなるべきにや見ん人むへて定むべし

おの〳〵ちぎれるかたにも
〔湖〕源も頭中將も外にかよふかたあれど互にされあひて行わかるゝ事もせずひとつ車にのりて歸らるると也
〔岷〕頭中將に馬なりしかば源の御車なるべし
雲がくれたる道のほど
〔評〕前におぼろ月といひくもりがちに侍めりといへる故にこゝに雲がくれたる道のほどゝいへり首尾とゝのひてめでたし
人みぬらうに御なほしどもめして
〔細〕狩衣姿なるを直衣に改め給ふなり
〔評〕人見ぬ廊といへる忍びたる人のかへれるさまいとをかし
今くるやうにて 〔孟〕内裡より只今御出のやうにし給ふ也
こまふえ 〔拾〕和名抄云籥名苑注云籥以灼反今案所ㇾ謂高麗用ニ此字ヲ一歟和名古萬布江籥ニ吹處一而六孔之笛也
〔評〕道のほど笛ふきあはせてかへ

かへしいさめ奉る。かうのみみつけらるゝを。ねたしとおぼせど。かのなでしこは。えたづねしらぬを。おもきこうに御心のうちにおぼしいづ。おの〳〵ちぎれるかたにも。あまへてえゆきわかれ給はず。ひとつ車にのりて。月のをかしきほどに雲がくれたる道のほど。笛ふきあはせておほい殿におはしぬ。さきなどもおはせ給はず。しのびて入て。人見ぬらうに御なほしどもめしてきかへ給ひ。つれなう今くるやうにて。御ふえども吹すさびておはすれば。おとゞれいのきゝすぐし給はで。こまぶえとり出給へり。いと上ずにおはすれば。いとおもしろうふき給ふ。御ことめして。うちにもこのかたに心得たる人々にひかせ給ふ。中務の君わざとびははひけど。（甲）頭の君心かけたるをもてはなれて。たゞこのたまさかなる御けしきの。なつかしきをば。えそむき聞えぬに。おのづからかくれなくて。大宮などもよろしからずおぼしなりたれば。（乙）物おもはしくはしたなきこゝちして。すさまじげによりふしたり。たえ

り給へる餘波にこの一段をとり出たるなりその中に中務の君の事を挿みたるは後の卷の伏線としたるにてさらにめでたし
御ことめして　（釋）このことは琵琶箏琴にかぎらずすべての彈（ヒキ）物の事をさしてことゝいへる也
うちにも此かたに　〔岷〕この内にもは葵上のおはする方也このかたは樂のかたに心得たるなり　〔細〕中務君は葵上に祗候の人也
わざとびはゝひけど　〔玉〕拾遺に琵琶をひくをわざとする也といへるは言の本はさる意なれども用る意はいさゝか異なり俗言にびはをばもつ
はら精をだしてつれにひけどもといふやうの意也
頭の君心かけたるを云々　〔細〕中務に頭君の心かけたるをもてはなれて源へしたがひ奉るを葵上の母大宮の聞給ひてこの比御けしきよろしか
らぬ也わざとびはゝひけどかやうの心ばへ有てひかぬよし也たまさかなるは源の事なり　（釋）すさましげにてとはかく人々の管絃する中に
中務のみ不用なる也よりふしは物によりてふしめに成たる也
たえて見奉らぬ所に　（釋）これより中務君の心をとく也こゝをさりて源氏君を見奉らぬ所にかけはなれゆかんともおもへどそれもさすがに心
ぼそくて猶こゝに在て思ひ亂れたりと也
ありつるきんのねを　（釋）こゝの琴の音につけてかしこのきんのねを思ひ出給ふ也ありつるとは末摘花の方にて有つる也
あらましごとに　（釋）此語は句をへだてゝ下の思ひけりといふへかゝる脉也點のごとく心得べしさてあらましごとゝは末の事を前つかたより
あらかしめ思ひはかるをいふ詞也俗にいふとはいたく異也
いとをかしうらうたき人の　（釋）もしうつくしき人の末摘花のごときすまひに在て年月をかされたらんをあひ見そめていみじく心にいりたら
ば世のそしりにもあふほどにあるべしなど頭中將はわれながら思ひ給ふといふ意也心ぐるしくはこゝは人のいたはしげなるを見て憐（アハレ）のふか
くかゝる意につかひたる也
まさにさては　〔玉〕すべてまさにといふ詞のつかひざま物語なるは皆かやう也漢文に豈（アニ）といふがごとし
あやふがりけり　（釋）先（ツ）源氏君に得られんかと危く思ふよし也
さやうなるすまひする人は云々　〔岷〕これより源も頭中將もあまり物思ひしらぬ末摘の心かなといづれも思ひ給ふ也中將はまいて心いられし
けりとは其中に中將は猶いら〱しく思ひ給ふ也云々
（釋）こゝの語脉點のごとしかくかすかなるすまひするわび人ははかなきをり〱の木草の花又は空のけしきなどによそへても物のあはれを
思ひしりたるさまをとりなしなどしてそのこゝろざしの程よりも推量られたるこそ哀ならめとなりとりなしは歌などにとりなしてよむ事な
るべし
おもしとても　〔湖〕其身いかにおも〱しきとてもあまり埋れて返事をもせぬやうなるはあしきと思ふと也是も末摘を心ふかき上臈と心にく

く思ふから思へる心也
れいのへだて聞え給はぬ心にて
〔細〕源と頭中將との御あはひ也
〔玉補〕これは中將君のみへかけて
見るべし
しか〳〵の返事は　〔新〕かの哀げな
りし所よりの返事てふを云々と略
していひたる也
こゝろみにかすめたりしこそ
〔釋〕我は試にかすめいひたりしに
末摘花の返事なきははしたなくて
止たりととひかけ給ふ也うれふれ
ばとはわびて訴へいふ意也
いさ見んとしも思はねばにや云々
〔新〕いさはいなにて問にしからず
と答ふる語也さてもとより見ばや
ともおもほえぬ心故にやよし見し
とても見るとも覺えずと也恐らく
は見しならんと頭の思ふべく答へ
給へりされば源には返事せしよと
意得てねたむ也
人わきしけると　〔釋〕人わきとは俗
にワケヘダテといふがごとし人に
よりては返事をするならんとねた

て見たてまつらぬところに。かけはなれなんも。さすがに心ぼそくおもひみだれたり。君たちはありつるきんのねをおぼしいでゝ。あはれげなりつるすまひのさまなども。やうかへてをかしうおもひつゞけ。あらましごとにいとをかしうらうたき人の。さて年月をかさねゐたらん時。みそめていみじう心ぐるしくは。人にももてさわがるばかりや。わが心もさまあしからむなどさへ。中將はおもひけり。この君のかうけしきばみありき給ふを。まさにさてはすぐし給ひてんや。となまねたうあやふがりけり。その後こなたかなたより。ふみなどやり給ふべし。いづれも〳〵かへりこと見えず。おぼつかなく心やましきに。あまりうたてもあるかな。さやうなるすまひする人は。物思ひしりたるけしき。はかなき木草。空のけしきにつけても。とりなしなどして。心ばせおしはからるゝをり〳〵あらんこそ。あはれなるべけれ。おもしとても。いとかうあまりうもれたらんは。心づきなくわるびたり。と

く思ひ給ふ也

君はふかうしも云々　(釋)源氏君は初よりさまでふかくは思ひ給はぬ事なる上に末摘花のなさけなきを不興に思ひて止んと思ひ給ひしかど又頭中將のいひよりけるを聞給ひてさはあれどつひには詞多くいひなれたる中將のかたにしたがふべし其後に女がたのしたりがほにて始よりいひそめし我を思ひ放ちたらんけしきを見なば殘念なるべしとて命婦をかたらひ給ふ也。

思はぬことの　〔新〕此のは思はぬことなるがうへにと云ほどの語を略したる也云々。(釋)ながらといふに似たる意ののもし也

ことおほく云々　〔花〕ことばおほくれんじたるかたに本文れんずるに鍊ずる也鍊磨するなどいふ心也うちおかぬ心也

(釋)かやうの本もありしなるべしみじかき心は　〔箋〕源の人を中空になしたる事になきと也

人の心ののどやかなることなくて

中將はまいて心いられしけり。れいのへだて聞え給はぬこゝろにて。しかしかの返事は見給ふや。こゝろみにかすめたりしこそ。はしたなくてやみにしか。とうれふれば。さればよ。いひよりにけるをや。とほゝゑまれて。いさみんとしも思はねばにや。見るとしもなし。といらへ給ふを。人わきしける。とねたう思ふ。君はふかうしもおもはぬことの。かうなさけなきを。すさまじく思ひなり給ひにしかど。かうこの中將のいひありけるを。ことおほくいひなれたらむかたにぞなびかんかし。したりがほにて。もとのことを思ひはなちたらんけしきこそ。うれはしかるべけれ。とおぼして。命婦をまめやかにかたらひ給ふ。おぼつかなうもてはなれたる御けしきなん。いと心うき。すきずきしきかたに。うたがひよせ給ふにこそあらめ。さりともみじかき心はえつかはぬ物を。人の心ののどやかなることなくて。思はずにのみあるになん。おのづからわがあやまちにもなりぬべき。心のど

〔箋〕人の心みじかくて女のかたよりかはる人おほき也されば心ならず本意なうしなふ事あると也
〔新〕卷の初にことく〵しきおぼえはなくていとらうたげならん人のつゝましきことなき見つけてしがなとある意より出たり
〔釋〕人の心とは女の心也女の心ゆるやかならずして案外になる事もあるを聞て世には我あやまちのごとくいふもあるべしとの意也
心のどかにて云々　〔釋〕父母兄弟の娘をもてあつかひてとだえを恨みなどする人もなくたゞひとり心やすくて有人は却てらうたかるべしと也
御かさやどりには　〔河〕いもが門せながか門ゆきすぎかねてやわがゆかばひぢがさのひぢがさのあめもやふらなんしでたをさあまやどりかさやどりやどりてまからんしでたをさ催馬樂妹之門
〔湖〕源の好み給ふ風流なるかたの立より所にはあるまじく只物づゝ

かにて。おやはらからのもてあつかひうらむるもなう。心やすからん人は。なか〳〵なんらうたかるべき。とのたまへば。いでやさやうにをかしきかたの御「かさやどりには。えしもや。とつきなげにこそみえ侍れ。ひとへに物づゝみし。ひきいりたるかたはしも。ありがたうものし給ふ人になん。とみるありさまかたり聞ゆ。らう〳〵しうかどめきたる心はなきなめり。いとこめかしうおほどかならんこそ。らうたくはあるべけれ。とおぼしわすれずの給ふ◎わらはやみにわづらひ給ひ。人しれぬ物思ひのまぎれも。御心のいとまなきやうにて。春夏すぎぬ◎秋のころほひしづかにおぼしつゞけて。かのきぬたのおとも。みゝにつきてきゝにくかりしさへ。戀しうおぼし出らるるまゝに。ひたちの宮にはしば〳〵聞え給へど。猶おぼつかなうのみあれば。よづかず心やましう。まけてはやまじの御心さへそひて。命婦をせめ給ふ。いかなるやうぞ。いとかゝる事こそまだしらね。といとものしとおもひての

給へば。いとほしと思ひて。もてはなれてにげなき御事とも。おもむけ侍らず。たゞおほかたの御物づゝみのわりなきに。てをえさしいで給はぬとなんみ給ふるゝと聞ゆれば。それこそはよづかぬ事なれ。物思ひしるまじきほど。ひとり身をえ心にまかせぬほどこそ。さやうにかゞやかしきもことわりなれ。何事も思ひしづまり給へらんと思ふにこそ。そこはかとなく。つれ〴〵に心ぼそうのみおぼゆるを。おなじこゝろにいらへ給はんは。ねがひかなふ心ちなんすべき。なにやかやとよづけるすぢならで。そのあれたるすのこに。たゝずまゝほしきなり。いとおほつかなうこゝろえぬこゝちするを。かの御ゆるしなくとも。たばかれかし。心いられしうたてあるもてなしには。よもあらじ。などかたらひ給ふ。◎なほ世にある人のありさまを。おほかたなるやうにてきゝあつめ。みゝとゞめ給ふくせのつきたまへるを。さう〴〵しきよひゐなどに。はかなきついでに。さる人こそとばかり聞えいでたりしに。

みし給ふかたの好みにはあひかなひ給はんと申す也

(釋)催馬楽の詞なやがて宮より給ふべき所にとりなしていへり

おぼしわすれずの給ふ

(玉補)夕顔上といふ詞もなくてゆくりなきやうなれど始の書出しに聴じたる詞也下のかのきぬたの音もおなじ

わらはやみに 【河】若紫巻始同時也横の并こゝに見えたり

(評)若紫の始と同時なるはいふもさら也こゝを引合せてかの巻の脉を續ぎまた筆を省きて春夏過ぬといひつひに秋にいたりて砧の音より夕顔巻の脉を引いでゝかの大どかにらうたきなごりをおぼしいでて末摘花をとひ給ふ本を書出られたるたゞみいでしらずめでたし作りぬしの心のはたらきによく〳〵心をとゞめて見るべし

人しれぬ物思ひ 【花】藤つぼの事也

かのきぬたの音も (釋)上におぼし忘ずの給ふをあけり〳〵餘韻なつぎて

夕顔のうへに及びつひにひたちの宮を思ひ出給へるくさはひとしたるなり

よづかず　〔雅譯〕男女かたらひよれども未(タ)事のならざるをよづかずといふ也　〔釋〕此注こゝろし舊注はみなひがことなり

もてはなれて云々　〔釋〕末摘花のかけはなれて似合しからぬ事とも思ひ給はず大かたの物づゝみの故に返事もし給はぬなるべしといふ意也但しおもむけ侍らずといふ詞いさゝかいかゞこれは末摘花のおもむけ給はぬ意と聞ゆれば侍らずとては打合ぬがごとし寫誤にや

てをさしいで給はぬとなん　〔釋〕手を出さぬとは何事も引こめて事をはじめぬをいふ詞にて俗もおなじ

よづかぬ　〔釋〕こゝは男女の事になれぬをよづかぬといへる也世は男女の交のこと也

物思ひしるまじきほど　〔釋〕世中のありさまをも思ひしらぬうち又親兄弟ありて我身を我心にもえまかせぬ時などこそさやうに物はぢし給ふもことわりなれ末摘花は年もやゝたけて何事も靜に思ひしり給はんと思ふにこそあれと也此あたり舊注ひがこと多し

そこはかとなく　〔釋〕これは源氏君のつれ〲におぼすよし也同じ心にとあるにてしるべし

なにやかやと云々　〔湖師〕世にある好色のやうに文をやり又媒をたのみて忍びよりなどやうなる事にはあらでかりそめのやうにしていひよりたきと也　〔釋〕よづけるすぢとは好色のすぢといふ意也好色のかたのすぢはなくてたゞかの簀子(スノコ)にたちて物がたりせまほしと也

いとおほつかなう云々　〔釋〕末摘花のあまり引入給へるがおほつかなう心得がたき也

かの御ゆるしなくとも　〔釋〕とにかくに逢給ふまじければ末摘花のゆるしなくともたゞばかりに我をゐてゆけとの給ふ也

心いられしうたてある云々　〔岷〕聊爾などは有まじきと也

大かたなるやうにて　〔新〕物かたらふを聞給ふ樣は凡(オヨソ)に聞しめすことゝかたる人は思ひて申すを御心の中にはふかく耳とゞめ給ふ御くせの有といふ也かく先かけるは末摘の事などつれ〲の御なぐさみにのみ少しいひ出たるを今かくせめ給ふが苦しきよしいはん料也おほかたに聞あつめて過し給ふべく覺えけるが思ひ違へなりといはんとて也　〔釋〕くせのつき給へるとは初はさはなかりしが此頃つき給へる也かの雨夜の品定などよりといふ意を含めたるなるべし

よびゐなどに　〔湖師〕前に物のついでにかたり聞えければといへる首尾なり

姬君の御ありさまも　〔岷〕末摘の樣體などのすぐれぬとは命婦が時々のおしはかりにも思ふ也

なか〲なるみちびきに　〔釋〕なまじひに媒(ナカダチ)してもし源氏君の御心にかなはずは末摘花のためにいとほしき事や見えこんなど命婦思ふ也

きゝいれざらんも　〔釋〕中立の事を聞入ざらんも偏屈なるべしと也

ふりにたるあたりとて　〔釋〕當世風によしめかぬ家風也といふ意なり

あさぢわくる人も　〔釋〕淺茅(アサヂ)は荒たる庭におふる物なれば形容にいへりあととは足跡(アト)也

なま女ばうなども（釋）よき女房もめしつかひ給はぬ故になま女ばうといへりゑみまけては事のいでこぬさきより笑てまつ意也笑片設てなど古言にもいへり

見もいれ給はぬなりけり（釋）上になほ世にある人のありさまた云々といふよりこゝまでは命婦が媒なうけがへる心と末摘花の返事し給はぬ故とな草子地に說あらはしたる文の法也

命婦はさらば云々（釋）こゝより命婦がうけひきてたばかる故ないへりもしたばかりて物ごしにも〇などいひ給はん時末摘花の源氏の御心にかなはずはさてもやみ給ふべし又さるべき宿緣ありてかりそめにかよひ給はんたとがむべき親族たちもなしとあだなる心に思ひとりてわが父の兵部大輔にもかたらはでたゞひとり事をとる也餘滴にこれな命婦が調也といへるはひがこと也

八月廿よ日云々（評）例のけしきい

かくわざとがましうの給ひわたれば。なまわづらはしく。ひめ君の御ありさまも。につかはしくよしめきなどもあらぬを。中々なるみちびきに。いとほしきことや見えんなどおもひけれど。君のかうまめやかにの給ふに。きゝいれざらんもひがひがしかるべし。ちゝみこおはしけるをりにだに。ふりにたるあたりとて。おとなひ聞ゆる人もなかりけるを。ましていまはあさぢわくる人も。あとたえたるに。かくよにめづらしき御けはひのもりにほひくるを。なま女ばうなどもゑみまけて。なほ聞え給へ。とそゝのかし奉れど。あさましう物づゝみし給ふ心にて。ひたふるに見もいれ給はぬなりけり◎命婦はさらばさりぬべからんをりに。ものごしに聞え給はんほど。御心につかずは。さてもやみねかし。またさるべきにて。かりにもおはしかよはんを。とがめ給ふべき人もなしなど。あだめきたるはやりごゝろは。うち思ひて。ちゝぎみにも。かゝる事なども いはざりけり◎八月廿よ日。よひすぐるま

とめでたしかゝるけしきに催されて末摘花のむかしよかりしなりの事などいひ出て打なき給ふことげにさも有べし命婦これをよき時として源氏君に消息しておはしぬるほどに月やう／＼いで末摘花そゝのかされて琴を引給ふなど事のついで露もみだれず心をつけてあぢはふべし

いとよきをりかなと　(評)わびしきなかこち給ふにつけて男君まうけ給はん御心も動くべしと命婦が思ひはかりたるさまにかけるなるべし

今めきたるけを　(孟)當世の風になし奉りたきと也

人めしなき所なれば　(釋)人目なくとがむる人もなき所なれば心やすく入給ふ也人めしのしは助辭

今しもおどろきがほに　(箋)源の御出を申合せざる體にする也　(新)今はじめて知ておどろきたる樣にて末摘にいふ也

しか／＼こそ　(釋)源氏君のおはし

でまたるゝ月の。心もとなきに。ほしの光ばかりさやけく。松の木ずゑふく風のおと心ぼそくて。いにしへの事かたり出て。うちなきなどし給ふ。いとよきをりかなと思ひて。御せうそこや聞えつらん。れいのいとしのびておはしたり。月やう／＼いでゝ。あれたるまがきのほど。うとましく打ながめ給ふに。きんそゝのかされて。ほのかにかきならし給ふほど。けしうはあらず。すこしいまめきたるをけをつけばやとぞ。みだれたる心には心もとなくおもひゐたる。人めしなき所なれば。心やすくいり給ふ。命婦をよばせ給ふ。いましもおどろきがほに。いとかたはらいたきわざかな。しか／＼こそおはしましたなれ。つねにかううらみ聞え給ふを。心にかなはぬよしをのみ。聞えすまひ侍れば。みづからことわりも聞えしらせんとのたまひわたるなり。いかゞ聞えかへさん。なみ／＼のたはやすき御ふるまひならねば。心ぐるしきを。ものごしにて。聞え給はんこときこしめせ。といへば。いとはづか

たる事をいひまぎらはしてしらする詞也あぢはひあり

うらみ聞え給ふを　〔湖〕命婦がなかだちのよろしからぬと源の恨み給ふをと也

心にかなはぬよしをのみ　〔湖〕末摘の同心なきは命婦が心にもかなひがたきと源へ申つるとなり　〔釋〕案に御心にかなはぬとありしを御の字を寫し脱せしにやただ末摘の心にかなはぬことゝ聞ゆるをやすまひはまけじとあらそふ意也すさびとある本は聞えがたし

みづからことわりも　〔釋〕源氏君みづから物のことわりも末摘花にいひしらせんとのたまふと也

たはやすき御ふるまひならねば　〔釋〕一とほりのたやすき好色にはあらでしば〳〵ねんごろにのたまひておはしたるなればたゞにかへし參らせんはきのどく也といふ意也御ふるまひとあるを源氏君の尊き事也と思へる説はわろし

しと思ひて。人に物聞えんやうもしらぬをとて。おくざまへゐざり入給ふさま。いとうひ〳〵しげなり。うちわらひて。いとわか〳〵しうおはしますこそ。心ぐるしけれ。かぎりなき人も。おやのあつかひうしろみ聞え給ふ程こそ。わかび給ふもことわりなれ。かばかり心ぼそき御有さまに。なほ世をつきせずおぼしはゞかるはつきなうこそ。とをしへ聞ゆ。さすがに人のいふことは。つようもいなびぬ御心にて。いらへ聞えでたゞきけとあらば。かうしなどさしては有なん。との給ふ。すのこなどはびんなう侍りなん。おしたちてあわ〳〵しき御ふるまひなどは。よも。などいとよくいひなして。ふたまのきはなるさうじ。てづからいとつよくさして。御しとね打おき引つくらふ。いとつゝましげにおぼしたれど。かやうの人にものいふらむ心ばへなども。夢にもしり給はざりければ。命婦のかういふを。あるやうこそは。と思ひて物し給ふ。めのとだつおい人などは。ざうしにいりふして。夕まどひした

かばかり心ぼそき御有さまに　〔新〕かゝる御さまにおはしましてはひたすらにつきせずはゞかり給ひてのみあらんはひがみ過てつきなしさるべき人にはなれ給ふぞよきと也

さすがに人のいふことは　〔釋〕人のいふ事をばつよくもあらそひもどかぬ末摘の御心にて也

いらへ聞えで　〔細〕返答などはなくてたゞきけとならばともかくもとなり　〔釋〕格子などさしては格子を鎖してそれをへだてゝ聞べしとなり

すのこなどは　〔新〕格子さしては源をすのこにすゑまゐらする外なければかくいふ

おしたちて　〔釋〕おしつけに聊爾などし給ふ事はよもあらじといひなすなり

二間のきはなるさうじ

〔細〕本尊など安置する所なるべし　弄孟同　〔釋〕一翁云ふたまはよろしききはの家には必しつらふ事に

るほどなり。わかき人二三人あるは。よにめでられ給ふ御ありさまを。ゆかしきものに思ひ聞えて。心げさうしあへり。よろしき御ぞ奉りかへつくろひ聞ゆれば。さうじみはなにの心げさうもなくておはす。をとこはいとつきせぬ御さまを。打しのびようい し給へる御けはひ。いみじうなまめきて。見しらむ人にこそみせめ。なにのはえあるまじきわたりを。あないとほし。と命婦は思へど。たゞおほどかにものし給ふをぞ。うしろやすう。さしすぎたる事は見え奉り給はじと思ひける。わがつねにせめられ奉るつみさりごとに。こゝろぐるしき人の。御ものおもひやいでこんなど。やすからず思ひゐたり。君は人の御ほどをおぼせば。ざれくつがへる。今やうのよしばみよりは。こよなうおくゆかしとおぼしわたるに。とかうそゝのかされて。ゐざりより給へるけはひ。忍びやかに。えひのかいとなつかしうかをりいでゝ。おほどかなるを。さればよ。とおぼさる。としごろ思ひわたるさまなど。いとよく

て宅神を祭り佛像をもかけ或は貴人をも請ずる爲の間にて別に清まはりて物するなるべしこゝは廂の中にて二間とりたるその内に末摘をおき源を廂にすゑたる也きはなるとは隔の中の障子の事なり云々

摘要

てづからいとつよくさして

（釋）命婦みづから立て障子をつよくさすなり末摘花に安心させ奉らんためなるべし末摘のてづからと見たる注はわろし

あるやうこそはと　〔岷〕末摘の心何のわきまへもなきなるべし

夕まどひ　（釋）よひよりねふりたるをいふなるべし新釋にゆふまどろみの略とあるはいかゞあらんされど意はたがはず。

聞ゆれば　（釋）ばはどの誤か。

つきせぬ御さまを　〔岷〕つきせぬとはかぎりもなく風流なるさま也

ようい（し）給へる　（釋）あしくは見えじとひそかに心づかひし給ふけはひなり

のたまひつゞくれど。ましてちかき御いらへはたえてなし。わりなのわざや。と打なげき給ふ。

いくそたび君がしゞまにまけぬらん物ないひそといはぬたのみに。の給ひもすてゝよかし。玉だすきくるし。とのたまふ。女君の御めのとご。じゞうとて。いとはやりかなるわか人。いと心もとなうかたはらいたし。と思ひてさしよりて聞ゆ。

かねつきてとぢめんことはさすがにてこたへまうきぞかつはあやなき。

いとわかびたるこゑの。ことにおもりかならぬを。人づてにはあらぬやうに聞えなせば。ほどよりはあまへて。ときゝ給へど。めづらしきになか〳〵くちふたがるわざかな。

いはぬをもいふにまさるとしりながらおしこめたるはくるしかりけり。なにやかやとはかなき事なれど、をかしきさまにもまめやかにもの給へど。な

見しらん人にこそ　〔孟〕源の御姿の物を見知たる人にみせたきと也
なにのはえあるまじき　〔湖〕末摘を思ひくたす命婦が心なりはえは光也
たゞおほどかに　〔釋〕末摘の事也
せめられ來るゝみさりことに　〔釋〕命婦が源氏君に媒の事を催促せらるゝ迷惑さにかくはせし物から源氏の御心とまり給はで末摘花の御物思ひやいでこんなど不安心に思ひなる也ゝみさり事は罪をさけん料にといふ意を體言にしたる詞也責られといひ罪といふを實の罪科のごとくとかれたる舊注はひがこと也
たびのゝ　〔新〕和名抄云文字集略云褁衣香褁於業反俗云衣比かく有からはえいといふべきを俗にえひといふのみさてこは焼物にあらずかけ香なること類聚雜要にくはしく見ゆこゝの樣にもかなへり下の繪合梅枝初音の卷にことにつけ其よしをあかすを見るべし云々
さればよと　〔釋〕さればよ思ひしごとく也とおぼす也
まして　〔釋〕遠かりしほどだに御いらへなかりしにちかくてはましてと也此詞おちはひ有
いくそたび云々　〔花〕童部の諺に無言を行ぜんと約束して無言〳〵とうしまにかれゝくといひて何にても打ならして後物いはぬ事をする也しまといふはしゝま也云々　〔釋〕この花鳥の御釋にて明らか也まけぬらんとあるも童の無言行をしてはやく物いひたるを負と定むるわざくれよりいへるなるべしさて歌の心は今まで幾十度君が無言行に負ぬらん我に物ないひそとの給はぬによりそれをたのみにして又しては物いひて負るよと戯れたる也
のたまひもすてゝよ　〔孟〕物ないひそとあるかための詞をせめていひ給へかしと也
玉だすきくるし　〔河〕「思はずは思はずとやはいひはてぬなどよの中の玉だすきなる　〔餘〕古今俳諧初句ことならば　〔釋〕引歌の詞のごとく思はずともいひはて給はでいたづらにかなたこなたへかけて置給ふはくるしといふ意也諸注此說あらくして聞とりがたし
御めのとごじゝう　〔玉〕御めのとの子の侍從也小侍從にはあらず蓬生卷に侍從などいひし御めのとごのみこそとあるにてもしるべし又わかうどゝあるにても乳母にはあらざることしるし
さしよりて　〔釋〕末摘のよみ給へるやうにせんとて傍へさしよりてよみいでし也
かれつきて云々　〔釋〕かの童の戯にするごとく磬をつきて結めて物いはせぬやうにせんことはさすがにいとほしくて思はずといひもはてずこたへうきもげに且はわけもなきことよといふ意也とぢめんとは結局の意にてそれをかぎりにする事をいふ口をとぢむるといふ說はいみじきひがことなり又花鳥に八講の論義の事といはれたれどこゝはたゞ童の戯の方のみにつきていへる也童の戯はもとかの八講論義のわざなどより起りたるにはあるべけれどこゝの注にはあづからぬこと也すべて此歌の注諸抄いづれも說得られたるはなしさすがにての注は湖月の師說

よろし

人づてにはあらぬやうに（釋）人傳にはあらで末摘のよみ給へるやうにいひなすを聞給ひて末摘花の分際よりはあまへたるやうに聞給ふ也はやりかなるわかうどゝいひいとわかびたる聲といへる脉にておも／＼しからぬさま思ふべし

めづらしきに（釋）はじめて聲を聞せ給ふが珍らしき也

中々くちふたがるわざかな（釋）こゝより源氏君の詞也さすがいとほしくてこたへまうきとあるをうけてしかいはれては却てこなたに閉口するわざかなといふ意也くちふたがるは閉口といふに同じこゝの注も諸抄説得られずめづらしきに中々云々とつゞけて見たるはいよ／＼わろし末のかなといふ詞にて源氏君の詞とはしるきものをや

いはぬをも云々〔花〕六帖「心にはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる〔玉補〕喑啞（オフシ）をばその比すでにおしといひていひかけたるか（釋）四の句補遺のごとくなるべしはかなき事なれどをかしきさまにもとあるすべて戯になるをあかしたる語なれば喑啞（オフシ）をかけていへりとはしらるゝ也上の口ふたがるもやゝ戯れ也さて一首の意は物いはぬもいふにまさるとも思へどとにかくに喑啞のごとくおしこめて返答なきはくるしと也

なにのかひなし（釋）返答し給はねばしか心を盡してのたまふも何のかひもなしとの意也

いとかゝるもさまかへて（釋）かやうに返答し給はぬも人なみよりは風がはりにて別にさるべき分別のある人にやと思ひ給ふ也ねたくてはまけて止んが殘念におぼすよし也故におしたちて入給ふ也傳注ひがこと也

おしあけて（釋）上に命婦が障子をつよくさしたる事有いかにしてあけ給ひにけんされど其世にはその樣もしられたりしことなるべし

たゆめ給へると〔河〕油斷をさせたる心也（釋）撓（タユ）ませをつゞめてたゆめといへる也

わが方へ〔箋〕つぼねなるべし上の詞に源を打とけたるすみかにすゑ奉りてと申たる所也こゝにて局の義見えたり

このわかうどゞも（釋）このはかのといふがごとし侍從など二三人の女房をさしていへり

おとぎゝ（釋）光る源氏などひとに聞えたる事を體言にしたる語也そのおとぎゝにさしてあしき事とも思はずしてしひて入給ふをもえとがめぬとの意なり

思ひもよらずにはかにて（釋）餘りに俄に入給ふ故に末摘の何の用意もなきを笑止におもふと也

我にもあらず（釋）我身ながら我身のやうにも思はれぬ意にてあきれたるさま也

今はかゝるぞ（釋）今はまだかくつゝましげなるが却てあはれなりとの意也

心えずなまいとほしと〔湖〕くらければよくも見給はねども何とやらん形あしげなる心也（釋）なまいとほしとは形のわろきを見あらはさば

にのかひなし。いとかゝるもさまかへて。おもふかたことにものし給ふ人にや。とねたくて。やをらおしあけていり給ひにけり。命婦あなうたて。たゆめ給へる。といとほしければ。しらずがほにてわがかたへいにけり。このわか人どもはた。世にたぐひなき御ありさまのおとぎゝに。つみゆるし聞えて。おどろ〳〵しうもなげかれず。たゞ思ひもよらずにはかにて。さる御こゝろもなきをぞ思ひける。さうじみはたゞわれにもあらず。はづかしくつゝましきよりほかの事又なければ。いまはかゝるぞあはれなるかし。まだよなれぬ人の。うちかしづかれたると見ゆるし給ふものから。心えずなまいとほしとおぼゆる御さまなり。何事につけてかは御心のとまらん。打うめかれてよふかういで給ひぬ。命婦はいかならん。とめさめてきゝふせりけれど。しりがほならじとて。御おくりにともこわづくらず。君もやをらしのびて出給ひにけり。二條院におはして。うちふし給ひて。なほ思ふにかなひがたき世

末摘のためいたはしといふ意也よく見きはめぬ故になまとはいへるなり

何事につけてかは　（釋）かたちもあしげなるになつかしくも打とけ給はず何事につけてかは御こゝろのとまるべきと也

打うめかれて　（釋）不興を歎息するなりなげくといふとはいさゝか異なり

命婦は云々　（釋）いかゞと思ふにつけてめをさましつゝ歸り給ふをも聞て臥ゐたれどわざと知たるかほなせじとて御送になども申さぬなり

なほ思ふにかなひがたき　［細］かやうの古宮に自然しかるべき人をみつけばやと思ひ給ひしにさもなきを觀じ給ふ也されども人によることなれば末まで思ひすて給ふまじきと也是源の性也

かろらかならぬ人の御ほどな　（釋）かろきしなの人ならばかくながら止給ふともさて有べきを宮の

御むすめばかりの人なればさやうにはなるまじきを心ぐるしく思ひ給ふよし也

ゆゑあらんかし（釋）よべ御忍びありきなどありしにこそと咎めたる意也

心やすき［岷］ひとりねなれば心安く油斷して寢過したりと陳じ給ふ也ゆるびは緩の字也

うちよりか［岷］内裏よりの退出かととひ給ふ也

しかまかで侍るまゝ也云々

［新］ふと見れば今退出て大殿へつげてほどなく立かへりて内へ参らんといふやうに思はるゝた次に同車にておはせしは即内へ参り給ひし也然らばしかまかで侍まゝ也とは既に如是まかでゝ侍るまゝにていまだ内へ参らずといふ也まゝといふに心すべしさて既に大殿にも告たれば君へも告んとて立よれる物也且やがては即也今は内へかへり参るべきに侍りと也

朱雀院の行幸［花］若紫と同時横の

にこそ。とおぼしつゞけて。かるらかならぬ人の御ほどを。心ぐるしとぞおぼしける◎思ひみだれておはするに。頭中將きて。こよなき御あさいかな。故あらんかしとこそ思ひ給へらるれといへば。おきあがり給ひて。心やすきひとりねのとこにて。ゆるびにけりや。うちよりか。との給へば。しか。まかで侍るまゝなり。朱雀院の行幸。けふなんがく人まひ人さだめらるべきよし。よべうけ給はりしを。おとゞにもつたへ申さんとてなんまかで侍る。やがてかへり参りぬべう侍り。といそがしげなれば。さらばもろともにとて。御かゆこはいひめして。まらうどにもまゐり給ひて。ひきつゞけたれど。ひとつにたてまつりて。猶いとねたげなり。とがめいでつゝ。かくい給ふ事おほかりとぞうらみ聞え給ふ。事どもおほくさだめらるゝ日にて。うちにさぶらひくらし給ひつ◎かしこにはふみをだに。といとほしくおぼしいでゝ。夕つかたぞありける。雨ふりいでゝ所せくもあるに。かさやどりせんとはた。

茁なり

(評)紅葉賀の行幸の事也若紫に舞人などえらせ給ふこと見えてこゝに又其人を定めらるゝ事見えやうやうにその御いとなみのしげき事をいひてつひに紅葉賀にいたる照應の脉ふかく心をとゞめて見るべし是卷々の命脉をつなぐ法にていともいみじき筆なり

御かゆこはいひ　〔拾〕和名抄云史記廉頗強飯斗酒食肉十斤飯音符萬反亦作餅餌強飯和名古八伊比

(釋)粥と強飯とを召よせていづれにても隨意にたうべ給ふなるべし

餘滴にかゆこはいひとつゞけよみて一物としかたかゆのこと也といへるはわろしさる名あるべしやは

ひきつゞけたれど　(釋)源氏君の御車と頭中將の車と次々に引つゞけたれどいづれへか相乘してひとつは空車にて參內し給ふ也道すがら物語し給はんため也

猶いとれふたげ也と

おぼされずやありけん。かしこにはまつほどすぎて。命婦もいといとほしき御さまかな。と心うくおもひけり。さうじみは御心のうちに。はづかしう思ひつゞけ給ひて。けさの御ふみのくれぬるも。とかうしもなか〳〵思ひわき給はざりけり。

夕ぎりのはるゝけしきもまだ見ぬにいふせさそふるよひの雨かな。雲まゝちいでんほど。いかに心もとなうとあり。おはしますまじき御けしきを。人々むねつぶれて思へど。なほ聞えさせ給へ。とそゝのかしあへれど。いとど思ひみだれ給へるほどにて。えかたのやうにもつゞけ給はねば。夜ふけぬとて。侍従ぞれいのをしへ聞ゆる。

はれぬ夜の月まつさとをおもひやれおなじこゝろにながめせずとも。くちぐちにせめられて。むらさきのかみの。としへにければはひおくれ。ふるめいたるに。御てはさすがにもじづよう。なかさだのすぢにて。かみしもひと

〔釋〕これすなはち車中にての物語にの給ふ也我に隠し給ふこと多しと痛心し給ふを恨み給ふ也

事どもおほく　〔孟〕舞樂の事定めらるゝ也

かしこには　〔湖〕尋常なれば三日の間かよふなれば今宵も末の方へかよひ給ふ筈なれど禁中におはせばかよひ給はぬをせめて文をだにとて夕ぐれにつかはさるゝ也

所せくもあるに　〔玉〕禁中よりかへり給ふ道も雨ふりてうるさく所せくもあるに末摘花の御方に立よりて屋どり給はんによき所なるにさもおぼさぬにやといふなり　〔細〕前にいでやさやうにをかしきかたの御かさやどりにはえしもやと有し詞をうけて也

まつほど過て　〔釋〕ふみは後朝につかはすことなるをさもなかりし故にまつほど過てといへり源の御出なまつといふ説はひがこと也

けさの御文の　〔細〕後朝のふみの遅くあるをも何ともおもひ給はぬと

しくかい給へり。みるかひなう打おき給ふ。いかに思ふらん。と思ひやるもやすからず。かゝることを。くやしなどはいふにやあらん。さりとていかゞはせん。我（は）さりとも心ながう見はてゝむ。とおぼしなす御心をしらねば。かしこにはいみじうぞなげい給ひける◎おとゞよにいりてまかで給ふに。ひかれ奉りて。おほい殿におはしましぬ。行幸のことをけうありとおもほして。君たちあつまりての給ひ。おの〳〵まひどもならひ給ふを。そのころの事にてすぎゆく。物のねども。つねよりもみゝかしがましくて。かた〴〵いどみつゝ。れいの御あそびならず。大ひちりきさくはちのふえなどの。おほごゑを吹あげつゝ。たいこをさへ。こうらんのもとにまろばしよせて。てづからうちならし。あそびおはさうず。御いとまなきやうにて。せちにおぼす所ばかりにこそ。ぬすまはれ給へ。かのわたりには。いとおぼつかなくて。秋くれはてぬ。なほたのみこしかひなくてすぎゆく◎行幸ちかくなりて。しがく

なり

夕ざりの云々　〔箋〕上の句は末摘君のへだてたいふかゝるうへに雨のさはりさへあるといふなり　〔新〕いふせさそふるは霧の上に雨さへふりていよ／＼晴間も見えず心ぐるしさも添ると也萬葉に鬱悒をおほつかなしともいふせしともよみたればこゝに二つをかれてよめるもしかり

且夕べは晩の意よひは初夜の意によめり

雲まちいでんほど　〔花〕雨はれば出給はんとなり　〔岷〕引歌あるべしたづぬべし

いかに心もとなう　〔餘〕雨のはれゆくほどをまつが心せくといへる也末摘の事をいへるにはあらず源のみづからをのたまへるなり

えかたのやうにも　〔玉〕拾遺にえの字は引くだしてえつゝけ給はればと見るべしといへるがごとしかたのやうはかたのごとくといふに同じ舊注ひがことなり

はれぬよの云々　〔拾〕後撰信明朝臣「こひしさは同じ心にあらずともこよひの月を君見ざらめや　〔釋〕月をまつは待遠なるにましてはれぬ夜の月まつ我さとを思ひやり給へたとひ我と同じ心に空をながめて物は思ひ給はずともといふ意也月まつ里は源氏君をまつ末摘の方をいひ同じ心は相思ふことをながめは物思ふことにて長雨（ナガメ）をかけたる例の詞なり諸抄の説いとたど／＼しく聞えがたし

くち／＼にせめられて云々　〔釋〕女房どもの口々にすゝむる也　〔細〕はひおくれは紫の色のかへりたる也紫には灰をさせば色よくなる也

〔新〕萬葉に紫は灰さすものぞ海石榴市（ツバイチ）のとつゝけたれば椿の灰さす也　〔箋〕常陸宮の世ざかりの時代の紙なるべし

中さだのすぢ　〔拾〕上にいふごとくさだはころ也　〔釋〕中ぐらゐの手すぢといふこと也書の品（クダリ）を論ずれば中の品にさだまるほどの手ゆゑにさだとはいへる也舊注みなよしなしもじづようは筆畫のしたゝかにふときなり上下ひとしくは行をそろへかきて風韻のなき也皆古代めきて今やうならぬさまをいへる也

くやしなどは　〔湖〕かやうの事源のならひ給はぬ故かく思ひ給ふ也　〔釋〕初て悔しといふことを知給ひしやうにかゝれたり

我さりとも云々　〔釋〕我の下はもじ有べき所なればかりに補ひつわがとある本は下の詞へつゞきがたし源氏君はかはらず見はてんとおぼす也なさけあるさまなり

御心をしられば　〔細〕源のすて給ふまじき御心をしられはなげき給ふ也

ひかれ奉りて　〔釋〕此奉りてといふ詞穏ならねど大臣の權威いみじかりし世にはかくもいひしにこそ　〔箋〕源の思はず大殿へおはします也心ならぬ體也

行幸のことを興ありと　〔釋〕行幸の時の舞樂の事を興ありとおもほす也あつまりての給ひはその噂をし給ふ也

その比の事にて　〔岷〕舞ならひなどし給ふ事をその比のことわざにてと也

などのゝしるこゑぞ。命婦はまゐれる。いかにぞなどとひ給ひて。いとほし
とはおぼしたり。有さま聞えて。いとかうもてはなれたる御心ばへは。見給
ふる人さへ心ぐるしくなど。なきぬばかり思へり。心にくゝもてなしてやみ
なん。とおもへりしことをくたいてける。心もなくこの人の思ふらんをさへ
おぼす。さうじみのものもいはで。おぼしうづもれ給ふらんさま。思ひやり
給ふもいとほしければ。いとまなきほどぞや。わりなし。と打なげい給ひて。
物おもひしらぬやうなる心ざまを。しばしこらさんと思ふぞかし。とほゝゑみ
給へる。わかううつくしげなれば。我もうちゑまるゝ心ちして。わりなの人
にうらみられ給ふ御よはひや。思ひやりすくなう。御心のまゝならんも
ことわりとおもふ。この御いそぎのほどすぐしてぞ。とき〴〵おはしける。
かのむらさきのゆかりたづねとりたまひては。そのうつくしみに心いり給ひ
て。六條わたりにだに。かれまさり給ふめれば。ましてあれたるやどは。あ

物のれども云々 〔釋〕すぎゆくとあるは月日の過ゆくことをおほかたに先いふ也さて物のれども云々よりこよひのありさまを立かへりて委しくいふ例の法也

かたく〳〵いどみつゝ 〔釋〕いづれもまけじおとらじとあらそひて稽古し給ふ也

大ひちりきさく八 〔弄〕今の世のよりも大なるひちりきが昔はありし也尺八のふえもむかしは一尺八寸に竹をきりたる物有て樂器に用ゐたる也

たいこをさへ 〔孟〕打物は地下の役吹物は各の物なれども輿に乘じて高欄のもとにて各うたれたる心なり 〔釋〕花鳥の例餘釋に引たるがごとし

てづから 〔釋〕公達の手づから也

ぬすまはれ 〔拾〕萬葉十一「情さへまだせる君に何をかもいはずていひしとわがぬすまはん「山川に筌をふせ置てもりあへず年の八年をわがぬすまひし

（釋）これは語のはたらきの例也こゝはしのびゆき給ふ事をいへりわが身を盗むやうにする意也

しがく〔岷〕試樂也樂のならし也紅葉賀卷に試樂を御前にてせさせ給ふと有て其時の事也

なきぬばかり〔拾〕なきぬべきばかりにと心得べし拾遺に「うつろはんことだにをしき秋萩にをれぬばかりもおける露かな　伊勢　此ぬに同じ

くたいてける〔拾〕命婦が心をさま／＼に摧（クダ）きしかひもなくといふなるべし〔新〕春海考るに命婦の心にくゝてやみなんと思へりしを源氏の打くだきてあひ給へりしかどさる心のとほられば此人の思ふらんをさへおぼす也（釋）春海が考のかた語脈にはかなひたりされどその方にてはなほ舊説のごとく腐（クダ）いての方よろし腐（クダ）いてはくさらしてやくにたゝぬやうにしたる意也さて此人の心もなく思ふらんといふ意なるを例の打かへしていへる語脈也

物思ひしらぬやうなる（釋）餘り物もいはでつれなきやうなるを物思ひしらぬといへり

我も打ゑまるゝ（釋）源氏君のうつくしきを見て命婦もおのづからゑまるゝやうにおぼえてしひて恨みぬ也

わりなの人にうらみられ給ふ云々（釋）わりなのは御よはひへかゝる意なり御齢（ヨハヒ）の若くして人にうらみられ給ふがわりなき也思ひやりすくなう云々は人のうへをば思ひやり給はず我御心にまかせてわがまゝにふるまひ給ふも御よはひのわかき故なれば尤なりと思ひかへしたるなり

この御いそきのほど〔細〕行幸すぐしてと也

かの紫のゆかり〔花〕紫のひめ君の二條院へうつろひ給ふ事行幸はてゝ霜月のころ也（評）この所若紫卷に引合せてかつ六條御息所の伏線の脈をあらはしつゝけたる中におのづから抑揚の勢ひあり心をつけてうかゝふべし

所せき御物はぢを（釋）末摘の所せきまで物はぢして對面し給はぬをしひて見あらはさんの御心もなくて月日の過ゆくにと也

打かへし云々（釋）もし打かへしてうらうへに見まさりする事もあらんかとおもほして見まほしき也舊注何れもひがこと也

手さぐりの云々〔玉〕あやしく心得ぬ所のあるやうにおぼえしはたゝ手さぐりのたど／＼しき故にて實には然らざるにやよく見まほしといふなり

けざやかに（釋）湖月に校合したる一本に此上に火をとあれどこゝはしかいふべき所ともおぼえずなか／＼にわろし後人の加へたるにや

まばゆし（釋）此下に「とおもほしてといふ詞など有しが落たるにやこのまゝにては源氏君のおもほす事とし給ふわざを地よりいふとのけぢめなし

打とけたるよひゐのほど（釋）常陸宮に人々の宵居してうちとけ用心せぬ時ひそかに入て格子のすきまよりかいまみ給ふなりよひゐは宵のほ

はれにおぼしおこたらずながら。物うきぞわりなかりける。ところせき御ものはぢを。見あらはさんの御心も。ことになくてすぎゆくを。打かへし見まさりするやうもありかし。てさぐりのたど〳〵しきに。あやしう心えぬ事もあるにや。みてしがなとおもほせど。けざやかにとりなさんもまばゆし。うちとけたるよひゐのほど。やをらいり給ひて。かうしのはざまより見給ひけり。されどみづからは見え給ふべくもあらず。几丁などいたくそこなはれたる物から。年へにけるたちどかはらず。おしやりなどみだれねば。心もとなくて。ごたち四五人ゐたり。御だいひそくやうのもろこしの物なれど。人わろきに。何のくさはひもなく。あはれげなる。まかでゝ人々くふ。すみのまばかりにぞ。いとさむげなる女房。しろききぬのいひしらずすゝけたるに。きたなげなるしびらひきゆひつけたる。こしつきかたくなしげなり。さすがにくしおしたれてさしたるひたひつき。ないけうばう。内侍所のほどに。

ど人々居つどひて物語などすることゝ聞えたり上下におほし

（評）此段は空蟬巻に碁打たる所をかいまみ給ひて思ひの外になかりしきさまを見つけ給ひたる事の反對にていとも〳〵わろかめるありさまをあらはしたり其中に末摘花はさすがに上の品の人なれば衰へたれどしどけなからず古代の禮法みだれぬさまをあらはされたるなど殊にめでたし心を付べし。

心もとなくて （釋）此てもじ不用めきたりもしくは衍か

ひそく 〔花〕今案秘色はあをき茶碗の類をいふ也 〔拾〕此秘色は臺の上に飯などもる器なりくさはひもなくは可然料理もなき也くさは種の字はひはあぢはひなどのはひ歟云々

（釋）御だいひそくやうの物もろこしのなれどゝいふ意と聞ゆされど少しいかゞ人わろきとはふるびてざまのわろき意あはれげなるはなりの誤か又はあはれげなるをとふ。

くめたる意にもあるべし
まかでゝ人々くふ　〔新〕末摘の前を退出て本より何のくさはひもなきおろしを人々のくふ也
すみの間ばかりにぞ云々
〔釋〕末摘花の居給ふ寢殿の角の間なるべしさて此にぞとあるぞもしの結び下になくていかゞもしくはしびら引ゆひつけたるとあるたるにて結びたるかされどなほ穩ならず考ふべし
しろきゝぬの云々　〔釋〕白き衣を着たるは儀式めきたる也しびらたつけたるも主の御前なれば也夕顏卷に見えたると相照して思ふべし此あたりみな衰へたれど古代の禮のまゝにし給ふさまをいへる也
さすがにくしおしたれて
〔河〕陪膳に候ずる女房櫛をさすこと本儀也然りといへども毎事ふるめかしくなかしき體也
内敎坊内侍所　〔新〕内敎坊は舞妓の樂習ふ所内侍所は神鏡を齋きまつる所にて巫女のごとき女房の老た

かゝるものどものあるはや。とをかし。かけても人のあたりに。ちかうふるまふ物とも。しり給はざりけり。あはれ。さもさむきとしかな。いのちながければ。かゝる世にもあふものなりけり。とてうちなくもあり。故宮おはしましゝ世を。などてからしとおもひけん。かくたのみなくても。すぐるものなりけりとて。とびたちぬべくふるふもあり。さま〴〵に人わろき事どもをうれへあへるを。きゝ給ふもかたはらいたければ。立のきて。たゞいまおはするやうにて。うちたゝき給ふ。そゝやなどいひて。火とりなほし。かうしはなちていれ奉る。侍従は齋院にまゐりかよふわか人にて。この比はなかりけり。いよ〳〵あやしう。ひなびたるかぎりにて。見ならはぬこゝちぞする。いとゞうれふなりつる雪かきたれいみじうふりけり。空のけしきはげしう風ふきあれて。おほとなぶらきえにけるを。ともしつくる人もなし。かの物におそはれしをり。おぼし出られて。あれたるさまはおとらざめるを。ほどの

るが侍る也これらの女のすがたは
いとあやしくてやんごとなきあた
りの女房とはことなるがこゝの宮
の女どもの似たると也
かゝるものともあるはや（釋）は
やは歎息の辭也こゝはたかしきも
のな思ひ合せ給へる勢ひなそへて
はやとはかける也
かけても人のあたりに（釋）かけて
もは「知給はざりけり」へ係る語脉
也かやうのあやしき女どもの貴人
のあたり近く立よるものとはかけ
ても思ひしり給はずといひて源氏
君のにぎはゝしく貴きさまを顯は
したり
あはれさも寒きとしかな
（釋）あはれと讀きりてさも寒きと
よむべしあはれは歎息の辭也さも
は今俗さてもといふが如き意也い
のちの長ければとは老女なる故に
いへり内教坊内侍所の應也老子に
壽則多辱といふをふくめたり
「なりけり」も歎息の辭
とびたちぬべく【河】「世中をうし

せばう。人げのすこしあるなどに。なぐさめたれど。すごうたていざとき
心ちする夜のさまなり。をかしうもあはれにも。やうかへて心とまりぬべき
ありさまを。いとうもれすくよかにて。何のはえなきをぞ。くちをしうおぼ
す。からうじてあけぬるけしきなれば。かうしてづからあげ給ひて。まへの
前栽の雪を見給ふ。ふみあけたる跡もなく。はる〲とあれわたりて。いみ
じうさびしけなるに。ふりいでゝゆかんこともあはれにて。をかしきほどの
空も見給へ。つきせぬ御心のへだてこそわりなけれ。とうらみ聞え給ふ。ま
だほのぐらけれど。雪のひかりに。いとゞきよらにわかう見え給ふを。おい
人どもゑみさかえて見奉る。はやいでさせ給へ。あぢきなし。心うつくしき
こそなど。をしへ聞ゆれば。さすがに人の聞ゆる事を。えいなび給はぬ御心
にて。とかうひきつくろひて。ゐざりいで給へり。見ぬやうにて。とのかた
をながめ給へれど。しりめはたゞならず。いかにぞ。打とけまさりのいさゝ

とはさしも思へども飛立かねつ鳥にしあらねば此歌は萬葉貧窮問答の長歌の反歌也尤よせある歟〔拾〕今按萬葉第五にうしとやさしとゝお
り書寫の誤か云々

たちのきて〔釋〕源氏君格子のもとを立のきて只今來給ふやうにしてたゝき給ふ也

そゝや〔釋〕今の俗言にソリヤコソなどいふ意の辭にて源氏君のおはしたるに驚きたるさま也

格子はなちて〔釋〕鎖(トザ)したる格子を取はなちて也

侍從は齋院に〔弄〕齋院誰ともなし〔湖師〕葵卷に齋院に立給ふより前の齋院なるべし〔釋〕桐壺帝の御代の齋院なり侍從を省きていよ／＼
末摘花のわろびたるさまをいはんの伏案

いとゞうれふなりつる雪〔湖〕前にあはれさも寒き年かなといへるをうけて愁へ思へる雪猶かき亂れつゝよくふると也〔釋〕前に寒き年といへ
るをこゝに雪と轉じたる文のはたらきいみじくめでたしかきたれの搔は例の語勢の發語たれは垂にて空より垂るゝやうにふる意なり

大となぶら消にけるを云々〔評〕前に寒き年といへるを起して雪と轉じ風をそへて燈火をけちともしつくる人なきわびしさをいひてさて夕顔
の何がしの院の事を引出てくらべたる巧いひしらずめでたし

ほどのせばう云々〔釋〕あれたるさまはかの何がしの院にも劣られどこゝはほどの狹くして人氣の少しあるなどかしこよりは心やすきと
なり

をかしうも哀にも云々〔湖〕末摘の御所のさまよにかはり心もとまりぬべきに末摘のさやうの方風流なき故くちをしきと也〔評〕わざ／＼か
やうの所を好みてたづね出給ひたるに末摘花のくちをしうて何のはえもなきことをいひてかの夕顏のをかしかりし反對としたつは深く巧み
たる事の違ひ安き世中のことわりをにほはせられたりいと心ふかしうもれすくよかとは引いり埋れたる心の堅固なる意なり舊注たがへり

からうじて〔釋〕此語いとをかし心のとまらぬ故をあかしたり格子手づから上給ふも人なくて不都合なるをあらはしたる也

ふみあけたる跡もなく〔湖〕とふ人なきさま也〔釋〕はる／＼とは前栽の廣き形容(サマ)也

老人どもゑみさかえて〔釋〕上の老女房ども也ゑみさかえは餘念なくうれしげに打笑(エ)むさま也古事記八千矛神の御歌に朝日のゑみさかえきて
云々

さすがに人の聞ゆる事を〔釋〕末摘花の本性上にも見えたり

見ぬやうにて〔釋〕源氏君末摘を見ぬやうにて外の方をながめ給へれどしり目になり／＼見給ふ也事のさま寫し得て生(ケ)るが如くはたらくがご
とし

いかにぞ〔釋〕上に打かへし見まさりするやうもありかしといへるをうけたる味也故にいかにぞといへり

先ゐだけの高う（釋）座し給へるたけの高き也先といへるいとよろしたせながに〔玉〕かもじ清べし背のたわみまがれるをいふなるべしながは長の意にはあらじたゞ背の長きばかりはむねつぶるといふほどにもあるべからず（釋）此說にいかゞ也背たせながといはんもいかゞなるに背中に見え給ふとはいひがたし舊說のごとく背の長き意也背の長きはおのづから曲れるやうに見ゆるもの也なほ輕く添たる發語

ふとめとまる（釋）大やうに見もてゆくうちにはやく目につく意也

ふげんぼさちの乘物〔河〕普賢菩薩乘二大白象一鼻如二紅蓮華色一　觀普賢經

色づきたるほど〔拾〕和名抄云皻鼻野王按皻音沙和名邏岐美波奈鼻上皰也俗に柘榴鼻といふこれ也云々

雪はづかしくしろうてさをに

〔拾〕かげろふ日記にあなさむ雪ははづかしき霜かな萬葉第十六怕物歌

かもあらばうれしからん。とおぼすも。あながちなる御心なりや。まづゐだけのたかうをせながに見え給ふに。さればよとむねつぶれぬ。打つぎて。あなかたはと見ゆる物は。御はななりけり。ふとめとまる。ふげんぼさちののり物とおぼゆ。あさましうたかうのびらかに。さきのかたすこしたりて色づきたるほど。ことのほかにうたてあり。いろは雪はづかしくしろうてさをに。ひたひつきこよなうはれたるに。なほしもがちなるおもやうは。おほかたおどろ／＼しうながきなるべし。やせ給へることと。いとほしげにさらぼひて。かたのほどなどは。いたげなるまで。きぬのうへだに見ゆ。なにゝ殘りなう見あらはしつらんと思ふ物から。めづらしきさまのしたれば。さすがにうちみやられ給ふ。かしらつきかみのかゝりはしも。うつくしげにめでたし。と思ひ聞ゆる人々にも。をさ／＼おとるまじう。うちきのすそにたまりてひかれたるほど。一尺ばかりあまりたらんと見ゆ。き給へる物どもをさへ

いひたつるも。ものいひさがなき(クチワルイ)やうなれど。むかし物語にも。人の御さう(装)ぞく(束)をこそは。まづ(先)いひためれ。ゆるしいろのわりなう(ムシヤウニ)うはじらみ(上白ケ)たるひとかさね。などりなうくろき(黒)うちき(袿)かさね(重)て。うはぎ(上着)にはふるき(黒貂)のかはぎぬ(皮衣)。いときよら(清)にかう(香)ばしきをき(着)給へり。こだい(古代)のゆゑづき(ヨシメキ)たる御さうぞくなれど。なほわか(若)やかなる女の御よそひ(粧)には。にげなう(似氣)。おどろ〳〵しきこと。

に人だまの佐青(サナ)なる君がたゞひとりあへりし雨夜は久しとおもほゆ
(釋)白く青ひれたるなるべし
はれたるに　〔箋〕額の大きなるに下がちに見ゆるはふく〳〵長き顔(カホ)となりちひさき額ならばはてしもなく長くは見ゆまじき也こゝをこよなう晴(ハレ)たるとかけり　〔玉補〕はれは晴(ハレ)なり腫にはあらず猶下がちこいへるにてしるべし
さらぼひて　〔細〕髐(サラボヒ)　莊子
〔河〕やせつまりたる也　〔新〕老さらぼひてふが如くにて木などの雨露に曝(サレ)て肉はなく眞骨ばかりあるにたとへいふ語也ほひはよろぼひといふがごとき辭なり
いたげなるまで　〔岷〕あまり痩(ヤセ)たるは骨高にていたさうなる也　(釋)きぬの上より見てさへいたげに見ゆるなり
なにゝのこりなう云々　(釋)かくわろきかたちを何故に殘なく見あらはしつらんと後悔し給ふ物から又あまりに珍らしきさまなればおのづから見やられ給ふと也事のさまいとをかし
かみのかゝりはしも　(釋)髮のかゝりとは髮の垂かゝりたるさまをいふと聞ゆかゝりばと濁りよみて懸り場也といふ注はわろしさてはしもといふ辭へうけがたしはもじ清べしたゞてにをは也
うつくしげにめでたしと云々　〔湖〕源氏のよき人と見給ふ藤壺葵上など也
うちきのすそに　(釋)袿(ウチギ)のすその引れたる上に髮のたまりて猶一尺ほど引餘りたる也
着給へる物どもをさへ云々　(釋)かたちのわろき事を餘りなるまでこちたくいひたてたるうへに又きもの〻事をいはんはかへす〴〵くちさがなきやうなる故にかくことわりたる作者の用意いと心にくし
むかし物語にも　(釋)いづれの昔物語にもその人の裝束をば第一にいひたれば今もまたもらすべきにはあらずとなり此物語を物がたりめかさずいはれたる例のことながらいとよろし

ゆるし色のわりなううはじらみたる（釋）一翁云花鳥に紅紫はふかき色を禁色となづけあさきをゆるし色といふ云々とあるはわろしゆるし色はすなはち禁色の事にてなべてはゆるさぬ色なれど功勞によりてゆるさるゝを規摸とすればゆるし色とはいふ也云々下略うはじらみたるは色のふるびてうへの白くなりたるをいふ

なごりなう黑きうちき〔新〕袿に大小ありて小袿は女の着ることは常也やんごとなきあたりにのみ着るやうにいへる注はいかにぞや枕草子に清少納言のきたる事あるに異なるよしありて着しとも見えず此文などにも空蟬君などもきたれば大かたの女房は着ること也けり又紅は深紅にても古きは上しらみゆき深紫の古きはいよ〳〵黑くなりてあかねさしたるにほひの失たればなごりなくとはいへり

ふるきのかはきぬ〔新〕和名抄云貂音凋和名天以鼠黃色皮堪作衣又云黑貂唐韻曰貂有黃貂黑貂出東北夷云々貂和名布流木

（釋）今俗てんいたちといふ獸の皮也此物寒を防ぐによしといへり餘釋に記しつ

いときよらにかうばしきを（評）あまりにわろき事ないひつゞくる故にかたちには髮をほめ衣服に黑貂の裘をきよらにかうばしきといへるめでたしされどかゝるあやしき物着給へるは古代の風なれば若やかなる女の御よそひには云々とて又おとしめられたり抑揚法ありてすきまなき筆也

いともてはやされたり〔新〕是は故宮の遺風にていともてはやして此かは衣をばれいと着給ふをいふなるべし（釋）此所脫字など有か少し穩ならずこのまゝにていはゞ貂裘のおどろ〳〵しく異やうなるがもてはやされたりといふ意と聞ゆもてはやすはそのおどろ〳〵しきをもてはやす意なり舊注どもは更によしなし

この皮なうてはた寒からまし

（釋）貂裘の寒をふせぐ事漢籍にも見ゆこれはすべて戲れていへる也

いともてはやされたり。されどげにこのかはなうてはた。さむからまし。と見ゆる御かほざまなるを。こゝろぐるしと見給ふ。何事もいはれ給はず。われさへくちとぢたる心ちし給へど。れいのしゝまもこゝろみんと。とかう聞え給ふに。いたうはぢらひて。くちおほひし給へるさへ。ひなびふるめかしう。こと〴〵しう。ぎしきくわんのねりいでたる。ひぢもちおぼえて。さすがに打ゑみ給へるけしき。はしたなうすゞろびたり。いとほしくあはれに

われさへ〔湖〕末摘の物のたまはぬに對して我さへといへり
例のしゝまも〔湖〕前に君がしゝまとよみ給ひしをうけて例のといへり末摘のけふは又物いひ給ふかとこゝろみ給はんとて也
くちおほひ〔湖〕袖にて口もとをおほふ也恥るさま也
ぎしきくわんの〔河〕儀式官〔花〕政官などを云〔細〕辨少納言内記外記史などをいふ也ことく\しき様をいふ也〔湖師〕此辨少納言など公事などに出る時ひぢをはりていかめしくして出る也云々〔新〕或抄に太政官の辨少納言などをのみ儀式官といふやうに注せるはおぼつかなし先は式部の輔をいふべくおぼゆ〔釋〕末摘花のさま儀式の官人のもの持て出る時のはり臂のさまに似たりといふ也ひぢもちは臂つきといふほどの意也物はもたでも笏などもちて臂を張たるべければもちとはいへるなるべし

て。いとゞいそぎ出給ふ。たのもしき人なき御有さまを。見そめたる人には。うとからず思ひむつび給はんこそ。ほいある心ちすべけれ。ゆるしなき御けしきなればつらう。などことつけて。
朝日さす軒のたるひはとけながらなどかつらゝのむすぼゝるらん。との給へど。たゞむゝとうちわらひて。いとくちおもげなるも。いとほしければ。いで給ひぬ。御車よせたる中門の。いといたうゆがみよろぼひて。よめにこ

たのもしき人なき云々〔釋〕かく衰へ給ひて後見する人もなき御有さまを見そめたる我には疎からずむつまじゝして何事も包み給はぬこそ本意あることゝちもすべけれいつまでもゆるしなくうと\/しき御けしきなるがつれなうこそあれとの給へる也ことつけてとは末摘花のつれなきにかこつけて早く出給へる也
朝日さす云々〔箋〕つらゝも垂氷も同事也朝日にあたる軒の垂氷はさすがに解て露はすがれどもいまだこゝろよく氷はとけざる也末摘君の心のとけたるに似て更にさもなしといへりとけながら猶むすぼゝるゝとよめり又つらゝのさまもさるやうなるべし〔釋〕垂氷は軒より垂下りたる氷にて今俗のつらゝといふ物也又つらゝはたゞに氷の事也折からのけしきにあはせてよまれたるなり
たゞむゝと打わらひて〔釋〕むゝは口をつぐみたる聲也口をあきてまでは笑ひ給はぬ也恥らひたるさまをいとよく書とられたり
御車よせたる中門の〔釋〕源氏君の御車中門によせかけてある也その中門いたくふるびて倒れかゝりたるさま也

ゝめにこそ云々　（釋）夜はかく荒たるさまは著きながらもよろづたど〳〵しくて隱れたる事も多きを晝となりては何事ものこりなく見ゆる也
あれまどへる　（釋）荒たることをつよくいはんとて、まどへるとはいへる也
松の雪のみあたゝかげに　〔花〕松の雪はしろき綿をむしりかけたるやうなればあたゝかげとはいふにや　〔新〕春海考末摘花のありさまをはじめ家居のさまもあれてすさましう寒げなれば松の雪のみあたゝかなるやうに思ひなさるゝをいふ也さておのづから綿にも見なしていふならん　（釋）松は雪のつもりやすき物にてふくよかに降つめるをあたゝかげとはいへる也其外の木どもはさばかりはたまらぬ也かくて此宮のうちのさむげなるを言の外ににほはせたり綿のたとへもさる事ながら文のうへさまでには聞えぬにや
かの人々のいひし　〔花〕雨夜の物語に馬頭がいひし事也　（釋）雨夜の物語よりしてむぐらの門をしたひ給へる脉
げに心ぐるしくらうたげならん人を　（釋）雨夜物語に世にありと人にしられずさびしくあばれたらんむぐらのかどに思ひのほかにらうたげならん人のとぢられたらんこそ云々といへるを受てげにとはいへる也
あるまじき物おもひは　〔孟〕藤壺を切におもひ給ふ心はそれにまぎれんと也
思ふやうなるすみかにあはぬ　（釋）かく思ふやうなるすみかに打合ぬ末摘花のありさまはとりどころなしと也
我ならぬ人は云々　〔岷〕末摘のかたちのあしきを見あらはし給ひてはいよ〳〵見すて給ふまじきとのこゝろなり
ちゝみこの云々　〔湖〕宮のたましひを此姫君にたぐへ置給ひけんと也　（釋）我かく見そめしは父みこのたましひのしるべし給ふならんと也
うらやみがほに松の木の　（釋）橘の雪のはらはれたるにふれてその傍の松の木も雪の落て起かへりたるをうらやみがほにとあやどりて書る也末摘花をあはれみ給ふ御めぐみにつれて家のうちの人も餘澤を蒙るこゝろなどもあらんか

そしるきながらも。よろづかくろへたることおほかりけれ。ひとあはれにさびしくあれまどへるに。松の雪のみ。あたゝかげに降つめる。山ざとのこゝちして。物あはれなるを。かの人々のいひしむぐらのかどは。かうやうなる所なりけんかし。げに心ぐるしくらうたげならん人を。こゝにすゑて。うしろめたう戀しとおもはゞや。あるまじきもの思ひは。それにまぎれなん

かし。と思ふやうなるすみかにあはぬ御ありさまは。とるべきかたなし。と思ひながら。我ならぬ人は。まして見しのびてんや。わがかうて見なれけるは。ちゝみこのうしろめたし。とたぐへおき給ひけん玉しひのしるべなめり。とぞおぼさるゝ。たち花の木のうづもれたる。みずゐじんめしてはらはせ給ふ。うらやみがほに。松の木のおのれおきかへりて。さとこぼるゝ雪も。名にたつすゑの。とみゆるなどを。いとふかゝらずとも。なだらかなるほどに。あへしらはん人もがな。と見給ふ。御車いづべきかどは。まだあけざりければ。かぎのあづかり尋ねいでたれば。おきなのいといみじきぞいできたる。むすめにや。うまごにや。はしたなるおほきさの女の。きぬは雪にあひてすゝけまどひ。さむしと思へるけしきふかうて。あやしき物に。火をたゞほのかにいれて。袖ぐゝみにもたり。おきなかどをえあけやらねば。よりてひきたすくる。いとかたくななり。御ともの人よりてぞあけつる。

名にたつすゑの　〔河〕「我袖は名にたつ末の松山か空より波のこえぬまぞなき　〔餘〕後撰戀二土佐結句こえぬ日はなしと有
〔釋〕松のおきかへりたるにつきてさとこぼるゝ雪のさま引歌の空より波のこゆるといへるごとく見ゆるけしきなどのえもいはれぬをたゞよのつねのさまほどになりともあへしらはん人もあれかしとなり末摘花のくちをしきを歎き給ふなり花鳥にはなみこすゝゑのとして「浦ちかくふりくる雪は白波の末の松山こすかとぞ見るといふ歌を引給へりさる本も有しにこそされど名にたつといふかたよろし

あへしらはん　〔釋〕諸本あひしらはんと有しを今改めつ誤れることしるければ也

いといみじきぞ　〔湖〕年よりたる也
〔拾〕櫻井素丹といふ人のよみけるを聞て聞書などせる古本を見しには「いとみじかきぞとありき
〔釋〕右の本はわろし短さはこゝに

用なし
むすめにやうまごにや　〔湖〕翁のために娘か孫かと也
はしたなる　〔箋〕半なる也どちらへもつかぬといふ比の女なるべし
雪にあひて　〔箋〕雪にはえあひて白き衣のいよ／＼すゝけて見ゆる也
あやしき物に云々　〔釋〕あやしき物とは火を入る器ならぬ物にかりに火を入たる故にいへる也袖ぐゝみとは袖のうちに引入れてもたる也
よりて引たすくる　〔岷〕はしたなる女のたすくるなり
御供の人よりてぞ　〔岷〕翁と女と二人してえ門をあけねば源の御供の人のあくる也
〔評〕翁に女をそへても猶門をえあけねば御供の人よりてあくるなどわびしきさまのきはみといふべし沓をぬぎてかゆきをかくといふべき文章也上に中門のゆがみよろぼひたる事をいへる應いと／＼めでたし
ふりにける云々　〔花〕あさの袖は朝

（源）ふりにけるかしらの雪を見る人もおとらずぬらすあさの袖かな。わかきものはかたちかくれず。と打ずじ給ひて。はなのいろにいでゝ。いとさむしと見えつる御おもかげ。ふとおもひ出られて。ほゝゑまれ給ふ。頭中將にこれを見せたらん時。いかなる事をよそへいはん。つねにうかゞひくれば。いま見つけられなん。とすべなうおぼす。よのつねなるほどの。ことなることなさならば。思ひすてゝもやみぬべきを。さだかに見給ひて後は。なか／＼あはれにいみじくて。まめやかなるさまに。つねにおとづれ給ふ。ふるきのかはならぬきぬ。あや。わたなと。おい人どものきるべきものゝたぐひ。かのおきなのためまで。かみしもおぼしやりて。たてまつり給ふ。かやうのまめやかごとも。はづかしげならぬを心やすく。さるかたのうしろみにてはぐゝまん。とおもほしとりて。さまことにさならぬうちとけわざもし給ひけり◎かのうつせみのうちとけたりし。よひのそばめは。いとわろかりし

の袖也　〔河〕「秋の野のさゝわけし朝の袖よりもあはでぬるよぞひぢまさりける」　〔釋〕翁が年ふりてわびしき頭の雪を見れば哀にて源氏君も翁におとらず袖をぬらし給ふと也ふりに雪の緣ありしらの雪は白髪のたとへなるを今のけしきにそへていへり

わかきものはかたちかくれず　〔河〕夜深煙火盡。霰雪白紛々。幼者形不蔽。老者體無溫。悲端與寒氣。併入鼻中辛　白氏文集秦中吟

〔花〕幼者といふをばはしたなき女にたとへ老者をば翁にたとへたり

はなの色にいでゝ　〔釋〕右の詩の末句入鼻中とあるよりふと末摘花の事を思ひいで給ふやうに書なしたる也寒ければ鼻のさき赤く色づくものなれば色にいでゝいとさむしといへる也小櫛補遺に此ははなたゞ目鼻のはな也といへれど猶舊注のごとく花をかねたる意ある故に色にいでゝとはいへるなるべしほゝゑまれはおのづからにゑまるゝをいふ

つれにうかゞひくれば　〔釋〕頭中將も常に此宮へうかゞひくればつひには見つけられんとせんすべなうおぼしこうずる也すべなうは俗にシカタガナイといふ意也

よのつれなるほどの云々　〔釋〕末摘花のかたち尋常ならば思ひすてゝ止べきを定かにわろきかたちをみては我ならぬ人は必ず捨てんと却てあはれにてまめやかに音信給ふと也

ふるきのかはならぬ　〔釋〕一句戲也

おい人どもの　〔湖〕末摘の宮女ども也

かやうのまめやかことも云々　〔湖〕こまやかに内證の不自由なるを源のみつぎ給ふは心ある者ははづかしく思ふべけれど末摘は何とも思ひ給はぬによりて源も心やすくてさやうの方のうしろみして末摘をはぐゝまんとおぼすなり

さまことにさならぬ云々　〔釋〕さまことにとはよのつれの樣には異なるよし也さならぬうちとけわざとは普通にては無禮にてなしがたき心やすだてのわざといふ意也内證の後見のみしてはぐゝまんとおぼす故にほどを過たる心安だての事もし給ふと也末の卷々此姫君のさまみな此意を貫きてかゝれたりよく心得置てよむべし

かのうつ蟬の云々　〔釋〕打とけたりしよひとは碁打てありし時の事也そばめとは側より横に見たるかたちを云

おとるべきほどの　〔釋〕末摘花は空蟬に劣るべきほどのかたちならんやと也舊注にほどゝいふを分際の事とせられたるはわろしこゝはたゞくらべたるかたちのほど也下に品とあるが分際の事なり

げに品にもよらぬわざ也けり　〔抄〕帚木に今はたゞ品にもよらじといへる所をふみてげにといへり　〔釋〕品とは人品の分際の事也末摘花は宮の御子なれど空蟬に劣り給へるは女の用意は人品の分際にはよらぬもの也と馬頭がいひしを思ひ出て心得はて給へる也かれなりけりといへり

心ばせのなだらかに　（釋）是より空蟬の事也ねたげなりしとは我心にしたがひはてずして心にくかりしとの意也心ばせなだらかに用意ありて心にくかりしをつれなさに負てやみにける事よと物のついでごとにくちをしう思ひ出給ふと也

（評）此段種姓尊くて心ばへもかたちもわろき人と品賤く形はわろけれど用意深き女とをくらべて評じつゝ此巻の首に書出たる空蟬の脈を結びたる首尾なり心をつくべし

まけて　〔拾〕枉てと見るべからず負けて也

年もくれぬ　（釋）源氏君十八の年くれたる也さて次の事もなほ年内のことなり

内の御とのゐ所　〔釋〕源の内裏におはする時の御とのゐ所桐壺なるべし

御けづりぐしなどには云々

（釋）源氏君の御くしけづりなどにつかひ給ふには大輔命婦は心かけ

かたちざまなれど。もてなしにかくされて。くちをしうはあらざりきかし。おとるべきほどの人なりやは。げにしなにもよらぬわざなりけり。心ばせのなだらかに。ねたげなりしを。まけてやみにしかな。と物のをりごとには。おぼしいづ□年もくれぬ。内の御とのゐ所におはしますに。たいふの命婦まゐれり。御けづりぐしなどには。けさうだつすぢなう。心やすきものゝ。さすがにのたまひたはふれなどして。つかひならし給へれば。めしなき時も。聞ゆべき事あるをりは。まうのぼりけり。あやしきことの侍るを聞えさせざらんも。ひが〳〵しう思ひ給へわづらひて。とほゝゑみて聞えやらぬを。なにごとの事ぞ。われにはつゝむことあらじとなん思ふ。とのたまへば。いかゞは。みづからのうれへは。かしこくともまづこそは。これは聞えさせにくゝなん。といたうことこめたれば。れいのえんなり。とにくみ給ふ。かのみやより侍る御ふみとて。とりいでたり。ましてこれはとりかくすべきことか

は。とてとり給ふも。むねつぶる。みちのくにがみのあつごえたるに。にほひばかりは。ふかうしめ給へり。いとようかきおほせたり。うたも。

から衣君が心のつらければたもとはかくぞゝほぢつゝのみ。心えずうちかたふき給へるに。つゝみに衣ばこのおもりかに。こだいなるうちおきて。おしいでたり。これをいかでかはかたはらいたく思ひ給へざらん。されどついたちの御よそひとて。わざと侍るめるを。はしたなうはえかへし侍らず。ひとりひきこめ侍らんも。人の御心たがひ侍るべければ。御覧ぜさせてこそは。と聞ゆれば。ひきこめられなんは。からかりなまし。袖まきほさん人もなき身に。いとうれしき心ざしにこそは。との給ひて。ことに物いはれ給はず。さてもあさましのくちつきや。これこそは。てづからの御ことのかぎりなめれ。侍従こそはとりなほすべかめれ。また筆のしりとるはかせぞなかるべき。といふかひなくおぼす。心をつくしてよみ出給へらんほどを おぼす

給へる人ならねばけさうだつすぢなくて心安き物から又なりゝへは戯れなどものたまふ故にいよ／＼心やすく思ひ奉りてめしなき時も申べき事あれば参ると也畢竟戯れないひ給ふ故に心おきなく馴れる也玉小櫛補遺にけさうだつすぢなき故に命婦が心やすき也といへるはいかゞあらん文の主客まぎらはしく聞ゆ

みづからのうれへは云々
〔湖師〕命婦が身上の愁などならばたとへ恐れがましくとも先こそ申侍らめと也（釋）うれへとはこゝは身上の事を祈る意にて今の俗ねがひといふにちかし

ことこめたれば（釋）言を籠ていひはなたぬさま也

れいのえんなりと（釋）例のとは上にあまり色めいたりとおぼして云云とありし脉にていへり艶なりとは色めきてヤサスブリする事也

かの宮より侍る御文とて
（釋）源氏君のにくみ給ふ故に命婦

からうじて文を取出たるさま也

ましてこれは〔釋〕いかなる事もかくすべきならぬにましてこれは我けさう人のふみなればとりかくすべきことかはといひながら文をとり給ふさま也

みちのくにがみ〔河〕檀紙也陸奥國より檀紙をすきはじめける也古序にみちのくのまゆみのかみといへり檀はまゆみ也

あつごえたる〔拾〕厚肥たる也いたくあつき紙は人のこえふとりたるに似たれば也

いとようかきおほせたり〔湖〕書得たる也女の文をさのみしたゝかにかきたるはわろきいましめ也〔新〕やう〳〵として書とり得たるをいふ歌の事を下にこれこそは手づからの御ことのかぎりなめれと有に合せてしらる

うたも〔湖〕歌も文のさまと同じとなり

から衣きみが云々〔拾〕から衣着るとつゞけたり〔花〕元眞集「いつか我涙のつきんから衣君がこゝろのつらきかぎりは〔湖師〕源のとだえをうらむ涙に袖はかくぬれたりと也

心えず打かたふき給へるに〔細〕歌はかくぞとあるは別に何ぞそひたる物の有べきかと不審し給ふなり

つゝみにころもばこの〔河〕褻 綾泥絵平具 衣筥 蒔繪 已上見二延喜式一〔萬〕つゝみは泥繪衣ばこは蒔繪にしたる也

ついたちの御よそひ〔湖〕元日の源の御裝束とて態と進せられしと也

ひとりひきこめ侍らんも〔湖〕命婦が方にとめ置侍らんも末つむの御心ざしを空しくたがふるなれば先源に見せまゐらせてこそ引こめもし侍らめと也

引こめられなんは〔釋〕源氏君戲れての給ふ也かくの如くよろしき物を引こめられんはいとからからんと也

袖まきほさん〔細〕「沫雪はけふはなふりそ白たへの袖まきほさん人もあらなくに〔拾〕引歌は萬葉第十に有〔湖師〕源の御そでぬるゝとても誰ほす人もなきに末摘の御志はうれしきと也

ことにものいはれ給はず云々〔湖〕源のあきれ給ふさま也〔花〕くちつきは末摘の歌のこと也

これこそはてづからの〔釋〕これこそ末摘花の手づから物し給ひしわざのかぎりなるべしさきに歌などよみ給へるは侍従など取直してものするやうに見えしが實にさやうなりきと思ひ合せ給へるさまに書れたる也湖月の師説いさゝかたがへり「なめれといひ「べかめれといふ辭をあぢはひて考へしるべし事のかぎりはわざの限にて才藝のありたけといふ意なり

また筆のしりとるはかせぞ〔釋〕侍従の外には又別に筆じり取てなしへ聞ゆる師ぞなかるべきといふかひなくおぼす也筆のしりとるとは幼き人に手を教るさまによそへて戲れ書たる也はかせは師匠の事也

いともかしこきかたとは（釋）かたといふ語穩ならず諸抄にも其意を解れたるはなし案にうたの誤なるべし末摘花の心をつくしてよみ出給へるなればいとも〳〵かしこき歌とは此歌をもいふべしとて嘲り給ふ意也さるは昔よりいとかしこき歌などいひ傳へたる歌も多かるを思ひて此歌も其ぢやう也との意也もゝじ心を付べし

今やう色のえゆるすまじく云々（釋）一翁云今樣色は當色ならぬ色目にて當時もてはやしたる間色をいへるなるべし當色とは位階につきて相當せる正色也間色はその當色ならぬはしたなる色也花鳥に紅梅のこきをいふやうにあるはひがこと也柏木卷に黄がちなる今やう色ともあれば色に何にまれたゞ其時々に流行する色をいへる也摘要〔玉〕えゆるすまじくとはかんにんのならぬほどゝいふこと也（釋）今樣色の直衣といふ中にその古めきたるさまをことわる例の文法なり

うらうへひとしうこ（釋）ひとしうこまやかなるとは裏も表も同じほどの地をもて仕立たるをいふこまやかは織ざまの事也舊注に色の同じきよしにとされ長澤氏はまろの直衣也といへれど色の事にはつやなうふるめきたりとあれば其古めきたる色をこまやかとはいふべくもあらず猶地の事とすべし

いとなほ〳〵しう（釋）なほ〳〵しは凡俗めきたる意也つま〴〵をなほ〳〵しう見えたるといふべきを打かへしていふは例の文法也

に。いともかしこきかたとは。これをもいふべかりけり。とほゝゑみて見給ふを。命婦おもてあかみて見奉る。いまやう色の。えゆるすまじくつやなうふるめきたるなほしの。うらうへひとしうこまやかなる。いとなほ〳〵しう。つま〴〵ぞみえたる。あさましとおぼすに。此文をひろげながらはしに手ならひすさび給ふを。そばめに見れば。

なつかしき色ともなしになにゝこのすゑつむ花を袖にふれけん。色こきはなと見しかどもなど。かきけがし給ふ。はなのとがめを。なほわるやうあらん。と思ひあはするをり〳〵のつきかげなどを。いとほしき物から。をかしうおもひなりぬ。

一翁云末摘よりまゐらせたる直衣の裁縫つたなくてつまぐ〳〵のしどけなきをいふ也
あさましとおぼすに（釋）此に。もじ穩ならぬやうなれど誤とは見えず此頃の一種のてにをはなるべし
手ならひすさび給ふを（釋）手ならひは用言也すさびはむだ書のやうにし給ふこと也
なつかしき云々〔河〕萬葉「よそにのみ見つゝやこひんくれなゐの末つむ花の色に出すとも　古今「人しれず思へばくるしくれなゐのすゑつむ花の色にいでなん
〔新〕紅花に一莖のうれに房ありて其房の末にちひさく花の出るを摘故に末つむ花とはいふなり
〔細〕源氏後悔の　ひとりごとなるべし
（釋）此歌によりて思へば直衣は紅の間色なりしなるべしさて意はなつかしき色なき末つむ花を何に我袖にはふれけんと也なつかしき色ともなしは紅色のなつかしからぬ

くれなゐのひとはな衣うすくともひたすらくたす名をしたてずは。こゝろぐるしのよや。といたうなれてひとりごつを。よきにはあらねど。かうやうのかいなでにだにあらましかば。と返々くちをし。人のほどの心ぐるしきに。名のくちなんはさすがなり。人々參れば。とりかくさんや。かゝるわざは人のするものにやあらん。と打うめき給ふ。なにゝ御覽ぜさせつらん。我さへ心なきやうに。といとはづかしくて。やをらおりぬ。又の日うへにさぶらへば。だいばん所にさしのぞき給ひて。くはや。きのふのかへり事。あやしく心ばみすぐさるゝ。とてなげ給へり。女房たち。何事ならんとゆかしがる。たゞうめの花のいろのごと。みかさの山のをとめをばすてゝ。とうたひすさびて出給ひぬるを。命婦はいとをかしとおもふ。心しらぬ人々は。なぞ御ひとり笑みは。ととがめあへり。あらず。さむき霜あさに。かいねりこのめるはなの色あひや見えつらん。御つゞしり歌のいとをかしき。といへ

よしにはあらずつやなう古めきたるをさせる也

色こき花と見しかども　〔新〕これはかく書なしたるのみにて古歌の詞によれるにはあらず或說に「紅の色こき花と見しかども人をあくにはうつるてふなりといふ歌有とて引たるは古今集に「くれなゐにそめし心もたのまれずとあるを上を作りてこゝにかなへんとしたる物也〔釋〕此所引歌ありげなる書ざまなれど河海に引れたるは拾遺新釋に辨へられたる如くいとおぼつかなしされば暫く新釋にしたがひてたゞ書なしたるばかりと定めつさていろこきはなと見しかどもさはあらずしてなつかしき色ともなしと上へかへりて歌の詞にひゞかせたる也花に鼻をかれたるはもちろん也かれ命婦はなのとがめを云々と聞とがめたるなり

なりし〳〵の月かげなどを〔明〕〔岷〕是は命婦の事なるべし源氏は月影ならで慥に見給ふ也命婦こそ時々月かげなどにばかり見參らせたる事なれと覺えたり前に物ごしにてかたらひ侍りと有又此頃の朧月夜にしのびて物せんともありかやうの時々ばかり命婦は見參らすべし〔湖師〕思ひ合する折々の月かげなどをとよみつゞけて命婦が見參らせたりとの明星の御說にしたがふべし

くれなゐの云々　〔新〕かの衣と源の御歌とをもとゝして末摘に御心はあさくともさるかたはにおはする名をたてざらんやうにと願ふなり是ぞ前におほつかなくてやみなんとさへ思へる命婦がまこと也源もとより心ぐるしうおぼす上に此歌の心にしたがひ給ふこと次にかけり〔釋〕ひとはなは染色の事にてたゞ一しほばかり染たる淺き色をいふ委しくは餘釋にいへりさて色の淺きをたゞ一時の志にたとへたりうすくともは色のうすくとも也くたすは腐す也末にうれしからんなどの意をふくめたりさて此歌にてかの直衣は紅の今やう色といふ事明らかにしられたり

心ぐるしのよや　〔釋〕世は男女のなからひを思ひてたゞ世間の事にいひなしたる也

よきにはあらねど云々　〔釋〕いとよくはあらねど末摘花の此命婦ばかりのかいなでにだにおはしなばせめてはよからんとおぼす也かいなでは箏より出たる詞也と箋に見えたりさもあらんかたゞおしなべたる普通の意なり

人のほどの心ぐるしきに　〔釋〕人のほどゝは末摘花の品たかきをいふ品たかき人の名のくちなんはさすがにいとほしと命婦が歌の心をうべなひ給へる意なり

人々まゐればとりかくさんや　〔釋〕かくいふうちに他の人々御前へ參りし也とりかくさんやとは命婦にとりかくせといひつけ給ふ意をかくゆるめて談合するやうにのたまふ意と聞えたり

かゝるわざは　〔釋〕人のする物にやとはかゝるつたなきわざは惣じて世間の人もする事かといたくとがめ給ふ意也

なにゝ御覽ぜさせつらん　〔釋〕何故に此衣を御覽に入つらんと命婦が後悔する也

やをらおりぬ　〔釋〕はづかしき故にひそかに御前を下て立かへりし也

またの日うへに侍らへば
〔岷〕禁中の臺盤所に命婦のさふらふ也臺盤所は女房の侍ふ所也
くはや　〔拾〕宇治拾遺には只くはともくは〳〵ともあり
〔玉補〕是はやの意なるべしすはやはそはやす奴もそやつならんと思はるゝ故也さてこゝにての意俗にそりやといふ詞のごとし
あやしく心ばみ過さるゝ
〔釋〕これはあやしく心づかひせらるゝと源氏君みづからのうへたのたまふ戲言也けさうぶみの返事は心ばへた見せてたかしう書べきわざなるたきのふ末摘花の歌手づゝなりければあやしきかたに心ばみの過さるゝ事よと戲れてのたまふ也諸抄末摘のおくり物さし過たりとおぼしたるやうにあるはいみじきひがこと也
女房たち　〔岷〕臺盤所にさふらふ女房たちなり
たゝうめの花の　〔玉〕これはたゝらめの花のと有しを此名聞なれぬ故

ばあながちなる御事かな。このなかには。にはへるはなもなかめり。左近の命婦。ひごのうねめやまじらひつらんなど。心もえずいひしろふ。御かへりたてまつりたれば。みやには女房つどひて見めでけり。

あはぬ夜をへだつる中の衣手にかさねていとゞ見もし見よとや。しろきかみにすてかい給へるしもぞ。中々をかしげなる。つごもりの日夕つかた。かの御衣はこに。御れうとて人の奉れる御そひとぐ。えびぞめのおり物の御そ。又山吹かなにぞ。色々みえて。命婦ぞ奉りたる。ありしいろあひをわろしとや見給へる。と思ひしらるれど。かれはたくれなゐのおもく〵しかりしをや。さりともきえじ。とねび人どもはさだむる。御歌もこれよりのは。ことわり聞えてしたゝかにこそあれ。御かへりはたゞをかしきかたにこそなど。くちぐ〵にいふ。姫君もおぼろげならで。し出給へるわざなれば。物にかきつけておき給へりけり◎ついたちのほどすぎて。ことしをとこだうか

にらたうの誤ならんと思ひてさかしらに改めつるなるべしたゝらめを梅とかへてうたふべきよしもなきうへにたゞといふ事も穏ならざるを
や注にたゝらめの花といふはたゝむめの花といへるを書誤れるなるべしとあるはいみじきひがこと也新撰字鏡に苹太々良女と見え内膳式に
は多々良比賣花と見え後の書どもにはたゝらべともあり風俗歌花鳥に引給へることしこれもかのたゝらめの歌の末にある詞にやかの歌政事
要略に載たるを今考るに花鳥に引給へるごとくにて末は見えずなほよく尋ぬべし　〔花〕政事要略衛門府風俗歌云多々良女乃花乃如加以禰利
好牟夜滅紫乃色好牟夜　（釋）たゝらめの花の事玉小櫛にて明らかなりさて花鳥に引給へる風俗歌本には滅紫とありてケシムラサキとよめ
りされどこはかいねりに對へたるなれば必滅紫にて色の淺く赤きかたなるべしと云伴氏の說によりて今改めつ猶餘釋にいふべし
みかさの山のをとめをばすてゝ　〔河〕求子の歌也春日社にてはみかさの山とうたふ餘社にては各其所をうたふ也云々　〔細〕此心は源の心中に
常陸宮のをとめとうたひたく思ひ給ふ也鼻の色を思ひてのたまふ也　〔湖〕宗祇云かいねりは色紅なり末つむの鼻の色の赤きをいはんため也
末摘は常陸宮の姫君なれば先三笠山のをとめとはのたまふなり云々こゝに三笠の山のといふ事は春日明神はひたちより出給ひたる御神也三
笠も春日も出給ひし御神の社なればそのたよりあるによりかくいふ也師說の密傳也　（釋）諸抄の說どもいづれもあたれりとは聞えがたきに
や其中に鹿島と春日と同じ御神なればといふことは少しよせありて聞ゆれどもなほいと迂遠き說めきたり案に花鳥に引給へる風俗歌の末の
詞などなりしを今は失ひてしられぬやうになれりしにもあらんか但しつゞしり歌とあるは多々良女に求子をつぎて歌ひ給へるをいふ意かと
もおぼゆればなほ別にさる故ある事にやよく考へてさだむべしさてたゝらめの花の色のごとく赤き鼻のをとめをばすてゝといふ意をこのう
たひ物の詞によせてうたひしらせ給ふ意とは聞えたり
命婦はいとをかしと思ふ　（釋）命婦は歌の心をひそかにしりてをかしく思ふ也
心しらぬ人々は　（釋）その心を得ぬ女房たちは御ひとりゑみは何の故ぞと命婦にとがめてとふなり
あらず寒き霜朝に　（釋）命婦がこたへていふ也あらずはさにはあらずといふ意を約めていへる也この寒き霜のあしたにかの風俗歌にかいねり
このむといふらんかいねりのごとく鼻のさきの赤くなりたる色あひや見えつらんさてぞ源氏君はつゞしり歌にうたひ給ひしなるべきいとを
かしといひことわる也寒きに鼻の色づくを花にかけたることはもちろん也
かいねりこのめる　（釋）掻練のかいは例の發語にて練たる絹の名なりしを轉りては火色の染色をさして掻練といへりこの風俗歌なるも染色を
さしていへる也委くは餘釋にいふを見るべしさてこゝにこのめるといへるはたゞかの歌の詞によりたるまでにて別に意はなしかいねりのや
うにはなの色づきたる事とのみ見るべし
御つゞしり歌の　（釋）歌をきれ〳〵にうたふ事にて今俗はな歌といふに近く聞ゆ帚木にも有舊注共はひがこと也
あながちなる御事かな　（釋）他の女房たちの詞也それはあながちの給ふといふもの也ともどく也此中にとは此人々の中にはとの意也にほへ

るはなもとはしか赤き鼻もなしと也例の花をおもへる故ににほへるとはいへる也

左近の命婦肥後の釆女や　〔釋〕此二人の女房かれて鼻赤き人と評判あるさまにかきなしたる也さる人やまじりて有つらんなどかの末摘花の事

を心得ればおの〳〵いひしろふ也

御かへり奉りたれば　〔湖〕命婦源の御返事を末摘へ奉りたるなり

宮には女房つどひて　〔岷〕末つむのかたの人々よりて見る也

あはぬ夜を云々　〔花〕拾遺「衣だに中にありしはうとかりきあはぬ夜をさへへだてつるかな　〔玉〕下句はかの末摘花よりおくり給へる衣の事

にてよみ給へる也逢ぬ夜をへだつる衣のあるうへにいとゞこれをかされて見よとやといへるにていよ〳〵重ねてへだてんとやの意也　〔釋〕

花鳥に引給へる拾遺集の歌の詞を用ゐてしたてたる也逢ぬ夜をかされてといふ語脉なり結句は相見よとやの意にてたがひに見るをかくいふ

なるべし源注拾遺に花鳥說の我も見んとあるをとがめたるはさる事なれど我にれんごろに見よとてや云々といへるは又たがへり

すてかい給へるしもぞ　〔釋〕書すて給へるといふに同じ心とゞめ給はぬさま也

御れうとて人の奉れる　〔花〕源氏君の御料とて人のまゐらせたるきぬをさながら末摘の方へおくり給ふなり

えびぞめ　〔河〕衣服令之義解曰蒲萄(エビゾメ)　蒲萄者紫色之最淺也　〔釋〕蒲萄(ブドウ)の實の色にかたどりたる染やうなり

山ぶきかなにぞ　〔釋〕山吹は若紫に注ありなにぞといへるはたゞ打見たるさまをおほらかにいへる也

ありし色あひを　〔湖〕命婦が心也末摘のおくり給ふをもどきて源の是を奉り給ふかと也

かれはたくれなゐの　〔釋〕末摘の方の老女房どもの批判する也かれとは末摘花より奉り給へる衣のこと也紅のおも〳〵しかりしとは今やう色

は淺けれどくれなゐは色がらの重々しきといふ意也

さりともきえじと　〔玉補〕此下にぞとかなんとかあるべし　〔釋〕きえじとは色あひのけおされてはえなくおしけたるゝをいふさりとも此方よ

りの衣もおしけたれじといふなり

ひめ君もおほろげならで　〔釋〕末摘花も大かたならでよみ出給へる歌なれば物に書とめておき給ふと也ふるめいたる人のさまを戲れに弄じた

る書ざま也

男踏歌　〔湖〕年始の祝言の歌うたひ舞をかなでゝ所々へめぐりありく事也　〔岷〕毎年におこなはれぬ故にことしはといへり女踏歌は毎年正月

十六日也　〔花〕男踏歌は正月十四日の事也初音卷に委くしるすべし

例の所々あそびのゝしり給ふ　〔岷〕然るべき人々も男踏歌には出給ふ也仍て打ならしの所々にあるき給ふなり

なぬかの日の節會　〔岷〕白馬節會也　〔弄〕白馬其頃はひるおこなはれたるなるべし　〔釋〕白馬いにしへは青馬を進(タテマツ)りしなり故に白馬とかき

あるべければ。れいの所々あそびのゝしり給ふに。物さわがしけれど。さびしき所の。あはれにおぼしやらるれば。なぬかの日のせちゑはてゝ。夜にいりて御前よりまかで給ひけるを。御とのゐどころに。やがてとまり給ひぬるやうにて。夜ふかしておはしたり。れいの有さまよりは。けはひうちそよめきてよづいたり。君もすこしたをやぎ給へるけしき。もてつけ給へり。いかにぞ。あらためてひきかへたらん時。とぞおぼしつゞけらるゝ。日さしいづるほどに。やすらひなして出給ふ。東のつまどおしあけたれば。むかひたるらうの。うへもなくあばれたれば。日のあしほどなくさしいりて。雪すこしふりたるひかりに。いとけざやかに見いれらる。御なほしなど奉るを。見いだして。すこしさしいでゝ。かたはらふし給へるかしらつき。こぼれ出たるほどめでたし。おひなほりを見いでたらん時。とおぼされてかうしひきあげ給へり。いとほしかりし物ごりに。あげもはて給はで。けうそくをおしよせ

てもなほあをうまのせちゑといへり天皇馬寮よりひき遣らする白馬を御覽じて群臣に宴を賜ふ儀式也陽氣を助くる爲なりとぞ委しくは餘釋にいへり

御とのゐ所〔湖〕きりつぼ也

そよめき〔玉補〕こゝにてはにぎやかなる心と聞ゆ（釋）よづいたりと有もこゝは世間なみになりたる意と聞ゆ源氏より御贈物などありし故なるべし

君もすこしたをやぎ給へる（釋）姫君も少したをやかになり給へるけしきをもてつけ給ふと也たをやぎは和らぎといふがごとし初の埋れいたきにくらべて少したをやぎとはいへる也

いかにぞあらためて（釋）ひきかへたらん時いかにぞといふ意を打かへしたるは例也〔岷〕末摘の心も形もあらたまりたらばいかならんと源の心に思ひ給ふ也年のあらたまりたると又衣裳などのかはりてちと見なほしたるにてかやうにお

もひ給ふ也
やすらひなして　〔湖〕踊りかれ給ふやうにしなし給ふ也
うへもなく　〔岷〕屋れなども板間がちなる也　〔湖〕屏のやれもなきさま也
雪すこし降たる光に　〔釋〕雪の日の映じたる也
かたはらふし　〔岷〕少しかたふきかゝり物によりかゝりなどしたる體なり
おひなほりな　〔岷〕源の心に樣體なほしかたちなども見なほし給ひてもしかたちなどもなほりてはと思ひ給ふ也
〔釋〕上にあらためて引かへたらん時とありし脉也
かうし引あげ給へり　〔細〕上下つゞきたる長き格子なるべし今の紫宸殿などの如く也それは内の方へあぐる也　〔孟〕この格子も長きしとみなるべし
いとほしかりし物ごりに
〔釋〕さきに末摘花のかたちのわろきを見あらはしていとほしかりし

て。うちかけて。御びんぐきのしどけなきをつくろひ給ふ。わりなうふるめいたるきやうだい。からくしげ。かゝげのはこなど。とりいでたり。さすがにをとこの御ぐさへ。ほの〴〵あるを。ざれてをかしと見給ふ。女の御さうぞく。けふはよづきたりとみゆるは。ありしはこのこゝろばへを。さながらなりけり。さもおぼしよらず。けうあるもんつきて。しるきうはぎばかりぞ。あやしとはおぼしける。ことしだに。こゑすこしきかせ給へかし。またるゝものはさしおかれて。御けしきのあらたまらんなんゆかしき。とのたまへば。「さへづる春は。とからうじてわなゝかしいでたり。さりや。としへぬるしるしよ。と打わらひ給ひて。「夢かとぞみる。とうちずじていで給ふを。見おくりてそひふし給へり。くちおほひのそばめより。なほかのすゑつむ花。いとにほひやかにさし出たり。みぐるしのわざやとおぼさる〔二條院におはしたれば。むらさきの君いともうつくしきかたおひにて。くれなゐは。

にこり給ひて格子をのこらず上(ゲ)もはて給はぬ也をかしかりしとある本はわろししかいふべき所にあらず
けうそくをおしよせて　〔弄〕長きみかうしを引かけ給ふなるべし上下つゞきたるを脇息によせかけん事たより有べき歟但分明ならず云々
〔釋〕格子を上(ケ)はてずして脇息を格子のほとりへおしよせて上(ゲ)かけたる格子をその脇息へ打かけて外のあかりをひきて鬢ぐきをつくろひ給ふ
なり孟津いたくたがへり
きやうだいからくしげ　〔河〕鏡臺唐匣(カラクシゲ)掻上函(カヽゲノハコ)掻髪之具足入たる物也　〔細〕かやうの御具足は故宮の御物なるべし　〔釋〕拾遺に和名抄を
引れと今略(ハブ)くこれらの圖は類聚雜要抄に見ゆ
とり出たり　〔湖〕女房達取出たるべし
ざれてなかしと見給ふ　〔釋〕かゝる心つきなき御すまひに男の調度などはあるまじきを案外に有しを見てほどよりはざれたるとおぼす也
ありしはこの心ばへを　〔細〕ふるとしに源より奉られし衣裳をそのまゝめすなり　〔釋〕心ばへは心ざしといはんが如し
さもおぼしよらず　〔湖〕源氏より奉り給ひし裝束をそのまゝ末摘のめしたるとも源氏はおぼしよらざりし也
けうあるもんつきて　〔湖〕興ある紋のけやけきにつきてあやしく源の奉り給へるに似たりと源の心をつけ給へる也
またるゝ物はさしおかれて　〔河〕拾遺「あら玉の年立かへるあしたよりまたるゝ物はうぐひすの聲　〔釋〕鶯のこゑよりは先末摘花の御けしき
のあらたまりて物いひ給はん聲のゆかしきと也
さへづる春はと　〔河〕古今「もゝ千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれどもわれぞふりゆく　〔釋〕あらたまらなんとあるにつけて此歌の詞を
いひ出給へる也わなゝかし出たりははづかしきに聲のふるひたるさま也　〔岷〕われぞふりゆくといふ心をのべ給へる末摘の詞也卑下しての
たまふ也
さりや年へぬるしるしよ　〔釋〕さりやは然有(サアリ)といふことにてや。はいひすてのや。也われぞふりゆくといふをうけて然有(サアリ)しか物のたまふも年を經
ぬる驗(シルシ)ぞとてわらひ給ふ也
夢かとぞ見ると　〔河〕「忘れてはゆめかとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは　伊勢物語　〔釋〕此歌の思ふとあるを見るとかへて引
れたるは例のこゝにかなへんとてのたくみ也一翁云ゆきふみわけてといふ詞をけふの雪のけしきにはせたる也といへり奥入に引れたる
歌はさらにかなはずひがこと也
かたおひ　〔拾〕萬葉第九云八年兒之(ヤトセゴノ)片生之(カタオヒノ)時從(トキユ)云々この物語末にはかたなりともいへり　〔岷〕おひとゝのほられどもうつくしきしたちといふ
なり
紅はかうなつかしきも　〔花〕くれなゐは紅顔をいふなり　〔釋〕紅顔といふまでにもあらずたゞうつくしきたとへのみなりさるは末摘花を紅に

たとへたるにくらべていへる也きぬの事也といふ説はすべてあたらず

むもんのさくらのほそなが

〔河〕櫻色は面はうすく裏はこき蘇芳也ほそながは幼少の貴女の着する物也　〔釋〕無紋とは地に何の形もなきをいふ細長はかりぎぬのくびかみのやうにたて〻三はたばりの物也といへり

古代のおば君の御なごりにて云々

〔新〕古代は男にあふほどにならでは歯黒せざりけん故に古代のおば君の心掟の殘りて十二ばかりになれども猶黒めんことはいまだしきこと〻少納言などはいへど猶とてせさせ給へりといふなるべし

〔釋〕右新釋の説少納言などはいへど〻あるは文外のよしなしごとなれど其外はよろしげ也引つくろはせとは鐵漿をつけさせ奉りて形を引つくろはせ給へる也岷江の或抄に祖母君の服なりし故おそなはりたるやうにいへるはひがこと也さ

かうなつかしきもありけり。と見ゆるに。むもんのさくらのほそなが。なよよかにきなして。なに心もなくてものし給ふさま。いみじうらうたし。こだいのおば君の御なごりにて。はぐろめもまだしかりけるを。ひきつくろはせ給へれば。まゆのけざやかになりたるも。うつくしうきよらなり。心からなどかううき世を見あつかふらん。かく心ぐるしき物をも。みてゐたらで。とおぼしつゝ。れいのもろともにひいなあそびし給ふ。ゑなどかきていろどり給ふ。よろづにをかしうすさびちらし給ひけり。われもかきそへ給ふ。かみいとながき女をかき給ひて。はなにべにをつけて見給ふに。かたにかきてもみまうきさましたり。わが御かげのきやうだいにうつれるが。いときよらなるを見給ひて。てづから此あかばなをかきつけ。にほはして見給ふに。かくよきかほだに。さてまじれらんは。みぐるしかるべかりけり。姫君見て。いみじくわらひ給ふ。まろがかくかたはになりなん時いかならん。との給へば。

ては古代のといふ事いたづらなり又長澤氏はこは歯をそめしにはあらで歯黒の具もて黛をひきたるなるべしといへれど歯黒とあるを打まかせてさはいひがたし案に歯を染ると黛をひくとは必同時にせしなるべしさらでは次の文聞えがたし又新釋に歯黒めの後はゝうまゆの常のまゆになりたるをいふとあるはうらうへのひが事也

心からなどかゝうきよを云々　〔岷〕このうつくしき紫上ばかりを見て居ずしてなぜにうき思ひあつかふぞと也　〔釋〕諸注の中に此説よろし心ぐるしきものといふを末摘花と見たる説どもはわろしこゝは二條院へかへりて紫上のうつくしきに見くらべて末摘花の事を後悔し給ふことをいへる所なれば心ぐるしきものは必紫上ならではかなひがたしうきよを見あつかふとあるが末摘花の事也うき世とは世は例の男女の緣の事うきは心にかなはずして憂はしき意也あつかふは取あつかひて苦勞するをいふさて心ぐるしきは氣にかゝりて心のくるしく思はるゝにて雅語譯解にイタ〳〵シイと譯したる方の意なり

かみいと長き女を　〔釋〕末摘花のかたちをかき給ふなり

あかばなを　〔釋〕あかばなは紅花にて卽紅粉の事なるべし俗に藍バナなどいふ語をも思ふべし紅粉を筆にてかきつけ給ふなりこれを赤鼻と說たる注どもはわろしさてはかきつけといふこと聞えがたし

さてまじれらんは　〔釋〕さてといふ事一本によりて補ひつ　〔湖〕よき顏にもあかき鼻のかくまじれるは見苦しからんと也

さもやしみつかんと　〔釋〕つけたる紅粉のさながらに染着んかと紫上の危ぶみ給ふなり

空のごひをして云々　〔釋〕のごふまねをして也用なきすさびはいたづらなるなぐさみといふ意也

御すゞりのかめの水にみちのくにがみをぬらして　〔釋〕此句落たる本あり今河海に引れたる本又一本によりて補ひつ硯の瓶は今水いれといふものゝ事也此句より平仲を出し來れり味はふべし

へいぢうがやうに云々　〔河〕平仲は平貞文が字也女にことに心ざしあるけしきを見えんとて硯の瓶に水を入てもちて目をぬらしてなくよしをしけり女心得て墨をすりて入たりけるをしらでれいのやうにかほにつけてかへりたるを見て家なる女のよみける「我にこそつらさは君が見すれども人にすみつく顏のけしきよ　宇治大納言物語　〔釋〕平仲がごとく墨にて色どりそへ給ふなどの意也そへとは赤きうへに墨を也

あかゝらんはあへなんと　〔拾〕敢は堪と心かよひて聞ゆれば赤きは猶堪忍すべし黒く色どりなし給はゞ見ぐるしさまさりてたへがたしと也云々

いもせ　〔釋〕夫婦といふほどのこと也

うらゝか　〔拾〕遲々をうら〳〵とよめり後のうを略してうらゝといふかはうらやかといふ心にそへたる也

ほゝゑみわたれる　〔釋　花の開くを人のゑむにたとへていへる詞にてもろこし人もいへり花鳥の素笑梅の事に餘滴に辨へたるがごとし不用な

れば こゝに載ず
はしがくし（花）仁和芹川行幸次ニ幸二八條院一爲レ作レ寄二御輿一之便初造二階隱一云々見二吏部王記天慶六年一也
今案南階の間にはしらを二つたてゝうへをふきいだすをはしがくしといふ鳳輦をひんがしむきにかきすゑて左のわきより乘御下御あらんため也
くれなゐの云々 （釋）上の句は紅梅の色につきて末摘花の形を思ひ出つゝうとみし給ふ心あらばなり下句はたゞ梅の事のみにはあらず末摘花の種姓はよろしくなつかしけれどいゝふ意をそへたるべしさらではたゞ梅の歌となりていたづらなる也諸注此意を説れざるはいかゞ
いでやとあいなく云々 （釋）紅梅の花より末摘花を思ひいでゝあいなくうちうめかれ給ふ也此卷は末摘花の事を語るが主なればこの事をもて終られたり結局心ありといふべし

うたてこそあらめとて。さもやしみつかん。とあやふくおもひ給へり。そらのごひをして。さらにこそしろまね。ようなきすさびわざなりや。うちにいかにのたまはんとすらん。といとまめやかにの給ふを。いと〳〵ほしとおぼして。よりて。御硯のかめの水に。みちの國がみをぬらして。のごひ給へば。へいぢうがやうに。いろどりそへ給ふな。あかゝらんはあへなん。とたはぶれ給ふさま。いとをかしきいもせと見え給へり。日のいとうらゝかなるに。いつしかとかすみわたれるこずゑどもの。心もとなき中にも。梅はけしきばみほゝゑみわたれる。とりわきて見ゆ。はしがくしのもとの紅梅。いとゝくさく花にて色づきにけり。

くれなゐの花ぞあやなくうとまるゝ梅のたちえはなつかしけれど。いでや。とあいなくうちうめかれ給ふ。あないとほし。かゝる人々のすゑ〴〵。いかなりけん。

あないとほし（釋）花鳥に引れたる本又萬水一露本などによりて補へり此句なき本どもはうつし落せる也末摘花のひたすら思ひおとされ給ふたゞ作者のたすけあはれびたる詞にてかならず有べき所也

かゝる人々のすゑ〳〵（釋）かゝる人々とは末摘花はいふもさら也空蟬軒端荻などにわたりていへりと聞えたりこれを紫上と末摘花とゝいへる注はかなひがたしこゝは空蟬末摘花などの事をしばらくたちきりて他の物語にうつるべき結構なればかくいひてとぢめたるいと心ふかし紫上は次の卷々にも絶ずむれとかゝれたればかくおぼめきていふべくはあらずよく〳〵思ふべしさてかくいひとぢめおきてはるかに須磨のうつろひの後に蓬生關屋の二卷をあらはされたるいと〳〵心ふかくめづらか也かの卷々につぎて心得べし

第七帖　紅葉賀　評釋

〔舊注〕卷の名は詞をもて號す但此卷に紅葉賀とつづきたる詞は見え侍らず試樂の日かくつくしつれば紅葉のかげやさうぐ〵しくとあり又花宴卷に御紅葉の賀とあり又藤のうら葉の卷に朱雀院の紅葉賀れいのふる事おぼし出たるとありかれこれをとりあはせて卷の名とせりしかのみならずうつぼ物語に神泉苑に紅葉の賀きこしめすべきとあり又藤井の宮に藤の花の賀し給ふとあり又雪の賀といふ事あり承和の御時紅梅の賀おこなはるゝ事ありこれらの名目を例とせるにや

〔細〕賀とは其年の滿たるを賀して行末の寶算を祈る心也天皇の御賀は仁明天皇嘉祥二年三月興福寺大法師等奉レ賀二天皇滿一四十一これはじめ也太上天皇の御賀は淳和天皇天長二年十一月奉レ賀二太上天皇五八之御齡一也これ始なり

〔新〕賀は四十より始めて末々十とせに滿るごとに賀ふ例也云々懷風藻に年賀の詩あり然れば皇朝にて年賀するもいと古き世より侍りけりされどすべらぎの御賀の事は此抄のごとくのみ見ゆ

〔玉〕源氏君十八の十月より十九の秋まで也或人問若紫も末摘花も此卷もはじめの同年なることは何によりてしれるにか答朱雀院行幸の事若紫の末又末摘花にもさだ有て此卷の始にまさしく見えたりこれにて同年なることしるし又若紫に藤壺女御夏より姙給へるよし見えて此卷の末の年の二月に御產あり又紫上の祖母尼君は若紫卷の九月にかくれ給ひて此卷に三箇月にて紫上除服の事ありこれらにてもしるべし

〔釋〕卷名の事諸抄のごとし十月の十日あまり紅葉の蔭にて御賀の宴し給ひて舞樂の事などある故に紅葉賀といふそのをりにあひたる物もて御賀に名くることと引れたる藤花の賀雪の賀などにてしられたりさて此卷名は次の花宴に對へて花と紅葉と賀と宴と春秋相照したる名としるべし其よしは末摘花の卷にいへるがごとし

〔評〕此卷の發端に朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなりと書出られたるは若紫卷末摘花卷にすでに其伏案をあらはし置たるをうけて說出たる也は。

といひなりといへる辭の勢ひに心を付て味はふべしさて行幸の事をかの卷々にあらはし置れたるは例の事をにはかにせぬ法なることはいふもさらにてかつは彼卷々と相照して年月のほどをもしるべく彼と此と事を分ちたる結構をも示すべきためにていみじき照應の法といふべしさて此卷は藤壺の御事と紫上の事とをたがひにまじへてかたるを主と立られたりさるは此卷にてかの物のまぎれの若宮生れ給ひ其事によりて藤壺は世の中をはゞかり給ひて源氏君に逢給はんことを深くつゝみなげき給ひてやう／＼御物遠くなりまさり給ふよしをあらはし其御物思ひのすゑ竟には尼となり給はん伏案をすゝめゆき源氏君はこの物遠くつれなき御なぐさめにて紫上に思ひうつり給ふさまをあらはして藤のゆかりの紫にうつりかはるべきよしをやう／＼にかたりもてゆくなりさて又若宮のうまれ給ふにつけて帝の御寵愛大かたならず藤壺を中宮に立給ひて帝は御位をおりゐさせ給はん御下心の出來たる事をいへるは一たび朱雀院がたの御世となりて源氏君須磨へさすらへ給ひさて後に冷泉院がたの御世となりてつひには榮をきはめ給はんの伏案を遠く思ひ構へられたるものと見えたり其中に舞樂の所に源氏君のかたてに頭中將を相そへ末に源内侍の御いどみの事をいへるなどは例の正副の脉を貫したる也又弘徽殿の女御の思ひ給へる事共を所々にあらはし葵上がたの事を挿れたるなどは例の文脉を失はずして葵卷須磨卷などにいたるべき伏線の法なればさして重きかたの事にはあらず内侍の一段は藤壺宮紫上などの物のあはれのさりがたくせちなる事又いとけなく物はかなきありさまなどかたりたる後にいとも年おいたるおむなの花やぎたる物語をとうでゝいたくあざれ興じたるにて見む人に厭しめざる爲なるべしさて卷末に藤壺の立后の御事若宮と源氏君と似給へる事をいひてとぢめられたるは此卷の本の意をうしなはず且末の卷々の端を起して終られたるにていひしらずあぢはひあり

○舞樂の段に青海波をとり出たるはかの桂殿迎初歳云々の詠の語御賀によせあればなるべく承香殿ばらの四の御子の秋風樂まひ給へるは紅葉の

よせなるべしかゝる事にも其縁を思はれたるいといみじ又この御舞樂の事につきて帝の御心藤壷の御心源氏君の御心などかた〴〵に書分られたるにげにさもあるべく聞ゆるなどはれいの事にてめづらしげもなき物からつゆのみだれなくてきはやかにわかれたる猶いとめでたし三條の宮にて兵部卿親王に對面し給へるくだりもいとめでたし紫上を源氏君むかへとり給ふとはみこはまだ知給はずてかたみに女にて見奉らまほしといへるいとをかしくむこになどはおぼしよらでといへる心きゝたる書ざま也紫上のひゐな遊の所にふたゝび犬君といふ女童が麁忽を引出られたる照對もいと委しと言べし大殿の事は葵卷の伏線ながらやう〳〵御中のむつましからぬさまをほころばしきてさる故をことわり說れたるなど例のよろし若宮の生れ給へるにつけても帝藤壷源氏君の御心を書分られたる所などつゆ紛れずしてめでたく紫上に琴敎へ給ふ所やう〳〵およずけ給へるさまをあらはして葵卷の結構とせられたるもめでたし

○源內侍の一段老女の色めきたるさまをいとよく寫しかゝれたりもたりし扇のいろめかしき繪やうより出し來て「もりの下草おいぬればといひ「もりこそ夏のとあざれたる後に「手馴の駒にかり飼んといふ歌又「駒なつくめる森の木がくれといふ歌などよまれたる其次に「思ひながらぞやとあるより長柄の橋柱にいひうつされたるなど又內侍が「瓜作になりやしなましとうたひたる所に君東屋をうたひてといひ「おしひらいてきませと打そへたりと云て「立ぬるゝ人しもあらじといふ歌又「人妻はあなわづらはしといふ歌を東屋の詞によりてよまれたるなどつゆのよどみなくして忽に轉り忽に變る筆つき潛める龍の雲をおこして見るがうちに大空に登るこゝちす頭中將を引もてきていたく挑ませたるは末摘花卷に常陸宮にしたひきて見つけたる餘波をいたくひゞかしたる照對の法なり其中に頭中將の屛風をたゝみよせてさわがす事をいひさして內侍のさき〴〵有し事より思ふ心を委しくいひ次に源氏君のおもほす心の中を說ことわられたるなどかく烈しくせはしき中に聊も情景を失はずさて次に直衣と帶とを引しろひて「つゝ

むめる名やもり出ん云々とよまれたるよりつとめて直衣の袖と帶とを取かへし給ひて一君にかく引取れぬる帶なればといふ歌まで六首の贈答例のよどみなく珍らしきに縁の詞をはづさずしてつらねられたるなどさばかりの事ならねど本上のかどかどしき溢れて聞えたりかくて源氏君の御いきほひのいみじきに頭中將のいどみ給ふゆゑよしをことわりて止められたるなどさきの卷々よりの正副の脉を失はずして全く瑕なき玉となれり心をつくへし

朱雀院の行幸は。神無月の十日あまりなり。よのつねならず。おもしろかるべきたびの事なりければ。御かた〴〵物見給はぬことを。くちをしがり給ふ。うへも藤壺の見給はざらんを。あかずおぼさるれば。試樂を御前にてせさせ給ふ。源氏の中將は。青海波をぞまひ給ひける。かたてには。大殿の頭中將。かたちようい人にはことなるを。たちならびては。花のかたはらのみ山木なり。いりがたの日かげさやかにさしたるに。がくのこゑまさり。物のおもしろきほどに。おなじまひのあしぶみおもゝち。よに見えぬさまなり。えいなどし給へるは。これやほとけの御かれうびんがのこゑならんと聞ゆ。おもしろくあはれなるに。みかどなみだをのごひ給ふ。上達部みこたちも。みななき給ひぬ。えいはてゝ。袖うちなほし給へるに。まちとりたるがくのにぎはゝしきに。かほの色あひまさりて。つねよりもひかると見え給ふ。東宮の女御。かくめでたきにつけても。たゞならずおぼして。神など空にめでつべ

朱雀院の行幸〔箋〕三條朱雀に四町に造られたり是後院也天子脱屣の後の御在所也〔釋〕天皇の他へ出ますを行幸といふ字義餘釋にいへりさてこれは桐壺帝朱雀院におはします先帝の御賀し給はん爲に彼院へ出ます事也是若紫末摘花の巻巻にいさゝかづゝにほはせたる脉をこゝに至りてとり出たる也心をつくべし

よのつねならず云々〔眠〕今度の御賀別して引つくろはるゝ故に尋常ならず面白かるべき度の事といふなり

御かた〴〵物見給はぬことを〔細〕禁中の外なれば后女御などの御見物かなはざる也

上も藤つぼの見給はざらんを〔釋〕藤つぼ取わきたる御寵愛のほどあらはしたる脉也

試樂を御前にて〔花〕御賀には試樂調樂などいひて舞樂のこゝろみどもあり此時のしがくは内裏にてせさせ給ひて藤壺女御に見せ奉らせ

給ふなり

源氏の中將大殿の頭中將　〔玉補〕かく改めてかけるはおほやけの人々より稱する意なり

青海波　〔河〕南宮譜云此曲承和御時大納言良峯安世朝臣奉勅命作此舞時依勅改盤渉調但詠小野篁朝臣作云々　舞裝束　表袴（文小葵）青色袍蒲萄染下襲（南大海浦）（裏蒲萄）大海浦半臂　舞手向一方摸寄波引波體　〔花〕青海波は盤渉調唐樂也から人の袖ふるとよみ給へるに相違なかるべし

かたてには　（釋）かたては片相手といふほどの義なり

花のかたはらのみやま木　〔玉〕目もうつらぬよし也人にはことなるをたちならびてはといへる語のいきほひにてもしろるべし云々　〔花〕うつぼの第九云花のかたはらの常盤木のやうに見え給ふ云々　（釋）源氏君を花にたとへたるはいふもさらなりみ山木はけおされたることのたとへなり

入がたの日かげ云々　（釋）けしき例のうちあひたり同じ舞とは俗にいはゆる相舞の意な〔ら〕しふみは足の拍子おもゝちは顏つきといふ意にて舞のふりにおもはくあるさまをするをいふ

えいなどし給へるは　〔河〕詠曰　桂殿迎初歲　桐樓媚早年　剪花梅樹下　蝶鷰畫梁邊　（釋）この末句なほ誤字あるべきかと新釋にもいはれたりいかさまにも少し穩ならずさて右の詩を字音のまゝに詠めて吟ずるをえいとはいへるなり和名抄にも青海波の下に有詠と見えたり

ほとけの御かれうびんがの聲　〔和〕かれうびんがとは鳥の名也かひこの中よりなく聲のいづれの鳥にもまさりたりといへり是を佛の說法の聲にたとふる也　（釋）御の字は聲の上にある意也

みかどなみだをのごひ給ふ　〔岷〕桐壺帝をはじめて親王大臣以下皆感淚をもよほす也

えいはてゝ袖打なほし給へるに　〔岷〕詠のあひだは音樂の聲をやむる也作法ありされば詠はてゝ樂を吹出すを待とりたるといふ也云々　（釋）袖打なほしは既に詠はてゝ舞んとして袖をなほし給ふさまなり

つれよりもひかると　〔拾〕ひかる源氏といふゆゑに常よりもといへり

神など空にめでつべき　〔河〕大鏡云いみじく侍りしことはやがて同君（延喜）の大井の行幸に富小路の御息所の御腹の親王（惟明）の七歲にて舞まはせ給へりしばかりの事こそなく侍りしか萬の人しほたれぬは侍らざりき御かたちのひかるやうにうつくしくわたらせ給ひしかば山神のめてゝとり奉りき」かやうの事をもて書る也　（釋）げにかやうの事を思ひて物せられたるにはあるべし空にめでつべきとは空より見て愛つべきといふ意なるべし

うたてゆゝしと 〔岷〕いま〳〵しくあぶないなどゝそねましくの給ふなり

わかき女房などは 〔釋〕弘徽殿のかくの給ふた若き女房など聞て笑止がる也

おふけなき心なからましかば

〔岷〕源の藤つぼを心かけ給ふ事なくばいよ〳〵めでたく見えんとの藤壺の心也 〔孟〕密通の事なくばと也

宮はやがて御とのゐ也けり

〔評〕藤つぼ直に御とのゐに參り給へることをいひて寵の甚しきをあらはし其ついでに源氏君の御評を引いでゝ藤壺の心のおにゝくるしみ給ふさまをにほはせさて舞の評よりしてつひに藤壺に見せ奉らんの御心にてといひてなほ御寵の深きをあらはされたる筆つき例のめでたしふかく心あるさま思ふべし

あいなう御いらへ聞えにくゝて

〔細〕藤つぼの御心のおにゝいらへ

きかたちかな。うたてゆゝし。とのたまふを。わかき女房などは。心うしとみゝとゞめけり。藤つぼは。おふけなき心なからましかば。ましてめでたく見えまし。とおぼすに。夢のこゝちなんし給ひける。宮はやがて御とのゐなりけり。けふのしがくは。青海波にことみなつきぬ。いかゞみ給ひつる。と聞え給へば。あいなう御いらへ聞えにくゝて。ことに侍りつ。とばかり聞え給ふ。かたてもけしうはあらずこそ見えつれ。まひのさまてつかひなん。家のこはことなる。この世に名をえたるまひの師のをのこどもは。げにいとかしこけれど。こゝしうなまめいたるすぢをえなん見せぬ。心みの日かくつくしつれば。もみぢのかげやさう〴〵しく。と思へど。見せ奉らんの心にて。ようゐせさせつる。など聞え給ふ◎つとめて中將の君。いかに御覽じけん。よにしらぬみだり心ちながらこそ。

物思ふにたちまふべくもあらぬ身のそで打ふりし心しりきや。あなかしこ。

にくゝし給ふ也 〔釋〕あいなうの解譯注のごとしことに侍りつとは他に異にかくべつにといふ意也此一句いとよく情景をつくされたり

いへのこはことなる 〔河〕良家子也若紫巻云十月に朱雀院の行幸あるべしとて舞人などやんごとなき家のこども云々 榮花物語第七〔東三條院御賀〕舞人家の子の君達なり云々 〔細〕堂上の人をいふ至徳記云良家とは攝家以下上臈家也 〔釋〕良家の君達は格別にて地下とは品格ことなりとの意也

まひの師の男ども 〔湖〕是は伶人の舞人の事也

こゝしうなまめいたるすぢ 〔釋〕こゝしうは兒々繁の意也オホコメキテうつくしく愛らしき意なり

心見の日かくつくしぬれば 〔岷〕試樂の日かやうにあまり出來たれば賀の日や結句ふできならんと也云々

とある。御返り。めもあやなりし御さまかたちに。見給ひしのばれずやありけん。

から人の袖ふることはとほけれどたちゐにつけてあはれとは見き。おほかたには。とあるを。かぎりなうめづらしく。かうやうのかたさへたど〳〵しからず。人のみかどまでおぼしやれる。御きさきことばの。かねても。とほゝゑまれて。ぢ經のやうに。ひきひろげて見ゐ給へり。行幸には。みこたちなど世にのこる人なく。つかうまつり給へり。東宮もおはします。れいのがくのふねどもこぎめぐりて。もろこしこまとつくしたるまひども。くさおかほり。かくの聲。つゞみのおと。世をひゞかす。一日の源氏の御夕かげ。ゆゝしうおぼされて。みずきやうなど所々にせさせ給ふを。きく人もことわりとあはれがり聞ゆるに。東宮の女御は。あながちなりとにくみ聞え給ふ。かいしろなど 殿上人地下も。心ことなりと世人に思はれたる。いうそくの

見せ奉らんの心にて　〔釋〕藤つぼに見せ奉らんとて用意をさせつると也御寵のかぎりなき御詞なるべし

いかに御覽じけん云々　〔釋〕昨日の舞をいかに御覽じつらん藤壺の見給ふと思ふにつけてはかぎりもなきみだりごゝちなれどさながら舞たりと也

もの思ふに云々　〔新〕君こふと物をのみ思へば立さふべき心ちなどはもとより侍らぬをこたびは見せ奉らんの御料なれば強て袖をめぐらせし也さる意をしろしめしきやいなやと也

御返り　〔釋〕こゝより歌へかゝる意也さて次の詞どもは御返りのありし事のよしを地より評じたる也

めもあやなりし云々　〔細〕平生は玉さかの御返事もなかりしにけふ御返りのあるは昨日の舞をたぐひなく面白く思ひ給ひし故にてぞと草子地にことわる也

から人の云々　〔細〕青海波は唐樂也

かぎり。とゝのへさせ給へり。宰相ふたり。左衞門督。右衞門のかみ。ひだり右のがくの事をおこなふ。まひの師どもなど。世になべてならぬをとりつつ。おの〳〵こもりゐてなんならひ給ひける。木だかき紅葉のかげに。四十人のかいしろ。いひしらず吹たてたる物の音どもに。あひたる松風。まことのみ山おろしと聞えて。ふきまよひ。色々にちりかふ木葉の中より。青海波のかゞやきいでたるさま。いとおそろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたうちりすぎて。かほのにほひにけおされたる心ちすれば。おまへなる菊をゝりて。左大將さしかへ給ふ。日くれかゝるほどに。けしきばかりうちしぐれて。空のけしきさへ見しりがほなるに。さるいみじきすがたに。きくのいろ〳〵うつろひえならぬをかざして。けふはまたなきてをつくしたる。いりあやのほど。そゞろさむく。このよの事ともおぼえず。物見しるまじきしも人などの。木のもといはがくれ。山のこのはにうづもれたるさへ。すこし物の心しるは。

もろこしの事ははるかなる事なれば知がたし昨日の源の舞給ふさまたぐひなくあばれに忘れがたかりしよし也　（釋）此歌の上句詳ならず案ふに袖ふる事とあるに古事といふことをいひかけたるにやそは此樂の起りの古事などそのかみは傳はりてありしなるべし事といふ字に心を付て思ふべしさる故なくては下の文に「かうやうのかたさへたど／＼しからず人のみかどまでおぼしやれる御きさき詞のかれても」とあること聞えがたしたゞ青海波は左の唐樂也といふばかりの事をかくはいふまじきことわり也さて歌の意はから人の袖ふる古事の心は遠きさかひの事なれば知るべきにあらねどゝいひて源の歌に「袖打ふりし心しりきや」とある戀慕のことをそれはあはずして遠きことなれば今はさはあらねどゝ含めたるにもあらんか下句はさはいへど立つ居つする舞のさまはあはれに面白く見きといひて下には立につけ居るにつけていとほしとは思ひ侍りとふくめたるにや猶よく考ふべし諸抄の説は餘釋に擧て辨ふるがごとし

おほかたには　［玉］密通のかたにてあはれと見しにはあらずたゞ公界にてあはれとは見侍りしと也にはのはもじにも其意あり　（釋）大かたにはあはれと見きといふ意を歌にいひそへたる也

かうやうのかたさへたど／＼しからず云々　（釋）上にいへるごとくこの青海波の曲の起源の古事をさへしろしめしてたど／＼しからず他朝までおぼしやれるはまことに人の君とあるべき御后がねの御詞ぞとその才學をほめ給ふなるべし花鳥細流などに左右の樂のわけめを知て左は唐樂也と分別し給ふ事のやうに説給へるはいかゞあらん女宮なりともその世にさばかりの事しり給はんは何のめづらしき事かはあるべき猶考ふべし

持經のやうに　（釋）持經は手を放たず尊び信じてよむ物なれば源氏君の此御文を大切にし給ふさまをたとへていへるなり舊注説つくされず

行幸には云々　［岷］是より行幸の當日の儀也　（釋）花鳥箋などにこれを行幸の前日と見られたるはわろし

れいのがくの船ども　（釋）音樂する人々御庭の池に船を浮べて漕めぐりつゝ奏する事也故に例のとはいへり

もろこしこまとつくしたる　［河］唐（左）高麗（右）唐土高麗の樂をつくさるゝなり

くさおほかり　［箋］種々の樂數多きなり

かくの聲つゝみのおと　［新］桐壺卷に琴笛の音に雲ゐをひゞかしと書るは事せばし今は事の大きなれば樂とは糸竹をかれいひてさて有が中にことなるつゝみどもの音をばわけて物を大きにいはんの意にや云々

（釋）案にかくは角にて笛の名にや樂の聲鼓の音とならべいはんは心ゆかぬいひざまなればなり和名抄征戰具に兼名苑注云角本出二胡中一或云出二呉越一以象二龍吟一也揚氏漢語抄云大角波良乃布江小角久太能布江と見えたりかゝる物を樂器に交へて用ゐしにもあるべしかの大篳篥尺八など交へたるをも思ふべき也又和名抄音樂の曲調類に角調曲といふもあり考へ合すべしさて世をひゞかすとは今日の舞樂のにぎはゝしくて世中へ響くほどの形容を甚しくいへる也

ひと日の源氏の御夕かげ 〔細〕前に神など空にめでつべきと有し事也其故に誦經させさせ祈禱せさせ給ふ也 〔岷〕此事は弘徽殿のゝ給へる事也それをみかどの聞しめすべきにあらず如何試樂の日あまりなるまで見え給ひし故に行幸の日は御祈禱などある也 〔釋〕岷江の說ことわりあるに似たりさて此一段は弘徽殿女御の例のものねたみし給ふ脉なるを挿みて上下の照應としたる也これによりて「かいしろなどゝいふより當日の事也といふ注あるはたがへり皆當日の事をいふ中にこの御誦經の事又舞樂の事定められたることなどは兼日の事なれどさしはさみいひて委くする例の文法也うたがふべからず

かいしろ 〔河〕長秋卿笛譜云四十人之內有二序一人破二人垣代三十六人一云々 舞人の立そひ也輪臺の輪作とて舞臺の上にまろく立めぐる也此時懸琵琶あり云々 〔弄〕垣代には地下堂上相交歟云々 四十人の數も說々不同也 〔新〕垣代の中にはその舞人も管がたの人もあり又そのわざなき人々は反身を打て拍子をとる也云々 〔玉補〕三四十人の人立めぐりて笛ふくさま舞人のためには垣のごとくなる故にかいしろといふなるべし

いうそく 〔新〕此有職とは故實學問のみならず樂のかたにも心得たるをいふなるべしかいしろの管がたなどの外はさせる業にあらずといへどもよろづ大切にするには事心得たる人を侍らしむればよそめもおもく〳〵しくみゆる物なれば也 〔釋〕いうそくはその道に轉通なる人をいふと聞えたり文字は識字といふ說よろし

宰相ふたり云々 〔河〕延喜十六年亭子法皇五十御賀樂行事保忠卿于レ時參議右大辨 〔釋〕宰相は參議の事を唐めかしていふ中古よりの稱也左唐右高麗の樂の事を奉行せらるゝ也

まひの師どもなど云々 〔釋〕伶人家の樂師を呼とりつゝ各家に籠り居て稽古せられたるよし也師をとるといふ詞此頃よりありしにこそ

木だかき紅葉のかげに 〔釋〕これより立かへりてまた當日のさまをかたる也

四十人のかいしろ云々 〔細〕四十人のかいしろと讀切ていひしらずとよむ也四十人がみなこと〳〵く吹立たるにてはなき也

山の松風 〔花〕朱雀院には他山ある所也 〔釋〕案に山のといふことはなき本よろし下のみ山とかさなりてしらべわろく聞ゆ衍なるべし

かざしのもみぢ 〔花〕舞のかざしにはまことの立木の枝をもなり又つくり花をもかざす也ちりすきたるとあれば是は誠の紅葉と聞えたり

ちりすきて 〔釋〕細流箋などに散透とあれど猶散過の方なるべし散透といふ語聞なれぬ上にこれは十月の十日あまりなれば過といはんはにつかはしければ也扨散過たる紅葉はゞえなくて源氏君の顏の光にけおされたれば事をとる左大將菊を折て挿かへられたるよしなり用意あるさま也

見しりがほなるに 〔釋〕空のけしきさへなりからの風流なる物の感を見しりがほ也となり

うつろひえならぬを 〔釋〕菊は露霜にうつろひたるをしそめづるならひ也故にえならぬといへり

けふは又なき手をつくしたる
〔箋〕試樂の時にもこえたり
〔釋〕またと有まじき秘曲の舞の手を盡し給ふ也
いりあや　〔河〕舞有〻取ニ綾手ニ故云ニ入綾ニ　〔花〕俊頼歌云「郭公二村山をたづね見ん入あやの聲やけふはまさると顯昭注云舞には入あやとてさらに取て返しておもしろくまふ事によせて郭公のいりあやの聲やまさるとよめる也云々
そゞろさむく　〔湖〕ぞつとするほど面白き心也
物見しるまじき下人などの云々
〔釋〕下人どもゝこゝかしこのくまぐまに隱れ居てひそかにうかゞひ見るなるべし其中に少しものゝ心しるは涙をながして感ずるとなり例のほめたるすぢ也
承香殿の御腹の四のみこ
〔細〕桐壺帝の御子也　〔弄〕此女御誰ともなし
秋風樂　〔河〕盤渉調也　〔釋〕和名抄云秋風樂古老傳云弘仁天皇幸ニ南

なみだおとしけり。承香殿の御はらの四のみこ。まだわらはにて。秋風樂まひ給へるなん。さしつぎの見ものなりける。これらにおもしろさのつきにければ。こと事にめもうつらず。かへりてはことざましにやありけん。その夜源氏の中將正三位し給ふ。頭中將正下のかゝいし給ふ。かんだちめたちは。みなさるべきかぎりのよろこびし給ふも。此君にひかれ給へるなれば。人のめをもおどろかし心をもよろこばせ給ふ。昔の世ゆかしげなり□宮はそのころまかで給ひぬればれいのひまもや。とうかゞひありき給ふをことにて。おほい殿にはさわがれ給ふ。いとゞかのわか草たづねとり給ひてしを。二條院には人むかへ給へるなりと人の聞えければ。いと心づきなしとおぼいたり。うち〳〵のありさまはしり給はず。さもおぼさんはことわりなれど。心うつくしく。れいの人のやうにうらみの給はゞ。我もうらなく打かたりて。なぐさめ聞えてんものを。思はずにのみとりない給ふ御心づきなさに。さも

池院之初奏此曲
かへりてはことざましにや
〔餘〕朗云ことざましといふは源と四の御子とによりて外の面白からずなれる事をさしていふ也
その夜源氏の中將云々
〔花〕延喜御記云貞觀以來奉賀時有叙位之例 〔巴〕從より正になり給へり
正下のかゝい 〔細〕叙正四位下也 今まで從四位上也 〔釋〕加階とは位の階を加へ給ふこと也
さるべきかぎりのよろこびし給ふも 〔湖〕昇進のよろこび也 〔細〕源氏君にひかれて各昇進し給ふと也
昔の世ゆかしげ也 〔細〕源の前世のゆかしきと也 〔釋〕佛說にはすべて此世の幸も皆前世よりの宿業とする故にこの源氏君の人の目をも驚かし心をもよろこばせ給ひてあかぬ事なきは前世にいかなる因緣のあるにやそれしらまほしと思へるなゆかしげ也とはいへるなり
宮は其比まかで給ひぬれば云々

有まじきすさび事も出くるぞかし。人の御有さまのかたほに。其ことのあかぬとおぼゆるきずもなし。人よりさきに見奉りそめてしかば。あはれにやんごとなく思ひ聞ゆる心をも。しり給はぬほどこそあらめ。つひにはおぼしなほされなん。とおだしくかる〴〵しからぬ御心のほども。おのづから。とたのまるゝかたはことなりけり□をさなき人は見つい給ふまゝに。いとよき心ざまかたちにて。何心なくむつれまつはし聞え給ふ。しばしとのゝ内の人にも。たれとしらせじとおぼして。猶はなれたるたいに。御しつらひになくして。われもあけくれいりおはして。よろづの御事どもををしへ聞え給ふ。てほんかきてならはせなどしつゝ。たゞほかなりける御むすめを。むかへ給へらんやうにぞおぼしたる。まん所けいしなどをはじめ。ことにわかちて心もとなからずつかうまつらせ給ふ。惟光よりほかの人は。おほつかなくのみ思ひ聞えたり。かの父宮もえしり聞え給はざりけり。姫君は猶ときどき思

ひいで聞え給ふ時は。あま君をこひ聞え給ふをりおほかり。君のおはするほどは。まぎらはし給ふを。よるなどは。時々こそとまり給へこゝかしこの御いとまなくて。くるれば出給ふを。したひ聞え給ふをりなどあるを。いとらうたく思ひきこえ給へり。二三日内にさぶらひ。大殿にもおはするをりは。いといたくくしなどし給へば。心ぐるしうて。はゝなき子もたらん心ちして。ありきもしづ心なくおぼえ給ふ。僧都はかくなんときゝ給ひて。あやしき物から。うれしとなんおもほしける。かの御法事などし給ふにも。いかめしうとぶらひ聞え給へり□藤つぼのまかで給へる。三條の宮に。御ありさまもゆかしうて。参り給へれば。命婦。中納言の君。中務などやうの人々。たいめしたり。けざやかにももてなし給ふかな。とやすからず思ひ給へど。しづめて。おほかたの御物語きこえ給ふほどに。兵部卿宮まゐりたまへり。この君おはすときゝ給ひて。たいめし給へり。いとよしあるさまして。色めかしう

〔細〕藤壺の里亭へ退出也
〔岷〕藤つぼの御あたりをうかゞひありき給ふを仕事にして也ことをやくにてなどいふがごとし
さわがれ給ふ　〔湖〕とかくいひさわぐなどいふ心也源の藤つぼの事故無音なれば也
いとゞかのわか草云々　〔玉補〕いとどといふこと下のおぼいたりへかかれり　〔岷〕私云藤壺の事ならばしらず何事に疎遠なるぞと思ふに二條院に人むかへ給ふをさやうの事と思ひうたがふ也是は若紫卷にむかへとり給へる時分の事歟
うちゝゝのありさまは　〔岷〕葵上がたに紫のいまだいはけなきをしり給はればかくおぼすもことわりと也
心うつくしう云々　〔細〕葵上の性をいふ也ちと打とけざるやうに平生のありさまのある也さやうにだになくば他人にわくる心も有まじき物をと也　〔湖師〕帚木にゑんずべき事をばみしれるさまにほのめか

しうらむべからんふしをもにくからずかすめなさばといへるに思ひ合すべし

思はずにのみとりない給ふ云々　(釋)葵上の案外に打とけずもてなし給ふ心づきなさによりさは有まじきしのびありきなどもいでくると也夫婦のあひだの情けにかくのみなん有べき

人よりさきに　〔眠〕源の元服の夜よりのそひぶしなれば也

心をもしり給はぬほどこそ　〔新〕或説にはじめ源の心をしり給はぬ程こそといへるはいかゞいと初めたる時はいふにも及ばず今もなほ源の心を知給はぬをいふ也しか意得ざる時は前の文と違ふなり

おだしくかろ〴〵しからぬ　(釋)葵上の本性穩かに輕々しからればおのづから思ひ直り給はんと憑るゝかたは猶人よりはことなりとなりさて「つひにはおぼし直されなんと憑るゝ」と續く語脈なる中にかれての本性の故を挿みてか

なよび給へるを。女にて見んはをかしかりぬべく。人しれず見奉り給ふにも。かた〴〵むつましうおぼえ給ひて。こまやかに御物がたりなど聞え給ふ。宮もこの御さまの。つねよりもことになつかしう。うちとけ給へるを。いとめでたし。と見奉り給ひて。むこになどはおぼしよらで。女にて見ばや。といろめきたる御心にはおもほす。くれぬれば。みすの内にいり給ふを。うらやましく。むかしはうへの御もてなしにいとけぢかく。人ずてならで物をも聞え給ひしを。こよなううとみ給へるも。つらうおぼゆるぞわりなきや。しば〳〵もさぶらふべけれど。事ぞと侍らぬほどは。おのづからおこたり侍るを。さるべき事などはおほせごとも侍らんこそ。うれしくなど。すく〳〵しうて出給ひぬ。命婦もたばかり聞えんかたなく。宮の御けしきも。ありしよりは。いとうきふしにおぼしおきて。心とけぬ御けしきも。はづかしういとほしければ。なにのしるしもなくてすぎゆく。はかなの契や。とおぼし

たるは例の文法也
をさなき人は云々　〔細〕是より紫上の事也　〔玉補〕見はあひ見る也「つくといふ詞すみつく語らひつく又俗語ありつくなどのつく也
との丶内の人にも　〔孟〕二條院の内のこと也
はなれたるたいに　〔岷〕はじめてむかへ給ひし時より住給ふ二條院の西の對なるべしこなたは住給はぬ所と前にも有
をしへ聞え給て本かきて　〔釋〕本にかく書たるを「聞え給ひてほんかきてと湖月によめるはひがこと也萬水に手本とあるによるべし
まんどころけいし　〔河〕政所家司　〔岷〕家中をとりおこなふもの共也しかるべき家々にはある也さやうの衆までを各別に定置給ふ也
惟光より外の人は　〔箋〕家司の中にも惟光ばかりならではこの事をたしかにしらざる也
思ひ出聞え給ふ時は　〔釋〕尼君をのみいひて父君をいはざるは前の巻の脉也
あやしき物から　〔釋〕いまだいはけなき人をかくかしづき給ふをあやしく思ふ物から又うれしとおぼす也あやしきの詞いとよろし
かの御法事など　〔箋〕北山の尼君の百ヶ日なるべし　〔岷〕此法事は僧都のし給ふを源のいかめしくとふらひ給ふ也　〔釋〕いかめしくとは贈物供物などのにぎはゝしきをいふなるべし　〔評〕此段父宮の未だえしり給はぬに僧都の先聞給へるは尼君の緣ならめど小反覆の筆也
藤壺のまかで給へる云々　〔評〕はじめ藤壺の事をいひさして却て紫上の事にわたりこゝに至りて再び說おこされたるは事を間隔したる例の文法也
けざやかにもゝてなし給ふ哉　〔釋〕藤つぼみづからたいめし給はずして女房たちのみ出して外ざまむきに淸く物し給ふを安からず思ひ給へどさる心を靜めてと也
女にて見んは　〔細〕我を女にて兵部卿を見ばやと也　〔評〕此所源氏君も兵部卿宮も互に女にて見んとおぼしたるとある奇絕の筆といふべし心をつくべし
人しれず　〔釋〕心の中に也
かたぐ\むつましう　〔釋〕女にて見まほしく思ひ給ふ上に紫上の父藤壺宮の御兄なればかたぐ\むつましう覺え給ふ也舊注たがへり
むこになどは　〔玉補〕一本むこにとあるそよき　〔孟〕紫を源のとりて置給ふとはしり給はで源のうつくしきにつきて好色の心より女になりて見たきと也　〔評〕聟になどはおぼしよらでと下にほのめかしたる筆つきいとめでたし
みすのうちに　〔細〕藤壺のおはする簾中へ兵部卿宮の入給ふ也
昔は上の御もてなしに　〔岷〕桐壺の帝の源のをさなくおはしまし丶程は藤壺のおはする簾中へもめし入し事を思ひ出てあぢきなくおぼす也
こよなうとみ給へるも　〔釋〕今となりては人ぎゝをいたく憚り給ひて藤壺の疎々しくし給ふをつれなくおぼさるゝと也わりなきとは憚り給

ふがことわりなるにかく源氏のおぼえ給ふは無理にてくるしき意なり
ことぞと侍らぬほどは　〔孟〕さしたる事なき時はおのづからおこたりしと源の詞也
ありしよりはいとゞうきふしに　〔湖〕懐妊より後は源に媒の事をいよ〳〵うきものに思ひ給ふ也
はづかしういとほしければ　〔岷〕命婦が心に藤壺の御心を恥思ふ也
何のしるしもなくて　〔湖〕源の藤にあふひまもやとうかゞひあるき給ふしるしもなきなり　〔釋〕源氏君の命婦を頼み給ひししるしもなきなり
はかなの契や　〔釋〕かたみにとあれば相互にはかなく思しみだるゝなり源也藤也など定めたる説はいかゞ
少なごんは云々　〔細〕是よりまた紫上の事をいふなり云々
〔釋〕すべて此巻は藤壺宮の事を主(ムネ)

みだるゝ事。かたみにつきせず」少納言は。おぼえずをかしきよをも見るかな。これもこあまうへの。この御事をおぼして。御おこなひにもいのり聞え給ひし。佛の御しるしにや。とおぼゆるに。大殿いとやんごとなくておはし。こゝかしこあまたかゝづらひ給ふをぞ。まことにおとなび給はんほどは。むつかしきこともや。とおぼえける。されどかくとりわき思ひ給へる御おぼえのほどは。いとたのもしげなりかし◎御ぶく。はゝかたは三月こそはとて。つごもりにはぬがせ奉り給ふを。又おやもなくて。おひいで給ひしかば。まばゆき色にはあらで。くれなゐ。むらさき。山ぶきの。ぢのかぎりおれる。御こうちきなどをき給へるさま。いみじういまめかしくをかしげなり。をとこ君は。朝拜に參り給ふとて。さしのぞき給へり。けふよりはおとなしく成給へりや。とて打ゑみ給へる。いとめでたうあいぎやうづき給へり。いつしかひいなをしすゑて。そゝきゐ給へり。三尺のみづしひとよろひに。

と語る中に紫上の事を互にまじへたる文法也其中に大殿のことを挿みたるは上の卷々よりの脉にて葵卷へ貫きたり心をつけてよむべし

大殿いとやんことなくて　〔釋〕葵上貴くておはし又源氏君こゝかしこかよひ給ふ所多ければ紫上おとなになり給はんには方々の物ねたみなどにて物むつかしき事もや出來んと少納言おもひあやぶみながらさしあたりてかう格別に思ひ給へる御覺えのさまを見てたのもしく思ふ也かしこき乳母などのおもはんやうをいとよく寫し出されたり

御ぶく母方は三月こそは　〔河〕服忌令曰祖父祖母父方者暇卅日服五月母方暇廿日服三月　〔細〕花鳥に此除服十一月晦日と有いかゞ九月よりかぞふれば十二月に及ぶべし然らば十二月晦日なるべし末に男君は朝拜に參り給ふと有尤十二月可レ然なり　〔釋〕弄花に紫の祖母逝去は九月廿日のほどゝあり九十日は十二月廿日比なるべし晦日に除服と有は日をえらび給ふにやといへりこれはつごもりとあるを正しく晦日の事と見たるよりうたがひたる也下旬をすべてつごもりといへる例なれば廿日餘りと見て妨なし

またおやもなくて云々　〔釋〕紫上は母上にははやくはなれて祖母君の外にはまた母親もなくておひたち給ひしかば祖母君の恩ひとしほ深し故に服をばぬぎ給ひてもまばゆき色の紋ある衣をば着給はずたゞ紅紫山吹などの地のかぎり織るにうちきに着かへ給ふ也これ源氏君の御用意なるべし

地のかぎりおれる　〔新〕紋のなきをいふ也紅紫山吹など色は上なけれどそれに紋のあるは猶まばゆきなればまばゆき色にはあらでといふも紋なきをいふこと明らか也且禁色といふには織物もかぬること式の文にて見ゆれば色といふにもこゝは紋なき色をいひたればうす紅なるべしてふ說はわろし　〔釋〕地のかぎりとは紋なき所を地といふべしその地のかぎりに織て紋のなきといふ意也新釋の說さることながらまばゆき色にはあらでとあるは猶色の事にて紅紫山吹ともにうすきをいふなるべし舊說ひがことにはあらず

てうはいに　〔花〕朝拜は正月朔日の小朝拜をいふ朝賀にはあらず　〔弄〕正月朔日の小朝拜淸涼殿の前庭に諸臣拜す云々　〔河〕小朝拜延喜五年被レ停二止之一同九年又行レ之依二群臣請一也

いつしか　〔岷〕年こえてやがてなればいつしかといへり　〔釋〕おとなしくなり給へりやとのたまへるにつきて猶幼きさまをいはんとていつしかひいなおしすゑてとはいへるなり

なやらふとて　〔河〕追儺十二月晦日也鬼やらひの事也　〔箋〕此ひな屋にて追儺のまねをしたる也　〔岷〕〔聞書〕晦日にある事也そのまねを今日したる歟又よべこぼちたる歟北山にて雀の子にがしたるいぬき也　〔釋〕箋岷江の義いづれにてもあるべしいぬきが麁忽を再びとり出られたる照應いとめでたし

けふはこといみして　〔細〕正月一日なれば也

ひいなの中の源氏の君　〔湖〕若紫にもあり　〔孟〕ひいなの中にて源氏と定めて遊び給ふ也　〔評〕若紫の卷よりこなた引もて來れるひいなの脉

しな〴〵しつらひすゑて。またちひさきやどもつくりあつめて。奉り給へるを。所せきまで。あそびひろげ給へり。なやらふとて。いぬきがこれを打こぼち侍りにければ。つくろひ侍るぞとて。いと大事とおぼいたり。げにいと心なき人のしわざにも侍るかな。いまつくろはせ侍らん。けふはこといみして。なゝい給ひそ。とて出給ふけしき。いと所せきを。人々はしにいでゝ見奉れば。姫君もたち出て見奉り給ひて。ひゐなのなかの源氏の君つくろひたてゝ。内にまゐらせなどし給ふ。ことしだにすこしおとなびさせ給へ。とをにあまりぬる人は。ひゐなあそびはいみ侍る物を。かく御をとこなどまうけ奉り給ひては。あるべかしうしめやかにてこそ。みえ奉らせ給はめ。御ぐしまゐるほどをだに。ものうくせさせ給ふなど。少納言きこゆ。御あそびにのみ心いれ給へれば。はづかしとおもはせ奉らんとていへば。心のうちに。われはさはをとこまうけてけり。この人々の男とてあるは。みにくゝこ

也心をつけ味はふべし

うちにまゐらせ給ふ 〔湖〕ひいなにて参内のまねびなし給ふ也

今年だにすこし 〔湖師〕紫の年よりはをさなくおはせばかく申す也

あるべかしう 〔湖〕北方などいひつべくおとなしくしてこそ源にもま見え給ふべきに一向にをさなくて髪ゆふほどだに只は居玉はぬと紫のをさなきをいさめ申す也

御あそびにのみ心いれ給へれば 〔岷〕少納言がいひつる事を釋していへる詞也はづかしと思はせとは御男などまうけ給ひてはといふことと也

この人々の 〔湖〕少納言などの夫は形などよろしからぬと也

今ぞおもほししりける 〔湖〕今までは源の子のやうにおぼしたるなるべし

さはいへど 〔岷〕此詞草子地なりさはいへどゝはあそびにのみ心を入れ給へども是ほどの心得もゆきたるは年の數そふしるしと也

こそあれ。我はかくをかしげにわかき人をも。もたりけるかな。と今ぞおもほしゝりける。さはいへど御としのかずそふしるしなめりかし。かくをさなき御けはひの。ことにふれてしるければ。とのゝうちの人々も。あやしと思ひけれど。いとかうよづかぬ御そひぶしならん。とはおもはざりけり［　］うちより大殿にまかで給へれば。れいのうるはしうよそほしき御さまにて。心うつくしき御けしきもなく。くるしければ。ことしよりだに。すこしよづきて。あらため給ふ御心見えば。いかにうれしからむなど聞え給へど。わざと人すゑてかしづき給ふ。と聞給ひしよりは。やんごとなくおぼしさだめたることにこそは。と心のみおかれて。いとゞうとくはづかしくおぼさるべし。しひて見しらぬやうにもてなして。みだれたる御けはひには。えしも心づよからず。御いらへなど打聞え給へるは。なほ人よりはいとことなり。よとせばかりがこのかみにおはすれば。打すぐしはづかしげに。さかりにとゝのほ

かくをさなき御けはひの云々
〔岷〕人にしらせじと源のし給へどおのづから二條院にさぶらふ人々もをさながましきをきゝて不審に思ふなり

よづかぬ　〔新〕よをしるとは男に逢たるをいふ後撰の歌いせ物語などにまだよへずなどいふ皆是也

うちより大殿に　〔釋〕こゝより葵上のかたの事を挿めり例の脉にて且間隔の法也

れいのうるはしう　〔釋〕うるはしうは打とけずきとしたる顔よそほしうは形の粧ひのこと〴〵しきなり
心うつくしうはなつかしく愛らしき也

すこしよづきて　〔釋〕こゝは男女の情をしりてといふ意也あらため給ふはきとしたるを改め給ふ也

わざと人すゑて　〔釋〕わざとはわざの意にてかりそめならず格別にといふに近し二條院にかりそめならずわざ〳〵人をすゑてかしづき給ふと聞給ひしより格別におぼ

しめし定めたる人ならんと心おかれていよ〳〵疎遠に隔心し給ふなるべしと也
しひて見しらぬやうに〔釋〕此一句はなほ葵上の事也諸抄源氏君の葵上のけしきを見しらぬやうにもてなし給ふごとく釋れたるは「御けはひには」とあるはもじにさはりて聞ゆこゝは二條院の事を葵上のしひて見しらぬやうにもてなして源氏君のことしよりだにすこしよづきてなどみだれてのたまふ御けはひにはさすがに心づよからず相應に返答し給ふが猶別人よりは異也といふ意也
四年ばかりがこのかみに〔細〕源は葵より四年ばかりおとりなり
〔岷〕桐壺卷に女君はすこし過したるほどにてとあり
何事かは此人の〔釋〕十分にたらひて不足の所は物し給はぬ也
わが心のあまりけしからぬ
〔湖師〕源の葵のやうなる人を置てほかに心をつくすはよからぬ事の

りて見え給ふ。我心のあまりけしからぬすさびに。かくうらみられ奉るぞかし。とおぼししらる。おなじおとゞと聞ゆるなかにも。おぼえやんごとなくおはするが。宮ばらにひとりいつきかしづき給ふ御心おごり。いとこよなくて。すこしもおろかなるをば。めざましと思ひ聞え給へるを。をとこ君はなどかいとさしもとならはい給ふ御心のへだてどもなるべし。おとゞもかくたのもしげなき御こゝろを。つらしと思ひ聞え給ひながら。見奉り給ふ時は。うらみもわすれて。かしづきいとなみ聞え給ふ。つとめて出給ふ所にさしのぞき給ひて。御さうぞくし給ふに。名だかき御おび。御てづからもたせてわたり給ひて。御ぞの御うしろ引つくろひなど。御くつをとらぬばかりにし給ふ。いとあはれなり。これは内宴などいふことも侍なるを。さやうのをりにこそ。など聞え給へど。それはまされるも侍りこれはたゞめなれぬさまなればなんとて。しひてさゝせ奉り給ふ。げによろづにかしづきたてゝ見奉り給

ふに。いけるかひあり。たまさかにても。かゝらん人を。いだしいれて見んにますことあらじと見え給ふ　さんざしにとても。あまたところもありき給はず。内春宮一院ばかり。さては藤つぼの三條の宮にぞ參り給へる。けふは又ことにも見え給ふかな。ねび給ふまゝに。ゆゝしきまでなりまさり給ふ御ありさまかな。と人々めで聞ゆるを。宮は御几丁のひまより。ほの見たまふにつけても。おもほす事しげかりけり◎この御事の。しはすもすぎにしが心もとなきに。この月はさりとも。とみや人もまち聞え。内にもさる御心まうけどもあるに。つれなくてたちぬ。御物のけにや。と世人も聞えさわぐを。宮いとわびしう。此事により。身のいたづらになりぬべき事。とおぼしなげくに。御心ちもいとくるしくて。なやみ給ふ。中將の君は。いとゞ思ひあはせて。御ず法などわざとはなくて。ところ〴〵にせさせ給ふ。世中のさだめなきにつけても。かくはかなくてやゝみなん。ととりあつめてなげき給ふに。

好色のすさび也それ故葵にもうらみ奉らるゝよと思ひしり給ふ也

おなじおとゞと聞ゆる中にも（釋）大臣は同じ大臣なれども其中に此左大臣はおぼえやんごとなくおはする其嫡妻の宮の御腹に只ひとりいつきかしづき給ふ葵上なれば御心おごりも格別にて源の少しも麁略あればめざましと思ひ給へると也

などかいとさしもと（釋）葵上の御心おごりを源氏君はなどかさばかり貴からんなどゝおぼして大かたにしならし給ふより互に御心のへだてとも成るなるべしと地より評じたるなり〔玉補〕ならはい給ふ御心とは源氏君も又御心おごりにみづからならはい給ふをいふ也竹取物語にかくたい〴〵しくやはならはすべきならはしをはいといふは音便也

見奉り給ふ時は〔細〕打むかひては恨をも忘れ給ふ也（釋）これ例の源氏君をほめたる脉也

つとめて出給ふ所に　〔湖〕元日の夜はおとゞにとまり給ひて二日の早朝也

名だかき御帯　〔花〕今案に昔名ある玉帯には落花形鴛鴦通天など名ある物有し也　〔箋〕當官三位中將也はじめて玉帯を用ゐらるべし四位の間は瑪瑙帯を用れば也

てづからもたせて　〔玉〕もたせてわたり給ひて手づから御その御うしろ云々とつゞく意也

御その御うしろ　〔湖〕源の裝束のうしろなどの衣紋つくろひ給ふ也

いとあはれなり　〔釋〕殆沓をとらぬばかりにし給ふは皆葵上の事を思ひ給ふ御親心なればそれを評じてあはれなりとはいへる也

これは内宴など　〔細〕源の詞也今日のためには過分なりとて斟酌し給ふ也　〔岷〕内宴と申すは内々の節會也仁壽殿にて行はる文人題を給はり詩を作りてやがて御前にて講ぜらる云々

それはまされるも侍り　〔湖師〕其時

二月十よ日のほどに。をとこみこ生れ給ひぬれば。なごりなく。内にも宮人もよろこび聞え給ふ。いのちながくも。とおもほすは心うけれど。弘徽殿などの。うけはしげにのたまふときゝしを。むなしく聞なし給はましかば。人わらはれにや。とおぼしつよりてなん。すこしづゝさはやい給ひける。うへのいつしかと。ゆかしげにおぼしめしたることかぎりなし。かの人しれぬ御心にも。いみじう心もとなくて。人まにまゐり給ひて。うへのおぼつかながり聞えさせ給ふを。まづ見奉りてそうし侍らん。と聞え給へど。むつかしげなるほどなればとて。みせ奉り給はぬもことわりなり。さるはいとあさましうめづらかなるまで。うつしとり給へるさま。まがふべくもあらず。宮の御心のおにゝいとくるしう。人の見奉るも。あやしかりつるほどのあやまちを。まさに人の思ひとがめじやは。さらぬはかなき事をだに。きずをもとむる世に。いかなる名のつひにもりいづへきにか。とおぼしつゞくるに。身のみぞ

は又これよりまさるもありと也珍らしき帯なれば参らするると也
げによろづに云々　（釋）げにはいけるかひありへ係る意也上の「見奉り給ふ時はうらみ。もわすれて云々とある脉をうけてげにとはいへる也か
しづきたてゝ見奉り給ふにむこなどいひて我かたに出入し給はんはまことに生るかひありたとひたまさかにとひ給ふともこれにます事あら
じと見え給ふ源氏君の御ありさまなりとの義也
参座しにとても　〔河〕参座元日参賀の事也
内春宮一院　〔河〕内（桐壺帝）春宮（朱雀院）一院（准寛平法皇）歟桐壺帝尊親也（釋）准據は例の大かたに見るべし
なりまさり　（釋）年たけてれび給ふまゝに御形の成勝り給ふと也
この御事の　〔花〕藤壺の御産の事也去年の三月に藤つぼ御里居し給ひて源氏の君通じ給ふ三月よりは十二月は十月にあたれ共誠は四月よりの
ことなるべししかれば正月にあたれども持こさるゝほどに二月十餘日に御産はありし也　〔弄〕源密通は四月也御門の御子なれば三月よりな
るべき心也正月はさり共と思ふ也
御物のけにやと　〔岷〕御懐妊の事も御物のけのまぎれにおそく見つけたるよし奏したりと前にみゆ
宮いとわびしう云々　（釋）御ものゝけにやなど世人もいひさわぐを聞き給びて密通の事を思ひわづらひ給ひていとわびしく此事の物思ひによ
りていたづらに死はてぬべきことよとまでおぼしなげく故に御心ちもいとゞくるしくてなやみ給ふ也　〔花〕後撰「あはれともいふべき人は
おもほえで身のいたづらになりぬべき哉
いとゞ思ひあはせて　〔玉〕源氏君の藤壺の御懐妊をわが御たねならんと思ひ疑ひ給ひしに月のび給ひて正月も過ぬるによりていよ〳〵然也と
思ひあはせ給ふなり
御ずほうなど　〔細〕此時の祈ども薄雲巻に見えたり　〔玉補〕す。もじにごるはわろし　（釋）猶にごる方昔よりのよみざまにてよろし
世中のさだめなきにつけても　〔岷〕源の心と見て然るべし御産の時いかやうの事もありて藤壺のはかなくなどもなり給ひてはまたかされての
對面もなくてやゝみなんとそれをさへとりそへて思す也　（釋）右の御説よろし箋細流湖月新釋など藤壺の心と見られたるはさらによしなし
やみなんといふに心を付べしやみなんはつひに逢ことなくて止（ヤマ）んの意也
たとこ御子生れ給ひぬれば　〔湖〕後に冷泉院と申也
なごりなく内にも宮人も　（釋）なごりなくは思ひ歎き給ひしなごりなく也内は帝宮人は藤つぼの也上に宮人もまちきこえ内にも云々とありて
こゝに内にも宮人もとある首尾とゝのひてかつあやあり
いのち長くもとおぼすは云々　（釋）藤壺の御命長くもあれかしと帝のおもほすは彼密事の故を思へば心うくて空しくならばやとはおもほす物

から弘徽殿などの此御産の事をうけはしげにの給ふと聞給ひてもし空しくなりしと弘徽殿の聞なし給はゞ人わらはれならんとやうに思ひはげみ給ふつよみより少しづゝひだち給ふと也うけはしげは河海に咒咀とある字の意にてのろはしげといふがごとしさはやぎは病のよろしくなるをいふ上に御心ちもいとくるしくてなやみ給ふとある結び也

いつしかと 〔湖〕いつか若宮を御覧ぜんと也

人まに 〔岷〕人のなき間に也三條の宮へなり

むづかしげなる 〔湖〕みこの生れ給ふきはゝいぶせくあるとて藤の源に見せ給はぬ也實はいぶせきにあらず源によく似給へるなはぢ給へる也

うつしとり給へるさま 〔湖〕あさましきまで源のかたちをうつしたるやうに似給へば源の子にたがふべくもなきと也

いと心うき。〈源八〉命婦の君にたまさかにおひ給ひて。いみじき事どもをつくし給へど。なにのかひ有べきにもあらず。わか宮の御事を。わりなくおぼつかながり聞え給へば。などかうしもあながちにの給はすらん。いまおのづから見奉らせ給ひてん。と聞えながら。思へるけしきかたみにたゞならず。かたはらいたき事なれば。まほにもえの給はで。いかならん世に人づてならできこえさせんとて。ない給ふさまぞこゝろぐるしき。

いかさまにむかしむすべる契にてこの世にかゝる中のへだてぞ。かゝることこそ心得がたけれ。との給ふ。命婦も宮のおもほしみだれたるさまなどを見奉るに。えはしたなうもさしはなち聞えず。

見ても思ふみぬはたいかになげくらんこやよの人のまどふてふやみ。あはれに心ゆるびなき御事どもかな。としのびて聞えけり。かくのみいひやるかたなくて。〈源八〉かへり給ふ物から。〈藤八〉人のものいひもわづらはしきを。わりなきこ

御心のおにゝ　〔花〕心のおにとは心におそろしく思ふこと也　〔岷〕心にあやまりある時そらおそろしく思ふ心歟
人の見奉るも云々　〔玉補〕此事は若紫卷にあり藤壺の宮おりゐ給ひて一たび月事ありて後に懷妊し給ひし事をいふ也
まさに人の思ひとがめじやは　〔湖〕かやうに源に似給へば人も推量をやせんと人のしらぬ事まで思ひ給ふ也　〔釋〕やはのはもじ諸本になし萬
　水によりて加へつ
きずをもとむる世に　〔餘〕前漢書十三王傳今或無レ罪爲二臣下一所二侵辱一有司吹レ毛求レ疵とあり人のあしきさがを見出さんとするを云
身のみぞ　〔釋〕我御身ばかり心うきと也
命婦の君に云々　〔釋〕藤つぼの御心上のごとくなれば源氏君の命婦に逢給ひて樣々に心をつくしての給へど何のかひもなしと也
わか宮の御事を云々　〔釋〕若宮をとく見奉り給はんとの給へど今自然に見奉らせ給はんをなどかくまであながちにいそぎ給ふべきとて命婦う
　けがはぬ也
思へるけしき云々　〔湖師〕命婦が心にも源の御心を察して哀に思ひやり參らする也口にはいはれぬ事共なれば源もあらはにはの給はず命婦も
　心にのみ思ふことなればかたみにたゞならずと也
いかならん世に　〔拾〕後撰「いかにしてかく思ふてふことをだに人づてならで君にきこえん　〔釋〕この歌は類例也引歌には及ぶべからずいか
　なる世にあひてか人傳ならずたゞに藤壺にたいめんして此事どもをもいはんとてなき給ふ也
いかさまに云々　〔釋〕前世にていかさまに結べる宿緣なれば此世にかやうなる中のへだてはあるやらんと也花鳥にこの世は若宮の御事をそへ
　てよみ給ふ也さて命婦が返歌にもこやよの人のまとふてふやみとはよめる子を思ふやみの心也と有もし此意あらば子の世にまで係る隔ぞと
　いふ意をもたせたるにやされど猶此歌なるはおぼつかなし
かゝる事こそ　〔細〕何とも心得がたき契りと也　〔湖師〕子もある中なるにと也
宮のおもほしみだれたる云々　〔湖〕藤もさすがに源を思ひもはなち給はぬけしきなれば命婦もはしたなくもえせぬ也
見ても思ふ云々　〔細〕命婦の歌也みてもとは藤つぼの事也見ぬはたとは源也　〔釋〕花鳥の御說のごとく此歌は此やに兒やをかねたりとおぼし
　一首の意は御子を見給ふ藤つぼも御物思ひはたゞならず見給はぬ源氏君もまたいかになげき給ふらんげにいづれにしても子は世人のまどふ
　やみといふらんがことわりに侍りといふ也「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまよひぬるかなの意也
心ゆるびなき　〔釋〕かたみに御物思ひのゆるむ時なきがあはれ也との意なり
かくのみいひやるかたなくて　〔岷〕源のこゝへおはして命婦には時々あひ給へども何のかひもなくてかへり給ふものから也
人の物いひもわづらはしきを云々　〔釋〕源氏君はいひやるかたなくて空しくかへり給ふ物から藤壺は世人のものいひさがなきを迷惑におぼし

て命婦をもそのはじめのやうにむつましうし給はずさりとて人目にはたつまじく平穏にもてなし給ふものゝかの御中の事をいひかけなどする故に心づきなきやうにおぼす時も有べきを命婦は案外なる事に思ふべしと傍より評じたる也
(評)此所藤壺のくるしき情をいとよくうつされたりとおぼえてめでたし
四月に内へ参り給ふほどよりは大きに云々 (細)わか宮参内あるなり (湖)誕生より三月めなり (釋)起かへりとは我とはれおき給ふなり
あさましきまで (細)源によく似給ふ也
又ならびなきどちは (細)ならびなくうつくしき人のをさなだちはいづれも同じ物と思ひ給ふ也
けにかよひ給へる (玉)げにはうくる所なしもしくはけもじ衍歟
(釋)此説によらばたゞ似かよひ給へるといふ也または氣に似ひ給へ

とにの給はせおぼして。命婦をも。むかしおぼいたりしやうにも。うちとけむつび給はず。人めだつまじう。なだらかにもてなし給ふ物から。心づきなしとおぼすときも有べきを。いとわびしく。思ひのほかなるこゝちすべし。四月に内へまゐり給ふ。ほどよりはおほきにおよずけ給ひて。やうやうおきかへりなどし給ふ。あさましきまで。まぎれ所なき御かほつきを。おぼしよらぬ事にしあれば。またならびなきどちは。げにかよひ給へるにこそは。とおもほしけり。いみじうおもほしかしづく事かぎりなし。源氏の君をかぎりなきものにおぼしめしながら。よの人のゆるし聞ゆまじかりしによりて。坊にもえすゑ奉らずなりにしを。あかずくちをしう。たゞ人にてかたじけなき御ありさまかたちに。ねびもておはするを。御覽ずるまゝに。心ぐるしうおぼしめすを。かうやんごとなき御はらに。おなじ光にてさしいで給へれば。きずなき玉とおもほしかしづくに。宮はいかなるにつけても。むねのひまなく

ろといふにやけしきの似たる意也
源氏の君をかぎりなきものに
(釋)かぎりなき物とはかぎりなく寵愛し給ふをいふ世の人のゆるし聞ゆまじかりしとは彼貴きすぢの御後見なき更衣腹の故をいふ也
坊にも　〔岷〕源氏を東宮に立給はざりし事をくちをしくおぼすなり
たゞ人にて　(釋)このたゞ人は君に對して臣下の事をいへり
かうやんことなき御はらに
〔孟〕源の年たけ給ふにつけてたゞ人になされしを御後悔の所にこの若宮御誕生にて母も藤壺の宮なればきずなき玉と御門の御心なり
同じひかりにて　(釋)源氏君と若宮と同じくうつくしき御顔にてと也疵なき玉といはんとて先光といへるは縁なり
宮はいかなるにつけても
〔岷〕若宮の源に似給へる事にも又餘りとりあつかひ給ふにも人の見やとがめんと藤つぼの御心にくるしくおぼす也

やすからず物をおもほす。れいの中將の君。こなたにて御あそびなどし給ふに。いだきいで奉らせ給ひて。みこたちあまたあれど。そこをのみなん。かゝるほどより明くれ見し。されば思ひわたさるゝにやあらん。いとよくこそおぼえたれ。いとちひさきほどは。みなかくのみあるわざにやあらん。とていみじくうつくしと思ひ聞えさせ給へり。中將の君おもての色かはる心ちして。おそろしうも。かたじけなうも。うれしうも。あはれにも。かたぐうつろふ心ちして。なみだおちぬべし。物語などしてうちゑみ給へるが。いとゆゝしううつくしきに。我身ながらこれににたらんは。いみじういたはしうおぼえ給ふぞ。あながちなるや。宮はわりなくかたはらいたきに。あせもながれてぞおはしける中將は中々なる心ちの。かきみだるやうなれば。まかで給ひぬ。わが御かたにふし給ひて。むねのやるかたなきを。ほどすぐして大殿へとおぼす。おまへの前栽の。なにとなく青みわたれるなかに。とこなつ

のはなやかにさき出たるを。をらせ給ひて。命婦の君のもとに。かき給ふこ
とおほかるべし。

よそへつゝ見るに心はなぐさまで露けさまさるなでしこの花。「はなにさか
なん。と思ひ給へしも。かひなきよに侍りければ。と有。さりぬべきひまに
や有けん。御覽ぜさせて。たゞちりばかりこの花びらに。と聞ゆるを。わが
御心にも。物いとあはれにおぼししらるゝほどにて。

袖ぬるゝ露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ。とばかり
ほのかにかきさしたるやうなるを。よろこびながら奉れる。れいの事なれば
しるしあらじかし。とくづほれてながめふし給へるに。むねうちさわぎて。
いみじくうれしきにもなみだおちぬ。つく〴〵とふしたるにも。やるかたな
きこゝちすれば。れいのなぐさめには。にしのたいにぞわたり給ふ□しどけ
なくうちふくだみ給へるびんぐき。あざれたるうちきすがたにて。笛をなつ

こなたにて　〔孟〕藤壺の御方にて也
いだきいで　〔岷〕みかどのみづからいだき出給へるとは見るべからざる歟　〔釋〕此說よろし奉らせとあるせもじに心をつくべし
そこをのみなん云々　〔細〕源ならではをさなき人をまぢかく見給ふ事なき故に小兒はみなおしなべてかやうなるとのみおぼすとなり
〔岷〕昔は皇子たちも外戚がたなどにつきて各諸家にてやしなひ奉るそれを養君にし奉るといふあづかり奉る人をば御うしろみなどいふにやされば禁中に朝夕をさなくよりおはします事はなかりし也云々源は別して御寵愛の故と又外戚がたなどに然るべき人なかりし故なり
思ひわたさるゝにや　〔湖〕思ひなぞらふる也　〔岷〕物のかよひたるをいふ
おもての色かはるこゝちして
〔釋〕みづから赤面を覺え給ふさまなり

かたぐ\うつろふ心ちして云々　〔玉〕おそろしくもかたじけなくもうれしくも哀にも心のさまぐ\にうつりて思はるゝ也　〔新〕ひとへに思ひ定めればとりはづして涙もおとしつべきをいへり故に此さまぐ\をかされ書たり云々　（評）四つのもじうつろふ心のくまぐ\をいとよく寫し盡されたり

物がたりなどして　（釋）此物語は幼き兒の何事ともしられず物いふを今俗もかたるといへる是也

あながちなるや　〔餘〕朗云おぼしめす事をメッサウナルコトカナと作者のあざける樣にしてよむ者に斷りいひたる也

宮はわりなく云々　（評）藤壺の御心さこそ有べけれ

中々なるこゝちの　〔玉〕若宮をはやく見まほしくおぼしけるに見給ひてはかへりてかなしさのまされるよし也舊注ひがこと也次なる歌にてもしるべし

ほどすぐして　〔湖〕しばし思ひしづめて也

よそへつゝ云々　〔花〕「よそへつゝ見れど露だになぐさまずいかにかすべきとこ夏の花　新古今　〔拾〕恵子女王の歌也　（釋）本居翁云撫子の花を若宮によそへつゝ見る也舊注に若宮を藤壺によそへつゝ見るといへるは非なり此なでしこの花をみればいとゞ涙にくれて露けさのまさる故にかひなき也」といはれたるがごとし

花にさかなんと　〔河〕「わが屋どにまきしなでしこいつしかも花にさかなんよそへても見ん　〔餘〕此引歌後撰夏部にありてよみ人しらずとしるせり上句我宿の垣ねにうゑしなでしこは也こゝは例の書かへたりと見ゆ　（釋）本居翁云引歌の心は撫子の花さかば思ふ女によそへて見んと也今引たる意は若宮によそへて見んと也廣道云此說よろし花にさかなん若宮によそへて見んと思ひしを見ては涙の露けさまさりてかひなしとの意也世におしはなれぬを歎き給ふなり舊注共ひがことおほし

ちりばかり此花びらに　〔河〕塵ばかりはすこしばかり也されどもなでしこの歌なればちりをただにすゑじとぞ思ふの歌によそへていふ也

（釋）花びらに歌書たる例拾遺に擧たるを餘釋にものしつ

袖ぬるゝ云々　〔玉〕初句御みづからの也四の句猶うとまれざる也にも猶といふにてしるべし此ぬを畢ぬといへる注は猶を俗言の猶に見たるひがこと也　（釋）わが御袖のぬるゝ涙の所縁（ユカリ）と思へどもなほ（ヤハリ）うとまれざるよと也なでしこの花は若宮のたとへなるはもちろん也露のゆかりは涙のたれといはんがごとし

かきさしたる　〔孟〕御返歌などはなしにあそばしさしたるやうにあるをと也

よろこびながら　（釋）命婦たまさかに御返事を乞得たるをよろこぶなり

れいの事なれば　〔細〕いつものやうに御覽じもいれまじと御返りをば思ひ絕て源のましますと也

うれしきにも　〔岷〕うれしきにさへ也
つくづくとふしたるにも　〔岷〕藤壺の御返事を見たるなごりの體なり
しどけなく打ふくだみたる　〔釋〕こゝより西の對にわたり給ひてのさまなり
あざれたるうちきすがた　〔弄〕大袿ばかりを着て直衣をき給はぬなりうちきはなほしの下にきる物也
女君ありつる花の　〔細〕紫上也有つる花とは撫子也面白きかきやうなり　〔評〕有つるなでしこを引もてきて露にぬれたると今一きは轉じて用ゐられたるさらにめでたし
あいぎやうこぼるゝやうにて　〔湖〕愛らしきさまの餘るほどある也　〔釋〕今俗もいふことにて心おなじ　〔明〕てとよみ切ておはしながらとくもわたり給はぬと下へつづくなり源のかへり給ひても紫上の方へやがても渡り給はぬをうら

かしうふきすさびつゝ。のぞき給へれば。女君ありつる花の。露にぬれたる心地して。そひふし給へるさま。うつくしうらうたげなり。あいぎやうこぼるゝやうにて。おはしながらとくもわたり給はぬ。なまうらめしかりければ。れいならずそむき給へるなるべし。はしのかたについゐて。こちやとの給へど。おどろかず。「いりぬる磯のくちずさひて。くちおほひし給へるさま。いみじうざれてうつくし。「あなにく。かゝる事くちなれ給ひにけりな。「みるめにあくはまさなきことぞよとて。御琴とりよせてひかせ奉り給ふ。さうのことは。なかのほそをのたへがたきこそ。所せけれとて。平調におしくだして。しらべ給ふ。かきあはせばかりひきて。さしやり給へれば。えゑじもはてず。いとうつくしうひき給ふ。ちひさき御ほどに。さしやりてゆし給ふ御てつき。いとうつくしければ。らうたしとおぼして。ふえふきならしつゝをしへ給ふ。いとさとくて。かたきてうしどもを。たゞひとわたりにならひ

み給ふ也

いりぬるいその　〔河〕「しほみてばいりぬるいその草なれや見らくすくなく戀らくのおほき　〔餘〕萬葉卷七寄藻　〔湖師〕源を見ることはすくなく戀る事の多きとの心也

くちおほひ　〔岷〕紫のふといひながらはぢたるさま也

かゝる事口なれ　〔湖〕世づきたる事を口なれ給ふとたはふれ給ふ也

みるめにあくは　〔河〕「いせのあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよしもがな　〔餘〕古今集戀四よみ人しらず　〔孟〕常住そひて有(ル)はまさなき事也見らく戀らくのありてこそとなり

さうのことは中のほそをの　〔釋〕村田光庸云弄花にこれを巾の緒也と注せられたるは誤也これは細緒三すぢの斗爲巾(トヰキン)とならびたるうちの中の緒といふ意にて爲の緒の事也その故は何れの調子の時も二七爲の三絃宮にて一越調のときは此三絃一越になり平調の時は此三絃平調になる其餘の調子のときも同じ事也さてたへがたきといふは此爲の緒の斷(キレ)やすきをいふたとへば盤渉調などのごとき高き調子の時は右の二七爲すなはち盤渉になるに二七の緒はふとき故に絶(キレ)ざれども爲の緒は細緒なる故に高き調子にては絶(キレ)やすき也この故におし下して平調のひきゝ調子にしらべ給ふといふ也云々○廣道云この説本居翁書入本に有しをよろしげに聞ゆればこゝにものしつ猶考ふべし

平調におしくだして　〔河〕平調は箏柱(コトヂ)をさげてたつる也　〔弄〕今案に平調におしくだしてとかけるはかれてのしらべもしは一越性調にて有けるか箏には一越調をしらぶるにかゝり一越調さがり一越調とて二樣にありかゝり一越調とはことぢを手もとのかたへよせてたつる也それを一越調といふ又保曾呂倶世利(ホソログセリ)は狛(コマ)一越調の樂也平調の曲にはあらずまづ平調にしらべて其調子どもをゝしへ給ひて後呂の聲になほしてほそろぐせりをひかれける歟こま一越調といふはその聲平調にて呂也以上洞院大將入道ノ(公敦號觀喜院)釋也以二件自筆一寫レ之

かきあはせばかりひきて　〔釋〕かきあはせは絃を搔ならして調子をしらべ合する事也今俗もてうしを合すといへり然るを湖月抄に箏の琴の曲也と注せるはいかにぞやさしやり給ふは紫上の前へ也

えゑじもはてず　〔釋〕例ならずそむきて怨じ給へるがつひにえゑんじもはてず也

さしやりてゆし給ふ　〔孟〕ちひさき御手にてとゞきかぬる程にさしやりてひき給ふ也ゆは左の手を押(オス)ことなり　〔湖師〕糸を左の手にておして糸に吟を出す也　〔釋〕さしやりとはおよびごしに手を遠くやり給ふ也

かたきてうしどもを　〔湖〕習ひ得がたき調子も只一返にて引とり給ふ也

思ひし事かなふと　〔釋〕よろづわが御心のごとく敎へ聞えんとかれて思ひ給ひしに其御思ひのかなふことよとうれしうおぼす意なり

ほそろぐせりといふ物は　〔河〕長保樂(大食調右樂)破(ハ)(保曾呂倶世利(ホソログセリ))急(ハ)(賀利夜須(カリヤス))　〔岷〕樂の目錄などにはほそろぐせりかりやすと別々にも

あり 〔釋〕名はにくけれど〜はからめきたる名のにくき意なり

かき合せまだわかけれど
〔釋〕源氏君の吹すまし給へる笛の音につれて琴の調子を掻合せ給ふがまだ幼けれど拍子たがはず上手めきたりと也

いで給ふべしと有つれば
〔眠〕今夜は何方へぞおはせんとかれて人々に仰られしなるべし

雨ふり侍りぬべしなど 〔眠〕源の御供の人々雨のふるべきを見ていそぎたる心なり 〔餘〕清少納言にたてじとみすいがいのもとにて雨ふりぬべしなど聞えたるもいとにくし

ゑも見さして 〔湖〕源の出給はんを紫上の無興し給ふさま也

外なるほどは 〔湖〕源のよそにおはするほどは紫の心に戀しきかとのたまふ也

まづくれ〳〵しう 〔釋〕紫上は幼ければ物ねたみの事などなくて心やすし されば先さしあたりてむつか

とり給ふ。おほかたらう〳〵しくをかしき御心ばへを。思ひし事かなふとおぼす。ほそろぐせりといふ物は。名はにくけれど。おもしろうふきすまし給へるに。かきあはせまだわかけれど。はうしたがはず上ずめきたり。おほとなぶらまゐりて。ゑどもなど御覽ずるに。いで給ふべしとありつれば。人々こわつくり聞えて。雨ふり侍りぬべしなどいふに。ひめ君れいの心ぼそくてくし給へり。ゑも見さして。うつぶしておはすれば。いとらうたくて。御ぐしのいとめでたくこぼれかゝりたるをかきなでゝ。外なるほどは こひしくやある。との給へば。うなづき給ふ。われも一日も見奉らぬは。いとくるしうこそ。されどをさなくおはするほどは。心やすくおもひ聞えて。まづくね〳〵しううらむる人の。心やぶらじと思ひて。むつかしければ。しばしかくもありくぞ。おとなしく見なしては。ほかへもさらにいくまじ。人のうらみおはじなど思ふも。世にながうありて。おもふさまに見え奉らんと思ふぞなど。こま〴〵

しく恨る人の心をやぶらじとて暫くかやうに出ありくと也くれ〴〵しうは物むつかしくすれて恨をいふ形容の辭也
人のうらみおはじなど思ふも
(釋)人の恨をおへば命短しなどいふは例の佛說より出たるその比の常語なるべし今まづ出ゆきて人の恨を負じと思ふも長く此世に在て紫上に見えんと思ふぞと也人は源氏君のかよひ給ふ御かた〴〵をさして云
さすがに　〔岷〕をさなき中にもすこし分別のまじるやうなるをさすがといふ
みなたちて　(釋)紫上の女房共なるべし諸注に御供の人々也といはれたるはいかゞおものなど參らせたりといふにかなひがたしこなたには紫上の方に也
いとはかなげにすさびて
〔湖〕御膳しかともまゐらぬ也
(釋)なほうたがはしく無興におぼして物などもしかとたうべずなぐ

とかたらひ聞え給へば。さすがにはづかしうて。ともかくもいらへ聞え給はず。やがて御ひざによりかゝりて。ねいり給ひぬれば。いと心ぐるしうて。こよひは出ずなりぬ。との給へば。みなたちて。おものなどこなたにまゐらせたり。姫君おこし奉り給ひて。出ずなりぬ。と聞え給へば。なぐさみておき給へり。もろともに物などまゐる。いとはかなげにすさびて。さらばね給ひねかし。とあやふげに思ひ給へれば。かゝるを見すてゝは。いみじき道なりとも。おもぶきがたくおぼえ給ふ◎かうやうにとゞめられたまふをりなどもおほかるを。おのづからもりきく人。おほい殿に聞えければ。たれならん。いとめざましき事にもあるかな。いまゝでその人とも聞えず。さやうにまつはしたはぶれなどすらんは。あてやかに心にくき人にはあらじ。うちわたりなどにて。はかなく見給ひけん人を。物めかし給ひて。人やとがめん。とかくし給ふなゝり。心なげにいはけて聞ゆるは。など。さぶら

さみのやうに参るさま也
あやふげに（釋）猶たゞばかり置て出給はんかとあぶなく思ひ給ふと也
かゝるを見すてゝは云々
（釋）かくらうたき紫上のさまを見すてゝはたとひいかなる大事有とてもおもふきがたくおぼえ給ふと也湖月にたとひ死する道などのえさらぬ道なりともといへりさもあらんか
おのづからもりきく人（釋）かやうの事をもれ聞たる者ありて葵上の方へ告たる也
たれならん（眠）これより此人をいかやうなる人ならんと大殿がたに色々いひあつかふさま也紫とはしらぬ也
いまゝでその人とも（湖）上﨟ならば誰としれもし又さやうに源氏をなれまつはしたはふれなどはすまじきをさやうにするはあまり心にくき人にはあらじと也
内わたりなどにて（眠）内裏あたりの宮づかへ人が一旦源の寵し給ふ

ふ人々も聞えあへり◎うちにも。かゝる人ありときこしめして。いとほしく。おとゞの思ひなげかるなることも。げにものげなかりしほどを。おふなおふなかくも物したる心を。さばかりの事たどらぬほどにはあらじを。などかなさけなくはもてなすらん。との給はすれど。かしこまりたるさまにて。御いらへも聞え給はねば。心ゆかぬなめり。といとほしくおぼしめす。さるはすき〴〵しう打みだれて。この見ゆる女房にまれ。またこなたかなたの人々など。なべてならずなども見え聞えざめるを。いかなる物のくまにかくれありきて。かく人にもうらみらるらん。とのたまはす。みかどの御としねびさせ給ひぬれど。かうやうのかたはえすぐさせ給はず。うねべ女藏人などをも。かたち心あるをば。ことにもてはやしおぼしめしたれば。よしある宮づかへ人おほかるころなり。はかなきことをもいひふれ給ふには。もてはなるゝ事も有がたきに。めなるゝにやあらん。げにぞあやしうすい給はざ

にほこりてさやうなるらんさて人のとがめてはと世を憚りかくし給ふなるべしと也

心なげにいはけて　〔拾〕此句は上の内わたりなどにてといふ上へ返して見るべしまだかたおひなる人をさしもかしづき給ふべきならぬに世づける心もなういはけなきやうに聞ゆるは内わたりなどにてはかなく見給ひけん人を物めかし給ひて人やとがめんとおぼしてさやうにいひなし給ふならんとおしはかる心也云々

いとほしくおとゞの云々　〔岷〕此詞のつゞきおとゞの思ひなげかるなる事もいとほしくといふ義歟御門の御心なるべし　（釋）いとほしくといふまでみかどの御心なるべき歟もしくは葵上をおとゞのいとほしく思ひ給ふ意にもあらんかさてはいとほしくより帝の御詞也物げなかりしほどゝは源氏君の幼くてものげなかりし時分といふ意也さる時より後見してねんごろにかくおほしたてられたる心を思へばげに歎かるゝもことわりぞとの意なり此所文脈いたくまぎらはし心をのをもじも穏ならぬやう也

さばかりの事たどらぬほどには　（釋）それほどの事をたどり知ぬ源氏君の年のほどにはあらぬをなど分別なくてかく情なくはもてなすならんと教訓し給ふ也

かしこまりたるさまにて　（釋）源氏君はたゞ恐入たるさましたるのみにて御答もし給はねば也

心ゆかぬなめりと　〔玉補〕葵上を源の心ゆきてはおぼさぬなるべしと也心ゆくとは俗に存分なといふことなり

いとほしくおぼしめす　〔岷〕葵上の父大臣の心中をおぼしめすなるべし　（釋）案に此説よろし源氏君をいとほしと思し召やうにいへる注はわろかめり

さるはすき〲しう云々　（釋）此段末にのたまはすとあれば帝の御詞なる事は論なし然れども事のさまたゞに源氏君へ教訓の御詞とも見えざればこれはたゞかく人にもの給ふと見るべきにや扨すき〲しう打みだれて云々は源氏君のつれの御さま也

この見ゆる云々　（釋）このみかどの御身近く仕へ奉りて見えわたる女房どもにもあれ也

又こなたかなたの人々など　（釋）又こゝかしこの女などにもあれといふ意なるべし

なべてならずなども　（釋）此詞少し心得にくし案になべてならずとえり出て心をかよはし給ふ意にやさらば今俗の語にヒトヽホリデハナイなどゝいひて男女彼此密通したるを評ずると全く同意也かやうに見ざればざめるをといふ辭にかなひがたし

いかなるものゝくまに　（釋）源氏君は誰にも通じ給ふさまには見え給はぬをいかなる物のかくれにかしのびありきてかやうの人をむかへきてかく大臣などにも恨みられ給ふらん不思議也との給はす意なるべし

御門の御としねびさせ給ひぬれどかうやうのかたは云々　（釋）こゝより草子地の評也帝の御よはひふけさせ給へれど猶好色の方はえすぐさせ給はずして釆女女藏人などをも容色あるをばもてはやして寵し給へればさるよしめきたる官女たち多き時節也といふなり

うれべ女くら人〔新〕釆女は古へより諸國の郡司以上の人の女妹姪などの中にかたち勝れたるを奉るを釆女司女釆町ありておかる其中に陪膳の被官などにあづかるは品よろしきもあり式には四十七人と見えたり女藏人はいよ〳〵御膳の事を専らつとむ中﨟下﨟の品有て水司膳司となるは又ことによろしき品也〔弄〕今も女藏人とて内裏に祗候す賀茂などの女也〔箋〕典侍掌侍などは勿論といふなり

はかなき事をもいひふれ給ふには〔玉補〕帝の也目なるゝにやあらんは官女たちさる事に目なるゝ故にやそれに合せては御子の源氏君はと也（釋）なほ源氏君なりこれより上は帝の色を好み給ふ故によき女の多きよしをいひこれより下は源氏君のひたふるに色好み給はぬよしをいふ是上文の意を草子地に釋する也心をつくすべしもてはなるゝ事も有がたきとは源氏君の才貌いみじき故にはかなき戯言をい

める。」とこゝろみに。たはぶれごとを聞えかゝりなどするをりあれど。なさけなからぬ程にうちいらへて。まことにはみだれ給はぬを。まめやかにさう〴〵し。と思ひ聞ゆる人もあり」としいたうおいたるないしのすけ。人もやんごとなく。心ばせありて。あてにおぼえたかくはありながら。いみじうあだめいたる心ざまにて。そなたにはおもからぬあるを。かうさだすぐるまで。などさしもみだるらん。といふかしくおぼえ給ひければ。たはぶれごといひふれてこゝろ見給ふに。にげなくも思はざりけり。あさましとおぼしながら。さすがにかゝるもをかしうて。物などの給ひてけれど。人のもりきかんもふるめかしきほどなれば。つれなくもてなし給へるを。女はいとつらしと思へり。うへの御けづりぐしにさぶらひけるを。はてにければ。うへはみうちぎの人めして。出させ給ひぬるほどに。また人もなくて。このないしつねよりもきよげに。やうだいかしらつきなまめきて。さうぞく有さま。いと

ひかけ給ひけるにいづれの女もゝてはなれてうけひかぬことは有がたきにそれをも源氏君は御目なれてにや不思議に誰にもいひより給はぬ
と也

こゝろみにたはぶれごとを　〔釋〕あまりにすき給はざる故にいかゞ思ひ給ふと試みがてら女房のかたより戯言をいひかゝりなどする時もあれ
ど情なからぬほどにいらへて實にはみだれ給はぬをあまり直實(マメ)にてさう〴〵しと思ひいふ女もありと也

年いたうおいたるないしのすけ　〔釋〕こゝよりは源氏君にたはふれいひかゝりなどする女の有といふ事のついでに老女の戯言いひしをあらは
して物語の興としたる也さるは此巻は藤壺宮と紫上との事のみにて珍しき事もなければ思ひの外なるをかしきをいひてしばらく見る人の眠
をさましたるなるべし此老女を源内侍のすけといふよしは葵巻に見えたり

そなたには　〔岷〕好色のかたには也　〔釋〕人がらも何もおも〳〵しけれど好色の方には重からぬと也

さだすぐるまで　〔新〕人の定(サダ)三十也それ過るをさだ過るといふ此内侍は末に五十七八(キハ)といへば上に年いたう老たるといふは實也こゝにてさだ過
といふは凡をいふなり　〔釋〕さだを三十と決められたるはいかゞなれど大かたさばかりのほどをいふにはあるべしみだるらんは好色にみだ
るゝ意也

にげなくも思はざりけり　〔湖〕内侍心に源を似合ぬ中ともおもはぬ也

ものなどの給ひてけれど　〔釋〕あひ給ひし事なるべし岷江入楚にあひ見そめ給へるにてはあるまじとあるはいかゞ下の文に今さらなる身のは
ぢにもなんといへるを思ふべし

つれなくもてなし給へるを　〔釋〕つれなしとつらしとはもとは同言なれどこの物語の比などに至りてはいさゝかけぢめありて譯注にしるすご
とし俗言のぢやうには心得べからず

うへの御けづりぐしに　〔孟〕御門の御ぐしけづりに源内侍の参る也

うへは御うちぎの人めして　〔釋〕御うちぎの人は御さうぞくの衣文(エモン)に参る人なりと岷江入楚の一說に見えたるよろし御けづりぐしせし人也と
いふ注どもはいかゞ玉小櫛に引れたる枕册子の文にて明かなるをや委しくは諸注を擧て餘釋に辨ふるを見るべし出させ給ひぬるは其御座所
より御衣めしかふる所へ出させ給ふなり

また人もなくて云々　〔釋〕此てもじはいとはなやかにこのましげに見ゆるをといふ句へかゝるてにをは也

つれよりもきよげに　〔釋〕源氏君に心ある故に常よりもきよげにさうぞきたるなるべし

さもふりがたうも　〔湖〕源心に源内侍がさても年よりがたくなまめくかなと笑止に見たまふなり

いかゞ思ふらんと云々　〔釋〕一たびあひ給ひて後絶給へるを内侍はいかゞ思ふらんとさすがに見すぐしがたくて也

ものすそた〔箋〕裳はきぬよりもすそへさがりてひかれたるべし

かはほりの云々〔河〕蝙蝠を見て扇を作り始めける也仍て夏扇の異名也（釋）えならずゑがきたるとはえもいはれずうつくしう畫をかきたる也さしかくしては扇をかざして顏をかくしたる也若き女のはぢらひたるさましたるがいとをかしき也〔岷〕昔は女は常に扇をさしかくす也

さし扇といふ冬は檜扇也

いたう見のべたれど（釋）目皮を見のべたれどゝいふ意也愛を含みたる目つきして遠く見て目ぶちをのべたるさま也

まかはいたくくろみおちいりて〔河〕師說云眶或マナカブラ文選云高眶一說眼皮也遊仙窟云眼皮瞤今案眼皮も有其謂歟老者なれば

とてまかぶらのおちいるはなき歟目の上皮は年よればくろみ落入也

（釋）眶も眼の皮の事なればたがへるにはあらず見延たれど猶黒みておち入て見ける也

いみじうはづれそゝけたり（釋）はづれは髮のはづれ也かゝりなどいふに同じ意にて亂たる髮のまゆのあたりへかゝりたるはづれ際をいへる

也そゝけといふにて知るべし諸抄用なき說ども多しみなひがこと也

につかはしからぬ扇のさまかな〔岷〕或抄云扇のさまのわかくしきをいふ（釋）此說よろし赤き紙のうつるばかり色深きに云々の畫やう老

女には似合ぬと也諸抄の說ひがことおほし

わがもち給へるに（釋）源氏君わがもち給へる扇ととりかへて見給ふ也扇をかふる事花宴其外にも見えたり

うつるばかり云々ぬりかくしたり（釋）物にうつるふほど色ふかき也〔箋〕泥にぬりかくしたるをいふにや

てはいとさだすぎたれど云々もりの下草おいぬれば（釋）內侍の手はふるびたれどよしありて書たるなり〔河〕「大あらきのもりの下草おい

ぬれば駒もすさめずかる人もなし〔餘〕古今雜上よみ人しらず

ことしもこそあれ（釋）かくべき事こそ有べきにあまり色めきたる心ばへやとをかしくおぼす也

もりこそ夏の〔河〕「ひまもなくしげりにけりな大あらきのもりこそ夏のかげはしるけれ〔拾〕此歌何にある歌にか見及ばず信明家集に「郭

公きなくなきけば大荒木のもりこそ夏のやどりなるらし此歌にてかけるなるべし（釋）拾遺の說たしか也なりから夏なればとり合せてしか

老たりとはいへど大あらきのもりこそ夏のやどりといへらんがごとく行て屋どる人多きやうに見ゆるはと戲れ給ふ也

人やみつけんと（釋）源氏君老人に物の給ふも似合しからぬをもし人や見つけんとくるしく思ひ給ふを內侍は色好みの心にさも思はぬ也

君しこば云々〔花〕「わが門の一むらすゝきかりかはん君がたなれの駒もこぬかな男のこざりければよめると有〔餘〕案るに此歌古今集とし

るされしは謬也後撰二小町があれとある歌也（釋）げに此歌をよみかへたるなるべしたなれの駒は乘人の手馴したる馬といふ意かりかは

んは薙て馬に飼ん也さかり過たる下葉は若草ならで時の過たる下葉といふ也した葉はもりの下草などいふによりて森の下の草葉の意に用ゐ

たるなるべし下句内侍みづからのたとへなる事はあらは也〔細〕源に御出あれのよし也

さゝわけば云々〔花〕蜻蛉日記「ささわけばあれこそまさめ草がれの駒つなぐめるもりの下かは

〔新〕常に人多くなづくる所なれば篠など分入らば先しめし人のとがめんがわづらはしさにゆかずと内侍のすき心をたはぶれながらいひのがれ給ふ也（釋）初句森には必篠など有べければいへりいつとなくはいつといふ事なしにいつにてもの意也木がくれはしのびてゆくによせたるべし

わづらはしさに（釋）人のとがめんがわづらはしさにえゆかぬと也

まだかゝる物をこそ（釋）花鳥に引歌あれどそは拾遺に辨へたるがごとしこゝは引歌に及ばぬ所なれば皆はぶきつ餘滴に引るもなほかなひがたし

いまさらなる身のはぢになん

〔孟〕内侍の此年になれどもかやう

はなやかに。このましげにみゆるを。さもふりがたうも。と心づきなく見給ふ物から。いかゞ思ふらん。とさすがにすぐしがたくて。ものすそを引おどろかし給へれば。かはほりのえならずゑがきたるを。さしかくしてみかへりたるまみ。いたう見のべたれど。まかはゝいたくくろみおちいりて。いみじうはづれそゝけたり。につかはしからぬ扇のさまかな。と見給ひて。わがも給へるに。さしかへて見給へば。あかきかみのうつるばかり色ふかきに。木だかきもりのかたをぬりかくしたり。かたつかたに。てはいとさだすぎたれど。よしなからず。「もりの下草おいぬればなど。かきすさびたるを。ことしもこそあれ。うたての心ばへや。とゑまれながら。「もりこそ夏の。とみゆめるとて。なにくれとの給ふもにげなく。人や見つけんとくるしきを。女はさもおもひたらず

君しこばたなれのこまにかりかはんさかりすぎたるした葉なりとも。とい

の恥をばまだかゝぬと也
（釋）一度あひて忘られたるは女のいみじきはぢとするならひなりし事此外にも多く見えたりたゞに戯言のみの故にはあらざること知るべし

今聞えん思ひながらぞや
（釋）此今は俗にオツツケといふに似て後刻といふに近し只今は人めもあれば後に又いはんとの意也思ひながらぞやは心には思ひながらたゞ戯れたる也となだめ給ふ也

はしばしらと　〔細〕「津の國のながらの橋のはしばしらふりぬる身こそかなしかりけれ　〔拾〕是は新勅撰雑四に謙徳公につかはしけるよみ人しらずとて「思ふことむかしながらのとある歌也拾遺戀四「かぎりなく思ひながらの橋柱思ひながらに中やたえなんよみ人しらずこれらにてかけるにも有べし
（釋）思ひながらぞやと源氏君のゝ給へるにつきてそれを長柄に取なして橋柱といへるいとをかしくて

ふさまことのなういろめきたり。
さゝわけば人やとがめんいつとなく駒なつくめるもりのこがくれ。わづらはしさに。とてたち給ふをひかへて。まだかゝる物をこそ思ひ侍らね。今さらなる身のはぢになん。とてなくさまいといみじ。いま聞えん。思ひながらぞや。とてひきはなちて出給ふを。せめておよびて。「はしばしらとうらみかかるを。うへはみうちぎはてゝ。みさうじのうちより。のぞかせ給ひけり。につかはしからぬあはひかな。といとをかしうおぼされて。すき心なし。とつねにもてなやむめるを。さはいへどすぐさゞりけるは。とてわらはせ給へば。内侍はなまゝばゆけれど。「にくからぬ人ゆゑは。ぬれぎぬをだに。きまほしがるたぐひもあなればにや。いたうもあらがひ聞えさせず。人々も思ひのほかなる事かな。とあつかふめるを。頭中將きゝつけて。いたらぬくまなき心にて。まだ思ひよらざりけるよ。と思ふに。つきせぬこのみ心も。みまほし

意は思ひながらに中や絶なんとて猶つきまとふさま也

うへはみうちきはて丶　〔釋〕みかど御衣をめしかへて出給ふとて御障子の内よりのぞきて見給ふ也

すき心なしと　〔玉補〕内侍のごとき官女達の源氏君をばと也云々さはいへどすぐさゞりけるは内侍の源氏君をばさてはすぎしめざりけるはと也　〔萬〕内侍をさへすぐさずたはふる丶はとてわらはせ給ふ也　〔釋〕すぐさゞりけるはの注萬水一露よろし　〔岷〕源の好色ならぬと人のもてなやみしこと此前の詞にあり

にくからぬ人ゆゑは　〔河〕「にくからぬ人のきせけるぬれきぬはおもひにあへず今かわきなん　〔餘〕後撰戀五中將內侍二の句きせけん　〔釋〕ぬれぎぬはなき名おふ事にいひならへる一種の俗語也にくからず思ふ人の故にはなき名をだにおはまほしがるたぐひもある故にや內侍はいたくもあらがひ申さずと評じてかける也

あつかふめるを　〔釋〕もてあつかひて評判する也

いたらぬくまなきこゝろにて　〔釋〕好色のかたに至らぬ所もなく明らかなる心にてと也

まだ思ひよらざりけるよ　〔釋〕さる老人を物せん事はまだ思ひつかざりし事よと思ふに也

つきせぬこのみ心　〔釋〕年ふりたれど猶盡せぬ色好みの心をもいかなる物かと見まほしくなれる也盡せぬの語いとをかし

かたらひつきにけり　〔評〕省筆の文法

此君も人よりはことなるを　〔釋〕頭中將もよのつれの人よりは格別にうつくしき人なれば源氏君のかはりとしてつれなきなぐさめに見んと思ひつれど也

かぎり有けるをとや　〔釋〕此語いとまぎらはしきを諸抄にとかれたる意いづれも義の貫きて聞えたるはなしかれつら／＼考るに「かぎり有けるをとやとあるをもじは世字を草書にをと書たるをに寫し誤れるよりまぎれしなるべしさて河海に引歌二首を擧られたる後の歌に「戀しさのかぎりだにある世なりせばつらきをしひてなげかざらましとある此歌の句によりてかゝれたるにて意は頭中將をつれなき源氏君の御かはりにと思ひてかたらひつれど猶源氏君の見まほしきは戀しさのかぎりありける世とやいはましさてぞ源氏君のつらきをしひてなげくならんいとをこなる物ごのみやと草子地より評じたる也引歌の意は戀しさにもしかぎりのある世ならば人のつれなきをもしひてはなげくまじといふ意なるを打かへして戀しさにかぎりのありける世にやあらんつらき人をしひてなげくはとやうにとられたる故にかぎり有ける世とはいへる也さてとやの下にいはましなどの意を含めのこしたる也「御なぐさめにと思ひつれど見まほしきは」とつゞけよみてよく／＼味はふべし諸抄のひがことなるよしは餘釋に引いでゝ辨ふるがごとし一本をなく一本となきは寫しおとせるなるべし

かなはぬものうさに　〔玉〕ものうきは俗言にいやなるといふ意にてこゝはなぐさめんとおぼせど其心にもかなはずいやなるなり

夕だちしてなごりすゞしき
〔評〕けしき例のめでたし下の東屋を引出んため也

うんめいでん 〔河〕温明殿 〔花〕これは中の重の東の方にある殿にて内侍所のまします所なり 〔岷〕温明殿は神鏡はじめて別殿に移りおはします時の御殿とみゆ内侍所とも賢所とも申奉る内侍所とは神鏡のおはします御殿に必内侍のさふらふ也

この内侍 〔岷〕源内侍も温明殿にさふらふ也 〔釋〕内侍司温明殿にある故に此典侍もそこに局して侍ふなるべし

御前などにても 〔岷〕御前の御遊などにおぼろけの女房の所作は有べからず琵琶の上手なりと也

ものゝうらめしう云々 〔岷〕源の御事などを物うらめしく思ふなるべし又物思ふ時ひく物の音はその聲あるべければあはれに聞ゆといへり

うりつくりになりやしなまし

うなりにければ。かたらひつきにけり。此君も人よりはいとことなるを。かのつれなき人の御なぐさめに。と思ひつれど見まほしきは。「かぎり有けるをとや。うたてのこのみや。いたうしのぶれば。源氏の君はえしり給はず。みつけきこえては。まづうらみ聞ゆるを。よはひのほどいとほしければ。なぐさめんとおぼせど。かなはぬものうさに。いとひさしうなりにけるを。ゆふだちして。なごりすゞしきよひのまぎれに。うんめいでんのわたりを。たゝずみありき給へば。このないし。びはをいとをかしうひきゐたり。御前などにても。をとこがたの御あそびにまじりなどして。ことにまさる人なき上ずなれば。物のうらめしうおぼえけるをりから。いとあはれに聞ゆ。「うりつくりになりやしなまし。とこゑはいとをかしうてうたふぞ。すこし心づきなき。がくしうにありけん昔の人も。かくやをかしかりけん。とみゝとまりて聞給ふ。ひきやみて。いといたう思ひみだれたるけはひなり。きみあづまやをし

〔餘〕河海に引給へる催馬樂二段いさゝいたがへり今こゝにしるす山しろのこまのわたりの瓜つくりなよやらいしなやさいしなやうりつくりはれ　二段「うりつくり我をほしといふいかにせんなよやらいしなやさいしなやいかにせんいかにせん　三段いかにせんなりやしなましうりたつまでにやらいしなやうりたつまでに(催馬樂呂山城)　〔玉〕我をほしといふいかにせんなりやしなましといふを心づきなくおぼせるなるべし　(釋)この說いかゞたゞ色めきたるを心づきなくおぼせる也

かくしうに有けんむかしの人も　〔河〕此事定家卿本にはがくしうと有親行本には「文君などいひけんむかしの人もとあり兩說いづれも證本也各可レ隨ニ所好一　鄂州事(白氏文集第十)夜聞ニ歌者一宿ニ鄂州一。夜泊ニ鸚鵡州一。江秋月澄徹。隣船有ニ歌者一。發調堪ニ愁絕一歌罷繼以レ泣。泣聲通復咽。尋レ聲見ニ其人一。有レ婦顏如レ雪。獨倚ニ帆檣一立。娉婷十七八。夜淚似ニ眞珠一。雙々墮ニ明月一。借問誰家婦。歌泣何凄切。一問一霑レ襟。低レ眉終不レ說。案之鄂州猶叶ニ物語意一歟源內侍聲はいとをかしくて山城歌をうたひたるを鄂州にて樂天の歌を聞しによそへたる歟如何　〔湖師〕鸚鵡州は鄂州の內に有　(釋)鄂州と文君とはもじがらもいと異なるをいかにしてかまがひたりけん物のうらめしうおぼえけるなりからいとあはれに聞ゆといへる句につき〳〵しければ今は鄂州にしたがへり史記に以ニ琴心一挑レ之とあるには文君も似つきたれどそれは瓜つくりにとうたへるかたの事にてすこし心づきなきと評じ終れる詞あればなほ鄂州ぞよろしかるべき

ひきやみて　(釋)内侍ひきやみていたう物を思ひみだれたるさまに聞ゆる也源氏君の事たるべし

あづまやを　〔河〕「あづまやのま屋のあまりの雨そゝぎわれ立ぬれぬそのとひらかせ　二段「かすがひもとざしもあらばこそその戸われさゝめおしひらいてきませわれや人づま(催馬樂東屋律二段)〔細〕その戸開かせの意なり　〔岷〕前の詞に夕だちしてなごりすゞしきとあり雨ぞゝきの詞にたよりおもしろし

おしひらいてきませと　(釋)東屋二段おしひらいてきませといふ所より内侍のうたひそへたる也　されど女のいふべき詞つきにもあらずうたてければ例にたがひたるこゝちぞするやといへりいとめでたし

たちぬるゝ云々　〔湖〕我立ぬれぬといふをうけてわれを思ひて立ぬるゝ人もあらじを雨ぞゝきはうたて音するよと也源のこの戸ひらかせとの給ふともまことにあらじと也うたてはこゝはなまじひになどいふ心也　(釋)雨ぞゝきは雨たりのそゝきてちりかゝるをいふ故にうたてもかゝるといへり源氏君のとひ給ふによせたる事はいふもさらなり東屋といふ物の事は東屋卷に注すべし

われひとりしも　(釋)内侍のかくいふを我ひとり聞て我身のみには引おふまじくなほ他の男も同じさまならんとは思ひ給へどうとましくて何事をたれにかくまではなげくらんとおぼえ給ふ也聞おふとは内侍のいふことを聞て身に引負ふ意也俗に引うくるといふがごとし

人づまは云々　(釋)人妻は人の妻といふことにて卽東屋の歌にわれや人妻とあるをとりていへりこの下に見えたる修理大夫など其外にもかよふと聞給ひてかくよみ給ふ意也わづらはしはいさかひ出來てわづらはしからんの意なり　あづまやのま屋のあまりも東屋歌の詞也さてあま

のびやかにうたひて。よりゐ給へるに。「おしひらいてきませ。と打そへたるも。例にたがひたるこゝちぞする。

たちぬるゝ人しもあらじあづま屋にうたてもかゝるあまぞゝきかな。と打なげくをわれひとりしも聞おふまじけれど。うとましや。なに事をかくまではとおぼゆ。

人づまはあなわづらはしあづまやのまやのあまりもなれじとぞ思ふ。とてうちすぎなまほしけれど。あまりはしたなくや。と思ひかへして。人にしたがへば。すこしはやりかなるたはぶれごとなどいひかはして。これもめづらしき心ちし給ふ。頭中將は。この君のいたうまめだちすぐして。常にもどき給ふがねたきを。つれなくて。うち〳〵にしのび給ふかた〴〵おほかめるを。いかで見あらはさんとのみ思ひわたるに。これをみつけたる心ち。いとうれし。かゝるをりに。すこしおどし聞えて。御心まどはしてこりぬや。といは

りにも相馴じと思ふといひかけたろなり

あまりはしたなくやと（釋）打過てゆかんとはおぼしけれどさりとて餘りに不都合ならんと思ひかへして入給ふ也人にしたがへばとは先方の人がらによればといふ意也內侍の老て色めきたる人がらによりすこし手づよきさまの戲れなどもいひかはしてかやうなるもまたさろかたに珍らしき心ちし給ふとなり

頭中將は云々（釋）頭中將は源氏君の常に實體めきてわが好色事するをもどきいさめ給ふがくちをしきをさりげなくもてなして源氏君のかよひ給ふかたの多きを見あらはさんとてうかゞふに今かく內侍の局に入給ひたるを見て大に悅び給ふ也

かゝるをりにすこしおどして（釋）かやうの時におどして源の御心をまどはしてさてこり給ふやといひて常にもどき給ふむくいをせ

んとて俄にも入らずうかゞひ給ふなり
たゆめ聞ゆ　〔新〕源のねいりたる時入てつよく驚かしめんとて也
風ひやゝかに打吹て　〔評〕夕立のなごりの更ゆく空いとめでたし
すこしまどろむにやと　〔釋〕源氏のまどろみ給ふにやと見ゆるけしき故に頭中將やをら入給ふ也
君はとけてしも　〔釋〕花鳥本「君はそらねふりしてとけてもねられぬころなればと有諸本こゝろとあるは少しいかゞころを寫し誤れるにや　〔岷〕此内侍源の心にあかればうちとけてもね給はぬ也
猶わすれがたくすなるすりのかみ　〔河〕修理大夫也大夫は此職のかみ也　〔新〕修理大夫の此内侍を相しれる事をかたへより書入たるもおもしろし　〔評〕前後に緣なくて不意に書入たるがおもしろき也この内侍かゝるすきものなればかよふ人あまた有べくおもはせたる中の一人をとり出たる巧いとめでた

んと思ひて。たゆめ聞ゆ。風ひやゝかにうち吹て。やゝふけゆくほどに。すこしまどろむにや。と見ゆるけしきなれば。やをらひりくるに。君はとけてしもねられ給はぬ心なれば。ふと聞つけて。この中將とは思ひよらず。猶わすれがたくすなる。すりのかみにこそあらめとおぼすに。おとな〳〵しき人に。かくにげなきふるまひをして。みつけられん事はづかしければ。あなわづらはし。いでなんよ。「くものふるまひはしるかりつらんものを。心うくすかし給ひけるよとて。なほしばかりをとりて。屏風のうしろに入給ひぬ。中將をかしきをねんじて。ひきたて給へる屏風のもとによりて。ごほ〳〵とたゝみよせて。おどろ〳〵しうさわがすに。内侍はねびたれど。いたくよしばみなよびたる人の。さき〴〵もかやうにて。心うごかすをり〳〵有ければ。ならひて。いみじく心あわたゝしきにも。この君をいかにしなし聞えぬるにか。とわびしさに。ふるう〳〵つとひかへたり。たれとしられでいで

し
おとな〳〵しき人に 〔岷〕修理大夫年おとなしき人なるべし 〔釋〕にげなきふるまひとは老女とれ給ひたる事也
くものふるまひは 〔河〕「わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも 〔餘〕日本紀くものおこなひ 〔岷〕修理のこんとは女のかれて知ぬらんものをさもいはざりしをすかし給ふとのたまふ也 〔釋〕かれてしるしもといふによりてしるかりつらん物をとはかきたる也
ごほ〳〵と 〔玉補〕こもじ清てよむべきか 〔釋〕なほ濁りて讀べし〔湖〕屏風をたゝみよする音也
内侍はねびたれど云々 〔釋〕内侍は年たけたれどいたく風流めきなよよかに弱き人なるが已前もかやうの事どもありて心うごかす事なりなりありければそれに馴て甚しくあわてたる中にも源氏君をいかにするにかあらんとわびしさにふる

なばやとおぼせど。しどけなきすがたにて。かうぶりなどうちゆがめてはしらんうしろで。おもふにいとをこなるべし。とおぼしやすらふ。中將いかで我としられ聞えじ。と思ひて物もいはず。たゞいみじういかれるけしきに。もてなして。たちをひきぬけば。女あが君〳〵。とむかひて手をするに。ほと〳〵わらひぬべし。このましうわかやぎて。もてなしたるうはべこそ。さても有けれ。五十七八の人の。うちとけて物思ひさわげるけはひ。えならぬはたちのわかうどたちの御中にて。物おぢしたる。いとつきなし。かうあらぬさまにもてひがめて。おそろしげなるけしきをみすれど。なか〳〵しるく見つけ給ひて。われとしりて。ことさらにするなりけり。とをこになりぬ。その人なめりと見給ふに。いとをかしければ。たちぬきたるかひなをとらへて。いといたうつみ給へれば。ねたき物からえたへでわらひぬ。まことにはうつしごゝろかとよ。たはぶれにくしや。いでこのなほしきんとの給へば。

ひ〱中將を取とめたりとなりふろう〱はおぢわなゝきたろかたちつとは俗言にチーヤツトといふ意也〔新〕此所隔句ども多し直にいはゞ年たけても本より和らびたろ人にていと心あ　わたゝしくふろはろれどさすがにさき〱も有しになれてたゞざえにも消ず中將を引とゞめて君に近づかすまじうすると也さろなかく詞を前後の様に置にて文のよろしき也いせ物語などに此體おほし

あが君〱　〔餘〕日本紀卷五（崇神十年）乃脱レ申而逃之知レ不レ得レ免叩頭曰我君云々又號ニ叩頭之處一曰ニ我君一

このましうわかやぎて　〔湖〕内侍のさま好色にふけりわかやぎて身をもてなしだろうはべこそまだ風流にも有けれと也

うちとけて　〔湖〕内侍のかたちづくろひもなく打とけて居ろ時に中將におどされて思ひまどひしさま若き衆の中にてはみぐろしかりしと也

なか〱しろく見つけ給ひて　〔釋〕あらぬさまにもてなしておそろしきけしきをみするからに却て中將也といふ事を著く見しり給ふ也

我としりて　〔細〕中將の源としりてかくわざとおどす也と思して也

その人なめりと見給ふに　〔釋〕中將也と見給ふ故にいとをかしくなりて太刀ぬきたろ腕をとらへてつみ給へろ也

れたきものから　〔釋〕我と見しられたろが殘念なるものゝをかしくなりて吹出して笑ひ給ふ也

まことにはうつし心かとよ　〔新〕うつし心は現心にてこゝは常の心にてはかくはし給はじ物狂ひにやといはんがごとし

たはぶれにくしや　〔釋〕戯れたるが實の事になりて腹たつるやうの事にいへりかく太刀ぬきたろは本心にやさて〱戯れがたきことよとの意なり

いでこのなほしきん　〔湖〕前に直衣ばかりをとりて屏風のうしろに入給ひぬと有しどけなきさまなればまづ直衣きんとのたまふ也

つととらへて　〔釋〕中將直衣をとらへてさらにはなち給はぬ也

さらばもろともにこそ　〔岷〕源に直衣をきせ奉られば頭中將をもぬがせ給ふ也

すまふを　〔釋〕すまふはあらそふ意なり相撲をすまひと云もいどみあらそふ意の體言也

ひこしろふ　〔釋〕ひこはひきの轉しろふは辭にて互にする意也つきしろふなどのしろふに同じ

ほころびは　〔釋〕直衣の袖のほころびて絶たる也案に袖つけたる下の縫のこしたるをほころびとて一つの名にぞいひ　けんほころびはとある詞必體言と聞えたり今の小袖にヤツクチなどいふ所めきて聞ゆ猶餘釋にいへり

つゝむめろ云々　〔箋〕つゝむめろは源のうへに實法をたて給ふやうなれどもその名あらはれんといふ也　〔釋〕引かはしは互に引て也かく中の衣のほころびてはつゝみ給ふ名のもりいでんと也中の衣こゝにてはたがひに引かはす故に源と頭との中の衣といひなしたる也

うへにとりきば　〔河〕「紅のこぞめの衣したにきんうへにとりきばしるからんかも　〔餘〕六帖卷六衣部萬葉卷七には結句ことなさんかもと有

〔花〕ほころびたる直衣をうへにきばうき名はかくれあるまじき心也

中將つととらへて。さらにゆるし聞えず。さらばもろともにこそとて。中將のおびをひきときて。ぬがせ給へば。ぬがじとすまふを。とかくひこしろふほどに。ほころびはほろ／＼とたえぬ。中將。
つゝむめる名やもりいでん。引かはしかくほころぶる中の衣に。「うへにとりきばしるからむといふ。君。
　かくれなき物としる／＼夏衣きたるをうすき心とぞ見る。といひかはして。うらやみなきしどけなすがたにひきなされて。みないで給ひぬ。君はいとくちをしく見つけられぬる事。と思ひふし給へり。内侍はあさましくおぼえければ。おちとまれる御さしぬきおびなど。つとめて奉れり。
　うらみてもいふかひぞなき立かさねひきてかへりし波のなごりに。「そこもあらはに。とあり。おもなのさまや。と見給ふもにくけれど。わりなしと思へりしもさすがにて。

かくれなき云々〔新〕本より隠れなからんを知つゝかく來しは淺き心なれば我名よりもそこの名ぞしろからんてふ意也〔箋〕夏衣きたるとは頭中將の來れるをいふなるべし〔釋〕夏衣は着といひかけたる枕詞にして且うすきの縁なり時も今夏なれば也

うらやみなき〔玉〕我と人とのうへをくらべ見るに人のまされる事もなく我と同じき事をいふ詞也こゝは我も人もともにすがたの見ぐるしきをいへり詞のつゞきにても心得べし宿木卷にそれもわが有さまのやうにうらやみなく身をうらむべかりけるかし

おちとまれる御さしぬきおび〔岷〕前に直衣ばかりを取てと有〔評〕帶は中將の也下に此おびをえざらましかばと有かやうの事まで心を盡されたる筆つきいと／＼めでたし

うらみても云々〔新〕うらみは浦かひは貝たちかさねも引もなごりも

皆波汐などのよせ詞也　（釋）歌の意は源氏君と頭中將と立かさなりき給ひてさて引つれてかへり給ひしなごりいとかなしく悔みても恨みても今はかひなしと也

そこもあらはに　〔河〕「別れての後ぞかなしき涙川底もあらはになりぬと思へば　（釋）湖月に細流に擧られたるをひくとて後ぞこひしきとしたるはいみじき誤なりさて意は何事もみな底をつくしてあらはれたるがかなしと也

おもなのさまや　〔玉補〕おもなしとは面皮の厚く恥しらぬ心をいふ古へは恥かしく面目なき事をいへるが後には轉じたる也

あらだち云々　（釋）明星抄の今案にあらだちし波は頭中將よせけん礒とは源内侍の事なるべし達々頭君をかよはせし故今も如此の事あると也とある注よろし諸抄よせけん礒を頭君とせられたるはいみじきひがこと也さて意は頭中將のあらだちしに我は心もさわがれども元來かの人をよせたる内侍をいかでか恨みざるべきと也　〔拾〕いかゞうらみざらんにて落着はうらめしく思ふなり

おびは中將のなりけり　〔岷〕直衣のうへにする帶也源内侍のかたより源の指貫にそへておくれる也

我御なほしよりは色ふかしと　〔花〕聽（ユルサルヽ）二直衣一人（ヲ）昔は直衣のきれを帶に用ゐたる也主上の御帶は御引なほしのきれを用ゐ給ふ夏の直衣は二藍（フタアヰ）或は花田を年によりて着す源氏は宰相中將うす二あゐの色なり頭中將は年はまさりたれど官ひきゝによりてこき二藍の直衣を着用すべし官のたかきは宿德の色をもちゐる官のひきゝはわかき色を用ゐるならひ也云々今頭中將はこき二藍なればわが御なほしよりは色ふかしといへる也　〔箋〕花鳥に源氏を此段にて宰相中將と注せらるゝいまだ三位中將なり

はた袖もなかりけり　〔孟〕鰭（ハタ）袖端（ハタ）袖兩義也　〔新〕萬葉に宮人の袖着衣（ソデツケゴロモ）とよみしは袖の長からん爲によき人は袖の端に又着（ツク）れば端袖（ハタソデ）といふべし鰭の字はむつかしく聞ゆ　〔餘〕源平盛衰記廿三維盛は赤地の錦の直垂に大頸端袖（オホクビハタソデ）は紺地の錦にてぞたゝれたる眞淵の引たるは萬葉二十宮人の袖つけ衣秋萩にゝほひよろしきたかまどの宮といへる也卷十六にもゆふはたの袖つけ衣きしわれをと有　（釋）此段いとまぎらはしきを暫く右の說どもによりてとかば内侍がおくりし帶をもし我物かとて源氏君我御直衣と見合せ給ふに色深ければさては中將のなりけりと見給ふにつけて又我御直衣を見給へば端袖も引きられてなかりけりといふ意にて此時によべきられたるをはじめて心づき給へるさま也かく釋（トカ）ざれば帶を見給ふに袖のなきやうなる語路に聞ゆるをよくよく思ふべしされど端袖といふこと穩ならずもしくは箋細流の一說のごとく辭（ハタ）の將にてもあらんかなほ考ふべし

あやしの事どもや　（釋）袖の引切れたるを見て始て驚きあやしみ給ふ詞也

おりたちてみだるゝ人は　（釋）おり立ては其事に打はまりて物するをいふこゝは好色（スキ）事に打はまりてみだるゝ人はいかさまにもをこがましき事多からんと御心のおのづから治めらるゝと也いとゞといへるは空蟬夕顏などの卷々に見えたる事どもを思ひていへるなるべし

おしつゝみて　〔孟〕源氏のなほしのはた袖也

あらだちし。波に心はさわがねどよせけんいそをいかゞうら見ぬ。とのみなん有ける。おびは中將のなりけり。わが御なほしよりは色ふかしと見給ふに。はた袖もなかりけり。あやしの事どもや。おりたちてみだるゝ人はうべをこがましき事もおほからん。といとゞ御心をさめられ給ふ。中將とのゐ所より。これまづとぢつけさせ給へとて。おしつゝみておこせたるを。いかでとりつらんと心やましこのおびをえざらましかば。とおぼすそのいろのかみにつゝみて。

中たえばかごとやおふとあやふさにはなだのおびはとりてだに見ずとて

やり給ふ。たちかへり。

君にかくひきとられぬるおびなればかくてたえぬる中とかこたん。え

のがれさせ給はじとあり。日たけておの〳〵殿上にまゐり給へり。いとしづかにものどほきさましておはするに。頭の君もいとをかしけれど。おほや

いかでとりつらんと　〔釋〕源氏君直衣を見給ふに袖なかりしを今中將のかく返し給ふを見ていかにして中將の取つらんと心外に思ひ給ふなり

この帶をえざらましかば　〔釋〕源氏君我もし此中將の帶を得ざらましかばいかばかりくちをしかるべきに幸に帶を得たればとおぼしてその帶の色の二藍の紙につつみて歌かきてやり給ふ也

〔湖師〕中將へよき返報と思す也

中たえば云々　〔花〕「石川のこまうどに帶をとられてからきくいする　いかなる帶ではなだのおびの中はたえたる（催馬樂呂石川）今案帶を人にとられたるは石川の歌便あり又「あづまぢのみちのはてなるひたち帶のかごとばかりもあはんとぞ思ふとあれば帶にかごとはよせあり云々　〔新〕帶のかこは和名抄腰帶具に鉸具（上音古巧反一音教鉸具此間云賀古今按唐令所謂玉銙是也）腰帶及鞍具以テ銅ヲ屬スルニ革也と

いへる賀古これ也こは字音なれど漸に歌にもよめり〔餘〕谷川士清云和名の鉸具は卽帶鉤なればかぎの義也歌に常陸帶のかごとなどそへてよめり（釋）歌の心は中たえばゝ石川の歌の詞を借て頭中將と內侍との中たえばと也二句かごとに帶のかこをそへたる事諸注のごとしさて中たえば中將のかごとを我に負んかとあやふまれてかの石川の歌にいへるやうなる縹（ハナダ）のおびはとりてだに見ずかへし申すとの意也實は二藍なるをはなだとかへたるは似よりたる色なれば石川の詞をかりていへるがおもしろき也

君にかく云々〔細〕我中はそなたへ引取れて絕はてたると也（釋）內侍を帶によそへてよめり君にかう引取れたる女なれば此度の事の故にたえぬる中と思ひて猶君をかこち恨みんとおしかへして戲れたる也たえぬるは石川の歌の末句中はたえぬるといふを用ゐたりいとたくみ也

えのかれさせ給はじ（釋）此かごとをばえ遁れ給はじといひそへたる也さるは源氏の歌にかごとやおふとあやふさになどのたまへるが故也

いとしづかに物遠きさまして（釋）源氏君也よべの戲れのなごりに物遠きさまして居給ふ也舊注源と中將とゝいへるはわろし中將の事は次にいへり

おほやけ事おほく云々〔花〕頭中將貫首たるによりて宣下の事どもうけ給はるをいふ也〔湖師〕貫首とは藏人頭也殿上人のかしらといふ心なり

いとうるはしくすくよかなるを（釋）うるはしくはきとしたる體すくよかなるは和らがぬ體也

かたみにほゝゑまる（釋）源も頭もよべの事の思ひ出られて也

人まにさしよりて（釋）人の見ぬ間に頭中將源氏君の邊へさしよりてなり

物かくしはこり給ひぬらんかし〔湖〕前に御心まどはしてこりぬやといはんと思ひてたゆめ聞ゆとありし首尾也（釋）ねたげなるしり目し給ふもわさとかくいかきさましてかのもどき給ふ返報をせんとし給ふさま也

立ながらかへりけん人こそ〔湖〕頭中將の內侍とかたらんと思ひて來つらんに立ながらかへられしはいとほしと也

うしや世中〔餘〕案に六帖卷四「人言はあまのかるもにしけくとも思はましかばよしや世中此歌にていへり下に「とこの山なるとあれば人言のしけきを思ひていへるなるべしうの字はよの字の誤にや

とこの山なる〔河〕「犬上のとこの山なるいさや川いさとこたへて我名もらすな〔花〕人の問ともしらぬよしをこたへてうき名もらすなといへるは口かためたる心也〔餘〕古今集墨附四句いさとこたへよと有もとは萬葉十一狗上之鳥籠山爾有不知也河不知二五寸許瀬餘名告奈（イヌカミノトコノヤマナルイサヤカハイサトヲキコセワガナノラスナ）

いひむかふる（釋）言迎ふるにて戲言をいひて相手になりいどむ種子とする意也

いとゝ物むつかしき人故と〔萬〕內侍故と源氏の思ひしり給はんと也此べしもれいの批判なり（釋）いとゞは始より物むつかしく思ひ給ひしにこたびの事によりていとゞ也語脈點のごとし

さるべきをりのおどしぐさに
〔花〕しせんの時おちあたるたれにせんとおもふ心也　〔新〕源のきらはしく恥かしかるべければおどしぐさには成べし

やんごとなき御はら〳〵の云々
〔細〕是よりうるさくてなんといふまで草子地也　〔釋〕これよりは頭中將の源氏君といどみ給ふ事のよしをいひとく也やんごとなき御腹腹の御子たちとは貴き后女御などの御腹に生れ給へる親王たちといふ意也

うへの御もてなしの云々
〔釋〕源氏君は帝の御寵愛の格別なる故に自然とむつかしがりて何事もゆづりさけつゝあらそひ挑みなどはし給はぬにと也

この中將はさらにおしけたれ聞えしと　〔細〕誰も〳〵源には所を置給へ共中將はさもなき也　〔釋〕おしけたれ聞えじとは何事をも光映なくつぶされまじとの意也

この君ひとりぞ云々　〔箋〕葵上と一

けごとおほくそうしくだす日にて。いとうるはしくすくよかなるをみるにも。かたみにほゝゑまる人まにさしよりて。ものがくしはこり給ひぬらんかし。とていとねたげなるしりめなり。などてかさしもあらん。立ながらかへりけん人こそいとほしけれまことは「うしや世中よ。といひあはせて。「とこの山なる。とかたみにくちがたむ。さてそのゝちは。ともすればことのついでごとに。いひむかふるくさはひなるを。いとゞ物むつかしき人ゆゑ。とおぼししるべし。女はなほいとえんにうらみかくるを。わびしと思ひありき給ふ。中將は。いもうとの君にも聞えいでず。たゞさるべきをりのおどしくさにせんとぞおもひける◎やんごとなき御はら〴〵の御子たちだにうへの御もてなしのこよなきにわづらはしがりて。いとことにさり聞え給へるを。この中將は。さらにおしけたれ聞えじとはかなき事につけても。思ひいどみ聞え給ふ◎この君ひとりぞひめ君の御ひとつはらなりける御門の御子といふばかりにこそ

腹頭中將なり御門の御爲には姪也みかとの御妹のはらなり

みかどの御子と云々　〔湖〕源氏は御子といふはかりこそあれ頭中の父も大臣の中にてはおぼえことなるに其上大宮の　はらにてかしつかれてそだち給へば源にもさのみ劣らじと思ふからにや何事もいとみ給ふと草子地よりいへり　〈釋〉大臣家の權威こよなかりしこのほどの世にはげにかやうにこそ思ひ給ひけめ心を付て世の樣を見るべし

人からもあるべきかきりとゝのひて　〈釋〉頭中將の人品もあるべきほどのよき事とゝのひて才藝も何事も足ひておはしけると也　〈評〉桐壺卷よりこなた所々に見えたる大殿がたの事またこの頭中將のさまなどをりく\かくあらはして何となく其脉をとほし續けられたるいとめでたし主客正副の文法前後相照して味はふべし

この御中とものいどみこそ　〈釋〉源氏君と頭中將との御中のいとみといふ意なるはいふもさらなれど「あやしかりしかと有を思ふになほこの源内侍の事をむれとさしていへるなるべし「されとうるさくてなんとは猶いと多かりしかともさのみしるさんもうるさくて書とゞめたりといふ意をふくめたる也　〈評〉上文やんことなき御腹々のといふよりたらひてそ物し給ひけるといふまでは頭中將の源氏君に所をおかすいとみ給ふゆゑよしをときさてこゝにいたりて再び内侍の事を繼て書とゞめられたる筆つきれいの法ありていみじくめでたし

七月にそ后ゐ給ふめりし　〔花〕藤壺の女御中宮に立給ふ事也　〈釋〉かやうの所にめりしとやうのてにをはをつかはれたるは物語する人の後より思ひいでゝおほやうにかたるさまに書なしたるにて前後此例いとおほし心得おくへき事也

源氏の君宰相に　〈釋〉源氏の君參議に任し給ふ也

御門おりゐさせ給はんの　〔岷〕桐壺帝御下位あるべき御下心なり　〈釋〉ちかうなりてとは近々にと思しめし定められし也

此若君を坊にと　〔細〕藤壺の御腹の若宮冷泉院也　〔湖師〕東宮坊にとおぼしめす也

御うしろみし給ふべき人おはせず　〔河〕わか宮〈冷泉院〉の御外舅親王達にて人臣にて御うしろみすべき人なしといふなり源氏執柄右大臣能有例歟

源氏のおほやけ事しり給ふすぢならねは　〔新〕若宮東宮にたち給ひて末即位などあらんには御外舅の執政もし給ふべきを是は皆親王たちなればさるすぢならず又さるみこたちの中によし源氏として臣下なるが有とも今は只藤氏ぞ執給ふ例なればとの意なるべし末に光源氏の執政し給ふは自然の事也こゝには一わたりの筋を先いふのみさて源氏の執政は左大臣能有公の例は　あれどこゝには少し時の權をさけて書たるか　〈釋〉この源氏はたゞ臣下の皇子といふほどの意にいへり作者の意こゝにかくいひ置て末に源氏君の執政し給ふ事をいへるは深き心ある事と見えたり此立后の時しも源氏君の宰相になり給へるよしかゝれたるも伏案なるべし心をつけて見るべき也

はゝ宮をだに　〔萬〕藤壺中宮に立給へば御領なども過分にまゐればわか宮の御うしろみの代につよりにと御門のおぼしめす也　〈釋〉御領のみ

あれ。我も。おなじおとゞと聞ゆれど御おぼえことなるがみこばらにて。またなくかしづかれたるは。なにばかりおとるべききは。とおぼえ給はぬなるべし。人がらもあるべきかぎりとゝのひて。何ごともあらまほしうたらひてぞものし給ひける◎この御中どものいどみこそ。あやしかりしか。されどうるさくてなん「今云止メツル」

七月にぞ后ゐ給ふめりし。源氏の君宰相になり給ひぬ。御門おりゐさせ給はんの御心つかひちかうなりて。このわかみやを坊にと思ひ聞えさせ給ふに。御うしろみし給ふべき人おはせず。御はゝかたみなみこたちにて。源氏のおほやけ事しり給ふすぢならねば。はゝ宮をだにうごきなきさまにしおき奉りて。つよりに。とおぼすになん有ける。弘徽殿はいとゞ御心うごき給ふ。ことわりなり。されど。東宮の御世いとちかうなりぬれば。うたがひなき御くらゐなり。おもほしのどめよ。とぞ聞えさせ給ひける。げに東宮の御母にて。二十

の故にも有べからずすべて御威光ありて萬のつよみになり給ふべければ也

こうきでんはいとゞ云々（釋）藤つぼ中宮にならせ給へる故にいとゞねたき御心の動き給ふと也されどこれは道理也と地より評じていへるいとめでたし

東宮の御世いとちかう（釋）東宮のといふより帝の御詞也（湖師）朱雀院の御代近つきぬればうたがひなくこきでんは皇太后になり給ふべしと也

おぼしのどめよとぞ（岷）御門の弘きでんへことわり仰らるゝさまなり

げに東宮の御はゝにて云々（釋）こゝより又草子地也（細）廿餘年昔に讀む也（拾）細流につくべし云々（釋）本居翁云朱雀院東宮に立給ひてはまだ十四五年なれは年數かなはず朱雀院今年廿一二歳になり給へば東宮を生給ひて廿餘年といふ事也帝に仕へ給ふ年數

よ年になり給へる。女御を。おき奉りては。ひきこし奉り給ひがたきことなりかし。とれいのやすからず世人も聞えけり◎まゐり給ふ夜の御ともに。宰相の君もつかうまつり給ふ。おなじ后と聞ゆるなかにも。きさいばらの御子。玉のひかりかゝやきて。たぐひなき御おぼえにさへ物し給へば。人もいとことに思ひかしづき聞えたり。ましてわりなき御心には。御こしのうちも思ひやられて。いとゞおよびなき心ちし給ふに。そゞろはしきまでなん。

つきもせぬこゝろのやみにくるゝかな雲ゐに人をみるにつけても。とのみひとりごたれつゝ。物いとあはれなり。みこはおよずけ給ふ月日にしたがひて。いと見奉りわきがたげなるを。宮いとくるしとおぼせど。思ひよる人なきなめりかし。げにいかさまにつくりかへてかは。おとらぬ御ありさまは。世にいでものし給はまし。月日のひかりの。そらにかよひたるやうにぞ。世の人もおもへる。

といふは非なり

れいのやすからず（釋）れいのとは世人の口さがなきをさしていへり萬水一露に弘徽殿がたの人のいふといへるはわろし世人はたゞ世上の人也上文にことわり也といへる評語の心をあかしたる筆也

参り給ふ夜の御供に（釋）藤壺中宮となりて入内し給ふ夜の御供に源氏君も参り給ふ也若宮の御後見たるべき伏案をやう〳〵に顯はしたり

おなじ后と聞ゆる中にも云々

（釋）この同じといふ語はすべて后となり給ふ人の事を廣くさしたるなり后といへばいづれもみな后なれども其中にこの藤壺は臣下の御女ならず先帝の后腹の四の宮殊には若宮の御母とある御威光もかがやき又帝の比類なき御寵愛さへましませば世の人も格別に尊び敬ひ奉るといふ意なりきさいばらの御子とある御子は藤壺也わか宮の御事にはあらず

ましてわりなき御心には云々　〔湖師〕藤壺に御心のかゝれば也　(釋)いとゞ及なき心ちし給ふとは今までだにつれなかりしをかく中宮となり給ひてはいよ〳〵およびなくへだゝりて相見奉ることかたからんと思ひ給ふ也そゞろはしきとは相見まほしくて不覺(ソヾロ)にものぐるほしく飛たたまほしく思はるゝをいふ也

つきもせぬ云々　〔湖師〕藤壺を雲ゐ高く及なく見奉るにつけても戀路のやみははれがたしと也　(釋)花鳥細流などに心のやみは若宮の御事也と注せられたるさも有べき歟こゝはさしも若宮の御事にはあづからぬやうなれど心のやみなどいふ詞はかならず子を思ふ闇の事と聞ゆる例なれば也

ひとりごたれつゝ　(釋)誰にのたまふべき事にもあらずおのづからかく思ひ給ふなればひとりごたれといへるなり
いと見奉りわきがたげなるを云々　〔玉補〕いとはいとゞなるべし　(釋)若宮の源氏君と見奉り分がたきまで似給へるを藤壺はいとくるしとおぼせど人はしかとは思ひよらぬなるべし何とも評判をせぬと也評判せぬといふ語はなけれどめりかしといふ辭にておのづからしか聞ゆる也
げにいかさまにつくりかへてかは云々　(釋)こゝの意は源氏君の御かたちはかぎりもなくめでたければ誰人をいかやうなるかたちに作りかへたりとも源氏君に劣らぬかたち有さまの人は世に出給ふまじ然るを若宮のつゆたがはずして源氏君と同じさまに見え給ふは月と日との光の大空に似かよひたるやうなるものなりと世上の人も思へるといへる也げにといへるは見奉りわきがたげなるとあるをうけてげにといへる也
「月日の光の云々」世の人も思へるといへるは「思ひよる人なきなめりかし」といへる故を云々と思ひて疑はぬなめりとことわれるなり「世に出ものし給はまし」といふ下に「然るに若宮の見分がたきまでにおひ出給へるは」などの意を含めてよく〳〵味はふべし

(評)此巻は大かた藤壺宮の事を主として且若宮のおひ出給へる事をいふ巻なる故に此事をもてとぢめられたり「七月にぞ后ゐ給ふめりし」といへるより下後の巻々の伏案をたてゝ先源氏君宰相になり給ひぬといひ置て次に帝のおりゐさせ給はん御下心をいひそれにつけて若宮を東宮にとおぼしめすより御後見のなき事をいひて藤壺の立后もそれらのためなるよしを說き其中に弘徽殿の御事を評じてやう〳〵御中うとくなりゆくべき端をあらはし其次に藤壺の參內に源氏君も御供し給ふよしをいひてかの御後見たるべきはしをにほはせながら却て業平朝臣の古事に思ひよせて戀のかたにまぎらはしさて若宮のおよずけ給ふよしをいひて世人の源氏に似給へるを疑ひ思はぬゆゑをことわられたるなどつゆもすきまなき書ざま也其中にもこゝの末の二三句は殊にいみじくかすめられたる筆つきにしてかいなでの文かきのかけても及ばぬ姿といふべしよく〳〵くりかへしあぢはひてつくりぬしのぬけいでたるざえを賞すべくなん

第八帖 花宴 評釋

〔舊注〕〔花〕詞を以て名とせり但卷の詞には南殿の櫻の宴せさせ給ふとありて奥の二條のおとゞの藤の宴の所には藤の花の宴し給ふとあれば是につきて卷の名を花の宴といへるにやとおぼえ侍れど古來花の宴とは櫻を翫ぶ事をいひならはし侍るうへ是は禁中の事也かれは私の家の宴なれば猶南殿の櫻の宴をもて名目とせりと心得べきなり

〔箋〕卷名南殿櫻宴事也則花宴也

〔新〕櫻花の宴をたゞ花の宴とのみ云につけてさまざまの説あれどいふにたらずいかにとなれば古今集春部に櫻の條に或は詞或は歌にも必櫻と書てさてちるさくらの歌までを載たり又諸の花の條には詞にも歌にも只花とのみ有てさて落る花までを擧てさだかに分たりさるを五百年ばかりこのかたの人いかでよく見ざりしにや我國には花といへば櫻の事也などいふ説のみあり此説は後の人のならはしをこそいへ古へにはかなはず

〔玉〕卷の名此度の櫻の宴の事を須磨卷薄雲卷をとめの卷などにはすなはち花の宴と見えたり。源氏君二十歳の春なり

〔釋〕此卷の名は南殿の櫻の宴によられたる事もちろん也さるを櫻を花といふにつけて諸抄にさまざまいはれたることあるは新釋に辨へられたるがごとし但新釋の意はたゞいにしへにのみよりて此物語の比のさまをはおもはれぬいひざま也此物語の比はすでにうちまかせて櫻花を花とのみもいひたりとおぼしければ花の宴といはんになでふことかあらん史にも記錄にも皆花宴と見えたるをや且この卷の名は既にもいへりしごとく紅葉賀に對へて花紅葉を幷べ擧られたるなれば花といはんかた却て穩かなる故にもあるべし古今集の花の事ははやう契沖ほうしの餘材抄にいへりしこと也

〔評〕此卷は朧月夜君の事を語るをむねとしたる中に源氏君の若きみさかりをにぎはゝしく書なすをせんとせられたりと見えて時は二月の二十日あまり所は南殿の櫻の花ざかり日いとよく晴て空のけしき鳥の聲もこゝちよげなるに花の宴せさせ給ひ詩つくりあそびして源氏君東宮より挿頭花賜はり

て春鶯囀を舞給ふなどいときら〳〵しくえんにに
ぎはゝしき盛のさまなりさて夜ふけてさし出たる
有明のおぼろ月夜に弘徽殿の廊にて右大臣の六君
にゆくりなく逢給へるもえんになまめきたるかぎ
りの事也然るをこの女君の事の故によりて源氏君
つひには須磨明石のかたへさすらへくだり給ふこ
とゝなれりしは盛衰のありさまを月花によせて書
かすめられたる抑揚の法にて禍福報應の因縁をに
ほはせたるものとおぼし此事は總論にもかつ〴〵
いへりきそも〳〵世中のありさまは吉事きはまり
ては必凶き事起りあしき事極りては又よき事にう
つることと神代より定れるちぎりありてもろこし人
の糺へる繩の如しとかいひけんやうなる物なれば
いかばかりやんことなき君たちもかならず遁れ給
ふまじきことわりをいはんとてこそかくたらひに
たらひてにぎはゝしくえんになまめきたるかぎり
の中より遠く禍の出來る伏案をば立られたるなら
めされればにや花と月とを眼目としてにぎはゝしき
さまをあやなされたる脉見えたり先さくらの宴と
かき出られたるより日いとよくはれて空のけしき
鳥の聲もこゝちよげなるにといひて春といふもじ
給はれりといひはる〴〵とくもりなき庭といひ春
鶯囀柳花苑など皆その縁と聞えたりさて藤壺の御
歌に源氏君の事を花の姿とよみ給ひ又月いとあか
うさし出てをかしきといひおぼろ月夜にゝる物ぞ
なきと打誦じてといひ源氏君の歌に入月のおぼろ
けならぬといひ取かへ給へる扇の畫にさくらの三
重がさねにてこきかたに霞める月をかきてといひ
それに書つけ給へる歌に有明の月のゆくへといひ
二條のおとゞの藤花の宴にもなほおくれさく櫻二
木をそへていひ源氏君の御直衣にもさくらの唐の
綺といひ花のにほひもけおされてどいへるなどは
殊にはな〴〵しくにぎはゝしきをほめたる也さて
つひに朧月夜君にたづねあひ給へる所にもほのみ
し月の影といひかへし歌に弓張の月なき空などい
へる何れも皆此脉のにほひなる中に花をば主とし
て月を副たりこは本卷の名をむねとしたればなる
べしさて此朧月夜の事つひに榊卷の鳴神の段にい
たりて事あらはれそれより須磨にさすらへ給ひは
らへの日の雨風のさわぎに其罪やう〳〵のぞこり

て竟に明月の秋の月に雲霧はれて明らかになりつゝ都にかへりのぼり給ふまでいと心ふかき伏案ありきと見えたりそは其卷々に評ずるを見て知るべし

○此卷は遠く須磨明石の卷の伏案を思ひ構へられたりと見えて其おもかげしたゝにほひたりそは先卷の初に弘徽殿女御の藤壺宮に中宮を越られ給へるををりふしごとに安からずおぼすよしをかき出られたるは末にいたりて源氏君の御かたに怨の かゝる事の一也さて源氏君の舞給ふを見て中宮のおもほす事の中に東宮の女御のあながちにくみ給ふらむもあやしうとあるも其脉也其次に東宮に奉らんとおぼし定めて弘徽殿の御かたにとゞめ置給へる朧月夜君にひそかに逢給へるはあるが中に御うらみの重るべき基を醸したるにてさかきの卷の鳴神の段にほころばし出たる伏線の端なりされぱつひに此事によりてぞ源氏君は須磨にさすらへ給へる此脉次の卷々にいたりてやう〳〵に甚しくなりゆく樣をよく〳〵味ひ考ふべしさて二條右大臣家の段もさばかり花やぎにぎはゝしきおとゞの殊更にとりよそひてむかへ給へる藤のえんも竟には源氏君の御光にけおされて事ざましとなりたるなど皆このすぢにかゝる事にてさらぬ御用意さへうらみの媒となりゆく情景をいとよく抑揚して書なされたり其中におとゞの花やぎ驕られたるさまをいはんとてわがやどの花しなべての色ならばなどいひてかの伊勢物語の忠仁公の故事をしたにふまへてかきながらにはかにはあらはさず末に源氏君の詞の中にかしこけれどこのおまへにこそかげにもかくさせ給はめとある所にてかの業平朝臣の「さく花の下にかくるゝ人おほみありしにまさる藤の蔭かなとよまれたる歌をさりげなくにほはせて藤氏の榮花の盛を蔭といふ一もじにて思はせたるなどはかけても思ひ及ばぬ筆つきといふべしさてまた扇のぬしを尋ね給へる所にさいばらの石川の歌の詞をいひかへて帯を扇にとりなされたるもいと心きゝたるもの也まして卷の末を「いとうれしき物からといふ詞に餘情を含め書さして終られたるなどはいと〳〵珍しき筆にてこれよりさきの文どもにかつて例なき事なるをかく思ひよられた

るいと〳〵めでたしされば舊注いづれもいたくほめはやされたりされども其ふくめたる餘情の意をばさま〴〵に思ひひがめられけんとおぼえてつきなき說ども多し其よしはかしこに論ふを見るべしさて又舊注に俊成卿の六百番歌合の判の詞に紫式部は歌よみのほどよりも物かく筆は殊勝の上花宴巻はことに艷なるもの也とあるを引出て此巻をのみ殊に勝れたるやうにいはれたるは心得がたし艷なる事は花やかにかゝれたればさも有べし歌と文とのけぢめはいかゞあらん大かた何れの巻々も皆その事のさまによりてえんにもあはれにもあやどられたるなればいづれを殊にすぐれたりとは定むべくもあらず俊成卿も殊に艷なる物也とこそかゝれたれ殊にすぐれたりとはのたまはぬをやかへすがへす意得がたし

南殿のさくらのえん　〔河〕南殿ノ櫻（紫宸殿）此本殿ノ巽角にあり是大略草創よりの樹也貞觀に枯といへども根より纔に萌出けるを坂上瀧守これをまもる枝葉再盛云々下略〔湖師〕左近の櫻と云是也今も紫宸殿の御階ちかくにあり云々

きさき東宮　〔細〕后は藤壺東宮は朱雀院なり

左右にして　〔細〕南殿の東西なり東宮は左東なるべし后は右西なるべし

こうきでんの女御は云々

〔細〕藤壺に立后をこされ給ふを恨み給ひて同座もなき也されども今日は參り給ふ也　〔釋〕かくておはするとは后にたち給ひて帝にそひておはするを云物見にはえすぐし給はでとは同座もし給ふまじく思しめせど物見るはゆかしくてえ過さず參り給ふと也情景さもあるべしいとよく書とられたり

日いとよくはれて　〔細〕前の紅葉賀の日は日くれかゝるほどに氣色ば

きさらぎの二十日あまり。南殿のさくらの宴せさせ給ふ。后東宮の御つぼね。左右にして。まうのぼり給ふ。弘徽殿の女御は。中宮のかくておはするを。をりふしごとにやすからずおぼせど。物見にはえすぐし給はで。まゐり給ふ。日いとよくはれて。空のけしき鳥のこゑも。心ちよげなるにみこたち上達部よりはじめて。そのみちのは。みなたんゐん給はりて。ふみつくり給ふ。宰相の中將。春といふもじ給はれり。との給ふ聲さへ。れいの人にことなり。つぎに頭中將。人のめうつしもたゞならずおぼゆべかめれ。といとめやすくもてしづめて。こわづかひなど。もの〳〵しくすぐれたり。さての人々は。みなおくしがちにはなじろめるおほかり。地下の文人は。ましてみかど東宮の。御ざえかしこくすぐれておはします。かゝるかたにやんことなき人。おほく物し給ふころなるに。はづかしくて。はる〴〵とくもりなき庭に立いづるほど。はしたなくて。やすきほどの事なれど。くるしげなり。年おいたる

かり打しぐれてと有此花宴には日いとよく晴てとかけりいづれも時節に相應したる感を思ふべし（釋）けしきめでたし細流の御評いとよく見出給へり實に紅葉賀と反對の筆法なるべし

その道のは　〔玉〕上に文學の事見えざるに其道とはいかゞなるごとくなれどもすべて宴には詩を作るをむねとすればかくいへり　〔玉補〕小櫛に云々とあれど今思ふに下の句に文作り給ふと有を上へめぐらして其道といへるなるべし

たんゐん給はりて　〔細〕韵の字を一字づゝ探得て詩を作るなり各分ニ一字ニの事也　（釋）この作法餘釋に擧つ

春といふもじ給はれりと　〔花〕花のえんの詩に春といふ韵の字はあひにあひたる事也云々　〔細〕韵字を探得ては各そのよしを申也官姓名何々の字を賜るとなのる也云々こわづかひ容儀心づかひ有べき事と見えたり

はかせどもの。なりあやしくやつれて。れいなれたるもあはれに。さま〴〵御覧ずるなんをかしかりける。がくどもなどは。さらにもいはずとゝのへさせ給へり。やう〳〵いり日になるほどに。春の鶯さへづるといふまひ。いとおもしろくみゆるに。源氏の御紅葉の賀のをり。おぼし出られて。東宮かざしたまはせて。せちにせめの給はするに。のがれがたくて。たちて。のどかに袖かへす所を。一をれけしきばかりまひ給へるに。似べき物なく見ゆ。左のおとゞ。うらめしさもわすれて。なみだおとし給ふ。頭中將いづらおそしとあれば。柳花苑といふまひを。これはいますこし打すぐして。かゝることもやと心づかひやしけん。いとおもしろければ。御ぞ給はりて。いとめづらしきことに人思へり。上達部みなみだれてまひ給へど。夜にいりては。ことにけぢめも見えず。ふみなどかうずるにも。源氏の君の御をば。かうじもえやらず。くごとにずじのゝしる。はかせどもの心にも。いみじうおもへり。

つぎに頭中將〔玉補〕人のめうつしもたゞならずと中將の心におぼゆべかめれどそれにつけて臆する心もなくといふ意也〔釋〕めうつしとは人の目につく事也人より目につけて容儀など凡ならずと思ふよし也

めやすくもてしづめて〔新〕めやすくは見苦しきに對ふ語にて見よくしなし給ふをいふ也もてしづめてとはよくしなし得給ふ也〔釋〕もてしづめてはあわつかならず容儀を靜にふるまひ給ふ事也

さての人々は〔釋〕さて其外の人々はといふ意也源氏君頭中將の外の人をいへるなり

おくしがちに〔花〕おくは臆病の心なり人の臆したる時はよそへ目がくばられずしてかならず鼻のうへがしろ／＼と見ゆる也〔新〕臆すれば鼻白み心驚けば面赤む也〔釋〕晴がましき所にては臆する物也情景思ふべし

地下の文人は云々〔釋〕堂上の人々もはなじろめるが多きにまして地下の文人どもはと也ましてははづかしくてへ係る脉也帝東宮の御ざえかしこく云々はそのはづかしき事のよしをことわる例の文法なり

はる／＼とくもりなき庭に云々〔釋〕はる／＼とは廣き形容をいへる辭也くもりなき庭は上に日いとよく晴てとあるをうけて且あきらけき君の御前なるよしをよせたりさる御前に立出る事官位ひきくざえもまた薄ければはしたなくて詩一首作るほどの事はたやすきことなれど迷惑に思ふと也やすき事なれどの注細流よろし明星岷江の說はたがへり餘釋に擧て辨まふべし

としおいたるはかせどもの云々〔釋〕地下文人の中に老人の博士どものかたちあやしく見すぼらしきは常の事ながらかく御前へめし出されてこうじたるさまをとり／＼あはれに御覽ずるがをかしと也此をかしは感あり興ある意也さる は儒者などいふらんものはそのかみよりかくやつ／＼しきものなりけん時におくれてかたくなに年老たるげにいとあはれにもをかしくも有ぬべしれいなれたるとは貧窶の姿が常住不斷となりて見馴たる意なり

樂どもはさらにもいはず〔花〕花のえんには御遊ばかりにて舞樂はなし但天曆三年三月十一日二條院（陽成院の事也）花宴同月十二日內裏仁壽殿花宴各有二舞樂一卽奏二春鶯囀一又地下の伶人ばかりにて殿上の舞はなき也此物語のならひ面影もあれば藍よりも靑く書なしたる也〔新〕右の說はよし鶯のさへづるといふ舞などいへるもかなへりさて花宴には樣韵などの式も見えぬをこれにはそへし事其外にも多し〔釋〕とゝのへさせ給へりとは御用意ありといふ意也

やう／＼入日になるほどに〔評〕上に日いとよくはれてといひ下に夜に入てといひ又夜いたうふけてといへる首尾の脉なり

春の鶯さへづると〔河〕春鶯囀壹越調大曲新樂一名天長寶壽樂〔細〕天曆の例なるべし春鶯囀花宴にたより有云々

源氏の御紅葉の賀〔玉補〕こゝにてきるべし上の詞にゆづりて舞といふことをはぶきたる也〔釋〕此說いかゞ御字は賀字へ係る意なるべし紅葉賀卷に御かれうびんがの聲とあるに准へて思ふべし〔新〕紅葉賀てふことこゝにみゆかくおくれて書もまた文なり

東宮かざし給はせて　〔釋〕東宮源氏君の紅葉賀の時の舞の事をおぼし出られて挿頭の花を賜ひてねんごろに御所望まします也賜はせとは人して令賜給ふ事責とは遁れがたく勸め給ふこと也

立てのどかに袖かへすところを

〔弄〕源はいづれの舞とも見えず一さし也　〔岷〕河海には一かへりと有同心なり　〔新〕これは伶人どもの舞臺にて舞なる春鶯囀の末を殿上にて源はまひ給ふなるべしさて東宮かざし給はせて舞給ふにあまりけしきばかりならんもいかゞ侍らん此一をれとは一疊をいふにや此樂大曲にてむかしは十四疊有しとかいふめればそれが中の一疊のみはけしきばかりともいひつべきものとやんことなき仰の侍し也

〔釋〕此說よろしげなり弄花細流などに何の舞とも見えずとあるはいかゞ上に春の鶯さへづるといふまひいとおもしろく見ゆるにとあれば春鶯囀なること論なきものをや

かうやうのをりにも。まづこの君をひかりにし給へれば。みかどもいかでかおろかにおぼされん。中宮御めのとまるにつけて。東宮の女御の。あながちににくみ給ふらむも。あやしう。わがかう思ふも心うしとぞ。身づからおぼしかへされける。

おほかたに花のすがたを見ましかば露も心のおかれましやは。御心のうちなりけん事。いかでもりにけん。夜いたうふけてなんことはてける。上達部おの〳〵あかれ。后東宮かへらせ給ひぬれば。のどやかになりぬるに。月いとあかうさし出てをかしきを。源氏の君ゑひごゝちに見すぐしがたくおぼえ給ひければ。うへの人々もうちやすみて。かやうに思ひかけぬほどに。もしさりぬべきひまもやある。と藤つぼわたりを。わりなうしのびてうかゞひありけど。かたらふべき戸ぐちどもさしてければ。打なげきて。なほあらじに。弘徽殿のほそどのにたちより給へれば。三のくちあきたり。女御はうへ

左のおとゞ 〔箋〕こゝに初めて左府と書り

うらめしさもわすれて 〔細〕葵上にふさはしからぬを恨むる心あれどさやうの方をも打わすれ給ふ也

頭中將いづらおそしとあれば云々 〔細〕紅葉賀の時の源のかたてなれば何とておそきぞとある也 〔釋〕東宮ののたまふなるべし

柳花苑といふまひを 〔河〕此舞樂圖波羅門僧正持來女形也 其姿如吉祥天女舞體柔々靜々而已云々賜御衣延長例也 〔細〕此樂上古は舞ありき今は斷絶と云々

今すこし打過して 〔細〕源よりは念比にまふ也 〔花〕久しくまふ也〔箋同〕〔釋〕打過しては右の二義をかれたり河海に舞體柔々靜々とあればいとしづかに舞給ふ也故に念比にも久しくも有べしかゝる事もやと云々は若かやうに御所望の事もあらんとかねて用意して手のかぎり考へてならし置給ふこと也語脉點のごとし

御ぞたまはりて 〔花〕花宴の日殿上の舞又勅祿を給ふ事などめづらしき例也 〔湖師〕河海に延喜延長の花宴に御衣を賜ふ例はあれども堂上の舞たる故にはあらざる也

かんだちめみなみだれて云々 〔箋〕源氏に舞を所望は臨時の處分なり紅葉賀のかた手なれば頭中將にもならべて御所望也然間各やむ事を得ずして次第に上達部に及べりと見えたりかねて期せざる事也花宴に堂上の舞其例未だなき故に如此臨時の體に書なすなるべし 〔釋〕みだれてとは入亂れて次第なく舞給ふなるべし夜に入ては殊にけぢめも見えずとは火影などにては上手下手のけぢめも別段には見えぬとなり

ふみなどかうずるにも 〔花〕詩を披講する時には庭中にたてたる文臺をかきて御前にたてゝ文人どもは階下にすゝみて講頌するなり 〔釋〕このふみは詩の事也花鳥本にはやがて「詩どもかうするにとあり

かうじもえやらず 〔釋〕かうじもえやらずとは文人ども披講しもえせずといふ意也又一本にかうしもえよみやらでとあるは孟津湖月などのごとく講師もえ讀やらずといふ義也されどこれは宗祇が私に改めたるよし岷江入楚に論あれば今はとらず其よしは餘釋にいへるを見るべし

句ごとにずじのゝしる 〔箋〕毎句秀逸なる故に各感ずるとて講頌中々事もゆかぬ體也云々

かうやうのをりにも云々 〔細〕草子地也桐壺のみかどは何事にも源氏君を光にし給ふよしなり

中宮御めのとまるにつけて云々 〔釋〕藤つぼ源氏君に御目のとまりていみじく覺え給ふにつけては弘徽殿女御のあながちに源氏君を憎み給ふもいかなる心にかとあやしく又藤つぼのみづから源氏君をいみじとおぼえ給ふも心うしと我と思ひかへし給ふと也心うしとはかのみそか事を思ひ絶んとし給ふに猶御心にまかせぬやうにて源氏君をいみじと見給ふが心うき也かれおぼしかへされけるといへり歌の下句もさる意也よく〳〵味はふべし諸抄いと粗くして辨へがたし

おほかたに云々　〔玉〕此大かたは源氏君の舞を密通の事なくてたゞ大かたの世の人にて見たらばとなり紅葉賀巻（四のひら）に大かたにはとある所にいへるに同じ考へ合すべし　〔釋〕歌の心は大かたの世人にて源氏君の花のごときすがたを見たらば露ほども心のおかれて心うしとおぼゆる事はあるまじきにと也花の縁に露といひ露の縁におかれといふおのづからの縁語也細流いたくたがへり引れたる歌もさらにかなはず

御心のうちなりけん事　〔細〕かやうの御歌は人にかたり給ふべきならねば御心ひとつにてあるべき物をと也草子の地也　〔釋〕いかでもりにけんとおぼめきたるは例の物語する人になりていへる語なり

夜いたうふけて　〔岷〕延長四年花宴御記寅二刻入内侍臣退出云々

あがれ　〔河〕分散又云頒　〔箋〕退散　〔釋〕分散退散共にあたれり頒はあがつにて物を分つなれば自他たがへり

后東宮かへらせ給ぬれば云々　〔釋〕上文の結末より月いとあかうさし出てといひて夜のふけたるをあらはしたり三月廿餘日の月のけしき思ふべし

うへの人々も　〔湖〕天子に御番の衆皆ふししづまる也　〔釋〕打やすみてとあるてもじ下に係る所なくていかゞ

かやうに思ひかけぬほどに　〔釋〕かやうに案外なる時分には然るべき隙のあるものなればと也

かたらふべき戸口ども云々　〔細〕王命婦がつぼねなるべし　〔釋〕なほあらじにはたゞはあらじといふを體言にしたる語なり

弘徽殿のほそどの　〔河〕細殿秘説云（忠教卿説）ほそどのとは廊の字をよめり舊記に廂をほそどのと點ず是も其心歟　〔細〕桐壺のすぢむかひ也　〔拾〕和名第十六唐韻云廊音郎（和名保曾止乃）殿下外屋也萬葉第十七には細殿とかけり廊の字の和訓すなはち此意なり

三のくち　〔河〕弘徽殿に南北へほそくとほりたる戸あり是は北より第三にあたる戸也格子遣戸也　〔花〕三の字はこゝによむべしこきでんのほそどのゝ戸三あり第三の間にあたる戸といふ心也河海にいへる相違なし　〔弄〕弘徽殿の東にわたり廊ありそれをほそどのといふ細殿へ出る所に戸三あり南の第三にあたりくるゝさしたる戸也　〔玉〕紫式部日記にほそどのゝ三の口に入てふしたればとありこれは禁中の事にはあらず禁中ならでもあるなめり

女御はうへの御つぼねに　〔湖〕弘徽殿は宴はてゝすぐに御宿直なりし也　〔釋〕上の御局は帝の御座所近き所にある御ざうし也禁秘御抄のおもふき藤壺と弘徽殿と二所にかきりてあるさま也

おくのくるゝ戸もあきて　〔岷〕私云おくのくるゝ戸もとあれば三の口の戸とは各別歟　〔釋〕くるゝ戸とは戸の上下に樞をつけたるひらき戸の事也河海にたゝき戸とも號する也とあるはさる名も有しにやいぶかし三の口の奥の樞戸也こゝより殿上へかよふなるべし

世中のあやまちは　〔玉〕世の中の女のあやまちする事のあるもかやうなるよりおこることぞと源氏君の心のつき給ふ也舊注ども　あやまちをみ

づからの事に見て用なき事多くして意明らかならず
やをらのぼりて （釋）のぼりてとは樞戸より入て殿の長押ある其長押の上の一段高き所へのぼり給ふ也下文にいだき下してと あるに心をつく
べしのぞき給ふは殿の内を也此所諸抄説なきはいかゞ
おぼろ月夜に云々 〔河〕「てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜ににる物ぞなきしく物ぞなき（伊行釋）〔餘〕大江千里集に不レ晴不レ暗
朧々月と題有て右の歌あり結句朧月夜ぞめでたかりけるとせり （釋）新古今集にはしく物ぞなきとあり河海の原本には似るとせり
こなたさまにくるものか （釋）この物かといふ詞の解ざま甚かたしこゝは傍に記せし譯注のごとき意也若くるを來ッと譯す時はくるの上に
アツラヘタヤツニなどの語を足して心得べし舊注いづれも意聞えず
あなむくつけ （釋）むくつけの意譯注のごとしのたまへどゝかけるはこゝはまだ誰ともしられぬ所なれど末にて右大臣の御女としらるればひ
きこしていへる也此類他にも例ありて一の文法なり心得おくべし
ふかきよの云々 〔新〕おぼろ月夜をめでありき給ふはおのづから我に逢給ふべき契の大かたならねば也といふを春の月よりおぼろけとはいひ
かけて上よりは入月のおぼろといふまでかゝれり萬葉に布留のわさ田のほには出ずなどつゞけて例多き事なるを或説にはおぼろけならぬと
いふまで月の事と思へるは誤れり （釋）此新釋説得られたり舊注はいとたど／＼しく聞とりがたしふかき夜のあはれとは上に夜いたうふけ
てと有てさて朧月夜に似る物ぞなきとあるに相照して聞べし入る月といふ事舊注に論あれどさまではあらぬ事也大かたに見るべき也契は例
の宿縁の事也
やをらいだきおろして 〔玉補〕上にやをらのぼり給ふとあるをかへり見るべし云々 〔新〕上にやをら上りてとあるはおくの長押の上なるべし
依てかたへの下の間にいだきおろしてさて戸をさしつるといふならん立てありしを居させしにはあらじかし （釋）長押より庇の間へおろす
也戸は上のくるゝ戸なるべし
まろは皆人にゆるされたれば 〔細〕源の自稱にはあらず人にゆるされたると計略にの給ふ也此人にすまはせじのため也 〔新〕まだわかき女の
ほどを見ておしての給へり云々
たゞしのびてこそは （釋）たゞひそかにしてこそは居給はめの意也
いさゝかなぐさめけり （釋）源氏君と聞定めて女の少しなぐさめたりと也光るなどいふ名にめでゝなるべし
なさけなくこは／＼しうは 〔湖〕女の心源になびきたるなり
ほどなくあけゆけば 〔岷〕春のみじか夜のふけたるさま思ふべし
あわたゝし 〔河〕周章 又 [illegible]

さまざまに思ひみだれたり
〔箋〕思ひかけず源に逢給へる事又は東宮へ参らせんと内々おとゞの給ひしさやうの事ともなるべし
なほ名のりし給へ〔湖〕猶といふ字に心を付べし最前より名のり給へとのたまへどなのらざる故今またかやうにの給ふなるべし
いかでか聞ゆべき云々〔細〕向後何として申通ずべきぞと也このまゝ一たびにてやみ給はんはよもおぼされじと源ののたまふ也
うき身世に云々〔新〕身の消るまでをいふも女ひとへに思ふさま也草の原とは墓の事にて其消て後の世をいふ然れば草の原をばとはじとや思ふとは我は今よりひとへに思ひたのむ物を君は後の世までの契にはあらでかりそめの此世のすさび也けりふかくおぼさば尋れ入べきやうもあらんを名のらずはいかで聞えんなどの給ふよと恨むる也云々〔箋〕しきりに名を尋ねらる

の御つぼねに。やがてまうのぼり給ひにければ。人ずくなゝるけはひなり。おくのくるゝ戸もあきて。人おともせず。かやうにて世中のあやまちはするぞかし。と思ひて。やをらのぼりてのぞき給ふ。人はみなねたるべし。いとわかうをかしげなる聲の。なべての人とは聞えぬ。「おぼろ月夜ににる物ぞなき。とうちずじて。こなたざまにはくるものか。いとうれしくて。ふと袖をとらへ給ふ。女おそろしと思へるけしきにて。あなむくつけ。こはたそ。とのたまへど。何か「うとましき」とて。
ふかきよのあはれをしるもいる月のおぼろけならぬちぎりとぞおもふ。とて。やをらいだきおろして。とはおしたてつ。あさましきにあきれたるさま。いとなつかしうをかしげなり。わなゝくわなゝく。こゝに人の。とのたまへど。まろはみな人にゆるされたれば。めしよせたりとも。なでふ事かあらん。たゞしのびてこそは。との給ふこゑに。この君なりけり。と聞さだめて。いさゝか

るにて志のふかゝらぬはしられたる也其故は眞實の志ならばなき跡までも尋らるべき也今にかぎるべき事かはと也名譽の作者也

聞えたがへたるもじかな　〔玉〕もじかなは文字かなにて詞かなといふこと也詞をもじといへる例葵の巻に今はさるもじいませ給へこれもあだ也といふ詞の事をいへる也須磨巻にもわかれといふもじこそとありされぱこゝも申しそこなひたる詞歎といへる也云々　〔釋〕草の原をばとはじとや思ふとあるをうけてげにことわりなり我々がいひそこれたる詞かなとて謝し給ふ也この所舊注どもえもいはれぬひがことのみにて論にも足ず

いづれぞと云々　〔釋〕草の原といへるを受て露の屋どりといひ露のやどりより小篠が原と轉じたり露の屋どりに女君の在所をよそへ篠原の風に人言のさわがしきをたとへたるはもちろん也さて意は然らば露のやどりをいづくぞと尋れ入て

なぐさめけり。わびしと思へるものから。なさけなくこは〳〵しうは見えじ。とおもへり。ゑひごゝちやれいならさりけむ。ゆるさん事はくちをしきに。女もわかうたをやぎて。つよき心もえしらぬなるべし。らうたしと見給ふに。ほどなくあけゆけば。こゝろあわたゝし。女はましてさま〴〵に思ひみだれたるけしきなり。なほなのりし給へ。いかでか聞ゆべき。かうてやみなんとは。さりともおぼされじ。などのたまへば。

女　うき身世にやがてきえなばたづねても草の原をばとはじとや思ふ。といふ

さまえんになまめきたり。ことわりや。聞えたがへたるもじかなとて。

源　いづれぞと露のやどりをわかんまにこざゝがはらに風もこそふけ。わづらはしうおぼす事ならずは。なにかつゝまん。もしすかい給ふか。ともいひあへず。人々おきさわぎ。うへの御つぼねに參りちがふけしきども。しげくまよへば。いとわりなくて。あふぎばかりを。しるしに取かへて出給ひぬ。

わかたんされども其間にはわけ入る小篠が原に風吹てさわぎもこそせめと也わけんといふべきをわかんといへるは女を誰人ぞと分たんといふ意にかけたれば也故にいづくそとゝいふべきをもいづれぞとといへり心を付べし舊注どもいと粗くして歌の心聞えかねたり又右大臣と源氏とは御中のよからぬ中なればなどいはれたる說すべてひがこと也こゝにてさる事いはん物かはいと〳〵つきなし〔箋〕露のやどりをもとめうしなふべきいはれを陳じたるなり

わづらはしうおぼす事ならずは〔細〕そなたの煩はしくおぼしめさぬことならば也〔釋〕本居翁云とかくしてとひよりて小笹原に風さわぐをもそなたにわづらはしくおぼさぬ事ならば何しにこなたはつつみて遠慮いたさんと也(書入本)もしすかい給ふかと〔新〕たばかりいひて又はあはじの御心にてなのり給はぬにやと也

きりつぼには。人々おほくさぶらひて。おどろきたるもあれば。かゝるを。さもたゆみなき御しのびありきかな。とつきじろひつゝ。そらねをぞしあへる。入給ひて。ふし給へれど。ねいられず。をかしかりつる人のさまかな。女御のおとうとたちにこそはあらめ。また世になれぬは。五六の君ならむかしそちの宮の北の方。頭中將のすさめぬ四の君などこそ。よしと聞しか。中々それならましかば。いますこしをかしからまし。六は東宮に奉らん。と心ざし給へるを。いとほしうもあるべいかな。わづらはしうたづねんほどもまぎらはし。さてたえなんとは思はぬけしきなりつるを。いかなれば。ことかよはすべきさまを。をしへずなりぬらんなど。よろづに思ふも。心のとまるなるべし。かうやうなるにつけても。まづかのわたりの有さまの。こよなうおくまりたるはや。とありがたう思ひくらべられ給ふ。その日は後宴の事ありて。まぎれくらし給ひつ。さうのことつかうまつり給ふ。きのふの事より

上の御局に參りちがふけしき　〔釋〕上の御局は淸涼殿に有女御はよべより御とのゐなれば此弘徽殿より人々參りかよふ也ちがふとは其かよふ人々の行ちがふさま也しげくまよへばとは人しげくたちみだれさまよふ也

扇ばかりをしるしに　〔釋〕扇を後の證に取かへ給ふ也ばかりといへるは猶外にもいはまほしき事多けれどあわたゝしき故に扇ばかりを取かへてといふ道也花鳥に引れたる東坡が詩は不用なれば省きつ

きりつぼには云々　〔釋〕桐壺は源氏君の御曹司也前に見えたり　〔細〕昨日花宴の後朝なれば人々多き也

おどろきたるも　〔細〕やう〳〵ねさめしたる也

つきじかひつゝ　〔釋〕人々ひそかに突あひて知ながらわざと空寢して居る也

ねいられず　〔釋〕よべの人の心にかゝりて也

女御の御おとうとたちにこそ　〔岷〕女をもおとうとゝいふ也　〔釋〕弟人(オトヒト)の義なり

まだ世になれぬは　〔釋〕世は男女の中をいへるにて男せぬ事也舊注たがへり

そちの宮　〔孟〕源氏の御弟也後に螢の兵部卿の宮

すさめぬ　〔河〕すさめぬとは不レ愛也「山たかみ人もすさめぬ櫻花云々「大あらきの云々駒もすさめずかる人もなし是等皆不愛の心也云々

〔細〕帚木卷に右の大臣のいたはりかしづき給ふすみかは此君も物うくしてとありし人なり

なか〳〵それならましかば云々　〔釋〕其人ならば却て今少しうつくしからんとなり弄花いみじきひがこと也新釋に中々しのびてかよはんに與あらんと也といはれたるもわろしをかしからましとはかたちの美しき事なるをや語脉點のごとし

六は東宮に奉らんと　〔湖〕六の君は東宮へ參り給ふべき人におはすればそれならばきずのつきたる事といたはり思す也

まぎらはし　〔湖〕五六のまぎれあれば也　〔岷〕いづれとさだめがたき心なり

ことかよはすべきさまを　〔釋〕さて絕なんとは女の思はぬけしきなりけるをいかなる故に文などかよはさんやうを敎へざりけんなど思しめすもかの人に御心のとまる故なるべしと地より評じたる也

かうやうなるにつけても　〔釋〕かうやうなるとはかくふと此女君にあひ給ふにつけても也其意は下の詞にて聞えたり

かのわたりの有さまの云々　〔玉〕藤壺わたり也奥にも見えたれども妨なし　〔新〕是は初に藤壺わたりをわりなううかゞひありけどかたらふべき戸口もなしといふに對して弘徽殿のくるゝ戸のあきてしかも姬君の一人月めでゝありき給ひしなどを今思ひかへすにかの藤壺はかくみだりならずとおぼす也或說にこゝは葵の方也藤壺の事は末にありといへるはわろしこゝは上に藤つぼわたりと書しをうけて同し度の事故にかのわたりと書下なるは別の事ゆゑにことに藤壺とは書たり

後宴　〔新〕後宴の名目は踏歌にのみ有やうにいふ說はいさゝかかたくなし總て大宴には後宴あるべき事なり

きのふの事よりも云々　〔細〕きのふは外さま也內々は猶面白しと也まうのぼりは上つぼねに參り給ふ也

かの有明出やしぬらん　〔釋〕有明月夜に逢給ひし女君故にかの有明といへり出やしぬらんはもしいつかたぞへ出ゆき給はんかと也出といひ空といへる共に月の緣語也花鳥本に有明の人とあるは劣りて聞ゆ　〔細〕物見に右大臣の女達の參り給ひしが歸り給ふべしと思ひてうかゞはせ給ふ也

思ひいたらぬくまなき　〔餘〕思ひいたらぬくまなき艮淸惟光とつゞけてよむべき也　〔釋〕何事にも思ひいたらぬ所なく明らかにさかしきよし也舊注たがへり艮淸の名こゝにはじめて見えたるをことわらぬは例の文法なり

北のぢん　〔花〕中重の北の陣は玄輝門のかたなり

かれてかくれ立て侍つる車ども云々　〔釋〕此所いとまぎらはし誤脫あるにや本どもゝ異同あり其中一本に「かれてよりかくれ立てと書たるやよろしからん立てはたてゝとよみて車をたてゝ也但さては上をかくしと云べき語格なれば猶いかゞもしくはかくれにたてゝ侍つると有しをにもじを寫し脫せるにやさらば北の陣より車ども罷り出ると續く語脈の中にかれてより物のかくれ所に立て在つると車のゆゑをことわる例の文法となりて聞ゆべししか物かげのかくれ所にたてたるは弘徽殿女御の御退出をまつ御供の車どもなれば也下に「車三ばかり侍りつといへるがやがて其御供の車にて此中にかの有明の君も乘て居給ふべきよしをおほせたる也かれむれ打つぶれ給ふとはかゝれたる也とにかくに「かくれたちてといふ方にては艮淸惟光等の隱れ立たる事となりて北の陣よりとあるよりの辭にかなはず又下の「侍つる車どもとあるにも續かずして事の意聞えがたし故にしばらくかくれの下ににもじを補ひて立てとあるを本文にはとれり猶考ふべしさて「まかり出るの下ににもじ有べきを省くは例の文法なればあやしふべからすにもじを含めて心得べき也「たゞ今といふよりは艮淸惟光が參りて申す詞也

御かたがたの里人　〔釋〕御かたがたとは女御更衣たちをすべていふ例也里人とはその御方々の御里がたの人々をいふ也

四位少將右中辨　〔孟〕右大臣の息たち也　〔細〕朧月夜の兄弟也　〔釋〕此人々の御送りしたるによりて弘徽殿の御退出とは見知たる也あがれは體言にて御退散といふ意なり

けしうはあらぬけはひども　〔釋〕女がたのわろからぬけしきなるが著く見えてといふ也

むね打つぶれ給ふ　〔釋〕三ばかりの車の中に其人も在なめりと先おどろかれてよろこび給ふ意也

いかにしていづれとしらん　〔釋〕いかやうにしてか我あひたる女君はいづれの君ぞとしるべきと也

父おとゞなど聞て云々　〔細〕右大臣の聞給ひて源をむこにとらんなどありてはと也　〔釋〕たどたどしくたづねよりてもし父大臣など聞つけてことごとしくもてなされんもいかゞ也女君のありさまをまだよくも見定めぬほどはさやうにとりなされてはわづらはしかるべしと也こと

も。なまめかしうおもしろし。藤つぼは。あかつきにまうのぼり給ひにけり。かの有明出やしぬらむ。と心も空にて。思ひいたらぬくまなきよしきよ惟光をつけて。うかゞはせ給ひければ。おまへよりまかで給ひけるほどに。(こ)たゞ今。北のぢんよりかねてよりかくれ(に)立て侍りつる。車どもまかりいづる。御かた〴〵のさと人侍りつる中に。四位少將。右中辨など。いそぎいでゝ。おくりし侍りつるや。弘徽殿の御あがれならむ。と見給へつる。けしうはあらぬけはひどもしるくて。車みつばかり侍りつ。と聞ゆるにも。むねうちつぶれ給ふ。いかにしていづれとしらん。ちゝおとゞなど聞て。ことごとしうもてなされんも。いかにぞや。まだ人のありさま。よく見さだめぬほどは。わづらはしかるべし。さりともしらでおらむはた。いとくちをしかるべければ。いかにせまし。とおぼしわづらひて。つく〴〵とながめふし給へり〔　姫君いかにつれ〴〵ならむ。日ごろになれば。くしてやあらん。と

ごとしうもてなされんとはげにも細流のごとく聟にとらんなどの事をさしていふなるべし

姫君いかにつれ〴〵ならん

〔細〕紫上の事也上の詞につく〴〵とながめふし給へりとあるにより姫君の事をも思ひ出給ふなるべし〔評〕此二三句をこゝに挿まれたるいとめづらし細流の御評もげによくかなへりかくて扇の事をへだてゝ二條院へわたり給へる事を書出られたるなどいと〳〵めでたし

かのしるしの扇は云々　〔河〕檜扇の兩方の上三枚づゝをうすやうにてつゝみて色々の糸にてとぢて末にあはび結びにむすびたれたる也〔花〕櫻のうすやう面白うらすはう也〔岷〕こきすはうなるべしその方に泥霞を引て月を出したるべし花に雲といへる不審〔釋〕三重の櫻がされの扇に金泥にて色こきかたに霞ある月をゑがき下に水をかきて水中に月かげのうつりたるさまをおもしろく畫きたる也

ゆゑなつかしう　〔弄〕常の物なども故なつかしうもちなしたると也心づかひ見ゆべき事也
世にしらぬ云々　〔新〕世中にまだおぼえぬ心ちするといふ也云々
〔箋〕明はてゝよりは有明の月の行へはいづく共しられざる也まがへとはゆくへをうしなひたる心也云云朧月夜誰ともしらず其人ともわかぬはたとへば有明の月のゆくへなきがごとしと也　〔釋〕新釋よにしらぬの注よろし其餘はわろし下句は箋よろしよにしらぬの說はわろしよきをとりて餘りははぶきつ
上二句は殘念のかぎりなき意也まがへてはまぎらかしてといはんがごとし失ひたる意也諸抄用なき說ども多し
かきつけ給ひて　〔箋〕かの扇に書付たまふなり
こしらへんと　〔釋〕ほどよくこしらへていひなぐさめんとおぼす也
をとこの御をしへなれば　〔釋〕源氏君わが御心のまゝに教へなさんと

らうたくおぼしやる」かのしるしの扇は。さくらのみへがさねにて。こきかたにかすめる月をかきて。水にうつしたる心ばへ。めなれたれど。ゆゑなつかしうもてならしたり。「草のはらをば。といひしさまのみ心にかゝり給へば。

世にしらぬ心ちこそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて。とかきつけ給ひて。おき給へり」おほい殿にも久しうなりにける。とおぼせど。わか君も心ぐるしければ。こしらへんとおぼして。二條院へおはしぬ。みるまゝにいとうつくしげにおひなりて。あいぎやうづき。らう〱しき心ばへいとこと也。おかぬ所なう。我御心のまゝにをしへなさん。とおぼすにかなひぬべし。をとこの御をしへなれば。すこし人なれたる事やまじらん。と思ふこそうしろめたけれ。日ごろの御物語。御ことなどをしへくらして出給ふを。れいのとくちをしうおぼせど。今はいとようならはされて。わりなくはしたひまつは

かれておぼしゝにかなふべしといひて但男の御教なれば人なれてなとこ近き事やまじらんと其かたはうしろめたく御心にかゝると也あかね所なうといふより後めたけれまで草子地の評也

御物語 〔釋〕此下語たらぬこゝちす

れいのと 〔細〕まへ〳〵はつよく源をしたひ給ふ事前の巻に見えたり

わりなくは 〔岷〕是ははや紫のおとなしく成給ふけぢめを見せて書り

大殿にはれいの云々 〔岷〕葵上がたへ二條院よりおはしたる也上に大殿にも久しうなりにけるとかきてされど先二條院へかりそめにおはしたる也前に大殿の事をかけるにふくませて二條院より大殿へおはしたる事をばかゝぬが面白き也 〔評〕此評よくあたれり味ひある所也始紫上の事をにほはせ置て次に扇の事をもて間隔しさて此段にいたりて先葵上の事よりいひおこしながら却て二條院へおはしけるよしをいひさて後大殿へおはせるは葵より紫に御心ひかれ給ふ事を文外にひゞかせたる也さてこの巻はもはら朧月夜君の事をむれとかゝれたる中に大殿と二條院との事を挿みたるは前後の巻の照應の脉にて例の法也

よろづおぼしめぐらされて 〔新〕或抄源氏の御心のなぐさみ給はぬからさま〴〵の事を思ひ給ふ也朧月夜藤つぼなどなるべし

やはらかにぬるよはなくて 〔河〕「ぬき川の瀬々のやはらたまくら也波艮加耳奴留與波奈久天おやさくるつまおやさくるつまはましてるはしも云々下略(催馬樂律貫河)〔新〕此やはらかにぬる夜はなくてといふを葵のもてなしにたとへ給ふ也 〔釋〕花鳥箋などにおやさくるつまといふまで論ぜられたるは過たる事細流に辨へられたるがごとし

明王の御世四代をなん見侍りぬれど 〔新〕伊勢物語に三代の帝につかうまつりてといふが如く年久しく在をいふのみ也延喜已上四代をいひ貞信公など思ひよするは例の泥める説なり 〔釋〕思ひよせたる人は有もすべけれどそは作者の心のみなればしひて論ずべきにはあらず桐壺帝まで四代の朝を左大臣の見給ひし也明王は字のごとし

ふみどもきやうさくに 〔拾〕詩文章の秀逸を驚策と云此字なるべし 〔玉補〕きやうさくは驚策なるべし詩文に秀逸の佳句あるを云 上の若菜巻にわかけれどいときやうさくにとあるなどは轉じたるものと見えたり

よはひのぶる 〔釋〕物事のいみじきを見聞て命の延るやうに思ふこと也今俗に命のセンタクスルといふ意也

くはしうしろしめし 〔細〕源のよくしりてめし出し給ふ故と也 〔釋〕けなりとはゆゑ也又しるし也又云々に依て也などいふやうなるさまにつかひたる詞にて例いと多し

おきなもほと〳〵 〔玉補〕續日本後記承和十二年正月丁巳天皇召尾張濱主於清涼殿前令舞長壽樂舞畢濱主卽奏和歌曰於岐那度天和飛夜波遠艮無久左毋支毛散可由留登岐爾伊天弖萬毘天牟天皇賞歎左右垂涙賜御衣一襲令罷退この歌の詞もてかけるなり源氏君のまし

さず□おほい殿には。れいのふともたいめんし給はず。つれ〴〵とよろづおぼしめぐらされて。さうの御琴まさぐりて。「やはらかにぬる夜はなくて。とうたひ給ふ。おとゞわたり給ひて。一日のけうありし事聞え給ふ。こゝらのよはひにて。めいわうの御世四代をなん見侍りぬれど。このたびのやうに。ふみどもきやうさくに。まひがく物の音どもとゝのほりて。よはひのぶることなん侍らざりつる。みち〳〵の物の上手どもおほかるころほひ。くはしうしろしめしとゝのへさせ給へるけなり。おきなもほと〳〵まひ出ぬべき心ちなんし侍りし。と聞え給へば。ことにとゝのへおこなふ事も侍らず。たゞおほやけごとに。そしうなるものゝ師どもを。こゝかしこにたづねて侍しなり。よろづの事よりも。柳花苑なんまことにこうだいのれいともなりぬべく見給へしに。ましてさかゆく春に立出させ給へらましかば。よのめいぼくにや侍らまし。と聞え給ふ。辨中將などまゐりあひて。こうらんにせなかおしつゝ。

て榮ゆく春に立出させ給へらましかば云々との給へるも此歌の詞也と嘉基いへり（釋）あまりのおもしろさにこの老翁も殆まひ出まほしきこゝちのせしと也

おほやけ事にそしうなる
（釋）そしうといふ語とにかくに詳ならず諸抄の說もたゞおしあての事のみと聞えたり餘釋に擧て論ずるを見るべしなると受たるを思ふに契沖の說の如く字音とは聞えたりその字はおもひえずしうは秀の字などかいづれにしても功者に上手なる物の師どもを尋られたる事とは聞ゆる也されぱおほやけごとゝあるも公事の意にはあらで桐壺卷に藏づかさこくさうゐんなどおほやけ事につかうまつれるおろそかなる事もこそとある大やけ事の意にてたゞひとゝほり大やうにといふ意なるべしさらではこゝの文勢聞えがたし細流に公方の御用などには出つかへずして云々とあれどもその意ならばたゞおほやけ

とり〴〵に物の音どもしらべあはせてあそび給ふ。いとおもしろし」かの有明の君は。はかなかりし夢をおぼしいでゝ。いと物なげかしうながめ給ふ。東宮には。う月ばかりとおぼしさだめたれば。いとわりなうおぼしみだれたるを。をとこもたづね給はんに。あとはかなくはあらねど。いづれともしらで。ことにゆるし給はぬあたりに。かゝづらはむも。人わろく思ひわづらひ給ふに。やよひの二十餘日。右の大殿のゆみのけちに。上達部みこたちおほくつどへ給ひて。やがて藤花のえんし給ふ。花ざかりはすぎにたるを。「ほかのちりなんとやをしへられたりけん。おくれてさく櫻二木ぞ。いとおもしろき」。あたらしうつくり給へる殿を。みやたちの御裳ぎの日。みがきしつらはれたり。はな〳〵と物し給ふとののやうにて。何事も。いまめかしうもてなし給へり。源氏の君にも。一日内にて御たいめんのついでに。聞え給ひしかど。おはせねば。くちをしう物のはえなし。とおぼして。御子の四位の少将

にといふべき也さてこの大やけ事にはたづれてへ係る語脉也
柳花苑なんまことに後代の例とも
〔箋〕頭中將の御衣を給はりし事は御面目のよしに申也　(釋)案に箋の御説よろし後代の例ともと有は花宴殿上の舞に御衣賜はれる事はこたびが始なればこれを後世の例とすべしとの意也諸抄この事をとやかくやいはれたれどこゝに作者のかくことわられたる用意を見おとされたる説にていとおろそか也と云べしこれらまことに透間なき筆にて作者のざえのほど返すく〵も感ずるにあまりあり
ましてさかゆく春に云々
〔弄〕まして左大臣の舞給はましかばさかえたる世の面目なるべしと大やけの御かたになりての給ふ也
(釋)翁もほと〳〵舞出ぬべきとありし御返答也さかゆく春の詞はげに玉小櫛補遺の說のごとく尾張濱主が歌の詞なるべしさて後代の例といひて世の面目といへるいとよ

くかけあひて聞えたり

辨中將など參りあひて　〔新〕二人といふ說よし脊中おしつゝとりぐ〳〵などいふは一人ならぬ事しらる

せなかおしつゝ　〔餘〕脊な勾欄におしあてゝ居る也榮花物語などにあまた見えたり　〔釋〕欄によりて笛ふくさま也

かの有明の君は云々　〔湖〕是より朧月夜の事なり　〔釋〕はかなかりし夢とは源氏君にはかなく逢給ひし事を春の夜のみじかき夢にとりなしていへる也

東宮にはう月ばかりと　〔岷〕東宮に參らせ給ふ事すでに來月となり

あとはかなくはあらねど　〔釋〕源氏君も尋ね給はんに右大臣の姬君とはしられたれば跡なくはあらねども何れの君ともたしかに知ずして殊に御中よからぬあたりにかゝづらはんもさまあしく思ひたゆたひ給ふと也

ゆみのけち　〔岷〕仙源抄云結はつがふて射る心なり云々　〔釋〕此所諸說まち〳〵なり案に弓のけちといふは一のわざにて仙源抄のごとく番ひて射る義なるべしそのわざすとて上達部みこたち多くつどへ給ひてそれより直に藤花の宴し給ふ也結を結願の意と見られたる注は文義にかなはず又諸歌の後宴の弓結を引れたるもこゝにはかなはず猶諸抄を擧て餘釋にて論へり

藤の花の宴　〔評〕南殿の花宴の照對に右大臣家の藤花宴をあらはし且藤氏の榮花の盛をよせてかの業平朝臣の「さく花のかげにかくるゝ人おほみとよまれたる故事をとりてあやなされたるなどいひしらずめでたし

ほかのちりなんとや　〔河〕「見る人もなき山ざとのさくら花ほかの散なん後ぞさかまし　〔餘〕古今集春上伊勢　〔花〕古今歌に外のちりなん後ぞさかましとよめるは花にいひなしへたる心なれば歌の詞になき事を心をとりてかくのごとくかける也云々

宮たちの御もぎ　〔河〕弘徽殿女御の御はらの宮たち也　〔弄〕こうきでんの宮たちの御裳着右大臣家にて有しなり　〔抄〕御裳着の事はこれより以前にありし事をいふ也　〔釋〕殿のきら〳〵しきをいはんための種子なり

はな〳〵と物し給ふ殿のやうにて　〔岷〕よろづきら〳〵しくもて出て人の目おどろくやうになり

御子の四位少將　〔箋〕藤大納言の弟右中辨の兄なり

わがやどの云々　〔新〕或說に是をおごりたる歌といふは誤れり花をほめて宿をばいひくたし源をばたふとめりみかどのしたりがほ也とのたまふは宿の花をほめたるを御たはふれにの給ふ也實におごりたらんにはいかで源のおはさんや　〔釋〕岷江の一義にもかうやうに注せられたりされども右大臣の驕り給へるさまをひそかによせたる意はあらんをあらはさぬは作者の用意なるべし帝のしたりがほなりやとの給へる詞にさる趣は聞えたり

わざとあめるを　〔釋〕右大臣よりわざ〳〵御迎に物せられたればとくゆき給へと仰らるゝ也

女みこたちなども（釋）帝の御子たちをの給へる也なべてのやうには思ふまじとは弘徽殿腹の女みこたちは源氏君の御姉妹なれば源氏をなべての他人のやうには思ひ給ふまじとの意也細流弄花にもかく注せられたれどこれを源氏君への御教訓のやうにあるはわろしこゝはさるむつかしき意にはあらず玉小櫛に右大臣の御むすめの事とあるもわろし補遺に辨へたるがごとし

またれてぞ（釋）いとよく引つくろひて右大臣に待るゝほどに直ぐ出たち給ふ也けたかく位あるさまなるべし

さくらのからのきの御直衣〔花〕からのきは地の色は何にても文はいろ〳〵のいともしは一色にても織たる物なりから織物二重おり物のごとし唐装束とて着する事ありそれは下がさねうへのはかまなど唐の綺を用る也襖のからのきは面しろきからのきに蘇芳のうら

をたてまつり給ふ。

わがやどの花しなべての色ならば何かはさらに君をまたまし。内におはするほどにて。うへにそうし給ふ。したりがほなりや。とわらはせ給ひて。わざとあめるを。はやう物せよかし。女みこたちなどもおひいづる所なれば。なべてのやうにはおもふまじきを。などの給はす。御よそひなどひきつくろひ給ひて。いたうくるゝほどに。またれてぞわたり給ふ。櫻のからのきの御なほし。えびぞめのしたがさね。しりいとながくひきて。みな人はうへのきぬなるに。あざれたる大君すがたのなまめきたるにて。いつかれ入給へる御さま。げにいとことなり、花のにほひもけおされて。なか〳〵事ざましになん。あそびなどいとおもしろうし給ひて。夜すこしふけゆくほどに。源氏の君いたうゑひなやめるさまにもてなし給ひて。まぎれたち給ひぬ。しんでんに女一宮女三宮のおはします。ひんがしの戸ぐちにおはしてよりゐ給へり。

なつけたるもの也　〔新〕是は常に櫻といふはおもて白うら紫なるとはことに侍るべしいかにとなれば雅亮裝束抄に上達部などの櫻の下がされとて着るは表は唐綾なれどもうらは濃紫に染る也白のさくらにはあらず云々といへり今唐の綺の直衣のさくらといふもこれになぞらふべきもの也さて唐の綺は地色と紋の色とはことにて常にからおり物といふ類也且古の直衣には是を多く用ゐられつらんうつぼ物語などにも所々に見えたり

えびぞめの下がされのしり云々　〔花〕しりは裾也裾は衣のすそを云也西宮記云上﨟者直衣下着二下襲一隨レ便不二常事一云々　今按袍に下襲をかさゐるをば布袴といふ上下用レ之事也直衣布袴は依レ時依レ人事也帶は丸鞆也或は皮帶ともいへり晴時は着二蒔繪野太刀一云々

みな人はうへのきぬなるに　〔箋〕各は袍をきる也袍とは常の裝束也是を位袍と云其位にしたがひたる色を着る也

あざれたるおほきみすがた　〔河〕直衣布袴宿老人可レ着之由見二中右紀一源氏雖レ非二宿老一依レ爲二尊者一着レ之歟おほきみは王の字也古今集にもかづらきのおほきみかれみのおほきみなどしてあり　〔花〕御幸巻にしどけなき大きみすがたとありしからばあざれたるもしどけなき心にや常の袍に指貫を着して裾をかくるはしどけなき出立ともいふべし　あざれたるはざれたるといふも其心たがはざるべし大きみは王の字也大人のすがたなどいふ心也又直衣すがたをすなはち大きみすがたといふ説あり　〔弄〕親王姿のやう也といふにや又直衣姿を云に大人の姿とほめたる詞也　〔新〕みな人は袍なるに源一人直衣をなよゝかに着なしてしり長く引れたらむはもとより大君たちの風は　あざれたるが上にあざれたるなりすべてみこたちの風は臣とことなるよし下の卷どもに書たり　〔釋〕大きみとは上古は天皇にかぎりて稱し奉りしを後には諸王の事にまうすやうになれりしはやう／＼に轉れる也こゝは弄花に親王姿のやう也とあるほどの意にて諸王よりは聊重く聞えたりさるは源氏君は帝の御子ながら既に氏姓を賜ひつればみな人と同じく袍を着給ひてもあるべきを殊さらに直衣布袴にて打とけざればみたる　さまし給へるは物にかゝはらぬ親王などの體也との意なめりそは花鳥に直衣布袍は依レ時依レ人事也と見え河海に源氏雖レ非二宿老一依レ爲二尊者一着レ之歟などあるを思ふに直衣布袴はさしも官位の式ある體ならず時により人がらに依て着るものとおぼしければ今日の事がら寵ある親王ほどの人のめし給ふべきやうに聞ゆれば也しか拘はらぬさまなるをあざれたるとはいへるなるべしあざれたるはざれたると同じく俗にシヤレタといふ意也されば大きみは王の字也といひ又大人の姿といはれたる注どもはいさゝかたがふべし親王ももとより大君と申し奉るべきもの也

いつかれいり給へる　〔釋〕皆人に敬禮せられて入給ふ也ことなりとは光る源氏といはれ給ふほど有てげにも御姿の格別也との意也

事ざましになん　〔岷〕前の詞におはせればくちをしく物のはえなしとおぼして有さてかやうにておはしたれば中々興もさむるほど、源のさまをほめたる也　〔評〕事ざましは俗言にケイクヅシなどいふ意也さて此段御よそひ引つくろひまたれて入給ふなどいたく用意し給ふはかれてより御中よからぬ所へおはするなれば殊更に心づかひし給ふなるべし然るにそれらの事どもによりてます／＼御中あしうなりゆく媒となるありさまを言の外に匂はされたる筆づかひいとめでたし皆次々の卷の伏案なる事を心得置て讀べき也

藤はこなたのつまにあたりてあれば。みかうしあげわたして。人々いでゐたり。袖ぐちなど。たうかのをりおぼえて。ことさらめきもていでたるを。ふさはしからずと。まづ藤つぼわたりおぼし出らる。なやましきに。いといたうしひられてわびにて侍り。かしこけれど。此おまへにこそは。かげにもかくさせ給はめとて。つまどのみすをひきゝ給へば。あなわづらはし。よからぬ人こそ。やんごとなきゆかりはかこち侍るなれ。といふけしきを見給ふに。おもく〳〵しうはあらねど。おしなべてのわかうどゞもにはあらず。あてにをかしきけはひしるし。空だき物いとけぶたうくゆりて。きぬのおとなひいとはなやかにうちふるまひなして。心にくゝおくまりたるけはひはたちおくれ。いまめかしきことをこのみたるわたりにて。やんごとなき御かたがた物見給ふとて。この戸ぐちはしめ給へるなるべし。さしもあるまじき事なれど。さすがにをかしうおぼされて。いづれならむ。とむね打つぶれて。

ゑひなやめるさまに　〔細〕そら酔也　〔釋〕酔たるさまにもてなしてもの、まぎれに座を立給ふ也さるはかの有明の君におもほす心あなるべし

しんでんに云々　〔釋〕宴ありし所は母屋の庇か對の屋などなるべしそこより寢殿のかたへゆき給ふ也東の戸口はしん殿の東の戸口也

〔箋〕女一若栄に一品宮と申是也女三前齋院也葵に齋院に立給ふ此二人弘徽殿の御腹なり

藤はこなたのつまに　〔岷〕藤は寢殿の方へちかき也藤はとあれば櫻はあなたにあるか

袖ぐちなどたうかのをりおぼえて　〔弄〕蹈歌の時の出し衣などのごとくことさらめきたりとよろしからず思ひ給ふ也一勘云袖口とは簾の下より女房のきぬの袖をいたす也今の世にも大饗などの晴の儀式の時は出しぎぬあり又車よりも袖を出す也　〔釋〕ふさはしは相應の字よく當れりふさはしからぬは不相

應のよし也さて前に弓の結の事有そこの諸注に弓の結は必踏歌の後宴にある事のやうにいはれたる意ならば作者殊に意有て踏歌の出し衣を
引出られたるにもあらんか考ふべし

まづ藤壺わたりを　（評）前の文に「かのわたりの有さまのこよなう奥まりたるはやとありし脉をこゝに再びあらはして右大臣家の花やぎ過たるを屋どられたる照應いとめでたしされども彼は大内の弘徽殿此は大臣の家なれば事がら重らずしてよろし舊注たがへる事ども多し

かげにもかくさせ給はめ　「花」伊勢物語のさく花の下にかくるゝ人おほみは業平中將の行平中納言のもとにてかめにさしたる藤の花をよめるといへり心は忠仁公（良房）の藤氏のさかへを思ひよそへてよめるよし詞に見えたり故に今二條のおとゞを忠仁公になずらへてかげにこそかくさせ給はめと源氏の君のの給へるも藤の花にかけたる詞なり　（釋）此御說の意したに有げに覺ゆさるは作者の深き用意ありし事なるべしさて詞のうへは酒をしひられて醉こゝちたへがたし此御前の物陰にかくさせ給へとのたまひてなほしたには御姉妹の親しきをのたまへる也こそはといふ辭の勢しか聞えたるにあなわづらはし云々といふ答の詞かならずさる趣と聞ゆれば也心をつくべし

わびにて　〔新〕此にては去てを略しいふにてこゝは詫はてゝといふ意となりぬ　（釋）にてはたゞ辭也すべてナニヌネのてにをはゝ皆去の意にはあれどつかひたるうへは必しもしからずわびも詫の意にはあらずたゞこまりたる意也

つまどのみすをひきゝ給へば　（釋）東の戸口の所より横に妻戸口にゆきて簾を引かつき給ふ也ひきゝは湖月抄に引かつぐ也内へ入かゝれる也とあるよろしかるべしきは着の意也

あなわづらはし云々　「細」こゝにさふらふ女房のいふ也下ざまの者こそ親類もとめはすれと也　〔拾〕これは源氏のかしこけれど云々とのたまふにこたふる詞なれば下ざまの人こそやんことなき人のゆかりはもとめてその蔭にかくれて身をよせ侍れみづからやんことなき御身にてかくのたまふはあなわづらはしやといふ也わづらはしとは事のかさなりしげきにいふ也白氏文集に託の字をかこつとよめり今のかこつ是也
（釋）わづらはしは惱み困じたる意にて俗にメンダウナといふ意也こゝは答へいふべき詞にこうじたるをわづらはしとはいへる也

おしなべので　〔眠〕こゝに弘徽殿のいもうとゞもゝあるべし　（釋）此答へいふ人は女房にて右大臣の御女たちにはあらず

空たきものいとけぶたう　〔細〕此殿のありさまをいふ也空たき物のさまもけしからぬと也鈴蟲卷にも見ゆ悉皆人の用意をかける也　（釋）空たき物とはふせごなどにて物を薫せず空中にたく故にいふけぶたうは煙痛の意也

きぬのおとなひいと花やかに　（釋）身を動かす衣の音も用意なくいと高くはらはらと聞ゆるを花やかにといへり

やんことなき御かたがた物見給ふとて　（釋）御かたがたは女宮たちより弘徽殿の御はらからまでにわたりていへる歟しめは我物と領ししむるをいふ也と餘滴にいへるよろし物見給はんとて戸口一ツを領し給ふ也戸をさしたる事といふ說は俗言の意にていふにもたらず

さしもあるまじき事なれど　〔湖〕或說女宮たちもおはし人しげき所にてかやうのすき事はあるまじきことゝ也

（源詞）扇をとられてからきめを見る。とうちおほどけたる聲にいひなして。よりゐ給へり。（内の女詞）あやしくもさまかへたるこまうどかな。といらふるは。心しらぬにやあらん。（又別こ）いらへはせで。たゞ時々うちなげくけはひするかたに。よりかゝりて。木丁ごしにてをとらへて。

（源）あづさゆみいるさの山にまどふかなほのみし月のかげや見ゆると。なにゆゑか。とおしあてにの給ふを。えしのばぬなるべし。

（女）こゝろいるかたならませばゆみはりのつきなき空にまよはましやは。といふこゑ。たゞそれなり。（源心）いとうれしきものから。

いづれならんとむれ打つぶれて〔釋〕扇のぬしは何れの君ならんとおぼしてたどりより給ふにつけてはいかゞあらんと先むれのさわがるゝ意也

あふぎをとられて云々〔河〕「石川のこまうどにおびをとられてからきくいする云々 下略 催馬樂ノ詞紅葉賀巻ニアリ」〔花〕源氏の君扇のぬしをしらんためのはかりごとに云々あふぎをとられてといひかへ給ふ也扇のぬしはやがて心得べき故也〔新〕この石川は河内國石川郡に高麗人を置たればしかいふ也云々

打おほどけたる聲に〔拾〕俗におどけたる事をいふとは狂言にかゝれるたいふ此轉ぜるにや

よりゐ給へり〔釋〕戸口の簾際に也

あやしくもさまかへたる云々〔花〕いはれをしらぬ人はうちきゝて源氏の君のいひあやまり給へるぞとをかしく思ひてさまかへたるこまうどかなとゝがめたる也

心しらぬにやあらん〔釋〕かやうに答ふる人は扇の事の意をしらぬにやあらんと察し給ふ也

たゞ時々打なげく云々〔花〕扇をとられたる人ははや聞しりて打なげくけはひの色にあらはれたるなり云々〔釋〕打なげくを其人なりとおぼしてそなたによりかゝりて几帳ごしに手をとらへ給ふ也

あづさ弓云々　〔花〕弓の結の日なればあづさ弓いるさの山とはいへりほの見し月は有明の影のほそどのゝ戸口を思ひ出したるこゝろ也
〔釋〕あづさ弓は射（イル）といひかけたる枕詞いるさの山は但馬國の名所なりほのみし月は女君のたとへなることはいふも更也
なにゆゑかと　〔玉〕引歌あるべしなくては聞えぬ詞なり　〔釋〕引歌なくても意は聞えたりかくまどふは何ゆゑならんとわざとおぼめきて問かけ給ふ也
おしあてにの給ふを云々　〔釋〕源氏君はおしあてながらそれと聞ゆるやうにの給ふを内なる女君はおぼえある事なればえしのばぬなるべしと評じたる也
こゝろいる云々　〔釋〕心いるとはふかく其人に心の入る意にて俗にキニイルといふ是也月なきに着（ツキ）なきをかけたり着（ツキ）なきとはトリツキノワロキといふ意なるをこゝは俗にトハウモナイといふ意に轉して用ゐたりさて一首の意はいるさの山にまどふかなといふを受て源氏君の心のふかく入る方ならばしか着（ツキ）もなき空に迷ひ給ふべしや我に心のいる事なき故にさるトハウモナキ所に迷ひてえたづね給はぬ也とうらみたる也
弓張の月は下弦の月にて形の弓を張たるやうに見ゆるをいふいるといひ空といへるみな月の縁なり舊注解ざまあしくて意聞えがたし
たゞそれなり　〔箋〕ほそ殿にての聲色きゝしり給へれば此人と知給ふなり
いとうれしき物から　〔釋〕かの扇をとりかへ給ひし人と聞つけ給ひていとうれしきものからさすがにあたり〳〵の人目もあり心しらぬ右大臣家にけふ初めて入給ふなどの事もあれば憚り給ひてたゞにもえ逢給はぬくちをしさなど千萬の思ひを含めのこして結（トヂ）められたる筆つき例のめでたしともめでたき文也さるを舊注どもいづれもいとこと〳〵しくほめられたれど或はうれしくはあれどもいまだ六君とはたしかにしらぬ心をふくませたりといひ或はうれしき物から女の身にて人にこそよれかろ〳〵しき事やと心に淺々しく思ひ給ふよし也といはれたるなどすべていかゞなる說ども也但しこゝはいひさしたる所なればいはゞ何ともいはるべけれど前後の事がら文の勢にふかく心をとゞめて味はゞよく見しらん人はよく見しるべきものぞかし

源氏物語語釋一之卷

○これに擧る語どもは本文の頭にかくべきことなるを釋の長くして注しがたき故に別に記してこれはいかなる義の詞也といふ事を示すなりいづれも先達の注どもを撰びてそのよろしきをのみ採用ゐたるものからいづれの抄にももれたる詞とその解ざまのいかにぞやおぼゆるとは余が今按をのみ注しつそれはた一つづゝ其舊說どもを擧てその違へるよしを辨まへいふべきなれどいたづらにこと長くなりてわづらはしければはぶきて其故をばことわらず又いと心得がたき語どもは諸注の說を悉く擧て末に余が今按を注しつさても猶しられがたきは疑はしきよしを記して後人の考をまつこれら皆やむ事をえぬしわざなれば見ん人さるかたにゆるしてよさてしるしもてゆく語どもはおの〳〵其卷の中に見えたる次第のまゝに體言用言のけぢめもなくさながらにしるしたれば下に某丁としるせるに見合せてそこの意をさとるべし又いづれの卷にまれ一たび注したる語は末の卷々にいたりてもふたゝびは擧ざればいづれもそのはじめて見えたる所に就て見るべし其中にたま〳〵初の卷に見おとして後の卷にて解たる類もあれど先達の注せられたる所にしたがひて其ついでに余が說を交へたる所などなれば今又これをあらためず釋の末に譯語をものせるは本文の傍にしるせる譯注の意をしらしめんとてのわざなれば引合せ見て其意をさとるべし

○物語ぶみどもの語をあつめて釋たるものこれかれある中に石川雅望の雅言集覽ばかりくはしきはなしされど彼書のおもふきは多くの例どもをかいあつめて其詞のしかる意をばさしも委しくは注せざればうひまなびのともがらは猶さとりがたき事もあるべしされば今はその例どもをばかの書にゆづりていたくは擧ずたゞ本文にくらべ見ていちはやくかゝる意ぞとしらるゝをむねとしたればさる心して見るべき也又鈴木朗の雅語譯解といふもの有はつかなる物なれど今世のさとび言にあてゝ解たる書にて初學にたよりある事どもおほしされば今もかの書の譯に今案をまじへて注しつ圈の中に雅集と記すは雅言集覽雅譯としるすは雅語譯解なりとしるべし

○卷中にかぎりもなく多く見えたる語の今世の耳に

遠さをいさゝかこゝに引出てその義を注すまぎらはしからぬ語或はてにをはの類はすべて略きつてにをはの事は詞の玉緒あゆひ抄などに從ひてその意をさとるべしさて又本文の頭書に其意を注し盡せる語は此卷にはさらに擧ずさるは此卷は頭書に餘れる事を注する例なればなり

はべる(釋)鈴屋翁の說にはべるは匍匐といふ意にて貴き人の前にては匍匐ふしてあるを本にて轉りては何事にも敬まひていふ詞となれりとやうにいはれたるがごとし今俗の言にゴザリマスルなどいふマスルほどの意に用ひたりかれ人と人と物語する處又消息ぶみなどには殊に多し　**きこゆ**(釋)これはいふ又申すなどいふ意也さるは口にいへば耳に聞ゆるを受るかたの耳につきて聞ゆとはいへる也されはいづれもいふ事として逢ふ事なしさて又まれにはいふといふばかりの意もなくて言の調にたゞかろくそへていへるのみなる所もありそは聞えといふ詞に拘らずしてその意をさとるべし　**ものす**(釋)これは其事とたしかに云てはあまりにけざやかにて却ていかゞしく聞ゆる所をまぎらはす詞にて俗言に何シテ何ガなどといひて其事と聞しむる類の語也されば意もそこの前後に隨ひて釋べし　**たまふ給ふる**(玉)給ひてを給ふてとあるも音便ながらよろしとも聞えず思ひ給ふるを思ふ給ふるとあるも同じ又此おのがうへにいふ給ふるのはたらきの給へを給ひとあるは誤也こはひとへとのたがひにて人を敬ひていふと己がうへにいふとのけぢめある事なるをや(釋)右の說にいはれたるごとく思ふ給ふるとては思ふと給ふると語の意きれてつゞきがたしこれは思給ふるとやうに思字の下にひもじを添ずしてかきたるを見て思ふとよみ誤りたるをつひにはふもじを加へて寫せる歟古き本どもには思ひ給ひなどのひもじをば略きたるが多し但し中昔よりは音便にくづれたる詞どもゝこれかれ見ゆめれば思ひを訛りて思うともいひしにやさらばうもじを書べき也されどもとにかくに紛らはしくして正しき詞とも聞えねば今はこと〴〵く改めて給ひとひもじを加へてしるしつさて又給ふといふ語はいにしへは詞の八ちまたにいはゆる四段にのみはたらきて給へ給ふるなど下二段の格に活きたる事はなかりしをこの物語のころほひよりは己がうへに下二段の格

にいふことはじまれりこれはたとへば今俗のせうそこぶみに御座候などいふは人のうへを敬ひていふ語なるを轉りては己がうへにもいふと同じ心ばへの語と聞ゆ。初學の輩は殊に心得がたきものなれば暫く給へ。給ふるとやうの詞を除きてそこのおもふきを心得べし　なん(釋)これは詞の玉緒にぞにかよふなんといはれたる一種の辭にて此詞の係りたる末をば必けりをばけるなりをばなるとやうに紐鏡の中行の格に結ぶこと也古言にはなもといへり意は同じこと也ただ調を緩くして文の勢ひを助くる辭にてぞといふに似たり又云々なん云々となんなどなんといひて終りたるもあるは其下に必云々なりける云々なりしなどいふ意を含めて其語を略きたる例なればそこのさまにしたがひてその含め略きたる意を心得べしこれはた人の物語するところ又消息文などに殊に多かるは詞のわづらはしきをいとひて殊さらに略きたる物なれば也ぞこそなどいひて終りたるもこれに準へてしるべし　あべかめり(釋)これは有べく有めりといふことを約めたるにてあべかめりとやうによむ也意は俗にアリサウニミエルワイなどいふ意なりめりは

所見有といふ言のつゞまりたるてにをはにて俗にミエルといふ意なればいづれもさる意にて心得べしかやうの詞此外にも多かれど悉く擧るに遑あらずなずらへて知るべし　うち、ひき、かき、とり、たし、さし、もて(釋)かやうの詞は文の勢ひをつよくせんために手してものするに力のいるべき事をかろく添ていへる發語にて別に意のある事にはあらずされど紛らはしく聞ゆる所もあればさやうのところには本文の左に・・點をつけてその發語なるよしを示すまぎらはしからぬ所にはもとより注せず此類の語なほ有べし　しき、しく(釋)これは物のありさまをだとへていふ辭にて繁の意也しげき事を古言にはしくといへりたとへば戀しくは戀の繁き意うらめしくは恨のしげき意なり他もこれになずらへてしるべしかやうの辭をすべて形容辭といふ　たき、たく(釋)これも同じ類の形容辭にて痛のいの略かりたる也たとへばうれたきは憂の痛き意らうたきは勞の痛き意也痛はものゝ甚しきをいふ身の痛きといふもしのびがたくはなはだしき意なり　めき、めく(釋)これも形容辭にて所見來の約まれる也されば何にても其さした

るさまに物の見え來るをいふ也此意にていづれもたかはず　**か、やか、まか、らか、どか、どき、ぶく、らぎ、らぐ、づき、づく、やぎ、やぐ、だち、だつ**（釋）この類なほ有べしみな形容をいふ辭なれど言の意は詳ならず　**いと、いたく**（釋）この二つは甚しき事をつよくいふ辭なりその中にもいとはやゝ輕くして俗言にズットといふにあたりいたくは痛の意にてこよなく重し俗にヒドクといふにあたれり　**し、しも、を**（釋）これはいはゆる助辭にて語勢をゆるめてしらべを調ふる辭にてさして意ある事にはあらず然れども緩急につきていさゝか義のかはる所もあればまぎらはしきには例の●●點を左にものしつ

○桐壺卷語釋

さぶらひ　一丁ォ（釋）古言にはさもらひといへり守を延てもらひといへるにてさは發語也俗言に伺候するといふにあたれり貴人のありさまを伺ひ目守てつつしみ侍るをいふそれより轉りてはたゞ敬ひ詞にそへてもいへりこゝは女御更衣たちのあまた伺候し給ふなり　**やんごとなき**　同〔玉〕此言はもとなほざりにしがたき意よりいひてもだしがたしといふと同じく無二止事一也高き人をいふもなほざりにしがたき意より出たる也〔譯〕カクベツナ〔拾〕後撰集羇旅部のことば書になかばらのむねゆきが美濃の國へまかりくだり侍りける道に女の家にやどりていひつきてさりがたくおぼえければ二三日侍てやむことなきことによりてまかりたちければ衣をつゝみてそれがうへに書ておくり侍ける此やむことなきはえやむまじき事ありて出るをいへり〔譯〕ヨンドコロナイ　モダシガタナイ　**きは**　同（釋）分際の字にあたれり今俗に分限といふに同じかぎりといふ意也極みといふも同じこゝろなり　**ときめき**　同（釋）時を得たりと見ゆるさまなりめくは例の所見來を約めたる形容辭なり

めざましき　同〔玉〕此詞卷々に數しらず多かるを思ひわたして考るにさは有まじき事をと思ひていきどほれる意の詞也〔餘〕めざましは古へは目すさましき意なり中ごろより轉じて目のさめたるといふ意にて善惡ともにつかふなり源平盛衰記七日醒とあり見ておどろくばかりのことなるべし〔譯〕アキレル　イカガシイ　シングツイナ　**おとしめ**　同（釋）我を高く

（釋）餘滴　ニ引ル小町集の歌は一本ニ上ノ句わがおもふ人にあはぬよはトアリコレニテ事ノ意キコエタリ普通ノ板本ハ誤ナルベシ

して人を貶しむるをいふめはすべて令字の意にて我より彼に及ぶ意の辭なり　みやづかへ　同〔釋〕宮は内裏の事つかへは此方より使はれ奉るをいふさて轉りては大宮ならぬ所に仕ふるをもすべてみやづかへといへり〔譯〕ゴホウコウ　あつしく　同〔餘〕小町集に人しれぬわれか思ひにあはぬまは身さへぬるみておもほゆる哉夕顔の卷に御ぐしもいたく身もあつきこゝちして若菜下に御身もぬるみて御こゝちもいとあしけれど手習の卷にうちはへぬるみなどし給へる事はさめ給ひてさわやかに見え給へばなどありすべて病者は身に熱の有てあつきものなればあつしなどいひならひたるが末には病とだにいへばあつしうなどいへるやうになりたるならん〔玉〕身よわく病あるをいへり拾遺に病の重きを厚しといふにやといへるは物語にてはかなはず〔譯〕不快ナ　ワヅラフ　もの心ぼそげ　同〔釋〕すべてもの云々と物といふことをそへていふ詞は物事につけて云々といふ意にてたゞ何となくおのづから然る意也こゝも其意にて何といふこともなくたゞ物事につけて心ぼそき也げは氣にてさるけしきに見ゆるを他より見ていへる意也けはサウニと譯すべし　さとがち　同〔拾〕和名云、周易說卦云、其於レ木也爲二堅多心一、師說多心讀二奈賀古可遲一、これによるに何がちといふ類はみな此多の字なり　あいなく　同ゥ〔玉〕此詞數もなく多く有そをことぐ〱く見わたし合せて考るに何といふわきまへもなしにうちつけに物する事なりこゝもその意にておのが身にかゝらぬ人までも何といふことなしに目をそばむる也注に無レ愛也あぢきなく也などいへるみなかなはず〔譯〕ナニトナウムサト　ナンノハリ合モナク〔釋〕新釋に愛敬なきを略して愛なきといふ也とある略してといはれたるはいかゞなれどなほ愛なきの意にはあるべし何といふことなしに打つけにものするもやがて愛のなき意なればいたく違へるにはあらず　そばめ　同〔釋〕そばは側字の意めはめむるとはたらく辭也側へ向てまさしく向はぬ意にて物妬するさまなり　まばゆき　同〔玉〕拾遺に日のかゞやく時まばゆくて見がたきやうの意なるべきにやといへるごとくにてなべて人に目をそばめらるゝこれまばゆきなり　あぢきなう　同〔新〕人の情を五味に譬へてうましからしにがしなどいふ中のにがく〱しき

といはんがごとき事を味氣(アヂキ)なしといふなり〔譯〕フアンバイナ　ムヤクナコトヂヤ　ラチモナイ〔雅集〕やくにもたゝずせんのないといふ心なり眞字伊勢物語味(アヂ)氣無(キナク)契沖云せんかたなし史記伍子胥傳無益をアヂキナシとよめり宣長云俗言にいらざることむやくの事といへる意なり　**はしたなき**　同〔拾〕枕草子にはしたなき物といふ下のひとつに人をよぶに我かとてさし出たるまして物くるゝをりなどかけり是にて心得べし竹取物語に宮はたつもはしたゐるもはしたにてゐ給へりといふに同じ云々〔餘〕俗にどちらつかずといふ意なり又めつたに又ひょんな事などいふ意なり〔譯〕フツガフナ　ツキモナイ　思ヒガケナイ　ツキホガナイ　フサウオウナ　フツヽカナ　**御心ばへ**　同〔釋〕心延(コヽロバヘ)の意にて心のひき延(ハヘ)て出るおもふきをいふ語也心のさしゆくを志(コヽロザシ)といひ心の馳(ハセ)出るを意(コヽロバセ)といふみな同じおもふきなり　譯　コヽロムケ　オモヒナシ　**よしある**　二丁オ〔釋〕よしはゆゑよしなどいふよしにて由緒あるといふに同じく種姓(スジヤウ)のいやしからぬをいふ　**はなやか**　同〔釋〕花のごとくめでたきよしを譬へていふ詞にてやかはそのたとへたる形容の辭也　**はか〴〵しき**　同〔釋〕はかは或說に極處(ハテカ)の意也といへるやよろしからん極處のなきはたゞよはしくたしかならぬもの故にたしかならぬことをはかなきといふはか〴〵しはその反(ウラ)にてたしかなる事をいへりしきは例のしげき意の形容辭なり〔譯〕シツカリトシタ　**うしろみ**　同〔釋〕後(ウシロ)の方は見えぬものなる故にいとおぼつかなきを傍より見て助くる意也今俗字音(モンゴヱ)にこうけんといふこと也雅言にはうしろむとはたらかしてもいへり　**ことゝある時は**　同〔餘〕帚木にことゝあかくなれば野分卷にことゝなれ〴〵しきにこそはあゐれ家持集に秋風はことゝふきゝぬ白たへのわがときごろもぬふ人もなし椎が本にことゝいへばかぎりなき御心のふかきになん著聞集にことゝいへばあるじながらもえてしがなぬはしらねどもひきこゝろみんすべてことゝいふ詞はとりたてゝ其事をするにいふ詞也○**さきの世にも御契や**　同〔釋〕この物語のころはむねと佛說のはびこりたる世なりしゆゑに何事にもかの詞にていへることおほしちぎりといへるはすべて前世の宿縁といふこと也次下みなしかりこゝは帝(ミカド)と更衣とは過去の世より御因緣や深

かりけん淸らかなる御子をさへうみ給ふといふ意也さるは佛說には夫婦親子の緣などもみな前世の宿因にてなれるやうにいへれば也人のしあはせのことにすぐせといへるも宿世にて同じ意なり　**さへ**　同（釋）萬葉集に副字をよめる意にてものごとのそふ時にいふ詞也俗言にはだにといふべき所をさへといふ故にまぎらはしきなりよく／＼思ひ辨ふべしさへはよく考へ見れば必ものゝ副たる意ある也譯マデモ

御にほひ　同ウ（拾）遊仙窟并に萬葉集に艶の字をにほふとよめるこれなり朝日のにほふ花のにほふなど同じ下にゑにかける楊貴妃のかたちは云々いとにほひなしといへりとり合せて見るべし（釋）言の本は赤土のいろよきを土秀といふより出て色のうつくしく餘光あるやうの事をにほひといへり香のことにいふは轉りたる末の意也（雅譯）いふにいはれぬうつくしさの其本質をはなるゝばかりなるをいふ也されば色つや光などをも時によりてはいふなり　**かしづき**　同（雅集）養ひ育つる意とひたすら大事にするとをいふ（釋）此語のもとは頭衝にてかしらを地につきて敬ふ意より出たるにもあらんか轉りてはたゞ大切にして

いたはりそだつることにいへりかしづきと俚言にいふは其人のうしろみの人の事也　**わりなく**　同（玉）あるまじき事をしひてあながちにすること思ふ事也（新）ことわりなくの略にてさは有まじきを知てもおもふに堪ずしてなす時にいふ語也（釋）この說ことわりなくの略といはれたるは本末たがへりわりといへるがやがて條理などの字にあたれりわりは條理の事也ことわりは事理の意也（譯）メッサウニ　ムシヤウニ　ムリニ（餘）このうへもなきことをいへり歌詞にはせんすべなしといふ意につかふ也（釋）此卷の下に待すぐす月日にそへていとしのびがたきはわりなきわざになん又をとこ女いとわりなきわざかなといひあはせつゝなげく帚木に女はこの人のおもふらんことさへしぬばかりわりなきになどあるはせんすべなしといふ意につかひたるなりこれは事理なくなりてせんかたのなき意より轉りたるなり　譯　シカタガナイ　**御あそび**　同（釋）遊といふは大かた管絃して心を樂しむる事をいへりさるはあそぶ事どもの中に管絃はむねとあるものなれば也今俗にいふとはいさゝかことなり但しこの卷の末に御心につくべき御あそ

びをし云々とあるは廣く遊戲の事をさしたる也されとなほ其うちに管絃もこもれり **大とのごもり** 三丁オ（釋）もとは大殿に隱りて御寢ませる天皇の御事にのみ申せる語なるべしうつりてはさらぬ貴人のうへにもいへりたゞ貴人の寢給ふことゝ心得べし 譯 御寢ナル **やがて** 同〔玉〕すべてやがては直にそのまゝといふ意なり（釋）此詞俗言にはオッツケといふが如くゆるくつかふ故にまぎらはしき也 譯 スグサマ サッソク コレガスナハチ トリモナホサズ **あながちに** 同〔新〕此文にては強てと云がごとし本は舒明紀に檢ニ覈蝦夷戸口一孝德紀にもありこのあなぐるに同じ云々強てあさり求るよりいふ也（釋）穿鑿の意なり 譯 メッタムシャウニ ムリヤリニ **おきてたれば** 同〔新〕おきては掟なり云々（釋）雅言にはかくはたらかしておきておきつおきつるとも云り置といふことの活きたるなり 譯 サダム 決斷スル **いさめ** 同（釋）後世には君父などに諫言する事をのみいさめといへれどいにしへは然らずすべて然るべからぬ事として禁むるをいへりこゝは嫉妬してとかくの給ふをいふ **こゝろぐるしう** 同〔玉〕此詞は多く今世の俗言にも氣毒に思ふといふ意にいへり又心にかゝりて案じるといふ意にもいへりこゝは弘徽殿のおぼすところをきのどくにおぼしめす也 **ものはかなき** 同ウ（釋）はかなきは上にいへるはか〴〵しの反にてたしかならぬ意也ものは例の物事につけていふ意に添たる辭なり又此下にはかなく聞えいづる言のはもなどあるは何と定まりたることもなくといふ意也 譯 ワケモナイ トリサダメヌ ラチモナイナンデモナイ、またナニゲナウチョト ツイチョット **なか〳〵** 同（釋）中にありて何かたへもつかずたゞよはしき意を本にて却てといふ意に轉し用ひたりこゝはそれを體言にしたるにて俗にナマナカといふにあたれり 譯 ケック **あやしき** 同（釋）あやは驚く聲なりしきは例の繁き意の形容辭にてあやといひておどろかるゝ事の繁きを本にてすべて奇妙なる事不思議なる事のよのつねならぬにひろくつかふ語也こゝは奇怪なるわざといふ意にて案外なるしわざをさしたる也〔雅譯〕ザマガワルイ ミグルシイ フシギナ ケシカラヌ イフウナ 法外ナ あやしく云々はメイヨニ云々 キドクニ ヘンナコトデ ケシカラズキッウ

この外にもなほさま〴〵也其所々にて譯語をかへてとくべし　**まさなき**　同（釋）正無にて正しからぬをいふまさなごと〻いふ時は小兒の戯れなどの意となりていさ〻かたがへり　譯　ムホウナ　**えさらぬ**　四丁ウ（釋）すべてえ云々といふは得の意にて漢文に得二云々一また不レ得二云々一などいふ意の得を先言のはじめにおくにて俗にエイセヌなどいふエイは即この得を音便に引ていへる也こ〻は得不レ去にて不レ得レ去ことといはんがごとしこれに准へていづこをもさとるべし　**いみじう**　五丁オ〔新〕こ〻には嚴重こ〻ろにいへり此語のもとは齋じきにて甚大事などある時物いみつ〻しむより出たる也（釋）言のもとは此說のごとくなるべしさて轉りては甚しき事大なる事に何事にもわたりてことひろくつかひたり　譯は　エライ　ヒドキ　キツイなどいふにあたれりされども此語は其さしたる事によりてかはる事もありてしか一向には定めがたければ本文はその所の意にしたがひてさま〴〵に譯語をかへたればさるこ〻ろして見るべき也　**およずけ**　同〔新〕萬葉卷五に意餘斯遠波と有は老をば也これによるにおよづけては老付ててふ意にて俗にとしよりめきてといふに同じ帚木卷の末に光源氏のおよづけての給ふと書たる是なりさてそれを轉じては乳兒のやう〳〵ひと〻なりゆくほどの事にもいひしなるべしおよづけとかくべし（釋）此說のごとくなるべしこれはもとよりつを濁りていひし語なる故に混ひてすの濁を書しなるべしされど思ふむねもあれば假字はしばらくすと書つ〔雅譯〕ヒト丶ナリテ　チヱガツイテ　およずけの給ふはオトナシヤカニオホセラル丶　**ありがたく**　同（釋）有ことの難きにて俗にメツタニナイといふ意也今俗かたじけなき意にいふはいたく訛りたるなり　**あさましき**　同〔玉〕此詞はよき事にもあしき事にもいひて俗言にけしからぬきものつぶれたなどいふ意也〔新〕このみこの世にめづらしきを驚きあさむといふ即是にてさを濁るなり云々（釋）新釋の此次にあざましとおぞましと音の通ふやうにいはれたるはひがことなりさを濁るといふはさも有べけれどしばらく世にいひなれたるに隨ふあさましとあさむとは同言也共に驚く意なり　**いとゞ**　六丁オ（釋）いと〳〵と重ねていふを更に約め濁りたる語にてある事のます〳〵甚しくなれるや

うの所につかふ語也 譯 ヒトシホ **われかのけしき** 同〔餘〕古今集雜下左近將監とけて侍ける時に女のとふらひにおこせたりける返り事によみてつかはしけるをのゝ春風あまひこのおとづれしとぞ今はおもふわれか人かと身をたどる世に〔雅集〕和泉式部集上人のもとにわすれぐさしのぶぐさつゝみてやるとて物おもへばわれか人かのこゝろにもこれとこれとぞしるく見えける夕顔にあせもしとゝになりてわれかのけしきなり、われか人かと身をたどるといふに心同じく我にもあらずといふ意也 **御むねのみ** 同〔玉〕かやうのみは胸のみふたがりて他の所はふたがらざる意にはあらずふたがりの下にある意にてふたがるのみにてふたがらぬひまはなきよし也〔釋〕のみの譯はバカリ **つと** 同〔玉〕つとは俗言にずつと見てゐるなどいふずつとの意にてずつとは即此つとの訛れる言也御むねのふたがりたるがずつとしてゆるばぬ也云々〔釋〕この說はいかゞなりつとは俗言にもヅト ヅットなど濁りていふ言にていちはやく急にさしつめたる意の語なりずつとはいと緩き語にててこの勢ひにかなはずこゝは更衣のうせられたるをきこしめして御胸のにはかにづとふたがりたる也 **つゆ** 同〔釋〕露ははかなくいさゝかばかりおく物なる故にいさゝかなる事に借ていへるかはたいさゝかなるをいふがもとにて露をもしか名づけたるか其はしられねど意は俗言にチットといふにあたれる語なり **いぶせさ** 同〔新〕本は物の内にこもりてある心より出ていづれにもおぼつかなく思ふをいふなり古書に欝悒とかきておほつかなくともいふせくともよめり〔雅譯〕惡き物を見聞し惡き事を思ひなどして心よからぬさま也ウルサイ シンキナ **あへなくて** 同〔玉〕俗言にはりあひなく力の落たるといふ言也〔釋〕無敢なり敢はつよくおすやうの意又つよくおさるゝをこらふるやうの意にいへり敢なくはその反にてすなはち力なくはりあひなしといふにあたれり云々あへずといふもえこらへぬ意にてあへの義は同じ 譯 ラチノアカヌ ハリアヒガナイ あへずは エモチコタヘヌ トゲズ オフセズ **いふかひなし**〔釋〕其事をいひてもかひのなきよし也かひは代の意にてかはりといふに同じ〔雅譯〕ラチノアカヌ いふかひなき者はナンデモナイモノ **こがれ**〔釋〕焦れにてもとは心火

に胸の焦るととりなしていへる歌詞なりそれより轉りては人をしのぶ事にもいへどそは末なりこゝは今俗にたゞ慕ふ事をこがるゝといふと等しく聞ゆれど煙の縁あればなほ別なり　**ひたふるに**（釋）言のもとは直經なるべし日本紀に永字をヒタフルとよめるを思ふべしさて轉りては一向の意につかひたりこゝは永字の意なり　譯　ヒトスヂニ　ムシヤウニ　ナガ〲イツマデモ　**くちをしう**　八丁オ　（釋）言のもとは朽惜にて朽ることの惜き意にもあらんか用ひざまは俗にいふと同じきうちに殘念なといふかたにおほくつかひたり〔雅譯〕エヽラチガアカヌトハギシミスルニガ〲シイ　ノコリオホイ　ザンネンナ　**めでたかりし**　同　（釋）先達愛痛と解れたるごとく愛ることのいたく甚しきをいふ詞なり何事にもひろくつかひたり譯語はその所々に隨ひてあつべしてこゝはめでたくありしの約にて更衣のかたちのうつくしかりしよしなり　**めやすく**　同〔新〕目に見るに安らかなるにて見よきをいふなり見苦してふ語に對して知るべし〔譯〕ナンガナイ　めやすき人は　ミグルシカラヌヒト　**すげなう**　同ウ　（釋）この語は今の俗言にもいふことに

てアイソナクといふ意に似たり諸注いづれもわろし〔餘〕蜻蛉日記下かへりてとをおやはらからせいすときゝてまろこすげにさしてうちそばみ君ひとりみよまろこすげまろは人すげなしといふなり常夏卷にこの御方のすげなうもてなし給はんにはたてりなんやとの給ふ云々　**をかしき**　九丁オ　（釋）此語はもとを‖こ‖といふことをはたらかして例のしきといふ形容辭を添へたるなりされば假字はをもじをかくべしさて意はおもしろき事風流なることとめでたき事心のきゝたる事心にくき事などさま〲につかひ又俗言と同じく笑はしき事にもつかひたりさるはをこなる事は笑はしきものなれば也さてその笑はしきよりおもしろき意にも轉りおもしろきよりみやびたること心にくき事にも轉れる也玉がつまに田中道麿が說とてをかしとおかしと二つあるやうにいはれたるはよろしからずこのこと先輩もこれかれ論じたることありおのれも委しき論あれどこゝにははぶきつ　**ながめ**　同オ　（釋）すべてながめは物を永く見つむるをいひて大かた物思ひのある時に空を見ることなどにいへりたゞうち見るのみのことにはあらずこゝも更衣の

さとの事をふかくおぼしめして命婦を出し給へる後もなほそなたの空をながく見給ふ意也詠字をながめとよめるはうたふ時に言をながくする意にてこれとは異也眺望をながめとよめるもあるは永く見わたす意なり　**けはひ**　同ッ（釋）氣延の意にてけしきの綖いづる形容をいふ語也されば人のありさま所のけしき樣體のことなどにいへり　譯ヤウス　ソブリ　ケブラヒ　**とみに**　十丁オ〔新〕とみは頓の字音といふ說さもあるべし土佐日記にとにとあればなり〔雅集〕俗の急早速の意なり三代實錄十二宣命早仁罪那倍不賜云々〔雅譯〕とは疾なり急（釋）今案に雅語譯解の說はみもじをいかになほ頓字の音といふかたにや三代實錄のころは既にかゝる詞も出來にければ字音ならぬ證にはなりがたかるべし　**たどられし**　同（釋）たどるは手取の意を本にてくらき所をさぐり〳〵ものするやうのことに用ひ轉りてはうたがはしきことをいかさまにかと思ひやる事にもいへりこゝはおのづからうたがはれたるかたにつきてたどられとはいへる也またたどりと體言にいへるもありこれは疑ひて物とふ事に轉していへる也又たど〳〵しといふもあり夕やみは道たど〳〵しなどの類なりみなこの意に同じ　**やう〳〵**　同（釋）漸々といふを音便にやうやうといへるなり意はつぎ〳〵に物事のすゝみゆくことにいへり俗言とはいたく異なりまた樣々の字音にていへるもあり別なる詞也　譯　段々ソロ〳〵シダイ〳〵ニ　**だに**　同ウ〔雅集〕俗語のスラ又ナリトモ　デモ　セメテの心をそへたるもありヤウ〳〵コレバカリとうつすべきあり云々〔雅譯〕云々ナリトモ云々サヘ（釋）雅譯の二つにて大かたことたるべし　**かつは**　同〔新〕且てふ語は左する間に右する時にいふ也こゝも仰事のたまふが間にまた人めをもつゝみ給ふ故に且といへり云々〔雅集〕此と彼と物二つまじはる時にいふ詞也カタヘハなどいふ詞とひとしかるべしマアと譯すべき所もあり（釋）秋元安民が說に此語はもと和といふ言より出たる也さる故に彼と此と交るやうの所にいへり和はかてかつとはたらく言にて物をまずる意也といへりこの說しかるべし〔雅譯〕カタテマ半分の意也かつはは一ッハ　カタコ、ロ　かつ〳〵はソロ〳〵ト小口カラ　**はぐゝむ**　十一丁オ〔雅集〕俗と同じ妻子又なべて養育する事也佛神のあ

はれみ守らせ給ふ事にいへるも同意也親鳥の羽をもておほひつゝみ養ふより出たる詞なり萬葉九旅人のやどりせん野に霜ふらばわが子羽裹天のたづむら

もゝしき 同ウ〔新〕萬葉に百磯城の大宮とかけるぞ正義にて百とは多くの磐もて築きたる堅き宮城なりといふが故に古へは宮に冠らしたる用の語なり中頃の世よりは其用を體にして大宮の事をいへり（釋）もし此意ならば百石城にや

ゆゝしき 同〔新〕ゆゝしいま〳〵しいみいむいつくゆゝしき大事ゆゝしくおぼすこれら皆一つ語なるをさま〴〵になづけて用るなりたとへば我に凶事あれば人にいまれ人に穢あれば我人をいむ是をいま〳〵しといふ又は我に吉を用る時は人の凶をいむこれをいはふといふ神の御事又大切に思ふわが君などをいつくといふも凶をいむよりいへりさてそのいみの語を約めてゆといへり云々然ればゆゝしき大事といふも至て大事をは物つゝしみいまるゝ故にいひ源氏のよになく清らなるを御父帝の御覧じていとゆゝしうおぼすとあるもいづれつゝしまるゝ方也歌に色にいづなゆめといふゆめを萬葉に諱とも努とも書たるにていみつゝしむ事なるを知るべし云々（餘）ゆゝしうはいみじうといへる同語にてよきあしきにつけなべてならぬ事にいふ詞也〔雅譯〕大切ナルコト 大ソレタルコト アヤフキコトなどに皆いふ本は忌々しなりさる故にいまはしき心もあり又すぐれたる事をもいふ時 ケシカラヌ ヒドイ エライの心なり（釋）忌々しき意諸注のごとし此詞自他にわたりてなべてならずよきかたといま〳〵しくわろきかたとに別れたりされは譯語もその所々にてかはるべしこゝは禁中に穢を忌給ふに對へて身の穢ある事を忌々しきといへる也次のいま〳〵しうかたじけなくとあるが卽その故をことわる詞なりさて又此末にゆゝしううつくしと思ひ聞え給へりとある下の玉小櫛にすべて此詞本は齋々しなるを次々にうつりて末はさま〴〵の意に用ひたる中にこゝは源氏君をなべてならずすぐれてうつくしとおぼす也ゆゝしき大事などいふゆゝしきに同じ云々とあり

御せうそこ 十二丁オ〔雅集〕晉書列傳十四汝能賚レ書取二消息一否、涅槃經云 報二示消息一 發源機要云 報示消息此以二音信一爲二消息一、魏志齊王記に見えたる字也もとは易の彖傳より出たり（釋）消息はいづれも音信の事に

のみいへり文の事をせうそこといへるも音信のかたにつきていへる也案内することをいへるも同じ意也〔雅譯〕書簡 口上 アンナイ オトヅレ **つれなき、つらき** 同（釋）此語の本はいかなる義とも知がたけれどつかひたる意はさりげなくといふに近く俗言にナンノヘンモナイといふ意として何處にもかなへり人の情なきにいふも我戀る人のナンノヘンモナクしてあるはうらめしき物なる故に轉していへる也こゝは死ぬべき命の死ずしてながらふるを我につれなきさまにいひなしたる也〔雅譯〕シラヌカホシテヰル ジイットシテヰル ドウヨクナ ジヤウガコハイ つれなしつくるは 心ハタマラネドムリニオシテカマハズシラヌカホシテヰル つらしはつれなしのつゞまりときこゆれども意は少し異なり ムゴイ ドウヨクナウラメシイ カナシイ メイワクナ **くづほる** 同ウ〔餘〕契沖云くづれ折るなり或云萬葉に可多知久都保里(カタチクツホリ)とあれば折る義にはあらざるべしといへり〔雅譯〕老くづをるは老クッスルなり思ひくづをるはキヲクサラカスなり（釋）餘滴に引たる或説に隨ひて假字もくづほるとかくべしほるは活(ハタラ)きの辭か又惚(ホル)る意かさだかならねど形(カタチ)くづほりとあるを思ふに只頽(クツ)るゝ意までなるべし語のはたらきは四段の格か萬葉にくづほりとありてこゝにくづほるなとあれば也二段の格ならばくづほるゝなと有べき也考ふべし **人げなき** 同（釋）人に人ともせられずして人がましくもなき意なり人氣(ヒトゲ)なきといふ意なるべし 譯 人ラシクモナイ ミスボラシイ **人わろし** 十三丁ウ（釋）人の見聞のわろくして此方に恥る意也 譯 ザマガワルイ 外聞ガワルイ ミグルシイ **かたくな** 同（釋）むかしより頑愚の字をよめる意にて偏窟にのびらかならぬをいふ轉しては姿の事にいへるものびらかならず偏窟なるありさまをいへるなり 譯 ブテウハフ グチ カタイヂ **さうざうしく** 十四丁オ〔拾〕さびさびしといふべきをさうざうしといふ和語のならひ此類おほし萬葉にさびしさには不樂とも不怜とも書りつれづれなるをのみさびしといふにはあらず萬葉によめるには此字の意によめる歌あり〔玉〕拾遺にいへるがごとしさてつれづれといふもさびしき事なるを同じさびしきもつれづれとさうざうしとは意異なりつれづれとはすべきわざのなくてひまにてさびしき

をいひさうぐ／＼しとはあるべき物あるべき事のなくてたらぬがさびしきをいへり此けぢめをこゝろえおくべし　**うしろめたう**　同ウ（新）背目痛にてわがうしろの見られずおぼつかなき意をたとへいふ語なり（玉）此詞は後目痛といふ事にてうしろやすきの反也俗言に氣遣ひなるといふ意なり　譯　ファンシンナキニカヽル　ウサンナ　キガユルセヌ　手放シテハアンジラレル　**すが／＼とも**　同（新）淸々にて心きよく奉りかねたるさまをこゝにはいふ神代紀に到ニ出雲之淸地一素戔嗚乃言曰吾心淸々之これなり（餘）此卷の末にも此詞見ゆ又夕霧卷にすが／＼しき御心にて榮花物語月宴卷にすが／＼しくもなしあけ奉り給はでなど見えたり　譯　サッパリト（雅譯）テキハキト　キリ／＼ト　すがやかは　サッソク（參）**うるはしう**　十七丁オ（玉）すべてうるはしといふ言は古書にては美麗の意なれども物語などにいへるはたゞ美麗の意にはあらで俗言にきつとしてかたいといふ意みだれず正しき意にいへりこゝは楊貴妃の唐めきたるよそひはあまりきつとしてかたくてたをやかにはあらざりけんといへるなり（餘）俗にりつぱといへる心にあたれり（釋）端正の字によくあたれり威儀のみだれず美麗にもてつけたるより轉れるなり　**なつかしう**　同（玉）すべてこの詞はなつくといふ詞をはたらかしたるにてやはらかにしたしくむつまじく思はるゝ也俗にいふ意とはやゝ異なり（釋）なつくは馴着の意なりなつかしうは馴着まほしうおぼゆるなり（雅譯）アイソラシイ　カハユラシイ　スイタタチジャ　又俗語と同意　**らうたげ、らう／＼し**　同（玉）此詞は俗にあいらしきといふ意也さてついでにいはんらうたしとらう／＼しとは其意いたくことなるを詞のさまのよく似たる故にあひ誤る人ありらう／＼しは俗にいふ物の功者なる意なり（釋）らうたしは勞痛の意にて苦勞の多く甚しきを見てはきのどくに思ふ意より出たる語也さてそのきのどくに見ゆるものは憐のかゝるものなる故に轉りてはかはゆくあいらしき意にもなれるなりらう／＼しは勞々しの意なりこれは功勞の勞にて功勞をつみたるものは何事にも功者なる意に轉したる也（雅譯）カハユラシイ　ムゴタラシイ　らうらうしは功者ナ　コウノイッタタチ　らうは本勞なり勞は仕官の年功のことなり　**すさまじう**　同ウ（釋）

此詞はすさぶといふ語を例のしくといふ形容辭にてはたらかしたる也さてつかひたる意は不用なる事不與なる事面白からぬ事ものすごき事など猶さま／＼に用ひたり皆荒ましき意より轉りたるなり枕草紙のすさまじき物といふ下にひるほゆる犬春のあじろちごのなくなりたるうぶ屋火おこさぬすびつ火桶方たがへにゆきたるにあるじせぬところましてせちぶんはすさまじなどあるいづれも不用に不與なる意也ここはかゝる御悲しひのをりから面白き物の音をきゝ給ひて帝の不用におもしろからずきこしめす意なり譯 不與ナ フキゲンナ モノスゴイ セハシナイ **ものし** 同〔雅譯〕さやうにはあるまじきことをと人を恨むる意の詞也 イカゞシイ ドウヤラシイ 物しと思ふはキザハリニオモフなり物しと見るは目ザハリニオモフなり（釋）つかひたる意此說のごとしてゝは耳ザハリニオボシメス意也さて此詞ものうしと似たる故に混ふる人もあらめどかれとはいたく異也 **かたはらいたし** 同〔新〕舊本今昔物語に傍痛とあり〔玉〕傍痛の意にてかたはらより見聞て痛く思ふ意也俗言に笑止なるといふにあたれり片腹痛とかくはいみじきひがこと也〔雅譯〕見ル目ガ笑止ナ キノドクナ **かど／＼し** 同〔拾〕河最押立 才 日本紀今按日本紀に才の字をかどゝはよめれどかくつゞきたる事またくなし今のかど／＼しきは才の字の意とは見えずたゞ石などのとがりたる廉の心なるべし〔玉〕此說のごとし今世の言にもかどひしをたつるなどいふなり〔雅譯〕リハツナ キハダッタキブン カドヒシノアルキマヘ **なほあさまつりごとは** 十八丁ォ〔新〕なほはまだ／＼といふ意にむかしよりいふ此文いづこもさなりいよ／＼その上などの意と思ふは後世の事也〔譯〕ヤハリ マダ ドウシテモトカクニ（釋）あさまつりごとは朝政の字也夜中にも民の訴あらんことを思ひて天子朝とく朝廷に臨みて政事をきくもろこしのわざなり長恨歌の早朝の字をかくよめるをとりてかかれたる也箋の註は上に入るべきをおとしたれば因にこゝに書くはへつ **そこら** 同ッ〔新〕其所等の人といふ意也そこらこゝらといふ語を數の多きことに用る始は萬葉十七長歌に可奈之家口許々爾思出伊良奈家久會許波久念出云々とつゞけいへるがごとし其所等此所等の二語をあはせて數々の意となれりそれを

略きてはそこらともこゝらともひとついへるも多き數とするなり等といふも物の一つならぬことと也云々（釋）この說はいかゞわらんされど用ひたる意は數多き也　**たい〳〵しき**　同〔玉〕こはもとたみ〳〵しといひけんを音便にてみをいといひなせる詞なりたみたみしとは舌たみてなどいふたみにて直からず横さまにゆがめるやうの意なり萬葉に回轉などかきてまがれる道をたみたる道などよめり〔餘〕斷々退々とあるはおぼつかなし意の字音にやと思はるたゆみ〳〵しきといへる說もおちつかぬやう也〔雅集〕細流やどり木の注に不レ可レ然事と也心ヲ用ヒヌ　ケダイ　ナゲヤリなどの心に聞ゆるもあれど畢竟は細流の注よろしすべてアルマジキコトの心也〔雅譯〕クワンタイナ　イカヾナ　フス、ミナ（釋）此詞の本の意詳ならず怠怠の音といへるや近かるべき用ひたる意は大かた雅語譯解のごとし　**なまめかしう**　二十丁オ〔新〕物のまだよくも熟せぬをなまといふ譬へば草の成定りてはこは〳〵しきをわか草はうるはしうて少女などにもたとふるがごとしわかく艶なるをいへりそれを轉しては色めくなどをもいふ〔雅譯〕フウリウナ　シナヤカナなまめくはジャラヅクなまめきかはすはタガヒニアヂヲヤル　ジャラヅキ合フ　**うたてぞなりぬべき**　同〔新〕物の餘りに重なり過又思ふ事いとことさまになることの多きをもいふ新撰萬葉にちると見てあるべき物を梅の花別樣にほひの袖にとまれる是は餘りなるまでにほひの袖にとまりて忘れんとするにわすれさせぬを別樣と書たる也〔餘〕宣長云萬葉十二何時奈毛不戀有登者雖不有得田直頃來戀之繁母同二十秋といへば心ぞいたきうたてけに花になぞへてみまくほりかも葵の卷うたてところせうもあるかないかにおひやらんとすらん同卷人の心こそうたてあるものはあれ轉の字をかくは轉り進む意をとるなるべし古事記下穴穗朝段に宇多弖物云王子書紀に武烈天皇の御所行をいふ所に設二奇偉之戯一などあるは右の意にもうつりて平穩に尋常ならであやしくよからぬ也うたてある神なりといふも是なり云々〔雅譯〕イヨ〳〵ワルイうたてある云々はヒヨンナ云々　メイワクナ云々うたてはヒヨンナコトヤ　重々アンマリ　**さがなくて**　二十三丁ウ〔新〕神代紀に神性をかむさがとよみまた仁德紀に伏祥をよきさがともありて其

性はうまれつきたるくせをいひ祥は氣ざしをいへりそのくせはた氣ざしと同じ意ともなりぬ歌に春のさが世のさがなどよめるも皆是なりこれらより轉してこゝにさがなしといひ次の卷にゆびくひの女をさがなものといふ類はわろき人わろくせものなどをいふなり故に惡の一字をもさがなしといへり〔雅譯〕ものいひさがなしは口ガワルイ　ロヤカマシイ也　さがなき童はワルイコトスル子供なり心さがなきは意地ガワルイなり又云々のさがは云々ノナラヒ　ソレニツイタクセなり又アタリマヘ　**うけばりて**　二十四丁オ〔玉〕事のたらひてかげたるかたなくしてはゞかり邊つらふべきところなき也河海に諾承諾の心也受張相當の心にやと見え拾遺に人のうけてそむかぬなりといへるまことに言の本の意は人にうけらるゝ方より出たるにもあるべけれどつかひたる意はかならずしも然らず〔餘〕うけばりてとは今の俗にいつはいにするなどゝいふこゝろにて十分なるをいへり〔譯〕オシハレテ　**こよなく**　同ウ　〔玉〕此言は必他に對へてくらぶる事のある時につかふ言にてたとへばかれよりはこれはこよなくまされりなどやうにいひてくらべていたくかはれる意なりされば俗言にかくべつにといふにあたれり云々其中にくらべたる所のあらはには聞えがたきやうなるもあれどよく見ればそれもくらべたる所あるなり云々拾遺にこゆる事なき意也といへるもあたらずすべてむかしより此詞のつかひたる意を見つけたる人なし　**なづさひ**　二十五丁オ〔新〕萬葉に多き中に船にも鴨にもおきになづさふとよめるはそこをはなれずしてとゞこほりて有なりそれを轉して其人になれちかづき慕ふをもいへり云々〔玉〕河海に昵近なれむつぶ事也と見ゆ此詞物語文に見えたるはみな此意也萬葉にもおほく見えたるをかの歌どもによみたる意はいたく異也思ひまがふべからず〔雅譯〕シタシウナジム古語にてはウキタヾヨフ事なるを中古に轉じたるなり　**そばそばしき**　同ウ　〔新〕物の角あるはしたしくよりつきがたきにたとへたる語なり〔拾〕うつぼものがたり菊の宴の神歌にうばそくがおこなふ山の椎が本あなそばそばしとこにしあらねば觚稜を文選にそばそばしとよめり和名抄云觚稜和名曾波乃木木名也又四方木也かどかどしければ物にさはる意なりそばそばするなど常に

もいふ言葉なりそばの木もそば〳〵しき木にて名づくる歟蕎麥をそばむぎといふもかどある故也胡瓜をそばうりといふもふくれ出たる物おほければなるべし側々は暗推の字ながら末にてはかなふ意あるべし〔玉〕言の本は拾遺の如くなるべし然れども物語につかひたる意は側々しき也〔雅譯〕不和なるさまなり不和なる者正めには向はずして側目にみる故なり　**きびわ**　二十七丁オ〔新〕戸令に三歳以下爲レ黄といひ黄口之兒ともいふは鳥のひゝなに譬へて黄といへりひわとは稚く弱きを俗にひわづなりともひよわしとも又よわくたわめる物をひわ〳〵するなどもいふに同じく幼くてよわきをいへり然れば假字もきびわと書べし　**おふな〳〵**　三十丁ウ〔新〕負な〳〵なり云云伊勢物語におふな〳〵思ひはすべしなぞへなくたかきいやしきくるしかりけり云々其おふな〳〵に古本に隨分の二字を用ゐたるに依るに身の分に隨ひたる重荷を負るにたとへたる俗語なり云々然ればわが心にのこす事なく人の爲をも身のつとめをもなすをおふな〳〵するとはいふ也是より轉じてねんごろなる事にもなるなり〔餘〕此物語にあまたある詞ながらみな老たる人のわかきにむかひたると又尊き人の賤きものにむかひたる時につかひてあり然れば身に應ぜぬ時にいへる詞也おふけなくといへる詞も其もとは同じかるべし轉じてさま〴〵に用れどもいづれ身に應ぜぬことに用る詞とおもはる云々〔譯〕分相應ニ　ネンゴロニ　シンセツニ　**になう**　卅一丁オ〔新〕似る物無てふ語也六帖似なき思ひといふ題にて歌ども有みなその意也〔餘〕無二といへる文字は史記韓信傳に功無レ二ニ於天下一と見え其外にもあまた見えたる詞なり云々是を似なきものといへる也と契沖眞淵もいひたれどいかにあらん云々下略〔玉〕無二の意とするはひがこと也又無似の意とするもよろしからず言の本はいかなる意かしらずたゞたぐひもなくといふやうの意につかひたり〔釋〕なほ似なきといふかたなるべし似もじは體言にいへるなり無レ二はいかゞなるべし〔雅譯〕ムルヰヂヤ

○帚木卷語釋

こと〴〵しう　一丁オ〔釋〕事々繁にて其事をとりたてゝいふ意也しきは例の形容辭なり俗言に仰山にと

いふにあたれり　**すき事**　同〔新〕是は古語にはあらで中世よりいふ俗語にて風流或は洒灑或は好色などの事をいふ也（釋）すきこのむなどいふ意のすきにて人の心に深く欲する事をいふより出て好色の事に轉しいへりさるは好色の事は人の心にふかく欲する事なれば也さてそれより又轉りてはあだ〳〵しきかたにいへる所もありすき〴〵しすきがましの類みなしかりこゝのすき事は竹にモノズキなどいふ意なる中におのづからあだめきたる意もこもれりかよはして知べし　**まめだち**　同〔湖〕實目つくる事也〔新〕眞目也日本紀に忠誠また忠一字をも訓たりこゝは實目の意也だちはめきといふに同じく其有樣をいふ詞也〔餘〕まめやかまめ〳〵しなどいひて心にまこと有を云目にあづかる事にはあらず（釋）餘滴よろし實目といふは何の意とも聞えず譯シンジツメキ〔雅譯〕トクジツニモチコム　**なよびか**　同〔新〕なよ竹といふがごとくしなえたわむ類の語にて此文になよ〳〵といひ又とかくなびき來てなよびゆきなどいふ轉じてはなまめく事ともすびはぶりの反にてこれもなまめくてふに同じき辭也麗の字をなよびかと訓といふ説は妄也且ひを清べしといへるも誤也（釋）此說大かたよろしきをびはぶりの反といはれたるはいかゞ也又なまめくと同じやうにいはれたるも言の本たがへり譯ヤンハリ　シナヤカナ　イロメカシイ　**まかで**　同（釋）まかでは罷出の約れる也すべて罷は參の反にて禁中を退出するにいふ詞なるを轉りてはたゞ貴人の前を退くにもいひ又轉りては貴人と語るに己が他へゆく事にもいへりこゝは源氏君の禁中を罷て大殿の方へ出給ふを云この言の本は詳ならず　**さしも**　同ウ（釋）さは然の約りたる語にて上にいへる事を受ていふ辭也しは例の助辭にて勢ひを強むるばかりにて意はなしもは常のてにをは也さればさもといふに同し意にて俗言にサウモといふにあたれりすべて此さといふ語はいづれも然の約れるにて上をうけて下を起す處に必用ふ詞なり。されば。さるは。さは。さて。さぞ。さこそ。さばれ。さやう。の類いづれも然り　**あだめき**　同（釋）あだははかなくもろき意にて萬葉集に花といふ字をあだと訓たるも花のうつろひ散やすき意をとれる也さて心に實なくしてうつろひなびき安きをもあだといふは同じ心ばへ也俗言にウハ

キといふにあたれりめきは例の形容をいふ辭也あだあだし。あだけたり。あだ人。あだ物。などいふ類みな同じ仇讐をあだといふとはいたく異也混ふべからす　**めなれ**　同（釋）目に馴たる意にて見馴といふに同じこのめなれたるはすき〴〵しさへ係る意にてうちつけにあだめきたるすき〴〵しさは常に見馴たる事にてめづらしからぬ意也新釋にさしあたりて好色めきめなれゆくべき女をばしたひ給はずと解れたるはいたく違へり　**あやにく**　同（釋）あやはあなといふに同じく歎息の聲にくは憎き意也杜律遊仙窟などに生憎の字をアナニクヤと訓り物事の我心に従はぬを憎みていふを本にて我心の思ふに従はぬをいへり又轉りては俗言にいふと同じく物事のをりにさしあふをも云（雅譯）メイヨニイヂワルウ　**おぼつかなく**　二丁ウ（玉）すべておぼつかなく又こゝろもとなくなどいふ言待遠なる意に多くいへりこゝも源氏君の久しく來給はぬをまちどほにおぼせる也（釋）案にかうやうのおほといふ言は皆おほらかにとりしまりなき意と聞えたればほを清てよむべきにやされど久しく濁り來れる言なれば今も改めず因におどろかしおくのみ也（雅譯）シカトシレス　シッカリトセヌ　ココロモトナイ　マチドホナ　**すみか**　同（玉）たみ詞に四君のすみかといへるは俗意也頭中將のすみかは通ひ男の女の許へかよふをすむといひて此すみかは通ひすむ所といふことなりされはいたはりかしづき給ふといふも頭中將をなり　**ものうく**　同（釋）すべてもの某とつゝく物は物事につけてといふ意なるを後にはたゞかろく發語にそへたるやうなるもありされどいひもてゆけばさる意に聞ゆる也さてものうくは物憂の意にて何といふ事もなく物事につけて憂く思ふよし也されば轉りては懶惰の字にあたりて俗言にタイギナといふ方になれりこゝもその意にて四君の方へかよひすむことを頭中將のタイギニ思ひ給ふよし也（雅譯）コ、ロガス、マヌ　イヤキナ　**をさ〳〵**　三丁オ（拾）萬葉第十四東歌にとやの野にをさぎねらはりをさ〳〵もねなへこゆゑにはゝにころばえ此歌をさ〳〵の詞のはじめなり云々又大和物語に故兵部卿の宮此中納言の君にしのびてねたまひそめてけりとき〴〵おはしまして後此宮をさ〳〵とひ給はざりけり又やがて此下に殿上にもをさ〳〵人ずくなにと

あるなどを引合せていづれにもわたりてかよはせば大かたといふに似たり〔新〕長々の意にて專らとする事也云々〔玉〕かくさまにつかひたるをさ〳〵は物をさしつめてたしかにはいはず大かたに定めていふ詞也拾遺に大かたといふに似たりといへるよくあたれりこゝもさしつめてたしかに立おくれずとにはあらず大體おとらぬ意也されば俗言にあまりといふ言これによくあたれりあまり立おくれもせぬなり此次の文に殿上にもをさ〳〵人ずくなにとあるはいさゝかいひざまはかはりたれども意は同じことにて殿上にもあまり人もないといふ意也　**かしこまりもたかず**　同〔雅集〕かしこまりに五種の義あり一つには勘當の心須磨卷に源氏の光る君こそおほやけの御かしこまりにてすまの浦に物し給ふなれ二つには俗に恐れ入てといふ意日本紀恐怖。畏。御幸の卷に此事にやとおぼせばわづらはしくてかしこまりたるさまにて物し給ふ三つには敬しうやまふ也應神紀謹惶夕顏卷に又なき事にかしこまる又らうがはしき大路にたちおはしましてとかしこまり申す四つには無沙汰のいひわけの心關屋卷に御むかへに右衞門のすけ參れりひとひまかりすぎしかしこまりなど申す五つには謝する事竹川卷にさすがにかたじけなうおぼえしかしこまりに若紫卷にいとむつかしげに侍れどかしこまりをだにとてなん〔釋〕なほ例ども多くひきたりしを今はいたくつゞめてとりつ本書を見るべし餘滴にもいへれど委しからずさてこゝは敬禮をなさぬ心にいへり　**つれ〴〵と**　同〔餘〕新釋云つらね〳〵といふことなり良禰の約禮なればつれ〴〵といへりさてつらね〳〵物を思ひつゝをるはいとまのわざなき時のことにて淋しきをいふ〔玉〕つれ〴〵とはすべきわざのなくてひまにてさびしきを云〔釋〕新釋の一本には此說なしさてつらね〳〵と解れたるはいかゞあらんこゝはたゞひまさうにふりくらしてといふ意のみなり　**しめやか**　同〔新〕これは先は靜なる意ながらさらばしづかなるといふべしすべてしめやかに物がたりしてなどいふも雨などふりて物のぬれしをるゝかたより轉じてしめりやかなるをいふ也〔雅譯〕シットリと譯するは人の有樣也ヒッソリ又シン〳〵と譯するは時節なりシッポリと譯するはことわざ也　**かたは**　同ッ〔拾〕注頑片輪　今按先かたわと書る假字誤

りて注もこれにしたがひて誤れり烏の片羽よりいふ詞なればかたはと書りうつぼ物語初秋の歌に「つはもの丶はらにやどるはつらけれどかたはに見えぬおとやなりけり「大烏のはねやかたはになりぬらん今はおとやに君いふるらん「かたはなる名のおとやにも聞ゆるは思ひいらるゝころにもあるかな「秋の夜の數をかゝせんしぎの羽の今はおとやのかたはにはせん〔玉〕河海に頑片輪とある共にひがことなり拾遺の說のごとし　**おしなべたる** 同〔釋〕押は例のつよめたる發語にて意なしなべは並べたる意也物を並べてまさりおとりなく同じほどの意を本にてすべてなみ〳〵の事にてすぐれぬ意に轉していへり又廣く惣じてといふやうにもいへる事あり　**おのがじゝ** 同〔拾〕河各競日本紀今按日本紀の中に此詞なし萬葉第十二に各寺師ひとしにすらし妹にこひ日にけにやせぬ人にしられず貫之家集に「おく露のこゝろやわくる菊の花うつろふ色のおのがじゝなる六帖に「戀はみなさま〴〵ありと聞なべにおのがじゝとぞねはなかれける拾遺物名四十九日「秋風によもの山よりおのがじゝふくにちりぬるもみぢかなしな輔相〔新〕萬葉

に各が寺師と書たれば上のじは濁るべしさておのがしな〳〵てふほどの意也〔玉〕面々それ〳〵にといふ意也　**おほざう** 同〔新〕切にかくさんは箱やうの物に入れ給ふべきをたゞ打おくべき厨子にちらして有べくもあらずてふ意也しかれば大空なる御づしといふなりけりさるを今の本におほざうと書誤れるをそれにつき大惣の字也など注せしはいふにもたらず大ぞらとはばとしたるをいふ常のことなるをや〔玉〕此言は萬葉にあふさわといふ言あるそれと意同じく聞ゆればもとはあふさわなりけんを例の音便にざうといひつひにあふをもおほと書なしたるなるべし音便にいふこと多く又假字づかひのみだりがはしくなれるよりかゝるたぐひおほし〔餘〕關屋卷に御心のうちいとあはれにおぼしいづることおほかれどおほざうにてかひなし柏木卷に女三宮の御子うみ給へる所にちゝのおとゞなど心ことにつかうまつり給ふべきに此ころは何事もおぼされでおほざうの御とふらひのみぞ有ける（ナホ多ク引タレドモルサクテハブキツ）蜻蛉日記にこちといへばおほざうなりし風にいかでつけてはとけんあたらなたてにこれは大空の誤なるべきかこれらをよみあぢ

はひてみればおほざうの心おのづからしらるゝこと也須磨巻にかんの君は云々かぎりある女御みやす所もおはせずおほやけざまのみやづかへとおぼしなせりと有此おほやけざまといへる詞おほざうとよくかなへり今の俗のおもてむきといへるによくあたれり新釋にいへるおほぞらといへるは強(シヒ)ごと也よるべからず宣長が説に萬葉巻八にさをしかの萩にぬきおける露のしらむ相佐和(アフサワ)にたれの人かも手にまかんちふ同十一山しろのくぜのわくごがほしといふ我(ワ)を相狹(アフサワ)丸(ニ)わをほしといふ山しろのくぜ云々といへり此詞よく考へ出たればよるべくこそ(釋)此語の本の義詳ならず解れたる説どもはこゝに擧るがごとくなれどいづれもげにと聞ゆるはなし其中に新釋の説はことわり有て聞ゆるやう也おほらかなるを空にしめゆふなど歌にもよめれば大空といふまじきにはあらず寫し誤としても事の情(コヽロ)近く聞えたり小椾の説はひが事也かのあふさわにといふ語はさして多かる詞にもあらず義(コヽロ)もたしかには知られぬを歌の意にておして思へばさわは騒がしき意とは聞ゆる也さればことのすぢもいたくたがへるに假字もあふをおほとは誤るべくもあらずあまりに物遠き考めきたり然るを餘滴によく考へ出たりといひてなか〳〵に新釋をしひ言といへるはいかにぞやよし新釋はしひ言にもあれ小椾のあふさわとおのがいへるおもてむきとはいたくかけはなれたる語ならずやかへす〴〵いぶかし又おほやけざまとかなへりといへるもいかゞおほやけざまは桐壺巻にくらづかさこくさうゐんなどおほやけごとにつかうまつれるおろかなる事もこそと云々とあるおほやけごとゝ同じ意のおほやけにて事のすぢもとより遠へり隨ふべからずとにかくにおほはおほらかおほどかなどのおほと同じくとりしまらぬ意とは聞えたれどざうの意はしられがたし意はなほざりかいなでなどいふ義と聞ゆ雅語譯解にヒト、ホリ　表ムキ　ナホザリと譯したるうちに表向といへるはいかが也餘滴に擧たる例どもの中にしか聞ゆるやうなるもあれどそれも皆ヒト、ホリの意也

一のまち　四丁オ(新)一の町は專らなる町二三はそれにつぐもののをりなどする意にていふ俗語也(釋)これを俗語といはれたるいとよろしまちは和名抄に坊(ハ)聲類(ニ)云(ク)房國(ノ)反和名萬知(マチ)別屋也又村坊也云々と見え拾芥抄宮城部

に凡一條之內有二四坊一一坊之內有二十六町一十六町之內有二四保一一町之內有二四行一一行之內有二八門一云々とありて京地の一區なる所をまちといふ女官町などいふもこれなりさてその坊町を計ふるに一の町二の町とぞいひけんそれによそへて次なる事を二の町といへる其世の俗語なりふかき心あるにはあらず今俗のいはゆるはやり詞也譯 二ノキリ　**ずゐぶん** 同ウ〔餘〕白樂天の詩に蓬蒿隨レ分有二榮枯一　**おほどき** 五丁オ〔玉〕おほどくおほどかおいらかこめくなど皆おほやうなる意にして其内におの〳〵いさゝかかはりあり〔餘〕とりしまらぬさま也わかき人のあどなきをいへり花宴卷におほどけたる聲狹衣にとしははたちにぞなり給ひけれどいたくおほどき過て　**すさび** 同〔新〕しかと取たてゝの事にはあらで手なぐさみのやうなる中にも也すさみは進にて心に進み來る故になぐさみとなるなぐさみは心の愁などを和す進なり　**ゆゑづけて** 同〔玉〕たみ詞にゆゑづきてと改めたるはわろし云々又ゆゑといふことをもむつかしく說たれどかなはずすべて萬葉などのふるき意をもて言の本をとけるは此物語などにてはかなはぬ事多し

たゞ此物語は此物語のころのやうをもてとくべき也ゆゑと云事も此物語などにてはかならずしも故の字由の字の意にもあらずたゞ藝能にもあれ心おきてにもあれふるまひにもあれとるべきふしのあるをゆゑ有ともよしありとも云り　**はづかしげ** 同〔餘〕この注に頭中將の體也とばかりかけるはことたらず此はづかしげをよく解得たる人なし此書の中に見えたるは初音卷にかきまぜつゝ有をとりて見給ひつゝほゝゑみ給へるはづかしげ也夢浮橋になみだぐまれぬるを猶僧都のはづかしげなるにかくまで見ゆべきことかはと思ひかへして清少納言にかぢすこししていかにさわやかになり給へりやとうちゑみたるもはづかしげなりこれらにてしるべしその人の德にかたはらの人の恥るなり古今俳諧何をして身のいたづらになりぬらん年の思はんことぞやさしき契冲云やさしきははづかしき也心ある人をやさしきといふは向ひてまみえんも心づかひせられてはづかしき人といふ心なればこなたの心をかなたに名づくる也云々と有　**ほゝゑみ** 同〔餘〕契冲云ほゝゑむといふ和語のこゝろは頰咲なるべし口をひらき齒もとをあらはさでし

のびわらふほどに頬にすこしそのさまの顯れてみゆる心也又含の字古語ふくむ。ふほでもり。と應神天皇の御歌にあるふほも是也笑ひたきをふくみて少しゑむこゝろ也〔新〕含笑也萬葉に梅花いまだふくめりといふは花のまだひらけず含みて有をいふそのふゝとほゝと音通へり人の頬をほゝといふも含みの所なればなり云々　**いうなり**　同ウ〔雅集〕優ヤサシクシトヤカナル意也形にも藝能にもいへり天德歌合小臣奏云左右歌俱以優也云々〔釋〕優劣と相對ふ優にてすぐれたる意也又ゆたかにやさしき意も有それも兼たり　**人げなき**　六丁オ〔釋〕人氣無といふ意にて人がましくもなきをいふ世にすさめられたるかたちなり　**けしうはあらぬ**　七丁ウ〔玉〕氣は異にてあやしからぬ也賤しきをあやしとつねにいへば卽賤しからぬにてさてつかふところは必しも貴賤の事にはかぎらず物のさしもあしからぬをけしうはあらずといふなりこゝも然なり〔餘〕宇治拾遺卷二ひはぎありて人ころすやとおめくそれをきゝてこのたてる侍どもあれからめよやけしうはあらじ空蟬卷けしうはあらぬおもとのたけだちかなまた宇治拾遺卷七殿臺をひきよせ給ひてかなまりをとらせ給へるにさばかり大におはする殿の御手に大なるかなまりかなと見ゆるけしうはあらぬほどなるべしこれらあはせ考ふべしけとは常ざまの並々なるをいへり褻の衣などにてしるべしけしうはあらぬは常並にはあらぬといふこと也けしからぬといへるも此詞をつゞめいへるなり萬葉に日にけにとありけにとは常の事也〔釋〕小楠の說のごとくなるべし但し賤しきをあやしといはれたるはいかがそれは貴き人のいと〳〵賤しきさまを見る時にこそいはめいやしきが卽あやしきにはあらず又餘滴に常並にはあらぬといへるはひがこと也かの褻の衣とはすぢ異なり萬葉の日にけには又べちの言なりまがふべからず　**かはらか**　八丁オ〔湖〕さはやかなる義也〔新〕これはかのなま〳〵の三位よりも濁と異なる意とみゆれば濁の字を少しやはらげていふなるべし此頃は惣て字音の語多き也〔餘〕横笛卷に御乳はいとかはらかなるを心をやりてなぐさめ給ふと有て乳の出ざるをかはらかといへり物の乾きたるをいへる詞にやらかとはあららか。うららか。老らか。明らか。といへるに同じさて轉じては物のきよらかになれる

ことにも用たるなるべし俗にさつぱりとしたりといふにかよへりやどり木卷にほめつるさうぞくげにかはらかにてみめもなほ〳〵しくきよげにぞある紫日記にらうたげなるけはひ物きよくかはらかに人のむすめとおぼゆるさましたり（釋）此語の本の義詳ならず餘滴にいへる乾く意ならば假字わとかくべし雅語譯解には卽わとかきてサツハリと譯したるは同じく乾く意と見たるなるべしもろこしに乾淨と熟けたる字もありされど猶いかゞあらん新釋の說は何の事とも聞とりがたし又案にもしくは河らかといふにて淸き意にとれるにやされど猶決くはいひがたしとにかくにはを濁るはわろし　**なにがし**　同ウ〔玉〕すべてみづからのことを人にむかひてかくなにがしといへるは其時實になにがしといひしよしにはあらず古は名をいへることとなるにこれは作り物語にて惟光良淸などをおきての外はすべて人々の名をば作らずして名をいふべき所をなにがしと書る也なにがしの院なにがし寺なにがし僧都などいへるたぐひもその名をいふべきをかくいへりうつぼの物語などは作り物語ながら皆人々の名をも作れる故に人にむかひていふ所にも皆名をいへるぞかし　**かた〴〵**　十丁オ〔雅譯〕イロ〳〵　サマ〴〵ニ　カレコレ　アノ方コノ方ノ心ナリ（釋）方々の意也彼方此方につきて云々といふ義也又桐つぼの卷に世のおぼえ花やかなる御かた〴〵にもといへるは人々といふ意也これもかなたこなたに仕給ふ人々といふ意也　**なのめに**　同ウ（釋）なのめは昔より斜字を訓來りたるごとく直からずゆがみたる意也さてこゝは斜ながらにさてゆるしおかるべき人といふ意にて俗言にユガミナリニといふに全くあたれり又この下にことが中になのめなるまじきとあるも斜なるまじきにてゆがみなりにすておかるまじき後見の方といへるなり　**たもたるゝ**　同（釋）たもつは手持の意を本にてかゝはりてとりはなたぬ事に轉しいへりこゝは男の思ふにかなはぬとは見えながら離たれもせぬをさて保るゝといへるなり　**心にくゝ**　同（釋）心憎く惡この憎くは實に憎むにはあらでゆかしき事を反さへに憎しといへる也今俗の意にも心きゝてめでたき物などを見てニクイ物ヂヤ　ニクラシイ形ヂヤなどいふ憎しと同じさてこころにくしは心のゆかしくおもはるゝにてオクユカ

シイといふにあたれり　**あやなき**　十三丁ウ（釋）文アヤ無ナキなりあやはこれは白しかれは黑しといふやうにたしかにけぢめのあるをいふその文アヤのなきはけぢめなくすぢのたらぬ義なり〔雅譯〕ワケガタ、ス　ムチャジャ　**あわつかに**　十四丁オ〔弄〕あは〳〵しくいひてさしむかひ居たるなり〔餘〕契沖云さしあふぎゐたらんといふは何ともせぬ意也眞淵云心たらぬものは空を仰ぎてゐるものなり〔玉〕河海に淡々しき也と有俗にいふしみやかならぬなり〔雅譯〕キナシニしみやかならぬさま也又あはつけしはソロツコイ　フジツナあは〻淡なり〔釋〕右の說どもにあわを淡と見て假字さへあはと書れたるはいかゞ淡々しとはいかなるさまとかせんいと心得がたし按に新撰字鏡に惶急を阿和豆アワツと訓りこれなるべしかれ今は假字もわと書つかは例の形容の辭也あわてふためきなどいふあわても同じ辭にて意はいはれたるやうにしみやかならぬさま也あわつけしといふもまた活ハタラかしたるにて意は同じ此外あわ〳〵しあわた〻しなどいふ皆此類の語也いづれもわと書べし譯ザワ〳〵ト　**こめきて**　同〔新〕よにも人のむすめ子めきて物はかなきをいふ紫式部日記に小少將の君の事を心ばへなどもわが心とはおもひとるかたもなきやうに物づ〻みをしいと世をはぢらひあまり見ぐるしきまでこめき給へりはらぎたなき人あしさまにもてなしいひ告る人あらばやがてそれに思ひいりて身をうしなひつべくあえかにわりなき所つい給へりあまりうしろめたげなる云々これをもていとわかき女子めきたるてふことを知べし云々〔玉〕おほやうなるをいふ花鳥にをさながましき心也と見えたみ詞にむすめの子めきて也といへるよろし親めくに對ひたる詞也親はよろづに子のあつかひをするを子は親にしたがひて親のするま〻に大やうにてある意也〔釋〕此說どものごとし但しむすめの子とかぎられたるはいかゞたゞ兒コめきて也こ〻しこめかしなどいふこも兒の意也〔雅譯〕こ〻しは子々しなるべし大ボコナ大ヤウナ　**こゝろもとなく**　同〔玉〕すべて此詞は物のあかぬことあるをかくあれかしと願ふやうの意也おそきを待ツことにいふも其意也皆俗ヨにいふとは少しことなり注に男に引つくろはるるほどの女なれば也といへるは俗にいふ意に見たるにや　**くまなき**　同ウ〔新〕物の隱れたる所を隱タマとい

ふさるかくれ〳〵泣いたれる物いひ也　**ねぢけがましき** 同〔新〕ねぢけは萬葉に佞人をよみたれどこゝはかの佞人といふ迄にことぐ〳〵しくいふにはあらず〔玉〕此詞巻々所々に見えたるを合せて考ふるに人の心にもあれ形にもあれしわざにもあれ有べきまゝに直からずしてわろくまがれる意也俗言に物のまがれるをねぢれたりといふともと同言にて意も通へり注に口きゝがましき人をいふといへるはたゞ佞字につきていへるにてひがこと也〔餘〕横笛巻にいとねぢけたるいろごのみかな萬葉十六なら山のこのてがしはのふたおもにかにもかくにもねぢけ人のとも六帖にとにもかくにもねぢけびとかな　**ゆゑよし** 同〔拾〕萬葉第九見二菟原處女墓一歌の終に處女墓中爾造置壯士墓此方彼方二造置有故縁聞而雖不知新喪之如毛哭泣鶴鴨此故縁たとへば眼目といひ清淨といふ一義と見ゆれば今のゆゑよしもあまりのゆゑともあまりのよしともいひては文章もわろくことわりも聞えねばさてかくはいへるなるべしよろこびに思ひは俗にいふひろひものゝ心也〔玉〕ゆゑよしの事上にもいへるごとく何わざにもあれひと才とるべきふしあるをゆゑ有ともよし有ともいふ也　**みさをつくり** 十五丁オ〔新〕みさをは眞青にて松栢などの常に青さより人の心のかはらぬにたとへいふ青をさをといふは萬葉にあり〔玉〕みさをにもてつけてともいへりくづれぬやうに心をつけてもてつくるなり〔餘〕みさをとは東野州聞書に云みさをとは常の義かはらぬ體也云々此末にみさをにもてつけてみなるゝまゝにといへる注に常住不斷にもてつけて也としるせりされはしらずがほつくるもつねの顏色をかへぬよりみさをつくるとはいふなるべし云々〔釋〕みさをの言の本は新釋の如くなるべし萬葉に人魂のさをなる君とよめり松栢にたとへたるは松のみさをなどいひならへるにて著しさていと後には女の貞操の事にいへるも立たる志をかへぬを松栢の色かへぬにたとへたる也つくりはげにもてつくる事なるべし　譯 ヘイキメカス〔雅譯〕みさをは　行儀ダテみさをつくるはキツト守ツテヰルみさをにはジツトシテ　シランカホデ　ヘイキデ　**ことさらび** 同ウ〔新〕わざと爲出たるがごとしといふ也びはぶりの反にてそのさまをいふ辭なり　**たゞろぎ** 十七丁オ〔餘〕堀川百首朝夕につたふ坂田の橋

なればけふさへたえてたぢろぎにけり著聞集にたぢろぐかわたしもはてゞふみ見るは濱松中納言物語につくしへはなたれおはせしにいとゞ參りたぢろぎすみ給ひし家などのあとかたもなくなり〔雅譯〕ドサメキ　たぢろぐは　グラヅク　**ゑんずべき**　同〔新〕怨の音なり字注にも恨は怨之極といへばうらみの輕き方に怨といふ故に此次にうらむべからんふしとてならべいへる樣ゑんは心にふくむほどの事うらみは言に出るにいたれる也されば此事かの事といひ擧る意にてふしといへり　**ひゞらぎ**　十八丁ォ〔餘〕落くぼ二てんやくが忍べる所に云かぎをとらせ給へれどうちとにしかぐとかためたればたちゐひゞらぎて云々紫日記にふやのはかせさかしだちさひらぎゐたりとあるさひらぎもひゞらぎのいをさとあやまれるなるべし同所におこなひがちにくちひゞらかしずゝの音たかきなどいと心づきなくみゆるわざなり發心集四此病の苦痛に責られてねられ侍らず切燒がごとくうづきひゞらぎ身ほとほりて堪忍ぶべうもあらねば和名抄に說文云疼徒冬反訓比々良久動痛也とあり今も身をさまぐにうごかすをいへるなるべし〔雅譯〕口を動かすなりクチタ、ク〔釋〕案にひゞは響のひゞと同じくらぎは例の形容の詞なるべし右の例ども皆響く意として聞ゆ　**あへしらひ**　同〔新〕日本紀に待字を訓たり語の本は饗をあへといひ侍るより出てみな人をもてなす方の語となりぬこゝもしかり　**そばつき**　同〔餘〕河海に側村と有によるべし空蟬の卷にめをしつとつけ給へればおのづからそばめに見ゆ同卷に見給ふかぎりの人はうちとけたるよなくひきつくろひそばめたるうはべをこそ見給へ梅枝卷に此頃の人はたゞかたそばをけしきばむにこそ有けれこれらのそばなり器などのありふれたるを其まゝにはつくらでそのかたそばをのみとりてたゞしからずつくり出すを云かたよりたるさま也そばゝかどゝいへるにもかよへり（釋）此說はいかゞあらん本文に擧たる玉小櫛を得たりとすべし新釋に萬葉の伊蘇婆比を引れたるはさらにかなはず　**ざればみ**　同〔新〕洒灑めきたる也洒灑洒落なる事をされといふさて俗にもしやれたる物といふは實樣には違ひて一旦面白く輕薄なる筋をいふ〔餘〕按ずるに洒灑の音にあらずあざれを略せる語也あざわらふあざける字の類と同じ言なら

んと鈴木氏いへり　**まほ**　廿一丁オ〔拾〕萬葉に左右又諸手また二手とかきてまてとよめるは眞手にていづれにても一手を片手といふに對する詞なりこれに准ふるにかたほにまほとも對せる詞なれば云々こゞ船のまほにもとつゞけたるによらば片帆眞帆にてかたほはそばむきなる追風にかたほにかけまほはたゞしき追風に眞帆にかくる心によせていふ詞歟云々〔玉〕まほとかたほと反對したる詞にてまほは物のろくなることかたほはろくにもあらぬ事也さて言の本は船の眞帆片帆より出たるかとも思へど然にはあらじほの意は別に有べし〔釋〕なほ船の眞帆片帆より出たるなるべし船のわざにて云語今世にもをり〳〵有新釋に眞顏也と有はひがこと也　**とまり**　同〔餘〕うつぼ物語俊蔭卷にいやしきものをとりすゑていふかひなくまづはさせ給ふぞいろごのみのはてはかくぞあるやあやしきものにとまるとはなどやすからずきこえける云々〔釋〕さま〴〵の女にあひてその思ひとまりにといふこゝろ也　**おいらか**　同ウ〔餘〕契沖云老らかなるべし此物語にあまたある所老らかにてはかなひねびれたるの准にてはかなはぬ所多し於以と書て於比とかゝず老らかの心を用べしといへり今考るに契說に從ふべしらかは。あきらか。きよらか。あららか。なだらか。などのらかにて心得べし　**おもてぶせ**　廿二丁オ〔拾〕後選集春中かざせども老もかくれぬこの春は花のおもてもふせつべらなり躬恆〔釋〕面を俯てはづる意也　**おぞまし**　同ウ〔餘〕浮船卷にこめきおほどかにたを〳〵とみゆれどけたかう世の有さまをもしるかたすくなくておふしたてたる人にしあればすこしおぞかるべき事を思ひよるなりけんかし東屋卷にめのとはたいとくるしと思ひてものづゝみせずはやりかにおぞき人にて云々夕霧卷に人きゝもうたておぞましかるべきわざをかげろふの卷にかくおやしうてうせ給へること人にきかせじおどろ〳〵しくおぞきやうなり源平盛衰記三十五內田三郎家吉と名乘て進みけり巴に一陣に進むには剛者大將軍にあらずとも物具の毛の面白きに押並びてしやくびねぢ切て軍神に祭らむと思ひけるこそおぞかりけれ印本遲かりけれと有は誤也古語拾遺注云古語天乃於須女其神强悍猛固故以爲名今俗强女謂之於須志此緣也かゝればおぞましは女のこゝろのをゝ

しうたけ〴〵しき事にいへる也此物語にかける古語拾遺の注にみえたる如くみな女の上にてのみいへり

いひそし　廿三丁オ〔餘〕いひそしのそはスコの約りたるにてすごしといへる詞ならんかゑひそししひそしなどみな同語にていひそしは言過ならんかされど此頃白氏文集などもはら行はれし時なれば詩語をつねにいひならひたるかしるべからず〔釋〕いひすごしの意ならばいひすごしといふべしかく短き言を約むといふことは例なき事なり又愁殺などの殺は音サイなればそといふべきにあらずされはいづれもひがことなり言の本はしられねどたゞ事をつよくいふ一つの語としてあるべしもしくはそしるなどのそと同し意かともおもへど猶定めがたし〆

あいなだのみ　同〔釋〕敢無憑といふ言の訛れる也敢なしは俗にはりあひなしといふ意也さていかならんともしりがたきゆく末の事を憑みにするははりあひなき事なる故にあへな頼と云也

および　同ウ〔餘〕契沖云和名抄指和名由比俗云於與比儀禮云季指和名古於與比小指第五指也これ指を惣ておよびといへり今考るに土佐日記にけふいくかはつかみそかとかぞふればおよびもそこなはれぬべしこれもたゞゆび也およびと有を小指の事とせるは誤れり〔釋〕萬葉五に秋の野にさきたる花をおよびをりかきかぞふれば七くさの花と有和名抄に俗云とあれどさにはあらじ

あくがれ　廿四丁オ〔新〕あくの反うなればうかれを延てあくがれといふしかればこゝは只例のこゝかしことうかれて女のかた〴〵へありく也〔釋〕此説いはれたるやうなれどかく發語より反むることは例なき事なれば從ひがたし此語は荒木田久老の説に在所離といへるよろし在所を離て他へゆく意也かくこ共に通ひて所の意也うかれは浮といふ語のはたらきたるにて漂ふ意也あくがれとは別也

あがるゝ　同〔餘〕後撰雜二太政大臣の左大將にてすまひのかへりあるじし侍りける日中將にてまかりて事をはりてこれかれまかりあがれけるに〔釋〕頒字をあがつとよむあがと同じ言にて分散する意なり

さうじみ　廿五丁オ〔新〕正身二字をいふしんをしみと云は燈心をとうしみといふがごとし〔餘〕古事記に其神之正身とあり令義解卷五凡兵衛衛士上番衛士皆須檢點正身然後奏聞三代實錄卷十三應天門云々有失火事云々或人告言之大納言伴

宿禰善男可所爲奈利 驚恠比賜比天命ニ所司勘ニ定爾正身固(サウジミハク)
爭天不ニ承伏一止云止毛子幷從 者等乎拷訊 須留爾云々 萬葉
卷十六味飯(アヂイヒヲ)乎水爾醸成(カミナシ)云々昔有ニ娘子一也相ニ別其夫一望
戀經レ年爾(ルニ)夫君更娶ニ(ニチ)他 妻一正身不レ來徒 贈ニ裹物一因レ此
娘子作ニ此 恨 歌一還ニ酬 之一也 落くぼ物語藤原の君の卷
に所々に見えたりさうじみとは今の俗語に本人當人
などいへると同じ〔釋〕この說共のごとし．**ひたやご**
もり 同ゥ 〔河〕直隱(ヒタヤゴモリ)〔細〕和泉式部うきによりひたや
ごもりとおもへどもあふみのうみはうちいでゝ見よ
〔新〕ひたやは日本紀に永字ひたすらと訓じ後に一向
をひたすらなどいふに同じこゝはひたすらに打こも
りてといふなるをかく一向に情なき意に轉じていへ
り或抄に直隱の字をあて和泉式部が歌を引たるはあ
しからず直もひたすらてふ意に用る也云々〔釋〕この
注は玉小櫛よろし新釋もいたくはたがはずひたすら
に屋(ヤ)に隱(コモ)る意なるべし◎**うるせく** 廿六丁ゥ 〔餘〕河
内本にはうるせくと有しよし河海にも同じ靑表氏は
うるさくとありしとぞ湖月抄にもうるさくとせしは
わろしうつぼ物語初秋上あるじのおとゞ仁壽殿はう
るせき人にこそ有けれ宇治拾遺十四西おもてのさう
しにうるせき女ありけり同卷にこのわらはも心えて
けりうるせく思そかし云々□□□はなれどもかしこ
くうるせきものはかゝる事をぞしける按ずるに□□
□はしきとしたる(本ノマヽ)をいへる詞なるべし鈴蟲卷に故大
納言なにのをりにもなきにつけて云々いらかひある
かたのうるせかりし物を若菜下宮の御ことの音はい
とうるせくなりにけり著聞集九賴義を身をはなたで
もたりけるがきはめてうるせくおぼゆるなり云々
〔釋〕此詞は功者にかしこき意也餘滴にうるはしき意
のやうにいへるはあたらず靑の本はしられがたし
あえ 同〔餘〕契冲仁德紀に譽田(ホムタ)に肖(アエ)給ひぬ古今集
秋上こよひこん人にはあはじたなばたの久しきほど
にあえもこそすれ素性法師〇按ずるに契冲の古今集
を引れしは秋上にはあれど今本は待もこそすれと有
是は六帖卷一に七夕の歌にみえてあえもこそすれと
あれば古今はあやまりなるべくやみつね集にひさに
こぬ人をまつにやあえぬらんときはの戀と我はなり
ぬる〇あえとはたなばたつめにひとしくてたちぬふ
かたはあえずぞ有ける後撰秋の上閑院右京大夫宗平女
同書に源昇朝臣時々まかりかよひける時ふむ月の四

五日ばかりなぬかの日のれうにさうぞくてうじてといひつかはして侍ければ　**よきぬ**　廿八丁ゥ〔新〕萬葉によき道といふを曲道と書たりこゝは只そのゆく道のほどにある家を云或説によきがたきと云は過たり只よきぬ也〔餘〕萬葉卷七みわのさきあらいそもみえず浪たちぬいづこよりゆかんよき道はなしに六帖卷三口すれ引よく道なしと聞てこそいとふの神もたちはよりけれ契冲云よきはよけといふに同じ古今に花のあたりをよきてふけ萬葉のよき道を曲道と書りしからばよきぬ道とは通り道といふ詞也萬葉十一をかざきのたみたる道を人なかよひそありつゝも君かきまさんよき道にせん古今集戀二藤原敏行住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人めよくらん〔釋〕通り道といふ詞也といへるはわろしよけず通る道などこそいはめ　**つゞしり**　廿九丁ォ〔新〕囈の字をつゞしりと訓がごとくひきり〳〵てうたふ也きとさだかにうたふべきをりにあらねば也萬葉にかたしほをとりつゞしろひと有〔餘〕末摘花卷に御つゞしり歌のいとをかしき同卷たゞうめの花の色のごとみかさの山のをとめはすてゝとうたひすさびて出給ひぬるを命婦はいとをかしと思ふ心しらぬ人々はなぞ御ひとりゑみはとゝがめあへりあらずさむきしもあさにかいねりこのめるはなの色あひやみえつらん御つゞしり歌のいとをかしきといへば云々俗にひと口うたといふものにや云々今昔物語越前守爲盛が段に官人ども物ほしきまゝにいそぎて此鮭鯛しほからなどをつゞしる程に〔釋〕案にきれ〴〵にうたふよしなるべし衣の破れたるをつゞれといひそれを補ふをつづるといふつゞに同じ言也　**ねたます**　同ゥ〔玉〕物語にねたしといふ言はすべてつねにいふごとく妬忌む意にはあらずたゞ時にのぞみてかろく思ふ事にいへりたとへば人の我にむかひていふ事する事などにふれてその時にあたりてそをくちをしなど思ふやうの意にてこゝもふみ分たる跡もなしといはるゝをくちをしとおもふがねたく思ふなりさてねたますとはさやうにねたく思はするをいふ也〔譯〕ザンネンガラス　**あざれ**　同〔餘〕たみ詞にあまへされならんといへるはたゞこゝの所につきて解したる也あまへたる義はなしをとめの卷にいとあざれかたくなゝる身にてと有土佐日記にしほ海のほとりにてあざれあへ

るなど見えたり〔譯〕オジヤレル ◎ **あゑか** 三十丁ウ〔拾〕和名抄第九淡路國津名郡平安阿惠加此あゑかは郷の名なり今のあゑかの心にてつけたる歟然らば平安の字にて心得べきか〔玉〕拾遺に云々もとは一つ言なるべけれど物語のあゑかは更に平安の意にはあらず用る意のうつりかはれるなるべし〔新〕これは物のあやうきよりいでゝ乳兒のいと弱きにも又かく女のまめ心はなくてなよびがちなるにもいへりあえの假字也あへと書べからず〔雅譯〕あへかはいとわかくて物はかなくよわき意也〔釋〕此語の義詳ならず右に擧る說どもを思ふに拾遺の說は小楠にいはれたるがごとしされども小楠には此語の解なし新釋には夕顏卷にもあやうげといふ事也とてむつかしくいはれたれどあやふげとあゑかとはいと異なれば從ひがたしただ雅語譯解のごとく心得てあるべし假字はしばらく平安の阿惠加にしたがひて物しつ譯解にはあへと書たり案にこれもすてがたしあへは敢なしなどの敢と同じ意にやとおぼゆるよしもあれば也猶考ふべし **しれもの** 卅一丁ウ〔餘〕萬葉集卷九詠水江浦島子一歌に老もせず死もせずしてながき世にありける物をよの中の愚人のわぎもこに告てかたらく云々土佐日記にわらはは迄ゑひしれて云々竹取物語にこゝちしれにしれて新猿樂記に白物新釋別記に本朝文粹卷一高鳳刺二貴賤之同一交歌 源順不レ足レ言不レ足レ嘲其恥三白物之入二青雲一左傳成公十八年云無慧不レ辨二菽麥一注曰不慧也世所謂白癡也〔譯〕バカモノ **いさや** 卅三丁オ〔新〕いさは否てふ語也人の問に不レ知をも又其問の意に逃ぶをもいなともいさともいふ故に萬葉に不知の二字を書たり人を率ふを云とは異也 **さすらふ** 卅四丁オ〔餘〕孟伶傳サスラフ已忍伶傳十年事杜甫今考るに杜子美が詩は宿府の作なり伶傳は行不正也と字書に注せり顯宗紀にも此字ありてサスラヘと訓ぜり文選寡婦賦にサスラフとよめり金葉戀下出羽辨おくりてはかへれと思ひしたましひのゆきさすらへてけさはなきかな〔釋〕舊注に吟流離伶俜などの字を擧られたる中には流離よくあたれり、或抄には流浪の字の心といへりこれもよろしおちぶれて漂ひありく意也〔雅譯〕オチブレル ◎ **おもひまつはす** 同〔拾〕萬葉十三の歌に藤浪乃思纏若草乃思就西云々〔釋〕糸の物に纏はるによそへて思のはなれがたきを

いふ語なり　**人やりならぬ**　同ウ〔新〕古今集に人やりの道ならなくに云々といへるより後の歌にも文にも多し其本は人の爲に遣るゝ道なり轉じては我心よりせぬ事をもいへりこゝは人もなさせぬむねをひとりやくならんといふ也〔餘〕契沖云古今集離別源さねいざかへりこん人やりは人のいひつけやる也されば人やりならぬは人のいひつけぬ事なれば我心からなすことにとりなしていへり　**くすし**　卅五丁オ〔餘〕萬葉三きゝしでとまことたふとくくすしくもかんさびをるかこれの水島同十八あやにくすしみ十九にいにしへに有けるわざのくすばしきことといひつぎちぬをとこ清少納言に物いみなどくすしうするものゝ紫式部日記に我はとくすしくくひもちけしきことゞ〱しくなりぬる人は宇治拾遺物いみくすしくいふやつは命もみじかくなど有契沖説に稱德紀に奇魂をクシミタマとよめり奇の字をクシビと訓る心と云り　**なでふことか**　同〔餘〕何條とかくはわろし何てふにて何といふことかといへることなり　**とりまうさん**　同ウ〔玉〕とりは御けしきとるなどのとるにて俗言

に何事を御意に入れませうぞといふ意也〔餘〕明石巻に源少納言さふらひ給はゞたいめしてことの心とりまうさんと云又云いととり申がたきことなれど云々(多ク引タレド今略ク)たゞ申すといへる詞にとりとつけていへる迄也宣長が云々とかけりしはあたらぬ事也(釋)案に小楯の説はさる事なるを餘滴にたゞつけていへるまで也といへるはいと〱ひがことなり　**ふすぶる**　卅八丁オ〔餘〕蜻蛉日記にもしほやくけふりの空に立ぬるはふすべやしつるくゆる思ひになどとありさかしらするまでふすべかはして同書長歌ふじの山べの煙にはふすぶることのたえもせず元眞集の詞書に久しくこずとてふすべて出ぬひとに　**はやりか**　同〔雅言〕テアライ　テヅヨイ　手あらきさまなり(釋)はやりは疾といふ事をりると活かしてはやりはやるといふ詞かは例の形容辭なり意はいさみたちてきは〱しく物する事と聞えたり聲もはやりかとは聲の高く勢あるさまをいふ　**うべ〱しく**　同ウ(釋)諾々し也諾とはげにと承諾する意にて俗書にモツトモといふにあたれりうべ〱しくはそれを重ねていへるにてモツトモラシイといふ意なりさて假字

はむべと書たるを今改めたりそのよしは首巻にいへり　**むくつけき**　四十丁ォ〔雅譯〕ミグルシイ　オソロシイ　キミガワルイ　尾張の田舎の詞にムッケタと云即是なり〔釋〕むくの義未だおもひ得ず意は譯解のごとしむく／＼しといふも同じ意と聞ゆ　**つまはじき**　同〔餘〕高光集詞書にうちとけてもあらぬ人をわりなき所に引とゞめてかくやはとつまはじきをしかくれば土佐日記にひと日風やまずつまはじきしてねぬ落くぼにつまはじきをちから／＼しくし給ひて槙柱巻になほめづらしうみしらぬ人の御あり様なりやとつまはじきせられうとましうなりて云々南史宋順帝禪ルニ于齊ニ泣而彈指曰願後身世々勿レ復生ルニ天王家ニ空蟬巻にをさなかりけりとあはめ給ひてかの人の心をつまはじきをしつゝうらみ給ふ〔雅譯〕にくき物事を見聞時のしわざ也　**あはめ**　同〔新〕あばめは家を發くといふはひらきちらす意也其如く式部が物語をいとわろしといひちらし給ふをいふ也或説に出したる字どもはみなあたらず〔餘〕河海に淡と有よろし淡しといへるにてうとみにくむをいふ詞也はを濁りて拒也といひ又いさめにくむやうの心などいへるはひが事也たみ詞の發といふ説もいとわろし〔釋〕うとみにくむ心とあるはさも有べし淡しとするといへるは今少しうけがたし玉小櫛も河海によられたれど猶いかが〔雅譯〕サミスル　**からうじて**　四十三丁ォ〔新〕辛くして也物を五味もてたとふる常の事也こゝは長雨のはるゝをいと待わびててふに同じ〔譯〕ヤウ／＼ノコデ　**にがみ**　四十四丁ォ〔釋〕上の新釋によるときはこれも五味にたとへていふなるべし俗言に苦々しといへりこゝは只つぶやく意也　**あなかま**　同〔新〕今あゝやかましといふ是なりされどやかましてふ語は見えずかしましとはいと上代よりいへばあゝかしましの二つのしを畧してかまとはいふなりけり〔釋〕此説の如くならめど解ざまいとむつかしくやあらんかまびすしのかまと同語なるべし囂字を訓り　**やをら**　四十六丁ォ〔拾〕柔らかなり云々本文ニ引ッ〔玉〕拾遺の説のごとし俗言にそつとゝいふことなり　**ほゝゆがめて**　同ゥ〔拾〕和名抄云野王按云類音狹和名豆良一云保々面旁目下也かほをかたぶくればほゝのゆがむ也くつろぎがましくといへる此心なり枕草子にも夏ひるねしておきゐたるえせかたちはつやめきね

はれてようせずはほゝゆがみもしつべくといへり云云〔玉〕河海をはじめ細流孟津などにほゝを方の意に注せられたるはひがこと也又拾遺に頰也として顔をかたぶくれば頰のゆがむ也といへるもいかゞ也枕冊子を引たれどかれも頰の意にはあらじか此詞たとひ本は頰のゆがむより出たるにもあれかならずしも頰のゆがむをいへるにはあらじこゝも物へだてゝ聞給ふなればその頰のゆがめるは見ゆべくもあらず〔釋〕なほ頰ゆがみの意也さてこれはまさしく頰のゆがむ意にはあらでゆがむ事を強くけにくゝいはんとて頰といふ事をそへていへる也今俗の語にもたゞ憎しといひても有べきを頰にくしなどいふ事ありこれも其事がらをけにくゝいひなさんとていへると同じくかかる事外にも猶多し拾遺の説は解ざまいかゞなり小櫛は事の情は得られたれどさりとて頰といひたるを何事ともいはでは事の意辨へがたし又新釋に次にくつろぎがましくといふはよりふしなどしてゐる故に物いひのほゝゆがみていふやうに聞ゆるなりとあるは正しく頰をゆがめて物いふ事と見られたりと聞ゆさては文の義いたく違ふべしたゞほゝゆがむといふ

詞あるをもてゆがむことを強くいはんとて頰を添たるのみなり　**あてはか**　四十七丁ウ〔新〕あては伊勢物語古本に高貴の二字を用ゐたり高貴の人ぶりてすがたよろしきをいふなり諸抄にさま〴〵字をあてたるは皆推量のみ其字どもをあてと訓たる例なしはかはそこはかのはかに同しく量度の語なるを轉じて程計の意にいへり何ばかりの人何ほどの人なりなどいふがごとくその位階分際をいふ詞とす〔餘〕河勝人細姫妍日本紀　契沖云河海に出されたる字何に出たるかしらず細流の二字日本紀に有ことなし〔雅譯〕ウチアガッテヰル　キャシャナ　品ガヨイ〔釋〕あての義詳ならず意は譯解の意をおの〳〵相兼たり新釋の説はさることながら古本の伊勢物語といふものは妄作なる事本居翁の玉がつまに辨へられたるがごとしそのうへ高貴二字の意のみにはあらずうつくしく品のよき意などかねたれば此字のみにては解がたしはかの説もさる事ながらいたくむつかしたゞあてやかのやかと同じく形容辭と見て有べし　**つき〴〵しく**　四十八丁ウ〔新〕着々敷にて似着こと也かの後妻に配せんにもつき〴〵しき也〔雅譯〕ニッコラシイ　モット

モラシイ　**すぢかひ**　五十丁ォ〈拾〉すぢかひは筋替角違など心得る人あるべしすぢるといふ詞あればすぢりちがふといふなるべし　**やとれびゆ**　五十一丁ォ〈餘〉新後拾遺集釋敎大納言道綱母思ひ出ることもあらじとみえつれどやといふにこそおどろかれぬる若紫巻にかゝる朝霧をばしらでいぬるものかとて入給へばやともえ聞えず宇治拾遺はやく左の目にいたつきたちにけり海ぞくやといひて扇をなげすてゝのけざまにたふれぬ○新撰字鏡愕然於比由〈釋〉萬葉二吹なすふえのおとはあた見たる虎かほゆると諸人のおびゆるまでに　**すくよかに**　五十三丁ゥ〈新〉健の字をよめるごとくたゆまず情なきさまなり總て物の餘情なく見ゆるをすく〳〵としてなどいふめり〈釋〉すくはきすくすく〳〵しなどのすくに同じく情なき意よかは例の形容辭也　**たをやぎ**　同　たをはたわむなどのたわと通ひてたわ〳〵としたるさまやぎはやぐともはたらく形容辭也とをゝなどのとをも同じ　**おろかならず**　五十四丁ゥ〈釋〉おろかはおほらかと同じ言の約りたる也おほはすべてとりしまらぬ意なることと上にたび〳〵いへるが如しらかろか共に通ひたる形容辭也愚をおろかといふも細しからず大らかなる心をいふ也さておろかならずは細やかにといふ意にてこまやかに語らひ給ふといふ義なり　**ことく**　五十六丁ゥ〈玉〉ことゝは何事にまれ其事をとりたてゝ事とする意にてとりたてゝあかくなるなり家持集といふ物にある歌に秋風はことゝ吹來ぬとあるも同じ河海に事となりとあるよろしわざとがましき心なりとあるはたがへり細流にことゞ〳〵くとあるはかなはず〈雅譯〉何事にもあれ其事を取立て事とする意也俗にキットヨイなどいふキットのこゝろなり　**あたらしき**　五十九丁ゥ〈餘〉今の俗あつたらものといへり古事記上に阿多良斯登許曾又萬葉にも見えたる語也玉かつらの巻に故少貳のうまごはかたはなんあなるあたらものをといふ落くぼに明くれはあたらものにいひ思ふ〈釋〉可惜の字を訓來りたるがごとし古事記の阿多良斯は猶異なるべし　譯　ヲシイモノニ　**ふつゝか**　六十丁ォ〈拾〉萬葉十七に太馬をふつまとよみたればふつゝかは人のふとり過たるがいやしげなればそれより起りて萬の事しなゝくてしたゝか過たるをふつゝかといふ歟末摘花巻にみちのくにがみ

のあつごえたると文かける紙さへわろき事をいふとてかけるも准らへておもふべし人のやせ過紙のうす過たるもわびしくわろけれどふつゝかなるとあつ過たるとのわろきまではあるまじき也〔雅譯〕太つか也デックリトコヱテヰル轉じていやしき心になる時俗語に同じデンブナ

○空蟬巻語釋

かゝづらひ 初丁（釋）かゝづりあひの約りたるにてかゝは拘はる義なり俗言にカヽリアヒといふに等し **たどりよらんも** 同（釋）探り寄る意にてたづねよらんといふがごとし空蟬のかくれたる所なるゆゑにたどりとはいへるなり **とぢめ** 同ウ（釋）とぢは閉めは活辭なり物を束ねて結び終る意を本にて何事にも竟をつくることにいへり〔雅譯〕シマヒ **うれたくも** 同（釋）先達憂痛と説れたる意にて憂の痛く甚しき也舊注に日本紀の慨哉などを引れたるも本は一つながらこゝの意には遠し **まぎるべき** 三丁オ（釋）目遮の意にて人の目を遮るべき几帳といふこと也すべてまぎるといふ語はみな此意にて見とほしを障斷る也紛らはしなどいふもこれをはたらかしたる也 **ものげなき** 同（釋）物氣無にて物々しき氣のなきよし也俗言にミスボラシイといふに近し〔雅譯〕ゼニメガナイ 位ガナイもの〳〵しのうらなり **ないがしろに** 同ウ〔拾〕蔑 此字也物ともせぬ心なりこゝにてはきたる物かともせぬ様也しどけなしと注せるもたがへるにはあらねどよくはかなはず〔雅譯〕シドケナウといふ意になる事有慢りたるさまなれば也 **ばうぞく** 同〔拾〕放俗なりはを清てぞを濁るべし〔新〕傍若無人の意なるをさまでは詞のしたゝか過たれば傍若とのみいひてしらする也且じやくをぞくと訓は此國の唱への例なり〔餘〕おもふに凡俗の字なるべきにや遊仙窟にも出てたゞびとゝよませてふるくいひならひたれば大かたは此字なるべし云々もしさならずは僕遨か云々源語のうちにてはかげろふの巻に人おほくみる時なんすきたる物きたるはばうぞくにおぼゆると見えたり此外見えず○身のかたみといふものに第七御ひきあはせの事御むねにつね〳〵御心をそへられ候はねはいかにうつくしきえりなりともしどけなくばうぞくにひきなされとりはづしては胸ひろ

暴字アラハストヨムトキハ音泊ニテ　バツニハアラズサレド入聲ノ字音チ用ルトキハナダラカニ引テ゜ウトカクフ法師チ　ホウシ縁　彩チロウサウナド例今モサル類トスベキニヤコレハセメテ試ニイフノミナリ

がりてちのしたまであきとほり見にくき事も出るものにて候〔玉〕傍側飽足など注あれどいかゞ拾遺に放俗の字をあてたれどこれもいかゞすべてかやうの字音の詞はその意によりては字は當がたきもの也字は字にて意はあらぬさまをも轉じ用るものなればなり〔釋〕右の説どもいづれもげにいはれたりとおぼゆるもなし玉小櫛にいはれたるやうに心得てあるべきなりされどなほ試にいはゞ暴側の字などにやあらん餘滴に引る身のかた見にむねひろがりて乳の下まであきとほりといへるすなはち暴側の意にて胸のあきて身の側までも見ゆるを側を暴すといへるにもあらん歟こゝにもむねあらはにといふより續けたるを思ふにさるさまなるべくは聞えたり猶考ふべし　譯　ジダラク〔雅譯〕ゾラク　**つぶ〳〵と**　同〔新〕つぶらかとは丸き物の形を一つぶ二つぶなどいふそれより轉じてこえ丸がりたる心にてこゝにはいへり〔雅譯〕マルマルと譯する時はつぶらなる也コマ〴〵と譯する時はつぶさなる也　**そゝろか**　同〔新〕大どかならですゞろに心かろきさまなること上にも下にも見ゆ〔餘〕狹衣につき〴〵しうそゞろかなるかたちなどいとゞいみじう云々とりかへばや三これは今少しそゞろかになまめけるけしきまさり給へり云々柏木にたけだちもの〳〵しうそゞろかにぞ見え給ひける河海にたけの高きさまにやといへるはよき説なり〔釋〕この語大かたは新釋のごとくにてかなふべし然れども餘滴に例ども擧たる其外をも考へわたすにげにもたけ高きさまをいふがごとく聞ゆかれ考るに萬葉集詠二立山一賦に天會々理たかき立山とよめることありこの天そそりいかなる義とも知れねど天に聳えて高きさまとは聞ゆればこゝもその意にてそゝりかといふをかよはしいへるにやあらんさらばすゞろとは本より別なる語也そもじも清てよむべし古事記上に於二天浮橋一宇岐士麻理蘇理多々斯弖とある蘇理もかよひて聞ゆるやう也暫く餘滴に從ふべし　**さがりば**　同〔餘〕枕草子にうらやましき物かみながくうるはしうさがりばなどめでたき人〔新〕さがりたるほどあひを云萬葉にかやかり許爾といふばかりの如くその程量をばかといふを略してばとのみもいへり濁るは音便也〔釋〕額髪の下りたる端の事也端をはとのみいふは軒端山の端などのはに同じ新釋の説はいたくたがへり　**さう**

どけば 四丁ォ〔雅譯〕さうは騒(サウ)なりどくはどかの活きたる也どかはらかの類也大らかを大どかともいひ夫を活らかしておほどくともいふにて知べしザワヅク　**ねびれて** 同ゥ〔新〕春海考るにねびれはねびまさるなど有と同語にてとしのふけたるをいふ也語釋は詳にしりがたし和名抄に能登國婦負郡禰比とありこれも年更たるをいふ詞ゆゑに婦負の字を禰比とよめる也此負は媼と同じくて老女の稱なり〔餘〕契沖云としのふけたるをいふ(釋)此說どもはねびといふ語にはかなへれどこゝにはいかゞ鼻などもねびれてとつゞきたる語勢さらに年のふけたる事とは聞えず頭書に擧たる玉小櫛のごとくなるべし但し草木の萎(ナエ)しぼみたるやうのさま也といはれたるはいかゞなり新釋にも俗に木などのみづ〳〵しからぬをすねびたる木也といふ是にて過捻(スギネヂケ)ぶりの意なるべしなどいはれたれどすべていかなる事とも聞わきがたし大かたは細流に鼻の高からぬよし也と有ぞよろしき　**そぼるれば** 同〔新〕そばへるをいふか上卷にそばづきざればみたるといふに萬葉のいそばへをるてふ語を引ていへるがごとし又そゞろくをいふか〔餘〕若菜上なしかうじやうの物どもさま〴〵に箱のふたどもにとりまぜつゝわかき人々そぼれとりくふもありこてふの卷にかきざま今めかしうそぼれたり○そゝくといへるに似たり(釋)新釋にそばへるをいふかとあるはよろしそゞろくをいふかとあるもかなふべしそばづき云々とあるはいたく違へり〔雅譯〕ソヽカシイといふに近し　**まろ** 六丁ォ〔新〕まろとはむかし男女ともに我を下していふ語也才あるをかど有といふに對へてかどなく丸くのみして愚か也てふ意なり〔雅譯〕男女ともに自稱の詞也少しはげみ高ぶるこゝろあり今の世男ならばコノ方女ならばコチャといふがごとし(釋)打とけていふ語ときこゆ新釋の說は暗推(オシアテ)にちかし　**とばかり** 同ゥ〔新〕時ばかりを略しての語也萬葉に例有されどこゝなどはいとしばらくの事に用ゐたり萬葉に夜のふけぬとにとあるは時(ホト)にの略也(釋)此說もいかゞあらんたゞしばらくの間らひをおもはせたる語としてあるべし　譯　チトバカリ　シバラクノウチ　**いだにねられず** 七丁ォ〔餘〕契沖云いは心のよくねらるゝ事也たゞねるといふとはすこしくかはれり○朗云これは熟睡をうまいにあてたるなどを

見ていへるにやさるわかちあらんともおぼえずいぬ二言のつゞきたる間にてにをはを入るゝことといもねずいをぬるなどあり引切もせずといふ心をひきもきらずといふがごとし　**しふねき**　八丁ウ〔雅譯〕執念しきなり字音にはたらくてにをはをそへて和語のごとくしたるは裝束するをさうぞくといふ類なり　**うらもなく**　九丁オ（釋）うらは心の裏の事にてうらさびしうらがなしなどのうら也されば心もなくといふ義にて何のこゝろもなくうちとけたるさま也　譯　何ノワケモナウ　オクソコモナウ　**よべ**　十丁オ〔新〕夜方にて前の夜をいふそれを音便によんべと云今も田舍にてはよんべといへり前夜をゆふべと云は誤也　**うつせみ**　十一丁オ〔新〕うつせみは萬葉のころまでは顯の身てふ意にてうつそみの妹うつそみと思ひし時などさへいへり然るを萬葉に字を借て空蟬とかき又顯身ははかなく死る意にもいへるをたゞ蟬のもぬけの事とのみ思ひ誤りたるを紫式部の比に至りてはひとへにもぬけの事とのみおもへるもうべなり此女房かくかしこしといへど時に古學のなければをしむべし（釋）うつせみの解は右にいはれたるごとくなれどこゝにうつせみといへるはたゞ蟬の事にてもぬけまではあらぬことと也さて身をかへてけるとあるがやがてもぬけたる事也然れども此語によりて蟬をうつせみとはいへりとおぼしければ空蟬の字をにほはせたることは論なしそれやがて歌の巧なるなりこのかへし歌にうつせみの羽におくつゆのとよめるにてうつせみはたゞ蟬の事なるよしを知るべきなり

○夕顏卷語釋

むつかしげ　一丁オ〔新〕むね〳〵しからずきたなげなる家どもの立こみたるをいふ下京邊のさまむかしもさぞ有けん（釋）すべてむつかしといふは物の繁くわづらはしきをうるさがる意の詞にて今俗にいふとはやゝ異也こゝは新釋の說のごとし　譯　ムシヤクシヤトシタ　ムサクロシイ　**ひたひつき**　同（釋）このころの女は髮を垂たる故にふと見て先額より人の目にもとまるなるべしさるからにをかしき額つきの透影といへりかしらつきといふにひとし　**やつし、やつる**　同ウ（釋）やつすは形をわろくしてしのびまぎらはすをいふ今世にいふとはいたく異也俗言にミス

ボラシクスルといふ意也又やつるといふはおのづからミスボラシクなる事にて形の痩衰ふるさまをいふたおのづから形のわろくなるをいふやつ〳〵しは貧窶の窶字を訓來れるがごとく貧しくミスボラシキ貌をさしていへり此けずめを心得おくべし〔雅譯〕忍びて出立時輕く身ごしらへをしわろきのり物にのるをいふカルイナリニナル、 **ついゐて** 二丁オ〔餘〕契沖河社に云崇神紀云急居此云菟岐于これは倭迹々姫命と申が立ておはしけるがものにおそはれて心ならずとみにゐ給へるをかくはいへりうつぼ物語に宮のついゐならひ給へといひ平家物語の六代などについゐてとかきつねにもついゐるついゐるといふは急の字を菟岐といふを岐を伊に同韻にかよはしていふ也何につけてもついとはすみやかなるにいへり雅望云此說ことわり有こゝも何の花ぞと源氏の問給ふに御隨身のとみにひざまづきて御こたへ申すさま也若紫卷にこちやといへばついゐたり云々〔釋〕此末例ども多く擧たれど今略きつ **このもかのも** 同〔新〕此面彼面てふ意にて萬葉東歌に足がりの乎弖母このもにさすわなとよめるも彼面此面の意也古今集にはこのもかのもとよみ此さか木の卷にもあり譯 アチラコチラ **よろぼひ** 同〔拾〕徒倚ヨロボフ神代紀下〔餘〕仁德紀天皇幸ニ山背ニ時視ニ桑枝沿レ水而流ニ歌之曰云々河のくま〳〵豫呂朋譬ゆくかも〔釋〕小家のさまの傾き倒れかゝりたるをいへるなり 譯 ヒヨロヅキ **むね〳〵しからぬ** 同〔餘〕細花棟々河宗々按ずるに棟々と書るは皆わろし河海の說によるべしもしこれを棟の心とせば葵の卷にものゝけとてもわざとふかき御かたきと聞ゆるもなしすぎにける御めのとだつ人もしは親の御かたにつけつゝつたはりたるものゝよわめにいでなどむね〳〵しからずあらはるゝとかけるむね〳〵しをば何とか解べき崇神紀十七年船者天下之要用也この要用の字を牟禰都毛乃と訓り私記にもしかり〔雅譯〕オモダヽヌ云々 **あやめ** 同ウ〔河〕綾目黑白文目文をあやとよむ也毛詩曰聲成レ文ほとゝぎすなくやさつきのあやめ草あやめもわかぬ戀もするかな清輔朝臣奥義抄云黑白もしらずといふやうの事也云々〔釋〕文は黑き白きにかぎらず物の色のさわやかに分るゝをいふめは顯注密勘に網の目籠の目絹め布めなどを引出られたるがごとく其分れたる際を

いふ事と聞ゆあやめもわかぬは其文(アヤ)のめの分れがたくしてみだれたるをいふこゝは貴き賤き人のさまを見分つことなきをいへるなり◎**らうがはしき**同（釋）湖月抄傍注に亂みだりがはしき也といへるよろしらうは亂字の音をなだらかにしたる例の語と聞ゆがはしは形容をたとへいふ辭なり萬水一露にそうぞうしき小路也と注せるはすこしたがへり　**よろこび**同（釋）此詞かく體言にいへるは今の俗言に禮をいふといふにあたれる事先達のいはれたるがごとし歎びて謝する意より轉れるなるべし又帚木卷によろこびに思ひといへることありそは常のごとくうれしく思ふ意なり何れも今俗にいふとは異なり　**ひそみ**三丁ウ〔新〕なかんとする時の口つきをいふ萬葉に百とせに老舌いでゝよらむともわれはいとはじこひはますともと有を六帖にひそむともと有是萬葉の訓をば誤りしかどひそむはさる口つきをむかしいひけん證とは六帖を以てしるべし老の涙もろに口つきひそみて源に見ぐるしく御覽ぜらるゝ也〔餘〕朗云ひそむは眉にも口にもいづこにもかぎらず顏のうちにわたるなるべし雅望按ずるにあげまきの卷に姫君の御心をあやしくひが〳〵しくもてなし給ふをもどきくちひそみ聞ゆ（釋）源注拾遺の帚木のうちひそみぬかしとある所の注にも萬葉集の老舌出而與餘牟(ヨヽム)ともとあるを引出ていはれたれどよゝむといふ方の解をのみいひてひそむといふ詞の說なきはいかにぞやおのれが釋はそこの頭書にいへり朗の說の顏のうちにわたるといへるはさも有べしされど本は口もとより出しにこそさて新釋にも拾遺にもよゝむといふ事を引れたれどよゝむは舌のもつるゝ事にてひそむとは異なればいたづらなりひそむは俗言にビリクチスルナキガホスルといふにあたれり　**つきしろひ**同〔拾〕和名抄云說文云觝丁禮反楊氏漢語抄云牛相觝豆木之良比(ヒルツキシラヒ)以角觸物也此觝の字つきしらひと讀たれど今は衝突などの字なるべし（釋）つきはげに衝突などの意也しろひは辭にてあへしらひ引しろひなどの如く互にする意也しらひ。としろひ。とは音通ひて同じことなり　**めくはす**同〔餘〕いせ物語に世をうみのあまとし人をみるからにめくはせよともたのまるゝかな清少納言にかつぎするあまのすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん若紫卷に中將中務

の君などやうの人にめをくはせつゝうつぼ巻二はべる雜色共にめをくはすればはしりよりて云々若菜上あなかたはらいたとめをくはすれどきゝもいれず云云など有　**しほたれ**　四丁ウ〔餘〕齋宮式に哭稱ニ鹽垂一とあり〔釋〕鹽の垂るは沾しめりて干がたきものなるを本にて涙のかわきがたきにたとへいへる語なり　**ぼうざ**　五丁オ〔餘〕土左日記に舟ぎみの病者もとよりこち〴〵しき人にて〔釋〕病者をつゞめてばうざといふは言をなだらかにする例のことなり　**かごとばかり**　七丁オ〔餘〕契沖云榮花物語にわかやかなる女房四五人ばかりうす色のしびらどもかごとばかりひきゆひつけたり古歌にひたち帶のとつゞけたるこれにおなじかたばかりなどいふにかよひて聞ゆ雜雜記上八帖東路の道のはてなるひたちおびかごとばかりもあはんとぞおもふ　**てかく**　十二丁ウ〔餘〕柏木巻にこゝちせんかたなくなりにければ出させ給ひねとてかき聞え給ふ常夏巻に御供の人のさきおふをもてかきせいし給ひて蜻蛉日記にはつせまうでに音せでわたる森の前をさすがにあなかま〳〵と手をかき面をふり云々後拾遺雜俳諧天台座主源心雲ゐにていかであふせと思ひしにてかくばかりになりにけるかな〔釋〕手ヲフル　**なにがしくれがし**　十三丁オ〔新〕くれがしとはそれがし也なにくれなどいふくれなり〔釋〕くれはこれといふ意なるがくとことかよふ例あり　**そらおぼれ**　同ウ〔新〕そらは虚言の虚なりおぼれはおぼろ〳〵としてことの意をわかぬさま也さてそらしらぬさまするを常に云に同じ〔釋〕おぼれはおほほれの約りたる也おほはおほらかおほやうなどのおほに同じくとりしまらぬ意ほれは老ほれなどのほれにて心の惚る也或抄云此詞は前の見給へおきながらといふ詞にかゝる也見給へおきながらはからればかりありくといふ意なり　**へんぐゑ**　十五丁ウ〔餘〕くゑんぞくほぐゑ經など同じ例也〔釋〕驟速といふ人名を紀にクヱハヤと有けを重く唱ふる時の音と聞ゆたゞにけとよむといふ說はわろかめりさて物の變化とは鬼物の變化して形をあらはしたるをいへる也〔新〕古事記に溝くひひめのもとへ誰ともなくうるはしき男の夜のみかよひて其住所しられねば男の衣のすそにへその苧をつけこゝろみるに其苧は戶のあなより通りて有をとめ行てみむろ山の神の社までいた

れる事ありこれらをいふならん〔河〕三輪明神倭迹々日百襲姫命にかよひ給ひし也日本紀の心はおほものぬしの神の妻也然るを其神晝は見えずして夜來るやまとゝ姫の尊夫に語ていはく君常に晝は見えず明らかにみかほを見ることなしねがはくはしばらくとどまれいましが形を見んと答ていはく君がくしげの中にをらんおどろく事なかれやまとゝひめの尊心の内にあやしむ夜明て匣をひらきて見るにうるはしき小蛇ありおほん衣紐のごとし云々下略〔釋〕右の准據どもさしも用なき事なれど何れの抄にも擧られたれば因にこゝに記しつなほ河海には中關白殿の赤染之兄弟の女に語らひて云々などいふ事もあれどうるさくて今はぶきつ　**ごほ〳〵と**　十八丁ォ〔餘〕これはことに物語ぶみにあまた見えたる語なりひとつふたついはゞうつぼ物語國ゆづりに御屏風御几帳もごほ〳〵とたふれぬ蜻蛉日記にまだひるよりごほ〳〵けた〳〵とするそひとりゑみせられて枕草子にやり戸などあくるもいとにくしすこしもたぐるやうにてあくるはなりやはするあしうあくればさうじなどもたふめかしごほめくこそしるけれ紅葉賀に屏風のもとによりてごほ〳〵とたゝみよせて朝顏にごほ〳〵とひきてじやうのいといたくさびにければ落くぼにはらごほ〳〵となれば雅望按ずるに萬葉卷十六つくゑの島のしたゞみを云々早川に洗ひすゝぎから鹽に古胡ともみとあり古胡も物の鳴音なればふるくよりいへる語と聞ゆ今の俗ぐわら〳〵ばた〳〵などいへるに同じかるべし云々朗云上略皆聲をかたどりたる言也案るに古胡をのべてこう〳〵といひならひたるなるべし〔釋〕聲をかたどりたりといふにて事足るべし古胡をのべてといへるはわろし古胡とは俗言にコク〳〵と又コッコトなどいへるに同じ　**こちたし**　二十丁ゥ〔拾〕こちたしは萬葉に言痛とも事痛とも書ておほき詞なり心にかはる所あり人の言をいたむと事々しきと事おほきとなり今はことおほきこゝろ也おほきなる心也といふ注はかなはず〔釋〕こといたしのといの反ちとなる故にこちたしといふ萬葉には事言をたがひに通はして書たれば强て此字になづむべからずさてこゝは言痛の意にて言のおほき意也此詞物語の中にては多くはわづらはしくだ〳〵しき意に用ひたり意の轉れる也〔雅譯〕ヤカマシイ　クダク

ダシイ　ギヤウサンナ　**こゝろもとなかめり**　同〔餘〕これは品定の卷に夕顔をいへる所にこの心もとなきもうたがひそふべければといへるにあたれり夕顔の本性よろづおほどかに若びて老らかなれば源の心ばみたるかたをすこしそへたらばとさへぞのたまひしこゝも源の二世を契りてこの世とのみはおもはざりけりとてこちたくゆくさきをたのませ給へるにこゝの歌に行すゑかねてたのみがたさよとよめるなどかやうに大どかなるが心もとなき本性也といへる也しなさだめの卷をあはせて考ふべし宣長說にこゝの心もとなきは歌よむことの未熟なるよしにて紫式部が卑下也といへるは誤なりこゝろもとなきは夕顔の歌をさして其本性をいへる也〔釋〕この說さる事のごとくなれど猶歌をさしてかやうのすぢとはいへるなれば歌の未熟なるよしなること論なしされどすゞなどもとあるもの辭にて落着は本性の心もとなきをいへる意とは聞ゆ小櫛の說も誤にはあらず　**いさよふ月に**　同〔新〕いさよふとは專ら出んとして猶豫て有十六夜月をいへるをこゝには入がたにまだたゞよひて有かたにいひなしたる也かやうにもいひなすが此文のつね也惣て此語の意をいはゞ出る月にのみいふべきならぬ事は萬葉にいさよふ波たゆたふ船などいふを見よ〇常樹云家隆卿のいるもいさよふとよまれしは是より得られけんかし〔河〕山のはにいさよふ月をいでんかとまちつゝをるに夜ぞふけにける〔餘〕萬葉第七續後撰雜中よみ人しらず〔雅譯〕立やすらふ意也月のいさよひ同意なり云々　**けいめい**　二十二丁ウ〔餘〕うつほ物語祭使の卷におほいなる御けいめいにこゝそ有けれと有此卷の末にも此詞見えたり上林賦に透迤經二營乎其內一と有けいめいといへるは音便也敬命と孟津に有はおぼつかなし東鑑に爲二洛中警衞一出二辻々一可レ懸レ篝之由被レ定郭璞江賦經二營炎景之外一韻會曰縱橫爲レ經回旋爲レ營又考るに警衞の字にてもあるべきか　**そらめ**　廿三丁ウ〔餘〕河箋拾遺雜下かもにまうで侍けるを男の見侍りて今はなかくれそいとよく見てきといひおこせて侍ければ伊勢「そらめをぞ君はみたらし川の水あさしやふかしそれはわれかや〔釋〕これは空目といふ語の類例まで也　**あいだれたり**　廿四丁オ〔河〕あまへたるやうなる體なり〔釋〕この御說のごとき意とは聞えたり案に愛垂と

いふ義にや猶考ふべし　**しとゞに**　廿六丁ウ〔河〕伊勢物語みのもかさもとりあへずしとゞにぬれてまどひきにけり「朝霧にしとゞにぬれて呼子鳥佐保の山べに鳴わたるなり〔花〕きたる物の身につくほどぬれたるをいふ也〔餘〕朗云シト〴〵ノ畧今シト〴〵ト云〔釋〕案に河海に引れたる歌の二句を萬葉集に之怒々爾所沾而と書たりされば本はしぬゝなりけんを怒字を漢音にドとよみ誤りてしとゞとはいひそめしなるべししぬゝはしぬゝれの約れる言と聞えてしぬはしなへたるかたち也さて意は轉りても同じくして沾たるさまの甚しきをいへり俗言にシッポリヌレルといふ意なり　**うつぶしふし**　廿八丁オ〔釋〕うつぶしは内伏の意にて面を内にして伏すさまなりさて一つの語となりたる故に又臥てとはかさねいへる也今の言にていはゞうつぶしにふしてといふ意なり　**けどられ**　同ウ〔釋〕或抄云正氣をとられたるなりといへり此説のごとく鬼物に氣を奪はれたるをいふ　**むくむくしき**　三十丁オ〔河〕いぶせくおそろしきなり〔餘〕あづま屋の卷にかゝる人の供人こそ心はうたてあれなどいひあへりむく〴〵しくきゝならはぬこゝちし給ふ〔雅譯〕ミグルシイ　オソロシイ　キミガワルイ尾張の田舍の詞にムツケタと云即是なり〔釋〕むくの意は未思ひ得ず河海に藎字をかゝれたるはむぐめく意にとられたるかいかゞあらんつかひたる意は雅語譯解にいへるがごとく猶心づきなくあらびたる意をもかねたり　**よゝとなきぬ**　卅二丁ウ〔新〕萬葉にもゝとせに老舌いでゝよゝむとももとよみてなく時の口つき也〔釋〕萬葉によゝむとあるは舌のもつれて聲のあやなき意と聞えたりこのよゝはなく時の聲と聞ゆるを口つき也と有は少したがへり〔雅譯〕オイ〳〵トナク　**びんなかるべし**　同〔釋〕びんは便字の音也びんなしはたよりのわろき事又たつきなき事をいふ轉りてつきなきことゝ不都合なる事にもいへり　**みつはくみて**　卅三丁オ〔河〕髮白くて老嫗の體也といへり後撰としふれば我黑かみもしら川のみつわぐむまで老にけるかな一說年よりぬれば腰かゞまりせくゞまりて二の膝とがり出たる中にかしらまじはりて三の輪をくみいれたるがごとく也云々〔新〕今昔物語舊本十二增賀法師の事をいふ條に云美豆波左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保爾爾阿布曾宇禮志伎かく

もあれば三歯(ミツハ)さすともいふ也老て歯のまばらに落て上の歯下の歯と三つさし合ひくみあふ様になるをいへり三輪とおぼえていふ説は皆誤也右にも美豆波とこそ書たれかの檜垣の嫗がよめるも同じ〔餘〕年ふれば云々後撰雜三にありて詞書につくしのしら川といふ所にすみ侍けるに大貳藤原興範朝臣のまかりわたるついでに水たべんとてたちよりてこひ侍ければ水をもていでゝよみ侍けるひがきの嫗とあり水をくむといふにかけていひたる詞なればわと書べきことわりなし此事大和物語にも見えたり舊本今昔物語に云くらげの骨てふ歌袋草子にも引て落句あひにけるかなとせり云々後拾遺雜五冷泉院東宮と申ける時女の石井に水くみたるかた繪にかきたるをよめとおほせごと侍ければ源重之年をへてすめる清水にかげ見ればみつはくむまで老ぞしにける又重之集に二の句すめる泉のとあり(釋)後撰集の歌檜垣が集には老はてゝかしらの髪はしら川のみつはくむまでなりにけるかなとありさてみつはくむといふ語の意は詳ならず新釋に今昔物語を引れたるにてみつはさすといへるも同じ意とは聞えたり然れども三歯くむとていはれたる説はかなへりとも聞えず歯の落たればとて必三つさしあひくみあふ物にもあらざればいかゞなるにくむといひさすといへる意もかの説のごとくにては聞えがたし猶異なる意あるにこそ考ふべししばらく年老たるかたちとのみ心得てあるべし雅語譯解に極老にて腰膝のかゞまる也と注せるは舊説のまゝなればたのみがたし

○**かこか** 同ッ〔河〕四圍ともいふかこめる心也四方をかこむ心と也〔雅譯〕ひそみかくれて静なる心ときこゆ湖月抄にカンゴリとしたりといふこゝろ也〔雅集〕松風巻宿もり詞みづかららうずる所に侍らねど又しり傳へ給ふ人もなければかごかなるならひにて年ごろかくろへ侍りつる也(釋)案に○かこの意は河海のごとく圍(カコ)みたる意なるべしさらばこもじは清(スミ)てよむべき也カンゴリカコ〳〵などいふにあてられたる説はさも有べけれど猶いかなる義ともたしかには知(ラ)れず○かは例の形容辭にて一本にかこやかとあるやかも同じ新釋に閑居(カゴ)やか也といはれたるはいみじき強言(シヒコト)也

おしくゝみて 同〔餘〕金葉集雜下大路に子をすてゝ侍けるおしくゝみに書付侍ける云々若紫にひとへばかりおしくゝみて榮花物語にき

かばわびしとなげける女房うせさせ給ひぬれば云々御そにおしくゝみてゐておろし奉らせ給ふ(釋)これらは類例也さてくゝむはつゝむといふに同じ萬葉集にわが子羽裹(ハグヽメ)とも書たり　**こしらへをき**　卅七丁オ(釋)源注拾遺に喩字を擧られ孟津に異見をする也とある共にあたらぬにはあらねど猶この意のみにはあらで心をとりてあざむきすかしなだむるをいふ詞なり今俗の言に物を造るをこしらふといふをも思ひてよきさまに作りなす意なるを知るべし(雅譯)ナダメル　取ナス　スカス　ス、メル　**をりたちて**　同　(釋)此詞は其事を人にまかせずしてみづからいたつくをいふ本は馬船などより下立(オリタチ)て手づから其事をとりていたつく意より出たるなるべし　**御やつれ**　卅八丁オ(釋)やつれやつると用(ハタラ)く言を體言にしたるにてこゝは源氏君の御しのびすがたをいへる也やつるの語は上に擧たり　**道のそら**　四十一丁オ(拾)萬葉巻十五挽歌云いめのごと道のそらぢにわかれする君新古今戀三道信朝臣心にもあらぬわが身のゆきかへりみちのそらにて消ぬべきかな(餘)小大君集に「あされども草葉の露やとはれまし道のそらにてきえなましかば「たちてゆくゆくへもしらずかくのみぞ道の空にてまどふべらなる　**はふれ**　同　(新)溢を崇神紀にはふれと訓り萬葉に大きみを島にはぶりといふも古今に心をだにもはぶらさじといふも皆通ひて身の行方なくなるも心の定なくなれるも水のあふれ出るやうの事にたとへていへり此物語にあぶれともいへり放埓などいふは古語しらぬ人のふといひ出しもの也(拾)はぶれは此物語におほき詞なりあぶれともあり云々日本紀の崇神紀に溢の字を用たり古事記には波布理と假字にかゝれたり孟津に放埓とあるは音にてはうらつにて常にもいふ詞也はぶれとは大に違へり云々下略(餘)玉かづらの巻にわか君をさる物の中にはぶらかし奉るとあるもすてはなつ心なり東屋巻にかうまどはしはぶるゝやうにもてなすことゝいみじければ落くぼに夜いかに寒からんとの給へば北の方つねにきせ奉れどはぶらかし給ふにやあくばかりえきつき給はぬ(雅譯)はぶれて　流浪シテ　はぶらかす俗のホカス　ホオルは此詞の轉也ヤリッパナシニスル　ステモノニスル　**ことなるなごり**　四十三丁オ(釋)なごりといふ語は先達餘波の字にあてゝ解たる

ごとく波の引さりて後になほ所々に海潮(ウナシホ)の遺(ノコ)れるをいふを本にて何事にも其物其事のはてたる後に其氣(ケ)の遺(ノコ)れるをいふ詞也のこりといふ詞も此語の轉れるにやあらん大かたは同じさまにきこゆこゝは體言なる故に又のこらずとはいへる也人のなごりをゝしむといふも其人の去たるあとに其けしきのおもかげに覺ゆるをゝしむ意也然るを今俗の言には未(タ)わかれざる前よりナゴリヲシなどいふはいと〳〵轉りたるにて理なしさてなごりは波凝(ナミコリ)の約(ツヅマ)れるかこゝは源氏君の病のなごり殘らずといへる也　**しにかへり**　四十九丁ウ〔餘〕うつぼ物語樓の上にしにかへり思ひそめにし世中のあかぬごとこそあはれなりけれ落くぼにましてほのきくわかき人はしにかへりわらふ狹衣にしにかへりまつにいのちぞたえぬべき中々なにゝたのめそめけん　**こりずまに**　五十一丁オ〔新〕今夕顏に物ごりし給へど空蟬軒端荻をも猶忘れ給はぬは又もあだ名は立給ふべしと也おぼし出るににくからずといひて古歌を引面白し云々萬葉卷十五にあはずまにしてといふも只不逢しててふ意といふ人ありさる意とは誰も見れど猶まの語助辭とも聞えずこりずまひの略なるべしいせ物語にすまふ力なしといふに依るに一度こりたることに猶すまひつよりて物をなすをいふ也(釋)この說はいかゞあらんされどまの義はいまだ思ひ得ず猶考ふべし後撰集に貫之風をいたみくゆるけふりのたちいでゝなほこりずまの浦ぞこひしきこれは須磨浦にいひかけたれば論なし

この六年あまりかほど中風にて手をやみたりけれは板下をかく事たにえせす源氏の評釋たえむとする事いとうれはしくかなしかりけりこれによりてさきに彫せつるちうさくをものしてまつかくなん五卷の草紙とはなしたる語釋をも別にせんとおもひしかとはつかはかりのほとなれはついてにこゝにとりそへつ次の卷々よりは人の手にかゝしめたれはいたうかはりたるになん

文久のはしめの年なか月

左なからに

廣道

しるす

源氏物語語釋二之卷

○若紫卷語釋

しゞこらかし 初丁オ〔雅集〕梁塵秘抄口傳集十 おこりごゝちにわづらひてしゞこらかしてありけるに〔新〕凝かたまる也うたてはせんかたなき也右のごとくなま〳〵のまじなひなど爲しこらかしては瘧の忘れがたくしていかにともせんかたなく成るものなり〔釋〕新釋の說爲し凝かしてといはれたるはわろし頭書にいへるごとく縮み凝る意の語なるを活かして凝かしてとはいへる也うたてはいよ〳〵わろくなる意なり　**ならひ給はず** 同ウ〔釋〕すべてならふは馴といふ語を活かしたる也物學ぶを習ふといふもたびたび物して其事に馴るをいふ意なりこゝも源氏君はかやうの山道などの步行を馴給はぬ故にめづらしうおもほすなりみな之に准へて知べし　**所せき御身にて** 同〔細〕河海云ひろき心也云々誤歟只せばき心也御ありきなどかろ〴〵しくはなきさま也〔釋〕此詞末はさま〴〵につかひたれど何れも所狹の意より轉りたる也こゝは源氏君は貴き御身にて下ざまのものゝごとく心にまかせてそゞろありきもえし給はぬを所狹御身といへる也俗にキウクツナバセマナなどいふにあたれり又所によりては河海にいはれたる如くひろき心にいへるもありそれは其物事の廣くなりて餘地の狹くなれる意にて所狹とはいへる也轉れる末に心をつけて見るべし皆所狹の意となる也　**ひじり** 同〔釋〕此詞もとは皇國の天皇の御事を稱奉れるにて日知の意なりさるは天皇は天照大御神の御子として天津日嗣を知しめせば高光日の御子など申たる意にて日知とはいひしにこそ然るに漢國にて王の德あるをば聖人といふをもて日知に聖字を充たるより轉りて後にはひじりとは聖をいふとのごとなれゝども其もとはいたく異なる事にてよくも充らぬ字とするべしさて又法師の德行至れるにも又此字を借て聖人といへりしよりつひには行德ある僧をいふ名のやうになれりしなるべしされども僧は位あるものならねばいよ〳〵たがへる事となれるうへにいともかしこくまが〳〵しきことゝいふべし今世にはます〳〵轉りて乞丐僧を殊にひじりといへるなどはいはんかたなく

（釋）雅集六帖三みよしの大川水のゆほびかにあふとはなしに涙のたつらん、とあり四句あらぬ物故なあふとはなしにとせし本ありと聞えたりかくてはいよ〳〵不ニ寛大ニ意と聞えたり

かしこき事也さてこゝなるひじりは行徳ある僧の事なり　**大とこ**　二丁オ　〔餘〕釋氏要覽曰僧史略云即唐ノ代宗大曆六年四月五日勅京城僧尼臨檀大德各置ニ十人一以テ爲ニ常式一此レ帶ニ臨檀一而有ニ大德ノ二字一以テ爲レ始ト也增輝記云行滿德高キヲ曰ニ大德ト一　**すかせ奉る**　同〔河〕すかせはのまする也世俗に飲いるゝをすきいるゝといふ也〔箋〕食ノ字吸ふ心也松の葉をすきてなどいふにおなじ〔拾〕日本紀第二十四皇極紀云以レ水テ送スクレ飯チうつほ物語に松の葉をすきてとい へり〔餘〕契ガ說のうつほはあて宮の事也　**ゆほびか**　四丁オ　〔河〕寛ひろき心也地窄ソ虛空寛白氏文集「御芳野の大河水のゆほびかにあらぬ物から波のたつらん〔岷〕私云何のこもりたる景もなく海の面のひろき體こと所に似ず面白しと也いたりふかきくまとは手のこもりたるをいふべし〔拾〕ゆほびかに寛大の心とは見ゆれど引く所の六帖の歌より外には見えぬことば歟然ればその字と定むべからず又大河のべのと引きたれど現本大川水のとあり現本よき證下にいたりて見ゆべし〔新〕萬葉に波のゆたなどいふ寛の字を用ゐしと思ひ合するにゆほびかもゆたかにひろきをいふと見ゆ（釋）此

語六帖三の歌を河海に引れたるより外には大かた見あたりたることなければ其心も又よく知れがたし然れども河海に寛ひろき心と注せられたるよりこのかた諸抄みな其意にのみ釋れたるはいかゞあるべきさるはかのみよしのゝ大河水のといふ歌のゆほびかには全く寛大の意とは聞えざれば也其故は詞のつゞきゆほびかにあらぬとあればゆほびかならぬ意なること論なしされば これを寛大の意としては不ルニ寛大ナラ一モのカラ浪のたつらんといふことゝなりて其心聞えがたきにはあらずや寛大ならず狹少なる所ならばかの古歌に淺きせにこそあだ波はたてといへらんがごとく波の立べきことわり也然らば波の立らんと疑ふべきにはあらざるべし結句はなど波のたつらんとやうに疑ひたる例の辭なるをやさればこれは中々に不ルニ寛大ナラ一をゆほびかとはいふことゝぞ聞ゆるさてはゆほびかにあらぬ物からは狹少ならぬものゝといふ意になりて結句の波の立らんにかけあひて聞ゆるなりかれ假にツンボリトシタと譯しつそこの頭書にもいへりしごとく明石浦は前に淡路島ありて海の面は廣からずいと狹りたる所なればかた〴〵寛大の意にては

かなひがたき事也さて右の歌の二句を大河のべとしたるは湖月抄にのみ有て河海には大河水のと引れたりされば拾遺にいへる引そこね給へるにはあらで湖月の寫し誤なることあきらけし　**いつきむすめ**　五丁ウ〔釋〕いつきは神代紀に祟字を訓る意にて忌清(イミキヨ)まはりて敬(ウヤマ)ひ崇(タフト)ぶをいふを本にて大切にする事に轉しいへりされば萬葉集にいはひ兒とよめるごとく大切にしてもてかしづく女(ムスメ)をいつきむすめといへるにて體言なりをとめの卷にかぎりなきみかどの御いつきむすめも云々ともあり　**さいなまるゝ**　八丁ウ〔釋〕さいは河海の傍注に罪字を充(アテ)られたるごとく此字の音なるべしなむは辭にていとなむたしなむなどのなむに同じ又河海に事態などの字を出して日本紀論語文選など記されたるはいかゞあらん此等の字の意はさらになし例の暗記の誤などにやさて意はただ責はたることにいひて俗にイヂメルといふによくあたれり　**おくらす**　十丁ォ〔河〕おくらかす也云々〔新〕おくらすは古今に「かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさんやはと出たる語也云々〔釋〕この物語の中に後(オク)らかしといへる語あまたあり

それと同し詞にて俗にオクレサスルといふ意也　**あさはか**　十七丁ウ〔河〕あさくはかなき心歟〔拾〕今按只あさきにてはかはそこはかなどのごとくそへたる詞なり萬葉第十二に紅のうすそめ衣あさはかに又あらぞめのあさらの衣あさはかにとよめる歌にともに淺の一字をあさはかと讀り〔釋〕此拾遺の說のごとし但萬葉の歌は略解にあさらかにとよめるよろしはかもらかも形容辭ながら意はいさゝか異なり　**さしくみに**　十九丁ォ〔拾〕後撰戀四「いにしへの野中の淸水見るからにさしくむ物はなみだなりけりかげらふ日記に人の家のまへちかきいづみに八月十五夜月の影うつりたるを女ども見るほどにおほぢにふえふきてゆく人あり「雲ゐよりこちくの聲をきくなべにさしくむばかり見ゆる月かげ〔玉〕拾遺に云々此蜻蛉日記の歌によれば淚といはでもさしくむといへは淚のさしくむ也然ればこゝの歌も初二句さしくむ淚に袖ぬらしけるにて源氏君の歌の四の句のことゝ也さて下句は花鳥に山にすめる身は心もさわがぬといへるなり云々〔餘〕眞淵云後撰の歌は目に淚さし含むことを水をくむにいひよせたり蜻蛉日記にさしくむばか

り見ゆる月影とあるも手にくみて見るばかり月のただちに見ゆるとおなじく水によせていへりこゝのもこれらをとりて水に寄たりされども此語のもとはさし含を略せりと見ゆさてさしてふ語もさしあたりさしつけなどいふ時はたゞちなる意あれば物をたゞちにはかなる意にいふ也けり今のも瀧波の音を聞とさしつけに袖ぬらすとよめりと聞ゆ此さしくみ云々の歌を同君の歌也などいへるはわろし僧都に疑ひなし○雅望考るに袖ぬらしける山水とは多武峯少將物語に「昔より山水にこそ袖ひづれ君がぬるらん露は物かはさしくみとは打つけといへるにちかしやどり木の巻に宮もあながちにかうすべきにはあらねどさしくみは猶ひとほしきをと有など思ふべし〔釋〕此詞さしつけにうちつけになどの意といへる説はよろしさて詞のもとはいかなる意ともしられがたしさし含の略とあるもいかゞあらん猶考ふべし　**めも、あやなるに**　二十丁ォ〔餘〕眞淵云あやなしとは織物の紋のあざやかならぬより出て萬の事に轉じていへるそのごとく是は紋の鮮なるより出てうつくしき物にいへり萬葉にあやに戀しきといへるも鮮なる方にていふ也朗云あやにはあなにともいひて虛語なりめもあやにのあやにとは異なり〔釋〕新釋の說あやを紋より出たるやうにいはれたるのみはよろし見る目も文有てうつくしき意と聞ゆ　**さだすぎ**　廿八丁ゥ〔拾〕さだは河海に央の字を出し給へりなにゝ見えたる字にかおぼつかなし萬葉十一に「人間守あし垣ごしにわぎもこをあひ見しからにことぞ左太おほき「おきつ浪へなみのきよる左太の浦の此さだ過てのちこひんかも此後の歌は第十二にもいれり初のうたにつきて按するにさだとはころといふ心と見えたりさてころとは此ころの心なり此物語になかさだのすぢなどあるは中頃也年のさだ過たるとはよきころほひを過る心也央の字はかなひても見えぬ字也〔釋〕大かた此說のごとしさだは定の意にてよきほどの定りたる時をいふ人の噂するをいふもいひ定むる意なりこれにていづこもたがはず　**なげの御ことのは**　卅七丁ゥ〔拾〕後撰「ことのははなげなる物といひながら思はぬためは君もしるらん六帖「あはれをはなげのことばといひながら思はぬ人にかくるものかは　兼盛集「ことのはをなげなる物とおもひせば何かは人のつ

らくしもあらん（釋）なげは無氣の意にて俗にナササツナといふ意なりさてその無氣なるは物の眞の無氣なるをいふことゝ聞ゆかの「くれなばなげの花の陰かはとよめるも暮なば無氣になる花の陰かはといへるにてこれも同じ意より出たるなりたゞ末のつかひざまのいさゝかかはれるのみなり　**よにしらぬ**　卅九丁ウ（釋）此世中にはいまだ見も聞もしらぬといふ意也すべてめづらしき事うつくしき事いみじき事にいひならひて皆甚しき意なり　**よしばみ**　四十一丁ウ（釋）ばみは形容辭也。よしはよしありなど云よしにて上品に奥ゆかしきをいふ詞なり

○末摘花卷語釋

こりずまに　一丁オ（河）「こりずまに又もなき名は立ぬべし人にくからぬ世にしすまへは今古集（新）是はこりずにの意にてまは添たる詞と誰もいへり萬葉卷十五に中臣宅守か遠き任にまかりたるに茅上娘子がよめる「ぬば玉のよる見し君を明るあした安波受麻爾して今ぞくやしき此安波受麻爾の麻を添たる辭とする時はこりずまもこりずてふ詞と聞ゆされど猶思ふに不逢妻の略ならむと覺ゆる也しからば古今なるもこりずつまを略せし詞にや古へ夜逢を夜妻朝にみるを朝妻なとの語多ければ也（湖師）夕顔上の事のさま〴〵の物思ひに猶こりずして也（釋）新釋の説よろしきを不逢妻の略ならんとあるより下はみなひがごと也さる詞あるべしやは論ずるにも足ねばさしおきつ湖月師説はよろし隨ふべし　**けしきばみ**　同（玉補）俗に氣持があるといふ意の詞也（釋）ばみは形容の辭にて氣色をたてゝ見するさまをいへる也さて案にこゝのけしきばみといふ詞は體言にて次のいとましさといふ詞に對へたる句法と見えたりさらでは打とけぬかぎりのとあるのも穩かならずけしきばみにて句を切てよむべし打とけぬかぎりのけしきばみと心ふかき方の御いどましさと四句一對の文法也心をつけてよみあぢはふべしさて打とけぬかぎりのけしきばみとは源氏君のかよひ給ふ御かた〴〵いづれも心をゆるさず打とけずして氣持を見するをむねとし給ふを云心ふかきかたの御いとましさとはいづれも心ふかくおくゆかしげに見せんとて劣らじと上べをつくろひかざりて吾はと思ひあがり爭ふをいへる

也　**かたじけなしと思へど**　四丁ォ〔拾〕かたじけなしははづかしきなり物などを得てかたじけなしといふは俗に過分といふことゝ無德なる身をかへりみればこの物を賜はるとははづかしといふ心也(釋)かたじけなしに辱字などを當たるは此拾遺の説のごとき意なりされど物語文どもにつかひたる意はさらに然らずみな俗にアリガタイ　モツタイナイ　オソレオホイなどいふ意也こゝは命婦が打とけてすむ所に源氏君を置奉りたるはうしろめたく氣にかゝりて且は恐多く勿體なく思ふよしなり拾遺ひがことなり　**こまぶえ**　八丁ォ〔拾〕和名抄云篇云々此笛の事歟但かゝるもの吹給ふべき物ともおぼえねば常の笛を高麗より作りて來たるをいふか(釋)此説いかゞ也高麗笛はもとより狛樂に用ゐる笛にて今の樂家にもふくもの也いかに思ひ混へてかくはいはれつらんいぶかし　**さまあしからんなどさへ**　九丁ゥ〔湖〕わが心ながらも世の聞えもおもはぬほど思ひしむべきとなり(釋)こゝの意は湖月のことし但さまあしからんといふ詞はたゞ樣體のわろき事のみなるをこゝにては深く心の迷ふ方に轉し用ゐたりさるは心のまよひて我ながらも樣のあしきやうにおもはるゝほとにといふ意なる故にしか轉したるにぞあるべき　**よづかず心やましう**　十一丁ゥ〔湖〕世人に似ずつれなき心也(釋)此説たがへり惣てよづかずとは男女の間の世をしらす著なきをいふ詞なるをこゝは末摘花君へしば〳〵いひやり給へどいつまでも猶おぼつかなうのみありて返事なき故案外に男女の情を知ぬ人のこゝちして心やましうおぼすよし也さらに世人の世にてはあらずひがこと也　**いなびぬ**　十五丁ォ〔河〕いなともいはぬ心歟〔孟〕不二辭退一さすがに人の申事は聞給ふと也(釋)注の如き意なるはいふも更也さて此詞いなまぬなど有べきをいなびぬとあるは詞の八ちまたにいはゆる中二段の格にていなびいなぶいなぶるとはたらく類の詞也心得おくべし　**こゝろげさう**　十五丁ゥ(釋)此詞は心繫想の意にてうつくしき人などを見ていかで我に思ひをかけよかしとやうに思ひてよろづ引つくろひ心にくきさまして人の思ひかくるをした待つ意にいへり故心化粧の意にやとも思ひしかど化粧といふは古からぬ詞なればなほ繫想の意にて心中に人のけさうするをまつ意としられたり　**しゝま**

十六丁ウ　〔拾〕無言進退兩說の中に無言を用へし其故は小侍從か返歌に其證明か也日本紀に棲-遑進-退をしゝまひと點したる所なければ其義かはれり〔餘〕しゝまとは口をしゝめをるよりいひけるなるべし〔河〕日本紀曰唯咽二進退一一泣懷悒無レ所レ訴レ言一　垂仁天皇卷　又曰棲遑不レ知二其所一第七　此事秘-說有〔孟〕河海に日本紀を引て進退の字をひける尤可然也幾度もそなたの進退にまけて堪忍する也云々當時皆しゝまを無言のやうに用ゐ心得るはひがごとにや進退本の心也云々然はしゝまと聲を讀べきにや先公此聲を用ゐ給へり天文八年五月十二日於二議定所一講讀の時此由を申了云々〔新〕しゝまひとは先おのがじゝてふ詞は萬葉にも後撰にもおのが心々てふ意によめり此所のしゝまひもおのがじゝめきて有心をいへり且まひは辭のみ譬へは否とて否むるを否まふ否まひてなどいふが如しさて其心々めくはおのが心を構ふるにて己をたてゝ人にも默して物いはぬ方にも又急にはいはてやすらひをる意ともなりぬ然れは日本紀に棲遑をも進退をもしゞまひと訓みこゝに物いはであるをもいへり云々下略（釋）しゝまといふ詞の義いかなる事ともしられがたく右の說どもの中には餘滴にいへるや近からんされど猶考ふべし河海孟津の說は拾遺に辨へたるが如し新釋の說は何事をいはれたるにか聞とりがたし否まひ否まふなどいふ語も聞つかぬ造言めきたり又しゝまひといふ詞のみをとかんとせられたりげなるはいかにぞやこゝはしゝまにてしゝまひとは別なれば何の用ともなしさて淸濁は上のしを淸て下のしを濁るべきかされどそれも決くはさだめがたければ今はいづれも淸てよみつ拾玉集述懷百首の中に「うき身にはしゝまをたにもえこそせねおもひあまればひとりごたれてとあるはこゝを思はれたるなれば無言の義とは決せられたるなり

十七丁ォ　あやなき　〔餘〕眞淵云もと綺の文目のそこなひなどして分れずなりしをいふを始にて何にもその類にはいへりそれを轉してかひもなきにも益なきにもいへり朗云本居の說はあやなきはワケモナウ　ラチモナイ事也（釋）右の說いづれもよろし必しも綺の事にはかぎらねどあやは文の意なる事はたがはず文のなきは埒もなき意よりわけのなき事にいへる也　そゝや

二十四丁ォ　〔湖師〕おどろく心也すはやなど云心也

云々鷲破と書新古今の歌にそゝや木枯けふ吹ぬといふ類なるへし〔餘〕考るに鷲破の字そゝやとよめる白氏文集長恨歌の點に出たり眞淵翁はこれを忘れてかく書てそゝよとよめる事なしと新釋にしるされたり木枯の歌は高圓の野路のしのはら末さわきと有て新古今集秋上に有て藤原基俊の作なり蜻蛉日記にあなたに人の聲すればそゝなとのたまふにきゝも入ず東野州聞書そゝや是はなぞなにぞなど申詞同事也招月の被申候はそゝやと云詞はすはやと云やうの詞也夫木「こも枕高瀬のよどにたつ鳴のおともそゝやとあはれ也けり顯昭（釋）鷲破の字長恨歌點にはソヨヤとつけたりとにかくに此字たしかにそゝやに當りたるにもあらざるべし俗言にソリヤコソなといふにあてて心得べし　**さらぼひて**　二十六丁ォ〔河〕髐荘子やせつまりたる也〔餘〕髐の字荘子至樂篇に見えたり曰荘子之レ楚見ニ空髑髏髐然有レ形注髐然空處而堅固之貌とあり音嗲白骨貌ト釋文ニ見エタリ　**なほ〳〵しう**　卅三丁ゥ（釋）なほはたゞといふに同じ凡なる意也平人をたゞう人ともなほ人ともいふなほの義に同しさて二つ重ねいひて繁といふ形容辭にて活かせたるなりすぐなる事にはあらずまがふべからず　**くはや**　卅五丁ォ〔餘〕かゝり火の卷に人のあやしと思ひ侍らんことぞわび給へばくはやとていて給ふに後撰集戀四「ひきまゆのかくふたごもりせまほしくくはこきたれてなくを見せはや　**あらず**　同ゥ〔新〕問に答へてしかはあらずてふを略してあらずとのみいふ常の事也古今集に「春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞおもふてふあらじも是なり〔餘〕清少納言になに事ぞなりまさがいみじうおぢつるはとゝはせ給ふあらず車のいらざりつるといひ侍ると申ておりぬ宇治拾遺にあなあふなのめぐみやといひたりけるをめくら取もあへずあらじ鼻くらなゝりとぞいひたりける此外あまた見えたる詞也朗云此詞はやく空蟬にあり小君詞そこの本居說にイヤ何テモナイと云今の俗語に當るといへり　**たをやき**　三十七丁ゥ（釋）たをはたわと通ひて和らかなる形をいふたをやめたわやめなど猶多しやきは形容の辭にて若やぎなどのやぎにおなし　**ひいな**　三十九丁ゥ〔餘〕崇神紀歌比賣那素寐殆朢私記曰言不レ知ニ殺逆之謀一爲ニ見女之遊一今案比々奈遊也釋日本紀　かくあれは

ひゝなの假字を用ゆべし(釋)契沖雜記 雛ヒヽナひゝはひゝと聞ゆるこゑなは鳴かとありこれ鳥の雛をいふ言の本義なるべし又玉かつま十に云人の形をちひさく作りてわらはのもてあそぶ物を物語ふみともにひゐなといへりこれはちひさくつくれるを鳥のひなになずらへていへる名にて字も雛とかき今の世の人もひなといふをふるくひゐなとしもいへるは詩歌をしいか四時をしいじ女房をにようばうといふたぐひにてひもじを引ていふなれば假字はひいなと書べきをゐと書るはたがへり物の雛形といふもちひさく物したるよしの名なりと有今按に比々奈を切めて比奈といへるをさらに引てひいなといへるなるべく比々奈の下の比を音便に伊の如く訛れるにはあらざるべししか定むる故は比々奈といふ言比二つ重れるを比伊などはいひうつしがたく比奈とは直に切り安ければ也されば假字は玉かつまに隨ひつ **あへなん** 四十一丁ォ〔餘〕案にあへなんといふ詞うつぼ物語國ゆつり下にあしかるべくはおそろしき物の中にすてたりともあへなんたゞ神佛にまかせ奉る云々又同巻この御箏の琴はいとよくなりぬべしといへばあへなんとて御かへりもなし柏木巻に御とがあることはあへなんふたついはんには女の御ためこそいとほしけれ蜻蛉巻にすぎたる物きたるはばうそくにおほゆるたゞいまはあへなんとててづからきせ奉りたまふ

○紅葉賀巻語釋

けざやか 八丁ォ〔拾〕河清(ケサヤカ)萬葉 今按萬葉に清の字さやかとはおほくよめどけさやかとよめる事なし氣清(ケサヤカ)と書べき也〔新〕此説は氣鮮(ケサヤカ)の意なるをこゝには外様(トサマ)の人めきたるもてなしてふ意にとる或説に清を萬葉にけさやかとよみしやうにいへるは例のそら言也清字をさやかとは古書によみたれど上にけの語をそへたる事なし此けはけしきの事なれば付ていふべきにあらず(釋)氣鮮(ケサヤカ)は猶いかゞ氣清(ケサヤカ)の方此語の本の意也〔譯〕サッハリ ハッキリ リッハけざやぐと活(ラ)かしてもいへり同意なり **そゝぎ** 十丁ゥ〔岷〕聞書そゝめく也あつかふ心也をさなき人のあそぶ體なり〔雅集〕帚木西おもてのかうしそゝきあげて人々のそくべかめり鈴蟲わかき尼君たち二三人花奉るとてならす云々さまかはりたるいとなひにそゝきあへるいと哀

なるに狭衣立さまよひつくろひさわくきぬのおと木丁などの音に云々今やそゝきやむと物いはでつくつくとゐ給へは同若君おはしてそゝきありき給ふを(釋)雅集になほ引たれとすこし心の異なるもあれば今ははぶく何事にまれいそがはしくもてあつかふ意也こゝも紫の上の他事をはさしおきてひいなをとく取出していそがはしくつくろひあつかひ給ふ様也そそめくとは同語ながら少し意異也譯は其所のふりに随ひて物すべし　**うけはしげに**　十四丁ウ　(河)(孟)呪咀(ウケハシ)のろふと云心也(拾)今按ニ日本紀に呪の字かしり咀はとこふと讀てうけふとよめる事なし誓の字祈の字をうけふとよめり萬葉にも祈の字をうけふとよめり日本紀古事記の意は善悪につけて祈るをいふかならずのろふにはかぎるべからず(釋)此語本は紀記の意なれど轉りて此物語などの比は河海の字の意にてのろふ事也さるは神に祈りてのろふより意のかはりたるものなめり伊勢物語に「罪もなき人をうけへはわすれ草おのがうへにそおふといふなるうつほ國ゆつり下に「あなかまやかの君の云々うけひのろひはせんとてなと皆此意也うけひのろひと有にてさる意をしるべき也なほ此物語にも数多見えたりみな其意也　**ひとま**　十五丁オ　(拾)日本紀に間の字をひとまとよめりひまといふはこの略語歟こゝにては人のなきまと聞ゆれど貫之の「梅の花いつのひとまにうつろひぬらんといふも必人まとは聞えぬにや(餘)助云此歌もやはり人間(ヒトマ)として聞ゆ(釋)鈴木氏の説よろし人間の意也　譯　人ノ見ヌマ　**御こゝろの鬼に**　同ウ(花)心の鬼とは心におそろしく思ふ事也謙徳公集「我ためにうときけしきのつくからにかつは心のおにも見えけり(餘)枕冊子心の鬼いできていひにくゝ侍なん物をとあり紫式部集「なき人にかごとをかけてわづらふもおのが心のおにゝやはあらん谷川士清云列子注に疑‐心生二闇鬼一と見えたり正法念經に閻‐羅獄‐卒非二實有レ情以三衆生妄二業力一故見レ之とあり按ずるに列子を引たるは林希逸が注文なり　**くね〳〵しう**　二十二丁オ　(新)古今集序に女郎花の一時をくねるといへる詞他には見えず此くね〳〵しといふにあはせて知べし(餘)東屋の巻に母なる者も是をことと人に思ひわけたるごとくくねりいふ事侍りておちくぼいみしうくねりためるは沙石集三老ひがみてくねりはらた

ちて〔釋〕古今序のくねるは別に論あり餘滴に引るくねりとは同意なり意は恨むるにも責るにもまほにはいはずしてひがめゆがめて腹あしくいふやうなる意也俗にウネル　ゴネル　グズルなどいふに近しこゝも源氏君に對してかよひ給ふ女がたの人の物にかこちよせて事々しく恨むるをくね〳〵しうと形容にいへるなり　**をこ**　三十一丁ゥ〔新〕をこの者とは異國の一所の名にてそこの人はよろづわろかるによりてここにもすべて心にもすがたにもひがみ見くるしきをいふ事とはなりつらん〔餘〕古事記に袁許と書日本紀に于古とあれどもと此國の語にてはあらず唐ざえのつきて後かうやうの語を常にいひならひたる也紀記ともに後世になれる書故からぶりの詞もおのづから入たるなるべし谷川士清か說にをこはもと國の名也後漢南蠻傳に烏滸の人の事委く見えて笑はしき事多かりといへり〔釋〕右の說ともいたくひがこと也烏滸といふ蠻國のならはしの笑はしきとて其國の名を係て笑はしきを烏滸といはんはいと物遠きことなるに漢國にてだにさはいひならさぬ物をまして御國にていふべしやはそはとまれかくまれ應神天皇紀に見えたる歌の語をからざえのつきて後云々といへるはさらにあたらず漢才などいふは漢籍行はれて後こそいはめかの御世にわづかにわたり始たる漢籍の語をさながら其世にいひならはめやよしならひたりとも歌によまめや日本紀などの訓點などならばこそ後世になれる書故云々ともいはめ歌は其御世々々の人のよめるなれば此ぢやうにはあらじをやいかにまがへてかくはいひけんいと〳〵いぶかし應神紀に伊夜袁許爾斯豆と見えたるは正しき皇國言の證とすべしさてをかしといふ語は此をこを活して轉じたるなり　譯　バカ　アホウをかしはバカラシイ　アホウラシイ　**ほと〳〵**　同〔拾〕〔孟〕殆也今按上のとをすみ下のとを濁るべしほと〳〵とはあやふき心なり歌にしかよめりあぶなく何せんとしつるなど俗にいふ是にかなへり程々しとよめるは程をふる心にてことなり〔餘〕萬葉卷七の旋頭歌「みぬさとるみわのはふりがいはふ杉原たきゞきりほと〳〵しくもてをのとられぬ萬葉八「我宿の一むら萩を思ふ子にみせでほと〳〵ちらしつるかな〔新〕萬葉にほと〳〵しくも成ぬとよみたるは事の顯はれんに迫れる意なり然れは殆の字を訓は

よくかなへり殆は危近き意といへりさてほと〳〵は本なりほとんどゝ訓は音便のみ萬葉卷の十五に中臣宅守の遠き國に在を娘子がまつ心をよめる歌に「かへりける人來れりといひしかば保等々々之爾吉君がとおもひて是はと〳〵と胷のさわく也（釋）拾遺にいへる淸濁の說わろし皆淸てよむべきこと萬葉の假字にてもあきらか也意は殆の字の如く大かた其事に及ばんとして未ㇾ及危きほどの心にいへりこゝもふき出して笑はんとしてこらへて笑はぬやうの意なり（雅譯）過去の時モチットテ　ステノヿニ　現在未來の時トウヤラ　ワルウシタラ　殆の字をホトンドとよむ卽是也殆はアヤフキ意チカキ意なり　**すまふを**　卅二丁ウ（拾）遊仙窟推の字禁の字をともにすまふとよめり（釋）此注はいかゞ也打まかせて此字の意にはあらずすべて漢籍の訓はあたるとあたらぬとあなるをよく思ひ定めていづこへも當るをのみ引べき事也此詞は俗にイヤガリテセヌといふ意にてさはすまじと爭ひいとむ意也　**おもなのさまや**　卅三丁ォ（拾）日本紀に安措をおもなしとよめり面目なく耻かしき心也（河）無ㇾ面也（細）面つれなき事をおほす也（新）今按萬葉に暮に逢てあした面無み云々といふに同じ意を朝面無ともかきたる所あれば面はぢする事也さていせ物語に面無ていへるなるべしといへるは只にはぢていふにはあらで面なき事も忘れて猶面つよくいく度もいふ也今もその如く面無かるべきことをさも思はで內侍のいひおこせし故におもなのさまやとはのたまふなりかく他の事をこなたよりいふは傍痛きてふ詞の用ゐざまなどに多きこと也

○花宴卷語釋

おくしがちにはなじろめる　二丁ォ（細）臆したるさま也（雅集）鼻白むなるへし○俗のシラケルといへるも語意同じさか下りたる代の軍物語にもクロミワタルといへるは背をうつむけて敵にむかふ勝軍の勢ひをいひシラクルはあふむきて負軍の體なりといへり（釋）花鳥に鼻のうへがしろ〳〵と見ゆる也とあるはいとふるくよりいふ言なれどいかにかあらんいかさまにも臆したるさまとは聞えたり　**なほあらじに**　五丁ォ（湖師）猶かくのみにてはあらじと思ひ給ふ心にと也（釋）大かたかくの如したゞはあらじといふ

を體言にしたる也〈拾〉細「なほあらじとことなしぐさにいふことを聞しれらくはすくなかりけり萬葉七默然不有〇今按此引歌今の本にはもだあらじとことのなぐさにとあり事之名種爾と書たれば胸の句は誤なり古點にはなほあらじとよみけるにや蜻蛉日記などにも此詞ありしかれども彼集中此詞おほきにもだと假字にも書たれば今の點叶へり直の字たゞともなほともよめばなほあらじはたゞにはあらじ也或注に猶かくのみにてはあらじと思給ふ心とあるは違へるにはあらねどよく心得られたるにはあらず〈雅譯〉其忿デハオクマイトイフキデ　**すさめぬ**　七丁オ〈河〉不肯萬葉〈拾〉今按萬葉に此詞なし〈釋〉拾遺に萬葉に此詞なしといへるはいかにおのが見たる本には不肯に日本紀とかゝれたりよしやそはとまれかくまれ河海にはスサメヌには不愛の心也云々と釋れたる大かたにはかなふべし只俗にトンヂヤクセヌといふ意にてたがふことなかるべし又雅言集覽に例多く擧たれど少しばかり引出たり委しくは本書を見るべし〈雅集〉元眞「足柄の山にしけれる玉こすげ行かふ人もすさめざりけり後春下「谷さむみいまだすだゝぬ鶯のなく聲わかみ人のすさめぬ後拾「香をとめてとふ人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりけり〈雅譯〉賞翫セヌ「駒もすさめずかる人もなし又人に見すてられたることをすさめられたりといふは後に轉じたるなり　**ふさはしからず**　十四丁オ〈拾〉河不祥日本紀〇今按日本紀に不祥をさがなしとはよめりふさはしからずとよめる事なしふさはしからずとは俗に相應するをいへり神代よりある詞なり古事記八千戈神御歌云奴麻多麻能云々許禮婆布佐波受云々許母布佐波受云々この中のふたつの布佐波受も俗にいふと同じ心に聞ゆ又萬葉十八に大伴池主おなじき家持より針袋のをかしきをえて「鳥が鳴あづまをさしてふさはしにゆかんと思へどよしもさねなしこれもふさはしきにゆかばやとおもへど行べきよしなしと讀る歟〈雅集〉夕霧ふさはしからぬ御心のすぢとは年ごろみしりたれどさるべきにやむかしより心にはなれがたう思ひ聞えてヤドリ木源中納言のいたうすゝめ給へるに宮すこしほゝゑみ給へりわづらはしきわたりをとふさはしからずおもひていひしをおはし出るなめりカケロフたいの御方のかの御ありさまをふさ

はしからぬ物に思ひ聞えて〔雅譯〕似合ヌ　相應セヌ
おほどけ　同ウ〔雅集〕おほどか○俗に大ヤウト云ルニ同シ○おほどけも同じ帚木おほどかにことえりをし椎か本何ごともあるにしたがひて心をたつるかたもなくおほどけたる人こそ云々竹川いとわかやかにおほどいたることゝちす夕顔人のけはいいとあさましくやはらかにおほどきてものふかくおもきかたはおくれて〔釋〕おほどけおほどか同しきよし雅言集覽にいへり按におほどきおほどか又同じかるべし各所によりて少しづゝのけぢめはありと見えたり〔雅譯〕大やうにくだくくしからぬ心なり　大サヤカ　アトナウ　トリシマラヌ

校正譯注源氏物語餘釋一之卷

萩原廣道纂注

此巻は本文の頭書(カシラガキ)に入るべきことなるを其説どもの長くして書加へがたき事ども或は公事の故實そのかみの衣服調度などやうの注せではえあらぬ事どももあるは本文義(ココロ)の通(キコ)えがたき所々の考(カウガヘ)また舊注どもにいはれたる説(コト)のいかにぞやおぼゆる條(クダリ)どもを論(アゲツラ)ひ辨(ワキマ)ふべき事などを取集めて物したるなり引出たる文詞の下におのおの某丁(ソレノヒラ)と標(シル)したれば本文と引合せて見るべし引たる舊注の標(シルシ)は頭書に同じければ更に記さず

校正譯注源氏物語餘釋一之卷目錄

桐壺巻

御さうぞく一くだり
御くし上の調度
長恨歌の御繪亭子院のかゝせ給ひて
まくらごと
歌あらき風云々
なつかしうらうたげなりしをおぼし出るに
いとおしたちかど〳〵しき所物し給ふ御方にて
右近のつかさのとのゐまうしの聲
よるのおとゞ
あさがれひ
大床子のおもの
ふみはじめ
高麗人のまゐれる
うたのみかどの御いましめ
鴻臚館
國のおやとなりて
無品親王の外戚のよせなき
すくえう
先帝
三代のみやづかへ

名たかうおはする宮
ひかる君
かゞやく日の宮
御元服
穀倉院
いしたてゝ
申の時にぞ
大藏卿くら人
御休み所に
さふらひにまかで給ひて
親王たちの御座のすゑに
內侍宣旨うけ給はり傳へて
上の命婦
大うちき
御衣一くだり
長橋よりおりて舞踏し給ふ
左のつかさの御馬
藏人所の鷹
をりびつ物こもの
とんじき

藏人の少將
さとの殿は

帚木卷

名のみことごとしう
いとゞかゝるすき事どもを
なよびかにをかしき事はなくて
御物忌
かしこまりもおかず
大となぶら
はづかしげなれば
品さだまりたる中にも
ころほひなり
なま／＼のかんだちめ
非參議の四位
こと人のいはんやうに
さらにもいはず
うちあひてすぐれたらんも云々
上が上はうちおき侍りぬ
白き御衣
なほしばかり

女にて見奉らまほし
あふさきるさ
墨つきほのかに心もとなくおもはせ
さやかにも見てしがなと
みゝはさみがちに
びさうなき家とうじ
打もゑまれ涙もさしぐみ
おほやけばらたゝしく
あはれとも打ひとりごたるゝに
物語よみしをきゝて
ごだち
額髪をかきさぐりて
うちひそみぬかし
にごりにしめる
やがてあひそひて云々あしくもよくも
實（ジチ）になんよりける
つらずゑをつきて
人なみ／＼にもなり
歌手を折て云々
臨時の祭

はかなき花紅葉といふも
かたき世ぞとは云々
この人のいふやう云々心ぐるしきとて
おり侍りぬかし
和琴
をりつきなからず
歌ことのねも云々
今一聲きゝはやすべき人のある時に
さてそのふみの詞はと問給へば
むかし物語めきて
歌咲まじる云々
さればかのさがなものも云々
吉祥天女を思ひかけんとすれば
ほうげづき
妻子
はかなくくちをしと云々子細なきものは侍める
はなのわたりをこめきて
ごくねちの草藥
歌さゝがにのふるまひしるき
つまはじきをして

むげにしらずいたらずしもあらんすこしもかどあら
ん人の耳にも目にもとまる事云々
うたよむと思へる人の
五月のせち
えならぬねを引かけ
九日のえん
中神
紀伊守にてしたしくつかうまつる人
こゆるぎのいそぎありく
きぬのおとなひはら〳〵として
さうじのかみより
もや
歌ずじがちにもあるかな
いづれかいづれ
まうと
いたづらぶし
なげし
心のしるべ
おくなるおましに
かやうなるきはゝきはとこそ侍るなれ

見なほし給ふのちせもやとも云々
かりなるうきねのほどを
月は有明にて云々
ぬるよなければ
あこ
歌數ならぬふせやにおふる
御かたはらにふせ給へり

空蟬卷

さりげなきすがたにて
こきあやのひとへがさね
なにゝかわらんうへにきて
白きうす物のひとへがさね二藍の小うちき
かどなきにはあるまじ
おくの人は
たゝみひろげてふす
ゆかのしもに
いせをのあまの
歌うつせみのはにおく露の

夕顏卷

六條わたりの御しのびありき
ひがき
はじとみ
玉のうてなも
きりかけだつ物
隨身
歌こゝろあてに云々
揚名介
歌よりてこそ云々
かごとばかり
げにをこがましう云々
むすめをばさるべき人にあづけて
御よはひのほどもにげなく
さぶらひわらは
ながや
右近の君こそ
いそぎくるものは
かづらきの神
しひておはしまさせそめてけり
あかつきのみち
おしたの露にことならぬ世を

何をむさぼる身の祈にかと
あれたるかどの
おきなが川
べちなふ
御くだものなどまゐらす
などりなくなりにたる御有さまにて
をかしげなる女ゐて
ことなる事なき人を
つる打してたえずこわづくれ
むかし物がたりにこそ
いのちをかけて
神事なるころは
かしこくもとめ奉らせ給ひて
さらに事なくしなせと云々
川の水にて手をあらひて
ぶくいとくろうして
けがらひいみ給ひしも
御名がくしも
すみわび給ひて山里に
さればよと

かのありし院にこの鳥のなきしを
歌見し人の云々
歌とはぬをも云々
あやしやいかに思ふらんと
歌ほのかにも云々
うちとけで
四十九日
願文
歌なく〳〵も云々
伊與介かんな月のついたち頃にくだる
ぬさ
歌あふまでの云々
歌せみの羽も云々
歌過にしも云々秋の暮かな
見ん人さへ

○桐壺巻餘釋

女御　一丁オ（岷）周禮云三夫人九嬪廿七世婦八十一女御比三公九卿廿七大夫八十一元士（河）周禮天官云女御掌叙御于王之燕寢云々（新）女御は今の夫人に當れり女御てふ語は續日本後紀巻八に女御從四位下藤原朝臣淨子卒と初めて見えたれど是より前奈良の朝の末などより此稱有しにや此物語に顯れては三人見ゆ云々雄略紀に女御の字はあれど是は漢文によれるのみにて其比女御てふ事あるにあらず權輿のやうに思ふは誤也（弄）女御は無位以上二位三位にいたるまである也云々（釋）女御の事岷江入楚に諸抄を引て委しくいはれたれど今は略きつ彼書を見るべし本居先生の玉がつま十三の巻に云女御といふ班をたしかに定められたるは何れの御世の比よりの事にか有けん雄略天皇の御世の稚媛を始といふはひがこと也書紀の彼御巻に女御とあるはたゞ撰者の例の漢文にてこそあれそのかみ實に此號ありしには非ずすべて彼紀はかゝる文字につきて後の人の思ひまどふ事多きぞかしそも〳〵女御といふはもと漢國にて王の御す女をひろくいへる目にて一つ定まれる號にはあらず皇朝にても本は然なりしを後に定れるしなにはなれる也かの雄略紀なるもたゞ御す女とし給へるよしなり

更衣　同（湖師）此局にて天子の御衣をめしかふる故更衣と云なり漢書灌夫傳の顔師古注に更改也凡久坐皆起更衣といへり衞皇后傳にも帝起更衣子夫侍尚衣とあり本朝の更衣は仁明天皇承和三年正五位上紀朝臣乙魚授從四位下爲更衣是始なり河に委し細流云便宜の御殿にさふらふしかるべき上達部などのむすめ也（新）更衣は今の嬪にあたれり更衣といふ事は仁明天皇の御時の紀に見ゆ云々更衣の字は漢書に云々また東方朔傳に私置更衣注に爲休息更衣之處亦置宮人てふより出たれば更衣を御休息所ともいへりされどさらぬ女房も御子をうめばみやす所といひはた東宮の御妃をも御休所と申す事となれり此文の様たゞにては更衣といふも御子をうめる後ぞ御やす所と書たる東宮の御休息所はもとよりなり（釋）新釋一本には更衣を御休所ともいへりといふ次に凡后を大御息所とも申し東宮の御妃を御休所といひ又皇子をうみ奉りしをみやす所といふ

例也よりて此文には更衣の御子うみし後に御息所と書たり是皇子をうみまつれるをいふと有にて少し後のこと也と有后を大御息所と申し云々といはれたるはいかゞあらん是はいせ物語又此物語の六條御息所などの事を思ひていはれたりとおぼしけれど强說に似たり御息所の事は小櫛の說よろしさて玉がつまに云續後紀に承和九年正月丙申朔戊戌云々是日詔授二從五位下秋篠朝臣康子正五位下无位山田宿禰近子從五位上一並太上天皇更衣也と見ゆこの更衣といふものはいづれの御代のころより有そめけむ物に見えたる事はこれ始也そも〳〵後宮職員令には妃二員、右四品以上、夫人三員、右三位以上、嬪四員、右五位以上宮人、とあるを中昔よりこなたはこれらの號は絕て大かた妃夫人にあたるほどなるをば女御とし嬪にあたるほどなるをば更衣とせらる三代實錄六の卷に光孝天皇更衣といふことも見えまた仁和三年には勅以二更衣從五位上藤原朝臣元善一爲二女御一中納言從三位山陰之女也とも見えたりといはれたり淸涼殿記に更衣其員十二人以下不レ滿二其數一侍二宣旨下諸司一着二禁色一などいふ事も見えたり　**あまたさぶらひ給**

同〔河〕延喜御代后宮、女御五人、更衣十九人、中宮以下都合廿七人也、桐壺帝后宮實名露顯之分　女御三人承香殿四宮母　麗景殿花散里姉　一人八宮母　更衣二人　桐壺　後凉殿　后二人　大后弘徽殿　女院藤壺　此物語に書のする所七人なり（釋）延喜の御代の事は例の准據なりあながちにとるべからず　**もろこしにもかゝる事の起に**　同ウ〔細〕殷の紂が妲己を愛し周の幽王褒姒を寵せしより世のみだれたる事等を引ていふ也

楊貴妃のためし　同〔湖師〕玄宗の寵愛ゆゑに安祿山が亂出來たるためしなるべし〔花〕桐壺の御門の更衣におくれ給へる事を唐の玄宗の楊貴妃にはなれ給てなげき給へるにたとへて長恨歌の詞をかりて一卷の始終を書侍れば其事をいはんとて楊貴妃のためしも引出つべくと先言出せり作者の意趣すぐれて聞え侍り〔岷〕云々前のもろこしにもかゝる事のといへるとは別段と見るべし花鳥にはひとつの心に注せらるる歟云々（釋）かゝる事の起とある中に楊貴妃の例もこもるなるべしさて此卷は長恨歌によりてかゝれたる事は論なきをかの歌の全文を知らざれば此文のいみじき事どもの知られがたき故にわづらはしけれど

白氏文集のまゝをこゝに擧つ引合せて見るべし

漢皇重色思傾國。御宇多年求不得。楊家
有女初長成。養在深閨人未識。天生麗質
難自棄。一朝選在君王側。回頭一笑百媚生
六宮粉黛無顏色。春寒賜浴華清池。溫泉水
滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力。始是新承
恩澤時。雲鬢花顏金步搖。芙蓉帳暖度春宵
々々苦短日高起。從此君王不早朝。承歡
侍宴無閒暇。春從春遊夜專夜。後宮佳麗
三千人。三千寵愛在一身。金屋粧成嬌侍夜
玉樓宴罷醉和春。姊妹弟兄皆列土。可憐光
彩生門戶。遂令天下父母心。不重生男重
生女。驪宮高處入青雲。仙樂風飄處々聞
緩歌謾舞凝絲竹。盡日君王看不足。漁陽鼙
鼓動地來。驚破霓裳羽衣曲。九重城闕煙塵生。
千乘萬騎西南行。翠華搖々行復止。西出
都門百餘里。六軍不發無奈何。宛轉蛾眉
馬前死。花鈿委地無人收。翠翹金雀玉搔頭
君王掩面救不得。回首血淚相和流。黃埃散漫
風蕭索雲棧縈紆登劍閣。峨嵋山下少人

行。旌旗無光日色薄。蜀江水碧蜀山青。聖主
朝々暮々情。行宮見月傷心色。夜雨聞鈴斷
腸聲。天旋地轉迴龍馭。到此躊躇不能去
馬嵬坡下泥土中。不見玉顏空死處。君臣
相顧盡沾衣。東望都門信馬歸。々來池苑
皆依舊。太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉。
對此如何不淚垂。春風桃李花開夜。秋雨梧
桐葉落時。西宮南苑多秋草。宮葉滿堦紅不
掃。梨園弟子白髮新。椒房阿監青娥老。夕殿
螢飛思悄然。孤燈挑盡未成眠。遲々鐘鼓
初長夜。耿々星河欲曙天。鴛鴦瓦冷霜華重
翡翠衾寒誰與共。悠々生死別經年。魂魄不
曾來入夢。臨邛道士鴻都客。能以精誠致魂
魄。爲感君王展轉思。遂敎方士殷懃覓。排
空馭氣奔如電。昇天入地求之遍。上窮碧落
下黃泉。兩處茫々皆不見。忽聞海上有仙山。
山在虛無縹緲間。樓閣玲瓏五雲起。其中綽
約多仙子。中有一人字太眞。雪膚花貌參差
是。金闕西廂叩玉扃。轉敎小玉報雙成。聞
道漢家天子使。九華帳裡夢魂驚。攬衣推枕

起徘徊。珠箔銀屏邐迤開。雲髻半偏新睡覺
花冠不整下堂來。風吹仙袂飄颻舉。猶似霓
裳羽衣舞。玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春帶雨。
含情凝睇謝君王。一別音容兩渺茫。昭陽殿
裡恩愛絕。蓬萊宮中日月長。回頭下望人寰
處。不見長安見塵霧。唯將舊物表深情。
鈿合金釵寄將去。釵留一股合一扇。釵擘黃
金合分鈿。但令心似金鈿堅。天上人間會相
見。臨別殷勤重寄詞。詞中有誓兩心知。七
月七日長生殿。夜半無人私語時。在天願作
比翼鳥。在地願為連理枝。天長地久有時盡。
此恨綿々無絕期。

この次に陳鴻が撰べる長恨歌傳といふ物一篇あり玄宗と楊貴妃との始終を記したれど長ければこゝには略きてたゞ其要とある所のみをいさゝかぬき出て注しつけぬ委くは本書を見べし

開元中泰階平。四海無事。玄宗在位歲久。倦于旰食宵衣。政無小大。始委于右丞相。深居遊宴以聲色自娛云々。詔高力士潛搜外宮。得弘農楊玄琰女于壽邸。既笄矣云々。上甚悅云々。明年冊為貴妃。半后服用。繇是冶其容。敏其詞。婉孌萬態以中上意。上益嬖焉云々。雖有三夫人。九嬪。二十七世婦。八十一御妻。曁後宮才人。樂府妓女。使天子無顧盼意。自是六宮無復進幸者。非徒殊豔尤態致是。蓋才智明慧。善巧便佞。先意希旨有不可形容者。叔父昆弟皆列在清貴。爵為通侯。姉妹封國夫人。富埒王室云々。出入禁門不問。京師長吏為側目云々。天寶末兄國忠盜丞相位。愚弄國柄。及安祿山引兵向闕。以討楊氏為辭。潼關不守。翠華南幸。出咸陽道。次馬嵬亭。六軍徘徊持戟不進。從官郎吏伏上馬前。請誅錯以謝天下。國忠奉氂纓盤水死於道周。左右之意未快。上問之。當時敢言者。請以貴妃塞天下怒。上知不免。而不忍見其死。反袂掩面使牽之而去。蒼黃展轉。竟就絕於尺組之下。既而玄宗狩成都。肅宗受禪靈武。明年大兇歸元大駕還都。尊玄宗為太上皇。就養南宮。遷于西內云々。適有道士自蜀來。知上意心念楊妃

如是。自言有李少君之術。玄宗大喜命致其神。方士乃竭其術。以索之不至。又能遊神馭氣。出天界沒地府。以求之不見云々。使者還奏。太上皇々心震悼。日々不豫。其年夏四月南宮晏駕云々。下略

北の方 同〔河〕男は南女は北に住べき謂也陰陽につかさどるゆゑ也仍て貴賤ともに妻室を北の方と號する也后妃を椒房と號するも北向に住給ふ故也云々

玉のをのこみこ 一丁ォ〔玉〕萬葉五の卷に生れ出たる白玉のわが子古日は云々うつぼ物語たゞこその卷に玉ひかりかゞやきたる男のいとをかしげなるをうみ給へり白居易詩に掌珠一顆兒三歳〔餘〕うつぼ物語としかげの卷に玉ひかりかゞやくうなゐこ同卷になやむこともなくて玉の光かゞやくをのこをうみつ云々此子やしなひもてゆけば玉光りかゞやきて見ゆれば杜詩に掌中探見一珠新などいへるも生れたる子をさして玉に比していへり云々

よせおもく 同ゥ〔玉〕續日本紀八の卷に寄重務繁文粹貞信公辭攝政表に擔重寄於微身負大任於小材これらは寄せ任ぜらるゝ事の重きをいへるをそれより轉りてこゝなどは注に外戚がたのおもくしき也といへる其意也〔餘〕三代實錄卷一安倍朝臣安仁抗跪請解大將曰云々此職任當股肱寄重爪牙又同書に竊以將軍之職寄重責深などあり

まうけの君 同〔釋〕儲君とかきて即皇太子の御事也皇太子は皇位を嗣せ給ふべきために豫て儲置るゝなれば儲君と申奉る也まうけは儲の音便也

坊にも 三丁ォ〔釋〕東宮坊の事にてすなはち皇太子の居給ふ所なり坊は宮殿をさして申す也東宮のもじはもろこしの易の理にとりて震の卦を長男とし又東方とす時にとりては春とする故に天皇の長男のおはします宮といふ意にて東宮とまうし或は字を春宮とかきても東宮とよめる也

きずをもとめ 同ゥ〔河〕所惡則洗垢求其瘢痕家語 吹毛求疵漢書なほき木にまがれる枝もある物をけをふききずをいふがわりなさ〔餘〕吹毛求疵とは前漢景十三王傳また韓非子にもみゆ歌は後撰雜二にて高津内親王の歌なり

御つぼねは桐壺なり云々 同〔新〕弄花に桐壺は清涼殿の丑寅なり花鳥に弘徽殿麗景殿宣耀殿などを過てゆく馬道つゞきなればあまたの御かたぐをすぎさせ給といへり今圖にて

(釈)右の圖にてその大かたを心得べし今は新釈の圖に拾芥抄を見合せて記しつ猶大内裏圖考證などを見て委きを知るべし○伴雄云世の人大内裏は順徳院の御代まで延暦創造の時の様也と心得ためれど然らず度々炎上ありければ次々にやう〳〵事そぎ給へる也中右記寛治八年十月廿四日内裏焼亡の事を記されたる條の裏書に國史以後皇居焼亡廿四度内裏十四度里亭九度太政官廳一度とありて次に御代々々の焼亡の

年月を記されたる中に一條院四度長保元年六月十四日亥時内裏燒亡同三年十一月十八日口時内裏燒亡寛弘二年十一月十五日内裏燒亡同六年十月四日半夜一條院燒亡云々とあり此事を本朝世記に六月十四日内裏火太皇避之八省小安殿遷御太政官朝所東皇太子避火縫殿寮此夜遷坐朝所東舍とありて七月十一日造宮の國を充られ廿二日造宮雜事定ありし由見ゆ同八月十四日造内裏始られたりと日本紀略に記されたり但し今度は殿舍の寸法を減ぜられたる由承久二年十一月九日の玉蘂別記に見え又同三年燒亡にて殿舍高大を止られたる事百練抄に見えたりかゝれば大内裏の趣もこれまでのさまに違へる事多かりかくて此内裏翌年九月造營了られ十月二日新造内裏仁壽殿にて安鎭國家法を修せられて同十一日夜一條院より遷御中宮も御入内あり同廿一日造宮賞とて叙位五十人ありしよし權記日本紀略にのせらる皇太子は十二月十三日東三條院より入内なりかくてまた同三年十一月十八日内裏燒亡ありて同五年九月新造内裏なりて十月八日一條院より遷御なり此時の造營もいたく省略給へりと見えて三年十一月廿五日の百練抄に造宮定止殿舍高大云々同四年三月十九日の條に定造營雜事戒梁柱高大（權記も同じ）などあり度々の火災にてかく事略給へるなるべし云々〇此說いと委しければ因にこゝに引出つ物語よまん人よく心得おくべしさらでは違ふ事多かるべし

〇うちはし　同〔新〕

或說にうちはしは切馬道に板を打わたして通ふ道也といへるはよし用あらん時とりはなつべき料なるべし日本紀萬葉などに打橋とあるはかりに板一ひら打わたせしにて夕顏卷に見ゆるも同じ宮中なるは多く板をわたしながら釘してかためねば打はしといへり或說に内橋と云はいかにぞやわたどのは渡殿にて廊をいふ和名抄廊保曾止乃殿下外屋也〔玉〕移橋をつゞめたる名也よのつねの橋はいつも同じ所にかゝりてところをかふる事はなきをこれは時にのぞみていづこへも〳〵用ある所へもて行て渡すかりそめの橋にてこゝかしこへうつす橋といふ意也こゝは渡殿などの間に横に下を通はん爲に切れたる所のあるに時にのぞみてわたせる也内橋打橋など注せるはかなはず萬葉などに打橋とかけるは例の借字なるをや〔釋〕移橋といふ名の釋はいかゞあらんなほ考へて定むべし

わたどの　同〔餘〕禁秘抄云渡殿ニ行各二疊敷ニ黄端ノ公卿在ニ殿上ニ之日不レ論ニ花族諸家ニ着レ之不レ然之時可レ然之人不レ着レ之北方副ニ高欄ニ立ニ布障子ニ間ニ（立柱打付）畫ニ打毬ニ向ニ下戸ニ横女官戸ヨリノ道ヲ通テ立ニ馬形障子ニ（號ニ波爾馬ニ也」）注に云下戸禁腋秘抄末ニ脇戸アリ下ノ戸ト云女官戸同抄小壁ノ外ニ南ヘ向タル脇戸ヲ女官戸ト云女官是ヨリ小庭通ル道也　波爾馬古今著聞集渡殿にはね馬よせ馬の障子を立て又同じ渡殿の北邊朝餉の前に馬形の障子ありし」其西南ニ間有ニ遣戸ニ其下一間籠テ下女居住ス如ニ手水物ニ置ニ燒火ニ置レ水自ニ中古ニ事歟高遣戸侍臣已下參ル所也」注に云有ニ遣戸ニ　按是高遣戸也禁腋秘抄殿上人ナト春花門ヨリ入テ南ヲ經テ修明門ヲ入テ殿上ノ高遣戸ヨリ上ケリ〔釋〕餘滴の本書いたくみだれたりしかば今は階梯本を寫しつさてこれはやゝ後世のさまめきて聞えたりそのかみはいかにありけん猶よく考ふべしさて新釋に和名抄の廊（ホソドノ）を引れたるはいかゞ渡殿といふものは今世に釣屋（ツリヤ）といふ物に似て彼此の殿舍の中に建渡したる所と聞ゆ空蟬卷に中將といへる女房の渡殿に局（ツボネ）したる事あるをも考ふべしされば廊とは別也思ひまがふる事なかれ

あやしきわざをしつゝ　同〔花〕〔新〕世繼物語に村上天皇の御時宣耀殿の女御（芳子小一條左大臣師尹公女）藤壺にさふらはせ給ふを中宮（安子九條右大臣師輔公女）のよからずおぼせしまゝに中宮の御方人かの女御の參り上り給ふ道に不淨をまきちらしたる事ありそれによりてこゝは書しなるべし〔餘〕安藤爲章云世繼物語に花山院の女御のまゝ母のさがなくてみかどの女御へわたらせ給ふうちはしなどに人のいかなるわざをしたりけるにか我ものぼらせ給はず上もわたらせ給はずとあり源氏物語に書たる事は世間にありしさまをふまへて作りたり小右記等の舊記をよみし人はしりぬべし○あやしきわざをしつゝ云々此所の文きたなきものゝ所をよくかくしてかけり糞なとをまきちらしたる事のありしと云をふくめりきぬのすそたへがたうと書るにてしらる古へも糞などまきちらしたる事のありしとなり〔玉〕不淨をまきちらすは人を詛（ノロ）ふしわざ也釋日本紀に見えて神代須佐之男命の故事よりおこれり但しこゝは詛ふまでにはあらでたゞ衣のすそを穢さんためのみにもあるべし〔釋〕世繼物語の准據はさもあるべしされど例のかゝはるべからずこれらみな作

橘守部云古注の北の馬道にて細流に切馬道に板を打わたしてかよふ道也といへるよくあたれる注也云々抑かかる道ある事は事とある時宮中奥の間所迄馬引入て乘出ん爲の通ひ路なるを常には横に隣板を敷渡しおきて廊と同くかよひ道にはなしおくにぞ有ける云々といへり（釋）案ニ此說ハ舊注ノマヽナレド馬道ノ名義ハナホ字ノマヽニ心得ベキニヤアラン猶考フベシ

りぬしの耳にも目にもあまりておしこめがたき中の事どもなるべし　**えさらぬめだうの**　四丁ウ（釋）伴雄云馬道めんだう共に同義にて和名抄に辨色立成云向レ堂之道也とあるがごとく殿中の眞中の板敷をいふ也簀子よりつゞきて孫庇、庇、寢殿、身舍を貫通して直行すべくわざと構へたる板敷の道なりさて前後の口に妻戶あれど晝も夜もあけ渡しおきて直宿の人などの往來の便とせり但し殿舍ごとに必馬道あるにはあらず仁壽殿承香殿常寧溫明後涼弘徽の六殿に限りて其他は淸涼殿の北庇と宣耀殿の南に切馬道とてあるのみ也かれ思ふにむねとは天皇通御のための設なるべし武家ざまに大廊下といへる所と同じ趣なりめだうは間通の約れる意の語なるべし古今集物名にめどに削花させるとあるも馬道の入口の鴨居にさせるをいへる也めんだうはめだうの延言也榮花晩明星に承香殿のめんだうより云々平家物語長門本に主上をば時忠卿いだき奉り雪の御所のめんだうにたち給ふ云々また後の書ながら年中御成記に長橋殿にて御冠をめされ御式裝に改られてめんだうつゞきに御前へまゐり給ふ也など有然るを陽成院の皇子におはしける時馬を牽上せ給へるより號くといへる古說はいといまだしき解也こゝは承香殿の北廊にてすなはち弘徽殿南馬道をいへる也此廊は常寧殿と承香殿の間にありていと長き廊也東の方にては承香殿馬道とも承香殿のはざまともいひ西の方にては弘徽殿のはざま又弘徽殿の細殿ともいへり淑景舍より上にのぼるには桐壺西の渡殿より宣耀殿の南の中門に麗景殿の簀子傳ひに片庇廊へ出て此廊の中門を南に承香殿の北廊（すなはちこゝまでんの南馬道是也）を折れて中殿の北廊づたひに淸凉殿の北庇より參のぼるなるべしかれ女御のさがなわざしたるは居所近き方にて也他の馬道と見る時はあたらず　**御はかまぎ**　同ウ（河）皇子三歲着袴の例冷泉院東宮ノ時圓融院親王ノ時花山院東宮ノ時一條院親王ノ時　**くらづかさ**　同（新）（餘）職員令、內藏寮、頭一人、掌ニ金銀珠玉寶器錦綾綵氈褥諸蕃貢献奇瑋」義解謂ニ非常之物一其金銀已下雜物皆自ニ大藏省一割ニ別而所レ送者也」之物年料供ニ進御服及別勅用ノ物事一といふ類の御物なり式にも委し　**をさめどの**　同（湖）後凉殿にあり諸國よりの進物などをさむる所と也（新）納殿也累代の御物は宣陽殿に納むなど西宮抄に見ゆ

右二所の御物は御料に專ら用ゐさせらるゝを此度の御ゐたちに出させられしといふなるべし〔餘〕拾芥抄云納一殿累代御一物納レ之在二宜陽殿一恆例御物納二藏人所一綾綺殿紙御屛風在二仁壽殿一頭藏人雜色爲レ預以二藏人雜色出納小舍人一爲二預人一　進月奏これらの御物どもをことごとく用らるゝを云々をつくしてとはいへり　みやす所　五丁オ〔玉〕此物語の例をもて考るに細流にも注せられたる如く御子をうみ奉り給へば御息所と申せりさてそは女御更衣などの外に別に此品あるにはあらず女御更衣などにわたれり若紫卷源氏君詞に此御母更衣の事を故御息所との給ひ上若菜卷に明石女御をも御子を生奉り給へる後のところに御息所と申せり六條御息所といふも姫宮（秋好中宮）の御母なるにつきての稱也竹川卷に鬚黑大臣の姫君冷泉院に參り給ひて懷胎のほどにも御息所とあり然れば御子いまだ生れ給はねどもすでに姙み給へば申せるにこそ　**てぐるまのせんじ**　六丁オ〔餘〕和名抄云輦周禮注云后居二宮中一縱容所レ乘謂二之輦一和名天久流萬爲二輦輪一人一挽所レ行也〔新〕西宮抄臨時に輦車親王大臣之中老一宿人有二此恩一女一親一王女一御尙一侍每二出入一藏人經二奏聞一仰闈門吉上（雖載雜式每度仰）云々或抄云手ぐるまは輿のやうにてちひさき輪をかけて轅は輿のやうに短きなり石階などを上り下るにいとゞろかず中の重を出入給ふためなり又延喜雜式云凡乘二輦車一出二入內一裡一者妃限二曹子一夫一人及內一親一王限二溫一明殿後涼殿後一命婦三位限二兵衞陣一但嬪女御及孫王大臣嫡妻乘レ輦限二兵一衞陣一云々是によりてかの上局に據ありといふ說はおほつかなし上御局はまゐりの時の局也病にふし給ふは桐壺なるべければこの臨時の勅ありてそこより乘べき也〔玉〕續日本後紀に承一和六一年六一月庚一戌朔己一卯女一御從四位下藤原朝一臣澤子卒故紀一伊一守一總一繼之女也天皇納レ之誕二三一皇子一皇女一也寵一愛之隆冠二後宮一俄病而困一篤載二之小車一出レ自二禁一中一纔到二里一亭一便一絕矣天皇聞レ之哀一悼遣二中一使一贈二從三位一也　とあり桐壺更衣の事これによりて書るなるべし似たる事多し　歌　**いかまほしきは**　同ウ〔拾〕いかまほしきとは生に行といふを兼たるにてこそ歌なるを諸抄に此意を注せられず今類歌どもおぼえたる限り出して證すべし　拾遺別「かめ山にいく藥のみありければとゞめんよしもなきわかれか

な戒秀法師・同戀四「何せんに命をかけてちかひけんいかばやと思ふ時もありけり實方朝臣・後拾遺「しぬばかりなげきにこそはなげきしかいきてとふべきわが身ならねば小式部内侍・新古今別「都にもおもふ人のみおほかればなほこのたびはいかんとぞ思ふ藤原惟親同「わかれ路はこれやかぎりの旅ならんさらにいくべきこゝちこそせね道明法師・大和物語「しねとてやとりもあへずはやらはるゝいといきがたきこゝちこそすれ後拾遺哀傷「わかれにしその日ばかりはめぐりきていきもかへらぬ人ぞこひしき伊勢大輔

例のさほう 七丁ウ〔新〕喪葬令に見ゆるごとく此時もたがはさりけんされどいかめしうと書たれば二位に准ぜしほどの禮にし給ふをいふなるべし

おたぎといふ所に 同〔河〕鳥部野をいふ也〔細〕今の六道これなり昔の葬所なり〔拾〕今按和名抄に愛宕郡に鳥戸の外に別に愛宕鄕あり〔新〕云々されば此葬は鳥部にもあらじ或說は後をもてのみいへり

ほひになり給はんを 同〔餘〕河「もえ出てはひになりなん時にこそ人をおもひのやまんごにせめ此歌拾遺戀五にありてよみ人しらず也〔釋〕これは類例也引歌にはあらず

はだ寒き 九丁オ〔玉〕はたは又の意にて又寒くもありといふ意の詞也そは秋になりて大かたはまだ暑くて涼しきがこゝちよきころ俄にあまり涼しくなりてこゝろよきながらはや又すこし寒くもある意也今もさることあるもの也さる故に此詞はかならず八月ごろにのみいへり心をつくべし几帳などにはたかくれてとあるも同じ意にて大かたは顯れて居ながら又すこし隱れもしたるさまにて居るをいへり拾遺に萬葉の膚寒を引ていへるはひがこと也かの膚寒とは別なるをや〔釋〕案に此說はたといふ詞のつかひざまをいはれたるはさることなれどこれはなほ膚寒の意也拾遺新釋餘滴ともに皆膚とあるに隨ふべしはたは又の意ながら少し異にては又も又などの意につかひたり野分たちてはた寒きとある語勢はたの意としてはさらに受つぎがたし野分の風たちて膚寒きにていとよく聞えたりかならず八月ごろにいふも其ほどより膚寒くなるころほひなればなりさて膚寒き故に常よりも更衣の事をおぼしめし出さるゝ事實にさもあるべき情なりあぢはふべし舊注又餘滴などに野分だちてと濁りよみて野分めきてふく風也といへるはひがこと也めきてと

いふ意ならばふく風といふ言なくてはさは聞えぬことなるをや　**ゆげひの命婦**　同〔花〕靫負と書てゆげひとよめり靫(ユキ)は矢を入るしこをいふ左右衛門は弓矢を帯するつかさなるによりてゆげひといへり〔河〕命婦は今の世に内侍の外織物を着せぬ中臈を昔は命婦と號せり殿上人已下の女なり〔細〕ゆげひの命婦は衛門の命婦也拾遺の詞書にも有命婦は惣じては禁中にあるを内命婦といふ私の妻をも命婦といふそれを外命婦といふ也當時も禁中に侍ふ女房の中に内侍より次に御下(オシモ)とてさふらふ其中に命婦女藏人とてある也〔新〕命婦とは今より延喜式のころまでは五位以上の人の妻を外命婦といへり中右記などの頃よりは女官の中臈を命婦といへり或説にたゞ中臈を昔は命婦といへりといふはくはしからず此女房の父兄弟などの中に衛門の官有しに依て喚名(ヨビナ)とせしもの也惣て女のよび名はさる事多し(新イ本ニ)○是は御門の御おぼえもよく更衣にもしたしかりし人也さらではかゝる御使はかひなければ心をやりて書たりさてかしこに行ての心づかひなどよにことに侍り○靫負はギオの反ゴなるをゲに轉してユゲヒと云さて衛門の官は靫(ユキ)を負(オ)ふゆゑにこの名あり　**やへむぐら**　同ゥ　（釋）和名抄に本草云葎草和名毛久良(モグラ)と見ゆこの草よく生しげる物なる故に彌重葎(ヤヘムグラ)といへるなりさて葎また蓬茅(ヨモギチ)などは人の住ずして荒たる所に殊によく生るものなる故に葎生(ムグラフ)蓬生淺茅生(ヨモギフアサヂフ)などいひてあばれたる家のさまにいへりあながちに葎蓬などの一種をさすにはあらず唯多く草の生たる意まで也心得置べし　**みふみおもて**　十丁ォ　〔玉〕すべて人の家も南向を正しとする故に南おもての舍屋を正面とするから必しも南向の家ならで南おもてにはあらざれども方角は何方にまれ正面のところを南おもてといひならへる也内々の方を北おもてといへるも同じ物語の中に多かる事也心得おくべし（釋）今案に此説のごとし但し古への家は大かた他(アダ)し方には向(ム)ずして皆南向に建たりとおぼしければ面は必南なりし也今も田舍の家は大かた南向ならぬは少し是古への作りざまの遺れるなるべし　**内侍のすけ**　同（釋）令云内侍司尚侍(ナイシノカミ)二人掌下供二奉常侍一奏請宣傳檢二校女孺一兼知中内外命婦朝參及禁内禮式之事上典侍(ナイシノスケ)四人掌同二尚侍一唯不レ得二奏請宣傳一若无二尚侍一者得二奏請宣傳一　**松のおもはんこ**

とだに　十一丁ゥ（新）是は古今集に「何をして身のいたづらに老ぬらん年のおもはん事ぞやさしき又「いたづらに世にふるものと高砂の松をや老の友と思はん此二首などを以てつゞめて書けんかし例の古歌を取用るに巧なるもの也然るに或說に「いかにしてありとしられし高砂の松の思はん事もはづかしてふ六帖の歌を引たり此歌今の六帖にはあれど古本にはなし後に此抄より書入しなるべしよりて思ふに歌のつゞけも意も穩ならず侍り恐らくは此文の抄作る人の詞にあはせて作れるなるべし此說どもにはさる僞り事多しはたさる歌を其まゝ引ては此文の例にもたがひて拙く聞ゆ（釋）此說一わたりさることの如くなれど六帖の古本になきはおとしたる本ならん事もはかりがたしされはあながちにしか定むべくはあらぬわざ也まづは諸抄に引れたるかたをとるへしさて湖月抄に細流を引ていかにしてありとしられしの歌のしもじを濁りてしられじとしたるはひがことなり

歌すゞむしの云々　十三丁ゥ（玉）此てもは常にいふてもの意にはあらずももじは俗言にまあといふにあたりて一首の意を深くいふ辭也後京極殿の「里はあれて月やあらぬとかこちてもたれ淺ぢふに衣うつらんなどのてもも同じ（釋）案に此說一首の意を深くいふ辭也とあるはさることなれど俗言に云々といはれたるはいかゞ也此てもはあかずふるといふへ係れる辭にて常のてもとかはることなし後京極殿の歌なるもてもはうつらんへ係りたる意にて常のてもなり異なるにはあらず

雲のうへ人　十四丁ォ（釋）雲の上とは禁中を天に比ふるからにいふ詞なり雲の上人は雲より上の人といふ意にてすべて大宮に仕奉る人をいふこゝは御使の命婦をさしていへり（玉）花鳥に昇殿の人を男女ともに雲の上人といふべしとあれどもこゝはたゞ禁中の人なるゆゑにいふなり昇殿の事にはかゝはらじ

御さうぞく一くだり　同（新）或說に裳唐衣など一領なるべしといへるはうたがはし雅亮裝束抄の五節の條に童のさうぞくを女院あらば使に女房のさうぞくを賜ふべき也裳唐衣濃張袴これを女房のさうぞくといふ也つゝみに入てとり重ねてたまふ也といへりやんことなきおまへのたまふにははかまよりうへのきぬなるべきにや右は五節に限りていふ事か又今昔物語に伊勢の御のもとへ伊衡のまう

でられし時も右のごときさうぞくを出せし事あり猶うたがはしとぞ仰られし也おちくぼ物がたりの中納言どのゝ八講八月に有りしに中宮よりの御使に綾のひとへがさねはかまくちばの唐きぬ薄物のかさねの裳をかづけ給ひつと有こはことなる御使なれば事のそひたるにや猶考ふべし　**みくし上のでうど**　同〔新〕髮をあぐるてふ語はいにしへ天武紀萬葉などに見えたれど其形定かにいひがたし云々内宴のさま書たる古き繪に女樂の形ありその舞妓の髮の樣と紫の日記に髮あげし樣をからの繪に似たりと書しをむかへて見るにげに相似たりといふべきさま也猶くはしき事はあだしものにも書つその調度は雅亮裝束抄に五節の姫君鬘笄差櫛とりぐして打みだれの筥のふたに入て云々と書し類かされどこゝは楊貴妃の事もていへるによるに釵子鈿合などもあるべし或說々多けれどみなよくあたらず　**長恨歌の御繪亭子院のかゝせ給ひて**　十五丁ウ〔新〕是は寛平のみかどおりゐさせられて後に一條の通油小路の東にわたらせ給ひておはしましければていしのゐんのみかどゝ申也亭子院のみかどの人して長恨歌の繪をかゝせられいせ貫之に其心の歌よませられたるが傳りてあるを今桐壺の帝御なげきにつきてあけくれ御らんずる也云云〔河〕亭子院七條以南油小路以東一町　伊勢集云長恨歌の御屏風亭子院にかゝせ給て其所々をよませ給ひけり御手にてもみぢ葉に色見えわかでちる物はもののおもふ秋の淚なりけりまた玉すだれあくるもしらでねしものを夢にも見じと思ひかけきや〔餘〕今のいせ集には亭子院にはらせ給てとあり紅葉に云々後撰戀四玉すだれ云々今本の伊勢集には初五字玉だれの結句思ひけるかなとあり〔花〕長恨歌のうた紅葉の色にわかれずの一首は帝の御手にてかゝせ給へりと伊勢が集にのせ侍れば亭子院の御製にてあるべきにや今一首の玉簾あくるもしらずといへるは伊勢がよめる也貫之が歌はいまだ見出し侍らず可尋之〔玉〕上に女房四五人さふらはせ給ひて御物語せさせ給ふといへるはすなはち此長恨歌のすぢの事を御物語せさせ給ふなりたゞそのすぢをぞまくらごとにいへるすなはち上の御物語をさせ給ふよしをことわれるなり此所かやうに見ざれば長恨歌の繪歌の事こゝにはよしなし　**まくらごとに**　同〔新〕左傳に藉レ辭といふに

似て更衣をおぼしめす筋によりたる事を下敷としてそれにつけてなげきの御おもひをのべ語らせ給ふと也枕は頭の下にしく物なれは體の中にも第一のしき物也まくらごとにとは其故事を籍ものゝごとく本として必それによりつゝ今の御なげきの御心をのたまへばいふ也冠辭てふ物とは少し異也（釋）今案に此說はいかゞあらんまくらごとゝは御寢物語といはんがごとき意なるべし枕ざうしといへるも寢ながら見る草紙といふ意と聞ゆればこゝもその意にて帝の寢給ひながら長恨歌のすぢの事を仰らるゝ意なるべし寢ながら物語するは打とけたる意なれば打とけ言といふにちかき也さらでは枕といふ事用なく聞ゆ枕詞といふはたゞ頭におくといふ意にていへるなれば別なり　歌**あらき風云々**　同（拾）拾遺雜下　東三條太政大臣の長歌にたのもしき陰にふたゝびおくれたるふた葉の草をふく風のあらきかたにはあてじとてせばきたもとにふせぎつゝ云々　**なつかしうらうたげなりしをおぼしいづるに**　十七丁ォ　（釋）萬水一露の本に此詞につゞけて「女郎花の風になびきたるよりもなよびなでしこの露にぬれたるよりもらうたく」といふ句を載て花鳥の說を擧たり其御說に此一段爲相卿本にはかゝず其心を案ずるに桐壺の更衣のかたちけはひをおぼしいづるに花鳥の色にも音にもよそふべきかたなしといへるに又しかも女郎花撫子にたとへ侍れば前後の詞相違するによりて此詞をすべて略し侍るにや河内が家の本によらば云々如此心をやりて見侍れば前後相違もなきにや但し源氏の本一樣ならず人の所好にしたがふべしと有げにも此御說のごとく此文ありては中々につたなし誰人かいたづらに書加へしものなるべき今は青表紙の諸本にしたがひてはぶきたりされど又わたくしに捨べきにもあらねばこゝにかゝげてしるし置つ　**いとおしたちかど〳〵しき所物し給ふ御方にて**　同ゥ（抄）大臣など薨ぜらるゝ時事の淺深によりて或は廢朝五ヶ日三ヶ日也廢朝とは天子みづから政に臨み給はぬなり廢朝の時は音奏警蹕をやめ禁中に物の音なし惣別更衣などの卒する時には廢朝に及ぶべからず殊に數日の物の音などをとゞめらるべきにはあらずそれを義を立たるがかど〳〵しき也されども帝の風のおと虫のねにも御思ひのまさるべきほどの御愁傷をしらずがほにすべ

き事頗無骨の事也時宜にかゝはらざる所をいましめて書る也　新釋同　**右近のつかさのとのゐ申のこゑ**　同〔奥〕亥一ー刻左ー近ー衞夜ー行官ー人初奏レ時終ニ子四ー刻ニ丑一ー刻右ー近衞宿ー申ー事至ニ卯一ー刻ニ内ー豎亥ー一ー刻奏ニ宿簡ー（釋）とのゐまうしとは近衞の武官の人當夜御直宿に參りたるよしをまうす事也さるは武き事もて仕奉る人の御防衞に參りたるよしをまうして上の御心を安からしめ奉る意なり宿簡とは其夜とのゐする人の姓名をしるしたる簡也これをよみて奏するなるべし猶夕顔卷にも有瀧口の名對面といふ事も見ゆそこにいふを見るべし　**よるのおとゞ**　十八丁オ（釋）おとゞは大殿所の約れる語也大臣をおとゞといふも大殿所の意にて大殿といふに同じさて夜御殿は清涼殿にありて帝の大御寢ます所也四方に妻戸あり南は大妻戸一間ありと諸抄に見えたり猶禁秘御抄にくはし　**あさがれひ**　同〔河〕朝餉ニ間也於レ此供レ之〔湖師〕朝餉の間とて御膳をとゝのふる所也或抄云陪膳の女房御さばをとりはしをたてゝ末を折かけて出すばかり也いづれも儀式ばかりに成て小供御とて御乳母などの奉る分にてうるはしう三度常の御

所にてまゐる也〔玉〕此說はいと後世の趣にてこゝの趣にはかなはずこゝのやうは大床子の御ものは外ざま朝がれひは御内々也云々〔萬〕云々早朝にまゐる也むかひ給供御にはあらず神供なるべし箸をいかにもよわくけづりてあまたたつる也わざと箸を折てたつるといへりをるゝはよき相といへり（釋）これらも皆後世のさまにて此物語の比のさまにあらず小櫛の說に隨ふべしさていにしへは貴賤にかぎらず飯は日に二度たうべし也さる故に朝の飯は此外なれば或は粥或は干飯などを食ひし也さればかならず干飯をめし給ふにはあらねど朝のおものをば朝餉と申す也下の卷に源氏君頭中將なども御かゆこはいひなどをまゐりし事見ゆ考合すべしされば朝餉をめし上らるゝは御内々の事なる故に御陪膳も女房たちのつかうまつるなるべし〔新〕西宮抄臨時部陪膳事云々御本殿朝夕陪膳四位奉仕女房不供也朝干飯陪膳女房候無ニ女房ー者五位以上候正下者公卿供ニ朝夕膳ー者挿レ笏不レ脫レ劒云々なほ禁秘抄に委し其中に大床子御膳爾八時々必可レ有ニ着御ー其作法藏人奏ニ御膳ー時御直衣自ニ帳後ー着ニ大床子ニ懸レ膝着レ之東向　陪膳人警ー候昔正　食レ之云々大槐秘抄

云おほろけの事候はぬ限りは日の御膳大床子につかせおはしますべき事となん申傳へて候へ陪膳もをのこの必つとむべきとなん申つたへて殿上人の見參のはじめにて候云々　大床子のおもの　同（湖）禁中に大床子所とてあり机を二つたてゝ其上に御膳をすうる也（孟）御膳をおものとよむ也つねの御膳也大床子を置て其上に御膳をたてまつる也日の御膳と號す（細）朝かれひは女房の陪膳大床子は殿上人の陪膳也いづれをも御覽じいれぬと也（釋）ものとは食物の事也今も物をくふなどいへり天皇の御なる故におものとはいへる也さて大床子は孟津にいはれたるが如く大床子を立る故に御膳を大床子のおものといひ其たてたる所を大床子といへりこれ正しき大御膳也故に殿上人陪膳せらるゝ也されどもしか正しくいかめしき方は御物思ひにものうく思しめして朝餉の御心安きかたをのみけしきばかりふれさせ給ふと也諸抄あまりにくだ〳〵しくして竟によく事の意を説得られたるもなし又いと後世の書などを引て注せられたるはたがふ事も多き也　ふみはじめ　十九丁ウ（河）皇子七歳御書始例村上天皇親王時承平二年二月廿二日一條院寛和二年十二月八日（花）御書始には御註孝經玄宗注也或貞觀政要を讀始給ふ也博士讀云御註孝經序五字尙復云此許次尙復讀二五字一如レ先皇太子親王等の御書始には聊替る事共有也（釋）これらの事猶西宮記江家次第などに委し　こまうどのまゐれる　廿一丁オ（玉）延喜のころまゐれりはみな渤海國の使にて高麗にはあらざれども渤海も高麗の末なれば皇國にてはもといひなれたるまゝにこまといへりし也文德實錄一に高麗國遣レ使と記されたりその時にかの大使橘淸友の弱冠にてあるを見ておどろきて骨法非レ常子孫大貴と相せし事ありはたして嵯峨皇大后を生奉れりき　うだのみかどの御いましめ　同（新）こは寛平遺戒の事也それに云外蕃之人必可二召見一者在二簾中一見レ之不レ可二直對一耳李環朕已失レ之愼レ之と有をいふ也されども是はおのづから來る三韓などの人の故ありて必見させ給ふべきを猶簾中にて見給ふとのたまふなるべしきと外蕃の使として來たるをば專らは節會などのついでに豊樂殿大極殿などへ召て百官威儀を備へて使人拜禮の後に位に叙せられて昇殿すれば天顏顯れ給ふべき也かゝる事は貞觀儀式の正月

七日の儀に委し云々　**鴻臚館** 同〔抄〕日本の玄蕃寮也細には今の四塚といふ所の邊也とあり漢書應劭注鴻聲也臚傳也傳レ聲賛レ道也云々〔新〕玄は僧尼蕃は蕃客等を掌るてふ謂也其玄蕃といふは或抄云此館は延暦遷都の始東西の大宮にこれをおかる然るに弘仁に東の鴻臚館をもて東寺として弘法大師に賜ふ西の鴻臚館を西寺として修因僧都に賜ふ其後七條朱雀に鴻臚舘を立て三韓の官舍を其中におくと云々今の四塚邊也云々〔花〕僧尼といふ物も昔は百濟國より來朝せし故に此寮につかさどる也云々鴻臚は聲をつたふるといふ心也異國人來朝の時は通事といふつかさありて兩國の心ざしを傳ふる故也　**國のおやとなりて云々** 同〔拾〕又の字に太上天皇の尊號を得給ふべき意こもれりおほやけのかためとなりて天下をたすけば亂れうれふべからんずる相はたがひてよかるべしといふ心に見たる人は又の字をうしなへり〔新〕源氏のみこ天位にのぼるべき相おはする人ながらしか定めて見れば亂れ憂ひやあらんとみゆさらばとて臣下として天皇を補佐する人になしては既に天皇の相そなはり給へるに違ふべしといひたる也故に臣とはなし給ひたれど此相をもて終に太上天皇の尊號を得給へりけるをおもふべし云々　**無品親王の外戚のよせなき** 廿二丁オ〔餘〕むぼう親王のげさくとよむべし云々源平盛衰記卷十九前兵衛佐光能といふ人は文覺にはげしやくに付てゆかりなり云々〔新〕親王は儲の第二といひて皇太子に事あらん時のまうけなればいとおもくおはして品に敍し給ふにも后腹は三品たゞの四品より立給へり又幼き時に親王宣下あるは多くは無品也今源氏君まだ元服し給はぬ故にかりに無品親王をもて事をおぼしめぐらすのみ也さて古へ皇威の盛なる時には親王は臣下とは格別にて威光おはしつるをこのちかき御代どもとなりて臣下に威のうつりたれば外戚にしかるべき大臣などの有て後見申さぬ親王はいづれへもつかぬやうにておはせりされど御父帝の御代久しくばおのづから光君の威もおはさんをわが御よはひも久しからじとおぼしめせばいよいよ親王にてたゞよはさじ臣となして政事とらせんさらば帝の御いきほひつよりて其身も時を失はざらんと也げにもあさましく皇威のおとろへゆかせられしかな天皇の御子とまうさんに臣の外戚のよろしき

御後見なくてはかなはぬやうになれるはくちをしき事也凡昔は親王こそ政を知給へれば御代もさかりにましませしを後には臣下のみかはる〴〵政を執し故に皇威おとろへ給ひて遠き國のものすら我意をおこしつゝ其頃よりぞかの平將門が亂貞任らが亂も起りにける然ればいかで古にかへして皇子を執政の臣として后をも皇胤にてたて皇子に威あらば御門のさかえまさんと思ふ意よりかくは書るなるべし今より思ふにこの頃臣下のわがまゝせし餘りは終に平家にうつり鎌倉に及べりこれを思ふに此記者は天皇にふかく忠なりけるをさる事をあらはにかゝば罪をも得べく又俄なることわりは人の心にしまぬ物なればかくこのましき事を表としてつら〳〵見給ひしらばおのづからすべらぎのおぼしうたがふべきすぢを書まうけたるなるべし源氏君のはぶれたるわざどもは皆ちひさき事也記者の大なる意は別に有とこそ見ゆれ(釋)岡部翁の此物語の見やうすべてかくのごとし猶所々に評ぜられたる事あれど思ふ旨ありて大かた略けりこゝは殊に甚しき所なれば引出つ　**すくえう**　同ウ（新）宿耀也職員令云天文云々義解云天文者日月五星二十八宿也云々これ天文博士の掌ることにて星の行度を考へて人の運をはかるをいふ　**先帝の**　廿三丁オ（新）當時一條院の前代の花山院なれど此文はそれよりもむかしのさまに書のがれつればいづれの帝などいふ說はわろし帝をたいとよむは呉音なり云々　**三代のみやづかへに**　同（新）伊勢物語にみよのみかどにつかうまつりてといふ語例なればみよとよむべしさて此三代をいつよりてふ事はさてもいはでよし此文の次を朱雀其次を冷泉と書たればそれに泥みて或は光孝宇多醍醐三代などいふは皆いふにもたらず（餘）雅望考るに此說に隨ふべし既にいづれの御時にかと初に書出たれば時代をあてゝいふべき書にはあらず（玉）河海に此先帝は相二當光孝天皇一歟典侍詞にも三代のみやづかへとあり光孝宇多醍醐たるべきかとあるを弄花細流にさして三代ならずともたゞ久しくといはんためかとあるはいかゞ久しくといはん爲ばかりに三代とはいかでかいはん河海に隨ふべし先帝も光孝天皇に當たるなるべし（釋）今案に小補に弄花細流の說を辨へられたるはさることとなれど光孝天皇に當たるなるべしとあるはいかゞ也しひ

て准據をいはんは前後の例ならねは新釋餘滴に隨ふべし　**名たかうおはする宮**　廿五丁ゥ〔新〕是はみかどの藤壺を見給ふ御心也名たかうおはするとかくは御かたち人々と世に名高きなりさて此ふたつをあげてそれよりもひかる君の猶增り給ふをいふ也〔釋〕新釋一本の說は頭書にかゝげつ同意也今案フに此段いとまぎらはし舊注はみな弘徽殿の宮たちの事とせられたりげに上よりの文のはこびはさやうに聞えたり然れども名高うおはするといふ事弘徽殿腹の宮たちとしてはいかゞ也そは上に女御子たち二所この御はらにおはしませどなずらひ給ふべきだにぞなかりけるとことわりたればこゝにふたゝびいふべきよしなしもしくは東宮の御事かともおぼゆれど東宮はたゞに東宮と申て宮とはかゝぬ例なればさも聞えずされば新釋のごとく藤壺の宮の事なるべしされど又世にたぐひなしと見奉り給ひといふ事帝の見奉り給ふことゝはすこし聞えがたきやうなるに下に又藤つぼならび給てといへればたしかにさやうにも聞えがたきにや猶よく考ふべき事なり拾遺玉小櫛共にさるさだのなきはみな湖月抄のごとく思はれしにやいといふかし　**ひかる君**　同〔河〕亭子院第四ノ皇子敦慶(アツヨシ)親王號ニ玉光宮ト好色無双之美人也又光孝天皇ノ皇子式部卿是忠親王ノ始メ賜フ源姓チ號スルノ光源中納言ト源光　仁明天皇源氏號ニ西三條ト延喜元年任ス右大臣ニ○日野系圖といふものに左大臣高明を光源氏とこれを書く云々〔新〕光君といふ事を或は敦慶親王或は是忠親王又高明公などをも光源氏といひしなどいふ說々あれど定かなる記をも引ずよしさることいひつとも必其人々の據ありとは見えず大かたにておくべし　**かゞやく日の宮**　廿六丁オ〔河〕中宮彰子　御堂ノ女上東門院十二歲入內　のまゐらせ給ひしをりこそかゞやく藤壺と世の人申けれ　榮花物語〔新〕一條院の御時彰子皇后の藤壺におはせし時かゞやく藤壺と聞えし事は榮花物語に有て其卷の名にも擧たり薄雲女院又同し藤壺におはせしをかゞやく日の宮と申す也今此物語は專ら當代の事を書しと見ゆれば是をばまさしくいひたれどことの心をことなるやうに書しによりてつみなき也〔新〕一本に　云々榮花物語に見ゆ是をうつしてかけるならんと思ふには男君もさるたぐひありて光る君とはいひしにや或說に云々此中には高明公は讒にあひて左遷し給ひし事其

西宮記ノ文校訂シテ此巻ノ末ニ擧ゲタリアハセテ見ルベシ

外にもおろ〳〵此源氏君と似たる事有にやとおぼしければかれをうつしてや書けん猶いひうつしたる人はなくともあるべけれど後の考の料にいふのみ（釋）准據の事は例の作りぬしのふかき心しらひ有し事とは見ゆれど今正しくしられがたき事なれば大かたにてあるべし其中に上東門院の御事に准へたりといふ事はいかゞあらん猶よく考ふべし　**御元服**　同（新）元服の式はそれ〳〵定れる事なるが中に猶事をそへ給ふなりさて西宮抄に親王元服一世源氏元服などの式は少し異なれども此度は事をそへて文句の中に親王元服のさまにあたれる事多ければ親王の條をひく其條に云云々この外一世源氏元服の式は却て略す皇太子御元服の式など西宮抄江次第などに委し（釋）新釋に西宮抄を引れたるはいとよろし今其文を擧べきなれど本書いたく亂れて事の意聞えがたきにつきて西宮抄四五本をもて校合しつれどなほ全く聞えがたければしばらく略きつよき本を得て糺し竟なばおひつぎて加ふべくなん　**こくさうゐん**　同（新）拾芥抄云穀倉院二條南朱雀西在ニ大學西ニ納ニ畿內諸國銅錢無主位職田及沒官田太宰稻等諸庄物ニ勤ニ年中饗ニ有

公卿及四位五位別當預藏人等ニ或云朱雀門前云々續日本紀などに穀布をも收らるゝとみゆ（釋）勤ニ年中饗ニとあるごとく右等の物を出してさま〴〵饗の料に充らるゝ故に今度も穀倉院に仰付られし也　**いしたてゝ**　同ウ（新）天子の御座也西宮抄親王元服に晝の御座を撤して大床子二脚たてゝ出御の事あり源氏元服には殿上の御倚子をこゝへうつさるゝ事はあれど此度は親王の式によるべく見ゆ　**申の時にぞ**　同（湖）稱名院殿御說云盛明親王天慶三年三月十五日申時綾綺殿の東廂にて御前において元服を加ふ此時刻ほどの事も心をつけて見るべし先例なきことはかゝずと云々　**大藏卿くら人**　同（釋）餘滴に弘安論義の雅有卿と康能朝臣の問答を擧て大藏卿藏人の事つまびらかならぬ事右の論をもてしるべし傳寫の書たがへなども有けることにやといへりむかしよりしられがたき事にこそ頭書に擧たる玉小櫛に隨ひてあるべしとにかくに理髮の事なくては聞えがたしさて餘滴に引たる論義はとにかくに知れぬ方なれば引ても用なくて略きつ又大藏卿藏人などの令文をも擧たれどそれも略きつ　**御やすみ所に**　同（玉）注に康保二年

二月八日御記下侍東第一間旋ニ立屏風一其中敷ニ土鋪二枚茵一枚一といへり今花鳥餘情を考るに茵一枚の下に為ニ親王換レ衣所一といふ文ありてゝの注には此文までを引では事たらず略けるはいかゞ　そびぶし廿七丁ウ（玉）北山抄皇太子加元服條裏書云息所參事寛平九年七月三日丙子為子内親王當夜參入延喜十六年十月廿二日甲辰故左大臣女參入用レ輦應和三年二月廿八日辛亥昌子内親王參入俗謂ニ之副臥一乎　さぶらひにまかで給ひて云々　同（餘）禁秘抄下侍三間有ニ炭櫃一四面敷レ疊號ニ侍臣亂遊所一也如ニ折一松一於ニ此所一也或又酒宴等於ニ此所一行レ之清華人近代不レ着レ之（新）西宮抄の親王元服を考るに加冠の儀終て皆しばらく御前を退き冠者舞踏など有て後に引入と理髪とを御前にめして祿引出物など賜はり退く後に元服せし親王の曹司に引入を召て酒祿などあり其後又引入を御前へめして宣陽殿の西庇にて饗を設させらる此時は王卿も御前の孫庇に候じて酒肴を賜ひ樂舞など有也是を以てみればこゝに侍に退て大御酒などまゐるといふは此度は曹司へ召て酒祿はなくて下侍にて酒まゐることゝせしなるべし曹司にての酒祿は有無不定と有からは此度は無よしなるべしさて下侍にて坏酒例有と見ゆ或説に此時に天皇もおはしまして饗ある樣にいへるは誤也此次に引入を内侍御前へ召といひ又光君へ左大臣どのゝけしきばみ給ふと云など御前にてのさまならず（釋）今案に西宮抄の注に親王下ニ下侍一改レ衣とある下侍と引入被レ召ニ親王曹司一とある親王曹司とは同所なるべしさるは親王は常は何方の御曹司に住給ふにもあれ其日は事の便につきて假に下侍を轉じて御曹司に定らるゝなるべければ也御休所とあるも同じく此下侍の事也さればば引入被レ召ニ親王曹司一とあるはすなはち曹司にて親王の引入を謝し給ふ也故に盃祿の事あり有無不定とあるもこれは必しも朝廷より賜る盃祿ならねばなるべしさて朝廷より賜る方は加冠依レ召着ニ御前座一とある注に内侍於ニ廂妻戸下一召ニ引入一女藏人授ニ給一祿一云々とあるが帝より賜はる御祿也又召ニ御前一とある下の注に有ニ酒祿一云々とあるは帝より賜る酒祿なりその以下は事にあづかり給ふ公卿たちをねぎらひ給ふ所の酒祿なりかく見る時はまぎらはしからず但し此物語にあるぢやうは曹司にて御酒給ふより後

に内侍宣旨承り傳へて大臣をめすさまにかゝれたるは西宮抄といさゝか異なり此物語にては彼記に又召ニ御前一とある所にて内侍の引入をめしたるさま也これは事を記しもてゆくついでによりてかくは書れたる歟或は西宮抄のかた違へるか猶よく考ふべし　**親王たちの御座のすゑに**　同（新）一世源氏の無位は勅にて親王の下大臣の上に着給ふと見えたり花鳥に李部王記延長七年當代の源氏二人元服の時盃酒御遊の間兩源氏四品親王の次に着仰によりて也無位の人なれば親王の次に着べきいはれなき故に別勅有しさまにて如此かけるかと覺えたりとあり（湖）源氏元服の時殿上にての盃酒に仰によりて源氏四位親王の次に着座のよし西宮抄にあり、**内侍せんじうけ給はり傳へて**　同（新）既に舉る西宮抄に加冠依レ召着ニ御前ノ座一注内侍於ニ廂妻戸下一召ニ引入一女藏人授ニ給祿一下ニ長橋一不レ着レ沓於ニ庭前一拜舞云々これに同じく女官の内侍の傳へて大臣を召也さて傳へてといふは職員令に尙侍勅を承て掌侍に傳へて告るよし有是に依るに今のは掌侍の傳へ承りて書て大臣を召をいふ也依てこゝに内侍といふは掌侍也或說に藏人の宣下を内侍宣といふにおもひ誤りたることあり　**うへの命婦**　同（玉）帝のおまへちかくつかうまつる內命婦也弄花に內裏に伺候するを內命婦といふそれを上の命婦といふべしといへるはたがへりこれは外命婦に對へる內命婦のよしにはあらずうへといふはうへみやづかへうへつぼねなどあるうへ也（釋）西宮抄に女藏人授ニ給祿一とある女藏人にあたるべし　**大うちき**　同（新）袷のうちきを二つ重ねたるを大袿といふとおぼしたゞうちき一かさねといふは袷袿一つに單を下にかさねたる也女のうちきに對へて男のを大袿といふと有說はいかにぞや委しく考ぬ說也さてうちきは衵に同じくて裔のあこめよりは長きのみのかはり也　**御そ一くだり**　同（新）御表衣御下襲御表袴と三つをいふべし江次第天皇御元服の祿に太政大臣靑色御表衣御下襲表袴と有右に引西宮抄親王御元服の祿に白袿一重御衣一襲大臣加ニ白橡一と有此御衣一襲と書るは明らかに意得がたし右の江次第のごとく御衣下襲袴などやうに有けんをおとしゝにや云々　**長はしよりおりてぶたうし給ふ**　廿八丁オ（釋）西宮抄に

下ニ長橋ニ不レ着レ沓於ニ庭前ニ拜舞とあり舞踏は手の舞足の踏をも忘るばかりに辱きよしを表したるもろこしざまの儀禮なり〔餘〕草木子に舞踏唐制也自ニ武后賜ニ宋之問ニ始と見えたり拾芥抄云舞踏事再拜置レ笏立左右左居左右左 取レ笏小拜立再拜　**左のつかさの御馬**　同〔釋〕左馬寮の御馬なり職員令云左馬寮右馬寮准此頭一人掌下左閑馬調ニ習養ニ飼供ニ御乘ニ具 義解云謂下是卽自ニ内藏寮ニ所レ送者上其在ニ大藏ニ賞ニ賜之料亦同送焉配給穀草及飼部戶口名籍事上云々　**藏人所の鷹すゑて**　同〔花〕鷹飼は藏人所の所レ掌也近衞隨身さならぬ人も御鷹飼に補せらるむかし出羽陸奥より鷹を貢ぜしも藏人所より奏する也〔弄〕藏人所は禁中仙洞執柄大臣家にもあり殿上の次の間に布障子をへだてゝ藏人所といふ地下の者の候ずる所なり〔新〕或説に引入の大臣の祿には馬鷹などはなき也限ある事に事をそへ給ふといへる此義歟といへれど今考るに西宮抄親王元服里亭にて有に鷹の事見ゆ吉部秘訓抄にも此例あるよし侍りひたふるになき事ともいひがたしさて令の時鷹主司あり天平寶字八年に廢して放生司をおかる其後又主鷹司をおかれまた後に藏人所にあはせられしなり

よりて今は藏人所の鷹といへり〔釋〕拾芥抄云藏人所在ニ校書殿ニ有ニ別當ニ左大臣一人頭二人預人八人出納三人小舍人六人有ニ熟食ニ年官進月奏或云衆十二人有ニ内官ニ或所衆廿二人瀧口廿二人或藏人八人五位二人或三人六位六人或五人是皆職事也　**をりびつ物こもの**　同〔河〕献物也或は籠物菓籠ともいふ籠をくみて薄樣をしきて五菓を入て木の枝或は松に付る也大臣以下これをとり後には膳部に給て調ぜらるゝ也五菓は柑橘栗柹梨〔花〕献物は惣名なり元服の人の奉る物也其中に籠に入たるをば籠物といふ又折櫃に盛たるもあり親王元服の時は献物あり王卿已下是を取て庭中に列立す第一の大臣一人座にとゞまりて何ぞの物とたづぬれば上首の人奏していはく其たてまつる御贄と申て名物の名を奏す其時大臣仰ていはくかしはでに給へ即膳部内膳司等すゝみ出てうけとる也一世源氏の元服には献物なきにや但し此物語にはかぎりある事に事を加へさせ給ふとあれば一世源氏の元服なれども親王の時の例をもて献物など右大辨うけ給はりて用意せるにや〔玉〕籠物なり献物にはあらず〔新〕折櫃物籠物なり諸記錄には惣てを稱して献物と

書たる多く又たまく\は外に折櫃をいひて又籠なるをとり分て献物といひしも侍るに似たれどこゝにかくならべいひては籠物てふ説に依べくおぼゆ或説に五菓は松子榧棗榴栗と見ゆ事に随ひて用ゐらるゝにや○西宮抄裏書に親王元服献物百棒又六十棒などあり　**どんじき**　廿九丁ォ（河）屯食つゝみ食といふもの也下﨟にたまふ飯也云々（花）元服の人の本家より諸陣の役者にわかち給ふもの也（新）花鳥云云々　西宮抄に見えたり孟津云屯食つゝみいひと訓下﨟に下さるゝ物也などいへど今考るに屯食は幾十具と諸記にしるしたれば器に盛て物に居たるを一具といふべしかつ台記春日詣の條に屯食幾十具裹飯幾百とあれば屯食をツヽミイヒと訓説はわろし屯食は今世に二重の臺といふ物ぞ其遺製ならん　**くらうどの少將**　同ゥ（河）執政息補ニ藏人少將ニ例清愼公實賴貞信公一男母宇多院皇女源順子延喜十九年正月廿八日任ニ左近衛權少將ニ延長四年二月二十五日補ニ藏人頭ニ　**さとのとのは**　卅一丁ォ（花）榮花物語にかくて大殿十五の宮盛明親王のすませ給ひし二條院をいみじくつくらせ給ひてもとより世におもしろき所を御心ゆくかぎりつくりみがらせ給へば云々今案法興院は二條京極にありもとは二條院と號せるを正暦三年法興院と名をかへられたる也源氏の御里の二條院は是に可レ准にや（釋）これは例の准據なりかゝはりなづむべからず○上にもらしたる西宮記の親王御元服の條をこゝにしるす引合せ見てその大かたをさとるべし　**天皇出御**。垂ニ母屋御簾一。撤ニ晝御座一。鋪ニ毯代一立ニ大床子一。**親王着座**。東廂南二間敷レ茵所錦疊三枚上敷レ之。有ニ二人一敷ニ二枚一。北面元服之時東向。　**引入着ニ孫庇南二間一**。依レ召疊一枚置レ茵。二人候鋪ニ二枚一。第一二間大臣錦端。納言兩面茵。本家儲ニ置加冠具一。親王座頭。唐匣一合。泔坏一口。巽角二階御冠。入ニ柳筥一。　**理髮着ニ親王座東一**。菅圓座。理髮了入ニ巾子一。候ニ南小戸前一。**引入進**。執レ冠入了。自ニ座下一着ニ本座一。有ニ二人一之時。引入並進。或自ニ上﨟一進。**理髮進搔レ鬢出了**。**親王退**。**引入退**。親王下ニ下侍一改レ衣。本家立ニ四尺屛風三帖一。鋪ニ地敷茵一。着ニ黄衣一。　**親王拜**。入レ自ニ仙華門一。出ニ於東庭一。拜舞。　**加冠依レ召着ニ御前座一**。内侍於ニ廂東妻戸下一召ニ引入一。女藏人授ニ給祿一。下ニ長橋一不レ着レ沓。於ニ庭前一拜舞。懸レ頸出ニ仙華門一。白袿一重。御衣一襲。

大臣加白橡御衣。云々　理髮給祿。候南廊小板敷。**牽出**物。左右入自北門。牽于庭中。引入取小拜。授攏人。引入出。或引入被召親王曹司。有盃祿。有無不定。**又召御前**。有酒祿。或奏見參。**宣陽殿西廂設饗春興殿西庭立屯食三十具**。給祿男女。**或本家設**。**内藏寮備酒饌。賜王卿殿上人。本家獻物王卿已下所人執**。入自北廊立御前。重行人少召内豎。屯食所所檢非違使分行。**王卿候御前孫廂**。賜酒肴。有樂舞。近衛府奏加冠同候。有御遊。供天酒。**祿**納言已上白褂。親王同。參議紅。四位或御衣。殿上四位五位衾一條。六位。童。疋絹。樂人同。尚侍白褂。典侍更衣乳母命婦紅褂。掌侍命婦藏人衾。已上后腹儀也**或叙品**。后腹三品。親王同之。餘四品。

○帚木巻餘釋

名のみことぐ〳〵しう　一丁オ（新）此語つゞけてよむべしことぐ〳〵しうの下にて切はわろし（釋）この説はいかゞ也もししかよむ時は名のみといふことうきて聞ゆたゞ光るといふ名のことぐ〳〵しき事とすべし

いとゞかゝるすき事どもを　同（玉）いひけたれ給ふ好色のとが多きに其中にも殊にいたく忍び給へるかくろへ事をさへ也いとゞといひさへといへるを思ふべしかゝるといへる詞はそのかくろへ事をし給ふ時にみづからおぼせる心をいふ語なれば也物語の地よりいふにはあらず云々宗祇注などかゝるすき事といふを物語の地の語と心得たるからいひけたれ給ふといへるはひが事也（釋）この小櫛の説は中々にわろきよし補遺にいへるを本文の頭には注したりその方にていはゞいとゞといへるはいひけたれ給ふ他の咎の多きうへにいとど也さへといへるは他の咎の多かなるにかゝるかくろへ事をさへ也聞えざるにはあらずさてこれを源氏君のみづからおぼせる心と見られたるはいと〳〵めでたき考なり　**なよびかにをかしき事はなくて**　同（玉）實にをかしき事なしとにはあらず是はかたの少將などのごときもて出てたはれたる人の見てわらふかたの心よりいへる也　**御ものいみ**　二丁ウ（玉）河海に引れたる儀軌の事拾遺にわきまへたるが如しこの儀軌にいへる説は物忌といふ札を簾などにつくる

事あるによりてそれをやがて鬼王の名として造りたるもの也いと拙し（釋）儀軌の事不用なれば今は物せず河海また拾遺を見るべし餘滴に禁秘抄を引るはよろしければこゝに擧つ但しこれは後世のさまなるべしさて文は本書を考へて引たれば餘滴にひきたるとは異同あり（餘）禁秘抄云御物忌之時惣不出御他殿舍中諸事於簾中有之或出御廣廂不固之時例也云々同記（匡房卿江記也）云御物忌時初參籠人丑時可參之云々御物忌數日相續不快例也云々禁中御物忌時諸禮近代公卿參籠極難叶仍多不重破之近代萬事如此物忌不加御字以柳造簡三分許指御冠纓上御放本鳥時附左御袖（書紙也）紙白云々御物忌諸陣立札御殿之御簾毎間附物忌（書紙屋紙）外宿人不參御前云々諸穢皆大內別司各穢也不引禁中禁中穢又不引諸司有穢モ仰諸陣令立札云々これらにてその大かたのさまを知るべし　**かしこまりもおかず**　三丁オ（新）大臣の君達と一世の源氏とは後世はいとことならぬ樣なれど此文の比まではまだ一世の源氏は貴く有つらんが中に既に元服の宴席の座も大臣の上に源氏着給ふことに書たれば其君達はかしこまるべき理りなるをむつましき御友なれば相いどむなるべしされど終に源氏には物ごとに劣れる意を末々にも書たり　**おほとなぶら**　同（餘）延喜式卷七大嘗祭式悠紀主基二國進御殿油二斗と見ゆ此外物語ぶみにあまた見えたり云々　**はづかしげなれば**　五丁オ（餘）この注に頭中將の體なりとばかりかけるはことたらず此はづかしげをよく解えたる人なし此書の中に見えたるは初音卷にかきまぜつゝあるをとりて見給ひつゝほゝゑみ給へるはづかしげなり夢浮橋卷に涙ぐまれぬるを猶僧都のはづかしげなるにかくまでみゆべきことかはと思ひかへして手習卷にさならんともしらずながらはづかしげなる人にうち出の給はせんもつゝましくをとめの卷に子ながらもはづかしげにおはする人ざまなればまほならず見え奉り給ふ清少納言にかぢすこししていかにさわやかになり給へりやとて打ゑみたるもはづかしげなりこれらにてしるべしその人の德にかたはらの人の恥るなり古今俳諧何をして身のいたづらになりぬらん年のおもはん事ぞやさしき契沖云やさしきははづかしき也心ある人をやさしきといふは向

ひてまみえんも心づかひせられてはづかしき人といふ心なればこなたの心をかなたに名づくる也云々とありさればやさしきの同じかることとは年のおもはん事ぞやさしき世中をうしとやさしと思へどもなどの歌にて心うべき也　**品さだまりたる中にも**　七丁ウ〔新〕惣ての國の守は一わたり品定まりたれど大國小國によりて位もことなりそれはおきてこゝは右のなり昇りなり下りたるが類にていふ時は大臣の末にて前播磨守なる明石入道の女中納言の子にて伊豫守の妻となれる空蟬君など也又惟光が女も既に宰相までなりたる上なれば中の品には入べしされどこゝはなり下りたる方にて專らいふと見ゆれば上の方につきていふべき也　**ころほひなり**　同〔玉〕當時のさまをいふ也又ほどゝいふ意にて受領の分際をさしていへるごとくにも聞ゆれど上よりの語のはこびを思ふになほ然にはあらじ　**なま〳〵のかんだちめ**　同〔玉〕花鳥に物のなまなりなる心とあるは言の本の意にはかなふべし始めて公卿になりたる家とあるはいたくたがへりそはなまなりより出たるひがこと也たみ詞にもとは筋目なき人の公卿になりたるをいふといへるも同じひがこと也〔新〕なまとは物の熟せぬを云ここは先凡家がら高からぬ人は參議の公卿とならずされど時を得て三位の上達部には至れども寄かろくて勢なし非參議の四位とは終に大臣ともなるべき家の子のまだ四位の大辨にてあるほどをいひて即非參議の四位とは四位大辨をいふ名目也しかれば家がら高くておのづから勢も富もなま〳〵の上達部の及ぶ事ならず是はおとろへたるならで盛まつほどの淺官の人の女なればおとしめがたき也　**非參議の四位**　同〔釋〕近藤芳樹云三位にも四位にも非參議あれども三位にての非參議は公卿補任の所見前官か散三位か也四位の非參議はいまだ參議にはならざれども大辨藏人頭衞府督などの顯職に居て宰相にすゝむべき途すでにしるき人々をいふされぼたとへ位は三位にても齢のほどやゝたけて昇進のおぼつかなきかた〴〵はみななま〳〵の上達部也夕顔巻に父は三位の中將にてなんおはせしわが身のほどのおぼつかなさをとあるは三位にておはしながらまだ參議にもえなり給はぬをなげき給ふよしにてこれらをなま〳〵の上達部といふ但攝關大臣の御子達に非參議の三位のあるを

殿の三位中將などいひて諸書に見えたるはやがて此源氏の君頭中將などにひとしき御方々にて品定の內には引出べからぬかみの品なれば別也同じ三位の非參議にてもかくけぢめある事也又四位の非參議にても竹川卷に左の大殿の宰相中將大饗のまたの日ゆふつけてこゝにまゐり給へり云々右兵衞右大辨にてみな非參議なるをうれはしとおもへりとあるはこゝの非參議の四位とは少し意かはれりこれは鬢黑のながらへ給ひて家門おとろへずは子共もその蔭にて左大殿の宰相中將と同じなみにすゝみ居んものをと玉がつらの君のなげき給ふよしをいへる也云々さればかく非參議の四位にても世をうれふるもありまたかはらかにもてなしふるまふもありてさまぐ〵なればよく〳〵文義をあぢはひてあげつらふべきこと也されど三位の非參議に攝關大臣の御子たちの外さらに世のおぼえくちをしからずといふきはの人はあるべきならねばこの文靑表紙に三字なきを正しとすべきなり」といへりなほ委しく寄居歌談に見ゆ本文には玉小櫛を注したれども此說いとこまやかなれば隨ふべし新釋に四位の大辨にかぎりていはれたるはよろしからず　**こと人のいはんやうに** 八丁ォ（新）源氏は何の意もなく右の論どもにつきてにぎはゝしく富るかたによるべきなりけりと戲れてのたまふを上の宮づかへに出て幸ありといふは御母更衣にちかくはた打あひてよろしく又自然にわろきふしはかくるゝなどいふは頭中將のかたなどにあたれば中將は耳とどめてにくゝおもふとなり心得ず仰せらるゝなどいふ詞にてしらるしかればこゝにて一段きれて又そのやんごとなきがおとれることを書るは馬頭も右の源の語をとりなほし論ずる意なるべし（餘）末摘花卷にこと人のいはんやうに咎なあらはされそと有こゝは中の品の女のうへなどは源のしらせ給ふべきにあらねばくちいれ給ふべきにあらずと思ひてしかいへるにや（釋）案に新釋の說委しきやうなれどさてはあぢきなし餘滴に引たる末摘花卷の詞は畢竟他人がましといふ意なりこゝもその意にて源氏君は帝の御子にてかつ左大臣殿の婿なればこの上もなくにぎはゝしく富榮え給へるをそれしらぬ他人のいはんやうににぎはゝしきによるべきなど心得ずげに仰らるゝとてかりに憎むといふまでにて中將のわが方の事或は桐

壺更衣の事など思はれたる意にはあらずもしそれしかいはゞ源氏君の心の底にあたる所ありていといひにくき情景となるべしよく〳〵前後の勢ひをあぢはふべし餘滴の説は心得ずしてといふ意に見たるならめどひがことなり　**さらにもいはず**　同ゥ〔玉〕此詞は次のうちあひてすぐれたらんも云々心もおどろくまじとある下へかけて心得べしさやうの品の人は何事も打あひてすぐれたらんももとより然るべきことなればめづらしからぬをましておくれたらんはさらにもいはずいふかひなくおぼゆべしと也〔釋〕此説はまぎらはしこゝはよく聞えたる所にてさるやんことなきあたりの内々のけはひのおくれたらんは殊更に論ずるにも及ばずといふ意をさらにもいはずとはいへる也さる故に何をしてかくおひ出けんといふかひなくおぼゆべしとことわりたる也打あひてすぐれたらんもことわりとはさる品の人は何事も打あひてすぐれたらんも尤しかあるべきこと也といふ意をことわりといへるにて文の抑揚よく意貫きたるところなるをや　**うちあひてすぐれたらんも云々**　同〔玉〕上にいへる條々は或はもとのしなはよけれども時代のおぼえなく或はときよのおぼえはあれどももとのしなわろきなどをいへるをこれはともに打あひてよきをいへるにてこれもなほ中の品の一種也上が上の品をいへるにはあらず思ひまがふることなかれもとの品とは家がらのよきをいふ也もとのといふに心をつくべしやむことなきといふももとの品と時代のおぼえとうちあひたるをいふ也上が上のよしにはあらずされぱこれを女三宮にあたれり薄雲にあたれりなどいへるはかなはず〔釋〕此説いはれたることなれどこれをなほ中の品の一種也といはれたるは心得ず上が上の品の事也もとの品とは種姓のよきをいへるにて家がらの事にはあらず血脈の事也もとのといふに心をつくべしといはれつれどこゝにもとのといへるは上に「もとよりさるべきすぢならぬはといひ又「もとはやんごとなきすぢなれどゝいへるをうけていふ所なる故にもとのとはいへるにてもとはよかりしがおとろへて後に又時世のおぼえあるをいふにはあらずもとより種姓の貴きをいへる也さてさる貴き人も時代のおぼえなくてはあかぬ事なるをそれも打あひてやんごとなきなれば此上もなく貴きをいふにて上

が上なる事論なしされば次の詞に上が上はうちおき侍りぬとことわりたる也此一語にても上が上の事なるをしるべし女三宮にあたれり薄雲にあたれりなどいふ注はしかあてたる事こそはよからねど上が上としたる品はげにさばかりのあたりの事なるべし　**上が上は打おき侍りぬ**　同（玉）まづ此品定は皆中の品の事にして上が上と下が下とはあづからざることをしるべしはじめに中將の詞に人の品たかくうまれぬれば云々中の品になん云々下のきざみといふきはになれば云々此語のやうを思ふにもはら中の品を論ずべき下がまへに書るもの也かくて中の品の事をいふうちにおのづから上と下との心ばへもこもりてある也云々（釋）案に此說もいかゞ也中の品を專らといふ論にはあれど始より終までみな中の品の事にはあらぬをいかに思ひまがへられけん此一語をもて此品定をみな中の品と定められたれどこゝまでの論は上が上の品なる故にこゝにてかくことわりてさしおきたる也さて又此次の條に「世にありと人にしられずさびしくあばれたらんむぐらの門にといひ「父の年おいものむつかしげにふとりよぎ云々といへるなどは下が下の品ならずして何とかせんされば「かたかどにてもいかゞ思ひの外にをかしからざらんとつよく論じまたすぐれて疵なきかたのえらびにこそおよばざらめなどいへるみな下が下を論ずる詞なりこれをもおしくるめて中の品とせられたるはいかにぞやはじめに中將の詞に云々とあるをもて中の品を論ずべき下がまへに書るものなりといはれたるはさることなれどかく三つにいひ分てるにてもなか〳〵に上中下三つの品をいふことゝは聞えたるをやとにかくに中の品のみの事にはあらずとしるべし　**しろき御衣**　九丁オ（弄）御そとは先きぬをいへり但衣裳の惣名をいへる所もあるべし（新）みそとは服をすべていへどこゝは御下着の單衵などの白きをいふ也一條院の比よりは小袖てふ物も出こしといへどなよゝかなるとあるからは小袖にはあらじ　**なほしばかり**　同（孟）下がさねをばぬぎて直衣ばかりをめしたる體也白衣にてはましまさずと逍遙院說云々（細）夜陰なれば知音の中にては指貫を略して直衣ばかり引かくる事勿論なるよし一條禪閤の說也然れども直衣には必下にきぬをかさぬる物也こゝにはきぬをかさねざる

餘滴ノ說ハ藤壺女ノ御身ニテ女にてトノタマヘレバ女にしてノ意ナルベシト思ヘルナレドカシコハ地ノ語ナレバソレニ拘ハルベキニハアラズ

をなほしはかりとはいふか指貫を略する說はあまりなるか云々〔新〕下がさねをばぬぎて單などの上に直衣のみ着給へるをいふならんさしぬきもなくてなどいふはいかゞ也末に右大臣殿へおはする時なほしに下がさねの尻長く引て有しをおほきみすがたといひたり此時のみならず常にも御門の御前へ出給ふ時など常の晝のさうぞくは直衣に下襲ならんさらば下がさねを去たるを直衣ばかりといふべし **女にて見奉らまほし** 同〔餘〕祇注我女になりて見奉らば猶無類なるべき義歟此說非なりてゝは源氏君のしどけなくおはしてもとよりうつくしきかたちし給へるをほめて女ともいはまし女なりともかばかりなるは上の品なるべしといへる也紅葉賀巻にも女にて見ばやと有そこにても細流孟津の說あやまりときたり繪合巻にも限の御さま女にて見奉らまほしと有みなてゝと同じ其證をいはゞ榊の巻に藤壺の尼になり給はんとて御子の冷泉院へ參り給ふ時に冷泉院の御かたちをあげいへる所に云々ゑみ給へるかをりうつくしきは女にて見奉らまほしうきよらなりと有冷泉院のいときなきさまのうつくしくて女子となして見奉るとも

にげなからずといへる也皆うつくしきすがたをほめていへる也見る人のみづからの女になりて源氏にむかひたく思ふ也ととけるはいとおろかなる書の見ざま也云々〔玉補〕江戸人石川雅望が源注餘滴に云此語いづくにありても皆その人を女にしてといふ事也わが女になるにはあらずといへりされど葵の巻に女にては見すてゝなくならんたましひ必とまりなんかし又榊の巻に藤壺の宮の東宮の御事をばの給ふ事あるなどを見れば此說ひがこと也〔釋〕餘滴の說をかしきが如くなれどなほ補遺に辨へたるごとくなるべし冷泉院の幼きほどに申せるもたゞうつくしきかたを主[ムネ]と書る所なればぞかしこれによりて其證とはなしがたし補遺に引る葵巻のかたたしか也そのうへ女にてといへる語はおのづから然るてにをはにて女に爲[シ]てといふ意にはならぬ物をやおのれも始は女にしての意とおもへりしかどいとわろかりき **あふさきるさにて** 十丁オ〔河〕古今集俳諧歌 そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに〔釋〕この歌いかなる事をよめりとも聞えがたけれど一わたりいはゞそへにとては舊說に領狀する事をそ

いにといふといへる意とは聞えたり俗言にさうじやといふてといふ意也さて人の物する事をそへにといひて左すれば右あり右すれば又左ありといふ意をつづめてさてあないひしらぬまでわづらはしと歎息たるにつゞけていへりと聞ゆあふさきるさは餘滴に引る往左來左などのごとく合にも離るにもといふ意にてさは往左來左の左と同じ意也諸抄にあふきるといふ語をたゞに往來といふことにしてとけるは言の本にかなはずひがこと也さて此歌をこゝに引出てたらはであしかるべき大事はかた〴〵にあれどかのあふさきるさにといひけんやうに一事よければ一事あしくなのめながらにさてあるべき女はいと〳〵少きを云云といふ意にひゞかせたる也此歌をかくとかざれば本文の意聞えぬを諸抄に其さだなきはいとおろそか也新釋にそへにとてを添崗といはれたるはいみじきひがこと也（餘）萬葉三白菅之眞野乃榛原往左來左君こそ見らめ眞野の榛原このさはさま也といへり散木集恨レ躬恥レ運雜歌百首今よりはうれしからせよおしかへてあふさきるさの我身とおもはん　**すみつきはのかに心もとなくおもほせ** 十一丁オ（餘）詞をえらびかすめてかける故によむ人その心を得ずこゝろいられしてとく其ふみのこゝろをしらばやといらちおもふをこゝろもとなしとかける也　**さやかにも見てしがなと** 同（餘）このふみのかうおぼつかなきをかくはあらであざやかにつゝまずかきたるをもみまほしと思へどせんすべなきまでにうちすてゝ女のおくをいへるなり　**みゝはさみがちに** 十三丁オ（餘）うつぼ物語藏ひらきの卷にしろきあやの御そを奉りてみゝはさみをしてまどひおはすと有又横笛の卷にもみゝはさみしてそゝくりつくろひていだきてゐ給へりと有紫式部家集にやよひのついたち川原に出たるにかたはらなる車に法師のかみをかうふりにてはかせだちをるをみて「はらへどのかみのかざりもみてぐらにうたてもまがふみゝはさみ哉としるせりこれによりてみゝはさみといふ物は別にある物なるべしとひさしく思ひゐたるに圓光大師の剃髮の所をゑがきたるを見るに耳に袋のごときかたちの物をはさみてあり是いにしへにいへるみゝはさみなるべしむかしの女は髮をたれて有ければかほに髮のかゝらざる爲にかゝる物を用ゐたりとみゆ（釋）此說はいみじ

きひがこと也頭書に擧たる玉小櫛のごとくなるべしみゝはさみといふ物の別に有しことは何の書にも見えぬ事也引たる紫式部集の意は法師の髮なき故に紙を冠にして博士めきてあるををかしく思ひて戲れたるなりみゝはさみかなとよめるはかの冠を耳にはさみてとめたるを髮ある人の耳はさみするさまにいひなして戲れたる也されはこれをもて證とせんことはいとあぢきなし〔玉〕或物語にわかけれどすこしもはぢらひたることなくみゝはさみして云々といへりこの物がたり題號に正三位とあれども此名はうけがたし　**びさうなきいへとうじ**　同〔拾〕今按無二美相一主人母といふなるべし遊仙窟に主人母をいへとじと點ぜり六帖第五の題に家童子をおもふとあるをある人流布の印本に他のかきたる本にて校合したるには假字にてとじとあり日本紀第十三に允恭天皇の后忍坂大中姫いまだをとめにて母の御許におはしましける時闘鷄國造と申ものゝとじと呼まゐらせけるをはら立てふづくませ給へる事ありそこに戸母此云二覩自一とあれば家をまかなひをさむる以上の老女をいふ故に腹たゝせ給へるなり和名抄負俗作刀自劉向列女傳云古語老母爲レ負漢書五唱武負佐引之今按俗人謂二老女一爲レ負字從レ自也今訛以レ貝爲レ自歟今案和名度之萬葉の一に吹黄刀自おなじく四には坂上郎女が娘におくる歌にわが子の刀自とよめれば老少に通じていへり家童子とわろく心得たるより六帖にも後人眞名に書る歟とじをとうじといへるは音便なるべし〔新〕いにしへは只とじと云て戸は即ひとつの家をいひじは主の略にて宮主といふがごとくなりしを中頃より又家てふ語を上にそへていふは俗になれるもの也云々　**うちもゑまれ涙もさしぐみ**　同ゥ〔新〕これは語りも合せばやとてつゞきたれば其女のいふかひなきを打わらはれ又かゝるものと相すむくちをしさに泪ぐまるゝといふなるべしさなくてはいひつゞけたる意通らぬが上に次にうちそむかれて人しれぬ思ひ出わらひもせられあはれとも打ひとりごたるといふ詞其妻の事を笑ふならば思ひ出といふべからず是を思ふにこゝは却て其愚なる女をあざけりゑまるゝにて次なるは公私に有し事を思ひ出て獨笑し獨歎といふなるべし又上も下も同く世に有し事をかたり合せんよしなければ思ひいでゝ笑ひもあはれともいふにて同じきに似

て少しことなるを二つ擧たりとせんかされど上の詞のつゞきはさとも聞えず(釋)この說いかゞ玉小櫛にもかうやうにとかれたれどなほいかゞ也こゝの意は朝夕の出入につけても公私の事につけてもよきあしき事の耳にも目にもとまる有さまを思ひて打ゑまれ涙ぐまれもしは何となく腹立しく思ひあまる事の多かるをうとき人にわざと打まねばんやは近く見ん妻にかたりもあはせばやと思ふにきゝわき思ひしる事もなければ何にかは聞せんと思ふにつけておのづから打そむかれて人しれぬ思ひ出わらひもせられあはれとも打ひとりごたるゝに其妻の心を得ずて何事ぞなどいひてあわつかにさし仰ぎ居たらんはいかゞはくちをしからざらんといふ意なるをかくあやなしていへるは例の文法にていとめでたしかたりもあはせばやと心ひとつに思ひ餘る事など多かるをとつゞく語脉の中に其事のさまを挿みたる法なり心を付べし然るをよのつねのごとく上よりつぶ〳〵と書たるやうに見られたる故にかゝる說は出こし也其妻のいふかひなきを笑ふといはれたるはさる事ながら相すむくちをしさに泪ぐまるとあるは言の意過たるべし又其妻の事を笑ふならば思ひ出といふべからずといはれたるはさることのごとくなればこれは公私の事の耳目にあまる事を思ひ出るにもあるべし然れども其妻のいふかひなくさし仰きゐたるさまのをかしきを見て人にかたらふべき事にもあらねば人しれず思ひ出笑ひをする意としてもきこえぬことはなしあはれと打ひとりごたるゝは其妻のいふかひなきと相すむことを歎息する意なりかたりもあはせばやとゝいふ語よりつゞきたればといはれたれどこゝはいはゆる隔句法なること上にいへるがごとし然れどもかたはらつゞきたる語の意は耳目にとまることのよきあしきをかたらはゞやと思ひてかたらぬさきより打ゑまれ泪ぐまれといふ意としていとよく聞えたるをやそのうへ涙もさしぐみもしは云々思ひあまることなど多かるをといふ勢ひみな一つことをさしたりと聞えてさらに別に妻のことをいへりとは聞えずもしこの說どものごとくならんには涙もさしくみにて暫く句て何にかは云々へかゝる語としもしは上の耳にも目にもとまるありさまをといふより受たる語とせでは語の脉とほりがたし然れどもありさまをうとき人

にとつゞきたる勢さらにさやうには聞えがたし見ん人よく〳〵思ひわかつべしさて又上も下も同じく世に有し事を云々といはれたる説はまさりたるを詞のつゞきはさとも聞えずとあるは中々にひがこと也　**さしぐみ** 同〔拾〕後撰にいにしへの野中の清水見るからにさしぐむ物はなみだなりけり（釋）此歌は類例までなり引歌とは心得べからず　**おほやけばらたゝしく** 同〔玉〕枕册子にあさましうおほやけばらたちてけんぞくのこゝちも心うく見ゆべけれど身のうへにてはつゆ心ぐるしきを思ひしらぬよ紫式部日記にすゞろに心やましうおほやけばらとかよからぬ人のいふやうににくゝこそ思ひ給へられしか榮華物語見はてぬ夢巻にげにはおほやけばらたゝれけるなど見えたりあやなきとは我身にあづからぬ事に腹たつをもて云る也云々　**思ひ出わらひもせられ** 同〔玉〕有し事を心のうちに思ひ出してわらふをいふこゝは心ひとつに思ひ餘る事の中に笑ふべき事を思ひ出しててはわらひもする也思ひあまる事は必しもうき事かなしき事などにはかぎらずあやしき事をかしき事などにても心にあまりて人にかたらまほしき事はあるなり宗祇注にくちをしく思ふ相手などを云々といへるはひがこと也　**あはれとも打ひとりごたる、に** 同〔玉〕これは思ひ餘る事どもの中に歎息すべき事どもを思ひては歎息する也さて人しれぬといひひとりごたるといへる皆妻に語りてもかひなかるべきが故也宗祇注にあはれ我身が云々といへる又ひがこと也何事とさしていふべきにあらず（釋）こゝは此説のごとくにても聞ゆべし然れども上にもいへるごとくうちもゑまれ涙もさしぐみ云々とあるが其事なればこゝは妻のかひなきを笑ひなげくなるべし見ん人えらびてとるべし　**物語よみしをきゝて**　十五丁オ

〔拾〕今按大和物語に平仲が色好みけるさかりにといふより男ぞよにいみじき事にしけるといふまでの武藏が事の一段こゝに似たり〔新〕此條はいせ物語の男の家を出たる女心かろしといひやせんとよみて出しに又有しよりけにいひかはせしが終には中ぞらに浮たる雲のごとくてはなれはてたると又有常のめの尼になりてわかれしなどをかねてそれに事をそへて書たりと見ゆ〔餘〕これは大和物語に平仲がむさしの守の女をよばひてさてあひて後いかざりければ女うら

みわびてこもりゐてつかふ人にも見せで尼になりけるを平仲聞てゆきけれどぬりごめにかくれていらへをだにせねばことの有やうをつかふ人々にいひてなきけるよしかの物語に有こと長ければこゝにいはず蜻蛉日記にもさることと見えたりこゝに物語よみしと有はこれなどにやあらん（釋）げにかやうの事を思ひてなるべし然れどもしひてかゝはりていふはわろしかゝる事は何の物語にも多き事なれば昔物語よみしを聞てしか思ひしといふばかりに心得て有べし　**ごだち**　十六丁オ（拾）御等といふ意なるべし本朝文粹第一慰ニ少男女一詩　菅徒跣彈レ琴者閭巷稱ニ弁御一　注ニ俗謂ニ貴女一爲レ御蓋取ニ貴人女御之義一也何御といふたぐひ貴女よりおこりてさらぬにもいへり　**ひたひがみをかきさぐりて**　同（新）いにしへはそぎ尼とて髮の末をそぎたり額髮をばことに短くそぐ故にいふといへど額髮を殊に短くせし事何の證あるにやおぼつかなし思ふに是はくやしき時頭かくてふ事を本にてかのそぎたる髮のくやしさを思はせてかく書るのみなるべく覺ゆ　**うちひそみぬかし**　同（拾）萬葉第四に百年爾老舌出而與余牟とも我はいとはじ戀はますとも　家持　これを六帖第二おむな（嫗なり老女の事なり女にはあらず）の題においくちひそみなりぬとも我は忘れじと引なほして入たりよゝむとは下にかをる大將のいときなき時たかんなをつと握りてしづくもよゝにくひぬらし給へりとあるに合せて案ずればよだれをたるゝをいふか云々（新）これは泣ときの口つきをいふ萬葉に云々てふ歌を六帖に云々とよみて有萬葉にては只おいじた出てとよむ事にて六帖はよみ違へなれどまた口ひそむてふ事のあれば語例にはすべし或人まゆをひそむといひ又老舌出を遊仙窟にありといふもわろし

にごりにしめる　同（餘）古今集夏蓮葉のにごりにしまぬこゝろもてなにかはつゆを玉とあざむく　**やがてあひそひてうらめしきふしあらざらんやあしくもよくも**　同ウ（拾）今按注に此二十七字異本になしといへりなきは落たるなり其故はあまにもなさでたづねとりたらんもやがてあひそひてとあらんをりもかからんきざみをも見すぐしたらん中こそちぎりふかくあはれならめとはことわりのつゞかぬなり猶おもふにやがてそのといふ下にをりなどいふことの落たらんにや（玉）一本にやがての下にあひそひてといふ

五もじのあるぞよろしき此詞なくてはやがてといふこと聞えず湖月の本に此言なきは同言の下にもある故にわづらはしと思ひてさかしらにはぶけるにや又一本にその思ひ出といふよりあしくもよくもといふまで廿七もじのなきはあひそひてといふ詞の二つあるによりてその中間(アヒダ)の語を見おとしておちたるなり此語どもゝなくては聞えずやがてあひそひてとは一たびそむきし後男の心のなごむべきふしもなくてそむきしまゝにて又かへりてあひそふ也その思ひ出はさきにそむきて家を出しことを思ひ出るをいふ（釋）右の説どもさることなれどかくながらにても聞えたり拾遺にやがてそのといふ下にをりなどいふことの落たらんかとあるはそのをりの思ひ出といふ事なるべければこれはおだやか也小櫛にやがての下にあひそひてといふ五もじのあるぞよろしきとあるは理(リ)はさることなれど文づらむげに手づゝに聞ゆいくたびもよみあぢはひて考へしるべし此語のこゝにある本は下の語よりまぎれて衍りたる也やがてといふ詞聞えずといはれたれどこれは例の隔(カヽ)てゝ係る文法にてやがてうらめしきとつゞく意也されば今はもとのままにしてあひそひてといふ事は省きつ又案(フ)に此下のわれも人もうしろめたく心おかれじやはといふ語は上下に縁なくはなれて聞ゆもしくはたづねとりたらんもの下に此句のありてさてやがてその思ひ出云々とつゞきたるを此所いたくみだれて寫しひがめたるを後に補ふとてかく入ちがへたるにはあらじかもし然らば事の意貫きて聞ゆべしとにかくにこゝの落着はあしくもよくもあひそひて云々ちぎりふかくあはれならめといふ所なれば其下に又立かへりてわれも人も云々といふべくはおぼえざればなり猶よく考ふべし　**なほじちになんよりける**　二十丁ゥ（玉）三つのたとへ皆同じ意にて女のけしきばめるうはべのなさけと實なるとのたとへ也注にその實なる方のたとへを本妻たるべき女のたとへなどあるは意たがへり又宗祇注に源氏君頭中將は世をまつりごち給ふべき云々といへれどさる意はなしとにかくにしひてから書の意にかなへんとするはむかしのものしり人のあぢきなきくせなりかし（釋）こゝにいはれたるごとく三つのたとへはざればみたると實なるとのたとへにはあれどその實なるが本妻となるべき意をいふなれ

ばつひにはたがふことなしさてこの實によるといふ事品定の中のむねとある所なる故にかく三つのたとへを擧て何のうへにもたがふまじく萬の事皆かく有べきことわりをくりかへしねんごろにいひ定めたる也　**つらづゑをつきて**　同〔餘〕伊勢集よもすがら物思ふ時のつらづゑはかひなたるさぞしられざりけり古今集俳諧大輔なげきこる山とし高くなりぬればつらづゑのみぞまづつかれける契沖云貫之集にことしげき心よりさく物思ひの花の枝をばつらづゑにつく

人なみ〱にもなり　廿二丁ウ〔拾〕萬葉十八大伴家持致三喩スル史生尾張ノ少咋ヲ二歌の中に云ちさの花さけるさかりにはしきよしそのつまのこともあさよひにゑみみゑまずみうちなげきかたりけまくはとこしへにかくしもあらめや天地の神ことよせて春花のさかりもあらんとまたしけん時のさかりぞ云々こゝに似たり歌

手を折て云々　廿三丁ウ〔新〕意は指を折て物をかぞふる也さて指をかゞめてといふをそへたりさて上ノ句は伊勢物語の句を皆用ゐたり惣て物語ぶみにはかくのごとくするを興とする也其伊勢物語に先古歌を詞をかへ又上ノ句と下句と別の古歌をよせなどして作れるを始として此文をも作れる事なるべし〔釋〕古歌を用ゐたりといはれたるはさることなれどこゝは指をかゞめてといふ詞の縁よりかの句を用ゐたるまでにて下ノ句をいたく轉してこゝの意をかしくいひなしたるがめでたき也さるを古歌をとり合せたる例のやうに此文をも評ぜられたるはあたらぬ事也〔玉〕やはゝたゞやの意也やといふべきをやはといへる例多し君がうきふしは女の馬頭をうしと思ふべきふし也一首の意は指を折て逢見そめしよりこなたの年月をかぞへて其間の事を思ふに君が我をうしと思ふべき事はたゞ此度の一ふしのみこそはあらめ外にはなしと也次の言にえ恨みじといふも此意にてこそたしかなれ注は誤なりもし四の句これのみならずの意ならばこれ一つかはとこそ有べけれやはといふべき語にあらず古人の歌にさやうのつたなきことはなきなり〔釋〕舊説のひがことなるよしは小櫛に辨へられたるがごとしさて小櫛の說も猶いかゞ也これ一つとさしたる詞は此度の一ふしをさしていへりとは聞えずすべてこれなどいふ時は一つの物をとらへてさす語の例なれば一時の事としては似つかはしからずなほ嫉モノ

妬をさしていへりとぞ聞ゆるえ恨みじといへるも馬頭が女に對ひていふに女の馬頭をえ恨みじといふ意としては事がらの情穩かならずよく〱味ひ考ふべしさてうきふしといへるは馬頭が心にうしと思ひたるふしと見るべしさらばえ恨みじといへるも馬頭が女をえ恨みじといふ意となりて事なく聞ゆるなりずといはずしてじとしもいへるは女の方を推量りていへるやうにも聞ゆれど猶さにはあらじ俗言にユメユメ恨ミハスマイといふ意なればさても聞ゆる也

りんじのまつり 廿四丁オ〔餘〕大鏡五十九代寛平十一月廿よ日のほどにかものみやしろのへんに鷹つかひあそびありきけるにかの明神たくせんし給ひけるやう此へんに侍る翁なりはるは祭おほく侍り冬のいみじくつれ〲なるに祭り給はらんと申給へば云々おのれはちからおよび候はずおほやけに申させ給へと申させ給へば云々かいけつやうにうせ給ひぬいかなることにかとこゝろえずおぼしめしけるほどにかく位につかせ給へりければりんじのまつりせさせたまへるぞかしかもの明神のたくせんして祭せさせ給へと申させ給ふ日酉の日にて侍りければやがて霜月のはての酉の日臨時の侍るぞかし云々

はかなき花紅葉といふも云々 廿七丁ウ〔玉〕上文頭書ニ擧タリをりふしの色あひとは花紅葉はもはら色をめづる物なる故にいへるにこそあれ人の物染る色のくらべ物にいへるにはあらずこゝは上にはかなきあだ事をもまことの大事をも云々といふよりそのかたもぐしてといふまでをすべてうけて花紅葉をくらべ物にいへるなりこれを唯物染る事のみのくらべ物としては次の語にさるによりかたき世ぞとは云々といへること似つかはしからず物染ることのつたなからんばかりをばかくはいふべきにあらず女の身のうへのすべての事としてこそ次の此語もよくかなへれ又たみ詞の此あたりの説もひがこと也

かたき世ぞとは云々 同〔玉〕此所湖月又たみ詞などすべての意を誤れるによりてひがこと多しかの女の早くうせて契のみじかゝりし事を難としていへるはたがへり又或説に嫉妬の深かりしを難としていへるもたがへりこゝは彼女の事はもはらほめたる所にて難の方をいへる所にはあらず定めかねたりといふはかの女の如く大かた何事もたらひたるは有がたき世中なる故に定めかねたるよし也次の

詞にいひはやし給ふとあるを以てかの女をばもはらほめたるにて難の方をいへるにはあらざることをしるべしさて又湖月に世は定めがたき物ぞとゝいへるもいみじきひがこと也定めがたきは女の事にこそあれ世の事にはあらずつひのよるべとも定むべき女は有がたき世中なる故に定めがたき也　**この人のいふやう云々心ぐるしきとて**　廿八丁ウ［玉］これは馬頭が木枯女の家に立よらむと思ひて殿上人にいふ語なり然るを昔よりこれを殿上人の語と心得たるはいかがさては此所聞えがたしされはこの人のいふやうとあるはもとこの人にと有けんを殿上人の語と心得たる人のにをのに改めたるかはたのと誤りたるから殿上人の語と心得たるにも有べしもしこれを殿上人の語とする時は下にもとよりさる心をかはせるにや有けむといへる事たがへり其故は待やどのあると初にいひたらんには心かはせるはもとよりの事なればにや有けんなど疑ふべくもあらずそのうへこれ殿上人の語にてはとてといふ辭も下にかゝる所なしおのれもさきには殿上人の語と心得て此とての下にそなたざまに物するになどいふ詞の落たるかと思へりしをなほよく考ふればとにかくに殿上人の語にてはかなはず馬頭が語にてとては下の下り侍りぬかしといふへかゝれる辭なり殿上人に云々といひて車よりおるるなりされはこの語はさすがにてといふ下へうつして心得べし（釋）この小櫛の說珍らしきやうなれど猶つらつら考ふるに殿上人の語なり其故はまづこの車にとあるは馬頭が車あひのりて侍ればとあるはうへ人なること論なしさて大納言の家にまかりとまらんとするにとあるは馬頭なればこの人にいふやうとありては語つゞかずもしこの人にの意とせばまかりとまらんとしてなどなくてはとゝのひがたし下にもとよりさる心をかはせるにやありけんといへることたがへりといはれつれどさもあらず人待らんやどのあるといひたるは殿上人の馬頭が車に相乘てゆく道のほどの物語と聞えたれば馬頭はその待らんやどを何處とも知るべきやうなし下にてしかいへるは既に殿上人の車よりおりてこの女の家に入て簀子だつ物に尻かけたるを見てはじめてこの殿上人と木枯女と心をかはせる事をさとりてさては今宵のみならず元來心をかはせるにやありけんと思ひたるなれば難なし

又とてといふ辭も下にかゝる所なしといはれたれど殿上人の語としてもとては同く下侍りぬかしへ係る也侍りぬ。といへるは馬頭めきて聞ゆるやうなれどこれは源氏君頭中將などに對ひて語り申す敬ひ詞なれば論なし上にもあひのりて侍ればとあるも殿上人の事なればしかいふべき例なりかしといふ辭もわがうへにては用なく聞ゆるを思ふべしされはかた〲殿上人の語といふかた穩かなり但月だにやどるすみかをすぎんもさすがにてといへるは馬頭が思へる心めきても聞ゆれば此あたりに必脫文はあるなるべし。とての下に。そなたざまに物するになどいふ詞の落たるかといはれたるはさもや有べきもし然らばおり侍りぬといふ語は馬頭のうへとなるべしされど正しくさなりともおぼえずすべて此一段は殊にかすめたる筆つきにていとまぎらはしきをなほ試にそのさまをいはゞ上に忍びて心かよはせる人ぞ有けらしといへるは後に此段を語らんとての結構なれば重りたるにはあらず。さて神無月のころほひ云々といふよりこの物語の始なるが馬頭が内裏より退出るに或殿上人來會て馬頭が車を乞て相乘しつかくてなにがしの大納言

といふ人の家にて行とまらんとしてゆくに。この殿上人のいふやう今よひ云々といひて。車より下侍りぬといふ中間にこの女の家のけしきを挿みて語れるなり大納言の家にまかりとまらんとするにといへるは大納言の家の門にて車をとめんとするやうにも聞ゆれど。この女の家はたよきぬ道なりければとあるは。大納言の家までゆくによけられぬ道の家なれば。といふ意なるべければ。なほ大納言の家にゆきてとまらんとてゆくみちのことゝすべし。さて女の家の前を過んもさすがにて馬頭も立よらんと思ふうちに。殿上人のまづ下て内に入て簀子だつ物にしりかけて月を見たるなるべし。此所の文さばかりくはしくは聞えねど前後のさまをおして思ふにさる意と聞ゆさてこの殿上人の先車よりおりて入るを見てもとよりさるこゝろをかはせるならんと馬頭のさとりたるなりさてこの時馬頭はもろともにおりて物かげなどよりうかゞひ見たる。か或は又車に在ながら見聞したるか其ありさまを省ける故に今少しまぎらはしされど女の體馬頭が來れる事はつゆもしらぬさまなれば馬頭は外にありてかいまみたる事は著く聞えたりこれら名文の故に

もあるべけれどかいなでの筆にては必馬頭が所在をあらはしおくべき所也さてこの大納言は河海に馬頭が父歟と注せられたるげにさもあるべし少しゆくりかなりされどなほ誰ともなし又とまらんとするにとあるも車をとゞめんとする事か或は行て宿らんとする事か何れにても聞えたれど猶まぎらはし　**おり侍りぬかし**　同〔玉〕馬頭車よりおるゝなりもし上のこよひ云々の語を殿上人の語としてとてをこゝへかけて殿上人のおるゝにしては上よりのつゞきかなはず〔釋〕おりは殿上人のおるゝ也とてはといひての意にてなほ殿上人也又案に上にもいへるごとくすぎんもさすがにてといへるは馬頭が心めきたれば馬頭ももろともに下たるにもあるべし殿上人のいへる詞と馬頭が思ふ心とを引すべて相共に下たるを語る也かやうの法をり〳〵ゆりさらば馬頭は物陰よりかいまみたる也　**和琴**　廿九丁ォ　〔河〕和琴に能鳴調ありそれにそへていへる也和琴は伊弉諾伊弉冊尊御時令作出給云々仍諸樂器乃最上ニ置之也あづま琴ともあづまともいふなり鴨長明記云和琴はもとは弓六張をひきならべて用ゐけるを後に琴に作りたる也云々りちのしらべとは春夏は呂双調也秋冬は律平調也云々〔新〕倭琴の始を神代に有といふは據なし仲哀紀に弓六張をならして神託を申させ給ふより始れりといふ説はさも有べき事也さて萬葉には梧桐日本琴一面と書たればやまとごとゝいひしを其後倭琴とも書しより後には字音にてわごんといふ此物語にはいかでやまとごとゝかゝざりけん末にあづまといへるを思へばこゝにもあづまとや有つらんおぼつかなし此琴は鵄尾琴ともいひしと和名抄にみゆ〔餘〕和名抄云日本琴萬葉集云梧桐日本琴一面天平元年十月七日大伴淡等附使監贈中衛將督房前卿之書所記也體似箏而短小有六絃俗用倭琴二字夜萬止古止云々〔釋〕河海に能鳴調とあるはさる曲名かいとまぎらはしこゝはたゞすぐれてよく鳴る琴とのみ見るべし伊弉諾云々の事うけがたきこと新釋のごとし天照大御神の岩屋戸にこもり給ひし時に起るなどもいふにや皆證なき妄説也琴の事は古事記上に天詔琴と見えたるが始也されど其形はいかなりけん知れがたし又これを諸樂器の上におく事はわが御國の物なれば伊弉諾云々の故にはあらずさてまた新釋にいかでやまと

ごとゝかゝざりけんといはれたるはいかゞわごんどなべていへりし世なりしかばしか書たるまでにて何の事もなしあづまといへるは又しかいひてよろしき所也わごんと書たるが拙きにはあらずさて又呂律を陰陽五行四時などに充(アテ)たる説は其器をたふとくせんとていふこと也あながちに此理有にはあらず　**をりつきなからず**　同〔餘〕をりふしのをりにもつきなからずなりつきなからずはつき〴〵しきにてをりからに似つきたりと也　歌　**琴のねも云々**　同ウ〔新〕月を一本に菊とあるは菊を折てと有に菊のよせ少しも歌に見えねば本は菊と有しにやされどことの様月とあらんぞ歌には似つきたる此二つ穏ならぬをおもへばもしはつれなき人はうつろふ人とや有けん然らば今菊のうつろひ盛ならんによし有其上つれなき人と打つけていはん理も此前後に見えねばかた〴〵此句も違へるかとおぼし〔釋〕月とあるは實に緣なし菊とあるかたをとるべしこの新釋にいはれたるごとくうつろふ人などあらば歌のよせはあめれど事がらに似つかはしからずつれなき人と打つけていはん理もなしといはれたれどそはつれなきを普通に見られたる故也つれなきは必しも其人に對ひてつらき意のみにはあらず俗言にナンノヘンモナイといふにあたる詞なればこゝに論なし予(オノ)が説は頭書のごとし　**今ひとこゑ聞はやすべき人のある時に**　同〔釋〕この今といふ詞は今一聲のきかまほしさになどいへる今にて俗言にモ一(ト)コヱといふモ。にあたれり然るを諸注に即今(タヾイマ)といふごとく見られたる故にこのきゝはやすべき人とあるを殿上人のみづからいふと解(カ)れたりいみじきひがこと也よく〳〵味ひて知るべし　**さてそのふみの詞はと問給へば**　卅三丁オ〔玉補〕此詞にて中將の思ひ入てしばし物をもえいはざる體のしらるゝは面白きかきざま也かの左傳の有窮后羿晋侯曰后羿何如とある所も是に同じ左傳の注家はさらにこれを得しらぬを式部は才子なる故によくさとりてうつし取たるにや又はさらずとも才子どちのしわざはおのづから符合もしつべし此卷の品定は皆論のみなる中にまことに有し事の昔語のあはれ此卷限にて後につゞく事なしそのなからに此一段を挾みいれて後の卷々の伏脉としたるいとおもしろし〔釋〕この說賞(ホメ)たる所はげにさることとなるを左傳を引てうつし取たるにやなど

いへるはわろしこれほどの事の似たらんは何のうへにも多かなるをこれはかりしかいはんものかは此巻の品定はといふより下つかたの論はいとよく見出たるにてめでたし　むかし物語めきて　同〔新〕うつぼの俊蔭のむすめのあれたる家にひとりゐたるさまなどよく似たり其外にも今見えぬふみにも有べし是もさだかに何れとは聞えぬにて却てよし物の注などの如く思ふべからず　歌　さきまじる云々　同〔新〕なでしことこなつ同じ花ながら二つの名あるにつけてなでしこは撫あはれむ子にたとへとこなつは相ぬる床にいひかくれば女の方にたとへなしたるのみさて此花夏を専らとして秋の末冬かけてもかつ〴〵あれば夏を常(トコ)とはにするいひにてとこ夏とはいひはた其花いともらうたげにてうつくしまるればなでしことももいふ也云々心をとるは其人の心にかなふべき筋をとりなす也上の夕顔の歌は我身をおきてわが子のうへをいひたるを中將はわが子をばおきて母の心をとるべき返しなりこれもかへしの一つにておもしろし　されはかのさがなものも云々　卅四丁ウ〔新〕これよりは或人は馬頭が語といひ或人は猶中將の詞といひてとり〴〵なり中將のならばかのさがなものとは馬頭にむかひてのたまはじか馬頭ならばあきたき事もありなんやことのねのすゝめりけんもなどの詞よそよそしき也仍ておもふにこゝは下にみなわらひ給ひぬといふ詞などをもておもへば右のされはといふよりは中將と馬頭ととり〴〵いひし詞を一つに書まぜたりとすべし餘りに各いひことわりたれば又かく二人の詞をかきまじへんも文なり〔玉〕これより又馬頭が語といふ説と中將の語といふ説といづれもすてがたき所ありてさだめがたきをたみ詞に賀茂翁のいはくこれより下の皆わらひ給ひぬといふまではまづ馬頭のいふよりはじめて中將の詞も有上には問答を分て書(キ)こゝにては二人の語をひとつに書たる物也さて皆わらひ給ひぬといふにいたりては源氏をもかねたりとある説よろしそれにとりてなほ二人の語を分ていはんにはされはかのといふよりありなんやといふ迄は馬頭也其故は中將の語にては馬頭に對ひてかの女をさがなものとはいふまじくわすれがたけれど。ゝいふも人のことゝは聞えざれば也有なんやのやはよの意なり次に琴の音云々よりうたがひそふべければ

といふまでは中將の語と聞えたりすゝめりけんは馬頭が物語をきゝていへるやうに聞えこの心もとなきもといふはおのがうへの事をいふやうに聞ゆれば也さていづれとつひにといふよりは馬頭ともすべけれど上よりの詞つゞきたれば猶中將の語なるべくこのさま〴〵のといふよりぞ馬頭なるべきこれも猶中將とせんもあしからじ(釋)右の説どもさることのごとくなれど猶よく案に花鳥に中將の語とせられたるにしたがふべくおぼゆ其故はされぱかのと打出たる詞わが語をつぎて端を起したりとのみ聞えて人の語を受て答へいへりとはきこえず此物語の文かゝる所にてきはやかに自他の差を立ぬは例の事ながら猶誰が語とも分らぬやうにはあらず自より他に移る所などは必その人の形容などを挾みて其わかちをば立られたるを此所は聊もさるさまには聞えざれば也さがな物といひたるは上の馬頭が詞にこのさがなものを打とけたるかたにてといへるを受ていへるにて人の物語するには其人のいふまゝにかたる事今世にもある事也わすれがたけれどゝあるも馬頭が物語をさながらうけていへるなればこれはた中將の語とせんにな

でふ事かあらんありなんやのやを小櫛によの意也といはれたれどこれも激辭のやにて問かけたる意なれば中將の語として論なかるべし琴の音といふよりを中將の語とせられたるはさることなれど上を馬頭が語としてはゆくりなく聞ゆべしこの心もとなきといへるはかのさがなものとある波に對へたる詞なればかた〴〵一つゞきの語なることゝ決しさていづれとつひにといふよりを又馬頭が語といふ説はとられざりしかどこのさま〴〵のといふよりをば馬頭とも中將とも定まらぬさまにいはれたりされどこれも皆中將なり然れども又わびしかりぬべけれとて皆云々とある語勢を思ふにこのさま〴〵のといふよりは誰ともなくてみな〳〵同じくいひしらがはれたる語とすべし皆といふにて然聞ゆよく〳〵味はふべし　**吉祥天女を思ひかけんとすれば**　卅五丁オ　(釋)玉小櫛に引れたる日本靈異記の事はげに此事のよりどころなるべくみゆその事は聖武天皇の御世に信濃國の優婆塞和泉國和泉郡血渟の上山寺に來り住るが其寺にある吉祥天女の像を見て愛戀の心を生じいかで天女の容のごとくなる好女をあたへ給へと毎日六時に願ひ

けるほどに或夜夢にかの天女の像と交合すと見てけりあくる日かの像を見奉れば裙腰淫精に染穢し給へりとぞ記したるそのかみの物語にて誰も知たる事にこそありけめ〔玉〕狹衣云御供の人々はまだかゝる事はなかりつる物をいかばかりなる吉祥天女ならんさるはいとものげなきけしきなるをとおの〳〵いひあはすべし云々これ狹衣大將の御供の人々の飛鳥井の姫君の事をいふ也〔餘〕うつぼ物語初秋の巻にみん人に心とめられぬべき心ありて吉祥天女にもいかゞせましとおもはせつべき大將なり云々 **ほうげづき** 同〔玉〕濱松中納言物語ににびいろかうそめなどあまたかさねてうちやつれ給へるいろ〳〵にしやうぞきたらんよりもなまめかしくさまかはりほうげづきたふとげになりて **さいし** 卅七丁ォ〔新〕續日本紀八元正養老四年四月三位以上ノ妻子及四位五位ノ妻子並ニ聽スレ服ルヲ二蘇芳ヲ一也と見えたるも妻の事のみを妻子といへり〔餘〕妻をさして妻子といふこと唐人の俗語にもしかいへり **はかなくくちをしと云々しさいなき物は侍める** 同〔細〕藤式部が詞也女を或ははかなし或はくちをしなどは思へども宿世にまかせてあれば男はしさいもなき物なりとなりすぐせのひくかた侍めれば。とよみきりてをのこしもといふよりおこして見るなり大かた男子はやすきものなりとなり花鳥の義には上へつけひとつに見る也をのこのためしさいなきと云々いかが〔孟〕男は身が持よきと也〔箋〕此段猶思惟すべきよしあり〔萬〕大かた男子はやすき物也云々すぐせのひくかた侍めればとよみきりて次の詞を見るべし云々〔祇〕をのこほどよき物は侍らずの心也云々〔湖〕女は才智なくてくるしからぬゆゑをいふ也云々男にしも子細なくて大やうなるもののある物をまして女は才學はいらざる物ぞとの心也子細は物のこまかなる事也子細なきとは大やうなる義なり〔新〕既に馬頭のいひけんかたちなどよきも心したらねば口をしきこと多きとは異なるやうなれど此さかしものはたゞかたくなゝる男のさまなればはたいふにもたらずかゝる女よりはまだかのはかなくくちをしきも縁にしたがひて男の心に捨がたく思ふをばさてもある事なればただ男ばかりぞ何のいひどころなくよきものなりと申す也とかく女には既にいひしごとくの難あり又申すごときも侍るぞといへり女の心かしこきをひたぶる

にすてよといふにはあらず次下にそのよきほどのまなびなどをばことわりて書たるをあはせて見るべし○しさいなき物は云々是は男ぞ何の難なき物也といふをかくなき物は侍るとも書又なきものはあるなども物語ぶみ枕草紙などに書たり後の俗はしさいなきものはなしといふをのみ思へる人の說には違ひ侍り且此しもの二辭は必しもと云入れ又は青柳の絲よりかくる春しもぞなどいふが類にて一つの辭也常にいふしは助辭もは物をかねていふ辭と思ふべからず且此なんはぞといふがごときいひざま也(釋)此段いたくまぎらはしきを諸注解得られたりとおぼゆるも見えずさればいづれも引出てこゝに擧たりくらべ見て考ふべしこの中に細流は大かたよろしと聞えて花鳥の義をいかゞと難じ給へることわりあり萬水一露はたゞ花鳥細流のむねを記したるのみにて事のすぢ聞えず湖月は子細なきといふ注はかなひたりと聞ゆるを女の才學はいらぬ物といふ心とあるはすべてひがことなり新釋は長々しく解れたれどすべて何事とも聞わきがたく大かたはあだし事をのみいはれたるやうなるはいかにぞやその中にも男ばかりぞ何のいひどころもなくよきものなりといはれたるはいみじきひがことなり頭書に擧たる玉小櫛はすべての意をば得られたりとは聞ゆれど女の學問はなくてもありぬべきといふことをふくめたりといはれたる本文にさる詞なければうつなくさやうには聞えずすべて何れも〳〵かなへりとおぼゆるはなしさて今試にいひたりとも又かなふべくはあらざめれどおのが思へるよしをも聊いひてんさは先はかなしくちをしとかつ見つゝもといへるはわがあひそふ女をはかなしくちをしとかつは見ながらもといふ意たゞわが心につきすぐせのひくかた侍るめればとはたゞ相見る男の心につきて宿世の因緣のひく所もありと見えたればといへる意にてわがは相見る男の我なりこゝろにつきては俗言にきにいりてといふにひとし宿世は例のがれがたき自然の理をいふ侍るめればゝありと見えたればの意なりめればといふに心をつくべしをのこしもなん子細なきものとはをのこは男子なりしもは例の物一つとり出たる意の辭にて女もあれど男をつよくとり出てしもといへるなり子細は字のごとくこまやかなる意なれば子細なきはこまやかならず大

やうなる意なりかくて上文の詞どもよりつゞけて解んに才學ある女を妻としては無學の夫のなまわろならんふるまひなど見られんときその妻に對してははづかしきやうにも見え侍りき我等だにかくのごとしまして君たちの上なき御ためにはさる才學だてする後見をまうけて何にかはし給はんといふ意にてすべて女といふものはたゞなつかしきをのみこそめづべきものなるにさはなくて才學のしたゝかなるは我妻といはんにもかゞやかしく心おかるゝものなり然れども我らがごとき賤しき者はその妻の才學にて身を立ることなどなきにしもあらぬを君たちはさる後見せん人は他にいくらもおはすべければなつかしかるべき女のさはなくてなか〳〵にしたゝかに才學ある後見は何にかし給はんたゞなつかしくらうたきをこそもとめ給はめといふ意を含めたる也そはたしかにふくめたりと見ゆる詞はなけれども上文よりつゞけたる語の勢にてさる意とは聞ゆる也さてはかなしくちをしとをりふしにつけてかつは見つゝもいはゆる宿世の因縁といふものにひかるゝ所もありと見ゆれば我心にかなひだにすれば男ほど何のむつかしき子細もなく大やうに事すむものはなしといふ意也わが心につきすぐせのひくかた侍るめればとは宿縁ありてきにいるといふ意なりそは氣にいるも卽宿世の因縁にひかるゝなれば我心につきすぐせの云々とはいへる也かくして見る時は大かた事もなく聞ゆるやうなるは猶ひがことにやあらん　**はなのわたりをこめきて**　同〔玉〕俳優めきたる顏をして也西宮記に右近衞內藏富繼長尾末繼善散樂合人大咲　嗚呼者也注にをかしきをこらへたるさま也といへるはひがこと也こもじを濁るもわろし〔釋〕鼻のわたりは鼻の邊也をこめきてはをこなる顏をして也をこは今いふバカアホウなどにあたれり　**ごくねちの草藥**　卅八丁オ

〔拾〕後拾遺俳諧にひるくひて侍ける人いまは香もうせぬらんと思ひて人のもとにまかりたりけるになごりの侍けるにや七月七日に遣はしける皇太后宮陸奥「君がかすよるの衣をたなばたはかへしやしつるひるくさしとて〔餘〕宇都保物語國ゆづりの卷に日頃はかくごくねちのころに侍ればゝゝるしうて內にもまゐり侍らずと有〔釋〕古事記云到足柄之坂本於食御糧處其坂神化白鹿而來立　爾卽以其咋遺之蒜片

端待打者中其目乃打殺也日本紀景行四十年日本武尊云々山神令苦王以化白鹿立於王前王異之以一箇蒜彈白鹿則中眼而殺之云々先是度信濃坂者多得神氣以瘼臥但從殺白鹿之後踰是山者嚼蒜塗人及牛馬自不中神氣也とあり此草げにかゝる効ある物にて寒暑の邪氣山海の瘴氣を防ぐにきはめてよしされば夏の土用にも暑氣を拂はんとて喰ふ故に極熱の草藥とはいへるにこそ細流にも記されたるを思へばふるき世よりのならはしと見ゆ風病に効あることは小櫛に引れたる春記の韮草にて明らか也韮も蒜も効は大かた同じき物から蒜は殊に勝れたり　歌さゝがにのふるまひ　卅九丁ウ〔餘〕わがせこが來べきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも是は古今集墨滅の歌也日本紀に見えたるは我せこがくべき宵なりさゝ儀泥のくものおこなひこよひしるしも（釋）日本紀なるは小竹之根の隱るとかけたる枕詞にて小竹の根はいとしげくこもりて隱ある物なるを蜘蛛にいひかけたるなり隱るとは隈とは通ふ音にて同言なり然るを古今集にさゝがにとよみそこねて入られたるによりて蜘蛛は小竹の中にすむ蟹のごとき物なる故に小竹蟹といふなどいへる說も出來にたるは笑ふべし蜘蛛と蟹といかでか同じからんもし足の八つあるをもていふといはゞ蛸なども其類なるべしとかへす〴〵をかし日本紀の泥字はネにのみ用ゐてニにはあらざるをやさてこゝにさゝがにを即て蜘蛛の事としたるは山をあしひき奈良をあをによしといへる類にて枕詞を其物に轉していへる歌詞の例なり　つまはじきをして　四十丁オ（釋）或抄にこの下に「かのにほひはかげどもまたまねびなせそ」といふ詞ある本あるよしいへり然れどもかげどもとある所今少し言の意たしかならねば諸本の此詞なきにしたがへり後人考へて定むべし　むげにしらずいたらずしもあらん　同ウ〔玉〕學問のすぢらを也　すこしもかどあらん人の耳にも目にもとまることと云々　同〔玉〕かどあらんにて切べしたてゝ學問とてはせねどもすこしもかどあらん女は世の人の耳にとまるしわざはおのづからおほかるべきことにてめづらしからねばそれに高ぶりほこるべきことにはあらずとの意也かどあらん人のとつづけて見るはわろしかどあらんは其女の事にて人は

世の人也(釋)この小櫛の說はひがことと也まづおほやけわたくしにつけて云々とあるを學問のすぢと見られたるはいかにぞや三史五經の云々といひたるこそ學問の事なれこゝは世にある事の公私につけてとあればたゞ公私の事につけたる世中の事なる事論なしはじめに學問だてする事の愛敬なきを先いひて次に世間の事を知がほするけにくさをいへるにておのづからよく別れたるをや案にかどあらん人のとあるかどをふと學問の事と思ひたがへられたるよりかくは解れけん才字をかどゝはよめれどかどゝいふ時は才智の事をいひざえと音にていふ時は學才の事をさす例なればさは聞えがたしさてさるまゝには云々といへるは學問だてと事しりがほと二つのことをうけていへるなりかどあらんにて切べしといはれたれど切てはあらんとあるんの辭とゝのはず何事とも辨へがたくなるなりよみわぢはひて知るべしさて又湖月抄におほやけ私の事につけて態と習ひ學ばねども又かどある人の耳をとゞめ目をとゞむるほどの事女のしわざにも自然に多かるべしさやうにありとて又女文字を眞名にかきなどせんはあしからんと也といへるは耳にも目にもとまる事とあるを女の行狀と見たるにていみじきひがことと也かくては女といはんからにとある語の勢にかなひがたくさるまゝにといへるにもつきなしかどあらん人とは女といはんからにといへる女をさしたるにて其女にすこし才智あらば世間大小の事につきて耳にも目にもとまる事自然に多かるべしといへる意なるをや

歌よむと思へる人の 四十一丁ォ　(釋)玉小櫛にこれを消息文かく事をいへるやうに釋れたるはいかゞ消息ぶみの事はさるまじき中の女ぶみにとあるが消息の事にてそはすでに此かたのたをやかならましかばと見ゆかし云々と評じをはりたればこれよりは歌よみにほこるかたのわろきをいへる事論なし歌にまつはれとは我は歌よみなりと思ひほこれる其歌にやがて我身のまつはれてさまぐ〵つきなきふるまひするをいへるなりやがてといふ詞に心をつくべし然るをやがてとは歌よみなりと思ひをる心にてそのまゝ消息文も歌にまつはるゝなりといはれたるは事のすぢいたくたがへり人の歌にまつはれとあるが消息ぶみの歌にまつはれとはいかでか聞ゆべきかく思ひたがへられたる故によ

みかけたるとあるをも消息ぶみに歌をよみてやる也と注せられたりよみかけといへるはたとひ消息ぶみの中にかきてやるにもあれ言のすぢはたゞよみかけたる事のみなる物をや　**五月のせち** 同〔花〕五月五日の節天皇あやめのかづらをかけ給ひて武徳殿に行幸あり内辨外辨等節會のごとし宮内省献二菖蒲一内侍藏人續命縷を群臣に賜ふ三献をはりて六府騎射の事あり云々　**えならぬねを引かけ** 同〔拾〕なにのあやめは菖蒲にかけていへりえならぬは伊勢物語に木の葉ふりしくえにこそありけれわたれどぬれぬえにしあればなど江に縁をかけて淺き事にいへば淺からぬをえならぬといふ歟それにとりて深きためしには堀江などを引ていふ事にて江は淺からぬ物なればこれは江にはあらで瀬をいふ歟えとせと同韻にて通ずる故に兄をせともえともよむこれになずらへて知べし然らばえならぬ根はふかき根すなはち上のあやめのね也それを深く思ふ長くわすれじ又はいはひにもよみかくるは藥玉かくるに縁ある詞なれば引かけといへり〔新〕えならぬとはえもいひしらぬといふ略語にて是はあやめの長き根とほめていふなりさてこゝには只あやめの根を引かけといひて足れるやうなれどしからずこゝは參内に心いそがしくてのみ有時に却て似合ぬ艶なる詞をもていひかくるなればわざとえならぬなどの語をおきて侍りかくわざと詞などの似つかぬを用るも又文なり文意をさとらぬ說々ありいふにもたらず○引かけとは其あやめの根にいひよせて歌をよみかくるを文にいへり次の句に菊の露を託よせといへるにむかへてしるべしかこちは繫着る事なれば引かけといふに意同じ〔釋〕右の說どもくだくだしくして言の意聞わきがたし拾遺にえならぬに江を兼たるやうにいはれたる意はあるべき歟さらずともこゝは聞えたり江にはあらで瀬をいふ歟云々とあるは殊に何事とも聞わきがたし引かけも藥玉まではかゝらざるべし新釋にえならぬをえもいひしらぬといふ略語といはれたる略語とてはわろけれど意はさることゝ聞えたり然るに又あやめの根を引かけといひて足れるやうなれどしからずとていはれたることは例のくだ〳〵しくて聞とりがたしあやめの根の縁に引かけといへるにて事足れることと也何のふかきえにかあらん頭書に擧たる玉小櫛を得たりとすべし舊

注どもにえならぬを緣ならぬ或は艶ならぬなど注せられたるはいみじきひがことなるを拾遺も新釋もそれにかゝづらはれたるからにかく何事とも聞えぬことをばいはれたるなるべしえならぬのえ。はいかなる心とも思ひ得ざれども湖月師說に只ならぬ樣とほめたる心也といへる意にいづこも〳〵つかひたりさればこゝも急ぎ參內するとて心あわたゞしき朝にたゞならぬ根をよせにしたる歌をよみかけてわづらはする意なりされどもえならぬにては猶あかぬやうなればもとはえ。さらぬとや有けんさらば去サることを得ぬ意となりて引かけとゞめられたりといふにいとよくかけ合て緣あることゝちする也　**九日のえん** 同〔花〕重陽の宴には天皇南殿に出御ありて內辨外辨等有文人博士を召れて題を奉らしめて各韻の字を探りて詩を作て文臺の上にて講ずる也三献あり氷魚を賜ふ御帳の左右に茱萸の袋をゆひつく御前に菊の花を瓶にさして立らる近代は宴の儀絕たるによりて宜陽殿にて平坐とて上卿以下着座して菊の酒を給ふよし仰らるそのよし計なり　**なか神** 四十四丁オ〔餘〕古今雜上かたゝがへに人の家にまかれる時にあるじの衣をきせける後撰戀四かたふたがりて男のこざりければ「あふことのかたふたがりて君こずは思ふ心のたがふばかりぞ大和物語に監の命婦のもとに中務の君おはしましかよひけるをかたのふたがればこよひはえなんまうでぬとのたまへりければその御返りことに「あふ事のかたはさのみぞふたがらんひとよめぐりの君となれゝば貫之集詞書にちかどなりなる所にかたゝがへにある女のわたれると聞て云々又三條のないしのかたゝがへにわたりてつとめてかへるに伊勢集にかたゝがふとて京極なる人の家にいきて云々金葉集戀下をとこのけふはかたゝがへにものへまかるといはせ侍りければつかはしけるよみ人しらず「君こそは一夜めぐりの神ときけなにあふことのかたゝがふらん　江次第抄云天一己酉ヨリ至二甲寅一テ六日在リ二艮方一ニ乙卯至二己未一五日在二卯方一庚申至二乙丑一六日在二巽方一丙寅至二庚午一五日在二午方一辛未至二丙子一六日在二坤方一丁丑至二辛巳一五日在二酉方一壬午至二丁亥一六日在リ二乾方一戊子至二壬辰一五日在二子方一癸巳至二戊申一十六日在二天上一ニ在ル二天上一ニ之時向テレ乾ニ拜スルレ之ヲ爲ス二秘事ト一〔新〕中央に立つ神なれば中神とはいふべし巡行の時

日を經てゐる故に長神と云といふはいかにぞや　**き**
のかみにてしたしくつかうまつる人　同（新）紀伊守
は源氏の家人也といふ説ありいにしへは其家につか
ふるを家人といふは諸氏にていふ名也令を考るに職
事の親王には一品以下四品以上皆文學家令扶書史等
あり今源氏親王にはおはせねども別勅にて親王の下
大臣の上に座する程の事なれば文學以下を賜はるべ
きか然ればそれらが中より考撰にあひて昇進して國
守ともなる有べし又さなくとも女房などのよし有て
名簿(ミヤウブ)まゐらせて家來の樣にして終に官に仕るもある
べし必家人とさだむるはおぼつかなし云々（釋）中ご
ろ唐國の制度を摸(ウツ)されし時はよろづ彼國ぶりに物せ
られしかば君臣の分別(ワイダメ)もさばかりけぢえんにはあら
ざりけん我國の上古のさま又今世のさまをもて見る
べきにあらずまた令條に記されたる事もやゝ後世と
なりてはさながらに行はれたる事のみにもあらねば
ひたぶるにそれをもてもいふべからずこの一條院(ノ)天
皇の御世のころは地下の官人などは大かた權勢ある
家々に私につかへてその勞をもておほやけにつかう
まつるくさはひとして官位をも賜はるさまなること

多しこの紀伊守もさる人にて國守にはありながら源
氏君に心よせつかうまつる人なるべし空蟬卷に紀伊
守國へ下りなどしてとあればこゝは暫く上京せしほ
どなるべしとにかくに朝廷よりさだめ給へる文學な
どのさまには聞えず今俗の書に用人の者といふべき
さまと聞ゆ　**こゆるぎのいそぎありく**　四十五丁ゥ
（餘）拾遺戀四小式部命婦「いかにしてけふをくらさ
んこゆるぎのいそぎいでゝもかひなかりけり同雜戀
よみ人しらず「こゆるぎのいそぎてきつるかひもな
くまたこそたてれおきつ白波（釋）これは類例なりこ
ゆるぎのいそぎといひかけたるは枕詞の例にて津の
國のなにはおもはず山しろのとはにあひ見んことを
のみこそ又みちのくのしのぶもぢずり高砂のをのへ
の鐘などの類ひなりさてこゝに引る風俗歌にあるじ
はいもとさかなきにとあるを舊注どもになきにと
せられたるはなきといふ事を心得かねてさかしらに
改められたる物と見えてなか〳〵いみじきひがこと
也又玉だれの小がめをこがめとあるも誤也玉垂(タマダレ)のは
緒(ヲ)とかけたる枕詞なればこがみといひてはあらぬ事
となれり改むべし　**きぬのおとなひはらはらとして**

四十六丁オ〔細〕夏はみなすゞしをきるべきほどに音あるまじきこといふ説あり頗いりほが歟夏もひねりがさねとて下のかさねは板びきなり音あるべし又はり袴もいたびきなれば音なくては不レ可レ叶〔拾〕日本紀に啼噪の字をおとなひとよめり詞花集雑上にしのびたる男のなりけるきぬをかしがましとておしのければよめるいづみ式部ー音せぬはくるしき物を身にちかくなるとていとふ人もありけり　**さうじのかみより**　同〔新〕障子の上よりなるべし紙より火かげのもる也てふ説は今の紙一重はりたるあかり障子の事と思へるにやさらばいかにもすきかげ有べきをひましなければといへば必古へ絹布などを表として紙の中へをはりたる障子にこそあらめ且次下にすのこの中のほどにたてたる小さうじの上よりほのかに見え給ふ御ありさまといふはついたてさうじなるべけれどかみよりてふ詞の同じきを思ふにさうじひきたるなげしの上に透たる所あるより火かげは見ゆるなるべし源氏をおはしまさせたる間のへだてをうすき紙してはれる今の如きさうじのみにては有べきにあらず〔釋〕この説一わたりいはれたり然れどもこゝは猶紙なるべきにや火ともしたるすきかげさうじのかみよりもりたるにとある語の勢あつき障子とは聞えずあつき物としては透影の漏るといふこといかゞなり上文に格子はあげたりつれど守心なしとむつがりておろしつればとあればなげしの上より見ゆるさまとも聞えず格子にそへたる障子に女の影のうつりたるが格子の間よりもりて見ゆる意と聞えたりひましなければとあるはしか影のもりたる故にもし見ゆるかとおぼしてのぞき給へど障子の紙にさへられて間隙のなきよし也さればこゝは猶紙なるべし又次下なるは上なるべし其故は簀子の中のほどにたてたる小障子のかみよりほのかに見え給へる御有さまをとある語の勢をおもふにこれはもとより簀子にて人ある處にもあらねばこゝより西の方へゆかぬへだてにかりに小障子をたてたるならめばさばかりきびしくさへぎるべきにもあらずかつ小障子としもいへれば上のあきたる事もしられたり然るを小補にこれをも紙よりの意として破れそゝけたる所のある穴などより見ゆる意と解れたるは上より見え給へるといふ語勢にかなはず破れたる穴などより見ゆる意ならば必そ

の故をいはではさとは聞えぬ事也然るを「小障子といへども上よりあなたの見ゆるばかりひきゝ障子は有べくもあらずたとひ有とも上より見んにはあなたよりもよく見ゆべければひそかにはいかでか見んといはれたるは中々にいかにぞやひくからぬ障子を小障子とはいかでかいふべきよしや又常ざまの障子なりとも簀子にたてたるならば其上は必ずあきてあるべき事なるをや上より見んにはあなたよりもよく見ゆべければといはれたれど彼は西ざまの格子をそゝき上ゲて遠くかくれて見出すべければこなたよりしか見ゆべきやうもなしさればほのかに見え給へるとことわりたるにていとよく情景をはづさずかゝれたるもの也さればこれは上カミよりとすべしたとひ同語の似たればとてそれをのみもて一つ事といはんは猶委しからずとや云べき

母屋　同（拾）上文略頭書ニ擧又延喜式に身屋とかゝれたる所ありみともとかよへばこれももや歟身狹とかきてむさとよむもみとむとかよへば也身狹は大和高市郡にある地名也（玉）身屋ムヤ也身を古へはむといへる例多しさてむともとは殊にちかく通ふ音にてもやといひなせるを母字を借て母屋モヤと書るそは母をおもといふ故に借て書るのみ也おも屋の義也といふ説はわろしさて身屋とは屋の内の眞中に在て主ムネとある所なるよしの名也俗言にも物の眞中を身といふに同じ（釋）案にこの二説のうち小櫛の説よろしげには聞ゆる物からなほ身屋ムヤといふはいかゞしくおぼゆいにしへは身をむといひ且みとむとは殊にちかくかよふ音にはあれど家の眞中なればとて身屋といはんはことやうなる名也延喜式に身屋とかゝれたる所あるこそ却て借字めきては聞ゆれ拾遺の説は母をおもといふ義をもていはれたるに（此説ハ頭書ニ引タリ）ほそどのひさしなどを子に似たればとあるも故なきにはあらざるに似たり且おもやとは今俗の言にもいひおものおを省くもあいうおの喉音を省く例なればさることゝ聞ゆ身屋の意なるをみやとはいはでおしてむやといはんもいかゞなるに又轉しかよはしてもやといはんは餘りに迂マハリドホ遠く聞ゆる也さればかたがた拾遺の説に隨ふべくおぼゆ但しそだつる恩のおもき故に母をおもといふやうにいはれたる説はしひごと也さてまた小櫛に身屋とは屋の内の眞中に在てむねとある所なるよしの名也とあるもいかゞ眞中にあるは母

屋のみならず寢殿も中にある也家の中にては寢殿こそ主とある所なれ母屋は主人の居る所にて今世に云勝手がたの所なれば旁いかゞ也　**歌ずじがちにもあるかな**　四十七丁オ（釋）萬水一露本又一本などに此下にどもじあり案にされど、ありしを寫し脱してともじばかりのこれるなるべし「されど猶見おとりはしなんかしとあれば事の意たしかに聞ゆるなり　**いづれかいつれ**　同ウ（釋）此語いさゝかまぎらはしさるはいづれかいづれかととひ給ふ意なるを下のかを一つ省きたるにやと思へどさては今少したしかならぬ意となれり又かもじを濁りていづれがいづれといふ意とすれば今の俗言にてはこともなく聞ゆれどかかる所のかを濁るは雅言の例にあらざればそれもいかゞ也されぱなほかもじは清てよむべしいづれかいづれなるといふ意なるを下のなるといふ辭を省きたる例とすべしかもじはなるにて結ぶ意也　**まうと**　同（新）眞人也古へは皇子に氏賜へるは某眞人といひて八等の姓の第一眞人第二朝臣と天武紀に見えたるを後に藤原朝臣盛になりてより源にも朝臣の姓を賜へりさて後に此物語の比となりてはかく對へる人を稱していふ語にも用ゐたり故に此同じ人をさして眞人とも朝臣とも源氏のたまひしなり（釋）いにしへはさま〴〵の姓ありしを天武天皇の御時に混じて八姓と定められたり其中に朝臣は字がらのよろしき故にや後にはこれを申し賜はるをいみじきめいぼくとしたるさま也史を讀てしるべし藤原朝臣の故のみにはあらざるべし朝臣はもとより借字なれど朝臣のもじの朝廷の臣といふがごと見ゆるからにおのづから尊びたるなるべしさて又唐ざまの御制度より後は人の實名をいふをば無禮き事としたればかく姓をもて呼しことも有しにこそされど其もとは其人の正しき姓をこそ呼つらんをこの比となりてはさる事も既に失てたゞ朝臣とも眞人ともいふが其方などいふばかりの事となれりし也　**いたづらぶし**　四十九丁ウ（餘）孟いかなりし時くれ竹のひとよだにいたづらぶしをくるしといふらん此歌拾遺戀三に有てよみ人しらず也またいせ集に人まちてなきつゝあかすよなよなはいたづらねにもなりぬべきかな後撰戀四藤原成國秋の田のかりそめぶしもしてけるかいたづらいねをなにゝつまゝし兼盛集あふことのなきつゝかへる

よな〳〵はいたづらねにもなりにけるかな（释）孟津に引れたるも類例のみ也引歌にはあらずたゞ女と共に寝ぬをいたづらぶしともいたづらねともいへるなり　**なげし**　五十丁ゥ（餘）契沖云夕顔の巻におまへちかくもえ參らぬつゝましさになげしにもえのぼらず榊の巻に三寸ばかりひきゝてなげしにおしかゝりてともあり殿舎の中に上段と下段と有て其上段の敷居の下になげしを付る是也なげしの下とは下段をいふ宇治拾遺三になげしのうへにのぼりて扇かきて引よせられけるほどに云々雅望考るに和名抄本朝式云長押和名奈介之(ナゲシ)と有源平盛衰記巻十七に祇王祇女をば一長押(ト)落たる廣廂(ヒロビサシ)にすゑられたり云々　**心のしるべ**　五十一丁ゥ（餘）古今戀一よみ人しらず「しるしらぬ何かあやなくわきていはんおもひのみこそしるべなりけれ（拾）（新）同引之　**おくなるおましに**　五十二丁オ（餘）眞淵云このおましを母屋といふ説はわろし上に寝殿の東おもてはらひあけさせてといひその次にかの女房どもの物語をたちぎゝし給ふ所にこのちかき母屋につどひたるなるべしとあれば源のおましは東西に二間あるかその二間のおくのまに夜のおましはしたるなるべし（释）此説よろしきを新釋一本にひさしのおましのやうにいはれたるはわろし案に一本はまだかたなりなるほどの説にぞあるべき　**かやうなるきはゝきはとこそ侍るなれ**　五十二丁ゥ（祇）心はぬしあるものにはかゝるたはふれせぬ習ひのよしなり（新）既に夫定りてはかくは有べからずてふ物のさだめはしろしめすべきにいと押たち給ふは見下しあなづり給ふものなりと是ははら立たるいひざま也（玉）かやうに夫ある女は夫ある女と其きはをたつるとにてこそ侍れと云也（释）頭書に擧たる餘滴にいへる如くきはといふは例の分際の事なること引たる末摘花巻の詞にてあきらか也もしくはきはとは極(キハ)の意にてかやうにおしたち給へるはあながちなる事の極(キハミ)といひつるにやあらんと思ひしかども前後のやうを考るにそれも猶わろかりきとにかくに諸説のごとく夫ある事をきはといはんは例なき事にていはれなし花鳥餘滴に隨ふべし　**見なほし給ふのちせもやとも云々**　五十四丁オ（河）若狹なる後せの山ののちにまたあはんかならずけふならずとも（餘）此引歌六帖卷二國の部に有三句後もあはん四句吾思

ふ人にとせりまたく此歌也しかるを眞淵の說に萬葉に後瀨山後毛將相と思へこそしぬべき物をけふまでもあれてふ歌の本語を取てかけるのみにて云々或說に若狹なる後世の山てふ歌を引たれど何より引たるや云々と新釋にかけり六帖に有をば忘れしと見えたり云々式部が心には六帖の歌を思ひて書たるにたがはずこそ〔玉〕こよひこそかく心なきものに思はれ奉るとも後には又さもあらずと見直し給ふやうもあらんかと思ひてわが心をなぐさむべきにといへる也なぐさむるは源氏君になさけなきものに思はるゝがかなしきをなぐさむる也花鳥に御心ざしおろかなりとも云々とあるは聞えず又河海に引れたるわかさなる云々の歌は萬葉四にかにかくに人はいふとも若狹路の後瀨の山の後もあはん君といふ歌をおぼえたがへ給へるなるべし〔釋〕こゝは引歌に及ぶべからずのちせはたゞ後の時といふほどのことにてせはうれしきせかなしきせなどいふせにて時といふ意也かつ右の歌どもには後瀨の山とこそあれたゞに後瀨といへるにあらねば類例にもならずいたづらごとなるをかにかくにあげつらはれたる說ども皆ひがこと也さて小櫛にこよひこそかく心なきものに思はれ奉るとも云云といはれたるはいかにぞや聞えたりこゝはうき身のほどの定まらぬありしながらの身にてといへるにてたゞ大かたの事をせめていへる所なれば畢竟はものゝたとへまでにいへるにてさらに今宵の事にはあらず御心ばへを見ましかばとあるましかばの辭を味はひてしるべしされば見直し給ふは我らがごときいやしく見にくき者なれどもし後には見直し給ふ事もやあらんと思ひなぐさめてもしたがひまつべきにといふ意なる事はあるまじき我だのみにてといへるにしるきものをや花鳥の御說のごとくなるべし　**かりなるうきねのほどを**　同〔釋〕かりなるはかりそめなるといふ意うきねは打とけて寢たるにあらずたゞさながらに逢たるなればうきねといへりうきは浮たゞよひたる意なるべし小櫛に拾遺集戀二かた岸の松のうきねと思ひしはさればよつひにあらはれにけり餘滴に六帖人ごとのしげみはされば水鳥の鴨のうきねのやすけくもなしといふ歌どもを引れたるは類例なり然るを餘滴に水鳥のうきてぬるといふよりいへる也といへるはいかゞあらんこゝにては本末たがへる

やう也〔新〕こゝはいと心をいひのこしたる物にて上の有しながらの身にて云々おもひ給へなぐさめましをといふ次に人の妻と定りて思ひもかけ侍らぬにかく源とかりそめながらもそひぶしするは又げに宿縁も有ての事にやとおもひまどはるといふ也さて折がたになりての詞なるにてもしらる下に心えぬすぐせ打そへりける身を思ひつゞけてとあるも卽是なり

月は有明にて云々 五十七丁オ〔新〕月は猶有て夜の明る比は月の餘光はなくなりて月の形のみ空にさやかに見ゆるをいふ此影を地にうつれる影也といふはいかにぞや古今集に白雲にはね打かはしとぶ雁のかげさへ見ゆる秋夜の月といふ歌をも地にうつる影と意得そこなへる說あるによれるにや彼も是も地にうつれる影をいふべき所にあらずたゞその形のみゆるを影とはいへる也惣て影といへるは物にうつれるを多くはいへどまた其物をも遠く幽(カス)かに見てもいへり〔玉〕ひかりは月のあかり也をさまるはきゆる也影は地にもあれ物にもあれわたりて見ゆる月のかげ也有明のさまことにこゝにいへるごとくなるものなり〔釋〕こゝは新釋よろし小櫛影の說は猶いかゞなり光をさまりては物にうつる影はあるべからねばなり

ぬるよなければ 五十九丁オ〔餘〕細戀しさをなにゝつけてかなぐさまん夢にも見えずぬる夜なければ此歌出所しらずたゞしぬるよなしといへるは萬葉集卷十一にしきたへの枕をまきて妹と我ぬるよはなくて年ぞへにけるまた古今戀一夢のうちにあひみんことをたのみつゝくらせるよひはねんかたもなしなどを思ひていへるにや〔釋〕此歌奥入河海にも引れたり餘滴に見る所なしといへれどこの歌なくては此所は解得がたしされば昔ありて今傳はらぬ集などに有し歌とすべし此事惣論にいへり餘滴に引たる萬葉も古今もこゝにはかなはず

あこ 六十丁オ〔拾〕日本紀にはこに濁音の字を用ゐたればあごなりあぎともいへり云々萬葉十九大船にまかぢしゞぬきこの吾子をから國へやるいはへ神たち是は光明皇后の御歌にて藤原淸河をさして吾子(アコ)とのたまへり〔釋〕案に日本紀にとあるは餘滴にもいへるごとく神武紀の歌に阿誤豫(アゴヨ)阿誤豫(アゴヨ)とある事なるべしかれは歌のはやし詞と聞えて吾子の事とはさらに聞えず又あぎとあるは古事記傳の說のごとく吾君(アギ)也さればこれはひがこと也こも

じ清べし　くびほそしとて　同（餘）和名抄陸詞切韻云領頸也頸居井反和名久比頸莖也とあり今の人頭をくびといひ頸をのどゝいへりみな誤なり云々（釋）此語にて源氏君はなよゝかに痩てなまめきたる委伊豫介は物々しくふとり過たるかたちをおもはせてかけるにもあるべし　歌かずならぬふせ屋におふる云々　六十三丁ゥ（餘）袖中抄に勘國史云仁明天皇承和二年六月勅如聞東海東山兩道河津之處或渡船數少或橋梁不備由是貢調擔夫來集河邊累日經旬不得利渉云々宜毎河加増渡舟二艘其價重者須正税又造浮橋令得通行及建布施屋備于橋寄其造作之料共用救急稻云々又云陽成天皇元慶四年云弘仁十三年國分寺尼法光爲救百姓濟度之難於越後國古志郡渡戸濱建布施屋施墾田四十餘町渡舟二艘令往還之人得其穩便而年代積久無人勞濟屋宇破損田疇荒廢望請被充越後國俗五人永令預守云々今按ずるに信濃國その原といふ所にふせやといふ別に有かと思ふに布施屋とて所々につくれるにこそされば信濃國そのはらにも此布施屋をたてけるにや又後賴朝臣田家秋興の歌に「山田もるきそのふせやに風ふけばあぜづたひしてうづらおとなふ是は谷のふせ屋賤のふせやなどいふ體かと存ずるに信濃の岐蘇にもかの布施屋あるにや又きそその原相近しといへり（新）或説に或は各ひとりごち也といひ或は贈答也といへる二つながら委しからず光君は右の歌を小君して贈り給ふを女の見てかくはよみたる事同じくふせやのはゝきゞの事を詞とせるにてしるしされど女は返しをまゐらせしにはあらでかくよみたるのみなるべし詞に聞えたりとあるはよみたりてふ意のみならん光君に返し聞えしならば上の詞にまどろまれざりけりとはかゝじ此詞の樣かの御歌を見ていと久しくねもいらずありてよめるをしるべし（釋）餘滴に引たる袖中抄は岷江入楚にも引れたり然れども猶かの歌の意は詳ならずさて新釋の説は弄花にいひたる趣の委しきもの也然れども岷江入楚にもいはれしごとく下に小君いといとほしきにねふたくもあらでまどひありくとあるは取傳へたるさまをあらはしたるなれば返しとはなくよみたるを傳へたりとは見るべき也さて又此歌の下句は源氏君の

わたり給ふをまちつけ奉らずして逃かくれたる事をきゆるとはいへる也と或人いへりあるにもあらずといへるを思へばさもやあるべき　**御かたはらにふせ給へり** 六十四丁オ（釋）この小君が事を頭書に男色なるべくいへりしをかたふきいふ人もあらめど吾邦にもふるき代よりそのさまこれかれ見えたる中にこの物語の比小舍人童(コドネリワラハ)などいひしものは近き世武家にて童小姓などいひけんもの〻さまになん見ゆめる神樂歌に大宮のちひさ小舍人玉ならばひるは手にとりよるはさねてん拾遺集に山ぶしも野ぶしもかくてこころみつ今はとねりがねやぞゆかしきなどあるを考へ合すべし

○空蟬卷餘釋

さりげなきすがたにて 二丁オ（湖師）今夜のさま然るべからずとは思ひしり給ひながら出給ふ故源氏とは見えぬやうにしておはすなり（新）夕顏の宿へかりぎぬ姿にておはせしがごとく光君のさまならずして也（釋）按に此說どもはこの子もをさなきを云々とあるよりかく考へられたるならめどいかゞなりこゝはたゞ御忍びありきなどのさまならで何事なきさまにもてなして出給ふ意なりさりげなきといふ語はやつすなどいふとは異にてさあらぬさまにもてなす意ばかりなり　**こきあやのひとへがさね** 三丁オ（花）女房の裝束五月五日よりひとへがさねをきるなりひとへ二つをひねりかさねたる物なり此時はさらにひとへをきずこきとはこうちきの事也濃(コ)き紫にそめたるべし河海には紅の色こきとしるされたりいかゞとおぼえ侍り（細）花說可レ然紫なるべし（釋）新釋にもこきを紅といはれたれど(集解)いかゞなり伴雄云濃(コキ)は紫のいと深く染たるにて令に滅紫と見えたる色是なり今も濃といふ色一種あり後世の紫色にはあらず朱を奪ふといへる色また枕草紙に紫だちたる雲のといへるやうの紫をやしほに染れば濃といふ色になる也赤み底に沈みていとなつかしきもの也打まかせて濃とあるみなこの色なりその餘は某(ソレ)の濃濃(コイコ)き某色などことわりて物する例也云々此說のごとし　**なにゝかあらんうへにきて** 同（新）こきあやのひとへがさねは色もこくて火ちかければてり合てまがはぬ也さて何にかあらん上に着てと云はこれは小袿(コウチキ)なるが色のいとう

すくて見わきがたきなるべし小袿なる事は下に見ゆ（釋）伴雄云こきあやの單重なめりとは今まさしく見とめ給へるおるふきをいひ何にかあらん云々はその單重のうへにうちかけて着たる物の何ともわかねども一種ありしをいへる也その着たるを小袿とさしたる新釋の説もわろし小袿を着たらんには其下なる單重の色は濃とも何とも知らるべきやうはあらじをやこゝはいと打とけたるさまなれば上に着たる物も何物ともしられぬがよそめに見えたる文章のあやと見るべきにやといへり細流もこの説のごとく唯火かげにさだかに見えわかぬなりと有これに隨ふべし但し猶新釋をたすけていはゞ下に着たる單重の色は衣領袖口などより見えたるにもあらんか次なる軒端荻はないがしろに着なしてとあれば小袿をはづれて單重の色の見えたる事勿論なれどそれに准へてもいささかは見えたりともすべきにや又上に着たる物も小袿の外に着べき物もあらねばしひて小袿ならずとも定めがたきかされどさばかりいはんはあまりにこちたきわざなればたゞ右に擧る説共の如く見てあるべし　**しろきうすものゝひとへがさねふたあゐのこうちき**　同ウ　（釋）白き羅の單重二藍の小袿なり伴雄云軒端荻のさうぞく單重も小袿もあざやかに見せたるは白き羅に二藍の色のうつろひたる透かげと東向にてのこる所なく見ゆといふ文を利せたるたくみなり云々荻は西の對よりたゞ今來たる人にてまづは客人なり故小袿も着たるなるべし空は上に着たる物何物とも見えずいさゝか打とけざまなるはあるじさびたるにやといへり（細）二藍なりふたへともいふ也同じ事なりあか花あを花二色にて染る也（花）こうちきは唐衣を着せざる時表着のうへに唐衣の代に着する物なり云々　**かどなきにはあるまじ**　四丁オ（餘）契冲云源の心なるべし朗云上の内よりはさゝざりけりは草子地ながら源の心也下の姉君まちつけていみじくの給ふ云々はづかしめ給ふは草子地ながら小君になりていふ也此たぐひ猶あるべし（釋）この鈴木氏の説のごとく源氏君の心ながら草子地より評じたる語なり下のすこし品おくれたりとあるも同じ長澤氏は脱文などあるべし本のまゝにては解しがたしといへり　**おくの人は**　同（花）此時源氏君のかいまみは東のつまどより西ざまに見やり給へり母屋の柱にそば

める人は空蟬の君なり今ひとりは東へむきたる故にのこりなく見ゆ西の御かたをいへり東より見れば母屋のはしらがくれにゐたるは西へむきたればうしろでばかり見ゆべし西はおくのかたなればむかふ方をとりておくの人とはいへるなり西の御方おくに居侍れどあらはに見ゆるははしのかたへむきたる故なるべし〔細〕空蟬なり座敷のおくなるべし花鳥の義有二不審一（釋）細流のごとくなるべしさて此段のすべてのやうを考るにまづはじめにひんがしのつま戸に立奉りて我は南のすみの間より格子たゝきのゝしりて入ぬとあるは源氏君を東の妻戸ある所に立せ奉りおきて小君は角の間の南の方より格子をたゝきあけさせて入たるなるべし此格子は角の間の南の格子のごとくなれど下文のさまを思ふに東庇のへたての格子と聞えたりさるは直に東より入らば源氏君のかたを内より見とほすべければ南の方より入たるなるべしさて次にやをらあゆみいでゝすだれのはざまに入給ぬとあるは妻戸の所より歩み出て少し南の方なる東おもての格子と簾との間に入給へる也此所常は格子をおろして其外に簾をかけたるべしさて次にこの入つるかうしはまださゝねばとあるは小君が入つる東庇の隔の格子にて其あきたる所より西ざまに見とほし給ふ也細流にたつみの方よりすぢかひて西ざまに見とほし給ふ也とあるよろしさて次にもやの中柱にそばめる人とあるは空蟬の柱に側み倚て西へ對ひたるさま也この中柱は母屋の北の長押ある所の柱にて母屋と北庇との界なるべし碁盤はその内にすゑたるなるべし長澤氏は庇の方なるべしといへり猶考ふべしさて帚木巻にわた殿より出たる泉にのぞきゐて酒のむとあるは此下に渡殿の戸口によりゐ給へりとある所と聞ゆれば東おもてよりつゞきたる渡殿也そこよりいへる詞に此西おもてにぞ人のけはひする云々といひこの近き母屋につどひゐたるなるべしといひ又この北のさうじのあなたに人のけはひするをこなたやかくいふ人のかくれたるかたならんといひ又女君はたゞこのさうじぐちすぢかひたるほどにぞふしたるべきとあるなどをあはせておもふに空蟬の居る所すなはち母屋にて其西に對の屋など有てそこに軒端荻はすむさま也かくして見る時は母屋の奥は東南にて西北は端なるべしかれ空蟬を奥の人とはいへる

なり此段の事を長澤氏のもとへかたらひやりてあげつらひしに圖を作りておこせられぬかくては心得やすげなれば右に其圖をさながら擧て初學の人に示す帚木卷のさまをもついでに記したれば合せ見て大かたをさとるべし　**たゝみひろげてふす**　六丁ウ〔細〕屛風なるべし次の詞に見えたり〔拾〕今按疊廣げ歟あつさをわびてくつろぎふす心歟たゝみひろげにふすと有けんをひろげてと寫し誤る歟そのゆゑは風吹とほせといはゞ廣げたる屛風もたゝむべきことわり也又たゝみたる屛風をたゝみといふべからず又とばかりそらねして火あかきかたに屛風をひろげてといへる重疊せり〔新〕後に火ある方をさへんに便あるかたへ屛風をたゝみよせて所をひろくしさて人々しづまりて後和らおきて火有かたへ屛風引ひろげて入れ奉る也〔玉〕屛風をかたはらへたゝみよせてふす所をひろくする也又ひろげては風の吹とほすへき道をひろくする意にても有べし人ある方にたつる也といへる注はひがこと也たゞ源氏君の入給ふべき道をあけんため也拾遺に云々といへれどいかゞ下に屛風をひろげてといへるを重疊なりといへれど然らずたゝみよせたるかの屛風を火あかき方に引ひろぐる也〔餘〕いにしへの疊は今のうすべり也御座といふものは今の疊のごときものなるべし物語ぶみに疊とかけるをかれこれかよはして考るに皆うすきものと思はるさていにしへの家居はみな板にてはりて其上にうすき疊をしきていぬる時は別に床などをおく事なるべししからばこゝは風の吹とほさんため弖も疊をおしひろぐるなるべし後世の疊を見たる意にてはこゝの解通ぜず古の疊の今のうすべりといふ物なる事は別にいへり〔釋〕伴雄云餘滴の解いまだ盡さずいにしへの疊は今のうすべり也といへるはよろし御座といふは今の疊のごとき物也といへるはわろし今の疊のごときをいにしへは字音に帖といへり御座はおましにて貴人客人の來る時に敷設る座なるゆゑにしか唱ふるにて必しも疊にはかぎる事ならねどまづ疊を敷てその上に褥茵などをしきて座とする故にうちまかせて疊を御座とはいひならへる也云々○廣道案に右の説どもの中には餘滴に疊はうすべりなりといへるを得たりとすべし右の説の次に疊のうすき物なるよしの例どもいと多く擧たりしかどうるさくて今は皆はぶ

きつ本書を見るべし但し御座の事は長澤氏の辨へたるが如し又風の吹とほさんため手して疊をおしひろぐる也といへるもいかゞ疊をひろげたりとも風の吹とほすべきことわりはなし風吹とほせといひたるははしに寢る事を人に疑はせじとていへるまでにて疊の事にはあづからぬことなるをやさて又これを屛風と見られたる說どもはすべてひがこと也上に屛風ともいはずしてゆくりなくたゞみひろげてといはんものかは拾遺にいはれたるごとく下の屛風といたづらに重なりてさやうには聞えがたし常には寢ざる障子口の板敷にふす故に疊をひろげてしきたりとして事もなく通ゆべし　**ゆかのしもに**　七丁ゥ〔新〕よき人は濱ゆかの上にぬるなり侍女などはたゞ下にふしたり〔釋〕案に帶木卷になげしのしもに人々ふしていらへすなりとあると全く同じさまなればこゝも長押より下の方を床の下といへるなるべし新釋の濱床のことはいかゞなう餘滴にも帳臺の事といふ說をあげ又六窓軒記聞といふ物を引て濱床のことをいへれどもしたがひがたし猶いはゞこゝは空蟬と軒端荻と二人もろともに寢たる所なればさるむつかしき物に入て臥たらんにはかならずそのけしきをもあらはし書ではえあらぬ所なるをさはなくてたゞ一人ふしたるを心やすくおぼすとある文の勢ひさらにさる事とは聞えぬものをや〇伴雄云ゆかといへるは母屋一間みながらをいふ也母屋と寢殿とは床一段高くつくれり庇の間は低し長押を堺とすこれいにしへの家作のさまなり云々　**いせをのあまの**　十二丁ゥ〔餘〕河海すゞか川いせをのあまのすて衣しほなれけりと人やみるらん後撰戀三伊尹朝臣集にはすゞか山とあり四句しほなれたりとせり詞書に女のもとにきぬをぬぎおきてとりにつかはすとてと有このはしがきにてよく聞えたり　歌**うつせみのはにおく露の**　十二丁ゥ〔玉〕此歌の事拾遺にこの歌全篇伊勢集にありといふ古本にはありけるにや今考るにあることなし「うつせみをおもふにこゑのたゝざらばまた衣手に露やおきなん此歌のみ有古人おぼえ誤じけるかといへり今思ふに此歌伊勢集にありとは河海に見えたり後の注どもはそのもとをば尋ねたゞさずしてたゞ河海によりていへれば伊勢集にあるよしいへるもとりがたしさて河海は古歌をおぼえたがへて引れたるたぐひなどいと

多かればこれもおぼえたがへにこそ有けめ此歌もしかの集の古本には有しかとも思はるれど此物語の例は古歌を今の歌にして入れたる事なければ河海に他の物語のさる例どもをあげられたるはよりがたし又これは空蟬の贈答にはあらず此時に相應したれば伊勢集の古歌を御たゝう紙のはしに書そへたる也といへる注もとりがたし此歌をあげたるやうたゞ空蟬のあらたによめるさまにこそ聞えたれすべて此物がたりのやうしか古歌を全く一首あげたるやうの例はなきことなるをや

○夕顔巻餘釋

六條わたりの御しのびありき 一丁オ〔河〕六條秋好中宮母儀前坊御息所の在所也中將御息所貞信公女前坊御息所後に重明親王の北方になる此例歟齋宮女御の母大臣女以下一同也伊勢物語にむかし左のおほいまうち君いまそかりけりかも川のほとりに六條わたりに家をいとおもしろく作りてすみ給ひけり〔湖〕前坊は保明親王諡號ニ文彥太子ニになぞらふこれ延喜の御宇春宮にたち給ひて早世也北方御息所は中將御息所貞信公の女になぞらふこれ保明親王かくれ給ひて後重明親王の北方になりて齋宮女御をうみ給へり此物語の御息所も大臣のむすめとかけり准據相當なるべし〔岷〕前坊とは文彥太子などの如く春宮にて位につき給はぬ以前早世し給ひ或は小一條院は春宮の位を辭し給ふ是皆前坊也云々〔新〕保明太子の事になぞらふなどいふは例のことにてこゝは似ても侍るべけれど惣てさることにはあらねば心ゆかじ **ひがき** 同（釋）檜木をうすくへぎてそれを組合せて垣にしたる物也ふるき繪どもに見えたり **はじとみ** 同〔花〕下はかうしはた板などをうちて上にしとみをつりて外へあぐるやうにしたるを云車にもはじとみとてあり上の蔀ばかりをあぐれば半蔀とは名付たる也〔細〕後拾遺雜一月のあかく侍ける夜はじとみに女どもの立て侍けるを男まゐらんなどいひ入させ侍ければよみ人しらず「誰とてかあれたるやどゝいひながら月より外の人をいるべき〔餘〕和名抄周禮注云蔀音部字亦作レ蔀和名之度美覆レ暖障レ光者也と有これは常のしとみ也はじとみはそれを半ら上の方へあぐるやうに作れる物を云 **玉のうてなも** 同ウ〔餘〕何せんに玉

のうてなも八重むぐらしげれる宿もふたりこそねめ
此歌六帖巻六むぐらの部に有て四句はへらん中にとせりもとは萬葉集巻十一に玉しける家も何せん八重むぐら覆小屋毛妹與居者　ごりかけだつ物　同〔河〕紫明抄に公良三位が說などゝて秘事げにいひたれどもあながち然らざるか大嘗會のしとみやといふ物也今陣座の前に是をたつ裏書云へいのおほひを切かけてしたる也俗にへいのおほひをきりかけといふ〔巴〕かべにせん所を板にてかりそめにしたり大裏などにもありがんぎなどのやうに板にてしたる也〔餘〕宇治拾遺に水干のあやしげなりけるがほころびたえにたるをきりかけの上よりなげこして云々更科日記に關ちかくなりて山づらにかりそめなるきりかけといふ物したるかみより丈六の佛のいまだあらづくりにおはするがかほばかり見やられたり大和物語此大德坊にしける所のまへにきりかけをなんせさせける其けづりくづにかきつけゝる離する所に板をめんとりばにしてふちをして垣のやうにせし物也　ずゐじん　二丁ォ　〔釋〕隨身は字の如く身に隨ふといふ義也執政大臣また左右大將などの召使ひ給ふ武士を隨身といふすべて唐ざまの御制度の時にはやんごとなき人も文官にて兵器など帶給はねば路次の警固の爲などに衞府の武士を賜ふこれを兵仗を給ふといふそは執政大臣などにかぎれる事也近衞の大中將なとはもとより其府を司り給へば隨身を召使ひ給ふ也さて隨身は太刀を帶び弓箭をとりて先驅にたちて非常をまもる事也　歌　こゝろあてに云々　四丁ゥ〔新〕おしあてに源氏にておはすらんとおぼゆるは光りもことなる御顏なればと也さて此歌は次の詞にいかに聞えむなどいひしろふと云且夕顏上の樣かくさし出たる事すべき女とも見えねば女房のよみて夕顏のかきしなるべしあてはかにゆゑづきたればと有は女房にはあらじとおぼゆ〔釋〕此事舊注にもさまざまに論ぜられたること岷江入楚に委く見えたりされどさばかりにいはんは餘り委しきに過たるべしたゞかの宿より誰ともなくて出したりとのみ見て有べし　揚名介　五丁ォ〔秘〕今案揚名二字諸國介にかぎるべからず故に揚名關白と清愼公はの給へり又揚名掾揚名目ともいへり揚名はたゞ名ばかりといふ心也たとへば其官になりたれども職掌もなく得分もなきをいへり或抄に

揚名介は不給籤符と見えたり官符を給はるほどにては國へくだりて吏務をしるべき也寛弘二年除目藤原維光望揚名介申文にて常陸權介に任ぜらる近頃貞和二年除目執筆(後普光園攝政)自給申文に藤原良淸望揚名介とありて山城權介に任ぜらる愚老も先年執筆の自給に此申文を献じて常陸權介に任じ侍りき云々〔拾〕つれ〴〵草に政事要略に揚名目ありといへり介と目とのあひだに掾あれば揚名掾といふものもあるべきことわり也かやうにかねて思ひしに揚名問答にひかれたるにはたして掾の字あり新續古今集雜中に云源氏ものがたりの揚名介の事を忠守朝臣に尋ね侍るとて申おくりける藤原雅朝朝臣「つたへおく跡にもまよふ夕がほの宿のあるじのしるべともなれかへし丹波忠守朝臣「心あてにそれかとばかりつたへきてぬし定まらぬ夕がほの宿揚名介は所傳もたしかならぬ事此かへしに明白なり云々(釋)年山紀聞に薩戒記(中院定親卿日記)應永三十三年三月廿七日除目の處に云今度右府臨時被申之文揚名介申文也件文云被任常陸介。正六位上藤原朝臣國貞。望諸國揚名介。應永卅三年三月廿七日。同廿九日記云揚名介事自院以葉室中納言被尋下云揚名介先例任國并請文等可注進者此事迷惑凡任國者山城上野常陸近江等之由見抄物此事大内記爲淸朝臣後日談曰上皇就揚名介事被尋仰少納言良資入道常宗常宗注進五國其時被散御不審云々此事若以源氏物語之說可定一國之由思召處今度申文望諸國揚名介云々依之御不審出來歟云々或古人物語云圓明寺關白見物賀茂祭之時山城介渡之由人々稱之圓明寺殿被仰云揚名介渡　被仰人々聞之其後諸使等渡大路之時又同揚名介渡　被仰了揚名介秘事也而無左右山城介渡之時被仰出忽覺悟爲令隱揚名介事後々每度被仰云々此時以來人々皆揚名介知山城介　事云々と有賀茂祭の揚名介は山城介に限るべし源氏物語のはいづれの國と定めがたし右の諸國の間なるべし作り物語なればたゞあるじの留守をいはん爲までに書るなるべし巳上(紀聞)伴雄云この薩戒記の說いかゞ圓明寺關白賀茂祭を見物せられし時云々と仰られしは旣に此頃は諸國の守介掾目等みな有名無實の職にて揚名なるをなほ舊例のまゝに山城介がいかめしくそうそぎてわたるを見給ひてあの樣

にいかめしくして渡れども揚名介なれば詮なき事よとしたには慷慨を含みて仰られし一時の詞也然るをその詞によりて此時以來人々皆揚名介知山城介事と記せるはあさましき事也また揚名介の任國を上野上總常陸近江に限れるよし記されたるもいかゞ何國にても無實の職掌ならんには皆揚名なる物をや爲章が年山記聞に云々といへるも猶くはしからず又云揚名は漢書に揚名於何奴とあるなどにもとづきて名のみきゝては有實職の如く邊鄙の者は意得べきのよしを含みてつきたる名なるべし類業私記に故信西入道云揚名介正權之外介也不預公廨云々とあるもてあきらかなりなほ揚名と云事は小右記に揚名關白あり九條相國除目抄に正六位上加茂朝臣忠信望揚名介寛弘二年正月五日正六位上藤原朝臣維光望申諸國揚名介寛弘二年正月廿一日など見ゆ又うつほ物語祭使の卷にそのやうめいをやはくうにつまんとすとあるは揚名を功に中立んとするにやとの義にて揚名は勳功になるまじきを云立にするにやと咎めたる也くうは功也萬葉に功にまをさば五位のかゞふりとあり印本にくゝとあるは誤也又同物語初秋上にやうめいらうある人にてなども見ゆ考合すべしといへり已上伴雄説やうめいの事大かた右の說どもの如したゞ名のみ揚たる介といふ義也然るを餘滴に揚名とは孝經に立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也と有よりとりたる文字也思ふにいにしへは學問なりてさて官に任じたる人をいひたるなるべしとて書生よりなり出たる官人を皆揚名といふものゝごといへるはいみじきひがこと也よしや揚名の字をば孝經などより取たるにもあれこゝにいへる揚名は事の意いたく違ひたる事上に引出たる諸記の文をもて知べし又新釋に給料を賜ふためにその人はなくて儲おく名のやうにいはれたるはうらうへのひがこと也　歌**よりてこそ云々**　同ウ〔新〕よそながらの夕ぐれにほの見て定むるはいかにぞやしたしみて見よかしと也〔玉〕歌の意うちまかせては注のごとく聞えたるを又思ふに四の句かなたより見たる事ならば見けんなど有べきに見つるとあるは源氏君のみづから見給へることのやうに聞ゆるはもしは此歌にてはかの簾のすきかげに見えし女どもをさして夕顏の花にたとへたるにもあらんか詞はよみかけたる歌によりながらたとへ

をばこなたかなたうちかへして答るも例あることぞかし但初二句のさまは注のごとく見る方まさりて聞ゆ(釋)新釋にしたしみて見よといはれたるはいかゞ舊注いづれもその意にてなれ近づきてなどあれどよりてこそといひたるはたゞ近く立寄てといふ意のみにてさる意までとは聞えず小櫛の説はことわりなれどなほ女の源氏君を見つるよしなり　**かごとばかり**　七丁ォ　〔餘〕契沖云榮花物語にわかやかなる女房四五人ばかりうすいろのしびらどもかごとばかりひきゆひつけたり古歌にひたち帶のとつゞけたるこれにおなじかたばかりなどいふにかよひて聞ゆ　雜々記六帖「あづまぢの道のはてなるひたちおびのかごとばかりもあはんとぞ思ふ　**げにをこがましう云々**　九丁ォ　〔玉〕げにとは空蟬の源氏君に逢奉ることを似つかはしからぬ身と思ひてつれなきをことわりとおぼせる詞也(釋)この説はわろしこゝは聞えたる如くにて實體なる長者(オトナ)をかくはづかしく思ふはげに我ながらをこがましく心はづかしきわざ也といふ意にてげには我ながらをこがましきをうけてげにといへる也　**むすめをぼさるべき人にあづけて**　同〔細〕軒端ノ荻をばとゞめ置て少將にあはする事なり(釋)案にさるべき人にとある語勢今既に少將にあはせたる意とは聞えずたゞ然るべき人に預けて國へ下らんとする事のみと聞えたりされば人に預んなど云わたりしほどに藏人ノ少將のかたらひつきたりと見るべし　**御よはひのほどもにげなく**　十丁ォ　(釋)この御息所の御齡の事は諸抄にいはれたるごとく榊ノ卷に「十六にて故宮に參り給ひて二十にておくれ奉り給ふ三十にてぞけふ又こゝのへを見給ひけるとあるは源氏君廿三の年なればことしは源氏君十七御息所廿四なる事論なし故に似げなくとはいへりこの榊卷の詞につきて周防ノ國岩國の賀屋千邦がもとより同じ里の秦田正輙といふ人の考なりとていひおこせける事を因(チナミ)にこゝに書つくそはかの榊卷に「中の時に內にまゐり給ふ御息所御こしにのり給へるにつけても父おとゞのかぎりなきすぢにおぼしこゝろざしていつき奉り給ひしありさまかはりて末の世に內を見給ふにも物のみつきせずあはれにおぼさる十六にて云々とある此父おとゞのかぎりなきすぢに云々とあるを思ふに御息所をつひには皇后にもとおぼして前坊の御妃に奉り

給ひしなるべし然るに十六にて故宮に參り給ひてとあるは源氏君九才の時にあたれば朱雀院春宮に立給ひし後也桐壺卷に源氏四つになり給ふ年の春一のみこ朱雀院春宮に定まり給ふよしあればいかゞ也もし前坊春宮を辭し給ひなどせし後に御息所參り給ひしならば父おとゞのかぎりなきすぢにとおぼしゝ本意にかなはずいかにぞやといへりげにかくいひつめて見る時は作りぬしのあやまちに似たりかやうの事は作り物語のならひにてさるくまぐ〵まではさしも深くは思ひ構へられざりしと見えてをり〳〵いかゞしき事どもゝあれどそは大かたに見過すべし但かゝる事をも見出られたる春田氏のいたつきはいといみじといふべし　**さぶらひわらは**　同〔新〕既に廊の方なれば源氏の近習童のあるしてをらせ給ふとみゆことさらめきたるさしぬきのといふは此花をらんとてわざと着たらんごとく見ゆるといふ意なれば是却て常に着て有しもの也しかれば女のわらはてふはわろし〔釋〕殊更めきたるといへるは童の姿の事にてさしぬきのみの事にはあらず右の說はいかゞ也〔餘〕狹衣に池の汀のやへ山吹は井手のわたりにことならず見わたさるゝ夕ばえのをかしさをひとり見給ふもあかねばさふらひわらはのをかしげなるがちひさきして一枝をらせ給ひて源氏の宮の御方にもてまゐり給へればと有これさぶらひわらはとは狹衣の大將のつかひ給へる童也こゝも源氏のわらはなるべし　**なが屋**　十二丁ォ〔新〕萬葉十六に橋の守の長屋と侍れば道ちかく建たる長き屋にて今いふ物見といふ物のごとく高くゆかをしたるべし其前に檜垣して上に五間ばかり半蔀しわたしたる也此家いとむね〳〵しからぬ體なるを五間ばかり蔀をあげんは長屋なることしらる　**右近の君こそ**　同ゥ〔箋〕こそとは官女をうやまひていふ詞女嬬こそといふがごとし〔湖師〕こそとは人をよびかくるとていふ詞也云々〔拾〕今按よびかくるとていふ詞といふ說は誤なり初の說よしすゑに京にこそといふ詞もおなじ詞と見えたり後拾遺にすまひこそといふ女の名あり宇治拾遺に地藏菩薩を地藏こそといひ花こそ物はおもはざりけれといふ歌を通俊卿難ずとて花こそといふを女の名のやうなりと申されたる事あり大和物語にも聞給ふやにしこそとあり〔餘〕うつほ物語にたゞこそあてこそ榮花物語のさ

まし〳〵のよろこびにおとゞこそ若紫卷にうへこそ落くぼにおとゞこそ此外あまた見えたり後拾遺にくそたちといふも同じ詞と見えたり狹衣に道成詞におとどこそこれ猶申おほし給へ此卷の末に北殿こそ聞給や金葉集戀下物へまかりける道にはしたものゝあひたりけるをとはせ侍ければ上東門院に侍るすまひこそとなん申すといひけるを聞てよめる源縁法師「名きくよりかねてもうつる心かないかにしてかはあふべかるらん清少納言にわか君こそまづ物きこえん

(釋)右の說ども人の名につけたるこそと辭のこそとまがへたるはわろしすべてこそは辭ながらむねと其物事をとり出たる意あり人に向ひ呼かけなどしていふこそは皆然なりこゝもその意にて右近を呼かけて右近の君こそまづ物見給へといへる也まづといふに心を付べし他の女房もあれど第一に右近をとり出たる也さてこその結びは給へのへなり次の詞に中將殿こそといへるこそもかづらきの神こそといへるこそも皆同じく末にぬれたれなどれといひて結びたり下に北殿こそきゝ給へやとあるも同じくこそは給へのへにて結びてその下にいひすてのやもじをつらねたる也然るを聞給ふやとふもじをそへてよみたる本は誤れりかくてはやもじ激辭となりてとひかけたる意となればかしこの事のさまにかなはずてにをはの格にもはづれたればかた〴〵誤也さて人の名につけたるはいかなる意にてつけたるにかそはよく知れねど中昔の比多かりし事にてくそといふもかよひて聞えたりされどもこゝなるは彼とは別の事なるをおしこめてひとつに擧たるは委しからずもしかのたゞこそあてこそすまひこそなどの例にていはゞこゝをも右近こそといはではかなはぬを右近の君こそと君といふことの下にいへるにてもうやまひ詞にも名につけたるにもあらぬをしるべし **いそぎくるものは** 同

〔玉〕花宴卷にこなたざまにくるものか明石卷に月夜にいでゝ行道するものは紫式部日記に雪はふるものかなどありこれらを合せて思ふにものはとものかと一つにてはとかとのうち一方は寫し誤なるべしさていづれ正しからんと思ふにものかのかた正しかるべしかくてこれは其事にいきほひをあらせてつよくいふ詞也(釋)榮花物語見はてぬ夢の卷に月いとあかきに御馬にてかへらせ給ひけるをおどし聞えんとおぼ

しおきてける物かゆゑやとゝふ物してとかくし給ひければ御そのそでよりやはとほりにけりとある物かも小櫛に引れたる花宴卷の例なりこれも一本には物はとありさてこのかの辭はおしはかりていへる疑ひの辭にて花宴卷なるはおぼろ月夜に似る物ぞなきと打ずしてこなたざまにくる物かとあれば來るともゆくともおぼつかなきがやう／＼こなたざまにくるさまと推量りてかといへる也榮花なるはおどし聞えんとおぼされし隆家の心をおしはかりてかといへる也これによりておもへば明石卷なるもかならずかの誤にて月夜に出て行道する物かやり水にたふれ入にけりとたふれ入たるよしを行道すとて立出けんとおしはかりたるなるべしさらではかしこは聞えがたし然ればこゝもかの誤にて橋より落たるをおしはかりていそぎくる物かといへるにもあめれど猶こゝはかくても聞ゆる也さるは急ぎ來る者はの意にて物見んとていそぎはしりて長屋へ來る女房をさして者はといへりとしてたがふ事なければ本のまゝにてあるべしされば右の例とは別なる詞なり　**かづらきの神**　同〔餘〕清正集かづらきやくめのつぎはしつぎ／＼にわたしもはてじかづらきの神」「かづらきやくめのつぎはしならなくにわたしはやまじくめのかけぢに　**しひておはしまさせそめてけり**　十四丁オ　〔釋〕一本にしひてをしのびてとあるは事もなく聞えたり然れどもこの宿へ源氏君をかよはせ奉らん事はいとわづらはしき事のさまなるをもてしひてといへるもよろしからんとて今はその方によりつきて源氏君をかよはせ奉らん事のかたきといふ故はまづこの夕顔上は頭中將におもはれて子さへいできたる後なるをたゞかの北方四君の方よりうたてある事の聞えこしにおぢてはひかくれつゝめしつかふ女房をも我どちとおもはするさまにしてある所なるを惟光わたくしのけさうをして立よりたるは夕顔に文かよはしたるか又その女房に言よりたるか今少しわきがたけれどいづれにしても源氏君にはかにおはしまさせそめんことはいとかたかなる事の情也いはんや下文のさまを考るに夜中に人をしづめて顔をかくしてかよひ給へるをやかくては更に女のうけひくべきさまにはあらずさればしひてといへるかたかなへるに似たりかくむつかしき事の情なる故にこれを委しくかゝんにはい

とく／＼くるしむべき事なるをもて次に此ほどの事くだ／＼しければれいのもらしつとて省かれたる也見ん人心をつけてよく／＼考へさとるべしさてかくあやしげにかきなされたるは皆變化の段をあらはさんとてわざとかくゆくりかなるさまに物せられしなるべし　**あかつきの道**　同ゥ（餘）清正集みじかよののこりすくなくふけゆけばかねてものうきあかつきの道　**あしたの露に云々**　二十丁ォ（餘）河朝露貪名利夕陽愛子孫長慶集に見えたり又此作者の歌に「消ぬまの身をもしる／＼朝がほの露とあらそふよをなげくかな玉葉雜四に載たり　**何をむさぼる身のいのりにかと**　同（新）此山は皆黄金なりといへば寶を得世に富べき願をなすこと此時の常なりけん依て何をむさぼる身の祈にかとは書りされど當來導師と唱ふるからは此世の富をいのるのみならずこん世をもかねて願ふといひて我契り給ふことにたとへ給ふ（釋）むさぼるは上に引れたる朝露貪名利の句を思ひてかゝれたるなるべし　**あれたるかどの云々**　廿一丁ォ（餘）𠘑江入楚に拾遺集第三秋河原院にてあれたる宿に秋來といふことを人々よみ侍りけるに惠慶法師「八重むぐらしげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋はきにけり（釋）是は類例なるべし　**おきなが川**　廿三丁ォ（拾）水原抄等に奧中河とある說は大に誤なり引ところの歌は萬葉第二十に有て於吉奈我河波と書り日本紀第廿八云男依等與近江軍戰息長横河破之延喜式第廿一諸陵式云息長陵舒明天皇之祖母名曰廣姬近江國坂田郡これらを引合せて考ふるに近江國坂田郡にある息長河なり萬葉に奈我と書るも長にて中にあらぬ證なりにほは水鳥にて息のながき物なれば枕詞におけりいきを萬葉にはおきその風ともいへり延喜式兵部式に近江國横河驛あり横川を息長にあれば息長川といふなるべし　**べちなふ**　同（河）李部王記天慶三年十一月二十七日巳刻冷泉院別納所失火此外諸院多在之別納は別に建たる屋なり別納にて大饗おこなはれたる事多し小寢殿なり（新）禁中に別納と云所あり又大臣定れる封戸の外に國より納物のある侍りそれを封戸の別納といふ此心にて此預り其別納物ある方に曹司をかまへて住なるべし（釋）べちなふの名はもと別納物を入おくより出たるならめど後世なるは必しも然らず河海の說

の如くなるべし　**御くだものなどまゐらす**　廿四丁オ（釋）或抄に貴人は殿上人とて御陪膳申す人もれき〳〵也前にとりつぐ御まかなひ打あはずといへり初に惟光は御供に參らざりし也惟光をたづね出してさて御菓子をまゐらする也といへるはわろし上に御まかなひ打あはずとありしは朝のほどの事なるをこれはや〻夕つかたの事と聞えて上にゆふ露にひもとく花はと歌にもありてさてかたらひくらし給とあるも朝のほどゝは聞えずされば こゝは夕づけて惟光たづね參りて御くだ物を持來て奉りし事とすべしあしたの御かゆなどはともかくもして參らせしなるべし下に所にしたがひてこそとあるをもおもへさてかゝる事を餘りに委くあなぐりて注するは過たる事にて中々也　**なごりなくなりにたる御有さまにて**　同ウ（玉）これは源氏君みづからの御事をのたまへりと聞えたるに御字いかゞ後に誤りて加へたるにや（玉補）湖月頭書草子地と見たる說よしさては御字誤にあらず嘉基は云こは夕顏の上の事をのたまへる也源氏君に身の上を打まかせてさそひ給ふまゝにともなはれながら猶誰とも名乘給はぬを心のうちのへだてとはの給へる也といへり（釋）嘉基が說の如くなるべし

をかしげなる女ゐて　廿五丁ウ（細）御息所の念なるべし（萬）御息所の事也源氏の思ひくらべ給へるによりて邪氣になれるにや（釋）これらの說どもにこの變化の物を御息所の怨念と見られたるは葵卷の事によりておしあてに定められたる也そはまづ此卷のはじめに六條わたりの云々と書出せしより次々にかのわたりの事は見えたれど未いかなる人といふ事をばあらはさずたゞ六條わたりの一人のやんごとなき女にかよひ給ふさまにのみいへるに此夕顏の事は俄に出來たる事にて御息所の知せ給ふべきやうもなければ怨念あるべきことわりなしされば唯此あれたる院にすめる變化の物の所爲とのみ見るべき也然れども六條の事もそのにほひはしたる書ざま也さるは此卷の初をかしこの事もて書おこされたるよりして御息所の打とけぬ御本上をも書あらはしおきてこゝにいたりて御息所と夕顏とを思ひくらべ給ふ事をいへるなど又おのがいとめでたしと見奉るをば云々といへるも全くかの御息所の事を源氏君のいとほしく思ひ出給ふによりてあらはれたる變化とおぼしき書ざま

なれば也されば此院にすめる妖物の御息所のさまになりて源氏君の思ひしをれ給ひ夕顔ノ上の物おぢする本上なるを氣どりてあらはれたるさまとは心得べき也もし舊說の如き意ならばをかしげなる女とはいはずして六條わたりの御ありさまなる女のなどいはではえあらぬわざ也さてまた此下に引れたる江談抄の河原院の准據の事などはげにさる物語の世にいひふれけんを思はれたりとは見ゆれどもそれにつけても中々に御息所の怨念ならぬ事をばしるべしすべてこの大かたのさまは此卷の末に源氏君の夢に夕顔を見給ひし處に「あれたりし所にすみけん物のわれに見いれけんたよりにかくなりぬることゝおぼしいづるにもゆゝしくなんとあるが作りぬしの意と見えてこの變化の事の注釋の如き詞也心をつけて味はふべしそも〳〵此變化の事の一段よはかなく作り出る物がたりなればいかさまにもめづらしくおどろ〳〵しく書なさるべきをさはあらずして皆源氏君の御心よりまねきむかへ給へるさまにかゝれたるはかのもろこしにいはゆる妖は人によりておこるなどいへる類のことわりを深くしたに思はれたる物とおぼしくここかしこ打かすめていかなる故とも知れぬやうに書まぎらはされたる筆づかひかへす〳〵もめでたくして作りぬしのざえのいたりふかきを見るに足れり

ことなることなき人を 同〔細〕夕顔ノ上は三位のむすめ也其俗姓さしもなきをかくことなる事なきとはいへり云々（釋）此注も餘りにおなぐり過給へる說にてよろしとも聞えず頭書に擧たる小楠の如くなるべし

つる打してたえずこわづくれ 廿七丁オ〔拾〕萬葉第四「梓弓つまびく夜音の遠音にも君がみゆきをきかくしよしも同十「はや人の名におふ夜ごゑいちじろく我名をいひてつまとたのまん

むかし物語にこそ 廿八丁ウ〔河〕〔餘〕江談抄云貞仲卿曰寛平法皇與二京極御休所一同レ車渡二御河原院一觀二覽山川形勢一入レ夜月明令レ取二下御車疊一爲二御座一與二御休所一令レ行二房内之事一殿中塗籠有レ人開レ戸出來法皇令レ問給對云融候欲レ賜二御休所一法皇答云汝存生之時爲二臣下一我爲二主上一何の恨出二此言一哉可二退歸一者靈物乍レ恐抱二法皇御腰一御休所半死失二顏色一御前駈等皆候二中門外一御聲不レ可レ達只牛童頗近侍食二御牛一召二件牛童一令レ召二人々一差二寄御車一令三彼乘二御休所一顏色

無色不能起立令扶抱乘還御之後召淨藏大法師令加持纔以蘇生　云法皇依先世業行爲日本國王雖去寶位神祇奉守護追退融靈了其戸面有打物跡守護神令追入之跡也又或人云法皇御簾中融靈參居檻邊云（釋）この物語そのかみよりいひ傳へし事なるをしたに思ひてかゝれたる事諸抄のごとくなるべし但しこゝに昔物語とあるはひろく昔よりの物語をさしたるにて必しも此物語のみの事にはあらずさて此物語のやうを思ふに　法皇依先世業行爲日本國王などいへる口つき全く僧どものの僞り作れるなるべしもし又まことにさる事有しならば奸僧どもの融公の靈に託ておどし奉れるにぞあらんさる類の事をり〱ありげに見えたる御世のさま也　**いのちをかけて**　卅一丁オ〔餘〕拾遺集戀四「何せんにいのちをかけてちかひけんいかばやとおもふをりもありけりこの上句に似たり　**神事なる頃は**　卅五丁ウ〔新〕延喜式神祇三云凡觸穢惡事應忌者人死限三十日自葬日始計　又云觸死葬之人雖非神事月不得參著諸司并諸衛陣及侍從所等かゝれば九月の神事をはゞかりて今より内に參らざるよしかされど神事なる頃は云々てふ文末をかねたりとも見えずもし石清水の八月十五夜の祭をいふか其外八月の神事はきこえず　**かしこくもとめ奉らせ給ひて**　同〔玉補〕嘉基云小櫛いかゞこのかしこくはかたじけなしの意とは異也おろかなる涙ぞ袖になどいへるおろかのうらなり伊勢物語にむかしをとこ女いとかしこくおもひかはしてこと心なかりけり又同書昔かやのみこと申みこおはしましけり其御子女をおぼしめしていとかしこくめぐみつかう給ひけり大和物語つゝみの中納言のきみ十三のみこの母みやすん所をうちに奉りけるはじめにみかどはいかゞおぼしめすらんなどいとかしこく思ひなげき給うけりなどこの外あまたあり（釋）詞の例は此說のごとくいみじくなどいふ意につかひたり然れども必しもおろかのうらなる詞にはあらず其本はみな恐多くかたじけなき意より出て轉りたるがそこの事のさまに隨ひてさまざまに聞ゆる事いみじくといふ詞のごとしこゝは帝の源氏君をもとめさせ給ひしを中將のかしこくとのたまへるなればなほ本の意也　小櫛ひが　ことにはあらず　**さらに事なくしなせと云々**　卅七丁ウ〔細〕ことと

なくは無レ事也難なく沙汰せよと也〔孟〕〔岷〕葬禮の事を取つくろへとのたまへどゐか事々しくすべきにもあらず我に任せられよと惟光が申す也〔湖師〕更に事なくしなせとは更に事がましからずひそかにしなせと也さやうにはの給へど惟光が御前を立を御覧じて忍びかねてみづからも出たち給ふとの義也（釋）ことなくは細流のごとくなるべし取つくろへとのたまへどゝある注は語勢過たり湖月師説はひがこと也さて頭書に擧たる小櫛の説にことぐ〵しくし侍るべきにもあらざれば心やすしと申す也とあるはわろかめりそのほどのさほうの給へどゝあるどの辭よりうけて何かといひたる語勢またたつがいとかなしくおぼさるればとあるがもじの勢などをよく〵あぢはふべし岷江孟津の説のごとき意と聞ゆる也猶よく考ふべし　**川の水にて手をあらひて**　四十一丁オ〔拾〕敏達紀曰於是綾糟等懼然恐懼乃下二泊瀨中流一向二三諸岳一漱レ水而盟曰云々（釋）こゝは清水の觀音を拜せんとて手をあらひたる也拜する時手を洗ふ事は今の人もする事にて何の事もなし契沖の抄にはかゝる無用の事をり〵あり　**ぶくいとくろうして**　四十二丁オ〔河〕清少納言枕草子にぶくいとくろき男の白張きたるとあり源光行俊成卿に申談じて此物語の句を切聲をさしける時こゝにいたりて筆をおさへて右近初參の時分且又隱密事之也着服しかるべからずと申されけるに清少納言枕草子にもありとてすみて聲をさゝれけり此事しらざる人々服の義を立る歟ふくりとくろき也いとりは五音相通の字也通用つねの事也たとへばふくらかにて色黑き也云々〔明〕花說ふくりと肥て色黑き心と云々〔新〕服の黑きといふことももとより也其主の同じくいたみ給ふ服なれば初參を論ずる場にあらず且かくし給ふとてもおもてに出て人目にかゝるべきにも侍らず人間に御前に召れなどすれば是又論ずることとなし云々又ふくりと肥たるなどいふは論にもたらぬ說也〔餘〕今本の枕草子にはいろくろき人のすゞしのひとへきたると有てふくいとくろき男の白はりきたるとはなしむかし本にはしかありけん（釋）此段の舊注は例の餘りにあなぐりたる說也新釋の辨いとめでたし又引れたる枕草子の文は例のおぼえたがへ給へるなるべしふくいとくろき男とは何の事ぞやさらに言の意聞えがたしすべていともい

ともひがことなり　**けがらひいみ給ひしも**　四十三丁ォ〔新〕穢をはゞかり給ふ也夕の死に源の忌は有べからす只穢をいみ給ふといふべししかれども猶令を以てみれば忌有べし穢の日數の世の定めおのづから御病の立給ふ日までなりしかばしかいふのみ　**御名がくしも**　四十四丁ォ〔湖〕一說此御名がくしとは源の事を云也さばかりにこそはとは大かた源とは推量したれ共ふかく忍び給ふ故に名を顯し給はぬにこそとはおしはかり聞えながら等閑にまぎらはしとは源の一旦のすさみばかりなればこそかやうにはうちとけ給はざらめと夕顏の心に源を恨み給ひしと右近が申す也〔釋〕此說大かた得たりと聞ゆるを解ざまのわろくていとくだ〳〵しく意得にくし其中にふかく忍び給ふ故に名を顯し給はぬにこそはとゝいへるは頭書に擧たる小櫛にもかゝる小屋に通ひ給ふ事をつつましくおぼして名をば顯し給はぬにこそあらめととあると同じけれど本文のうへにさる意は見えず名をかくし給へども源氏君ほどの人ならんと推量り給ひしといふ意のみ也源を恨み給ひしといへるも詞過たり只うき事に覺したりとのみあるをやさてこの御名がくしといへる體意いとめづらし又さばかりにこそとあるもまぎらはしけれどこれは下に「たしかならねどけはひをさばかりにやとさゝめきしかば云々とあるは全く源氏君の事と聞ゆればこゝもそれに准へて源氏君ばかりの人といふ意と知れたり　**すみわび給ひて山里に**　四十五丁ゥ〔餘〕いせ物語すみわびぬ今はかぎりと山ざとに身をかくすべき宿もとめてん　**さればよと**　四十六丁ォ〔湖〕内々其人にやと思ひ給ひし故さればよと思ひ給ふ也〔釋〕或抄云前にほかの頭中將のかたりしとこなつうたがはしくと有内々うたがはしかりしに今聞あらはしてさればこそとなほ〳〵殘り多く思ひ給ふ也　**かのありし院にこの鳥の鳴しを**　四十七丁ォ〔細〕ありし院とは河原院也院に此とよみ切て鳥の鳴しとよむ說あり此といふ詞はうたひものなどにやすめ詞におくたぐひ也此時はいへばとの聲に梟を思ひ出たるなりさもあるべきにや一說たゞありし院にとよみて此鳥のなきしとよむべき也此河原院には終日居給ひしほどに鵂の啼事もあるべき也それをおぼし出すなるべし物語には前に鵂の沙汰なかりし故にむつかしき沙汰ありかやう

に心をやりてみれば相違なき者歟（釋）後の說よろし前の說はいみじきひがこと也前に梟をとり出たる餘韻にこゝに鴿を取出て晝間の事をおもはせたるいと巧なり　歌見し人の云々　四十八丁ォ　〔餘〕齋宮女御集まゝはゝの北の方「見し人の雲となりにし空なればふる雪さへもめづらしきかな此歌をかへて用ゐたり諸抄此歌をひかずわすれたるにや（釋）かへて用ゐたりといふはわろきいひざまなりあまたの歌の中には意の似たるも多かるをいづれも其歌により其歌をかへたりとせんはいとあぢきなし此物語はさらに他(ヒト)の歌を作りかへたることなき例也諸抄も忘れたるにはあるべからずもとよりことなれば引れざりしにこそ〔拾〕異本にむつかしきとあるは寫しあやまれるなるべし新古今哀傷におなじ人の歌に「見し人のけふりとなりしゆふべより名ぞむつましき鹽がまの浦これを引合せておもふべし　歌とはぬをも云々　同ゥ　〔細〕此歌の結句花鳥思ひわづらふとあり思ひわづらふは源氏の病惱を思ひよせていへりとひ給はぬはわづらひ給ふ故とおしはかる心也云々これはあまりなる義歟此本は思ひみだるゝとありしかればわづらひなきか〔餘〕源のわづらひ付給へるは八月十七日なりこの前に昔よ日おもくわづらひ給へど九月廿日の程にぞおこたりはて給ひぬると有をかぞふれば三十三四日をへぬ右近をめしいでゝのどやかなる夕ぐれに御物語し給ふと有はそれよりわづらひ日比へたる時なるべし此次にかの人の四十九日忍びてひえの法華堂にてず經などせさせ給ふとあれば此歌よみておこせたるはわづらひ付給ひてより四十餘日をへたるなるべし源の方には病おこたり給へれど文のかよひもなければ猶わづらひ給ふと思ひて文奉りたるなるべし歌にいかばかりかはといへるは五十(イカ)日をふくみてよめるならんか三の句ほどふるにといひていかとつづけたれば五十(イカ)日をふくませていへるにやあらんこは臆說ながら思ひよりぬればしるしつ源のなやませ給ふは五十日ばかりにやなりぬらんわがおもひなやむは五十日のみにあらずといへるをいかばかりといへる詞にそへてよめるにや（釋）こは穿鑿に過たるか語脈もさは聞えねど珍らしければ試に擧つ　あやしやいかにおもふらんと云々　四十九丁ゥ　〔細〕藏人少將自然知たらん事をいかゞと也〔湖師〕少將の心のう

ちはいとほしけれども又軒端の荻のけしきも床しければ御文をつかはし給ふ也（新）此所は意得がたし思ふに荻のはやく世をしれるを少將のあやしきことかなと思ひゐたらんを今文かよはさばされぱよと思はんもいとほしけれど又かの女も捨がたくおぼせばといふならんか下に我なりけりと思ひ合せばと云を見るべし（釋）細流の注は事の心聞わきがたし湖月師說はいとほしけれどもといへる少したがへり新釋は大かたよろしきを少將のあやしきことかなと思ひゐたらんをといはれたるは猶わろしとにかくにあやしやとあるを少將のあやしと思ふことゝしては語格たがへり 歌 **ほのかにも云々** 同（新）煩ひてよみがへり給ふを荻をおぼす故といひなしてさてかりそめにも契りし事なくばかく思ひわづらふを問給はぬうらみを何しにかかけて申さんさるほのかなりとも契のあればこそと也かごとは託言にてうらみなどを人にかけていふなり云々（餘）この結ぶといへること諸抄あきらかに注せず僻案に思ひいづるまゝをかきつく萬葉第一君がよもわがよもしれやいはしろの岡の草根をいざむすびてな同卷十一あし引の名におふ山すげおしふせて君しむすばゝあはずあらめやも同十二しろたへの我紐の緒の絶ぬまにこひむすびせんあはんひまでに伊勢物語うらわかみねよげにみゆる若草を人をむすばん事をしぞ思ふ萬葉十一いもが門行すぎかねて草むすぶ風吹とくなあはん日までに古今戀五花すゝき我こそしたに思ひしかほに出て人にむすばれにけりなどいひて草をむすびて男女の相かたらふよすがとせる事古歌にあまた見えたり後世緣結びとて神の御まへなる木にかうよりしてむすびつくるは古き遺風ならんかこゝもさる心にてそこと我なかはかねてむすび置たりとの給へるなるべし（釋）新釋にわづらひ給ふをとはぬことをかごとゝいへるやうにいはれたるは舊注の意にてわろしさて餘滴に結ぶといふ事の例どもを擧ていへる事はさもあるべし草などを結ぶは男女ひとつによりあふにたとへたるにて今もさる事するならはしの國々もあり然れども引たる萬葉の歌なるは皆事の誓にせしわざと見えて今世にする緣結びなどゝは意異なりさるは上に引たる君がよもわが世もしれやなどいふ歌も戀の意とは聞えぬに卷二に有馬皇子の紀伊國にて失はれんとし給ひ

し時松枝を結びて「磐白の濱松がえを引結びまさきくあらば又かへり見んとよみ給ひしなどを思ふべし戀の歌によめるも皆ふたゝび逢んことの誓にせしさまに聞ゆされば是は別なり後世にいへるはたゞ緣の結ばるゝ事或は契を結ぶなどいふ事を草にいひかけたるのみ也さて其草などを結ぶといふも殊更に誓ひて結ぶ意にはあらでたゞものゝさはりにならぬやうに引結びておくによせて結ぶとはいへりと聞えたりさればこれも少しく意異なり此差(ケヂメ)を思ひ分つべし **うちとけて** 同〔拾〕注空蟬と軒端のむかひし事也○今按この注のこゝろならばうちとけてのても濁りて軒端荻にくらべていよ〳〵空蟬の用意ありし事をほめ給ふ心なるべしてもじ淸て軒端の事と見ば人といふ事のかなはねば誤也〔餘〕今案ずるに契說(ガ)にてはなにの心ばせと有より軒端の荻をいへりと見し也むかひゐたる人とは空蟬をいひうとみはつまじきとは源の心に飽はつまじきさまと思ひ給へる也湖月師說及箋の說はての字を淸て人とは荻をさしていへりと見たる也穩ならず **四十九日** 五十一丁ォ〔細〕いづくにても訓によむべし〔拾〕拾遺に藤原輔相が四十九日を音に隱題によめる歌もあれば只音しかるべきかこの次にいはく幾十よ日とあるをもとをかあまりとよめといへるは心得がたしとをかあまりならば直にさかくべし餘の字をかんなに書たるを見ながらいかゞ訓にはよむべき五六日七八日なども作者は音を用ゐてや書けん四五人なども同じ **願文** 同〔河〕淸和天皇貞觀九年十月勸學院南邊(ノ)更(ニ)建(ニ)一院(ヲ)號(ス)延命院(ト)乃日主上自製(シ給ヒ)願文(ヲ)云々願文自作例是也〔花〕重明親王家室藤原氏四十九日願文後江相公朝綱書(ス)之見(タリ)文粹(ニ)生者必滅釋尊未(レ)免(ル)栴檀之烟(ヲ)樂盡哀來天人猶(レ)逢(ニ)五衰之日(ニ)此願文之詞也云々 歌 **なくなくも云々** 同ゥ〔新〕本は旅などにゆく夫の紐をば妻のむすびて又逢ふ時解んなどいふ意の歌萬葉に多し然るを是は身まかれる女の爲の布施のさうぞくの紐なれば源氏わがゆふ云々とよみ給へりされば是も今かくゆふ紐をわれもこん世となりての何れの世にか夕顏とときて夫婦となりてあらんと先(ツ)夫婦の上にていひて且解脫の門に入べき願をも添たるなるべし〔釋〕解脫の門にといはれたるは猶舊注にすがられたる也此歌にさる意まではなし **いよのすけかんな月のつ**

いたち比くだる 五十三丁ウ（釋）關屋卷に伊與介といひしは故院かくれさせ給ひて又の年ひたちになりてくだりしかばかのはゝき木もいざなはれにけりと有故院かくれさせ給ひて又の年とは桐壺帝崩御の翌年にて源氏君廿四歲の時也試に此年よりかぞふるに八年の後にあたれりされば伊豫の任四年にして京へかへり又他國の守になりて四年國へくだりさてかへりて又常陸介になりたるなるべしさて常陸の任六年にして上洛するよし見えたるは任國の政よかりしかば年を延られたるなるべしさて其間の事をすべて省きたるは空蟬君は卷中のむねとある人ならねば任國へやりて筆を省きたるもの也 **ぬさ** 同（餘）和名抄云道祖風俗通云共工氏之子好遠遊故其死後以爲祖和名佐倍乃加美亦云道神唐韻云禓音觴和名太無介乃加美道上祭一云道神也眞淵云手向の神は古事記日本紀等に伊弉諾尊御帶をなげ給ひてなれる神を道の長ちはの神といひ御褌を投給ひてなれる神をちまたの神といひ御杖をなげ給ひてなれる神をくなどの神といふこれらの神ぞ道の神におはせば旅路に手向するも此神也然るを和名抄に他國の神をのみ擧しはよしなしといへり 歌 **あふまでの云々** 五十四丁オ（河）あふまでのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかぶもくづなりけり 歌 **せみの羽も云々** 同（拾）後撰戀四につらくなりにけるをとこのもとに今はとてさうぞくなどかへしつかはすとて平なかきが女今はとて梢にかゝる空蟬のからを見んとはおもはざりしをかへし源巨城わすらるゝ身をうつせみのから衣かへすはつらきこゝろなりけり（河）ありし薄ぎぬに冬の裝束をそへてつかはしけるか仍てたちかへてけるといふ歟（巴）十月朔日に更衣あり一年に二度ありこうちきをかへし給ふを見て也（箋）河海の義ならば今返しつかはされし薄衣は夏衣にて時をうしなへり我身の有さまかくのごとしと音をなくといふにや又の義は衣をかへすは不逢人のしわざなればかへすを見ても音をなくといふ歟（釋）河海の說は文外のおしはかりにて此歌のみにてはさは聞えずましてそれをたすけてとかれたる箋の義はいよ〳〵わろしたちかへてけるといふはたゞ夏と冬と時のおしうつりてかはりたるにそへていへるのみの事と見るべし巴抄は其意とは見ゆれど詞足ずして聞えがたし 歌 **すぎにしも**

云々秋のくれかな 同ウ〔細〕是は十月の歌なるを秋の暮かなとよめる餘情比類なき也歌の道かやうの所に心を付べき事也惣じては春と秋との中に夏冬はこもる也拾遺集にも雑の春秋の中に夏冬はこもれり〔箋〕此義非正義歟只九月盡の歌と分別すべし其故は上詞に伊與介神無月朔日ごろにくだるとあるはあらましごとなれば當時も十月にはあらず又けふぞ冬たつ日也けるもしるくといふも九月中立冬の節の日をいへり然ばこれも十月にあらずけふわかるゝといふは九月盡秋の別の事也四十九日も過秋もけふの空にとゞむる別にもよほされて哀傷の心切なればかく詠じ給ふ也過去の人もけふゆく秋も也云々若けふ別るゝといふに空蟬が事を含むべくは詞書にその句有べきを伊與介下國の事はかきもらしたり云々其上此巻は夕顔上の列傳なれば巻の終を夕がほの事にて書をさむ旁以九月盡哀傷の歌と治定すべき也然れば秋の暮といへる其煩ひなき者乎〔玉〕上に冬たつ日といへるは九月の末立冬の日なるべければ此歌に秋の暮とよめる論なき事也又上に十月のついたちごろにくだるといひて此歌にけふ別るゝとよめるけふは今といふ意にてかならずしも其日にはかぎらず秋のくれといふ事妨なし〔餘〕九月の末といへるいかゞ宣長も九月の末の立冬といへど夕顔の四十九日は十月四五日頃なるべければそれ過て後を九月也といはんはかなはず○孟齋宮女御集に過にしもいまゆくすゑもふたみちになべてわかれのなき世なりせば此歌齋宮集にあることなし今おとせるにや〔釋〕細流は花鳥の説をさながらに擧られたる也さて秋の暮といへるは頭書に擧たる鈴木氏が説のごとく十月になりての立冬の日によめる意也過にしもといひけふ別るゝもといへる二つのもは共に秋の事をさしていへりとせざれば此歌は解がたし箋に夕顔の哀傷とのみ定められたるは此理を思ひもらし給へるからのしひ言と聞ゆ又此巻は夕顔上の列傳なれば云々とあるもいかゞ也ここは帚木巻よりこなたの空蟬と夕顔との事を引すべて結びたる所なれば空蟬の事なくてはあへなきなりけふぞとあるも空蟬のふりはなれたる事よりうけたる語脉なるをやさて孟津に引れたる歌は河海より見えたるが餘滴にいへるごとく齋宮女御集の今の本には見えず歌のさまの餘りに似たるを思へば例の暗記

のまゝにみだりに書つけ給へるなどにやあらむかの抄にはさること他にも多く見えたること拾遺にいへるがごとし　**見ん人さへ**　五十五丁ォ〔玉補〕源氏君に逢見奉らん限りの女をさへかたほならずよき人のみとせんはものほめがち也となり小櫛にはとき誤られたり(釋)此說はひがことなりもしさる意ならば見給はん人をさへなどいはでは例にかなはずたゞに見ん人さへといひたるは傍より見たる人の意なる事明らけし小櫛誤にあらず

校正譯注源氏物語餘釋二之卷目錄

末摘花巻

兵部大輔
父君のもとをさとにて
ひたちのみこ
いま一くさや
あはれは聞しる人こそあれ
御かさやどり
ふたま
いとつゝましげに
さくはち
たいこをさへ
くたいてける云々
みだいひそく
しろきぬの
しびう
さすかに櫛おしたれてさしたる額つき
内教坊
内侍所
ゆるしいろ
うはしらみたる
なこりなうくろきうちぎ
ふるぎのかはきぬ
わかきものはかたちかくれず
いともかしこきうたとは
今やう色のえゆるすまじくつやなうふるめきたるな
ほしの云々
うらうへひとしうこまやかなる云々
くれなゐの一はなごろも
だいばん所
たゝらめの花
みかさの山のをとめをばすてゝ
かいねり
歌あはぬ夜を云々
御そひとぐ
をとこだうか
七日のせちゑ
きやうだいからくしげかゝげのはこ
けうあるもんつきて
はぐろめも
かく心ぐるしきものをも見てゐたらて

紅葉賀巻

朱雀院
行幸
青海波
かれうびんが
歌から人の云々
かうやうのかたさへたど〳〵しからず云々
御后ことはのかねてもと
かいしろ
いうそく
かざしの紅葉云々きくを折て
なやらふとて
名だかき御おひ
內宴
歌よそへつゝ云々
たゞちりばかり此花ひらにと聞ゆ
あざれたるうちすがた
さうのことは中のほそをのたへかたきこそ
平調におしくだして
うねべ女藏人

御けつりぐしみうちきの人
まかは
いみじうはづれそゝけたり
まだかたる物をこそ思ひ侍らね
見まほしきはかぎりありかゝるをとや
うんめいてん
瓜つくりになりやしなまし
がくしうにありけんむかしの人も
なか〳〵しるく見つけ給ひて云々その人なめりと見
給ふに
ほころびは
歌あらだちし云々
おびは中將のなりけり我御なほしよりは云々はたそ
でもなかりけり
まことはうしや世中よ
とこの山なる
七月にそ后ゐ給ふめりし
御こしの內もおもひやられて

花　宴　巻

南殿のさくらの宴
たんゐん給はりて
やすき事なれど
春の鶯さへづるといふまひ
柳花苑
かうじもえやらず
きこえたがへたるもじかなとて
しるしの扇はさくらのみへかさね
とゝのへさせ給へるけなり
そしうなる
弓のけち
藤の宴
女みこたちなども
櫻のからのきの御なほし
袖口などたうかのをり
扇をとられて
いとうれしきものから

校正譯注源氏物語餘釋二之巻

萩原廣道纂注

○若紫巻餘釋

わらはやみ 一丁オ〔餘〕續博物志巻十云瘧鬼小不能病巨人故曰壯士不病瘧晉人云君子不病瘧蜀人以疼瘧為奴婢瘧秦漢故事云昌意子七歳七月七日死後為豆鬼著人為瘧病故為童病 宇治拾遺十二むかし閑院大臣殿冬嗣三位中將におはしける時わらは病をおもくわづらひ給ひけるが神名といふ所に叡實といふ持經者なん童病よく祈りおとし給ふと申人有ければこの持經者にいのらせんとて行給ふに云々(釋)わらはやみといふ名のよしは右に引たる秦漢故事の事より出しなるべし舊注に瘧のおとしやうなど記されたるは餘りに過たりたゞまじなひ加持をさせんために北山のひじりがり行給ふとのみ見てことたるべし **北山になんなにがし寺といふ所に** 同(釋)河海にこの北山に萬葉集の向南山にたなびく雲といふ歌を引給へるを拾遺にこと〴〵しく辨へたりされどすべて用なければ共にはぶきつ京より北の方なる山なれば北山と今もいひてまがひあるべくもあらずなにがし寺は鞍馬寺也とて鞍馬寺の縁起など擧られたるも共に不用の注なれば今はとらずたゞ其わたりのことゝのみ見てあるべし **よのひがものにて** 四丁ウ〔新〕世中にすぐれてひが物ぞといふなりされど此入道をひがものといふは思ふにこは源家の大臣の子なりけるを時の他姓の執政のわがまゝしつゝ源家はかげもなきやうなるをくちをしく思ひて時にへつらはねば内のまじらひも心ゆかで中將をすてゝ國守とはなりしならんその上に娘のよろしきを見ていかで内にも奉らんとおもへど家の内もとまず且いきほひなければ奉るべきよしもなくなどある故に國守にて内々ゆたかになりてむすめをかしづきたてゝ末のすぐせまかせんなどの意也(釋)此新釋の論は皆文外のおしはかりごとなれどげにこのほどの世はさるやうもありしならんとて試にかきくはへつ **近衞の中將をすてゝ** 同〔河〕藤原實方朝臣長德三年正月十三日辭左中將任陸奥守即日還昇此外例可勘〔細〕上略また山蔭の中納言中將を辭し

て備前守に任じて國に下るよし三代實錄に見えたり〔拾〕佐理卿の大貳に請ひなりて下られしなどを思ひてかけるにや　**はゝこそゆゑあるべけれ云々**　六丁オ〔細〕良清が詞也母の族姓をいふ也松風卷に此族姓の事見えたり〔弄〕系圖には誰ともなし但松風卷に大井の古卿兼明親王の事見ゆしかればかの御女に准じて心得べきにや〔釋〕准據の事は例のよしなしゆゑ有といふことをあながちに族姓の事と見られたるもいかゞ唯よしある人といふがごとき意也こゝはむすめのかしづきざまの事をいへるなれば族姓の事のみにはあらじ海　**なさけなき人になりゆかば**　同ウ〔河〕後々の國司の事を云也素寂はにの字を止て了見をくはへたり不レ足ニ信用ニ〔岷〕人なりゆかばゝなさけなき人國司になりてゆかばと云歟用べからず〔細〕今までは國守の所望するをもいひのがれけれども後々に情なき人などの此國の守に成て入道が心おきてをも云やぶりて迎へとる人もあるべきと也〔餘〕上のゐなかびたらんをうけていへるにて其むすめの情なくてちなきものにおひたちゆかばといへるなるべし心やすくてしもえおきたらじはさやうにこちごゝしくなりゆかばいかにいつきやしなふ事のおろかならぬ親なりとも心やすく見るべきや安堵するよはあらじといへる心ならん〔釋〕後々の國司の事といふ說はよしなきことと玉小櫛にいはれたるが如しにの字を止てとある說も國司ともいはでたゞなりゆくとては聞えがたき事河海に用ゐられざりしがごとし餘滴の說はきはめてひがこと也人にとある語さらに女の事とは聞えず親の安堵せぬよしにいへるもこゝにはかなひがたしたゞ安心してむすめを今までのやうにてはえおくまじといふ語勢にのみ聞ゆる也さて愚案は頭書に注せるがごとくなるを猶また案に「いでやさいふともといふより「したがひたらんはといふ迄は一人が難じていへる詞「はゝこそ故有べけれといふよりは良清ならぬ又の一人が入道のかたざまの事を知居ていふ詞とも見るべきかとにかくにゆゑあるべけれ「もてなすなれとある二ッのれの辭抑へていへる意か推量りていへる意かまぎらはしき故にうつなく定めてはいひがたし猶他の例どもをも見合せて考へ物すべくなん　**あぜちの大納言**　十三丁オ〔河〕養老三年始置ニ按察使ニ〔釋〕職原抄云陸奥出羽按察使府按察

使相當從四位下近代納言已上兼レ之 **おとなになり**
給ふものなれば 十五丁オ〔玉補〕給ふるとか侍ると
か有べき所なり給ふ物とあるは誤也〔釋〕此説一わた
りさる事のごとくなれど猶思ふにおとなになるとい
へるは成長して人の妻になる事と聞ゆればこゝは源
氏君の室となり給ふべき事をいふ故に敬ひて給ふと
いはんもさるべき事なるにや **瀧のよどみも** 同ウ
〔玉〕少し打そゝぐといふばかりの雨に瀧の水のまさ
んことといかゞとも聞ゆれど瀧はたゞ山川の早瀬のこ
となればその細き流れなどはしばしふる雨にもたち
まち水はますことなり〔新〕瀧の淀には常は音すくな
きを雨に風さへふけば淀も水増て音高きといふ歟
〔細〕雨に瀧のおとのますこと也山中一夜雨樹抄百重
泉などいふがごとし〔河〕古今戀二「瀧つせの中にも
よどはありてふをなどわが戀のふちせともなき〔餘〕
山中一夜雨云々これは王維が作にて送二東川李使君一
と題せる詩中の二句なり〔釋〕本のまゝにて右の説ど
もを助けていはゞ瀧の淀も打そゝきたる雨にまさる
故に落ゆく瀧の音もまさるといひて有べし然れども
猶頭書に擧たる玉小櫛補遺の説ことわり有べし **す**

こししぞきて 十六丁オ〔玉〕源氏君也此詞ほとけの
といふ上へうつして心得べしすこし退き給ふ故に見
え給はぬによりてひがみゝかとたどる也〔釋〕此説い
かゞなり「聞しらぬやうにやはとてゐざり出る人あ
なりといふにつゞけて書たればさは聞えがたし出た
る人のすこし退きてひがみゝかとたどる也前後の文
勢を味はひてしるべし隔句法とてもかやうの所入ま
じりては聞えぬこととなるうへに情景もいたく劣れる
をやくらき故にすこし退きてうかゞひたるさま也
うどんぐゑ 二十丁オ〔河〕天台云優曇華三千年一
現々則金輪王出云々文句云優曇華者新云二鄔曇鉢羅一
翻爲二瑞應花一金輪王出海水減少金輪路現此華乃
生金輪王之先兆 又云靈瑞華似二蓮華一故云疑
云法華無量劫難レ聞譬如二靈瑞一者有二所以一若三千
年此花現者何爲二靈瑞一乎答云 一義云此花開時
分歷二三千年一歟毎二三千年一非レ云二出現一〔細〕優曇華
此云二瑞應一泥洹經云閻浮提內有二樹王一名二優曇華一
有レ實無レ花優曇鉢樹有二金華一者世乃有レ佛 **おく山
の云々** 同ウ〔孟〕「あし引の山櫻戸をまれにあけて
まだ見ぬ花の色を見るかな〔細〕山櫻戸を稀にあけて

の句法也〔拾〕今按定家卿の歌は萬葉第十一「足引の山櫻戸を明置てわがまつ人をたれかとゞむる此歌を本歌の本體にして腰の句あけ置てといふを今のこゝのまれにあけてといふにかへ下句花こそあるじ誰を待らんは公任卿の花こそ宿のあるじなりけれといふをとりてわが待君をといふにあはされたれば彼腰の句は此歌をとられたりとこそあるべきにかへりてこゝを彼句法といふは顚倒せり孟津に定家卿の歌の下句をまだ見ぬ花の色をみるかなとあるは暗記のあやまり歟傳寫の誤歟おく山の松の扉とは萬葉に十二「奥山の眞木の板戸をおしひらきしゑや出こね後は何せん「奥山のまきの板戸を音はやみ妹があたりの霜の上にねぬ十四「おく山のまきの板戸をとゞとしてわがひらかんに入來てなさねこれらは眞木は奥山に有物なればかくつゞけたりこれら同じつゞけやうなる上やがて所にかなひてよめり花のかほとよめる歌 後撰春下「きのふ見し花の皃とてけさみればねてこそさらに色增りけれ 三條右大臣與風集「うすくこき色はまがへど花といへばひとつかほにも見えわたるかな拾遺「さくら花露にぬれたる顏みればなきてわかれし人ぞ戀し

き

どこ 同〔餘〕行法肝要抄云五鈷三鈷金佛蓮三部杵也五鈷五部之金剛故爲金剛部三鈷三部一體故爲佛部獨鈷摧破杵也西方爲通調伏妙觀察智說法斷疑是摧破也西方蓮華卽理也理獨一法界故爲一鈷

こんがうじのずゝ 同〔最〕欽明天皇御時太子六歳十月に百濟國より經律幷種々の重寶等を吾朝へ渡さるゝ中に件の御念珠有之歟大和國法隆寺へ文永の頃能海法印良觀上人同道して參詣之次彼寺重寶等拜見之時御念珠兩三連在之其中に金剛子數珠相交者也〔餘〕數珠經略云其數珠體種々不同校量乃至槵子掐一遍得福千倍蓮子得福萬倍水精得千億倍若菩提子或手持得福無量

こんるり 同〔餘〕名義集曰瑠璃此云青色寶言金翅鳥之卵殼鬼神得之出賣與人名紺瑠璃

とよらの寺 二十二丁オ〔餘〕大和高市郡にあり三代實錄卷四十三宗岳朝臣木村等言建興寺者是先祖大臣宗我稻目宿禰之所建也云々彼寺推古天皇之舊宮也元號豊浦故爲寺名云云（釋）北畠守部が催馬樂譜の入綾に云豊浦寺の事行嚢抄を考るに云元興寺は飛鳥村の西南久米寺へ行方ニ在豊等村ノ內也昔ハ四方ニ四門ヲ建テ四ノ額ヲ掛

タリ扁曰東門ニハ飛鳥寺西門ニハ葛城寺一本ニハ法興寺ト誤レリ南門ニハ元興寺北門ニハ法満寺ト云境内方廿二町餘最坊舍數十宇有シト也今ハ僅カニ二間三間ノ瓦葺ノ御堂ニ御丈一丈釋迦佛ノ銅像一體昔ノ餘波ニ殘レリ云々豊浦寺ト云ハ是也」と見え又大和巡路記に此寺の記錄とて引て右の趣にいへり然れば此寺東門は飛鳥に向ひたる故に飛鳥寺といひ西門は葛城に向ひたる故に葛城寺といひしなるべし推古御時葛城邊にいまだ寺あらざりければ彼四ッ五ッの寺號の中にも豊浦はもとの大宮の號飛鳥葛城は地名なりける故にかの四天王寺を難波寺といひしやうに專ら此二ッを以て呼しならんかし然るときは別に葛城寺といふが有しにはあらず今此四句は彼榎葉井の在方角を此寺の前通りにして少し西の方にあるよしを詞をかへて云るにて二ヶ寺のゐはひと云にはあらず云々則葛城寺の前なるや其同じ豊浦の寺の西なるやといふ意なり又其えのはゐも葛城寺のえのはゐといひならへるまゝに無名抄のごとくにはかけるなればかれもひが事にはあらじ」といへり此説さもあらんか然れども引たる書後世の物なればなほよく其たしかなる證を考へ合せて定むべくなん　**ひちりき**同〔河〕律書圖云大篳篥小篳篥〔岷〕事物紀原云說文曰羌人所吹其聲悲切本名悲篥〔餘〕和名抄云律書樂圖云云々畢栗二音和名比千利岐　**さうのふえ**同〔河〕笙說文曰笙十三簧象鳳之身吳曰列管以象鳳翼也或云鸞翼鳳音爾雅曰夫笙謂之簧郭璞曰列管匏中施簧管端列仙傳曰王子喬好吹笙作鳳鳴鸞鳳類故通言之李嶠笙詩曰形寫歌鸞翼聲隨舞鳳哀　**きん**同ウ〔河〕琴神農作云云元五絃宮商角徵羽是也加文王武王絃合七絃也琴操曰長三尺六寸六分象三百六十日前廣後狹象尊卑上圓下方象天地五絃象五行〔釋〕河海抄此次に五節の事あり又白虎通に琴者禁也禁追於邪氣以正人心也といへるを引て源氏君わらはやみの時分なれば僧都琴をすゝめ申も若心有歟などあるは餘りに過たるべし又允恭天皇天武天皇の彈給ひし事をも唐の琴のごと注し給へるもいかゞ天武の御事はさもあらばあれ允恭の御時のは日本琴なる事決し　**山の鳥もたどろかし**同〔河〕琴書師曠晉之樂官也工於琴能易寒暑占風雨晉平公鼓之感玄鶴二六十下舞　列子云瓠巴鼓琴瑟鳥舞而鳴魚躍而遊矣〔餘〕史記師曠援

レ琴一奏玄鶴一雙集二于門一再奏延レ頸而鳴舒レ翼而舞まれ〳〵はあさましの御事や云々　二十五丁オ〔箋〕たまさかの一言も曲なきと也傍におきて其時々恐び給ふ事などこそとはぬはつらきなどゝいふ恨もあらめ本臺の人には似合ざる詞ぞと源のゝたまふ也〔萬〕いやしき人などこそといへるにや〔釋〕右の說どもまれ〳〵はとあるをたまさかの一言と注せられたるははもじの意をばいかゞ釋べき必さはあるまじき也萬水一露にいやしき人などこそといへるは分際とあるにはかなへれどこゝは尊卑をいふ所ならねばなほ本臺と側室との分際なるべし　いのちだに　同〔河〕〔細〕「いのちだに心にかなふ物ならば何かは人をうらみしもせん〔餘〕此歌大に誤れり上句は古今集離別白女がよみたる何かわかれのかなしからましといへる歌をそのまゝ用ゐたりさて下句の何かは人をといへるは後撰集一によみ人しらず「わたつみにふかき心のなかりせは何かは君をうらみしもせんとあり又伊勢集につらくなりたる人に「わたつみのふかき心のかはらずは何かは人を恨みしもせん古今後撰の歌の本末を合て一首となして引たるは笑ふにたへぬことなり源注拾遺新釋にも是をとがめいはざりしは見おとしたるにや　わしつゝみ給へるさまも　二十六丁オ〔花〕河海につゝみぶみをたて文の事にいへるおほつかなしつゝみ文は宇治の卷に見えたりたて文にてはあるまじきにや嫁娶記に見え侍り艶書のつゝみやうは假令紫或は紅の薄樣二重に歌をかきておしたゝみて引むすびて墨を引て其を又薄樣を一重にて薬もしは砂逢などの如くつゝみて同薄樣をほそくきりてひねりて頸をゆふ也これに墨を引不レ引は兩說也〔新〕花鳥の說まことなるべし雅亮裝束抄に女御參聟取などの文は結びて裹むとあり　王命婦　二十八丁オ〔河〕王氏の命婦也又上古は王姓をも給ける也續日本紀曰藤津王等言亡父（少納言正月王也）存日作レ請レ姓之表一云臣男四人女四人雖レ蒙二王姓一以レ世言レ之不レ殊二匹庶一〔釋〕王姓をも給けるとあるはいふかしき注也姓を賜はるはやがて臣下の列に入給ふ證なれば王といふ姓を給ふべきいはれなし續紀に王姓とあるはさる姓ありしにはあらすたゞかろく添ていへるのみ也そは此時始て姓を賜はらんとて表を上り給へるなれば此前に姓のなかりし事はしられたりさてこの王命

婦は王とある人の女などの命婦になれるをいふなるべし　**くらぶの山に**　二十九丁オ〔花〕六帖二「くらぶ山くらしと名にはたてれどもいもがりといはゞ夜もこえなん今案此歌いたくかなはねどもくらぶ山をくらきかたによめる歌なればこゝの詞にすこしきたよりあるにや心は夜がはやくあくればしばらくくらき所にやどりはとらまほしきと也京極中納言のこゝの詞をとりてよめる歌兼厭ㇾ曉戀「今夜だにくらぶの山にやどもがなあかつきしらぬ夢やさめぬと「やどりせぬくらぶの山をうらみつゝはかなの春の夢のまくらや〔餘〕眞淵云天武紀に倉部倉歴など有は近江也山城に在と後にいふは誤也歌は古今集に二首あり又暗にはふを清競には濁るといふ説は古意にくらき説也かゝるいひよせはその本語のまゝに云てよせたき心には清も濁るもかゝはらぬ例なるを古意しらぬ人はかゝる説をいふ也此くらぶはもと濁る言也　**ほだし**　卅四丁オ〔餘〕古今集雜下もののべのよしな「世のうきめ見えぬ山路へいらんには思ふ人こそほだしなりけれ和名抄刑罰具鈕加奈保太之鎖足具也　**あしわかの浦**　卅八丁オ〔細〕蘆の若きにわかの浦をよせたり〔拾〕今按蘆若の浦を別にひとつの名所とするは誤れるを此細流にはよく釋し給へり蘆の若きによせたる事少納言がかへしにあしを捨て只わかの浦とよめるにて明らか也又元眞集にかのえさるを隱題によめる歌「なにはがたこげと小船はあしわかのえざるほどこそ久しかりけれこれは蘆分小舟さはりおほみの心にてあしわかのしげれる江をこぎさるほどの久しきとよめり若きあしはことにやはらかなる物にてよわければ古事記にも武雷神建御名方神の御手を取給へば若葦のごとしといへり萬葉第二の歌に葦わかの足痛吾勢とよめり別に注之〔新〕元眞集に云々てふによれば攝津にあしわか江といふ有かしからば少納言が返しは只わかき心にのみよりて紀の國のわかの浦をとり出たるなるべし返歌に其を意得て他の名所をもていふも常ある事也〔拾〕細新勅撰戀一よみ人しらず「あしわかの浦にきよするしら波のしらじな君は吾おもふとも此歌六帖卷五いひはじむといへる題の部にいれり新勅撰集戀一にいだせり立ながらかへる波とは後撰集戀四よみ人不知「こりずまの浦のしら波立出てよるほどもなくかへるばかりか〔釋〕拾遺

よろし新釋はわろし河内に若江といふ所も今あれどなほそれにはあらじかし　歌朝ぼらけ云々　四十一丁ゥ（拾）今按霧の立まよふといふを道をまよふにかねたり萬葉十一「妹が門行過かねて草結ぶ風吹とくなゐはん日までに催馬樂の歌もこれより出たるべし（釋）この說霧の立まよふを道をまよふにかねたりとあるは過たるべしたゞ霧のまよひにもゆきすぎがたき意とのみきこえたる物をや　**きりのまがき**　四十二丁オ（拾）菅家萬葉下「君に見えんことやゆゝしき女郎花霧のまがきに立かくるらん「さやかにもけさは見えずやをみなべし霧のまがきに立かくれつゝ曾丹集「山里にきりのまがきのへだてずばをちかた人の袖も見てまし　**さはりしもせじ**　同（餘）後撰戀五雨にさはらずまできてそら物語などしけるをとこの「思ひやる心ばかりはさはらじをなにへだつらん峰のしら雲大和物語としこ雨のふりける夜ちかぬを待けり雨にやさはりけんこざりけり次郎百首隔遠路戀「都人戀しきまでに音せぬはなこその關にさはるにやあらん萬葉五「すべもなくくるしくあれば出はしりいなゝと思へどこらにさやりぬこのさやりぬに同じ障らるゝなり　**あづまをすがゝきて**　四十六丁オ（釋）日本琴をあづまといふはもと東遊（アヅマアソビ）の歌をひくより出たる名なるべしさて東遊といふ名は東國（アヅマ）のひな歌ををかしくうたふより出たる也もろこしの琴にむかへてやまと琴といふだにいかゞしきいひざまなるに東としもいひならへるはいとあかぬこと也これわが皇國の固有（モトヨリ）の琴なるものを（河）あづまは和琴の總名なれども又東調とて秘曲ある也常陸歌は風俗の秘事四首の其一也東調にて此歌をうたふを今の世しる人まれ也云々（花）和琴に菅攪片攪（スガカキカタカキ）とて神樂催馬樂に用る事あり五ツ拍子にはすがゝき三度拍子にはかたがきといへり又箏にも毎レ樂曲終にかくを菅攪と云と云々（弄）一禪御講釋の時は未分明の由のたまひきと云々尙可レ尋（最）凡菅根をあつめて其音をかきいだしてすがゝきの秘曲とす和琴のかたち弓を六張たてならべてその姿につくれり本はせばく末はひろし云々親行許へ和琴大夫敎豪狀云あづまをすがゝきてひたちには田をこそつくれとは晝身にいとなむ事に候をみな被知食て候らめどもあづまと申候名は和琴をばたゞも申候へども是は東調と申て道の秘事

にて候ひたちには田をこそと候は風俗の秘事四首の内第一の也あづまのしらべにてすがゝき候て風俗をばうたふことにて候を今はくはしくしりてト人もすくなく候らんそれをしらん人は心みよと書置て候けるやらんと思候間涙難禁候如何云々行阿云若菜上に柏木衛門督のすがゝきしたるとあり其所より三四行がかみにしらべにしたがひてあとあるべしとみえたる也若紫此段と若菜上の詞と符合せり(釋)河海の説は右の最秘抄の旨をつゞめて記し給へる也然れども此所の文の意さるむつかしき事とは聞えずもし東調ヽに彈給ふ意ならばあづまにとこそ有べけれされぱことはたゞあづま琴をすがゝき給ふ也

追加　**はるかにかすみわたりて云々**　三丁オ　(釋)中島廣足の海人のくゝ都に云源氏物語の文にいはゆる草子地の詞あり人々の詞あり又人々の心のうちをたゞにいふ詞あり此三の差別其詞つゞきの堺大かたはいとよくわかれたるをまたおのづからうつりゆきて地の詞より人の心のうちをいふ詞になり或は心のうちをいふ詞より地にうつり其間に人の詞のまじりなどなほさまぐ\にはたらかしかきたる所ありこれ紫式部か文法のすぐれたる故のみにはあらずすべて物語文はそのかみ人の物がたらふまゝを記せるさまに物したれば詞のしらべにまかせておのづからしかうつれるもの也今俗にも人のさまぐ\と世のありさまをかたりあふ中にはさやうのおもむきにおのづからうつり行語あるを其しらべにまかせてきく人はたしらずぐ\よく聞とりゆくが如しさるを玉小櫛に詞の堺なくてとゝのはぬやうにおもはれてもじの落たるにやなどいはれたる所もあるは委しく考へられざりし故なりかれ今其例をいさゝか左にあげぬ」とて巻中の例ども擧られたる中にこゝの文も出たるを既に本文を彫せたる後に此書を見たりしかばいとくちをしくてこゝに物しつ　○「はるかにすみわたりて(コレヨリ源氏君ノ見給フケシキテ其御心ニナリテ云)四方の(源氏君ノ詞ニウツル)梢そこはかとなうけふりわたれるなどゑにいとよくもにたるかな(堺アリ)かゝる(地)所にすむ人心に思ひ殘す事はあ(人々ノ)らじかし(詞ニウツル)とのたまへば云々又「(地)くれかゝりぬれど(シ―)おこらせ給はずなりぬるにこそはあめれ云々この說いとよろしければ隨ふべしされぱかしこの釋に「はるかにかすみわたりてといふ所より源氏君の詞なるべしといへるも語中にけしきをかたり給也といへるも

共にわろかりきけしきをかたる中に詞にうつる法也
とこそいふべかりけれ

○末摘花巻餘釋

兵部大輔　二丁ウ〔玉〕此人わかむどほりとのみいひていづれの子ともしられずまぎらはしきしるしざまなるを今よく考ふるにこれも常陸親王の御子にて末摘花君の御せうとの如く聞えたり其故はむすめの命婦が事をいふに父君の許を里にてといひて下に父の大輔の君はほかにぞ住けるこゝには云々といへるは末摘花と御兄弟なれば同じ宮にも住べき人なる故也もし御兄弟にあらずはほかにすむことをことわるべきよしなきにあらずや又命婦が常陸宮に參り通ふも此緣によりてなるべしもし然らずは參り通ふゆゑよしをいふべきことなるにそれを何ともいはずしてたゞ父君の許を里にて行かよふといへるつゞきにやがてこひたちのみこの云々と書出たるはその父君の御父の常陸宮といはねばかりに聞えたり又下に命婦が源氏君のために媒する事をいへる所に父君にもかかる事なんともいはざりけりとあるも末摘花の御せうとなる故とこそ聞えたれもし他人ならむには人の忍び事の媒する事を父などにはいふまじきはもとよりの事なればかくことわるべきにあらざれば也されば必末摘花の御せうとゝ聞えたるにたしかに然いへる文もなく又末摘花の御身のたづきなき事どもなどいへる中に蓬生巻にまれにも訪ひくる人は御せうとの禪師の君のみなるよしのみ見えて此大輔君の事は此巻にもかの巻にもいかにとも見えたる事なきなどは御せうとのやうにも聞えずこれかれまぎらはしき事なり然るに諸抄にかつてそのさだなきも又いかにぞや〔釋〕此說いとよく考へられたり案に蓬生巻なる禪師の君は此兵部大輔の君の出家せしさまにかゝれしなどにもやあらんさてかく書かすめて見ん人のとりあはせて此は其人也とやうに考へしるべく記されたるも巻中一箇の文法にてもあるべし　**父君のもとをさとにて**　同〔孟〕末摘の父宮也〔拾〕今按此說誤也上にいへる兵部大輔なり其上ちゝ君をとは此上に末摘の事なくていふべきやうなし又此說のごとくならば故常陸宮とつゞくべきやうなし又ことば顚倒せり〔新〕下に父の大輔の君は外にぞ住けるこゝにはとき

どきぞかよひける命婦はまゝ母のあたりはなどいふを心得誤りてさま〴〵いへど上には先一わたりいひて次に委しく明す文例にてその住もつかぬなどはここにはかゝはらで只父の大輔の方を里なるべき理りをもて先かくかける也實に王家統なる故と見えて下にも大輔の君と書たればこゝに父君とかけるはもとよりなり云々　**ひたちのみこ**　同〔新〕親王此大守に任ずる事は類聚三代格第五云天長三年九月六日官符云應レ任ニ親王ニ國守事上總國常陸國上野國云々この後親王の任ぜし例數ふべからず抄どもには或は引おくれなどして擧たり〔花〕光孝天皇承和五年正月任ニ常陸大守ニ其後貞純親王代明親王元長親王等任じ侍る也〔明〕考ニ續日本紀第五ニ承和五年正月庚申朔壬申四品忠良親王爲ニ常陸大守ニ從五位下藤原朝臣貞公爲レ介〔釋〕この常陸國の大守に任ぜられし親王を常陸の皇子とも宮ともまうす也　**いま一くさや**　三丁ォ〔拾〕細流の説可然但詩もあまりに好みもし作りもせんはうたてかるべく酒もすこしなどはいふべきにあらねど詩をあまりに作らんよりは酒はすこし好むともうたてかるべし　**あはれは聞しる人にこそあなれ**

四丁ゥ　〔河〕ものゝあはれしる人にこそあれ　六帖「琴の手をきゝしる人のあるなべにいまぞたちはてしををもすくべき湖月ニ引ルハつぐべきトアリ〔餘〕今本六帖にはことの音をきゝしる人の有ければ今ぞたちいでてをゝもすくべき〔花〕ものゝあはれしる人こそあなれ伯牙彈レ琴鍾子期知レ音たる心也〔弄〕〔孟〕命婦をさしてしる人といへり〔岷〕あはれしる人こそイ本あはれきゝしる人こそ〔釋〕此所諸本異同ありて意の明らかならざる事右に擧たるがごとし案に河海に引れたる歌はかの伯牙鍾子期が故事を思ひたる歌なればしる人と云を鍾子期にして命婦にあてられたる意と聞えたりさては擧給へる本のものゝあはれとあるにかなはず又「人にこそあれといふてにをはゝ既に在つる人の事を後より評ずる意となれゝばさらにかなひがたし花鳥には人にのにもじなけれど伯牙云々を引給へれば猶しる人は鍾子期にて命婦をさゝれたるなるべしさては又人こそあなれとある辭にたがひてあはれしる人を傍にしたる意となれゝば下文に續きがたし岷江又一本にあはれしる人こそとあるはみづからのうへをさゝれたりとすれば卑下の詞となりて聞

前後に一翁とあるは伴雄が號なり

えぬにはあらざるべしされど他の本どもに皆きゝしるとあればそれも猶いかゞあらむとにかくに聞しる人又しる人などいふを鍾子期が事によそへて命婦をさせりといふ說どもは前後の文につゞけてかなひがたしそのうへ物の音を聞しる人とあらばこそさもあらめあはれをしるとあるをもて鍾子期にはあてがたきものをやさればみなひがと也今は「あはれは聞しる人こそあなれといふ本に隨ひてさる琴の音まさるべき夜のけはひなどいふ物のあはれは心ありて聞しる人こそさやうにはあらめわが拙き琴にてはもゝしきに行かふ人のきくばかりにやはあるべきといふ意に定めつ猶よく考ふべし　**御かさやどり**　十一丁ォ

〔餘〕いもが門せなが門云々此催馬樂のもとは六帖巻一雨の部に「いもが門ゆき過かねつひぢがさの雨もふらなんあまがくれせんといへるより取たり萬葉巻十一に「いもが門行過かねつ久かたの雨も零奴可其乎因將爲と有て六帖とはすこしたがへり（釋）ひさかたをひぢがさとよみ誤りたる事もいとふるき事と見えて此物語枕冊子などにも皆ひぢがさ雨などいへり肘をかざす意也といへるは昔よりさる意に思ひ誤れるなるべし　**ふたま**　十五丁ォ（釋）枕冊子くちをしき物の下に五月の御さうじのほどしきにおはしますころぬりごめのまへ二間なる所をことにしつらひたればれいざまならぬもをかしと有又桃華殿のひんかしのひさしの二間に御しつらひはしたり云々とも有新後撰集に御持僧に加はりて二間に侍りけるとを思ひ出て前大僧正禪助「天の下千代に八千代といのるこそよゐのむかしにかはらざりけれ禁秘御抄云二間敷疊一帖北間向妻戸敷阿闍梨座半疊南間如御講之時懸御本尊寄障子也　眞俗交談記云二間御鏡毎月十一日辰一點奉拜之給嵯峨天皇御記云毎月朔朝御代鏡奉拭之伯督所役也着淨衣用覆面正月朔無其事除夜勤仕也日中行事に清涼殿とうろ五額間をのぞきてそれより南のかたへ四間ごとにあり二間のまへおの〳〵すはうの綱にかけたり云々など見ゆ一翁云二間はよろしきゝはの家には必しつらふ事也宅神を祭り或は佛像をもかけなどする爲の間にて別に清まはりて物する也內裡にては仁壽殿清涼殿にありて神鏡をも祭り又佛像をもかけ僧徒をさふらはせ給へり二間本尊二間供など諸記錄にあまた見

えたり但し平常に設置くにはあらず齋會などある時にのぞみての鋪設なり云々こゝは末摘花の里亭の廂の中にて二間とりたるその二間のうちに末摘を置源を廂にすゑたる也きはなるとは隔の中の障子の事也云々此説のごとくなるべし　**いとつゝましげにれば**したれど云々夢にもしり給はざりければ云々　同〔玉〕ばはどの誤なるべし又上なるつゝましげにおぼしたれどのどはばの誤なるべし〔玉補〕云々と小櫛にあれどおのれはさは思はず本のまゝにてよけんとぞ思ふ〔釋〕今案に補遺の説のごとくなるべしつゝましげにおぼしたればのばは何を隔て「命婦のかういふをあるやうこそはと思ひて物し給ふといふ所へかけて心得べし　**さくはち**　廿一丁ウ　〔河〕詠二尺八一遊仙窟長一尺八寸吾四寸八分律書圖云又云尺八爲二短笛一玄宗皇帝前身爲二羅漢一也好吹二尺八一被レ擯二出之一　見二聖僧傳一　**たいこをさへ**　同　〔餘〕和名抄云律書樂圖云爾雅云大鼓謂二之鼖一音墳和名於保豆々美一云四之豆豆美今接細腰鼓有二一二三之名一皆以レ應レ節次第取レ名也〔花〕禮記曰鐘鼓在レ庭琴瑟在レ堂延喜四年三月廿四日覽二舞樂一左大臣時平公仰令レ推二大鼓階前一自打レ之

云々大鼓はかならず堂下にてうつ事也但寛治六年五月廿五日殿上競馬六番之時主上 堀川院 自打二大鼓一給此時置二堂上一也　**くたいてける**云々　廿二丁オ　〔河〕腐〔拾〕今按河海の心は命婦が心にくきほどにて止なんと思へりしをおしたちて逢てかれが心をむなしくするを令レ腐といひてくたしてけるをかれが我を心もなう恨み思ふらんと源の思ひ給ふと也只命婦が心をさまぐ\に摧きしかひもなくといふなるべし〔釋〕こゝは猶腐いての意也命婦が心にくゝて止なんと思へりしを源氏君の腐いてしひて逢給へる也けるの辭にて暫く切て心もなく此人のおもふらんをさへとつゞけてよむべし此人の心もなく思ふらんといふ意也我心を催くとはいへど人の心を摧くといふ事は例なき事なれば隨ふべからず　**みたいひそく**　廿三丁ウ　〔河〕御臺秘色今の茶垸様の物也　秘色事　今之秘色磁器、世言錢氏有レ國越州燒進、不レ得二臣庶用一レ之、故云二秘色一、皆見二陸龜蒙集一、秘色越器云、九秋風露越窯開、奪二得千峯翠色一來、好向二中宵一盛二沆瀣一、共二嵇中散一鬪二遺杯一、乃知唐已有二秘色一、非二錢氏爲一レ始、類說　今案秘色は磁器也越州よりたてまつる物也

其色翠青にして餘にすぐれたり仍是を秘藏して尋常に不用之故是秘色云々〔花〕李部王記天暦五年六月九日御膳沈香折敷四枚瓶用秘色うつぼの物語云ひそくのつき今案秘色はあをき茶椀のたぐひを云也〔拾〕五雜組云、陶器柴窯最古、世傳柴世宗時燒造、所司請其色御批云、雨過靑天雲破處、這般顏色做將來、然唐時已有秘色、陸龜蒙詩、九天風露越窯開、奪得千峯秘色來、 **しろききぬの** 同（釋）したの小袖やうの物をいへるなるべしさらでは神事産所の外には白衣を本儀とする事はなければ也こゝは貧家なる故に小袖のまゝながらしびらをゆひ村櫛をさしたるなどのをかしきさま也かれ下文に内侍所をいひてかの小袖の白きが内侍所の老女の神事に着たるにおもひよそへられたるさまとしらる **しびら** 同（釋）一翁云しびらは上古にいはゆる褶の遺製也衣服令の義解に褶者所以加袴上故俗云袴褶と見え集解の古記に褶謂似婦人裳也褶訓枚帶也といひ令抄に今私案褶着袴上也今禮服中所謂裳也とありて其寸法をも褶裳袷廣五尺二寸腰廣二寸五分長二尺三分と記されたり今も卽位の時に着する裳と異なることな

しさてこれらは男子の服也婦女は褶と裙とを重ねて着る事にて褶は染色裙は纈染なるよし令に見えたり着るやうは集解の穴に女褶服褶上耳といひまた跡に婦女服褶裙謂男褶表袴上女褶先着裙而纈裙表而褶下端顯也とあるにて明らか也寸法は男女ともに異ならざりしやう也今京となりて後は女もなべて袴きる事となりてより禮服にも袴と裙をのみ着て褶を服る事は停られたり續日本後紀承和七年三月丁丑朔の詔に一裳之外不得重着と見えたり然れどもなほ行はれがたかりしにや延喜彈正式に凡婦人袷裳不論貴賤一裳之外不得重着單裳不在制限といふ事もありさて裳の製もやう〳〵かはりゆきて後の裳といふ物はこの褶と領巾とを合せてつくりたる物とおぼゆ今の裳の大腰といへるは褶の遺また引腰とて大腰よりつゞけて肩を打越て胸の邊にて結ふ紐は領巾の遺也されば古の褶裙の製とはいたく違ひたりかくて褶は着る時もなくなりて竟には褻服となり下ざまの女またはよきほどの婦にても打とけざまのをりなど袴にかへて着るやうになりしなるべしさるからにヒラミといふ古名もいつしかうせてシビラと

呼かへたるなるべしシビラは下平の略語にて裾のひらめくよしの名か云々夕顏の新釋に云々（此文カシコノ頭書ニ擧ゲタレバ略ク）令義解に枚帶也云々とあるはたがへりこれは上に引たる集解の古記の文也又上裳とて裳の腰にひらめなる絹をまとふとあるもいかゞ上裳とはすなはち裙下裳とは褶の事なるをや云々扨褶は推古紀十三年天武紀十一年に見えたる舊訓ヒラミヒラオビとありてシビラといふ訓は見えず和名抄にも宇波美と有然るに粱塵秘抄に宇波母またしびらといふ褶なり云々女房飾抄にもしびらは上裳の事也といへるは右の沿革をよくも考へず源氏物語の唱によりて打つけに説るものなるべしさばれ其大むねはたがふことなし云芳樹云宍云上引タレバ略ク云々跡云云々古記云女褶俗云引下裙着裙中着總之裙也この說によれば裳よりも下に着るもの也河海に延喜式褶覆袴之衣也と見ゆこの袴は張袴の事なるべし張袴のうへに裙そのうへに裙也云々褶字シビラと訓べきがごとくなれども志比良は中古の俗稱にやとおぼしければ此令なるはなほ志多毛と訓べきにや志比良は下枚帶の略語ならんか志多毛は下裙也又うすものゝ裳云々は御息所に仕る女房の事にてこは褶のうへに裙を着たる式正の姿貴人の御前にてのさま也中古より裙をも裳と書たるからに裙といふはいかなる物とも知れがたくなれども中古の裳は令の裙なりさて褶は裙の下に着るものとおもはる縫殿式に下裙と見え和名抄に下曰裳とある褶の事なるべし然るに字類抄に褶ウハモ名義抄に褶ウハミ和名抄に宇波美などあるは男服の事也女のは下に着るもの故に正しくは志多毛といひ俗にはしびらともいふべしこの物男の用ると女の用ると一字兩訓也まがふべからず云々」この二氏の說にてこの物のさまをしるべし夕顏卷に新釋の說をのみ擧たるはおろそかなりし故に再び注する也　**さすがに**　**櫛おしたれてさしたる額つき**　同〔湖師〕おしたれてとはしどけなきさまなるべし（釋）本居翁云かやうの所に女の櫛をさす事は古風にて今やうにはせぬ事なるべし云々」廣道按に禁秘御抄に朝餉女房皆上髮三位以上釵子計也とあれば陪膳は髮を上る事本儀と見えたりさて櫛は髮上したる抑にさすものなるをこゝはさる儀式の形ばかりに垂たる髮ながらにて櫛をさしたるなるべし故におしたれとはいへる也さすがに

といふ語に心をつくべしさて此物語の比となりては宮たちの御家々などにては陪膳の櫛をさすなどの事は絶にたるを此常陸宮には猶かたばかりもさる儀の殘りたるが中々かたくなゝるよしにかける也　**内教坊** 同〔河〕内教坊在大宿今の大とのゐ也注大内裏にありける歟内裏の宮女の候ずる所也〔岷〕女房の樂をならはす所也琵琶行にも名屬教坊第一部とあり〔除〕續紀孝謙帝天平寶字三年正月饗五位以上於朝堂作女樂於舞臺奏内教踏歌也或説内教坊者老女習音樂於雅樂寮而後教諸女房也妓女者多叙從五位下也職原聞書〔新〕拾芥抄云土御門北堀河西有内教坊町中右記云嘉承二年正月七日内教坊舞妓別當右中將師時傳取皇帝玉樹萬歲樂桃李花喜春樂五曲畢退歸

内侍所 同〔釋〕禁秘御抄云近代者如内侍不候内侍所上古者多以溫明殿爲局　階梯云本朝事始上崇神六年己丑始制溫明殿以三種之神器安置此殿後代之内侍所以右之溫明殿表始也榮花物語わか枝だいばん所にてはかなくびやうぶきちやうばかりをひきつぼねてひまもなくゐたり拾芥抄云内侍所在溫明殿載令有月新土殿掃部女官同候之

ゆるしいろ 廿六丁ウ〔河〕聽色事延喜式云紅梅色也紅紫不以爲褻服と論語に云り然者此二色を聽色といふ歟但今のゆるし色は紅のうすき體也〔花〕延喜十七年參議三善清行請禁深紅服奏議云但淺紅輕黄未及火色者不在制限長保三年太政官符云紅紫服堤防自存中袴直袍下襲之類或是用紅或亦用紫誠雖禁其深染未曾制其淺色今案くれなゐむらさきはふかき色を禁色となづけ淺きをゆるし色といふ云々〔箋〕兩抄の今案共以然るべし延喜式に載る所も薄紅梅と心得て別儀なし論語の文是又相當せり是はゆるさるゝ色也薄きはゆるし色也〔釋〕花鳥の御説よろしかるべし或人云ゆるし色は卽禁色の事にてなべてはゆるさぬ色なれど勞功によりてゆるさるるを規摸とすればゆるし色とはいふ也政事要略には聽禁色と書たる所もあり深き紅紫の外をゆるし色といはゞ赤も黄も緑も何も紅紫ならぬはみなゆるし色といふべきならずや云々といへり一わたりさる事のごとくなれど猶いかゞ也禁色は功勞に依てゆるさるゝなればこの末摘花君など私に着給はんことといかが有べき禁色にまぎらはしき紅紫の色なる故にとり

わきて紅紫の淺きをゆるし色といはんはさも有べき情景也但し言の上はゆるされ色といふべきがごとくなれどさては言がらむづかしく聞ゆる故にゆるしいろといふなるべし今世に御免茉といふがごとき意也赤も黃も綠も禁色の他は皆ゆるしいろといふべきやうなれど他の色は禁色に紛らはしからねば殊更にしかいふべくもあらずゆるすとは禁じたるをゆるす意なることはいふも更なれど似よりたるをゆるされて着んほどなるをばなほさてもいふべくなんなほよく考ふべし　**うはじらみたる** 同〔箋〕色のかへりたる也わりなうといへる詞にて見えたり一かさね兩抄にはうちき一かさねと有河內本かくのごとき歟◎**なごりなうくろきうちき** 同〔弄〕〔細〕紫の色のくろみたるなり〔箋〕此詞にて紅のうはじらみたるといふはべにの色ぬけたるとしるべし〔花〕きぬの次第にきぬの上にうはぎその上に小うちきなり寸法は次第にをめらかす也〔箋〕然らば末摘のうはぎはふるきの裘也此上に紅のうちきを着給ふと心得べき歟〔釋〕右の諸抄の御說どもいたくまぎらはしゆるし色のわりなううはじらみたるとあるは淺紅の年をへて上の白く成たる也さて一かさねとあればこれはきぬの事と聞えたりなごりなうくろきうちきかさねてとあるは紫の年をへて黑くなりたる袿をきぬの上にかさねてめしたる也さてうはぎにはふるきのかはきぬとあれば是は又その上に着給へるなるべし花鳥に小うちきとあれど小うちきは必小うちきとことわる例なればこれはたゞ袿なるべしされどかの御說はたのみがたし下よりかさねて上に及びたる次第と心得てかなふべしさて又なごりなうくろきとあるはもしくは紅にもあらんか紅も年をふれば黑むもの也されどゆるし色の上に又おなじ紅色を着給はんことはいかゞなるやうなれば是は紫といふ說に隨ふべくやあらん　**ふるきのかはきぬ** 同〔河〕杜詩云季子黑貂弊得レ無二妻嫂欺一注云蘇季子未レ用黑貂裘弊又出遊數歲大困而歸兄弟嫂妻皆却笑レ之 奉送魏六丈佑少府之交廣千家廿二又云兎應レ疑二鶴髮一蟾亦戀二貂裘一斟酌嫦娥寡天寒奈二九秋一月詩 詩の心貧家の服にかなへり　西宮記曰臨時祭舞人歸路ニ着ニ黑貂皮衣一也　拾遺集云中宮安子ふるきのかはきぬを高光少將入道横川にすみ侍りけるにつかはしける「夏なれど山はさむしといふなればこのかはきぬは

風をふせがん　御返し「山風もふせぎとりつるかは衣うれしきなみに袖はぬれつゝ」六帖五「とこしへに夏冬ゆけや皮衣扇はなたず山にすむ人」（花）江次第云昔蕃客參入時重明親王乘鴨毛車着黑貂裘八重見物此間蕃客纔以件裘一領持來爲重物見八重大慙云々（新）多武峯少將物語に中宮くるみいろの御ひたゝれくちなし染のうちき一かさねふるきの皮の御そ青にびのさしぬきあはせの袴奉れ給ふる歌「夏なれど山は寒しといふなればこのかはきぬぞ風はふせがん（箋）（拾）河海に引れたる拾遺集にはなし（餘）考るに貂は說文鼠屬大而黄黑爾雅翼貂實鼠類故字亦作鼦史記貨殖傳狐鼦裘千皮とありうつぼ物語藏びらきの巻に六尺ばかりのふるきのかはきぬあやのうら付てわたいれたる御つゝみにませ給ふと有玉造小町子壯衰書に貂裘濕紅藍而色濃也と見えたり（釋）山川正宜云凌雲集に御製東部侍郎野美閑使邊賜帽裘歲晩嚴冬寒最切忠臣爲國向邊城貂裘暖帽宜羇旅特賜卿之萬里行　小野岑守遠使邊城王事古來稱无監長途馬上豈云闌中略唯餘敕賜裘與帽雪犯風牽不加寒野美閑は即小野岑守なり妹子を因高葛野を賀能の類にて蕃客應接の稱呼を用ゐ給へる人といへり御製は嵯峨天皇の也この外貂裘のこと漢籍にはいと多かれどさのみはとこ例のもらしつ

わかきものはかたちかくれず　卅丁オ（花）體無溫といはんとて火桶に火を入てもたせたり（細）（新）前に風吹あれておほとなぶら消にけるをともしつくる人もなし云々かしてへかけてみるべき也云々（餘）此說せんさくに過たりこゝはわかき女と翁とを見給ひて幼者形不蔽老者體無溫といへる句を思ひ出給ひてずし給へるさてその結句に入鼻中辛といへる句のあればふと末摘の顏をおもひ出されて笑ひ給へる也宵に來り給へる時おほとなぶらの消にけるをさへつきもなき御歸り路に詩を引いでゝの給ふべき物かはことに烟火とはともし火の事にはあらぬをしひて說をつくり給へるなり云々　**いともかしこきかたとは**　卅三丁ウ（河）思ふ事をかざらずしてさしもにいひたるたゞこと歌の本意なれはこれをかへりてかしこしとあざける也（釋）本文の頭書に愚案を注して後に河海抄の一本を見れば本文をもうたと引出て右のごとく注し給へり然ればかたとある本は寫し誤れる

事しるしされば右の河海を頭書にも擧べかりしを見おとして誤りたれば再びこゝに注す　**今やう色のえゆるすまじくつやなうふるめきたるなほしの云々**　卄三丁ゥ〔花〕榮花物語云祐子内親王紅梅十二を奉りたるを内の御つかひとて中納言の局參りたりけるが見奉りてうつくしの今やう色やと申けりうつほ物語云わらはにつゝじのこうちきわか君のいまやう色のうちき今案紅梅のこきをいふ也たとへばこき紅にもあらず又こうばいにもあらぬはしたのいろにて此比いできたる色なれば今やう色とはいへり大略ゆるし色と同じき也えゆるすまじくといふは紅のこきかたによりたれば禁色によりたるによりてえゆるすまじきとはいへり〔河〕聽色今樣色共紅色也見延喜式然らばゆるし色同物歟紅にならべてはゆるし色といひ紅に訓ずる時は今樣色といふ也えゆるすまじくとはゆるし色によそへてそしれる歟云々〔細〕〔岷〕花に見えたりこれはきぬの事也〔釋〕右の御說どもすべていかがまづ今やう色とは俗言に當世色といはんがごとくそのをり〳〵に流行する色の事にて禁色の事にはさらによしなしされば花鳥に此比いできたる色なれば今樣色とはいふ也とあるはよろし然るを濃紅にも紅梅にもあらぬはしたの赤色をいふやうにの給へるはわろし柏木卷にすき〳〵見ゆるにび色の御そども黃がちなる今やう色などき給ひ云々ともあれば今やう色はかならず赤色にかぎりたるにはあらで其をりをりの流行色をいへる事頭書に擧たる一翁說のごとくなるべしされどこゝは紅の今樣色なりしことは次々の歌文などにてしられたり然らば禁色ならぬ淺染の紅色なりしなるべし河海の說はまぎらはしくさらに聞わきがたき中に聽色と同じ樣に注し給へるはひがこと也又えゆるすまじくとあるを禁色のかたに思ひよせ給へるなどもすべてひがこと也えゆるすまじくつやなう古めきたるとつゞけたれば古めきたるをさしてえゆるすまじくとはいへるにこそあれ細流にきぬの事也とあるもわろし今やういろの云々古めきたる直衣のとあれば直衣なること論をまつべきにあらぬをいかゞ心得誤り給ひけん　**うらうへひとしうこまやかなる云々**　同〔河〕表裏同色の濃也是も舊儀歟〔花〕上にいへる今やう色はきぬをいふ也此なほしもいまやういろのうらおもて同色なるをいふにや〔細〕

なほしをきぬにそへたる也當世の直衣とは見えず上古にはうらおもて紅の直衣もある歟（岷）今案紅の直衣の事所見分明ならず是は直衣にては有べからずいまやう色のえゆるすまじうつやなうふるめきたるといふまではきぬの事也さればふるめいたるといふにて句をきりて「なほしのうらうへひとしうよりは直衣の事也　注ニこまやかなるといふを色のかたには見るべからずおりざまなどのこまやかなる心歟是今案の義也云々（箋）（明）御抄の説ふるめいたるといふまでを一句にしてきぬの事と見るなほしといふ詞より直衣の事に見る也花の説も大略かくのごとし然るを松殿裝束抄に紅直衣連綿也法性寺關白直衣布袴紅梅織物直衣紫織物指貫皆練着レ之寛弘四三五法成寺關白左府行二曲水宴一主人着二桃花直衣柳色指貫山吹色袙(アコメ)一永久三十一十四五節童御覽日法性寺關白紅梅浮文直衣萠木指貫皆紅衣（岷）私云細の義はきぬはいまやう色直衣はこと色のこまやかなるといふ義也然るに箋の義は紅の直衣の例をひけり此義も勿論きぬはいまやう色也直衣も同じ色のこまやかなるといふ義也しかれば紅直衣のかたを執せられたりと見ゆ（釋）

右の説々いたくむつかしふるめきたるといふまでをきぬの事と見られたるは上にもいへるごとく語脉(コトスヂ)切れずして文をなしがたしきぬならば必こゝにきぬといふべき所也古めきたる直衣のとつゞきたれば直衣なることと疑ふべからずさて「うらうへひとしうこまやかなるといふは岷江の注におりざまなどのこまやかなる事歟とある説いとよろし色の事としてはこまやかなるといふ詞聞えがたしさるつやなく古めきたる色をいかでかこまやかなりとはいはんよく〳〵考ふべし或説にはまろ縹(ハナダ)直衣まろ檜皮の直衣など裝束抄どもに見えしはうらおもてひとしき色の直衣と聞ゆればそれならむといへれどさてはこゝの文脉みだれてこまやかなるといふ詞何をさしたりとも聞えねばそれにはあらじさていとなほ〳〵しうつま〴〵ぞ見えたるとあるは縫ざまのつたなくてつま〴〵のしどけなきをいふ也と同説にいへるぞよろしき　**くれなゐの一はなごろも**　卅四丁オ（釋）此歌の詞にてかの末摘花よりまゐらせられたる直衣は紅の淺き今やう色としられたり一花とはいかにも淺く染たるをいふなるべし壬二集に「初萩のひと花すりのたび衣露

おきそむるみやぎ野の原とあるは後の物ながら語例には引べし　**だいばん所**　卅五丁ォ（餘）禁秘抄云三間北間朝餉方敷黄端疊東倚子其南女房簡入袋辛櫃朱塗也臺盤上有御膳棚二階檜火櫃一圍碁彈棊等同殿上中間臺盤東黑漆厨子上置菓子等其南立馬形障子鬼間方奥一間出也疊中幷南間紫端長押下二間是渡廊籠也南有布障子一間北遣戸一間蔀一間常不上二間際程副北立馬形障子西立布障子其外號切簾一間懸遣戸御簾二間也抑臺盤所東北障子到鬼間和繪也　**たゝらめの花**　同（釋）伴信友翁多々良女考一篇ありていと委しく論はれたり其要を摘ていさゝかこゝにしるす猶本書を見るべし○玉小櫛に伴のたゞらめの花とあるを論ひてたゝらめなるべしと說れたるはまことにさることと也されど字鏡に太々良女式に多々良比賣とみえ後世の書どもにたゝらべといへる物いかなる物とも注されずおのれその物ざねをしらざればさらに考るにまづかのたゝらめの花の色のごとくうたひ給へるは政事要略六十七に載たる衞門府風俗歌に云々と見えたる歌にて其を歌ひ給へる下の心はかの末摘花の鼻の赤きにそへ給へるおもむきにて下文にも其心ばへ見えたれば多々良女の花は紅色なる事著し云々中略さはいへどその多々良女いかなる物にかと心にかゝりつるに此比源順朝臣集の古本の寫をみるに田畦のごとき形に歌四十五首を廻らしよむべく書とゝのへられつる中の歌に「をりをりにゝほふたゝべのうめなればをしめどかひな花のにほひやといふが見えたり今考るにこのたゝべはたゝらめの急りたるにて紅梅のことなるべし其は内膳式に見えたる多々良比賣も同物にて漬年料雜菜の條漬春菜料の中に多々良比賣花搗三斗料鹽三斗と載られたるこれなるべしさてその多々良比賣花搗とあるは紅梅の花にてその蕾を搗とりて鹽漬にして奉る料なるべし今の俗に梅の蕾を鹽漬にして食の飣酒の肴などにすることあり馥氣ありてめでたき物也しかるに其を漬て後常の花の白きはやゝ黄はみゆくを紅梅は蕾のほどは殊にあかき物なるがさながら有て色あせず美麗きものなればとりわきて紅梅を奉る例なりしなるべくまた此梅むかしより紅梅と呼てもはやし來れるを御饌に奉るにもなほ然申さんはさすがにつきなければさらにうるはしく多々良比賣と稱

名を申して奉り來れる例のまゝにやがて式にも其名もて載られたりし物なるべし細注「但しか名づけたりけん意は考へ得ずしひておもへば多々良とは紅梅の蕾のあかきを器に盛たるをたゝらの熾の色に思ひよせたるにはあらぬか但しこゝにいふたゝらは蹈鞴の事にはあらず埃嚢抄に大嘗會の火桶元三の御藥溫むるたゝらなどは世の始りの物なりしか冷泉院の御時燒たりといへりと記せるたゝらこれ也色葉字類抄に鑪をタヽラとよめり鑪は爐と同字也字書に火牀也と注せりさてたゝらの熾の色に云々とおもはるゝ事の掻練のあかきを火色といひなれたるにもいさゝかかよふこゝちす比賣は此花のうるはしくやさしきによりてたゝへもしつべし此はせめて試にいふのみ」さるをうちまかせて紅梅の一名の如くに呼ことゝもなりてたゝらめといひ又たゝべと急ていふことゝもなりしなるべし○そへて云新撰字鏡に萃所巾反長也衆也雉也辯也聚也多々良女と見えたるものこゝにあげつらへるたゝらめなるべく思はるれど字注は他義なれば此物ざねを考ふべきよしなし正字通に萃草生山澤如蒲黄葉如芥とみえたれど何なる草とも知がたく花狀たゝらめには更に合はず又小櫛にいはれたるたゝらべと云ものいかなるものにか知らずおのれさきにたゝらめをたづぬとて本草の道にくはしき人々に問試たるに本草毒藥部に載たる石龍芮といへる物諸國の方言くさ〲ある中にタヽラメ。タヽラベ。タヽベ。タヽナベ。タヽラビ。タヽロベ。タヽライなどとり〲にいへりいづれ本の名なるにかしらず注「此方言の中にタヽラメ。タヽベともいへるを本考のたゝべの考の證とすべし」秋冬より溝瀆また水田などの中に生出て二三月のころ五瓣の黄花開くもの也また濕草部にみえたる鱧腸をもタヽラビといふ所あり此は春末夏初つかたに生出て夏のなかば枝頂ごとに白き碎瓣なる花さく物也これらをおきては似かよひたる名の草木をしらずといへりこの二種花色あかゝらずまた食料とすべきものにあらざれば本考にあげつらへる多々良比賣にも多々良女にもあらざること明かなり」已上信友考 村田春海云字鏡に萃を多々良女と注せり因ておもふに式の多々良比賣は多々良女にて爛目の義なり和名抄に瞸タヽラメと注せり瞸は眼瞼のはれて涙の垂る病なり凡て草に病の名をつ

*玉篇搗ノ注ニ同シ擣ノ注ニ又擣ノ注ニ手推也築也トアリ

けし事例多し龍膽草を疫草敗醬を血眼草などいへり今按にタヽラビといへる草ありこは本草に載る石龍芮なるべし其主療を見るに明目の效ありまた俗に突目といひて眼瞼の腫る病に此タヽラビの葉をとりて挫きたゞらして再び熨して挑げて頂後の風府といふ穴所へはりつくればその腫を治する也さればいにしへたゝらめといへる草はまさしく今のタヽラヒなるべし」已上一翁云雅亮抄ひとかさねにきるきぬの色といふ條にうらこきすはう春はなでしこぞきる云々黃なるは秋よし春はなか〲二つなりにひとへかさねてたゝらべ色とてぞきると有此文くだ〲しけれど推て考るにうらこきすはうを二つばかりに黃なるひとへをかさねたる色をタヽラベと號けてきるといふ意也かゝればたゝらめ花は紅の深きに薄き黃をおびたるをいふ也」〇廣道案に伴翁の考いと精しといふべし然れども紅梅の花漬を多々良比賣といはんことはなほいかゞあらん唯さる名の春菜の花を搗て鹽漬にしたるやうに聞ゆる也石龍芮はゆかしけれど花赤からねばげに信みがたし猶よく尋ねて定むべき也とぞて搗といふことを說れたる注に上ニハ略稻麥の穗を連枷にて擊とるをかつといひ菓などの枝に在るをうちおとすをかちおとすともいふごとく莖の枝に在るを搗とりたるをいふべし此外にも菁根搗韮搗などいふたぐひの見えたるは其物によりて搗ざまはたがへども同じ意ばへにてかつといひなれたる物なるべし」とあるはいかゞ搗はかつとも活きて搗和る事をいふ語と聞えたれば擊落す事にはあらず萬葉集十六にひしほ酢に蒜都伎合而鯛願ふとある合而をふるゝカテテと訓るも搗和ることゝ聞え和名抄葷蒜類に搗蒜を比流豆木とあるも蒜を搗たゞらして和合たる物と思はるされば多々良比賣花搗もかくいふものゝ花を搗たゞらして漬たるを搗と體言にいへるなるべしとにかくに搗は臼などにて搗碎くかたの語と聞えて擊落すをいふにあらざる事は引れたる菁根搗韮搗などうちおとす物ならぬにても著し搗栗なとはうちおとす名のごとくにも聞ゆれどこれも小き栗をば打碎きて用れば搗碎く方の語とぞ思ゆるさて又多々良といふを鑪の事として熾の色に思ひよせたるやうにいはれたる試の說もいかゞ也もし紅梅の花といふに依ていはゞ爛梅の略語などにもあらんか搗たゞらして貯ふ

る物なればかくもいふべくおぼゆされどなほ決めがたしよく／＼人に問定むべくなん　**みかさの山のをとめをぼすて、**同（釋）東遊求子の歌に云千者也布留、賀茂能也之呂乃、比女古末川、與呂川與不止毛、以呂者可者良之、と有河海などに春日社には三笠の山とうたふとあるは賀茂の社を三笠の山とかへてうたふといふ事なるべしこれ昔よりの傳にやおほつかなし案に古本東遊求子歌の裏書に立播歌、春日歌、倭歌、柏木歌、といふ有てその春日歌の下に東遊之後多唱件歌故以附出といふ注ありさて其歌は加美乃末須、加須加乃波良二、多津也々乎止女、多津也々乎止女、也乎止女波、和加也乎止女波、加美乃也乎止女、加美乃也乎止女と有また風俗八乎止女の歌に也乎止女波、和加也乎止女曾、太川夜々乎止女、太川也々乎止女二段加美乃萬須、太加末乃波良仁、太川也乎止女、太川也乎止女とあるは右の春日歌と同歌と聞えたるを唱へざまのいさゝかかはれるのみなり太加末乃波良仁とある句を河海に引れたるにはこのみやしろにともあれは或は春日にては春日の原ともうたひかへしなるべしさて三笠の山のをとめとはなけれど右の

春日の原にたつや八少女とあるをにほはせて他の人には知られぬやうに源氏君の歌ひかへ給ふさまに作者のあやなしてかゝれしにも有べきかさらば衞門府の風俗歌に東遊の求子の後にうたふ歌を繼てたゝらめの花の色の如きをと女をば去てといふ意にほのめかしの給へりとや見るべきされど春日も三笠山も共に何の縁といふことは知れがたし猶考ふべきなり

かいねり　同ウ（釋）宮重一清云火色かいねりは男女にわたりて着する色目也女は衣に用ゐ男は下襲に用ゐ、らる装束諸抄のおもふき染色の事にしるしたり初音巻にひかりなき黒かいねりのさゐ／＼しくはりたる云々寄生巻にきよげなるほそながども白きかいねりなどたゞあるにしたがひて云々すでに黒かいねり白かいねりとある時は染色の事とは見えず地の事と見えたりされど装束抄源氏諸抄みな染色の事と注せらる不審なきにしもあらず云々」伊勢貞丈主云搔練の事は中古より詳ならざりしにや何人のいひ出しにかかいねりを赤色の事として火色にならべてその差別を論ずる事になり諸說まち／＼にして決しがたかりしに宮重一清翁の源氏物語の黒かいねり白かいね

りを證として色のことにはあらず地の事也といへるにてよくわかれたり然れとも地の事とのみいひて何物の地ともいはざるは遺念なり今案にまづ掻練のかいとはたとへば行く事をかいゆく破る事をかいやる取ることをかいとるつくる事をかいつくなどいふ類のかいにて掻に意はなくたゞ虚詞也されば練ざる生絹に對して練たる絹をいひしことと明らか也」一翁云かいねりは專ら緋色の練絹をさしていふことゝ聞えたりさるはもとは練絹の緋色なるをさす唱にて緋のかいねりといひけんを語を約めてつひにはかいねりとだにいへば緋色の練絹の名と聞ゆることゝなりたるなるべしさるはこのかいねりの絹の色目は緋色なるが多く他色は稀なればおのづからさやうに打つけなる唱となりたる也他色なるは皆某色のかいねりと類を分ちていふことゝなりし物にて白かいねり黒かいねりなどいへる是なり白とも黑とも某ともわけずしてたゞかいねりといふは必緋色の練絹なりし故に火色と混れ來りて其別きはやかならずなりゆき後には附會の説もとり〲に出來れる也云々」廣道云右の説どもなほ諸書を擧ていへれど今は所せくて略き

つかいねりは伊勢ぬしの説のごとく練絹より出たる名なるが後に緋色に轉りたる也但右の説にかいねりのかいは云々といはれたる語例の中にかいとるはよろしかいやるは遣也破にはあらずかいつくは書つく也掻作にはあらずかいゆくといふ語は大かた無き語なりこれはついでにいふのみ也後世皆練とも書るは盾推の字なるべしさて後の裝束抄どもにはさま〲にいはれて或は裏打たるを云といひまたは裏を張たる也といひ或は裏紅の張たるを云といひ又は火色皆練同じ物也といひまた差別ありなどいはれたれどかいねりの本の意は右の説々にて明かなり後にはさる差別なども有しならめどなほ附會の説なりおほかたかばかりの事も家々にていたく秘られしほどに後にはいづれ宜しとも知れぬやうになりてさま〲の説ども出來にたる事は是のみにはあらずそのかみあぢきなき世の癖にてぞ有けらし　歌**あはぬよを云々**　同〔花〕今案見もし見よとやは我も見ん人も見よの心也かさねていとゞはかさね〲へだてたる事也〔細〕心はいとゞへだゝりたる中と思ひつるにから衣君が心のつらければなどへだてあるさまにうけ給はるは猶

○朝ハ御ノ誤ナルベシ閏二乙亥ハ日本紀ニ見ユ

猶心のへだてをかさねよとあるかと也云々〔明〕かこちたるなり〔拾〕源の我にねんごろに見よとてや此衣は給はりつらんと也花鳥に我も見んとあるは不レ稱歟〔釋〕結句は相互に見もし見られもせんとやと咎めたる意也とやとあるに心をつくべし花鳥いさゝかたがへり細流は衣の事の注なしいかゞ拾遺に我にねんごろに見よとてやといへるは又たがへりあはぬ夜をかさねてといふ語脉(コトスヂ)と見るべしいとゞはへだつる中にいとゞといへるにてへだつる事のいよ〳〵かさなる意也〔餘〕うつぼ物語藏びらきの卷に「よそながらおほくの年もへだてけりころもうらみし時はいつぞも拾遺集の歌は頭書ニアあひそひしほどは衣を中にへだてしだに疎かりしに今はあはぬ夜をさへいく夜もへだてしとなり　**御そひとぐ**　卅七丁オ〔餘〕明阿法師のうつぼ物語に書そへたるを見れば一具をひとぐとよむべからずひとくだりとよむべし音にいはゞいちぐ也と有こゝもともは一具とかひとくだりとか有つらんをうつせる時にひとぐとせるにやされどひとぞうなどいふ詞も音訓をまじへてつけたり〔釋〕岷江に擧られたる本文にはやがてひとくだりとかゝれたりさる本もありしにやさらば寫し脱せるならむされどひとぐなどいふもこの物語の比の俗語と見てあるべし　**をとこだうか**　同ウ〔河〕天武天皇三年正月朔ニ朝ニ大極殿ニ詔男女無レ別闇ニ夜踏歌男踏歌　聖武天皇天平元年正月十四日始有ニ男踏歌一女踏歌ハ　天平十四年正月十六日天皇御ニ大安殿一宴ニ群臣ニ酒酣奏ニ五節四舞ニ更令ニ少年童女ヲシテ踏歌上是濫觴也〔餘〕聖武天皇天平元年云々この事續紀に載ることなし何によりてかける歟天平十四年云々これは續紀に見えて正月壬戌の日なり五節四舞とある四は田の字の誤なり舞の字の下に訖の字を脱せり是濫觴也の四字續紀の文にはあることなし〔釋〕踏歌のこと新釋などにも說あれど初音卷にかのわざの見えたる下にかいあつめて注せればこゝには略く　**七日のせちゑ**　同〔釋〕伴信友翁七日節會白馬青馬の精考ありいと長ければ其文を約めて大むねをこゝに注すくはしくは本書を見るべし○彼考に云正月七日青馬(アヲウマ)を御覽し給ふ事は萬葉集に水鳥乃可毛能羽能伊呂乃青馬乎家布美流比等波可藝利奈之等伊布右一首爲ニ七日侍宴一右中辨大伴宿禰家持預作ニ此歌一但依ニ仁王會事一却以ニ六日一於ニ內裏一

召諸卿等賜酒肆宴給禄因斯不奏とあるぞ書に見えたる始なる云々此卷の例に依るに聖武天皇乃御世天平二年正月七日の事也此事これより前に始給へるにか其は詳ならず又其後相續て行はれしにやそれも考る所なければどうけばりたる恒例にはあらざりしにや色葉字類抄に本朝事始を引て光仁天皇寶龜六年正月七日天皇御楊梅院安殿設宴於五位以上已而内厩宴進青御馬兵部省進五位以上裝馬とあり河海抄にも此文を引て此青馬始也と注されたり此事續日本紀には載られずして弘仁内裏式正月七日の會式に引青馬式を載られたり水鏡に弘仁二年正月七日はじめて青馬をみそなはし給ひきと見え紹運錄嵯峨天皇の御譜に弘仁二始覽青馬と見えたるをおもへば中間廢られたりつるを此時再興し給へるをかくは記せるもの也國史には續日本後紀より始めて載られて仁明天皇の御世承和元年正月壬子朔戊午（七日なり）御豊樂殿觀青馬宴群臣と見えたるぞ始なる云々さてその青馬を覽し給ふことは右にいへるごとくかの助陽氣也（文德實錄ノ文也上ニ引タルヲ今席道ガハブキタルナリ）の謂にて江家次第白馬節の裏書に御馬本數廿一匹禮記曰以青馬七匹然

而用二十一匹者三七之義也三陽之義之由見寛平御記また年中行事秘抄に帝王世記云高辛氏之子以正月七日恒登崗命青衣人列青馬七匹調青陽之氣馬者主陽青者主春崗者萬物之始人主之居七者七曜之徵陽氣之溫始也など見えたる漢國の風俗により給へるものなりけりさてその青馬は儀式の青馬儀の條の宣命に常毛見留青支馬見太萬閇退止爲弖奈毛云々弘仁内裏式内裏儀式和名抄に爾雅注云菼騅今按菼者蘆初生也吐敢反俗云葦毛是也青白如菼色也とある毛色にて白馬毛付奏文にも葦毛とかく例なるをおもふべしさてその青といひ葦毛ともいふ毛色を又或は青鷺毛ともいへり云々そは蒼鷺の羽色に似たる由なりしかれば今俗に水青といへるぞ當るべき云々かくて今の俗になべて葦毛といふ毛色をば昔は葦花毛と稱へり云々葦花毛としもいへるは青に白が雜りて葦葉に其花の白きが散かゝりたるに似たるをもて稱けたるなるべし云々さて今俗に青毛といふを古は黑みどりといへり云々然るを後の御世となりて青馬を白馬に更めて覽し給ふことになれり其は醍醐天皇の御世延喜の末つかたよりの事なるべし云々さ

て遂に其青馬儀の字をも白馬と改られたりいはゆる白馬奏白馬節會などこれなりされど白馬と書ても詞にはなほ舊のまゝにアヲウマと唱ふ例也かくてしか白馬と書たる事の書に見えたる始は日本紀略村上天皇の天暦元年正月七日癸巳白馬宴と書るを始にて次次皆白馬とかき其外の書どもまた家々の記どもにも延喜より後のものには皆白馬と書て青馬と書るはをさ〳〵ある事なしさて然白馬に更給へる謂は年中行事秘抄に正月七日白馬事十節記云馬性以白為本天有白龍地有白馬是日見白馬即年中邪氣遠去不來などいへる方の説にさらに據給へるものなるべし云々」○廣道云此下なほいと委しけれどかばかりにても大かたの故はしらるべしとて今は略きつさて本日の式は弘仁内裏式に左右馬寮引青馬入自延明門云々度殿庭近衛分配前後毎七匹前後寮官人分陣云々出自延秋門訖儀式に左右馬寮率青馬入自延政門云々其行列也左近衛左右各五人前行左右馬寮頭次之青馬七匹在中次之左右寮允左右各一人次之青馬七匹在中次之左右寮屬左右各一人次之青馬七匹在中次之左右寮助左右各一人次之右近衛左右各五人次之江家次第に左右馬頭度次白馬七匹次左右允次白馬七匹次左右屬次白馬七匹次左右助次右白馬陣度畢次白馬經殿上前無名門明義門仙華門度御前自瀧口出など見えたるおもふきを考へて其おほかたの様をしるべし

きやうだいからくしげかゝげのはこ　卅八丁ウ〔拾〕和名抄云鏡臺辨色立成云加々美加介此和名あれど昔より音にいひなれけるにや今も然いへり又云嚴器俗用唐櫛匣三字加良玖師介（釋）鏡臺はかゞみかけもちろん也其圖は類聚雑要抄に見えたりからくしげは櫛を入るゝ匣也其圖も同書に見ゆ唐としもいへるは形の唐めきたるをいへる也古玉くしげなどいへるは圓き筒なりしを玉とはいへる也其後にもろこしより渡し來れる物など有て其樣にこちたく造れるをとりわきて唐くしげとはいへるなるべし搔上の筥は髪を搔上る具をいるゝ故の名なるべしこれもまた雑要抄に圖有てその納る物を記せるに懸子に螺鈿櫛二枚鋏十疋鑷子六疋髪搔二櫛掃耳洗在折立身納三寸八分丸鏡筥一合在鏡在折立と見えたり然るにからくしげにいるる物も大かた同じさまに見えたるはいかなる由にか

あらん案に唐くしげはおもだゝしき元服の儀式などにも見えたるを搔上筥はさばかりは見えずされば恒に用ゐる櫛笥にやあらん或說に此筥は婦人の用るものにて主とは解櫛を收たる物なるべしといへりさもやあらむ雅亮裝束抄童殿上のみづらゆふ條に此物の見えたるは童のみづらゆふは元服とはやゝ輕きからに搔上箱を用ゐる事にや岷江入楚にきやうだいのからくしけとある本あるよしを注して鏡臺の具のからくしげといふなるべし云々鏡臺などは男の具足と聞ゆと有さてはすこし意ことなりと聞ゆされども鏡臺と唐櫛匣とは別なれば猶いかゞあらん考ふべし。

けうあるもんつきて 同〔花〕此一段の詞說々あり一には源氏のおくり給へるきぬどもの中にかゝるうはぎもありけるを今見いで給ふ也一にはうはぎばかりは末摘の方にしたてられたるをめづらしく思ひ給ふ也〔岷〕聞書此うはぎは末摘の方にしたてられたる也〔新〕源よりまゐらせし裝束をさながら皆着給ひしと源のおぼしよらで與ある紋樣のうは着をのみいちじるく見ゆれば今までのさまと異なる故にさきにわがおくりしにやとあやしう見給ふなり〔釋〕花鳥の始の說よろしかるべし新釋湖月も其方を用ゐられたり

はぐろめも 卅九丁ウ〔釋〕女の齒黑する事いつの比よりかはじまりけん詳ならず堤中納言物語に人はすべてつくろふ所あるはわろしとて眉さらにぬき給はずはぐろめさらにうるさしきたなしとてつけ給はずいと白らかにゑみつゝこの蟲どもをあしたゆふべにあいし給ふ云々とある文の勢その世よりいとふるき時よりつけたる事と聞ゆさて和名抄容飾具に齒黑文選注云黑齒國在東海中其土俗以草染齒故曰黑齒俗云波久呂女今婦人有齒黑具故取之とある黑齒國は皇國の事也などいへれども詳ならず順朝臣の意は今の婦人に齒黑の具あるが故に此文を取てこゝに引くとの意ばかり也さてこゝの本文の意を思ふに此比より昔は男にあふばかりの年比にならざればはぐろめはせざりけんを此物語の比となりてさるをさなき少女もはやうかねつくる事となれりと聞ゆ「古代の祖母君の御なごりにてとある文の勢さやうに聞えたり又上に引る堤中納言物語にまゆ更にぬき給はずはぐろめも云々といひとりかへばやにかしらあらはせ髮もかきたれなどしてみればあまのほどふさ

ふさとかゝれり眉ぬきかねつけなど女びさせたれば云々などあるを思ふにかねつくるとまゆぬくとは必同時にせし事と聞えたりされば本書に「はぐろめもまだしかりけるを引つくろはせ給へればまゆのけざやかになりたるもうつくしうきよらなり」とかゝれたるはかねつくると眉ぬくと同時にするは定まりたる事なる故に齒黑めして引つくろはせ給へればまゆのけざやかにと齒の事をもて直に眉の事に相てらし及ぼしたる文意とおほしさらば湖月に齒黑めの後ぼぼうまゆの常の眉になりたるをいふ也とあるはうらうへのひがこと也常のまゆのぼゝうまゆになりたる也　**かく心ぐるしきものをゐ見てゐたらで**　同〔拾〕見てゐてあらで也天阿切多なればつゞめてかくはいへり上にうきよを見あつかふらんとくゆる心なれば心ぐるしきは末摘にて見てので濁るべきにや紫を心ぐるしといはゞ源の外におはするほどの紫の心をくるしといへる歟(釋)心ぐるしきは紫上也かくといふ詞に心をつくべし契沖は心ぐるしといふ語をたゞに心の苦き意に見られたる故に誤れり心ぐるしは俗言にキノドクナといふ意にてこゝは愛の餘りて立はなるゝがきのどくにこゝろぐるしといふ意に轉りていへるなり憂き世を見あつかふとあるが末摘花の事なり

○紅葉賀卷餘釋

朱雀院　一丁オ〔河〕朱雀院は三條朱雀也是後院なり古今集にも朱雀院とあるは宇多院の御事也脱屣の後は此院に御座ある故也〔箋〕代々のおりゐの御門朱雀院におはしましつるを承平の御門を朱雀院と申奉りてより此義なきなり承平の御門は延喜より後の事なれは此紅葉の時分をば其以前と心得べし(釋)拾芥抄ニ云朱雀院累代後院或號二四條後院一三條北朱雀西四町四條北西坊城東とあり此物語に朱雀院と申奉る御門は桐壺帝の御子の帝の後におりゐさせ給ひてこの後院に御座ましゝによりて申す也今とは別也思ひ混ふべからずいづれの帝にても仙洞とならせ給ひて後此院におはしませばしか申奉る也朱雀はたゞ院の號なり　**行幸**　同〔細〕〔眠〕蔡邕云天子車駕所レ至見レ令長二老宮屬一親臨レ軒作レ樂賜以二食帛越寄一有レ級或賜二田租一故謂二之幸一　晉灼曰民臣被二其德一以爲二僥

倖也顏師古云幸者可慶幸也故福喜之事皆稱爲幸〔餘〕蔡邕云は獨斷の語也晉灼曰は漢書高帝紀注に見えたり(釋)天子の行給ふ所には幸福ある意にて行幸といへるよしなり〔河〕朱雀院行幸之先例　延喜十六年三月七日辛酉行幸朱雀院有法皇五十賀同年八月廿八日行幸同院詩題高風送秋韻　康保二年十月廿三日行幸同院題飛葉共舟輕〔花〕この朱雀院の行幸は宇多御門の御賀になずらふる也その故は延喜十六年三月七日云々醍醐の御門の御時朱雀院と申は寛平法皇の御事也五十の御賀は三月の事なるをこの物語に十月のもみぢの頃にかきなしたるべし此卷に一院と申す事ありすなはち寛平の御門になずらふるなり桐壺の御在位の中に一院崩御の事見えざるは寛平法皇は延喜の御門崩じ給ひて後かくれさせ給ふ故也〔新〕宇多天皇のことゝするは例のかたくなしいづれの御賀いつの御時にてもありなん　**青海波**　同〔餘〕萬葉緯といへる書に樂詠一卷ありそれにしるしたるは輪臺新樂管絃時連吹青海波此曲昔者平調樂也而承和天皇御時此朝依勅被遷盤渉調曲舞者大納言良峯安世卿作樂者和邇部大田麻呂作詠者小野篁作

也とあり〔新〕三位の人舞に立るゝ事古くも侍りしか考ふべし此時より後には後一條院治安三年十月十三日道長公のうへ倫子の六十賀の時經道卿の右兵衛督陵王まはれし事榮花物語に見ゆ經道卿は公卿補任に寛仁四年從三位同年十一月正三位と見ゆれば治安にはすでに三位なりしなり　**かれうびんが**　同ウ〔河〕聖主天中天、迦陵頻伽聲、法華經文句に迦陵頻伽在卵聲勝衆鳥云々或迦樓頻賀或曰伽陵嚬者梵語也唐云敎鳥此鳥鳴時音中囀苦空無我常樂我淨土也〔細〕翻譯名義集云此云妙聲鳥大論云在殼中未出發聲微妙勝餘鳥正法念經云山名曠野其中有迦陵嚬伽出妙音聲美音若天若人緊那羅等無能及者唯除如來音聲　歌**から人の云々**　三丁オ〔河〕或本云「うら人の袖ふることは遠けれど浪のたちゐにあはれとは見き舞のすがたも海邊にかたどりたる事勿論也然而證本ことにから人のとある歟〔餘〕雅望考るに樂詠の書に舞手向一方摸寄波引波體也云々と有さらば浦人といひ浪のたちゐといへるよせありて聞ゆされど此下に人のみかどまでおもほしやれる御后ことばなどあればから人のといへる五文字誤には

あらざるべし細流抄に青海波は唐樂なりとしるし給へり今考るにから人とよみ給へるは舞人の出たるさまをいふなるべし細流に唐樂也としるし給へるはから人といへる文字につきていへるにやあらむ〔拾〕思ひながら逢ことの遠き中をかくかすめて立居につけてとはいへり舞には立居すればそれによせてたつにつけ居るにつけてもありし事ども思ひ出てあはれと見侍りきと也萬葉十一「立居するわざもしられず思へども妹につげねば間使もこず　同十二「立居するたどきもしらずわがこゝろあまつ空なり土はふめども　同十一「たちて思ひ居てもぞおもふ紅の赤裳すそ引いにしすがたを〔釋〕河海の或本の歌げによせ有て聞ゆるを下文の詞に打合ぬ事餘滴にいへるがごとし又餘滴に細流を辨じたるはさることながらから人のとよみ給へるは舞人の出たるさまをいふなるべしといへるはわろし本文の頭書に擧たる河海抄の舞の裝束を考るにさばかり唐人めきたるいでたちとは思はれずされぱひが事也拾遺の說逢ことの遠き中をかすめてといひ舞には立居すればそれによせてといへるはよろしきをありし事どもおもひ出てといへるはいかがさては「大かたにはといふ次の詞に打あはぬものをや猶よく考ふべしとにかくに解得がたき歌になん有ける　**かうやうのかたさへたど〳〵しからず云々**　同ゥ〔細〕此樂は唐の樂とも能分別し給ふをいふ也誠に后などに立給ふしたゞと源の思ひ給ふなり〔箋同〕〔花〕左右の樂のわけめをさへしらせ給ひてから人の袖ふるとはよみ給へると源氏の女御をほめ給へる心なり　**御后ことばのかねてもと**　同〔細〕后の下地なり〔弄〕きさきがねにておはしませばかく申給へり〔湖師〕兼ても后としるきとの心なり〔箋〕藤つぼをよき立后の器かなと源の思ひ給ふ也是を只今藤つぼは后にあらずと云不審を河海にのせらる紫明抄ノ說也　はなはだ然るべからずかねてもとほゝゑまれてとある時は當時后と云にあらず后がねと云義也〔新〕こは唐樂高麗樂をわけてから人の云々とよみかくるをいひ人のみかどまでと有は此上の句に皆かゝりて御おぼしやりのひろきを云且まことに儲后のしらるゝとほめ給へり〔釋〕右の說どもいづれも釋得られたりとも聞えず先ッ「かうやうのかたさへ云々とある下の注に左右の樂のわけめをしり給ひてから人のとよみ給へる

やうにいはれたるはさることのやうなれど頭書にもいへりし如く舞樂の盛なる御代にあひ給へるやんことなき御方ならば左は唐右は高麗といふばかりの事を知給はぬやうやは有べきそれ知給へるが御后がねといふことさらにことわり聞えず物遠くつきなき注といふべし新釋の說ざまは少しは理あるやうなれど猶同じ趣なれば論に及ばずとにかくにさる故事などの傳はりて異朝のふるきためしをしりてよみ入給へるが大かたの人のえしらざりし事などなりし趣に見ゆされどこゝの詞は解がたし猶よく考ふべし　**かいしろ** 四丁ウ〔孟〕垣代也警固也垣に立て此内にて裝束を着する也〔拾〕今案孟津の說おほつかなしやがて下に木高き紅葉のかげに四十人のかいしろいひしらず吹たてたる物の音どもにあひたる松風まことのみ山おろしと聞えて吹まよひ云々河海云長秋卿の笛譜云云々驛花云云々此說の如くならば樂人をすべて垣代といふ歟日本紀立歌場衆歌場此云宇多我岐續日本紀云天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀門覽歌垣男女二百四十餘人五品已上有風流者皆交雜其中云々又稱德天皇由義宮にして歌垣を御覽じけることも

記せり行列する事垣のごとくなれば歌垣といふ歟今垣代といへる是なるべし云々　**いうそく** 同〔河〕右族也華族也又云右職〔孟〕有職の人は諸藝に達して人體にいたるまでの心也〔餘〕荷田在滿云有職とかける文字義もなく聞ゆもし有識をいふにや雅望云右職の字なるべし前漢文王傳に選郡縣小吏開敏有材者親自飭厲遣詣京師受業博士數歲皆成就還歸爲右職注師古曰郡中高職也〔釋〕餘滴の說雅言集覽にも擧て物語ぶみの例ども多く引たりげに面白く聞ゆるやうなれど漢書なるは選擧につきていふ意と聞ゆればなほいかゞあらんとぞおぼゆる有識の字相應へるなるべし職字の非なるよしははやう多田義俊などもいへりさるを中昔ごろの衣服調度をしらぶる學問の號とせるなどはいみじきひがこと也さて物語ぶみに見えたるは孟津のごとき意也　**かざしの紅葉云々きくを折て** 五丁オ〔河〕楊氏漢語抄云頭花加佐之又挿頭花挿は冠の角に指す也結たる藤を指事常にある歟冬も藤を指と聞し歟、菊挿頭事後撰云女八のみこ元良の御子のために四十賀し侍けるに菊花をかざして參議藤原伊衡朝臣「萬代の霜にもかれぬしらぎくを

うしろやすくもかざしつる栽菜花物語云治安三年十月十三日殿の上(道長公の上雅信の女)の御賀なりかざしの花どもこがねしろかねの菊の花をつくりてこのきんだちかざしたる延喜十八年十月九日御記云女房侍前菊花盛開此夕更衣命婦藏人等相集頗設小宴云々中略臨明左衞門督折菊花奉插頭〔新〕類聚國史に桓武の御時樂ならねど蘭を挿せしと見ゆさて此蘭はふぢばかまにはあらで菊をいふなり〔釋〕插頭花は上古の髻華のなごりなるべし髻華も上古は直に髻にさしけんを冠の上に挿すことゝなりしは推古天皇の朝に唐ざまの冠位儀禮を摸し給ひし時よりの事と見えたり日本紀をよく讀て知るべしさて後は大かた作り花を用ゐらるゝ事なりし也されどこゝなるは折から風流の爲なれば眞の紅葉菊と聞えたり　**なやらふとて**　十丁ウ〔河〕金谷園記曰爲陰氣時絶陽氣始來陰陽相激化爲疾厲之鬼爲人家作病黃帝使防相氏黃金四目身著朱衣手抱桙楯口作儺々之聲以驅疫厲之鬼至今歲除夜爲之　文武天皇慶雲元年甲辰十二月此年天下諸國疾疫百姓多死始作土牛追大儺除夜に儺を追事也鬼やらひといふ追の字をやらふとよむ也儺の字をもおにやらひと讀也始自禁中迄于何家行也〔餘〕こゝに慶雲元とせるは誤也續紀を考るに慶雲三年丙午のとし也〔新〕追儺をなやらふとよむやらふは追ことなり又鬼やらひともいふこは十二月除夜に大舍人寮方相をつとむ熊皮に黃金の四目をつけ朱衣を着楯戈を持たる鬼の形をなすさて此方相先儺聲をなして戈を以て楯を叩く群臣これをうけて呼つゝ方相を追て御前及びかた〳〵をわたる殿上人長橋の内にて桑弓蓬矢して方相を射るさてさま〳〵の事有て末には格子を放ちてふみならし白木燈臺を衝など亂りがはし然ればかの物を打ならしなとするまねすとて屋などこぼちたるなりけり惣て追儺の事諸書に見えて明らけし〔釋〕河海抄にはなほ多く諸書を引れたれどさしも用ある事ならねば今は略きつから國にては舊き習俗とおぼしく周の世より見え始たり皇國にはそれを移されたる也新釋の説は江家次第の文を採たる也同書の頭書に桑弓桑にあらず桃ならん蓬矢蓬にあらず蘆ならんと注せられたるは文選に桃弧棘矢とあるが本文なる故なるべしなほ委くは本書を見るべし　**名だかき御わび**　十三丁

オ〔花〕うつほ物語云うへ世中に名高くつたはりける御おびあまたあるが中によしとおぼすをとり出させ給ひて大將にこれついたちにてうはいなどあらんをりものせられよとてたまふ云々〔箋〕玉ゴクの帯也名物花鳥に見ゆ私云玉ノ帯有ウ文モン無文丸鞆マルトモ（なりのまろきなり）巡ジユン方ハウ（よはうなるなり）三位已上用レ之事による也四位ノ参議も用レ之碼碯ノ帯丸鞆ばかりなり石の帯といふ四位の人用レ之犀ノ角帯巡方丸鞆あり五位用レ之烏犀ウサイノ帯是は牛角にてする歟　六位用レ之　**内宴**　同ウ〔弄〕正二三月中に清涼殿にて文人をめして詩を作り講ぜらるゝ事あり主上ならびに執柄赤色ノ袍を着す保元に信西申行ひて後は絶たる事也　一注〔岷〕公事根源抄云内宴正月廿一日云々　中略頭書ニ注ス　廿一日廿二日の程子日にあたらば其日おこなはれて一二獻の後親王公卿に若菜の羹アツモノを給ふ保元に信西申行ひ侍りし後はたえて侍るにこそ」私云弄花に一注としてしるしたると相違あり不審云々〔釋〕内宴の式西宮記に委く見えたり弄花に清涼殿とあるは公事根源に仁壽殿とあるをよしとすべきか西宮記に調ニ仁壽承香綾綺殿ノ御簾ヲ一事仰ニ木工ニ一云々と見えたり公事根源に子日にあたらば云々とあるは西宮記に當ニ子日ニ一二獻ノ後女藏人等以ニ若菜羹ヲ一盛ニ土器ニ一就テ王卿ノ座ニ相分ツと見えたる事也一二獻とあるは三獻の誤にて此ノ上文に給フ臣下ニ三獻ヲ一と見えたる時の事なりまた公事根源の本書には廿二日の下に廿三日の三字あり岷江には脱たる也また弄花に正二三月中とあるは西宮記に應和二年二月廿日の例あり三月の事は見えず又保元に信西云々とあるは公事根源集釋に平治元年正月廿一日被レ行ハ内宴ヲと注して保元の事は見えず猶考ふべし　歌**よそへつゝ云々**　十九丁ウ〔新〕後撰に「我やどの垣ねにうゑしなでしこは花とさかなんよそへつゝ見む是をとりて惠子女王の其御子義孝ノ少將の久しうまゐらざりける時なでしこの花につけてつかはしける「よそへつゝ見れどつゆだになぐさまずいかにかすべきとこなつの花とよめり今は此二首をかねて歌と詞になしたり惠子女王の歌は新古今に入たり此女王は冷泉院の比の人なり**たゞちりぼかり此花びらにと聞ゆ**　同〔拾〕うつぼ物語に花ざくらのいとおもしろき花びらにとて歌あり伊勢家集に梅の花のたよりにものいひたる人とおもはせてゑにをとこ女のゆきあひてものいひはじめた

るをひとつのひらにかゝせ給へる云々　**あざれたるうちきすがた**　同ゥ〔弄〕大袿ばかりをきて云々〔新〕袿衣は延喜式には中宮の御料にのみ有て天皇の衵にあたれりしかるを後撰集に二條后の御前にて敏行朝臣の白き大うちき賜れりと見ゆれば大袿衣てふ名もはやくより有しならんさらば今源氏のうちきすがたと有は大袿也てふ注さもあるべきか　**さうのことは中のほそをのたへがたきこそ**　二十丁ォ〔花〕箏秦聲也世謂蒙恬爲ㇾ之絃有二十三一象二十二月一其一以象ㇾ潤也自ㇾ一至ㇾ五大絃と云自ㇾ六至ㇾ十中絃と云斗爲巾を細緒と云中のほそ緒は巾也平調の時は二七爲宮にて巾の緒は雙調にしらぶるをいふ也〔弄〕中のほそ緒とは巾の緒の事なるべし細緒よりも猶ほそき心なり中のこのかみといへる類也〔細〕箏の十三絃のうち斗爲巾此三の緒細き也其細緒の中の第一のほそをといふ心也兄弟をも弟を中のおとりといふ事やがて此物語に有〔箋〕箏は大絃四筋中絃四筋細絃四筋合て十二筋此外に巾の絃一筋きはめて細也十三絃中の細絃と云也河花兩抄の説相違人の兄弟の幼少なるを中のおとりと云此義に同じ〔釋〕本居翁書入本に村田光庸といふ

人の説とて有を頭書には擧たり其次の文に云さて爲の緒よりも巾の緒はいよ〳〵細く又調子も盤渉調の時などは巾の緒は神仙調になりていよ〳〵高ければ爲よりも巾の緒はいよ〳〵絶やすかるべきに巾をいはずして爲の緒をきれやすしといふはいかにとなれば右にいふごとく二七爲は宮にて其調子々々の主となりて何れの曲にても此三絃は餘の絃よりは格別に彈く事しげきが故也かゝれば花鳥に平調の時は二七爲宮にて云々とあるも心得ぬ注なり　**平調にわたし下して**　同〔細〕巾の緒のせまりたるをおしくだす心なり〔萬〕平調より絃のせまりたるは呂一越性調也又こゝ律平調歟にて有けるを平調におしくだしたるなるべしほそろぐせりは狛一越調の樂なり平調の位にて呂のしらべにかはりたる物也されば通法平調にといへるにや又平調よりかりたるしらべにて有けるを平調律にくだして其外の調子などをもひかせ給ひて後にこゝ一越調になしてほそろぐせりを引給ひけるにやいづれにても其理有べしかたき調子どもをとあればあまたのしらべのてうしどもをといへるにや絃の物にも調子を引たるを今の世には管ばかりに吹く事

になり侍る也長亨二年十月七日記之云々〔箋〕此已前のしらべ壹越調なるべし手もとへせまりたる調なれば巾の絃など誠に切にして堪がたき物也盤渉はさがり過たるに平調はよき程にたひらかなる調也壹越をおしさげてしらべられたる也〔帳〕此段心得がたきやうなる歟おしくだしてとはもとは壹越調にても有べしいかさまかりたる調子を平調にしらべたるなりさておしくだしてしらべかき合せばかりとよむべしさてほそろぐせりは長保樂の破也弄花の義にも狛一越といふはその聲平調にて呂也と有河海にも長保樂は右樂太食調とあり太食調は平調の聲にて呂あり狛笛の壹越調に通ずる故にかくいへる也不審なき歟又昔は絃にも調子をひくと弄花の義にありさればかき合せばかりとはいへる也云々〔釋〕村田光庸云此注古來誤れる歟案に一より五に至るを大絃といひ六より十に至るを中絃といひ斗より巾に至るを細緒といふはさるべき事ながら巾の緒を中の細緒とする事心得がたし中のほそをといふは斗爲巾の正中のほそをといふ事にて中とは上中下初中後などいふ中の字の義にて爲の絃の事也さる故は何の曲にても二七爲の三絃

宮になりて一越調の曲なれば一越調になり平調の曲なれば平調になり盤渉調の曲なれば盤渉調になりてそれ〳〵の樂の調子になりて主となる絃也されば中のほそをのたへがたきとは中のほそ緒は爲の絃にて絕やすき事をいへる也黃鐘調盤渉調などの高きにては爲の緒きれやすければ平調に柱をおしくだし下くしてしらべ給ふと也問云爲の絃より巾の絃はそく且調子も盤渉調の曲なれば神仙調になり平調の曲なれば下無調になりて高ければ爲の絃よりは巾の絃絕やすかるべき歟答云さるにては中の字を中のこのかみなどいふ中の字の義とする說と同意にて非なりその故は右に辯ずるごとく二七爲の絃宮にして主になりて多く彈く絃にてそれにつゞきては一五十の絃徵にあたりてこれはた多くひく絃也はての絃も宮に比すれば彈ことすくなし然れば巾の絃にあらずして爲の絃なること明らけし」廣道云諸抄の說いとたど〳〵しくして決くかくと聞ゆるもなく紛はしけれど予管絃の事に疎けれは煩はしきを堪て諸注を悉く記しつそれが中には光庸といふ人の論さしあたりてげにとは聞ゆるやう也中の細緒とある中の字に說をつけて

中のおとり中のこのかみなどの中とせられたるはとにかくに强說なるべし上に何ともいはずしてかくふと中のとはいふべくもあらずまた平調におしくだしてほそろくせりを彈給へるやうにある注もひがこと也ほそろぐせりは一かきあはせまだわかけれど拍子たがはずとあれば上の平調にはあらでこれは笛を吹て調子をさだめそれにつけてかき合せし給ふ也さらでは搔合といふ事をふたゝびいふべきやうなし文の語脉によく〳〵意をつけて考ふべし猶其道にたけたらん人にたづねて決むべき也　**うねべ女藏人**　廿三丁ウ（花）采女々藏人とはこゝに書たれど藏人はうねべよりもあがりたる女官也さるによりて元三の御藥にも內膳司の御はがためをば采女役送して女藏人につたへ女藏人はいぜんのすけにはわたす也又御厨子所には采女の中をえらびて得選となづけて得選役送して命婦につたへ命婦はいぜんの典侍にわたす也さりながら節會の時は內膳司の晴御膳をば采女是を供ず陪膳のうねべとて執せらるゝ事也時にしたがひて上﨟にもなり下﨟にもなる事也加樣の事はいまめかしきやうなれど末の代にはしる人も有がたく又井

中人などのためにこの抄はしるし侍るによりていまさらなるやうなれどことの次に申侍る也（釋）職員令曰采女司正一人掌下檢校采女等事上佑一人令史一人采部六人使部十二人直丁一人又云凡諸氏氏別貢女皆限年卅以下十三以上雖非氏名欲自進仕者聽其貢采女者郡少領以上姉妹及女形容端正者皆申中務省奏聞と見ゆしかるを類聚國史大同二年五月の下また十一月の下に停諸國貢采女といふ事もあれば諸國より貢りしは此時に停られけん然れども同書弘仁四年正月の下に制令伊勢國壹志郡尾張國愛智郡常陸國信太郡但馬國養夫郡貢郡司子妹年十六已上二十已下容貌端正堪為采女者各一人と見えたれば此等の所々よりはなほ貢りけん延喜中務式に凡諸國所貢采女名簿者辨官經奏下知省記錄其由送內侍とも見えたれば大同に停られし後にまた貢るべきよしの制ありしにや禁秘御抄に陪膳采女尤可然事也近代漸令零落無極尤可有沙汰事也陪膳采女典侍仰之應和例也云々と見えたれば采女は御膳の事に主と仕奉る女官なりし也然るを後にはやう〳〵衰へて花鳥に注せられたるさまにはな

れりし也されど節會の時は云々とあるをもてその本職なる事は知られたりさて釆女は宇禰倍と古書どもに見えてウネメとはいはす花鳥にも猶うねべとかゝれたりさるは釆女部といふを切めていへるなるべし今ウネメとのみいふは字につきて訛れるにてなかなかにひがことなり　**御けづりぐし　みうちきの人**

廿四丁ウ〔餘〕榮花物語根合の卷云みくしあげのないしのすけのぼれなどいはせよとおほせらるればべんの内侍のすけ參り給へりけるのぼりてひのおましに御いしたてゝ御ぐしあげさせ給ひておはします〔河〕中院事書云御髻とる人の事也云々御梳櫛の人はわらはくびの無文の直衣を給はりて着する也仍て御うちきの人といふなり一說云御裝束奉仕する人也云云御門の無文のむらさきの御直衣を給はりてきる人をみうちきの人といふ云々〔花〕藏人私記十三云御髻御鬢事侍臣之間撰ニ堪レ事之人一供無ニ定例一皆着ニ當色袍一注謂ニ之御袿一染ニ紫色一絹也納ニ藏人所一今案御もとゞりとり御びんにまゐる人は紫のきぬのなほしをきて祇候するをうちきの人とはいふ也〔弄〕見レ花みうちきとはきぬのなほしをいふ一注或抄御說うちきの人とは白きゝぬをきると也〔岷〕聞書御もとゞりとる人とあり又御さうぞくめさする衣文の人となり又御けづりぐしは源内侍みうちきの人は御もとゞりとる人と云々又けづりぐし御もとゞりは源內侍にて御うちきの人とは御さうぞくの衣文にまゐる人と也〔新〕此事藏人私記によらんもさることながら只御鬢の事ならば同じ御座にても有べきか御衣を更るは所こそ有なればさる人めして他へ出させられんものなり且御けづりぐしの後は必御衣はかへ給ふべし又御鬢のみに外へ出給ひてやがてかへり入せられんも煩はしかるべき事歟しかれば此御うちきの人は御裝束の事といふ說によるべくおぼゆ〔玉〕枕冊子に日のいるほどにおきさせ給ひて山井の大納言めしいれてみうちきまゐらせ給ひてかへらせ給ふ櫻の御なほしに紅の御ぞの夕ばえなどもかしこければとゞめつと見えたりこれも御裝束の事のやうにも聞ゆ猶よく考ふべし〔釋〕右の說どもいとさま〴〵にてまぎらはしされどこゝの文勢かならず頭書に擧たる萬水一露のごとくならではことわり聞えがたし花鳥に引給へる藏人私記の注證文のやうなれど當色の袍を着るはもち

ろんなる事を別に御袿(ミウチキ)といはんはいかゞしき名づけざまなるべし又紫にまれ何にまれ賜はりたる御直衣を着たりとてそれを御うちきの人といはんもことわりなき名といふべしさるはたゞ大御身近くつかう奉る人なれば殊さらに賜はるまでにこそあらめそれをやがて職名のやうにはいふまじき理なり且かの私記の本文とはいたく異なる注なるもいふかしとにかくに「はてにければといひ「人めしてといへるにて別人の事とりまうすことはいと著きところなるをや

まかは 廿六丁オ〔細〕はの字清濁兩義也清時は目皮(マカハ)也此義可然歟目の皮の白粉などにくろみたるさま也俗におしろいじみなどいふがごとし〔孟〕まかばらといふ本あり老たれば目の皮くろみ落入(ル)也云々〔湖師〕まかはゝ俗にいふまぶた也〔餘〕和名抄唐韻云眶 和名萬奈加布良 目眶也按るにブラの約ばなればまかはともいふべし目皮の字は史記酈生傳に見えたり〔釋〕本居翁書入本云眶マカブラノ説可レ用ブラノ反ば也」廣道云右の説ども何ともなき事をいとこと〴〵しく注せられたるはいかゞまかはゝ目の皮也といふにて明らけき物をやまかばとよみてマカブラの反などあるはいふにも足ずさるむつかしき反切の論などすべて用なき事也

いみじうはづれそゝけたり 同〔餘〕はづれは俗にほつれといへり髪のほつれたるをいふ歟拾遺集哀傷「藤衣はつるゝいとは君こふるなみだの玉の緒とやなるらんそゝけは徒然草に鯉のあつ物くひたる日は髪そゝけずといふこと見えたり新撰字鏡に鬠(カミソヽケミニクシ)とあれば髪による詞なり〔釋〕本居翁書入本一説云いみじうはづれは俗に目のはづれたると云詞なるべしハヅレより見ゆると云説は非なりいみじうはづれとあればはづれよりとは聞えず」廣道云餘滴にはづれは俗にほつれといへりとあるはたがへり髪ともいはずしてたゞにほつれといひてよからめやこれは體言にて髪のかゝりたる外(ハツ)れ際(ギハ)をいへる也さても猶髪とはいはざれどもさる一ッの名となりてはしか聞ゆる也そゝけの説はよろしはづれ目といへる説はいみじきひがこと也目にそゝけといふ詞有べしやは笑ふべし

まだかゝる物をこそ思ひ侍らね 廿七丁オ〔花〕萬葉四「しろかみに黒かみまじりおふるまでまたいとかゝる物はおもはず坂上郎女〔拾〕これは萬葉第四坂上郎女が歌なり拾遺戀五にも入たり黒髪二白髪

交至レ者如是戀庭未相爾〔餘〕雅望考るにまだかゝる物をこそ思ひ侍らねといふには此引歌かなはず初に内侍のもてる扇に木だかきもりのかたをゑがきてもりの下草老ぬればと書しを源の見給ひて森こそ夏のとたはれ給ひまたさゝわけば人やとがめん云々とよませ給ひたるなど皆扇の繪によりてつゞけ給へる也こゝに又かゝる物をこそ思ひ侍らねと内侍がいへるも森によりていへる也大和物語に良少將の歌「かしは木のもりのした草老の世にかゝる思ひはあらじとぞ思ふまたく此歌を思ひてまたかゝる物をこそ思ひ侍らねと内侍がいへる也云々〔釋〕餘滴の引歌も猶かなひがたし大あらきのもりを柏木の森とせんもつきなく引歌をとれる例にたがへり未を又とせるも文にかなはずひがことなり

見まほしきはかぎりありけるをとや 廿八丁オ〔河〕「いたづらにゆきてはかへる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ「戀しさのかぎりだにある物ならば云々〔細〕引歌に不可及此人にてもなぐさめがたき也〔孟〕「いたづらにゆきてはかへる云々とにかくに源に逢たきと也〔箋〕人の高下尊卑は限ある物かな頭中將に誰人かは及ぶべき随分の人なれども源氏のなずらへにも及ざれば只源氏のみ見まほしき也されば人の分際の限りあるものなるべしといふにや〔岷〕源氏のつれなくおはするなぐさめにと頭中將を思ひつれど見まほしきは源氏君にかぎりたるといふ事を見まほしきはかぎり有けるをとやとはかけり云々〔湖師〕中將にて慰んとは思へども實に逢まほしきは限り有て源より外にはなきとにやと草子地にいふ也〔新〕おもひなぐさむやと中將に逢ども猶まぎれかたく源の戀しきと也 追書かぎりあるの詞きこえがたし〔玉補〕。ともじなきを小櫛によしとせられたるは心得ず〔釋〕右の説ども何れも語の意をたしかに解れたるもなくいとたど〳〵し河海にいたづらにゆきてはかへるといふ歌を擧給へるはこゝにはよしなし細流孟津岷江湖月新釋の諸抄いづれも粗くして推量の説のみなる中に箋は一ふしありて聞えたりされどかぎりとあるを高下尊卑の分際のやうに記されたるは猶いかゞあらんこゝは尊卑の分際の事には更にあづからぬ所なるをや又ありけるをといふを。の辭も分際の事としては聞えがたし玉小櫛補遺に小櫛を難じたるはさる事ながら其説を擧ざれば

いかに思ひとれりともしられず皆いと貫かぬ注ども也予が考は本文の釋に注せるが如し　**うんめいでん**

同〔箋〕古語拾遺云至二于磯城瑞垣朝一漸畏二神威一同レ殿不レ安故更令下齋部氏率二石凝姥神裔天目一箇神裔二氏一更鑄レ鏡造上レ劒以爲二護身御璽一今踐祚之日所レ獻神璽劒鏡也　此文ハ今改メテ本書ヨリ引出ツ箋ニ引レタルハ違ヘレバ也禁秘御抄云垂仁天皇御宇始爲二別殿一御二溫明殿一白河院仰云内侍所神鏡飛出天欲レ上レ天而女官懸二唐衣袖一奉二引留一依二此因縁一女官守護云々〔岷〕溫明殿は云々頭書ニ引是白河院の勅定のごとし凡近代おはしますは春興殿なりそれをも内侍所と申て今も女官どものさぶらふ也主上神鏡と別殿におはします事は崇神天皇よりの事と古語拾遺に見えたり是を正説とすべし云々　**瓜つくりになりやしなまし**　廿九丁ウ〔花〕是は催馬樂の山城の歌の詞也是をとりてよめる歌六帖にあり「山しろのこまのわたりの瓜つくりならひて後ぞくやしかりける〔餘〕此花鳥の歌撰集には見えず拾遺雜下「おとにきくこまのわたりの瓜つくりとなりかくなりなる心かな　兼盛集「山城のこまのわたりを見てしがな瓜つくりけん人のかきねをこれこまの瓜つくりをよめりされど催馬樂の外はこゝに用なし〔細〕〔箋〕うりつくりいかにせん〳〵はれいかにせんのことばをとれり〔岷〕聞書うりつくりの歌をうたふことは歌の詞に成やしなましと有はこの瓜作り我を思ふといひて彼ものゝつまにやならんとなり其心を以てかゝる物思ひをせんよりはかゝるいやしきものゝ妻に成てなりとも思ひをなぐさめやせんいかにせんと歌の心に我思ひを引合せて此歌をうたふにや折ふしも又瓜の時分なり〔釋〕催馬樂なる山城歌は萬葉集十一旋頭歌に「山しろの久世のわく子がほしといふわれあふさわに我をほしといふ山しろの久世とある歌の意を本にて餘滴に引る拾遺集のとなりかくなりなるこゝろ哉といふ歌に合せて作りたるもの也さてしか作りたるうへにては岷江入楚に注し給へるごとき意と聞ゆ又内侍が此歌をうたふ意も岷江のごとくなるべし頭中將を瓜作りになぞらへたる也さるは中將は瓜作りのごと賤しき人ならねども心にかなはぬよりよそへてうたふなめりこの上文に「つれなき人のなぐさめにとおもひつれど見まほしきはかぎり有ける世とやいへる所にあはせて知るべ

し「すこし心づきなきと有は玉小簾のごとく色めき過てにごりかなるをこゝろづきなく源氏君のおぼせる意なるべし　**がくしうにありけんむかしの人も**
同〔河〕文君事史記曰云々　司馬相如傳ヲ擧ラレタレド用ナケレバ今ハ省キツ〔花〕文君といひけん昔の人も　この文君を定家卿の本には鄂州にありけん人もかくやをかしかりけんとあり河海に兩說を出されながら鄂州はなほ物語の心にかなへりと注せられたりうりつくりの歌をうたふを源氏の立きゝ給ふは鄂州の女のうたふを樂天の聞しには似たるやうなれどもかの鄂州の女は十七八の物とみえたり源內侍のすけはさだ過たる齡也すこぶるなずらへがたく侍るにやこれによりて愚意には文君なほたより有て思ひ侍りそのゆゑは卓文君としよりて司馬相如にすさめられて白頭吟といふ歌をつくれり相如これを見てあはれと思ひけるにや源內侍のすけもとしよりて人のもてなさぬうらみありしによりて物語の作者文君をひきよせてかきたるべし〔新〕花鳥に此事定家卿の本にはがくしうと有親行本には文君などいひけん昔の人もとありとて兩義をもて爭へども琵琶としもいひ他の語も覺ゆる事多ければ老少にはかゝはらで琵琶行の意とおぼゆ云々　**なか〳〵しるく見つけ給ひて云々その人なめりとみ給ふに**　卌二丁ォ〔細〕源はやがて中將としり給ふ也〔釋〕書入本に本居翁云わざとおそろしげにもてなしておどす也といふ事をしるく見つけ給ふ也細流非なり中將としり給ふことは下の「その人なめりと見給ふとあるがそれなれば事重る也」と有廣道案に此說はいかゞ也これは中將のあらぬさまにもてなして我としられじとてわざとおそろしげなるけしきを見する故に却て著く中將也と見つけ給ふ也「我としりて殊更にするなりけりとゝいふ詞かの修理大夫などをさしたる語勢にあらず源氏君と知てことさらにおそろしげにもてなしつゝおどすはかならずうらなき中將なる事あきらけし「其人なめりと見給ふにとは著く中將と見つけ給ふ事をふたゝびたしかにいひて下の文を引起す筆也別なるにはあらずされば細流誤にはあらず　**ほころびは**　同ゥ〔雅集〕宇治拾遺七水干のあやしげなるがほころびたえたるを云々ほころびぬひにやりたればほころびのたえたる所をば見だにつけずして云々　雅望注 几帳のも又衣のもたと

瑩ハ瑩ノ誤カ

へは闕腋のごとくはじめよりわざとぬひのこしたる所をほころびといへる也それがぬひてありし所までもほころびぬるをたえたるとはいへる也たゞぬひたるもののほころびたるは勿論なり〔釋〕この雅望が説いとよろし直衣のもかならず腋の下をほころびといひけんことと知るべし　歌 **あらだちし云々**　卅三丁オ〔餘〕後撰戀三人のもとにまかれりけるにすのもとにすゑて物いひけるをすをひきあげゝればいたくさわぎければまかりかへりて又のあしたに遣しける藤原清正「あらかりし波のこゝろはつらけれどすこしよせしに聲ぞ戀しき此歌を思ひてよみたるなるべし
おびは中將のなりけり我御なほしよりは云々はたそでもなかりけり　同〔花〕上略頭書ニ擧タリ　藤裏葉巻に夕霧宰相中將のなほしの事源氏君の給ふとて非參議のほとなにとなきわか人こそふたあゐはよけれとの給へり非參議とは二位三位などの中將をいふすでに夕霧は八座に昇進し給ふことなれば花田のなほしをき給ふべきといふ心也榊の巻に源氏の帶をうす二あゐなるおびの御そにまつはれてとあり今頭中將はこき二藍なればわが御なほしよりは色ふかしといへる也

近代直衣の帶に下襲の色をもちふ禁色人冬蘇芳　面白　夏蘇芳寒草文生四位以下非參議人冬躑躅　面白　夏二藍　イ遠草　○禁裏濃打綾 ○禁裏濃打平絹　穀おほかた今も直衣をきる程の人はなほしの色を用ゐなほしきぬ人は下がさねの色を用べき事なるをなほしきる人の下がさねをもちゐるは略儀と覺え侍り〔箋〕帶には直衣のきれを用る儀也直衣ゆりざる人は下がさねの色を用べき也其中にも禁色非色の差別有べし色の事は貴人ほど早く宿德する故に頭君源氏に年ましなれども色こき也云々〔萬〕直衣をゆるされたる時のきれにておびをするといへり是規模なる事と也わかきは二あゐの色年たけたるははなだの色也宿德とて主人ほどの位はうす二藍をきる也源氏は三位也故にうすし頭中將は四位なる故にこき二あゐをき給ふ也二あゐはあゐとかりやすにてそむるといへり色ふかしとあるに見合すべし〔細〕鰭袖也〔箋〕鰭袖也又袖也ある説にはたは鰭也將字也不レ用レ之ノ義將ノ字云々　**まことはうしや世中よ**　卅五丁オ〔花〕古歌の詞あるべし尋ぬべし〔弄〕本歌　未見歌詞　細同〔箋〕理はならでも世中を觀じたるにても可然歟あきらか也引歌未勘〔新〕是は古今集戀に一ながれて

は妹夫の山の中におつる吉野の川のよしや世中又雜に「しかりとてそむかれなくにことしあれば先なげかれぬあなう世中此二首をおもひてひとつにいひたるなるべし(釋)こゝは必引歌あるべき所なり弄花に世中を觀じたるとある注さらに意得ずこゝは互に戲れ給へる事の末なれば世間を觀ずるなどいふべき所ならず新釋は宜しげなれど猶引れたる二首の歌の意にてはこゝにはかなひがたし本文に注せる餘滴を得たりとすべしさて「まことにといふよりかたみにいひ合せ給ふ詞なるべし　**とこの山なる**　同(新)花鳥に云々眞淵云是は萬葉卷十一に狗上之鳥籠山爾有云云と有て注古への女は男に父母のゆるして逢時ならでは名はいはぬことのむね萬葉にも紀にも見ゆ」妹が實名はしらずと夫のゝ給ふに今はかく相逢ふ中なればいざとこたへてわが名もらすな　唱へ來れるをふるく古今集に好事の書入たるもの也さて此文の比には其誤唱へしをのみことわざにいひしと見えてかく書たりこれらは物がたりなればかくても有なん實の物ならばいかにぞや　**七月にぞ后ゐ給ふめりし**　卅六丁ウ(河)左傳曰帝嫡妃曰皇后後漢書曰以備內職爲后正位宮闈同體天皇下略令曰中宮職謂皇后宮其太皇太后皇太后宮亦自中宮也」釋曰今稱皇后爲中宮也(細)藤つぼの女御中宮に立給ふ事也河內本に十月とあり七月可然歟そのゆゑは皇大后宮藤溫子昭宣公の御女也寛平九年七月中宮に立給ふ昌泰二年七月皇大后たり此等に摸して書侍るなるべし然者七月尤可然也　箋弄同(弄)班子女王光孝后宇多母寛平九七廿六皇大后(釋)しひていはゞこれらの例を思ひてかゝれたるにもあるべからんさらば右の說どもに從はんか河海に引れたる文には七月の上にそのとしといふことと有さる本もありしなるべし　**御こしのうちもたもひやられて**　三十七丁ウ(河)伊勢物語二條の后のまだ東宮の御息所とまうしける時氏神にまうで給ひけるにこのゑづかさにさふらひけるおきな「大原やをしほの山もけふこそは神世の事もおもひいづらめとて心にはかなしとや思ひけんいかゞおもひけんしらずかし(萬)此段よくこゝに心かなへり業平も后にむかしあひ給ひし事を今御供して思ひ出てよめり(花)中宮の行啓には鳳輦にめさるゝ事もあり

又庇さしのいとげの車に乘給ふ時もあるなり供奉人の行粧も乘物によりてかはること侍るなり

○花宴卷餘釋

南殿のさくらの宴 一丁オ〔河〕南殿櫻云々延喜御記にも群二列櫻樹東頭一などあり天德に燒たりけるを康保元年十一月に植らるすなはち枯る同二年正月に又植られて三月に花宴あり兩度之間一は重明親王家樹一は西京より移植らる其後度々燒亡に每度植らるゝ者也〔湖師〕拾芥抄云南殿前庭櫻樹者本是梅也桓武天皇遷都之日所レ被レ植也而及二承和年中一枯失仍仁明天皇被レ改レ樹也云々〔河〕花宴事 延長四年二月十七日御記曰。此日殿前櫻花盛開。仰召二文人一聊開二花宴一昨暮預令レ召二可レ候文人一。今日遣レ使召二常陸太守貞眞親王。左大臣。々々有レ所レ煩不レ參。申尅常陸大守親王參入。同尅仰二藏人一立二倚子東北庇自レ北第二一間一。敷二菅圓座兩三枚於北階南簀子敷一。爲二親王納言座一。櫻樹下鋪二座西面一爲二文人座一。西尅左衛門督藤原朝臣參。即着二倚子一。令レ召二親王藤原朝臣等一。即參來侍座。仰令レ召二文人一。即文章博士公統朝臣。民部大輔博文朝臣。右中辨大江。民部少輔諸蔭。侍二內御書所一。大內記橘正臣以下。文章生以上七人。參二入仙華門一。着二樹下座一。侍臣給二紙筆一。仰令レ獻レ題。藤原公統朝臣進昇レ殿。藤原朝臣座前給レ之。令レ書二題目一奏。花芳紅蠟珠。仰又令レ上。又書奏レ書之。櫻繁春一斜。仰以二後所レ上爲レ題。又仰令レ探二韵字一。右近權少將實賴探レ韵奉上。次親王以下就二文臺一探レ韵。仰二清平朝臣元方在衡維時尹甫等一探レ韵令レ就二進中座一。于レ時內藏寮給二酒肴一。中納言藤原朝臣參入。仰令レ探レ題。其後仰召二樂所管絃者四五人一。時々奏二音聲一。以助二謳吟一。及二子尅一終。頭取二文臺一以二公統朝臣一爲二講師一讀レ詩。仰二文人等一近侍二砌下一令レ講。其後管絃頻奏吟詠不レ止。仰二常陸太守親王一彈レ箏。中納言藤原朝臣彈レ琴。及二丑尅一。給二親王納言御衣一。文人給レ綿。侍臣及樂所人等給二疋絹一。寅一尅入レ內。侍臣退出○度々花宴中延長四年例探韵以下尤相似たり○拾遺集天德三年二月內裏に花宴せさせ給ひけるに九條右大臣「さくら花こよひかさしにさしながらかくて千歲の春をこそへめ(釋)河海には右の外に延喜十七年三月六日康保二年三月五日同三年二月二十一日等の花宴の例どもを出されたれどさのみは

とて今は省きつ諸抄にもいはれしごとく此物語のさまは延長の例に近く聞ゆれば彼度の例ばかりをこゝには擧たり委くは本書を見て知べし〔箋〕此卷の花宴事は紅葉賀卷におりゐ給はんの御心ちかうなるよしあり御脱屣程あるまじければ御在位の名殘に此宴を開き給ふの心なり延長四年の例を引用るも醍醐御門代の末の年號なるに依てその面影あり○凡勘例一度の例を守らず此物語のならひなりかれこれをもて取合せて分別すべし細同旨〔花〕桐壺御門を醍醐の帝になずらへ奉るにつきてかの御字に花宴行はれしは延喜十七年三月六日常寧殿花宴詩題春夜翫櫻花延長四年二月十七日清涼殿花宴詩題櫻繁春日斜此兩度の例には過べからずみな探韵作文御遊の事あり延喜の常寧殿の花のえんも宴席をば清涼殿にてひらかれしなりこの物語の花宴も南殿の櫻を御覽ありて宴をは清涼殿にかへらせ給ひておこなはるゝ事と心得べき也云々下略〔新〕或説に此宴南殿の櫻の宴とは書たれど宴席は清涼殿にてひらかれつらんといふはおもひ過したる説也只南殿の宴とあるにまかせて宴席もそこにて有しと意得んぞ直かるべき況や村上の大御時南殿の花宴有て席は他にてひらかれしよしもしるさず且圍碁などすら南殿にて有し事西宮抄に見ゆるをやさて此宴は內宴九日宴などよりはかろく又常の花宴曲水宴などよりはおもく書たりすべて此文は必しも古き例にも泥まずはた有べきほどの事をば加へたるも多く又後の世のならはしを有まじき事と思ひてかへたるも今はすたれたるをもいかであらばやと思ふをばむかしにかへして書つと見ゆるも侍りよりて古きも古からず新しきもあたらしからず例などをば有か無かに書し物をかたくなにあつるはかねの尺もて水の月の大きさをはからんとするが如し此卷にもかの桐壺のみかどを延喜の帝にたとへ奉りたるなどいふごときはいふにもたらぬ說なり

たんゐん給はりて　同〔花〕先第一儒者奉レ仰獻レ題。次書二韵字一盛二中境一。置二庭中文臺上一。近衞次將先探二御料韵二字一置二筥蓋一。昇自二御前階一獻レ之。次王卿堪レ屬レ文者。文人等。各進二文臺頭一探二一字一見レ之。奏二官姓名及所レ探韵字一也　今案探韵は各分二一字一侍る也ことゞゝく韵字かはる也故懷帋端作云春日同賦三春夜翫二櫻花一各分二一字一應レ製詩　探得二某字一　如レ此書レ之べきなり〔釋〕

新釋にも右の文を假字書にせられたり河海例と見合せて知べし　やすき事なれど　二丁ォ〔細〕〔岷〕詩の絶句一首作るべき事はいとやすき事なれど時宜にしあつかひたる也〔明〕今案あながち詩の事にあらず立出て探韵給はる時の進退をいふにや〔湖師〕明星の御説を用ゆべし〔玉補〕げに明星の御説よしやすき事は上のはる〴〵とくもりなき庭に立いづといへるをうけくるしげ也は上のはづかしくてとはしたなくてをうけたる也〔釋〕細流の御説よろし明星の義はたがへりさるを助けていへる説ども皆ひが事也こは地下の文人は帝東宮の御才かしこくかゝる方にやんごとなき人おほく物し給ふ比なるにましてはづかしくて云云といふ意也やすき事なれどは異本にやすきほどの事なれどゝあるかたよろしかくてはいよ〳〵探韵賜はる時の進退をいふにやとは聞えがたし詩一首作る事はいと易きほどのことなれどゝいふことなるをやほどの三字は寫脱せる成へし　春の鶯さへづるといふまひ　同丁ウ〔河〕南宮横笛譜云昔善傳此曲者有左大臣源信朝臣及臣勢式人等仍承和御時勅信朝臣以此曲令傳習畢成康親王合子御笛傳於清涼殿前視之者無不感泣　柳花苑　同〔箋〕聞云大唐には人の死したる時あたらしく樂を作りて葬送の時これを奏する也此柳花苑も人の葬送に作りたる樂也さて吹て見たれは吉の聲あり不審なりとて棺槨をひらき見れば彼死人蘇生したる也それより吉の樂にもちゆるなり云々　ふうじもえやらず　三丁ォ〔河〕或説云廣才の人難字を作によりて講師もえよみやらざる歟云々今案此義不甘心叅宴の講師をつとむるほどの人難字を不講得乎只進退なるを毎句よみやらずして講じのゝしると云歟〔箋〕毎句遒逸なる故各感ずるとて講頌中々事もゆかぬ體也又一本講師もえよみやらずと云本あり講師になしへられてよむ物なればとゞこほる義はあるべからず〔釋〕宗祇が點じたるはさやうの本ありしにこそされど今はしたがふべからず湖月抄の本にはかうじもえよみやらずとあり　歌うき身世に　六丁ォ〔拾〕今案後撰戀二まかり出て御ふみつかはしたりければ「けふ過はしなまし物を夢にてもいつこをはかりと君がとはまし中將更衣小大君集に「我しなばいつこをはかりと尋てか此世につきぬ事もかたらん　聞えたがへたるもじか

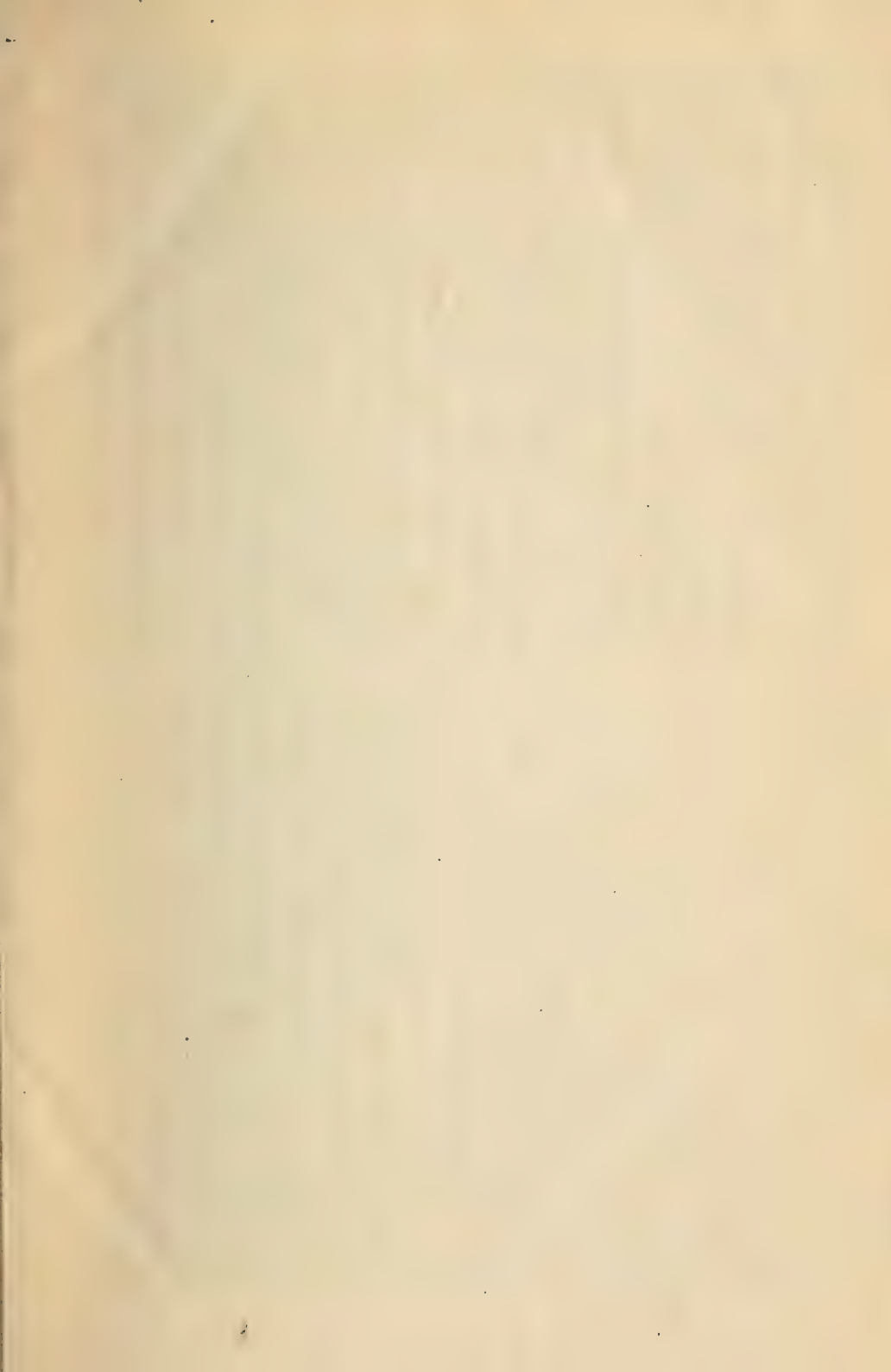
なとて　同ウ〔花〕きこえたがへたるといふ詞を源氏の君の思給ふこゝろむけを女のきゝたがへてひとへになのらずはとふまじきにとりなして草の原をはとはじとやとよみ給へる也源氏の心ははじめよりさにてはなし問ふべき事はとゞめけれども猶露のやどりをたどらんほどもてさわがれん事のうしろめたかるべきによりてたしかになのり給へとはいへるなりしかなとてはしか〳〵のいはれにてあるといふ心を下の歌にのべ給へり「小さゝが原に風もこそふけは露のやどりをもとめうしなふべきいはれ也わづらはしくおぼすこととなくはと下の詞にかきつゞけたるは二條のおとゞのわたりわづらはしかるべき事を小さゝが原の風にたとへたるへし云々（釋）しかなとてはしか〳〵のいはれにて有といふ心を下の歌にのべ給へりといふことはいみじき誤なり此事は水原抄に誤りそめ給へるを河海箋など皆この誤を改め給はず其中花鳥の説の委しさをとり出たるなり本居先生の玉小櫛に注どもいかゝ然也をしかなとはいかでかいはん又それにてはもといへるもあたらずとあり實に此説の如したゞもじかなにてよく聞えたれは今は諸説をあげず　**しるしの扇はさくらのみへがさね**　九丁ウ〔花〕今按櫻のうすやう面白しうらすはう也今按こきかたにかすめる月をかきたるはこさむらさきの雲をかきて月をいだしたるにや〔箋〕かさねのうらのこき紫也私ニこきすはうなるべしこのかたに泥霞を引て月をいだしたるへし花に雲といへる不審也一本三重がさねとあり青表紙になきは寫しおとされしか〔河〕清少納言枕草子「なまめかしきもの三重かさねの扇五重になりぬれはあまりあつくて云々（釋）櫻のみへがさねとあるによれり青表紙になきは寫しおとされしか　**とゝのへさせ給へるけなり**　十丁ウ〔雅集〕萬廿十八朝なきにかこ等登能倍續日本紀四二此天下乎治賜比諸賜比　源葵八　さうぞく人のありさまいみじうとゝのへたりと見ゆる中にも　同九　かたちすがたまばゆくとゝのへてわか紫廿三よろづをとゝのへ給へり書合二えならぬ御よそひども御櫛の箱云々くさ〳〵の御たき物云々心ことにとゝのへさせ給へり（釋）俗にいふが如く物事のとりとゝのひて全き意也けは氣にてけしきをいふ意也　**そしうなる**　十一丁ウ〔弄〕紆かたむ心也朝にも出つかへぬものゝ中に上手などをたづね出

給へると也〔細〕そしうは姧字ねたむ心也公方の御用なとには出つかへずして隠れぬる者の中に物の上手などあるをばめし出し侍ると也〔釋〕なほ箋等にも同し様のこゝろ也河海にはおほやけこと「かたむもののしどもをとて出されしは河内本の意なるべけれどかつて考ふる所なし姧字は記されたれどもいかにとも考へわたす事なければ其まゝさしおく也按に細流弄花などに姧と記されたるは河海の謬にならはれたるにや是にてそしうなるの意は解へからずしうは秀字などか又そは疎などにてしうは別に字あらん歟考へて定むべし　**弓のけち**　同　弓名カ〔河〕踏歌後宴弓結也延喜七年二月二十二日御記云蹈掌は所ㇾ奉ㇾ仕踏歌後宴ニ云々御ー射ー場中務親王左大臣以ー下侍更召ニ殿上公卿ニ預ニ召立。書ー別如ㇾ例御ー賭ー物臣ー下賭〔細〕今年右大臣の踏歌後宴ある也私の宴例考べしとあり踏歌後宴なり弓をいることとあり一勘定れる事にはあらず藤花の時分の宴なればかくのごとくとりなし侍る也〔箋〕惣別は踏歌の後宴に弓の結あるそれはおほやけ事なりこゝの心は私に小弓遊有し其結に藤宴をせらるゝなり箋聞書弓をいたる結願などのやうの義也おしあけにの心也〔花〕二條のおとゞにて小弓あそびありてその結に藤の花のえんせられし也圓融院御集に結の比宮にわたらせ給ひて「弓はりの山のはさして入ときはあやしくものそかなしかりける　返し宮「里ならて弓はりなから入月は山のはにだに立とまらなん

師説　弓の結はもと禁中にてある事なるを右大臣の家にてまなびせられし也〔釋〕すべて弓の結はおのづから一つの名目となりたり踏歌後宴を引れたるもこゝにはかなはぬにや箋聞の説とて弓をいたる結願などのやうとあるもこゝにはかなはずひが事也たゞ右大臣のかたにてありし弓の結とみるべし　**藤の宴**　同〔河〕飛香舎ニ藤花宴有ㇾ興 延喜二年三月廿日此日左大臣飛香舎藤花下獻ㇾ物事歟 うつほの物語云三月中の十日ばかりにふぢ井の宮に藤の花の賀し給〔花〕おほやけ事になずらへて右大臣の第ニにて藤花の宴あり又天暦三年四月十二日飛香舎藤花宴には和歌管結等あり　**女みこたちなども**　十二丁ウ〔細〕源と右大臣と御中よからぬ間ついでがてらよそよそしからずし給へと教訓ある也御門の御子たちをそだて給ふ弘徽殿なればおしなべてのやうにはおほすまじきと也 弄同 〔玉〕みことあるは姫宮たちのごと

く聞ゆれどもこゝのやうを思ふになほ右大臣の御むすめたちの事とこそ聞えたれ源氏君の御姉妹としては事のさまおたやかならず〔玉補〕小櫛に云々とあれどいかゞあらん天子臣下の子をみことの給ふ事ありやいとおぼつかなし〔釋〕細流に源と右大臣と御中よからぬ間云々御教訓ある也とあるは過たり玉小櫛なるは玉小櫛補遺に辨へたるが如しうつなく臣子の子をみ子とは宜ふまじき也　**櫻のからのきの御なほし**十三丁オ〔河〕からのきとは唐綺也うすきからあや也さてこゝに直衣布袴事とて例を多く擧られたれどさのみはとて今は悉く省く本書を見るべし〔花〕六條院はさくらのからのきの御なほしいまやうの御そひきかさねてしどけなき大君すがたいよ／＼たとへんかたなし今按此物語に二所おなじ御よそひの事をかけり云々　**袖口などたうかのをり**　十四丁オ〔花〕榮花物語に枇杷殿（妍子三條院后道長公女）の大饗に女房の袖口ことごとしくいだされたるをは小野宮右大臣（實資公）は難ぜられしことありいまの物語にもこうきでんの女御のかどめい給へる御かたにて袖口とも目にたつばかりいだされたるを源氏君はふさはしからず思給ひて藤つぼわたりにはかうやうにことゞ／＼しくはしたまはぬ物をと思あはせ給ふ也〔細〕けふはうち／＼なる事をあまりにことゞ／＼しきさまと也　**扇をとられて**同ウ〔河〕伊之加波乃云々源氏扇をとられたるを是によせてさまかへたる高麗人かなと云々〔拾〕細　催馬樂石川の歌云々抄聞書石川は加茂の名所也むかし高麗人の住し也○今按鴨川を石川や蟬の小川といふ事は加茂の緣起をもて長明のはじめてよまれたる事にてこれよりさきには人しらずと彼人の無名抄に見えたり催馬樂にいへる石川鴨川の別名ならば歌主合せて申さるべし又世にも知人おほかるべければ歌合の時難ずるにも及ぶべからずこれは河内國石川郡なるべし其ゆゑは姓氏錄に河内國諸蕃に大狛連は出レ自二高麗國人伊利斯沙禮斯一也大狛連出レ自二高麗溢士福貴王一也島木高麗國伊理和須使主之後也これらを石川郡におかれたる歟さて其從者どもの末のものなと取かくしたることありけるにや〔花〕源氏の君あふきのぬしをしらんためのはかゝり事に「石川のこまう人におびをとられてからきくいするとうたふをあふぎをとられてといひかへたりあふぎ

のぬしはやがて心得べき也　**いとうれしきものから**十五丁ウ〔花〕草の原をはとはじとや思ふといひしその人のこゑとはきゝなせりうれしき物からの結語の詞おもしろくかきなせりかつ〴〵うれしくはあれどもいまだ六の君とはたしかにしらぬこゝろをふくませたり〔箋〕花説こも有ぬべし此物語誠に物語の眼也源氏の心にあくがれて有明のゆくへを尋ね知たき心なれば此時其人はたしかに知ぬるは本意のうへの本意なりされば女の身にて人にこそよれかろ〳〵しき事やと心に淺く思給ふよし也源氏の性萬事においてかくのごとし眼をつくべし〔細〕花鳥説面白し但し細説此結語は返歌をし給ふ事はうれしくはあれども女の身にとりてはちとかろ〳〵しとおぼしたる也是源の性なりいづくにも此心あり〔弄〕尋あひたるはうれしけれども女のすべきさまは然べからずと思給ふ心あれば物からといひのこしたり是又源の性也花鳥説も其故あるにや五六君の聞未ニ分明ナラ云々此外心ありいつれも面白キ歟此時のさまうれしけれども猶あぢきなく物思るなるべき心をこめて物からといへるにや云々或あるにや聞書うれしき物からかろ〳〵しき也私云うれしき物からかろ〳〵しきが正説也花に五六分明ならねど弄の箋にいよ〳〵物思ひのますといふは異説也然ともいつれも面白しと心得へし〔箋〕細凡源氏物語の中にも此巻勝れたると也六百番歌合にも紫式部は歌よみの程よりも物かく筆は殊勝の上花の宴の巻はことに艶なる物也云々〔釋〕こゝはいひのこしたる説なればゝるさけれど悉く擧たりおのが説は評釋の中に擧たゝるが如し

室松岩雄
保持照次　校
井上頼数

明治四十二年十二月八日印刷
明治四十二年十二月十二日發行

定價金參圓

編輯者　室松岩雄
東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行者　三里半七
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
印刷者　中野鍈太郎
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所　東洋印刷株式會社
東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行所　國學院大學出版部